

生徒は天使のように可愛らしいので手を出すのも仕方ないね

伊倉米磁

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ブルーアーカイブの生徒をだいたい一人ずつ犯してセックス大好きにしていく話です。持つてる生徒は全員セフレにする予定です。

タグに収まりきれないのであらすじに登場済みキャラを書いています。

あらすじ：キヴォトスで仕事をするうち、仲良くなった生徒空崎ヒナと肉体関係を持ってしまった先生。ヒナも本気で付き合おうと、隠れて愛をはぐくんできた。しかしある日、ふとしたきっかけで他の生徒とも関係を持ってしまい、雪崩を打つように多数の生徒との爛れた日々が始まってしまう。

ヒナ

アリス

イズナ

ノドカ

コタマ

イズミ

ツルギ

マシロ

アズサ

ヒフミ

シロコ

ムツキ

チナツ  
イオリ  
ユズ  
シユン  
サヤ  
ヒビキ  
ネル  
カリ  
アスナ  
アカネ  
エイミ  
ハナコ  
ミドリ  
アル  
ノノミ  
セナ  
フウカ  
ツバキ  
ユウカ  
アイリ  
ミモリ  
イロハ  
シズコ  
アカリ  
ヒナタ  
フブキ  
アヤネ  
カエデ  
ホシノ  
チセ  
ウイ

ウタハ  
マリー  
ハスミ  
モモイ  
セリナ  
ハルナ  
ハナエ  
ジュンコ  
ヒマリ  
カヨコ  
ハルカ  
アコ  
トキ  
ミヤコ  
サキ  
ミュ  
コハル  
ワカモ  
サクラコ  
ハレ

PIXIVにも投稿しています。

https://www.pixiv.net/novel/se  
ries/7199906

## 目次

不純異性交遊でも本気セックスなら純異性交遊だから(ヒナ)

1

選択肢に外出しと膣内射精があったら必ず膣内射精を選びますよね

(アリス)

11

くのいち映画には濡れ場がつきもの(イズナ)

25

壁に盗聴器あり向かいのビルに望遠鏡あり(アリス・イズナ)

41

変態が変態なのは変態だから(ノドカ・コタマ)

58

本気の食ザーだから粗末にしてないもん(イズミ)

78

竿姉妹100人できるかな(ツルギ)

94

可愛いは正義、エロいは大正義(マシロ・ツルギ)

111

たとえば火の中水の中草の(中略)セフレと乱交の中(アズサ・イズナ・

イズミ)

130

夏、海、青春、タンクセックス(ヒフミ・アズサ)

146

ん、主役は遅れてやってくる(シロコ)

164

オールメスガキニードイズワカラセ(ムツキ・シロコ・コタマ)

182

スケベも治療不可能です(チナツ・ヒナ)

199

嫌よ嫌よは大好きの証(イオリ)

225

協力プレイはゲームの華(ユズ・アリス)

244

身体は子供、頭脳も子供、記憶は大人(シユン)

259

用法用量を守って正しくお使いください(サヤ・シユン)

271

どこでもいっしょ(ヒビキ)

288

ハードファックとダンスつちまった(ネル)

305

おおきくなったらお嫁さんになる (カリン・イズナ) | 319  
うさぎは寂しくても死なないけど年中発情期は本当 (アスナ)

340

誠心誠意のご奉仕 (アカネ) | 356  
効率的な関係 (エイミ) | 372  
背徳健康法 (ハナコ) | 387  
ヤリモク温泉一泊二日 (チナツ) | 404  
お姉ちゃんには内緒ですよ (ミドリ) | 420  
修行・性奉仕編 (ノドカ) | 435  
アウトローが処女なのは恥ずかしい (アル) | 447  
負けた方は何でも言うことを聞く (ムツキ) | 463  
ダイレクトに体温を感じる距離 (ノノミ) | 478  
待機中の時間つぶし (セナ) | 491  
今日はフウカのための食卓 (フウカ) | 507  
淫らな喘ぎ声に包まれて (ツバキ) | 523  
乱交はデビューライブの後で (ユウカ・アル・アリス・ヒフミ)

538

普通の女の子の普通の体験 (アイリ) | 557  
匂わせはクセになるから気をつける (ミモリ) | 573  
休憩スペースの正しい用途 (イロハ) | 587  
糖分摂取は疲れに効く (シズコ) | 600  
持ちっ持たれっ (アカリ) | 611  
姦淫の秘跡 (ヒナタ) | 624  
怠けがちな警察官の初セックス (フブキ) | 641  
やりたいことをやるのが「遊ぶ」事 (アヤネ) | 656

|                            |      |
|----------------------------|------|
| 素敵なレディーとは (カエデ)            | 672  |
| お昼寝の共犯者 (ホシノ)              | 690  |
| きらきらのかたち (チセ)              | 704  |
| 私、すっごい性欲強いんです! (シズコ)       | 725  |
| イズナと一緒にSEXチャレンジ! (イズナ)     | 738  |
| 古書に囲まれてイキヌキ (ウイ)           | 751  |
| マイスターの応援セックス (ヒビキ)         | 766  |
| 情熱とロマンの学ランセックス (ウタハ)       | 776  |
| うさぎメイドのご奉仕 (アカネ)           | 791  |
| 姦淫用の装い (マリー)               | 802  |
| ダイエットのための激しい運動 (ハスミ)       | 817  |
| 休日の合理的な楽しみ方 (ユウカ)          | 832  |
| 良いゲームのための経験 (モモイ)          | 848  |
| 性の6時間 (セリナ)                | 864  |
| 究極の美食×夜明けのコーヒー (ハルナ)       | 885  |
| サンタさんに近づく一歩 (ハナエ)          | 907  |
| お腹にぬくもりを (ジュンコ)            | 920  |
| おせちも良いけどセックスもね (フウカ)       | 938  |
| 天才ハツカーの美しさは罪を体現する初体験 (ヒマリ) | 955  |
| 誤解されるのは慣れてる、から (カヨコ)       | 979  |
| 誰かにお世話されるのは嬉しい (ハルカ)       | 997  |
| とにかくセフレなんです! (アコ)          | 1014 |
| 趣味の条件 (トキ)                 | 1035 |
| メイド勇者のご奉仕 (アリス)            | 1053 |
| クイーンメイドとセックス勝負 (ユズ)        | 1069 |

本番さながらの熱心な訓練 (ミヤコ) |  
深い絶頂、浅い呼吸 (サキ) |  
性的魅力の確認 (ミュ) |  
セフレの使命 (コハル・ウイ) |  
森の中のお手製ラブホ (ウイ) |  
2人きりの性の告白 (ヒナタ) |  
楽園の存在証明 (ハナコ・コハル・ウイ・ヒナタ) |  
夏の海のセフレ撫子 (ミモリ) |  
あなた様のためならば (ワカモ・アスナ) |  
懺悔の席 (サクラコ) |  
デエナドリ (ハレ) |  
テントの音 (コタマ) |  
とにかくセックスしたいんです! (アコ) |  
ヒナと恋人セックス (ヒナ) |  
カヨコとのひととき (カヨコ) |

131113001286127212561242122012021179116411511131111510991082



不純異性交遊でも本気セックスなら純異性交遊だから（ヒナ）

「先生っ♪ 仕事してるー?」

ニッコニコの笑顔で、ヒナがやってきた。

ここはシャーレのオフィス。ビルの高層階にあり、窓からは街が見下ろせる絶景……だが私自身はほとんど景色を堪能したことはない。ここにいる時は大抵書類と取っ組み合いをしているからだ。いつまでやっても片付かない書類に諦めの境地に達し、休憩を入れる事に決めた時、ドアが開いて上機嫌なヒナが現れた。

笑顔の理由は簡単、今日はシャーレのオフィスで先生の仕事を手伝うのがヒナ一人だけだからである。風紀委員長であるヒナはゲヘナ高どころか大抵の学生に恐れられており、ヒナも立場上生徒に対しては毅然とした態度を取らねばならないので、先生だけが相手の時にか素を出せないのだ。勿論それは、ヒナが笑顔になる理由の前半分に過ぎないのだが。

「ああ、ヒナ。いらっしやい」

「相変わらず忙しそうね。もう、もつと要領よくやらないと体に障るわよっ!」

どつきりと机の上に置かれた書類を見て、ヒナは呆れたように溜息をついた。

「いやあ、なかなか難しくて……」

苦笑いで誤魔化すも、休憩は阻止されてしまう。

「お茶は淹れてあげるから、さつきと片づけましょ。ホラホラ席に着く!」

腰を浮かせかけていたところを、ヒナの小さな手が肩に置かれて椅子に抑えつけられる。身長僅か142cmの彼女は、こういう機会を決して見逃さない。ついでの様に頬と頬が触れるほどに顔が寄せられ、ふわりとヒナの髪から良い匂いが漂った。

「はあーい……」

どちらが学生か分からない返事をしながら、ヒナの入れてくれるお茶を待ちつつ仕事の続きに取り掛かった。

「はい、先生。こっちはもう終わったわ」

どっさりと、しかしキツチリと耳をそろえた紙束が机の端に置かれる。もと情報部の彼女はこういう仕事がとても得意だ。まず書類の山から定型の申請書類の類を選別し、私から短い会話で的確に情報を引き出してすらすらと必要項目を埋めていったのだ。これらの書類は、概ねシャーレの活動で周辺に被害を出した事の免責……つまり連邦生徒会に弁償とかをしてもらう事の申請である。最近市街地戦も多いので、全体の7割はそれに類するものだった。

「早いなあ。本当にありがとう、ヒナ」

「いいわよ、このくらい。……私だって、早く終わらせて先生と二人きりの時間が欲しいし……」

くしくしと豊かな銀髪を弄りながら、頬を赤らめるヒナ。私も早く終わらせようと再度気合を入れた。

こちらの書類は、各地の学校の情報要求と訪問許可申請である。シャーレとして活動するのもそろそろ慣れてきたが、未だに知名度は低い。アビドスの問題がようやく一段落して時間が取れるようになったので、より多くの生徒と知り合えるようにキヴオトス全土の学校の事情を知ろうとしているのである。

内容は要するに「お願いします」を詳しく言った作文なのだが、相手の校風に合わせて文章を考えるのに時間がかかっている。

「あ、ここ。レッドウィインターはこの表現をとても嫌うからやめたほうがいい」

ヒナが後ろから抱き着くように密着し、書類を指さして指摘する。今度こそ頬をびったりと密着させてきて、ヒナの柔らかくてひんやりしたほっぺが気持ちいい。

「そうなの？　ありがとう」

ヒナは文章を指摘した後もそこから退かず、私の首を抱きしめるような態勢で首に顔をうずめて、すんふんと匂いを嗅いでいた。文章を考えながら左手でわしわしと頭を撫でると、

「ん……」

気持ちよさげに小さく声を漏らして、されてるがままになっている。

ヒナのこの行動は、さつきも言ったように二人きりでゆっくりしたいという催促だ。かなり待ちかねているみたいなので、ヒナの手を借りつつも効率的に作業を進めた。

「はあ。終わったー!」

「お疲れ様、先生。……ね、休憩……するでしょ?」

赤い顔をして袖を摘まむヒナに頷いて、仮眠室へと歩いて行く。

ヒナとこういう事をし始めて、もう一月位になるだろうか。各地で授業をするときにとても良く逢うなと思っ居たが、ゲヘナは勿論シャーレでもアビドスでも毎日のように会うので、あつという間に仲良くなった。カフェでも周りを気にしながら私に近づいてきてくれるのでつい可愛くなってお菓子とか本とか色々プレゼントもした。好感度で言うと100はあるだろう。

後ろ手にドアを閉めると、ヒナが目の前に立ち、つま先立ちで背伸びをしてバンザイをするように腕を上げた。薄暗い仮眠室の中で、ヒナの暗い紫色をしたハイロウが神秘的に彼女を浮かび上がらせている。

「んっ」

少し口をすぼめて突き出してくるキス待ち顔が可愛らしい。私は腰をかがめて彼女の要望通りに抱きしめて、少し硬く尖らせた唇に口づけた。

ヒナが私の唇を割って舌を伸ばしてくるのを受け容れる。ちゆく、ちゆく、と味わうようにねっとり舌を絡められ、ぷりぷりと熱く、ヒナの愛情が伝わってくる動きに興奮が高まってくる。

赤みを増してきた彼女の真っ白な頬に手を添えて撫でると、まだひやりと冷たい。あつあつな唇と舌とのギャップが、ヒナの心ともシンクロしているようで面白かった。

ちゆぶ、とキスを切り上げると、ヒナはまだ銀の糸を引いた舌を出して物足りない様子だった。

「続きはベッドでしようね」

「うん」

はにかんで応えるその頬は化粧をしたかのように赤い。肌がとても白いので紅潮しやすいのだ。ヒナ自身は自分のその肌色を「うっかり緊張する事も出来ない」と面倒がっていたが。

お姫様をエスコートするように手を引いてベッドへ連れていく。念のためカーテンを引いてベッドを目隠しした後、さっさと服を脱ぐ。全裸になってヒナを見ると、上着を畳んでベッドのサイドボードにきつちりと置いていた。灰色のブラウスだけになったヒナの肩に背中から手を置いて、そのままずりりと前へ手を伸ばし、ボタンをはずし始めた。

「あつ……もう。自分でできるから」

そう言いながら、されるがままになるヒナ。しかしハイロウを邪魔にならないように前のほうへ寄せてくれているので、彼女がこれを楽しんでいる事も伝わってきていた。

わざとゆつくりと、ヒナの控え目でツンと尖った膨らみに手を這わせつつボタンをはずしていく。

「あ……♥」

段々露わになる胸元は、興奮で紅潮し始めていた。黒いレースブラは大人っぽく、恐らく今日のために新しく買ってきてくれたものだった。最初は白のスポーツブラに着心地を最優先した綿パンツだったなあと回想していると、何かを察したのかヒナが上を向いてきろりと睨んでくる。

「とつてもエッチで似合ってるよ」

と告げると、もう、と苦笑を一つして、ヒナが自分でボタンをはずし始めた。

「そんな事言って、すぐ脱がしちゃうくせに」

ブラウスとシャツをヒナに任せて、私はヒナのブラのホックを外し、緩んだ下から両手を差し入れて胸のふくらみをそっと持ち上げ、柔らかさを堪能する。私に愛撫されながらも、脱いだものをテキパキと畳んで上着の上に置くヒナ。

それを確認して、私はさらに大胆な行動に出る。ヒナの豊かな髪に顔をうずめて匂いを嗅ぎながら、胸のサイズ同様に可愛い先端的ふくらみを指に引っかけるようにクリ、クリと弄り始めた。

「あん……♥ まだ、ちゃんと脱いでないのに♥」

そう言いながらブラを外すヒナ。完全に露わになったヒナの胸は、既に乳首がカチカチに勃起していた。

「ヒナの乳首はいつ見ても可愛いなあ」

「またバカな事言つて……」

まんざらでもなさそうに呟いて、ヒナはスカートのホックを外してタイトスカートを床に落とした。髪をまとめて横に除けて、上とお揃いの黒のショーツを間近から観察する。薄めのお尻を浮き上がらせるようにぴったりと張り付いたショーツに顔を埋めて匂いを嗅いだ。

「やあ、もう、変態♥」

わざわざ脚を曲げずに前屈してタイトスカートを拾い、シワを伸ばしてサイドボードに置くヒナ。私が腰の横に手を当てて下げると、くるくとショーツが巻かれてヒナの真っ白い尻が視界一面に広がった。尾てい骨の辺りにキスすると、きゅつと尻たぶが引き締まる。

「そんな所にキスして何が楽しいの……」

そう言うヒナは良く分からないといった風に尻を気にして何かあるか見ようと身体をひねった。

「ヒナのお尻はとっても綺麗だからね」

くい、と触りやすく突き出された格好の尻にキスをする。ちゅううと吸い付いて離れると、ヒナの真っ白な尻に赤いキスマークがついた。

「あっ……♥」

何をされたか分かったのだらうヒナが、その跡をそつと指で撫でた。私は立ち上がってヒナの腰を抱きベッドに押し倒すと、ソックスに包まれた折れそうに細い脚を掴んで開いた。

ヒナの股間の陰毛は薄く、小さなハート型に整えられている。産毛のように柔らかなそれを撫でると、ヒナはくすぐったそうに身をよじらせる。それを後目に見ながら、脱ぎ散らかしていた自分のズボンか

らゴムを取り出すと素早く装着した。

処女だったころはぴったりと閉じていた秘裂は、私との性交を繰り返すうちに花の蕾がほころぶように開いてきている。ぬらぬらとハイロウの紫の光に照り光るそこに、先端を押し当てた。

「んっ……先生、もう、十分ぬれてるから……いいよ」

キスと脱衣中の愛撫だけで愛液を溢れさせていたヒナの入り口と先端を擦り合わせ、にちゃにちゃと音を立てて竿に愛液をまぶしていく。ヒナの性器は火傷しそうな程熱く、焦れたように腰を揺らめかせて挿入をせがんでいた。

細い腰に両手をかけて、入り口を真つすぐに捉えるとヒナも私の肘の辺りを手でつかんで結合部に熱い視線を送る。ぐい、と腰を突き出すと、何度入れても狭いヒナの膣口が歓迎するように柔軟に広がって亀頭を飲み込んでいく。

「はぁ……♡」

かぼ、とカリを超えた所で竿にぴったりと張り付き、容易に抜かせまいとする大歓迎を受けながら、ぬるぬるして、つぶつぶが全体を撫でるような感触の気持ちいい穴の中を這い進んでいく。大胆に広げられたヒナの脚が私の腰に絡み、後ろから押すように抱きしめてくる。

そして、竿が半分埋まった所で一番奥にたどり着いた。コリコリとした感触が伝わってきた瞬間、

「ふぁぁ♡」

ぴく、ぴくとヒナが痙攣してのけぞった。奥を突かれるのが好きな彼女は、セックスするたびに奥をじっくりとこねるように刺激されて絶頂しているのでどんどん感度が上がっている。そして私は、さらに腰を突き出す。

「んっ、ぁぁぁぁっ♡」

一際甲高い声を上げて、ヒナが枕を掴む。ヒナの膣が奥に伸び、一番奥が強く押し付けられる。小柄なヒナのへそ辺りまで届く肉棒が、根本までずっぽりと啜えこまれていた。

「う、おおお……ー」

きゅん、きゅん、と断続的に強い締め付けを食らい、早速の射精感に耐える。ヒナはこれだけでイッているようだった。よほど待ち遠しかったのだらう。私も忙しいが、彼女も学生とは思えないほど多忙な日々を過ごしている。前にシタのが一週間前、最初のうちはリスクを無視してでも猿のようにやりまくったが、先生と生徒の肉体関係がバレると両方とも困るので自重し始めたばかりなのだ。

「はああ……効くう……♡」

声に艶が増し、心なしか瞳にハートでも浮かんでいそうな色っぽい笑みを浮かべてヒナが私に視線を合わせてくる。無言のおねだりに、ずるずるとゆっくり腰を引いた。ヒナの膣壁がつぶつぶした感触を竿全体に与えてきて、強い射精感をこらえる。

「あゝ ああ……♡」

ヒナも、熱い風呂に浸かったようにリラックスした調子で、思わず漏れ出たかのような喘ぎ声をあげた。

膣は十分に濡れているが、それでも始めはまだ膣が暖まっていない。筋肉をマッサージするようなゆっくり、かつ力強い動きで腰を振り、ヒナの膣をじゅじゅと伸縮させていく。ずつとくつついたままの子宮口がピクピクと快感で痙攣するのが、まるで鈴口とディープキスをしているかのようだ。

最初の頃は速く押し込みすぎてヒナに痛がられた事もあったが、二人で協力して丁度いい速度を探して今に至っている。ずりゆ、ずりゆと一定の速度でゆっくりと腰を振るのが最初はもどかしかったが、ヒナが積極的に膣の締め付けに緩急をつけてくれてからは全力で腰を振っている時のような強い快楽を得られるようになった。むしろ撫でまわすような膣壁の感触はこの速度のピストンでしか得られないものだとさえ思う。

「あつ、あつ、はああー……♡」

ぐじゅ、ぶじゅ、と粘度の高い水音を股間から響かせるヒナはとても気持ちよさそうで、トロトロに緩んだ顔はセックスの事で頭がいっぱいだと大書しているかのようだ。その両腕が持ち上がり、ゆっくりと私の首にまわされた。

いつものおねだりに私は身をかがめ、ヒナとキスをする。ヒナは私の頬に愛おしげに手を当てて、激しく唇を吸ってきた。舌を伸ばし激しく口内を蹂躪し、ぐちよ、ぐちよと股間に負けない音を立てる。キスはいくら激しくしても痛くないので、ヒナのテンションに応じて激しくなるのだ。どつぷりとセックスの快楽に浸り、愛情がドバドバとあふれ出しているかのような熱烈なキスに身をゆだねながら、すっかりほぐれた膣肉をえぐる速度を段々と速めていく。

すると、それに合わせて膣ヒダの刺激の代わりに締め付けがリズムカルで強くなっていく。優等生のヒナはセックスの覚えもよく、気持ちいい事も大好きだ。そんな彼女を改めて愛しく思いながら、そろそろ堪えられなくなってきた射精に向けて腰の振りをさらに強めていく。

「んっ♥ むっ うっ♥」

キスをしたままで声を上げられない中、激しいピストンに押し出されるように低くて太い唸り声のような声がヒナの喉から出てくる。彼女も本気の絶頂に近い事を感じ、一番深くまで竿をねじ込んだままぐりぐりと腰をグラインドした。

その動きでついに限界に達したのか、ヒナが口を離して背中を限界までのけぞらせる。

「んおおおおおっ♥ イック、いくうううっ♥」

叫び声のように大きな声が仮眠室中にひびく。ビンビンに勃起した乳首が目の前に差し出されたのでこれ幸いと吸い付きながら、ラストパートのピストンを絶頂して不規則に痙攣するヒナのマンコに叩き込んだ。

「ぐうっ……」

金玉から煮えたぎるような精液が射精される。最後の一滴まで搾り取るようにヒナの膣が収縮し、気持ちよく精液を出し切る事が出来た。

「はあ、はあ……」

息も荒く、ヒナの横に寝転がる。ヒナの細い指が私の手に絡み、絶頂の甘い余韻に二人して浸った。



「はあ……お疲れ様、先生。とつても良かった……♡」

囁くようなヒナの声は、とても心地よさそうで……この後の展開も目に浮かぶようだった。

そう思うが早いかな、ヒナが裸体を起こしてこちらを覗き込んでくる。

「先生……♡ 次の生徒が来るまで、あと2時間あるから……まだまだできる……よね？」

そう言つて、ゴムを外して縛り、新しいものを口に啞えて半勃起している肉棒にフェラをするかのように押し当て、喉奥まで躊躇なく飲み込むと……口を離れた時にはもう新しいコンドームが装着されているのだった。

「私も大分ほぐれてきたし、次は先生は動かなくていいから……♡」

悪戯でも仕掛けるようにクスリと笑つて、私の上に跨つて軽く肉棒を手でしごくと、ヒナの繊細な手コキにあつという間に勃起を取り戻した棒を抑えて入り口に押し当て、ぬるりと腰を落としていく。

「ああつ……♡」

普段は絶対に見せない、口角を釣り上げた喜悦の笑顔でヒナが細い腰を上下に振りたくる。身体を支えるためにペたりと腹の上に置かれた両手がくすぐりたい。フルフルと微かに揺れる胸に目を引かれ、くすぐるように乳首を弄る。

「はあんっ♡」

ヒナは予期せぬ刺激に声を上げて喜んだ。もつともつととせがむ様に胸を突き出し、腰の振りも激しくなっていく。カリカリと指先でくすぐると、キュンキュンと膣の締めまりがよくなる。あまりの気持ち良さについ腰が浮き、ヒナの膣奥を強くえぐった。

「あああつ♡」

一際高い声で啼き、髪を振り乱して悶えるヒナ。汗とヒナの髪の毛匂いがブレンドされ、甘ったるい香りが部屋中に充満する。その匂いを胸いっぱい吸い込むと、興奮が増してくるかのようだった。

快楽が激しくなつて腰の振りが自由にならずへこへこ動かすだけになったヒナの腰を掴み、ガンガン下から突き上げる。

「はくっ、ひうっ、んひいーっーっ♡」

自校の生徒には絶対に聞かせられない、セックスが大好きとしか思えない下品な声を上げてヒナが快楽を貪る。目をぎゅつと瞑り眉を寄せて快楽に悶えながらも、口元はだらしなく緩んだ笑みで、よだれも垂れていた。

絶好調で夢中になっているヒナの絶頂が近い事を悟り、腰の動きを激しくする。騎乗位の腰の振り方ももう慣れたもので、油断すると一方的に搾り取られてしまうのだ。別の生き物のように膣のうねりも激しく、複雑になり、二回目の射精がすぐそこに近づいている。

逆転の秘策として、ぷっくりと親指の先ほどに膨れ上がっているヒナの乳首をぎゅつと摘まみ、四分の一回転させた。

「あつぐ、イク、いっくううううう♡」

部屋の外に聞こえるのではないかというほどの声を上げて、思い切りのけ反るヒナ。ぎゅうぎゅうと全力で絶頂する膣の締め付けに逆らわず、二回目でも量が変わらない射精をヒナの膣肉に促されて吐き出していく。射精が終わると、ヒナの軽い身体がぐたりと倒れ伏してきた。

汗に濡れてしっとりとしたすべすべの身体を抱き、小柄すぎて胸元に来る頭をゆっくりと撫でる。みぞおちの辺りにトクトクとヒナの心臓が脈打っているのを感じた。

数分間そうやって静かにしていると、ゆっくりとヒナが身を起こした。

「ねえ……先生。まだ一時間も経ってないわ……まだいけるわよね♡」

ヒナの覚えたての性欲は、まだまだ尽きる事を知らないようだった……

結局その後追加で三回も搾り取られ、次の生徒……アリスが来るまで本当に仮眠室で寝て休むハメになったのだった。

選択肢に外出しと膣内射精があつたら必ず膣内射精を選びますよね（アリス）

「あ、先生！ まだ仮眠室でお休みしてたんですか？」

ヒナに5発も射精して仮眠室を本来の意味で使つて出てきたら、執務室にはアリス……天童アリスが居た。

「っ、あ、アリスか。そうか、もうそんな時間だったっけ」

目を覚ました時、もうヒナは居なかった。自分の受け持ち分の時間通りに退出したのだろう。勘ぐられたら大変だからと言って、彼女はその辺りとても神経を使っている。

「はいっ。今日も先生の所に遊びに来ました！ アリス、先生と一緒にゲームしたいです！」

普段だつたら苦笑して何とか仕事を続けることを納得してもらう所なのだが、ヒナの御陰で今日のノルマは片付いている。まあ明日も厳しいノルマがあるわけで、前倒しにして仕事をして良いのだが……

（どうせ毎日きついし……）

という訳で今日は息抜きの日としよう。そう決めた。

「よし、じゃあ今日は遊ぶか！ アリスは何が良い？」

「それじゃあ、えつと……先生と、仮眠室でセックスしたいです」

少し顔を赤くして、そう言った。

（聞き間違いだな、きつと）

「アリス……今、なんて……？」

「アリス、先生とセックスがしたいです」

どう考えても聞き間違いではなかった。

「そ、そんな言葉をどこで覚えてきたんだ！」

「闇市で買ったADVゲームです！ モモイも言っていました。『一時期、エロゲーに一世を風靡した大作が超多くて、やってみたいんだけど年齢制限で買えない』って。だから闇市で買いました！ とても古いゲームですし、テキストだけの進行が殆どでしたけど、全年齢に

はない大胆なシナリオが……」

「年齢制限があるんだから闇市であろうと買ってもやつてもダメだよ!？」

毎度ながら、この無軌道な行動力には開いた口が塞がらない。街のゴミ箱をゲーム感覚で「調べる」してアイテムをゲットするアリスには、闇市もレアものを売っているショップとしか思っ居ないのだから。

「ええー？ でも、アリスはエロゲーをやって、人生についてとっても大事な事を学びました！ これは全年齢のゲームでは得られない学びだと思えます！ エロゲは文学！ エロゲは人生です！」

「その道はダメだから引き返すんだアリス！ そ、そうだ、今日はそう、お説教だ！ 年齢制限のある物に手を出したらダメだときつーく……」

「アリスは、とっても気持ちいいっていう、『好きな人とのセックス』がしてみたいんです！」

一点の曇りもない無垢な笑顔で私とセックスがしたいと宣言するアリスに、二の句が継げなかった。切り出す時は少し恥ずかしげにしていたが、今は全く躊躇がない。アリスから感じるのは、純粋な好意。

「だ……ダメだよ、アリス。そう言う事はね、将来を誓い合った男女だけがだね……」

だが、それは子供が保護者に向けるような無垢な感情だ。男女の機微なんてものを全く考えた事も無いようなアリスに、まさか手を出せるはずはない。それ以前に、私はヒナと既に肉体関係にあるのだ。まだお互いに確認したわけではないが、彼女も本気で私と……

「でも、ゲヘナの風紀委員長の人とはセックスしてましたよね？」

思考と、空気が、固まった。

「とっても気持ちよさそうにしました。あの人もきつと、先生の事が大好きなんです。アリスも、先生の事が大好きです。だからきつと、凄く気持ちいいです。セックスってどれくらい気持ちいいのか楽しみです！」

と思ったのは私だけで、アリスはニコニコと近寄ってくる。

「あの……アリス、この事は……」

「アリス、毎日お勉強してるから分かります。先生と生徒は、セックスしてはいけないんですね？ ネットのニュースで見ました。どこかの高校で、淫行教師が書類送検？ されたって書いてありました」  
「うぐつ」

ぐうの音もでない正論である。愛し合っただけでいいが、17歳で学生のヒナに手を出した時点で教職にあるまじき行為だ。

「こういうの、エロゲでもありました！ 解決策も簡単です、ここに来る生徒はみんな先生が好きだから、皆とセックスすれば絶対に秘密がバレません！ 皆気持ちよくなって、先生も安心できる最高の提案です！」

子供の無邪気さがエロゲの知識と合わさってとんでもない方向に行っている。やはり年齢制限は必要なものだなあと感じるが、そんな現実逃避をしている場合ではない。

「そ、それはアリスがばらさないでくれたら丸く収まるんじゃないかな」

「それじゃあ、アリスは先生とセックスできません！ じゃあ、警察に先生の行為をばらして書類送検してもらいましょう。そしたら先生は先生じゃなくなるから、アリスとセックスできますね」

くそつ、手が付けられない！

「ねえ、先生。アリスと、セックス、しましょう……？」

ごとん、とアリスが肩掛けにしていた荷物を下ろす。重量140kgの超級武器、レールガンだ。とことごとく雛鳥のように無防備な足取りで、長すぎる髪の毛の先で床を撫でながら近づいてくるアリスに、何の対処も出来ずに正面から抱きしめられる。

「ん……先生、あったかい……匂いを嗅いでると、ドキドキします……」

べったりと、遠慮のない抱擁。言動は赤ん坊のように危なっかしいアリスだが、身体はヒナよりも発育している。身長はヒナより10cmも高いし、胸も尻も子供から大人になりつつある柔らかさと大きさをもち、ブラをしていないのか乳首の位置まで感じ取る事が出来る。

「だ、駄目だアリス、考え直そう、ね？」

「どうしてそんな事を言うんですか？ アリスでは、先生の好感度が足りませんか？ ……エロゲではこういう時、本番以外の行為をして好感度を上げるから…フエラをしますね」

えっ、とまたしても思考が空白になる私の前で、アリスが膝立ちになる。素早くズボンのジッパーが下ろされ、アリスの細く繊細な指があっという間に私の肉棒を引きずり出した。

「おおー、これが無修正の大人チンポなんですね！ 感動です！ あむっ」

さっきまでヒナとセックスしていて若干湿っているチンポを、制止する暇もなくアリスが口に含む。

「ちよ、あ、駄目、アリス！」

頭を掴んで離そうとするも、微塵も動かない。それもそのはず、アリスはレールガンをいつも肩から下げて行動するような怪力の持ち主なのだ。貧弱な私にどうにかできるはずもない。

「れるれるれる…」

亀頭を口の中に含み、舌で表面を撫でまわされる。今日は5回も射精しているというのに、普段通り好奇心を発揮した楽し気な表情に自分の肉棒がアリスの唇を犯している異様な光景に、興奮を禁じ得ない。どんどん勃起して、アリスの上顎を持ち上げる位の仰角になってしまう。

「んむう!? ぶはっ、先生、アリスのフエラで気持ちよくなってくれたんですね。…嬉しいです」

そう言って笑うアリスは、どこか普段とは違って見えた。無垢な子供ではない、女の…性の匂いが一滴混じった、男を誘う笑みの気配が見え隠れしている。

「エロゲのヒロインは、主人公のチンポをしゃぶって気持ちよくするとき、とっても嬉しいって内心描写されました。本当にやってみると、思ったよりずっと嬉しいです。先生、アリスのフエラでもっと気持ちよくしてあげますね」

手首を柔らかく使って手コキをしながらニコニコ上機嫌なアリス

は、音を立てて殻を破りつつある雛鳥のように急速に女として成長しつつあるらしい。男を悦ばせる興奮に身を任せ、あー、と大口を開けて私の肉棒を一息に咥えこむ。

「お、むっ、んぐ、っ！ つげほ、けほけほ」

「わっ、アリス、大丈夫か？」

思い切り喉奥まで咥えこんでしまったのか、ぬぼんつと一気に頭を戻して苦し気に咳をする。

「大丈夫です。喉奥に触れると反射が起こってこうなってしまうんですね。ディープスロットを試みるにはスキルレベルが足りませんでした。心配しないでください、先生。アリスは人体の反射機能がある程度抑制する事が可能です」

「いやフェラをやめてくれと……うっ！」

懲りずに、もう一度アリスが竿を咥えこむ。ぬる、ぬると今度はゆっくり呑み込まれていき、竿の半分の辺りでアリスの喉奥の熱い感触が亀頭に触れる。ふー、ふー、とアリスの鼻息が荒くなり、股間がくすぐりたい。華奢に見えるアリスの両腕は私の太ももを抱き着くようにしっかりと固定しており、私に拒否権はない。膝のちよつと上あたりにアリスの両胸が強く押し付けられ、慣れない場所での胸の感触に言葉とは裏腹にさらに勃起してしまう。

「アリス、無理はしなくていいから、もうやめよう、な？」

「んむう、ちゆるっ、じゅろろっ」

アリスの口内は風呂に入っているかと思うほど熱い唾液で満たされており、垂れそうになったそれをすすって嚥下する。頬がびつたりと竿にくつつく位に吸っているのでアリスの可愛い顔はひよつとこのようになり、まるで可憐な少女が性処理道具に変貌してしまったかのような背徳感だ。無垢なアリスが綺麗なままに性の対象に見えてくるだまし絵のような倒錯感に私まで生唾を飲んでしまった。

スツとアリスが目を細める。一瞬で大人になってしまったかのような、色っぽい表情。それは恐らく、本気でフェラに集中を始めたという事でもあり……

「ちゅっ、じゅるっ、んぐっ……」

頬をすぼめて、鼻の下を伸ばして、顔面を性器のように卑猥に歪めながら、嘘みたいのアリスは肉棒をどんどん呑み込んでいく。まるで剣を飲み込むマジックだ。

マジックと違うのは、見ているだけではなくアリスの熱くてきつい喉の感触がチンポを締めつけてくるのをはつきりと感じる事だ。さらには竿の根本の部分も舌でザラザラと舐めまわされ、セックスとは一味違う快感が押し寄せる。

どくん、どくんと玉が痙攣する。射精をしようとしても、もうとつくに空っぽになっていて痛みを感じるばかりだ。満足感もないので萎える事も無い。いいや、萎えていたとしてもアリスのフェラが執拗すぎてすぐに勃起してしまうだろう。

こんなことをしていたら苦しいだろうに、アリスはむしろ楽し気に微笑んで、私がアリスの卑猥なフェラ顔を覗き込むのとバツチリ目を合わせて反応を探っている。その責めはどんだんの確になり、カリを刺激するように喉が締まって強い刺激を与えてくる。腰が引けてしまうような快樂に、しかしアリスの拘束は全く緩まずに為すがままになるしかなかった。

「んぼっ、ぐぼっ、じゅずっ、ぴちやぴちや……」

奥まで飲み込んだと思えば、口内で亀頭を舌で舐めまわし、強く吸ってひよっと顔を晒す。私の興奮するフェラのフルコースの様相を呈してきたアリスの性技に、もう悶絶するしかなかった。

くち、くち、くち……

アリスの口が立てる淫らな水音とは別の、控え目な水音に気づいたのはいつだったか。何度目かの空撃ちを強要され、そろそろ膝が震えて来た頃合いで、太ももを固定していたアリスの腕は片方外され、無防備なウンコ座りでフェラしている彼女の股間に伸びていた。

何をしているのか理解している瞬間、心臓がドクンと強く跳ねる。もはや我慢の限界だった。

「アリス、もういいよ。ありがとう。……続きは、仮眠室でしようか」「おむっ、ぬろろろっ……ぶはっ。やった！ 先生の好感度が上がりました！ ついにセックスですね！」



喉奥深くまで呑み込んでいた肉棒をズルズル引き出して、アリスが笑う。そんな彼女をひよい、と抱きあげる。それは完全に見た目通りの重さで、怪力を発揮するなんて嘘のようだった。

仮眠室のベッドは、ヒナとの行為の跡がまだかすかに残っている。ヒナが証拠隠滅のためにシーツやコンドームを処分したが、彼女の甘酸っぱい性臭がほんの少し感じられた。そのことに罪悪感を感じるが、腕に収まるこの牝にチンコをねじ込まない事にはもうおさまりがつかない。アリスは私を見上げて無邪気に笑いながら、唾液でてらてらと光り陰毛をくつつつけている唇を開いた。

「先生、アリスはきつと、セックスするたびに好感度が上がりますから……先生もアリスの好感度をどんどん稼いで欲しいです」

もはや無言で、ベッドの上に放り投げた。

「ひゃんっ」

ばふっ、と無防備に背中から落ちたアリスは、肘で上半身を起こすが、脚は無防備に開いたままだ。誘惑している……というよりも、なぜ閉じなければならぬのかもよく分かっていないのだろう。しかしその股間のシーツには膣口に大きなシミが出来ている。フェラをしながら脇から指を入れてオナニーしていたからだ。

あまりにも無邪気なまま性欲に忠実なその姿は、良識ある男なら決して食べてはいけない禁断の果実だ。だがそれは、あまりにも美味だから禁じられているのだと現物を目の前にして思う。私は童貞のようには手が震えるのを自覚しながら、下半身だけ裸になってもどかしげにアリスに覆いかぶさって脚を掴み、何の抵抗もなく開いたその奥にあるショーツを横に除けて、遊びに来た時から全く変わらないミレニアムの制服に身を包んだ彼女の性器に肉棒を突き立て、押し込んだ。「あ痛っ」

ごく軽く、プチンと膜を千切る感触が伝わってくる。だが躊躇なく押し込んだ。ヒナとは全く違う、大振りのヒダがアリスのように人懐っこく竿に抱き着き、歓迎してくれるかのようなトロトロの感触。ズルズルとフェラの時のようにどんどん呑み込まれていき、竿が殆ど呑み込まれた時点でようやく奥に行きついた。見た目よりずっとア

リスの膣は深く、年齢と経験を考えればあり得ない位に膣がこなれて  
いる。

「ふう……ふう……やっぱり、好きな人とのセックスって、すごく気持ち  
いいんですね……オナニーとは、全然違います」

「オナニーを……してるの？」

そう問うと、初めてアリスは顔を背け、はにかんだ。

「よ、予習は大事って、先生も言っていました……だから、先生との  
セックスを想像して、何度も……」

世間体、交友関係のしがらみ、そんな不純物を一切持たず、ただた  
だ「好き」と「気持ちいい」だけがあるセックス。それは確かに極上  
の気持ち良さに違いない。

今まさに、生で膣に挿入している私自身が、それを認めざるを得な  
かった。

絶対ダメだと分かっているでも、無防備で隙だらけの女の子の大歓迎  
膣にチンポを突き立てたいという欲には抗えなかった。

しかも、膣の具合も私の長さに合わせてあつらえたかのような最高  
にピッタリのトロまんなのだ。腰が疼くのに急かされたように、夢中  
でピストンを始めた。

「あつ、あつ、ああつ♥」

行為の正確な意味も理解しているか怪しい、行為に伴う責任なんて  
絶対本当には理解できてない心身共に未熟な少女に、「好きな人との  
セックス」という一番気持ちよくて刺激的な行為をたっぷりと学習させ  
てしまう。

ぬちゃ、ぬちゃ、と汁気たっぷりな膣はさつきまで処女だったこと  
さえ信じられない位にスムーズに大人の男のチンポを咥えこみ、ガツ  
チリとアリスの脚が腰に絡んでいてもう膣内射精以外の選択肢は取  
れなくなっている。

乱暴に打ち付けられる腰にアリスのスカートはめくれ上がり、胸元  
までかかっていた。清楚というより子供が穿くような飾り気のない  
柔らかなショーツはアリスの幼さを象徴するようで、股間の部分がめ  
くられて無毛の性器が真っ赤に充血し、太いチンポに合わせて無惨に

拡張された膣穴がヌルヌルと愛液に濡れ光っているのは犯罪的としか言いようのない光景だ。

「ああっ、すごい、先生、すごいですっ ♥ アリスの好感度っ ♥ どんどん上がっちゃいますっ ♥」

アリスの反応は全く処女らしくなく、顔を真っ赤にして大興奮しながら満面の笑みを浮かべている。その笑顔はもう普段の屈託のないものとは違い、セックスに陶醉する女の笑みだった。自分が無垢なアリスをこうした、ヒナに黙って関係を持った、という罪悪感が目の前の淫らな雌に対する攻撃衝動となつて股間から湧き上がる。

アリスの制服に包まれた胸を鷲掴みにした。水色のネクタイが谷間に埋もれ、雌穴をほじくられた事で興奮し汗ばんでいる。モモイによく注意されているが、アリスはスポブラさえたまに忘れる。今がまさにそうで、制服の下には薄いシャツがあるばかりで、男に触れられた事のない淫らな乳首が激しく自己主張しているのを手のひらにくすぐったく感じる事ができる。まるで男に食べられるためにいるような無防備さに、股間のイライラがさらに高まつていく。

「まったく、アリス！ 君つて子は！ もっと！ 慎みというものを！ 覚えなさいっ！」

震える手でボタンをはずし、バツと前を開く。膣を突くたびにぷるん、と震える程度には大きさのある胸が、シャツを立派に盛り上げている。

「はい、先生 ♥ 着衣胸はだけ差分、ゲットです ♥」

悪戯を仕掛けるように、アリスが自分からシャツをめくりあげ、ピンク色で硬く勃起した乳首を惜しげもなく曝け出した。意外にも乳輪も乳首も大きく、男の興奮を煽る胸をしているが……今のアリスにはむしろふさわしかった。たまらず身をかがめて右の乳首に吸い付く。

「はあんっ ♥ 乳首っ ♥ ちくびすきっ ♥ そこ、アリスのウィークポイントっ ♥ オナニーの時も乳首だけでイッちゃうんですっ ♥ エクストラターンでもう一回乳首責めコマンドを選んでくださいっ ♥」

ゲームのようにセックスを楽しむアリスに促され、もう片方の乳首を指でつまみ、クリクリと捻ってやる。

「ん、おっ♥ 先生のっ、乱暴なのに自分でするより気持ちいいっ♥  
先生の身体、アリスに特攻ですっ♥ 三倍ダメージ叩きだしてますっ♥」

乳首をひねるたびに、膣穴のほうもキュウキュウと締まる。ヒナのように意識して出来ていないわけではない為ピストンに完全に合わせやっっているわけではないが、それがランダムな刺激となつて予想外の快感をもたらしてくれる。

私はミルクのように甘い匂いのするアリスの胸から顔をあげ、すぐ上の唇にキスをした。

「はむっ、ちゅ、ちゅっ………♥」

赤ん坊が哺乳瓶を含んだときのように、無心に唇を吸ってくるアリスに、舌をねじ込んで返礼する。

「はおっ!? はむっ、ちゅるっ、ちゅぱちゅぱっ♥」

アリスは一瞬驚いて目を見開いたが、すぐに気持ち良さを理解して私の舌をフェラするように吸いたて、アリスからも舌を絡めてくる。スポンジのようにセックスのやり方を吸収していくアリスに、さらに追い打ちをかけるように、両手で乳首をぎゅうっ、と引っ張つてやる。

「んむうーっ♥」

胸の形が伸びるほどに強く引っ張つたが、アリスはこの刺激も快樂として受け取った。ぎちっ、と一番の膣の締めがあつて、それからグネグネとのたうつように膣がチンポをむしやぶる。その快樂は普段ならとつくに射精している所だったが、ヒナに射精しきっているのもうまだまだ頑張れる。

「おらっー」

絶えず高刺激を与え、アリスを絶頂責めにする。とはいえ、貧弱な私の体力の限界は近い。休憩もかねてアリスに声をかけ、体位を変える。アリスをひっくり返し、横向けに寝ているアリスの背後に私も寝そべる、背面側位になった。アリスの細っこい脚を高々と上げさせ、またずぷんと挿入する。

アリスは背中の中の私に何もできず、私はアリスを触りたい放題の体勢だ。アリスを腕枕するように回された腕で乳首をつねり、もう片方の手は小さくて皮からほんの少し顔を出しているクリトリスに伸びる。「そら、こんなのはどうかい？」

反応の良かった膣の浅い部分を亀頭でえぐりながら、クリトリスの皮を剥いたり戻したりシコシコとしごきたててやる。

「あおおおおおう ♥ いっ ♥ イツく、イクイクイク、イクっ ♥」

痛がるかと思ったクリトリスへの刺激も全く問題なく受け取りながら、アリスがまた絶頂する。みっちり密着するような膣の締めりに、鼻の奥がツンとするほどの快感がこちらにも押し寄せてくる。どくん、どくん、とこの牝に種付けするべく筋肉がポンプ運動をするが、精液なんて出尽くしているし、我慢汁にだってほんのちよつとの精子しか残っていないだろう。それでも妊娠の可能性のある生交尾に生殖本能を刺激されながら、熱に浮かされたようにアリスの首に顔を埋めて強くキスをする。甘ったるい子供の匂いが、目の前にいる雌が純真無垢な子供だと思い出させてくれて、勃起がまだ収まらない。

ベロベロと唾液の跡をナメクジが這った跡のように残しながら、首筋、耳、頬、唇へとアリスの甘い少女の身体を味わう。アリスも首をもたげてこちらを振り返り、もはや慣れた様子でセックスのためのディープキスをする。

「んむううううう ♥ んぐむっ ♥ んごっ ♥」

ひたすらにアリスの気持ちいい所をこそげ落とすほどの勢いでしごきたて、つねり、えぐり……毎秒のように膣がうねり、アリスが絶頂する手ごたえを感じる。自分の腕の中で、無知な少女が絶頂に慣れ、当然のようにその快楽に親しみ、味わいを知っていく様子を眺めながら……何度目かの射精絶頂を感じる。金玉が再生産を終えたばかりのなげなしの精液が、アリスの一番奥深い所に放たれる手ごたえが、確かにあった。

殆ど白目をむいてぐったりしているアリスの身体を強く抱きしめながら、一番奥に押し付けて、ほんの少しの精液を子宮にねじ込むようにねじ込んでいる時……私たちは二匹の繁殖期のケダモノだった。

大惨事だった。

ベッドの上には制服をぐしゃぐしゃに乱したアリスが薄目を開いて、呆然と寝そべっている。汗に濡れた胸の頂点には、勃起が治まっても前より大きい気がする乳首が存在を主張しており、ばんざいをしたような腕と、レイプ後としか思えないパカツと開いた股が起こつた事を雄弁に物語っている。殆ど出ていないはずの精液は見えないが、アリスの綺麗に整った性器が男の太さに合わせてぽっかりと膣口を開けており、無残さがより一層際立っていた。

「どうしよう……」

合意というか迫られたとはいえ、途中からもうアリスを犯すことしか考えられなかった。それほどに無垢かつ淫乱な女の子というのは反則的に魅力的だった。

「じ、自首するか……」

「駄目ですよ」

「うわあっ!?!」

放心していたアリスがいつの間にか起き上がり、いつものゆったりした瞳をこちらに向けている。首から上は全く普段通りであるだけに、胸と股間が丸見えなのが悪い冗談のようだった。

「アリスが先生とセックスしたくてお願いしたのに、先生が犯罪者になるなんて嫌です」

「で、でもねアリス……」

「ゲヘナの風紀委員長とはよくて、アリスはダメなのですか」

ぷう、と頬を膨らませてむくれるアリスは子供そのもので、さつきまでの淫らな姿が嘘のようだ。しかし彼女の大きな乳首とめくれたパンツ、パクパクと開いた膣穴がそんな現実逃避を許さない。

「う、ひ、ヒナの事も……」

「先生は……あの風紀委員長ルートがお望みなんですか?」

「いや、ルートってそんな……」

「確かに、同時進行の出来ないヒロインも居るでしょう。先生が風紀委員長狙いならば、それは理解できます……でも、アリスは他の誰と

も同時攻略可能なヒロインです。他のヒロインのフラグを折ることも、しません」

「な、なにを言っているのか……」

「先生には、これからもアリスの好感度を上げてほしい。アリスも、もつと先生の好感度を上げたいです。……だから、次もまたセックスしましょう」

「なっ……」

まさか……ヒナが本命という事を認めた上で、まだ肉体関係が続けようというのか。しかもヒナに明かさなまままで。

「やっぱり、エロゲーは人生の教科書です。アリスは、今日のセックスの事をこの先ずつと、絶対に忘れる事は無いと思います。こんなに気持ちいい事……もうセックス無しではアリスは通常の生活を送ることができません」

普段通りだと思ったアリスの表情に、ねっとり、雌の快楽を反芻するような笑みが浮かぶ。

「だから……ね、先生。アリスと、もつともつと、セックスしましょう。もしかしたらアリスは、子供を作る機能が備わっていない可能性もありますから……それなら先生も遠慮なくセックス出来るのに。簡易セルフチェックではそこまでは分からなくて。すみません」

「わ……わかった、わかったよ。この事は、二人の秘密……だな。次に来的时候は……ちゃんと避妊しよう」

「はい！ ゴムセックス、ですね。口で付けたら、使い終わった後は縛って腰みののようにぶら下げたり、エロゲーでは定番のアイテムです。楽しみにしています！」

その後、シャワーを浴びさせ、首筋についたキスマークをベビーパウダーで誤魔化してから家に帰した。

アリスが帰り際にちよこちよここと手を振る、その可愛らしい仕草を目にしながらも、140kgの重量を受ける肩紐が胸に食い込み、谷間を強調するように浮かび上がらせているのに目を奪われてしまう。

もう自覚せざるを得なかった。

(生徒たちは、皆私を慕ってくれている……あんなにも純真で、可愛ら

しい生徒が、皆……アリスのように乱れるのだろうか）

ヒナも、アリスも、私とのセックスに夢中だ。私も彼女たちの身体を夢中で貪っている。イオリは、モモイとミドリは、イズナにシズコ、シロコにノノミ……皆はどんな風に乱れるんだろうか？

それが、見たい。

私には、見る事が出来る。

そう思うと、射精するものも残っていない股間が強く疼くのだ。

消灯と戸締りの準備をしながら、私は自然と脳内で『次』の段取りを組んでいくのだった。



くのいち映画には濡れ場がつきもの（イズナ）

アリスとのドスケベセックスを経験し、生徒たちの秘められた性に魅入られた私は、早速次の相手を選定し始めた。

自分で言うのもなんだが、キヴオトスに来てから私は異様に生徒にモテている。ヤれるかヤれないかで言えばヤれる生徒のほうが多いくらいだろう。

しかしそれは、誠実に付き合えばという話だ。ヒナと関係を持ったときのように。迂闊に手を出したりしたら皆が皆持っている銃器で蜂の巣になる事さえあり得る。

では、誰ならイケるのか？

（まずは一対一じゃないとな……）

アビドス対策委員会の皆で和気藹々と話しながら、シロコのオツパイを揉む想像をする。想像の中で即座にセリカが叫び、ノノミが怒気を放ち、アヤネが目を吊り上げ、ホシノがシールドを構える。シロコは頬を染めながらこんな所じゃダメ……とつぶやいた。

やはり二人きりでないとそういう雰囲気には持つていけないだろう。しかし、そうになるとアビドスの面々は難しい。十分な時間を確保しながら二人きりになり、さらにはそれが怪しまれない必要がある。シロコに手を出したら、常識的には私がシロコを恋人に選んだとみなされる。それを他のメンバーに話したら、後は生徒がキヴオトス中に広める事だろう。いずれヒナの耳に入り、私は死ぬ。

関係をもつても秘密にしたがるような方向に持つていかなければならない。単純なようで意外に難しい条件だ。生徒たちはほとんど、部活や委員会に所属していて仲のいい友達がいる。その友達に「先生と恋人になった」「先生と肉体関係を持った」という相談をするかどうか。下手をすると本人にさえ予想できない難問だ。

例えばモモイとミドリは双子だが、そんな相談をするだろうか。恐らくお互いに秘密にしあうとは思……が、ユズやアリスには話しているかも知れない。アリスはともかく、ユズが同時にそんな話を聴いたら、人見知りのユズでも生徒会……ユウカ辺りに相談する可能性は

ゼロではない。

生徒同士の関係性というのは考えれば考えるほど難しい。そうになると、基本的に単独でいる生徒を狙うべきか。

(他の生徒と一緒にじゃないという意味では、山海経のサヤとシユンはいいかもな……ゲヘナの美食研究会も、人数はいるけど一緒に行動しているイメージはないが……)

しかし、別の問題がある。生徒もまた忙しい場合があるという事だ。シユンはまさにそれで、子どもたちの面倒を見るのに忙しい。給食部なんかもかなり忙しいだろう。お祭り運営委員会は忙しい時とそうでない時で差が激しそうだ。

会ってから口説いてセックスまで持つていくには、普通より多くの時間が必要だろう。場合によっては何度も会う必要がある。ヒナの時とは違って、これから手を出す生徒は3人目である以上はあまり時間を取り過ぎるとヒナに怪しまれかねない。逆にヒナを優先すると口説く機会を失う。事によると、「先生に言い寄られた」と警戒されるかもしれない。

友達とあまり一緒に居なくて、近づきやすくて、会う時間を取るのが簡単な生徒が良い。

その条件でも、複数人思い当たる。

(うーん、まるで性犯罪者の思考だなあ)

まるでではなく性犯罪を犯すつもりなのだが。というか、既に犯しているので今更の話だった。せめて合意の上でやるようにしよう。

あと本当に性犯罪者に狙われたら危ないから、セフレになれたら私と一緒に対策を考える事にする。

「よし」

最初に毒牙にかける相手は決まった。あとは……

「仕事しよ……」

今日もまた大量の仕事を死んだ目でこなしていくのだった。

「ええっ!?! 主殿、今日は忍者ものの映画を一緒に見てくれるんですか!?!」

イズナだった。

「ねえ、イズナ。最近忍術研究部に入ったんだよね？ もう友達はできた？」

「もしも何でも話す大親友が出来ました！なんて言われたら普通に映画を見るだけにしよう。」

「はいっ！ 皆忍者好きな同士ですから！ あっ、でもでも、主殿の個人情報はいしよにしてますよ！ 忍者は口が固いのです！」

イズナの言う事なのでどこまで守れているかは分からないが、仲は良いようで何よりだ。

「そうなんだ。普段どんな事話すの？」

「それは勿論、忍術の事ですよ！ 昨日の部活でも、資料映像を皆で鑑賞してポップコーン味の饅頭を……いえ真剣に討論をしました！」

「うーん、目に浮かぶようだ。しかしそうか……イズナも友達が出来たんだなあ。良かった……いやしまった？ いやしまっていないのか？」

「なんだかよく分からなくなってきた。セフレはもうヒナとアリスだけで良いのでは……？」

「あ、あの……主殿。たとえどんなに仲のいい友達が出来たとしても……イズナが一番優先するのは、主殿ですから……御用があったら気軽に誘ってくださいね？」

シャツの裾をきゅつと摘みながら、顔を赤らめて上目遣いにイズナが言ってくる。

何てチンコがイライラする光景だろう。

(やるか)

イズナが雌の顔をする所が、どうしても見たい。なに、イズナならたとえレイプしても黙っていてくれるだろう。

そして、イズナの自宅。おすすめ映画と言いつつ、昔のよく知らない映画を借りてきた。ネットで調べて、濡れ場がとにかく沢山ある作品を選んだから映画に感情移入しがちなイズナとみればエッチな雰囲気になる事は確実だろう。そこから先に行けるかどうかは、イズナ次第だ。

「主殿と映画く♪ 主殿と映画く♪」

テレビの下のデッキにディスクをセットするイズナ。四つん這いになって、短いスカートからは下着が見えそうで見えない角度だ。私はチンコをイライラさせつつ、ソファアームに座って待った。

「えへへっ♪」

戻ってきたイズナがぴつとりと寄り添って座る。私は……普段ならしない事だが、肩に手を回してイズナを抱き寄せ、ゆっくりと頭と、頭の上に生えている方の耳を撫で始めた。

「ひゃわっ……あ、あるじ、どの……」

「ほら、映画始まるよ」

真つ赤になってこちらを見上げるイズナを見ず、テレビを見るように促す。イズナは私に軽くもたれかかるように力を抜くと、顔を赤くしながら映画を見始めた。

「おおっ、これはイズナも知らない作品ですよ！ かなり古い年代みたいですね！ さすが主殿です！」

てつきりエロ目的の作品かと思いきや、意外に面白い。忍者同士の暗闘、主に誓う忠誠……手に汗握る展開が続く。イズナも普通に楽しんでる。

しかし、開始30分ほどの所でついに始まった。

これまで主人公と共に戦っていたくのいちが情報収集の別任務で、敵国の重臣の所に乗り込む場面。商売女として抱かれながら隙を見るそのシーン。イズナが見てきた映画であれば、「最中」は適当に飛ばすのだろうか……

「え？ ふえ？ あ、あわわ……」

イズナはいつまでたってもカットされず、ついにはくのいちが全裸になり、乳首も下の毛も映し出されたのを見て赤面していた。そして、主人公の前では無邪気キャラだったくのいちが男に抱かれ、気持ちよさそうな喘ぎ声を出しながら布団の中でゴソゴソしているのを、内腿をモジモジさせながら食い入るように見つめている。

私は、ずっと撫でていた頭から手を滑らせ、顔の横のほうの耳に触れる。

「んっ……」

ぴくん、とイズナの肩が跳ねた。だがそれ以上の反応はない。首筋に指先を這わせ、鎖骨をなぞる。肩と、それに続く腕の外側をさわさわと撫でまわす。

「はんっ……」

イズナは、むしろ身体をさらに密着させてきた。比較的大きい胸が脇腹に押し付けられる。

(これは……行けるか)

さらに大胆に、イズナの腰に手を回す。日頃運動している彼女は体型だけなら立派なくのいちだ。細く、女を感じさせる括れた腰を無遠慮に撫でまわす。ついに、イズナはテレビを見るのをやめて私の胸に顔を埋めてきた。ギュツと身体を強張らせているが、抗議の声を上げたりはしない。

腹を撫でまわしていた手を、上へ持つていく。ついに、イズナの柔らかな胸を持ち上げた。ブラに包まれた胸の感触を指先で感じながら、たぶ、たぶと片乳を軽く上下させて弄ぶ。

「ふっ……うん……♡」

押し付けられた口から、悩ましげな声が漏れる。それは明らかに、子供ではなく……女の声だった。

しゅるる、と衣擦れの音を響かせて、手が滑つていく。外側の胸を、優しく、何度も往復して撫でる。

「ふう……ふう……♡」

マフラーを外した襟元が、紅潮しているのが見える。私は意を決して、イズナの胸を鷲掴みにした。

「はあんっ♡」

ぴくん、と身体が跳ねる。抵抗はなかった。胸を揉みながら、セーラー服の前のファスナーを下ろし、ブラのホックを外し、シャツをめくりあげて生乳を拝んでも、イズナは私の胸に顔を埋め続けていた。

イズナは乳輪、乳首共に大きめで、それを恥じたように腕をもちあげて乳首を隠す。それをもう片方の手でそつと押し下げる。暫く抵抗していたが、手をぎゅつと握るとゆっくりと腕が下がっていった。

指先で、イズナの肌色の乳輪をそつとなぞる。

「っ……」

押し付けられた顔から、鋭く息を呑む音がする。だがそれ以上は何もない。私はゆったりと指を這わせ……乳首をころころ転がすようにくすぐり、ぴん、と弾いた。

「ああっ♥」

一度も聴いた事のない、イズナの雌声。いつもの元気さとはまるで違う、男にされるがまま、あまつさえ気持ちよくなってしまう都合のいい雌の、習性とさえ思える媚びを含んだ、甘い声だ。もつと聞かせてほしくて、敏感な乳首を執拗に指で弄ぶ。

「あっ、あっ、だめ、あるっ、じ、どの、やめっ♥」

ついに耐えられなくなつて、顔をあげて私を見た。

乳首の快楽に眉をひそめ、やめてくれるよう懇願するように目じりに涙が浮かんでいる。だが潤んだ目には確実に、「もつと気持ちよくなりたい」という感情が滲んでいる。懇願しておきながら、それを踏み碎かれる事を期待している。

乳首をぎゅつと摘まんで、引っ張つた。

「ぶぐっ、んいいいいい♥」

イズナが目を見開いて、背をのけぞらせる。摘まんだ指の間で、乳首があつという間に更なる勃起に硬くなるのが分かった。

私が抱き寄せる腕の中で、イズナが乳首をつねらせて絶頂している。そして、絶頂後の余韻をうつとりと楽しんでる。犯罪ものの「いたずら」をする男から逃げもせず、むしろこちらの身体にもたれかかって、何をするでもなく、大口を開けてお代わりを待つ幼子のように、成り行きに任せている。

ヒナは、私と恋人になりたくて関係を持った。

アリスだつて、私の好感度を上げようとしていた。

イズナは……この状況でも、何も聞かない。ただただ、私の都合のいい道具のように扱われる事を許容し、そしてそれに快感を感じている。

「イズナって、変態だよね」

さっ、と蕩けていた表情が驚愕に染まる。

「ちっ、ちが、イズナは、主殿だかふあああんっ♥」

とってつけたような反論を封じる。

「男を家に上げて、胸を揉まれてもそのままにして……イカされても黙って続きを期待しちやってるよね？　そういうのは変態女って言うんだよ」

「あう……あう……♥」

胸を軽く揉みながら言うと、イズナは酷い言葉をかけられたにもかかわらず羞恥に顔を染めて乳首をまた硬くした。

「イズナ。男にそんな態度を取っていたら、あっという間に犯されて子供を作る事になっちゃうよ」

「こ、こど、も……♥」

胸を揉みながら、ついにスカートのホックを外す。太ももからゆびを滑らせ、イズナの股間をショーツ越しに撫でると、溶けかけのバターのように柔らかな感触と粘質な水音が上がる。すでに、映画はエンドロールも終えて部屋には静寂が満ちていた。

かれこれ1時間はイズナを撫でまわしていたのか。あまりにも楽しかったので気付かなかった。

「立って、イズナ」

はつきりと、命じる。糸を付けられた操り人形のようにイズナが立ち上がる。ホックを外され、短いフアスナーも下ろされたスカートがイズナの脚を滑り落ち……イズナはそれを止める素振りさえ見せなかった。

「へえ、そんな下着付けてるんだ。エッチだね、イズナは」

「ああっ……♥」

ビキニのように股間を頼りなく覆う布を、ヒモがショーツとして成り立たせている。よく鍛えられてハリツヤのある尻にぴったりと布が貼りついている。まさに目線の高さに、手の届く距離にあった。羞恥から、イズナがその場で手を後ろに回して尻をパーで隠して見える。勿論、全然隠れてはいない。

悠々と下から手を伸ばし、むっちりとした尻たぶを掴む。キュツと

力んで硬くなる変化を楽しみながら、無遠慮に撫でまわす。

「主殿……♥　だ、だめ……こんなこと、ダメですう……♥」

そんな事を言いながら振り向く事さえせず、むしろ尻を私に突き出している。両の尻たぶの真ん中に手を差し込み、持ち上げてやる。中指が膣口に食い込み、愛液と汗で蒸れているのを感じる。イズナの太ももはむっちりしているが決して太ってはおらず、余分な肉のない股間部は内腿を閉じようとしたところで三角形に空間が出来るだけで私の手を拒むことはできない。

「はあっ、ああっ♥　あああっーっーっ♥」

ぬぶ、と中指がショーツを巻き込みながら膣に埋没していく。これほど決定的な行為を働かれても、イズナは身を震わせて、私の掌に水たまりを作る勢いで愛液を垂れ流すだけだ。

「イズナ、ショーツ脱いでよ。マン汁でドロドロにしたらよくないでしょ?」

「っ!　は、……は、い……♥」

こうして膣に指を入れてみるとよくわかる。命じられた時、明らかに膣が締め付けてきていた。まるで普段のイズナが喜んで私に抱き着いてくるかのように明け透けな好意でもって、瑞々しい性を搾取されようとしていた。

イズナは、面倒だからなのか、それとも元からそういう構造なのか、腰の横の結び目を解かずにズリ下ろして、最後の防壁を自分から取り払ってしまった。

「良いの?　脱いじゃって。これからイズナの処女、奪っちゃおうよ?」

イズナが抵抗したら致命的に困るのはむしろ私の方だが、もはや確信をもってそう言った。

果たしてイズナは、震える手で後ろ手に膣の左右の肉に指を添えると、深くお辞儀をするように前かがみになってこちらに尻を突き出し、ピンク色の性器を自分で広げて見せた。

「……………♥」

とろりと溜まっていた愛液が零れ落ち、部屋のカーペットに小さなシミを作る。



「どうしたの、イズナ？ 黙ってたら分からないよ」

ちゅぷ、と膣に中指を突っ込んだ。お風呂に浸かったように愛液があふれ出し、床のシミを広げていく。

「んきゅううつ♡」

びくん、と全身を痙攣させた。立っていられないという風に内股になつて膝が笑っている。

「ねえ、処女を奪われちゃっていいの？ 悪いの？」

ぐじゅ、ぶじゅ、と下品な水音がイズナの股間から響き渡る。指一本でかき回しているだけなのに、イズナの股間からは後から後から愛液が湧きだし、床には既に水たまりが出来ていた。

「あつ、だめつ、イク、イック♡」

自分で膣を上げたままの姿勢で、がくん、がくん、と上体を揺らす。処女膜にも触れない程度の浅い手マンで、あつという間に絶頂に達したのだ。

「え？ ダメなの？ じゃあ、もう帰った方がいい？」

その言葉に、弾かれるように肩越しに振り返った。

「ち、ちがつ、あの、そのっ……い！」

泣きそうに眉尻を下げながら、その瞳の潤みは更なる快楽を意地強く強請る色を帯びている。イズナが二の句を継がないで見ているのを見て、私はぷつくり膨らんだクリトリスを、皮も剥かずに愛液を絡めたヌルヌルの指で弄び始めた。

「あつ、あーっ♡ だめ、だめ、だめ、また、イク、イクイクイク♡」

へこへこ、クリトリスの刺激が増すように自分から腰を振って指にごすり付けてくる。イズナがイク寸前に、私は手を離した。

「こーら。人と話してる時にオナニーを始めちゃ駄目でしょ。答えは？」

振り返ったイズナの目から、ぽろぽろ涙が零れ落ちる。半開きの口からはよだれが顎に伝っており、イズナが何に悲しんでいるのかをよく伝えていた。

「捧げますっ♡ 処女、主殿に捧げますから、もっと、もっとしてくだ

さい♥」

そう、彼女はただただ、クリトリスでの絶頂を取り上げられた事だけを嘆いていた。曝け出された淫らな本性を見て、私の昂りも最高潮に達していた。

「じゃあ、全部脱いで。ベッドに行こうか」

ぱあつ、と笑顔になり、その場に服を全部脱ぎ捨ててしまう。立ち上がった私に、何時ものように抱き着いてきた。だがその顔にいつもの笑顔はどこにも見当たらない。

男から性の玩具として扱われる事に期待する、浅ましい女の媚びた笑みしかなかった。

ぐいぐいと腕を引つ張るように、テレビのすぐ隣にあるイズナのベッドに導かれる。私も全裸になり、イズナに跪くように命じる。

「じゃあ、しゃぶって」

そそり立つ肉棒をイズナに突きつけると、イズナがおずおずと小さくて可愛らしい舌を出し、先端にペトリとつけた。

「まずはそのまま舌で舐めまわしてみて」

命じられるがままに、ぬろぬろと亀頭をイズナの舌が這った。あつという間に唾液がまぶされ、竿を伝っていくのが分かる。

「歯を立てないように啜えて」

ゆつくりと、イズナの頭が前に進んでいき……私のものが呑み込まれていく。半ば程度で喉に触れ、そこからは進めなくなった。イズナが

(もう無理です、主殿)

と泣きそうな顔をして啜えながら上目遣いに訴えてくる。このまま喉奥を犯しても喜ぶかもしれないが、それはまだ早いだろうと判断し、頭を撫でてやった。

そして、イズナにフェラを仕込んでいく。舌を絡め、頬をすぼめて吸い付き、一旦口を離させてフルートのように横から竿に唇を這わせる。手コキをさせながら玉を舐めさせると、スンスンと股間に顔を埋めたイズナが匂いを嗅いで陶然としていた。

「そんなにチンポの臭いが好きなの？」

ビクン、と悪戯をとがめられたようにイズナが固まった。頭をゆつたりと撫で、優しく声をかけてやる。

「知りたいんだ、イズナの事。どんな事が好きで、どう気持ちよくなるのか、教えて」

イズナの目がキラキラと輝く。昂奮のし過ぎで瞳孔が広がっていた。

「す、好き……です。主殿の、匂い……嗅ぐと、ドキドキするんです……♥」

身体だけでなく、心までも私を楽しませるオモチャとして扱われて、イズナは悦びを一層深くしていた。やはりどうしようもない変態女だ。

「いい子だ、イズナ。ベッドに仰向けに寝そべって」

まるで夢遊病のようにふらりと立ち上がり、言われるがままにベッドに寝そべる。何も言われないのに自分から股を開き、両手でマンコをむにと広げた。

私もベッドに上がり、イズナの裸体を眺める。処女なのに自分から男に喜んで股を広げる淫乱女がそこに居た。髪を結うヒモと、キツネ面のアクセサリだけが、無邪気な忍術少女だった面影を辛うじて伝えている。

「イズナはどうされるのが気持ちいい？ 乳首？ 穴？ クリトリス？ それとも……お尻の穴をさりたい？」

許しなど得る必要もなく、雄待ち女の身体に手を伸ばす。軽くなでてやるだけで、イズナはいとも簡単に甘い声を漏らした。

「く、クリ……クリトリス、いつも、弄って、ます……♥」

顔を真っ赤にして、女の子が一番知られてはならない事を白状する。その羞恥すらもイズナの興奮を高めていた。

「でも、主殿なら、乳首も、おまんこも、身体中クリトリスより気持ちいいです……♥ イズナ、乳首だけでイっちゃうなんて、初めてでした……♥」

イズナも自分の変態さに気づいてきたと見えて、恥ずかしい秘密を自分から追加で明かしてくれる。それだけなのにマンコをひくひく

させて愛液を溢れさせていた。

「そうなんだ。じゃあ、これを入れても大丈夫そうだね」

ぐりっ、と亀頭を押し当てると、イズナから感嘆とも悲鳴ともつかない声が漏れる。鼻息も荒く、結合部からピタリと視線を外さない。されるがままに処女を奪われるという状況を余すことなく味わおうとしているのだろうか。

「私の、処女……貰ってください……♥」

呟くように、恋仲や愛を求める事も無く、ただ肉欲に浮かされて処女を差し出す淫乱生徒の姿に、心の底から満足し……腰を突き出した。

ぬるりとキツイ入り口をくぐって、亀頭が膣に埋没する。イズナの括れた綺麗な腰を掴み、力任せに突きを繰り返した。

「あああっ!!」

ぶちん、としっかりした肉の膜を破る感触と共に、一番奥まで竿を突き込む。途中で一番奥に突き当たっても強引に押し込んだ。

「はぐっ、ぐっ、いだっ、いだああ……♥」

歯を食いしばって眉根を寄せ、快樂ではない涙を浮かべるイズナを見降ろしながら、

「動くよ」

それを一切構わずに腰を振り始めた。イズナの膣はギチギチと固く、愛液が溢れていなかったら入れている私でさえ痛かったことだろう。

しかし私とは比にならない激痛に苛まれているだろうイズナは、だからこそ被虐の快樂に酔いしれていた。

腰を掴んでいた手を離し、イズナの手に重ねる。指を絡めて握ると溺れる者が藁を掴む様に、縋りつくような力で握り返された。そのまま覆いかぶさって、イズナのファーストキスを奪う。

「んむうっ♥」

イズナは目を見開いた後、トロリと表情を緩ませた。処女を奪われ強引なピストンを受けても、たった一匙のまやかしの愛情を加えてやるだけで痛みは麻痺し快樂が優勢になっていく。膣からは力が抜け

て、処女膣の気持ちいい締め付けだけが残る。おずおずとイズナからも舌が伸ばされ、口を離して舌だけでヌルヌルと睦みあう。

「主殿……♥」

ただ、名を呼ぶ。それだけで膣がわなないていた。お手軽な処女オナホと化したイズナが、自分からキスを求め開脚していた脚を私の腰に絡める。それに逆らわず、身体ごとイズナに体重をかけた。私の胸板でイズナの胸がつぶれ、腰を突き出す度に勃起乳首がくすぐってくる。

べつたりと張り付くように身体を密着させ、マイペースに腰を振る。ぐぷ、ぬちゃ、と汁気たっぷりのマンコから蜜が溢れる淫らかな音だけが部屋に響いていた。

「イズナ。脚を離してくれないと、子供できちやうよ」

そう、私は今避妊具を付けていない。どうしても、イズナの処女膣をナマで味わいたかった。

「いっ、いい、です♥ 主殿の赤ちゃん、出来ても良いですっ♥」

マンコをほじられすぎて馬鹿になったイズナが、上ずった声で返事をする。

「いいの？ 責任取らないよ？ 結婚どころか、恋人にもならないよ」

「いいですっ♥ セックスしてくれるだけでっ、イズナは幸せですっ

♥ 主殿の赤ちゃん一人で育てますからっ♥ このまましてくださいっ♥」

ある意味、この瞬間……本物の忍びの主従のように、真の意味でイズナは私に人生を捧げていた。誇りある忍びと違って、只の都合のいいオナホ女としてだが。

「じゃあ、出すよ……！！ イズナの一番奥に出すよっ！ ほら、チンコに集中してっ」

「だしてっ、だしてっ♥ 主殿のせーえき♥ イズナにくださいっ♥」

ぎちぎちと絶頂に等しい膣の締めを感じ、導かれるままに一番奥に押し当てて射精する。アリスの時とは違って玉をパンパンにしての射精は、興奮も相まってヒナとの一番搾りに勝るとも劣らない量をイズナの胎内に注ぎ込んだ。

「あああー………」

イズナが絶叫する。密着していてもブリッジのようにのけ反った背が私を持ち上げ、イズナの胸の谷間に顔を埋めた。種付けフリーの膣に最後の一滴まで注ぎ込むべくイズナを強く抱きしめ、射精を叩き込む。イズナが無意識にか腰をグラインドさせ、ビリビリと痛みにも似た快楽の中で精液を出し切った。

「ふう……良かったよ、イズナ……ん？」

イズナからの返事はなかった。白目を剥いて失神していたからだ。処女の初セックスで気持ちよくなるどころか興奮のあまり失神してしまう、忍術よりも才能に溢れた反応を見て、私の股間がまた滾ってきた。

「ごめんね、イズナ。また使わせてもらおうよ」

乳首を勃起させ、半開きになった口からよだれを垂らし、性を貪られた悲惨なその姿をオカズにして、多少緩くなった膣をヌルヌルと往復する。硬さが取れた膣はまた違う気持ち良さで私を悦ばせてくれた。パン、パンと下腹部が打ち合う音を響かせて犯していると、

「んきゅっ♥」

びくん、と電気でも流されたように突然イズナが覚醒する。それに構わず腰を振り続ける。

「あつ、あれつ、イズナ、なにやって、えつ、イク、イク、なんで、イクっ♥」

寝ぼけているようなイズナを快楽責めにして、絶頂に合わせてまた射精した。

「あー………♥ 主殿のせーえき、あちゆいつ♥ おなかやけちやう♥」

何をしても許される、可愛いオナホ生徒が射精にのたうち回るのを楽しく眺め、それからまた腰を振り始める。予想通り生徒の痴態は私に無限の勃起を与え、抜かすの3発を可能にしていた。

「あつ、あつあつ♥」

4発目を射精するころには、もうイズナは絶頂しすぎて虚ろにな

り、腰に回されていた脚もべったりとベッドに落ち、握り返す手も虫の息といったか弱さになっていた。

「出すよ」

射精しすぎて痛みすら覚えるほどだったが、それでもイズナの一番奥をぐりぐりと蹂躪しながら射精する。金玉の筋肉が痛いくらいに精液を絞り出しても、もう殆ど出ていなかった。

「あゝー……えゝ、ああー……♡」

イズナも、ぽっかりと口を開けて焦点の合わない目を天井に向けながら、ぼんやりと絶頂を迎えた。夢中でやったので覚えてないが、胸や首筋にいくつもキスマークが浮かび、股間はおもしろでもしたのかというほどに大きなシミが出来ている。中央が僅かに赤黒くなっていくような気がするが、殆ど目立たない位に愛液がまき散らされていた。

「気持ちよかったよ、イズナ」

もはや返事もないイズナを腕枕で寝かせてやりながら、私もベッドに横たわり目を閉じた。

目を覚ますと、イズナがじっと私を見つめていた。

「おはよう、イズナ」

びくつ、と怯えたように震えるが、私の腕の中から出ていたりしなかった。

「主、殿……」

「イズナ、私たちの関係は？」

ハッと目を見開く。

「主君と、しもべ、です……」

「じゃあ、これからは命令されたらいつでも身体を使わせるんだよ」

ほんの数秒、イズナの瞳が揺れる。どんなことを考えたのかは分からなかった。

「はい……♡ 主殿の望み通りに……♡」

卑屈ともとれる媚びた笑みを浮かべて、イズナが私のオナホになる事を宣言する。よくできた生徒の頭を優しく撫でてやると、喉を鳴らしてすり寄ってきた。

「今日はナマでしたけど、普段は避妊するから。子供が出来たらお金だけだすから、イズナが一人で頑張ってね」

「はいい……♥ 遠慮なくイズナを使ってくださいね、主殿……♥」

快活な忍者好きな少女の裏に潜んだオナホ志願のお手軽マンコを暴き、私は深い満足を覚えていた。暫くは色々調教を施してもいいかもしれない。そんな事を考えながら、優しく、ことさらに優しく、イズナの頭を撫でてやるのだった。



壁に盗聴器あり向かいのビルに望遠鏡あり（アリス・イズナ）

「あつるっじつどのー♪」

イズナがシャーレに着くなり抱き着いてくる。前からよくある事だったが、前と違ってむにゆりと潰れる位押し付けられた胸の感触に年頃の女の子らしい恥じらいはもはやない。

こちらを興奮させ、あわよくばセックスしようとしている浅ましい雌の行動だった。

「えへへっ。今日はお仕事の量多いですか？ イズナが居る間に終わりますか？」

「そうなるようにイズナも頑張つて手伝つてね」

イズナを手籠めにしてから数日。あれ以来アリスにもイズナにもヒナにも会っていないが、通報から逮捕のコースには至っていない。ちゃんと調教できたことに安堵しつつ、前日から頑張つて前倒しにしてイズナが来る時間に自由時間を作れるようにしていた。

「はーいっー！」

子犬のような満面の笑みを浮かべるイズナ。彼女が非処女ですと言われてもすんなり信じられる人はいないだろうという位の無邪気な笑顔だが、裏に隠された淫らな雌顔を私だけが知っている。今のところは。

イズナをお茶くみやら資料整理やらにこき使いつつ、前倒しで減少していたノルマ分を終える。

「ふう。今日は仕事終わり。さ、休憩しようか。……イズナ」

「はい……♥」

少し低い声で呼ぶだけで、微かに身体を震わせて、イズナの頬に朱がさした。とろんと夢見るように緩んだ表情は、実際に私とのセックスを夢見ているのだろう。イズナは胸を強調するように寄せながら手を股間の前で組んで私の前に立つ。その瞳は既に潤んでいて、先ほどとは別人のエロ待ち顔だ。私は満足して微笑んでいるその頬を、頭

の横の耳を撫で、普通に隣に立って執務室を出た。

シャワーレ居住区のシャワーブースに、水音とパンパンと肉の打ち合う音が響く。イズナを壁に手を付けて立たせ、後ろから腰を掴んで犯している音だ。

高い防音性で聞こえていないが、体育館では今日もスマイレがトレーニングに精を出している。今日はアイリやヨシミといった放課後スィーツ部が自習室を予約して使っていたはずだし、いつもなら休憩室のベッドでツバキが寝ている時間だ。

「あつ、あつ♥ 主殿っ♥ もつと、もつとお♥」

そんな日常の中で、シャワー室にこつそり一緒に入り、イズナを犯している。

処女を喪つてから初のセックスだというのに、立ちバツクにすでに慣れた様子でイズナがこちらのピストンに合わせて腰を使っている。シャワーヘッドから放たれたお湯が、イズナの女子高生らしい水をはじく玉の肌を流れ落ちていく。むっちりと丸い尻を撫でまわし、すべての背中を戯れに撫でるとイズナは身もだえして悦んだ。

「いいよイズナ。突き込んだ時に合わせて膣を締めてみて」

命令に忠実に従い、イズナが私の肉棒に生膣で奉仕する。イズナの懇願により、あれからすぐ生理が来て明けたばかりなので今日は安全日だから生でして欲しいという事で今はゴムをしていない。

……つまり処女を奪って散々犯したあの日は危険日だったという事だが、まあ運が良かったのだから良いか。またすぐにイズナの生膣に射精できる事を喜ぼう。

お湯を浴びて身体が暖まっているイズナの膣は既にトロトロで、前回よりも多少こなれて抜き差しがしやすくなっている。駆け付け一杯とでもいうべき最初の射精を、遠慮なく一番奥に注ぎ込んだ。

「イズナ、出るよっ」

「来てっ♥ あるじどののせーえきっ♥ イズナを孕ませてっ♥」

媚び媚びの甘い声で啼き、膣を強く締めてくる。せがまれるままに一番奥で精を放った。射精しながらイズナに覆いかぶさるように抱き着き、お湯に濡れた肌を撫でまわす。

「ああ……でてるう♥ 主殿の精液、イズナの赤ちゃんの部屋を満たしています……♥」

子作り行為を一切厭わないイズナの忠臣ぶりに感じ入りつつ、遠慮なく種付けの悦びに浸らせてもらう。密着したイズナの肌の瑞々しさが心地よい。身をひねって顔を向けてくるイズナに唇を弄ぶように舐めまわし、キスをする。射精が終わっても、しばらくそうしていた。

「はふう……主殿とお風呂、気持ちよかったです……♥」

イズナが先に出て誰も居ない事を確認した後、シャワー室からすぐのエレベーターに乗って何食わぬ顔で執務室に帰ってきた。

ほこほこ湯上りの肌を上気させながら、イズナが無邪気に笑っている。まるで健全に水着でも着て一緒に入ったような顔をしているが、彼女の子宮は私の精液でたぶたぷになっていいる。それが垂れてこないようタンポンまで目の前で装着したのだ。私好みのスケベ女になったイズナの、ドライヤーで乾かした直後のふわりとした髪を手で梳いてやると目を細めて頭を差し出した。それを撫でてやりつつ、これからの予定を話す。

「この間は私の予定でイズナの時間を取ってしまったから、今日はそのお詫びをしないとイケないと思ってね」

何のことか分からず首をかしげるイズナに、ニヤリと笑う。

「だから今日は、イズナとアリスを呼んであるんだ。勉強会をするためにね」

「べ、勉強会!? どど、どーしてそうなるんです!? お礼ならさっきのをもう一回してくれればそれで十分なんですけど!」

「でもスケベな事しか考えられない女の子とか、すぐ飽きちゃうだろうなあ……勉強や忍術の修行を頑張ってる魅力的なイズナならずっと飽きないかもしれないけどなあ……」

「ひいっ! 分かりました! イズナ勉強しますう! 忍術も頑張りますから捨てないでー!」

涙目になるイズナに鞆から教科書ノートを出させ、執務室と同じ階の図書室に移動した。ロビーから広く開放された入り口から、図書

室の中の席についてもくもくと携帯できるゲーム機をプレイしている少女が見える。

「やあ、アリス」

弾かれたように顔をあげ、笑みを浮かべるアリス。

「あつ、先生！……と、えつと……忍者の人、ですか」

楽しみにしていたものがやってきたと思っただけなら勘違いだった、みたいなテンションの降下をしつつ、アリスがイズナにじとつとした目を向ける。

「ヒエツ、主殿、なんか睨まれてますけど！」

ササツと私の背後に隠れたイズナと、むくれるアリスに苦笑いしながらも図書室に入った。

「ええっ!? 勉強会? なんでもそんな事をするんですか!? そんなお礼はひどいです! 罨イベントです!」

ついさっきのイズナと似たように驚愕して、アリスが顔を悲愴に歪めた。

「ですよね! やっぱりそうですよ主殿!」

「自習の後に小テストして良い点が取れたらご褒美と思っただけで、この調子じゃ無理そうかな」

「ううっ、無理無理絶対無理ですよおー!」

「現在のアリスのINTでこのイベントのグッドルートに進める確率、10%未満……」

始まる前から情けない事を言っている二人を相手に、教科書とノートを広げさせ勉強会を開始した。

授業の進度自体はミレニアムのほうが早いみたいだが、アリスは全然ついていけてなかったのでイズナ共々授業の進度とは別の基礎的な内容をやる事にした。

「むー……」

「ああ……こんな事なら大人しく部室でモモイとゲームをしておくでした……」

眉を寄せて問題文とにらめっこするイズナと、虚ろな目で手が止まっているアリスは難敵だったが、手取り足取り教えて何とか内容を

飲み込ませていく。

「えつと……この問題は……こうですか!？」

「お、合ってるよ、イズナ」

「や、やった……!」

涙目になりつつも理解し始めたイズナ。

「ううう……」

対照的にペンが動かないアリス。アリスも頭が悪いという事はなはずだが、それ以上にイマイチ集中できていない感じがした。鞆にチラチラと注がれる視線から、プレイしていたゲームが気になっしょうがないようだ。

(これ以上やっても無駄だな……)

もつとアリスの目を勉強に集中するようにしなければ。私は一計を案じる事にした。

「やったー!」

一通りを終えたので小テストを実施する。合格ラインである60点ギリギリのイズナは泣きながらバンザイし、アリスは30点を取って白目を剥いている。

「さて、それじゃイズナにはご褒美だな」

ガタつと席を立ち、入り口から本棚の陰になっている席にまた腰を下ろす。

「おいで」

イズナがびくつ、と反応し、しかしアリスが居るのでチラチラと視線を向けつつ困惑している。期待はあるが、まさかこんな場所でするはずはないし、という感じた。キョドキョドとしながらこちらに近づいてきたイズナの手首を掴んで引き寄せ、腕の中に抱きとめる。

「えつ、えつ!? 主殿、あ、あの、アリスさんが、みてっ、んっ……

♥」

そのまま対面座位の形で座らせ、強く抱きしめてデーパーキスをする。目を見張り、アリスのいる方向と私の目を激しく行き来する。

「大丈夫だよ、イズナ。アリスも私のセフレだから」

「え、ええつ!? さすがは主殿、既に複数人を従えていたんですね……

！」

「ぶうーっ。そうです、アリスは先生とナマセックスした仲なんです。……でも、今分かりました。アリスにNTR趣味はありません！」

頬をぶくーっつと膨らませて拳をぶるぶる震わせて拗ねるアリスを尻目に、イズナの尻を掴んでもみほぐす。

「あつ、やんっ♥ でも、やっぱり見てる前でするのは慣れませんかよう……♥」

そんな事を言いつつもまんざらでもなさそうなイズナを忌々しげに睨むアリス。

「アリスはゲームを気にして勉強に集中できてなかったからお仕置きだよ。まずは小テストの問題を教科書を見ながらやり直して。出来たら私が採点するよ。それで満点が取れたらもう一度小テストをしよう」

そう言うのと、アリスとイズナはうげっ、と顔をしかめた。

「イズナはこの通りご褒美だから、ちゃんと復習できるアリスがだいぶ有利なのは分かるよね？ ま、小テストの範囲は同じだからイズナがちゃんと理解してれば次も合格点を取れるから良いよね」

たらりと冷や汗を流したイズナだったが、今のうちに楽しむことに決めたのか、今度はイズナから抱きしめてキスをしてくる。ねっとり舌を絡め、イズナの口蓋を舌尖でくすぐると、気持ちいいのか艶めかしい声が漏れる。

「むーっ！ むーっ！」

アリスは涙目でプルプル震えてこちらを睨んでいるが、ノートに視線を戻してしゅばばっつと殴り書きし、音を立てて席を立ててこちらに近寄ってきた。

「はい！ はい！ 見直します！ ほら先生はーなーれーっ！」

ぐいぐいとイズナと私の間に入り押しつける。人間離れた力には逆らえず、ちゅるんとお互いの口の中に入っていた舌が抜かれ銀の糸を引いた。

「ずいぶん早いんだね。でもこれで合格点にも満たなかったらお仕置

きとして30分は提出禁止だよ」

あつ、と大口を開けて、しまったという顔をしているアリスが訂正をしようと伸ばした手より先に、私がノートを取った。そして一瞥すると、当然のようにダメダメだった。

「全く……アリス、これじゃもとより酷いよ。普通に0点だ」

「うううっ、アリス、勉強は苦手です……」

「苦手だから今勉強会で頑張っているんだよ。これも自分のためだと思っただけで頑張ってる。小テストが合格点ならご褒美だからさ」

そう言いつつ、イズナのスカートを捲り尻を露出させる。ショーツに指をかけてスルスルと脱がそうとするが、イズナがぐずった。

「ちよっ、あ、あの、ここはいつ人が来るか分かりませんし、それにアリスさんも見ている前で……」

「嫌ならこれからイズナには挿入はもうしないけど？」

「あうう……」

勃起をイズナの柔らかな股間に押し付けながら理不尽な選択を迫る。

「イズナはどうされたい？」

そう問いかけると、恥じらいを秘めた顔は徐々に消えていき……生唾を飲んだあと、どろりと雌の性欲が滲み出たような、困り顔と笑顔の中間のような卑屈な表情を浮かべた。

「主殿のおチンポ……入れて欲しいです……同級生の前で、イズナのおまんこ使ってください……♥」

自由意志を押し折られる事自体を望んでいるように、既にセックスの最中としか見えない上気した頬でそう答える。

「いい子だ。……じゃあ私のズボンのポケットからゴムを取って、自分で付けてみて」

イズナは抱きしめた状態から起用にもズボンに指を滑らせ、中のコンドームを一枚抜いた。太ももの膝寄りに座りなおし、カチャカチャとテントを張っている私のズボンのジッパーを下ろし竿を露出させる。袋をぴつと切り、被せようとするが、向きが逆だった。

「イズナ、逆だよ。ゴムの付け方って知ってる？」

安全日だということまで生でしたが、アリスの性教育もかねてゴムセックスをするべきと思い、まずはイズナに仕込む事にした。

「し、知るわけないじゃないですかあ……！」

涙目でそう言うイズナに教えると、精液だまりを指で押さえながらそつとゴムを被せ、クルクルと下げていく。完全に装着したことを頭を撫でて褒めると、照れながらも少し笑った。

膝の上でもぞもぞとショーツを脱ぎ、タンポンを抜いて、椅子の端に足をかけてガニ股に踏ん張る。

アリスは横目にそれを睨みつけているが、イズナは生尻が丸見えになってもそれに見向きもせず、開け放たれたドアの向こうから球技の試合でもしているのかワックスの利いた床をシューズが擦る音が聞こえる。そんな状況で、ひよいと覗かれたら一発で見えてしまう本棚一つ隔てただけの席でイズナが私のチンポに手を添えて自分の穴に導き、少しずつ腰を下ろしていく。

自分の状況が今更自覚できたのか、イズナは羞恥で耳まで真っ赤にしながら、挿入する前からヌルヌルと愛液とさつき私が出した精液を膣口から垂らして竿を濡らしていた。3度目のセックスは実にスムーズに進み、椅子の上でM字に開脚したイズナが私のチンポをすべて呑み込む。

「靴で椅子に足をかけちゃダメだよ」

足首を掴んで椅子から外すと、イズナの足先が宙ぶらりんになった事により挿入部により体重がかかる。

「っ♥だ、め、ですう……♥主殿、これ、声、でちゃ……♥」

足を踏ん張っていれば、いざという時飛びのいて誤魔化せるかもしれない。だがこの体勢では無防備になりそれも難しい。その意識がイズナに羞恥と緊張を強いる。声をごまかすためにキスしようとするイズナの額を抑えて制した。

「ダメだよ、誰か来ないかちゃんとして。私は背中を向けてるからね」

笑いながらそう命じると、さらに他人の目を意識したのか、ぎゅうぎゅうと膣が締まる。絶頂時にも劣らないうねりを心地よく堪能し



ながら、時折イズナの好きな部分を激しく突いて刺激する。

「~~~~~♥ ほ、ほんとにダメ、ダメですからあ……♥」

ぼろぼろとイズナの目じりから涙がこぼれる。涙と興奮に彩られ、イズナの瞳が宝石のように美しく輝いていた。

「いつもより臆がうねってるよ。イズナはこっちのほうが気持ちいいの?」

「ちがあっ♥ あっ、つか、突かないでえ♥ 声、我慢できない♥」

監視なんて出来るはずもなく、必死に私にしがみついて声をこらえ、イズナが激しく絶頂する。全身が痙攣し、がた、がたと椅子が鳴った。

「おや? アリス! どうしたんだい?」

図書室の外から声がかかる。エンジニア部のウタハの声だ。アリスの武器を作ったエンジニア部の部長である彼女とアリスは当然知り合いだ。エレベーターからロビーを経た所にあるシャーレオフィスの格納庫に良く出入りしているので、今日も来たのだろう。

「先生がアリスにいじわるするんです! 小テストのやり直しで点が取れなかったらご褒美が貰えないんです!」

リスのように両頬を膨らませて憤懣やるかたないという表情をしながら勉強をしているアリス。何食わぬ顔をして図書室で勉強している彼女を見て、本棚の裏でセックスしている変態が居るなどという発想は絶対に浮かばないだろう。

「ははは。先生もアリスのためを思って居るんだよ。先生? 先生もいらっしやるんですか?」

当然の流れで私にも声がかかった。イズナの緊張と興奮が限界を越え、また絶頂する。

「っ、ああ、居るよ。今日は百鬼夜行のイズナも一緒に補修してるんだ」

(ほら、イズナも声だけでいいから挨拶して)

「どっ、……どうもー、イズナですー……♥」

きゅん、きゅんと、何時もの元気が見る影もない震え声でウタハに挨拶する。

「あはは……ずいぶん絞られてるみたいだね。まあ頑張つて。私は用があるから、これで。失礼します、先生」

「ああ、頑張つてね」

その声を、アリスと同様勉強で苦勞していると解釈したのか、ウタハは苦笑をしたような声で返答して、去っていった。

イズナの腕がカタカタと震え、壊れてしまったのかと思う位に膦の痙攣が止まらない。ずっといきっぱなしのような状態の膦に耐えられず、私はイズナを強く抱きしめてキスをすると深く貫きながら射精した。

「んぐむうううううんっ♥」

口をふさがれた事でタガが外れたのか、イズナが私の口の中へ絶頂の叫びを吸収させながら思い切りいった。そして口が離れていく。くったりと後ろに脱力したイズナを腕で支えると、顔を覗き込む。よだれを垂らしたイズナの目は焦点を結んでおらず、激しすぎる絶頂で、またも意識を飛ばしてしまったようだった。

ゴムの付け方と羞恥セックスを脳に焼き込むように学習したイズナを労うように撫で、股間をタオルで拭いて下着をまた着せてやった。

すると横合いからノートが眼前に出てきた。

「先生！ 出来たから採点してください！」

アリスがむくれながらノートを突き出している。一瞥すると、今度はちゃんとできていそうだった。やはりこの方が本気で勉強するなあととしてやったりの笑みを浮かべる私をアリスが睨んでくる。

(ちゃんと途中の証明もあつてるし、やっぱりやればできるな)

結局、アリスは満点だった。……やり直しかつ教科書首っ引きではあるが、ちゃんと理解はできているのだ。

「うん、ちゃんとできてる。偉いよ、アリス」

普通にぐすす半泣きになっているアリスを優しく撫でて、ハンカチで涙を拭ってやる。キツと強いまなざしでアリスは宣言した。

「さあ、すぐ小テストしましょう。そしてアリスはご褒美を手に入れるのです！」

ぺちぺちと椅子で寝ているような体勢のイズナの頬を張り、鼻をつまむアリス。

「ふががっ……うにゃあっ?! はんへイズナ鼻を摘ままれてるんですか!?!」

イズナをたたき起こしたアリスはメラメラとした闘志を瞳に宿し、小テストに臨んだ。

「やつ……つたあ……!」

「ふうーっ……今回もギリギリセーフ……」

両こぶしを天に突きあげながらやり切った笑みを浮かべるアリスと、またも合格点丁度を取って胸をなでおろすイズナ。なんにせよ必死な姿勢が幸いしてか、二人とも合格点を取ることが出来た。

「うん、二人ともよく頑張ったね。本当に偉いよ」

ととととと走り寄ってきたアリスが抱き着いてくる。

「ね、ね、先生……アリスも先生とセックスしたいです……♥ あんなの見せつけられたらもう、我慢できません♥」

腰をモジモジさせながら普段の無邪気さの奥に雌の顔を覗かせて、アリスが泣き笑いでおねだりしてくる。さらさらとした髪を手で梳きながら、私はアリスに向かって言った。

「うん、勿論。イズナも一緒に、執務室でシようか。今はまだ夕方だし、仮眠室にも人が居るだろうから」

そしていつもの執務室。助手の机……いつもなら主にユウカやヒナが作業を手伝ってくれる所でノートパソコンをどかし、ショーツを脱いでスカートをめくって尻を突き出したイズナとアリスが並んでいる。勿論入り口に鍵はかけたとはいえ、犯罪にもほどがある光景だ。日も高く、一面の窓からは良く晴れた青空が見える。そんな暖かな日差しを受けている二人の白い綺麗な尻に手を置き、左右の手で揉み比べてみる。イズナのほうが肉付きが良いが、アリスの小ぶりな尻も素晴らしい。

「あんっ……♥ 先生、早く、早くアリスのお手軽オナホマンコに先生

のデカマラハメてホジホジして下さい♥」

くねくねと尻を振り、愛らしい唇から可愛い声で聞くに堪えない卑猥な言葉を紡ぐアリス。ぎよっとするイズナを無視するように自分から性器を拡げて見せると、ぬるりと床に愛液が垂れた。

「ああ、良いよ。今日はよく頑張ったね、アリス」

ゴムに包まれたチンポをアリスに押し当て力を入れると、ぬるんつと勢いよく埋没した。男を知りたての、しかし生来のものかトロトロに柔らかく大歓迎で迎え入れてくれるアリスの名器だ。小さな尻を両手で指が食い込むほどに掴み、叩きつけるように奥まで突き、素早く引き抜く。じゅばん、じゅばん、と愛液が飛沫と化して周りに散り、アリスの尻肉と私の下腹部が打ち鳴らされる音が執務室に響く。

「おっ、おほっ、うっ♥」

アリスも早速没頭したように机に突っ伏し、犯されるためだけに存在しているように集中して腰を振り、動物じみた普段よりトーンの低い喘ぎ声をあげてセックスを楽しんでいる。

その様子を食い入るように見つめ、隣のイズナが物欲しそうに指をくわえていた。

「イズナ、交代までオナニーしてて」

キスなどで奉仕させても構わないが、せめて一発くらいはアリスに集中してあげるべきだろう。何せご褒美なのだ。

処女を奪った時は必死だったのでそんな余裕はなかったが、日差しの下で制服に美しい黒髪を広げたアリスの背中とむき出しの尻を眺めながら腰を振れる今はアリスの好きな所をじっくりと探ることが出来る。

タンタンタン。アリスは一番奥に突き込んで身体を揺らされるたびに身を震わせて感じている。だが、奥を突かれた事に対するものではない事に気づいた。

ぐり、ぐりと腰を上下にグラインドさせる。それも奥を探るのではなく、入り口を拡げるように動かした。

「おっ、うっ!? イくっ、イ、ツク……うっ♥」

びくんつ、と全身を痙攣させ、脚が地面から離れる。内股になって

持ち上がり、それと同時に膣がぎゅうぎゅうに締まった。

「そうか……アリスはクリを裏側からされるのが好きなんだね」

そうと分かれば、根本を腹側に押し付けるようにしてクリトリスを刺激しながらのピストンに切り替えた。

「あゝー……っ!! イグツ♥ イグツ♥ まらイグうううっ♥」

執務室が防音でなければ絶対誰かに聞かれている大声を上げて、壁に尻を向けた女の子座りをしているような姿勢で机に突っ伏したまま足を持ち上げて何度も絶頂する。激しくうねる膣の中で気持ちよく射精した。

「はっ……♥ ああ……♥」

びくん、びくんと身体を痙攣させ、漏れ出るような甘い嘔き声をあげながらアリスが絶頂に浸っている。やがて身体のコわばりが少しずつなくなり、くったりと脚がさがり、内股のつま先立ちへ戻っていった。

「ふう……とても良かったよ、アリス」

「アリスも……とっても凄かったですう……♥」

夢見心地といったふわふわした声で言うアリスから肉棒を引き抜いて、コンドームを外す。口を縛ってアリスの尻にぺとりと乗せた。

「ね、ね、先生、イズナにもご褒美をば……♥」

ソワソワと袖を引いてくるイズナ。では次のコンドームを付けようかと思った瞬間、ガツとイズナの手首をアリスが掴んだ。

「忍者さんはさつき何度もイッてたじゃないですか。それに精液が垂れてました。2回以上してるはずですよ。まだアリスのターンですよ」

「ぎくっ」

しらを切れば良いものを、イズナは凶星を指されて狼狽してしまっ

た。  
「はいはい、それは勉強会とは関係ない所の事だから。今度はアリスとイズナで交互に入れるよ。それなら平等、だよな?」

アリスはアヒルみたいに口を尖らせたが、不承不承頷いた。イズナはその手荒な扱いが気に入ったのか、オナニーをして既にぐしょ濡れ

になっているマンコをおつぴろげて尻を振った。

「あつ、もう先生にアツピルを!? 汚いなさすが忍者きたない」

イズナの痴態を見てアリスも慌てて尻をフリフリ誘ってくる。可愛らしくも淫靡な光景に私のチンポは三度の射精にもめげずにそそり立ち、イズナの初々しさが残るオナホマンコにずつぷりと侵入した。

「きたああんっ♥ 主殿っ、すきっ、すきい♥」

「うー……先生！ 私も！ 私も先生に好感度マックスですよ！ ホラホラ、マンコも準備万端です！」

イズナに先を越されたアリスが必死にアピールしてくる。その物欲しそうな膣に指を二本突っ込んで愛液をたっぷり親指に絡めた後、その親指をアナルに突き立てた。膣に入れていたベトベトの指でクリトリスをヌルヌルと刺激する。

「んおおっ♥ せんせ、そこ、あな、アナルう……♥」

突然の刺激にアリスがのけ反る。クリトリスを刺激される快感が初体験のアナル性感と混じり合い、アリスの脳内でアナルへの異物挿入が快楽と結び付いていく。唇を突き出して必死に身もだえするアリスを横目に、イズナの膣穴開発を進めていった。トロマンのアリス、数の子天井のヒナと違い、膣そのものの形よりも締まりの強さとタイミングが心地いいイズナのマンコをより反応させられる個所をほじくっていく。丁度産道の真ん中あたりにある少し硬い部分、Gスポットに龟头をこすりつけると、身体が跳ねた。

「ひうつ!? あつ、主殿、そこ、だめ、すぐ、イツちゃ……♥」

いきやすいイズナが絶頂を迎える直前、引き抜いてそのままアリスの膣に挿入した。

「はあああんっ♥ 先生きましたあ♥ 忍者さんじゃなくてアリスの欲しがりマンコに精液びゅー♥びゅー♥ってしてください♥」

私の耳を楽しませようというのか、覚えてたと思われる隠語を駆使して媚びた甘い声で啼くアリス。ヒクヒクと開閉するアナルのしわを指でなぞり、ゆくゆくはここも開発しようと思しながらぐちよぐちよと水気たっぷりの膣穴をかき回し、アリスが気持ちいいピストン

を与えていく。

「あゝーっ ♡ それっ ♡ それされたらあつ、すぐ、イツ……」

アリスがイク寸前に抜いて、イズナへ。

「お帰りなさいませ、主殿っ ♡ イズナのオナホマンコ、ホカホカに温まっています ♡」

アリスに対抗して、ことさらに甘く媚びてくるイズナに勃起を激しくしながら、イズナの弱点を遠慮なくほじくる。

「イツ……♡」

また抜いて、アリスへ。その調子で、二人から絶頂を求める事以外の思考をすべて奪っていく。数回往復した時点で、二人は恥も外聞もなく、隔意もないようにお互いの身体を密着させてただひたすらに私のチンポをねだり、絶頂を懇願する肉奴隷と化していた。

「チンポっ ♡ チンポっ ♡ チンポくださいっ ♡ あるじどのっもう耐えられないんです ♡」

「アリスもっ ♡ アリスもイキたいっ ♡ イキたいのっ ♡ お願いします、先生、なんでもしますから、チンポでイかせて ♡」

目を血走らせて必死で絶頂をねだる二人を微笑ましく見つめながら、まずはアリスにトドメを刺す事にした。膣口を腹の側に押し広げながら、限界まで勃起したクリトリスの皮を剥いて激しくしごく。

「んゝおゝ おおおおおおう ♡」

天井に顔が向くほど背をのけぞらせ、獣の唸り声のような聞いた事も無いアリスの本気絶頂声を堪能しながら、膣のうねりで射精しないよう耐える。

イズナは泣きそうな顔で羨ましげにアリスをじっと見つめ、鼻息も荒く自分の番を待っていた。ダラダラと内腿まで愛液まみれのイズナの脚を開き、机に突っ伏した寝バツクのような体勢でGスポットを強くえぐつてやる。

「おゝっ、うゝっ、うううううううううう ♡」

腰に添えたこちらの腕を掴み、必死に握りしめてくる。あまりの快楽に、全身を激しく痙攣させながら膣をわななかせ、私が射精する感触を余すことなく味わい、ようやく力を抜いて机に額を付けた。

コンドームを縛ってイズナの尻にのせると、普段よく見ている机に二人の制服姿の美少女が生尻とマンコだけを晒して、濡れたコンドームを尻に乗せたままに絶頂の余韻に浸るといふ、この世のものとは思えない絶景が広がった。

指一本動かさないという感じの彼女達の股間をタオルで拭いて始末してやりつつ、執務室を出てすぐにあるトイレからモップを持ってきて少女の愛液を掃除する。

二人が余韻から戻ってきたころには、ちよつと汗臭いアリスとイズナが寝ぼけている風にししか見えなくなっていた。

「はふう……♡」

「ふひい……♡」

二人はうつとりと私の腕に抱き着き、頬を寄せてくる。いがみ合っていた空気が嘘のように平和で、騾の済んだ雌が二匹いるばかりだった。

「さ、そろそろ日が暮れるから、もう二人は帰る時間だよ」

それぞれの手を優しく握りながらそう言うと、ふわふわした調子ではあるが腕を解き、それぞれに手を振って二人は帰っていった。

執務室に、静寂が満ちる。私はおもむろに端末を取り出し、電話をかけた。

トゥルルルル。トゥルルルル。相手はなかなか通話に出ない。10度目のコールで観念したか、ようやくつながった。

「コタマ、今からここに来れる？」

『えっ、あつ、あのつ、今学校だから、ちよつと無理かも』

「手も下着も洗わなくていいから、10分以内に執務室に来て、待つてるようにね」

『あう……はい……』

ぶつつ、と通話が切れる。足早に執務室から立ち去り、エレベーターを降りる。向かいのビルに入りエレベーターで最上階へ、階段で屋上に上がると、そこにはこちらに背を向けて股を開いて床に座っている女の子が居た。

「ああっ……♡ 先生、私にも、私にもおっ……おち……を、く、くだ



さしい……♡」

厚手のジャケットに遮られて後ろからは見えないが、ニチャニチャという水音だけは聞こえてくる。

「いよいよ」

「ひひひひひひっ!!!」

びつつつくん！ と座ったまま尻が浮き上がる勢いで跳ねる。

がばつ、と首だけで振り向いたノドカは、顔を青ざめさせながら後ずさった。ちらりと見えた股間には何も穿いていなかった。

その視線に気づいたノドカがガバツ！ と股間を抑える。赤くならないながらプルプル震えるノドカに無造作に歩み寄り、肩に手を置いた。

「今からシャールレに来てもらうよ」

「……………はい……………♡」

俯いたままのノドカが、気配だけで生唾を飲み笑みを浮かべるのが分かった。

変態が変態なのは変態だから（ノドカ・コタマ）

「あの、先生。やっぱり一度部室に行かせてほしいんですが」  
シャーレの執務室。青空が見えるがもう盗聴も盗撮もされないこの部屋で、コタマが平然とそう言った。

盗聴も盗撮もされないのは、犯人がこの部屋に集まっているからだ。

「何か用事？」

コタマの短いスカートから覗く白くて細い脚を眺めながら私はそう言った。

さりげなく右手を腰の後ろに隠しているが、彼女はさつきまで激しくオナニーをしていたのだ……と確信している。

というか、していた。実際に会って、近づいた時に恥ずかしがって後ろに下がるコタマからは確かに最近嗅ぎなれてきた雌の臭いが漂っていた。

「んっ……あっ……♡」

「一番良い録音機材を持ってきたいんです。私と先生が初めてセックスする大事な記念ですから。永久保存版です」

コタマはちら、とノドカを見つつ、予想通りの理由を述べる。……実はそれが嘘で、官憲に通報するという事はあるだろうか？

（いや、ないな）

コタマは割と嘘が下手なので、すぐにわかる。

「分かったよ。誰かに付いて来られないようにね」

「勿論です。こんな機会を逃すわけにはいきません」

「あっ、あの……は、初めてが3人っていうのは、私的にはちよつと……はんっ♡」

帽子とコートとタイツを脱がせたノドカから抗議の声が上がるが、膣穴を少しほじってやるだけで続けられなくなる。ノドカは今、私の膝の上に座って脚を開かされ、首筋の匂いを嗅がれながら愛撫されていた。

ちなみにショーツは元から脱いでいたので私が脱がせたわけでは

ない。

「私も、出来れば初めては一对一が良いです。そうだ、お互いにお互いを撮影すればいいのでは？」

「えええっ!？」

ぬちやぬちやと股間を弄られながらノドカが目を剥いた。この提案が素で出るのはさすがコタマといったところか。

「順番待ちの時とか、手持ち無沙汰になるし……それに……」

コタマは、珍しく親しげな笑みを浮かべてこう言った。

「ノドカさんも、先生を眺めるの好きなんでしょう？ 先生がセツクスしてる所を好きなように見ていられるんです。楽しそうだと思いますか？」

楽しいのか、それ？ と思わなくもないが、ノドカはその誘い文句に感じ入るものがあつたようで、生唾を飲み込んでいた。

「そうと決まれば、ビデオカメラも良いのを持ってこないと。じゃあ、行つてきます」

その反応が答えとばかりにコタマがニツコリと笑い、部屋から出ていった。残された私は、変わらずノドカの臍肉をぬちやぬちやとほじくりまわす。

「それじゃ、コタマが帰ってくるまでのんびりしようか」

「ふええ……こ、こんな唐突に初めてを喪うなんて……うう、でも先生とエッチできる機会を棒に振るなんてもったいなさすぎる……!」

「ノドカに拒否権はないから悩む必要はないよ」

親指でクリトリスを弄びながら、セーターの下、さらにブラウスの下に手を滑り込ませていく。

「ひゃっ……そんな、先生、私の胸ちっちゃいから、恥ずかしいです……♥」

「そう？ けっこう大きいと思うけど」

セーターを押し上げていた柔らかな膨らみは、直に触ってみても年相応に膨らんでいる。服の中でごそごそと手を動かし、ボタンを外してやるとブラの下にも手を潜り込ませた。

しつとりと汗ばんだノドカの胸表面は、まだひんやりと冷たい。敏

感な年頃のその胸にゆっくりと力をかけて揉みこんでいく。その頂点に、可愛らしい小さな突起を感じた。

「ノドカの乳首、小さくて可愛いね」

「んっ、ふうっ♥ あ、ありが、と、ごさいま、すっ……♥」

普段から弄っているのかもしれない。乳首を指で転がすと、ノドカの身体から強張りが段々取れていった。

膣と共にゆったりと愛撫を継続しながら、窓際で日向ぼつこのように二人して座っている。

「もし、ノドカみたいな生徒が他に居たら、この姿を見られちゃうね」

「そ、そ、で、すね……♥」

びくっ♥ とノドカの身体が跳ねる。膣肉もうねりを激しくした。

「ノドカは見られるのも好き？」

「ちっ、ちがつ、これはそのっ、緊張しただけでっ！」

抗議するために首をひねってこちらと目を合わせるノドカだが、隙ありだ。

「んむっ♥」

俯いてばかりで奪えなかった唇を奪う。抵抗する素振りもなく、目を閉じてキスを受け容れるノドカに、さらに調子に乗って舌で唇をつついた。

身体をまた硬直させて少し逡巡した後、ノドカの唇がほんの少し開く。ヌルヌルと舌を伸ばして口内に侵入させると、戸惑いがちにノドカから舌を触れ合わせて歓迎してくれた。

そのままキスを続けてノドカが慣れて集中してきたのを見計らい、服の裾を掴んでグイっと上にめくる。さつき撫でまわして予想したとおりの可愛い乳首と、小ぶりながらおわん型に膨らんだ胸が露わになった。

「ひあっ!? せ、先生、恥ずかしいです！」

ワタワタと隠そうとするが、膣に突っ込んだ指の感触は誤魔化されない。ノドカは見られた瞬間に軽く絶頂していた。

「やっぱり、綺麗な乳首をしているね」

「あうう……」

小さな乳首をカチカチに勃起させて、赤面するノドカ。しかし隠すどころかむしろ胸を張るようにしてよく見えるようにしてくれる。遠慮なく生乳を揉み、乳首に吸い付いた。

ちゅうちゅうと吸い立てると、ノドカが私の頭にしがみついてビクンビクンと痙攣する。

「あつ♥だめっ♥こんなのっ♥恥ずかしくなりますうっ♥」

そう言いながらも今までよりずっと興奮しているのは明らかで、膣をかき回している指はきゆうきゆう締め付けられているし脚はもう180度に近いくらいに開いている。

だが、私はそこで手を止めた。コタマが帰って来てからセックスが始まるのに、あまりイかせすぎて体力を失うのはまずいからだ。

「せんせえ……う？」

トロトロに出来上がったノドカが甘えた幼子のような声をだす。瞳は行為への期待に潤み、紅く染まった頬は情欲で化粧したかのよう。ノドカのあどけない顔立ちに艶めかしさを加えている。思わず軽くキスをして、ごく弱く膣への愛撫を再開した。

「コタマを待っている間に疲れ切ったらいけないからね。しばらくのんびりしてようか」

「あ、だったら……その、したいことがあるんですけど……」

腰が引けていた当初の事はすっかり忘れて乗り気になってくれたノドカにニツコリ微笑んで、要望を聞いてみた。

「ふわわわわ……」

椅子に座った私の前でノドカが床に敷いた段ボールの上に膝立ちになっている。さすがに直接床に膝をつくのは痛いだろうから、通販の箱を解体して即席マットにした。

目を大きく見開いてキラキラに輝かせ、口も大きく開いてふわわと震わせている。ノドカが見ているのは当然、私の肉棒だった。セーターも脱ぎ、ブラウスのボタンもすべて外されてブラもさつき私が外したので、薄手のキャミソールをノドカの乳首がささやかに押し上げているのがくつきりと見て取れる。私はさらに勃起を固くした。

「ああ……これが先生の、おっ、おち……」

口の端からよだれを垂らしながらも、直接言葉を言うのは恥ずかしいのか、もごもごと口ごもっている。私はノドカの頭をそつと撫でた。

「ちゃんと言つてごらん、ノドカ」

「お、おちん、ちん……」

食い入るように見つめながら、先端に鼻を近づけてスンスンと臭いを嗅ぎ始める。おずおずと震える両手を竿に添えて、扱くでもなく感触を確かめるようにペタツと手のひらを密着させた。

「ああ……♥」

悩ましげなその声は、先ほど絶頂しかけた時と遜色ないほどに艶っぽく、むわりと濃くなった女の匂いでノドカの愛液が股間の下で水たまりを作っているであろうことが分かる。

すると、宝物でも扱うように手のひらで竿を撫で、ふによりと柔らかいほつぺたを付けて頬ずりし始めた。刺激は強くないが、至福の表情で私の性器にほおずりするノドカが可愛らしいのでそのまま眺める事にした。

ノドカは我慢汁が頬につくのも厭わずに頬ずりを続ける。そしてついに顔をあげて、先端に口づけした。

「ちゅう……♥」

さつきキスをした時よりも愛おしげに、瞳にハートマークが浮かんでいるような陶醉しきった顔をして鈴口と唇を重ねるノドカ。口をすぼめてちゅぱ、ちゅぱと音を立てて熱の入ったキスの雨を降らす。

「ふーっ、ふーっ♥」

興奮のあまり鼻息の荒くなったスケベなフェラ顔になっている。それこそ今まさにビデオカメラが欲しかったところだが、ポケットの中に端末があったのを思い出して撮影してみた。

「ひああっ!?! せ、せ、先生っ! まさか今、私の顔を撮りました!?!」  
思い切りシャッター音が鳴ったので、さすがに気付いたノドカがビクンと顔を跳ね上げた。

「撮ったよ。すごく可愛い顔をしてたから」

「ウソ! 絶対ウソです! なんかつんでもない顔をしてたに決まっ

てます！」

そんな事はないといいつつ、端末の画面を見せてあげた。

「う、わああああああ！ 消して消して消してーっ！」

突如奇声を上げて白目を剥いたノドカが端末を奪い取ろうとしてくるが、頭を抑えつけて座らせる。

「ほらほら、ノドカがしたいって言ったんだからちゃんとしてフェラしてね」

今度は堂々と端末のカメラを突きつけながらそう言うと、ノドカはさつきとは打って変わってオドオドとこちらを見上げながら竿を握り締めて動かない。

「ううー……先生に見られながらだなんて……恥ずかしすぎて死んじやいます……」

「私はさつきもずっとノドカの事見てたよ。大丈夫だからフェラしてごらん。可愛い顔を撮ってあげるから」

「先生が……私の事を……？」

目をまんまるにして少し固まったあと、おっかなびつくりといった感じで亀頭を口に含んだ。

「いたたっ！ ノドカ、こう、唇を内側に巻き込む感じで歯が当たらないようにしてみてください」

「はわっ、ごめんなさい！ こ……ほう、れふは？」

さつきまで男を知らないどころか近づく事さえ夢にも見ていなかった純情な女の子に、昼の日差しを浴びながらまったりとフェラを指導する。ノドカは私と目を合わせると恥ずかしそうにしながらも見つめ返してくれる。優しく頭を撫でながら、すこし後頭部に力をかけてやると、理解してくれてより深く肉棒を咥えてくれた。

指示して口をすぼめて吸ってもらうと、ノドカのぷにぷにした頬の裏側の熱い感触が竿に感じられた。卑猥に顔を歪めて、またもフェラに没頭し始めたノドカを正面から撮影する。

「んっ……♡」

シャッター音に身体を震わせて、しかしさつきのようにフェラを中断しない。耳まで赤くするくらいに恥ずかしがりながら、目じりに涙

さえ浮かべながら、上目遣いに竿の半ばまで啜えこむフェラを続けてくれる。

じゆる、くちゅ、とノドカの唾液と私の先走りが混じったものが口内で溢れ、ノドカの可愛らしい舌で攪拌するように竿に塗りたくられる。言われた通りに舌を裏筋にこすり付け、頑張つて吸い付いてくれる一生懸命なフェラをまったりと満喫しつつ、額に張り付いた髪をそつと脇に寄せる。興奮だけでなく苦しさで息切れもしているのだろう、鼻息も荒くなってきた。

その頑張りの甲斐あつて、フェラはぐんぐんと上達している。じゅっぽ、じゅっぽとフェラ音がリズムカルになり、ノドカの顔は滑らかに前後して、まるでマンコのように私のチンポを気持ちよくしごき立てていた。

「うっ、ああ……ノドカ、もう射精しそうだよ」

そう言うと、ノドカはひよつとこみたいなフェラ顔で目元だけ柔らかく笑つて、亀頭を強く吸つて舌を裏筋に当てて小刻みに左右に動かしした。

「くうっ、その動き、やばい……!」

「んふっ♥ちゅぱっ、ちゅぱっじゆるるっ♥」

竿の部分も激しく手でしごかれ、チンポ全体がノドカの奉仕に包まれているようだった。愛する生徒の成長を強く感じながら、私はノドカの顔を両手でしっかり固定し、口内に精を放った。

「んぶっ!?!んっ、んごっ、ごくっ……ん♥」

大量の精液に反射的に顔を離そうとしたノドカを逃がさず、すべて口内に出す。初めての精液の味に目を白黒させながら、唇の端から少し漏らしつつもノドカは私の精液を飲みづらそうに嚙下していった。

味の良いものではないというのがよく分かる、ある意味悩ましげに眉をひそめた精飲顔をカシャカシャと撮影しながら、ノドカが全て飲み下すのを待つ。

「おえ……けほ、こほ……先生、全部……のみ、ました……♥」

あ、と口を開けて喉奥まで見せてくれるノドカ。ついさつきまでチンポを奉仕するための器官だったとは思えない位に綺麗なピンク色



で、精液など一滴も残っていないように見えた。

「うん、良く出来たね、ノドカ。フェラもどんうまくなつたし、呑み込みが早くて偉いよ」

「えへへえ……」

テレテレと髪を手櫛で梳くノドカ。フェラの上達が早い事が果たして褒め言葉になるのかはさておいて、喜んでいるようなので一先ず良かったとおこう。

ぴんぽーん、と呼び鈴が鳴った。確認するとコタマだったのでドアを開ける。

「ふー、おまたせしました、先生。すん……この臭い、どうやらノドカさんとお楽しみだったみたいですね」

平然とした顔でそう言つて、あられもない姿をしたノドカを見るコタマ。ノドカは我に返つたようにササツと前を隠した。

「じゃあ、ちよつと機材の準備をします。先生はノドカさんと準備しててください」

がちやがちやと両肩にクーラーボックスのような見掛けの大きくて重そうな見た目の鞆の紐をかけたコタマが、細い身体に意外なほどの力強さで執務室の一番床が広い場所……机正面の辺りに機材を展開し始めた。さすがに床に段ボールを敷いて寝るのもアレなので、私もこの部屋と同じ階にある格納庫脇の倉庫にこつそり仕舞っている徹夜用のマットを取りに行つた。

「さ、ノドカ。横になつて」

準備万端といった感じでハンデイクメラを構えたコタマと、既に裸になつた私の間でキョロキョロと視線を往復させるノドカ。

「ううっ、本当にやるんですか？ こんな状況で……？」

少し視線を上にあげると、大きなハタキみたいな、テレビ撮影なんかで目にしたことのある本格的なマイクが2基もセットされ、最高品質で今も録音を続けている。

それどころかカメラだって三脚で固定されたものが2台、死角なく配置されていてコタマの持つものを含め三台体勢だ。生徒たちとAVでも作ろうとしているようで楽しくなってくる。

「いいですね、それ。先生が男優のAV……コンプリートしてみたい……」

私のつぶやきを聴きとったコタマが相槌を打つ。今からすることを自覚して、いったん落ち着いていたノドカがまた赤面した。

「え、えーぶい……!」

「ほら、ノドカ。おいで」

手招きすると、怯えた子猫のようにびくつきながらノドカが近づいてくる。その手を取り、胡坐をかいた膝の上に座らせ、耳にキスしながら服を脱がしにかかった。

「あつ、ああつ♥ だ、だめ、先生、コタマ先輩が、みてま……ひんっ♥」

今更な事を言い出すノドカをクリトリスへの愛撫で黙らせつつ、するすると脱がせて裸にした。

「あつ、ああああ……♥ わた、わたし、いま、裸、撮られて……♥」

「やっぱり、見られるのも興奮するみたいだね」

そう言いながら膝の上のノドカを回転させて私に背を向けさせ、コタマがカメラを構えている方に向けて股を開かせる。

「~~~~~!」

もはや声もなく両手を口元に当てて目を白黒させるノドカ。だが股間は熱く潤み、私の指を締め付けて離さない。その締め付けをかき分けるように力強く指を沈め、ノドカの気持ちいい部分をゴリゴリ刺激しながら引き抜く。

静かな執務室の中に、ノドカの押し殺した嬌声と粘質な水音が響き渡る。それを余すことなくクリアに録音するマイクと、毛穴まで映さんとばかりに構えられている3台のカメラ。

ノドカの興奮も異常なほど高まっていた。

「ほらノドカ、聞こえる? 凄いい水音してるよ」

「んひいっ♥ だめ、言わないでせんせいっ♥ 私っ♥ ドキドキしすぎておかしくなりそうっ♥」

グジュグジュグジュ! と膣をかき回すだけで白く粘つく愛液が泡を立てながら床に敷いたマットに流れていく。準備は整ったので

ノドカを仰向けに寝かせ、細い膝を掴み股を開かせる。

たったった、とコタマが背後を駆けていき、2台の三脚カメラを調節していた。胸を軽く愛撫したりして少しそれを待ってからノドカに覆いかぶさる。

「さ、入れるよ」

「あつ、あの、先生、その、ひ、避妊、とか……」

「最初は生でするよ。コタマもね。……出来たら、対処のための費用は私が出すよ。養育費も」

「えっ!? あ、赤ちゃん……出来ちゃっても……?」

「籍は入れられないけどね。……どうする? やめる?」

ぬちゅ、とマンコの表面を亀頭で撫でてやると、ノドカの瞳が性欲で濁っていく。

「い、いいです……♥ ナマでいいですから……いえ、ナマでしてください……♥」

おずおずと伸ばされた手を恋人繋ぎで握り、もう片方の手でチンポを穴に添えて力をかけていく。入り口はほぐれきっていて、侵入はすぐだった。しかしさすがに処女の穴だけあつてすぐにきつくなる。

「んっ、く……」

「大丈夫?」

眉を寄せて、破瓜寸前の痛みに耐えるノドカ。繋いだ手が痛いくらいに握りしめられるが、ここで止めても苦痛が長引くだけだ。一気に腰を突き出す。

「ぎっ、い……!」

ノドカが目を見開き、歯を食いしばる。手もマンコもギチギチに締め付けて、顔をのけぞらせて苦痛に耐えていた。

チンポを動かさずにピンと勃起したクリトリスを優しく転がし、少しずつノドカのこわばりを解いていく。10分はそうしていただろうか、ふつとマンコの締め付けが緩み、痛みが引いていく。

「大丈夫?」

「はっ、はっ、……は、い……」

脂汗を浮かべたノドカの額に張り付いた髪を除けてやり、頬に手を

当ててゆつくり撫でた。縋りつくようにノドカからも手を重ねてきて、冷や汗をかいていた顔に再び体温が戻っていく。

そろそろ大丈夫だと判断して、身をかがめてノドカにキスをした。デーパーキスにも、もう自分から応じてくれる。恋人繋ぎのままの手も甘えるように指先で手の甲をすりすりとして撫でて来て、ノドカは清らかな処女からセックスOKの女へと成長したのだった。

(後でノドカと一緒に録画を見たいな)

破瓜を受け容れ、痛みと愛情と性欲の涙に濡れた瞳を輝かせ、だんだんと快楽が上回っていくのを全身で伝えてくれるノドカは大輪の花を今まさに咲かせようとするかのように美しかった。

「動くよ」

繋いだ手を解くと残念そうな顔をするが、腋の下に手を入れてノドカを抱きしめ、ノドカにも私に抱き着かせた。脚も私の腰の後ろで絡めさせ、ノドカの女になりたての身体がびったりと密着する。手のひらに収まる可愛い胸が私のみぞおち辺りでつぶれ、前戯の快楽と破瓜の苦痛でかいた汗が潤滑油のように二人の隙間を満たした。

小柄すぎて窮屈ながら腰を動かす。処女の膣肉が強い締め付けで私のチンポを押しだし、その力を跳ねのけて再びノドカの中に埋没していく。

「ふっ、ぐ……」

収まってきたとは言えまだ痛いらしいノドカは、苦悶のうめきを上げながらも私を制止する事はない。私をぎゅうと力いっぱい抱きしめながら、汗まみれの私の胸に唇を押し付けてきた。

「ちゅっ……ちゅっ……」

くすぐったいが、ノドカのしたい事なので好きにさせておく。何往復もするうち膣肉のこわばりも少しずつ解れ、元々本気汁すら垂れながす準備万端の状態だったために抜き差しもスムーズになってきた。

「あっ ♥ せ、せんせ、なんか、ちよつとずっ ♥」

「気持ちよくなってきた？」

背中に回された手に力がこもる。今度は苦痛ではなく快楽だ。私はピストンの速度を緩め、ノドカの気持ちいい部分を探った。

「あっ……んっ♥」

奥の腹側に良い所があるとすぐにわかる。ノドカに負担をかけないようにそこだけを小刻みに刺激する。傍目には殆ど動いていない、ほんの少し体を揺らしているとしか見えない動きで、ノドカがどんどん昇り詰めていく。

「んっ♥ あうっ♥ せ、せんせっ♥ ちよつと、まつ♥ これっ♥」

ちゅぷ、ちゅぷ、と静かな水音しかたたない地味なセックスだが、ノドカだけが余裕を無くして身体を左右にひねったり背を逸らせたり身もだえしていた。

「これっ♥ しゅごいつ♥ こんなのにやいつ♥」

腕にも脚にも力が入り、絶頂寸前まで追い込まれたノドカ。

「ノドカ。私もそろそろ射精しそうだから、膣内に射精されたくないかったら解いてね」

そう言いながら腰を少しだけペースアップする。ノドカの脚は私の腰をガツチリととらえ、全く力が緩む気配がない。

「あっ♥ だめ、だめっ♥ 赤ちゃんできたら退学なっちゃうのにつ

♥ 脚解けないっ♥」

ノドカが必死に私にしがみつき、腰を密着させてくる。

「膣内で射精してほしいの?」

「ほしいっ♥ 先生の赤ちゃんできちゃってもいいからっ♥ 最後まで気持ちよくしてえ♥」

初めての膣イキに夢中になって妊娠のリスクさえ投げ捨ててしまった可愛い生徒に満足しながら、抱き起して座位に移行する。一番奥にチンポが強く突き刺さる体位になってノドカは悶絶した。

「ほら、ノドカ。処女セックスなのに妊娠してでも気持ちよくなっちゃいたいって言ってる所、全部撮ってくれてるよ」

丁度私たちの真横からコタマがハンデイクメラで撮影している。顔を横に向けてそれを自覚したノドカは、今までの痴態を思い出し、それをすべて見られていたことを思い出し、

「~~~~~♥ あっ♥ あぐっ♥ んっ♥ いいいいいいっ♥」

盛大に絶頂した。膣もギチギチに締まり、背中に爪跡が残りそうなほど抱きしめ、精液を一滴も逃さないように脚で腰を固定し……激しすぎる快樂に歯を食いしばって、腹の底からひねり出すような動物じみたいき声を上げる。

「おおっ、でるっー」

女として開花しきったノドカの胎の奥底に、遠慮なく射精する。これで教師生命が終わりになっても構わないと思えるほどに、種付けしないという選択はあり得ない魅惑的な生殖相手に思い切り精液を注ぎこんだ。

「あゝーっーっ ♡ でてるっ ♡ 先生のせーえきでてるううう ♡」

そう言いながら腰をむしろさらに密着させようと押し付けてくるノドカ。どくん、どくんと何秒も送り込まれる精液を、一番奥で受け止めようと私にしがみついてじっとしていた。

「はあ……ふう……♡」

いきっぱなしで全身を強張らせていたノドカがようやく脱力すると、私はそっと彼女をマットに寝かせた。まだガチガチに勃起しているチンポを抜いて立ち上がると、ノドカはまだ呆然とした顔でそのまま寝転がっている。

さっきまで私に押し付けられていた胸はまだ乳首が勃起していて、だらしなく開いた股からは処女を喪って開きっぱなしの膣口から精液がたらたらと零れ落ちている。じっと眺めているとまた犯したくなるので私はコタマに視線を向けた。

「おいで、コタマ。コタマも初めてでしょ？ ならたつぷり準備しないかね」

太ももをモジモジとこすりあわせていたコタマが、びくんと身体を跳ねさせる。

「あっ……はい……」

コタマの肌も白く、紅潮が分かりやすい。もそもそとブーツを脱いでマットに上がってくるコタマを抱きしめる。スラリと伸びた手足と、ほんの少し硬さを残した乳房が大人になる直前の瑞々しい色香を

感じさせた。

いつもしているヘッドフォン、脱いでいる所を見た事がないジャケットを脱がす。ネクタイを緩めるついでにノドカと同程度に小ぶりな胸を軽く持ち上げるように揉む。

「っ……っ♥」

息を？み、予想外に恥ずかしかったことに困惑しているのか、眉を寄せて非難するようにつめてくる。今更ながら顔を逸らして恥じらうコタマを鑑賞しながらボタンをすべて外し、スカートのホックをはずす。

少しフアスナーを下ろすと、スカートはコタマの小さなお尻と細い脚をすり抜けてマットに落ちた。可愛らしい白のショーツと上にブラウスだけとなったコタマは、申し訳程度に手で股間と胸を隠そうとするが、鎖骨の下あたりから手を滑り込ませてブラウスを脱がせると観念したように顔を両手で覆ってしまった。

ノドカとのセックスの間中撮影してくれていたからか、脱がした身体から汗の臭いが立ち上っていた。甘酸っぱい少女の体臭を首筋から嗅ぎながら耳元で囁く。

「照れてるコタマ、新鮮で可愛いよ」

「あっ♥ うっ♥」

びくんびくん、と全身を震わせるコタマ。

「囁かれるのが気持ちいいの？」

耳に唇がかする位の近さでコタマに囁くと、またも身体を震わせた。

「そ、そうです……♥ 先生が、私にエッチな事しようとしてる声って、身体、ゾクゾクしちゃいます♥」

さすがコタマとしか言いようのない特殊な嗜好だが、あまり表情を崩す事のないコタマが雌の顔をしているのは可愛いので遠慮なく囁いてあげる事にした。

一枚だけ上に残ったキャミソールを脱がすと、飾り気のない白いブラが露わになる。すべすべの背中を撫でるついでにブラのホックを外し、ついにコタマの乳首が私の目と、カメラの前に晒された。

小ぶりな乳房ながら、乳輪は大きめで……なにより、ぷつくりと盛り上がっていた。

「パフィーニップルか。エッチで良いと思うよ」

「やあ……♥ 気にしてるから……♥」

小さな子供がぐずるように甘えて鼻にかかったような声。いつものコタマとは違った雰囲気、射精する前よりもガチガチに勃起させつつ、下も脱がせた。

体毛が薄いためそこまで茂ってはいないが、ショーツからはみ出ない程度に陰毛が生い茂っている。コタマは恥じるように両手で下腹部を覆った。

「うう……こんな事ならちゃんと処理してから来るんだ……」

耳まで真っ赤にして、処理を怠った陰毛を見せるのを恥じらうコタマ。

「ふうん……ちなみに腋はどうかな？」

肘を掴んで上に持ち上げると、コタマの匂いが濃く広がった。腋はつるりと毛の一本もなく綺麗なものだ。

「さすがに見える所くらいは処理してます……」

だらしない子と思われたのが不服だったか、むっとしながらコタマが抗議する。

「ごめんごめん。でもコタマのここの毛を撫でられて嬉しいよ」

「うう……先生の変態……♥」

耳たぶをはみながら囁くと、コタマの両手が股間から離れ、陰毛が再び見えるようになる。毛の感触を確かめるように優しく撫でながら股間に指を伸ばすと、にちゃ、と既に濡れそぼった熱い感触が返ってきた。

「まだあまり触ってないのに、囁かれただけでこんなに濡らしてるの？」

「だって、だってえ……♥ 先生の声がっ♥ 直接耳の穴に注がれるの凄すぎるからあ♥」

ぐちゅ、ぐちゅと音を立ててかき回しながら囁くと、あつという間に全身を痙攣させて絶頂した。膝が笑ってきたので、マットの上に座



らせ、ゆつくりと押し倒す。

「ノドカ。そろそろ起きて、コタマと私のセックスを撮影してよ」

「ふえ……はっ！ す、すみませんコタマ先輩！」

夢見心地のノドカに声をかけると、ばね仕掛けのように跳ね起きた。裸のまま四つん這いでハンデイクメラを取り、録画されたままのそれを構えなおす。マットに寝そべったコタマと覆いかぶさろうとしている私がノドカのほうを向く。

股間から精液を垂れ流しながら、それを忘れたようにカメラを向けているノドカに微笑んで、カメラにバッチリと映るようにコタマに身体を重ねてキスをした。

「んっ……♡」

コタマの薄い唇に優しく口づけ、舌を侵入させる。

おずおずと応じてくれるが、その舌の動きは意外と不器用だ。中間で留まるという事が出来ないのか、唇の端から端を往復している。長めの舌に吸い付いて動きを止め、緊張する必要はないと舌と舌を絡めて落ち着かせた。

「ちゅく……♡ ちゅく……♡」

少しずつ慣れてきたのか、コタマから舌を絡めてくれる。ノドカよりも長い分触れ合う部分が広くて気持ちがいい。

恐る恐ると言った感じで背中に手が回され、脚も腰に絡みついてきた。ノドカとの行為を見ていて同じようにしてくれたのだろう。ギンギンに勃起したチンポをコタマのスリムなお腹に押し当てて、私はコタマを抱きしめた。

パフィーニツプルをぶにぶにしながら乳首をコロコロ転がすと、キスした口からくぐもった喘ぎ声が漏れる。囁きだけでなく普通に気持ちよくなってもらおうべく乳首や膣を中心にゆつくりと責めて、コタマの性感を引き出していった。

「んむうーっ♡ んっ♡ んんっ♡」

繰り返す事しばらく、私の指がふやけるほど愛液を垂れ流し胸板がくすぐったく感じる位に乳首を勃起させたコタマ。全身から余計な力が抜けて、処女を食べごろの出来上がりになってきた。

「さあコタマ、そろそろ入れるよ。力を抜いてね」

「はあい……♥」

トロリと融けきった表情で脚を自分から開いて見せてくれるコタマの淫らさをノドカがバツチリ撮影している事を意識しつつ、ぴったりと閉じた綺麗な性器に処女を既に四人も食べてきた毒牙を突き立てる。

濡れテカる処女穴がみりみりと拡がり、男の形に変形していく。ついには亀頭が呑み込まれ、さらに浸食が加速する。

「あうっ……」

ぷつん、と薄い膜を突き破るような感覚と共に、処女膜があっけなく破れて最奥までチンポが突き刺さった。

「コタマ、大丈夫？」

「あつ……はい。意外と痛みもありませんでした」

少し拍子抜けといった感じの素の表情をしてから、不意にクスリと笑った。

「いえ、やっぱり痛いです。だから先生に耳元でいい子いい子って囁いて欲しいです……♥」

処女を喪ったとたんに女として芽吹きつつあるのか、自分の可愛さを前面に出しておねだりをするコタマに、私はすぐに応えた。

「いい子だ、コタマ。破瓜の痛みに耐えられて偉いよ」

「あああつ……♥」

それだけで、コタマは愛撫されて本気汁を垂らしていた時のように表情を蕩けさせる。

「コタマはどう？ 膣内に射精していい？」

「いいっ……♥ いいですっ♥ 今日は多分大丈夫な日だから、ナカにダしてくださいっ♥」

可愛い生徒から膣内射精許可が下りたので、頑張って腰を使う。コタマの膣はまだ硬さはあるものの、既に動かすのに支障はない程度に柔軟だ。ゼリーの中に突っ込んだようにトロトロの肉がまとわりつく。締めりは緩めではあるが、いつまでもかき回していたくなるような居心地の良いマンコだった。

「コタマのマンコ、気持ちいいよ」

「ふあああっ♥ もっと、もっと囁いてえ♥」

身体感想、コタマの感じている場所、恥ずかしいと思う事、色々な事を質問として囁き、コタマをセックスに没頭させる。ぶっじゅ、ぶっじゅと緩トロマンコから愛液が押し出される下品な水音を響かせ、ノドカがセックスをカメラで撮りながらオナニーする水音とまじりあいながら高品質で記録されていく。

コタマは囁かれる事で何度も絶頂し、締め付けもその瞬間には充分にきつくなつた。射精感が高まり、次の囁きで出るだろうという確信を得た私は、最後の囁きをコタマの耳の穴にキスしながらつぶやいた。

「コタマ、中に出すよっ……」

「あああっ♥ きてっ♥ 先生の射精、私のなかでっ♥」

今までで最大の締め付けが私を心地よく射精に導き、コタマの奥深くでドロドロと射精する。十分に子供を作る年頃の生徒に、思い切り種を付ける原始的な快感を享受する。

私の身体の下で、コタマの身体が受精快樂に身もだえている。ねじ伏せるように抱きすくめて、最後の一滴までコタマの子宮口に擦り付けるように射精しきった。

射精後もしばらく勃起が治まらず、コタマの子宮口を抑えつけて子宮に精液が流れ込むのを待つようにじっとする。くたりと脱力して精液を受け容れるコタマの唇を奪い、戯れに唾液を交換した。

「はあ……はあ……はあ……♥ すごかった……♥」

ようやく満足して萎えてきたチンポを引き抜いて、マットに尻もちをつく。

「うわあ……すっご……♥ コタマ先輩、先生にあんなに思い切り射精されちゃってる……♥」

くちゅ、くちゅとハンディカメラを構えたのと逆の手で自分の股間をまさぐるノドカ。一糸まとわぬその姿は私の性欲を大いに刺激し、射精したばかりのチンポをまたフル勃起させた。

「ノドカ。もう一回セックスしたい？」

「うえっ!? い、いや、あの……はい……♡」

びくーん! と身体を跳ねさせてから、照れ笑いでノドカが2回目を承諾してくれた。

「じゃあ、次からはゴムをつけようね。……はい、これ」

脱いだ私のズボンからコンドームを取り出し、ノドカに渡す。ハンデイカメラを持って、私の股間に向かって四つん這いになったノドカが四苦八苦しなからゴムを装着するのを余すことなく撮影した。

「さ、じゃあ濡れてる事だしすぐ入れちゃおうね」

「あんっ♡」

キヴォトスの学生はやはり丈夫なのか、破瓜の痛みはもう完全に感じていないようだった。カメラを構えて、まだまだこなれていないノドカの膣を丁寧にかき回しながらその表情を撮影する。

最中の顔を真正面から撮影されながらのハメ撮りセックスに、恥ずかしそうに顔を隠そうとするノドカの両手を都度どかす。ノドカのほうが力が強いだろうから本気で抵抗すればこんな事は出来ないのだが、見られる事を強く意識させるハメ撮りは、ノドカの好みに合っているようだった。

「ノドカさんだけ、狡いです。私ももっと先生に愛を囁いて欲しいです……♡」

ノドカを犯している背中にコタマがしなだれかかる。しつとりと汗で濡れた少女の身体が心地いい。ノドカを撮影したまま、頭のすぐ横にあるコタマの形の良い耳に口づけた。

「コタマもノドカも、もうセックスが大好きになったね。これからもずっと、可愛がってあげるよ」

「ふあああっ……♡」

耳元で囁いてやると、ぞくぞくと全身を総毛立たせ、背中に押し当てられるパイプラインチップルの先端が硬く勃起するのが分かる。

それから日が傾くまで、たっぷりと可愛い生徒とのハメ撮り動画作りに勤しむのだった。

余談として。

コツテリ膾内射精された二人は、帰りがけにシャーレ居住区のコンビニ、エンジェル24に何故か置いてあるアフターピルを購入して帰った。

「うえっ!?! あ、い、いえ、失礼しました、お、お会計一つ6000クレジットになります……」

先生から貰ったお金で、それぞれにピルを買うコタマとノドカ。コタマは割合平然と、ノドカはコンビニ店員のソラと揃って耳まで真っ赤になって、震えながらのお買い物となった。

本気の食ザーだから粗末にしてないもん（イズミ）

「今日の小テストは……数学！」

ざわ、と動揺が走る。苦虫を噛み潰したようなイズナ、への字口にしたアリス、しよっぱい顔をしたノドカ、涼しい顔のコタマ。それぞれの反応を見つつ、執務室の同階にある教室に座った4人にテスト用紙を配っていく。

「時間は30分。では、はじめ」

さらさらと筆記の音だけが響く中、私は追試用の小テストを準備していた。

なぜこんなメンツで小テストをしているのかと言えば、当然ご褒美セックスの権利を賭けているからだ。1位の人から優先的に、同点だったら3P〜5Pという事になる。

教科は毎回くじ引きで選択し、範囲は事前に告知しておく。勿論学年ごとに違うテストを行う。合格点に届かない場合、一日に付き二回まで追試あり。褒美が褒美だけあってみんな真剣だ。さらには80点以上で同着が無い場合は注文を付ける事も出来ると約束したので何を言われるか私も楽しみだ。

休日の朝から私とセックスするため頑張つて勉強している生徒たちを見ると心がとても豊かになる。

一応2回分の追試を作成し、溜まっている仕事を前倒しにすべく手を付け始めたが、すぐに小テストの制限時間が訪れた。

「はい、やめ。……こらアリス、ペンを置かないと0点になるよ」

4人の熱っぽい視線を一身に感じつつさっと採点を行う。……イズナ以外は合格していた。

「はい、イズナは不合格。一位はコタマだね。やっぱりヴェリタスだけあつて数学とかは得意？」

「はい、まあ、歴史とかの暗記物よりは」

答えるコタマは表情も柔らかく、80点以上ではないもののご満悦だった。アリスも今回は合格して鼻息が荒い。ノドカはひたすら安堵したという風に胸を撫でおろしている。

「じゃあ、イズナは再テストまで自習ね。コタマ、行こうか」

「はい♥」

耳元でそつと囁いてあげると、聡明そうな普段の顔がトロリと雌の顔に蕩けていく。教室に一つだけ存在する監視カメラの死角で細い腰を抱いてキスすると、先生と生徒の距離で執務室まで歩いた。

結局その日は、コタマとのセックスが終わってからの追試にもイズナが落ち、涙目になりながら最後のテストで合格し、対面座位でがつり抱き着かれながら沢山射精してあげた。最初にセックスしたコタマは、最後までセックスの様子を録音してホクホク顔で帰っていた。

その翌日。

「くんくん……なんかいい匂いしない？」

今日はイズミ……獅子堂イズミが執務室で「先生当番」をやっていた。女の子にあるまじき鼻の穴のおっぴろげ方で鼻から深呼吸して、しかし何の匂いか分からず首をかしげている。

「最近暑くて汗臭くなりがちだから芳香剤を置いたんだよ。それじゃない？」

「いやいや、違うよ。芳香剤の匂いはさつき嗅いだから分かってるんだけど、それとは違う匂い。先生、なにか良いもの食べたでしょ！」

くんくんと鼻を鳴らしながら執務室じゆうをうろつくイズミ。キョロキョロと身体の向きを変えるので、豊満な胸がゆっさゆっさと重量級の揺れ方をして、イズミの濃い少女臭が振りまかれる。机に座りながらもチンコがイライラしてしまう。

「あつ、なんか……匂いが濃くなった？ こつち……」

ふらふらと私に近寄るイズミ。ふらついている割に素早く、制止の暇もなく後ろまですぐに詰め寄り、躊躇なく四つん這いになる。胸が重力に従って鉛直に垂れ、制服の前がぴつちりと張力によって胸を押しとどめている。

「やっぱり先生がなんか隠してるでしょ！ ここからすっごい匂いがしてるもん！」

机の下、私の足元に犬猫のように入り込んでスンカスンカと匂いを

嗅ぎまわるイズミ。

「ちよ、こら、やめなさいイズミ！」

しばらく粘ったイズミだが、当然何もないので渋々机の下から出てきた。

「んー？ おつかしーなー……分かった！ 先生のズボンのポケットだ！」

がぼっ！ と俊敏な動きでイズミに襲い掛かられる。がっしり抱き着いて拘束され、両のポケットにイズミの黒手袋を付けた手が潜り込み、ゴソゴソをまさぐられた。何もないとすぐわかるだろうに諦め悪く、ズボンの中をグリグリ探りまくる。太ももの内側、股間にも容赦なくその手は伸び、指先で竿や玉にも触れているのにまるで手が止まらない。

イズミのものすごい巨乳が平べったくなるほどに私の背中に押し付けられ、さらにチンコまで手で刺激されてしまったのは、最近勃起も射精も強化されたとすら感じる使い込まれ具合のチンポには我慢できるものではなかった。

「ていうか、真ん中のこれ何？ あれっ、なんかさつきより硬く……あっ」

イズミはようやく我に返ったか、一瞬で手を引つ込めて身体を離れた。

「全くもう……不用意に男性にこんな事しちやダメだよ」

「ぶっ……ぶっごめん、なさい……」

意外というべきか、普通にといふべきか、イズミは真っ赤になつて顔を逸らしていた。手で顔を覆おうとして、しかし股間を触っていた手だと気づき躊躇する。

しかし、すん、と小さく鼻を鳴らしてそろそろと手を顔に……鼻に、近づけていく。

「すんすん……すんすん……こ、これだ！」

「えっ」

まさか……いや予想して然るべきか。イズミが言っていたいい匂いとは、私の股間の匂いだった。珍しくも恥じらう乙女のようなだった



イズミの顔から恥じらいが一気に失せ、爛々と輝き出す。

「ね、先生、お願い！」

「いやいや！ 何言ってるの!?!」

がばつと詰め寄られ、一応は常識的な先生としてふるまう事にした。

「ね、ね、ね、お互い秘密って事にしよ、ちよつと、一回だけ、一回だけ先生のおちんちん舐めさせて!」

ノドカやコタマはかなり特殊な性的嗜好をしていたが、それでも『性的嗜好』だった。イズミはもはや完全に性器を舐める行為を食事の延長で捉えている。

変態を越えた何者かだった。

「はあ……しかたないな、分かったよ」

「ええっ!?! いいの!?! やったー! ぞ、その……き、気持よくして、あげる……からね?」

どういう基準かはよく分からないが、一応恥じらいを見せてイズミが私の前の床に座った。さすがに改めてやると抵抗があるのか、懐かない野良猫に恐る恐る触れるような手つきで私の股間に手を伸ばしていく。親指と人差し指でジッパーを摘まみ、片手だけではうまく下ろせずにもう片方の手もそろそろと出して来てズボンを抑えた。

私のパンツが直に見えるようになって匂いが増したのか、イズミがじゅるりとよだれを飲み込む。

「一応言っておくけど、噛まないでね?」

かあつ、と頬を赤くしてイズミが眉を逆立てる。

「し、失礼だなー先生! さすがの私だって人肉は……あれ? 人肉ってどんな味がするんだろ」

「イズミ……」

はつと気を取り直したイズミがあからさまに取り繕った笑みを浮かべる。

「じよ、冗談冗談。先生のを舐めさせてもらえれば大丈夫だから!」

「歯も立てないでね?」

「もちろんだよ! 私はチェリーのヘタをちようちよ結びできる位器

用なんだから！」

疑わしい発言だが、最低限怪我しなければ良いので流しておいた。すうはあと匂いを嗅ぐイズミの顔は段々私の股間に近づいていき、私の膝にイズミの巨乳が押し付けられて潰れていく。

頭より大きいレベルの乳房だが制服越しにもプリンより柔らかい感触が伝わってくる。前のめりになったイズミは胸になど頓着せず、既に半勃起している私のチンポをボロンと露出させて顔を赤らめた後、匂いを嗅いですぐに目を輝かせて笑った。

「あー……すっごい、ゾクゾク来るよ、この匂い！　こんなの始めて！」

亀頭に鼻がくつつく位近づけて、イズミがすんすんと匂いを嗅いで陶然としている。これだけなら色っぽいはずなのに、じゅるりとよだれを飲み込んで舌なめずりするイズミは食事前にしか見えない。

「いったただっきまー……んむっ」

あー、と大口を開けて、一気に半分ほども竿を口の中に侵入させていく。フェラではないので口は開けたままであり、唇の感触よりも先にイズミの吐息の熱さを感じるのが新鮮だった。

「ちゅ♥　じゅるっ、くちゅくちゅ……」

ついにイズミの舌、上あごの感触がチンポを包み込み、『実食』が始まった。私の太ももの上にイズミの巨乳がずりずりと押し付けられ、それだけでも心地よい。見下ろせばゲヘナの制服の外套じみた上着の灰色をイズミのむっちりところちらも肉付きのいいお尻が押し上げていて、光景だけはちゃんと色っぽかった。

イズミは宣言通りに歯を立てる事も無く、教えもしないのに唇を内側に巻き込んで歯が当たらないようにしてくれている。口の中を使う事にかけては人一倍得意なイズミの意外な応用編といったところだろうか。

それどころか、舌の動きが途轍もなく滑らかで、亀頭に巻き付くように舌が這いまわり、昨日たっぷりセックスして楽しんだ残滓のチンカスがあつという間に綺麗に舐めとられていく。イズミの舌は大きく太く、さらに心なしに熱く、それがまた気持ちいい。

射精を目的としていないおしゃぶりは吸うという行為を行う事無く、ひたすら舌で舐めまわしてのテイスティングを繰り返していた。それも味が濃い亀頭を入念に行うので快感自体は強く、イズミに代わり替わりの我慢汁をどんどん提供している。

「ちゅぱっ、ちゅぱっ……んくっ」

鈴口から美味しい液体が出ている事に早々に気づいたイズミは、ついにチンポを吸い始めた。頬をへこませることなく、一旦唇近くまでチンポを出してストローでジュースを吸うように気軽にチンポを吸う。

触っているうちに理解したのだろう、竿を掴んで尿道を通っている液体を出すべくシコシコと手コキをしてくれる。銃を保持するためのイボがついた手袋での手コキはこれまでにない経験だ。ぽーっと顔を赤くしながら、我慢汁が出てくるそばから舌の上で転がしてじっくり味わい、嚥下していく。

最初はどうなるかと思っただが、意外とイズミのフェラが気持ちいい。これなら一番の『ご馳走』をちゃんと提供できるだろう。

「イズミ、頬の内側をくつつけるみたいに強く吸ってみてよ」

「ええー？ や、やだよ……変な顔なるじゃん。エッチだよ、先生」

ちゆるっ、と我慢汁を吸っていたチンポから口を離して、イズミが抗議の声を上げた。しかし私はここで押す事にする。上気している頬と首元、押し付けられた胸……なによりその胸の頂点の乳首が制服越しにも硬くシコっってきているのを太ももで感じていた。

意外にもイズミも性的興奮を覚えているようだ。

「やってくれたら一番美味しいのが出るからさ。お願い、イズミ」

我慢汁と唾でヌルヌルと光る唇を赤い舌が舐めとり、その成分がたっぷり混じった唾液をぐくっ、と飲み込んだ。

「……わかった。か、顔見ても……笑わないでね」

ちらちらと視線を気にしながら、再び唇にチンポが呑み込まれていく。サツと手で顔の下半分を隠しながら、イズミがついにバキュームフェラを開始した。

「ぢゅっ……じゅぱっ！ ちゆるっ、くちゅ……」

吸い過ぎて大きな音を立てたイズミが恥ずかしがり、再度慎重に吸い始める。ぷにぷにしたほっぺの内側の粘膜が今まさに私の股間に射精を促すために張り付いていた。

「おお……良いよ、イズミ」

戯れにふわふわの髪の毛を撫でてやると、顔を真っ赤にして押しつけられた。これも恥ずかしいらしい。

吸い付いて狭くなった口の中で、効率的に味わうために舌先が高速で鈴口を往復する。吸い付きと相まって射精感はどんどん増していき、秒読み段階になった。

「でるよっイズミ！ 全部口で受け止めてね……！」

「ちゅく♥ ちゅく♥ ちゅるるっ♥」

本能的に理解したのか、イズミの舌が裏筋を激しく前後して射精を後押ししてくれる。今日初めての射精をイズミの口内に思い切り放った。

「~~~~~!!」

カツ、と目を見開いて、イズミは唇を亀頭まで持ち上げて精液を逃がさないようにしながらも口をもごもごさせて舌で攪拌して味わっているらしかった。私の太ももからイズミの巨乳が離れ、ぺたんと床に女の子座りし、口の中に集中している。

イズミの口がリスのように膨らむほど射精しきった私は、そんな食事風景を興味深く眺めていた。

ぐじゅぐじゅぐじゅ！ と汚らしい音を立てて空気を取り込み、ワインのテイステイングのように口の中を右へ左へと精液の塊が移動しているのが見て取れる。

「すうーっ、ふうーっ」

精液の風味を余さず感じ取ろうというのか、鼻で深く呼吸している。

イズミは頬を上気させ、ぼーっ、っと上の方……視線的には私の胸辺りに視線をやっていたが、何も見ていない事は明白だった。

明らかに、セックスしているかのように、うっとりとした表情での中の精液を転がしている。

(これは……行けるか?)

食欲しか頭に無いような、ある意味アリス並に純粋なイズミが不意に見せる雌の顔。それこそイズミではないが、中々に味わい深い。

「んくっ、ぐくっ、ぐっ……くん♥」

最後の一飲みをしてから、ぶるるっ、と身震いするイズミ。無意識にだろう、自分を抱きしめるようにして胸を強調しながら恍惚の表情で意外と太くない太ももをすり合わせている。赤い舌がゆっくりと精液に濡れた唇を這い、一滴残さず舐めとってそれも嚥下するのが先ほどと違つて艶めかしい。

当然、私のチンコはイライラから再度フル勃起している。

「ふうーっ……♥ すう、ふうーっ♥」

胃に落ちた精液の匂いを鼻を通して吐き、余すことなく楽しもうとしているイズミに声をかけた。

「イズミ。お代わりしてみる?」

イズミは言葉すら無く、ちゅび、と舌なめずりをしてフラフラと私の太ももに胸を乗せ、大口を開けた。

「あもっ♥ ぐじゅ!・ じゅぼっ! ちゅくちゅくちゅく……♥」

イズミは酔っぱらったように真っ赤な顔で今度は顔を隠す事も無く思い切り頬をすぼませて、口の中で我慢汁を攪拌するように空気を混ぜる下品な音を響かせる。

完全に精液を絞るためのフェラだった。しかし、これだけではもつたいたい。私はイズミの胸元に手を伸ばし、左右に引っ張られて独特の皺ができているイズミのボタンを外す。

びくっ、とイズミが硬直し、困惑するように、しかし口は離さずに舌を動かし続ける。行けると判断して、どんどんボタンを外してあっという間にイズミの制服の下のシャツを拝むに至った。

下着としてのシャツは頼りなく、ゆつさりと重量のある見事な胸をむしろ強調するように貼りついている。フェラしているイズミの頭を抱えるように屈んで裾をめくろうとすると、イズミがその手を押しとどめた。押し合う事無くその手を取り、指で手の甲を愛撫する。

「んう♥」

ぴくん、と手を震わせ、硬直するイズミの隙をついてぺろんとシャツをめくる。みっしりとブラに押し込められたかのようなイズミの爆乳が目飛び込んできた。

なおもイズミはチンポを啜えたままで睨んでくる。

「私だって恥ずかしい部分を見せてるんだからこれくらい許してよ。それに、イズミが胸を使ってくれたらもつと濃いのが出るよ」

基準が分からないが、さすがに胸を見られるのは恥ずかしいのか……イズミはしばらく百面相して逡巡していた。しかし精液の魅力には敵わないのか、渋々こくりと頷いた。

「ちゆるんっ……♡　ぴちゃ、んくっ……で、どうすればいいの？」

口に残った我慢汗を律儀に飲み干してからイズミが赤い顔をして訊ねてくる。胸で挟んで刺激する事を伝えると。耳まで真っ赤にしながらおずおずと背中に手を回し……ぱちんとブラのホックを外した。

ぶるん、という音さえ聞こえるようだった。ブラの域に留められていたおっぱいが本来の姿を取り戻していく。女の子の恥じらいという呪縛を解いて、雌を越えた原初の太陽のごとき神に近い存在へと変わっていく。

そんな馬鹿な事を考えてしまうほどに女体の神秘を体現したおっぱいだった。イズミらしくというときれるだろうが脂肪が主になつたふによりと柔らかいおっぱいが、若い張りのある肌を支えられギリギリの上向きを保っている、奇跡のような美しさの紡錘型だった。大きさにふさわしい巨乳輪と親指の先ほどもある堂々とした乳首は既に勃起している。

「おおー……」

「やっ、やあつ！　そんなに、見ないですよ……」

イズミが胸の先を隠すが、その手が乳房にめり込む様子すら煽情的だった。

「綺麗だよ、イズミ」

両手を使ったイズミの隙だらけの顎に人差し指を当て、上を向かせる。そのまま親指で唇をなぞった。

「あつ……♡」

イズミの表情に、恥じらいを超える雌の欲望が混じる。私の親指をチンポのように舌で舐り、フラフラと股間に近づいて熱い肉棒を豊かな胸で挟んだ。

まるで膝元に肉の海が出来たような不思議な光景だ。そつと手を離すと、ちゆび、とイズミの唇が名残惜しげに吸い付いてきた。

肉の海にただ一つそびえる肉の塔を見つめ、イズミが熱い息を吐く。首を伸ばしてチンポに吸い付こうとキス顔をするその様は、明らかにセックスとしてのフェラをしている女の貌だった。

まるで恋人相手のように亀頭にキスし、ヌルヌルと唾液をまぶしながらゆったり頭を上下させて唇のリングでカリ首を刺激する。本能で分かっているのか、竿を伝って胸に唾液が垂れていき、あつという間に挟んでいる部分は唾液で照り光った。

イズミはその黒手袋で真っ白なおっぱいを左右から圧迫し、肉の塔は高潮に洗われるかのように亀頭以外イズミのおっぱいの海に没してしまう。

「ちゆる、くちゅ……ちゆるるるっ♡」

下品な水音を高く響かせ、イズミがパイズリフェラを開始した。何も言われていないのに舌は裏筋をくすぐるように撫で、とぷとぷと湧き出る我慢汗はその都度舐めとり舌全体で味わいつくした後に嚙下している。

たぱっ、たぱっ、とたどたどしく上下する胸が私の太ももにまんべんなく打ち付けられ、ズボンの生地とイズミの爆乳が妙なる音色を響かせる。強く圧迫されているとはいえふによぶによぶのパイズリ自体は刺激の強いものではなく手コキの方が射精はしやすいだろうが、その分視覚的には刺激的で長く興奮出来るため射精が沢山出る予感があった。

イズミはもう私と目を合わせる事も無く、鼻息を荒くして夢中でチンポをしゃぶっている。パイズリのほうもこなれてきて、上下だけでなく竹とんぼを回すかのような手つきで左右の胸を互い違いに前後に動かしてくる。さつそく前言撤回、パイズリならではの刺激に私も

反射的に顎が上がってしまった。

躊躇のないむしゃぶるようなフェラ、初めてなのに応用を利かせてくるパイズリ、イズミの隠れた性交の才能が開花しようとしていた。

「ああ……すごい、上手いよイズミ」

頭を撫でるのはさつき嫌がられたので、両の角に手を置いた。嫌ではなかったのか、フェラに夢中なのかは分からないが、今度は跳ねのけられなかった。

ごく軽く角に力を入れてみると、イズミが私の意を汲んでフェラを深く啜えこむものに変化させる。射精しそうになるとまた角を引き戻し、浅く亀頭を飴玉のようにしゃぶり倒す高刺激のフェラに変えてくれる。

ひっきりなしに我慢汁があふれ出し、精液を垂れ流しにしているような気分になるまでイズミのフェラは止むことなく続いた。常人なら顎が疲れてへばっている所だろうが、一日中ものを食べている勢いのイズミにはこの程度なんともないのかもしれない。

とはいえ結構な運動量のイズミの額には汗が浮かび、むわりと濃い少女の匂いと私の精液の匂いが入り混じり、執務室中に性臭を立ち込めさせていた。

「ぐっ、イズミ、そろそろでるよ……!」

ふー、ふー、と鼻息を荒くすることで応えたイズミは、ここまでで一番気持ちよかった前後の胸の動きと深いフェラを同時に行う。イズミ自身が胸の海に顔を突っ込むような体勢で、射精のための疑似マスコのように振舞って精液を絞り尽くそうとしていた。

「ぢゅうううううっ♡」

強い吸い付きに射精をこらえきれない。イズミの角を強く握り、ハンドルのように引いて少女の小さな頭を股間に押し付ける。喉奥まで突き刺さったチンポがグツグツに煮えたぎった精液を噴出させ、舌にも逆流しながら殆どが空気に触れる事も無く喉奥へと直接滑り落ちていく。

「おっ♡んぐっ♡ぐくんっ♡ぐくっ♡」

一滴も残すまいと、抑えつけられて目の端に涙を浮かべながら精液



を飲み下すイズミ。射精の勢いが凄まじく、鼻にも入ってしまったのだらう、精液の鼻ちようちんが出来てしまっている。一方で口内に逆流してきた精液も漏らすことなく口内で味わい、ついでのようにチンポの竿に舌を這わせてくれる。

やがて長い射精が終わり、角から手を離すと、イズミがヌルヌルと口からチンポを引き抜いて大きく息をついた。

「ぶはーっ！ ちよつと、先生！ 殆ど味わえなかったじゃ……うっ」

イズミは文句を言おうとして、不意打ちを食らったように目を丸くした。

「げえーっ！ っぶう ♡」

長いゲップが出た。あまりにも濃厚にまき散らされた精液臭に私は顔をしかめるが、イズミは恍惚としている。

「はっ……あああ…… ♡ すっごい、最高の風味だよ ♡ こんな食べ物食べた事無い ♡」

すう、はあ、と精液の鼻ちようちんを膨らませたりしぼめたりして、精液の匂いをダイレクトに鼻腔で味わう様子は完全に危ないクスリをキめているかのようにトリップしていた。

私はまたフル勃起した。

「じゃあ、お代を払ってもらおうかな」

「えっ、お金取るの……っとうわっ!」

上半身殆ど裸のイズミを床に押し倒す。目を丸くして驚くイズミだが、抵抗はしなかった。仰向けになったイズミの重力に負けて平らに広がる胸から視線を引きはがし、潤んだイズミの瞳を見つめてキスをする。

「んっ…… ♡」

恐るべき精度で口内の精液をすべて飲み干していたのか、あまり臭みは無かった。フェラされていた時から思っていた舌の熱さはキスをして舌を絡める事でより強く感じられた。ぬるぬると螺旋を描くようなイズミの舌は私の舌に巻き付き、まるで肉のガムとして味わわれているかのようだ。

器用な動きでディープキスのやり方もどんどん覚えていき、イズミは私の唾液を吸い立てて食前酒のように嚥下していく。

「ぷは……もう、先生……乙女のキスは高いんだよ？」

見た事も無いほどしおらしく、イズミが本当に乙女の顔をしている。

「それは困ったな。お釣りを払わないといけないかな？」

「ん……これからも先生ののを飲ませてくれるなら……良いよ？ その、今どきは飲み物もサブスクの時代だし」

恥ずかしさの限界なのか、ふいと顔を逸らして口を尖らせた。

ならばと、遠慮なくイズミの服を剥いていく。これまでセフレにしてきた生徒にはない肉感的な身体つきが、二度の射精にも負けず金玉に精液をチャージさせる。

肉体派であるイズミらしく、全身に肉がついているがだらしない身体ではない。ぽよんと柔らかかそうなお腹だが腰はちゃんとかくびれていて、肥満ではない爆乳がやはり目を引く。

白ソックスと編み上げブーツ、前髪を止める赤いヘアピン以外は一糸まとわぬ姿となったイズミの太ももを押し開き、下の毛が濃く茂った股間を露わにする。

「ああっ!?! ちよ、ま、やっぱなし！ こんなの恥ずかしすぎるよお！」

やはり男の目がほとんどない生活をしているところなるのだろうか。コタマに続いて二人目の未処理勢だった。

尻の穴の周りまで生えた陰毛はイズミの濃い体臭を封じていたのか、むせかえるような雌の臭いが立ち込める。

「すうーっ」

「やめてえええ……はずかしい……」

こんなにも乙女だったのか、と感動さえ覚えるイズミの乙女な部分を堪能し、せっかくだからと口を近づけてクンニを始めた。

「やつ、だめ、きたなっんっ♥」

大ぶりなビラビラとした陰唇は大人の女性顔負けだが、色は鮮やかなピンクでまだ少女らしさを濃く残したイズミのマンコを舐めしや

ぶる。ヒダに隠れた恥垢をほじくりだし、舌をピリピリ痺れさせながらも特濃の少女臭を飲み下していく。

「ああっ、やだっ、私っ、先生に食べられてるっ♥」

謎の興奮ポイントにより、愛液がどんどん湧き出てくる。舌への刺激が強いし味も濃いイズミの愛液は、舐めていると私までクラクラしてくる。フェロモンまで濃縮されているかののように勃起も激しくなり、もう二発濃いのを出しているのに我慢汁を垂れ始めた。

ごくりと飲み込んで胃の中が熱くなるような感覚を後に口を離し、イズミの膣口に龟头を押し当てる。

「先生……やさしく、してね……?」

食事ではなくセックスの時は乙女になるイズミが本当に乙女である最後の瞬間を目に焼き付けて、腰を突き出した。

「いっ……!」

顔を盛大にしかめ、私の腕をぎしりと軋むほどに握るイズミ。手袋越しに痛みをこらえているのが伝わってくる。

「大丈夫?」

「だいじょぶじゃ、ないよ……あー……いった……」

チンポを突き刺したままじっとしつつ、クリを転がして痛みを和らげつつ時を待つ。

「あっ、ん……♥」

やがて、痛みよりもクリの快楽が勝利始めた。イズミの顔をうかがいながら、ゆっくりと腰を動かす。

膣内はイズミの舌のように大ぶりなヒダが幾重にも連なり、何人もイズミに舐められているかのようだ。気合を入れなければすぐにも射精してしまいそうだった。

「はっ、ふう……♥　　なんか、お腹の中に出たり入ったりするの、不思議な感じ……♥」

「気持ち悪い?」

「ううん? ……もっとして、良いよ……♥」

はにかむような笑顔で、そっと私を抱きしめてくれるイズミ。誘われるままに覆いかぶさり、唇を重ねた。むっちりと肉感的なイズミの

身体を全身に感じる。じつとりと汗に濡れた肌、濃厚なイズミの匂い、ふかりと柔らかく受け止めてくれるおっぱいを丸ごと抱きしめて、全身をこすりつけるように前後動させて膣の中も腹も胸も唇もすべての感触を楽しむ。

「んっ……んっ……♡」

二度の精飲で興奮しきっていたのか、イズミももうセックスを受け容れて楽しめているようだった。

ゆったりとした動きで時間をかけてイズミの性感を高め、股間から鳴り響く水音がはつきりと聞こえ出す頃合いになるとイズミも腰を微かに使って私と息を合わせてゴール……絶頂へ向かって二人三脚のように歩んでいく。

「あ……なんか……くる……♡」

「イズミ……中に出すよ……」

「あ……え……？　なんか……よく、わかんない……いいよ、出しても……♡　だして……♡　美味しいの、出して……♡」

穏やかだが押しとどめる事の出来ない強さを持った絶頂が、二人を同時に包んだ。

一つの肉塊のように密着し、私はイズミの膣奥に射精する。

「あ~~~~~♡」

熱い風呂に入ったような気の抜けた嬌声と共に、イズミが絶頂する。膣はきゆうきゆうと吸い付き、過不足なく精液を啜り上げてくれる。イズミの豊満な身体に包まれながらの射精は不思議と安堵感を強く感じさせてくれた。

執務室の床に二人並んで転がり、ぼけっと天井を見つめている。

「はあ……もう。こんな出しちゃって……子供出来たらどうするの……」

「下のコンビニにアフターピル売ってるから、お金出すから飲んでから帰ってね……」

絶頂後で緩んだ気だるげなイズミは、ぐっと大人びて見えた。

「先生のバカ。エッチ」

「イズミのほうがエッチだよ。いきなりしやぶらせてくれなんて」

「私は、美味しそうだから飲んでみたかったけどもん……」

私の腕枕で眠るイズミは、わしわしと頭を撫でる手を今度は払わず……身を寄せて目を閉じるのだった。

後日。

「ええええっ!? テストー!? 話がちがーう! 料金前払いのサブスクじゃなかったのー!?」

危うく詐欺で訴えられかけたが、なんとか雌の心をくすぐって正式にセフレをまた一人増やしたのだった。

## 竿姉妹100人でできるかな（ツルギ）

ジリジリと、太陽が背中を焼いている。

汗をポタポタと垂らしながら、私は腰を振っていた。

「あっ……あっ……っ♡」

マットの上にはノドカが全裸で横たわっている。今日は他の生徒が居ないので、学校の小テストで成績が上がったと笑顔で見せてくれたノドカとこうしてゆったりとセックスしている。

恋人握りにした片手は汗まみれでヌルついていたが、ノドカが相手なら気にならない。ノドカは、眩しそうに目を細めて私の顔とか胸板とか結合部を眺めている。

もうセックスにもだいたいなれた様子で、一定のリズムで腰を振る私に合わせてノドカも腰を使ってくれている。180度に近く開かれた股間には華奢なノドカの恥骨が浮かび上がり、私の恥骨とぶつかり合って下腹部にコツコツと振動が響いていた。

ノドカが片手で私の胸を弄る。少女の細い指が這い回り、乳首を人差し指でねっとり撫でられる感触にビリビリとした快感が走る。

お返しに、私もノドカの胸で勃起している乳首を汗のぬめりを利用して指一本で転がして愛撫してあげた。

「あんっ……♡ んふ、先生も乳首気持ちいいですか……？」

全身汗だらけで、額に髪を張り付かせたノドカがぼうつとした様子で聞いてくる。

「うん、気持ちいい……でもちよつと恥ずかしいかな」

ノドカは子猫の喉をくすぐるように、下から柔らかく小刻みに私の乳首を刺激してくる。ビリビリと背筋や股間に快樂の電流が走り、射精感がこみ上げてくる。

「ああ……先生のその表情、すっごくいいです♡ しまったなあ……コタマ先輩が居ないから録画してないのが残念……」

うつとりと頬を緩め、より嫌らしく指を使い、イソギンチャクの触手のように蠢かせる。負けじと乳首をつねってみるが、ノドカの膣のうねりが更に激しくなり、もうこらえきれなかった。

「ああああっ」

二人同時に乳首をギュツとつねったのが引き金になり、仲良く唱和しながら同時に絶頂する。射精の脈動をノドカの絶頂膺のうねりで絞ってもらい、ほっそりとしたお腹の奥深くでゴム越しに大量の射精がノドカの子宮口に押し付けられた。

ノドカの下腹部に手のひらをおいて、絶頂にうねっている体内の筋肉の収縮を楽しんでいると、ノドカも手を重ねてきた。

「先生の精液、いっぱい出てますね……♡」

もうセックスに気負った様子もなく、充実感いっぱいのお笑顔を浮かべている。少女からどんどん女に成長していく過程の輝きを感じながら、私はノドカの額や頬に張り付いた髪を払ってあげた。

私がチンポを抜くと、ずっしりと先端に精液の重しができている。ノドカは身を起こすと手早くゴムを外して口を縛った。そのまま尻もちをつけて休憩する私の股間に這い寄り、八分ぐらいの勃起を保ったチンポをぱっくり啜える。

甲斐甲斐しいお掃除フェラに、上目遣いでじっと見つめてくるノドカを見つめ返す。フェラされている私の顔を堪能したいノドカが一番喜んでくれるのでいつもこうしている。

「ノドカはセックスもお掃除も丁寧だなあ……将来良いお嫁さんになるよ」

「んぶっ!? けほっ、も、もう、先生ったら変なこと言わないでください」

顔を真っ赤にしながら、将来誰かのお嫁さんになるその可愛らしい口をすぼめて頬をへこませたスケベ顔で私のチンポを掃除してくれる。

ノドカの長い髪が背中やマットに広がり、強い陽射しを受けてキラキラ輝いているようだった。首の後ろあたりの髪に手を入れると、じつとりと湿気を感じる。

「ふう……最近暑いね。ノドカ、お掃除はそれくらいでいいから、飲み物を飲んだほうが良いよ」

ちゆる、と尿道に残っていた精液を一滴残らず啜り出して嘔下し、

ヌルつく唇を舌で拭ってからノドカは応えた。

「そうですね。先生の精液、とつても濃いから喉がイガイガします」

そう言いつつも吐き戻しはしないノドカに愛おしみを覚えてまた勃起がぶり返す。ベトベトの体を寄せ合い、片手で相手の股間をいじりながらペットボトルで水分補給をするのだった。

ノドカも再度盛り上がってきてゴムを口でつけてくれた所で、チャイムが鳴った。

ぎよつとしてマットを机の下に押し込みノドカがマンコ丸出しのまま制服を手にとつたところで、

「せんせー、私ーイズミー。あーけーてー!」

のんきな声が聞こえてきて、胸をなでおろした。

「おつ、ノドカとやってたの? 何回した?」

他に誰も居ないことを確認し、執務室のドアを開けて一番にイズミがそう言った。肩からは何やら銀に輝く保冷バッグを提げている。

「まだ一回目だよ。ノドカは今日は小テストの成績上がったって答案持ってきてくれたからね。満足行くまでしてあげるさ」

「へーそっかそっか♪ じゃあ……あつた! ゴム入り精液ー♥」

ひよいと私を避けて執務室の奥、机が影になって見えない場所……ただし窓際なので日差しがきつい……に敷かれたマットに置かれたゴムを手に取り、懐からチーズバーガーを取り出してバンドズを取って保冷バッグから出した板チョコを載せた上に精液をドロドロと落とすしていく。

「うええ……チョコチーズザーメンバーガー……それ美味しいんですか?」

「さいつ……こう♥」

尿道の中の精液を飲み下したせいで精液の臭いがする口でノドカが疑義を呈するが、イズミはうつとりと身を振りながら精液とチョコとチーズバーガーを口内でもちやもちやと味わっている。

「あ、今日は私はセックスは良いから、ノドカは好きなだけやっていいよ。精液は私にちょうだいね」

そう言うのと、助手席のキャスター付きの椅子に座ってクーラーの聴





「あう、あうあうあうあ……すみません、すみません私のような人間が女の子のようなことをして……」

ぎよろぎよろと視線がさまよい、開いた口からはよだれが垂れそうになって放心している。

「ツルギは女の子なんだからそれで良いんだよ。せつかく夏なんだし、ツルギも水着で海水浴にでも行ってみればいいと思う」

このまま放っておいても、結局は勇気が出ずに夜には膝を抱えて落ち込んでいる羽目になる可能性が高い。だったら逃げる前に引張って買わせてしまうのが良いだろう。

なにより、ツルギを薄着にしてセックスをするチャンスだ。

「先生……」

そんな邪な思いには全く気づかず、顔を真赤にしてまた乙女の顔をして手をひかれるままについてくるツルギ。ショッピングモールの売り場には、色とりどりの女性用水着が並んでいた。

「ぎえ……」

「はいはい、お店では静かにね」

そつとツルギの唇に指で触れて奇声を上げようとするのを留める。前ならしなかったボディタッチに、ツルギが口を抑えて顔を赤くした。

「さあ、気に入ったのを選んでみよう」

そう言っつてツルギの背中をそつと押す。

「で、で、でも、私には、似合わない、し……」

「そんなことないよ。ツルギは綺麗だからたいいの水着が似合うよ」

「きつ!? き、きれ、キレレレレレはむっ!?」

またおかしくなりそうだったので唇に指を当てた。

「じゃあ私が選んでみようか。……こんなのはどうか?」

そう言っつて、黒い水着を手渡す。なかなか大胆なセパレートの水着だ。胸の部分は三角形で、ツルギの巨乳を包みきれないだろうし首紐はホルターネックになっている。下半分は2本紐になっていて、ツルギの細い腰には似合うように思えた。

「ひぎゅっ、こ、ここの様な大胆な水着を着ていたら恥ずかしすぎて死んでしまいます……！」

「ずぎぎ、と下がりながら両手のひらをこちらに向けて振る。しかし私は追撃した。」

「まあまあ、ツルギには絶対に合うから、一度着てみてよ」

「あう、えう、ででも……先生が、そういうなら……」

水着を押し付けると、ツルギは笑みを我慢しているかのような形に口をもにゆもにゆさせて更衣室に入っていた。カーテンのそばに立っていると、ツルギの脱衣する衣擦れの音が聞こえる。周りの視線があるので表情に出さないようにしつつ待っていると、程なくカーテンがおずおずと開いた。

と言っても、ツルギが首だけ出したただけだ。むき出しの肩がチラリと見えているのがすでにセクシーだった。

「あつ、あの、この水着、やっぱり恥ずかしくて……」

「大丈夫だって。普通に売られている水着なんだし」

「そう……でしょうか？ 色は黒で落ち着くからいいのですが、やっぱり、は、肌を出しすぎというか、私としては全身ピッタリと覆う感じのものの方が……」

それではせっかくのツルギのエロい体を楽しめないのです、ツルギなら大丈夫、絶対似合ってるから見せてみてとゴリ押しした。笑ったりしないことを何度も念押しし、ついにカーテンが開かれる。

「おお……」

思わずため息が漏れた。二丁ショットガンを振り回して不良を追い詰める姿からは想像もできない線の細さで、しかし胸だけはたわわに実っている。ホルターネックの布が重そうに胸に食い込んで柔らかさを強調し、首紐が鎖骨の真ん中あたりでクロスするようになっている構造により巨乳が持ち上げられ、さらには寄せられて零れそうなほど存在を主張している。

下半身も、普段はロングスカートの奥にしまわれているツルギの白くてすらりと長い脚が美しい。更衣室ということで今は素足まで見えている。思ったとおり、ツルギの腰骨にかかる紐と、より上の方、腰

のくびれに引つかかるような二本目の紐が食い込んで、わずかばかりの肉感を主張していた。

「や、や、や、やっぱりこんなのは私には」

「すっごく似合うよ。思わず見とれちゃった」

「かひゅっ」

びつつくん！ とツルギが上を向いて固まってしまった。恐らく恥ずかしさが許容を超えてしまったのだろう。いつものリアクションだが、水着を着ているとぜんぜん違う。

体全体を痙攣させたせいで胸がぷるると揺れ、いつもなら見えないう脚は内股になっていて股間にできた三角の空間が目を楽しませてくれる。

私はツルギのむき出しの肩に触れ、そつと撫でた。

「落ち着いて、ツルギ」

「はひっ、はひゅっ」

びくんびくんと痙攣するたびに揺れる胸を視界に収めつつ、ホルターネックで大胆に露出した背中を優しく撫で擦る。

「大丈夫、とっても似合ってるし、綺麗だよ、ツルギ」

最近コタマにセックス中に囁きまくっているので、愛撫をするように囁くという感覚がわかってきた。その技術を生かしてツルギの耳もとで囁く。

「はひゅんっ♥」

反射的に首をすくめて、ツルギが耳を抑えて後ずさる。乙女の目をしてプルプル震えている姿は、普段の姿が想像できない正統な美人と違った趣だった。

「やややっぱり着替えてきますっ!!」

さすがの身のこなしで更衣室に逆戻りし、またゴソゴソするツルギ。私は売り場を見渡して、今度は白くて胸元にたつぷりのフリルがついた水着を手にとった。

「せ、先生、やっぱり私、こんな格好で外を歩くのは……えっ?」

「ほらツルギ、次はこれを着てみてよ」

「ひ、ひぎっ、ギャギャぎや……」

またバグリ始めたツルギを慣れた調子でなだめ、褒めそやし、水着の試着に行かせる。ファッションショーはまだこれからだった。

数時間後。

「それで良かったの？ あんなに恥ずかしくていたのに」

「だ、大丈夫……です。先生が、選んでくれたものだから……」

紙袋を大事そうに抱きかかえて、ツルギと炎天下を歩いていった。結局ツルギは私が最初に選んだ水着を買ってくれていた。セクシーだし似合っていると思っていたので私としても嬉しい限りだ。

頬を緩めていると、ツルギはどこか浮かない様子だった。

「どうしたの？」

「あ、いえ……せっかく選んで頂いたのに、やっぱり着る勇気がなくて海に行けないんじゃないかって思ったら……」

私は、電話をして2、3連絡をしたあと、ツルギの手を取る。

「……じゃあ、勇気の出るおまじないをしてみようか」

「えっ？」

ニツコリとツルギに微笑みかけ、私はシャーレまでツルギの手を引いて帰った。

執務室はエアコンが効いているが、傾き始めた日が入っているせいで少し暑い。

入った途端、ツルギは訝しげに目をすがめた。正面には、いつもセックスに使っている体育用みたいなマットが敷かれていたからだ。ツルギに先に入らせた私は、執務室をロックした。

私はツルギに後ろから抱き着く。

「ひひひひっ!? セんっ、先生、な、何を」

「勇気の出るおまじない、だよ」

「わ、わわわわ私にはそういうのはっ！ まだ早くっ！」

外を歩いてきて汗をかいているツルギの蒸れた臭いがする首筋に顔を近づけつつ、制服の裾からはみ出ているツルギの羽に指を這わせた。

「んんっふうっ♥」

腰を反らせてツルギが悶える。やはり羽は性感帯のようだ。ヒナも最近、羽を愛撫するだけでイけるようになった。

「だ、だめ、先生、だめです……」

プルプルと、子うさぎのように震えるツルギ。私も、嫌がっている生徒を無理やりというのは趣味ではない。

嫌がらないようにするだけだ。

「じゃあ、ツルギが良いと言ったことだけすることにするよ。……手を握ってもいい?」

「ひえっ? は、……はひい……」

混乱冷めやらないところをまだ押す。私はツルギの許しを得て手を握った。暴れまわっている割には繊細な指にツタのようにいやらしく指を絡め、手の甲を優しくさする。

「あひゅっ♥ はう、あう……」

明らかな愛撫を男から受けて、ツルギが気絶寸前の興奮に白目をむいている。

「ツルギ、胸を揉ませてよ」

耳元で、脳みそを愛撫するかのように囁く。ぽーっとしながらも、ツルギは首を横に振った。

「だ、だめ……だめえ……」

だが、その抵抗は弱々しい。本気を出せば何人も人間を同時にちぎっては投げできるツルギは、男の毒牙に自らの首を差し出そうとしていた。

「じゃあ、お腹なら触らせてくれる?」

「お、お腹? お腹、なら……いい、いいです……」

手を握ってツルギをマットに導いて一緒に座らせてから、ツルギの制服の裾に手を入れる。

「えええっ!」

「お腹を触らせてくれるんでしょ? 約束を破っちゃうの?」

「あう、あうあうあ……」

恥ずかしすぎて顔が乙女のままになっている。どこに出しても大

丈夫な美少女がそこに居た。私は水着のときに見たツルギのほっそりしたお腹を撫でさせる。腹の肉越しに子宮を愛撫するつもりで、ねっとり揉み、撫でほぐす。

「じゃあ、次は……ツルギにキスしたい」

「だっ、だだだだだだだだだ、だめです……！　だめですから……！」

そう言いながら、ぺたんと女の子座りのまま離れようとはしない。正義実現委員会の委員長たるツルギが色欲の悪徳に絡め取られていく様子を愉しみつつ、更に言い募る。

「なら太ももを撫でさせてよ」

「むむむ、むり、むりむりです……！」

「じゃあ背中を撫でさせて。これくらいは良いでしょ？」

「うっ……は……はい」

汗でじつとりと蒸れたツルギの服の下を、私の手が這い回る。下着のシャツを裾から引つ張り出しながら腰の後ろの素肌を撫で、スルスルと上に登っていく。ぴくん、ぴくんと顔を赤らめながら、ほとんど抱きしめるような体勢を受け入れてしまっているツルギを横目に、さり気ない風を装ってツルギのブラのホックを外した。

「!!」

ばっ、と胸を抑えるツルギ。普段めつたに見ない女の子然とした仕草に、チンコのイライラが俄然高まってきた。抱き寄せたツルギの太ももに勃起を押し当てながらブラの外れた背中を撫で回す。

「あっ、あっあっ、あのっ！　せんっ、せんせんせんせんせ、あたっ、あたっ……」

「何があたってるの？」

「~~~~~!!」

顔を真っ赤にして声にならない声を上げるツルギ。

「だ、だ、だめです、先生、これ以上は……」

ツルギは震える手を私の胸に当て、精一杯の拒絶を示した。もちろんそんなことで逃したりはしない。

「ツルギ。君に必要なのは、勇気だよ」

「ゆ、勇気……」

「水着を着て友達と遊びに行きたいんだろう？」

「お、おとも、だち……遊びに……」

グラグラとツルギの心が揺れているのがわかる。

「大胆なことをして練習して、度胸をつけてみようよ。私もツルギが友達を作るの、協力するよ」

ろくでもない言葉をかけ、花も恥じらう乙女に自ら処女を差し出すよう誘惑する。

「あ、う……」

ぎゅつと目をつむったツルギは、観念したかのように頷いた。

「服、脱がせていい？」

耳まで真っ赤にしながら、ヘッドバンギングのようにガクガク頷くツルギ。私は遠慮なくセーラー服の前のファスナーを下ろし前を開いた。

ほとんど引つかかっているだけだったツルギのブラがシャツの下でずり落ちそうになっている。ペロンとめくると、つい数時間前に水着に包まれているところを見た胸が完全に露わになった。巨乳の割には小さく上品な乳輪と乳首をしている。ブラはベージュ色の地味なものだ。かなりの巨乳なのでデザインを選べない、なんて話を聞いたことはあったが、彼女もそんな悩みを抱えているのだろうか。

「き、きえええええ……」

耐えられないというふうにはツルギが両手で自分の顔を覆う。私はその隙にスカートのホックも外した。

「ほら、腰浮かせて」

ツルギに自発的に協力させつつ、スカートを脱がすついでにショーツも一気に取り去る。下半身はもう靴と靴下だけだ。上半身も乱れた衣服がまとわりついていてただけで胸は完全に露わになっている。あとは美味しく頂かれるのを待つばかりとなった乙女を前に、私はゆつくりと覆いかぶさった。

「おっぱいを吸うよ」

マットに押し倒されて、ほとんど裸になったツルギの耳元で囁く。ツルギはプルプル震えているばかりだ。



「……っ！」

ふうーっ、と乳首に息を吹きかけると、それだけでツルギが震える。「ねえツルギ。ツルギが許してくれなかったら私が吸えないよ？」

「あつ、は、はひっ……す、すすす……すつて、くだ、さい……」

ぎゅう、と手を顔に更に強く押し付けるツルギを前に、天井に向かってツンと形を保ったツルギのおっぱいの先端、お上品な未勃起の乳首にキスする。

「きゃうっ♥」

びくん、と震え、背中をのけぞらせるツルギ。なるべく優しく、唇を使って乳輪をくすぐりつつも舌で乳首を転がす。

「あっ♥」

小さいが鋭い呼気とともに、たしかにツルギが快楽の声を漏らした。そのまま口でコロコロと転がしながら、もう片方の手も乳首を愛撫し、胸全体をもみほぐす。

「あ、っ、あ、ああー……っ♥」

野生の獣の唸り声のような、低い喘ぎ声がツルギの細い喉元から奏でられる。口の中に感じる乳首の感触が、だんだん大きく固くなり、口を離すと一回り大きく勃起していた。

「ツルギも気持ちよくなってくれてるんだね」

「ひいいい……き、聞かないでええええ……」

さつきから、すえた臭いがかすかに漂っている。ツルギが感じ始めた事による性臭だ。

「ツルギ、次はオマンコ舐めさせて」

モジモジと股間を隠すように閉じられた太ももを見つつ、少し曲げられた脚の頂点たる膝頭に手をおいてツルギにお願いした。

「ひぐっ、ふぐっ……」

「ね、お願い、ツルギ」

膝においた手に、ほんの少しだけ力を込める。どんな不良だって、いや巨大人型ロボだって蹴り飛ばすようなツルギの脚が、脆弱な私の力で少しずつ開いていく。

「な、なななな、なめ、なめてくらさいい……」

声はもう半泣きに近く、脚も震えていた。ツルギの股間はつるりと綺麗で、陰毛はクリトリスの周りにちよこんと可愛らしく生えているのみだった。ほんの少し剃り残しがあるところを見ると、ちやんと日々お手入れを欠かしていないようだ。

陰唇自体もピッタリと閉じて清楚な佇まいを保っている。可愛らしくちよこんと顔を出したクリトリスが目を引きいた。

「ツルギのマンコ、とても綺麗だよ」

「きえええええええ……」

もはやなんと応えて良いのかわからないのだろう、ツルギが小さく悲鳴を上げる。私としても困らせるのは本意ではない。早速ツルギのマンコにむしやぶりついた。

「あゝっ♥ ああああっ♥」

乳首をいじったときよりも顕著に、ツルギが胸を浮かせるほど背をのけぞらせる。脚がじだじだと蠢き、私の顔を太ももで軽く挟んだ。

ピリピリと舌にしぶれるツルギのマン汁を舐め啜りながら、膣口を指で刺激する。まだまだ固いそこは、指一本の侵入さえ拒んでいる。周りの肉を愛撫しながら、多少強引に舌をねじ込んでやった。

「あっ♥ きひいいい♥ せ、先生の、した、舌がっ♥ 私、私イイイイ！」

ついにツルギの顔から手が離れた。私を押し止めるように頭を押さえつけてくるが、力が全くこもっていない。

じゆるじゆるっ！ と音を立ててツルギのマンコを吸い、今度はクリトリスに舌をつける。

「そ、そこっ♥ そこだめっ♥」

私は全く動いていないが、ツルギが快感により身じろぎするたびにクリトリスが擦れ、それがさらなる快感をよんで腰が動いてしまい、自分で自分を追い詰めていく。お好み焼きに振りかけられた鰹節のようにどうしようもない運命に翻弄されてクリ絶頂へと上り詰めて行った。

「はうっ♥ おっ♥ ん、おおおうううう……♥」

発情した獣のような遠吠えとも思えるイキ声とともにツルギが絶

頂する。先程まで私の頭を抑えていた手は力尽きたようにマットに落ち、顔を挟んでいた太ももはだらしなく開かれて、ヒクつくマンコを蛍光灯の照明に晒している。

喘ぎ声と違って顔は美少女然としている。程よく力が抜けているのが良いのだろう。

「ツルギ、……処女をちょうだい」

膣口に亀頭を押し当てながら、ツルギにお伺いを立てた。

「はい……わたし、の、処女……もらって、ください……♥」

こうして、不義を許さぬ正義実現委員会の委員長は快樂により不貞を受け入れた。さっそく美味しくいただけこうと覆いかぶさった私を、ツルギが手で押しつける。

「だ、だめ……」

「どうしたの、ツルギ？」

ツルギの手に込められた力は今までの比ではない。金属の像かと思うほど全く動かないので、本気で嫌なのだろう。

「わ、私の変な顔を見て、もし先生がその気じゃなくなったらって思うと……怖くて……」

じわ、と目尻に涙を浮かべたツルギは、ずっと美少女モードだ。だからそんな心配はないと思うが……本人にとっては重大なことなのだろう。だがもちろんツルギとのセックスは諦めない。

「そうか。じゃあツルギ、お尻を向けて四つん這いになって」

「ケヒョッ!？」

驚きのあまりいつもの物凄い顔になったツルギのクリトリスをつまんで美少女顔に戻しつつ、クリトリスを引っ張ってツルギに行動を促した。

恥ずかしそうにチラチラとこちらを振り返りながら、ツルギが尻を突き出した四つん這いになる。こっちを振り返る度にお尻がプリプリと揺れて余計にいやらしい事には、多分気づいていないだろう。

その見事な桃尻を撫でつつ、クイツと陰唇を広げた。

「これなら顔が見えないから平気だよ。じゃあいくよ」

「ひぎやっ、先生、ちよ、まつ……あうー!」

先程散々弄った膣口はほぐれており、指一本がきつかったのが嘘のように伸縮して亀頭を飲み込んでいく。とは言っても処女膣はきつく、全体的にざらついていてかなり気持ちいい。

途中、ごく軽く肉を破る感触とともにツルギの処女は散らされた。ツルギにリアクションは特になく、艶めかしい背中を反らせてじつとしているばかりだ。そのままズルズルとチンポをネジ込み、奥まで到達させてからツルギの耳元に顔を寄せた。

「分かる？ ツルギの処女、私が貰ったよ。一生の記念だね」

耳にキスするように唇をつけながら囁くと、ツルギはコクコクと頷いた。

「はい……ありが、と……ありがとう、ございます……先生に、処女を奪って頂いたこと……一生忘れません……」

涙声で、感極まったようにそう応えた。言ったのがツルギ以外だったら恨み言のようにも聞こえるかもしれないが、この声は本当に感謝している声だと判断して、そのまま腰を使い始める。

生徒の顔が見えるので私も正常位や対面座位が多かったが、バックもなかなかの良いものだった。

スラリと手足の長いツルギが、私に犯されるために尻を突き出し、白くなめらかな背中が突きこむごとに艶かしく身を振る。それを見下ろしながらゆったりとツルギの気持ちいい所を探るように腰を振っていると、ツルギも早々に慣れ始めて愛液を溢れさせ始め、腰もスムーズに前後するようになる。

膣の中程の腹がわにあるGスポットを探り当てた私は、亀頭でそのコリつとした感触を愉しみつつそこを執拗に刺激した。

「おおっ、おおおおううううう ♡ ふっ ♡ んおおおおうううう…… ♡」

びく、びくと膣全体を絶頂寸前と言った感じで痙攣させながら、ツルギが獣のようになく。

「ほらっ、イクよ！ ツルギ、生で膣内に射精するよ！ 集中して！」  
「えっ、せ、先生、そんな、おっ ♡ つほ ♡ だ、だめ、いぎっ ♡ むりっ、我慢できなっ ♡」

ぴしやん、とツルギの尻を馬にムチをくれるような手付きで叩き、スパートをかける。Gスポットを刺激しつつ、長いストロークで膣全部をグネグネと形を変えるほど蹂躪し、乙女の花園だった場所を射精のための穴として使い倒す。

「射精するよ！ 受け入れて、ツルギ！」

「はいっ♥ はいっ♥ 受け入れますっ♥ しやせえ♥」

羞恥と快楽で頭がいっぱいになってしまったツルギは私が言ったとおり復唱して承諾した膣内射精を受け止めた。

「ん、おっ、ほおおおおおおおんっ♥」

大きな声をあげて、ツルギが人生初の膣内射精、人生初のセックスでの絶頂をその身で体験する。処女膣が絞り上げてくれるに任せてドバドバと子宮に精液を注ぎ込む。度胸をつけるためという名目で処女を捨て、初セックスで激しく絶頂した愛しの生徒の尻を優しく撫でた。

「よし、そろそろいいかな。……コタマ！ ツルギの顔を撮ってあげて」

そこで私は、予め待っておいでもらったコタマを呼んだ。

「はい。……今回は先生の言葉が多くてとっってもいい動画になりました。私のおきもああい言葉責めして欲しいです」

ぐったりと額をマットにつけていたツルギが、幽鬼のようにふらりと顔を向ける。

「は？ へ？ せん、せい？」

あんぐりと口を開けた美少女が振り返った。

「彼女はコタマ。ミレニアムの3年生だよ。ツルギと同じ、私のセフレだ」

「えっ」

白目になりかけているツルギのアナルに指を突っ込む。

「あっ！ だめ、そこ、汚い所ですからあ♥」

ぬぶぬぶと入り口を出入りしながら、私は説明を続けた。

「コタマにはずつと、ツルギを撮影してもらってたんだよ。見せてあ

げて、コタマ」

さつとハンディカメラの液晶でついさつきまで撮影していたシーンを見せてくれるコタマ。

そこには、悩ましげに眉を寄せて後ろから犯される美少女の姿があった。

「これ、が……私……変な顔してない……」

「そうだよ。ツルギは恥ずかしい時は顔の力が抜けるみたいだからね。セックスすれば余計な力が抜けて、友達もできるようになるよ」ツルギのアナルをいじりながら笑いかける。コタマも目を丸くしていた。

「トリニティの正義実現委員会の委員長は凶相は聞いていましたが……こんな風に解決してしまうなんて。さすがは先生です。……お礼、期待してますからね？」

セックスを見せつけられた形のコタマには、後日たつぷりと『お礼』をする必要があるが、むしろ望むところだ。

「わ、私……本当に、お友達、できるんでしょうか……？」

セーラー服の上をはだけて、下半身は素っ裸に靴と靴下だけで、バックで犯されながらアナルに指を突っ込まれつつ、ツルギは感極まったようにくしやりと微笑んだ。

子宮に避妊していない精液が今まさに流れ込んでいても、その顔は深窓の令嬢のように楚々とした美しさを保っているのだった。

「は、はじつ、はじめまつ、き、きええええええつ!!!」

後日、セフレだけを集めた小テストで完全なるデビュー失敗をやらかすツルギだったが、

パンパンパンパンパン!!

「はじめまして、皆様……剣先ツルギと申します……先生のセフレとして、仲良くしてください……♥」

物陰に連れ込んで長いスカートを捲くりあげ、無言でレイプするのとでなんとか最悪の事態を免れたのだった。

可愛いは正義、エロいは大正義（マシロ・ツルギ）

「うん、やっぱり似合うなあ」

水着のマシロを前に、私はニッコリと微笑む。

マシロのトレーニングに軽く……私にとっては致命的なほどに……付き合ってから、レジャーシートで二人して座って休憩していた。

ここは、人気のない砂浜だ。少し離れると防風林というのかすぐに木々が生えていて、向こうにあるはずの道路は時折車の通る音でしか確認できない。浜自体にもちよつと砂利っぽい大きめの石も混じっていて近くには岩場もあり、あまり観光向けではないが……マシロの目的はトレーニングなので好んでここを使っている。

「そ、そうですか？ 実際に着てみても、やっぱり私にはちよつと可愛すぎるかなと思っただけですが」

そう言っただけで、自分の着こなしを見ようとするマシロ。夏の強い陽射しが健康的なマシロの身体を鮮やかに照らし出し、狙撃手として鍛えられたしなやかな脚が美しい曲線を描く。

黒一色でいつもの制服と色は共通だが、フリルに飾られた上下はいつもよりも可愛らしさを強調している。太ももの付け根やうすらと割れている腹筋なども惜しげもなく太陽のもとに晒されているが、それは制服のときも同じだったなと思ひ直した。

「水着もだけど、パーカーとリボンも似合うよ。それは自分で選んだんだよね？」

そう指摘すると、マシロは頭のリボンカチューシャをくしくしと弄りながらはにかんだ。

「はい。せっかく先生に可愛い水着を選んで貰ったので、他もそれなりのものを、と思つて。気づいていただけで嬉しいですよ」

そうやって微笑む頬の赤らみは、日差しの暑さだけではないような気がした。

海からの風は潮の匂いがして、涼しげに二人の間を吹き抜けていく。

「はあ……いい風。先生もほら、アイスでも食べましょう」

制服のときでもパンツが見えそうな体勢でしどけなく横座りをするマシロ。レジャーシートに座りつつビーチサンダルを脱がない横着のために、寝そべるように身体を伸ばしてクーラーボックスからアイスを取り出そうとする。

ボックスの下の方に入っているのか、片肘をつけて腰をひねって奥を探る。自然と四つん這いのような体勢になり、お尻が私の方に突き出される。可愛らしいフリルの下に隠された、普通のショーツよりカットのキツめなボトムがマシロの大事な部分だけを隠し、白いお尻の大部分をむき出しにしている。

私は今非常に困っていた。

(めちやくちやチンコがイライラする)

谷間になった尻の中央の作る、わずかに布の浮いた部分が目を引きつけてならない。それ以前に股間の部分はそれなりに厚みがあるとはいえ陰唇の盛り上がりを実に感じさせ、膣口に一番近い幅の狭まった部分の布の横から見える肌はわずかに色が濃くなっていて、脚を広げたらはみ出てしまいそうなくらいだ。

マシロの気持ちいい穴を使いたい衝動がムクムクと入道雲のように湧いて来てしまう。

「はい、どうぞ、先生」

「ありがとう、マシロ」

どうにかテントを作らないよう煩惱を制御しながら、マシロのくれたアイスを食べる。

「じゅ……ちゅるっ、れえお……」

マシロは目を細めてアイスキャンディーを舐め始めた。溶けた汁を啜りつつなので、小さく音を立てながらピンク色の小さな舌をぬらぬらとアイスに這わせてネットリと味わい尽くそうとしている。

わざとやっているのかと思うほどにいやらしい舌使いだ。チンコを眼前に突きつけてイラマチオさせたくなった。

「マシロ、体調はもう大丈夫？」

んっ？ とマシロが目を点にして、何の事を言っているのか一瞬考



え、柔らかく微笑んだ。

「ふふ、もう大丈夫ですよ。先生のおっしやる通りに、全力で休みましたから。砂浜の待機訓練もバッチリです」

「ええ？　また砂浜で何時間も待機する訓練してるの？　体調が良くてもそれは絶対健康に良くないよ……」

難色を示すと、マシロは苦笑した。

「まあ、それはそうでしょうけど。スナイパーってそういうものですよ……」

ティン、ときた。モモトークで連絡を取る。すぐにこれから向かうと返事があった。

「……せめて、メンタルのケアを手伝わせてほしいな」

「メンタルの……ケア？　カウンセラーみたいな感じですか？　それなら私は別に……というか、その……い、今のこの時間さえあれば……」

俯いてアイスクャンディーを啜るマシロ。猫背になったことでお腹の肉が動き、上半身の影がかすかな腹筋の凹凸を描き出している。

最後の方は小声で、当然全部聞き取れていた。可愛い。チンコのイライラは最高潮だ。

「いや、マッサージだよ」

「マッサージ？　なのにメンタルなのですか？」

「このマッサージはとても気持ちが悪くスツキリするからね」

早くマシロの素肌に触れなければ暴発してしまいそうだ。

「で、でも……マッサージということは、その、身体に触れるわけ……そういうのは、正義に反するのではないかと……」

腕でお腹を隠し、ピツタリと太ももを閉じて身を振るマシロ。くいとボトムフリルを引っ張って、ほんの少しでも肌を隠そうとするのがいじらしい。

「そんなことないよ。むしろマシロのストレスを放置することのほうが私の正義に反するよ」

「先生……」

顔をあげたマシロの目は、少し潤んでいる。この顔をこれからセツクスで潤ませるかと思うとすぐにでもテントを張ってしまいたい。そうだった。

「それに、日焼け止めもちゃんと塗っておかないとね。持ってきているからついでにやってあげるよ」

「はい……わかりました。お願いします」

「じゃあ、うつ伏せに寝そべって」

砂がいくらか残るレジャーシートに、マシロが寝そべった。滑らかな背中と、ぷりんと弾力のありそうな尻を目に焼き付けつつ、白いクリームをチューブからひり出していく。

まずは日焼け止めクリームを塗るところからだ。ペトリと背中に手を当て、塗り拡げる。可愛い大きいサイズの翼の付け根を避けつつ、あつという間に薄いクリームは塗り伸ばされ、白濁はほとんど透明になった。

次はそのまま手を滑らせて脇腹に塗る。

「ひひやつ、せ、せんせ、そこはくすぐりたいですから……！」

膝から下だけパタパタさせるマシロ。肋骨の感触を指先に感じながら、指を更に下に潜らせて、ほとんど臍にまで触る勢いで塗っている。

「そこつ、あははっ！ だめ、せんせ、そこは自分で塗れますからっ」

びく、びくと敏感な腹を撫でられてマシロがくすぐったさに笑い転げる。どうやら感度はなかなか高そうだ。

混乱して居るうちに次に行くことにする。

「サンダル脱がすよ」

マシロの綺麗な足をじつと見る。爪はよく見るとピンクのマニキュアが塗られており、ツヤツヤと照り光っていた。足を取って膝を曲げさせ、足の甲の部分にヌルヌルと塗りたくっていく。足の側面、足首、ふくらはぎとどんどん上がっていく。

「んっ……♡」

マシロが艶めかしい声を上げる。日頃生徒たちに愛撫してきた経験を総動員し、マシロの性感を引き出す。

そう、もちろんこれは性感マッサージだ。マシロの大事な部分を沢山気持ちよくするためのマッサージである。

ふくらはぎから膝裏に上がっていく。片足ずつ、抱えるようにして浮かせて指先を掠らせるように撫でてくすぐったさともまた違う快感を与えていく。

「あつ……♥」

次は太もも、という所で、マシロが身体をよじって振り返った。

「あつ、あの、そこから上は、自分で塗れますから……」

顔を赤くしてそう言うマシロは、どこか後ろめたそうだ。正義に反して男の手で快楽を得てしまったからかもしれない。

「大丈夫、マッサージを兼ねているからちゃんとして私がやるよ」

そう言つて、マシロの引き締まった太ももに指を這わせる。

「っ……♥」

びく、びくと内ももに指を這わせる度にマシロの身体が痙攣する。どうやら口に手を当てて声が漏れないようにしているらしい。可愛らしい反応に私のマッサージにも熱が入る。

ほとんど太ももの付け根、尻との境まで登ってきた。このあたりの内腿の性感帯をじっくりと愛撫する。

「あつ、ちよ、だめ♥ 先生、それも、だめっ♥」

「大丈夫、私に身体を任せて、素直に気持ちよくなつて」

びくん、びくんと腰が浮く位に感じ始めたマシロの脚に乗るように拘束し、マッサージを続ける。ジリジリと肌を焼く日差しを背中に感じながら、遠くに聞こえる観光客の声を聞く。

このあたりは売店がないので全く人気がない。早朝にランニングをする人がいる程度だ。あるいはマシロのようにトレーニング目的で走るか。

なので、ここでセックスしても誰にも見られることはないだろう。

「先生っ♥ い、いったん、一旦休憩をっ♥」

そう訴えて来るが、もう腰に力が入らないのか力なく匍匐前進のマネごとをするだけだ。知らずのうちに開かれた脚の間から見える水着の股間は、黒くて見づらいがシミができています。そろそろだと判断

し、尻に手を滑らせる。

「マシロ、これは性感マッサージと言って気持ちよくなるためのマッサージなんだよ。だからちゃんと気持ちよくなるのが正しいことなんだ」

「ちや、ちゃんと……気持ちよく、つて……」

「マシロが気持ちよくなってくれることは分かっているから」

「……………!!」

目を見開いて真っ赤になるマシロ。正義に反すると怒ることすら忘れて、またうつ伏せに戻ってしまう。それを良いことに、尻肉を大胆に揉みほぐしていく。円を描くように揉むと左右に開いたときに、食い込んだ水着の脇から肛門のシワが見え隠れする。

水着の下に指を潜らせて、ヌルヌルのクリームを塗りつける。肛門のシワにギリギリ触れないあたりを指のフェザータッチで何度も往復し、性感を引き出し続ける。

「あっ♥ そこっ♥ お、お尻のっ♥ 汚いですから♥」

さつきより大分素直に色っぽい声でマシロが止めようとする。

「マシロの身体は全部綺麗だから大丈夫だよ。それより、これは気持ちいいの？ 素直に言ってみて」

ぐい、と尻たぶを左右に広げ、ほとんど中央しか隠れていない肛門を露出させて、シワを伸ばすように指で愛撫する。

「きっ、気持ちいいですっ♥ 気持ちいいですから、いちいち聴かないでくださいっ♥」

何も見たくないとはかりにレジャーシートに突っ伏したマシロ。つまり触りたい放題ということだ。

より大胆に、水着のボトムの下に手を潜り込ませて尻全体をもみほぐす。ほとんど肛門には親指を起き、指の腹を押し当てて括約筋を少しずつ伸縮させる。

ぐいっと水着を引っ張り、更に中央に食い込ませてマンコもほとんど露わにした。

際どいカットの水着を着るだけあり、マシロは毛の一本もないツルリとした股間だ。というより、15歳という年齢的にまだ生え揃う前

なのかもしれない。

マシロのマンコはクリームを塗る前から愛液でテカテカと塗れ光っている。雪見だいふくのようにぷにぷにの外陰唇を広げると、鮮やかなピンクの粘膜が顔をのぞかせた。

中央の膣口だけは水着でかろうじて見えないものの、ほとんど丸見えだ。その感触は当然マシロも分かっているのか、

「~~~~~!」

声にならない、喉が締まったような細かい悲鳴をあげて耳まで真っ赤にしていた。

「マシロのここ、とっても綺麗だね。ここも触るから、下を脱がすよ」がぼっ、と流石にマシロが身体を起こし、腰をひねって驚愕の表情でこちらを見る。それに構わずさっさと指をかけて引き下ろそうとして、反射的にマシロが私の手首を掴んできた。

「え、え、えっと、その……」

あまりの展開に頭が追いつかないのだろう、言葉が出ないマシロ。その隙に私は肛門に人差し指を挿入した。日焼け止めクリームのぬめりと、さんざん愛撫してぷっくりと盛り上がりシワのなくなった肛門の柔軟性により、第一関節まですんなり入る。

「うひっ!?!」

マシロは反射的にきゅっ、と肛門を締めてくる。更に追い打ちとして、水着の上からクリトリスをゴシゴシと圧迫してやる。厚めの布なのでこれくらいで丁度いいかと思った力加減だが、

「あうっ♥ はぐっ♥ ああああっ♥」

がくん、がくん、と全身を痙攣させるマシロ。マッサージで高まった性感が爆発してしまったようだ。手の力が緩まったので、水着は脱がす。

痙攣する脚をすると下り、水着は無事脱がされた。丁度いいで横向きに寝そべっていたマシロを仰向けにする。ぱっかりと脚を広げさせ、真夏の日差しのもとにマシロの性器が晒しだされた。

思ったとおり、恥丘の頂上あたりに申し訳程度に茂みがあるくらいの薄い陰毛に、普段はピツタリとスジ状に閉じているのだろう陰唇

が、今は開脚によって少し中身を覗かせている。

「あつ、だ、だめ、先生……こんなところで、初めては……」

「大丈夫、マシロが嫌がることはしないよ」

何を言っているのか、という泣き顔寸前の困り顔でマシロが見つめてくるが、嫌がらなくなるまで身体を説得するので嫌がることはしない。ここまででも、太ももの時点でやめさせることはできたのにされるがままになったのはマシロの判断でもある。マシロと出会った頃は、触つてと言われたのに首筋を触ったら怒られたのだ。それを思えば随分心を開いてくれたものだ感慨深くなった。

バキバキに股間にテントを張りつつ、マシロの股間に口づける。

「先生、そんな所、汚いですから……！ ひいあつ♥」

くぱつ、と性器を開き、舌を平べったく使つて全体を舐める。マシロの手は私を引き剥がすことなく、ただ頭に置かれただけになっている。

マシロは処女なので、最初から激しくはせずゆっくりと舌を動かした。ほんの少し舌の位置がずれるたび、

「んっ♥」

マシロの口からあえぎ声が漏れる。私はほとんど動くことなく、マシロの暑さと興奮で荒くなった息遣いが身体の動きをもたらし、マシロは独りでに気持ちよくなっていく。

「はあ……ああつ……♥」

しばらくそうしているとマシロも慣れてきたのか、私の頭を掴んでいる手に力を込めて、気持ちよくなれる所に押し付けている。

正しい事を何より重んずる少女にイラマンニをさせられながら、トロトロと愛液を垂れ流す膣口に小指を挿入する。若い膣はそれだけでもキツキツで、ここにチンコを突っ込んだらどれほど気持ちいいか想像するだけでテントの頂上が我慢汁でヌルヌルになる。

「あ、い、いく……♥」

小声でそう言うと、マシロの腰がゆらゆらと揺れ始めた。私もクリトリスをチュウチュウ吸い上げて絶頂を促してやる。

「あ……いっ♥ あ、はあ……♥」

マシロはびくん、と大きく一度痙攣して、ぐったりと全身を弛緩させた。まぶしげに目元を前腕で隠し、青空の下、潮風が吹き抜ける砂浜でぽっかりと股を開いたまま余韻に浸っている。

私はマシロに添い寝するように寝そべり、腕を回してマシロを抱き寄せた。

「ん……♥」

お互いの汗の匂いすら興奮を煽る香水のようだった。マシロは呆然と私の胸に顔を寄せ、下半身が裸であることを忘れたかのように抱きついてくる。

当然のように、バキバキになったチンポがマシロのほっそりしたお腹にあたった。

「ふう……あの、先生……」

クンニ絶頂の余韻から帰ってきたのか理性が幾分戻った顔で、マシロが睨んでくる。

「やっぱりこれ、いやらしい事……ですよね」

ガツと手に力が入る。万力のように私の腕を捉えて離さない。

「でもストレスは解消できたでしょ？」

「ぐ……ぐまかさないてください。先生と生徒の関係でこんなことをするのはいけないことです。正義に反します！」

私の詭弁に少し怯むが、マシロは断固として糾弾する構えだ。

「マシロだってあんなに気持ちよくなってたよね？ 私の頭を押さえてまで舐めさせてたし」

「ううー……そ、それはっ！ 先生が……上手かったから、で……」

嘘について無理やりされただけだと主張することもできるだろうに、正義の心が許さなかったのかマシロは認めてしまった。

「ここまででしたんだし、最後までしちやおうよ」

そう言つて、マシロのお腹にチンポを押し付けた。

「あつ……♥ だ、だめです、そんな事……ここ、ここは野外なんですよ……!？」

そう言いながら、私の腕の中から出ようとはしない。チンポの角度を調整し更に強く抱き寄せて、マシロの股間にチンポを突き出した。

ぬるつと上面に愛液のぬめりを感じつつ、マシロの股間にできた空隙を貫いてお尻に抜ける。

「きゃあっ!？」

マシロの顔を胸に感じ、フリルに包まれた胸の膨らみも控えめに伝わってくる。驚きでまた離された両手でマシロの尻をガツチリつかみ、お互い横向きに寝そべった体勢で腰を使う。

「あんっ♥ せんせっ、おちっ……ひ、卑猥な所をこすり付けるのはやめてください!」

「私もマシロみたいに気持ちよくなってスッキリしたいんだよ。ね、お願い、マシロ」

そう言いながら、マシロの新鮮な小陰唇のプリプリした感触を味わいつつ腰を前後させる。

「だめっ、だめっ♥ こんな事駄目なんですからあ♥」

ももぞと身をよじりつつ、甘い声を上げるマシロ。日差しのせいだけではない熱々のマンコから粘ついた愛液が流れ、にちやにちやと卑猥な水音が私の耳にも届いてきた。

「マシロの身体は駄目だっって言ってないみたいだけど？」

「ううっ……意地悪を、言わないでください……♥」

ぶつくりと勃起したクリトリスが竿をくすぐっているのも、亀頭が膣を擦り上げる度に陰唇がヒクつくのものはつきりと感じ取れる。マシロの目からだんだんと理性の光が消え、快楽に身を任せるメスに変貌しつつある。

「ねえ、どうしても駄目? マシロの初めてがほしいなあ。今までよりずつと気持ちいいよっ!」

「ずつと……、い、いえ、駄目です! 百歩、譲って……ここまでは、メンタルケアとして許してあげますからあ♥ これっ、以上は……だめですう♥」

脚を交差させるように閉じて、チンポを強く挟むようにして感触を存分に味わいながらも、マシロが崩れることはなかった。水音はますます粘つき、マシロからも私に抱きついて、傍から見たらもうセックスしているようにしか見えない状況であっても、マシロの正義の心が



私の邪な企みを阻む。

「じゃあマシロ、キスさせてよ。さつきからマシロが可愛すぎて、キスしたい気持ちが押さえられないんだ」

「私が……？　べ、別に私はそんな、可愛くなんか……んっ♡」

そう言つてふと顔をあげたマシロの唇を奪う。じゆる、じゆると唾液を吸い、脱水気味の身体にごくごくと取り込んでいく。

「んむううう♡　何するんですか先生！　わ、私、ファーストキスで……ああっ♡」

抗議の声は素股の快樂で有耶無耶になる。素股に気を取られて顎が上がった所を、またキスした。マシロの熱くて小さな舌を舐り、薄い唇の柔らかさを楽しむ。

腰を激しく降ると、ばふっ、ばふっと下腹部が打ち合つて空気が押し出される音が間の抜けた響きを奏でた。しかしマシロの快樂は激しくなり、キスはいつの間にかマシロからも舌を絡める濃厚な恋人同士のソレに変化している。

「ああっ……♡　先生、私、もう、もうっ……♡」

「セックスしたいよ、マシロ。ね、お願い、入れさせて？」

「だめっ♡　だめですう♡」

頑なに挿入という最後の一線は越えようとしないマシロ。チンポは完全に愛液で包まれて、塗りたくった日焼け止めクリームも股間からは流れ落ちてしまっているくらいに愛液を垂れ流しているのに、さすがの精神力で耐え忍ぶ。

私は我慢汁を垂れ流してマシロのマンコに擦り付けながら、ひたすら射精せずマシロも絶頂させずにその時を待った。

「先生、おまたせしまし……ああっ、マシロさん！　マシロさんも先生にセックスして頂いてるんですね！」

ぎし、とマシロがぎこちなく顔を上げ、驚愕に目を見開いた。

「つつ、ツルギ先輩!?　い、い、いえ、これは、その、なんというか、ち、違うんです！」

セクシーな水着のツルギがいつの間にかすぐそこに来ていた。私

はツルギを振り返りつつ腰を振り続ける。

「ああ、ありがとうツルギ。マシロがセックスさせてくれないっていうから、ツルギのマンコ使わせてくれない？」

あんぐりと口を開いて眉を寄せ、大声を出そうとするマシロ。しかしその直前、

「はいっ！ お願いしますー！」

ツルギが満面の笑みで応えたので、そのままポカーンと大口を開けて固まってしまった。

ツルギはマシロの視線を気にして恥じらいながら、水着の下をスルッと脱ぎ捨てる。レジャーシートにぽとりと二人分のJKの水着が並んだ。そのままくるりと身を反転させ、中腰でお尻を突き出すツルギ。

その股間は既に薄っすらと湿り気を帯び、自ら両手で左右に開いた膣口がパクパクと物欲しげにヒクついている。

私はマシロをあっさりと手放し、立ち上がってツルギへと歩み寄った。

「ここに来るまでに自分で準備してくれたんだね。ツルギは偉いなあ」

するとツルギが私のバッグからいそいそとコンドームを出して装着してくれる。後ろ手に竿に手を添えて腰の高さを調節して、ガニ股気味に踏ん張った。

細いとはいえ、マシロに比べると幾分か肉感のあるツルギの尻を撫でながら、ぐりつと亀頭を押し当てる。つい最近処女を奪ったばかりのツルギの膣は、その鍛え上げた身体故かまだまだキツキツで搾精能力の高い名器だった。

「あっ……♥ 褒めて頂いて光栄ですう♥ ツルギは先生のセフレですから、いつでもご都合の良いときに呼びつけてくださいね♥」

マシロが、目を点にして私達を見上げている。その視線を横顔に感じつつ、ぶりゆ、と腰を突き出した。

「んほおおんっ♥」

「いやいや、ツルギだって正義実行委員会忙しいでしょ？ 時間の空

いてるときで構わないよ。それに、ストレスが溜まったらツルギこそいつでも私を呼んでね」

「ああんっ♥ お心遣いありがとうございますっ♥ ツルギ、もつとたくさん先生におちんぽ恵んで頂きたいですっ♥」

媚び媚びの甘い声をあげ、獣のような喘ぎ声でセックスを楽しむツルギを、マシロが凝視していた。

「えっ……誰、これ……っ？」

そのつぶやきは小さすぎて、セックスに夢中のツルギには聞こえなかったようだが気持ちはわかる。

何度も何度も躡けたおかげでツルギはセックスの最中だけでなく、セックスの事を考えて股間を濡らしている時もまともに会話が出来るようになったのだ。その口調はお淑やかなお嬢様を思わせるもので……そう、ハスミにそっくりなのだった。余人が思うよりも、委員長と副委員長の絆は強いのかもしれない。

そんなツルギを立ちバックで遠慮なく犯していると、我慢続けた精液がグツグツと煮えたぎり、すぐに射精のときが訪れる。

「ああ、出すよ、ツルギっ！」

「はいっ♥ 出してっ、先生の熱いザーメン、ツルギにくださいっ♥」

運動神経の良いツルギは中腰で尻を突き出しても尻を上下に振る動作に淀みがない。ぐりぐりゆと揉むように膣をうねらされ、根こそぎ吸い上げるような締付けと共に思い切り射精した。

「あっ、あ、あああああっ♥」

悩ましげな……悲鳴に近いイキ声をあげて、私の射精を感じたことによる絶頂に至るツルギ。その尻を指が食い込むくらい握りしめ、ベツタリと下腹部を押し付けて、ツルギの膣に精を解き放つ。焦らしただけあって充実した射精に、涼し気な潮風が吹き付けて開放感を更にプラスしてくれる。

ズルリと引き抜いたゴムには大きな精液だまりが出来、縛ってレジャーシートの上に放った。マシロの水着の股間にべたりと乗ったソレを見ることもなく、次のゴムを取り出す。

「ここまで来てくれたんだし、もう一発して行くっ？」

「はいっ♥ 先生とのセックスなら喜んで♥」

ギリツと鋭い犬歯を覗かせる満面の笑みを見てツルギの成長を感じつつ、次は愛撫もするかとゴムを装着するために目の前に膝立ちになったツルギの頭を撫でながら考えていると。

「ま、待ってください先輩！ 次は私の番ですよ！」

顔を真っ赤にしつつ、下半身裸のまま立ち尽くしていたマシロが止めに入った。

「えっ？ マシロさんはもう終わったんじゃないんですか？」

「ああ、マシロはセックスだけは嫌だっというから、素股してたんだよ。それで……いいの、マシロ？ 私に処女をくれる？」

「……先生は、私のメンタルケアを一生懸命してくださいっただけ、ですから……」

目をそらして、耳元の髪をかき上げつつマシロがそう呟く。

「そっか。すごく嬉しいよ。ありがとう、マシロ」

これから淫行をするための言い訳にもならない戯言だと、自覚があるのだろう。ニコニコとつい笑みを浮かべた私に、マシロがびつと指を突きつける。

「ツ、ツルギ先輩の様子を見て、ちゃんと効果があると思ったからですからね！ い、いやらしいことは本当は駄目なんですよ！」

「うんうん、ちゃんとストレスがすっかりなくなる位に気持ちよくしてあげるからね」

ツルギの頭を撫でてゴムをつけるのを中断させると、マシロに歩いて近づいていく。

マシロはバキバキに勃起して精液まで垂らしている私のチンポを見て怯んだように後ずさるが、期待感が上回ったのかそのまま気をつけのように直立不動になった。

私は跪いて、ぴっちり美しく閉じたマシロのマンコに口づけする。

「んっ♥」

マシロが膝とつま先を外に開き、舐めやすいようにしてくれた据え膳マンコを、鼻先までうずめて味わい尽くす。

「あ、あ、あっ♥」

マシロは晴れ渡った夏の爽やかな青空を仰ぎながら、尊敬する先輩に見守られ、再度クンニで絶頂しようとしていた。

じゆるじゆるじゆるっ！ と派手に愛液を吸いたてる音を響かせ、マシロを手早く絶頂させる。処女なので沢山イかせてリラックスした状態を作るためだ。

「んっくうううう……♥」

仰け反った首を傾げながら、マシロが目を閉じて絶頂に浸る。そこを更に舐め回す。

「えっ、先生、私もうイッて、あああっ♥」

苦悶に近い快樂責めを受け、マシロの息が更に荒くなる。そのまま二度三度と絶頂させ、膝が笑ってきた所で口を離した。

へたり込んでしまいそうなマシロを支え、レジャーシートに仰向けに寝かせる。膝を掴んで股を開いても、もう全く抵抗しなかった。

「さあ、入れるよ、マシロ」

「えっ、あの、ゴムは……」

腰を突き出すと、丹念に舐め回したマシロのほぐれきった膣が私を歓迎してくれた。ぬらぬらと突き進み、ぷっつと処女膜を突き抜ける。

「痛っ……」

マシロは少し顔をしかめたものの、リアクションはその位だった。ズブズブと竿が埋没していき、私のチンポが根本まで埋まる頃にはマシロの子宮を臍のあたりまで持ち上げていた。

「マシロのマンコ、すごく良いよ……初めてでこんなに柔らかくて深く入れられる子、なかなか居ないと思う」

「だっ、だから……そういう返答に困ることを言わないでください……！」

ずっぷりと深いところまで繋がりはしたが、マシロにはまだ照れがある。口元を拭ってマシロの愛液を落とすと、身をかがめてキスをした。

「んっ、ふ、うう……♥」

チンポは動かさずにキスを楽しんでいると、マシロがもどかしげに身をくねらす。

「もう平気そう?」

「はい……大丈夫だと思います……♥」

ゴクリ、マシロが喉を鳴らしたのを見た。快感で赤く染まった頬は少し緩んだ無表情にも見えるが、目はこれからの行為への期待でキラキラと輝いている。

腰を引くと、マシロの膣肉が愛おしげに抱きつき、入り口がひよつとこのように少しだけ引き出される。負担の少ないように深く突き刺したままで小刻みに腰を使い、マシロの感じる部分を探る。

「んっぐ……♥」

どうやら少し珍しい事に、マシロは背骨に向かって膣壁を押しやるのが好きらしい。正常位をするためにあるような性感帯にマシロらしさを感じつつ、ゆったりと腰を使いながら水着の上をペロンとめくった。

「きやつ! は、恥ずかしいです……こんな、小さいし……」

「そう? マシロの胸、綺麗で好きだよ」

15歳の割にはむしろ立派な物を持っていると言っているだろうか。均整の取れた、ロケット型の綺麗な胸だった。淡いピンクの乳首は小ぶりで、頂点の乳首も控えめな大きさをしている。ようやく拝むことが出来た胸を優しく指で弾ませながら、ジリジリと背中を焼かれつつマシロを犯す。

すると、遠くからガヤガヤと声が聞こえてきた。

「本当にこんなところに穴場なんかあるのかよ?」

「まーじだって。砂浜は砂利とかあってアレだけど、サーフィンするには十分だし!」

ぎよつと目を見開いて、マシロがキョロキョロと辺りを見回す。

「せ、先生……! 林のむこうから近づいてきます……!」

「しようがない、ちよつと移動しようか。ツルギ、水着とゴムだけ持って来て」

「はいっ」

マシロの背中に腕を入れると、よいしょと抱き起こす。正常位から座位、立ち上がって駅弁へと流れるように移行した。

「えええっ!? 何を考えてるんですかつ。こんな所を見られたら……見られたら、ああっ♥」

小走りで岩場の影へと移動する上下動で子宮を突き上げられ、マシロの文句は中断させられてしまった。

「あれっ、なんかシートあるぞ」

「まあ先客位いるっしょ。それよりどうよ? ガラガラじゃん?」

小柄で額を出した前髪とツインテールが特徴の慎ましい胸の女の子と、アシンメトリーで片目を隠した髪型のなかなか大きい胸の女の子だった。

というか、おなじみのスケバンだった。よく見ると水着の柄が同じなので、きつと同じ店で仲良く買い揃えたのだろう。サーフィンを楽しむに人気のない場所にやってきたわけだ。

「せ、先生、もう、やめときましよう? ね? あの人もこのままあそこにとどまるみたいですし、今のうちに、きやうっ♥」

おどおどと珍しく慌てふためくマシロを、駅弁スタイルで突き上げる。

「大丈夫、サーフィンに夢中だからここまでは来ないよ。それにマシロも、ちゃんとチンポでイキたいでしょ?」

岩場越しにキヤツキヤと遊ぶ二人を見て不安そうにしながら、マシロはこくりと頷いた。

「じゃあ、私にギュツとしがみついで。このまま激しくして、早めにイこうね」

アンチマテリアルライフルを担いでビルを上下するとは思えないマシロの細腕が、私の首に巻き付く。いつかのビルで目を奪われた白い生脚を私の腰に絡め、性交の準備は万端に整った。

両手でマシロの尻を下から支えるようにつかみ、腰を前後に振りたくる。あまり慣れない体位だからか、もどかしいくらいに腰の動きが拙い。

それをカバーするように、マシロが自分から動いてくれてストロ―

クの浅さを補ってくれる。キツキツでヒダをかき分ける感触が楽しい1年生膣を存分に使わせてくれて、どんどん射精感が増していくのを感じる。

「んっ、はっ、あんっ♥」

そこその距離はあるとはいえ、それでも壁で隔てているわけでもない野外だ。サーフィンをやめて休憩したら聞こえてしまうくらいの声をだして、マシロが悶える。

いつものように狙って当てられない分、お互い予期せぬタイミングで気持ちいい所に当たり、その度にマシロの膣がキュンと締まるのが気持ちいい。二回目の射精が間近に迫っていた。

「くうっ、出る、一番奥に出すよ、マシロ……!」

「ううっ、ほ、本当に中で出しちゃうんですか？ 学生で妊娠なんて、せ、正義が……でも性交は子供を作るのが正しい……？ あれ？ わ、私、どうすれば……」

「アフターピル、買うお金は上げるから……シャールレのコンビニで買っていつてね……!」

「あふたー？ それ、飲んだら、赤ちゃん出来ないん、ですね……♥ わ、わかりました、ちよっと、怖いけどおっ♥ 私のなかに、射精、してくださいっ♥」

がっしりとしがみつかれ、肩に顎を載せた状態のマシロから膣内射精の許可が出る。初潮が来て数年程度の真新しい子宮に亀頭を擦り付けながら……奥深くに射精した。

「あっ♥ あああああっ♥」

ほとんど叫んでいるような大声で、マシロが絶頂する。ギチ、ギチと音さえ聞こえそうなきつい締りが射精の快感をより高め、鼻の奥がツンとするような強い快感を覚えながらマシロにどぶどぶと生で射精した。

「はあ……はあ……♥」

絶頂したマシロは、身じろぎもせずに私にしがみついた体勢のまま私の射精をすべて絞り尽くすように膣だけ蠢かせている。最後の一滴まで絞りだすと、私はそつとマシロを地面に座らせた。



顔を真っ赤にして呆然とよだれを垂らすマシロは、夏の魔力で一皮むけた女の顔つきになっていた。

「先生……その、私にもお情けをいただけませんか……？」

マシロを見下ろして満足していた私に、横合いから声がかかる。

「おっと、ごめんねツルギ。ちゃんと気持ちよくしてあげるからね」

ゴムを着けてもらって、木綿のハンカチを敷いて岩に手をつかせ、尻を突き出させる。息を整えているマシロをよそに、早くも回復したチンポをツルギに突っ込んだ。

「ああんっ♡」

岩礁は結構高く、ちょうど日陰になっている。波音と、遠くでサーフィンで遊ぶ女の子たちの声を聞きながら、ツルギのザラザラした名器をまったりと味わった。

ゆるゆると高めあい、射精に至ってようやく後始末、という所で……肘を掴む小さな手に気づいた。

「初めてを奪った相手を放っておいて、他の女性と楽しげにするなんて……先生の態度で、その……ストレスが、溜まってしまいました」顔をそむけつつも、唇を少し突き出しながら不満げな顔をするマシロへの愛おしさで、またもフル勃起する。マシロのスペシャルメントルトレーニングは、まだ続くようだった。

「あつ、ああーっ♡ 後ろからも、すごい、気持ちいいですっ♡」

「なあ、さつきから、あっち……」

「しっ！ 気づかないふりしろ！」

「だって、女の声二人分じゃん……こんな昼間から……ちよ、ちよつと気にならね？ それになんか、この声聞いたことあるような……」

「やめとけて！ 絶対やばいから！ もっと遠くでサーフィンしよ、ほら行くぞー！」

どちらがむつつりで、どちらがイモを引いたのか、それは私の立ち位置からはわからないが……かろうじて、皆の社会生命は保たれたのだった。

たどえ火の中水の中草の(中略)セフレと乱交の中(アズサ・イズナ・イズミ)

——先生、シャーレの入出場記録はちゃんと把握してる？

——いつ、誰が出入りしたのかは重要な情報。シャーレは立派なビルだからシステム自体はあるだろうけど、不審な記録が無いか先生も常日頃からチェックを怠らないように。

——知っていれば、シャーレ内部で犯罪が起こった時も適切な判断を下せるからね。護衛をするにも重要な情報なんだ。今度行った時に確認させてもらうから

モモトークでそんなやり取りをした。

というところで、アズサがやってきた。小さな身体なのにズンズンという擬音が適切な、迫力のある歩き姿だ。当然のように机についてPCに向かっていった私の横にピッタリとくつつき、PCのモニタを覗き込む。

「じゃあ早速、記録を確認していくから」

そう言っ、手早くPCを操作して記録を呼び出した。

「なんで記録を見る方法なんて知ってるの？」

「護衛として当然の嗜みだよ。このビルの警備システムは比較的新しいけれど、さすがに新築でもないから最新って訳じゃない。私はこのシステムを防衛側からも攻撃側からも知ってるから」

「そ、そうなんだ……すごいね」

としか言いようのない、アズサの謎スキルだった。彼女が今まで何をやってきたのかは大いに気になるが、今は脇に置くとして……

(大丈夫かな?)

警備システム自体には特になにも証拠は残していないはずだが、最近になってセフレ面子ばかりが固まってシャーレに来ていることは間違いないわけで、それを怪しまれる可能性はある。

カタカタとキーボード操作で入出場記録を確認していくアズサ。

見返してみると、これが結構面白い。私がヒナやセフレとセックス

していた当日に誰がどこに居たのかが大まかに分かるようになっていた。記録を見る限り、シャーレでセックスしている所を誰かに見られたという事はなさそうだった。

「ふう……問題なし、かな。生徒は頻繁に出入りしているみたいだけど、全員先生の受け持ちだし。警報システムも全く動作していない。セルフチェックでは装置自体にも問題ないし……今の所犯罪の痕跡はないね」

「そっか。ありがとう、アズサ」

ふんすと腰に手を当ててチェックを完遂したアズサを労い、お茶に誘う。シャーレ居住区の休憩所に行つて、二人で飲み物を飲んだ。

「先生。夏は誰しもが開放的になる時期だ。だから先生も浮かれてしまつても仕方ないと思う。けど、だからこそ危険が潜んでいる。この夏は私に先生の護衛をさせて欲しい」

至極真面目な顔でそんな事を言うアズサ。それはそれで困るのだが……セフレとセックス出来なくなつてしまう。

(いや、待てよ……)

私は妙案を思いつき、早速実行に移すことにした。

「アズサ。護衛つて言うことは、私の行く先に付いてきてくれるんだよね?」

「うん、勿論。私が、先生をどんな危険からも護つてみせる」

キリッ! という感じで、アズサが私の目を見て頷いた。

「確かに、付いていくつて言った……言つたけど……」

「あんっ♥ あんっ♥ 主殿、アズサ先輩が見ているのにこんなっ♥

ああっ♥」

「先生!…これはどういうこと!」

この間アズサを連れて夕焼けを眺めた『穴場の砂浜』で、レジャーシートに胡座をかいて水着のイズナを正面から跨がらせ、腰を振らせている。水着は下も脱がさずに横にずらしてハメているので生地が擦れるが、それもまた青姦している実感を感じさせるアクセントになつていた。

「何つて、イズナとセックスしてるんだけど」

「それで、その精液を私がもらおうんだよ！」

ニコニコ顔で応えたのは、水着を着たイズミだ。真つ赤なビキニは布面積も小さく、水着の下の身体を知っている身としては乳輪がはみ出ないか心配になる位だ。花飾りの付いた麦わら帽子と、複数のブレスレットとシユシユなどアクセサリー類にも気を配っており、良家のお嬢様のような雰囲気醸し出していた。

「むう、主殿、イズナにおちんぼハメてる時に他の女の子でおちんぼ膨らませないでくださいっ！」

ゆさゆさとじやれるように上下動していた所から一転、イズナが腰を落としチンポを根本まで飲み込んでグリグリと腰をグライندوقさせる。亀頭が子宮口に擦り付けられ、強烈な快感がビリビリと背筋を這い登った。

「うおっ、ごめんごめんイズナ、キスするから許して？」

「えへへ……はあーい♥」

一瞬で相好を崩し、セックスに浸る蕩けた表情に戻ってイズナから唇を重ねてきた。

「あー！ もう！ 私を無視しないで！」

「だん！ と砂浜を強く踏む振動が伝わった。」

ちゆくちゆくと音を立ててのディープキスの最中に、今度は逆側……アズサから声がかかる。羞恥とか怒りで顔を赤くしたアズサは頬を膨らまし、少し前傾姿勢で体いっぱい不満を表現していた。

格好が可愛らしい水着なので、目を吊り上げて睨まれてもどこか微笑ましい。

「もう！ なんて笑うの！」

「いやあ、アズサは可愛いなあと思ってさ」

「先生……あんまり私をからかうと、怒るよ」

こめかみに青筋が浮き出したのを見て、私は腰をふるイズナから視線を切ってアズサに顔を向けた。

「見てのとおりだよ。私は二人とセックスするから、その間の護衛を頼みたいんだ」

「セツ……そ、そんなの見れば分かる！ なんて、生徒としてるんだっ

て話！」

「イズナも、イズミも……皆とても魅力的だからね。一番魅力的になる所を見てみたいからセックスしてるんだ。皆ちゃんと同意の上でセックスしてるよ」

「そうですね♡ イズナはっ、主殿とセックスできて、最高に幸せなんですよ♡」

ぐっぽ、ぐっぽと水気たつぷりの音を響かせてイズナの上下動が激しくなる。イズナの顔は喜悦に染まりきっており、言葉に裏などないと雄弁に語っていた。

「私としては、セックスはオマケで、先生の精液が最高に美味しいからお礼にセックスしてるだけけどねー」

イズミも、ニコニコと……まるでスイカを頬張る直前のように、全く屈託のない笑顔で所感を述べる。

「ふふっ、そんなこと言って、イズミ先輩も先生とセックスするときは気持ちよさそうじゃないですか♡」

「べっ、別にいい、気持ちよくないとは言ってないよ？ 精液を飲むとすっごくセックスしたくなるんだからしょうがないじゃん」

顔をそむけ少し頬を赤らめたイズミを、腰をズボズボ振りながら微笑ましげに見やるイズナ。ゲヘナと百鬼夜行、学校の枠を超えた交流に心をほっこりさせていると、

「むう……むうううう！」

頬をリスのように膨らませ、憤懣やるかたないという感じでアズサが私を睨んでいた。

「どうしたの、アズサ？」

「ふん！ なんでもない！ じゃあ私は護衛のために少し離れるから！」

ふいつ、とそっぽを向き、肩を怒らせて歩きさろうとしたアズサを、イズナが呼び止めた。

「アズサ先輩、主殿はアズサ先輩ともセックスしたいって思ってるんですよ？」

ぎっ、とビーチサンダルが砂浜に線を引き、アズサが踏みとどまる。

「なっ、なに？ どういう事？」

ぶじゅっ、ぐじゅっ、と機械のように正確に腰を振るイズナ。

「私は主殿の下僕なのでセックスするのは当然ですが、世間では先生と生徒がセックスするのは犯罪でしょう？ だから主殿はバレないように気を配ってきたんです。それを今回、私とイズミ先輩に付き合うよう誘ったってことは……」

ハッ、と目を見開いてアズサが私を見つめる。ピンクサファイアの  
ような美しいその瞳を、じっと見つめ返した。

「わ、私とも……セツ……うう……し、したいの？」

「うん、すごくしたい。……前に、この砂浜でアズサと二人で並んで座った事があったよね」

「あった、けど……どうせ、先生は他の子とこういう事するためにこの場所を使ってたんでしょ」

アズサはしゅん、と今度は哀しげに俯いた。

「してないよ。アズサ以外の生徒を連れてきたのは今日が初めてだし」

「あっ ♥ んっ ♥ そうですよ。いつもはシャーレの中でシてますから」

「しゃくっ……そうだね。最近暑いからその方がありがたいけど」

私の言葉に、腰を振りながらイズナが、おやつにスイカを食べながらイズミが続く。

「アズサと最初にセックスする場所は、ここにしかかったんだ。……  
どうかな？」

ぽ、と照れで頬を染めて、気を取り直したように軽く睨んでくるアズサ。

「他の女の子を侍らせながらそんなことを言うなんて……先生は思ったより相当の悪人」

「嫌かな？ それならこの関係を内緒にしてくれるだけでも構わないけど」

アズサはモジモジと腕でお腹や太ももをかばうように身をくねらせて、視線をあっちこっちにさまよわせ、顔をそむけたままでこう

言った。

「別に……嫌じゃない。か、勘違いしないで。先生の事が好きだから、とかじゃなくて、護衛をするなら環境に溶け込む必要があるからで、これからも生徒と野外なんかの危険な場所でこういうことをするときにはちゃんと私を呼んで貰わなきゃ困るからだからー」

かなり早口でまくし立て、言ってしまったからその大胆さに自分で顔を更に赤くしている。

フリルとりボンと花飾りたつぷりの、絵に描いたような少女趣味の可愛らしい水着を着たアズサからのセックスOKの返答と、イズナの最近熟れて来てピツタリと私にフィットするマンコの感触に私は思い切り射精してしまった。

「あああああつ♥ イズナ、お射精でイキますうう♥」

じっくり仕込んだイズナは、もう絶頂の時に自己申告することが自然に出来るようになった。自分が絶頂するのと同時に、私を楽しませるための媚びた甘ったるい声をあげて、膣をギチギチに締めて射精の快感を高めてくれる。忍術よりもよほど肉奴隷の才能がある。

アズサは、イズナが突如気が狂ったように叫んで背中が折れそうなほどに仰け反った事にびくつと小動物のように一歩後ずさった。

しかしメスの本能でイズナがどれほどの快感を感じているかなんとなく理解したのでろう。どこか羨ましがげな視線で、レジャーシートに寝かさされるイズナを見ていた。

「おっ、新鮮な精液だー！ えへへ、スイカは塩をかけても砂糖をかけても美味しいけど、精液ならもつと美味しいと思うんだー」

ぱあつと目を輝かせて、ズルリとイズナの膣から抜いたコンドームを手早く回収するイズミ。

「つとと、まだ残ってる、もったいないもったいない……んむっ♥」

立ち上がった私の前に跪いたイズミの表情は麦わら帽子に遮られて見えない。前に大きく突き出た乳房に夏の日差しが帽子の濃い影を落とし、情緒あふれる光景にしている。

尿道に残った精液がぷつくりと鈴口で玉を作るのを見るなり、イズミぱつくりと亀頭を口の中に入れた。ちゅ、じゅるっ、と音を立てて

吸いたて、ゴシゴシと手コキで一滴残らず絞り出す。沢山出した後にも関わらず、イズミの絶品お掃除フェラを受けて勃起が回復していた。

「ありがとう、イズミ。そろそろいいよ」

ちゅぱつ、と口を離し、舌なめずりをするイズミ。放っておくと精液のおかわりをするまでしゃぶり続けるので、イズミのふわふわした髪の毛に手を差し込んで頭をそつと撫でて中断させた。

「ん、分かったよ先生。んー、ザーメンスイカのお味はどうかなー？」

ニコニコと返事をしてからムツチムチのお尻を性器と肛門が辛うじて隠れるような小さな水着を見せつけるようにレジャーシートを四つん這いで進み、サンダルを履いて海水につけて冷やしているスイカへと駆けて行った。

「おまたせ、アズサ」

コチコチに固まっているアズサに改めて声をかける。きゆうつと身体を縮こまらせて肌を隠そうとしているのが却って艶かしく、勃起は完全に回復した。

「えつ、えつと、先生、やっぱり私、今回は護衛に徹しようかなって」「おいで」

言葉を遮って、バキバキに勃起した全裸のままアズサに手を差し伸べた。アズサはチラチラと私のフル勃起した股間に視線を向けて、その度に恥ずかしそうに視線を逸らしてしまうが……おずおずと、ちよこんと指先だけで私の手をつまんだ。

その手が離れないように、壊れ物を扱うようにそつと引き寄せる。と、ふらりとアズサが私に近寄ってくる。

潮風に吹かれてなおもサラリとした肌触りの銀髪を腕に感じながら、剥き出しの肩に手をおいて抱き寄せた。

「あつ……」

裸の私と抱き合い、臍からみぞおちまでにべつとりと私の勃起チンポが押し当てられる。キラキラした少女趣味の理想のようなアズサの美貌に、私の精液が染み込んでいくかのようだった。

「あつ、あの、先生、わ、私、何をすれば良いのか、その」



「大丈夫。私に任せていればいいよ」

そう言つて、アズサと共にレジャーシートに腰を下ろす。あの日、夕暮れを二人で眺めた時のような位置関係だ。今はあの時より更に距離が近く、私がアズサの肩を抱いていて……アズサは私の胸にもたれ掛かつて、海よりも私の顔を見ていた。

「先生……先生は、私みたいな子供とも、その……したいの？」

それは揶揄するような口調ではなく、自身なさげなもので……アズサの魅力の多寡について語っていると分かった。

「したいよ。アズサはとても綺麗で、魅力的な女の子だ」

じっと目を見つめて語りかける。照れと緊張に耐えかねたようにアズサの視線が泳ぐが、最後にはしっかりと見つめ返してくれた。

「……うん。信じるよ、その言葉を。先生がそう言ってくれるなら……私のはじめて、先生に……あげる」

恋する乙女、とも少し違う、気高く強い決意の光をともし……アズサは私のセフレになることに同意してくれた。

アズサの可愛らしく丸い顎を指であげ、顔を寄せる。察したアズサが、ぎゅっときつく目を閉じて、全身を緊張させた。

「んっ……」

アズサの唇は緊張で硬くなっていたが、構わず軽く音を立てて吸ったり舌でねっつとりと舐めて上げる。

「ひゅっ」

その度に喉奥で悲鳴のような声を漏らすアズサだったが、だんだんと唇を重ねる事に慣れていき、ついに引き結んだ唇から力が抜けた。口内にぬるりと舌を侵入させる。

「んむう!？」

目をつぶっていたアズサが思わず見開いてしまう。驚愕に揺れるピンクサフアイアの瞳と目が合うと、照れくささに耐えかねてまた目を閉じてしまった。

肩を抱いていた手で二の腕を優しくさすって、リラックスするよう伝える。少しずつつ力が抜けて、私の舌に触れていた歯をあげてくれる。小さくプリプリしたアズサの舌とダンスをするかのようにくる

くる回りながら睦み合う。

「んう……んくっ……♡」

ディープキスに徐々に慣れ、アズサからもたどたどしく舌を使ってくれる。アズサのサラサラした唾液と私の唾液が交換され、お互いに喉を鳴らして嚙下し……私は次の段階に移った。

水着のトップスのすぐ上、寄せてあげられた胸の肉をスリスリと指で愛撫する。

「んっ♡」

ぴくん、と身体を痙攣させるだけで、アズサは抵抗しなかった。つう、と胸骨まで指を滑らせて、大きなリボンの付いた水着のトップス、その中央から指を潜らせる。

殆どない谷間から侵入し、アズサの小ぶりの胸を水着を着せたままで手のひらに味わった。

手の甲には水着の裏地に付けられたパッドの柔らかさを感じ、手のひらには夏の日差しの下であつても少しひんやりとした、小さくも確かに膨らんでいる乳房の柔らかさを感じる。

その胸の頂上は、張りのある肌と滑らかな乳輪の感触が入り混じっているが……

「あつ、せ、先生……♡」

直接的な性行為を感じさせる乳揉みに、アズサの瞳が不安げに揺れる。私はアズサの目を間近からしっかり見つめた。

「大丈夫だよ、アズサ。力を抜いて、身を委ねて」

きゅっ、と両手を胸の前で祈るように握り、小さく震えながら目を閉じるアズサ。不安ながらも私を信頼してくれるその所作に愛おしさが膨れ上がり、アズサの水着のトップスを下から指をかけてペロんとめくった。

「あつ……」

慌てて目を開き、指先で乳首を隠してしまうアズサ。

「隠さなくていいよ。とっても綺麗な胸じゃない」

「だって……こんな胸、変……でしょ？」

さつき胸を揉んでそうではないかと思つたが、アズサの乳輪は小ぶ

りな割に大きめだった。乳首は控え目な大ききで、オナニーに手を染めて居ないことが伺える。

「変じゃないよ。アズサみたいな可愛らしい女の子がこんなエッチな乳輪をしてるなんて、最高に魅力的だよ」

「うう……褒められている気がしない……でも、先生が魅力的だと言うのなら……いいよ。見て……先生」

そつと指が外され、アズサの胸が露わになる。ふるふると少し揺れているのはアズサの緊張故か。薄ピンクの綺麗な乳輪は胸の前面を覆っているような大ききで、ほんの少し盛り上がっている。フリルに飾られた美しい少女の水着をどけてセックス出来る雌の匂いが立ち上ってきたというギャップが、より卑猥さを引き立てていた。

そつと唇でアズサの乳首にキスをする。

「ひゃんっ……」

感じているというよりも、くすぐったさで上がってしまったという感じの声を聞きながら、ネットリと舌を這わせる。ぷにぷにと舌で突いただけで沈んでいく乳輪の柔らかさと、そのすぐ外側にあるピチピチの張りのある肌の感触、舌で舐め上げる度にピクリと身体を震わせる小さく可愛らしい乳首を堪能する。

片手でもう片方の胸を撫でるように揉み、アズサの様子を伺うが……先程とは打って変わって、母性を感じさせるような微笑を湛えていた。

「ふふっ……先生、私の胸に吸い付いて……赤ちゃんみたい。ちよつと、可愛いな」

そう言つて、小さな手でそつと頭を撫でてくれるアズサ。それはそれでいい気分なのだが、もつと性的にアズサが気持ちよくなっている所が見たい私は、乳首をきゅつと摘んでみた。

「あつ♥ちよつ、先生、それ、なんか、ひうっ♥」

ごく軽く、慣れないアズサに痛みと感じられない程度の力で乳首を刺激してやると、ぴくん、ぴくんと痙攣でアズサの肩が上がる。辛抱強くその力加減を維持して愛撫を続けるうちに、アズサの可愛らしい乳首は固くしこり、赤く充血していった。

「あ、ん……♡ ちょっと言ってみただけなのに、先生の意地悪……♡」

アズサは目だけは睨んだ形にしているが、照れ隠しなのが伝わってくる。ちゅぱ、と乳首から口を離してアズサを見ると、白い肌は羞恥と乳首の性感で桜色に上気し、表情もうつとりと夢見るように陶然としている。フリルの多い水着はずらされて首元までを隠し、逆に乳房が夏の日差しに照らされ、片方は唾液にてらてらと淫猥に光っていた。

少女が、少女のままに性に染まっていく……幻想的なまでの美しさに、思わず息を呑む。

「綺麗だよ、アズサ」

「恥ずかしいことを言わないで……」

そう言っただけで所在なさげに身体を揺らすアズサだが、もう目をそらしたりはしない。むしろ……これから期待するかのようになり、瞳を潤ませていた。

「下を脱がすよ」

この完璧なまでの美しさのままに挿入までしてしまいたいの山々だったが、さすがにアズサもお気に入り水着をセックスで伸び伸びにさせるわけには行かない。終わった後相当怒られそうだ。

アズサのほっそりとした、しかし括れるほど性徴していない腰をねっとり撫でながら、ボトムスに指をかける。

流石に恥ずかしすぎるのか、アズサは何も言わずに腰を少し浮かせてくれた。スルリと健康的に筋肉のついた太ももとふくらはぎを伝って、水着と同デザインのリボンのついた可愛いサンダルを履いた足を抜けていく。

アズサの生まれたままの下半身には、つるりと一本の毛も生えてはいなかった。剃り跡すらない、つるりと美しい素肌だ。恥丘の盛り上がりは控えめで、まるで股間に何も付いていないかのようにシャープな曲線を描いている。

「あうっ……」

正視に耐えないとばかりに、アズサが両手で顔を覆った。その手に

はこれもフリルの付いたアームカバーを纏っていて、羽やサンダル、水着のトップスに囲まれてメインディッシュのマンコを豪華に飾り立てているかのようだ。

我慢できずに平板に近い大陰唇を割り開くと、むっと生々しい雌の香りが漂う。うやうやしく唇で触れた。

「ひゃっー」

アズサは反射的に脚を閉じ、私の頭を押さえつけた。恥ずかしすぎる光景から目をそらすように顎を上げて目を閉じる。

濃い臭いの割に癖のない塩味がするアズサの愛液を舌で味わい、小さなクリトリスを包皮の上から唇で挟む。たっぷりの唾液で浸し、そつと舌先で転がした。

「あつ♥ あつ♥ 先生、なにこれ、ぞわぞわっ、て、変な感じがするっ♥」

オナニーすらしたことのないアズサが、クリトリスを弄られる事が気持ちいいと学習するまで、真上に登った太陽の日差しをジリジリと背中に浴びながらゆつくりと舌を動かす。

アズサの身体はとて正直で、ほんの少し舌先を動かす度に、顔を挟んだ太ももを痙攣させてどれくらい気持ちいいか教えてくれる。

「はっ……あ、ああーっっ♥ んんーっ……っ♥」

じつくりと愛撫を続けると、アズサの喘ぎ声は鋭いものから弛緩したものにへと変化していく。太ももからも力が抜けて行くが、アズサの太ももを頬に感じるのが気持ちいいので外側から両手で支えた。

クリトリスへの愛撫で本格的に性快楽を感じられるようになったのだろう、アズサは日差しだけが原因でない汗をかき、膣からトトロ口と愛液を零し始めた。

そつと口を離し、アズサを犯すために身体を起こす。

ふくらはぎを掴み脚を高々を持ち上げると、目の前に芸術品のような精緻さをもつアズサの足の指があった。サンダルを履いたままのそれに口づけ、指の股に舌を這わす。

「ああっ♥ そんな、先生、そこは、本当に汚い所だから♥」

アズサの顔を覆った手は、しかし目を覆ってはいなかった。指の間

から私が足をしゃぶる所をばつちりと観察し、膝をOの字に開いて暗にセックスOKを示してくれる。

「アズサは体中全部綺麗だね。もう我慢できそうにないよ」

「だから、恥ずかしいこと言わないで……！ す、するなら……して、いいよ」

顔をそむけ、砂浜を見ながらもチラチラと横目にこちらを気にしてくるアズサ。可憐にして卑猥なアズサに覆いかぶさって膣口にチンポを当てると、ふわりと私の背中を何か包み込んだ。

リボンで可愛らしく飾られたアズサの天使の羽が、恥ずかしがりなアズサの手足の代わりに私に抱きついていているのだ。いじらしい親愛表現に微笑みながら、小さな膣穴に龟头をねじ込む。

「いっ！ つっ！ つっ！……」

クンニで何度か絶頂させたはずだが、小柄なアズサの膣は私のチンポを受け入れるには小さい。クリトリスを素早くも優しく擦り上げて痛みを誤魔化しながら、アズサの清らかな処女膣を蹂躪して腰を進める。みち、みち、と肉を割り開く感触に射精をこらえながら進むと、なんと最奥までたどり着いてしまった。

「おやつ、アズサ、経験あるの？」

「あるわけっ……ない！ 失礼なこと、言わないで……！」

首を傾げてそう問うと、アズサは涙目を吊り上げて睨んできた。

「ふむ……激しい運動をしたら破けることもあるって言うけど」

「たぶん、それだと思う……蹴りとか柔軟で、開脚することも沢山あったし……先生は……処女膜、破れなかったの、残念なの？」

痛みに耐えながら私のことを気にしてくれるアズサの頭を撫でた。「いいや、膜があるうとなかろうと、アズサの初めてを貰えたんだから変わりないよ。それに……」

少し力を抜いてやると、アズサのキツキツの膣はチンポを押し出そうとして自然と腰が引ける。入り口近くまで引き抜いてアズサ膣でカチを刺激してもらってから、また力を込めて狭い膣をヌルヌル分け入っていく。

「アズサと最初から楽しめるんだから、むしろ私は嬉しいかな」

「こっちは、まだ、気持ちいいってほどじゃ、ないんだけど……先生の  
おちんちんが……お腹の中、いっぱい……熱くて、おつききて……  
入ってる感じが、すごいする……」

そつとお腹を撫でて呆然とした口調で今の感覚を説明してくれる  
アズサ。彼女なりに、私とセックスしている実感をゆつくりと受け入  
れてくれているのが嬉しくて、抱きしめてキスをした。

ちゅ、ちゅ、と穏やかなキスを交わす。そろそろとアズサの手足が  
私の首と腰に絡みつき、羽をあわせて三対で私にしがみついた。ゆつ  
くりと腰を動かし、アズサが慣れるのを待つ。

ぎああ、という穏やかな波の音、吹き抜ける風の音、シャクシャク  
とスイカを食べるイズミ、いつの間にかサングラスをかけて眠ってい  
るイズナの寝息。

小さくきついアズサの膣を犯す興奮と、ゆつたりと抱き合いキスを  
する安堵で、私は満たされていた。アズサも同じ気持ちでいてくれた  
ようで、徐々に身体から強張りが解けていき、私のチンポを柔らかく  
受け止めてくれる膣へと変化していく。

「はあ……先生……セックスって、気持ちいいね……」

まるで昼下がりにお昼寝をするのが気持ちいいと言っているよう  
なりラックスした声音で、アズサが呟いた。

「うん。私も、アズサとセックスするのも気持ちいいよ」

アズサは眠るようにそつと目を閉じて、全身から力を抜いた。私は  
アズサを強く抱きしめ、身体を密着させてより大きく腰を振り始め  
た。

「ああつ……♥ 先生、先生……好き……♥」

私の首筋に顔を埋めるような格好になったアズサの口から、あるい  
は寝言のように夢見心地のふわふわした声が漏れる。子作り行為の  
中でもなお清らかで可愛らしい乙女であるアズサの子宮口に龟头  
をくすぐられ、射精感が高まっていく。

「出すよ、アズサ……!」

「うん……来て、先生……♥」

ぱん! ぱん! ぱん! と力強く打ち付け、一番奥に打ち付けた

所で射精する。私達以外誰も居ない砂浜にセックスの音が響き……開放的な青空に吸い込まれていく。

アズサの一番大切な場所に、私の精液が大挙して雪崩込んだ。

「あああーっ♡」

少女が雌として生まれ変わる産声のように艶めかしいイキ声をあげて、アズサが絶頂する。それもすぐに消え、荒い息と波の音だけを聞きながらアズサに精液を残らず注ぎ込んだ。

「はあっ……♡」

アズサが耳元で熱いため息をついたのを契機に身体を起こす。アズサは絶頂の余韻を残す緩んだ表情でお腹……子宮のあたりを撫でさすっていた。

「赤ちゃん……できちゃうね」

「シャーレのコンピニでアフターピル……避妊薬を売ってるから、帰ったら買って飲んでね」

きよとん、と私を見つめたアズサは、

「飲まなきゃ、駄目かな」

ぼーっとしながらそんなことを言った。すぐにハッ我に返って、

「な、なんて、冗談！ いま子供が出来たら学校も退学だろうし、避妊はちゃんとする。……というか、さつきイズナには避妊具を付けていたよね？」

「初めてのときは生で膣内射精と決めてるんだ」

「ふうん……先生の変態。すげべ」

じとつと普段と同じ顔で睨んでくるアズサ。

「うん」

「でも……気持ちよかったから、いいよ。これからは生理の周期を先生に教えてあげるから……先生さえ良ければ、大丈夫な日は生でしても……いい」

ふっ、と微笑むアズサは、急に大人びたような気がして……

チンコが瞬時にフル勃起した。

「あっ、またこんなにして……もうしたくなかったの？」

余裕の笑みを見せるアズサに、私は再度覆いかぶさった。



その後は、スイカを食べ尽くしたイズミとうたた寝から起きたイズナを交えて、砂浜で日が暮れるまで腰を振り続けた。

帰る頃には全員が股間をムラなく日焼けして、痛みをこらえながらの帰宅となったのだった。

夏、海、青春、タンクセツクス（ヒフミ・アズサ）

「ふああ……」

「大丈夫？ ヒフミ」

ウィッシュリストを埋めていつもどおりの大騒ぎをして、戦車に乗っての帰り道。

後ろで寝息を立てて寝ているセフレ3人は、肩を寄せ合っとても仲良さそうだ。実際にはツルギがテンションを上げすぎたせいでヒフミとは仲良しになれなかった感があるが……

助手席……戦車にそんなものがあるかは知らないが、私の前には操縦桿のようなものがあるから砲手席なのかもしれない……に座る私は隣に座るヒフミを見ていた。

「あ、すみません先生。大丈夫です、ちゃんと安全運転しますから……くあ」

そう言っただくびを噛み殺すヒフミ。崖沿いの道路は戦車の内部モニタ越しでしか見えず、どうにも現実感がない。私が運転したらゲーム感覚でついうっかり海に転落して死にそうだ。

車内の空調は効いているが、徹夜で作業していたため皆水着から着替えていない。つまり運転をするヒフミも水着のままだ。クルセイダーちゃん、というこの戦車は内部が意外なほどに広く、最新……かどうか私にはわからないが洗練されたオートマ車であることが見て取れる。

早朝で誰も通りがからない信号で、ヒフミがビーチサンダルを履いた生脚を動かしブレーキを踏む。細い足の付け根、鼠径部に目を奪われる。運転しているため脚は少し開き気味になっており、恥骨と大陰唇の作る股間の落差が車内の照明に照らされてよく見えた。

少しだけ慣性を感じて車体が止まるが、後ろの3人が起きる気配はない。ヒフミがバイクと同じグリップアクセルを握る腕を休めるため肘を下げると、フリルの下の胸が寄せられて強調される。

「……眠気覚ましにお話でもしようか。今回の海水浴はどうだった？ 楽しめた？」

前を見ながら、眠たげに目をしばたかせるヒフミに、私は話しかけた。

若い女性4人の体臭が車内に充満し、もれなく水着を着ていることで、チンコが猛烈にイライラし始めたから気を散らすためだ。

「あはは、すみません、ご面倒おかけして……そうですね、振り返ってみると結構楽しめた気がします。何かに追われたりしよつちゆう銃撃戦が挟まったりしましたけど……ああ、ただお昼ごはんは最悪でしたね……」

昨日の昼ごはんは、なぜか海の家を乗っ取ってしまったイズミが提供するものを口に入れてしまったばかりに皆揃って気絶するはめになった。

「でも、スイカは美味しかったね」

「そうですね。ちよつと硝煙の臭いがしてましたし、弾痕の所だけぬるくなつちやつてましたけど……ふう、次行くまでにアズサちゃんにスイカ割りの常識を覚えておかないと……」

「うん。ちゃんと勉強を済ませて、夏のうちにまた来よう」

ちらり、と横目で私を見て、柔らかく微笑むヒフミ。少し眠気も覚めたようで、戦車は滑らかに発進した。

しかし、のんびりと郊外を運転する時間が長いため、またまぶたが下がり始める。ヒフミが軽く首を振って眠気を取ろうとするたび車内の空気が攪拌され、ふわりと汗の匂いが私に届く。運転の緊張からか微かに汗の浮いたヒフミの鎖骨のあたりが艶かしくぬるりと光を反射する。

私はヒフミの太ももに手をおいた。

「ひゃーっ！」

ヒフミは私の方を見ようとするが、よそ見をしてはいけないという思いが前方……モニタに意識を戻させる。内心の葛藤を示すように前を向いたりこちらを向こうとしたりとせわしなく首を動かし始めた。

「こうしていれば眠気も覚めるかなと思って」

ヒフミは私の顔を見たり太ももに置かれた手を見たり、後ろの3人

が起きていないかチラチラ気にしたりとひとしきり慌てた。

「た、た、確かに、覚めましたけど……！ そんなところ……うう……いい、いえ。なんでも……ありません。その……学校の用具倉庫に帰るまで……お願いできますか……？」

今更気にしていない風を装って、私に太ももを撫でられることを受け入れてくれたヒフミ。徹夜明けのテンションで少し大胆になっているのかもしれない。

市街地に入ると信号も増える。停車する度に、私は少しだけ手を動かし、海水を落とすきれずに少しベタつくヒフミの太ももの感触を味わった。

「んっ……♡」

明らかに性的な響きを伴った吐息。そんな自分を恥じているのか、少し俯きがちに赤面するヒフミ。その横顔をじっと見つめる私を一瞬だけ横目で見て……視線が合ってしまった事に驚き、更に赤面する。

モニタに映る道路がトリニティ周辺の見慣れたものになってくる頃には、私の手は常時ヒフミの太ももを撫で回していた。ヒフミは何も言わず、時折身じろぎするばかりだ。少しだけ脚を広げて、私に撫でやすいように太ももを差し出してくれるのがいじらしい。

太ももの上においていた手から、内側に指を滑らせる。

「あっ……♡」

ほとんど水着の股間に触れてしまいそうな、犯罪もののセクハラだった。ヒフミは気づかないふりをして運転を続けてくれる。

今すぐにも清楚な白い水着越しにクリトリスを刺激したい気分だが、ぐつとこらえて太ももを撫でる。つう、と内腿に指先を滑らせるたび、微かにヒフミは震え、喉の奥で押し殺したような微かな嬌声を上げる。

素肌にクーラーを浴びて冷えていたヒフミの身体に、うつすら朱が差す程に興奮は高まっていた。

やがて、生徒の居ないトリニティを悠々と進行し、用具倉庫へと収まる。

ヒフミはメインエンジンを停止しつつも、所在なさげにハンドルに手をおいたままだった。

「あ、あのっ！ 先生！」

私に向き直り、精一杯目を吊り上げて睨むが、全く迫力が出ていない。

「い、いつもこんなことを、他の子にもやってるんですか？」

ヒフミはちらりと視線を下に落とし、太ももを今も撫で回す私の手を払いのけることもなく糾弾する。

「ヒフミみたいな可愛い女の子が水着でずっとそばに居たから我慢できなかつたんだよ」

「……おだてたって、駄目……ですよ？ こっつ、こういうのは、その、良くないこと、ですから。その……えつと……」

自分でもどういいう落とし所に持っていきたいのか混乱してまつまっていないのだろう、吊り上げた目はたちまち下がり、視線をさまよわせ始める。

「良くないことなら、すぐにそう言ってくれば良かったのに」

数時間触り放題だったお陰で、ヒフミの好む愛撫は分かっている。指先で内腿を一番気持ちいいように撫で回してやると、ヒフミが大きく痙攣した。

「んひゃんっ ♥ だ、だめ、駄目です先生……！ 車内には皆いるんですよ……!?!」

チラチラと後ろの3人を気にするヒフミ。

「ねえ、ヒフミ。ヒフミは私に触られるのは嫌？」

「あつ、う……」

目を見開いて顔を真っ赤にして黙ってしまふヒフミ。

「このままお預けされたら、後ろの3人を触りたくなっちゃうからさ……お願い、もつと触らせてくれないかな、ヒフミ」

徹夜でまともに働かない頭を、性感帯を愛撫して更に痺れさせ、声を上げられない状況で追い詰めていく。

返事を聞く前に、抱き着くようにヒフミをお姫様だつこのように横抱えにして自分の席に持つてくる。膝上に横座りになったヒフミは

私の目を見つめてカチコチに硬直していた。

そしてついに、水着に包まれた股間を撫で回し始める。

「あっ♥だ、だ、駄目ですっ!」

反射的に拒絶したヒフミの唇にそつと人差し指を当てる。

「そんな大声でしたら皆が起きちゃうよ!」

ハッと気づいたヒフミが後ろを気にしている間に、スリスリとヒフミの柔らかい股間を指が往復し始める。

「ダメツ……♥お、お願いです先生、落ち着いてください……んっ♥」

ヒフミはすがりつくように愛撫する私の腕を取り、制止しようとしてくる。その力は弱々しく、まるで媚びているかのように声が甘ったるい。

多少厚いと言つても、薄布に過ぎない水着だ。陰唇の柔らかさも、クリトリスがだんだん勃起し始める感触もはつきり感じられる。もはや私はフル勃起し、ヒフミの尻から背筋にかけて竿をグリグリ押し当てていた。

「こ、こんな事、したら、先生が犯罪者になってしまいますからっ♥」  
勃起を押し付けられて、ヒフミが腰を逃がそうと身を振るが、それは尻たぶでチンポを愛撫しているに等しい動きだった。

「それは怖いな。じゃあヒフミは戦車からでたら私を通報しちゃうのかな? 残念だなあ……皆に二度と会えなくなるなんて」

「わ、私はそんなことはしませんから、ね? 落ち着いて、こんな事はもう止めましょう?」

「通報しないのならヒフミは触って良いってことだね?」

「そ、そうではなく、うう……こ、こんなところじゃ嫌ですう……初めでは、その……雰囲気のあるお部屋で……」

可愛らしい願望に、ますます欲望に火が点いて止まらない。敏感なクリトリスを重点的に責める。

「あああっ♥だめ、だめ、だめっ♥そこだめっ♥先生、とまっ、とまっ♥」

声を抑えることさえ忘れて声を上げながら必死に私の腕を握るが、

それで指を止める事は出来ない。絶頂を我慢する苦悶の表情に快樂がじわじわと滲み溢れ出すかのようになり、ヒフミの瞳が潤み、表情が少しずつ緩んでいく。

「あつ、あああああああああつ♥」

戦車の中に思い切り絶頂声を響かせて、ヒフミが背をのけぞらせた。

「綺麗だよ、ヒフミ」

肌を桜色に染めて脱力するヒフミを優しく抱きしめながら、耳元で囁く。

「わ、私みたいな、普通の子なんて触って、嬉しいんですか……?」

私の腕の中で居心地悪げに身じろぎするヒフミの顎を指であげ、目を合わせる。

「私にとって、ヒフミは特別に可愛い子だよ。お尻に当たるもので分かるでしょ?」

照れに耐えかねたように、視線だけを横に逃がすヒフミ。

「だから……そういうセクハラは……ほ、他の子にしたら犯罪なんですからね……?」

「ヒフミには自由に触っていいの?」

ずい、と唇が触れる寸前まで顔を近づけると、ヒフミはぎゅつと目を閉じた。

「もう……知りません。好きにしたら、いいじゃないですか……」

珍しくもすねたように言うヒフミが可愛らしく。そのまま唇を奪った。

「んっ……♥」

イヤイヤ言う割に、私が舌でノックするのをすぐに理解して唇を開いて受け入れてくれる。ヌルヌルと舌尖を絡め合いながら、横抱きにしていたヒフミの脚を開かせて私に跨る体勢に変えさせ、正面から抱き合った。

海水でベタつく髪に手榴を入れ、逆の手で汗に濡れて少し冷たい背中に指を這わせる。

「んうっ♥」

くすぐったげにヒフミが身を振ると、フル勃起した私のチンポがヒフミの股間に押し付けられる。水着を脱ぎ、直にヒフミの下腹部にチンポを押し付けた。

「……………」

ヒフミはキスしたままぱつちりと目を開け、私が見つめている事にすぐ気づいてまたギュツと目を閉じてしまう。

楽しいセクハラをしつつ、髪から指を離してヒフミのトップスを下からめくりあげた。チューブのようにしつかりと胸を覆っていた水着はあっけなく剥がされ、ぷりんと胸が放り出される。

さっと両手で乳首を隠してしまふヒフミ。ぎゅつと眉を寄せて、羞恥に耐えていた。

控えめな大きさの胸はその手のひらでほとんど覆われてしまっている。ヒフミの細い手首を掴み、少しずつ力をかけて手をどかさうとする。

「んーっ、へんふえ、ちゆるっ♥」

抗議の声を唇を強く吸うことで封じ、観念したように手が胸から離れていく。私はヒフミのおっぱいを鑑賞するためにキスを中断した。

「せ、せんせい、もう、このあたりで止めにしておきませんか？ ね？

絶対、絶対通報とかしませんから……」

ヒフミの胸は均整の取れた形をしていた。若干乳輪は大きめだが、ツンと上を向いた瑞々しいほどに張りのある釣り鐘型だ。小ぶりながらも乳首から下の部分の盛り上がり落差が激しい為、水着で抑えていた時よりだいぶ大きくなったような錯覚すら覚える。

「ヒフミは綺麗なおっぱいしてるね」

「そ、そんな事言わないでください……」

半べそをかきながらも、ヒフミの口元は緩んでいる。乳首へと近づくと私の顔をじつと見て、微かに胸を張って自分から差し出してくれた。

ちゆう、と汗と海水の塩味を含んだヒフミの乳首に吸い付く。

「あっ…………♥」

そつと手首を開放してやると、ヒフミは私の頭を腕で抱きしめた。



「ひょうう……♡ んっ、くうんっ……♡」

ちゅぱちゅぱと吸いたてるのに合わせて、ヒフミの押し殺した声が響く。手で口を覆っているのだろうと想像し、もう片方の乳首を指で弄り始める。

「やつ♡ そんなふうには、されたら……！ あっ♡ だめ、先生、押さえてください♡ こえ、声我慢できません♡」

甘ったるいヒソヒソ声は耳朶を震わすが、遠慮なく愛撫を続ける。どうせ全員セフレなのだし、全員起きたら5Pしてもいいだろう。

そんなことを知る由もないヒフミは、内緒のカーセックスならぬタンクセックスに大興奮して乳首を固くシコらせていた。どうやら胸が感じるらしいヒフミの乳首を吸い上げ、引っ張り、強く刺激する。

「あっ♡ くっ♡ もう、我慢、できな、ああああっ♡」

絶頂の時にはヒソヒソ声に出来ないのか、再びヒフミのイキ声が響き渡った。ちゅぽんと唇を離して顔を上げると、ヒフミは両手を口に当てて後部座席の3人が起きないか戦々恐々としている。

「大丈夫だよ。よく寝てる」

適当な事を言っつて、ついにヒフミの股間の水着を横にずらした。まだ諦め切れないのか、ヒフミは必死な顔で私の手首を掴んで止めようとする。しかし絶頂後だからか、本気でないからか、その程度の力で止まるわけではない。私の指がヒフミのヌルついた性器に触れる。

「はんっ♡」

たったそれだけで、背筋を伸ばして上を向いてしまうヒフミ。ゆっくり、ネチネチと指を這わせると、とろとろに甘い声が漏れる。

「ヒフミの気持ちよくなってる所、とても綺麗だよ。もっとよく見せて」

「だめっ、これ、ほんと、声が、っ、おさえ、られなっ……♡」

にちやにちやと早くも溢れ出した愛液が私の手に降りかかり……ヒフミのクラスメイトも使ったことがあるのだろう戦車のシートに水たまりを作っていく。たっぷりの愛液を絡めた指でクリトリスをヌルヌルと刺激すると、イヤイヤするように首を振って唇を噛んで声を我慢した。

私は、ちゅっ、と唇で音を鳴らし、少し尖らせたそこを指で指し示してみせる。

ヒフミは半泣きで唇と後ろの3人を見た後、自分から抱きついて深くキスをしてくれた。

「うんんっ♥ んーっ！ んぐっ、んんんんっ♥」

悶える声が私の口の中を震わせる。

と言っても、後ろに座っている人が起きていたとしたら余裕で聞こえる音量だと思うが。

それ以前に、ヒフミの股間が奏でるくちやくちやという卑猥な水音は戦車の中のどこに居ても聞こえるだろう。

「ヒフミ……入れたい」

絶頂した事で手を緩め、呆然としているヒフミに囁く。

「うう……それ、は……やっぱり、その……」

やはり踏ん切りがつかないように洩るヒフミ。

「おねがい、ヒフミ。……ヒフミの初めてを、私にください」

ちらちらと、後ろの3人を気にする。未だにぐっすり眠っているのを確認すると、意を決したような真剣な表情を作った。

「わ、わかり……ました。私の初めて、貰って、ください」

こうして、とつても良い子のヒフミは、悪い男に流されてその場の雰囲気で処女を捧げてしまうのだった。

ヒフミに腰を上げてもらう。私の顔に胸を押し付けるように抱きついて姿勢を整え、ゆっくりと腰を下ろしていく。ポタリと愛液のしずくが亀頭にぶつかって碎ける感触があった。

それからすぐ、ヒフミの熱い膣口が押し当てられる。

「いいよ、ヒフミ。そのまま腰を落として」

「はい、いき……ますー」

みちっ、とヒフミの狭い穴をこじ開ける感触。痛みがあるのか、腰がすぐ上がってしまう。それでも挫けず、ヒフミは私に処女を捧げるためにもう一度腰を落とす。

私も応援のためにクリトリスをコロコロ転がして、少しでも苦痛を和らげてやる。

ヒフミの胸の谷間に顔を埋め、荒い鼻息を耳元に感じながら、処女穴を少しずつ拡げて侵入して行く感覚に身を任せる。まさに極楽だった。

少しずつ深く入るようになり……やがて、亀頭がすべて飲み込まれる。そこから先は割とスムーズだった。ぬぶぬぶと進んでいき、処女膜の遮りが先端にふれる。

「一気に行くよ」

「は、い……あつ、そうだ、ゴ、あ、いっ！」

何かに気づく寸前、私の生チンポがヒフミを貫く。ヒフミの膣はキツ目の締りと奥の腹側にあるツブツブしたイボが特徴的な、射精を促すに十分な名器だった。

「あ、ぐ、いた、あ……」

ヒフミは抱きついた私の背中に爪を立てている。血が滲んでいるかもしれないが……ヒフミの処女を貫つたのだ、名誉の負傷とでも思っておこう。いつものようにクリを弄ってやる……処女を奪った後の宥め方も慣れたものだ。

ふう、ふうと息を整えヒフミの身体から強張りが徐々に抜けていく。なにか気づく事があったのか手を顔の前に持っていき、指先が血塗られているのを見て目を見開いた。

「す、すみません、先生……血がでちゃってます」

「大丈夫。ヒフミのほうがか痛かったでしょ？ 処女を私にくれて、本当にありがとう」

そう言うと、不思議そうに下腹をさすった。

「私、本当に……セックスしちやっただんですね……」

「どう？ 初めての感想は」

熱々のヒフミの膣内を味わいながらそう訊くと、ヒフミもそつと目を閉じて……手のひらの下、腹の中にあるチンポに感覚を集中した。「熱くて、大きくて……先生の存在が私の中から感じられます。ドキドキするような、ホツとするような、不思議な感じで……うん、いやじゃ……ないかも……」

そのまましばらく、静かに抱き合っていた。ついにむようなキスを

したり、感じやすい乳首を虐めたり、ヒフミが慣れるのをただ待つ。「んっ……♡ なんだか、うずうずする、ような……」

ヒフミがゆらゆらと腰をくねらせ始める。もう挿入に慣れ、セックスを楽しむ準備が整い始めていた。

「じゃあ、そろそろ動くよ」

クツシヨンはあつても流石にバネではない座席に苦勞しながら、小刻みにヒフミを突き上げる。

「ああっ♡ これ、ずんっ、て突き上げられるの、すごい……♡」

もう3人のことなど忘れてしまったかのように、声を潜めることもなくヒフミが快楽に震える声で感想をくれる。

ヒフミの膣の、コリコリとした周りと違う感触の部分をかき首でこするように腰を使うと、ぎゅっつと首に強く抱きついてくる。

「くうううん！ こんな、こんな、気持ちいいの、我慢、できなっ♡」

口元を抑えることさえ出来ず、私にしがみついて初セックスの快楽に翻弄されるヒフミ。ばふっ、ばふっ、と肉を打ち合わせる気の抜けた音が響き、それにヒフミの嬌声が合わさって淫らな二重奏が戦車に響く。

段々とヒフミ自身も腰を遣い始め、私と息を合わせてピストンをより深く、速くしていた。

外からクルセイダーちゃんを見れば、ほんの少しゆらゆらと揺れているのが見て取れるだろう。

朝早く、用具倉庫内の戦車で処女を捨てたヒフミがもう一人前の女の顔をして腰を振っていることなど、トリニティの生徒には想像も出来ないに違いない。

甲斐甲斐しい位に膣を締め付けて、射精を促してくるヒフミ。絶頂のタイミングを合わせるために、私もヒフミの敏感な乳首を愛撫して性感を高め始めた。

「もうっ♡ だめっ♡ きちやうっ♡ すごい、きちやいますっ♡」

嵐の海に浮かぶ筏に必死にしがみつこうように、私にしがみついて激しい絶頂の予感に大きな声を上げるヒフミ。最後に力強く奥を貫き、

清らかなその子宮に煮えたぎった精液を流し込んだ。

「あ、あああああああああああああつー！」

絶叫。戦車の外にも響いてしまったときえ思える、ヒフミの雌としての産声をBGMに、生の膣内射精を一滴残らず注ぎ込む。

「ああ……♥ 先生の、精液……でちやつてる……♥ だめ……子供、できちゃ……♥」

ヒフミは今更のように避妊していない事を認識するが、それはうわ言のように弱々しく……熱っぽいため息を吐いて射精を受け入れてくれた。

「んん……よく寝た。ヒフミ、もう着いた……の……」

水着のアズサが目を覚まし、ヒフミが目を見開く。操縦席のヘッドレスト越しに視線が合ってしまったのだろう。

じわじわと顔が真っ赤に染まっていき、震える手が私を突き飛ばさうと力を入れる瞬間、半勃起のチンポでヒフミの膣を突き上げる。

「はあんっ♥ や、ちよ、先生、アズ、アズサちゃんが起きちゃって、わた、私を見ちゃって！」

パニックになっているヒフミを更にチンポで突きながら、アズサに挨拶した。

「おはよう、アズサ。よく眠れた？」

「うん、お陰様……というか、ヒフミのお陰で。まったく……二人して朝から何をやってるかと思えば、こんな所でセックスなんてね。いつの間にヒフミに手を出したんだ？」

口をへの字にしてジト目で睨んでくるアズサ。

「ついさつき、ヒフミの処女を貰ったばかりだよ。ね、ヒフミ」

「えっ、えっ……」

呆然と私達のやり取りを見ているヒフミ。

「ふわ……ああ、すっかり寝ちゃいましたね。おはようございます、先生、お疲れさまでした、ヒフミさん。あつ……セックスしてるんですか？ まあヒフミさんも運転で疲れたでしょうからメンタルケアは良いですけど、朝からそんなだらしない事ではいけませんよ？」

マシロは目覚めるなり、私に跨っているヒフミの姿を見て一言だけ

お小言を漏らし、何事もなかったかのように天井のハッチを開けて荷物とゴミを持って戦車を出ていった。下から見上げる尻のエロさに勃起が回復する。

「おはようございます先生。朝からセックスだなんてそんな……ヒフミさんが羨ましいです♥ 私とマシロさんは昨日休んだ分を取り返さないといけませんので、残念ですが今日は不参加といたしますね。また今度、たっぷりセックスしましょうね♥」

マシロが小言を言っている間に私達の繋がっている姿を見て興奮したのか、まともな……内容はまともじゃない……言葉を話すツルギも、自分の分の荷物と残りのゴミをすべて持ち、ぷりんとしたケツを見せつけながらハッチを登って出ていった。

「正義実現委員会も大変だな。私は特に予定はないから、このまま付き合おうよ。……まさか私に出す精液はない、なんて言わないよね？」  
「勿論だよ、アズサ。後でたっぷりね」

もぞもぞと水着を脱いで全裸になりながら私に近づいてくるアズサ。すっかりセックスの味を覚えてしまった彼女は、シャーレでも積極的に「小テスト」に参加している。

「先生……」  
みしっ、と骨がきしむ音さえ聞こえるような強い力で肩を掴まれる。

「わ、私だけじゃなくて、皆にもすでに手を出していたんですか……!!」  
マシロさんや、まさかのツルギさんも!」

ぷるぷる震えながら、涙目で不満を露わにするヒフミ。

「うん、そうだよ」

怒りで力んだからか、チンポが締め付けられる快感に勃起をぐんぐん回復させつつ、私は平然と応えた。

「そうだよって……! はあ、ですよね……分かってました……私なんか先生の、特別になれるわけないって……」

怒りを通り越して悲しみだしたヒフミを優しく抱き寄せる。ヒフミはムツとして抵抗しようとするも、チンポが入ったままではうまく行かず抱きすくめられてしまう。

「それは違うよ。さつきも言ったけれど、ヒフミは私にとって特別に可愛い女の子だ。ほら、身体の中に感じるでしょ?」

グリグリと子宮口を刺激すると、刺激に反応してヒフミが肩をぎゅゅと縮こまらせた。

「うー……初めて先生のこと、最低って思いました……」

眉根を寄せたムスツとした表情のヒフミが珍しく、抱きしめてキスをした。もぞもぞと形ばかりの抵抗をするが、それも弱々しく……腰を使って突き上げてやると、おずおずとヒフミからも腰を合わせてくれる。

「ありがとう、ヒフミ。これからもっとセックスしようね」

ぬっちゃう、ぬっちゃうと精液と愛液の混じった粘質な音を響かせ、友達のアズサに暖かく見守られながらヒフミは激しく身体を上下させる。

どうやら奥のほうを感じるようで、時折深く挿入したまま腰をグラインドさせる動きも見せ、セックスにおいても優等生ぶりを見せてくれる。

「ヒフミの胸、やっぱり私より形とか乳輪とかが綺麗な気がする」

「あつ、アズサちゃん!」

いつの間にか運転席に身体を滑り込ませていた全裸のアズサが、四つん這いで助手席の私とヒフミを眺めていた。

「アズサもヒフミのおっぱい触ってみなよ」

「えっ、良いの?」

「先生!?!」

「いいからいいから」

思いつきで言ってみたがアズサは意外なほど乗り気で、ひよいっと気軽にヒフミの胸に手を伸ばした。

「きゃうっ♥」

目をグルグルに渦巻かせて取り乱していたヒフミは、アズサの小さな手がそつと乳輪に触れると、電撃を受けたように身体を震わせた。

「おー……ぶにぶにしている。へえ、それは私と変わらないんだ。やっぱり私より形が整ってるな……私ももうちよつと乳輪が小さかった

ら良かったんだけど……もしくは胸がもつと大きくなるか……」

アズサはそんな事をぶつぶつ言いながら遠慮なしに乳輪と乳首を指先で撫で回す。異常な行為に反応してしまっているのか、ヒフミの乳首はパンパンに勃起し、マンコも痛いくらいに締め付けを激しくしていた。

「だっ、だめ、駄目だよアズサちゃん、そんな、女の子同士でこんなこと……!」

両頬に手を当てて羞恥に身悶えているヒフミに、アズサはこてんと首を傾げる。

「どうして? 今から一緒に先生とセックスするんだし、このくらい気にしてたらやってられないと思うけど?」

「じゃっ、じゃあ私がアズサちゃんの胸を揉んでも平気なの!」

アズサはポツ、と頬を染めて、しかし目をそらすこともなく言った。

「ヒフミもしたいなら、良いよ。私の胸、ちよつとバランス悪くて恥ずかしいんだけど」

そう言うアズサは四つん這いから膝立ちになり、裸体を私達の目に晒した。

自分でも言ったとおり、乳輪もやや大きめ程度の普通サイズでツンと釣り鐘型を描いたヒフミのおっぱいと比べて、アズサのおっぱいは大きな乳輪により先端が鈍角になっていて全体に丸い印象がある

「アズサのおっぱいもエッチな感じがして私は好きだよ」

「むっ、それ全然褒め言葉になってないよ、先生」

正直な感想を言ったら睨まれてしまった。しかしアズサはすぐに普通の表情に戻って、

「ここじゃやりにくいから、一旦後ろの席に行こうよ、先生」

3Pのお誘いを受けたのだった。

後ろの空間は3人が座って眠れていただけあって、座りながら3Pセックスするには十分な広さが確保されていた。

「あっ♥ アズサ、ちゃ、私の胸、そんなにされたらっ♥」

「ひゃんっ♥ ヒフミこそ、初めてなのに胸の愛撫、うますぎっ♥」

私に跨って腰を振るヒフミと、隣に座るアズサが身を寄せ合って、



お互いの乳房を愛撫しあっている。

最初はおつかかなびつくりだった二人の手は、今や別の生き物のように蠢いて快楽を与えあっている。少女二人の美しい嬌声が奏でる極上の音楽に、奏者気取りで腰を振って介入する。

「あああうっ♥ せんせ、急に奥突かれたら♥ 私、もうっ♥」

一番奥をえぐるように突き上げると、ヒフミは背をのけぞらせてアズサへの愛撫を中断し、私にしがみついた。

「あつ、ずるいよ先生、私もヒフミをイかせてみたかった」

そう言つて唇を尖らせるアズサに、ヒフミの身体を回転させて応える。

「ふええっ? やっ、この体勢♥ 恥ずかしいですっ♥」

ヒフミは私に背中を預けて座るような格好で犯され、股を広げられ腕を羽交い締められる。

ヒフミは軽くイヤイヤと首を振り、アズサはなるほどニヤリと笑った。

「ふふふ……覚悟して、ヒフミ」

「あつ……だめ、先生に突かれながらアズサちゃんに一方的に触られたりしたら……♥」

恐怖か、期待か本人にも分かっていないように生唾を飲む。膣はキュンキュン収縮していた。

「あー、むっ♥」

この体勢だからこそ出来るとばかりに、アズサはヒフミの乳首を啜える。ちゅぱちゅぱ吸い立てながら、指はピンピンともう片方の乳首を弾く。同性だからだろうか、ギリギリを攻めたかなり激しい動きだ。

「ああー……っ♥ アズサちゃ、ちよ、ゆるしてえ♥ それすぐっ♥ イツちゃ、ああー……っ!」

大きく叫ぶような絶頂声を上げるヒフミ。うねりの激しくなった膣を、私のチンポが好き勝手蹂躪する。

当然のようにアズサの手も口も止まらない。

「だめっ! いっつ、でる、からあ! もうだめっ、いってる、いって

るのに、またイぐううつううう！」

もはや絶叫と言つても良い声をあげて、限界を超えた絶頂をキめるヒフミ。

ぷしやあああつ！ とヒフミの股間から透明な液体が噴出した。

真正面でヒフミの胸に吸い付いていたアズサは、下からシャワーを浴びたように胸にも腹にも脚にもヒフミの潮を浴びる。

ヒフミは大きく股を開いた体勢で全身を痙攣させて、虚ろな目で正面に顔を向けていた。ハイロウが揺らいで出たり消えたりしているので、本当に失神しかけているのだろう。

捲り上げられてフリルが首元を飾っている胸元は、アズサに吸われ弄られて乳首が唾液に光りビンビンに勃起しており、下は股間の部分を横にずらしてずっとセックスしていたせいですっかり伸びてしまい、ヒフミの昨日まで確かに処女だった性器を全く隠していない。

たった一度のセックスでこんなにも快楽に浸ることの出来るセックスの才能に、私はニツコリと笑顔でヒフミの頭を優しく撫でた。

「わわっ！ だ、大丈夫、ヒフミ？」

びちよびちよになりながらもまずはヒフミの事を気遣うアズサ。ペチペチとほっぺたを軽く叩き、目の前でひらひら手を振ってみせる。

「アズサちゃん……」

俯いて、ヒフミにしては低い唸るような声でアズサを呼ぶ……と同時に、手首を掴んだ。

「ひっ」

アズサすらも怯む迫力を出しながら顔を上げると、そこには満面の笑みがあった。

ヒフミは勢いよく立ち上がり、ぬるんっ！ とチンポが抜けたことで射精直後の私に痛みにも似た激しい快感が与えられる。

「次はアズサちゃんの番ですね♪ さあ先生、アズサちゃんももう濡れてるみたいだし、ズボツとヤっちゃってください」

「お、怒ってる？ ごめんね、ヒフミ」

「いいえ？ こんなに気持ちいいのに怒るわけないじゃないですか

……ねえ先生？」

そういうヒフミのこめかみには明らかに青筋が立っていて……

普段怒らない人を怒らせてはいけない、という教訓を、アズサは学  
ぶ事になるのだった。

「先生もですよ！」

「あああーっ♥ イツ、てるからっ♥ もうだめっ、もうだめえ♥  
クリトリスちゅーちゅーするのだめえ♥」

「ヒフミっ、もう、出ないからっ！ 手コキは勘弁してくれえ……！」  
その日は、昼頃になるまで用具倉庫に少女の悶え声という表現がふ  
さわしい嬌声が響き渡るのだった。

その後も後片付けは当然手伝ってくれず……シャーレビルでアフ  
ターピルを買うためのお金を握らせるまで、必死になってアズサと二  
人でヒフミのご機嫌取りをするのだった。

ん、主役は遅れてやってくる（シロコ）

この所、先生の所に行けてなかったから久しぶりに行こうと思っ  
た。

「遠出して買ってきたお土産、先生喜んでくれるかな……」

キヴォトス外周ライディングツアーとして800kmほどの道程  
を走破した私……砂狼シロコは、シャーレビルのすぐ近くまでやって  
きた。

上を見上げると、執務室の特徴的な形の窓が見える。窓際に先生が  
来ないかな、と少し期待して、会いに行くほうが早いと歩くペースを  
上げる。

ビルに入り、エレベーターホールで待つ。やってきたエレベーター  
に乗ろうとして、先客が降りようとしているのに気づいた。

頭一つくらい低い身長。ゲヘナの風紀委員長、空崎ヒナだった。

ちらりとこちらを見た後、会釈をして通り過ぎる彼女に、慌ててこ  
ちらも会釈する。

別に、ゲヘナに思うところはない。むしろ彼女には劣勢だったのを  
兵を引いてもらって謝罪までされたし、

それなのに、なぜか嫌な予感がした。

気づいたら眼前に爆発寸前の手榴弾が放り込まれていたような気  
分だった。

ため息を一つ、気を取り直してエレベーターに乗る。上昇中、なに  
か妙な臭いを感じた。

「空崎……先輩の、体臭？」

スン、と鼻をひくつかせて嗅いでみるが、なにか違う気がする。イ  
カミたいな、花みたいな、嗅いだことのない臭い。不思議と背筋が熱  
くなるというか……

ぽーん、と音が鳴って、執務室の階層に着いたことを知らせてきた。  
不思議と気にかかるが、今は先生に会いに行くほうが大事だと気を取  
り直して執務室に向かった。

「先生。こんにちは」

「ああ、シロコ。最近見なかった気がするけど、何かしてたの？」

私の事を気にかけてくれてくれた事に嬉しくなる。ゴソゴソと鞆からご当地お菓子をとり出した。

「前に言ったかもしれないけど、ライディングで遠出してきたの。バイトでお金を貯めたから、お土産も買った」

「おお、学校ごとに違う味なんて用意されてるんだ。今お茶を用意するよ、二人で食べよう」

「え？ 自分の分とアビドスの皆には用意してるから、それは先生が食べていいよ？」

「いいからいいから」

いそいそと、先生がコップに大きなペットボトルから麦茶を注ぐ。後でゆっくり食べてくれれば良いのに……でも先生のそんな優しいところも好き。

ふと、先生の汗の臭いがした。

どき、と胸が高鳴る。

(先生の匂い……ドキドキする)

自分の臭いを嗅がれるのは恥ずかしいけど、先生の匂いを嗅ぐのはやっぱりやめられない……と、もう一度鼻をひくつかせた所で、それに気づく。

「えっ……っ？」

ぞくり。

氷柱を背筋に突っ込まれたかのような、唐突な悪寒。

どうして自分が悪寒を感じたのか、遅れて気づく。

(さっきのと、同じ臭い……っ)

先生の汗の匂い。それに混じった、空崎先輩の臭い。そして……あの、奇妙な臭い。

どうしてだろう、胸がとてもざわつく。

考えてみれば当たり前の話だ。空崎先輩はさっきまでここに……執務室にいたに違いない。だから同じ臭いがしている。それだけのはずだ。

「おまたせ、シロコ」

先生がにこやかに近づいてきて、執務室の机の上にコップを2つ置いた。夏の日差しできらめいているそれは、汗をかいていない。ここに冷蔵庫はないので冷えていないのだ。下の休憩室なら冷蔵庫はあるが、先生と二人きりのお茶のほうが嬉しいから、これで良い。

「ん。ありがとう、先生。昨日皆と食べたんだけど、このレッドウィンター・ピロシキ味なんかはクセがなくてオススメだよ」

気のせいだ。そう思うことにして、先生と楽しくお喋りをする。

この日は、その後先生のお手伝いをしてから帰った。

翌日。家に帰ってから先生のこと……正確には執務室で嗅いだあの臭いの事が気にかかって、今日もシャーレに来てしまった。

「ふんふん♪」

ビルの自動ドアが開き、誰か出てくる。機嫌の良さそうなその声に聞き覚えがあった。

「ヒフミ？ えっ……どうしたの、その格好」

ヒフミは、水着を着ていた。トリニティの生徒が好みそうな女の子らしい白いフリルが、海も水辺もまるで見当たらない、陽炎さえ漂うアスファルトの道路には全く似合わない格好だ。

「わっ、シ、シロコさん!? あっ、えっと、これはその……あ、暑かったので!」

まあ確かに、今日も暑い。夏の間一度くらい、アビドスの皆と海水浴にでも行きたいな……とは思うけど。

全く無関係な往来で水着姿を晒すのはちよつとどころじやない勇氣が必要だと思う。

「そ、そう。ヒフミって意外と大胆だね……」

「ううっ、言わないでください……それじゃ私は帰りますから!」

パタパタと、ビーチサンダルで駆けていくヒフミ。私とすれ違うのではなく横に……シャーレビルの壁に沿って走っていき、曲がり角へと消えていった。

頭に火がつくかと思う位の日差しの中、またも悪寒がした。

すん、と鼻を動かす。

昨日と同じ、奇妙な臭いが漂っていた。

暑いからか、冷や汗かわからない汗がこめかみを伝い、ヒフミの行ったほうを見る。地下鉄駅とは違う方向だったので首を傾げていると、どるるん！と重たいエンジン音が聞こえる。気になったのでヒフミの消えた角まで行って覗いてみると……道に戦車が止まっていた。

「嘘……シャーレビルのそばに敵？ 手榴弾、手榴弾……」

ゴソゴソバッグを探る間にも戦車を注視すると、違和感に気づいた。

上からパラソルの突き出た戦車は、流石に見たことがない。

ギョラギョラと履帯の音を立てて、割と安全運転でこちらに近づいてくる。

「まさか……」

口の中で呟いた事に反応した訳でもないだろうけど、戦車が止まって上から誰かが顔を出した。

「シロコさん、そこにいたら危ないですから下がってくださいーい！」

ヒフミだった。

「ヒフミ、まさかそれに乗ってここまで来たの？」

本当に、見た目からは想像もできない大胆な子だ。水着で戦車に乗って先生に会いに来るだなんて。

(先生とも、水着で会っていたんだよね)

執務室で二人きり、薄着どころか水着のヒフミ。きつと先生はヒフミを褒めて、舐め回すように身体を見ただろう。

先生は割とエッチなのだ。自転車に乗った私の太ももとかもチラチラ見ている。パンツが見えてしまうかもと気になっているのだろうか。下にスパッツを穿いている事を知ったらどう思うだろう……とニヤニヤしたことはあったけど……

「そうなんです！ 夏の海と言えば戦車ですから！ 今はちよつとクラスの備品をお借りして……すぐ返さないといけないので、私はこれー！」

さつきまで、ヒフミが私よりも遥かに大胆な格好で先生のエッチな視線を独り占めしていたのだ……そう考えるだけで、ズキズキと胸

が痛む。

嫌な予感が止まらない。私は去っていく戦車から顔を背けて駆け出し、ビルに入る。

歩いただけで汗だくになったので、居住区にあるシャワーを浴びてから先生の居る執務室に入った。

「こんにちは、先生」

「あ、ああ！ シロコ、いらつしやい。今日も来てくれたんだ」

先生の顔が、赤い。確かに今日も暑いけど、ここはエアコンも効いているのに。それに……

「あの臭いが、はつきり残ってる……」

口の中だけで眩く。すんすん、と臭いを嗅いでいると、先生が歩み寄ってきた。

「ごめんね、暑くていっぱい汗をかくから、今消臭している所だったんだ」

「ん……それは良いけど。先生……」

臭いの事を訊こうとして、言い淀んだ。なにか、言っではいけない気がする。気づかなきゃいけないような、気づいてしまったらいけないような、理解不能の葛藤が生まれる。

俯くと、妙な臭いが強くなった。すうう、と深く吸うと、それが決して不快ではないことに気づく。

（ああ……先生の臭いなんだ、これ）  
すつんと、腑に落ちた。

理解、してしまった。

（これ……先生の、精液の臭い……なの？）

どつ、どつ、と心臓が早鐘を打つ。激しい運動をしたわけでもないのにこれほど動悸が激しくなった事は無い。

つまり……つまり。先生は。

（複数の生徒と……そういう事をして、る？）

怒りは、あった。私には犯罪をしてはいけないと口を酸っぱくして言っていたのに。自分は複数の女生徒と淫行なんて。

でも、怒りなんてどうでもいい位に、私は恐怖で震えていた。



(私……乗り、遅れた?)

よりにもよってゲヘナとトリニティの生徒で二股なんて。いや、対照的だからこそ先生はどちらにも惹かれたのかもしれない。

空崎先輩も、ヒフミも、私よりずっと可愛いし……きつと先生と接した時間もずっと多いのだろう。

私はどうしてた?

(アビドスの皆と過ごしてた。趣味のトレーニングとか、休日はバイトやライディングしてた)

全然、先生に関わってなかった。時間をかけて仲良くなれたら良いと思っていた。

忘れていたのだ。先生は皆の先生。私達アビドスの次に、ミレニアムとかトリニティでもお仕事しているらしい。

ライバルが多いことは分かっているつもりだった。だからって、もう肉体関係まで行っている人が複数居るなんて思ってもみなかった。

いやだ。始めることさえ出来ずに終わるなんて、絶対にいやだ。

「先生、ヒフミとさつきまで何してたの?」

ぎくり、と先生の身体が少しだけ強ばるのを感じる。

「な、何って……ヒフミと会ったの?」

「そうだよ。何か……変なこと、言ってた」

戦車で帰るとかなんとか、ね。

「へ、変なことって?」

私のカマかけに引っかけた先生は、笑顔が引きつっている。やっぱり、後ろ暗い事をしてるんだ。

「先生は……ヒフミが好きなの?」

「ど、どうしたの? えっと、好きだよ」

じつと、先生の顔を見つめる。動揺はしているけど……言葉に嘘は感じられない。

「空崎……ヒナ先輩と、どっちが好きなの?」

「ここで、先生は誰でも気づく位に目を見開いて驚きを露わにした。

「い、いやー、生徒に順番は付けられないかなー、なんて」

「じゃあ、私のことも二人と同じくらい……好き?」

照れる。それ以上に、怖い。先生から特に好きじゃないと言われてしまったらと思うと、膝が震えてしまう。

「ああ、勿論。私はシロコのこと大好きだよ」  
「じゃあ、」

出来るのか。やって良いのか。弱気の虫が騒いで仕方ない。けれど、ここで引いたら……絶対に先生の恋人には成れない。

「じゃあ……私にも、二人と同じこと……して」

震える脚を踏み出して、先生に抱き着く。空調が効いていても日差しがモロに入ってくる部屋の暑さで、お互い汗をかいている。先生の身体から立ち上る匂いを胸いっぱい嗅ぎながら、先生にも私の汗の臭いを嗅がれている事を思っ胸を高鳴らせる。

「シロコ……意味がわかって言っているの？」

先生が、私の肩に手を置いた。さっきまでの動揺が嘘のように、低くて優しい声で耳元で囁いてくる。

もう、顔が上げられない。これだけで満足してしまいそうになるほど、天にも昇るような心地よさだった。

先生が、私にエッチな事をしようとしている。そういう気配を強く感じさせる仕草だった。

「ん……エッチな、事……でしょ？ 私……か、身体、鍛えているから。きつと、その、先生を満足させられるよ」

自分でも何を言っているんだか分からない。でも、何でも良かった。先生の気を引きたかった。今の私は、そのためならなんだって出来た。

先生の指が、優しく私の顎を持ち上げる。目があった先生は、私の顔を覗き込んでくる。

初めて見る、先生の顔だった。私の心の奥深くまで見通すような、獲物を捉える直前の獣のような。きつとこれが、『雌』を目の前にした時の顔なんだと思っ、興奮で頭が真っ白になる。

近づいてくる先生の顔に、私は目を瞑って身体を委ねた。

シロコが突然私の情事に気づいた時には、ついに終わったかと思っ

たが……セフレ志望のようで首の皮一枚助かった。

しかし、まだ安心はできない。今日はとても暑いからわざわざここまで来る生徒は少ないとは思うが……それでも既に2人目なのだ。やっている時に3人目が来たら、私は終わる。

手早く済ませようとしてシロコを満足させられなくてもやはり終わる。

生徒たちが夏休みに入ってセックスの回数が増え、経験を重ねた成果を見せなければなるまい。

早速、シロコと唇を重ねた。緊張で力チカチになった唇を優しくほぐすように、ちゅ、ちゅ、と唇を軽く吸うだけのキス。緊張はまだ解れない。

シロコの鍛えられた細い腰を抱きよせると、私のシャツを握る手に力が籠る。縋りつくようなその手に、シロコの切ない気持ちを感じられる。目を開けられずにギョツと瞑って震えているのも、相まって、とてもかわいい。チンコがイライラしてしょうがない。

一旦口を離して、シロコの首筋に顔を埋めた。シャワーを浴びてきたのだろう、シャンプーの匂いとシロコの汗がうっすらと混じって甘酸っぱく爽やかな匂いがする。

それに、いつもは上着を着ているが今日は暑いからかシャツだけだ。うっすらとブラ紐が透けて見えるのがとても良い。シロコの背中を擦りながら、指先でブラの位置を覚えておく。

「あつ、だめ……臭い嗅がれたら、恥ずかしい……」

「とつてもいい匂いだよ。もつと嗅ぎたいな」

恥ずかしがりながらも、シロコも私の首筋の臭いを嗅いでくる。暫くそうやってお互いフンフン臭いを嗅いでいた。

最初よりは力が抜けて来たシロコのシャツのボタンを外していく。顔を赤くして、また身体を強張らせてされるがままになるシロコ。前が開いて下に着ていたキャミソールとブラの紐が私の目に飛び込んでくる。

羞恥に耐えきれなかったようで、シロコは胸元を両手で隠した。私はその隙にスカートのホックを外す。ジッパを下ろしてやると、ス

トンとスカートが床に落ちた。

「なっ！ せ、先生！」

「どうしたの？」

手を股間にやり内股になってパンツを隠そうとするシロコだが、そのくねくねした動きがむしろ興奮を煽るものだど気づいてはいないようだった。

「う、うう……あの2人とも、こんな事してたの？」

「まさか」

ついさつきまで、倉庫から持ってきたマットの上で牛柄Vストリング水着を着たままのヒフミにガニ股騎乗位で精液を絞ってもらっていたのだ。

ヒナの方も最近アナル開発をさせてくれるようになり、毎回じつくりねつとりとシワが無くなるくらいにアナルを舐め回している。

「2人とはもつとすごいことをしてるよ」

「も、もつと……!!? ……分かった、もつと、すごいこと……して」

キツ、と強い決意を感じさせる表情をするシロコ。隠していた手をゆつくりと解き、仁王立ちになる。上ははだけた制服のシャツにキャミソール、下は水色のショーツに靴と靴下という格好ながらも、エロさより美しさを感じさせる堂々たる立ち姿だ。

うつつすらと割れた腹筋、スラリと長い脚と引き締まった太もも。そう言えばスポーツブラではないんだなど、スレンダーな胸を見る。ショーツと同色のブラ紐がキャミソールとは別に見て取れる。

「そんなに気負わなくても良いよ。シロコは始めてだから、ちゃんと優しくする」

「そう……なの? でも……ううん、分かった。先生の好きな風にして」

氣勢を削がれたようにまたモジモジするシロコだが、私はもう我慢の限界だった。抱きしめるようにシロコに迫ると、首筋にキスをしながら太ももを撫で回す。

「ひゃあっ!? あっ、そ、そんな所、いきなり触ったら……」

「大丈夫、シロコは力を抜くことだけ考えて」

祈るように胸の前で両手を組み、シロコは努めてリラックスしようと目を閉じて深呼吸を始めた。その機会をありがたく使わせてもらって、ついにシロコのショーツの中心……柔らかい布に包まれた、それ以上に柔らかい雌肉に触れる。

「っ!!」

シロコが鋭く息を呑む。抵抗しない事を確認した私は、ゆっくり慎重に、薄布越しのシロコの性器の感触を楽しむ。

私の指がシロコのショーツを擦る音が、密やかに執務室に響き渡る。シロコの震えながらの深呼吸の音、エアコンの駆動音さえはつきり聞こえる静寂だった。

布越しに感じるシロコの性器は、とても形が良さそうだった。真ん中を往復し、股間の三角形に満ちる熱く湿った空気を堪能しながら、膣口を探ると……既に濡れた感触が伝わってきた。ニヤリと笑みを浮かべてから、クリトリスを親指の腹でぐりりと軽く潰してやる。

「あっ♥」

ついに、シロコの口から甘い吐息が漏れる。

そう言えばマットが今なかったなと思い、一旦手を止めて腰を抱いたまま歩かせ、机の上にシロコを腰掛けさせた。

ショーツに指をかけ、脱がそうとする。がつ、とシロコの手にかから掴まれた。

「ちよっ、ちよっ、先生……!」

元から白黒の左右の目を更に白黒させて、シロコが哀願のような非難のような、複雑な目で私をみてる。

「これからもっとすごいことするんだよ?」

「う、うう……」

そつと、シロコの手が離れていく。

「腰、浮かせて」

自分から脱がすことを許可させた上、脱がす手伝いをしてもらう。シロコは顔を真っ赤にしながら、後ろに手についてお尻を浮かせてくれた。

するりと私の手の中でショーツが丸まっていき、8の字の布として

シロコの股間から離れていった。机の上にパサリと落ちたシロコのショーツの股間は性器の形にシミが出来ている。

私は跪き、シロコの脚を開きながら性器に顔を近づけた。

すうーっ、と鼻から深呼吸する。シャワーを浴びたてとは言え、暑さに蒸れたシロコの股間の香りだ。饅えたような臭いの中にも一欠片の獣のような臭いが混じっている。

「先生、お願いだから、そんな所嗅がないで……うう、絶対変な臭いするのどうしてそんな所を嗅いじゃうの……」

これまでに嗅いできた生徒たちのマンコの中でも一番強い臭いを放つそこを嗅がれて、シロコが耳まで真っ赤になって涙目で私をみていた。

確かに臭いは強めだから女の子のシロコが気にするのは分かるが。

「とてもいい匂いだよ。ほら、嗅いだけでこんなになっちゃった」

立ち上がって、ズボンを脱いでフルボツキしたチンポを見せつける。

「うあ……」

シロコは目を見開いて絶句してしまった。これ幸いと、私はクンニを再開した。

「あっ ♥ そんなとこ、舐めるなんてっ ♥」

中央を満遍なく舌で舐めあげるだけで、シロコの全身が震える。頭を掴まれるが、制止されることはなくシロコの芳しいマンコをぴちゃぴちゃ音を立てて舐め続けた。

シロコの愛液は臭いと同じく濃く、舌に絡みつくようにヌメリがある。舌がピリピリするくらいに刺激と苦味のあるそれを舐め取る度に身体が熱くなり、勃起が強くなる気がした。

しばらく舐めると十分に濡れてきたので、勃起していたクリトリスに狙いを定め、尖らせた舌でぐりぐり突いて刺激する。

「んっ ♥ あああああっ ♥」

執務室にシロコの大きな声が響き渡る。どうやらクリトリス舐めはお気に召したようだ。膣口に小指を入れてマンコの仕上がり具合を確かめながらクリトリスを舌先で突き、包皮の上から優しく舐め回

し、口に唾液を貯めてフェラのように啜えこんで吸いたてる。

「あーっ♥ あああーっ♥」

経験のないシロコはされるがままに快楽に打ちのめされている。いつの間にか、手で押さえつけるよりも大きく股を開いていた。

感じ始めることでほぐれてきた処女マンコに指を入れる。どうやら人差し指と中指の2本なら痛みもなく啜え込めるようになったようだ。

頃合いとみて、口を離して立ち上がる。シロコは、惚けたようによだれが垂れた唇を半開きにして私の股間を見ていた。

いつかの日を思い出す。教室で机に腰掛けたシロコと差し向かいで話したあの時と、ほとんど同じ体勢、位置関係。それなのにシロコは私に犯されるのを待つばかりの無防備なマンコを晒し、濃い愛液の臭いを部屋中に撒き散らしている。

そう言えば、と放置していたキャミソールの裾に指をかけて上げていくと、シロコは無言のままにバンザイして脱がすのを手伝ってくれた。シンプルなブラが可愛らしく、優しく抱きしめるようにシロコの背中に手を回し、ホックを外す。そのまま脱がせると、待望の乳房を挿んだ。

「おお……とつてもエッチだよ、シロコの胸」

乳輪はやや大きめという程度だが……乳房の小ぶりさに比して乳首の大ききのほうが目立つ。触ってもいないのに、これまでのクンニで固く勃起したそこは、親指の先くらいの太さがあった。

「そ……そう？ バランスが悪くて不格好だと思うけど……先生が喜んでくれるなら、良かったかな」

真つ赤な顔で、強がるようにぎこちない笑みを浮かべて私の寸評を受け入れてくれた。

シロコへの愛おしさのままに、乳首に吸い付く。

「んっ♥」

乳首の感度も悪くなく、股間とともにゆったり刺激してやると私の舌の動きに応じてマンコも締まった。

くちゆくちゆと股間の責めを絶頂ギリギリまで高め、そこで中断し

て乳首を全力でせめてやる。

「はああっ♥ う、そ、乳首、で、イツ……♥」

がくん、と身体を丸めるように大きく全身を痙攣させ、シロコが絶頂する。処女を失う前に乳首絶頂を覚えたシロコは、荒い息で絶頂の余韻に浸っていた。

「さあ、シロコ。そろそろ入れるよ」

我慢しきれなくなった私がそう言うと、シロコはぼうつと顔を上げるだけでまだ惚けている。立ち上るシロコの匂いに包まれながら、我慢汗を垂れ流すチンポをシロコの開いたままの股に押し当てた。

ぬちゃ、と粘り気の強いシロコの愛液に包まれ、スムーズにチンポが入っていく。程なく、肉の膜に行き当たった。

「シロコの処女、私がもらうよ」

改めてそう言うと、シロコはゴクリと生唾を飲み込んだあと、濡れた瞳で私を見つめた。

「いいよ……ね、先生」

「ん？」

シロコは口をはくはくと何度か動かした後、意を決したようにじつと私の目を覗き込んでこう言った。

「好き。私、先生のこと、好きだよ」

痛いほどに真っ直ぐな、胸に突き刺さってくる愛の告白。それを受けて、

「ああ。私もシロコのこと好きだよ」

汚い大人は、本気の愛の告白を本気で受け取って、ただ不誠実に性欲のため生徒の処女膜を突き破って腰を進めた。

ぷちん、と軽い振動と共に処女膜を破る。

「くっ」

短い苦悶の声。机の上に出ていた大きな愛液の水たまりに、破瓜の赤が交じる。

「はあ……はあ……」

シロコはしばらく眉をしかめて息を整えていたが、程なくまた私を見つめて言った。



「ん、もう大丈夫だよ、先生。……好きなように、動いてほしい」

額面通りに受け取れる言葉ではないが……シロコの強い決意に押され、私は腰を振り始めた。

「うっ、んくっ……」

シロコの膣は柔軟性に富んでいて、大ぶりのヒダが腰を振る度に心地よくチンポを撫でてくれる。更にはとても熱く、ローションのようにぬめりのある愛液と相まって、シロコに全身を包まれて風呂で洗われているかのような心地よさがあった。

奥まで突くとキュンと瞬間的に強く締め付けてくれ、シロコの鍛えた身体がセックスに使われている事を強く感じさせた。

「シロコ。シロコのマンコ、すごく気持ちいいよ」

そう言つて褒めてやることでも、シロコは締め付けを強くしてくれる。

「おおっ、今の、その締め付け凄いいっ」

「こ、……こっとう？ んっ♥」

シロコは目を閉じて眉を寄せ、マンコの感覚に集中し……キュンっ♥ と締めてくれる。

「ああ、それ……凄い、良いよ……」

思わずうつつとりと感想を漏らした私を見てどう思ったか、シロコは軽く目を見開いて口元を綻ばせた。

「なら、もっとしてあげるね。こっとう、こっとうっ♥ あっ♥ これ、私も、気持ちいい……♥」

打つて変わって楽しんで、自分からユラユラと腰を動かして不定期にマンコを締め付けてくれる。処女とは思えない淫らなサービスに、思わず私の腰の振りが速く、強くなった。

パン！ とシロコの鍛え上げた下腹部と私の下腹部がぶつかる。ほとんど小波さえ立たない贅肉のない美しいお腹が眩しく、ペタリと手を置いた。

「ひゃっ、え、どうしたの先生、ああっ♥ そんな所、手を置いたらすぐったい……んっ♥」

後ろに手について身体を支えている姿勢上、腹筋にも力が入ってい

るのか……適度な硬さを保っている。その胎の中で今まさにチンポに突き上げられて弄ばれている子宮の存在を感じ、ぐんぐん射精欲が高まっていく。

「シロコ。中に出していい?」

シロコは一瞬目を丸くしたが、ゆつくりと頷いた。

「良いよ……他の2人にも、いつも中で出してるの?」

「いいや、皆と初めての時だけ生でしてるんだ」

「みん……? あうっ♥ 先生、それ、つよいつ♥」

何やら言おうとしたシロコだったが、私はもう限界だった。限界まで腰を引き、思い切り打ち付ける。処女を相手にしているとは思えないスムーズさで腰を振りたくる。

「ああっ♥ すごいよ、先生、あたまっ♥ びりびりくるのっ♥」

そう言いながらも、シロコはキュンキュンとマンコを締め付けるのを忘れず、徹底して私を楽しませようとしている。

「シロコっ、シロコッ! とても気持ちいいよ、私のためにマンコ締めてくれてありがとうね!」

「うれしいっ♥ 私で、いっぱいっ♥ 気持ち、よくなって♥ 私が一番、先生をっ♥ 気持ち、よくしてっ♥ あげるからっ♥」

乱暴なほど強いピストンで揺らされながら、シロコはうわ言のように熱情を帯びた言葉を紡いでいく。

そのいじらしさをチンポで存分に感じながら、一番奥にある子宮をめがけて腰を突き出す。ぷりぷりした子宮口にチンポを押し当てながら、精を解き放った。

「ああああっ♥ でてるっ♥ 本当に、でて、るう……♥」

同時に絶頂したシロコが、くたりと後ろに支えていた腕を曲げ、肘をつき、ついには机に仰向けに寝そべった。絶頂でうねる上に、それでもなおシロコの意味で膣を締められて、射精中の私に強すぎる快楽が走る。

「ぐうっ……!」

しかしそれがまた射精を促し、どくん、どくとシロコの汚れなき子宮に遠慮なく精液を注ぎ込んでいく。

「あ、あーーーーーっ……♥」

これまでとは違う、すすり泣くような、気の抜けるような声でシロコが嬌声……いや交尾のときの鳴き声という方が近いそれを上げて歓喜に打ち震えていた。

ぼろり、と天井を見るシロコのまなじりから大粒の涙が溢れる。

チンポで射精を注ぎ込んでいる私は、その涙が喜びからくるものだとなんとなく分かった。証拠のように、これまで180度近く開いていたシロコの脚が私の腰に絡み、精液を一滴残らず吐き出していけばかりにシロコから腰を押し付けて子宮口に当たるように調節してくれている。

「ああ……先生……好き、好き……♥」

私の射精を誤解なく求愛行動だと受け止め、満面の笑みを浮かべて言葉で返事をしてくれるシロコは……今まさに生殖欲求の化身であり、誰よりも女性らしく美しかった。

射精している最中なのに、また勃起が回復していく。

「もつと、もつと先生の精液、ちょうだい……♥」

涙と興奮でキラキラと輝く瞳のシロコに覆いかぶさり、机をきしませて上からピストンを再開する。ぶっじゅー！ぶっじゅー！と愛液と精液がシロコの膣から押し出され、下品な音を立てて机の上の水たまりを更に広げていった。

無我夢中で腰を振り、何度目かの射精を終えると、もう数時間経っていた。

机の上の水たまりは、端に流れる滝の水源地となっている。

(しまった、これ以上は流石に危険すぎる)

既に誰かに見られている可能性すらあった。それほどにシロコの『お誘い』はひたむきで、底なしだった。

「はあ……♥ はあ……♥ 先生……もう、おしまいなの……？」

緩んだ笑みを浮かべ、シロコが射精しきって萎えた私のチンポを見る。

「ああ、流石に打ち止めかな。それより、早く後始末しないと大変だ。

「ごめん、シロコも手伝ってくれる?」

「良いよ。私もすぐく……楽しめたから♥」

そう言つて、シロコはベロリと長い舌で舌なめずりをし、口元の私の唾液を舐め取った。

セックス前のガチガチに緊張していた姿が信じられない位に慣れ切っていて、心から交尾を楽しんでいるのが見て分かる。

シロコが寝そべっていた机から身体を起こすと、まず背中が机と糸を引く。精液と愛液がベツタリとついた机にベチャリと手をついて尻を移動させようと浮かせると、糸どころか柱のように太い線が尾を引いていた。

全裸に膝までの白ソックスとスニーカーだけのシロコが身体をひねり、自分の尻を見ようとする。

「うわ……凄いベトベト。先生、こんなに射精したんだね……♥」

戦果に満足するかのような薄笑いで私に流し目を送るシロコ。時間があればもう一発やりたいが、流石に無理がある。執務室出口すぐのトイレからホースを引っ張ってきて、机の上に放水して愛液と精液を押し流す。マンコ丸出しのシロコがモップでそれを拭い、流石に危なすぎると着替えを先にするよう指示する。

顔をしかめながら鞆から出したハンドタオルで背中と尻を拭いたシロコが制服を着て、精液を絡め取ってベタベタのモップをトイレの流しで洗い落とす。

奇跡的に誰かが来ることもなく、大雑把だが掃除が終わった。消臭スプレーを部屋中に撒きまくり、消臭ビーズを机に配置する。

「そうだ、シロコ。下のコンビニで避妊薬が売っているから、お金を出すからそれを飲んで帰ってね」

「いいよ」

シロコは、にこやかにそう言った。

「えっ……」

「避妊なんかしない。だって大好きな先生との子供だから。妊娠したらちゃんと産んであげたい」

さつきまでの乱れ方が嘘のように慈愛の笑みを浮かべて、ゆったり

と下腹部をさするシロコ。

「ええ……いいの？」

「これは流石に予想外だった。

「良いに決まってる。先生、妊娠が分かっていたら教えるね。籍を入れる準備お願い。大人だから分かるでしょ？」

「あの……」

「私もマタニティ雑誌とか読んでおくから。子供出来たら、絶対、結婚しようね」

有無を言わさぬ強い目力で、私の発言を封殺する。

「それじゃ、……今日はとても嬉しかった。……大好きだよ、先生♥」  
「ばいばい、と小さく手を振って、シロコが帰っていく。私は黙って見送るしかなかった。」

それから半月ほど、眠れぬ日々を生徒とやりまくって過ごしていたが。

「先生、生理来ちゃったからもう一回精液お願い」

ギリギリの所で、破滅……あるいは幸せな終焉……は回避され、シロコとはゴムセックスした。

そして、シロコには今後コンドームを破る用の針を持ち込まないよう嚴重注意の上家に帰すのだった。

オールメスガキニードイズワカラセ（ムツキ・シロコ・コタマ）

「ねえン……♡ 先生……♡」

シャーレ執務室。おなじみになってきた床に敷いたセックス用マットの上で、寝そべった私にシロコが全裸で跨り、ソープランドのプレイのように伸し掛かって胸も腹もピッタリと私にくっつけている。

当然チンポはシロコのマンコに突っ込まれ、汗気たつぷりのそこをゴム突きチンポが痛々しい位に拡げていた。

シロコは全身を使って前後運動をして、胸をこすり付けると同時に膣でチンポをしごきたてる。

「ナマでシよ……♡ 私のオマンコ♡ 絶対気持ちいいよ♡ 先生だってナマ、好きでしょ？」

鼻にかかった甘ったるい声。

私にバツチリ目を合わせてくる、潤んだ瞳。

普段のシロコなら絶対にしない態度を全開にして、私を誘惑する。

しかしまだまだ付け焼き刃なので、幼い女の子が遊びをねだっている様な感じもしていた。

「はいはい、いつかね、いつか」

「むう……まだその気にならないか。ナマでしたくなったらいつでも連絡してね、先生。モモトークで呼んでくれれば、24時間いつでもナマで膣内射精させてあげるから」

口をへの字にして、媚び媚びな態度をやめるシロコ。

既成事実を作って最短で籍を入れようとするのは困ったものだが、この明け透けな好意はとても好ましい。チンポが滾ってくる。

「ナマは出来ないけど、十分気持ちよくしてあげるから」

「ん、ありがとう、先生。私、もっともっと先生のこと好きになるね……♡」

果たしてどこまで行き着いてしまうのか、怖いもの見たさと言う感

じではあるが……そのカモシカのような鍛えられた美しい脚を私の脚に絡みつけているシロコの、むっちりとした筋肉の乗った尻をわしづかみにして下から突き上げ初めた。

ばっふ、ばっふと密着した肉が離れ、面で打ち合わさる間抜けな音を響かせながらシロコも腰を使って二人で仲良く高めあつていく。

「すきっ♥ 大好きだよ、先生っ♥」

「ああっ、私も、好きだよシロコっ！」

セックスの時限定の、刹那的な愛の告白。

シロコは健気に両腕で私を抱きしめ、両脚も私の脚に絡め、更にはマンコもギユウギユウに締め付けてくる。

シロコの穴自体は緩トロ系なのだろうが、鍛え上げた下半身の筋肉で締め付ける事により肉厚のキツキツ系マンコに瞬時に変化する。奇しくもシロコのオッドアイのように二面性を持った、ナマで味わえばすぐに達してしまうかもしれない極上のしごき穴だ。

しかしそれは流石に我慢して、ゴム越しにシロコの愛情たつぷりの膣奉仕を堪能し、押し付けられた美乳の勃起乳首が胸板をくすぐるのを感じつつ射精する。

「ああっ♥ 先生の、子種、私に出てる……♥」

うっとりとして、いつか自分が子供を孕む時を夢見るように目を細めて膣内射精を堪能するシロコ。

その眩しい笑顔をオカズに、シロコの子宮口にパンパンになったゴムの精液だまりを押し付けるように射精する。

そのまましばらく、汗みずくのお互いの身体を密着させて絶頂の余韻に浸っていた。

「はふ……♥ 今日もすっごく気持ちよかったよ、先生」

軽く触れるようなキスと共に、ジョギングした後のような爽やかな笑みでシロコがお礼を言ってくれる。

その汗に蒸れた髪に手を入れてくしゃくしゃと頭を撫でると子犬のように目を細めた。

「はい、カットー。おふたりさん、そろそろ私のこと、思い出してくださいね」

そして、コタマが私たちに声をかけた。

そう、私達のセックスの一部始終を撮影していたのである。『新入り』のシロコは私のセフレが二桁に達したことを知り唾然としていたが、ならばと戦略を改め、積極的に通いセフレとして私の子を妊娠しようとする誘惑を繰り返している。

そんなシロコが、コタマに説明されて自分主演のAVの撮影を依頼したので。曰く、

「私達だって毎日先生と会いたいですけど、お互いに用事とかありませんから。会えない日はこれで自分を慰めるんです」  
だそうだ。

何回か見せてもらったことはあるのだが、主に私の顔とかがアップになっているのでヌキどころが一番使えない感じになってしまっている女性用AVだった。

「先生に機材を買うお金を出してもらえば、視点を自由にできるVR動画も撮影できますが？」

私が微妙な顔をしている事で内心を悟ったか、コタマが微笑んでそう続けた。

「いや、やめとくよ……私は皆を直接抱いたほうがいいし」

シロコを横に寝かせて立ち上がり、コタマの方に歩いていく。

後ろでゴソゴソとシロコが股間をティッシュで拭っている気配がする。

ぴろん、と電子音が鳴った。

「コタマ先輩、入金済ませたよ。受け取りは先生から、だったよね？」  
「はい、確認しました。先生もシロコさんも、取り扱いにはくれぐれも気をつけてくださいね……んっ♥」

身支度を整えるシロコを後目に、私はコタマの太ももをねつとりと撫で上げていた。

コタマのAV撮影は料金が媒体代に少し上乗せした程度で、ノドカなどはもう何本も撮影している。それと同時に、コタマとも撮影後にセックスするのだ。

コタマ自身にもインセンティブがある事も手伝って、私のセフレは



皆……勿論ヒナだけは何も知らないのだが……素人AV嬢でもある。  
「じゃあね、先生。明日と明後日はバイトだから、3日後にまたセックスしようね」

「ああ、またね、シロコ。もっとバイト頑張ってもいいよ」

「先生の子供を身ごもったら家で出来るバイトを沢山やるよ」

さつきまで媚び媚びのセックスを楽しんでいたとは思えない、普段どおりの立ち姿のシロコが部屋を出ていった。

「先生、シロコさんばかりじゃなくて私も見てください」

くい、と入り口に向けていた私の顔をコタマが両手で挟んで向き合わせる。

「ふふ、ごめんごめん。今はコタマだけを愛してるよ」

スレンダーなその肢体を抱き寄せて、耳元で愛をささやく。

「ふああ……♡ もっと、もっと言ってください♡」

「大好きだよ、コタマ。いつも助けてくれてありがとう。これからもずっと一緒だよ」

「あああ……♡ もう、イキそ……♡」

相変わらず私の声が大好きなコタマは、普段どおりに見えてノーパンの股間から愛液を床に滴らせた。

脚以外の肌を晒さない制服にジャンパー姿で、真っ白な太ももを昂奮で紅潮させて、内股を愛液でぬるぬるしているコタマの姿に、射精したてのチンポがみるみる回復する。

「今日は服を着たままのコタマを犯したいな」

「はい、先生のお望み通りに。……ゴムは、なくても良いんですよ。」  
クスリといたずらな笑みを浮かべて、コタマは短いスカートをたくし上げて何も穿いていない下腹部を晒した。

「それは付けさせてもらおうよ」

マットに脱ぎ捨てられた自分のズボンからゴムを出して装着すると、コタマは仕事机に手をつけてジャンパーの裾ごとスカートをめくって丸出しにしたお尻を突き出していた。

「はい、どうぞ、先生。今日もいっぱい、私に愛を囁いてくださいね……♡」

聖母のような慈愛の笑みを浮かべて私を待ち受けるコタマに後ろから押し掛かって、今日もセフレとのセックスを楽しむのだった。

「なーに、先生。指輪なんか出しちゃって。くふふっ！もしかしてえ、ムツキに愛の告白、してくれるの……？」

翌日。シャーレの執務室にやってきたムツキを見て、前から用意していた小道具を取り出した。

「ある意味、そうかもね」

にっこりと笑顔で返事をする。

生徒とのセックスを経験していない頃の私ならともかく、今やムツキの誘惑など子供がじゃれているのと同じだ。

ムツキは一瞬目を丸くして、つまらなさそうに唇を突き出した。

「えー、何その態度。なんか余裕そうでつまんなーい！」

「ちよつと前に、ムツキがいたずらに使った勝負があつたでしょ。ブレスレットを付けて、心拍数が上がったら電流つてやつ」

あときはムツキがブレスレットの電源を入れていないというイカサマをして、勝負はお流れになった。

「えっ、えー、そんな事あつたかなー？」

ムツキがわざとらしく目を逸らした。私は無視して続ける。

「あの時は痛い電流だったけど、これは気持ちいい感じなんだって。無線給電で電源オフ機能もないからイカサマも無理だし、今日はこれでムツキと遊ぼうと思つたんだ」

「えへへ……先生に遊んでなんて言われたら断れないよねー。じゃあ付き合つたげるー！」

無邪気な笑みを浮かべて、私の誘いに乗るムツキ。

早速、その小さな手を取った。

「さ、指輪を着けてあげるね」

「ひゃー、先生つたら、私の手を取って指輪をつけるなんて、ダ・イ・タ・ン♥」

そう茶化しながらも、ムツキは少し顔を赤らめている。これも照れ隠しなのだろう。

とてもチンポがイライラする。

私はうやうやしくムツキの手を取って、そっと左手薬指に指輪をハメていった。

「えっ……♡」

その指のチヨイスに面食らったか、手を眼前に持つてきてぼーっと赤い顔で指輪を眺めるムツキ。

「んっ、ああんっ♡」

突如、指輪を付けられた左腕を縮こまらせてムツキが声を上げた。ハツと我に返り、私を睨んでくるムツキ。

「ううう、こんなのに引つかかるなんて……」

不覚にも私にときめいてしまったことで気持ちいい電流を食らってしまったムツキは心底悔しそうだった。

「ははは。じゃあムツキが私に指輪をつけてみる？」

「い、いいよ、先生もドキドキして変な声上げちゃえ！」

にたあ、と精一杯の邪悪そうな顔で私の手を取るムツキ。小さな女の子の手が私の手を握るくすぐったい感覚が心地いい。

しかし、いざ私に指輪をはめようとした所で、その手が止まってしまふ。

「……………ひゃうんっ♡」

そして、何もしていないのに私の手を掴んでいた左手を縮こまらせてしまう。

「くっ、うううー……………」

自分が指輪をはめることさえ意識して心拍数を上げてしまった羞恥で、ムツキは顔を真っ赤にして盛大にしかめた。

「やーだ、やーだー！ 私ばかり負けるゲームなんてやーだー！」  
そしてダダをこね始める。ムツキはイタズラをしたいのであって、弄られるのは苦手なようだ。

丁度いい、たっぷりとお灸を据えてあげよう。  
そしてセフレにしよう。

私は決意して、逃さないようにがっしりとムツキの手を握る。

そもそもこの指輪、あまりにも売れなすぎてブラックマーケットの故買屋で捨て値だったのを購入したものだ。

マッサージ器具だったはずが、乳首や首筋の性感帯を刺激するという卑猥なものになってしまったため発売すぐに販売停止となった曰く付きの製品である。

商魂たくましい開発元は、路線を切り替えてジョークグッズとして再利用したのだが……キヴオトスには犬とロボットと女学生位しか居ないので、一般向けからの転向で在庫がダブつきすぎてこれも安売りで入手できた。

つまりさっきのムツキは乳首や首筋にピリリとした快感を感じていたはずだ。

チンポのイライラをなんとか宥めながら、ムツキに再度指輪をはめさせる。

「くっ、んんっ♥」

ムツキは何度か指輪を発動させてしまいつつ、なんとか私に指輪をはめる。

「ふう、ふう……もうこうなったら先生にまいったって言わせてやるんだから！　それで、先生。ルールはどうするの?」

恥ずかしすぎてムキになったムツキが勢い込んでそう聞いてくる。

しかし、その姿勢は不自然に猫背になっていた。

多分、連続して電流を受けて乳首が勃起してしまったのだろう。制服の上着を着ているのだから外から分かるわけではないのだが、私の前で乳首を勃起させている事を過剰に意識してしまっているらしい。

「そうだな、両手を繋いだままでお互いを触って、相手がまいったって言ったら勝ち、でどう?　勿論、負けた方は言うことを何でも聞く」「ふ、ふーん?　くふふっ、良いのかなー先生。前の勝負の時、私に一発で負けちゃったの、覚えてないのお?」

さつきしらばつくれた事はすっかり無かった事にして、ムツキが普段の悪戯な笑みを見せる。

だが普段より動揺しているというものはつきり感じ取れた。ムツ

キとも、もう知らない仲ではないのだ。

「リベンジマッチつてやつだよ。さあ、始めようか」

イスを二つ向い合わせて、膝を突き合わせるように座る。

私はムツキの小さな手を恋人同士のように指を絡めて繋いだ。

「んんっ♥ く、くふふっ。私の魅力で先生をのーさっしてあげるっ  
！」

すでに顔が赤いムツキが、ぴくぴくと繋いだ方の腕を震わせながら逆の腕で私の手を取った。

しかし恋人つなぎではなく、私の手の甲の上から一方的に掴むやり方だ。

「ムツキ、そのつなぎ方でいいの？」

余裕の笑みを浮かべながら、指でムツキの手の甲を愛撫する。

「ひゃうっ、んきゆうんっ♥」

ムツキはくすぐったさに身を振った後、快感で心拍数を上げてしまったことで強めの電流を受けて身悶えた。

「ほらほら、こういうつなぎ方でないと攻撃出来ないよ？」

私はなおもねつとりとムツキの手を愛撫する。

これまで何十回とセフレを相手に使ってきて、私の性技の腕も上がっているようだった。

「ちよ、先生、やめっ、あっ♥ ひっうっ♥ だめ、だめっ♥♥♥」

傍から見ればムツキは独りで勝手に身悶えているように見えるだろうが、私の手の愛撫が間断なく指輪の電流のトリガーとなり、ムツキの乳首はビンビンに勃起しているはずだった。

「あつく♥ あ、あああっ♥」

もう顔を上げている事もできず、身体をくの字に折って細い足をギョツと内股同士でこすり合わせている。

明らかに、絶頂していた。

服の下もまだ全く見ていないというのに、悪戯ばかりしてくる小悪魔のような生徒のイキ声を先に聞いてしまうという行為にチンポのイライラは最高潮だった。

「あっ、うづうづううーっ……」

羞恥のあまり、ムツキが俯いたまま顔を上げない。声もどこか泣いているように震えていた。

「ムツキ、参ったする?」

「し、しないもん! 絶対、先生にまいったって言わせてやる!」

真つ赤な顔で、ムキになつて続行を選ぶムツキ。乙女として痴態を晒してしまった事で引くに引けなくなったのだろう。

完全に私の術中にハマっていた。

「あつ♥ ふうふう♥ ほら、ほら、気持ちいいでしょ、先生、くふつ♥ ふうふう♥」

乳首イきを堪えたままの引きつった笑みで、いつものようにくふふと笑おうとするムツキが愛おしい。

手の握り方を変え、頑張つて私のマネをして愛撫しているが、指の長さが足りないので多少くすぐったいだけだ。

「ふ、ふうふう〜♥ ど、どう? せん、ひっぐ♥」

両手を握っていても耳の穴に息を吹きかける事はできると気づいて実行するも、直後に私から無防備な首筋にキスをしてやると、すぐに甘イキしてしまうムツキ。

「はっ♥ くっ、あああつ♥ だめっ♥ そんなの反則っ♥」

口技を使ってしまったことで私からも耳にキスするというアクションを引き出してしまい、乳首の快楽が混ざる事により耳の性感帯を自ら開発してしまうムツキ。

「はあ……はあ……はあ……♥」

ついにムツキは、私と繋いでいる手だけを残してぐったりとへたり込んでしまった。

「ほらムツキ、参ったは?」

「ううう〜……ううううううう〜!」

ムツキは往生際悪く渋っていたが、繋いだ手を痛いくらいに握り締めてきてから、

「まいっ……た」

ものすごく往生際の悪い降参宣言をした。

「ははは。やっとムツキに勝てたよ」  
するっと両手を解く。

それと同時に、ポケットに忍ばせていた指輪ケースのような箱を取り出した。

「じゃあムツキには、これを着けてもらおうかな」

「えっ……そ、それ、もしかして、本当に……ゆ、ひくうっ♥」

まるでプロポーズでもするかのような絵面に、ムツキがまた乳首イキしてしまう。

ムツとした顔で乱暴に指輪を引き抜くの見ながら、私は箱を開けて見せた。

「ま、まさか本当に先生ってば私の事をあい……ん？　これ、ちよつと小さすぎない？　もう、先生ってばいくら私が小さくて可愛くても、指輪のサイズくらい調べなよー♥」

それは、ぱつと見指輪に見える金属の輪だった。

勘違いしたムツキが上機嫌にそれを手に取ろうとするのを制して、私は補足する。

「大丈夫、これはフリーサイズだからね。ムツキに合わせてピッタリと縮むようになってるんだ」

「縮むって、元から小さいんだから縮むしかできなかつたら駄目じゃん、先生のオ・マ・ヌ・ケ♥　でもでも、ムツキちゃんにプロポーズしたいって気持ちはとっても嬉しいな♥」

乳首でいきすぎてバカになっているムツキが浮かれ続ける。

チンコのイライラが限界になって、私はムツキを抱きしめた。

「ちよ、ちよ、先生？　私のことを愛していると言っても、これはちよつと急すぎだよ？」

戸惑った声を上げるムツキのスカートに躊躇なく手を入れた。

ぬちやり。股間に指を這わせると、すでに愛液でグシヨグシヨに濡れている。

「わっ、わっ！　だ、だ、駄目だよ先生、こんな事するの犯罪だよ、捕まっちゃうよ？」

いつも余裕ぶっていたムツキの声が、哀れなくらい震えている。軽

く無視してシヨーツを無理やり横にずらしてマンコを露出させる。

「さつきからぐしよ濡れで気持ち悪かったでしょ？　これからもつと濡れちゃうから、もう脱いでおこうね」

「やめて、先生！　こ、ここのういの、私、好きじゃない、かな」

押されると急激に臆病風を吹かせ始めるムツキに昂奮しながら、抱きしめて動きを制しつつスカートをめくってマンコを晒した。

「ぎゃーっ……むぐっ！」

悲鳴をあげようとするのをキスで封じる。悔しげに顔を歪めて、涙目で私を睨んでくるムツキ。

本気で抵抗しようとする姿に、すごく興奮してしまう。

ムツキの股間には、毛が生えていなかった。剃り跡もない、天然のパイパンである。

「うううー……先生の変態、変態！　性犯罪者！　はーなーせー！」

ももぞと身体を動かすムツキだが、生徒の全力なら私の腕を千切ることさえ出来ようというのに振りほどく様子もないのが答えだった。

パイパンマンコを見られた羞恥で、エルフのように尖った耳まで真っ赤なムツキ。

私は抵抗しないならと堂々とムツキのぐしよ濡れマンコを愛撫し始めた。

白パンのようにもっちり指を受け止めてくれる恥丘を滑り、ムツキのピツタリ閉じたマンコを指で割り開く。

くちゅ、くちゅと愛液をたっぷり指に絡ませ、まずは性器の外側の性感帯を探った。

「ああっ♥　こんなの、いけないんだからねっ♥　ちよっと、きいてっ

♥　るう♥　のおっ♥」

クリトリスをコロコロ転がすだけで、ムツキの反抗精神はトロトロになっってしまう事を発見する。

どうやらムツキはクリ派らしい。プレゼントは丁度いいものだったと言えるだろう。

「クリがそんなに気持ちいいの？　可愛いよ、ムツキ」



「ばか、ばかばか！ 先生なんてキライっ♥」

想像もしたことない羞恥に見舞われて、ムツキは涙目で私を罵倒し続けていた。

しかし、脚はもうだらしなく開きっぱなしであり、クリ愛撫のお代わりをねだってしまっている。

「クリトリスが好きなムツキにはピッタリのプレゼントだよ。受け取って」

「えっ？ さっきの、リング？ なにそれ……ちよ、だめ、止めてっ先生！」

先程の箱から、金属を取り出す。それは、視力検査のCの字のように一方向が欠けたリングだった。

ぱちん。

ムツキのフル勃起して皮がズルむけになったクリトリス、その根本を適度に締め付けてリングが密着する。

「えっ、なにになになに、怖い、先生、外してよおー」

涙目で私にすがりつくムツキ。私はそつと、優しくキスをした。

抱きしめて、優しく、優しく、背中をさすってやる。

それだけで戸惑っていたムツキはおとなしくなり……

「んっ……んんんんっ!? んぐっ♥ んむうーっ♥」

突如、全身を激しく痙攣させて絶頂した。

そう、先程の指輪のクリトリスリングバージョンだ。絶妙な低周波電流で、クリトリスの神経全体を刺激して高効率の快楽を与える。

マニアックな人達はクリ性感開発リングとして使っているようだが……いかにせんロボと犬には売れないので安売りされてしまっていたのだ。

フリーサイズでデカクリにも対応、吸い付く機構付きで勃起が収まっても外れることがない。

キヴォトス驚異の科学力を実感するアイテムだった。

「とっても綺麗だよ、ムツキ」

「だめ、だめ、今そんな事言われたらっ♥ あっぐ、ひっ……！ つぎ

……♥♥♥」

何度も何度も乳首イキして火照った身体に、ドキドキする言葉を囁かれてのクリ開発電流。

ムツキはなすすべもなく、私の目の前で服も脱がずに本気絶頂していた。

「ふうっ……♡　ふうっ……♡」

絶頂が激しすぎて呆然とするばかりのムツキの顔はいつもの小悪魔のような雰囲気か鳴りを潜め、手折られるのを待つばかりの可憐な一輪の花のようだった。

私は昨日コタマとセックスしたのと同じ体勢でムツキの手を机に付かせ、尻を突き出させた。

ムツキは度重なる絶頂でまともに立っていられず、内股で膝をくっつけてガクガクと脚を震わせている。

スカートをめくると、黒のレース付きの可愛い下着が顕になった。ムツキの小さくも丸い尻をピッタリと覆っている黒い布が、無残にも横にずらされて隠すべき性器を丸見えにしまっている。

少しチーズっぽく酸っぱい愛液の臭いを立ち上らせて、ムツキが犯されるのを待つばかりの体勢をしている。

「お、おねがい、先生……赦して……」

首をひねって私を見上げるムツキは怯えきっていて、哀れっぽい表情で目尻に涙を浮かべている。

最高にチンコがイライラする光景に、私は躊躇なくムツキのメスガキマンコにチンポを突き立て、一気に腰を突き出した。

「はっぐ、ああああっ！」

ぷつり、と軽い音と共にムツキの処女を奪う。

「ムツキの初めて、私が貰ったよ」

「ばか、ばかあ……いたいよう、先生……どうしてこんな、ひどいことするの……?」

幼児退行してしまったように、たどたどしくムツキが問いかけてくる。

それにチンコをイライラさせつつ、私はムツキに覆いかぶさって耳を甘噛した。

「それはムツキが魅力的だからだよ。ムツキに対する愛情が溢れて、我慢できなかつたんだ」

「あ、愛情……？ 先生、ムツキのこと、そんなに好きなの……？」  
前々から、軽々しく密着したり、下着が見えそうで見えない角度で高所に立たれたり、大人をからかうような行動をしてきたムツキ。

そんな彼女を乳首やクリで絶頂させ、後ろから思うがままに犯している気分が晴れやかになる。

「ああ、勿論大好きだよ。ムツキのお腹のなかでとても大きくなってるだろう？」

「う、うん……これが……先生の愛情……♡ あつ、あああつ♡」

ムツキは身体を捻るのを止めて前を向き、そっと目を閉じてマンコの中の感覚に集中しているようだった。

そして私の性欲という名の愛を受け止めた瞬間、心拍数を上げてクリリングの電撃で軽く絶頂する。

「うおっ、これ、私にもピリピリきて気持ちいいよ。ムツキも一緒に気持ちよくなってるんだね」

「うん、うんっ♡ 先生のおっきいの、お腹に感じながらクリでイクの、すごいっ♡ 気持ちいい♡」

まるで神に祈る清らかな乙女のように胸の前で手を組んで目を瞑ったムツキは、完全にセックスに集中していた。

「ムツキ、気持ちよくなってるムツキの可愛い所、もっと見せて」  
「ああっ♡ イクッ♡ クリでイクとアソコも凄いきゅーってしちゃう♡」

ムツキの性に対する忌避感をピッキングのようにチンポとクリ電流でこじ開けていく。

悪戯好きなだけでウブだった少女はもはやどこにも居らず、クリと膣の相乗効果で深まる快楽を自ら貪欲に吸収する淫乱なメスガキが誕生しようとしていた。

「せんせ、もっと♡ 動いていいよっ♡ 痛く無くなってきたから♡」  
「ああ、行くよムツキっ！」

ぬぼっ、ぬぼっ、と締りの良いムツキのマンコが愛液を溢れさせる

事で奏でる卑猥な水音だけをBGMに、私達はしつぱりとセックスを  
楽しんだ。

昂ぶってきたムツキは常にクリ電流を流されているような有様で、  
数秒ごとにクリイキを繰り返し、もう自分では立てないくらいに膝が  
笑っている。

ムツキの軽い身体を羽交い締めのように拘束し、まるでオナホのよ  
うにキツキツのメスガキ穴を好き放題犯した。

付け根の尿道側にムツキのクリリングの電流の余波のようなピリ  
ピリした快楽があり、もう射精を堪えられそうにない。

「出すよ、中にだすよ、ムツキっ！」

「ああっ、だめ、だめなのにつ♡先生のえっち♡ ああんっ♡ も  
う、私も、がまんできな、イツ、つくうううう♡♡♡」

保健体育の知識はちゃんとあるムツキの幼い膣に思いきり精液を  
ぶちまける。

射精しながらムツキが膣でイツたことを察するが、

「イツく♡ またイツちゃう♡ だめ、先生、これ、止めて、止めてえっ  
♡♡」

激しいセックスの絶頂中に動悸が収まるはずもなく、クリリングの  
電流は絶好調で流され続ける。

「あああああっ♡♡」

ムツキは絶頂とともにひとときわ大きく背をのけぞらせ、  
ぷしやあああああっ!!

と股間から透明な液体を噴出した。それはムツキの長めのスカ―  
トの内側にボタボタと遮られ、一瞬では吸収しきれず床に落ちて水た  
まりを幾つも作った。

「あっ、あああああ………」

目を見開いて限界を超えた激しい絶頂をキめてしまったムツキは、  
電源が切れるように気を失った。

「ばか！ ばかばかばか！ 先生最低！ もう絶交だよ絶交！」

10分ほど後、起きるなりムツキは私を罵倒した。顔は真っ赤で、

スカートの上から股間を押さえている。

「そんな事言わないでよ。私はムツキのこと大好きだよ」

「ひつつくっ♥ あ、ああ、もう！ これ!! 外してよお!!」

私の告白に、ムツキが大きく痙攣する。そう、クリリングはまだ付いたままだ。

「ムツキはゲームで負けたから、これからはそれを付けて過ごすんだよ」

「えっ、う、嘘でしょ……!?!」

流石に顔を青ざめさせるムツキ。私は意地悪を止めにして微笑んだ。

「まあ、流石にずっとじゃないよ。今日一日でいいから」

「長いよ！ 家までも付けっぱなしなの!?!」

「だって罰ゲームだからね」

ムツキはしばらく、うーっ、と唸り声を上げて私を睨んでいたが、観念したようにため息を付いた。

「あー、もう、今日は帰るー!」

そしてぐしょ濡れのショーツを直して、

「ひぐっ♥」

びくん、と痙攣した。

「どうしたの?」

私がよくわからず尋ねると、ムツキが真っ赤な顔で睨んでくる。

「パンツ穿いたら、クリがすれてまともに歩けないの……! もう、先生のせいだよ!」

ムツキはこちらに向き直り、私からは見えないうちにゴソゴソとスカートに後ろから手を入れて、その場でショーツを脱いだ。

その仕草がエロくてまた勃起してしまう。

「な、な、なにおつきくしてんの!?! まだ足りないの!?! へ、変態! 変態! もう知らない!」

ぎよつとした顔で逃げていくようにさろうとするムツキ。

私はその手を掴んで引き止めた。

「なによー!」

「下のコンビニで、避妊薬を買って飲んでから帰ってね。はい、これお金」

「~~~~~!!!」

ムツキのキツキツマンコで封じられていた精液がどろりと垂れ、スカートの中から床に落ちて雫を残した。

「も~~~~~!!! 覚えてなよ、先生！」

完全敗北を喫したムツキは、処女喪失直後でもあり、さらに決してクンを刺激しないよう少しガニ股になって速歩きで家に帰っていくのだった。

スケベも治療不可能です（チナツ・ヒナ）

風紀委員の夏合宿。ヒナが私と海に遊びに行く約束をしてくれたので、仕事を前倒しにして片付けて約束の時間に向かうと。

「すう……」

ホテルの大きなベッドの上で、ヒナが眠っていた。

しかもスク水、旧スクと呼ばれるスクール水着である。ベッドに投げ出されたヒナの白く細い脚が、いつものタイトスカートより更に良く見える。

当然のようにベッドの上にそっと上がって、肩幅くらいに広げられた脚の間に四つん這いになった。

「おお……」

恥骨のあたり、股のすぐ上で横一線になるようなカットが印象的だ。股間の布はヒナの肉付きの薄い恥丘に張り付いてほとんど直線な円弧を描き、蟻の門渡りと尻を覆っている。

ヒナのぷりんと丸いお尻は水着の股間の内側から少しはみ出ている。恐らく小学5年生のときより成長してしまったからなのだろう。

そつと、水着の股間に鼻を押し付ける。すうはあと匂いを嗅ぐと、寝汗の蒸れた甘酸っぱい匂いと、嗅ぎ慣れたヒナのマンコの少し酸っぱい匂いがした。

「んん……」

むずがるようにヒナが寝返りを打つ。とつさに身体を起こして脚を避けると、ヒナは左側を上にした横向きになり、ぷりぷりのお尻をこちらに向ける体勢になっていた。

ありがたく尻たぶの間に顔を埋めさせてもらおう。すうはあすると、より濃い汗の匂いがした。結構長く寝ているのだろう。疲労が濃いのかも知れない。

もう少し寝かせておいてあげようと思い、エアコンを付けてブランケットをかけてあげた。

「ん………今、何時……」

もぞもぞと動く気配と共に、ヒナが目を開ける。

「……？」

ヒナの目の前には、私の顔がある。添い寝していたからだ。

「……!？」

目が覚めて状況を理解したヒナが目を見開いた。

「せ、先生!?! どっ、どうして先生がここに!?!」

がぼっ、とヒナが上体を起こす。

「ヒナに会いに来たからだよ。疲れてるみたいだったから、そのまま眠っていて貰ったんだ」

「ごめん……私から誘ったのに、こんな……」

しゅんと俯いてしまうヒナをそっと抱き寄せ、頭を優しく撫でた。

「ヒナには悪いけど、私はヒナの寝顔を堪能できたから楽しかったよ」

「……ふふっ、もう、またそんな事を言つて。……ありがとう、先生。今度からはちゃんと体調管理するから」

ヒナは苦笑して、自責の言葉が続けるのを止めてくれた。それでも気落ちした風の彼女の手を取って立ち上がる。

「それに、海はまだ終わつてないよ」

「あ……そっか、テラスから海が見えるって……」

窓の外、テラスの先には月明かりに照らされた夜の海が視界一面に広がっている。

そこなら、今の時間からでも海の景色を楽しむことは出来るだろう。

「うん、行こう、先生……へくしゅっ」

可愛らしくしゃみをしたヒナに、カーデイガン差し出す。泳いだ後に身体が冷えてはいけないと思つて持つてきたものだが、夜に外に出るなら丁度いいだろう。

「カーデイガン? わざわざ持つてきてくれたの? ありがとう……」

はにかみながらスク水にカーデイガン姿になったヒナの手を引いて、テラスに出た。

そして、テラスでゆっくり、しんみりと話をしたのだが……

後半はほとんど頭に入つてこなかった。なぜなら、向かい合ったヒ



ナが膝を立てて座っていたからだ。

夜と夕暮れの狭間、紫がかつた空と同じ色をしたヒナの瞳に海の光が映り込み、キラキラと輝いている。

それも綺麗ではあったが、ヒナの胸の前で抱えられた膝、その折れてしまいそうな細い脚の間から覗く紺色のスク水に包まれたヒナの股間に目を奪われていた。

脚を閉じることでヒナの少ない肉が寄せられて、普段見れないむっちりとしたマン肉が現出している。膝を抱える事でお尻の方の布がずれ、ゴムの跡が太ももの付け根に見える。座ることでお尻の肉がどう歪んだのかをくつきりと線で示してくれているかのようだ。

「色んな事を教えてくれて、ありがとう、先生……ん？ どうしたの？

何を……っ！」

私の視線に気づいたヒナが、バツと太ももを伏せて女の子座りになってしまった。

「もう……ここには風紀委員の皆もいるんだから、あんまり変なこと考えないで」

「ごめん、ごめん。でも、ヒナが余りにも可愛すぎるから我慢できなくなっちゃったよ」

顔を赤らめながら上目遣いに注意してくるヒナが愛おしい。寝ているヒナを嗅いだのも相まって、チンコのイライラが急激に高まってくる。

私のズボンの股間がテントを張ったのをチラリと一瞥したヒナは、顔を赤くしながらため息をついた。

「まったく……先生は本当、仕方ないんだから……」

ヒナは恥ずかしそうに目を逸らし、顔を赤くした。

その顔が、さつきまでの風紀委員長顔から私のセックス相手の顔に変わるのを感じ、完全に勃起する。

手を差し出すと、苦笑しながらヒナはその手を握ってくれた。その小さな身体を引き寄せ、抱きしめる。

あぐらをかいた私の膝の上にすっぽり収まってしまおうその肩に手を置いて、ヒナの小さな額にキスをした。

「ん……」

女の子座りで膝の上にはいたヒナの脚を広げ、対面座位のように股間と股間をくつつける形で座らせる。

スク水越しのマンコの感触を味わいながら、夜風で少し冷えたヒナの腕をさすった。

「ふふ……先生の手、あったかい。普段は冷たく感じるのに、不思議な感じ」

ヒナは私の胸に頭を預け、そっと私に抱きついてくる。私の手はカーデイガンの中に潜り込み腕からスク水の背中、お尻を撫で回し、ズボンの下で勃起したチンポをスク水の下の使い込まれたマンコに擦り付ける。

お尻を撫でるために触れて分かったが、ヒナのスク水は後ろにも水抜き穴のような穴が開いていた。そこから羽を出しているのだ。しっとりとしたゴム質の羽の表面をひと撫でし、むっちりとしたお尻を掴んで、まるで対面座位でセックスしているかのように腰を使う。

「んっ、ふ……♥」

クリトリスが刺激されたか、ヒナが太ももをびくんと震わせた。

「もう……先生、本当にするつもり？　ここ、外なのよ？」

「したい。ヒナは、声我慢できない？」

「意地悪言わないで……その、先生のオチンポ、入れられたら……絶対我慢できないと思う」

ヒナらしい抑揚を押さえた綺麗な声が、私に教え込まれた卑猥な単語を紡ぎ出す。昂りを我慢できずに抱きしめてヒナに上を向かせて唇を重ねた。

「んむっ、ちゅっ……♥」

突然の行動にもかかわらず、ヒナは当たり前前のように入れられた舌を受け入れてくれる。

キスしながらズボンのファスナーを下ろしチンポを取り出す。ヒナのスク水の下腹部の辺りにある、水抜き用の穴の入り口にチンポをねじ込んだ。

「きゃっ!?　な、何するの先生！　そこはオチンポを入れる穴じゃない

い！」

「いやあ、ヒナのお腹の感触とスク水の生地に含まれる感触……格別だね」

「先生のヘンタイ……はあ、射精はしないでね？ 洗うの大変なんだから」

優しいヒナは呆れ顔で変態行為を許してくれる。それどころか、お腹をさするようにスク水の上から私のチンポを撫で、たどたどしくも手コキまでしてくれる。

「ああ、それ、いいよ……ヒナ。亀頭の辺り、握ってみて」

「んっ……こう？ 先生のオチンポ、水着越しでも温かい……夜の涼しさには丁度いいかも」

私のチンポでいびつに膨らんだスク水のお腹を、慈愛に満ちた微笑みでさするヒナ。

小さなその手が、いい子いい子するように私の亀頭を撫で、こちよこちよと指先でカリの段差をくすぐる。

「ああっ」

「ふふ、先生、これ気持ちいい？ なら、もっとしてあげる」

カリカリカリッ！ と爪を立てるように4本指で傘を引っ搔く。厚いスク水の生地により丁度いい刺激に変換され、強く押し付けられたヒナのお腹の柔らかさとのコントラストが更に明確になり、ぐんぐん精液が登ってくるのを感じる。

「はい、おしまい」

傘がぶわつと開くのを感じたあたりで、ヒナは両手をぱつと離してしまった。

「ええ……酷いよ、ヒナ」

「言っただでしょ？ 駄目よ、射精しちや。ここじゃ、誰が聞いているかもわからないし。……中で、続き……しよっ」

ずるりとヒナのスク水からチンポを引き抜き、お姫様抱っこで担ぎ上げた。

「ひゃっ!? せ、先生、こんな運び方、恥ずかしい……」

そう言いながらも、ヒナの手はそつと私の腕を握り、口元はほころ

んでいる。

「ヒナはとつても軽いから、お姫様抱っこしやすくて助かるよ」

「そ、そう……たまには小柄なものも役に立つわね」

気のなさそうな事を言いつつも、白い肌が赤面しているのが夕暮れの薄闇の中でも分かった。

ベッドについて、さてやろうと思ったが……ここはホテルだ。下手なことをするとバレてしまう。

「ねえヒナ、大きなタオルはあるかな」

「え？ もちろん、あるけど……何するの？」

「ヒナのマン汁でベッドが汚れないように下に敷くんだよ」

顔を赤らめたヒナがムツとして私を睨んだ。

「しよがないじゃない、先生のオチンポ、おつきくて気持ちいいんだから。……それに、そんな手間をかけなくてもお風呂ですれば良いんじゃない？」

さすがヒナ、頭の回転が速い。

「せっかくならお風呂はシャワーじゃなくてヒナと一緒に入りたいし。今はベッドでゆっくりしたい気分なんだ。駄目かな？」

「……まあ、良いけど……私も、今は先生と触れ合っていたい気分かも」

顔にかかった髪をそつと払いながら、ヒナが同意してくれた。

私が風呂の栓をして湯を入れ始める間、ヒナは荷物の中にあつたタオルを引っ張り出してくる。

それは、いわゆるラップタオルと言われる、マントのようなタオルだった。

片側にゴムとスナップボタンが付いていて、私も子供の頃着替えに使った覚えがある。

「これも、昔から使っているやつ？」

「え？ ええ、そうよ。……何かおかしかった？」

「いいや、ヒナは物持ちが良いんだなって」

ふわっ、と広いベッドの上にタオルを敷く。ヒナはもぞもぞと水着を脱ぎ捨て、全裸になった。

「なんだか、誰にも邪魔されないで先生とセックスするのって、不思議な感じ。いつもシャーレでしていたから……」

「確かに、人目を気にしないで済む場所があれば良いんだけどね」

「せ、先生さえ良ければ、今度……私の家に、遊びに来て、いいよ」  
実のところ、フイーナやイズナの家には泊まり込みで映画鑑賞したこともあるが……ヒナのお誘いは、それらとは意味が違う。

人目を気にせず思い切りセックス出来る場所として、自宅を使おうというのだから。

「ヒナも大胆になったね。嬉しいよ」

「なっ……!?! ち、ちがつ、ずつとセックスしようなんて言っていない!

ただ、先生と二人で過ごせたら素敵だなんて、思っただけで」

最後の方はモジモジして小声になってしまった。可愛い。

「うん。今度ぜひ行きたいな。ヒナの部屋がどんなのか、楽しみだ」

「変なものとか置いてないから。家探ししないでね」

水着一つとっても小学生時代のもものが残っているのだし、探せば面白いものが見つかると思うが……

と楽しい空想にふけっている間に、照れくさくなったヒナがベッドに仰向けに横たわっていた。

「さ、どうぞ……先生♥」

もう完全に雌の顔をしたヒナが、笑顔で脚を開いて歓迎してくれる。私はゴムを装着し、ヒナの元へとベッドの上を這って行く。

「さっき少ししただけで、もうこんなに濡らしてるの?」

「だ、だって……こんなムードのある所で先生とするの、初めてだったから……」

ヒナのマンコはもうしつとりと濡れていた。

確かに……海の見えるホテルの一室で、ヒナが6, 7人は横に寝られそうな大きなベッドで、誰にも邪魔されずに二人きりだ。

私のチンポも大いに盛り上がっているし、ヒナも同じ気持ちでいてくれたのを嬉しく思う。

「これなら、すぐに入れられそうかな」

「うん……もう大丈夫、だと思おう。来て、先生」

関係を持つてから、セフレが増えてからも大して変わらないペースで身体を重ねてきた。ヒナはその小さな体に似つかわしくない、食べごろの気持ちいいマンコを持った最高の雌へと成長している。

ヒナに突きつけるには大きすぎる私のチンポを入り口にあてがっても、ヒナの顔には期待しか浮かんでいない。

ぬぷっ、と未だにキツイ入り口を押し広げ、愛液のぬめりとヒナの膣の柔らかさに任せて力を込めて、奥深くへと埋没していく。

「ああ……♡」

感極まった様なヒナの小さな嬌声と共に、子宮口へと到達した。

私はそのまま膣の締りを満喫しつつ、ヒナの華奢な身体を撫で回した。腋の下当たりを手で掴み、乳首を親指でこねる。

背中側に潜った指先には、タオルの生地が触れていた。ヒナを学生から今まで包み続けているタオル。

脇に目をやると、ヒナの脱ぎ捨てた水着がベッドの上に置かれていた。

「どうしたの、先生？」

ヒナが夢見心地になりながらも私に聞いてきた。

「なんだかこうしてると、ヒナが小学生の頃からこういう関係だった様な気分になるなって思ったんだ」

くすり、とヒナは笑う。

「ふふ……それも良いかもね。先生なら、小学生の私にも手を出しちゃうだし」

からかうように言われるが、ヒナくらい可愛かったら絶対手を出していただろう。

「小学生の頃のヒナってどんなだったの？ 普通に子供っぽかったのかな。それとも、昔から今みたいな口調だったりとか」

「恥ずかしいから、秘密。ぜったい言わない」

ふいつ、とそっぽを向いたヒナに、私は腰を突き出す。一番奥に突き刺さっていたチンポが、ヒナの子宮を更に押し込んだ。

「んんっ♡ や、そんな事しても、絶対言わないから、っああ♡」

ヒナの好きな、一番奥をじっくりとこね回す動きをしてあげる。

「えー、知りたいな。教えてよ、ヒナ。小学生の頃のヒナとか、絶対すごく可愛かったんだろなあ」

「やあ……♥ 絶対、言わないから……♥」

鼻にかかった甘ったるい声で、ヒナが抵抗してみせる。その瞳は楽しげに輝いていて、ヒナが甘えてくれている事を感じさせた。

「ほらほら、言ったらもつと気持ちよくしてあげるよ」

「あつ、そこ、そこ好き♥ 先生の力で引つかかれるの、気持ちいい♥」

ヒナは奥を刺激されるたび悩ましげに身悶えて、どれほど気持ちいいの私に教えてくれる。

ぐつぶ、ぐつぶ、と腰を動かすときの水音がだんだん大きくなり、ヒナも私も行為に没頭していった。

ヒナはそつと手を差し上げて、私の首に絡めた。いつもの「抱きしめてほしい」の合図を受けて、私はヒナに覆いかぶさる。

身をかがめて、小さなヒナにキスをする。ヒナはほっそりとした首もとがよく見えるほど顔を上げて、ほとんど上を見るような角度で繋がったまま舌を絡める。

ぴちゃぴちゃと舌を絡める音と、ぐぶ、じゅぶ、とヒナの愛液を私のチンポが掻き出す音が二重奏を奏で、静かなホテルの一室に卑猥な音が満ちた。

何度か軽く絶頂するほどにヒナは盛り上がっていて、愛液の粘つきからして既に溢れているのは本気汁だろう。

傍から見れば可哀想なくらいに押し広げられたヒナの膣からダラダラと本気汁が掻き出され、むっちりした尻肉を伝って下に降りていく。

そうして、ヒナが小学5年生から使っているタオルは本気汁を吸って濡れそぼっていた。

その事実により興奮しつつ、そろそろ射精しようとしてヒナとタイミングを合わせるため腰を素早く小刻みに動かす。ヒナがすぐにイッてしまう動きだ。

「んっ♥ んっ♥ んっ♥ んっ♥ んっ♥」

いつものフィニッシュの動きを察してくれたヒナが、細い脚を私の腰に絡めて自分からも腰を振ってくれる。

私達はピツタリと癒着した一つの肉塊のようにもぞもぞと蠢いて、一つの快樂を共有していた。

「んむううううんっ♡」

ぱあん！ と最後の力強い一突きで拍手のように肉を打ち鳴らし、一番奥で射精する。ヒナの膣が握りしめるように締め、私と同時に絶頂したのが伝わってきた。

まるで心も一つになったかのような満足感に包まれて、ヒナの唇を吸いながらしばらく射精の余韻に浸っていた。

「ふう……♡ 気持ちよかった……♡」

ヒナがうつとりと零した言葉を契機に私はチンポを引き抜いてゴムの口を縛り、ヒナのタオルの隅に落とす。

そのままヒナの横に寝転がり腕を差し出すと、ヒナは嬉々として腕枕に頭を預けた。

「ああ、やっぱり良い……セックスが終わったあと、こうして先生とゆっくり寝ていられるって、すごく幸せ……♡」

指を絡めて手を握り、行為の余韻に浸りながらヒナと唇を重ねる。窓の外は、もう夕日が落ちて夜の闇一色になっていた。

ぴっ、ぴっ、ぴっ、と電子音がする。風呂が沸いた音だ。

「丁度いい。先生、お風呂にしよう」

ヒナが身を起こすと、さざりと髪が揺れてヒナの匂いが漂った。背中を下敷きにしていた汗と、ヒナの女の匂いだ。私も体を起こしてヒナの首筋と髪に顔を突っ込んで、今のうちに匂いを堪能しておく。

「やつ、ちよつと、恥ずかしいから止めて……」

行為後の臭いを嗅がれて顔を赤らめ、割と本気力で私を押しつけるヒナ。しょうがないので二人して沸かしたお風呂に行った。

更衣室で、ヒナは器用に髪をくるくる巻いたり畳んだりして、あつという間にお団子を左右に二つ作る。

「おおー、女の子っぽい動き」



「先生は私をなんだと思ってるの……」

可愛らしくむくれるヒナのうなじを鑑賞しつつ、まず身体を洗う。

「先生、背中を流してあげるね」

ヒナの小さな手がスポンジを押し付け、力強くゴシゴシと背中を上  
下する。

「あー気持ちいい。私もヒナの背中を流してあげるね」

お湯で泡を流してもらい、私もヒナの小さな背中をそつと擦った。

「ん……もつと強くしていいよ、先生」

「分かった」

小さくて陶器のように滑らかな肩、背中に艶めかしい凹凸を形作っ  
ている肩甲骨、ほんの少しだけ括れている腰、意外に敏感な羽の根本、  
むつちりと椅子に潰れたお尻。

余すことなく堪能しながら、ヒナの背中を丁寧に洗った。

「先生、触り方がいやらしい」

「ヒナの背中が綺麗だったからね」

「それは、ありがと」

ぎば、とお湯で泡を流すと、二人して湯船に浸かった。

「ああ……先生とお風呂に入れるなんて、合宿に来て良かった……」

だらりと弛緩した声を上げて、ヒナの背中が私の胸にもたれ掛かっ  
てくる。角が刺さらないように頭の角度が配慮されていた。

しばし、ヒナと二人で天井を眺める。お湯の中でヒナのお腹や胸を  
撫でる感覚が新鮮だった。

「ん……♥ 先生、だから、触り方がいやらしい……♥」

「ヒナにいやらしいことがしたくて触っているからね」

「さつきしたばかりなのに……」

「ヒナも、一回じゃ足りないんじゃない？」

乳首をつねられるたび、ぱちゃ、ぱちゃ、とお湯が跳ねる音を時折  
響かせてヒナが身悶える。

「だからって、お風呂の中でなんて……んっ♥」

お湯の中でクリトリスをコロコロ転がしてやると、閉じていたヒナ  
の脚がだんだんと開いていった。

屈折してゆらゆらと揺らぐヒナの脚を掴んで開き、両手でヒナのク  
リを攻め始めた。

「あっあっ♥ せん、せ、そんな、そこばつか、りい……♥」

ヒナのつま先がお湯の外に出て、ざば、とお風呂に波が立った。

「いつ、く……♥」

お湯の外へと突き出るようにVの字に脚を上げ、ヒナがクリトリス  
で絶頂した。

くた、とヒナの全身から力が抜けて、私の首元にヒナの角がチクチ  
ク刺さる。

ざぶん、と音を立ててヒナの脚がお湯に没した。

「ん、ごめん、先生」

お湯で温まった身体を更に赤くしたヒナが我に返って、座り直し  
た。

私のフル勃起したチンポがヒナの尻たぶに挟まれて心地よい刺激  
が与えられる。

「……放っておいたら、お風呂で射精しそう。ほら、先生。そこに座っ  
て」

そう言っヒナは私を湯船の縁に腰掛けさせた。

ぺと、と片手を私の太ももに乗せる。お湯で温まったヒナの掌が心  
地いい。

「またこんなに大きくして。ベッドまで我慢できないの?」

「裸のヒナと密着してたら、ついね」

責める言葉とは裏腹に、ヒナは楽しげに竿を握り、洗いたての先端  
にキスをする。

「ちゅっ……ちゅびっ♥」

ヒナは微笑んでいるような眠たげなような半目で、キスの雨を降ら  
す。

鈴口、裏筋、竿へとだんだん降りていき、根本を通り越して金玉に  
口づけた。

「んむ……♥ ちゅ、ぢゆるるっ♥」

風呂に入っ緩んだ玉袋を音を立てて吸引し、口の中で飴玉のよう

に転がす。

その傍ら、竿を扱く手は滑らかに動き続けている。

「ああ……いいよ、ヒナ。本当にうまくなったね」

そう言っただけで濡れていない頭を撫でてあげると、手コキが速くなった。

ヒナはもうすっかりフェラも手コキも上達し、啜えるだけではない色々な楽しみ方を熟知している。

「先生、立って。アレやっただげる」

言われるがままに立ち、脚を広めに開く。ヒナは私の股の真下に潜り込み、真上を向いて股間に顔を突っ込んで、目元辺りで金玉を受け止める。

そして、小さな舌を尖らせて私の肛門に差し込んだ。

「くっ……！」

私がヒナの肛門をふやけるまでしゃぶって開発した頃、ヒナもされてばかりは嫌だと私の肛門を舐める事を提案したのだ。

それ以来、シャワーを浴びた後にする時は肛門に舌を入れられての手コキがレパートリーに加わっている。

まるでモーター駆動のスクリューのように、一定の速度で私の肛門の中をかき回すヒナの舌。

いつの間にか両手を使い始めた手コキは、竿と龟头を満遍なく刺激し、肛門との快楽の相乗効果で射精感をさらに引き出してくる。

気持ちよさにキュツと肛門を締めると、プリプリのヒナの舌の熱ささえ伝わってきた。

金玉を感じるヒナの鼻息は荒く、手コキの激しさからも昂奮が伝わってくる。

「あ、ヒナ、もう、出るっ……！」

「つと、はむっ♥ ぢゅっ♥ ぢゅぞぞぞっ♥」

私が限界を告げると、即座に舌を引き抜いて私の下から出て膝立ちになり、龟头をパツクリと啜えて強く吸引した。

ヒナはひよつとこ顔で頬の内側まで使ってチンポに奉仕しながら、目元だけは優しい笑みを浮かべている。

裏筋に舌を強く押し当て、ゴシゴシと先程の背中洗いのようにザラザラの部分を擦り付けた。

「ううっ！」

たまらず、ヒナの頭を掴んでチンポを喉奥まで突っ込む。

「んぐうっ♥　ぐっ、ぐくっ、ぐくんっ♥」

ヒナは小さなうめき声を一つ上げたきりで、私のチンポを喉奥に受け入れてすべてを飲み下してくれた。

「んっ……ぐちそうさま、先生♥」

風呂に入ったからか、昂奮からか……ヒナは顔も胸元も紅潮させて微笑んでくれるのだった。

結局二発しか射精しなかったが、その分ヒナとイチャイチャしたことでチンコのイライラは収まった。

あまり部屋で二人きりでいると怪しまれるからということ、惜しまれつつの帰宅となった。

「じゃあね、先生。今日はありがとう。海には入れなかったけど、とっても楽しかった」

「うん、おやすみヒナ。じゃあまた」

そして、私は自宅に帰る……

途中で、チナツに会っていた。

「どうしたの、チナツ。元気がなさそうだけど」

ヒナと別れてホテルのロビーから外に出ようとした時、チナツが窓に向かうソファに腰掛けているのが目に入ったので声をかけた。

「ああ、先生……ちよつと、合宿が忙しくて疲れてしまつて。そんな大した事じゃありませんから気にしないでください」

「いや、大したことあるよ。いつも大変なチナツがそんなになるなんて一大事だ」

救護担当なのに誰もやらないから事務までやっているという苦労人のチナツは、それでも普段めつたに弱音を吐いたりはいしない。

そのチナツが夜空を見上げてボーツとするほど疲れていたのだ、気にしないわけがなかった。

「大丈夫？ 熱とか無い？」

「あ、い、いえ、そんな、お気になさらず……！」

顔を赤くして、ワタワタと顔の前で手を振るチナツ。めったに見せない慌てた顔が可愛らしい。

それにもまして、手を振ったことでユサユサと揺れるチナツの巨乳がたまらなくチンコをイラつかせる。

本人は地味だなどと言うが、髪と胸元のリボンに、巨乳を包むフリル付きブラウスと実に男心をくすぐる美少女がこのチナツなのだ。

絶対セフレにすると心に誓った。

「部屋で飲み物でも飲んで横になったほうが良いよ。さ、行こう」  
そう言って、チナツの革手袋の手を取って歩き出す。

「あつ、もう、先生……！ 私の部屋がどこか、分かってるんですか？」  
チナツは目を丸くして驚くが、大人しく手を引かれて歩き出した。すぐに私の横に並び、そのまま手をつないでホテルの廊下を歩く。  
「ふふ……こんな所、誰かに見られたら囃し立てられてしまいますね」  
その場合、割と大変なことになりそうでもあるがチナツは愉快そうに微笑んでいる。

「ここだよね、チナツの部屋」

「……ええ、はい……本当に知っていたんですね、先生。相変わらずと  
いうか……まあ良いです。先生も少し休んでいかれませんか？」

何故か呆れているチナツが鍵を出し、私を招き入れてくれた。

「あつ……」

部屋に入っただけで、椅子に座ろうとしたチナツがふらついたので抱きとめた。

「本当に疲れてるんだね。大丈夫？」

私の胸にもたれ掛かった体勢で、チナツはじつと動かない。

「はい……思ったより、疲れていたようです。部屋に入って気が緩んだら、ふらついてしまつて……」

私は軽くチナツを抱き、背中をゆつくりさする。

「ん……」

気持ちよさそうな吐息を一つして、チナツはされるがままになつて

いた。

するり、とチナツの手が私の背中の後ろに回される。そつと抱きしめられ、胸元にチナツの呼吸が暖かく感じられる。

「先生……今日はどなたに会いに来られたんですか？」

「ヒナと遊ぶ約束をしてね。さつきまで一緒だったよ」

「それで一緒に、お風呂に入ったんですか？」

チナツはいつの間にか上を向いて、私の目を真正面から覗き込んでいた。

その金の瞳は底しれないほどに深く、目をそらす事ができない。

「少し前から、噂はあつたんです……委員長が頻繁に先生に会いに行っているって。でも、まさか、あの委員長がもうこんなことまでしていたなんて……」

背中に回された手に力が籠もっていく。

ナイフとフォークより重いものを持ったことがないと言われても信じそうな白魚のように細く繊細な指が、ライフルだつて捻じ曲げてしまえるほどの力を帯びる。

背中に指の腹が食い込みつつあるが、もしチナツが本気を出したら次の瞬間には背中肉は抉られているだろう。

「不潔です……いいえ、ずるいです。私だつて……私が、一番早く先生と出会ったのに！」

憤りが涙となってチナツの目尻から溢れた。しがみつくように抱きつかれ、チナツの胸が私のみぞおち辺りに押し付けられ、柔らかく潰れる。

「先生……私では、駄目なんですか……？ やっぱり、私みたいな地味な女じゃ……」

それ以上は言わず、チナツの唇を奪った。

「んんっ!？」

チナツはメガネの奥の瞳をまんまるにして驚き、そしてそつと目を閉じる。

強張っていた両腕も力が抜け、私が仰向けにベッドに押し倒すのを

黙って受け入れた。

「……本当に、二人はそんな関係だったのですね……そして先生は、委員長を裏切って不貞を働いている」

糾弾するような鋭い口調でありながら、チナツの口角はきゆうっと釣り上がっていた。

「ああ……私も、自分で思うよりゲヘナの生徒だったみたいです。先生が、立場を危険にさらしてまで生徒の身体を貪っているのを知って……」

チナツはぺろり、と唇に舌を這わせた。

「とつても、胸が高鳴っています」

「チナツのお好みに合ったようで何よりだよ」

私は微笑みながらチナツの胸に手を載せた。

思ったとおり形も適度な弾力も申し分なく、夢中になって巨乳を揉みしだく。

「んっ♥ あ、はあああ……♥」

気の抜けたような声をなびかせて、チナツが身体をくねらせた。

その隙にブラウスのボタンを外していく。ぷるんと飛び出した胸を、手袋やタイツと同じ深い赤のブラジャーが覆っている。

「おお……」

思わず感嘆の声を漏らしながら、さつとチナツの背中に手を潜らせてブラのホックを外す。

ケセドの外殻もかくやというほどの大きなドームがチナツの胸からそつと外れていく。

「ああっ……♥」

羞恥に耐えかねたチナツが、胸を両手で隠す。赤い革手袋がチナツの巨乳に食い込むが、その程度では隠しきれないほどポリウームのある胸だ。

両手を胸に使わせたことで無防備になった腰から下に、遠慮なく手を出していく。

スカートのホックを外して脱がせると、ブラと同色のショーツがこれまた同色のタイツに包まれている絶景が目飛び込んできた。

スカートをベッドの上に放り投げ、チナツの股間に顔を埋める。訓練のし通しで疲れ切ったチナツの股間は、蒸れて甘酸っぱい匂いを漂わせていた。

「やああ……♥」

チナツはさらなる羞恥と共に身をくねらせるが、両手は胸を隠す事に使っているのも何も出来ることはない。

キュつとくびれた15歳の腰に指を這わせ、タイツとショーツ同時に脱がしにかかる。

チナツは羞恥で潤んだ瞳を唯一の抗議とし、腰を浮かせて私を手伝ってくれた。

ブラウスをまだ脱がさないうちに一糸まとわぬ下半身を私に晒したチナツは、必死になって手を動かして乳輪と股間の陰毛を隠そうとしている。

顔を真っ赤にして、細い太ももを精一杯内股にして身をよじっている姿は、余計に扇情的だ。

「隠さないで、チナツ。とつてもエッチで素敵なんだから、もつたいないよ」

「先生……こんな、事を……他の子にも、しているんですか？」

羞恥に耐え、絞り出すような声で私に語りかけるチナツ。

「しているよ。チナツが嫌ならこれでおしまいにするけど？」

「……ずるい人……そうやって女の子から言わせて、絡め取ってきたんですね」

チナツは恥ずかしさが極まったか涙目で私を見つめてきた。その表情に嫌悪はないが、喉が震えて言葉が出てこないようだった。

「私はただ、皆の一番可愛い所が見ただけだよ。エッチなおねだりをするのを恥ずかしがってるチナツとかね」

胸と股間を隠して身体を丸めてしまったチナツの、ほっそりとした首筋に指を這わす。

笹穂のように尖った耳を撫で、リップクリームで薄桃色に艶めいた唇にちよんと指を当てる。

「あ、んっ♥ 本当に、ずるい人ですね。……そんな風にされたら……」



取り返しの付かない位、本気になってしまいそう……♥」

指を動かすたびに痙攣していたチナツが、徐々に私の愛撫を受け入れ始める。雪が解けゆくようにチナツの身体から力が抜け、腕が身体から離れた。

「とても綺麗だよ、チナツ」

「ああ……私……先生に、裸、見られて……♥」

腕を解いて裸身を見せているだけでチナツは顔も胸元も紅潮させ、巨乳にしてはやや控えめな大きさの乳首をふっくらと勃起させていた。

「チナツは、恥ずかしいのが好きなのかな？ 触ってもいないのに、乳首が大きくなってる」

「いやあ……♥ 言わないで、ください……♥」

チナツは顔をそむけながらも、再度胸を隠そうとはしない。天を向いているのに形が崩れない、若い肌によって維持された奇跡のようなお椀型をそつと手で掴む。

「っ……い」

チナツが息を呑むのが、音と手の感触で分かる。しつとりと汗に濡れた胸を、ゆっくり柔らかく揉む。

掌に勃起した乳首がくすぐったく擦れ、時折、肩をすくめるように身体を痙攣させて、チナツが善がっている。

「どうしたの、チナツ。声を我慢しなくて良いんだよ？」

「っ、ああっ……♥ こんな、すぐ、声上げてしまったら、っん♥ は、はしたなさすぎる、のに……っ！」

エツチな事をしたと思いつつもエツチなところを見せたくない。複雑な乙女心というやつだ。

「大丈夫、もつともつと、チナツのエツチで可愛い所を見せて。そうしたら私、チナツの事をもつと好きになると思うよ」

「ほんっ、とうに……ずるい、です……♥ いいんです、ね？ 後から、嘘でしたなんて、怒りますから……♥」

「もちろん。チナツが乱れば乱れるほど嬉しいな」

チナツは一度喉を鳴らして唾を飲み込むと、身体の力を抜いた。

私はチナツの胸を揉む手を止め、乳首を指でつまみ上げた。

「あつ、あああーっ♡」

伏せたお椀型が、ロケット型に伸び上がる。部屋中に響く大声を上げながら、チナツが背中を仰け反らせて絶頂した。

「はっ、はあつ、はあつ、はあつ♡」

チナツは乳首で強く絶頂した余韻で、全身がガクガクと痙攣している。脱力した頃を見計らって、膝裏に手を入れて持ち上げ、脚を開いた。

むあつ、と濃縮された雌の匂いが漂う。呆然として反応できないチナツの股間にむしゃぶりついた。

「ひっぐっ♡ あゝ、いいいいいいっ♡ だめっ、ああっ！ いっ、っ、ぐうううう♡」

追い打ちをかけるようなクンニに、チナツは嬌声とも苦悶とも付かない声を上げて更に絶頂した。

ぷしや、と軽く潮まで吹いて、電気ショックでも受けたのかというくらいに全身を痙攣させて快樂の大きさを教えてくれる。

「とつても綺麗だよ、チナツ。こんなに気持ちよさそうにいく女の子もなかなか居ない。もっと見せてほしいな」

クリトリスを口で吸引しつつ、膣の浅い所を引っ搔くようにしてクリトリスを裏からも刺激する。

「むゝりいっ♡ おかぢくなるっ♡ ひんじやううっ♡」

先程までの知的な振る舞いは全く見られず、狂乱したかのように髪を振り乱して悶えるチナツ。

脚はピンと伸ばされ、絶頂に耐えるかのように指先にぐつと力が籠もっている。

「さあチナツ、もう一回イッて見せて」

「いゝぎますっ♡ 先生の仰るとおりい♡ いっ、っぐうううう♡♡」

プシャッ！ と強く潮を吹く寸前で口を当て、チナツの潮をすべて飲み下す。流石にシートをビショビショにしてチナツにお漏らしの濡れ衣を着せるわけにはいかない。

私が立ち上がって見下ろすと、ベッドの端に寝そべってだらしないく脚を開き頭を振りすぎたせいです。ずれてしまった眼鏡もそのままに、チナツが呆けたような顔をして絶頂の余韻に浸っているのが、部屋の明かりに照らされてよく見えた。

既にチナツの足腰は震えているが、私のチンポのイライラは最高潮だった。メガネをかけ直させ、抱き起こしてブラウスを脱がすとお姫様抱っこで風呂場に連れて行く。

「……はっ、せ、先生？ も、もう大丈夫ですから、下ろしてください結構です」

セックス中とは違う、素の恥じらいを見せてチナツが床に足を下ろす。まだまともに立ってないのか、私に抱き着くようにもたれ掛かったままだ。

当然、私のイライラ棒がチナツのスリムなお腹に押し当てられる。

「あっ……♡」

私からもチナツを抱き、ズボン越しにチンポをこすり付ける。真っ赤な顔で見上げてくるチナツの唇を奪った。

「ちゅっ……じゅるっ♡」

美味そうなチナツの身体を前にして溢れてきたよだれを、チナツが音を立てて吸い上げる。私も負けじとチナツの口内を舌でかき回し、さらりとした唾液をすすった。

チナツがまともに立っていられるようになったのを見計らい、服を脱ぐために脱衣場に行く。ついでにコンドームとアレを持ってきた。

風呂場に入ると、チナツは私の股間を目を丸くして凝視していた。チナツも裸ではあるが、結んだりボンとメガネ、何より手袋がそのままなので少し不思議な感じだ。

「さ、お待ちかねだよ、チナツ」

風呂場の椅子にどっかりと腰掛けると、チナツが独りでに跪いた。

「わあ……すごい……」

チナツの瞳はキラキラ輝き、まるで宝物でも見つめるようだった。

「先生のおちんちん、かわいい……♡」

へにゃ、と口元だらしく緩ませて満面の笑みを浮かべるチナツ

は、一周回って逆に色気を感じさせない喜びに満ちあふれていた。

「か、かわいい?」

「はいっ♥ この、フォルム……まるで亀さんみたいです……♥」  
するりといつの間にか伸ばされていた手が、私の亀頭を捉える。

触れるか触れないかギリギリのフェザータッチで、両の掌が竿と言わず亀頭と言わず金玉と言わず、性器全体を這いずり回る。

「うああっ!」

革の感触とチナツのぬくもりが相まってイズミのイボつき手袋コキとも違う、しつとりとした撫でられ心地を生み出している。

先程まで恥じらっていた処女とは思えぬ巧みな手付きに、こちらの顎が上がってしまった。

「ああ……すごい……こんなにパンパンに張って……先っぽから、トロトロおつゆが溢れてます……♥」

目にハートを浮かべたかのような陶醉しきった声で、夢中になってチンポを撫で回すチナツ。

まるで小動物でも撫で回すかのような繊細な手付きは、その巧みさで刺激こそ強いものの射精出来るような激しさはない。

我慢汁をどぶどぶ溢れさせながらもチナツの頭を撫でて制止する。

「チナツ、もう我慢出来ないよ。お願い、入れさせて」

ハツとして、少し気まずそうな顔をするチナツ。

「んっ、コホン。わ、わかりました。生徒からそんな事をさせるなんて、先生がずるいのは今に始まったことではありませんから。……でも、これを? 本当に、入るのですか?」

私の目の前で、少しガニ股になつて腰を落とそうとするチナツ。内腿は先程までの愛撫でネットリと愛液にまみれており、膣口からは亀頭に向かって一滴の愛液が流れた。

チナツは私の肩に手を置いて、踏ん張るようにガニ股で腰を落とすていく。すぐに鈴口と膣口がキスをした。

「んっ……♥」

潤んだ瞳のチナツと、至近距離から見つめ合う。ほんの少しオレレンジがかった深みのある金の瞳を覗き込んでいると吸い込まれそうだ。

チナツは、そんな美しい瞳をそっと閉じて、私に軽くキスをした。そして、次の瞬間にはフル勃起した私のチンポがチナツを貫いていた。

「んっ、ぐっ……！」

私の背中に回されたチナツの手が、食い込むほどに強く押し付けられる。手袋をしていなかったら、背中に引っかけ傷が左右に四条ずつできていたかもしれない。

背中痛みもそうだが、私の胸板にも潰れるほどにチナツの大きな胸が押し付けられていた。

巨乳越しにも伝わってくるほどにチナツの心臓が早鐘を打っている。私からもその華奢な身体を抱きしめ、そっと背中をさすってあげた。

何分そうしていただろうか、徐々にチナツの身体から強張りは解け、膣もガガチの締め付けではなく密着するように私を心地よく包むよう変化している。

「先生。もう、大丈夫です。先生の、気持ちいいように……して、ください」

表情を見れば、まだ痛みが残っているのは明白だった。残念ではあるが、今日は早めに切り上げるとしよう。

チナツの処女膜が切れた部分を刺激しないように、亀頭でグリグリと一番奥深くをかき回す。

誰の触れたことのないチナツの子宮口が、膣の動きに引きずられて時折私の亀頭にふれる。

「あっ♥ それ、一番奥、ぞくぞくっ、て♥ します♥」

セックスに並々ならぬ才覚を見せるチナツは、子宮口をくすぐられるのがお好みの方だった。新たな事実が発覚したことにチンコのイライラを更に高めつつ、徐々に上下のピストンも織り交ぜていく。

「あっ、はっ、んんっ♥」

貫かれる度に、チナツの喉から押し出されるように声が漏れる。

がっしりとしがみつくとチナツは既に玉のように汗をかいており、お互いの肌は風呂に入ったかのように濡れて滑った。

私の口元にはチナツの笹穂耳が揺れており、口に含んで舌で舐め回すと、

「はあっ♥ ああーっ♥」

不意を打たれたようにチナツが大きな声をあげ膣を痙攣させる。どうやら今ので軽くイッたらしい。

吸い付く様な締付けのチナツの膣を、振りほどくように強引に上下左右前後にグリグリと動かし、膣肉の柔らかさとコリコリした子宮口の感触を味わっていると、射精感が限界に近づいてきた。

「チナツ。膣内なかで出すよ」

「そ、そんなっ♥ あかちゃん、できちゃいますっ♥」

「大丈夫。ほら、これ飲んで」

そう言つて、傍らの風呂桶に入れておいた小さなケースから錠剤を取り出す。

「こ、れは……」

「アフターピルだよ。飲んでおけば妊娠を防いでくれるんだ」

アリスにお使いを頼んで買ってきてもらった一品だ。報酬はもちろん小テスト免除でのおねだりセックス権である。

「あ、ああ……♥」

チナツの昂奮で幾筋か涙の跡が残る顔に、だらしなく緩んだ笑みが浮かぶ。

ゆっくりと、よだれが糸を引く口内を開け、ピンク色の可愛い舌を伸ばしてくれるチナツ。

ぼとり、と小さな錠剤が落ち、チナツはあふれるよだれでもって飲み込んだ。

「膣内に、出していいんだね?」

「あ、アフターピルなんて、避妊率は100%じゃないのに、生徒に膣内射精しようとするなんて……♥ 本当に、大人つてずるいです♥  
こんな行為の味を覚えさせられたら……先生に夢中になっちゃうに決まっています♥」

昂奮でタガが外れてしまったのか、妊娠のリスクを正確に認識しながらチナツが膣内射精を許してくれる。

最高に射精欲が高まってくる。腰をカクカクと小刻みに使い、チナツの子宮口をお手玉して絶好の射精位置にセッティングする。

「あっ♥ ひっ♥ んいっ♥ いっ♥ んひいっ♥」

お互いに必死になって相手の身体にしがみつき、小刻みに震えながら性器の感覚に没頭する。射精する側と受精する側、まるで一つの生き物のように息のあった子作り行為。

これで孕まないのが不思議なくらいに、全てを許しあった男女の甘やかな雰囲気満ちていた。

「いくよ、チナツっ！」

「ぎてっ♥ せんせ、の、しゃせーっ♥ できちやってもいいですか  
らあ♥」

チナツの、苦悶にも似たチン媚声に促され、子宮口にいい角度で刺さったチンポから精液がほとばしった。

「あっ、あああーっ♥」

締め切った風呂場に、チナツが人生初の射精で絶頂する叫び声が響く。

清潔なお湯の蒸気ではなく汗と愛液が湯気になったものが漂う風呂場で、15歳のチナツに許可を得て妊娠リスクのある精液を大量に注ぎ込んだ。

どく、どく、と1分は長々と脈打っていたチンポがようやく出し尽くすと、チナツも力が抜けたようにぐったりと私に体重を預けて脱力してしまった。

「はあー……っ♥ はあー……っ♥」

チナツの深く、リラックスした呼吸だけが耳に届く。汗まみれの身体を密着させて、しばらくそのまま抱き合っていた。

「お疲れ様、チナツ。すごくエッチで、可愛かったよ」

「はあ、はあ……もう、気持ちよすぎて……頭がおかしくなりそうです……♥  
♥ こんなのを委員長が独り占めするなんて、許せません……♥」

一皮向けたとでも言うのか、すっかりセックスを受け入れたチナツがチンポを啜えこんだまま婉然と微笑んだ。

「一応、ヒナには内緒でお願いね」

「ふふ……委員長以外の皆を墮としてから種明かしをしたら……どんな顔をするでしょうね？」

「そういう意地悪は止めておこうね……」

「冗談ですよ。……先生がその気にならない限りは♥」

ニツコリと余裕さえ感じる笑みで応じるチナツが、処女を失った事で大きく成長した手応えを感じつつ……精液を漏らさないようにチナツを駅弁の体勢で脱衣所まで抱えて戻った。

「それじゃまたね、チナツ」

「はい。明日も合宿なのに、股間の違和感がすごくて……バレてしまったらすみません、先生。その時は委員長と私、どちらか選んでくださいね」

ドアを開けて廊下で話しているというのに、平然と際どい発言をするチナツ。

「あ、あはは……それなら私はどちらも……いや、イオリとアコもまとめて全員選ぶけどね」

「……ふふっ。ずっとずっと、そうやってずるい先生で居てくださいね♥」

見透かしたような女の笑みを浮かべて、チナツは小さく手を振って私を見送ってくれるのだった。



## 嫌よ嫌よは大好きの証（イオリ）

合宿最終日。私はまたヒナの部屋に居た。ヒナももう普段の服を着ている。

「先生。泳ぎ方を教えてくれて、本当にありがとう」

ほんの少し時間が空いたので、ヒナに泳ぎ方を教えていたのだ。2人きりとは言え、アコもよだれを垂らして見守っていたので浜辺でセックスとは行かなかったが。

「どういたしまして。でも完全に一人で泳げるとまでは行かなかったし、また今度一緒に行こう」

「うん。必ず行く」

につこりと年相応の……いや年よりかなり幼く見える笑顔が眩しい。

私は、身をかがめてヒナにキスする。

「んっ……」

セックスではないが、舌を絡めてゆつくりと触れ合う。ヒナの小さな手がフラフラと上がってくるのを見て、それぞれの両手を指を絡めて繋いだ。

「んふっ……♪」

ヒナがキスしたまま目だけで微笑み、そのままキスを続ける。

「ぶあ……もう、先生。これから帰るのに、こんな事したら……身体が熱くなっちゃう」

「ごめんごめん。ヒナの笑顔がとっても可愛かったから」

そう言うと、ヒナははにかんだ。

「はあ、仕方のない人ね。……次は、半月以内に時間を作るから」

「うん、楽しみにしてる」

最後に触れ合うだけのキスをして、私はシャーレビルに帰った。

（嘘だ。嘘だ嘘だ）

見ちゃった。先生と、委員長が、あんな、いやらしいキスを、喜ん

でしてゐるなんて。

顔の血の気が引いて気持ち悪い。寒いのに背中が汗でベタついて気持ち悪い。

私には関係ない。そう思っても、頭の中でさつき見た光景がグルグル回って消すことが出来ない。

(ベ……別に、いいじゃん。委員長と先生がどういう事してたって……そりゃあ、どっちも立ち場のある人だけど、2人がこ、恋人……同士、なら、私には……関係ないし……)

身体が震える。目の奥がツンと熱くなつて、今にも涙が溢れそうになる。

(なのに、どうしてこんなに……)

ズキズキ、胸が痛い。

先生。会う度に私に触ろうとしてきて、隙あらば足とか舐めてくるし、昔のアルバム見ようとしてくるし、私が来てって言ったらいつでも来てくれるし、私の使ってるコスメとか把握してるし……

(ああ……私……もしかして……)

目尻から、涙がこぼれた。

(先生のこと、好きなんだ)

認めたら、余計に辛くなつた。

(いつから?)

2人の親密な様子は、合宿で付き合い始めたなんて感じではなかった。

(もしかして……委員長と付き合いながら、私にあんな事してたの?)  
少し前なら、殺意に転換されていたような推測だった。けれど、今それを思うと、

(私にも、まだ、チャンスがあるのかな)

傷ついた心に、希望という甘い蜜が浸透する。

「イオリ先輩ー? どこに居るんですかー?」

チナツが呼んでいる。

(行く)

トイレの洗面所で、顔を洗う。目元が赤いかもしれないが、ちよっ

とファンデーションを塗って誤魔化しておいた。

委員長に対して、普段どおりに振る舞わなければ。

(風紀委員でも、隠れて男の人と付き合うならセーフ、だよな)

委員長が示してくれた範に、従おうじゃないか。自然と口角を吊り上げながら、トイレを出た。

「おや、どうしたの、イオリ？ 水着でここまで来たの？」

執務室のドアがスライドすると、そこには黒ビキニを着たイオリがビーチベッドを脇に抱えて立っていた。

「そんな訳無いでしょ。……下の居住区で着替えて来たの」

後ろの疑問には答えてくれたが、前の疑問には答えてくれない。

「ふうん。それで、どうしてここに？」

そう言いながら、イオリを見つめる。

風紀委員として日々鍛えている事がよく分かる、少女の柔らかかさや鍛えられた筋肉の美しさの融合。

腰回りはほっそりしていると云うより鍛え抜かれて薄っすらと腹筋が6つに分かれているのが見えて、彫像めいた肉体美を感じる。

「せっかく海に行つて水着も新調したのに、あんまり遊べなかつたからね。せめて日光浴でもしたいと思つて」

「それなら、今から2人で浜辺に行こうか？」

すぐさまそう提案した。イオリのセクシーな水着姿を合法的に眺められるのなら悪くない。

イオリは、びくつ、と大きさに肩をすくめて顔を真っ赤にした。

「い、い、いいよ。大きさを。……誰かの邪魔が入ったら困るし……」

「え？ なんて？」

「なんでも無い！ い、いちいち人の発言を詮索しない！」

もちろん聞こえていた。これはもしかして、イオリとセックスするチャンスなのだろうか。

イオリは耳を赤くしながら、私の後ろを歩いていき、ビーチベッド

を窓辺に設置する。

真夏の日差しは熱く、クーラーの効いた室内であつても窓辺に居たら汗が吹き出るほどだ。

カーテンを設置しようと思いつつも、窓の形が特殊過ぎて面倒だという理由で後回しにされていた。

がしや、とビーチベッドを置くイオリは前かがみになっており、私に尻を向けている。

鍛えられたイオリの尻は丸くて張りがあり、水着の布がピッタリと張り付いている。普段はなかなか見れない鼠径部や、心なしか楽しみに揺れている尻尾の根本なんかもよく見えて眼福だ。

イオリは設置したビーチベッドの様子が気になるのか、何度かぐつ、ぐつ、と押して軋みがないか確かめていた。

その度に尻がプリプリと振られ、チラチラと股間の布の張り付きが見えてチンコのイライラが急速に高まってくる。

(明日はアリス一人の予定だし、コツテリ抜いてもらおうかな)

ある意味最初のセフレであるアリスは、セックスの学習に一番意欲的だ。

遠慮を知らない抜き特化のフェラに、自分がイッてもお構いなしの腰使いで精液を搾り取る騎乗位はもはや得意技と言つても過言ではない。

明日のセフレックスを思い浮かべた私に気づいたか、イオリが振り返って何やら睨んできた。

「こ、これから、私はここで寝るけど……へ、へ、変なこと、しないでよね」

なぜか震える声でそう言って、サンダルを脱いでサングラスをして、両手を頭の後ろにやり、膝を軽く組むポーズをする。

たつぷりと気分を出して寝そべった。

(よし、触ろう)

こんなお誘いをファイにしたら男が廃るというものだろう。がたと椅子を鳴らして立ち上がり、スタスタ歩いていく。

「ひうつ」

何やらイオリの喉がなった気がするが、気の所為だ。寝ているのだし。

イオリの足の指は意外と厚く、丸みを帯びている。それでいて肌はミルクコーヒーのように滑らかな質感で、シミ一つ無い。

ふくらはぎから太もものラインは美術品のように美しく、弛んだ感じは一切しない鍛えられた筋肉を脂肪が美しくコーティングしていた。

「やっぱり綺麗だなあ、イオリの身体は」

ふすー、ふすー、とイオリの鼻息……寝息が聞こえる。

私はふくらはぎをそつと掴み、上に向かってスーツと手を這わせていった。

ぴくん、とイオリの脚が痙攣するが、起きる気配はない。

「このお腹のライン、こんなに綺麗な子はなかなか居ないよ」

両手を恥骨が浮き出た所に置いて、そこから上にゆっくり上げていく。

力強い筋肉と女の子の柔らかさが同居した最高のボディ。ゆっくりゆっくり、じつとりと汗ばんだイオリのお腹を、筋肉の凹凸を指先に感じながら上がって……

「っ……………」

腹筋の微かな震えを感じながら、ゆっくり上がる。

みぞおちを過ぎ、胸へ。

イオリの胸布は下乳を隠さないデザインで、彼女の形の良い胸をピツタリと包み込んで形を露わにしている。

水着に包まれていない下側から、持ち上げるように触れる。

「はっ……………」

ぴくり、と身体が震え、顎が微かに上がる。息を呑み、喉が鳴った。イオリの胸はとてもハリがあつて、上を向いても全く形が崩れていない。

触れるとゴム毬のように弾力を感じる。熱いくらいの身体の体温とは対照的に、まだ少しひやりとした温度を保っている。

親指と人差し指の間でゆっくりと乳房を持ち上げ、山頂へと向か

う。

必然的にイオリの水着がずれ、男に一度も見せたことのない秘部が露わになっていく。

弾力のある感触と、ふにやりと柔らかい感触の境を感じた。イオリの乳輪にまで手が掛かったのだ。

それでも速度は変えずに、ゆつくりと手を進め……

ついに山頂、乳首まで到達した。

「わあ……」

感嘆の息を漏らす。褐色のイオリの肌に、白っぽく見える色素の薄い乳首と乳輪。

鍛えているからなのか、イオリの乳輪は横に引き伸ばされたかのように楕円になっている。

甘勃起している乳首を指で転がした。

「んっ、ふっ♥」

鋭い呼気と共に、イオリの肩がぴくん、ぴくんと痙攣するように竦む。あつという間に充血し、大きめの勃起乳首が現れた。

すかさず、向かって右の乳首にしゃぶりつく。

「んんんっ♥」

大きなうめき声を上げ、イオリが身を振って悶えた。

ゆつくり、唾液を絡めるように乳首を舌でねぶる。イオリは舌がくるんと一周する度に、大きく痙攣して反応する。

そつと、イオリの股間に手を伸ばした。

とん、とん、と指一本でノックするように、クリトリスの位置を叩く。

イオリは、ノックに応じるみたいに脚を肩幅に開いてくれた。

ありがとう、の代わりにカリカリと水着の上からクリトリスを爪で搔く。

「はあーっ……はあーっ……♥」

荒く、深く、けれど心地よさそうにリラックスした深呼吸の音だけが、執務室に響いていた。

ちゅぷ、と名残惜しくも乳首から口を離すと、明らかにしゃぶって

いた方だけがさらなる勃起に膨らんでいた。

夏の昼間の日差しに、じつとりと珠のような汗がきらめいている。ぬらぬらとした汗の光が、腹筋の凹凸を強調し、ずらされたままの水着がいたずらの爪痕を物語る。

「綺麗だよ、イオリ」

サングラスで目元を隠し、未だ何も言わないイオリの喉元が、固く唾を飲んで艶かしく蠢いた。

イオリの下半身に覆いかぶさり、ローライズな水着の股間に口づける。

ベツタリと唇を押し付けて、もぐもぐと食むように動かし厚い水着の布のむこうの秘唇の柔らかさを堪能した。

下から手を入れてプリプリのお尻を掴みつつ、背中側の水着の縁に指をかける。

「あつ、う……………！」

目の前の水着の縁を唇で挟み、前後同時にずり下ろしていく。

「まつ……………」

目の前の腹筋にぐつと力が入り、影が落ちる。

イオリが起き上がっていた。

「まって、そ、それ以上は、だめ、先生」

かしやん、と音が鳴る。イオリはサングラスを外していた。

「どうして?」

ずるずると水着を下ろすのを継続する。

「ちよ、まつ! なんて!? 待ってって言ったじゃん!」

ぐつ、と力をこめて私の頭を掴むが、そこだけ掴んでも手は止まらない。

「ちよ、だめ、ほんと、まって、見えちゃう、見えちゃ、ああつ!」

スルリと尻の下敷きから抜け出し、後はもう滑るだけだった。

「おおお……………」

クリトリスの回り、ほんの少しの部分だけ残された、イオリの髪と同じ色の陰毛に目を奪われる。

赤く充血した陰唇が、誘うように、しかしまだまだ控えめに花開い

ている。

包皮に包まれたクリトリスは大ぶりの真珠のようで、艶やかなピンクに照り光っていた。

イオリの綺麗な褐色の肌は恥丘もまた美しく、粘膜が鮮やかなピンクなので強調されてより美しい。

「イオリの身体はどこも綺麗だね」

「そんな所見ながら言うことか……!」

恥辱を堪える押し殺した声が、頭の上……掴まれた手の向こうから届く。

クンニのために顔を股間に寄せると、イオリの手が頭の動きを阻む。

「だめ、だめ、ほんと、駄目だからっ……!」

力を拮抗させつつ、ふるぶると痙攣する中で顎を突き出すようにして距離を稼ぎ、舌を限界まで伸ばす。

触れた。

「はんっ……!」

鼻に抜けるような、甘ったるい声。

一度届いてしまえばそれまでだ。ぬる、ぬる、と可動域の限界で、舌とイオリの陰唇が絡み合う。

「ああっ♥ そんな、とこ、汚いっ……!」

イオリの胸につかえたような声がひどく色っぽい。頭を抑える手の力が緩み、舌先だけではなくべっとり舌全体で、唇で、イオリの股間をしゃぶれるようになった。

「んきゅうううっ♥ なめ、るなあ……!」

もう頭に添えているだけになったイオリの手が震える。じゅるる、と愛液をすすり、舌を入れてネチャネチャとかき回すと目の前に壁のようにそびえるイオリの腹筋が、快樂のほどを表すようにヒクヒク震えた。

ぷつくりと勃起して包皮から先端を覗かせたクリトリスをぱつくりと口の中に含み、唇で挟み、舌で皮を向いて飴玉のように舐め転がす。



「あっ！ ああーっ！！」

がくん、がくんと全身を痙攣させて、私の頭を掴んだ手を痛いくらい握りしめ、イオリが絶頂した。

「はっ、はっ、はっ……♡」

激しい絶頂は始めてなのか、全身を弛緩させて余韻に浸るイオリ。

私は、更にイオリのクリトリスをしゃぶる。

ぢゆるるう、とフェラのように吸い付き、充血しきったクリトリスに更に血液を集中させ、舌を激しくビンタのように往復させて強い刺激を与える。

「ああーっ♡ だめっ♡ せんせっ♡ やめっ♡ いっ♡ く♡ いくっ♡ いくっ♡」

イオリは力を込めようとして込められないように、私の頭をどかさうとして結局はお腹に抱くような体勢で動けなくなってしまった。ちゅうちゅうと更に吸い、イオリを何度も何度も絶頂させる。

「あ、ーっ♡ もうだめっ♡ ゆるひてっ♡ ねえっ♡ せんせえっ♡」

イオリの声が、すすり泣くようなもの変わっていく。私の口の前にあるイオリの膣口は言葉とは裏腹に悦びの涙として白濁した本気汗を流し始めていた。

ぎしっ、とビーチベッドがきしむ。ついにイオリが力尽き、再び寝そべってしまった音だった。

生チンポをイオリのマンコにこすり付け、これからすることをイオリに意識させる。

「あっ……♡ だめ、だよ、先生……♡ 生徒を、レイプするつもり……っ？」

イオリは夢うつつのように柔らかな声音で、そんな事を囁いた。

「そうだよ。私はイオリの事が大好きだからね」

ごくり、とイオリが固くつばを呑む。

股間に突き立てようとした私のチンポの前に、そっとイオリの手がはだかった。

「ねえ、先生……私と、委員長と、どつちが好き……っ？」

「どつちも好きだよ」

「やだ。答えて。……私の身体、綺麗って、言ってくれたよね……？」  
「さすがのような、潤んだ瞳。泣き崩れる直前のように弱々しく、普段のイオリからは想像も出来ない女の子の弱々しきを感じた。」

「どつちも好きだよ」

「答えてよ、先生！」

「皆のことが好きだから、皆の一番可愛い所が見たいんだ。ただそれだけだよ」

そう言つて、イオリの手にチンポをくつつける。黒手袋をはめた手に、我慢汁がべつとりと付着し、イオリが震えた。

「ずるっ……大人の男って、ずるい。最低……！」

「イオリが本当に嫌なら、ここで終わるよ」

「嘘。絶対ウソ。……私が嫌って言ったら、委員長とこういう事するつもりでしょ……」

「ううん、ヒナじゃなくてアリスとセックスするつもり」

「は!? 他にも手を出してるの!? ほんと、どこまで……！」

「だから大丈夫。アリスもいっぱいセックス出来て喜ぶし、イオリは処女を喪わないよ」

イオリは、ぎゅつと顎に皺が寄るくらい顔をしかめ、私を睨んだ。

「別に。知らない。先生の好きにすればいいじゃん」

「いや、イオリの意思を……」

「先生が！」

大声で私の言葉を遮り、イオリが小さく呟く。

「大人の男の人が、本気出したら……子供の私なんて、抵抗出来ないもん。だから……先生の、好きにすればいい」

「ふい、と顔をそむけ、そつと手がどけられる。ひくひくと物欲しげに震えるイオリの膣口が晒され、とろりと一筋の愛液がビーチベッドに小さく水たまりを作った。」

「じゃあ遠慮なく」

ぱつくり開いたイオリの膣にチンポを突き立て、腰を突き出す。

キツイ抵抗を受けつつ強引に押し広げると、ぬるんと筋肉のリング

をくぐり抜けた。

「んっ、ぐっ……♥」

何度もの絶頂で準備が整っていた膣は私を歓迎するように受け入れ、幾重もの肉襞にもみくちやにされながら奥へと入っていく。

とん、と膣奥にたどり着くまで、特に抵抗はなかった。

「イオリの処女、貰ったよ」

「はあ……はあ……♥ この、性犯罪者……レイプ魔……♥」

水着をずりあげられて勃起している乳首を丸出しにしながら、上ずった声でイオリが罵倒する。

親指でクリトリスをゆっくり転がしながら、私は軽く腰を使い始めた。

「は、ああーっ♥」

とたんにイオリの膣はざわざわと蠢き、私に愛おしげに抱きついてきた。

「おおっ、凄い、イオリはマンコまで運動神経抜群だね」

「ばか、あ♥ そんな、な、こと、いうなあ♥」

ぬっち、ぬっち、とイオリの本気汁が粘ついて音を立て、私の下腹部とイオリの陰唇に糸を引く。

「ほらイオリ、バンザイして。水着脱いじやおう」

「やつ、やあ♥ 変態♥」

むずがるイオリの乳首をクリクリと弄ると、だんだん抵抗が弱まっていく。するつと上の水着は首を抜けて、ビーチベッドの脇の床にパサリと落ちた。

イオリが両手をブラの代わりに押さえつける。手袋に包まれた革のブラだ。

私のチンポの突き上げにプルプル揺れる胸を、必死に覆い隠している。

「ねえ、手をどけて見せてよ、イオリ」

「やあ……♥ はずかしい……♥」

ぬっちや、ぬっちや、と私のチンポは常にイオリの膣を出入りし、イオリも既に膣の硬さが取れ、ピストン運動はどんどん滑らかになって

いった。

「はあっ、はあっ♥」

イオリは目を閉じて、感じ入るように私の動きを受け入れている。私はイオリの手の上から、胸を押しつぶすように揉んだ。

「んんんっ♥ このっ、そんなに私の胸揉みたいかつ♥」

「揉みたい。イオリの綺麗で敏感な胸、見たいな」

「変態……っ♥」

ぐっ、と手首を掴んで引き剥がすと、ゆっくりとイオリの手が……チンピラ達を殴り飛ばし、銃の反動にもともしない力を持った手が、非力な私の力で離れていく。

ぶるん、ぶるんと腰を打ち付ける度に揺れる胸はセックスの昂奮で汗をかき、揺らされて珠の汗が谷間に集まり、大きな雫となって腹筋の作る道筋に従って腋に分岐して流れていった。

一番奥を突く度に、膣がきゅんと閉まる。それと同時に腹筋がひくんと痙攣し、イオリの身体全部で私を気持ちよくしてくれているのが伝わってくる。

「本当に、イオリの身体綺麗だよ」

「そんなことっ♥ いわれてもっ♥ うれしく、ないもんっ♥」

突き上げられる度に言葉をつまらせ、膣を締めて気持ちよくしてくれるイオリに、私の射精感も急激に高まっていく。

「出すよ、イオリ」

「ちよつと、……ほんとに？ 私、赤ちゃん、できちやうよ♥」

顔を背けたままに、流し目で私を見つめ……キウンキウンと膣を締めてくる。

「大丈夫。下でお薬売ってるから、帰る時に忘れずに買って帰ってね。お金は私がだから」

「さいっ、てえ♥ 生徒にっ♥ そんな恥ずかしいことっ♥ させるのっ♥」

レイプする先生とレイプされる生徒になっても、イオリは軽口のように罵倒の言葉を繰り返して出し、私を受け入れてくれた。

鍛えられたイオリの脚が、私の腰に絡みついて拘束する。

「出すよ、イオリ」

「だめっ♥ だめだったらあ♥」

イオリの両脚は私の腰をガツチリ捉え、両腕も腋の下から私の背中を捉えた。

私はベッドに突っ伏すようにイオリと密着し、腰だけを細かく前後させる。

「好きだ、イオリ」

「あ、ああっ♥」

囁いた瞬間、ギチツ、と腰を動かせないほどの締め付けが私を襲った。

その刺激で射精する。キツイ締付けに逆らって射精する分、強い射精快楽を感じ……目の奥がツンとして涙が溢れてくるほどに気持ちいい。

「せんせえの、精液い……♥ ほんとに、だしたあ♥ 赤ちゃん、出るかもしれないのに、だしちゃったあ♥」

脚と手がぎつちりと私をホールドし、腰も一番深い所から全く離せない。

セックスが継続しているかのようにイオリは膣をリズムカルに締め、精液を搾り取られているかのような快楽が私を襲った。

「はあ……♥ はあ……♥」

いつの間にかイオリは私の方を向き、潤んだ瞳で私を見つめていた。

吸い寄せられるように、唇を重ねる。

「ん……♥」

鼻に抜ける心地よさそうな声と共に、イオリは瞳を閉じる。

そのまましばらく、ゆったりと最後の一滴までイオリの一番奥に射精を注いだ。

閉じたままのイオリの唇を、舌でノックする。目を閉じたまま眉を寄せて拒絶されるが、何度かやっているとおずおずと唇が開いた。

イオリの口内は熱いくらいに体温が高く、たっぷりと唾液が溜まっていた。

舌を絡めようとするのと口内を逃げ回る。ぐるぐると時計回りに追いかけてっこをしていたが、ならばと上顎につうと舌先を這わすと、

「んんうっ♥」

嬌声と共に舌の動きが止まったのを狙い、べつとりと舌を絡めた。私達は追いかけてっこをしていた時よりもぎこちなく、始めて舞踏会に出て社交ダンスを踊るように粘膜をこすりあう。

「ふーっ♥ ふーっ♥」

イオリは互いの舌がもつれて動きが激しくなるたび、膣をキュンキュンと締めて喜んだ。

鼻息が荒く私にかかり、背中の手が私の身体を抗えない強い力で抱き寄せる。

余りにもいじらしく可愛らしいイオリに、すぐに勃起が回復する。膣内でそれを感じたイオリが、そつと濡れた瞳を開いて、私を睨んだ。

「まだするつもりなの、レイプ魔、連続強姦犯……♥」

その言葉に私は勃起を強くして、イオリの子宮口に引つかかるようチンポを反らした。

「んんっ♥ こんな事言われて余計昂奮するなんて、どこまで変態なんだ……♥」

「イオリのおねだりが可愛かったからね」

「っ……しらないっ♥」

また、ぷいとそっぽを向いてしまうイオリに、私は微笑んだ。イオリの背中に手を回し、ぐつと抱き寄せる。

そのまま、ビーチベッドの上でぐるりと身体を入れ替えた。

「あっ……♥」

そして、イオリは私に抱きついたままで、私に馬乗りになる姿勢となった。

「今度はイオリが動いてよ」

「なっ、そんな、恥ずかしいことっ！」

「ね、お願い……いや、命令だよ、イオリ」

「そんな事、言われたって……しないし」

イオリのプリプリのお尻を掴み、勢いをつけて下から突き上げる。  
「あうっ♥♥」

急に奥を突かれたイオリが、大きな声を上げた。

「なにつ、すんのお♥」

「イオリは大人の男に抵抗出来ないんでしょ？ だから、命令。『腰を振れ、イオリ』」

「あつ、う……う」

イオリはゴクリと喉を鳴らしてつばを飲み、

「しようが、ないんだ……よね♥」

ぬちゃ、と粘ついた音を立てて自分から腰を動かし始めた。

「イオリ、その体勢じゃ辛いでしょ？ 脚を解いて、踏ん張ってごらん。あと、手もつなごう」

がつちりとだいしゆきホールドされたままでひっくり返ったので、私の腰とビーチベッドの間にはイオリの脚が挟まっている。

ベッドの縁に踏ん張らせ、手も背中から恋人繋ぎに切り替えるよう命令する。

「こ、こんなつなぎ方っ」

裸に手袋だけの格好で、ずっぽりと私のチンポを咥え込みながらもイオリは恋人繋ぎに照れて渋った。

せつかくなので手袋も外し、完全に産まれたままの姿になったイオリと指を絡めて手をつないだ。

「ほら、上下でも、横でもいいから腰を使って」

「~~~~~♥」

下唇を噛んで私を睨みながら、イオリがたどたどしく腰を上下に振り始める。

ぬっ、ちゅ、ぬっ、ちゅ、と上下動は度々止まり、そのたびに膣がキュンと締まる。

「あつ♥ あつ♥ んっ♥ ふうっ♥」

私に命じられるでもなく、イオリは自分が気持ちいい部分を探して、そこにこすり付けるように腰を使っていた。

だんだんイオリの動きも最適化されてくる。

まるで、和式便器でいきんでいるように曲げた膝に上体を預け、前後に身体を揺する動きをマンコの上下動に利用しだした。

「ふうっ♥ふうっ♥ふうっ♥」

私と顔を合わせる事なく俯くように頭頂部だけ見せて、荒い鼻息を響かせて腰を振るイオリは、明らかにセックスに没頭していた。

くち、くち、くち、と小刻みにGスポットをチンポの力りで刺激し、始めての膣イキの予感にダラダラと愛液を垂れ流している。

目の前で生チンポを使った妊娠の危険のあるオナニーを見せてくれるイオリに、私も笑みを深める。

「はっ♥ん♥んっ♥あっ♥いく♥いっく、う……♥」

やがて、一人で初の膣イキをキめるイオリに合わせ、私もまた膣内射精した。

「はっ、あああああああっ♥♥」

大きな絶頂の声を上げ、予想外の衝撃に丸めていた身体を仰け反らせるイオリ。

目を合わせたイオリは、吊り目がちな尻をとろんと下げ、絶頂の昂奮で溜まった涙で目を宝石のようにキラキラ光らせていた。

「イオリは本当に可愛いなあ」

「はーっ♥はーっ♥はーっ♥」

私の軽口にも応える余裕が無いくらい深い絶頂だったのだろう、イオリは珍しく緩んだ表情で呆然と絶頂の余韻に浸っている。

けれど、その膣だけは貪欲にチンポを締め付け、精液をすすめるように蠢いていた。

あまりに可愛いイオリに、私もまだ勃起が収まらない。

「お疲れ、イオリ。次は私が突いてあげるから」

「ふえ？」

イッた余韻でキュンキュン締まるイオリの膣を、下から突き上げる。

「んあああっ♥だめ、せんせ、いまっ♥そんなの、されたらあっ♥」

ぎゅっと繋いだ両手に力がこもる。イッたばかりの敏感な膣を、ビーチベッドをギシギシと軋ませて無理に行き来する。



「あーっ♥ ああーっ♥」

イオリは天井を向いて大きな声で喘いだ。

太陽を背にしたイオリが、ツイントールを振り乱し私のピストンに悶える。それだけで何か神秘的な儀式か何かのように、イオリは昂奮のトランス状態にあった。

形の良い胸が、美しく浮き彫りになった腹筋が、身を振るイオリに釣られて変形する。汗の珠をちらして躍動するイオリの身体は更に美しく私の目を奪った。

「本当にイオリは綺麗だ。ほら、乳首も気持ちよくしてあげるよ」

褒める度にイオリは律儀に膣をキュンキュン締めつけて喜んでくれる。私はぐつと身体を起こして、仰け反るイオリの胸に吸い付いた。

「んきゅっ♥」

可愛らしい喘ぎ声と、淫らな膣の締めまりが同時に起こった。乳首をコロコロと舌で転がす度に膣が締めまり、腰を動かしてGスポットを通り過ぎる度に膣が締めまり、両者が合わさって複雑なリズムを刻む。

「ん、はあーっ♥ あう、ん、ーっ♥」

イオリは頭を限界まで上げて喉を晒し、腹の底から直接外に出ていくような、言葉にもならない大きな音を出して快楽を叫んだ。

「気持ちいいんだね、イオリ。素直になっているイオリは、本当に可愛いよ」

「ああーっ♥♥」

私の囁きが最後の堤防を決壊させたのか……イオリがまた、全身を痙攣させて絶頂した。

ギチチ、と痛いくらいの締め付けに逆らわず、私も射精する。

じよろ……と下腹部に何かがかかる感触がした。

潮かと思っただが、そうではない。暖かな液体が次から次へと溢れ出てくる。

イオリが、絶頂でおしっこを漏らしていた。

「あっ、ああっ♥ やだっ♥ ちが、ちがうの、せんせっ♥ ああ、もう、とまらないっ♥」

絶頂でゆるんだ頭で弁明しようとするも、じよろじよろと私の下腹

部を尿びたしにし、それどころか腹筋に力が入ったことにより勢いがついて、着たままの上着にまで引つかかった。

「ごめっ、ごめんなさいっ♥ わたし、こんな、おしっこ♥」

混乱して、ポロポロとイオリの目尻から涙が溢れる。温かいおしっこを下腹部に感じながら、そつとイオリを抱き寄せた。

「大丈夫だよ、イオリ。こんなに気持ちよくなってくれて凄く嬉しい。おしっこを漏らすイオリ、最高に可愛いよ」

「ばかあ♥ へんたいっ♥ ……でも、すぎ♥」

イオリも私を抱きしめ、ちよろちよろと出し切るまでしがみつくのがみつけた。

長いおしっこを出し切り、私は何度かイオリの背中を撫でて宥めてから、イオリと共に立ち上がって後始末を始めた。

幸い、執務室を出たすぐ左にはトイレがあつてモップなど掃除道具も収められている。

過去にも、数々の女子生徒の愛液や潮を拭ってきたマニア垂涎の代物だ。私は直に舐めるのでモップに昂奮したりはしないが。

イオリはタオルで身体を拭いて、危うく尿の海に侵食されそうになつていた水着を回収して着ている。ツインテールの先が尿に浸かってしまつて愕然としていたが、今は落ち着いて羞恥が先に立っているようだ。

私の執務室の椅子に膝を付けて行儀よく座り、拳を膝の上に置いて震わせている。

「ふう、こんなもんかな。もう大丈夫だよ、イオリ」

ビーチベッドはトイレに持ち込んで水洗いすれば終わりだった。きれいな水の滴るビーチベッドを掲げてイオリに示してみせる。

「そつ！ そんなの、もう使えないじゃん……」

ううう、とうめき声を上げて、イオリが俯いてしまう。耳まで真っ赤にして、さつきまでの気持ちいいセックスを反芻してくれているだろう。

「ええ？ いいじゃない、洗ったんだし。捨てるなんてもつたいないよ」

「だ、だって……これ使ったら、その……思い出しちやいそうで……」  
「思い出してくれたら私は嬉しいよ」

ばつ、と顔を上げて私を睨むイオリ。ようやく調子が戻ってきた様子に、私は笑った。

「何ニヤニヤしてるんだ！」

「イオリは本当に可愛いな、って思ったんだよ」

「ああっ！ もう！ この変態！」

眉を吊り上げて叫ぶイオリ。だが、その膺は今もきつとキュンキュンと締まっているだろう。それを知れたことはとても価値のあることだった。

「やめろ！ その、ニヤついた顔、やめろおーっ！」

拳を振り上げて私を追いかけるイオリ。

ビーチベッドを置いて逃げ回り、しばらくグルグルと追いかけてここに興じるのだった。

なお、当然追いつかれてキツイリバーブローを食らった。

## 協力プレイはゲームの華（ユズ・アリス）

「先生、アリスは多人数プレイがしたいです」

シャーレの執務室。毎度のようにセックスをしている最中、アリスがそんな事を言った。

「多人数？　じゃあ他の子を……」

今日も小テストをして、ついに高得点で合格したアリスはご褒美である『おねだり』を言う前にすぐ服を脱ぎ、幼児のように私に飛びついた。

そのまま流れでセックスを始めたのだが、とりあえず挿入した所で落ち着いたアリスは先のような事を言ったのだった。

マットで寝そべっている私に全裸で跨って騎乗位しているアリスが、ぐつと身を乗り出して顔を近づける。

「昔の人はこう言いました。『ひとりよりふたり、ふたりよりよん、よにんより、たーくさん』。アリスはこの言葉に感銘を受けました！協力プレイはゲームの華、アリスも大切な仲間と協力プレイしたいです！」

「えっと、つまり？」

「ユズやモモイ、ミドリも先生のセフレにして、皆でセックスしましょう！　ゆくゆくは、エンジニア部やヴェリタスも全員セフレにして、総員で先生とセックスするんです！　きつとかつて無い楽しい体験になります！」

「なるほど〜」

さすがアリス、発想が普通じゃない。しかし、とても楽しそうなのは同意する。

「と言っても、何かきっかけが欲しい所だなあ」

流石に処女を3Pで奪うというのは難易度が高い。かつてノドカとコタマを相手に処女喪失ハメ撮りを連続で行った事があったが、アリスは2人が相当な変態だから出来た事だ。

「それならきつと大丈夫です！　ミドリは先生を呼びながらオナニーしてたし、ユズだって先生と行った遊園地のアクセサリを眺めてニヤ

ニヤしてますし、モモイもウルトラマリンスターズの限定グッズを  
ショーケースに入れて毎日挨拶していますから、きつと先生がレイプ  
しても許してくれます!」

さらつとんでもない秘密を暴露されたゲーム開発部の面々に同  
情しつつ、まだ見ぬ生徒のマンコに期待が膨らみ、チンコも更に膨ら  
む。

「あつ♥ 先生も乗り気なんですね、嬉しいです♥ アリスも協力し  
ますから、明日にでもまずは誰か一人適当に犯してみましよう」

アリスはとても大胆ないい子に育った。感慨深くウンウンと頷い  
て、その細い腰を掴んでズンと強く突き上げる。

「ふふ、分かりました、今日はアリスが先生と楽しくセックスする番で  
すね♥」

そう言うのと、アリスはぱつかりと脚を180度近く広げ、身体を後  
ろに倒して私の太ももに手をつけて支えた。アリスの長い髪が私の  
膝辺りを毛布のように覆い、なかなか味わえないしっとりとした不思  
議な感触に陶然となる。

散々犯したにもかかわらず未だピツタリと閉じたアリスの陰唇を  
私のチンポが無残なまでに押し広げる様を丸見えにしながら、アリス  
は私の方を見て微笑んでいた。

普段とはほんの少しだけ違う、セックスのことしか考えていない、  
雌の笑顔。ヒナ一筋だった私を数多の生徒と肉体関係を持つ淫行教  
師に変えた、無垢なる性欲の塊。

「今日もアリスで、沢山射精してくださいね、先生♥」

そう言つて、アリスが腰を振り始めた。

にちにちにちにち、と水音を立てる間さえ待つていられないとばか  
りにその腰の振りは素早い。

まるでベリーダンスのように前後の振りと左右の振りを織り交ぜ、  
良い子の歯磨きのように満遍なく膣内のすべての箇所私のチンポ  
をこすり付ける。

「はっ………♥ ふっ………♥」

アリスも興が乗つてきて、蒼白とさえ言える普段の肌色が桜色に染

まってくる。

怪力を秘めている事が信じられないくらいに細い身体が躍動し、クイクイと腰を振る度に恥骨や腰骨が浮き出て強調され、膣口がヒクヒクと痙攣し腹筋がへこむ。

下半身の全身全霊で奉仕してくれている事が伝わる、アリスらしい純粹な騎乗位だ。

私は、限界まで勃起したアリスの小さなクリトリスをちよんと指でタップした。

「んっ♥ せ、先生、今はアリスがあ♥ 先生を、気持ちよくっ♥」

ちよん、ちよん、優しくタップする度にアリスは小さく痙攣し、腰の振りに微かなランダム性が生まれる。膣のうねりも一際強くなり、更に気持ちよくなった。

「大丈夫、アリスのマンコはとっても気持ちいいよ。腰を振るのも凄く上手になったね。偉いよ、アリス」

「嬉しいっ♥ 先生が褒めてくれるの、アリスにとって何よりのご褒美です♥」

ぱっかりと大股を広げてチンポを咥え込み、クリトリスも乳首もピンピンに勃起させながらへこへこ腰を振るアリスが、無垢な少女の笑みを浮かべる。

アリスのこういう所が最高にチンポをイライラさせるのだ。我慢できなくなって、アリスの細い腰を掴んで私からもガンガン腰を振り始めた。

「ご褒美ついでに私からも突いてあげる！ アリスも気持ちよくなる事だけ考えて腰を振ってごらん！」

「はいっ♥ アリスのマンコ、もう、いきそうですっ♥ 先生、アリス、ポルチオアクメしたいです♥ 一番奥、擦って♥ アリスのポルチオいじめてっ♥」

騎乗位を繰り返すうち、アリスは一番奥が大好きになった。『協力プレイ』で毎度の開発を続けた結果、今では一度は子宮口でイかないと満足出来ないほどにハマっている。

今の後ろに倒れた姿勢も、アリスの子宮口を一番効率よく突くため

に選ばれたものだった。

「ほら、アリス！　ここが良いんだよね！」

最適な角度、力加減でアリスの子宮口を突き崩すと、普段のアリスの態度の奥から、雌の本性が現れてくる。

「おっ ♥　おおおおお　♥　んおおおおお……♥」

アリスの顔はもう私を向いていない。仰け反って天井に向かい、喉からは発情期の獣が唸るような悩ましげな声を上げてポルチオアクメに集中した。

ぬちや、ぬちや、と膣の愛液が白濁し本気汁を垂れ流し、もとは薄いアリスの性臭がくつきりと感じられるようになると、そろそろ絶頂の合図だ。

「ふーっ ♥　ふーっ ♥　んおおーっ ♥」

鼻息を荒くして、アリスがラストスパートとばかりに一際激しく腰を前後にカクカクと振る。

私はダンスのパートナーのようにそれに合わせて上下に突き込み、息をピッタリと合わせて絶頂へと上り詰めた。

「出すよ、アリス！」

「おおおおおーっ ♥　♥　いつ、くううううんっ ♥」

普段の純真無垢な幼いアリスしか知らない人ならば驚きで思考停止してしまいそうなほどかけ離れた、全身全霊の叫びを上げてアリスが子宮口イキをキめた。

ギユウギユウと握りしめるような絶頂時の膣の締りに精液を押し止められ、射精の快楽が増幅される。

純粹に子種を欲しがる子宮口への道を薄いゴムに閉ざされた私の精液が、アリスの膣奥にわだかまった。

ガクガクとアリスの腕が震え、怪力を誇る腕が少女の上体すら支えられなくなつて肘が折れる。くたつ、と私の膝を枕にアリスが背を付いた。

「はあ……♥　はあ……♥　先生とのセックス、やっぱり最高に幸せです……♥」

天井を見つめながら熱っぽく語るアリスは、もう立派な一匹の雌

だった。

——先生、今なら部室にはユズ一人きりで、あと3時間は誰も来ません。今のうちに電撃レイプ作戦を敢行してください！ Good

L u c k !

ビツ、と親指を立てたアリスに見送られ、ゲーム部部室に入る。

「おじやましませ〜す」

「あつ、先生！ 来てくださったんですね、嬉しいです！」

誰も居ない室内……と見せかけて、ガチャ、とロッカーが開いた。小柄な身体をすっぽりとロッカーに収めていたユズが笑顔で顔を出していた。

「やあ、ユズ。遊びに来たよ」

「やった、じゃあじゃあ、どうしましょう、格闘ゲーム……は止めたほうが良いですね……えっと、協力プレイが出来るやつは……」

ユズが四つん這いになって床を漁り、ゲームを選んでいる。すっぽりと被ったパーカーに隠れてお尻は見えないが、むき出しの白い太ももとふくらはぎが眩しかった。

「うん、今日は久々にこれを遊びましょう！ メタルバレット3です！」

そういう事になったらしい。プライステーションのコントローラーを受け取り、テレビの前に胡座をかく。隣にピットリと座るユズに微笑んで……

ガツと腰を掴んで、膝の上に載せた。

「ふええ!? せ、せ、先生!? どうしたんですか!?!」

「せっかく2人きりだから、この姿勢でやりたいなって思ってた」

「いや、あの、そんな、えっと……あうう……わ、分かりました。じゃ、じゃあ、始めましょう」

プルプル震えているユズのつむじを見ながら、ゲームを開始する。

昔のゲームとは言え緻密に描かれたアニメーションは素晴らしく、目を奪われると即死する厳しさも相まって熱中してしまった。

ゾンビを焼き、海や空も駆け巡り、最終的には宇宙人の母船に乗り



込んでの死闘を繰り広げる。私はコンティニューを何度もしたが、ユズがスコアを稼いでくれるのでギリギリ生き残っている状態だ。

「ふっ、ここ！ あ、先生！ 次は画面左から四分の一のところから敵が来ますから撃ち続けて下さい！」

私というお荷物を生かすハンデ戦が丁度いいのか、最初は照れていたユズもすっかり熱中している。

そのせいで、ユズの柔らかいお尻が私の股間に押し当てられ、丁度いい刺激を与えてくる。

チンコのイライラを我慢せず解き放つ。

「ひうつ!？」

びくん、と敵を倒したユズが進行待ちのシーンなのに肩を跳ね上げる。

チラチラと後ろを見ようとして、勇気が出ずに見れない角度で首が左右に振られ、軽快だったゲームの進行が途端に止まった。

私は無言で画面右端でジャンプし、ユズを促す。同時に勃起をより固くさせ、ユズのお尻をぐつと持ち上げるように力を入れる。

「んっ……♡」

パーカーの下で、ユズが脚に力を込めたのが分かった。私はユズのお腹の前で構えていたコントローラーを手前に寄せ、離れようとしていたユズの身体を抱き寄せる。

「あ……♡」

勃起をより強く押し付けられ、2人きりで抱きすくめられているというのにユズは特に抵抗もせず、何も知らないフリでゲームを続けた。

後ろから見える小さな耳は赤くなり、耳たぶを食みたくなったがそれは我慢しておく。

そんな状態でもユズの腕前は凄まじく、大気圏外から落下しつつの巨大な脳みそのようなラスボスをガンガン武器で撃ち、ゲームをクリアした。

メインテーマのアレンジであるエンディング曲が流れ、味わい深いクレジットが下から上へと過ぎていく。

そんな中、コントローラーを手放した私は直接ユズを抱きしめた。  
「せ、先生、あの」

ようやく振り返ったユズが何か言おうとする前に、唇を奪う。  
「んっ!?!」

手足をバタつかせて逃れようとするユズに、強引に舌で唇を割り開き口内を蹂躪した。

「んうううーっ♡」

床に物が散乱しているゲーム部の部室なのでちよつと難易度が高かったが、私達が座っていた座布団を活用して頑張つてユズを床に押し倒す。

細い手を掴んで指を絡めて握る事で拘束しつつ、チロチロと上顎の裏を舌先で愛撫する。

「んっ♡ んっ♡」

押さえきれない声がユズから漏れ、私の口を直接に震わせた。脚をバタつかせて抵抗していたユズがだんだん大人しくなり、私の手を握り返してくれるのを確認して、唇を離す。

「せ、せんせい……♡ だめ、ですよ……こんなの……」

「駄目じゃないよ。私はユズとしたい」

「だ、だって……あの……わ、私、まだ、子供だし……」

「構わないよ。ユズはとっても可愛い女の子だから」

「あ、いえ、ですから……!」

ユズはキスをしているときよりも真っ赤になって、ギョツと目を瞑った。

「ま、まだ、は、はじ、始めてが来てなくて……! 赤ちゃん、出来な  
いんです……だから、こういう事は、まだ早く……先生?」

チンコのイライラは最高潮に達した。パーカーのジツパーを下ろし、ガバツと前を開ける。

「ふええ!?!」

ユズのパーカーの中は全裸とかではなく、普通に制服だった。とは  
言え始めての姿に新鮮味を感じる。

「ちよ、だ、聞いてましたか!?! 駄目です、駄目ですって!」

愕然としたユズが制止してくるが、フラフラと顔がユズの小さな胸に吸い寄せられて行った。素早くボタンを外し、ネクタイが付いたままのブラウスの前を開ける。

「きやあああつ!? や、やだ、先生、先生っ!」

本格的に抵抗して来そうだったので、先手を打ってまたキスをする。

「んむー!? んむうううっ♥」

優しいユズには舌を噛むという考えがないのか、反応の良い上顎への愛撫をすると突き飛ばそうとする腕の力が緩み、私に胸を触られてしまう。

キスしたまま薄手のキャミソールをめくると、柔らかいスポーツブラに包まれた胸に触れた。

「んーっ!? んううううっ!」

目を見開いて抗議の声を上げるが、私からもじつとユズの目を覗き込むと、羞恥に耐えかねて閉じてしまう。そうしてされるがままに、スポーツブラの上から優しく乳首をカリカリと引つかかれ……

むくっ♥ と可愛らしいサイズの乳首がブラを押し上げる感触が伝わってきた。

「んーっ♥ んふうううーっ♥」

羞恥と、微かな快樂にユズが悶える。ペろん、とスポーツブラをめくって胸を露出させた後、今度はスカートのホックを外した。

「んむーっ! んんんーっ!!」

しつかり者のユズは未だに抵抗を続け、スカートを掴んでずり降ろさせまいとする。しかし私の手は既に下から侵入し、ユズのショーツ……いや綿の子供パンツの股間を撫でていた。

指一本でスリスリと割れ目をこすり、熱く湿り気を帯びた二重に柔らかな感触を味わう。

「んっ♥ んっ♥ んんっ♥」

びくっ、びくっとして身体を震わせて、ユズが私の責めに悶えている。両手をスカートを掴む事に使ってしまったユズは私の行動を止める事もできず、されるがままに股間を弄られるしか無い。

しかも、別の手で乳首を直接触り始めた。

「んーっ♥んーっ♥」

目をぎゅつと瞑り、眉を寄せて快樂に耐えるユズ。身を振ってもどうにもならず、身体が痙攣する間隔はどんどん短くなっていった。

「んむううううっ♥」

そして、パンツを下ろす前にあっけなく絶頂を迎えてしまう。

あれほど固く握りしめていたスカートを持つ手が緩み、私はするりと脱がしてしまった。

ちゆるんと舌を抜くと同時に顔を離し、ユズを見下ろす。悲しみと昂奮で目を潤ませ、前をはだけられた制服からは平坦な胸が晒されている。

お菓子にデコレートされたクリームのようにツンとそびえる可愛らしい乳首が目を引いた。

脱がせてしまった下半身を包むのは、前にくまさんがプリントされた可愛らしいものだ。その可愛らしさが、愛液で出来たシミにより淫靡さをより引き立てていた。

「はあ……はあ……♥」

「ユズ……とっても可愛いよ」

「うう先生のバカ……し、信じてたのに……」

涙声で睨んでくるユズを見ると心が痛むが、チンポのイライラは高まる。ピツタリと閉じた脚を強引に開かせ、股間に顔を突っ込む。

「ひゃああっ!? そんなとこ、汚いですからあ!?!」

裏返った声で叫ぶユズを無視して、幼い故に瑞々しい匂いを放つ愛液を吸引するつもりでパンツの上からクリトリスを吸引する。

「は、きゅうううんっ♥」

言葉にならない声と共に、ユズの太ももが私の顔を左右から押し潰し、天井に向かって垂直に伸びた。

太ももの力の入り具合からして足先をギョツと丸めて気持ちよさに耐えているのだろう。

十秒程もそうした後、ユズの脚から力が抜けてM字の大股開きで脚が床に落ちた。ゲームのカートリッジを蹴り飛ばし、カシヤリと音が

するがユズは気にかける余裕もなく、

「はぁーっ♥ はぁーっ♥」

激しいクリトリス絶頂で止まっていた息をするのに精一杯のようだった。

ひとまずのトドメを刺した私は、その間に服を脱ぐ。全裸になつてからユズのパンツも脱がし、ユズの下半身も一糸まとわぬ姿となつた。

呆然としていたユズが我に返つた時には、もう私はユズの股間にチンポを擦り付けている。

「ひよわあああつ!? せ、先生の、お、おちつ、わわわわわっ!」  
顔を真っ赤にして両手で顔を覆い、指の間からしっぴかり見ているユズ。

その可愛らしい様子に、身をかがめて綺麗なおでこに口づけた。

「あっ……♥」

そこでようやく、これから何をされるか覚悟が決まったらしい。

「先生……優しく、してくださいね……?」

ユズは俯いて上目遣いに呟いた。恐怖と期待と媚びが等分に入り混じつたそのはにかんだ顔は、まだ子供も作れない少女が一足飛びに大人になつていく軌跡として私の目に焼き付いた。

まんまとレイプを和姦に発展させ、私はガチガチになつたチンポを膣口に当てる。自分の股間を見下ろしたユズが小さく悲鳴を漏らし、ぎゅつと目を瞑つた。

親指でグリグリとクリトリスを弄り、硬くなつたユズの身体をほぐしつ、小さな小さな膣口をこじ開けていく。

ユズの両手を私の背中に回させ、小さな手が肩甲骨の辺りを掴む。

「あっ……いつ、うう……」

生徒をレイプする変態相手に、ユズは痛いという言葉を我慢する気遣いを見せる。その態度にチンポの勃起は限界に達し、銃身のように堅いそれを汚れなき少女の性器に突き立てて行く。

かなりの抵抗をねじ伏せて腰を突き出し、膣口をこじ開けた。

「ぐっ……うう……!」

ユズの苦悶の声を聞きながら、更に腰を突き出す。握るようにキツい締付けを感じながら、クリトリスを親指で転がしてなんとか抵抗を弱め、ユズが息継ぎのために一瞬緩んだ隙を突いて奥まで侵入して行く。

ぶつ、と強めの抵抗を強引に突き破った。

「いっつ、た、あ……！」

ぎり、とユズの手が力み、私の背中に爪を立てる。指先が下がり、長い線状の傷を残しているだろうそちらは無視してユズの乳首を吸い、クリトリスを愛撫し続けた。

「あつ、う、ううう……ふー、ふー、ふー」

5分か、10分か。長い時間をかけてユズは身体の力を徐々に抜いていき、少し青かった顔にも血色が戻ってきた。

「大丈夫、ユズ？」

「はっ、はっ……はい、なんとか、痛く無くなってきました……」

苦悶を通り越して虚脱状態のユズが、力ない声で答えてくれる。

「ありがとう、ユズ。私にユズの処女をくれて」

「あつ、うう……なんて答えればいいんですかあ……」

ニコツと笑いかけると、ユズは顔を赤らめて私を軽く睨んだ。

「きつと、一生この事は忘れないよ」

「それは……私こそ、こんな、忘れられそうにないです……」

ユズはチンポを咥えこんだまま力の抜けた微笑みを浮かべて、下腹部を優しくさすった。

「凄く……暖かいです。先生が今、私の中に入ってるの……はつきり感じます」

「うん。ユズの中、暖かくて気持ちいいよ」

「私も……痛かったけど、抱きしめられるよりも先生の存在が強く感じられて……なんだか、凄く落ち着くかも……」

痛いくらいに締め付けていたユズの膣から、余計な力が抜けていく。窮屈なのはそのままながら、私の太さに合わせて吸い付くような膣の具合に変わっていった。

「先生……動いて、いいですよ」

頬を赤く染めながら、ユズがはつきり私と目を合わせて言った。返事代わりにそつとユズのおでこにキスをして、細い腰を掴んでピストン運動を始めた。

「んんっ……」

ずるりと引き抜いたチンポは破瓜の血に濡れていて、ユズの声もまだまだ気持ちよさそうとは言えない。

引き続きクリトリスを刺激しつつ、小刻みに腰を動かしてユズの良いところをなんとか探していく。

ずるずると少しずつチンポを引き出しながら、入り口近くまで来てようやく、

「んっ♥」

ユズの甘い声を引き出す。クリトリスと連動させながら、一定のリズムでゆつたりと膣の浅い所を刺激した。

「はあっ♥ あ、あんっ♥」

無意識に出ているような、微かな喘ぎ声。ユズのほっそりとした喉から出ていると思うと、妙に色っぽく聞こえる。

ようやく、にちゃ、にちゃと愛液が音を立てるほどに滲みだした。

「はあ……はあ……♥」

冷や汗だったものが、上気した身体から滲む汗へと変わっていく。あくまでも密やかに、膣のほんの入り口だけを使った性交で一步一步絶頂への道を歩んでいった。

「あっ……先生、先生……♥」

泣き出しそうな切ない声が私を呼ぶ。そろそろと上げられた手に手を絡め、固く繋いで始めての膣イキの前兆に戸惑うユズを励ました。

ぬち、くち、と粘つく音を立て、ユズの小さな膣口を私の亀頭が押し広げたり埋没したりを繰り返す。

ぷにぷにした皮に陰唇は包み込まれてほとんど見えず、ただ亀頭でめくりあげられた箇所だけが痛いくらいに真っ赤に充血し、咲いてはならない淫らかな花を咲かせていた。

「はっ、あ、うーっ♥」

びく、びく、とクリ絶頂に比べれば大人しい位の小さな痙攣と共に、ユズの膣がきゅんきゅんと締まる。

間違いなく、チンポで絶頂を覚えていた。

「はーっ♥ はーっ♥ はーっ♥」

スポブラを捲られて丸見えの胸が荒い息と共に上下する。あどけない顔に女の色香を漂わせて、ユズが呆然と虚ろな目を天井に向けていた。

だが、まだ終わらない。

「ユズ、フリーパスを使うよ」

「あっ……え？ えっど？」

「このままユズの膣内に射精させてほしい」

「あー……え、ええええっ!？」

ボーツと聴いていたユズが目を見開いて驚く。

「こそ、そんなの……」

「ね、ね？ お願い、ユズの中で射精したいんだ、一生の思い出として」  
「うううう……そんな思い出困りますう……で、でも……」

とんでもない願いを受けて、ユズが顔を赤らめて目を逸らした。

「フリーパスです、から……仕方ない、ですよね……？」

上目遣いにチラチラとこちらを見ながら、優しいユズが承諾してくれる。

「ユズの口から、はつきりとお許しがほしいな」

「本当に、先生は、もう……ええと……わ、私の、ち、膣の中に……お射精して、良いですよ……？」

私の無茶振りに応えて、ユズがたどたどしくもツボを押さえた許可を出してくれる。

押し留めていた射精感を開放し、ズブズブと再びユズの奥へと舞い戻っていった。

「く、うう……！ ああ、凄いです、先生……もっとはつきり、先生が感じられて……♥」

膣イキを経験したユズは、急速に女として育ちつつある。今日がユズの無垢な少女としての最後だ。



その初々しい子宮口に、精液を吐き出した。

「あつ、ああつ！ 私の中で、先生が、跳ね回ってます……♥ で、出ちゃってるんですね……♥ 初潮、来てたら……赤ちゃんできちやう精液、注がれちゃってる……♥」

ようやく、ユズが笑顔を見せてくれる。子宮を精液で侵される事を喜ぶ、雌の笑み。この世で私が始めて見る、ユズの雌の顔だ。

ユズは再びそつと下腹部に掌を当て、その内側の膣と子宮……無垢な性器に撒き散らされる精液を夢想するように撫でさすり、そつと目を閉じた。

「ああ……♥」

セックスのときよりも気持ちよさそうに、うつとりと口元に笑みを浮かべ、私の長い射精に浸るユズ。聖母のように精液をすする姿を見ているだけで無限に射精出来そうだった。

しかしそんな夢想もじきに終わってしまい、たっぷりの精液を膣奥に注ぎきった私は、お礼の気持ちを込めてユズのおでこにキスをした。

「あ……もう、終わっちゃったんですね……♥ えと……お、お疲れ様でした？」

「うん、ユズこそお疲れ様。とても気持ちよかったよ、ありがとうね、ユズ」

「え、えへへ……なんだか、大人の女性になった気分です」

無意識にか子宮の上をまだ撫でながら、ユズがはにかんだ笑顔を見せた。

愛らしいその笑顔に、今度はユズの唇にキスをする。ユズもそつと目を閉じて、私を受け入れてくれるのだった。

ガチャ！ と派手にドアが開く音に、2人とも弾かれたように振り返った。

「チャラツチャツチャーン！ ヒアカムズアニューチャレンジャー！ アリスが乱入しました！」

「ひええええええっ?!?!?!?」

びっくーん! とユズが派手に震え、おでことおでこがぶつかる。

「ユズ! 先生との処女喪失、おめでとうございます! これですとも協力プレイ出来ますね!」

「……………え?」

「アリス、ずっとこの日が待ち遠しかったんです! さあ、ユズ! 一緒に先生とセックスしましょう!」

「……………せーんーせーいよいよいよいよ????」

ギヌロ! とセックス前の抵抗とは比べ物にならない迫力でユズが私を睨む。

「あれ? 先生がピンチです! えっと、えっと…………アリス、先生の助太刀に入ります! レイドボス・ユズを討伐しましょう!」

その後、なんとかしてレイドボス・ユズを2人パーティで倒した。もちろん、戦闘システムはバトルファックである。

私はなんとか帰してもらえたが…………アリスは夜通しコツテリ絞られたようで、次に会った時は白目になっているのだった。

身体は子供、頭脳も子供、記憶は大人（シユン）

昼下がりの公園をシユンと一緒に歩く。

「懐かしいですね……ここに私が昔、秘密基地にしていた場所があるんです」

隣を歩くシユンの声は、私の腰位の高さから聞こえる。それもそのはず、サヤが作った子供になる薬をまた飲んでしまったからだ。

幼女から大人に戻る際にヴァルキューレの生活安全課であるキリノを巻き込んだ大騒ぎをしておきながら、お肌の荒れを気にするあまりまた薬を飲んでしまうシユンの行動はどうかと思うが……まあそれだけストレスが溜まっているんだろう。

だから優しくしてあげようと、パフェを食べに行ったり梅花園を手伝ったりしたのだが……

「私の秘密基地は……ここですー!」

シユンが両腕をパツと横に振って、「じゃーん」とでも言いそうなニコニコの笑顔で示したのは……

「……土管?」

昭和の空き地のアレのような土管だった。ゲームでよく見る鮮やかな緑ではなく普通にコンクリートの灰色をした土管の入り口に、シユンがちよこんとしゃがむ。

「んしょ……」

そして、四つん這いになって土管の中に入った。二桁にも届かない肉体年齢のはずなのに、プリンと丸いお尻が薄い服越しに肉感を主張してくる。

子供特有の甘いミルクのような体臭がふわりと私の鼻に届き、お尻をフリフリ進む光景と併せてチンポをイライラさせてくる。

そもそもが、幼女になったシユンは無防備がすぎるのだ。

梅花園に手伝いに行ったときも、

「先生お願いします、おろしてください……!」

収納棚から降りられなくなってプルプル震えながら助けを求め

シユンは、私が柵に登った時に膝を立てて座っていて……パンツが丸見えだった。

黒だった。しかもあの形状は……

その後も柵の上におもちやが残っているからと肩車をお願いされた。

「先生の上に乗れば、簡単に手が届くはずです。さあ先生、お願いします……！」

「あつ、先生、その、落ちると危ないですから、しっかり足を掴んでおいて頂きますと……」

そんな事を言って、女兒のふくらはぎをしっかり掴まされた上で……黒パンツ越しのマンコを首筋と後頭部にムニムニと遠慮なく押し付けられた。

その後も高い高いをさせられて、肉付きの薄い女兒の肋骨さえ感じられる腋の下、胸の横の肉の感触をじっくりと味わわされた。

ヒナも小五並の体格をしているが、それより更に幼いシユンの身体は体臭も体温も特殊だ。

その日は一日抱っこやお馬さんごっこなどベタベタとスキンシップの連続で、勃起を抑えるのに苦労した。

一桁歳の小さな手指が、土管の中の落書きを愛おしげになぞる。

「この約束……今こうして見てみると、ほとんどは守ることができましたね」

その横顔はノスタルジーに浸る大人の憂いを帯びていて、薬で若返ったシユンにしか出し得ない魅力を放っていた。

そしてそんな風にしながらも、土管の中でぺたんとして座するシユンのお尻に服が張り付いてくつきりと形を露わにしている。

そこには一切の余分な線がない。……ピッタリ張り付いている布と身体の間にあるべき布の盛り上がりがないのだ。

シユンの腰の横に走る深いスリットはもはや腰の横まで届き、常識的な幼女用下着を穿いているとは考えられない。

「大人には教えられない、子供だけの秘密……ですから。ふふっ」

そう言って童女の微笑みを見せるシユンに、チンポのイライラは最高潮に達した。土管に侵入して幼女をレイプしよう、そう決意した瞬間、

ヴーツ、とポケットが震える。珍しく電話が入ったようだ。

しかも相手はヒナだった。

「もしもし？ ヒナ？」

『せ、先生？ 今大丈夫？』

「うん、大丈夫だよ。何かあったの？」

『えつと……そうじゃないんだけど。ああ、でもそうとも言えるかも……あ、明日の予定が変更になって、時間が空くから……先生の所に遊びに行きたいなって、思ってる』

緊張を押し殺して訥々と喋るヒナの様子が目に浮かび、思わず笑顔になった。

「明日の何時頃？ ……ああ、それなら大丈夫。待ってるね」

ぴつ、と電話を切ると、シユンが私の足元まで四つん這いで近づいていた。

「むくくっ！ 先生！ 今は私と2人の時間だったじゃないですか！ どうして他の女の子とそんなに楽しそうに会話しちゃうんですか！」

ぷうーつと頬を膨らませ、ジト目で睨んでくるシユン。

「ごめんごめん。……でも『大人同士』の会話だったからなー、シユンにはまだ早いかな」

実際、ヒナの誘いも確実にセックス込みなので大人の会話と言っ正しいだろう。

「わ、私だって中身は大人なんですー！」

目をバツテンにして舌つ足らずに叫ぶ今のシユンの中身が大人とは到底思えないが……セックスの口実にはできそうなので、私はにっこりと笑った。

「せ、先生？ 特別に、本当に特別に秘密基地の中にご招待しますよ？

ね？ 私と……遊びましょ？」

きゅつとズボンの膝あたりを摘んで、上目遣いにおねだりするシユ

ンを見て大人だと思う人は存在しないと思う。

「それじゃあ、お呼ばれしようかな」

そう言っただけじゃがみこんで、四つん這いになっているシュンを腋の下から持ち上げて仰向けに押し倒す。

これで、外からはもう私の足位しか見えないはずだ。

「あつ……♡　せ、先生……♡」

何かを感じ取ったのか、シュンがぎゅつと固く目を閉じて、んーつと口をタコのように突き出した。

突如据え膳と化した幼女を前に、私は躊躇なくぶにぶになほっぺに手を添えて唇を重ねていた。

「んう……♡　ちゅ、れう……」

唇を軽く吸って舌で撫でてやると、滑稽なくらいに力んでいた口が緩み、幼女の口内に汚れた大人の舌が侵入する。

小さな小さなシュンの口の中は、精巧に作られたミニチュアを思わせる。

舌先でつるつるの歯を撫で、戸惑うばかりの小さな舌を強引にからめて蹂躪し、敏感な上顎をくすぐるように往復して舐め回す。

「はっ♡　うんっ♡　んんーっ♡」

最初こそ無邪気に喜んでいたシュンだったが、次第に粘つく鼻にかかった甘い声に変化していく。

一桁の女の子が出してはいけない声がほっそりとした喉から奏でられ、震える小さな手が、怯えるように私の胸元のシャツを掴む。

私は、平らなシュンの胸に手を置いた。

とくんとくんと早鐘を打っているのが指先に感じられる。擦るように周りを撫で回すと、シュンはむずがるように身を振った。

ちゅる、と銀の糸を引きながら唇が離れる。

「い、いけません、先生……♡　まだお昼なのに、こんな事……♡」

「大丈夫、シュンが声を上げなければ、誰も気づかないよ」

「そ、そういう問題ではなく……！　あつ♡」

ほんの少し浮いているような気がした胸の一点を指で押すと、シュンが肩をぴくんと痙攣させて反応した。

「シユン、もう胸で気持ちよくなれるんだ？」

「で、ですから、私はもう大人だと……んっ♥」

ふにふにと押ししても、ほとんど乳首の硬さは感じられない。それなのにシユンは幼いかんばせを切なげに歪めて、性の快楽で頬をりんごのように可愛らしく染めている。

「とつても可愛いよ、シユン」

息を荒くするシユンに調子づき、太ももに手を這わせて裾をめくりあげる。

シユンは両手を顔に当てて赤面する顔を隠しながら、大人の手によって女兒の秘所が暴かれるのをただ見過ごした。

そして、予想したとおりにシユンのショーツは側面の布がなかった。

「え、ええと、これはその、穿ける下着がなかったので、横の調整が出来るものを選んだ結果、であって……」

ぷにっとした子供の下部を、不自然に前後に長い布が覆っている。まるで子供が親の下着を勝手に付けてみた、というようなアンバランスさ。

スリットから外に紐が垂れ下がらないように、ほとんどヘソの横辺りにまで紐がY字に伸びている。見えない所だが結び方は可愛らしく、シユンのお洒落さを感じる。

紐をちよんとつついてみると、シユンは下着を鑑賞されている恥ずかしさに折れてしまいそうな細い脚をすり合わせ、腰をモゾモゾとくねらせた。

水着とは明らかに違う、あまりに頼りなく薄い布。

「っ……………!」

シユンが息を呑む音さえ聞こえる静寂の中、その股間に指を触れる。

人差し指と中指が、恥丘からアナルまでを長いストロークでゆつくりと布の上を這う。

じつとりと湯気の中に指を突っ込んだような熱気と、まだ薄いけれど極上に柔らかな媚肉の反発。

すでに二桁の生徒を手籠めにしてきた私でも緊張を抑えられないほどに、あまりに犯罪的な甘美さだった。

「んっ……♡ はああ……♡」

既に性を知った大人の記憶がそうさせるのか。シユンは、股間をこすられて明らかに快感を得ている。

全体を擦る指先を、手前に……ほんの少しだけ主張し始めた、シユンの小指の先より小さなクリトリスに集中させる。

「あ♡ あああ……♡」

ぴく、ぴく、と細い脚を痙攣させて、ペろりと横にめくれた前垂れを直そうともせず……それどころか、だんだんと脚が開いていく。

シユンは未だに顔を両手で覆っていて、瞳は呆然と悪戯される自分の股間を見つめていた。

脚の開きはまるで身に染み付いた動きが自動的に現れてしまったかのように、シユンのオナニーを覗き見ているかのような背徳感を感じる。

物欲しげに腰を前後にへこへこと振り始めたので、お望み通りに少し強めの力でクリトリスを押し潰した。

「んくっ、はああんっ♡」

甘ったるい声を上げて、脚の開きが加速する。結局60度ほどまで開き、膝を支点に腰を浮かせて私の指を使ったオナニーのように腰の動きが激しくなった。

「クリトリスも好きなんだ？」

「い、意地悪言わないでえ……♡ 先生の、指が、触れてるって、思うと♡ こ、こしつとまらなっ♡ ああああっ♡」

感極まったようにシユンの黄味がかかった緑の瞳が涙に濡れ、つうと目尻から溢れる。

子供の甘い声が性の悦びを高らかに歌い上げる極上の音楽が土管の音響で反響する。

中腰にもなれない狭さの秘密基地の中に、子供が分泌してはいけな  
い汗の匂いが充満した。

堅いコンクリートに頭を押し付けて、シユンがクリトリス絶頂に仰



け反る。

元気に走り回っていた子供がスイッチが切れたように眠るのと同じく、腰をへこへこと貪欲に振っていたシユンは絶頂に浸ったまま放心していた。

勿論まだ行為は始まってもない。幾重にも結ばれた腰の横の紐を解き、ついにシユンの股間を拝む。

始めてのときのヒナと比べても更に美しい、一筋の縦線。

線の手前の終端は半分ほど顔をだしたピンク色のクリトリスが可愛らしく彩り、顔を近づけると汗の湿気と愛液の甘酸っぱい香気が顔に当たると感じる。

シユンの両の太ももをうやうやしく持ち上げ、肩車の逆のように背中に脚を載せてやりながら処女雪を思わせるそこに口づけた。

「あつ、あああー……♥」

絶頂で夢うつつのシユンが、かすれたような声で啼く。舌でべろりと小陰唇を舐めると、細い太ももで顔を挟まれる。

それは拒絶ではなく、むしろ私の顔をより強く股間に押し付けようとする動きで……シユンの小さな手がついに顔から離れ、私の後頭部を抑えつけた。

じゆる、じゆる、と音を立てて膣口を吸い、舌先さえ拒もうとする聖域を周りの性感で騙して男を受け入れるよう誘惑する。

「はあっ♥ ああんっ♥」

よく響く高い声が、両端を開口した土管から抜けていく。近所に通りがあつたら、だれかが見に来てしまうかも知れない。

シユンはそんな事も忘れて、ただ幼い身体で味わう強い刺激に心奪われているようだった。

口はいつの間にか笑みを形作り、口の端からはヨダレが垂れている。

舌先に味わう陰唇は私が舐めあげるたびにヒクヒクと痙攣し、快樂のお代わりを要求するようになっていく。

だが、まだ膣は固く、余りにも小さかった。これでは私のチンポを挿れる事は出来ないだろう。

ここまで来たならシユンにも処女膣内射精を決めねば収まらない私は、必死に頭を巡らせた。

そして、シユンの小さくぷりんと丸い尻を持ち上げた。ほんの少し茶色がかった美しい菊紋を形作る肛門のシワに舌を這わせる。

「んひゅうっ♥ 先生、そんなところ、き、汚いですから……あ、だめ、した、舌が、入っちゃってるう♥」

ぬらぬらと唾液をまぶし、強引に侵入する。それと同時に、膣の入り口周りを指でほぐすように撫で始めた。

5分、10分経つても膣は硬いままだったが……ついに転機が訪れる。

それは、肛門からの波及だった。

「ああっ♥ だめっ♥ こんな、お尻の穴、先生に舐められて……イッ、く……♥」

舌をちぎらんばかりに締め付けたあと、シユンの肛門が緩む。それと同時に岩戸の如き硬さだった膣からも力が抜けた。

私はすかさずズボンを脱ぎ、緩んでもまだまだ狭すぎるシユンの膣に容赦なくチンポを押し当てる。

「シユン、挿れるよ」

「ああ……♥ 先生の、おつきすぎます……♥ わたし、こわれちゃう……♥」

肛門絶頂で真っ赤になった顔に、怯えとも期待とも付かない引きつった表情が張り付いていた。

処女を失う直前の9歳児の表情を目に焼き付けて、強引に穴を押し広げる。

「うっ、い、っ……う」

苦しげに歪むシユンの顔。龟头を握りしめるように締め付けられ、ぞわぞわと射精感が背筋を登ってくる。

ぷち、と軽い衝撃とともに、色々な意味で準備の整っていない最奥まで到達した。

子供の秘密基地に、子供の破瓜の血が消えない跡を刻む。

線だったシユンの股間は0の字に拡げられ、裂けてしまっように張

り詰めて真っ赤に充血している。

それでもなお、チンポの全長の半分も収まっただけではいかなかった。

「シユン。わかる？ シユンの一番奥まで届いたよ」

「は、い……先生の熱いの、お腹の奥に感じてます……♡」

脂汗が滲んだシユンの額を撫で、拭ってやる。シユンは私の手を取って頬に当て、血の気の引いていた顔が温まるまでじっとしていた。

「ありがとうございます……先生。もう、大丈夫ですから……私のおまんこ、使ってください」

その瞳は静かだが強い意思を感じさせ、幼い身体に宿る成熟したシユンの心が垣間見えるものだった。

つまり凄くチンポをイライラさせる良い表情だったということだ。

私は裂けそうな膣口をなるべく刺激しないように、入り口を支点にしてシユンの腹の中をかき回すように腰を使った。

まるで避妊具のようにピッタリと張り付く膣は全く未成熟で、握りしめるようなキツイ締め付けは快楽を置き去りに射精だけを求める野生動物のようだった。

しかし、ショーツ以外は一枚たりとも脱いでいないシユンに、ちゃんとセックス出来ているのかと少し不安げな顔で見つめられながら、股間にグロテスクでさえある太さの肉棒を突き立てるこの光景だけで幾らでも射精出来る気がした。

申し訳程度にクリトリスを親指で刺激し、なんとかシユンからも快楽を引き出そうと試みていはいるが……余りに拡がりすぎたせいで感覚が麻痺しているのか、先程絶頂したような反応も引き出せてはいない。

「シユン、中に出すよ」

「はい……来て、ください……その、この歳なら、まだ来て、ないはず、ですから……」

私のチンポで突き上げられて横隔膜を揺らされているシユンが、とぎれとぎれに返事してくれる。

性の熱狂にあるわけでもなく、ただただ私に尽くすためだけに幼す

ぎる膣を使わせてくれるシユンは、まるで性処理道具オナホールのようだった。

ギユウギユウと遠慮ない圧迫が私の竿を工夫もなく刺激し、私は自分でシユンの未熟な子宮口にこすりつけ膣の最奥をストレッチのようにほんの少しずつ伸ばしつつ、我慢せず射精する。

「あつ……♥ 先生の、どく、どくつて、震えてます……♥ いま、私の中で射精してるんですね……♥」

妊娠の可能性が一切ない小児の清らかな膣に、快樂のためだけに大人の汚れた欲望を流し込む。

シユンは射精に震えるチンポによって時折盛り上がる自分の下腹部をさすつて、自分の気持ちよさよりも私が気持ちよくなった事が何より嬉しいというようにうつつりと微笑んだ。

一方私はギチギチに閉まる膣で射精を阻害され、チンポがより力強く収縮することで、普段より強い射精快樂を感じ、腰が独りでに震えてしまう。

「先生♥ 気持ちいいんですね……♥ もっと、出していいんですよ……♥」

射精しきった亀頭をみっちり張り付く粘膜で刺激され、刺すような鋭い快樂に悶えさせられた。

シユンは悪戯を思いついた子供のようにニヤつと笑うと、クリトリスオナニーの時のようにへこへこ腰を使い始めた。

「ううっ！ シユン、む、無理しなくて、いいんだよ」

「いいえ、まだお腹の中の感覚は痺れてますけど……先生の気持ちよさそうな顔を見ると、すぐくドキドキするんです♥ だから……子供の秘密基地の中でこんなおイタをしちゃう先生は、私がお仕置きしてあげますね♥」

半分しか挿れることも出来ない膣を限界まで大人チンポで蹂躪されながら、シユンがニコリと笑う。

くびれてもいないするりと胴から落ちる腰を浮かせて、上下左右に腰をくねらせて膣奥の肉を使って揉み洗いのように亀頭をグリグリ刺激し始めた。

「うああっ!?! シユン、まだ、射精したばかりだから……」

「うふふ、存じていますよ、先生♥ きもちよーく射精した後は、とつても敏感なんですよね♥ だからお仕置きになるんじゃないですか♥」

舌つ足らずな子供の声で大人の性知識が語られ、あまつさえ子供の膣でそれを実践する。

セックスを気持ちいいとも思えない年齢の幼子が、精液を絞ることだけを楽しみにチンポを啜え込み、自分から腰をくねらせて搾精する。

現実離れた無邪気な淫靡さに、早くも次弾が装填されて行くのを感じた。

「ああ……♥ 先生のがまた、お腹の中で力強くなってきました♥

これじゃあ、危なくて梅花園のお手伝いも頼めませんね♥」

「そ、それは……!」

確かに今の私はJSも余裕で性の対象になるが。

「ふふ、良いんですよ、先生♥ お仕事に来るたびに私が全部又キヌキしてあげますからね♥」

自分が気持ちよくなならない事を逆手に取って、涼しい顔で激しく腰を振るシユン。

大人の学習能力を遺憾なく発揮し、腰の振りはどんどん滑らかに、膣の締まりすらリズムカルに進化し、男を気持ちよくするためだけにある肉穴を使って私を『お仕置き』する。

「ほーら♥ 我慢せずにびゅっぴゅっぴゅって出しちゃえ♥ びゅっぴゅっ♥」

からかうように声をかけながら、腰と膣の動きをシンクロさせてトドメを刺しにかかる。

「ぐうっ……!」

シユンは麻痺してわかっていないだろうが、膣口周りの小陰唇は激しい動きによって出血と見まごうくらいに充血している。

これ以上は長引かせるべきではないと、幼女に促されるままに2発目の射精を解き放った。

「あはっ♥ 出たでた♥ 先生、私のおまんこ、そんなに気持ちいいん

ですかあ？ ふふっ♥」

シユンはからかうように言うがそこに意地悪さは含まれておらず、無邪気な微笑みで私を射精させた事を誇っているようだった。

「ああ、凄く気持ちよかったよ。きつかっただろうに、シユンは偉いね」

「えへへ……あの、先生？ 今度は……大人になった私とも、その……」

胸の前で指先をもじもじさせて、照れくさそうに上目遣いになるシユン。

股間にチンポを咥え込みながらそんな仕草をされるとまたチンポがイライラしてしまうので、萎え始めたチンポをさっさと引き抜く。

「ああ、梅花園に来たら毎回、シユンに全部抜いてもらうからね」

「はい……お、お待ちして、います……♥」

くしゃくしゃとシユンの頭を撫でると、そつと目を伏せてされるがままに受け入れてくれる。

私はそのプニプニのほっぺにキスすると、しばらく2人寄り添って身体を休めた。

無残にもポツカリと穴の空いたシユンの股間から、どろどろと大量の精液が溢れ出す。

土管の湾曲に沿って直線に垂れ流れる白濁が、子供の秘密基地を切り裂いて外まで伸びていった。

用法用量を守って正しくお使いください（サヤ・シュン）

「ふんふんふん♪ ほらほら先生！ 早くこっちなのだー！」  
ストリート系ファツションの私服に身を包んだサヤが両腕を広げながらこちらを振り返る。

先日約束したとおりに、シャーレで使う薬品類の相談ついでのデートにやってきていた。

ついでと言っても薬品類の相談の方はサヤが事前にきっちりとした資料を制作してくれており、それをもとに後は決めて発注するだけで終わった。

「よし、お仕事終わり！ じゃあ先生、早速デートなのだ！」  
輝くような笑顔で私の手を取るサヤに引っ張られ、玄武商会での食べ歩きデートが始まったのだった。

「まってよ、サヤー！」

自転車を駐輪場に停めてサヤのもとへ駆けていく。

以前もサヤが言ったように、玄武商会の領域は広い。道も細く公的移動手段も乏しいので、乗り物は必須だ。

なので途中まではスケボーと自転車ママチャリでの移動となった。通勤などには使わないので、ほとんど山海経に来た時専用のものであり、少しもつたないかとも思ったが……

「ふーっふっふっふ、先生も自転車の移動に慣れてきたみたいだな！ いいことなのだ！ 乗り方を忘れないようにこれから定期的に来ると良いのだ！」

満面の笑みを浮かべたサヤを見ると、悪い買い物ではなかったと思ひ直した。

「そうだね。マラソンよりは気軽に運動出来るから、それも良いかもね」

生徒たちをもっとチンポで気持ちよくしてあげるためには下半身の強化が必要なので、いい契機かも知れないと私も領いた。

「えっ、ホント!? やった! もっともっと先生と一緒に居られるのだ!」

目を丸くして驚き、ぴよんぴよん跳ねるサヤの頭を撫でて、一緒に店の中に入る。

サヤが飛び跳ねる時にぶるんぶるん揺れる胸が否応なく見えてしまい、チンポがイライラしつつあった。

「ふーっ、食べた食べたあ! カップル用メニューって意外といっぱいあるものなのだ。先生のおかげで普段食べられないものがたくさん食べられたのだ!」

パフェやケーキはまだしもチャーハンやラーメンをカップル用にするのはよく解らなかったが……色々とサヤとはんぶんこして食べ歩いた。

流石にこれ以上は無理なので、今は錬丹術研究会の部室に帰ってきている。

サヤは収納棚からマットを取り出すと、隅っこの床に敷いた。

「ほらほら先生、自転車漕いだりして疲れたでしょ? ここに座ると良いのだ」

自分もマットに座り、ポンポンと横を叩くサヤ。少し顔が赤くなっている、自分でも大胆なことをしている自覚があるところが可愛らしい。

「ありがとう、サヤ。じゃあお言葉に甘えようかな」

マットに座っているせいでサヤの白い太ももがよく見えてチンポのイライラが高まってしまふ。

それをまだ見せずに、疲れた脚を休めるためマットに座った。

「しかし、マットなんて用意してるの?」

「うん、いつもじゃないけど、調合に時間がかかる時があるから徹夜で交代作業するために仮眠用のマットや布団を用意してるの。あ、ちゃんと洗ってるから女の子の匂いをクンカクンカしようとしても無駄



なのだー♪」

「しないよ、そんな事……」

嗅ぐならばマンコに鼻をくっつけて嗅ぐからだ。

サヤはしばらくウキウキソワソワと矢継ぎ早に会話をしてきた。

学校の授業、友達との部活動、最近のお気に入りのお店……なんでも無い出来事を、肩を寄せ合って話し合う。

そろそろ会話のネタも尽きてきたかという頃、ふと思いついたようにサヤが言った。

「ほら、これ。ぼく様の新作！ の、飲んだら目の前にいる人が好きになっちゃおう、び、媚薬……なのだ」

薄ピンクの少し粘質な感じの透明な液体が、そっけない小瓶に入っていた。

「ど、どう？ 先生……飲んで、みる？」

チラリと、うつむきがちにこちらの顔色を伺うサヤ。差し出された手には小瓶がつままれている。

「じゃあもらおうかな」

私は小瓶を取ってサツと半分飲んだ。

「えええ!! の、飲んじやったのだ!!」

顎にかけられたマスクが伸びるほど驚愕して、サヤが小瓶と私を交互に見る。

「飲んだらまずかったの？」

「い、いや、今回は本当に自信作だから、こ、これじゃ本当に先生がぼく様のことを好きになっちゃうのだ！ 心の準備が出来てないの……」

「じゃあとりあえずサヤも半分飲んでね」

「えっ、むぐつ!! んぐつ、ごくつ……、つけほ、せ、先生!!」

サヤを抱き寄せて固定し、口に小瓶をねじ込んで残りを流し込む。咳き込みながらも飲み込んでくれたサヤは、困惑したように私を見返していた。

「ああ、薬が効いてきたみたいだ。サヤ……可愛いよ」

「え、いや、そんなに早く効くはずが……せ、先生？ ほ、本当に？」

いま、しちやうの……?」

困惑しながらも、ゆつくりと押し倒す私に逆らわずマットに背をつけるサヤ。普段の元気な様子は鳴りを潜め、不安げに揺れる瞳が私を見つめている。

(先生はこんな直接襲いかかってくるような人じゃなかったはず……！ 一体誰なのだ、先生をこんな肉食獣に変えてしまった奴は！)

「あ、だ、だめ……せんせ、んっ……♡」

私の胸を押しつけようとしたサヤの手を掴み、マットにねじ伏せながら覆いかぶさって唇を奪った。最後に食べたパフェの味がほんのり残った口内を舌でかき回す。

「んーっ!? んんっ♡ んうんうんー!」

脚をバタつかせ、腕を振りほどこうとする素振りを見せるサヤ。口内の上顎の裏を舌尖でつうとくすぐると、思わずと言った風に甘い声が漏れる。

両手を開放し、片手でサヤの身体を抱き寄せつつもう片方の手でサヤの胸を揉む。

「んっ♡ んむううーっ♡」

(ああ、でも、せんせ、キス、うまい……♡ きもちい……♡ ぼく様に夢中になってる先生、良いかも……♡)

抗議と歓喜が入り混じったうめき声が、私の口の中に吸い込まれていく。服の上からでもふにやふにやと柔らかいサヤの胸を揉みつつ、サヤの性感帯を探り始めた。

サヤを抱いている方の手で首筋や背中を触り、反応を確かめる。

「んっ♡ んんっ♡」

ぴく、ぴくと反応を返すサヤ。弱点と云う感じではないが、性感自体は開発できそうだった。

サヤの手は開放されたにもかかわらず私の胸元の服を握っているばかりで、既に抵抗はない。

もう大丈夫だろうと唇を離し、サヤと見つめ合った。

「あ……先生……♡」

とろんと眼尻を下げたサヤの顔は、才気煥発な研究少女ではなく

……男に食べられるのを待つばかりの雌の表情をしていた。

「脱がすよ」

一声かけて返事を待つことなく、サヤの服をズリあげる。サヤの体型にしては豊かな胸を包んでいた布が取り払われ、眼前にさらけ出された。

大きめの乳輪に、長くはないが大きめの乳首がバッチリと見える。周りより少し暗い肌色の乳首に誘われるように口づけ、ちゅばちゅばとしゃぶり始める。

(ううっ……見られてる、ぼく様のおっぱい、先生に見られてる……♡

ぼく様の身体であんなに股間を膨らませて……♡)

「ああっ♡ そんな、そんなこと♡ だめえっ♡」

柔らかい胸を吸いながら引つ張って変形させつつ、マッサージのようになりズミカルに、力を入れすぎないように注意しながら胸を揉みしだく。

「あーっ♡」

乳搾りのように根本から先端にかけて揉み込むと、一際大きい声がかかる。

ちゅばっ、ちゅばっ、と音を立てて吸い立てるうち、サヤの乳首は一回り以上も大きく勃起していた。

口を離して見比べてみると、ただ揉んでいるだけの反対側の乳首より明らかに直径も長さも大きい。

「うう……みちやだめなのだあ……♡」

サヤの目には涙が浮かび、つぶらな瞳を宝石のように輝かせている。頬は上気し荒い息遣いで胸を上下させるその姿は扇情的の一語で、言葉とは裏腹に私を駆り立てていた。

(胸を吸われて揉まれただけなのに、腰がふにやふになっってしまった  
いそうなのだ……♡ これ以上されたら、ぼく様は……♡)

サヤのホットパンツを脱がしていく。前のホックを外しても、ジッパーをおろしても……下にある黒のショーツを拝んでも、サヤは抵抗しなかった。

ホットパンツからはみ出すようにセクシーに着こなしていたガー

ターベルトで飾られたショーツは、濃い色にもかかわらず股間が愛液で濡れている事がくつきりわかる程に濡れそぼっている。

「せ、先生が、興奮してるのは……ぼく様の葉のせい、だから……責任持って、ぼく様が受け止めてあげるのだ……♥」

真っ赤になつた顔をそらしながら、チラチラと横目でこちらを見つつそんな事を言うサヤにチンポのイライラは最高潮に達した。

ガーターベルトとニーハイソックスに結びついたリボンを解き、ホットパンツを脇に放る。

サヤの健康的な腰がガーターベルトに飾られ、アンバランスな嫌らしさを醸し出していた。

実のところガーターベルトの脱がし方もよくわからないので先にショーツもクルクルと丸めながら脱がす。むあつ、とチーズのような乳臭くも酸っぱい臭いが立ち込めた。

サヤのマンコは比較的形が綺麗で、乳首と同じく肌の陰部の褐色をした小陰唇がふつくらした大陰唇から控えめな花を咲かせている。

陰毛は控えめに髪と同じ灰色のものが、割としつかりと生え揃っていた。そっけないが、クリトリスの周りの長方形の部分を残して綺麗に剃られている。

「綺麗だよ、サヤ」

「うう……そんな事言われてどう反応しろって言うのだあ……♥」

顔を覆った手の指の間から私がサヤの股間に口づけようとするのを凝視しながら、サヤは私がやりやすいようにそっと脚を広げてくれる。

こんな時にも気遣いの出来る優しいところを見せてくれるサヤに対するお礼として、クリトリスに唾液を絡めつつ舌でやわやわと刺激する。

「はっ……♥ あ、あああーっ……♥」

きゅん、きゅんと顎の辺りでサヤのマンコがぴくぴく痙攣する気配を感じる。

サヤはまるでお風呂にでも入ったように力の抜けた声を出して、自ら腰を突き出すようにクリトリスを私に捧げて来た。

お代わりをリクエストされた私は更に激しく攻め立てる。

「はーっ♥ うんうーっ♥」

クリトリスを吸い立てるうち控えめだった脚の開きはどんどん大胆になり、今や180度近くまで開いている。

涙声のような、何かをこらえる悩ましげな喘ぎ声を聞いていると、サヤが一気に大人になってしまったかのような錯覚を覚えそうになる。

膣から愛液がとろとろこぼれたのを見て、そろそろ頃合いかと口を離し、マシユマロのようにしつとりと柔らかな感触の大陰唇を押し開いて籠もっていたチーズ臭を解き放つ。

たつぷりと内側に満ちていた愛液をじゆるっ、じゆるっとな音を立てて吸いながら、膣口の周りを舌でグリグリと圧迫する。

「あうっ！ あー、だめっ♥ それ、いく、いつちやう♥」

切羽詰まったような声と、ぐっとな頭を押さえつける小さな手に昂奮を煽られ、サヤの膣へと舌を潜り込ませた。

握るようにキツイ処女穴の締め付けを舌に感じつつ、ぷりぷりの肉穴をヒダの一枚一枚を確かめるように舐め回す。

気持ちいい位置を掠るたびにサヤの膣はリアクションを返してくれるので、それをもとに一番気持ちいい動きを洗練させていく。

「だめっ♥ いく、いく、いく、いくっ♥ くくくく♥」

気持ちいい所を執拗に刺激されたサヤが、高く、声にもならないかすれた音を喉から出して背を仰げ反らせる。

両脚をピンと伸ばし、足指だけをぎゅっとな丸めて絶頂を噛み締めていた。

同時に舌に一際強い締め付けを感じ、尿道から私の顔面にぷしゃ、と液体が放出された。サヤが潮を吹いたのだ。

「はっ……はっ……はっ……♥」

私の顔を潮だらけにしたサヤは、気にする余裕もないのかぐったりと全身を弛緩させて虚ろな目で天井を見つめていた。

上半身の服は捲りあげられ、腰にガーターベルト、アシンメトリーなニーハイソックスとふくらはぎに届かない程度の短いソックスの

みの半端な着衣。

これから淫行される普通の女の子であることを強調してひどくいやらしく見える。

我慢の限界とばかりに私も下半身裸になり、無防備な大股開きのままのサヤのマンコにチンポを押し当てた。

欲望にまみれた我慢汁がサヤの愛液と触れ合い、混じり合う。熱々の陰部同士がついにくつつき、サヤの熱をチンポで感じ取る。

「いくよ、サヤ」

返事をまたずにパクパクと物欲しげに開閉していた膣口をチンポでこじ開け、腰を突き出した。

「あ、うっ！ いっ、た、あ……」

夢から覚めたように普段の声で、サヤが苦痛を叫ぶ。ヌルヌルになった膣はチンポを歓迎してくれ、締付けに逆らって処女膜を突き破るのもすぐだった。

「しばらくこのままじっとしておくから、落ち着いて息を整えてね」

そう言うと、サヤはむっとこちらを睨んできた。

「なーんか……すつつごく！ 手慣れた感じがするのだ！ 一体ぼく様の前に先生に手を出したのはどこのどいつなのだ!」

ふう、と頬をふくらませるサヤの顔を撫でる。

「サヤも今度シャーレに来ると良いよ。セフレの皆と挨拶すると良い」

「セフっ!? 皆?! い、一体どういう……んっ♥」

驚愕にまたも目を丸くするサヤに、緊張が解けたと判断して腰を軽くグラインドさせる。

処女膜辺りは動かさず奥の方だけを亀頭でグリグリと刺激すると、サヤは氣勢を削がれてまた雌の顔になっていく。

「ちよっ、先生え♥ どういうっ♥ ことなのだあ♥ セフレなんてえ♥」

グリグリと刺激を続け、サヤの膣の最奥にある感じるポイントを探りつつも、サヤはなおも食い下がった。

「そのままだよ。私はサヤとこれからもセックスしたいんだ。お願い

「サヤ。私のセフレになつてよ」

ぬちや、ぬちやと元から濡れそぼっていたサヤの膣が再び愛液を溢れるほどに垂れ流し始める。

全体的に感じやすいらしいサヤは、破瓜の痛みをすでに脱しようとしていた。

腰をグラインドからピストンに変え、キュウキュウに締まり程よくヒダの感触を味わえるサヤの人生一度切りの処女膣を余すことなく味わう。

「セフレっ♥　なんてえ♥　だめっなのだあ♥　ぼく様は、先生とお♥　恋人っ♥　にい♥」

処女を奪われながらの愛の告白に、チンポが更に激しく勃起する。ぱん、ぱん、とサヤと私の下半身の肉をぶつけ合う激しいピストンでサヤを説得にかかった。

「あーっ♥　はげしっ♥　はげしいのだあ♥　そんなっ♥　されたらあ♥　たえられっ、たえられないのだあ♥」

ぐつぶ、ぐつぶと粘質な水音を部屋内に大きく響かせて、サヤが上半身を左右にねじって快樂から逃れようとする。

その細い腰をガツチリとホルドして、ついさつきまでセックスを知らなかった少女にチンポの味を執拗に教え込む。

一定の速度を保ち、サヤの気持ちいい動きを機械的に繰り返す。

「ね、サヤ。サヤのことは大好きだし、こうやって気持ちよくしてあげるから、セフレになつてよ」

「だめっ♥　だめえ♥　こいびとお♥　こいびとがいいのだあ♥」

幼児のように駄々をこね、ホルドされた腰に力が入らないのかじたじたと手足をうごめかすことしか出来ないサヤ。

「強情だなあ、サヤは。そういう所、とつても可愛いよ」

「ばかーっ♥　せんせいのばかあーっ♥　あーっ♥」

コリコリと膣の一番奥の気持ちいい場所だけをほぐすように小刻みに刺激すると、サヤの手が腰をホルドする私の手首を捉える。

それは振りほどくためではなく、さながらジェットコースターの安全ベルトを掴むような力加減だ。

無意識にクライマックスを望んでいるサヤの望み通り、一番奥をトントンとまた一定の速度で責め続ける。

「あーーーーっ♥ だめっ♥ もうだめっ♥ いくっ、いくっ、いくっ♥」

切羽詰まったようなようなサヤの声を聞いて、私は腰を止めた。

「うーーーーっ♥ い、いけない、いけないい……! なん  
でっ、なんで意地悪するのだ先生っ!」

「サヤが私のお願いを聞いてくれないからね」

サヤが肘をつけて上半身を少し起こし、私を睨む。絶頂寸前で潤んでいた目から涙がこぼれ落ちた。

「ぜったい、絶対こんな事した責任を取ってもらうんだからなっ♥  
せ、セフレになってから覚えてるのだっ♥」

真っ赤な顔でセフレになる事を承知してくれたサヤに、一番奥を刺激する動きを再開してあげた。

「これっ♥ これえっ♥ あっ、いくっ、すごいくるっ♥  
あーーーーっ♥」

睨んでいたことなど全く感じさせない、腑抜けたようなだらしのない笑顔で膣奥を揺らされる快感に浸るサヤ。

その落差にゾクゾクと射精感が背筋を這い上がり、ぶくつと亀頭が膨らんでサヤの一番奥に大量の精液を放出した。

「いっ、くううーーーーっ♥♥♥」

サヤは立てた肘を戻すことも忘れて、半端に身を起こしたまままで背を仰げ反らせて喉元を晒して絶頂する。

処女で膣奥絶頂を決めた膣が、もつともつと精液をねだるようにうねるような締め付けで私を楽しませてくれた。

たっぷりと数十秒はサヤに注ぎ込み、その後数分サヤは一言も口を開かなかつた。

それは不機嫌などではなく、絶頂の余韻に浸りきっているためだということとはチンポを入れたままのヒクつく膣が教えてくれた。

「あっ……あ、あああああああ!!」

ふいにガバツと身を起こすと、サヤが自分の股間からにじみ出る精



液を見て顔を青ざめさせる。

「な、なんてことするのだ！ 先生、大人なのに避妊つてものを知らないのか!？」

「処女には膣内射精するって決めてるから……次からはちゃんとゴムを付けるよ」

「そんなことわりはさっさと捨てるのだ！ ああ、もう、どうするつもりなのだあ……」

現実を見据えて子宮に流れ込んだ精液を思うサヤに、萎え欠けたチンポが再びイライラしてくる。

「ちよつと先生！ 真面目に聞いているのだ！」

「サヤなら避妊薬作れるんじゃない？」

「そ、それはまあ、作れる、けど……」

本当に作れたのか、と軽く驚く。身体を子供にするような薬さえ作れるのだし、当然なのかもしれないが。

「じゃあ大丈夫だね。あ、シャーレに来た時は1階のコンビニで売ってるのを買おうと良いよ。お金は私が出すから」

「そんなの買ったら二度とあのお店行けないのだ!？」

さつきとは別の意味で涙目になるサヤに軽くキスをして、また押し倒す。

もうセックスを知った女になったサヤは、社交ダンスの相手のように自然な動きで押し倒されて脚を広げてピストンしやすいように腰を浮かせてくれる。

サヤの賢さがセックスに発揮されるようになった嬉しさで我慢汁をどぶどぶと膣奥に撒き散らしながら、2発目の種付けのために小柄な身体にのしかかった。

「もうっ……こうなったら、ぼく様が満足するまでたっぷりしてもらうのだ……♥」

さつきまではきつと出せなかった、強い意志を感じさせながらも媚びを含んだ笑顔で、サヤがささやく。

自然に瞳が閉じられるのを契機に唇を重ねながらのピストンはじまった。

それから、どれくらい経ったか……いつの間にか、日が傾き始めていた。

「ああっ♥　いく、またイツちやううん♥」

サヤは既に裸で、マットに四つん這いになっている。私はサヤの丸い尻を両手で撫で回しながら肉を打ち付けあうパンパンと云う音を響かせて背後から突いていた。

サヤの学習能力はセックスに置いても遺憾なく発揮され、私のピストンに合わせてへこっ♥　へこっ♥　とサヤの尻が振られ、より強く膣ヒダを感じ深く膣を突く事ができるように腰の振り方を考えてセックスしてくれている。

私は既に3度膣内射精し、マットにはもう言い訳の出来ない大きなシミが広がっていた。

「サヤさーん?　居るのー?」

ガラツ、と戸が開く。そこにはシュンが怪訝な顔で立っていた。

「ああっ」

「えっ」

全員揃って、間抜けに口をポカンと開けて固まってしまう。

「シュン、丁度いい所に来たね。おいで。シュンも一緒にセックスしよう」

「ええっ!」

「まあっ……♥」

私の提案に、バックで突かれていたサヤがぐりんつと顔を振り向けて眉間にすごいシワを刻んで見つめてくる。

一方のシュンは、豊満な胸の前で手をぼんと合わせて妖艶に微笑んだ。

「うふふ、サヤさんも先生のオチンポを味わってしまったのですね♥　本当は良いことではないのですが……仕方がありませんね……♥」

「えっ、えっ?」

幼女の時に処女を奪ったシュンとは、梅花園を訪れた時に大人姿で念入りにセックスした仲だ。

9歳の時に処女を失っただけあって身も心も私を受け入れる形になっっているのか、口を塞いだままでなければ子どもたちに丸聞こえになっっているような声で喘ぎ、シユンも夢中になっって私を求めてくれた。

チンポでたっぷり可愛がってから頼み込んだので、セフレになる件もすんなりと受け入れてくれたのだった。

シユンは後ろ手にドアを閉め、ちゃんと鍵をかけると、ゆっくりと歩み寄ってきた。

驚愕したままのサヤが今更恥ずかしがったように胸を両腕でかばい、私を遮蔽物にしてシユンから隠れようとする。

それを強引に押し留め、逆にシユンに向けて股を開かせて背面座位の姿勢で濡れそぼった膣を貫く。

「あうっ♥　だ、だめなのだ先生♥　シユンが、シユンが見てるからあ♥」

「大丈夫ですよ、サヤさん。わかってますから。先生のチンポを突っ込まれてしまったら、我慢なんかとても出来ませんよね……♥」

「やだあああ……みないでええ……♥」

あまりの羞恥にサヤが顔を手で覆ってしまふ。だが膣はキユンキユンと絶頂したとき並に締め付けていた。

「サヤの膣、凄くよくしまっって気持ちいいよ。恥ずかしいの昂奮しちゃった?」

「ばか、ばかあ……♥　先生、怒るのだあ……♥」

怒りと羞恥が混じった、涙声でありながら善がり声。幼さと色気が同居するそれを聞きながら、サヤの感じる一番奥を揺らすように刺激する。

「だめっ、だめっだめえ♥」

「ああ……サヤさん、気持ちよさそう……♥」

シユンはサヤと私の正面に立ちながら、既に着衣を脱ぎ始めている。

成熟した身体のストリップショーを見ながら小柄なサヤの背中中の体温を、重みを味わう。

すでに絶頂寸前のサヤは逃れることも出来ずに膣奥を突かれるままになるしか無く、限界は刻一刻と迫っていた。

「あゝーっ♥ だめ、本当に、せんせ、だめえ♥ ぼく様、もう、もうっ♥」

「大丈夫、シユンに気持ちよくなつてるところを見てもらおう」

「そうですよ、サヤさん。そうやって先生を独占するなんてズルいです♥ 早くイッて私に交替してください♥」

ぶじゆ、ぶじゆ、と羞恥で頭がバカになってしまったかのように愛液が大量に溢れ、卑猥な水音を立ててサヤが本当の限界に追い詰められていく。

「うゝーっーっ♥ あゝーっーっ♥ ふっぐ、い、っぐうううーっーっーっーっ♥♥♥」

限界まで我慢して、ポロポロと涙をこぼしながらサヤが膣奥を突かれて絶頂した。

「きやつー」

ぷしやつ、と盛大に潮を吹き、覗き込んでいたシユンが慌てて飛び退く。

サヤが、そして錬丹術研究会の友達が普段使っている机や器具に、パタパタとサヤの潮が降り掛かった。

別の生き物のようにうねる膣に、4発目の膣内射精を流し込む。

「あゝーっーっ♥ うゝあゝーっーっーっ♥」

もはや生気を感じないサヤの唸り声が精液に反応するかのように喉から漏れ出てくる。キツキツの膣の中にたっぷりと注ぎ込んだ。

「ああ……♥ サヤさん、今が始めてだったのですね。先生にナマでシてもらえるなんて、羨ましいです♥」

再びサヤの前にしやがみ込み、ぐっぽりと開かれた処女喪失仕立ての精液が溢れる膣をみて、シユンが妖艶に微笑んだ。

「サヤはぐったりしちやっつたし、起きるまでセックスして待っていいよ。おいで、シユン」

「はゝっ♥」

初体験の経験からか、シユンはまるで子供のよう……幼い日に出

逢った年上を相手にするように私の言葉に従い、むっちり立派な大人の女性に育った身体で抱きついてくる。

サヤの膣からぬぼんつ、とチンポを抜くと、4発分の精液がごぼごぼと滝のように流れ落ちる。

失神したように反応のないサヤをひとまずマットの端に寝かせて隣にシユンを寝そべらせて股を開かせた。脱ぎ捨てたズボンからゴムを出し、手早く装着する。

「うふふ、さっきのサヤさんではないですが、ドキドキしますね♥」  
そう言いながら、その背徳的な状況を楽しむかのように笑うシユン。

普段からチャイナドレスで晒している脚はスラリと美しく、それが股間にある性器の卑猥さをより際立たせている。

陰毛は両翼を広げるようにV字に生えていて、自然に処理されている。

発達した小陰唇は物欲しげにぱっくりと開き、アワビのようにヒクついて私を待ち望んでいた。

「先生……もう、待ちきれません……♥」

男を誘うやり方を十分に理解したシユンの、鼓膜も股間も震わせるような淫らかな声音に反応し、自然と腰が前にでる。

ぬぶぬぶと、いともあっけなく私のチンポはすべてシユンのマンコに飲み込まれてしまう。

幼い日、あれほどキツかった膣がとろとろに蕩けて私を迎え入れ、シユンの腹筋で在りし日を思い起こさせる握るような締めをも併せて実現している。

「ああ……♥ すごい……♥ なんどシても、先生とのセックス、とっても気持ちいいです♥」

うつとりとチンポの味を堪能するシユンに微笑みかけ、腰を振る。

一突きごとに大きな胸がゆっさゆっさと揺れ、小指の先より小さかった乳首が親指よりも太く成長し私に抓まれるのを待っているのに、性欲を掻き立てられた。

ぐにや、と上から押しつぶすようにシユンの胸を掴むと、そのまま

腰を何度も強く打ち付ける。

「それっ、そんなに直ぐされたらあ♥ 楽しむ前にイツちやいますう♥」

媚び媚びの甘ったるい声を上げて、シユンがむしろ胸を突き出すように私に押し付けてくる。

長く楽しみたいと思いつつも、私の意向を最優先にしてくれる出来た女性。それがセックスのときのシユンだった。

「シユンが凄くやる気になってるから、私も我慢できないんだっ」

「確かにっ♥ サヤさんとのセックス見せつけられてっ♥ 私もこんな事して欲しいって♥ 思ってたましたあ♥」

幼い姿で犯してから、シユンが私に向ける好意には明確に『甘え』の色が濃くなった。そのせいか、なんでも胸中を素直に明かしてくれる。

いびつながらも私とシユンとの間にしかありえないような愛の形に、散々サヤに射精した金玉がフルで精子を増産する。

「シユンっー」

豊満な胸に顔を埋める。イズミともまた違った不思議な包容力のある胸に包まれて、甘えられながら甘やかされる。

「せんせいっ♥ きて、きてえ♥」

シユンのたおやかな手が私の頭を優しく撫でるのにやすらぎを感じ、顔を柔らかな胸に包まれ、胸の谷間のシユンの匂いにも包まれて、まるで溶け合ってしまったような一体感の中でシユンの膣に射精する。

「ああっ♥ いくっ♥ いきますう♥」

短い仕込みで完璧に覚えた絶頂宣言とともに、シユンも同時に果てた。

「はあ……はあ……♥」

母親のように優しく頭を撫でてくるシユンが、子供のように脚を腰に絡みつかせて甘えてくる。身も心もベツタリと癒着しそうな距離感の心地よさに、しばし浸った。

「うー……ん……ハッ！ 先生！ シュン！ な、なにやってるの  
人の部室で！」

シュンのいき声がうるさかったか、サヤが起き上がる。そしてチンポの誤魔化しが切れた頭で周りを見渡すと、

「ぎゃーっ！ マットがベットベト！ 机も、フラスコも汚れ  
がーっ！ 先生！ シュン！ こんなにした責任、取ってもら  
うのだ！ 終わるまで家には帰さないのだ！」

ごもつともな怒りとともに全裸で勢いよく立ち上がったサヤに説教され、日が落ちるまで頑張つて3人で掃除するのだった。

どうでもいっしょ（ヒビキ）

この所ヒナと夏合宿に行ってセックスしたりゲーム部の部室でユズとセックスしたり山海経に行ってシユンやサヤとセックスしたりと出かける事が多かったが、今日は比較的穏やかにシャールで仕事をこなしていた。

「先生、まだそんなに残ってるの？ ん…今の先生の任務進行は多少、非効率的な状態だと思う。もっといいやり方を探してみる」

今日の『先生当番』はヒビキだ。比較的珍しい、私の仕事を手伝ってくれるタイプの生徒で、かつ優秀なヒビキは私にとってとてもありがたい生徒だった。

生徒に手伝わせる事が前提なのが情けないという話は脇においておく。

『先生、大変です！ 先日退けたはずのヒエロニムスが緊急襲来の情報が入りました！』

目の前の端末の画面が突如切り替わり、少女の顔が大写しになった。言わずもがな、システムの箱の管理人格、アロナだった。

システムの箱の端末は私のポケットの中だが、このオフィスのネットワークに接続した機器はすべてアロナの管理下にあるため、このようなくとも出来る。

「またか？ 前もこんな事なかった？」

『ええ、ありましたね…お仕事中申し訳ないんですけど、先生…』

「いいよ、それも仕事なんだし。…と…というわけでヒビキ」

そうやって振り向くと、ヒビキは既に机に立て掛けていた砲のストラップを肩にかけていた。

「うん、勿論私も行くよ。先生の敵は赦さない」

2人で仕事をしている時間を邪魔されたことで腹を立てているのか、いつも自然体で優しげな目元は険しく、柳眉を逆立てている。

「まあ落ち着いて。他の面子に連絡を入れるから、まだ時間はあるよ。下の休憩室でお茶でも飲んで待ってて」

そうやって、小銭を渡す。普通なら飲み物は自費だが、仕事で待機



させるときは私が払うという事で話は付いていた。

「……わかった。待ってるから、早く来てね、先生」

こつくりと頷くと、ヒビキは装備を担いで執務室を出ていった。

「さて、誰を呼ぼうか……」

ヒエロニムスは何度も来ている分、対策も色々と練つてある。最適なメンバーは決まっているが、生徒のスケジュールを抑えられるかが問題だった。

悩んでいても仕方がないので、重要順に連絡を入れていく。まずアズサ。

『了解、今回はどっち？ ……トリニティの古聖堂の方か。ならこのまま現地前で合流しよう』

次にコハル。

『え、また？ でも私を頼つたのは正解よ！ ヒエロニムスの対処はこのコハル様に任せなさい！ ……て、テストのことは今は良いでしよ！? ……アズサの成績は上がってる？ う、うるさい！』

次にアカネ。

『はい、あなたのメイド、C&Cのアカネでございます。お待ちしておりました先生。私も今トリニティに向かっていますので現地で合流しましょう。……うふふ。次は別の、もっと個人的な呼びが掛かるのを楽しみにしておりますね？』

そしてムツキ。

『せつ、先生!? な、なに、この間のこと、まだ赦してないんだからね！ ……ああ、なんだ、そつちか……まあ良いよ。行つてあげる。くふふつ、便利屋68のメンバーをご指名だもん、料金は弾んでよねー♪』

最後にセリナ。

『……分かりました。時間までには合流します。……いえ、今学校ではなく病院で……大丈夫です、シャーレの活動が優先ですから。けが人を増やしてしまったては本末転倒ですからね』

皆のありがたい配慮によって、最速で理想のメンバーが揃う運びとなった。

早速エレベーターで降り、大人しくミネラルウォーターを飲んで待っていたヒビキに声をかける。

「おまたせ。皆現地に行ったほうが早いから、現地で集合にしたよ」

「了解。じゃあ早速行こう」

私の3歩後ろに付き従うヒビキと共に、トリニティへと急いだ。地下鉄で。

「じゃじゃーん！ 勝利勝利い〜！」

ヒエロニムスとの戦いはいい加減慣れているのもあり、危なげ無く勝利に終わった。

ムツキが先の処女喪失のストレスをぶつけるかの如く地雷を直接ヒエロニムスに当たるという大胆な攻撃をしてくれたおかげで一番の大活躍を見せ、弾けるような笑顔でVサインをしていた。

「皆、お疲れ様。じゃあいつもどおりここで解散としよう」

「先生……帰り道、私が護衛に付かなくて大丈夫？」

心配そうな顔でアズサが前に進み出る。

「いや、大丈夫だよ。トリニティなら地下鉄駅も近いしね」

「まあ、そうか……少しでも異変を感じたら、直ぐに私に知らせると。いい？」

「うん、ありがとう、アズサ」

ばいばい、と小さく手を振ってアズサが立ち去る。

「ねね、先生。私今日かなり活躍したよね？ だからあ、それ相応のお給料欲しいな〜♪」

立ち代わりにムツキが前に出て、腰を折って下から覗き込むように私を見つめた。

「はは……そこは、私が料金を決めているわけじゃないから……連邦生徒会にお願い」

「ぶーっ！ じゃあ、先生が個人的に私にイイコトしてくれるのでもいいよ？ ねえ、先生……どう？」

「そういうことなら喜んで。前回みたいに、ムツキに喜んでもらえる

ようにするから」

そう言つて笑うと、ムツキはサツと顔を紅潮させて身を引き、自分の身体を守るように抱いた。

「そつ、そういう事言ってるんじゃないもん！ いーつ！ 先生のバカ！ いじわる！ 今度あつたら覚えてろーつ！」

そしてぴゅーつと走り去つてしまふ。

「ちよ、ちよつと！ なに、あれ……せ、先生、何かいやらしい事したんじゃないでしょうね!?!」

何もしていないのに顔が真っ赤なコハルが興味津々に目を光らせて詰問してくる。

「たぶん、珍しくゲームに勝ったのが悔しかったんだろうね。コハルもゲームしてみる？ 負けた方は何でもするってルールで」

「なっ!?! 何言ってるの！ やらしい！ やらしい！ やらしい！ やらしい！ もう知らないっ!?!」

瞳を左右に思い切り泳がせた後、コハルもぴゅーつと走り去つていった。

「あらあら、随分お盛んなのですね、先生？」

いつの間にか後ろに居たアカネが声を上げるのに、驚いて振り返る。

「あ、あはは……コハルはいつもあんな感じだけど」

「ふふ……存じております。よくよく面白い方ですね、コハルさんも。けれど……」

夕暮れの古聖堂、うつむいたアカネのメガネが光を反射し目元が見えなくなる。

「先生……私は立ち場に関係なく、あなた個人のためのメイドでありたいと思つています。だから……その……」

俯いたまま、らしくもなく言葉に詰まるアカネの頭に手を伸ばした。

激しい運動の直後でしつとりと汗をかいた髪を掻き分けるように頭を撫でる。

「あつ……」

「うん。機会があつたらアカネを呼ぶことにするよ。……きつとすぐに機会があると思うからさ」

「どういふ情報網かは知らないが、アカネは私の情報を掴んでいるよ。うだ。」

「は……はい……あの、あ、ありがとうございます。それから……申し訳ありませんでした、はしたないおねだりをしてしまつて」

「ううん、良いんだよ。アカネから言つてくれて凄く嬉しい」

「そう言つて、メイド服の下の豊満な肉体を想像して舐め回すように見つめる。とてもヤリがいがありそんな身体だ。」

「アカネは腕で身体をかばうようにしながら身体を捻り、顔を赤らめた。」

「お呼びするときは、事前にお申し付けくださいね。か……身体を、綺麗に洗つてまいります」

「わかつたよ」

「そう返事をする、アカネは今度こそ笑顔でカーテシーをしてから落ち着いて歩き去つた。」

「さっきの、何のお話だつたんです?」

「ん? まあちよつとね」

「むう……皆さん知つてるみたいなのに仲間はずれなんて酷いです」

「珍しくむくれるセリナに、チンポがイライラしかけるが我慢した。」

「はは……セリナもそのうち分かるから」

「そんなんですか? 何か順番が……? まあ、それなら楽しみに待つてます。それでは、先生。またお会いしましょう」

「そう言つて笑顔を取り戻したセリナも去つていった。」

「じゃあ、先生。皆も居なくなつた所でシャールに戻つて続きをしよう」

「うっ……今日はほら、疲れているだろうし……」

「だめ。そんな事をしていると仕事が増み上がっていくよ。明日はおよすみだから、最悪私もシャールに泊まれるし。さ、行こう、先生」

「どこかムツとした表情で、私の腕を取つて歩き出すヒビキに引かれながら夕暮れ時のトリニティを歩く。」

シャーレビルの執務室に帰るまで、地下鉄の中でも、ヒビキが私の腕を離すことはなかった。

そして、更に数時間。夜も完全に更けた所で、今日の仕事を片付け終えた。

「ああー……終わった……」

「お疲れ様、先生。ふう……もうこんな時間」

立ち上がって大きく伸びをしながら窓際に歩く。下を見ると、夜景からも光がそろそろ失われつつあった。

「ごめんね、ヒビキ。家まで送っていくよ」

「ん……いい」

ゆるゆると首を振るヒビキに、私は首を傾げた。

「どうしたの？ 何か悪いことしちゃったかな？」

「そうじゃなくて……今日は、帰らない。先生とここで……泊まりたい」

「それは……どういう……」

戸惑っている私に、ヒビキは恐る恐る歩み寄って私の胸にすがるように抱きついた。

「アカネ先輩も、言ってた。……コタマ先輩も、なんだかこの頃凄く機嫌がいい……変だなって思ってた。それはきつと、先生と一緒に過ごしてるから……わ、私も……先生と、特別な関係に、なりたい……」

ヒビキとコタマは、同じ学校とはいえ1年と3年で部活も違う。しかし共に非常に高い任務適正により一緒に行動することが多かった。そんな事情はともかく……

顔を真赤にして、何度も言葉に詰まりながら。

それでも目をしっかりと合わせて、ヒビキは私に思いを告げた。

ちんこのイライラが最高潮に達した。

「ヒビキ……男にそんな事を言ったら、もう止まれないよ？」

「あう……いい、いい。それでも……相手が先生なら、絶対、後悔しないから」

その返答を聞いて、遠慮なく私からもヒビキを抱きしめる。一瞬硬

直したが、私に身体を預けるように力が抜けていった。

「ん……あつたかい」

ヒビキからも私の背中に腕が回され、優しく抱きしめあう。

サラサラとした髪を撫で、頭の上の垂れ耳に口を寄せる。

「下の仮眠室で一泊しよう。ベッドがあるからね」

ヒビキはくすぐったそうに肩をすくめてから、赤い顔で頷いた。

廊下に出てからは、普通の生徒と先生の距離を保って歩く。エレベーターに着いて休憩室に向かおうという時、ヒビキが逆側に視線を向けた。

「あの……今日は外で運動したし、シャワー浴びてきて良い？」

「ああ……そうだね。私も浴びるよ」

そういうわけで、別のシャワーブースでシャワーを浴びてから、休憩室の中の仮眠ベッドに歩いていった。

そして、この後寝るからと網タイツを既に脱いでジャケットも脱いで腕に掛けたヒビキと共に、仮眠室のベッドに並んで座る。

私達の尻の下には、既にタオルが敷いてあった。これからの行為の証拠を残さないためだ。

「あ、あの。それで、実際には皆と……何してるの？」

おずおずと上目遣いに聞いてくるヒビキを無言で腰を抱いて引き寄せ、唇を奪う。

「んうっ!？」

びっくん！ と痙攣するものの、震える身体で堪えてされるがままになるヒビキ。

ゆっくりとベッドに押し倒し、完全に寝かせる体勢にして唇を味わうようにちゅうちゅうと吸い立てる。

ヒビキは緊張に全身を固くして、胸の前で手を組んでじっとしていた。

それはそれで可愛いのだが、もう少しほぐしたいと寝たままのヒビキを抱きしめる。

腋の下に手を入れて抱くことで、ヒビキにも私を抱きしめるよう促した。

「ちゅ……んふ……」

ヒビキの手が私の背中に回った所で、舌を挿入する。

「んんうっ！」

ヒビキは目を見開いて驚くが、ねっとり穏やかに舌を絡め合うと徐々に落ち着いていく。

「ん……んく……」

気持ちよさそうな吐息と、口内に流れ込んでいく私の唾液をヒビキが嚥下する音だけが夜の仮眠室に響いた。

ディープキスに慣れた所で、ついにヒビキの服の肩紐に手をかけ、ずらす。

これには一番の反応を示した。

「……！ん、んむうっ……！」

目を見開いて、手足をバタつかせようとするのを押さえつけ、上着の前をペろんとめくる。

15歳が着るには随分色っぽい衣服の下から、まだ異性に晒したことの無い綺麗な桜色の乳首が姿を現した。

「んーっ!？」

混乱の最中、目で何かを訴えてくるヒビキの舌をじっくりと愛撫し、顔の横の耳をかするような繊細なタッチで撫でる。

「んっ♥」

初めての性感に緩んだ意識を戻させず、更にむき出しにした胸をふよふよと弾ませるように揉んだ。

年の割には女らしい大きさに育った胸と、それにしても可愛らしいほど小さい乳輪と乳首をくすぐるように愛撫する。

「むうー……っ♥」

男にそんな事をされる羞恥で顔を真赤にするヒビキ。しかし、最初ほどの抵抗はない。

それにつけ込んで、ごく軽い力で乳首をつまむ。

「んんっ♥」

ちよん、ちよん、と摘むたび見開いていた目を閉じて眉を寄せ、内ももをこすりつける。キスと乳首の性感に、聡明なヒビキの理性が屈

し始めていた。

その効果を見て取った私は、じつくりとヒビキを快感で躡けていく。

私との行為の気持ちよさ……法を犯すことを選択するほどの快楽を教え込み、抵抗の意思を奪っていく。

「ふう……♥ ふう……♥」

どのくらいそうして居ただろうか。今はもう夜なので誰もこない。明日の朝までたっぷり時間を取れるので時間を掛けすぎたかも知れない。

ヒビキの顔は耳まで真っ赤になっていて、驚きに見開かれていた目は何度もの穏やかな絶頂を経て蕩け、目尻が下がって虚ろな視線をさまよわせるだけになっていた。

もう大丈夫だと確信して、ちゅぽんと銀の糸を引きながら口を離す。

「はーっ、はーっ♥」

久しぶりに呼吸をしたように、ヒビキは大きく胸を上下させて深呼吸していた。

ほんの豆粒のようだった乳首が小指の先ほどにぴんと勃起しているのが愛らしい。

ホットパンツの前のジッパを下ろし、隠された聖域を暴こうとするのを、ヒビキは力なく腰を上げて協力してくれる。

セクシーな服装の割にパンツルックで見えなかったヒビキのパンツを、薄暗い照明だけが頼りなく照らす仮眠室でついに挿んだ。

少女らしい飾り気のないそれは、オレンジがかった光源の下では色味がよく解らなかったが……正面についた小さなリボンが可愛らしい。

パンツ越しに下腹部にキスする。

「きゃうっ!! せ、先生!! な、なにをするの……!」

弾かれたようにヒビキが身体を起こして私を見下ろした。

「なについて、ヒビキのショーツが可愛かったから」

「うう……へ、変態みたいなこと言わないで……」



恥ずかしそうに顔を覆ってしまうヒビキに、チンポのイライラがどんどん高まっていく。

みずみずしく甘酸っぱいヒビキの股間の匂いを嗅ぎつつ、パンツの縁に手をかけて脱がせていく。

「……………」

ヒビキは目を硬く閉じ、身体を硬直させて震えていた。

下着を取り払うと、ヒビキの匂いが更に濃くなる。艶やかで縮れたヒビキの陰毛が股間に茂っていた。

まだ薄く、あまり処理はされていないがあまり濃くはない。性器の縁を覆うように大陰唇の周り、肛門までちよろちよろと生えているのが個性的だ。

「あああ……先生……見ないで……」

「ヒビキの……、とっても綺麗だよ」

涙混じりの声のヒビキに、ぴったりと美しく閉じた性器を見つめながら答える。

むっちりとした太ももの間には比較的薄めの大陰唇が股間を覆っており、クリトリスも陰毛に隠れている。

脚を閉じようとするヒビキの膝を掴んで力を込めると、諦めたようにヒビキが股を開かせてくれた。

両手で顔を覆って背けるヒビキを尻目に、私も服を脱いで全裸になる。ヒビキはチラチラと指の間から私の胸板や股間に視線を送っていた。

それを可愛らしく思いながら、薄い大陰唇を舌で押しつけて中の暖かな粘膜と舌を触れ合わせる。

「ぎゃうっ♥ あ、あ、あ、ほ、本当に、私、先生に、舐められちゃって……ひきゅっ♥」

変な声を上げながら、胸をむき出しにして胴回りを覆うだけの上着だけを着たヒビキが、脚を高々と持ち上げられて股間をむしゃぶられている。

「あーっ♥ あっあっ♥ はああっ♥」

段々とヒビキも慣れて、声が遠慮なく甘くなっていく。昼間だった

ら廊下に居る生徒が訝しんで覗き込んできただろう。

ぴちや、ぴちやと云う水音は私の唾液だけでなく、ヒビキの膣から溢れ出る愛液が主になって奏でていた。

敏感で絶頂しやすいらしいヒビキが何度かイッているのを感じながら手と口を離すと、ヒビキはカエルがひっくり返ったようにだらしなく股を開いたまま呆然としていた。

「はあ……はあ……♡」

常夜灯の下、じつとりと汗に濡れた胸元にピンと勃起した乳首が上下している。

ヒビキの表情がよく見えないのが、余計に艶めかしさを与えていた。

「これからもっと汗を掻くし、服は全部脱いでおこうか」

「ああ……ん……♡」

赤子にするように力が抜けたヒビキを抱き起こし、背中のファスナーをゆっくりと探り当てて脱がしていく。

ヒビキは私の腕の中でされるがままだった。コトリと大きなゴールを外し、ベッド脇のサイドボードにおいておく。

産まれたままの姿になったヒビキをまたゆっくり寝かせ、膝を掴んで股を開かせる。

「ヒビキ。ヒビキの初めて、私がもらっていい？」

「あ、う……うん。いいよ……先生が望んでくれるなら……私の処女、もらって……♡」

オレンジ色一色の視界の中、全裸に大股開きさせられたヒビキが肘で少しだけ上体を起こして、私の目をはつきりを見つめて微笑んだ。

その笑顔に押されるように、グリグリと閉じきった性器に亀頭を押し当て処女穴をこじ開けていく。

「いっ……だ、大丈夫、だから……そのまま……」

健気にそう言ってくれるヒビキに甘えて、強く反発してくるキツイ穴を押しつけてヒビキの処女膜を破り、一番奥まで押し入った。

「ああああっ……！」

ヒビキの顔が苦悶に歪む。生暖かい感触が金玉を這う。ヒビキの

出血量は少し多かったのかも知れない。

「しばらくじっとしてるから、ゆっくり、大きく息をして」

「うん……………」

そろそろ20に届こうという数の生徒の処女を奪い、私自身も慣れ  
てきた。

チンポを動かさないようにしつつヒビキを抱きしめ、頭や腕、背中  
を優しく撫でる。

息が落ち着いてからは身を起こし、ヒビキと指を絡めて手をつなぎ  
ながら片手でクリトリスをやわやわと愛撫した。

「ふう…………ふう…………♥」

再び、ヒビキの吐息が熱を帯びたものに変わっていく。

「ん…………先生、もう、大丈夫だから…………動いて、いいよ…………」

「ありがとう、ヒビキ。…………ねえ、射精は中にしていい？」

ふと、今訊きたくなってしまった。

「えっ…………え？　せ、先生、もしかして…………避妊具、つけて、無いの？」  
目を見開いて、常夜灯のオレンジ色でもわかる位顔を青ざめさせる  
ヒビキ。

とたん、私を両手で押しつけようとする。それを阻止するため、私  
は自分から腰を大きく使ってヒビキを一突きした。

「あああうっ♥」

チンポによって振るわれるマンコに対する暴力に、人生はじめての  
性感を刺激されたヒビキは動きを止めてしまう。

「だ、駄目、先生！　もし私が妊娠なんかしたら、先生のほうがタダ  
じやすまない！」

「アフターピルがコンビニで売ってるから大丈夫だよ」

「アフターピルだって絶対妊娠しないものではないんだよ!?　もしそ  
れで妊娠してしまったら…………」

「ふうん。どのくらいの確率？」

「それは…………1%ちよつと、って話だけど…………」

滅多に無いヒビキの荒げた声に、私は掴んだ手を再度強く握った。

「その時は、ヒビキに産んでほしいな」

「えっ……」

「そんな低い確率で赤ちゃんが出来るのなら、それはもう運命だよ。私が養育費をちゃんと出すからさ」

目を丸くしていたヒビキが、ぽろぽろと涙を流し始める。

「わかつ……た。ひつく、その、ときは……私も、運命に感謝して、先生の赤ちゃん……産むね」

そう言つて、泣き笑いを浮かべた。

チンポに貫かれて、クリトリスをビンビンにしながら、この上なく透き通った笑みを浮かべるヒビキにチンポのイライラが限界を超え、子宮を腹の側に押し寄せる。

「……はい、ヒビキ。これがピルだよ。飲んだら、膣内射精するからね」

傍らの鞆のポケットからピルを取り出し、ヒビキの口元に持っていた。

「あー……♥」

ヒビキは小さな舌をいっぱい伸ばし、膣内射精の同意としてのアフターピルを舌先に載せ、溢れる唾液で飲み込んだ。

「じゃあ行くよ、ヒビキ。ヒビキが可愛いことを言ったせいで乱暴になつてしまうかも知れないけど、止まらないから」

「うん、先生の好きなように、して……今回は、全然わかつて無いけど……これから、先生を気持ちよくするもつといいやり方を探していくから……これからも、いっぱい私を誘つて欲しいな……♥」

すぱあん！ とヒビキの尻と私の下腹部が大きな音を打ち鳴らした。ヒビキが可愛すぎてもう我慢の限界を超えていた。

「あうっー」

気持ちいいかどうかというより、衝撃で肺から空気が絞り出されたような声を上げるヒビキ。

私は止まらずに腰を使い続けた。

「あっ、あっあっ♥」

ピストンの激しさと破瓜の痛みによりヒビキはほとんどマグロ状態だった。

じつと私の腰使いに耐えて、漏れ出るような喘ぎ声を漏らすだけの肉塊に成り果てていた。

こんなにも可愛らしいヒビキを性処理のためだけに使っている感覚に、どくどくと射精感がこみ上げる。

一晩の時間があるからと、雑に射精を膣奥に放った。

大興奮の結果、狂ったようにチンポがヒビキの中でのたうち精液をぶちまける。

「ああー……っ♡」

受精の危険がある精液を子宮に流し込まれる感覚に、ヒビキが叫び声を上げてのけぞり、枕を挿んで耐えている。

まだまだ勃起は収まらず、精液をぐっぽがっぽと掻き分けて膣口から漏らさせつつピストンを再開した。

「ああっ♡ あんっ♡ あっ、あっあああっ♡」

射精で性感が目覚めでもしたのか、ヒビキの声がだんだん甘くなつていく。

マグロなのは変わらないが、膣がリズムカルにきゅつきゅと締められ、気持ちよさが上がっている。

畑に肥料を与えて耕すように、私はヒビキにチンポを突き込み、パンパンと肉を打ち鳴らして腰を降る。

既に尻の下には濡れた感覚が拡がり、愛液と精液でぐしょ濡れになって処女の血も薄まっっているだろう事が察せられる。

ぎゅっど強く握り返してくれる手を心の繋がりのように暖かく感じながら、私はヒビキを何十分も犯し続けた。

握りしめる手の強さがぎゅっど強くなった。膣のうねりが激しくなり、きゅうきゅうと断続的な締め付けが射精感を急速に高める。

「ヒビキ、もしかしてイキそう？」

「うんっ♡ イキッ、そう♡ わたし、始めてなのにつ、お、おちんちんで、イッちゃう♡」

もう訳が分からないというように髪を振り乱し悶えるヒビキに、トドメのように気持ちいい所をゴリゴリと刺激する。

「ヒビキ、もう一発、射精するよー」

「きてっ、きてっ♥ 先生の赤ちゃん、産みたいっ♥」

まるで家族計画を立てた夫婦のような気持で、片手は指を絡めて握りしめながらも片方の手でヒビキの細い腰を抱き寄せ、チンポをより深くまでえぐるように突き刺し……

直前にヒビキの子宮が無理のない位置に来るよう調節して、2発目の射精を子宮に叩き込む。

「ふーっ♥ ふーっ♥」

ヒビキは自分から股を開き、まるで子宮で飲み干すために念を送っているように目を閉じて眉を寄せ、腰を不器用にクイクイと振りながら膣を締めて本気で受精しようと全力を尽くしている。

その一生懸命な姿に、金玉が震えるほどの精液を吐き出していく。どつくんどつくんと15歳の少女の中に注ぎ込み、ヒビキも膣口をクイと上に向けて、子宮に精液を流し込もうと奮闘していた。

行為の前に妊娠を恐れていた姿はどこにもなく、運命という言葉に酔いしれて初体験にして本気受精セックスの虜になったヒビキは眩しいくらいに美しかった。

大量の精液をヒビキの好意に甘えてすべて腹に飲み込んでもらっても、金玉が後から後から精子を作り出しているのを実感する。

私はヒビキの太ももを抱えるように覆いかぶさり、ピツタリと密着して上から押しつぶすように交尾のためのセックスを再開した。

夜が明けるまで、昂奮が止まりそうにもなかった。

「あー……あひっ……♥」

朝焼けの光が仮眠室の開いたドアから差し込んでくる。

結局、ヒビキの可愛さに甘えて一晩中種付けプレスを敢行してしまった。

擦り切れたように真っ赤になった小陰唇が、昨日まで一本筋だったことが信じられないくらいに淫らに狂い咲いている。

どぶ、どぶ、とぽっかり開いた膣口から精液が垂れ流れていく。

厚めに敷いたタオルに吸われ、黄ばんだ白のまだらな水たまりがヒビキの股間に出来上がっていた。破瓜の血の赤など、見つけるのも難

しい。

絶頂に痙攣しているヒビキの頬をピタピタと叩いて、気付けをす  
る。

「さあ、ヒビキ。誰か来る前にシャワーを浴びよう」

「あ……う……わ、かった……」

トリップしていた頭を振って、膝が笑っているヒビキが立ち上がる  
のに肩を貸す。

何とかまともといえる服を来て廊下を渡り、シャワーで汚れと昂奮  
を洗い流した。

タオルを片付けつつ戻って待っていると、普段通りの格好のヒビキ  
が休憩室に入ってくる。

「おかえり、ヒビキ。始発の時間になったら送っていくよ」

「あ、ん、うん……ありがとう、先生……」

若干ガニ股になりながら、赤面してモジモジと俯きがちにつぶやく  
ヒビキ。

一晩中した行為のことを思えば大人しい位の反応だろう。

「あ、せ、先生。その、タオル……どうするの？」

精液と愛液をたっぷり中身に詰めた四つ折りのタオルを見ながら、  
ヒビキが言った。

「ん？ 家に持ち帰って洗濯するよ」

「わ、私の家で、洗濯させてくれないかな？」

立っているのが辛そうなヒビキを隣に座らせて、続きを促す。

「そ、それ……私の、た、体液とか……血とか付いてるし。先生に洗っ  
てもらおうの恥ずかしいから……それに、私なら色々……良い洗濯機と  
か、家にあるから」

そう言えば、ヒビキはコスプレが趣味だという話だった。いつか見  
てみたいが……作るだけでなくメンテナンス……洗濯についても良  
い機材を確保しているのだろう。

「わかったよ。じゃあこれ……鞆に入る？」

「うん、大丈夫そう。」

一番外のタオルは乾いているが、押し込むと明らかにぬちゃりと粘

液の感触がするタオルを、ヒビキは嫌な顔ひとつせず鞆に押し込んでいく。

その後は言葉を交わすこともなく、ヒビキに腕に抱きつかれたままゆっくり過ぎした。ヒビキは時折下腹部を優しく撫で、うっとり微笑んでいた。

時計を見ると、そろそろ始発の時間だ。

「さ、そろそろ行こうか、ヒビキ」

「……先生。あのね……」

「うん？」

「赤ちゃんの名前、考えておいて。男の子の名前を私が、女の子の名前を先生が考えて……どっちかの名前をつけるの」

「うん、そうだね。考えておく」

私の精液が幾十億も泳いでいるヒビキの下腹部をネットリと撫で回しながら、ヒビキとつえばむようなキスを交わすのだった。



ハードファックとダンスつちまった（ネル）

「はあ……なんだよ、その目は」

用具室に置かれた机の上に女の子座りをして背中を向けたネルが、少し困惑気味に言った。

背中と言っても、いつものスカジャンではない。スカジャンは着ているのだが、袖だけ残して大きくはだけている。

少し埃っぽい体育館の倉庫の中。窓から差し込む光に照らされたネルの身体は白磁のように美しい。

私から見えるのはネルの艶やかな背中中の肌。むきだしの肩もすべてが見える、ほとんど裸の背中だ。

ネルの今の服装はバニースーツにスカジャン。腰あたりをスカジャンで隠されたため何も着ていないように錯覚してしまう。

「おお、大丈夫だな、サンキュ」

アキレス腱の部分にできた靴擦れに、絆創膏を貼ってあげたところだ。普段大暴れしているネルだが、足はまた小さく可愛らしい。

「なんだかこんなネルを見るのは珍しいね」

バニー姿で活動する練習をしているネルから呼び出され、こうして絆創膏を貼りにやってきたわけだが……

「言つとくけどあたし、普段はこういう事誰かに頼んだりしないからな」

頬をほんのり染めて、唇を尖らす様は小柄な体格も相まってとても似合っている。

「ネルは本当に頑張り屋さんだね」

「う、うっせ！ 子供みたいな褒め方すんな！ なんだよ、頑張り屋さんて……」

ネルの細い肩に手を置く。そう、『前』を上から確認するためだ。

（ああ……）

案の定、ネルの薄い胸をバニースーツは密着して隠しきれず、綺麗な桜色の乳首が丸見えになってしまっている。

C&Cの誰も気にしていないのか、ニプレスすら貼っていないある

がままの膨らみにチンポのイライラが急速充電される。

「ちよ、なんだよ、先生。触んなよ……」

そう言いつつも、ファイと顔を逸すだけで跳ね除けようとはしない。

「ネルって肌綺麗だよね」

不良生徒もそうでもない生徒も吹き飛ばす豪腕とは思えない、ほっそりした腕を撫でる。

「んんっ……♡」

鼻にかかった色っぽい吐息が漏れ、次の瞬間にはグワツと振り返り、真っ赤な顔をして叫んだ。

「へ、変な触り方すんなっての!」

そう言って突き飛ばしてこようとする手をするりと交わし、腰を抱く。

「は!?! せ、先生、躲しやがっ……いやなんで抱きついてんだよ!?!  
ち、近い近いって!」

真っ赤な顔のままでのけぞるネル。一糸まとわぬ胸元の肌が眩しい。

「ネルの格好が可愛すぎて我慢できなくなつたんだ」

「ちよっ、ま、待ってって、落ち着け、な?」

気が動転しているのか、腕力で押しのかたりしないようだ。それを良いことに机にネルを押し倒す。

「あっ……」

ネルの鋭い吊り目が、不安げに揺れる。滅多に見られないネルの表情が愛おしくて、その頬に手を添えた。

「っ……!」

ぎゅつと目を閉じるネルに、顔を近づけていく。ネルとも、初めて出逢った時から信じられないくらいに仲良くなった。

これはセフレにせねばなるまい。

「んんっ……♡」

ファーストキスを奪うと、可愛らしい吐息が漏れた。小さな肩を抱き寄せ、首筋を撫でながら唇を吸う。

ちゆ、ちゆ、と小さなキスの音が用具室に響く。ミレニアムでも外

れの方にある体育館なので、外から聞こえる生徒たちの喧騒も遠い。そろそろかと、舌先を侵入させてネルの歯並びの良い歯と歯茎の間をくすぐるように舐める。

「んっ!?!」

閉じていた目を見開き、驚愕するネル。

気を取り直したか私の肩をガツと掴んで引き剥がしに掛かる。

勿論、そうはさせない。無防備な胸に手を侵入させ、乳首を摘んだ。

「んむうーっ!?!」

思い切り眉を寄せて、至近距離から睨んでくるネル。クリクリク  
リ、と乳首をひねり、さすり、弾く。

「んひゅう♥」

ネルの肩が本人の意思とは無関係に竦められ、身体が痙攣する。

弾くのがお気に入りのようなようだ。反応の良い動きを執拗に繰り返す。

「んっ、んんーっ♥ んむーっ♥」

口の中で何やら抗議しているようだが、その隙を突いて舌を侵入させた。

ぐっ、と私の胸板に手を押し当ててどけようとする力に逆らい、乳首と口内への愛撫を続ける。明らかに、ネルは本気ではなかった。

「んっ……んっ……」

ふう、ふう、とネルの鼻息が荒くなり、抵抗も弱まっていく。視線にはまだ不満が乗っているが、

——しよーがねーな、早く済ませろよ。

そんな感じだ。処女であるネルにお許しをもらうこの状況にチンポのイライラはどんどん高まっていく。

固くなり始めた乳首をチンポのようにシコシコしごいて、舌先はネルの小さな舌に巻き付くように絡め合い、時折上顎の裏をくすぐる。

「んんっ♥ んーうー!」

先生、と口の中で言っている気配がするが、構わず激しくしていく。ネルの快楽は一秒ごとに高まり、どんどん絶頂に近づいているのが手応えで判る。

ここまで来たらネルをイかせて、なし崩しにセックスするしか無

い。

ぎゅっ、と乳首を強めにひっぱり、最後のひと押しを決める。

「んーーーーっ♥」

羞恥、快樂、憤慨、様々な感情で真っ赤な顔をしたネルが、目を見開いて全身を痙攣させる。

ちゅぽん、と唇を離した。

「はーーーーっ、はーーーーっ♥」

ネルは呆然と私を見つめ、息を荒く吐くばかりだ。その間にズボンを脱ぎ、下半身裸になった。

「あ……」

ちらりとネルの視線が下がり、私のフルボツキチンポを見やる。

男の手がネルのスラツとした太ももを掴み、犯すために広げて行くのを見送り……バニースーツの股間をずらしてチンポを押し当てたところで、ようやく我に返った。

「うおおっ!? だから待ってって先生! さ、流石にそれは洒落にならないから!」

「私はネルとセックスしたい」

「はあ!? 何いってんだホント!?」

まだ絶頂の余韻が抜けきらないのか、ネルが拳を握る気配はない。私は素早く膣口を捉え、腰を突き出した。

「くうっ!?!」

執拗な愛撫によって既に愛液をたっぷりと蓄えていたネルの膣は、ギユウギユウにきついながらも何とか侵入できる柔軟さも兼ね備えている。

処女膜の気配は無く、ズルズルと奥まで侵入できてしまった。

今まで色々やってきたとは言え、言い訳不能のレイプをやらかしてしまい勃起が更に激しくなる。

「おおお……ネルのなか、すごく気持ちいいよ」

「バカッ! 変態! 性犯罪者! 何してくれてんだよ!」

真っ赤な顔で講義してくるネルだが、マンコはキュンキュンと吸い付き締め上げてくる。

まるで照れ屋なネルの心の中を覗いているようでチンポのイライラが爆発した。

「動くよ、ネル！」

「ちよ、やめ、あああっ♥」

際どいカットのバニースーツは横にずらされ、もうネルの股間を全く隠せていない。

小柄なネルだが下の毛は流石に生えているようで、太くて濃いが剃り整えられた陰毛にネルの女の子を感じる。

ネルの膣は程よいヒダと強い締付けにより、ズルズルと往復運動をするとカリが強く刺激されて射精には最適のメス穴だ。

「あっ♥ ああっ♥ だめっ♥ やめろお♥」

私のチンポが気持ちいい所に当たるとたびにレイプされているネルの身体がびくんと震え、起き上がることも出来ずに机に背中をつけてしまう。

「ごっごっ? んごっ気持ちいい?」

ネルの好きな所は膣の浅い所、Gスポットだった。カリをそこに押し当てるように、何度も何度も往復する。

ぬっちや、ぬっちや、とネルの愛液が粘質な音を奏で、白く泡立った愛液が机に水たまりを作っていく。

「それだっ♥ めえ♥ わけっ、わかん、ねえ♥ やめっ、やめてくれえ♥ あたま、へんになるう♥」

上ずった声で、涙目になりながらも快樂に眼尻を下げて懇願するネル。

レイプしてチンポでよがり狂わせなければ見られない光景に金玉が煮え立ち、ネルに精液を注ぎ込みたいと強く願う。

「ネルっ、中に出すよ!」

「だめっ、だめだっ♥ あかちゃん♥ できちまうだろお♥」

普段の強さが嘘のように、ネルはレイプされながらチンポから与えられる快樂に翻弄され、唐突に子供を孕むかもしれない恐怖を拒絶している。

「できちやったらちゃんと産んでね、養育費は出すから」

「ばかつ、ばかばかばかあ♥」

たん、たん、たん、と一番奥までの深いピストンを繰り返す。

運動神経の良いネルは既にセックスの要領を掴んでおり、私のピストンに合わせてリズムカルに膣を締め付けてくれている。

口でどれほど文句を言おうと、身体は既に子作りにオーケーサインを出しているネルだった。

「おおおっー!」

「やめっ、あ、あああー!」

体育館の倉庫から外にも響くほどの声を上げて、ネルが絶頂する。初セックスにして射精されることによる絶頂をキめてしまえるのは、ネルの非凡な身体性能故か。

膣のうねりと締めも一段上の激しさとなり、まるでむしゃぶるように私のチンポから精液をすすり上げていく。

おかげで私は腰を振る必要もなく、歯を食いしばった必死の形相でガチ絶頂するネルを鑑賞できている。

「あつ、ぐ、あ、ああう……♥」

ぶるっ、ぶるっ、と断続的に全身を痙攣させて、焦点の合わない瞳を私に向けるネル。

初絶頂をがっつりと楽しんでくれて私も誇らしい気持ちでいっぱいだ。

「はあ……はあ……ふう……」

そうして、数分が経った頃ネルの吐息も落ち着いてくる。

「おい、先生……わかってんだろうな?」

!?

ビキッ!                      ビキッ!

何か得体のしれない感嘆符を幻視しつつ、キヴオトス一のメンチ切りに負けないようネルの膣内で勃起したままのチンポに力を入れる。

「んくう!」

ネルの顔が切なげに歪むのを確認し、口を開く。

「ネルが可愛かったから抑えられなかったんだよ。ごめんね」

「軽いな!?! ああ、くそっ、キスの時にぶん殴つときや良かった……」

髪をかきあげてガシガシと頭をかくネル。そんな仕草も、バニー  
スーツで股を広げてチンポを咥えながらだとたまらなく扇情的だ。

「ちよ、おい！ 何また硬くしてんだ！」

「ネルが可愛いから……」

「そればかりじゃねーか！ ……ああ、くそ！ もう煮るなり焼く  
なり好きにしろってんだ！」

ぷいっと顔を背けて、バンザイをするネル。

「いいの!? ありがとうネル、まだまだやり足りなかったんだ」

「~~~~~っ！」

ネルは目や額をビキビキさせているが、それはさておきペロンとバ  
ニースーツの胸を捲り乳首を露出させる。

背中に腕を回して小さな身体を抱き寄せつつ、カチカチのままの乳  
首に吸い付いた。

「くっ、あ……っ♥」

小さめの乳首を口の中で転がしつつ、ネルの気持ちいいGスポット  
をチンポで突き崩す。

先程までと違って、もうお許しモードなので慌てることもなくゆっ  
たりまったりとレイプを継続できる。

汗ばんだ肌を撫で、背中につうと指を這わせた。

「ひゃあっ!? ちよ、くすぐるのはずりーぞっ……ううんっ♥」

「あ、今の声可愛いよ」

「っー」

バンザイをやめ、バツと口を抑えるネル。睨みを効かせては居る  
が、マンコは相変わらず気持ちよさそうにチンポを刺激してくれるの  
で、ギャップがまた可愛い。

その光景が楽しいので、口を塞いだネルと見つめ合いながら正常位  
で犯すことにした。

ぴん、ぴん、と乳首をおもちやにして適度な快楽を与えつつ、ネル  
に言葉を投げかける。

「ネルってセックスが好きなの?」

「あ、あっ!? つく、あっ♥」

ドスの利いた声を出そうとした瞬間に私のチンポで子宮を揺らされて、甘い雌の声を出してしまう。

「だって、処女膜はなかったけど初めてなんでしょ？ それでこんな気持ちよくなれるものかなあ？」

「むううううう……!! んっ♡」

顔を真っ赤にして睨んでくるが、Gスポット攻めには甘い声が出てしまう。

快感で身体を痙攣させつつも、意思の強さは変わらず強気に睨みつけ続けていた。

その様が、汲めども尽きぬ蜜の泉のように私のチンポを勃起させる養分となる。

「あー、本当に可愛いよ、ネル。マンコも気持ちいいし、無限にセックスできそう」

「んぬううううああああ!!! くそっ！ もう黙ってらんねえ！

さつきからいい加減にし、んくうんっ♡」

ズコズコと腰を降る私に抗議するネルが、Gスポットを突かれる刺激に話の腰を折られる。

「ちよ、だから、やめっ、やめろっつってんだろおらあー！」

「うおっ」と

本気で拳を握って殴ろうとするのをのけぞって躲す。いかに力が強いとは言え、ネルは身長の高い女の子だ。私の顔面にはそもそも拳が届かない。

そして、のけぞった姿勢を利用してGスポットを更に強く刺激する。

「んきゅううううっ♡」

脚を上げて踵を叩き込もうとしていたネルが機先を制され、膺の快感で脚をピンと伸ばしただけに終わる。

上げられた脚を抱きかかえ、私の貼った絆創膏を眺めながらネルの土踏まずをペロペロなめた。

「や、やめ、はぎゅっ♡ あ、あああああっ♡♡」

これまでに無く強すぎるピストンにネルが悶絶する。私の服の裾



を小さな手が掴むが引き倒す気配もなく、むしろ縋り付くように弱々しい。

ぱん、ぱん、ぱん、と用具室中にネルと私の肉を打ち付け合う音が響き、上げられたネルの足先がピンと伸び、その指が強く曲げられている。

快感をこらえるように、あるいは快感を目一杯感じられるようにしているその仕草が、私の興奮を高める。

「ああ……ネル、そろそろまた射精するよ」

「だっ♥ あ、んくううううっ♥」

駄目の二文字すら発言出来ず、ネルが何度も膣イキを繰り返す。うねる膣にまかせて、二度目の射精を一番奥に遠慮なく注ぎ込んだ。

「あゝっ♥ お、おおえああ……♥」

フニヤフニヤになってしまつて、またも深い絶頂に浸るネル。

こんなにも勝ち気でありながらチンポ相手にはそのへんの不良生徒のように簡単に負けてしまうアンバランスさがネルに新たな魅力を与えていた。

チンポ大好きなネルの膣にまた精液を絞ってもらいながら、ネルの意識が覚醒するのをゆったり待つ。

「ああ……あ？ そんな……なんで居るんだ……？ あ、あああっ!？」

「てめーっ！ また！」

「おはよう、ネル」

目覚めの挨拶をしながら、ネルの弱点を突く。

「んんっ♥ ……っ！ あーっ！ もーっ！ か、硬くすんなーっ！」

手も足も出ないという事態に慣れていないのか、額に青筋立てて喚くしか無いネル。

しかし、アレだけよがり狂いながらも疲労の影が見えないのはさすがのコードネームダブルオーという所だろうか。

「ネル、もう一回セックスしていい？」

「やめろって言ってるんだろ！ こうなりやヤケだ……おらっ！」

掛け声はあったが、今回は拳を振り上げるでもない。

キュンツ♥

と膣が全体的に締め付けられ、これまでにない密着感でチンポを締め付けてくる。

「うおっー」

不意打ち気味の一撃に声を出してしまった。それを見たネルがにやあと笑う。

「へっ、これなら逃しようもねえ……あたしを舐めた礼、たっぷりときせてもらうぜ！」

そう言いつつチンポを締め付けてくれるのだからたまらない。

きゅん、きゅん、と極上の締め付けを堪能しつつ、こちらからも返礼とばかりにGスポットを突き始めた。

「くっ、ん♥ いい加減、慣れて来たぜ……！ おらっ♥」

顔も胸元も艶かしく上気し、めくれたバニースーツと乱れた首元のリボンタイという格好でいつもの不敵な笑みを浮かべてネルがチンポを締め付けてくれる。

最高のご褒美だ。ピストンにも力が籠もった。

「くうああ♥ ま、負けねえぞっ♥」

どこか弾んだ調子の声でチンポを受け入れ、ぐにぐにと膣を伸縮させて美味しそうにしゃぶりつつ自らも腰を振り、不意打ちのように外れたタイミングでの膣締めを織り交ぜる。

「くうっ」

その間の外し方が巧く、処女とは思えないツボを抑えた腰のくねらせ方でどんどん射精感を増幅させられてしまう。

まあ特に問題ないのだが……むしろ嬉しいのだが、それは今は黙っておく。

「そらっ、出せよ、先生！ また情けないツラして射精しちまえっ♥」

いつの間にかネルも目を爛々と輝かせ、私を射精に追い込むことを楽しんでるようだった。

生徒の初搾精だ、受けなければ失礼というもの。私は処女の巧みな腰振りと膣締めを受け入れ、気持ちよく射精させてもらおう。

「うおおっー」

どくん、どくん、とネルの小さな子宮に3発目の射精が流れ込んでいく。

ピッタリと張り付いたバニースーツは射精に暴れるチンポにより押し上げられる腹部の微妙な盛り上がりすら余さず伝えてくれる。

2人の共同作業としての気持ちいい射精に、レイプ以上の満足感に浸っていた。

「はあ、はあ……どうだ、まいったか……!」

珠のように胸元にいくつもの汗を浮かべて、まだ目元をチンポの快樂に少し蕩けさせたネルが勝ち誇る。

あまりのエロさに瞬時に勃起が回復する。

「はあっ!? な、なんでまだ硬く出来るんだよ! お、男って1回出したらその、お、終わりじゃないのか!?!」

意外と耳年増な……いや3年生なら別に普通か……事を言つて、ネルが動揺する。

「いやあ、ネルが一生懸命私を射精させてくれたかと思うと可愛くて、つい」

「つい、で復活すんなよ! キリねーだろ!? くそっ、どうすりゃいいんだよ」

くぬぬ、と歯噛みするネルに、思いついたことを言ってみる。

「次はネルが上になってみる?」

「あ?」

「ネルが上にのしかかって、腰を振って私を犯すんだよ。これなら攻守逆転で平等だよ」

「……………」

じとーつとした目でたっぷり30秒は睨まれた。

そしてネルは私を押し分けると久しぶりに起き上がり、そのまま押し倒した。

私の腹に手を付き、股を開いて踏ん張る。そのまま腰を落とすと、先端を加えこんだままの膣が再びチンポをヌルヌルと飲み込んでいった。

「な、なんかこれ、おかしくね? 恥ずかしいんだけど……」

「大丈夫だよ、チンポがどんどん硬くなってるの分かるでしょ？」

「バカ、その何が大丈夫なんだよ」

苦笑しつつ、力の抜けた声でネルが答える。落ち着いた気安いセツクスの雰囲気チンポが震えた。

「ん……」

眉をしかめながら、私の上にのしかかったネルが腰を上下させ始める。

ツンと張った胸が下を向きフルフルと微かに揺れ、股間の筋に力が込められ滑らかに躍動する。

埃舞う体育館の用具倉庫の窓から差す光に照らされ汗に濡れたネルの肌がエナメル質のバニースーツと同種のぬめるような光沢を帯びる様は息を呑むほど美しい。

「綺麗だよ、ネル」

そつと小さな頬に手を当ててつぶやく。

「……………うっせ」

モニョモニョと口を動かしたあと、結局言葉が見つからなかったのか取ってつけたような悪態をつくネル。

けれどその瞳は優しく、ぬぼぬぼとチンポを扱ってもらいつつ私達は穏やかに見つめ合っていた。

トロトロとネルの愛液が溢れ、竿と玉を伝って降りていくのを感じる。

段々とネルの腰は滑らかに速くなり、愛液の溢れ方も激しくなる。

「はあ……はあ……♡」

これまでと違って、静かに、しかし情熱的に、ネルの性感が高まっているようだった。

つぽ、つぽ、と水音がはつきり聞こえる中で、主旋律を支えるベースのように深く熱く、艶かしい吐息もその存在感を増していく。

「んくっ……ふう、はあ……♡」

時折溢れるよだれを飲み込むアクセントを交えながら、もはや軽口を叩くこともなく腰を振り続ける。

ネルの瞳の焦点がだんだんぼやけ、心身ともに膾イキを味わうだけ

の肉オナホになっていく。

愛らしい生徒が一生懸命に精液を絞ってくれる最高のシチュエーションに、4発目をフルチャージした金玉がすぐそこに迫った射精を今か今かと待ちわびる。

「あ、あ、あああーっ……♡」

ネルの顎が上がり、言葉とも付かない、快楽に対する反応が漏れ出たかのような声帯の震える音を上げて、その時を告げた。

ぎゆう、というネルの絶頂のうねりに合わせ、パンパンに精液の詰まった子宮にダメ押ししの4発目を注ぎ込む。

「あ、ー……♡」

派手な反応などなにもない、ネルのリラックスした絶頂声。

ぼうっと意識を希薄にさせ、絶頂に浸りきっている。唇の端からよだれが垂れ、着たままの私のシャツに小さなシミを作った。

膣の方はいつもどおりに大喜びでチンポを締め付け、重力に逆らってこみ上げてくる精液を根本から吸い尽くそうとうねっている。

ぐったりとネルが崩れ落ち、私に完全に身体を預ける。よだれのシミを塗りつぶし、セックスでかいた汗が私のシャツをぐっしよりと濡らした。

甘酸っぱいネルの汗の匂いを嗅ぎつつ、抱きしめてゆっくりと頭を撫でる。

身じろぎ一つしないまま延々と射精を続け、ネルのマンコも美味しそうにチンポをしゃぶり続ける。

動物ですらなく、性器と性器だけで会話するような濃密な愛を楽しんだ。

「あー……くっそ……まんまと先生にハメられちゃった」

「すごく気持ちよかったよ」

満足してチンポが萎えて抜けてしまったが、体勢はそのままに寝転び続けていた。

「いつか覚えてるよ、まったく……今回は完敗だったけど、次は容赦しねーからな！」

その言葉に私はニツコリと笑う。

「次？ いつする？」

「ぼっ……だから、そういう事をいうなつての！」

どす、とみぞおちに掌底を入れられ、くの字に折れ曲がる。

起き上がったネルは机の上に立とうとして尻餅をつき、忌々しげに自分の無残な股間を見下ろした。

「うわ、ドバドバ溢れてるじゃねーか。どうすんだよ、もう……流石に子供は勘弁だぜ」

「シャーレの1階のコンビニで避妊薬が買えるよ。お金は私が出すから」

それを聞いたネルの顔が怒りに歪む。

「おい、先生……随分手慣れてやがるじゃねーか、ええ？」

「そうだね。ネルで19人目だからかな」

随分増えてきたセフレの数にしみじみしながら答える。

「はああ!? このっ……! はああ……もういい、分かった。聞いたあたしがバカだった」

「まあまあ、そう怒らないで……またやろうね」

「くそっ! 絶対泣かせてやるからな、先生!」

そう言つて、立膝で座りながら股間からごぼごぼ精液を垂れ流すネ  
ルは吠えた。

次は面識のあるアリスと3Pなんかも楽しそうだと今後の予定を  
思い、私は微笑んだ。

おおきくなったらお嫁さんになる（カリン・イズナ）

褐色の美少女が、尻を向けて座っている。

「……………あの、先生」

ビルの窓からは日差しが差し込み、カリンの着ているバニースーツにくっきりと陰影を付けてくれている。

バニースーツ越しのお尻の合わせ目の段差も、大きなお尻の丸みも、むき出しの肩、背中、腰の曲線も、影の付き方によってはっきりと見て取ることが出来る。

さらには、床からの照り返しによって間接照明で浮かび上がる腋から乳房へのなかなか注目出来ない横乳も見放題だ。

「先生、気が散るから、その」

「大丈夫、見てるだけだから気にしないで」

「ううう……………こんな格好するんじゃないかな……………」

恥ずかしそうに声を震わせて言うものの、体勢を変えたりはしない。

なにせ、任務で狙撃するために待機しているからだ。おかげで私も遠慮なくカリンの身体を堪能することが出来ている。

日差しの中に佇んでいるカリンはしつとりと汗をかき、開いた窓から吹く風が甘酸っぱいカリンの体臭を私の鼻腔に運んでくれる。

やりづらそうに身じろぎして狙撃銃がゆらゆら揺れていたカリンも、しばらくして通信が来るといよいよ近づいた狙撃のためにピタリと静止し、程なくして銃声がビル内に響いた。

「……………とりあえず、任務完了」

ふう、と息をついてカリンが振り返る。カリンはまだ少し残るといふ事なので、私も側にいることにした。

「いやあ、バニーガール姿のカリン、とっても良いね。目の保養だよ」

ネルのちまいスレンダーな身体で着ると胸を覆い隠せなくて乳首が見えそうになってチンポがイライラしたが、カリンのような胸も尻も大きく手足も長い美少女が着ていると、やはりこういう体型のための服装だと思える。

最高にチンポイライラする。

「先生は本当に、全くもう……」

むっとした顔をして私を睨むカリンだが、特にそれ以上のリアクションはしない。前に踏んでもらったりしたのでそれなりに慣れて  
いるのだろう。

「でも本当に綺麗だよ。とても良く似合ってる」

「そ、そう？ そう言ってもらえると、嬉しい」

任務も終わったので、グイグイカリンに近づいていく。白手袋に包まれた手を取った。

「白の手袋はメイド服と同じなんだね」

「そうだね……これはどっちかと言うと扱う銃が変わってないからだ  
けど。……あの、先生？ ちょっと、その、近いから……」

顔を赤らめて下がろうとするカリンだが、その前に私が腰に手を回  
して抱き寄せた。

「ひゃっ!? こ、この格好でこの距離は、さ、さすがに」

お互いの腰と腰が触れ合う。驚いて背を反らしても、カリンの大き  
な胸は私の胸にあたってしまっていた。

「ポニーテール、似合ってるよ。カリンって綺麗なうなじしてるよね」  
首筋を、指先でつうと撫でる。

「ううんっ ♥ くすぐりたい、先生……も、もう本当に、」

その先の言葉は言わず、カリンの小さい耳の縁をなぞるように指  
を這わせていく。

「ああっ ♥ やだあ……へ、変な声出ちゃうから……」

敏感な所を撫でるたび、カリンの身体が震え……大きな胸がゆさゆ  
さと揺れている。

鎖骨、肩、腕を撫で、腰に回した手も滑らかな背中をなで上げる。

「リボンの色、ネクタイの色と同じだね。そういう所もお洒落だと  
思う」

胸の横、バニースーツの縁を彩るリボンに触れる……ついでに、カ  
リンの太ももを撫で回す。

素足を飾る意味しかないスカスカの網タイツの感触がアクセント



になり、張りがあってしつとりした肌との対比が楽しい。

「カリンの瞳、とても綺麗な金色だね。肌と服の黒にすごく映えるよ」  
そう言いながら顔を近づけて、カリンの瞳を覗き込む。

抱き寄せる事でカリンの胸が私の胸板に潰れ、柔らかい感触が余すこと無く伝わってきた。

「あつ、やつ、だ、だめーっ！」

バツ、と手を突き出してカリンが私から離れる。身体をかばうように身を振り、腕を組んでいるが……

それが大きな胸を複雑に歪め、柔らかさとエロさを際立たせている事には気づいていないようだ。

「な、なんなんだ、もう！ 今までそんな事したことなかったのに！」

「ごめんごめん、カリンが余りにも綺麗だったから」

ゴリゴリと押していく。

「そ……そう？ そんなに気に入ったのなら、しょうがない……かな」  
そう言つてカリンが首を傾げると、長いポニーテールがざらりと揺れる。

高鳴る心臓を抑えるようにカリンは手を胸の上……谷間の上端辺りに置いた。

腕によつて潰されたおっぱいを気にしない無防備さがチンポのイライラを増幅する。

カリンはセクシーな割に自己評価が低い。他の悪い男に騙される前に私がセフレにしなければ。

「ふう。っと、今も一応待機中なんだから、あんまり先生にばかり構つていられないんだ」

「そうか……ごめんね、邪魔しちゃって」

「い、いや、邪魔なんかじゃないから、気にしないで。……まさか、先生がそんなに気に入るとは思わなかったから。あの、よかつたら……」

モジモジと両手の指を絡めて、何かを言いかける。

「よかつたら？」

「い、いや、その。また後で連絡するから」

「そう？ 分かった」

その後は、カリンがその場を去るまで普通におしゃべりをして過ごした。

「つていう事だったんだよ」

「なるほどです！ カリン先輩も主殿の魅力にもうすぐ気づくことが出来るんですね！」

その日の夜。カリンとセックスするために一度引いた私は、チンポのイライラを発散するためにイズナの家で泊まることにした。

一緒に料理を作って夕食、イズナオススの忍者映画を普通に鑑賞し、宿題を片付けるのを監督。

そして一緒にお風呂、全裸のままベッドに入ってゆったりセックスのコースだ。

「急なお願いだったのにお泊りさせてくれてありがとうね、イズナ」

「そんな……主殿とこうして一緒に過ごせて、イズナはとっても嬉しいです！」

裸で抱き合い、マンコでチンポを抱きしめながら弾けるような笑顔を向けてくれるイズナの頭を撫でた。

明かりをつけっぱなしのため、15歳の瑞々しい裸が乳首を勃起させ、興奮でまた汗をかいているのがよく分かる。

「うんうん、イズナは最高のセフレだよ」

「はいっ♥ イズナ、一番便利なオマンコでいますから、今後もイズナのことたくさん使ってくださいね♥」

意図して媚び媚びの甘ったるい声を出して私のチンポのイライラを煽ってくるイズナに、お望み通りチンポを突きこむ。

「ふあんっ♥」

ぬち、と早くも粘質の音を響かせてイズナが善がり声を出す。

細身ながらもポリウムのある胸をしたイズナを抱きしめて密着すると、お風呂上がりのホカホカさが心地よい。

性欲を際限なく受け止めてくれる都合のいい肉体に埋没するように、イズナの肉布団に体重をかけて堪能する。

「んっ……ちゅっ、ちゅっ……♡」

顔が近づくと、イズナの方からキスをして舌を絡めてくれる。私の下敷きになりながらも健気に腰を上下にへこへこと振り、チンポをしごき始めた。

私はのしかかったまま何もせず、しばらくイズナの心尽くしの性奉仕をゆったりと味わった。

イズナのしなやかな腕と脚が私に絡みつき、ギンギシとベッドのスプリングの反動を利用して下からの動きだけで射精に導こうとする。いじらしいが、もどかしいその動きに我慢の限界はすぐ訪れた。

「ん、むう♡ んっ、んっんっ♡」

ずぶ、ずぶ、と愛液が圧力で押し出される音を響かせて、私が上からイズナのオナホマンコをズゴズコ突き崩す。

何度と無く抱いてきた事で、もう処女の面影をなくしスムーズに入りできるようになったマンコに、コンドームの甘ったるい赤ピンクが見え隠れする。

前後だけでなく腰をグラインドさせて、膣ヒダを撫でるように掻き回して遊ぶ。

こうしてイズナマンコの味を余すこと無く味わえるのは、お泊りで遠慮なくセックス出来る醍醐味だなと喜びを噛み締めた。

イズナの155センチの小柄な身体をギュツと抱きしめ、細かく腰を振る。

鼻の頭を触れ合わせながら、ふうふうと唇の上端にイズナの鼻息を感じながら、イズナと間近で見つめ合う。

うっとり目を細め、私に犯されるのが嬉しくて仕方ないと言わんばかりに目をキラキラ輝かせるイズナにチンポを思い切りねじ込み、身勝手に射精する。

「ん、んんんーっ♡」

細めていた目を閉じ、膣内射精される感触に集中するイズナ。当然のように、私の射精に反応して絶頂してみせてくれた。

感極まった目の端から涙がキラキラとこぼれ、顔の横を流れていく。

「ちゆく……ちゆく……♡」

射精の余韻に浸る私とイズナ。ことさらゆつくりと舌を絡め合い、勃起が自然に萎えるに任せる。

ちゅぽん、と口を離し、私は身を起こした。ぬるんと萎えたチンポがイズナのキツキツマンコから押し出される。

「お疲れ様です、主殿。お掃除いたしますね♡」

股を開いたまま、コンドームを外して口を縛るイズナ。

ベッドの脇に用意しておいたゴミ箱へとそれを落とすと素早く身体を入れ替えてよつん這いになり、尿道に残った精液が滲む亀頭を口に含んだ。

「ちゅ、じゅるっ、じゅるっ……」

音を立てて吸いたて、尿道から精液を吸い上げつつ亀頭に満遍なく舌を這わせて刺激する。

金玉の下に手を添えて、マッサージするように優しく圧迫する。尿道の奥の方に残った精液も残さず吸い上げ、イズナの細かい喉の奥へと滑り落ちていった。

「ああ……いいよ。フェラ、とつても上手くなったね、イズナ」

けもの耳の軟骨をクニヤクニヤにしつつ頭を撫でて上げると、舌の動きに加えて顔全体を前後させてのおしやぶりが開始された。

愛情たつぷりの奉仕に、あつという間にチンポが勃起を取り戻していく。

「ああ……♡ 主殿、またイズナでこんなに勃起してくださったのですね♡」

よだれを垂らしたイズナの口元に、私の陰毛が張り付いている。セックスに馴染みきったその姿に一発目以上のイライラを感じ、手を伸ばしてそつと取り払った。

「あつ、はは……これはお恥ずかしい……さ、主殿。コンドームをお付けしましょうね。さささっ♡」

照れ笑いでごまかした後、サイドボードにたっぷり用意してあるゴムを取り出して手際よく装着してくれる。

「こんどはイズナが上になってみてよ」

「はいっ♥」

ベッドに寝そべった私にイズナがまたがり、背を屈めて股間の下にある私のチンポを掴む。

入り口を探るように性器を擦りつけ、亀頭が小陰唇に嫩られる感触に腰を震わせながら待つと、イズナが膣口で亀頭を捉えた。

「んんっ……♥」

片目を瞑って挿入の快楽に耐えながら、一気に腰を落としてチンポを啜え込む。

「はあ……♥ 主殿のチンポ、イズナの子宮を持ち上げちゃってます……♥」

下腹部に手を当てて熱いため息をつくイズナは、少女の姿をしながらも滴るほどに濃密な色気をまとっていた。

「では、イズナのご奉仕……たっぷり堪能してくださいね、主殿♥」足を踏ん張ったまま、イズナが体重を前に傾けていく。そのまま、

腋を締めて指を構え、私の両乳首をカリカリと引っ掛けるようにじり始める。

「くうっ……」

「ふふ、『スパイダー騎乗位』って言うんですって♥ ブラックマーケットで買った本に書かれてました♥」

小テストの成績は伸びないが、イズナなりに私のセフレとしてお勉強してくれていたらしい。

「こんなのはどうですか？ れろお……♥」

ベッドに手をつけて身を乗り出し、舌を伸ばして乳首を舐めてくるイズナ。

それと同時に腰も上下させ、たん、たん、と音を鳴らしてピストンを開始する。

「ろうれふか……？ あうりろおのひんほ、ひふひふしひやつへふあふふお♥」

れるれると私の乳首をねぶり、腰を打ち付けてくるイズナの顔は、とても楽しそうだ。

「ああ、とつても気持ちいいよ、イズナ。勉強熱心で偉いね」

ワシワシと頭を撫でると、くすぐったそうに目を細めながらイズナもまた自身の乳首を硬くシコらせている。

無邪気なままでセックス大好きになってくれたイズナに感謝の気持ちを持たせたいと、全自動で射精まで導いてくれるのに任せて力を抜いた。

ぎっ、ぎっ、ぎっ、とベッドのスプリングが軋む音と、イズナの興奮した荒い息遣いだけが室内に響いては消えていく。

腹のあたりにイズナの胸がたぶたと当たる心地よさ、勃起乳首が掠めていくくすぐったさを満喫する。

「ちゅうっ♥　ちゅぱっ♥」

ねぶるだけでは飽き足らず、イズナは私の乳首に熱烈なキスをして吸い立て始めた。

私はずっとワシワシと撫でているイズナの髪は上下の運動で汗に湿っており、ピストン運動を続けて興奮が高まり続けるイズナの視線はどんどん熱っぽくなっている。

一言も言葉を交わす必要もなく、お互いの絶頂が近いことを解りあう。

イズナは唾液でベトベトになった私の胸から顔を上げて、唇をんと突き出した。

唇が重なり、私からもイズナの腰を引き寄せるように抱きしめる。

パン！　パン！　パン！　と射精寸前の獣欲を叩きつけるように激しく打ち付け、私とイズナの下腹部が肉の打ち合わさる盛大な音を立てた。

「んんーっ♥♥」

イズナの絶頂に合わせ、私も射精する。上に乗られている分、イズナの身体が絶頂に震えるのがはつきり伝わってきた。

くったりと脱力して私にのしかかってくるイズナを抱きしめる。

イズナにちゅうちゅうと唇を強く吸われながら、汗だくの身体を密着させて2人でぼーっと余韻に浸った。

「ふう……とても良かったよ、イズナ」

激しく絶頂したイズナは目元にキラキラと輝く涙を浮かべながら

うっとり微笑む。

「主殿の腰使いも、とっても素敵でした……♡」

見つめ合いながらも、イズナは腰を上げてチンポを抜くと、私のコンドームを始末してくれる。

「さ、次は後ろからしようか」

「はいっ♡」

その日は夜も更けるまで、たっぷりとイズナの身体を堪能するのだった。

そんなことのアッタ翌日。

「えっと、いらっしやいませ、で合ってるのか……?」

バニーガール姿のカリンが、私を部屋に招待してくれた。

私室で2人っきりのバニーというのめかなりの特別感を感じる。

胸も大きく、スラリと足の長いカリンにはやはり抜群に似合う姿だった。

「先生があんなに反応してくれた事って、今までなかったし。日頃のお礼っていうか……」

そう言ってくれるカリンに、遠慮なく近づいて抱きついた。

「うわあっ!? だ、だから先生反応しすぎだって……! そんなにこの姿、好き?」

室内なのでハイヒールは流石に履いていないカリンは、ビルで抱きついた時より頭の位置が低い。

抱きついても抵抗しないのを良いことに、身体を密着させる。

「すごく良い。カリン……」

そして、唇を奪った。カリンが金の目を見開いて、私に抵抗しようとする。

それをベッドに押し倒すことで制しつつ、硬く閉じた唇に舌をねじ込む。歯に阻まれ、ツルツルと堅い表面と歯茎の境目に舌を這わせた。

唇をもにゆもにゆ動かして逃れようとするカリンの形の良い眉が顰められ、モゾモゾと身体をよじる。

動転していたカリンがようやく私の肩を掴み、腕力で引き剥がす。怒りを感じる握力の強さに顔をしかめつつも、顔を真赤にしたカリンを見下ろした。

「うう……先生のバカ……私達……まだそんな関係じゃないのに……」

カリンの顔が悲しみにくしやりと歪む。お嫁さんになるという夢を持つ彼女は、すっかりとした貞操観念を持っているのだろう。

「ごめんね、カリン。カリンが私のためにこんな格好をしてくれたから、我慢できなくなってしまうた」

そう言ってまた顔を寄せようとする。

「だ、だから、だめ……！　　そういうのは、まだ早いから……！」

「私とキスするのは、嫌かな」

悲しそうな表情でそう言うと、カリンに動揺が走る。

「うう、そ、そうじゃなくて……だから……もつと段階を踏みたくて

……もう！　　先生は意地悪だ！　　い、嫌なわけない……だろう？」

それだけ聞いて、また唇を奪った。

「んんむう♥」

カリンは白手袋をはめた手で私の胸元の服をぎゅっと掴んだが、今度は突き飛ばさなかった。

緊張で堅い唇を割り入って、カリンの歯をノックする。しつこく続ける、おずおずと口が開いて私を侵入させてしまった。

「んっ……♥」

バニー姿で自室のベッドに押し倒されてセックス準備のためのキスがファーストキスになるとは思っていなかったカリンが、目をギョツとつぶって涙をこぼす。

悲しいだけの記憶にしないよう、私も気合を入れてカリンの胸を揉んだ。

「んーっ♥」

またも目を見開いて、カリンがもの問いたげに私を見つめる。

触れ合う程度の近さで唇を離すと、カリンは掠れたような小声で私に哀願した。



「ああ……お願い、先生……こんなこと、やめよう？　先生が望むなら、私、卒業したら先生のお嫁さんになるから、ね？」

「いやだ。今したい。絶対にしたい」

バニーの胸をペロンと剥がし、カリンの胸を露出させる。褐色の肌をしたカリンの乳首は、浮かび上がるように白く見えた。

「きゃあっ！」

驚きで固まっているうちに、両胸を寄せてカリンの2つの乳首を素早く口を含む。

ちゅば、ちゅば、と激しく吸い立てると、カリンはビクビクと身体を震わせて悶えた。

「だめっ、だめえ　♥　こんな、こんなこと、嫁入り前にしちやいけないのにつ　♥」

哀れっぽい声がまた色つぽく、気持ちよさからか私の肩を掴むカリンの手にも力が籠もっていない。

私はカリンの胸を両脇から寄せていた手を滑らせ、横乳を支えながら腋までを往復するようにさすり始めた。

「んっ、ふう……　♥　先生、な、なに、それ……そこ、なんかゾクゾクつて……　♥」

腋と胸の境界あたりにはスペンス乳腺という性感帯があるらしい。カリンの胸を開発するべく、今のうちからこつそり愛撫しようと思っていたのだが。

「こっ、気持ちいいの？」

乳房と腋の境に指を這わせると、カリンが堪えきれないように身を振る。

「ああ……　♥」

しかし、その顔は先程までとは打って変わって緩んだもので、明らかに恍惚としていた。

どうやら、カリンは胸で感じる才能が備わっていたらしい。ニッコリした私は、そのまま責め続ける。

「だめ……　♥　ゆるして、せんせい……　♥　こんなこと続けてたら、私、変になるからあ……　♥」

鼻にかかった甘い声が私の耳朶に響く。もう肩を掴む手も離れ、カリンは羞恥からか自分の顔を手で覆ってしまった。

それは腋がから空きになるということでもある。

ぷつくりと勃起した乳首から口を離し、周りの褐色肌との対比によつて白く見えるそれが勃起しているのを眺め、舌先で転がした。

同時に、さつき反応が良かった方法で横乳と腋の境界線、スペンス乳腺を手探りで愛撫する。

「胸が……じんじん、して……♥ 身体がふわふわ浮いちやいそうになる……♥」

どこまで気持ちよく出来るのか純粋な探究心を発揮し、カリンの気持ちいいところを繰り返し繰り返し愛撫し続けた。

「あ……ああ、あー……♥」

すこし低い、絞り出すような長い声と共に、カリンの体が痙攣する。初体験を済ませる前に、胸全体で絶頂したようだ。

絶頂でぼーっとしているカリンをよそに、私はカリンの股間に潜り込んでバニーの股間をずらした。

下着は勿論付けておらず、カリンの生まれたままの股間がさらされる。綺麗に整えられた陰毛がお嫁さん志望の影の努力を伺わせた。

「やあ……♥ そんなところ、見られたらお嫁にいけない♥」

絶頂の余韻から立ち直っていないカリンがふわふわした声音で私を制止しようとするが、当然引き続き股間の観察を続ける。

ぴつたりと閉じた陰唇の中央に、閉じたカーテンを思わせる肉ヒダの盛り上がりがある。

力の入らない脚を開かせて下の方もよく見えるようにすると、薄ピンクの肛門が褐色肌によつて白く強調されたように目に飛び込んでくる。

「カリンのお尻の穴、すごく綺麗だね」

「いやああ……先生のバカあ……そんな所、見るな、あああつ♥」

あまりの羞恥に涙声になったカリンに最後まで言わせず、肛門に舌を伸ばす。

「ちよつ、な、何してるの先生！ そんな所舐めたら汚いから、んひつ

♥

ヒナの肛門も舐め尽くした私の舌使いに、カリンの肛門がきゅつとすぼまった。

「だ、だめっ、だめっ、だめえええ！」

だがそれでもなお、カリンは腕で這って私から逃れた。

「大丈夫だよ、カリンの身体に汚いところなんかないよ」

「私が気にする！」

カリンは股を閉じるのも忘れてマンコを丸見えにしたままで私を睨んだ。

「うーん、でもカリンは処女喪失するのは嫌かと思って。お尻ならその心配はないよ」

「うう……せめて初エッチはまともにしたかった……お尻の穴はやめて……」

ぐすつ、と泣きが入ってしまったので、ありがたく処女を頂くことにした。

這ってカリンに近づこうとしたら、

「口！ 洗ってきて！ 私ノウ……の臭いのする口でキスなんかしたら、いくら先生でも絶交だから！」

しようがないので、カリンに洗面所の場所を教えてもらって液体ハミガキなども借りて口をゆすぐ。

カリンの腸液とかの臭いが落ちたことを十分確認してから戻ると、ベッドの上のカリンは全裸になっていた。

「カリン、ついに乗り気になってくれたんだね」

「ち、違う。これはただ、バニースーツの股間の部分が伸びるのが嫌だから……」

女の子座りで私に犯されるのを待つばかりのポニーテールのカリンを見てチンポのイライラは頂点に達し、私も服を脱いだ。

「うわっ……♥」

カリンは赤い顔を手で覆うが、指の間からバツチリと私の身体を見ている。

私はすぐさまベッドに上がり、カリンを押し倒して抱きついた。

「あ……」

身体を密着させたままそれ以上は何もしない私にカリンはしばらく呆けたものの、力を抜いてカリンからもおさおさすると私を抱きしめてくれる。

鍛えてはいても少女らしく柔らかかったイズナと比べ、カリンはしなやかで力強いという印象が強い。

ただ尻や胸が強烈に女を主張する肉感を宿しており、その鮮烈な対比がチンポのイライラを煽る。

それでも、頬をくつつけあつて10分以上抱き合いゆつくりと時間を過ごす。

カリンの身体からは怯えも緊張も抜け、背中に当てられた手は心地よさげにゆつくりと上下して私の背をさすっていた。

そろそろ頃合いかと、改めてカリんに優しく口づける。

「ん……♡」

ちゅ、ちゅ、と控えめな音を立てて唇を吸いあい、そろそろと舌を侵入させる。カリンはそつと目を閉じて、私を受け入れた。

ぬるぬると舌と舌を絡めあいながら、先程も好評だった胸の性感帯をさする。

「ふう、ん……ううん……♡」

ゆつくりゆつくりと、カリンの理性に麻酔をかけるように快楽を少しずつ満たしていく。

ぷつくりと勃起した乳首を、慎重に指でこねる。眠り姫のように目を閉じたカリンを起こさないよう甘い面だけを見せ続け、身体を説得する。

慎重に、手を下腹部に滑らせ……陰毛の茂る辺りをくすぐるように指で撫でた。

ふう、ふう、と興奮で鼻息の荒くなってきたカリンの様子をキスしつつ間近で伺いながら、ちよん、とクリトリスに触れる。

「んっ♡」

鋭い呼気と共に、カリンの喉から甘い声が漏れた。目蓋はまだ、開

かない。

柔らかい刺激になるように手のひら全体でマンコを覆い、ムニムニと柔らかい外陰唇を揉みほぐすようにマッサージする。

「んっ、んっ♥」

ぴく、ぴく、と痙攣する回数が増え、背中に回されたカリンの手に力が籠もった。

辛抱強くその動きを繰り返すと、手のひらがぬるりとぬめっているのを感じる。

それを合図に、指を一本だけ割れ目の中、小陰唇の内側にまで滑り込ませた。

「ん、ふうーっ、ふううーっ♥」

ぎゅっ、とカリンの手が強く私の背を握る。

まだ勢いに任せる段階ではない。指一本で、膣口周りを撫でるように愛撫する。

ぬち、ぬち、と愛液の粘つきが恥ずかしい音を奏で、私の勃起を煽った。

男の性欲がにじみ出てカリンの汚れない褐色の太ももに滴り落ち、穢していく。

繰り返すうち愛液がトロトロと膣口から溢れでて、くちゅ、くちゅ、とかき混ぜる音は更に大きくなり、本能のなせる技かカリンの脚は私が命じるまでもなく肩幅以上に開いていく。

充血したカリンの陰唇は花開くように淫らに内部を露わにし、むわりと性臭を漂わせ始める。

私はついに指を膣に挿入した。

「んっ♥ん、んんっ♥」

つぷつぷと、処女のキツイ穴の中をこじ開けるように侵入する。ヒダの多い感触は突っ込んだらさぞ気持ちいいだろうと思わせたが、カリンに拒絶感を抱かせないようにゆったりと膣内部を撫で回した。

「ふーっ、ふーっ……♥」

本気で感じ始めた証拠か、カリンの鼻息が荒くなる。指をより深くまで挿入し、処女膜にも触れた。膜より手前でカリンの気持ちいい場

所を探り当て、いよいよ2本目の指を潜り込ませる。

これまでとは違う気配に、カリンの両手が私の背中に爪を立てる。指2本を使って、カリンの感じるお腹側の一点……Gスポットを刺激しながら手ごと指を前後させる。

力を入れて、しつかりとGスポットを刺激する。ぐちゅ、ぐちゅと粘質な音が響き愛液が滴ってベッドにシミを作った。

「んんんっ♡」

股間から伝わる快樂の昂りが、カリンに目を見開かされる。

酸欠にでもなったかのようにカリンは唇を離し、喉元を晒して荒く呼吸した。

「はーっ、はーっ♡ せんせ、それ、だめ、なんか、おまた、熱くなつてえ♡」

「大丈夫、カリンは力を抜いて、気持ちいいのに身を任せてくれればいよいよ」

ぐじゅ、ぐじゅぐじゅぐじゅぐじゅ！

残像が見えそうなくらい素早く、小刻みに手を前後させる。

「だめ、だめだめ♡ である♡ なんか、でちゃうからあ♡ とめてっ♡ 指止めてえ♡」

切羽詰まったような声でカリンが懇願する。勿論手を止めることはなく、更に激しくした。

「んぎゅっ♡ う、いいいいっ♡」

身を振って快樂から逃れようとするカリンに余すこと無くGスポットを叩き込み、

ぷしゅあつ!!

と潮を吹かせた。

「はっ、が、あああああ……♡」

のけぞって喉元を晒し、本気絶頂の時の低めの声を上げてカリンが悶絶する。

その間もぷしゅ、ぷしゅ、と断続的に潮を吹き、私の手や肘にかけての腕をびちよびちよに濡らす。

勿論ベッドにはおねしよをしたような大きなシミが広がっていた。

そうして潮吹きを終えた後には、だらしなく脚を開いてピクピクと内股を痙攣させる、犯される準備が万端に整ったカリンが出来上がった。いた。

薄めの塩味がする手をペロペロ舐めながら、カリンのしなやかな太ももを掴んで開かせる。

「あ、う、うう……♡」

M字に開いた股間に念願のチンポを突き立てて、まだ絶頂から戻れないカリンに黙って膣口をこじ開けた。

「ああああっ♡」

ぬるんっ！ と処女とは思えないスムーズさで侵入し、処女膜にぶつかって一時停止する。

「カリン、ほら、分かる？ カリンの処女膜に触れてるよ」

呆然としていたカリンも、ようやく自分が既に挿入を許してしまっている事を理解した。

「ん……わかる……なんだか、お腹の中、引っ張られてるみたい……」  
不安げに揺れる金の瞳が、私を見つめている。

「カリン。『昼は淑女のように、夜は娼婦のように』って知ってる？」

「えっ？ ううん、聞いたこと無いけど……」

「昔から男の理想の女性像とされていてね。ようするに男はエッチな事を積極的に楽しむ女性が好きって事」

「なる、ほど……？ 確かに、少なくとも先生にとっては理想だって分かるよ。だからこんな事になってるんだし」

「そうだよ。だからカリン。これから、ちよつと痛いかもしれないけど……花嫁修業だと思つて楽しんでほしいな」

「は、はなよめ……うん、分かった。私……先生専属の、娼婦になるね……♡」

こうして……将来はお嫁さんになりたいという可愛らしい夢を持った女の子の処女をまんまと頂き、私専属の娼婦になってもらうことが出来た。

その達成感を噛み締めるように、腰を押し込む。

「あ……今、ぷつつ、って切れた感じがした……これで、先生に処女を

捧げた、つてことになるの?」

「うん、そうだよ。カリンの処女をもらえてとっても光栄だよ」

「わ、私こそ……先生に処女を貰ってもらえて、とっても嬉しい」

カリンの微笑みはとても柔らかかで、言葉に偽りがない事が伝わってきた。はちきれそうな程に勃起したチンポをそんなカリンの最奥までねじ込んでいく。

「ん……♥」

カリンは自分の下腹部をゆっくり撫で、呆然とつぶやいた。

「感覚だと、もつとぽつこり膨らんでそうなくらいおっきいの……意外とそんなふうにはなっていないんだな」

ヒクヒクと膣をわななかせて早速好奇心を發揮するカリンに、膣内のチンポがグンと跳ねる。

「あつ♥ なに、今の……体の中、持ち上げられるみたいな感じがした……♥」

「カリンが可愛すぎるから、つい反応しちゃったんだよ。もう動いても平気そう?」

「ああ……処女って痛いものなんだっけ。氣遣ってくれていたんだな……先生、ありがとう。私はどうやら、あまり痛くないみたいだ。先生の好きなように動いて大丈夫」

そうやって良妻の片鱗を見せつつカリンが微笑む。遠慮なく腰を前後させ始めた。

ぬつ、こ、ぬつ、こ、と密着感が強く粘膜が張り付いてくるようなカリンの膣内を往復する。

さつき潮を吹かせなかつたら普通にピストンをするのも難しい位の強い締付けに、射精感を堪えながらペースを保つ。

「カリンのおまんこ、すごくキツくて気持ちいいよ」

専属娼婦に使い心地の感想を述べると、カリンは眉を寄せて赤面した。

「そ、そんな事言われてもどう返していいか分からない……」

「うーん、カリンはどう? 私のチンポどういう風に感じてる?」

そう問い返すと静かな音を立てながら自分の股間に出たり入った



りする私のチンポをじつと見つめる。

いつの間にか微かに荒くなった吐息が私の耳まで届いた。

カリンはそつと目を閉じてマンコの感覚に集中し、確かめるように膣をぎゅ、ぎゅ、と締めてくる。

「……………うん。おつきくて、暖かくて……………結構、気持ちいい……………かも」

至極冷静に好評をくれるカリンに、腰の力と速度を速めた。

「んっ♥んっ♥ あ、それ、激しくされると、ぞくぞく、強くなる……………♥」

膣ヒダの抵抗を振り切って腰を前後させると愛液を泡立てる勢いも増し、水音と性臭もより激しくなった。

一突きごとに大きな胸をたぶんだぶんと揺らすカリンは、枕を掴んでマンコの激しい快楽に耐える姿勢をとる。

「ふう……………♥ふう……………♥」

カリンは荒い息をつき、薄目になって股間の快楽に集中しはじめた。

私の言ったことを守ってくれているのか、リラックスしてセックスを楽しんでいる。

生徒の成長を見守るために余計なこととは言わず一定の速度を保つてカリンを犯し続けた。

「ふう……………♥ん……………♥んっ、んっ……………♥」

30分経つか経たないかという頃、カリンは自分からクイクイと腰を揺らめかし、切なそうな声を上げ始めた。

その変化には気づいていたが、そんなカリンも可愛いので腰の速度は変えない。

「ん……………♥ あ、あの……………先生？」

「どうしたの、カリン？」

カリンは、しまったという顔をしていた。この後自分が言いかけた内容に気づいたのだろう。

「え、ええと……………あの……………その……………」

モジモジと恥じらいながら大股を開いてマンコをズボズボと犯されているカリンを眺める。

「も、もうすこし……は、激しくしてもらっても、良い……？ さつきから、ちよつと……もどかしくて……♡」

いくには足りない刺激を受け続けて、処女喪失初セックス中のカリンが激しいピストンをおねだりする。

チンポのイライラが限界を突破し、私も我慢を解き放ってカリンの脚を抱き込んだ屈脚位に移行する。

目の前でぷらぷらと揺れるカリンの踵やふくらはぎにキスをしてから、思い切りピストンし始めた。

「ああつ♡ これつ、凄いつ♡ いままでとっ♡ 角度、違つてえ♡」  
ぐぶ、じゅぶ、と愛液を掻き出す下品な音を立てて、クライマックスに向けてカリンの膣を貪るように犯す。

力を込めたピストンが奥深くまで到達するたび、背を曲げることで浮かんだカリンの大きなお尻と私の下腹部がパンパンと打ち鳴らされる。

ピストンの角度を調節し、カリンの好きなお腹側の膣壁をこそぐように刺激する。

「ああーっ♡ これ、さつきの、またきちやう♡ すごいつ♡ すごいのお♡」

指導するまでもなく娼婦のように甘い声を上げ、胸を張って大きな乳房をぶるんぶるんと揺らしてくれる。

初体験で快感を堪える事もできないカリンは素直に絶頂に向かって上り詰めていき、耐えきれなくなった所で自然と絶頂した。

「ああーっ♡♡♡」

一際大きな声を上げて、両脚をガクガクと痙攣させる。

握りつぶすほどの強い締め付けを感じながら、カリンのお嫁さん志望の子宮に大量の精液を流し込んだ。

「はあつ、はあつ、はあつ……♡ で、でちやつてる……♡ 先生の精液で、子供できちやう……♡」

絶頂で緩んだ心と事態の深刻さを理解する理性がせめぎあい、結局なんの対策も打てずに精液を注がれるままになるカリン。

「大丈夫、アフターピルは持つてきているから。今飲んでおこうか。は

いつ」

絶頂で呆然とするカリンに、避妊薬を飲み込ませる。それを良いことに、また生膣に締め付けられる刺激で勃起を取り戻していく。

「あっ……また、おつきく……♥ 先生、まだ、するの……？」

真つ赤な顔と潤んだ瞳でか細い声で囁くカリンは、自然と娼婦の媚びを身に着けていた。

開けば力なく従う脚をどけ、ぷっくりと勃起した乳首を上から押しつぶすように揉む。

「さあ、カリン。一緒にいっぱい気持ちよくなろうね」

「うん。先生の娼婦になるために必要なこと、私に全部……教えて欲しい……♥」

精液が漏れ出る膣と押しつぶされた乳房に構わず微笑んだカリンに、尿道に残った精液を漏らしつつ……

シミの付いたカリンのベッドシートの上で、私達は延々と腰を振り続けるのだった。

うさぎは寂しくても死なないけど年中発情期は本当  
(アスナ)

「先生、こんにちは。今日も手伝いに来たよ」

今日も今日とて仕事に追われる執務室に、ヒビキがやってきた。もう慣れたもので、挨拶しながら私の机の上を覗き込んで必要な仕事を把握し始めている。

「はあ……先生、あのね、ちょっと聞いてくれる？」

しかし普段とは違うすこし気落ちした感じで、言いづらそうにしながらヒビキが私を上目遣いに見つめた。

「どうしたの、ヒビキ？」

「あのね……私……生理、来ちゃった。先生とのあかちゃん、出来てなかったの」

休憩室で一晩中種付け交尾をした時のことを話題にされて、チンポがイライラしてしまう。

「そっか……でも、それはそれでマイスターに専念できるし、悪いことじゃないよ」

「うん。そうなんだけど。先生との初えっちであかちゃん出来る運命じゃなかったんだな、って。……おかしいよね、運命なんて信じてなかったのに」

そう言っつて、ヒビキはすらつとした下腹部をさすった。

15歳にして一晩のセックスで母性を漂わせるヒビキにチンポのイライラは高まりっぱなしだが、今は仕事を片付けなければならぬ。

「ヒビキが望み続けるなら、そのうち機会はあるさ」

「それって……あかちゃん出来るまで先生がえっちしてくれるってこと？」

「学生の間は避妊しようね」

「……！ うんっ！」

そういう事になった。

その日はヒビキの鼻歌を聞きながら、必死に仕事をこなす。ヒビキが帰ってからも仕事は続き……結局徹夜になってしまった。

深夜のキヴオトスは静まり返っていた。

銃社会にも程があるキヴオトスだが、基本的に学生が主役ということもあり深夜は意外と安全だ。

24時間営業の店が多い割には利用者は少ないのである。

私が向かっている目的地も、すこしクリーム色がかつた明かりが入り口から漏れ出ていた。

「……アスナ？」

入ってすぐ見えた光景に、息を呑んだ。

と言っても、コインランドリーの洗濯機の前椅子にバニースーツのアスナが座っていただけなのだが。

雪のように白い肩と背中に照明が当たり、眩しいくらいに目を奪う。

真横からのアングルなので大きくも形の良い胸のラインがとても良く分かった。

深夜のなんの変哲もないコインランドリーであっても、バニースーツ姿のアスナが座っているだけで美術館のような雰囲気があった。床にまで広がった長い髪が、彼女のテリトリーであるかのようだ。

「あれ、どうしたの？ご主人様？」

自分のそんな美貌には特に頓着しない気軽さで、アスナが私に気づいて話しかけてくる。

「アスナが心配になって、会いに来てみたんだ」

そう言うと、アスナは目を丸くして驚いた後にぱつと満面の笑みを浮かべた。

私がおここに来たのはモトトークでアスナから連絡……というか雑談を受信したからだだが、まあ勿論危険なことかはなかった。

「嬉しー！ ちょうど一人で、退屈してたところだったの!! ありがとう、ご主人様!!」

深夜残業を終えてきた身に、アスナの笑顔の眩しさが染みる。

「じゃあ、何して遊ぼつか！」

いづどこであつても、即座に遊びに繋げるアスナ節を聞いて、反射的に言葉が出た。

「セックスしよう」

眠すぎて口が滑った。アスナは私にあつた時以上に目を丸くして、心なしか頬を染めている。

「うわー、大胆！ 私、深夜のコインランドリーで初めてしちゃうんだ！ 面白そー！」

そう言うと、女の子座りしたままに椅子を滑り寄ってくる。

いつもの無邪気な笑顔が、頬を赤らめただけでチンポのイライラを煽るものになった。

「……………いいの？ アスナ」

「ん？ もっちりろん！ だってアスナ、ご主人様のこと好きだもん！」  
気づけば、アスナの柔らかかそうな巨乳が手の届く距離まで近づいていた。

深夜のコインランドリー、確率は低いがアスナのようにいつ誰か来てもおかしくない場所だ。

私は、チンポのイライラとアスナへの愛しさが溢れていつの間にか抱きしめていた。

夏も終わり、深夜にはそれなりに冷え込む気温にアスナの身体も冷えていた。

「こんな格好じゃ冷えるでしょ？」

「私はこの位大丈夫だけど……………ご主人様に抱きしめられると暖かくて気持ちいいね」

アスナはベツタリと遠慮せず抱きついてくる。大きな胸が押しつぶされておもちのようになわんだ。

温めるように、滑らかなアスナの背中に手を当ててなで上げていく。

長い髪が手の甲に当たり、サラサラと心地よかった。

「ん……………はあ……………やっぱり、ご主人様に触られるの、すっごく……………♥」

たったこれだけで、アスナは甘い声を上げる。どうやら相変わらず、私に触られると敏感になってしまおうようだ。

最高にチンポがイライラする。

「アスナ……胸、見せてくれる?」

腰を抱いたまま身体を離して、バニースーツに包まれた胸を凝視する。

「ご主人様ってば本当に大胆だね……いいよ。アスナのおっぱい、見て……♥」

アスナは白手袋に包まれた指を引つ掛けるようにして、胸の下半球を支えるバニースーツを自らめくっていく。

大きな胸に相応しい大きめの乳輪が、バニースーツにギリギリで隠されていた事を知った。

寒さによつてか、乳首は縮こまるように硬くなっている。

いかにアスナと言ってもこれは恥ずかしさが勝るのか、少し手が震えていた。

「やー、はは、流石の私も恥ずかしいかも」

照れたように、それでも明るくアスナが笑った。

「とても綺麗な胸だよ、アスナ」

早速、両手で包み込むように揉む。

「ふあんっ♥」

すぐにアスナが高く甘い声を出した。

「ご、ご主人様っ。あんまり激しくすると、声、抑えられなっ、ううんっ♥」

特に何も激しくなく、ゆつたりと手を動かしているつもりなのだが……アスナはひとりで肩をビクンと跳ねさせて、恥ずかしい声を上げる口を手で抑えている。

「アスナは本当に敏感だよね」

「ちがっ♥ ご主人様に触られた時だけだもんっ♥」

まだろくに愛撫もしていないのに、アスナの目尻は下がり、興奮で首筋まで紅潮し始めていた。

きゅっ、と乳首をつねってみる。

「ひっ、っぐ……♡♡」

いつも笑顔のアスナの顔に、深いシワが刻まれる。

絶頂を噛みしめるように眉を寄せ、歯を食いしばっているアスナの表情など、私以外の誰も見たことが無いだろう。

「はーっ♡ はーっ♡」

アスナはちよつと乳首をつねっただけで息も絶え絶えに身体を震わせて、私に倒れ込んでくる。

抱きしめてそれを受け止めながら、しつとりと汗をかいて冷えた肩と腕を撫でた。

「そう言えばアスナ、洗濯機はもう良いの？」

「あ……そう言えばまだ回してなかった……」

ぽーつと絶頂の余韻に浸りながら、アスナが夢見心地に答えた。

そのまま立とうとするが膝が笑っている。裸の背中をポンポンと叩くと、私が洗濯かごの中のを洗濯機に入れて稼働させた。

「うう……ご主人様にそんな事してもらうなんて……」

「アスナの今のお仕事は別に頼んであるでしょ？」

私に働かせた事を気に病むアスナの隣に座り、腰を抱き寄せる。

「あっ……♡ もう、ご主人様アスナとセックスした過ぎでしょ……♡」

私は太ももを叩き、アスナを促した。勘のいいアスナはそれだけで理解してくれて、照れ笑いを浮かべながら深く座り直した私の脚の間にすっぽりとお尻を収めるように座る。

滑らかなアスナの背中が視界一面に広がった。

背後からアスナを抱きしめる。

「ん……♡ こんな所見られたら、もう言い訳出来ないね、ご主人様？」

バニーの耳とハイロウを私の目の前で揺らして、アスナが振り返る。

少し背を反らした姿勢になったせいで、胸が丸見えの体の前面がちらりと見えた。

「洗濯が終わるまで位は大丈夫だよ、きつと」



付け襟に包まれたアスナの首筋にキスしながら、優しく胸を揉む。この体勢なので、ガチガチに勃起したチンポがアスナのバニースーツに包まれた尻の谷間に思い切り押し当てられている。

それを意識してか、アスナは私を背もたれにするように体重を預け、時折モゾモゾと尻を動かしてくれた。

「はあ……♥ ねえ、ご主人様……もつとすごいこと、しないの？」  
アスナはモジモジと脚をこすり合わせ、イタズラを持ちかけるように楽しげに声を上げる。

「せっかく洗濯に来たのに、バニースーツを洗濯しないとイケなくなるからね。この後、アスナの家に行つていいかな？」

そう言うと、アスナは正面に向き直る。

今もアスナの乳を揉む私の腕をきゅつと握り、うつむいてポツリと呟いた。

「うん……いいよ」

サラリと流れた髪の間から見える耳が、赤く染まっていた。

ごうん、ごうんと低い音を立てて回る洗濯機の前で、アスナを後から抱いて胸をもみながら待つ。

途中、アスナは何度か脚をギュツと閉じて身体を硬直させた。

「イツた？」

「うん……イツた♥」

そのたびに私が訪ね、アスナは振り向いて正直に答えてくれる。

その表情から照れが段々と抜けていき、力の抜けた自然な笑顔になつていく。

目を細めて、頬を真っ赤にして、にっこりと歯を見せた……普段とはほんの少し違うこの笑顔こそ、アスナのセックス用の笑顔だった。

「綺麗だ、アスナ」

「な、なに、ご主人様？ 急にそんな事言われたら照れるよ」

「アスナの笑顔がいつにもまして色っぽくて、凄く綺麗だと思って」

「もうっ、だから……えへっ！ そんなに褒めてもらおうと嬉しくなっちゃう！」

胸を揉まれながら屈託なく笑うアスナの尻にチンポをグリグリ押し当てていると、ようやく洗濯機が乾燥まで済ませたようだ。

震える膝に手をつけて、ふらつきながら立ち上がったアスナを支えつつ、洗濯物をかごにしまっていく。

2人で連れ立ってコインランドリーから出ると、東の空が白み始めている。明日が休日ではよかった。

私にしなだれるように寄り添って歩くアスナは、顔も肩も胸元も上気し、まるで銭湯の帰り道のようなようだ。

誰もいない町中を、アスナの素肌をベタベタと撫で回しながら歩き、マンションの一室にたどり着く。

「えへへっ、いらっしやい、ご主人様！ まさか初めてご主人様がウチに来てくれるのがエッチの為だなんてねー！」

これからセックスをするというのに、処女のアスナはいつものように楽しげだ。

「それでーえっと、どう、すれば……良いのかな？」

勢いに任せて言ってみたはいいが特に展望がなかったようで、私に振り返ってえへへと照れ笑いを浮かべた。

無言で抱きしめ、ベッドに押し倒す。ふわっとアスナの長い髪がベッドに広がった。

太ももを掴んで股を開かせると、私の手の動きに合わせてアスナが動いてくれる。

バニースーツの股間に顔を埋め、横にずらす。素肌に直にパンストを着用し、愛液がその隙間にベツタリと広がって網目を際立たせていた。

「やあん……♥ そんなとこ汚いよ、ご主人様……」

むあつとむせ返るような鼻につく濃厚な雌臭を漂わせ、アスナが軽く私の顔を股間から遠ざけようとする。構わずパンストの上からしゃぶりついた。

「ああっ♥ そっ、すっご、いいいいっ♥」

パンスト越しのため巧くクリトリスを吸えず、ぢゅうぢゅうと派手

に音を鳴らす。

相変わらず敏感なアスナはこれだけで軽イキしてしまったようで、コインランドリーの時のように脚を閉じようとして私の頭を挟んだ。アスナの脚と股間が作る三角形に捉われるような形で挟み込まれ、股間に鼻面が強く押し付けられる。

「ひぎゅっ♥」

その衝撃が更に快感になり、顔を挟んでいる太ももが震えるのを感じた。

鼻でしか呼吸が出来ない状況で、構わずクリトリスを吸いたて、パンストのザラザラを利用するように舌でこね回す。

「ひっ、い、あああああああ♥♥」

朝焼けがカーテン越しに差し込むアスナの部屋に、絶頂の叫び声が響き渡った。

脚の力が緩み、くたたりとだらしなく股を開いた姿勢でベッドに落ちていく。

「それじゃ、服を脱ごうか」

このままセックスしたいのは山々だが、アスナの服をダメにしてしまいうわけにはいかない。

「はあ……はあ……べつに、ご主人様がこのままシたいならバニーのお股の部分がダルダルになってもいいよ?」

「それは勿体ないから遠慮しておくよ。アスナ、立てる?」

「ん……ご主人様、起こして欲しいな♥」

私はアスナの背中に手を回し、抱き起こす。

性欲に興奮してキラキラ輝く瞳で、明るい笑顔とともにお礼を言ったアスナは立ち上がってストリップを始めた。

と言っても、アスナらしくもスパツと早く脱ぎ去ってしまったが……待ちきれないとばかりに全裸に付け襟と手袋のアスナが振り返る。

「ほらほら、ご主人様も脱ごっ! アスナが脱がせてあげるね!」

手袋に包まれたアスナの手が、私の身体を這う。滑らかな手付きでボタンを脱がし、ベルトを緩め、ズボンを下ろす。

チンポがボクサーパンツをギンギンに押し上げ先端が我慢汁でヌルついているのを見て、アスナは目を丸くして固まってしまった。

「あう……」

アスナはとても元気な女の子だが、ふとした瞬間に見せる初心さが堪らなくチンポをイライラさせる。

アスナのしている前で勃起を更に大きくすると、動いていく亀頭の位置に合わせて視線が動いた。

「あ、え、えつと……脱がすね……」

顔を正視出来ないと言った感じに、チラチラと上目遣いになるアスナが可愛らしい。

ぐつと下におろそうとして勃起が引つかかって全然下ろせず、ゴムを思い切り引つ張って亀頭を迂回させて下ろしてくれる。

「ぐくつ……」

我慢汁滴る勃起を目の前に突きつけられるような形で、アスナが蛇に睨まれたカエルのように固まってしまう。

ポンポンとバニー耳の頭を叩き、そつとカチューシャを外す。アスナは無言で立ち上がって、私を熱っぽく見つめた。

ぐい、と口元のアスナの愛液を拭い、アスナを正面から抱きしめる。スラリとしたお腹に勃起の我慢汁を塗りつけながら押し付け、アスナの唇を奪った。

「んっ……♡ ふう……♡」

唇を割り開く私の舌を、ノータイムで受け入れて……しばらく舌を絡めただけで学習し、アスナからも私の口内に舌を入れる勢いで伸ばし、ベツトリと濃厚なデーパーキスをした。

むつちりとした尻を掴みながら、ゆつくりベッドに押し倒す。

白い付け襟と手袋が美しく飾るアスナの裸体が、私に犯されるために仰向けに身を横たえている。

カリンよりは自由な感じに茂っているアスナの陰毛をふわふわと撫でさすりながら、ベツトリと愛液に濡れた膣口にチンポを押し付けた。

「ね、ご主人様。生で大丈夫？」

「ん？ 一応アフターピルはあるよ。初めては生で膣内射精したいから」

「んー、そうじゃなくて、さ。ほら……私って、ご主人様も知っての通り運が良いでしょ？」

「そうだね。カジノでSランクになってたし。だったらなおさら大丈夫なんじゃ？」

「1%程度の確率をアスナが引くとは思えなかったが、アスナはニヤニヤと笑みを浮かべている。」

「どつちかな？」

「え？」

「私にとつて、どつちが運が良いのかわかって。デキちゃう方がいいなーって私が思ってたら、ピルを飲んでても妊娠しちゃうかもよ？」なるほど、運がいいというのはアスナにとつて都合のいい方向に事態が動くという事だから、そういう考えもあるか。

「アスナは、どつちが良いと思う？」

「うーん、妊娠したらお仕事出来ないなーって言うのもあるし、こうしてご主人様と裸で寝そべっていると赤ちゃん作るのも楽しそうだなーって思うし。正直、分かんないかな」

なるほど。私は腰を突き出した。

「んっ♥ あっーい……♥ ご主人様、アスナに子供デキちゃってもいいんだ？」

「アスナがそう望んでいるのなら、悪いことにはならないさ。ちゃんと、養育費は出すからね」

そう言うと、アスナはニッコリと笑う。

「んふ、ご主人様やっさしー♥ でも、私もお仕事してお金持ってるからそんなに気張らなくてもいいよ♥」

熱っぽく弾んだ声。アスナがセックスの時に出す媚びた発情声の、第一声だった。

それを許可証がわりに、トロトロに熱く潤んだアスナの膣をかき分けて進む。

「は……ああ……あ……♥」

鼻にかかった小さな喘ぎ声と共に、アスナの手足が私に絡みつく。背中与腰をガツチリとホールドして、アスナからも私を後押ししてくれた。

ぷちっ、と軽い感触と共に、アスナの処女膜を破る。

痛がる素振りもなく、そのまま突き進み……最奥にまで届く。

「どう、アスナ。痛くない？」

「うん……大丈夫♥ はあ……ご主人様が私の中に入っちゃってる

……♥ すっごく熱いね……やけどしちゃいそ……♥」

自分の下腹部を覗き込むように少し身体を起こし、アスナが呆然と呟いた。気を取り直すように顔を上げて、私に訪ねてくる。

「この後って、どうすれば良いの？」

「腰を動かして、お互いに気持ちよくなるだけだよ」

「えつと……こう、かな？ はあんっ♥」

聞いてすぐに腰を動かしてみるアスナだが、亀頭と奥……子宮口が擦れた途端に大きな声を上げて硬直してしまう。

「あ、やっぱ♥ これ、肩や胸を揉まれた時とは比べ物になんない……

♥ 目の前に火花が散ったかと思ったあ♥」

目を細めて、ふにやつと力の抜けた笑みを浮かべるアスナ。

金玉が煮えたぎる程にチンポがイライラした私は、思わずアスナの腰を掴んで一番奥に亀頭を擦りつけてしまった。

「んっひいいいんっ♥ ごっごしゅ、」

たった一突きで叫び声を上げてしまうアスナが愛おしく、今度はズルリと半ばまで引き抜いて勢いをつけて奥を穿つ。

「んおおおおおんっ♥」

新しい一日の始まりを告げるかのように、アスナの叫びが部屋の空気を震わす。

たっぷんと柔らかく揺れる両の胸を鷲掴みにして乱暴に揉み潰しながら、発情したサルのように腰を振り始めた。

「おっっ♥ おっっ♥ おっっ♥ おっっ♥ おっっ♥ おっっ♥ おっっ♥」

叫び声さえ途切れる程に、一突きごとに絶頂する勢いでアスナが乱れ狂う。

手袋をしていなかったら背中から出血していただろう強きで、アスナの手が私の背を掴んだ。

アスナに抱き寄せられたのを良いことに、大きな胸を掴んで寄せ、両乳首を口に含んでしゃぶる。

「ん、いいいいいいいい♥」

すすり泣くような切ない声を上げてアスナが悶える。

絡められたアスナの脚がぎゅ、ぎゅ、としきりに私の腰を圧迫し、それが絶頂報告となって私の興奮を煽った。

トロトロに柔らかい膣肉を絶頂の締め付けが補完し、貪欲に射精をねだるアスナのマンコに。私も我慢できず射精した。

「んっぐ、あーんんんんんんんんんん♥♥♥」

一番奥で大きく脈動するチンポがアスナの子宮を振り回しながら跳ね回る。

何度目かのアスナの絶頂をBGMに、妊娠してもおかしくない本気の交尾のクライマックスを噛みしめるようにお互いに強く抱きしめあつた。

「ふう……♥ はあ……♥」

くったりと力が抜けたアスナのほっぺにキスをして、一度身体を離す。

イズナやアリスに頼んで、処女の生徒との生交尾用にピルを常備するようになった。会計をするソラはいつまでも顔を赤くしてぎこちならしい。

とにかくピルを荷物から取り出し、アスナの口元にもってくる。

「あー……んむっ♥」

ためらいなく、差し出されたものを飲み込むアスナ。

私は股を開いたままのアスナに覆いかぶさり、半勃起のチンポを精液を垂れ流すマンコに挿入した。

「んはあああっ♥」

イッたばかりの敏感な膣を蹂躪され、アスナはまた甘い声を上げる。

勃起を取り戻すのももどかしく、アスナの身体に溺れるように身体を密着させてキスをしながら腰を振り始めた。

「んーっ♡んっ♡んっ♡んっ♡んっ♡んっ♡んっ♡」

むわりとアスナの汗の匂いに包まれながら、必死に腰を振る。

初のセックスで既に数え切れない位絶頂しているアスナは、それでも必死に私に舌を絡めて奉仕してくれる。

「んーっ♡ふーっ♡ふーっ♡ふーっ♡ふーっ♡」

お互いの鼻息と、唾液を啜りあうじゆるじゆるという水音を奏でながら、雀が爽やかな朝を告げるのをそっちのけで必死にセックスした。

子宮口と亀頭がちようどいい位置で擦れ合い、気持ちよくなって深く突き刺したまま腰を小刻みに振る。

「んっ♡んっ♡んっ♡んっ♡んっ♡んっ♡んっ♡んっ♡んっ♡」

私の口の中にアスナの絶叫が吸い込まれていく。手袋越しに爪を立てられた背中に、線の上に痛みが走った。

言葉でも子宮でも子作りを歓迎してくれるアスナに、精液を注ぎ込む。

外から見ても分かるくらいに腹筋をヒクヒク痙攣させて、腹腔をグニグニと変形させて私のチンポに奉仕をしてくれるアスナに、全力で精液を注ぎ込んだ。

「ふぁ……♡ご主人様、すごいよお……♡おかしくなっちゃうくらい気持ちいい……♡」

唾液の太い銀の糸が、重力に負けて伸び、アスナの口元に落ちていく。

アスナは普段より随分高く甘ったるい声を上げてセックスの感想を教えてくれた。

「でも私い、ご主人様にご奉仕しなきゃいけないのに♡」

絶頂が深すぎたのか舌つ足らずになったアスナの頭をそっと撫でた。

「今日はそういうのは良いよ。……そうだ、私が思い切り攻めるから、アスナは気持ちよくなってる所をいっぱい見せて。それがご奉仕」



「うんっ ♥ アスナご奉仕するっ ♥ ご主人様とセックスして気持ちよくなるっ ♥」

媚び媚びの甘い声を上げて、アスナがヒリヒリ痛む背中を擦つてくれる。

その光景が私の勃起を取り戻してくれるのだから、まさしくご奉仕だった。ずぶん、と精液がまだ残ったチンポを最奥にねじ込む。

「はああああんっ ♥ おくっ ♥ 一番奥、コリコリされるとねっ ♥ すっごい ♥ 幸せになっちゃうの ♥」

涙声にも似た、鼻にかかった震える声でアスナが女の子の秘密を教えにくれる。

「じゃあ、一番気持ちいい所を探そうね」

「うんっ ♥ 楽しいっ ♥ 宝探しみたいっ ♥」

子供のように無邪気に、妊娠するかもしれない行為をどんどん学習していくアスナを見ているだけで勃起はみるみる回復し、我慢汁は垂れ流しっぱなしだ。

「ほら、これはどう?」

「ああっ ♥ もうちよつと、上の方、そこっ ♥ そこそこっ ♥

あーっ ♥ いまのいいっ ♥ そこしてっ ♥」

二人三脚のように息を揃えて、アスナのポルチオ性感を開発する。バラ色に染まった頬、生き生きとした笑みを浮かべたアスナが実に楽しげに腰をくねらせる。

「あーっ ♥ すっごいっ ♥ あああーっ ♥」

窓が開いていれば近隣住民が飛び起きるような叫び声を上げるアスナ。

「ぜーっ ♥ ぜーっ ♥」

髪を振り乱してよがり狂い、糸が切れたようにぐったりと動かなくなった。胸元に珠のような汗が浮かび、腰に絡んだ脚も解けて力なくベッドに沈む。

アスナは虚ろな目を私に向け、目を細めて力ない笑みを浮かべる。

「ごめ、んね、ご主人様…… ♥ も、気持ちよすぎて、動けないかも…… ♥

♥ ご主人様は、まだしたいよね? 私の身体、遠慮なく使つていい

から……♡ ほんとにゴメンね？ 最後までちゃんとセックス出来なくて……」

溢れるような奉仕精神に胸を打たれ、アスナの頭を優しく撫でる。「ありがとう、アスナ。でも気にする必要はないよ。アスナとのセックスは、とても気持ちよくて楽しいからね」

「あ……」

頭を撫でられ、目を丸くしたアスナが柔らかく微笑む。

「うん、ありがとう、ご主人様……大好き♡」

アスナは透き通るようなきれいな笑顔を浮かべた。

その腰を掴み、ズンと力強く突く。

「ん、おっ♡」

白目を剥くように目玉が上を見上げ、口をタコのように突き出して犯される雌の顔になってケダモノのような喘ぎ声を上げる。

「綺麗だよ、アスナ。もっとよく見せて」

パン！ パン！ パン！ と叩きつけるようにピストンを重ねた。

アスナの脚が絡んでいた時には出来なかった、本気のピストンだ。

「あっ♡ おっ♡ んぐっ♡」

全身から力が抜け、犯されるがままのアスナに容赦なく腰を振る。

「うっ♡ んぐっ♡ かひゅっ♡ ひゅっ♡ ひゅっ♡」

早すぎるピストンによる、度重なる絶頂にアスナの呼吸が追いつかず声にもならない喘鳴がアスナの喉から絞り出されてくる。

アスナの顔が真っ赤になり、酸欠になりそうなものを見て取った私は、射精のために早めにスパートし……三度、アスナの奥深くに射精した。

「かっ……♡ あ……♡」

びくん、びくんと全身を大きく痙攣させて、言葉も上げられずに絶頂するアスナ。

私も、全てを出し切ったような満足感と疲労感に包まれる。

(そう言えば、徹夜して寝てなかったんだっただ)

そう思い至ると、急激に睡魔が襲ってきた。

暖かなアスナの胸に顔をうずめ、ドクンドクンとまだ早鐘を打って

いる心臓の鼓動を聞きながら睡魔に身を委ねる。

アスナの、精液を絞りだす膣の締りがおやすみを言ってくれているようだった。

## 誠心誠意のご奉仕（アカネ）

じとっ、とした目でアカネが私を睨んでいる。

「どうしたの、アカネ？」

ここはシャーレ併設カフェだ。アカネの他にはノドカにコタマ、アズサにヒフミが思い思いに寛いでいる。

「どうしてこのような意地悪をなさるのですか？」

テーブルを挟んだ対面のソファに座るアカネが、身を乗り出して言った。

「そう言われても……なんのことを言っているのか」

ぷくーつと子供みたいに頬を膨らませて、アカネが席を立ち窓へ歩いて行く。

「もう、結構です。……所詮私はご主人様にとってただのメイドでしか無いのですね」

なにやら拗ねてしまったアカネの後ろまで歩いていき、後から抱きしめた。

「ふやあつ!? い、いえ、誤魔化されませんよ、ご主人様。どうして私に手を出してくださらないのか、ご説明して頂けませんと」

「ああ……そういうことか。ほら、アカネはこの間約束したじゃない? だからC&Cの他の皆を先にやってしまおうと思って」

「むう……なんでそうなるのですか。約束したのですから、私を一番先にしてくれるのも良いではありませんか?」

どうやら、アカネは私がC&Cの他のメンバーをセフレにしてアカネにまだ手を出していない事に憤っているようだ。

「アカネみたいに、事前に約束ができる生徒はほとんど居ないからね。とても貴重なんだよ。だからデザートみたいに最後に取っておきたかったと云うか……アカネに甘えていたね。ごめん」

そう言って、身体を密着させる。

アカネの16歳にして成熟した身体が、ふかっと柔らかい感触で腕の中に収まった。

「あ……い、いえ……こちらこそ、申し訳ありません。私はメイドなの

に、このような子供じみたワガママを……」

きまりが悪そうに私の腕の中で身じろぎするアカネ。それを逃さず、下乳を持ち上げるようにアカネを抱いた腕をズリあげていく。

「いいんだよ、アカネ。今こうして、私の呼び出しに答えてくれて……約束通り、身体を洗ってきてくれたんだよね？」

ゆるくウエーブするアカネの長髪に顔を埋めて匂いを嗅ぐ。甘く、紅茶のような香りがした。

「んっ……は、はい……ご主人様のために、隅々まで洗ってまいりました……」

普段の大胆さが嘘のように、しおらしく俯いているアカネ。

胸の谷間に下から手を突っ込んで、アカネのみぞおちの上辺りに手を当てる。

とく、とく、とく、と心臓が高なっているのが伝わってきた。

アカネはそれを恥ずかしがるように身じろぎするが、決して私の腕から逃れることはない。

「じゃあ、今から私にセックスさせてくれるんだね？」

腰を突き出すと、アカネのむっちりしたお尻の間に私の勃起チンポがグリグリと押し付けられる。

「ぐくっ……その、通りです。私は……アカネは……ご主人様の、性奉仕メイドになります♥」

アカネからも尻を押し付けて、豊かな尻肉で左右に揉むように刺激してくれた。

「嬉しいよ、アカネ」

抱いていた腕を解き、アカネの胸を鷲掴みにする。

「んっ♥ あ、あの、ご主人様？ まさか……この場で、ですか？」

「だめ？」

「うっ……ご主人様がお望みなのでしたら、是非ありませんが……他の方がいらっしゃるのですよ？」

先程から同じ空間で言い争ったり席を立ったりしているの、当然チラチラ見られている。

ヒフミなんかは私が勃起チンポを押し付けているのを理解して、ア

ズサと会話しながらも赤面してしまっている。

「コタマとノド力は「撮影しますか？」と目で問うてきたので、「今はやめておく」と答えておいた。

「アカネは調査済みでしょ？ 今は大丈夫だよ」

「それは……そうなのですからけれど。やはり、実際にこの状況に身を置くと、頭が理解を拒んでいるというか……本当に、この場にいる方が全員……」

「うん。皆私のかわいい生徒で……セフレだよ」

ロングスカートのメイド服に白手袋という、まったく素肌を晒さない姿のアカネを、その服装のまま犯すように腰を振ってチンポを押し付ける。

アカネの尻肉とセックスするように弾力を感じつつ、幾重にも重なった衣服の上からのアカネの胸の感触を堪能する。

もう、後ろから見えていても如何わしい事をしていることが一目瞭然だった。

「アカネ。脚を開いて、壁に手をつけて、お尻を突き出して」

「あ、う……は、はい……」

緊張で身体を細かく震えさせながら、アカネが言ったとおりの姿勢を取る。

前傾することでアカネのロングスカートの裾がほんの少しだけ持ち上げられ、ふくらはぎの下の方だけが見えていた。

柔らかくアカネを包むスカートの布が張り付き、その尻の大きさを浮き彫りにする。

私がかがみ込んでスカートの裾を持ち、ペロンと持ち上げていく。

「っ……い……」

アカネが息を鋭く吸い、その脚が緊張からびくんと内腿になりかける。

しかし精神力で立て直し、昼間のカフェで足を肩幅より少し広く開き、お尻を突き出す姿勢を維持した。

持ち上がっていくスカートの下から、アカネの脚がどんどん現れてくる。

白いストッキングの上端は腰ではなく、太ももでガーターベルトに吊られていた。

清楚な白のレースのガーターとショーツが、上品かつ優雅にアカネのエロい身体を包み込んでいる。

「綺麗だよ、アカネ。私のために良いのを着てきてくれたの？」

「は……はい……今日、この日のために……選んで参りました……」

顔を真赤にして勝負下着を買ってくれた事を教えてくれるアカネ。

「あああ……こんな、こと、恥ずかしすぎますっ……♡」

昼間のカフェ、衆人環視の中でこんなやり取りをさせられた羞恥で震える声で、小さく抗議するアカネ。しかしそこには、隠しきれない熱っぽさが含まれている。

上まで上げきったスカートを、アカネの腰の上に落とす。

先程までチンポを押し付けていたむっちりしたお尻はレースのショーツが張り付き、カフェの照明のもとで眩しい位に白い肌をしている。

宝玉に触れるようにそのおしりに両手を当てて、クロッチ部分に鼻面を突っ込む。

「ひうつ……!」

すう、はあと鼻で息をすると、濃ゆいアカネの匂いが鼻腔に満ちた。

「ご主人様……! そんな、臭いを嗅ぐだなんて……!」

アカネがこちらを振り向いて声を荒げるが……振り向いてしまうと、この場にいる他の4人の視線が全員こちらを向いているのに気づいてしまう。

その圧力から逃れるために、アカネは壁を見つめるしかなかった。

「アカネのマンコの匂い、いい匂いだと思うよ」

「うう……そのようなことを言われましても……」

つるつるとしたシルクのショーツの感触を顔面で味わいながら、むっちむちのお尻を揉みしだき、じんわり滲んでくる愛液でシミができるクロッチ部分をじっくり観察する。

「アカネ、ショーツのシミが広がってきてるね。興奮してくれて嬉しいよ」

「し、知りませんっ……！　ご主人様のいじわるっ……♡」  
ショーツを履いたままのアカネの恥丘を、両脇から指で引つ張るように開閉する。

愛液が、膣穴からこぼれ落ちて縦にシミを広げていくさまがはつきりと判り、ベツトリと濡れそぼったショーツの向こう側の小陰唇さえ透けて見えてしまいそうだ。

ショーツを突き上げるように勃起したクリトリスを、指でグリグリと押しつぶすように揉みほぐす。

「ひきゅっ♡　だっ、だめ、そんなところ、ああ、皆さんの見ている前なのにつ……♡」

びくん、びくんとアカネの尻が跳ね、膝が笑う。

クリトリスへの愛撫が効いたのか脚を伸ばしていることすらできなくなり、膝頭を突き合わせて内股になることで何とかくずれずに耐えていた。

クロツチ部分を横にどけるとアカネの小陰唇が愛液にコーティングされ、てらてらとピンク色に照り輝いているのが目に飛び込んでき

る。  
感触でショーツをずらされたのが分かったのだろう、羞恥か緊張か、アカネの膣穴がヒクヒクとわななきトロリと涙のように愛液をこぼした。

「そんないじらしい膣口に、そっと口づける。」

「んっ♡」

ちゅ、ちゅ、と音を鳴らしてノックするように入り口にキスし、ヌルヌルと舌をお邪魔させる。

「んんっ♡　くう、んうっ♡」

鼻にかかった声を上げて、アカネが悶えた。ずれたショーツの下、私の眼前にはアカネの肛門も丸見えになっており、少し色の濃いそこが膣以上にヒクヒクと痙攣を繰り返している。

床に滴るほどにこぼれ落ちていく愛液を指に絡め、アカネの可愛らしい肛門に一本突き立ててみた。

「んひっ!?　ご、ご主人様、そこは、違いますっ、あうう♡」



第一関節までを浅く入れ、つぽつぽと抜き差しして遊ぶ私にアカネが驚いて抗議の声を上げるが、膣内を舐め回す舌の感触と相まって甘い声が出てしまっている。

くちやくちやと膣肉を内側から舌でかき回し、クリトリスをこね、尻穴を浅く出入りし続けると、アカネの声がどんどん切羽詰まってくる。

「だめっ♥ だめです、ご主人様っ♥ こんな事、続けられたらっ♥

ああ、もう、私っ♥ 限界、でっ♥ んつく、うううううう……っ♥」

びくんっ！ とアカネの尻が私の顔に押し付けられるように大きく跳ね、押し殺したような声がかフェに響く。

そしてその間、他の物音はほとんど立っていないかった。他の4人も、処女のアカネが私に責められて絶頂する様を、声一つ上げずにじっと見ているのを背中越しに感じる。

誰かが紅茶を啜る音だけが、ここがかフェであることを教えてくれた。

「んっ♥ ~~~~~♥♥♥」

頑張つて堪えていた絶頂が、アカネに襲いかかった。手袋を噛んで声を抑え、その代わりに尻が雄弁に快楽を伝えるように大きく何度も痙攣を繰り返す。

カクカクと震えている膝がついに限界を迎え、ついにアカネは腰を抜かしてへたり込んだ。

「はーっ♥ はーっ♥ はーっ♥ はーっ♥」

時折痙攣する白いお尻を突き出したまま、アカネは言葉を発することも出来ずに荒い息をつき絶頂の余韻に浸っていた。

「アカネが気持ちよくなってくれたみたいで嬉しいよ」

トロトロに準備が整っているアカネの膣口にチンポを突き立てる。

「ま、まって……ください、ご主人様。お、お願いです……」

尻肉を掴む私の手首にそつと手を重ねて、アカネは涙で潤んだ瞳に悲哀の色を浮かべた。

「せ、せめて……初めては、その……ご主人様と向かい合って、お顔を見ながら……いい、いえ……すみません、不躰なことを。ご主人様がお

望みになることに、私が口をはさむなど……」

クリトリスを愛撫していた方の手でアカネの頭を撫でる。

「そうか。言ってくれてありがとうね、アカネ。あ、そうだ、それなら……」

せつかくだから、とアカネの尻を撫で回しながら提案する。

「ご主人様はまたそんな事を……まあ、メイド服を汚してしまうよりはマシ、でしょうか。分かりました、少々お待ち下さいませ」

アカネは呆れながらも快諾してくれた。

ぐつ、と頑張つて脚に力を入れて、ふらつきながら立ち上がる。しゆる、と衣擦れの音と共にスカートが下がり、見た目は普段のアカネそのものになった。

だが、顔は耳まで赤く、歩き姿もフラフラしている。

私にクンニされて絶頂した爪痕をくつきりと残しつつ、他の4人に生暖かい視線を送られて更に赤面し俯いて歩き去っていくアカネ。

それを見送りながら私はソファに座つて待った。

紅茶の残りをすすっていると、アカネが現れる。

「おまたせしました、ご主人様……♥」

かつ、こつ、とヒールを響かせて優雅に歩いてくるのは、バニーガール姿のアカネだ。

先程スカートをめくつて拝んだ脚が白ストッキングに包まれて尻の横まで見えている。

股間の際どいカット、零れてしまいそうな大きな乳房を下から頼りなく支えるだけのバニースーツ。

眼鏡と羽織ったショールだけが、いつものアカネとの共通点だった。

「おお……やっぱりよく似合っているね、その服」

「あ、ありがとうございます……」

そう、私が提案したのは、バニーガール姿になってセックスしようという事だった。

絶頂の余韻がまだ引かない赤い顔で、チラチラと私のテントを張つ

た股間に視線をやるアカネを手招きする。

「アカネが出してみて」

「はい……し、失礼しますね……♥」

じい、とジッパーが降ろされ、手袋に包まれたアカネの指が私のズボンを恐る恐る摘んで引き下げていく。

ぼろんっ！ とパンツから勃起チンポを開放し、整った顔をチンポがぺちんと叩くも、生唾を飲み込みながらズボンをズリ下げた。

「せっかくだし、パイズリフェラしてよ、アカネ」

「パイ……ズリ……ですか？」

本当に知らない感じでキョトンとするアカネに、どういう行為なのかを語って聞かせた。

「あう……ご主人様がお望みなのでしたら、もちろん、やらせて頂きます」

緊張に震える手で、そっとバニーの胸部分をめくってみせるアカネ。その下には、美しいピンク色の乳輪と乳首が隠されていた。

抜けるように白いアカネの肌に相応しい、美しい乳輪。指先で触れると、張りのある周りの肌と沈み込むような柔らかい乳輪の感触の違いがはっきり分かる。

アカネが自身の両手でゆっさりと乳房を持ち上げて、私の勃起チンポを挟み込む。

「ああ……熱い、です♥」

大きな胸の谷間から伸びる私のチンポが、まるで喉元に突きつけられたナイフであるかのように……顔を逸して恥ずかしがるアカネ。

「先端を口に含んでみて。歯を立てないように、唇を内側に巻き込んでね」

「では……ふえ、フェラチオ、させて頂きますね……♥」

アカネはゆっくりと、胸に挟んだチンポに真っ赤な顔を近づけていく。

熱い舌の感触が裏筋を包み、それをガイドにしてスルスルとアカネの口内に収まっていった。

「れう……♥ ふう……♥ ふう……♥ ろうれふは？」

フェラ用に唇を内側に巻き込んで舌先でやわやわと裏筋を上下に往復してくれる。

まともに喋れない状態で上目遣いに私の様子を伺うアカネの頭を優しく撫で、感謝の言葉を伝えた。

「とても気持ちいいよ。その舌の動きをしながら、胸も動かしてみても」  
「ふあひ……♡」

私に言われるがまま、アカネは重そうな乳房を掴んで、左右から押しつぶすように圧迫しつつ上下に揺らした。

たぱっ、たぱっ、と柔らかいおっぱいが私の太ももにぶつかる音が響くほど、カフエは静寂に包まれていた。コタマなどはいつの間にか机の上に機材を広げて録音しているし、ノドカはコタマに借りたビデオカメラで堂々と撮影している。

アカネはそんな事はつゆ知らず、ふうふうと鼻息を荒くして一生懸命に私のチンポにパイブリフェラ奉仕を続けている。

耳に指を這わせて愛撫してやると、

「うんっ♡」

と切なげに声を上げて、潤んだ瞳を私に向けてくる。フェラ奉仕に興奮したのか、先程股間に顔を埋めて嗅いだアカネの性臭がまた漂い始めたのを感じた。

「アカネ、そろそろ……しよるか」

頭を撫でながらそう言うと、アカネがゆっくりと頭を上げる。

それにつれて唾液まみれでぬらぬらと光る勃起チンポがアカネの口から顔を出した。

ふらつきながら立ち上がったアカネの脚をガニ股に開かせて、バニースーツの股間をずらす。

恥ずかしいシミを大きく広げたアカネの股間を覆う白ストッキングを、爪を立ててビリッと破る。

ぽたり、と私の手のひらにアカネの愛液が滴ってきた。

「ああ……♡」

いよいよ犯される実感が湧いたのか、アカネが小さな声で熱い吐息を漏らす。

「さ、自分で入れてごらん、アカネ」

私に促されて、ゴクリと喉を鳴らすアカネ。

グシグシと私の我慢汁と唾液とよだれに濡れた唇を手の甲で拭つてから、ソファに座る私の両脇に膝を立て、背もたれに手をついた。覆いかぶさるような体勢になり、アカネの胸が私の顔にたぶんと当たると。

顔だけでアカネの乳首を探り、強く吸い付いて片乳を固定する。

「んんっ♥ お戯れを、ご主人様……♥」

下を見ても胸が邪魔で股間が見えないアカネが、手袋を唾液と我慢汁まみれに汚してチンポを掴み、何とか膣穴に入れようとするが処女穴が狭くヌルヌルと滑ってしまう。

しばらくアカネの乳首を吸い、たつぷりとした柔らかい乳を揉みながら、穴を正確に捉えるのを待った。

「いつ、つ、う……♥」

ミチ、と抵抗する肉を押し広げる感覚と共に、アカネが苦悶の声を上げる。

ついに亀頭はアカネの処女穴を捉え、侵入のために押し広げ始めた。

アカネが自分から股を開いて処女を私に献上してくれる、その心意気にチンポのイライラは最高潮に高まっている。

キツイ入り口を過ぎるとトロトロに柔らかい膣肉が処女の締りでもとわりつき、私に射精をねだってくる。

途中にごく薄く処女膜を貫く感触はしたものの、アカネも気にすること無く腰を沈めていった。

処女の血が竿に薄く流れても、動きは止まらない。

やがてアカネの腰は私の下腹部と密着し、チンポをすべて飲み込んでいた。

「はあ、ふう……♥」

アカネの膣の一番奥を突き上げて、子宮を持ち上げている感触がある。

目の前にあるアカネの顔は快感に緩み、フェラしていた時よりも更

に熱っぽい瞳で私を見つめていた。

「大丈夫、アカネ？」

「あり、がとうございます……♥ 大丈夫、です。先生のおちんちん、凄く熱くて、気持よくて……頭がふわふわしてます……♥」

そう言つて浮かべた笑みもフワフワと緩んでいて、強がりでないに分かった。

私はアカネを抱き寄せて、唇を重ねた。

「んっ……♥」

感極まった涙に潤んだ瞳が私をじつと見つめ、覗き込んでくる。

強く抱きしめると、アカネの身体から力が抜けて私に身体を預けてくれた。

むつちりとした胸が遠慮なく押し付けられ、シヨールと髪から漂う優しい香りも相まって、包み込まれるような安心感だ。

ダンスを誘うように舌を絡めると、恥ずかしげにアカネの瞳が揺れる。

ゆっくりゆっくりと舌を動かすと、アカネも合わせて動いてくれる。

優雅にワルツを踊るように口内で舌が絡み合い、溢れたよだれがアカネの白い顎を伝う。

舌の動きにアカネが慣れてくると、ソファのスプリングを利用して尻をはずませ、腰を突き上げる。

「うんんっ♥」

唇を塞がれ、舌もセックスに使っているせいでくぐもった声を上げることしか出来ずにアカネが悶えた。

トロトロと柔らかい肉がみっちりと密着してくるアカネの膣が、突き上げのたびにぎゅっと締めつけて射精をねだる。

ぎし、ぎし、とリズムカルにソファが軋む音が、静かなカフェに響いている。

耳をすませば、じいー……と録音機材の立てる駆動音と、興奮した生徒たちの鼻息も微かに聞こえてくるが、いずれにせよアカネは夢中で私にしがみつき舌を絡めて腰を振っていて、周りのことなどもう頭

にないようだった。

「んっ♥ んっ♥ んんーっ♥」

そして、絶頂で膣が締まったのを機に、私も射精する。

「んはあああああんっ♥」

アカネは射精の熱さに耐えかねたように唇を離し、大声を上げてさらに絶頂した。背をのけぞらせたせいで、シヨールが床にするりと落ちていく。

窓から差し込む日差しはいつの間にか傾き、茜色を帯びている。

夕日に照らされたアカネは、バニーガール姿で露出の多い白い肌のほとんど全部を桜色に上気させ、いくつも珠のように汗を浮かべていた。

髪が汗で頬に張り付き、パイズリに使った胸の谷間に汗の珠が流れ落ちる。

絶頂で虚ろに虚空を見つめ、ほかほかと湯気さえ上がる全力の情事を経たアカネの姿は、女神像かなにかのように整って美しかった。

当然、私はその腰を強く引き寄せながら、ドクンドクンとアカネの一番奥に精液を流し込み続けている。

「はあ、はあ、はあ……♥」

肩で息をしながら、アカネが再び私にしなだれかかってくる。

「どう？ 気持ちよくなってくれた、アカネ？」

汗に濡れた背中を撫でながら私がそう問うと、アカネは苦笑を浮かべた。

「もう……本来なら、私をご奉仕しなくてはなりませんのに。でも……はい、とても……気持ちよかったです。ご主人様の子種が、私のお腹の中に流れ込んで、とっても熱く感じます……♥」

うっとりとした優しい笑みを浮かべて、バニースーツのお腹を撫でるアカネ。

その笑顔の透き通った美しさと、手のすぐ下で横にずらされたバニースーツの股間から見える無残に押し広げられた処女穴とのギャップがチンポをイライラさせる。

「あんっ♥ ご主人様、アカネの中でもうこんなに硬く……♥ また

したいのですか?」

「うん。アカネがとても綺麗だから、もう復活してしまつたよ」

「まあっ。うふふ、お上手ですね、ご主人様♥ では、今度こそ私がご奉仕致しますね♥」

ニツコリと笑つてから、アカネが身体を屈めて靴を脱ぐ。

ソファに足を踏ん張つてはしたなくM字に開脚し、ぎっし、ぎっしとスプリングの反動も使つて身体全体を上下に揺らし始めた。

「おおっ……アカネ。2回目とはとても思えないほど上手だね」

「お褒めの言葉、感謝いたします♥ これからのアカネはきつと、ご主人様を100%満足させられることでしょう♥」

ニツコリとした笑み、その瞳に怪しい光が宿り、きゅうと口角が上り上がっていく。

アカネの腰の上下は先程の倍以上は激しく、ほとんど先端から根本までの長いストロークをソファのスプリングを上手に使い素早く繰り返している。

ばっふ、ばっふ、と股間同士を打ち付けあう激しい音が、スプリングが軋むうるさいくらいに負けないくらいにカフェに響く。

「はあっ♥ はあっ♥ どうですか、ご主人様♥ アカネは、ご主人様のご期待にお応えします♥ ですから、いつでもアカネに性処理をお申し付けくださいね♥」

目を爛々と輝かせ、とても楽しげに……今までの鬱憤を晴らすように、アカネが大声で言った。

「くうう……ありがとう、アカネ。これからも、性処理メイドとしてよろしくね」

「はいっ♥ アカネは、ご主人様だけの性処理メイドですっ♥」

ばちゅん! と一際強い杭打ちのようなピストンがアカネから降ってきて、私は引っこ抜かれるように二度目の射精をアカネの奥深くに放っていた。

「はああああんっ♥ ご主人様の精液で、私もイキますっ♥♥」

腰を密着させて、膣をぎゅうぎゅうと締め付けてアカネが私の精液を啜り上げる。



一切気兼ねのない、処女だったアカネの子宮を蹂躪するような量の精液を、奉仕に甘えて吐き出していく。

強く抱きしめたお互いの身体が、心音さえ重なるような一体感で密着し……お互いの首元に跡が残る位にキスの雨を降らせた。

「ふう……♡ ふう……♡」

しばらく、私とアカネの荒い息と、衣擦れの音だけがカフェに響いた。

「先生、そろそろ私達にも構ってほしいんだけど」

いつの間にか近くから聞こえた言葉に顔を上げると、アズサが目を吊り上げて私を藪眺みにしていた。

「あ、アズサちゃん!？」

裏返った声でアズサを呼ぶヒフミ。

「そ、そーです！ こんな凄いのを見せつけておいて、お預けはひどいです！」

座ったまま太ももをモジモジさせているノドカが、後ろの方から声を上げる。

だが、アカネはいずれにも反応しなかった。

私は隣のソファにタオルを敷いてやると、アカネを持ち上げてそこに座らせてやる。

アカネはぐったりと身体から力が抜け、座らされても脚を閉じる事はなかった。

激しい動きで股間の部分が伸び伸びになったバニースーツ、そして破れた白いストッキング。

そこから覗く、ぽっかりと開いた処女喪失したばかりの膣穴から……ごぼごぼと、とめどなく大量の精液が流れ落ちていく。

処女の身で私に誠心誠意性奉仕したアカネは、激しすぎる絶頂に意識を失っていた。

「ぐくっ……」

ちゃっかり4人全員が集まってきて、ソファにだらしなく股を開いて座るアカネの姿を見て生唾を飲んでる。

アカネが、どれだけ気持ちいい思いをしたのか……ここにいる4人はその何倍もの経験で知っているからだ。

「わかった。じゃあ……アズサから、壁に手をつけてお尻を出してね」

「うん、どうぞ、先生♥」

アズサらしいキツパリとした態度で、即時に私とセックスする体勢を取るアズサ。どうやら、今日はまだまだ忙しいみたいだった。

「ん……あ、あら、ここは……」

日が落ちて随分立ってからアカネが目を覚ました。

「おはよう、アカネ。ちようど皆帰ったところだよ」

あれから、生徒4人の尻を並べて長いスカートも短いスカートも捲りあげ、ひたすらに膣穴を犯しまくった。

おかげで、カフェには私達6人の複雑な性臭が立ち込めている。換気扇を回しているが、明日までに拭えるか分からないくらいだ。

「す、すみませんご主人様……きやつ!? わ、私ったらこんな格好で……!」

今更ながら股を開いて股間を丸出しにした自分の格好に気づいたらしく、ガバツと身を起こして居住まいを正す。

だが、バニースーツの股間は見ても判るほどにユルユルになってしまっていた。

「ごめんね……その服、ダメにしちゃったね」

私がそう言うと、アカネも自分の股間を見て苦笑した。

「いえ、これは単に前に任務で着ただけですし……うふふ、なんでしたらご主人様との性奉仕用の衣服にしても良いんですよ?」

そう言いながら、テーブルの下に落ちていたシヨールを拾ってポンポンと埃を払うと、普段のように羽織る。

「え、本当? それは良いなあ。アカネのバニー姿、凄く綺麗だからね」

私がすぐさまそれに反応すると、アカネは顔を赤らめた。

「もう……ご主人様はすぐそうやって……いえ、分かりました。この

服はご主人様への『ご奉仕』用に、大事にしまっておきます♥」

アカネはいつもの優雅なメイドの微笑みを浮かべて、股間が酷いことになったバニースーツを愛おしげに撫でる。

結局、バニースーツはもう普段の任務では使えないようになってしまったが、アカネは満足そうだった。

## 効率的な関係（エイミ）

「よい……しよ、と」

ここは特異現象捜査部の仮部室。

先日のデカグラマトンの来襲で用意していた部屋が使えなくなっ  
てしまったので、引越し予定の部屋だ。

そんな場所で、エイミが四つん這いで机の下に潜り込んでいる。

一年生とは思えない見事なお尻がプリプリ揺れて、短いスカートか  
らはブラと同じデザインの黒の下着が見えてしまっている。

私はパーツを梱包する作業を手伝いながら匂い立つような距離で  
エイミの股間をじつと見つめていた。

なんでこんな事をしているかと言えば、勿体ないからだ。デカグラ  
マトンの侵入を許したことにより、メモリ部分はウイルスが仕込まれ  
ている可能性を考慮して廃棄するしか無いとは言え、ケーブルなんか  
のパーツは使いまわして良いだろうという事で、エイミが回収作業に  
当たるといので手伝いを買って出た。

「ふー、こんなもんかな。お疲れ様、先生」

既に段ボール箱数箱分になるとは言え、この広々した部屋からすれ  
ばむしろ少ない気がする。

「これだけ？ あっちの……壁のハッチとか、結構残ってる気がする  
けど」

「あれは安いケーブルとかだから、運ぶより新しく買っちゃったほう  
が効率的。今回は、発注に時間が掛かるものを回収しているの」

「なるほど……エイミは詳しいんだね」

「そういう事。ふう……しかし、この部屋暑いね。エアコンは止めた  
し窓もないから換気も出来ないし。ねえ先生、脱いでいいよね？」

そう言いながら、既に上着は腕も通さず腰に巻きつけている状態  
だ。

「それ以上何を脱ぐつもりなの……」

「それは……スカートとか、上の服とか。ここには先生以外居ないし、  
梱包したパーツの確認中くらいは良いでしょ？」

上半身にはブラしか付けていない状態でこういう事を言うのがエイミなのだ。私のチンポのイライラは急速に高まっていく。

「そんなに暑いなら少し休憩を入れよう」

「えっ？ 疲れてはいないから大丈夫だよ。それに今日中に運び出しまで終えてしまいたいし、先生の時間もあんまり取るわけにいかないし」

そんな事を言いながら、エイミは腰に巻きつけていた服をもどかしげに床に落とし、スカートのジッパーを下ろす。

「私の身体(の一部)が凝っちゃってね。よければエイミにどうにかして欲しいんだ」

そう言いながら、セックスでもないのに自発的にブラとショーツだけの姿になっているエイミに近寄っていく。

「一部？」

そして、おもむろに私もズボンのジッパーを下げ勃起チンポを取り出した。

「おお……先生も暑いのか？」

「うん、そうだね。こうなるととつても熱くなるんだ。だからエイミにこれを鎮めて欲しくて」

「先生は私とセックスしたいのか？」

なんの気負いもなく、エイミが尋ねてくる。さすがエイミ、浮世離れしたようで無知ではない。

「うん、したいんだ」

だから交渉もとてもスムーズだった。

「そう……うーん、でも任務があるから妊娠はちよつと困るかな」

少し残念そうに眉をしかめてエイミがつぶやく。

「避妊用のピルも持ってきてるから、ほら」

そう言ってピルを見せると、エイミがその箱を手にとって裏返し、手元の端末で何か調べ始める。

「妊娠の確率を下げるだけで完全に防ぐわけじゃないんだね。この、コンドームって避妊方法じゃ駄目なの？」

ごく冷静にピルの効能を調べ、しかも代表的な皮膜による避妊を端末画面を見せて提案してくれた。

「エイミとの始めては生で膣内射精したいんだ、ぜひとも」

「先生がそうしたいなら。でも、妊娠したらちちゃんと特異現象捜査部の部員集めをしてね」

「……墮胎はしないんだ？」

エイミはポツ、と頬を赤らめて目をそらした。

「だって、いつか先生の子供を産みたいって思ってたし。せつかく妊娠したなら墮ろしちゃうのは非効率、だよ」

「そっか……うん、分かった。エイミは今日は妊娠しやすい日？」

妊娠OKの15歳のナイスバディの女の子の前に、私のチンポはエイミに見つめられながら我慢汗を垂れ流し始める。

「そんなの考えてないよ。えつと……うん、そういえば生理の直後か。じゃあ、多分今は比較的安全……だと思う」

またも検索で性知識を仕入れてくれるエイミ。私は勃起チンポをエイミの引き締まったお腹に突き立てながら、正面から抱きしめた。

「わっ。……先生の体、ちよつとひんやりして気持ちいいね」

「エイミの身体は暖かいね。お風呂にでも入った後みたいだ」

むわっ、と甘酸っぱいエイミの匂いが鼻腔に飛び込んでくる。

暑がりの割にエイミの体臭は薄いけど、それでも密着するとはつきりと感じられた。

「さっきネットで見たけど、セックスって裸でするんだね。一部の女子生徒は凄く好む子もいるって書いてあったし、私にはぴったりかも」

エイミの趣味のプロフィールにセックスが加わってしまいそうな気配にニツコリしながら、私はエイミのフロントホックをプチンと外す。

「あつ、脱がしっこだね。私も先生を脱がせてあげるね」

服を脱ぐという慣れ親しんだ行為を堂々とできる事が嬉しいのか、上機嫌で私を脱がせてくれるエイミ。私もエイミと交代で彼女の服……というか下着を脱がせる。

「おお……」

ふるん、とブラを外すだけで柔らかく揺れる巨乳は、大きな乳輪に陥没乳首が目を引く。

「ああ、これ？ 私は乳首が少し珍しいみたい。ジツパーを開け締めする時に挟まないから効率的だし、自分では問題ないと思うけど……先生は、気になる？」

最後だけ、ジトツとした目で見つめてくる。エイミは私の感想を気にしてくれているようだ。

「うん、とっても魅力的で凄く気になるよ」

素直に返答し、親指の先ですりすりと乳輪に円を描くように愛撫する。それ以外の指で巨乳をそっと持ち上げると、イズミにも劣らない重さと沈み込む柔らかさが伝わってきた。

「んっ、くすぐったいよ、先生。まだ私が脱がせてないからもうちよつと待って」

ぴくん、と肩を竦めただけで、熱心に私の脱衣を続けるエイミ。

パサパサと床の上に二人分の衣服が散乱していき、お互いに靴と靴下だけの姿になった。

私の前で全裸になったエイミは何やら満足げな表情で、支えるもののない乳房をいつもより下に垂らして胸を張っている。

「うん。やっぱり暑い時は服を脱ぐのが一番。先生もそう思うよね？」

「他の人が居る場所では脱いじゃ駄目だよ」

こんなスケベな身体を目にしたら、犬やロボでも勃起不可避だろう。可愛い生徒が私以外の性被害を受けないように守護らねばならない。

「じゃあさっそく、セックスしよう、エイミ」

「うん。私はよく知らないから、必要なら指示して」

アリスとはまた違った意味で純粋な瞳で、エイミが私に身体を任せ

る。その信頼に応えるべく、まずは裸で抱き合った。15歳にして167センチの高身長を誇るエイミは、立ったまま抱き合うには丁度いい

サイズ感だ。

「ん……不思議。先生と抱き合っていると、熱いのに不快じゃない。私の体温が、先生に移ってくみたい……」

「うん。エイミの身体も、柔らかくて暖かくて気持ちいいよ」

そう言いつつも、エイミの薄っすらと脂肪の乗ったお腹に勃起を押し当てる。

「先生のペニス、熱いね。私の身体みたいで何だか馴染むかも」

エイミは嫌がる素振りもなく、私の背中に手を回して抱き返しながらチンポの感想を言ってくた。

「セックスって、ペニスをヴァギナに入れるんだよね？ 私のおへそより深く入りそうだけど……こんなに入るのかな？」

「大丈夫だよ、膣が伸びるから。でも最初はちゃんと準備をしようね」  
「うん。教えて、先生」

まるで普段の掃討任務でのやり取りのように何気ない微笑みを浮かべて、セックスの指導を願い出るエイミ。

その唇を遠慮なしに奪った。

「んっ……」

エイミの口内はイメージ通り熱く、お風呂にでも浸かったかと思う熱い唾液が湛えられている。

キスをして顔色を変えることもなく、じいっと微笑んだままの目で私を見つめるエイミ。

舌を挿入して絡めると、意図を理解してくれて肉厚な舌をエイミからも絡め、私の口内に入れてくれる。

「ふー……んふ……」

ちゅくちゅく、とお互いの口内をかき回す音だけが響く。空調もなく窓も無いこの部屋は本当に無音なので、気兼ねなくエイミを貪る事ができる。

そのまま5分以上キスした後、そつと口を離した。

「どう？ エイミは気持ちいい？」

「ん……どうだろ。悪くないと思うよ」

そう言いながら、私の唾液でぬらぬらと濡れた唇をねつとりと舌な



めずりした後、コクンと嚙下する。

私は鞆の中からピルを取り出すと、エイミに差し出した。

「あー……んむ」

雛鳥のようにあーんするエイミに指ごとピルを口に含まれる。これで膣内射精の準備は整った。

私は、コンソールの前に固定されている結構立派な椅子にエイミを浅く座らせて股を開かせ、その前に跪く。

「先生、私は何もしなくていいの？」

目の前にはエイミのむっちりした太ももと、綺麗に整った一筋のマンコ、そして濃いめに生えた陰毛という絶景が広がっている。

「エイミは初めてだからね、リラックスして、股間の感覚に集中してくれば良いよ」

「うん、分かった」

ぐっ、と脚を180度近くに開いて、股間を突き出してくれるエイミ。

むあつとエイミの股間の高い体温で暖められた空気が顔に押し寄せ、汗よりも酸っぱさを増した匂いを堪能する。

ぷに、ぷにと食パンのように白く柔らかい大陰唇の感触を指先で味わい、そつと左右に開いた。

くぱあ、とエイミの性器が外気に晒される。薄っすらと湯気が一瞬のぼり、アツアツになっているのが分かった。

「あつ……さすがに、ちよつと恥ずかしいね」

「エイミのここ、ピンク色で凄くきれいだよ」

「そんな感想は、別に要らないから……」

羞恥心など無いかのようなエイミさえ恥ずかしがるような所まで踏み込んだ実感が湧き、我慢汁が床に垂れる。

ペロリと大陰唇の内側全体を舌で舐めた。

「ひゃうっ♥」

エイミの太ももがびくんと痙攣し、甘い声の上から降ってくる。

私は何も言わず、ゆったりと舌を往復させる。

「あつ、んっ♥ こ、れえ……背中、ゾクゾクって♥ 気持ちいいっ、

て、ことなの、かなっ……♥」

ぴちやぴちやと音を立てて舐める。エイミは私の指示通り、目を閉じて初めての感覚に意識を集中しているようだ。

上ずった声がとても澄んでいて、歌のうまいエイミは喘ぎ声まで綺麗だと思った。

慣れてきた辺りで、クリトリスに吸い付く。

「ひぎゅっ♥」

エイミの腰が跳ねた。普通の女の子と同じようにクリトリスは敏感なようだ。

優しく、唾液に浸して舌先で転がしてみる。

「あっ、あああーっ……♥」

エイミは先程の痙攣とは打って変わって、力の抜けたような声を漏らしてむしろ腰を突き出してくる。

気に入ってくれたようなので、そつと、刺激を強くしすぎないようにクリトリスを甘やかし続けた。

「ううん……♥ はあ、はあ……」

10分ほど続けると、目を閉じて悩ましげな声を上げるエイミの肌にじんわりと汗の珠が浮かんでくる。

そろそろ頃合いと見て、強く吸い立てた。

「ふっ、ぐ♥ んあああああっ♥」

クリトリスを吸われる股間の位置はそのままに、エイミが背中をのけぞらせる。

椅子が軋み、エイミの快樂のほどを教えてくれた。

口を離してマンコを見てみると、クリトリスは勃起して先端が顔を覗かせ、小陰唇もぷっくりと充血し、膣口は物欲しげにパクパクと開閉している。

「エイミ、次は膣に指を入れてみるからね。痛かったら言っつてね」

「はあっ、はあっ♥ ちょ、ちよつと、まつ、あああっ♥」

大きな胸を上下させ、荒い息をつくエイミの反応を見ながら、豊かな陰毛の上に手を載せてクリトリスに親指をかけ、反対の手の小指をそつとエイミの膣に入れてみる。

「んっ……♡ ふう、ふう……このくらいなら、大丈夫だと思う……」  
エイミは全身を桜色に上気させて汗を掻きながら、肩で息をして何とか落ち着こうとする。

私は次に人差し指を挿入した。

「あつ♡ なんだか、不思議な感じ……目で見てると全然大丈夫に見えるのに、先生の指が凄く太く感じる」

エイミは上から自分の股間を覗き込むと、人差し指一本をピツタリと啜え込む様を見ながら感想を言ってくれる。

「エイミの膣が初めてでまだ狭いからね」

「ここに、先生のペニスを入れるんだよね？ 本当に入るの？」

「これからほぐしていくから心配しないで。そうそう、セックスの時はペニスじゃなくて『チンポ』、ヴァギナじゃなくて『マンコ』って言うってくれると嬉しいな」

「チンポ、マンコ、だね。分かった。……ふふっ、なんだか面白い響き」  
素直に学習をしてくれるエイミに気を良くしつつも、挿入した指を上に向けて曲げる。

入り口のごく浅い所を引っ搔くようにして探った。

「んんんっ……♡ それ、そこお……♡ さつきみたいなのに、ゾクゾクっとする……♡」

「それが『気持ちいい』だよ。リラックスして感じてみて」

「うん……♡ これ、ぼーっとしちゃう……♡ 先生にされるの、私、好きかも……♡」

いつもの無表情とは違い口を半開きにして頬を染めたエイミは、クリトリスを膣側から刺激される快樂に浸りきっているようだった。

やがて手に前後の動きが加わり、ちやこちやこと水音を立てて膣をかき回してもエイミは痛がることはなかった。

「はーっ♡ はーっ♡」

中空に視線をさまよわせ、身体だけでなく顔も真っ赤にして、汗をタラタラ流しながら私に好きなようにマンコをほじらせてくれるエイミ。

追加で中指を挿入しても問題なく受け入れてくれ、グリグリと強く

Gスポットを刺激する。

ぐつちよぐつちよと本気汁と化し白濁した愛液がかき混ぜられ、泡を立てながら垂れ落ちて革張りの椅子をヌルヌルにしていく。

「あああああああつ♥♥」

エイミが仰け反り、白い喉元を晒しながら澄んだ高い声で絶頂した。

一度も触っていない陥没乳首をほんの少し頭を覗かせるほど勃起させ、胸の谷間に幾筋も流れていく汗の川が興奮を物語っている。

好き放題にほじられた膣口は、点のようだった最初の数倍の直径に広がって子作りをねだっているようだった。

「どう？ 気持ちいい感覚は掴めた？」

ホカホカと湯気をあげるエイミに問いかける。

「うん……♥ セックスって凄いいね……♥ こんなに暑いのに、もつとして欲しいって思うなんて。私も一部の生徒みたいにセックスが好きになりそう♥」

赤裸々に語られる胸の内に、チンポのイライラが限界を超える。

股をおっぴろげて座ったままのエイミに覆いかぶさり、マンコに即挿入した。

「あああつ♥ 先生の、チ、チンポ……太いつ♥」

初めて指以外を受け入れたエイミが喉につかえるような声を上げる。

すっかりアツアツになった身体を抱きしめてズブズブと侵入し

……ぷちんと軽い衝撃とともにエイミの処女膜を破った。

「んっ……今の、処女膜が破れた……のかな？」

「うん、そうだと思うよ。エイミの初めて、私にくれてありがとうね」

「処女膜を破って何が嬉しいのかよくわからないけど……先生が喜んでくれたなら、嬉しい」

エイミの表情は普段どおりの微笑みだが、セックスの興奮で上気した肌と合わさりひどく扇情的に見えた。

そのまま15歳の瑞々しい膣の最奥までたどり着き、更に押し込んでいく。

「う、ううう……すごい、圧迫感……お腹の中が、先生のチンポでいっぱいになっちゃったみたい……」

鍛えているだけあって締め付けの強いエイミの膣は、お湯に突っ込んだような熱さを持っていて汗気も多く、とても居心地がいい。

「くうおお……エイミの膣、とつても気持ちいいよ」

「ふふふ……本当だ。そんな顔してるよ、先生」

真っ赤な顔で私を見つめるエイミ。私は照れ隠しに腰を前後に振り始めた。

「あつ、あぁーっつ♥ これ、すごいっ♥ さっきのよりも、刺激つ、つよっ♥」

「エイミはセックスの才能があるみたいだね！ 最初はゆっくり動くから、さっきみたいに『気持ちいい』に集中して！」

「うんっ♥ 集中、しなくても……あたまっ、真っ白になるくらいっ♥ 気持ちいいっ♥」

ぬっこ、ぬっこ長いストロークでエイミの膣を犯す。

窮屈な体勢で椅子に押し付けられ、身体を曲げたエイミのお腹のシワに汗が流れ、それにそって流れていく様さえはつきりと見える距離。

犯すために持ち上げたエイミの脚、その膝から下が私の腰の後ろでプラプラと揺れ、時折靴の踵が尻に触れた。

立ち上る汗の熱気がエイミそのものであるかのように私を包んで、2人してサウナのように汗を垂らしながら蠢きあう。

突きこむごとに膣はこなれ、まるで餅つきのように粘りさえ帯びてくるようだった。

「エイミっ、そろそろ、射精するから！ できれば、エイミも一緒にイッてくれると嬉しい」

「わかっ♥ でも、そんな、自由には、ならないかもっ♥」

突きこまれるごとに言葉を詰まらせるエイミは、膣の締めからも今にも絶頂しそうになっているようだ。

ぐじゅぐじゅぐじゅ！ とフィニッシュのために奥の方で小刻みに腰を使い、エイミの奥深くに射精する。

「あつ、あ、ついい♡ あーーーーっ♡♡」

普段無表情なエイミが、目を見開いて絶叫する。

ムチムチで、しかし幼いといえる程の若さを持つ熱い身体を抱きしめて、金玉の中身を無垢な女の子の子宮に注ぎ込む愉悦に浸った。

「ああ……♡ 先生の、精液……私の中に、染み込んでくるみたい……♡」

潤んだ瞳のエイミと見つめ合い、どちらからともなく唇を重ねて抱きしめあつた。

汗に濡れたエイミの身体が私に押し付けられ、湯たんぽのように熱い体温を全身で感じる。

どく、どく、と長く続いた射精が収まる頃、そつと唇を離れた。

「はあ……ふう……♡ セックスつて、暑いけど気持ちいいね」

膣内射精された余韻に浸っているのか、普段より目元をトロンと緩ませて笑みを浮かべるエイミ。

「私も、凄く気持ちよかったよ。よければこれからもエイミとセックスしたい」

「うん、良いよ。……でも、次はエアコンが効いてる所でしたいかな」

汗みずくで頬に髪を張り付かせて、エイミは微笑んだ。

スポーツを終えたように爽やかにセックスを語ってくれるエイミの純粹さに、チンポがまたイライラしてくる。

「あつ……先生は、まだシたりないみたいだね。時間もあるし、もう一回する？」

そう言つて誘ってくるエイミの瞳は、処女だった時とは少しだけ違う妖しい輝きを帯びていて……確かに女の悦びを覚えた少女がそこにいた。

「うん、ぜひともしたい」

「ふふふ……素直だね、先生。そうだ、次は私が上になるよ。先生、その格好だと腰を痛めそうだから」

ありがたい配慮まで頂戴してしまった。素直に受け取って、エイミに挿入したままその体を抱き上げ、私が椅子に座る。

べつちよりとエイミの汗と愛液に塗れた椅子は、熱が冷めていない

今はエイミに包まれるような密着感を感じさせてくれる。

「ん……♡ 上になると、お腹の中持ち上げられちゃうね。息苦しい位……♡」

微笑みを浮かべたままへソの辺りをさするエイミ。ちょうどその辺りまで私の勃起チンポが到達しているのだと思うとチンポも硬くなる。

目の前でゆれる、たわわに実ったエイミの胸に手を伸ばす。

全体がしつとりと汗に濡れ、すっかり暖まった乳房。持ち上げようとする手が沈み込んでホカホカの肉に包まれ、それだけで陶然となってしまう感触だった。

内側で勃起した乳首に親指で触れると、エイミがピクンと肩を竦めて反応する。

ぬぷりと汗に濡れた陥没に指を埋め、ほじくるようにして乳首を掘り起こした。

溜まった汗の濃い匂いと共に現れた大粒の乳首は艶やかで、フラフラと顔が吸い寄せられる。

ちゅうと音を立てて吸い付いて、もう片側の乳首もほじくり出す。

「んんっ♡ 乳首、吸われるのも……いい、かも♡」

すっかりセックスを楽しむ気になってくれているエイミが、私の頭を抱きしめる。

アツアツの胸が私の顔面に密着し、ホットアイマスクのように心地いい。

身体の脇で、エイミが椅子に足を踏ん張ったのを感じる。

「んっ……しよ♡」

私の頭を支えに、身体ごと上下に動かして自発的にピストンを初めてくれたのだ。

お礼のようにもう片方の乳首を指で弾いて愛撫する。

「あっ♡ だめ、先生♡ あんまり気持ちいいと、上手く動けないから♡」

上ずった声でエイミが言うのを証明するように、乳首への刺激と膣のうねりが同期していた。

乳首を強く、ぢゅうううと吸い上げるとエイミの膣はうねうねとチンポにまわり付き、腰の上下動が止まってしまふ。

「ぷは……エイミ、慣れないならあまり大きく動かないでいいよ。腰を前後に揺らす感じでやってみて」

「前後……？ うん……それも、気持ちよさそうだね♥」

基本的に賢いエイミは、その動きで得られる気持ちよさに想像が付いたようで妖艶に微笑を浮かべた。

再度乳首をしゃぶる私の頭を抱き、スラリとした腰を波打たせ前後動を始める。

「あ、ああっ♥ これ、いいところ、当たるっ♥」

大分セックスに慣れてきたのか、艶かしくも澄んだエイミの喘ぎ声が私の耳朶に染み込んでくる。

傍から見ればほんの微かな動きだが、初体験のエイミが自分の丁度いい所を探して腰をくねらせる様は見ているだけで金玉から精液がこみ上げてくる。

私の方からも、エイミに足りない上下動を付け足してあげることにした。

「ああうっ♥」

びくんっ！ とエイミが強く痙攣し、息が詰まるくらい私の頭を抱く。

ギチギチと膣が締め、突発的に絶頂したようだった。

「イツ、いっちゃっ……た♥ 先生、不意打ちはずルいよ……♥」

そう言いながら優しく私の頭を撫でてくれるエイミ。

「腰をね、前に突き出すのと、先生の突き上げが重なって……一番ビリビリする所にチンポが食い込んだの。頭が真っ白になって、ふわって身体が浮いたかと思った……♥」

子宮口イキを決めた報告を絶頂後の緩んだ声音で囁いてくれるエイミに、ドバドバと我慢汁がエイミの膣に撒き散らされる。

「あ、ごめんね先生。チンポが張り詰めて、苦しいよね。腰の振り、再開するね♥」

ふう、ふう、とエイミは息も荒く腰を前後に動かし始める。抱き合



う腕や身体に滴る汗を感じる程に熱中し、顔を埋めた胸の奥の方でドクドクとエイミの心臓が早鐘を打っているのを感じる。

もちろん、エイミが一番気持ちよくなれるように腰を前に突き出したタイミングにピッタリ合わせて激しく下から突き上げた。

「あああつ♥ だから、それ、イッチャ、ああああう♥♥」

腰を揺らす度に視界がショートするほどの快楽に見舞われながら、取り憑かれたように二人で息を合わせて腰を打ち付けあう。

何度目かのエイミの絶頂と共に、私も限界を迎え……コリコリした子宮口の感触を鈴口に感じながら、金玉から子宮への直行便を開通させた。

「うっ、あああああー……♥」

エイミが思いきり背中を仰け反らせ、誰もいないモニタールームに甘ったるい絶叫を響かせる。

ギチギチに締まる処女腔がポルチオアクメに蕩け、激しくうねって私の精液を心地よく絞り上げてくれるのに任せ、私は遠慮なく生徒の子宮への種付けを楽しんだ。

身体が暖まっているからなのか、射精もとてもよく出る感じがする。

縋り付くように抱きついてくるエイミの汗まみれの背中をヌルヌルと撫で、エイミに優しく頭を撫でられる。

一对の番として毛づくろいをし合うかのように抱き合った手でお互いをさすりながら、溢れ出る射精を愛しの生徒に注ぎ込む至福の時間に浸った。

「はあ……っふううー……♥」

射精が終わってしばらく、エイミが大きく深呼吸して息を整える。

「まだお腹の奥が熱いよ……♥ セックスつて、こんなにすごいんだ♥」

その瞳は熱っぽく爛々と輝いていて、これを見て感情がないなんて言う人は誰も居ないだろうな、と思った。

「エイミ、私のセフレ……いつでもセックスする仲になってくれる？」

「うん、もちろん♥ 先生は……戦友で、セックスフレンドだね♥」  
こうして快諾を得た私は、ドロドロのぐちよぐちよになった椅子を  
頑張つて掃除してから本来の仕事に戻っていった。

後日。

「先生のセフレがこんなにくっさん居るなんて……あ、じゃあ執務室  
にセフレしか居ない時は服を全部脱いでいいよね？」

「他の人が来そうな時は遠慮してね」

あつという間に馴染んだエイミは、遠慮なく裸族の道を歩み始める  
のだった。

## 背徳健康法（ハナコ）

雨の東屋で、佇んでいたハナコを探し当てて話をした時のこと。

「ただ、息苦しいのは嫌だなというだけで……」

そう言つて、ハナコは寂しげに笑った。今の私には見えないところで、色々なしがらみがあるのだろう。

（そうだ、セフレにしよう）

ティンと来た。いけないことをするドキドキが楽しいという癖に、趣味に『イタズラ』と書くことも出来ない抑圧されたハナコのことだ。関係性自体が秘密のセフレになれば同好の士が出来てストレスも軽減するに違いない。

私は、雨に濡れて悄然と佇むハナコの制服が巨乳に張り付いているのを見て決意するのだった。

そして翌日。

「ふふっ。ここで「当番」をするのは、すごく楽しいですね？」

シャーレの執務室。ハナコには書類の仕分けや、私でなくとも書ける事務的な内容を任せている。

「ハナコはすごく上手だから、いつも助かってるよ」

そう言つて私が褒めると、ハナコはニッコリと花咲くような笑顔でこう言うのだ。

「うふふ……「先生当番」が「すごく上手」だなんて……ドキドキするような響きですね」

今まではまともに取り合わなかったシモネタだが、今は違う。

忙しい仕事の合間を縫つてセックスする相手、という意味での「先生当番」という言葉は生徒達の間で実際に使われている。

きつと、ハナコはその意味でも「すごく上手」になる素質があると思うが。

「今ここにいるのは私たち二人だけ……これは、期待してもいいんでしょうか？」

「うん、もちろん」

私がそう言って笑顔で返すと、ハナコは少しの間目を丸くして、ニンマリと笑みを深めた。

「まあ……私、先生にどんな事をされてしまうんでしょう？ 期待で胸が高鳴ってしまいますね」

机仕事をしながらさり気なく前傾姿勢になり、大きな胸が机の上に「置かれて」たわむ所を見せてくるハナコ。

「まあ、仕事の後だね。ハナコのおかげで早く片付きそうだから、あと一息頑張ろう」

「はい、かしこまりました、先生」

鼻歌でも歌いそうな位に上機嫌なハナコと、頑張って仕事を片付ける。

実際にハナコの有能さは生徒たちの中でもトップクラスで、仕事の種類の偏りはあるとは言え数日分の量をあつという間にさばっていく。

その分セックスする時間が取れるということだ。

そうして何も知らないまま自分がセックスするための時間を稼いでいくハナコに、トントンと書類の耳を揃えながら声をかけた。

「お疲れ様、ハナコ。今日はもうこの辺りで切り上げよう」

窓からは夕焼けが差し込み、部屋も明かりを付けている。

「お疲れ様でした、先生。ふふっ。私、もうこの時間が待ち遠しくって……先生は私にナニをしてくださるんですか？」

イントネーションが完全にシモネタだ。昔の私ならばここで慌てふためいて良いようにされていただろう。

「ハナコがきつと喜ぶことだよ」

ハナコの望む、息苦しくない『居場所』を、今の私であれば提供できる。あと私のチンポのイライラも解消できる。

完全なるWIN-WINの関係だ。私は席を立ち、ハナコに歩み寄っていく。

「あの……先生？ そんな、無言で近寄られますと……まるで、イケナイことをしようとしているみたいですよ？」

ニコニコと笑顔を崩さないハナコが、いつもの逆セクハラみたいな

事を言つて私を遠ざけようとする。

構わずに座っているハナコの肩を掴んだ。

「ひゃっ……」

思わずと言つた感じで声を上げ、顔を上げて私と向き合うハナコに顔を近づけていく。

「あ、え？ 先生？ まさか、あ、ああ……」

そして私は、ハナコにキスをした。

「だ、だめっ……！ え？」

額にキスしたので、震える声での拒絶もちゃんと最後まで言っている。

「いつもありがとう、ハナコ。コレは親愛の証だよ」

「も……もう、先生ったら。乙女の額にキスするなんて……ギリギリアウトではありませんか？」

困つたように苦笑を浮かべるハナコだが、さっきの声の必死さを誤魔化しているのはミエミエだった。

頬どころか耳まで赤くなっているからだ。

「ハナコが期待していた事とは違つた？」

ニヤニヤと揶揄するような笑みを浮かべて挑発してみると、ほんの微か、一瞬だけハナコが眉をしかめかける。

「そうですね……そう言われれば、たしかに期待していたことだったかもしれませんね」

そして、もう顔色を戻して、楽しげに満面の笑みを浮かべる。

「でも……私の期待というのなら、もつともつとしていただきたい事がたくさんあるのですが……」

スツ……と楚々とした所作で立ち上がるハナコ。161センチの身長には不釣り合いなほどの大きな胸を張って、両手を尻の後ろに回して更に強調してくる。

「ところで先生、私、今日はシャーレのお手伝いなので帰りは遅くなる」と寮監さんに申請を出しているんです。き・た・い……して良いんですよね？」

小首をかしげて上目遣いで私を見つめ、耳に心地良く響く甘い声で

囁くハナコ。

「それは良かった」

心置きなく、時間をかけてセックスできるといふものだ。

私はハナコに向かって一歩踏み込むと、正面から腰を抱いて引き寄せた。

「えっ?」

全く予想していなかったのだろう、ハナコは簡単に私の腕の中に収まり、寄りかかるような格好になってしまう。

大きな胸がむにゆりと押しつぶされ、呆けたように口を半開きにして私を見るだけで何も反応できないハナコ。

「あ、あ、あの?」

「ハナコが期待している事以上のことを、沢山してあげるから安心してね」

強く抱きしめ、ゆっくりと顔を近づけていく。

「ふ、ふふっ。先生、女子生徒をこんなに堂々と抱きしめるなんて……誰かに見られたらタダではすみませんよ?」

二度目でもあり、頑張って取り繕おうとしているハナコだったが……既に頬が紅潮し始めている。

「そうかもね。ハナコにはゴメンね。でも……私はハナコとこういう事がしたいんだ」

至近距離で見つめ合ってそう言うと、ハナコは微かに目を見開き、ゴクリと喉を鳴らした。

「……ええ。先生がそうおっしゃるのなら……私も、最後までお付き合ひ致します」

ニツコリといつもの笑顔を浮かべて、背筋を伸ばすハナコ。

もしかして、私とのからかい合戦とでも思っているのだろうか。

私は、最後までではつきりと目を開けたままの全く無防備なハナコの唇に思い切りキスした。

「っ?!?!」

今度こそ、思い切り目を見開くハナコをがっしりと抱きしめ、ちゅば、ちゅば、と下品な音を立てて唇を貪る。

ハナコのぷるぷるしたりリップクリームの塗られた唇を割って、無遠慮に舌を入れる。

「んむう!」

身をよじって逃れようとし、歯で侵入を拒むハナコ。

しかし宣言した以上必ず膣内射精まではする。その信念でもって、まずは唇を吸い舌も使って愛撫する。

「んっ♥ んーっ、んーっ!」

ハナコはなおも抵抗し、私の肩に手を置いて遠ざけようとする。

しかし、力が籠もってはいるものの、それは年相応の少女程度のものでしかない。

銃を撃った反動さえ楽々抑え込む超常の力はその中にはなかった。だから、片手で腰を抱き寄せるだけで十分に封殺できてしまう。

空いた手でハナコの首筋に指を這わせ、耳をなぞるように愛撫する。

「むうっ♥ むうううっ♥」

何か喋っているようだが、ちゅばちゅばと唇を吸い立て口が開いた隙を狙って舌を侵入させる私への対処に気を取られて言葉になることもなく消えていく。

首筋や耳は中々気に入ったようで、声がだんだんと甘くなっていくのが口の中の振動でダイレクトに伝わり、チンポのイライラが高まり続けた。

更に強く抱き寄せ、ハナコの腹に勃起チンポを押し当てる。

首筋を撫でていた手をハナコの大きな胸の横へと持つていき、制服の上からさするようにブラのワイヤーをなぞる。

「んうんっ♥ ん、んんっーっ!」

首や耳だけでなく、直接的な部分を触られてハナコの声がより大きくなる。

ハナコの後頭部はもともと抑えられてもいなかったもので、大きくのけぞって唇を離されてしまった。

「せ、せ、先生! 信じられません……! 本気ですか!? こ、こんな事をするなんて……!」

真つ赤な顔をして、柳眉を逆立てて睨むハナコ。

「さつきからちゃんと言ってるはずだけど？」

「あ、う、それは……」

戸惑うハナコの胸の脇を、止まらず撫で続ける。カリンでたっぷり練習した性感帯開発のための愛撫だ。

「ううんっ♥ あ、あの、先生、問い詰められているのに手を止めないのはいかななものかと思うのですが……」

「ハナコは私のする事に最後まで付き合ってくれるし、寮監さんに遅くなる事は了承してもらってるんだよね？ それとも、嘘だったの？」

「うううーっ……ほ、本当、です……寮監さんのことも、ちゃんと……まさか、先生がこんな事をする方だとは思わず……不覚でした」「こんな事ってどんな事？」

腰を抱く手を解き、さつきとは逆の首筋と耳を愛撫する。

「んっ♥ ずいぶんと……慣れてらっしやるんですね」

真つ赤な顔をして、なんとか取り繕って余裕の笑みを浮かべようとするハナコが愛おしく、チンポのイライラが高まる。

「うん。経験豊富なんだよ」

勃起でハナコの腹の柔らかさを感じようと腰を突き出すと、ハナコの顔は笑みを浮かべたまま目だけが丸く見開かれる。

「あ、あの、こんな事をしたら、先生は職を追われるどころではすみませんよ？ 分かっているんですか？」

「そうかもしれないね。でも、答えは一緒だよ。私はハナコとこういう事がしたい」

そう言って勃起チンポをチラリと見えているヘソにグリグリ押し当て、本格的に乳房を手で持ち上げてやんわり揉み始める。

「あうう……」

ハナコはぴくん、と刺激に反応して肩をすくめるが、ついに笑顔を維持していられず耳まで真つ赤にして俯いてしまった。

「それ、ちよつとヒフミに似てるね」

「じよ、情事の最中に他の女性の名前を出すのは失礼ですよ？」



「情事、してくれるんだ?」

「ううーっ……」

いつもの切れ味が見る影もなく、少し小突かれただけで赤い顔で俯いてしまうハナコ。

そんな隙だらけの所に、いつもヘソさえ見えている上着の下から手を入れてブラジャー越しに胸を持ち上げる。

「ひうっ♥」

ハナコを苛めるのも新鮮で楽しいが、とにかくセックスしたいのでほどほどにしておく。

顎を指で持ち上げ、涙にきらめく瞳に非難の眼差しを向けられながらまた唇を塞いだ。

「んっ……♥」

たゆ、たゆ、と乳房を弄びながら、ハナコのぷりぷりの唇をそつと舌で割って入る。

ハナコは見たことがない表情で眉をしかめ、視線を左右にさまよわせてたつぷりと迷ってから……そつと口を開けてくれた。

無遠慮に、気が変わらないうちに素早く侵入する。

「んうっ、む……う、ちゅ……♥」

舌を伸ばし、引っ込み思案なハナコの舌に触れる。口の中を強く吸引して舌を引っ張り出し、音を立ててセックスのためのキスを強要する。

私の意思が固いのを悟ったか、ハナコも努めて力を抜いてされるがままになってくれているのが分かる。

乗り気とも違う反応だが……その初々しさもまたチンポのイライラを煽った。

じい、と上着のジツパーを下ろし、スカートのホックを外す。ヒフミやアズサとはもう何度もセックスしているので手慣れたものだ。

「っー」

精一杯の抵抗と言った感じで涙目で睨みつけていたハナコの目が、ギユツと閉じられる。

見ながら脱がすために、ちゆるんとわざと音を立てて唇を離れた。

「わ、綺麗な下着履いてるね」

ハナコの今日のショーツは薄いピンクのレースだった。

合宿での赤白の縞のものが普段の下着だったとするなら、これは勝負下着とでも言うべき豪華さだ。

「今日は、先生に会いに来たので……き、気合を、入れたんです……」  
露出が趣味みたいな事を言いながらも、セックスを前提にスカートさえ脱いで下着を鑑賞されるのは想定外だったようだ。

上着に手をかけて、殊更にゆっくりと脱がせていく。ハナコの微かな身体の震えで大きな胸が揺れる。

あっけなくストンと床に落ちてしまった上着の後残されたのは、ショーツとおそろいのレースブラだ。

ハナコの綺麗なピンクブロンドより少し明るめのピンクの上下に包まれた裸体は、胸の大きさも腰のくびれも、むっちりとした肉付きの尻も、男好きのする身体だった。

肩を縮こまらせて、そっと両手で胸を隠そうとするハナコだが、もちろん全く隠せていない。

正面から抱きつき、ぴったりとショーツの張り付いたハナコの尻を掴む。

「っ♡」

それだけで声を上げそうになり、堪えるハナコを見つめながら、指を背筋に這わせつつ上に登っていき……ブラのホックを外す。

「先生は……」

「ん？」

「先生は、私がもし、大声を上げて助けを呼んだらどうなさるつもりですか？」

いろいろな感情に揺れる、しかし強い光を湛えた瞳でそんな事を聞いてきた。

「そうしたいのなら、構わないよ」

「も、もし、です。……聴かせて、くださいますか？」

「どうもしないよ。見られながらセックスする」

「なっ……!」

驚愕に目を見開くハナコ。

まあ、既に23人になったセフレが今日もこの階に複数居る。

誤魔化そうと思えば誤魔化せると思うが……どちらにせよ、私がチンポを突きつけた以上、ハナコの処女喪失は絶対だ。

驚愕しているハナコに構わずブラを脱がせ、机の上に置く。

乳首はまだ手で隠されているが、ゆっさりとし重そうにブラから解き放たれた乳房が弾んだ。

「さ、私も脱がなきゃ。みたいなら見ていいよ?」

「え、あ、でっ、では……み、見させて……いただきますね……」

動転してまともに思考が回っていないのか、ハナコは棒立ちで手ブラのまま私が脱いでいくのを見ていた。

さっさと服を脱ぎ捨て、ハナコの注目する中で勃起チンポをさらけ出す。

「こ、これが……先生の、ご立派様……」

ハナコがマジマジと見つめる私のチンポは既にガチガチに勃起しており、タラリと我慢汁まで垂らしていた。

「さ、ハナコも隠さないで、見せて欲しいな」

「う、ううう……(づ、づ)……」

「ごめんなさい! ゆ、赦してください!」

「ずぎ、と一歩後ずさるハナコ。」

「どうしたの? 嫌だった?」

「い、いや、というか……それは、こういう事に興味はその、ありませんけれど……さっ、さすがに、今日この場で処女喪失するとは全く思っていないから……だから、あの、」

「嫌じゃないならセックスするよ」

離された距離以上を詰め寄り、むき出しの勃起チンポをハナコの腹に押し当てる。

ヌルリと我慢汁がヘソの上に塗りたいくらい、ハナコの腹筋が震えた。

「ひいっ!」

その生々しすぎる感触にハナコが情けない悲鳴を上げる。

「あの、先生？ あ、謝りますから、どうか、どうか……」

「ちゃんと拒絶してくれたらもう誘わないって約束するよ」

ほとんど嘘だが。

「うううう……以前の先生はどこに行ってしまったのですか……ずるいですが、そんなの……」

ぬるん、ぬるん、と我慢汁は何度も往復して塗りたくられていく。

手ブラしているだけの無防備な胸を下から持ち上げ、タプタプと上下させてハナコの手のひらを使って乳首を刺激する。

ハナコのむっちりとしたショーツ一枚の尻を撫で回し、指を引っ掛けてずり下ろしていく。

抵抗しようかどうか迷う素振りを見せて、ハナコは結局何もせず顔に顔を背けた。

了承を得た私はしゃがみ込みながら両手でショーツを下ろしていく。

綺麗なハート型に整えられた陰毛が目飛び込んでくる。

スジ自体も整っていて、極度に肥大化したりビラビラが伸びたりはしていないようだ。

「綺麗にお手入れしてるんだね」

陰毛を撫でてみると、柔らかい毛が指に気持ちいい。

「あああ……そんな恥ずかしいこと、言わないでえ……♥」

顔を真赤にして背け、本気で恥じらってはいるようだが……目の前の秘裂からは早くも愛液が一筋滴っている。

「触ってないのに、もう濡れてるね。やっぱり恥ずかしいので興奮するんだ？」

「ですから……そのような意地悪、言わないでください……♥」

辱めるような私の言葉に、嫌がりながらも身体をくねらせている。

私は、そのままハナコにクンニし始めた。

尻を掴んで逃げられなくしてから、股の下に潜り込み上を向いてハナコの外陰唇を舐める。

「じゅるるっ……」

夕焼けに染まるシャーレの執務室に、ハナコの愛液を啜る音が響

く。

ドアの向こうには、今も沢山の生徒がいる。

教室にはヒフミとアリスが次のセックスのために小テストの模試をしているし、視聴覚室ではツルギとイオリという異色の二人が何やら鑑賞している。

もちろんセフレだけではなく、図書室ではマリーが読書しているし、体育館ではハスミとアスナが運動しているのをヒビキが見ている。

それを、ハナコもよく分かっている。チラチラとドアの方を何度も見ながら、私の頭と自分の口を抑えて必死に声を我慢している。

「ふっ、ふーっ！ ふーっ！ ふーっ！」

緊張か、興奮か、私を抑えるハナコの手はカタカタと震えており、舐めしやぶるマンコの内側はヒクヒク痙攣しっぱなしだ。

私に下に潜り込まれてしまったため、つま先立ちのガニ股にされてしまっているポーズを見られたら社会的に終わってしまう……と思っているであろうことは想像に難くない。

そんなハナコのクリトリスを唇で剥き、レロレロと舌で舐め回す。

「んむうううっ♡♡♡」

口を押さえなくても喉の震えは抑えられない。扉の向こうまで届くのではないかと思うほどの大声を上げて、ハナコは絶頂した。

ぷしやあああっ！ と勢いよく出てきた潮をゴクゴクと飲み下していく。

たった一度の絶頂、だがハナコにはとてつもない衝撃だったのだろう、膝はもう笑いっぱなしだ。

口を離してやると、あぐらをかいて座っていた私の膝元にへたり込んでしまった。

「はっ、はっ、はっ……♡」

目が虚ろになり、浅く呼吸をするハナコ。もう手ブラさえする余裕はなく、大粒の乳首を勃起させているのを隠せていない。

ぎゅっ、と乳首を強めにつまむ。

「んくうっ♡」

過呼吸気味だったハナコが気を取り直し、荒く息をついた。

「せ、先生……あのドアの向こうには、今も沢山人が居るんですよ？  
さ、さっきの……私の声だつて、誰かに聴かれてしまったかも」

口の中に溢れるよだれを、ごくんと喉を鳴らして飲み込むハナコ。  
「先生は、どうとも思われませんか？」

さつき浴びた非難の視線とはまた違う……奥底に情欲の火が灯つた怪しげな女の目をして、ハナコが問いかけてくる。

「見つかったら大変だけど、ハナコとセックスするためだからね」

「そんなにも……私と、生徒と、性交したいのですか？」

「したいよ。ゴムも付けずに中で射精するからね」

はあ、はあ、と熱っぽく荒い息で、ハナコが私の言葉を咀嚼するよう  
に黙り込む。

「仕方が……ありませんよね。先生のような、大人の男の方に、性交を  
迫られては……私のような小娘は、従うほかありません」

「ハナコはそう思った方が興奮する、変態だものね」

「あああ……っ ♥ そう、です…… ♥ 私、こんな、恥ずかしくて、背  
德的で、むちゃくちゃなことが……してみたかったです ♥」

にたあ、と口を三日月のようにする卑猥な笑みを浮かべ、ハナコが  
両頬に手を当ててうっとりと言言した。

そろそろとその手が下に降りていき……ハナコの白魚のような指  
が、私のチンポに触れる。

お嬢様学校に通う、もと優等生の綺麗な手が、私の我慢汁にベトベ  
トに塗れていく。

そのぬめりを利用して、亀頭を撫で回し、竿を上下する動きはとて  
も初めてとは思えなかった。

「ハナコはこういうことの知識を持つてみたいだね」

「はい ♥ 御存知の通り、その手の文学を嗜んでおりますので ♥」

一周回って調子が出てきたハナコが、じいと私の股間を見つめなが  
ら手コキをしてくれる。

「心の準備も出来たようだし、挿れていいかな？」

「ふふ……待ってくださいあってありがとうございます。私の……じゅう

ろくさい、現役の学園2年生の処女、どうぞ貰ってください♥」

私の知る彼女らしく、背徳感を煽る言葉でもってセックスの合意をはっきりと口にしてくれるハナコに、びゆるっ、と我慢汁を引っ掛ける。

「そっか、じゃあ……ちよつとまってね」

床の上に散乱するズボンのポケットから端末を取り出し、コタマに連絡する。休憩室で待機をお願いしたのですぐ来てくれるはずだ。

「あの……先生？ 今のは、どちらに？」

「すぐ分かるよ」

シヤツ、と扉が開いた。

「ひっ!？」

ハナコが悲鳴を上げて私に抱きつく。助手席の直ぐ側でおっぱじめたため、扉が開いたらすぐにハナコの裸の背中が見えてしまう位置関係なのだ。

「こんにちは、先生。すぐにセッティングしちゃいますね」

「うん、お願いね、コタマ」

「えっ……えっ？」

訳も分からず目を丸くするハナコの周りで、簡易ながら音響機材を展開してカメラを構えるコタマ。

「彼女はコタマ。ミレニアムの3年生で、私のセフレの1人だよ」

「先生とか、セフレの皆の要望で、セックスを撮影したりしてます。貴女も気が向いたら頼んでくれて良いですよ。テープ代と手間賃程度は頂きますけど」

これから、処女喪失をAVとして撮影するという事実が頭に染み込んで来たのか、ハナコの顔がゆでダコのように赤くなっていく。

「先生……」

「どう？ ハナコなら喜んでくれると思ったんだけど」

「ありがとうございます。こんなにも嬉しいプレゼント、人生で初めてかもしれません♥」

はあ、はあ、と息を荒くして、私の肩に手を置くハナコ。

脚をガニ股に踏ん張って身体を持ち上げて、私の亀頭を掴んで自ら

の膣穴へと導いてくれた。

「ああ、わ、私の、処女喪失が……映像記録として、残ってしまうなんて……♥」

興奮に震える手が、膣穴を捉えそこねる。

ぬる、ぬる、と溢れ出ていく愛液と、犯したくてたまらない我慢汁が混じり合い、むわりと性臭が立ち込める。

やがて、正確に膣穴を捉え……

「み、見ていますか？ 私、処女、を、こんな格好で……自分から腰を落として、今から先生に捧げます♥」

私から目を離し横にいるコタマの構えるビデオカメラを見て、卑猥な口上をスラスラと並べ立てる。

ぐっ、と処女の膣穴をこじ開けて、ついにチンポが押し入っていく。入り口の輪っかになった筋肉が分厚く、とろけた膣内と外界とをキツパリと隔てるかのように強い締付けで快楽を与えてくる。

ぬぶぬぶと膝が震えるハナコの主導で膣を進み、あつという間に処女膜にたどり着き。

「あ、今、処女膜に、当たっちゃっています♥ ああ、私……こんな場所、女になってしまいました♥」

そうして、私と目を合わせず、カメラ目線のまま……ぷっん、と膜を破った。

「うっ、く、ああああっ♥♥♥」

それなりに厚めの処女膜を一気に破ったので、痛みもあつただろう。だがハナコは甘い悲鳴を上げて、背を仰げ反らせた。

膣内はうねり、力の抜けた脚に従ってチンポが最奥をドスンと叩く。

蕩けた膣内の肉のうねりと、入り口の締め付けがギュウギュウと激しくチンポを刺激してくる。

ハナコは、自分を辱めるような処女喪失体験の興奮で絶頂していた。

一生一度の経験を、相手の男と向き合う事ではなく背徳的な演出で興奮することを優先させたのだ。



本物の変態女として、一皮むけたと言っても良い。

「よく出来たね、ハナコ。とても素敵だったよ」

びん、と触ってもいけないのに強く勃起する両乳首をシコシコとしごきたて、絶頂しているハナコに追い打ちをかける。

「あゝーっーっーっ」

タガが外れたように絶叫して更に絶頂するハナコは、もう心の底から快樂を受け入れているようだった。

股間を見ると、たしかにハナコの破瓜の血が流れている。

それを押し流すように後から後から、白濁したハナコの本気汁が溢れ、血をピンク色にしていた。

「はーっ♥ はーっ♥ はーっ♥ せ、せん、せえ……♥ お願いが、あります……♥」

ドロドロと性欲に濁った瞳で、興奮しすぎて歪んだ笑みを浮かべるハナコ。

「ど、ドアに身体を預けて、セックスしましょう♥」

ニツコリ笑って、私は挿入したまま立ち上がった。

「あうっ♥」

奥を強く刺激されて、絶頂したてのハナコが悶える。駅弁の格好で運んだ後、片足ずつ立たせて挿入したまま立ちバックに持つていった。

ハナコが手をつく場所は、執務室のドア。次の瞬間空いてもおかしくないものだ。

もちろん、コタマが通った後ロックをかけているのだがハナコは知らない。

「さあ、思い切り声を出してご覧、ハナコ」

「はいい……♥ 先生の、ご立派なもので、私を犯してくださいっ♥」  
色情狂としか言いようのない、蕩けた声音でハナコが懇願する。

むっちりとした尻を割り開き、ハナコの本気汁をまぶした親指をアナルにねじ込んで犯し始める。

「んひい♥ お、お、お尻の穴あっ♥ 指が入っちゃってますう♥」

処女喪失直後なので、探り探りに腰を使う。

せつかく気分を出してくれているので、傷になるべく触らないように円を描く動きで奥のトロ肉をかき回す。

「あつ、ああーっ♥ おちんちんっ♥ おちんちんっ♥ はいつてますっ♥ わ、私っ♥ ヒフミさんの居る直ぐ側でっ♥ 先生とセツクスしちやつてますっ♥」

配慮など必要ないと言わんばかりに、ハナコは節操なく絶頂してしまっている。

奥をかき回すごとにビクンビクンと全身を痙攣させ、私の親指を食いちぎらんばかりにアナルを締め、潮まで吹いてドアの直ぐ側の床をベチャベチャに汚している。

「まったく……こら、ハナコ。ちよつとお股が緩すぎるよ」

ぴしゃん！ と肉付きのいい尻を平手で打ってやる。

「ひきゆううううんっ♥ ごめんなさいっ♥ お股の緩いみだらな女でごめんなさいい♥」

ハナコはとても楽しげに、本当に壁の向こうまで聞こえそうな位遠慮ない大声で喘いだ。

「もう、しょうがないな。じゃあ、そろそろ膣内に射精するよ」

「ああつ……♥ そんな事をされたらあ、妊娠してしまいますっ♥

トリニティで1人だけボテ腹で登下校するなんて……想像しただけでえ♥ イツクウウウ♥♥♥」

私を待つこともなく、独りでに絶頂してしまうハナコ。

だが俵締め膣の名器であり、ハナコの絶頂に合わせて私もハナコをドアに押し付けるほど奥深くまで貫き、膣奥に遠慮なく射精する。

「あああつ、あああああ……♥」

窮屈な姿勢で、身じろぎもせず恍惚の表情で射精を受け入れるハナコ。

ちよろ、ちよろ、とハナコは失禁し、ドアに小便のマーキングをする。

その一部始終を、コタマは絶妙のアングルで撮影しきったのだった。

興奮のあまり失神してしまったハナコを床に寝かせて、コタマと二人で後始末をしていると、終わった頃にハナコが目を覚ました。

「あつ、ああ……私……なんて……」

素っ裸のままの自分を見下ろして、自分を抱くように腕を組むハナコ。

「お疲れ様、ハナコ。とっても楽しそうで何よりだよ」

「はい……♥ 一生忘れられない、素敵な思い出です♥」

何かを吹っ切り大人の階段を登った爽やかな笑みを浮かべ、裸のハナコが立ち上がった。ポタポタと股間から精液が垂れ落ちていく。

「ああ、お金を上げるから一階でピルを買って帰ってね」

「一階って……あのおでこのチャージングな中学生の子がバイトをしているお店ですか？」

「うん、そうだよ」

愉悦の笑みでピルを買うハナコに気圧されたソラが涙目で会計をしたと、後日ハナコが楽しげに教えてくれた。

## ヤリモク温泉一泊二日（チナツ）

「はい、是非。今日は私が誠心誠意、先生のことをおもてなしいたします」

雪の舞う、ゲヘナ学区の温泉宿。私はチナツに招待されて、2人きりでの宿泊をすることになっていた。

なにやら、1人での宿泊が出来ないという話だったが、キヴォトスで見かける人種の偏りからは他の人達がどういう構成で泊まりに来るのか気になるところだ。

屋外から旅館の中に入ると、一気に寒さが和らぐ。フロントさんが言うには、

「ただいま当旅館ではカップルのお客様に、貸切の露天風呂を無料でご提供しております」

とのことらしい。チナツはカップルとして私と宿泊の予約を入れたようだ。

「えっと、その、実は私が間違えて……」

カップルというのを否定しようとしたチナツの手を握って、間違っていない事を告げる。

「先生……♥」

つないだ手を握り返し、熱っぽい視線を送ってくるチナツ。

「せっかくチナツとゆっくりできるんだし、『いろんな事』したいよね」

「ふふ……はい、私もです♥」

早くも浴衣姿で私を待っていたチナツの身体は冷え切っている。身体を寄せてきたチナツの腕や腰を手で擦って暖めながら部屋へ向かった。

寒いだろうし、入る時間は自由ということなので早速温泉に入ることにした。

中々大胆な作りで、脱衣場が共通になっている。しかし私とチナツは既に肉体関係にあり、どちらも洩ることはなかった。

「まあ……先生、もうこんなに勃起してくださっているんですか？」

チナツは私の股間を横目に見ながら、スルスル帯を解いて浴衣をかごに入れ、下着姿になっている。

15歳とは思えない豊かな胸をブラから開放し、一糸まとわぬ乳房が身体の自然な形状に従って少しだけ外を向く。

私の勃起と興奮した視線をしっかりと受け止めつつ、余裕のある微笑みを浮かべてショーツにも手をかけ、何気ない仕草で脱ぎ去るとかごの中に入れた。

「さあ、行きましようか、先生」

風呂桶に手ぬぐいを引つ掛けて、胸も股間も隠さないチナツが笑顔で言った。

私はチナツの腰に手を回して抱き寄せ、処女を奪ったあの夏合宿の時より少し濃くなった股間の陰毛を指で撫でながら頷くと、ゆっくりと風呂へ向かった。

「お体、洗わせて頂きますね」

風呂に入る前に、まずは風呂の椅子に座って身体を洗う。せっかくだし、お互いに洗いあうことにした。

タオルを頭に巻いて髪を上げたチナツがボディソープを手に取り、両手でぬちゃぬちゃと泡立てて私の股間を優しく撫でるように洗ってくれる。

私も真似してボディソープを手に取り、首筋から撫で回していく。

「ふふ……カップルで宿泊して、混浴で洗いっこしているなんて、ヒナ委員長が知ったらどう思われるでしょうね？」

他の皆は認識していないが、チナツはヒナと私が恋人同士であることを認識している。

その上で不貞行為を働く事に興奮を感じるのがチナツという女の子なのだ。

チナツの細い指が、私の金玉を揉みほぐす。更に身体の下に潜り込み、前から肛門に指先をつぼつぼ入れて洗ってくれる。

そのまま私を抱きかかえるように身体を密着させて、後ろからも手を回して尻など下半身をねっとりボディソープ付きの手で撫で

回してくれる。

チナツの胸は私がボディーツープを付けて撫で回しており、お互いの身体が泡にまみれてヌルヌルと摩擦少なく上下に擦れあった。

腹から胸板にかけて、チナツの大きくハリのある乳房が押しつけられ、少しずつボディーツープが泡立っていく。

チナツの乳首は私のチンポのように固く勃起していた。時折お互いの乳首が擦れ合い、痺れるような快感が走る。

眼鏡を外したチナツの熱っぽい視線を正面から受け止めつつ、私もチナツのほっそりとした背中を追加のボディーツープと共に撫で回す。

かつ、と音を立てて椅子を鳴らし、チナツが腰を上げて私の太ももに正面から座り直した。

傍目には正面座位にしか見えない格好で、大胆に脚を広げて抱きついていくチナツ。

チンポがボディーツープまみれのチナツの下腹部に押し当てられ、2人の腹に挟まれる。

「先生……♥」

がちりちりと脚を絡めて抱きついていくチナツが身体を上下に動かして私に擦りつけ、ほとんどセックスのように甘い吐息を漏らした。

さっきのお返しに、チナツの尻と肛門をボディーツープで洗う。括約筋のリングを指で感じながら抜き差しを繰り返すと、

「ああ……♥ そんな所、汚いです……♥」

私の指をヒクつく肛門で締め付けながら、掠れたような声で心地よさそうにチナツが悶えた。

チナツが身体を上下させると少し遅れて胸がついてくる。乳房の心地よい弾力と柔らかさ、勃起した乳首がくすぐる感触に、チンポのイライラが高まる。

お互いに背中も泡まみれになったので、次はとチナツの白くて程よく筋肉のついた脚を撫でた。

チナツは身体を反転させて私に背中を預け、チンポにむっちりとし

た尻を押しつけながら前に屈んで、私の脚を指の間まで丁寧な撫で回す。

私はチナツの股間に泡をまとった片手を入れ、そつと大陰唇の中に指を忍ばせて撫でるように優しく粘膜を洗う。

「んっ……♡」

私の脚を一生懸命洗ってくれるチナツは、甘い声を上げつつも足を洗うことを優先したようだ。

もう片方の手で眼下に見える白いうなじを丁寧な撫でくまなく泡まみれにしつつ、膝にチナツの乳房が触れる感触を楽しむ。

「先生。そろそろ全身洗いましたから、泡を流しましょうか」

振り返ったチナツの頬は、寒さのせいだけではなくバラ色に紅潮している。風呂桶にお湯をためて、密着したまま身体を流した。

流石に乙女の髪の手入れを私がするわけにはいけないので、頭は椅子に並んでそれぞれ洗う。

すつかり綺麗になった身体で2人して温泉に浸かった。

「こんな豪華な温泉を2人だけでなんて……人生、何が起こるか分からないものですね」

チナツのタオルは、湯縁に置かれた風呂桶の中にある。お互いに一切隠すこともない裸の付き合いだ。

ちらほらと舞い落ちる雪を見上げながら、私の隣に座るチナツの肩を抱き寄せる。

「ふふ……♡ 夏に、ホテルで先生に犯された時はこれからどうなるかドキドキしましたけど……こうして恋人の距離感で先生と温泉に入れるのなら、セフレになって良かったです」

私に身を委ね、頭を肩に乗せるようにしなだれるチナツの笹穂耳が少しくすぐったい。

腰のあたりまでしか水位がないので、チナツの胸はもちろん私のチンポの亀頭もギリギリお湯の外に出ているが、寄せ合った肌は暖かった。

「先生ったら……ずっと勃起していますね。私の身体を早く味わいたって思ってくださいっすね♡ でも、温泉に我慢汁を垂れ

流すのはあまり関心できませんよ？」

何度かのセックスを経てチナツからは処女の初々しきも抜け、余裕をもって私の性欲を受け入れてくれるようになった。

「裸のチナツが隣りにいるから、こうなっっちゃうのは自然なことだよ」「そうですね♥ では、先に少しヌいて差し上げますね。さ、湯縁に腰掛けてください」

言われるがままに腰を上げて足湯をするような形で座り直すと、チナツが足の間に潜り込んでくる。

そのまま私の下腹部に抱きついて、チンポを胸で挟んだ。

「先生の好きなパイズリフェラでお射精しましようね……♥」

チナツはリラックスした笑顔でそう言って、ぱっくりと亀頭を口に含む。

身体を洗っていた時とは違い発情しているという風でもなく、ただ私に奉仕するのを楽しむように優しい笑みを目元にだけ浮かべて、ひよつとこ顔でチンポを吸引してくれる。

「ちゅっ♥ じゅぽ、がぼっ……」

眼鏡を外しているのに加えて、普段より5割増しで寛いでいるチナツに、温泉に入った番いのサルが毛づくろいをするように優しく亀頭をしゃぶられる。

風呂で芯が暖まった柔らかい乳房に竿をふにふにと揉まれつつ、チナツの綺麗な顔を伸び縮みさせての吸い付くようなフェラは視覚的にも強い充実感を得られた。

洗ったばかりでしっとりしているチナツの髪を撫で、ぴくぴくと震えている長い笹穂耳に指を這わす。

「ちゅるっ♥ ちゅるるっ♥」

私の仕込んだ通りツボを押さえた舌使いで裏筋を刺激して射精感を引き出してくるチナツの配慮に甘えて、すぐに射精することにする。

「出るよ、チナツ」

「ん……♥ ちゅろろっ♥ がぼっ、がぼっ♥」

フィニッシュとしてチナツが激しく顔を上下させて唇のリングを



亀頭の力りで往復させる。100点満点の優等生フェラに心地良く射精した。

「うん……♡ も(づ)……♡」

口内に溜まっていく大量の精液をこぼさないように顎の下に手を添えて、頬を膨らませて受け切るチナツ。

射精が終わると、私の太ももに手を置いて背筋を伸ばした。

顔を近づけて、

「あー……♡」

ぷるぷるの精液が口中に溜まっているのを見せてくれる。チナツの舌が私の精液を味わうかのように口内をゆったりかき回していた。

「んくっ……こくっ♡」

少し眉をしかめ、喉に絡みながらもすべて飲み下してくれるチナツ。

「はあ……♡ ろうれふか、へんへひ?」

「うん、よく出来ました、チナツ」

すっかり綺麗になった口内を見せてくれたチナツが、私の答えを聞いてニツコリ笑った。

精液でヌルついた唇を指で拭い、温泉のお湯を口に含んでくちゅくちゅとゆすいで捨てる。

「どうですか? 少しは落ち着きましたか、先生?」

「うん、ありがとうチナツ。次は肩まで浸かろうか」

愛情たっぷり奉仕を受けてひとまずチンポのイライラが収まった私は、水深の深い所でチナツと一緒に全身浴を楽しむのだった。

「ふう……いいお湯でした。雪の舞う中で、先生と2人肩を寄せ合って温泉に浸かる……こんなに幸せで良いんでしょうか?」

「もちろん。チナツはいつも頑張ってるからね」

たっぷり温まり、部屋についても二人の肌は桜色だ。しばらく、当たり前障りないチナツの学園生活の話やシャーレの事を雑談し、部屋に運ばれてきた美味しい夕食を頂く。

そして、1つの部屋に隣り合って敷かれた布団を、手をつないだま

まに見下ろした。

「先生。この間の薬膳のように、先生の好きそうな健康法を知ったのですが……少し試して見ませんか？」

「健康法？」

唐突な発言に首を傾げるが、チナツはゆつくりと浴衣を脱いでいくので私も合わせて全裸になった。

眼鏡を枕元に置いたチナツは、裸のまま跪いて掛け布団を脇にどかす。

「さあ、先生。横になってください」

言われるがままに仰向けになると、チナツが既にフル勃起したチンポに手早くコンドームを被せてくれる。

「それで、チナツ。健康法っていうのは？」

「はい、今回は『房中術』というのを試して見ようと思ひまして」

房中術。名前くらいは知っている。互いの気を循環させてどうたらという、古代中国の話だ。

「さすが先生、博識ですね。その古代の健康法を現代の解釈で、一種の健康体操のように分かりやすくまとめた本があつたんです。今日はそれを実践しようと思います」

「うーん、まあチナツがそういうのなら……」

正直、ガッツリとやりまくりたい気持ちはあるが、せつかくのチナツの提案なので付き合ってみることにする。

「今回は、『兔吮毫』という体位を試してみましよう。いわゆる、背面騎乗位です」

チナツは私にまたがり、背を向けてチンポを挿入した。

私と同じく既に濡れていた膣内に、滑らかにチンポが飲み込まれていく。

「ああ……チナツの膣、もう私の形にピッタリだね」

「はい……♥先生のオチンポ、ゴム越しにも熱くて、お腹の中がピッタリと満たされるの感じます……♥」

ゆつくり休んで美味しいものを食べ、誰も邪魔の入らない静かな所で可愛い生徒のマンコに挿入する充実感に浸る。

「それで、チナツ。どうすればいいの？」

「はい、先生は私のGスポットについて、絶頂まで感じさせれば良いそうですね。ただし、射精してはいけません。そうすれば、病気にかかりにくくなるのだそうです」

なるほど、と頷く。

「そういう事ならいつもやっているから大丈夫だね。いくよ、チナツ。」

「はい、お願いします♥」

部屋の明かりを付けたままなので、チナツの白くて丸いお尻がよく見える。

慣れた腰使いで勝手知ったるチナツのGスポットをゆっくり目に突き上げる。

「あんっ♥」

膣口を押し広げるように入り口ギリギリから上側を擦り上げGスポットを刺激すると、チナツは甘い声を上げてお尻の穴をキュツと締めた。

「さすが先生、一突きで私のGスポットを捉えてしまわれましたね♥」

チラリと肩越しにこちらを振り向くチナツと微笑みあって、ゆったりとピストン運動を開始する。

「ふっ、んっ♥ はっ、ああっ♥」

普段のセックスのようにガツガツと腰を振ることもなく、それこそ健康体操のようにいつまでもスローペースで2人息を合わせて腰を上下させる。

当然ながら、チナツの膣はそれでも十分に気持ちがよく……10分もすれば、射精感を堪えなければならなくなった。

「はあっ♥ んああっ♥」

それはチナツも同じことで、腰を上下させる度にぢゅぶ、ぢゅぶ、と粘ついた音を立てるようになっていく。

風呂で洗って綺麗になった私の陰毛がチナツの愛液に濡れ、尻の下の布団にもシミが広がっているのを感じる。

「せつ、先生え♥ 私、イク、いきますっ……♥ 先生にGスポット突

かれて、いつちやいますっ♥」

チナツの綺麗な声が、絶頂に耐えて掠れている。

最後まで最小限の動きでゆったりとチナツのGスポットを擦り上げると、ぎゅうと私専用の1年生膺が締まった。

「くっ、はぁ♥ あぁあっ♥♥」

チナツの美しい背中が、絶頂にくねり、踊る。背を反らしたり腰を左右にひねったりする度に背中の筋肉や肩甲骨が陰影を変え、私の目を楽しませた。

「はぁーっ、はぁーっ……♥」

余韻に浸っているチナツが振り返ると、頬をバラ色に染めた笑顔に向けてくれる。

「お上手でした、先生♥ どうでしょう、効果は実感出来ますか？」

「うーん、チナツのマンコが気持ちいい事しか分からなかったかな」

そう言うときチナツは顎に指を当てて少し考える仕草をして、

「まあ、体操ですから普段からしていないければそんなものかもしれないね。では、他のを続けて良いでしょうか？」

「うん、チナツの勉強の成果、教えて欲しいな」

普段はあまりやらない体位をゆっくりと楽しめるので、特に断る理由はない。

チナツは笑顔になると、次の体位を指示した。

「次は鳳翔ほうしやうという体位です。先生が教えてくれた、『だいしゆきホルド』というのに当たります」

私はチナツを布団に仰向けに押し倒し、覆いかぶさって深く挿入した。

チナツはVの字に脚を上げて、私の腰の後ろで足首を絡めて固定する。

「ああ……♥ 先生のチンポ、とつても深くまで入っています♥ それで、私が3×8の24回腰を動かすのだそうです。それを私がいくまで繰り返して、イッたら止まる。それで健康になるそうです」

聞いていると、ゆっくりと触れ合う事を主体として沢山スキンシップをする事でホルモンの分泌を促す……そんな思想だろうか。

「じゃあ、チナツとキスしたりはしていいの？」

「はい♥ 本当によくお分かりですね。キスをしたり、愛を囁くのも良いとされていました」

大体理解出来てきた。せっかく温泉旅館でしつぽりとできるのだし、今日はこういうのも悪くはないとチナツとの房中術を楽しむ事に決める。

「じゃあお願いね、チナツ」

「はい、途中でイッてしまわないように、ゆっくり始めますね」

私の体の下から抱きつく形のチナツが、私の腰に絡めた足を支えにして膣を持ち上げるように腰を上下させる。

いつもだったら私の方から杭打機のようにガンガン突く所だが……完全にチナツに任せた動きに身を任せるのも新鮮で良い。

目の前でゆれるチナツの胸を軽く揉みつつ、唇がくつつくだけの軽いキスを繰り返す。

「ちゅっ♥ ちゅうう♥」

限界まで勃起した状態が続くチンポがチナツの膣の中でのたうつ。

腰を思い切り振りたい衝動をチナツへのスキンシップで紛らわせながら、だいしゆきホルドの体位でチナツだけに腰を使わせる特別感をじっくりと味わった。

「に、じゅう……♥ にじゅういち……ふう、ふう……♥ にじゅう、に、にじゅう、さん、にじゅう……よん♥」

1セット目が終わる。キュウキュウとチナツの膣が締まるため、これだけでも射精を我慢した実感があつた。

「では、次の24回を始めますね……♥ いーち、にーい、さーん……♥」

イッても良いためかチナツの方は慣れがでて、温泉に浸かっていた時のようなりラックスした笑顔を浮かべていた。

楽しそうなチナツのカウントを聞いていたくて、キスではなく耳を唇で食むことにする。

「あん……♥ そこ、弱いです……♥ すぐにイッてしまいそう♥」

色っぽい、鼻にかかったような甘い声を耳元で囁かれ、どくんとチ

ンポが跳ねた。

「では、続けさせて頂きます……♡ しーい、ごーお、ろーく……♡」  
カウントと共にチナツの腰が持ち上がり、膣の中でチンポが咀嚼されるようにヒダが撫で、きゅんきゅんと締まる。

ベツタリとお互いの身体が癒着してしまつたかのように肌をくっつけながら、体の奥底からゆつくりと汲み上げるように快樂を引き出していく。

チナツの体温、チナツの全身の柔らかさ、チナツの優しい声、チナツの膣の心地よさ、すべてがじんわりと染み込むように実感でき、いつもよりも深く没頭できている気がした。

私の背中を撫でるチナツの手の動きもいつもより激しく、チナツもまた深い興奮に包まれている事が手に取るように判る。

「チナツ……好きだ……」

自然と、心の底から求愛の言葉が湧いてくる。

「先生……♡ 好きです……♡ 愛しています……♡」

同じペースで腰を動かしつつも、目を潤ませて私に愛の言葉を囁くチナツ。

どちらからともなく顔が近づいていき、唇が重なる。

同じタイミングで舌を伸ばし、手と手を握り合うように自然に舌を絡める。

「んっ……♡ んっ……♡」

あくまでもゆつくりと、チナツの腰の動きに任せての房中術の最中に心の底から湧き上がってくる愛しさを確かめあうように、私達は強く抱き合い、唇を重ね、舌を絡めた。

「んう……♡ んむう……♡♡」

とくん、とくん、と心臓の鼓動さえも共有し、体温がピッタリと同じになったような錯覚を得る。

心の中さえもすべて分かり合っているような、穏やかで強い愛に身を任せていると……チナツの絶頂が近い事が何となく分かった。

ディープキスをしたまま至近距離で見つめ合い、揺れる瞳が絶頂の宣言をしたことを感じ取る。

「んんっ……♡ ふうーっ、ふうーっ♡ んー……♡♡♡」

最後までペースを乱さぬまま、穏やかに、深く、チナツは絶頂した。私の形びったりになった15歳の若い膺が、普段の小刻みな痙攣とは違う大きな波のようにゆっくりとした締めと開放を繰り返し、限界まで射精感が募る。

しかしせっかくのチナツからの提案なので、頑張つて耐えた。つるん、と自分の体の一部のようなだったチナツの舌が抜けていき、震える吐息を唇に感じる。

「ああ……♡ すごくいです、これ……♡ 私、まだイツたままで収まらなくて……♡ 先生の事が愛しくて、たまらないんです……♡」

感動に震えるチナツの唇が、夢を見ているようにふわふわとした言葉を紡ぐ。

いつになく情熱的に私を見つめるチナツ。これを見ただけでも房中術の実践に付き合った甲斐があったと言えるだろう。

「チナツ……もう、我慢できない。思い切りチナツで射精したい」

「はい……♡ 先生のお望みのままに、思い切り私を犯してください♡」

作法として正しいか分からないが……じっくりとお互いを高めあった結果、最後までやりたくて堪らなくなってしまった。

チナツも同じ気持ちのようで、私の腰に絡めた脚にギュツと力を込めてくれる。

「ふんっー」

ぱあん！ と拍手をするかのようにチナツの尻と私の下腹部が打ち鳴らされる。

ずくん、と痛みにも似た激しい射精の前兆を、今度こそ我慢しなくて良いのだと思いきり叩きつけるように腰を振った。

「ああっ♡ ああああーっ♡♡」

激しく奥を貫かれたチナツが私の腕の中で身体を捻り、仰け反り、善がり狂う。

構造的に防音になっているはず……などと考えた訳ではなく、チナツを啼かせたくて腰が止まらない。

ぱん、ぱん、ぱん、ぱん、と女体の負担も考えないがむしやらの腰の打ち付けを、チナツは甘くも激しい善がり声で全肯定してくれる。あんなにも射精を我慢したのに、思い切り腰を打ち付けても中々射精が出来ない。

その分すごいのがでる予感に任せ、ひたすらに腰を打ち付ける

「あゝっ♥ あゝっ♥ あゝっ♥ あゝっ♥」

意識が白み、腰を振る事しか考えられない。

チナツのあえぎ声も規則正しく、私が奥を叩くのに合わせた反射のような、音程の低いケダモノの発情声に変化していく。

(くる……！ 射精する……！)

(きて……♥ 私に射精してください……♥)

心と心で言葉を交わした、ような気がした。

「うゝっ！」

「おゝっ♥ おお、おおおおああああえええええええ……♥♥」

ぶる、ぶる、と全身が総毛立つような震えに包まれ、耳鳴りと共に射精が開始された。

チナツもまた、声にならない震えをそのまま喉で増幅したような、淫らさを音程で表現する芸術のような音を上げて絶頂する。

お互いに、指一本動かさない。

どく、どく、と吐き出され続ける精液そのものになつて体の外に流れてしまうような安堵と不安に包まれ、チナツの膣のうねりと暖かさだけが唯一頼れるものとして感じ取れる。

「んおおおおおお……♥」

チナツの両脚は解かれ、布団に力なく落ちていく。私に貫かれたままの姿勢で全身を痙攣させて、ゴム越しのチンポをもぐもぐと美味しそうに膣口が収縮して頬張っている。

いつもの知的なチナツは消え失せ、涙も鼻水もよだれも垂れ流しのままに、私と同じく股間の感覚だけが全身を支配しているのだろう。

どくん、どくん、と再現なく吐き出される精液でゴムが膨れ、自然とチンポが押し出され、引き抜かれていく刺激がまた絶頂を誘発する。



射精する肉塊と精液を搾り取る肉塊に成り果てた私達は、結局チンポがずるんと抜け落ちるまで他の行動を何一つ出来なかった。

「はあ、はあ、はあ……」

「ひゅーっ、ひゅーっ ♡ う、あああ…… ♡」

力尽きてチナツの肉布団に沈むと、縋り付くようにチナツからも抱きしめられた。

「はあーっ、はあーっ ♡ す、……凄かった、ですね…… ♡」

「うん、房中術もバカにならないね……」

ノロノロとチナツが私の股間に手をやり、ゴムを外してノールツクで口を縛る。

たっぷりと重いそれを目の前に掲げると、うっそりと笑った。

「こんなに沢山、私で射精してくださいっただね……ふふっ。ヒナ委員長よりも沢山でましたか……？ ♡」

汗だくでセックスした後の頬に髪を張り付かせた顔には、どこか清々しくて誇らしげな表情が浮かんでいる。

全身全霊の射精をした後だと言うのに、私のチンポが急速にイライラしてきた。

「またそうやって、不貞を楽しんで……いけない子だ、チナツ。お仕置きをしなくちやね」

「はい…… ♡ 先生のたくましいオチンポで、一晩中チナツを躡けてください…… ♡」

私はチナツの腰の下に腕を入れて抱き起こすと、連れ立って襖を開けた。

窓と部屋の間にある、和風旅館によくある細長い板の間にソファが向かい合わせに一對置かれている。

目と目で通じ合い、チナツにゴムを装着してもらおう。

そして、チナツはソファの背もたれに手をつけて尻を突き出した。後からチナツの尻を挿んで、ぐっしよりと濡れそぼったままのチナツの膣にぬるんとハメる。

先程のじつくりゆったりとしたセックスとは逆に、私の好きなようにチナツのマンコをカジュアルに使わせてもらう。

カーテンの開いた大きな窓の外には、ゲヘナの夜景が広がっている。

時折地面が星のように瞬くのはマズルフラツシユなのだろう。もしかしたら私の顔見知りの誰かがそこにいるのかもしれない。

そんな景色が広がっているということは、目を凝らせば向こうから全裸の私とチナツが見えるということでもある。

そんな刹那的なスリルをスパイスに、ただチナツの身体を貪る事を目的としたセックスをする。

「ああっ♥ あっ、ああーんっ♥」

チナツの声も背徳に酔いしれているのか、先程よりねっとりと思いましい。

目の前でパクパクとおねだりするように開く肛門に、愛液を絡めた指を突っ込む。

「んおおっ♥ あうう♥ もっと、もっと激しくしてえ♥」

気分を出して淫らなおねだりをするチナツの尻をぴしゃんと叩き、合わせて強く腰を突きこんだ。

「んはあああっ♥」

声の大きさを気にすることもなく、伸び伸びとした淫らな声を上げるチナツの尻を強く掴み、フィニッシュに向けて腰の振りを早める。

「あっ、あっ、ああーんっ♥♥」

房中術で学んだ、息を合わせた腰の振りで最後の射精を補助してくれるチナツ。

また一つ淫らに学びを得た生徒の優秀さに満足しつつ、射精した。

「いつ、くううう……♥ あはあああ……♥♥」

ソファに突っ伏すように身体を預けて、尻を突き出したままで絶頂するチナツ。

ぬぽんっ！ と勢いよくチンポを脱いだ私は、そのまま眼前に差し出した。

チナツは何も言わずとも丁寧にゴムを外し、唇をすぼめて尿道に残っている精液を吸い出してくれる。

「ぢゅるるっ♥ ぐくっ♥ ……ちゅぱっ♥」

最後にサービスののように亀頭にキスして口を離し、次のゴムを装着してくれた。

チナツを正面から抱きかかえ、駅弁の体勢でまたマンコを貫く。

「あうっ♥」

そのまま襖を開けて部屋の中へ。つい数時間前、2人でゆったりと夕食を食べたテーブルにチナツを載せ、上から覆いかぶさって犯す。

「あっ♥ あっ♥ あっ♥」

そのまま、私達は火が点いたようにセックスし続けた。

布団の上でも、部屋の隅でも、廊下でも、洗面所でも、とにかくハメてハメてハメまくった。

「ふう、ふう、ふう……♥」

最終的に、チナツの裸体の上には色とりどりのゴムが並べて置かれることになった。

マンコを隠すもの、太ももを飾るもの、腹の上に置かれたもの、胸に張り付いたもの、チナツが縛った口を逆さにして、精飲しているもの……

チナツも私に成果を誇らしげに見せつけるかのように脚を開いてゴムをディスプレイしてくれる。

これが房中術の成果だというのなら、今後もチナツには房中術を学んでもらうのも良いかもしれない。

金玉を空っぽにして、そう思うのだった。

お姉ちゃんには内緒ですよ（ミドリ）

「誕生日おめでとう、モモイ、ミドリ」

12月8日。その日はモモイとミドリの誕生日だ。既にゲーム部で誕生日パーティーをやってきたという2人だったが、

「先生！ お誕生日に一緒にできる2人用ゲーム買って〜」  
などとおねだりしてきた。

「ちよつと、お姉ちゃん！ 何ずうずうしいことをいつてるの！ すみません、先生」

「だってお誕生日なんだよ！ 言うだけ言わなきゃ損じゃん！」

ニコニコと上機嫌に甘えてくるモモイの頭を撫でてやると、彼女は猫のように目を細めてイーツと笑った。

「ゲームは無いけど、2人分のケーキは用意したよ。さ、どうぞ。お茶を入れてくるよ」

そういつて用意しておいたケーキを出すと、

「ひゅ〜！ 先生やるう〜！」

「す、すみません、わざわざ用意していただいて」

執務室に持ち込んだ電気ケトルで淹れた紅茶で誕生日パーティーを開催した。

騒がしいモモイと静かなミドリ、2人とも笑顔で、とても和やかな時を過ごすことができた。

「ふ〜、ごちそうさまでした！ よっし、今日はユズにだって勝てそうな気がする！ ゲーセン行ってくるね！ ミドリは？」

「私はいいよ。ていうかお姉ちゃん、一応ここには手伝いに来たんだからね？」

「あつ、あー！ キコエナイー！ そんなじゃ行ってきまーす！」

ぴゅー、と走って去っていくモモイ。ミドリは苦笑してそれを見送った。

「いいの？ 今日くらいモモイと遊んできても良かったのに」

「ふふつ、良いんです。むしろお姉ちゃんには感謝しなくちゃ。……」

先生と、2人きりの誕生日を迎えられたんですから」

そう言って、ミドリはうつとりと少しだけ目を細めて笑った。小さなミドリに女を感じる瞬間だ。

チンポがイライラしてしようがない。

ミドリはキャスター付きの椅子を押してトコトコ歩いてきて、私の隣に触れる位の距離で座る。

「お誕生日は家族と一緒に過ごさなくちゃいけません。ねえ、先生……」

ミドリは私の太ももに小さな手を置いた。

「アリスちゃんと、セックスしてるんですよね」

じいつ、と私の目を見つめるミドリ。

「……いきなりどうしたの？　というか、ミドリみたいな女の子が男にそんな事を言っちゃ駄目だよ」

「私にはセックスしてくれないんですか？」

私を見上げるその瞳が潤んで、哀願してくる。

ため息をつく、と、ミドリの頭をそつと撫でた。

「2人から聞いたの？」

「いえ、何も聞いていません。でも部屋に居ると何か変な臭いがすることがあって……臭いのしなかったアリスちゃんとユズちゃんが、先生の所から帰ってくると臭いがするので」

「どうやら、最近アリスやユズと3Pが多くなったのが関係していたらしい。」

ユズも処女だった頃の恥じらいはもはやなく、日々私のチンポを攻略しようとしてとせと腰を振っている。

——最近、先生とのセックスが増えたからゲームセンターでゲームをする回数が減って、お小遣いが溜まるようになったんです。

とニコニコして言ってくれたユズにたっぷりとセックスをしてあげた。ユズが出費しない分私のコンドーム代は増えているが、まあ可愛いものだ。

精液の臭いが染み付いて落ちない位になった2人を思い浮かべながら、ミドリがこれほど望むのならこれ以上隠す意味はないと思い、小さく可愛らしい耳をなでる。

「あ……♥」

私の意思を目で感じ取ったか、悲壮だったミドリから全身の強張りが解けていく。

「しようがない子だな、ミドリは。そのうちミドリやモモイもセフレにしようと思っていたのに」

そつと頬に手を添えると、ミドリは私の手を両手で包み、愛おしそうに目蓋を伏せて手のひらに頬ずりした。

「……今はそれで良いです。皆いつしよっていうのも、悪くはありませんから。でも、いつかは私一人に絞って欲しいです。いえ……その時が来るまで私は先生との関係が続けます」

静かに、しかし強い意思を持って紡がれるミドリの言葉にチンポをイライラさせ、頬に添えた手でミドリに上を向かせ、唇を奪った。

「んっ……いー」

触れた瞬間、ミドリの全身がまた強ばる。しかし、少し間をおいた後自分から唇を開き、舌を差し入れようとしてきた。

「んうっ♥」

ミドリの舌を迎え入れるのと同時に、私からもミドリの舌を捉えて絡める。

「んうっううっ」

大胆な行動に比して経験が全く無いミドリが、初めてのディープキスに震える。

性的な刺激に順応できずにパニックになりかけているのか、いつの間にか小さな両手は私の服の胸の下あたりを掴んでいた。

ゆっくり、ゆっくり……ミドリが私とのキスに慣れるまで、ほんの少ししか舌も唇も動かさず、じっとしている。

「ふう……ふう……♥」

顔を真っ赤にしつつも、ミドリの様子が落ち着いてくると、首筋から耳にゆっくりと指を上下させつつ舌を動かし始めた。

「ん……♥」

今度はミドリも落ち着いて舌を絡めてくれる。

私は先程食べたケーキと紅茶の風味が残る口内を舌で撫で回し、ミ

ドリは顔を上に向けた状態で流し込まれる私の唾液を乳飲み子のように無心にちゅうちゅうと吸いたて、飲み下している。

首筋を這っていた手を、下に下ろしていく。

フード付きのコートの、内側。シャツに直接触れ、肩から胸元へと無遠慮に降りていく。

「……………」

いよいよ性的な行為が始まる事を実感して、ミドリの身体が震えている。

ぢゅうう、と唇を強く吸い、安心させるようにもう片方の手でミドリの手を握り、恋人繋ぎに指を絡めた。

「んふう……………」

ミドリのお気に召したようで、絡めた指をさわさわと動かして私の手の感触を味わっている。

平坦だがホカホカに暖かくなっているミドリの胸に、私の手のひらが当たっている。

シャツの下から伝わる感触は、まだスポーツブラを付けている事を示していた。

幼い乳房に痛みを与えないよう表面をなぞるように撫で回して微かな胸の柔らかさを堪能する。

「んっんっ♥」

直接的な刺激に、ミドリがピクピク反応する。しばらく繰り返すうち、シャツとスポーツブラの下に乳首が固くしこり始めているのが感じられるようになった。

かりかり、と服の上から爪で搔いて刺激する。

「んううんっ♥」

よりピンポイントな刺激により、ミドリと重ねた唇の間から甘ったるい声が漏れ出る。

恋人繋ぎの手はしっかりと握りしめられ、短いズボンから伸びた白く細い脚はモジモジと内股に擦り合わされている。

カリッ、と強く弾くと、

「んむっ、うあああっ♥」

乳首だけで達したミドリが、背を仰け反らせて私から口を離してしまつた。

まだ清らかな乙女であるミドリが乳首イキをきめた甘つたるい声がチンポのイライラを加速させる。

ミドリの瞳は快楽に潤んでいて、少女が大人の男を相手に解いてはいけない警戒を解こうとしている。

夢見る乙女と、生々しい現実に身を浸そうとしている女の境目、チンポを突っ込まれて処女を失う直前にしか見るこの出来ない、どんな宝石よりも貴重な輝きに見惚れた。

デープキスのように視線を絡め合い、縋り付くように握られた小さな手を包み込むようにそつと受け止める。

目の前の乙女の処女を奪いセフレにするべく、隙無く締められていたネクタイをしゆるりと解き、シャツのボタンを焦らずゆつくりと外していく。

「はあーっ、はあーっ♥」

絶頂の余韻に震える荒い息と、ミドリの胸を撫で回すようにシャツのボタンを外す衣擦れの音だけが聞こえる。

一番下までボタンを外されたシャツの下には薄手のキャミソールがあつて、私の指一本でめくりあげられてしまう。

白に黄緑の縁のブラは、触った通りスポーツブラだった。

「あ……恥ずかしい、です。こんな、子どもっぽいの……」

今更ながらに胸元を隠そうとするミドリの手を制し、ブラを直接に撫で回す。

「とても可愛くて似合ってるよ」

そう言いながら、ブラを下から指一本に引っ掛けて捲りあげていく。

「……………♥」

真っ赤になつた顔を少し背けながら、握った手を微かに震わせながら、ミドリは無抵抗にそれを受け入れる。

じわじわと持ち上がっていくスポーツブラの下から、ミドリの微かな膨らみが見え……ついに乳首が私の目に晒された。



すると抵抗なく持ち上がったスポーツブラに、ミドリがぎゅっと固く目をつむる。

薄ピンク色の形の良い乳輪と、同じく可愛らしい乳首。

「ミドリの乳首、綺麗だね」

「やあ……♡」

むずがるように身体をくねらすミドリの胸の中央に手を当てると、トクトクと心臓が早鐘を打っているのが伝わってくる。

しっとり汗ばんだミドリの乳首を、ついに直接に撫でた。乳輪の縁を撫でるように、クルクルと指を回す。

「は、あ、ああああんっ♡」

今までとは一段も二段も違う刺激の強さに、ミドリが悩ましげな女の声を上げる。

「ミドリ、とても色っぽい声だね。気持ちいい？」

そんな言葉を投げかけると、少し恨めしげに眉をしかめながらも、

「は、い……きもっ♡ち、いいっ♡ですう……♡」

私の指の加減でとぎれとぎれになりながらもちやんと答えてくれる。

ぐ褒美に、乳首をそつと摘んでクリクリとダイヤルを回すように左右にひねってやる。

「んきゅっ!?!♡」

ビクンと肩を上げて刺激に反応するミドリ。この様子だとまた絶頂してしまったのかもしれない。

「あ、ああ、ああああ……♡」

今までより更に強い絶頂だったのか、ミドリは上を見上げたまま呆けてしまった。

握りしめる力が緩くなった手を解き、胸の中央から外側へと手を滑らせるようにミドリの服を脱がせてしまう。

シャーレの執務室、まだ昼過ぎといった時間に、ミドリの上半身が一糸まとわぬ姿で陽の光に照らされている。

「さ、そろそろズボンも脱ごうね」

チラチラと入り口の方を気にして裸の胸を両腕で隠すミドリをよ

そこに、ズボンを脱がせていく。

視線で促すと、泣きそうな顔をしながらミドリが腰を浮かせてくれる。

ズボンを脱がせた瞬間に、むわりと饅えた雌の臭いが広がった。ブラと同色の柔らかそうな綿のショーツは、ミドリ細い脚では隠しきれない股間がすでに湿っている。

すうう、と鼻で息を吸い込む私に、

「わああっ、や、やめてください先生！」

本気で泣きそうな声でミドリが私を止めてくる。

「どうして？ ミドリの匂い、すごくエッチでいい匂いだよ」

「ううう……だからって、お股の匂いをそんなに嗅がれるのは、その……」

「じゃあ、ミドリも私の匂いを嗅いでみてよ」

ショーツ一枚のミドリを前に、私は下を脱いでいく。

我慢汁でパンツを汚してしまった勃起チンポを乙女の目の前に放り出した。

「ぐくっ……これが……先生の……♥」

下半身裸で椅子に座った私の前にミドリが跪く。何も言わずとも先端に鼻がくつつく位顔を近づけてスンスンと臭いを嗅ぎ始めた。

「ああ……♥ 先生の臭い、すごく、濃くて……嗅ぐたびに、ドキドキします……♥」

囁くような小さな声なのに、心地良く鼓膜を揺らす雌の声に勃起が更に硬くなり、ミドリの目の前でとろりと我慢汁を垂れ流す。

「あ……れう……♥」

反射的に、ミドリがその我慢汁の滴りを舌を伸ばして受け止める。勢い余って舌がピトリとチンポの裏筋に触れてしまった。

「……………」

ミドリは目を見開いてすぐ下にある亀頭と私の顔との間で視線をさまよわせる。

「ちよつとよかった、ミドリ、そのまま私のチンポをしゃぶって欲しいな」

「ふえっ!？」

舌を突き出したどこか間抜けな顔のまま、ミドリはおずおずと口を開けて私の亀頭を頑張つて口の中へと収めていく。

「あもっ……♡ うん、むうっ……♡」

小さな口には収まりきらない亀頭に、コツコツと歯が当たっている。それも悪くはないのだが、私は優しくミドリの頭を撫でた。

「ミドリ、歯が当たると痛いから、唇を内側に巻き込んで歯が当たらないようにしてみてくださいるかな」

「ふあふい……」

大きく口を開けたままで、私の言ったとおりにしてくれるミドリ。

「ああ、いいよ、ミドリ。チンポに吸い付いて、頬の内側をぴったりくっつけてみて」

ネコミミヘッドフォンだけはいつものミドリなのに、興奮してトロンと下がっている目元も、唇を内側に巻いて頬を凹ませるフェラ顔も、すっかり雌の姿になっている。

肋骨さえ浮いてしまいそうな細い体は明るい日差しに照らされて、ほんの少しの胸の凹凸など見て取ることは出来ない。

その中で、インドア派で白い肌に薄ピンクの乳首が勃起しているのだけは強調されたかのようにはつきり見えた。

うつとりとチンポをしゃぶるミドリの頭や耳を愛撫しながら、しばし乙女の初フェラに身を任せる。

「あもっ……んぐっ……♡」

時折えずくような声を喉から鳴らしつつ、ミドリは鼻息荒くフェラを続けている。

小さな口には大きすぎるチンポを咥え込むために大きく口を開けて、それでも頑張つて頬を凹ませて吸い立ててくれる。

絶え間なく溢れる我慢汁がミドリの口内に溜まり、躊躇なく飲みくだされる。

「ぢゅぞぞっ…ぐくんっ♡」

自らの考えで頭を前後させて口マンコを奥まで使い、唾液と我慢汁の混合物を下品な水音を立てて吸い、飲み込んでくれる。

初の射精は子宮に注ぎたいと思い、ミドリの頭にそつと手を添えてフェラをやめさせた。

「ミドリ、そろそろ、しようか」

「はあ……はあ……はあ……ふあい♥」

よほど必死でチンポをしゃぶっていたのだろうか、真つ赤な顔で肩で息をするミドリを屈んで抱き上げ、膝の上に乗せる。

ヒナとほとんど変わらない143cmのため、ミドリの身体の扱いには困らなかった。

まだ意識がフワフワしているうちに、するりと最後の砦であるシヨーツを脱がしてしまう。

再度ミドリを持ち上げ、机の上に仰向けに寝させる。

いつものマットを持ち出した所だが、今この階の倉庫にはまだセフレにしている生徒が居るので無理だった。

せめてクッション位はと、ウエーブキャットの抱き枕を腰の後に入れて犯しやすいように角度を整える。

「いくよ、ミドリ。初めては膣内に射精するからね」

「えっ……いいんですかっ♥ もし赤ちゃん出来たら、そのまま産んで良いですよね？」

目の色を変えて笑顔を浮かべるミドリ。

案の定というか前のめりなミドリに、私は一つゲームを持ちかけた。

「セックスが終わったら、お金を渡すから下のコンビニで避妊薬を買って飲んでね。それでも妊娠したら……ミドリの好きにしていよ」

「はいっ。……赤ちゃん産んだら、卒業した後でぜったい籍を入れてくださいね……♥」

ミドリはねつとりとした笑みを浮かべて、細い脚を上げる。靴と靴下、そしてヘッドフォンだけをまとった犯罪的な程に繊細な少女の裸身だ。

つるりと綺麗な曲面を描く恥丘の真ん中に、小陰唇を全くはみ出していない美しい一本の筋が引かれている。

指でくぱつと割ってあげると、綺麗なピンク色の陰唇と膣口がしつとりと濡れていた。

改めて見ると、その造形は全体的に小さい。精巧なフィギュアときえ感じられる小ささは、まともに挿入できるかも怪しいレベルだ。

「入れる前にもつとほぐさないと駄目だね。ミドリ、指で開いたままにして」

「う……はい……♡」

ミドリの繊細な絵描きの指が、はしたなく開脚した股間を自ら広げる。幸い机の上に乗っているのでクンニはしやすい。

湿っているとは言え強引に私のチンポを入れたら裂けてしまいそうなお小さな穴に口づけた。

「あつ♡ ああつ！ せ、先生のお口がつ♡ 私のおまたにつ♡」

きゅつ、とお尻の穴がすぼまり、膣口が震える。私はまず大陰唇の中の粘膜を舌で満遍なく舐め回した。

「ふぎゅつ♡ せ、しえんしえ、それ、しげき、つよおつ♡」

べろべろ、じゆるじゆると音を立てて吸い付き、舌を這わせる。クリトリスも皮の上から指でそつと摘み、シコシコしごいてあげる。

「あゝーっ♡ せんせっ♡ だめっ♡ なにかっ♡ でちゃっ♡」

健気にも開脚とマンコを拡げる指は維持したまま、細っこい下腹部をガクンガクンと痙攣させて、快楽に悶えるミドリ。

ドアが開いて誰かが入ってくるのを気にする余裕もなく、大きな声で善がり声を上げている。

小さな膣穴からトロトロと愛液が零れてくるが、まだまだほぐれている感じではない。

キツキツの穴にそつと小指を入れる。

「んっ……」

ミドリが眉を顰めた。

「まだ痛いかな?」

「だ、大丈夫、です。ちょっとびっくりしただけで……」

明らかに無理をしているとわかる声音で作り笑いをし、マンコを拡

げる指が滑りもう一度拵げ直すミドリ。

私は再度ミドリのマンコに口づけ、膣穴に舌を挿入した。

「んんっ♥ 先生の、舌……にゆるって入ってくるの、分かります……♥」

膣の浅い部分を舌でほじり、なんとか穴を拵げようとじつくり舐め回す。勃起したクリトリスも先程より弱めに、さするように撫で続ける。

「あ、あああ……♥」

丁度いい程度の刺激に、ミドリがリラックスし始める。愛液の出も良くなり始め、膣内もホカホカと暖まり始めた。

可愛らしいお尻の穴を指の腹でくすぐってやると、きゅっと締まって反応してくれる。

「やあ……♥ お、お尻の穴は恥ずかしいです……♥」

そんな事を言いながら甘い声をあげるミドリにチンポのイライラを静かに高めつつ、慎重にクンニを続ける。

それからペースを崩さずに20分ほど続けた。

「はぁーっ♥ はぁーっ♥」

お風呂に浸かったようにミドリの肌が上気し、呼吸が荒くなっている。

愛液には白く濁った本気汁が混じり始め、膣口はパクパクと物欲しげに開閉し、指を入れてみると人差し指をぬるりと飲み込んでくれる。

握るような締め付けで、チンポを受け入れるのは苦しいかもしれないが……今はこれ以上は無理と判断し、自分も机の上に乗ってミドリに覆いかぶさった。

「さあ、入れるよ」

「ふう、ふう……来てください、先生♥」

クンニで小陰唇とクリトリスをビンビンに勃起させたミドリのマンコは、未だ処女であることを示すように綺麗なピンクに濡れ光っている。

亀頭の半分も飲み込めなさそうな小さな膣口に、20人以上の生徒の破瓜の血を吸ってきた私のチンポがグリツと押し当てられた。

ミドリの細い腰を掴み、まっすぐに腰を突き出す。

「うっ、く……」

こらえきれないという風に顔をしかめて、苦悶の声を上げるミドリ。

「痛い？」

「だ、大丈夫……です。一気に、入れちゃって、ください……」

膣口は粘膜が赤い円のように無残なほど押し広げられ、亀頭を半ばまで飲み込んでいる。

後ひと押しで裂けてしまいそうなほどだ。

「へ、へいき、ですから……私、絶対に、先生と一つになりたい……です」

途切れ途切れの言葉に、ミドリの強い意志を感じる。

覚悟を決めて、腰を強く掴んで一気に貫く。

「ぎっ……」

ミドリが苦痛から顎を上げ、歯を食いしぼる。

限界近くまで膣口の粘膜を拡張、ぶつんと厚めの処女膜を勢い任せに破り、膣奥へと潜り込んでいく。

浅い部分とは異なり、奥の方はほぐした成果が出ていて私のチンポを柔らかく包み込んでくれた。

膣口は相変わらず、ゴムで縛られているかのように全力で締め付けてくる。

「入ったよ、ミドリ」

「かつ、は、はっ、はっ……」

ミドリは私と目を合わせることも出来ずに顎を上げたまま天井を見上げており、浅い息を繰り返している。

チンポを動かさないまま、クリトリスを優しく撫でて待った。

10分後。

「あ、うう……」

「大丈夫、ミドリ？ もうやめておこうか？」

ミドリはまだ顔をしかめて辛そうにしている。

「い、いやです！ 先生を満足させられずに終わるなんて、耐えられませんか！ ……ユズちゃんとアリスちゃんの初めては、どうだったんですか？」

「いやあ、まあ……あの2人も最初から気持ちよくなつて膣内射精させてくれたけど……」

「くっ、やっぱり……私だけ初めてで膣内射精して貰えないなんて辛すぎます！ お願いです先生、最後まで、してくれませんか……？」  
すがりつくように私のシャツを握りしめ、涙を浮かべて懇願するミドリ。

「わかったよ。どうしても我慢できなくなったらちゃんと言うんだよ」

「はいっ……♡」

なんとか苦痛をごまかすため、ミドリのクリトリスをもう少し強く刺激する。

「んっ……♡」

ミドリもなんとか私を楽しませようと、クリトリスの快楽に集中するように目を閉じた。手を握ると、強く握り返してくる。

痛いほど締め付けてくる入り口はなるべく動かさずに奥をかき回すように腰をグラインドさせる。

入り口に比べれば柔らかさを感じるもののピッタリと密着するよ  
うにチンポにまわり付き、処女ならではの強い締め付けでチンポを刺激する。

「ミドリのマンコ、締め付けが強くてとても気持ち良いよ」

「ほ、ほんと、ですか？ 嬉しい……♡」

ミドリは隠しきれない苦痛がにじみ出た、こわばった笑顔を浮かべた。

しかしそこにある悦びは本物だ。冷や汗を浮かべる額、微かにしかめられた眉とは対象的に、瞳はドロドロとした濃くも熱い情念の光を帯びている。

「ほら、ミドリの赤ちゃんの部屋を押し込んでるの、わかる？」



ズブズブとチンポをミドリの小さな処女膣に沈める。奥の方はいくらか柔軟になったミドリの膣が伸び、子作りできるようになったばかりの子宮が押し込まれる。

「はあっ♥　はいいい……♥　私、いま、先生と赤ちゃん作ってます……♥」

未だ苦痛に苛まれ少し顔色が悪いながらも、ミドリは心底嬉しそうに笑った。

膣奥がヒクヒクとわななき、精液をおねだりしてくる。

「先生のおちんちん、私の中で跳ね回ってます♥　私の膣で満足してくれてるんですね♥」

痛々しく膣口を引き伸ばされながら、それでも笑顔を浮かべて自分のマンコの使い心地を気にするミドリ。

「うん、とつても良いよ。さあ、そろそろ射精するからね……!」

あまり長引かせるとミドリが辛くなりそうなので、頑張つて射精しようとするように腰を遣い子宮の辺りに亀頭を擦り付ける。

「ああ♥　おくっ♥　私の一番奥に、先生が来てますっ♥」

「ミドリ、子宮にだすよ。奥に意識を集中して」

「はいっ♥　先生との赤ちゃんを宿す大事なところ♥　いっぱいおちんちん擦りつけてくださいっ♥」

コリコリとくすぐったく亀頭にこすれる子宮口の近くで射精した。

「あっ、あああ……♥　いま、射精、してるんですね……?♥　赤ちゃんのお部屋に、先生の精液が、流れ込んでるんですね……♥」

キツキツに締め付けてくるミドリの膣が、さらにぎゅうつと締まる。

セックスではあまり気持ちよくなれなかっただろうに、ミドリは妊娠の危険のある射精だけで絶頂していた。

実に美味しそうに、まだ痛むだろう腰を揺らめかせて精液を最後の一滴まで搾り取ってくれる。

射精が終わったチンポをゆっくり抜くと、ミドリの幼かったスジマはほっかりとチンポ大の穴と化した膣口に拡げられ、充血した小陰唇もチラチラとはみ出す女の性器に変貌していた。

「はあ……ふう……♥ ありがとうございました、先生♥ 最高の誕生日プレゼントです♥ ……先生さえ良ければ、もう一回しませんか？」

満足げな微笑みで、下腹部をねっとり撫で回すミドリ。

「辛そうなミドリ相手にそんな事は出来ないよ。それに、そうやって薬を飲むのを先延ばしにしても駄目。着替えたらちゃんと一階で薬を買って飲むんだよ」

ミドリは少しバツが悪そうに顔をそむけて、

「はあ……」

姉妹そっくりな調子でしぶしぶ了承するのだった。

そして、精液の処理をしたミドリが一階で買い物をする。

「えっと、お会計6150クレジットです……」

「はい」

水といっしょにピルを買ったミドリは、その場でペットボトルとピルの封を開け、ごくんと飲み下した。

「ひい……」

コンビニの店員である中学生のソラは身長が同じ位のミドリとは少し会話する程度には顔見知りだった。

そのミドリが、避妊薬を目の前で飲むということは……

「どしたの？ ソラちゃん」

「えうっ!? あ、いや、その、あの……」

まさか話しかけられるとは思わずしどろもどろになるソラ。

「ああ、このお薬？ ……生理痛を和らげるやつだよね？」

「えっ」

「今月のは特にきつかったから……ソラちゃん？」

「あつ、そそ、そうですよね！ あ、はは、生理痛、生理痛のお薬ですよねー！」

白目を剥きかけていたソラが、偽りの希望で息を吹き返すのだった。

## 修行・性奉仕編（ノドカ）

シャールレの地下に存在する居住区。区とは言ってもほとんど私の居住スペースだ。

ここには風呂もあればソファもあり、終電を逃した場合にはここで寝ることになる。

一番身近なヤリ部屋なのだが、執務室を留守にしていると一発で怪しまれるので使用は控えている……のだが。

「本日も、お疲れ様でございました」

一部生徒はセキユリティを越えて侵入してくる。ノドカもその一人だ。

「食事にしますか？ お風呂にしますか？ それとも……」

「わ・た・し♥ にしますか……？」

照れたように少し顔を背けて、上目遣いにこんな事をいうノドカに、瞬時にチンポがイライラしてくる。

「もちろんノドカだよ」

着物を着込んだノドカを抱き寄せる。露出は少ないものの、チラリと覗く襟元の鎖骨や帯の締め付けで強調された意外にある胸がチンポのイライラを増長させてくる。

「あんっ♥」

ポーズだけは身体をひねって拒否し、笑顔で甘い声をだすノドカ。

「えへへえ、先生が、わ、私の魅力にメロメロなのは分かりますけどお、このお着物は借りたものなので、汚すのはご勘弁を……」

「おっと、そうだね」

うんめえ棒を買うのにも苦勞するノドカだが、いい着物をレンタル出来ているらしい。流石にそれを来たままセックスするわけにはいかない。

「ですが、ご安心ください！ この温泉郷の女将である私が！ せ、先生に最高の性奉仕をご提供いたします！」

「おっ、いうじゃない、ノドカ。じゃあ期待しようかな」

「はいっ！ では沸かしてありますので、お風呂にどうぞ♥」

歩いて行く間にも、ノドカはコートを脱がしてハンガーに掛けてくれる。どうやら修行の成果は始めているようだ。

脱衣場で脱ごうとすると、追いついたノドカが声をかけてくる。

「うえへへへ、私がやりますので、先生はそのままです♥」

欲望丸出しの声で背中から密着し、ヌルヌルした手の動きで服を脱がせてくるノドカ。

されるがままになっていると、背広はちゃんとハンガーにかけてシャツはささつと綺麗に畳み、手際よく籠に入れていく。

「ノドカ、手際が良くなったね」

「そ、そうですか？　ありがとうございます、先生」

少し照れた声が背中から聞こえてくる。バンザイして下着も脱がせてもらい、次はノドカの手がベルトにかかる。

女将が絶対してはいけないニヤケ顔で私の前に回ってきて、跪いてズボンを下ろす。

「えへ、うへへ……♥」

ノドカが何度も見て、触って、上でも下でも啜えこんできたチンポがパンツ越しに勃起を主張している。

「ああ……♥　先生のチンポ、今日もご立派ですねえ……♥」

一周回っておっさん臭い程に、しみじみと言うノドカ。我慢汁がにじむ先端に突き上げられた布に優しくキスをして可愛らしい音を立て、さわさわと撫でるように形を確かめる。

手慣れた愛撫に勃起を更に硬くしつつ、うやうやしくノドカがパンツを脱がしてくれる。

「ああ……♥」

にやあ、と大口を開けた笑顔で、ちよつとよだれもたれそうになりつつノドカが私の勃起チンポを見つめる。

「ノドカ、着物によだれ付いちやうよ」

「おっとお！　で、ではでは、私も脱いでしまいますね」

そう言って帯を緩めるノドカ。

しゅるる、と衣擦れの小さな音を立てて合わせがはだける。レンタールなので大事そうに籠に仕舞い、着物も脱いでいく。

白い襦袢姿になると、少し恥ずかしそうに私の視線を伺いながらも脱いでいった。

「さ、先生。お風呂にどうぞ♥」

一糸まとわぬ姿になって、形の良いおっぱいと可愛らしい乳首を惜しげもなく見せながら、ノドカは先に行つて風呂場の戸をカラカラと引いた。

「おや、これは……」

そこには、ピンク色のフロートのように空気で膨らんだマットがあつた。

「うふふ、先生はきつと食事とお風呂より私を選んでくれると思つて、万全の準備をしておいたんです！」

「なるほどね……それじゃ、期待して良いのかな？」

「任せてください！ この私が！ 先生専属の泡姫としておもてなしいたしますー！」

風呂場に入ってピンクマットに仰向けに寝そべると、ノドカはお風呂からお湯を汲みボトルから液体を少し入れた。

風呂桶を床に置き、前かがみになって両手を回してタパタパと攪拌するとあつという間にお湯はトロみを帯びていく。

ノドカの瑞々しい胸が下を向き、腕の動きに合わせてふるふると揺れるのを鑑賞しながら混ぜ終わるのを待った。

「はい、ではお体綺麗にいたしますね……♥」

ノドカは身体の前面に少し風呂桶からローションを垂らす。私の腹にも垂らし、既にヌルヌルになっている両手で塗り拡げていく。

「おー、暖かいね」

「でしょう？ 結構気持ちいいですよ。……でゆふつ、しかも先生の裸をじっくりと堪能しながら密着できちやう……なんて素晴らしいでしょ♥」

私の腹をぬらぬらとノドカの手が這い回つて十分ローションが塗られると、ノドカは四つん這いで私を跨いだ。

「ノドカ、陰毛は剃ったんだね」

ノドカの股間に薄く茂つていた陰毛は、微かな剃り跡を残してつる

りと無くなっていた。

「えっ？ ええ、はい。先生を体全部で洗うので、無いほうが良いと思  
いまして。駄目でした？」

「いいや、クリトリスがよく見えていいと思うよ。続けて」

胸をむにゆりと押しつぶしつつ、ノドカが自分の身体の前面に腕を  
上下させて再度ローションを塗り伸ばす。

そのまま私の身体に寝そべるように押し掛かってきた。と言って  
も身長147cmの小柄なノドカなので心地いい程度の重みだ。

暖かくも柔らかいノドカの身体が、ローションで更に密着感を増し  
て溶け合いそうに心地よい。

「んっ……♡」

ノドカが、身体ごと前後に動き私の上を滑って往復し始める。

コリコリと勃起した乳首が私の胸から脇腹にかけて往復し、くす  
ぐつたい刺激が面白い。

ノドカが上にながると私とノドカの乳首がぬるりと絡み合  
い、ピリリと気持ちいい電流が走る。

「あは……♡ 先生が乳首で気持ちよくなってる顔、とつてもセク  
シーでドキドキします……♡」

熱っぽい囁きが私の鼓膜を愛撫するように染み渡る。固くなった  
チンポがノドカの股間に押されて素股のように陰唇に擦れた。

だんだんとノドカの動きもなれて大胆になり、身体の前面だけだっ  
たのが腋や腕にまで手が伸びて、ノドカの欲望を感じるねちっこい手  
付きで撫で回される。

「ふう、では次は脚を洗わせて頂きますね」

身体を離し、私の脚の間に座ったノドカが私の片脚を持ち上げて手  
でぬらぬらと撫で回してくる。

足で踏みつけにできるように胸を潰れる位に押しつけて、足の指の間  
もねっとりとして撫で回される。

ノドカの胸の感触は段々と這い登ってきて、指もふくらはぎから太  
もも、そして股間へと魔手を伸ばしてくる。ついに私の金玉もノドカ  
の手でもみくちやに洗われ、更には肛門にも指を入れられる。

「うおっ」

不意打ちのようにぬるりと挿入された指に思わず声が漏れると、ノドカはにまあと笑った。

「どうふっ ♥ ふうーっ、ふうーっ、せせ、先生の肛門…… ♥ こんな明るい所でじつくりと見られるなんて…… ♥」

「ほらほら、自分が楽しんでないで」

「つとと、失礼しました。先生のお体、お尻の穴まで綺麗にいたしますからね…… ♥」

ムラムラとした欲望を隠しきれない、かろうじて上品にも見えるニツコリとした満面の笑みを浮かべてノドカが私の身体を撫で回す。

強い快楽が得られるわけではないが、愛おしげな指先の動きが私の興奮を煽り、勃起を萎えさせることはなかった。

そのまま脚を洗い終え、ノドカは残りのローションを自分の身体にかけていく。たっぷりとローションを滴らせながら仰向けの私に抱きつき、背中側にぬるりと手を入れてくる。

「えへへっ ♥ お背中と……お待ちかねのオチンポも洗わせて頂きます ♥」

ノドカは身を乗り出して、膝を私の腹に乗せるように片脚を上げた。そのまま私の首に抱きつき、それを支えにしながらチンポを膝裏に挟む。

「よっ、ほ、こうかな……どうでしょう先生、エッチな本屋で立ち読みした本に書かれてた方法なんですが」

ノドカの膝裏がローションのにゆるにゆるで滑らかにチンポを扱く。そこまで強い刺激ではないが、裸のノドカに抱きつかれる心地よさと相まって中々心地よい。

「ああ、結構気持ちいいよ」

「よかったあ……それじゃあ、サービスで乳首も弄らせて頂きますね…… ♥」

舌なめずりしそうに楽しそうな顔で言うと、ヌルヌルした指が私の乳首にまとわり付いてクルクルと円を描くように愛撫を始める。

「くっ、おおおっ」

前からノドカは乳首責めが好きで、よくやられていたが……泡姫プレイに興が乗ったのか何時もより指が滑らかにうごめいている感じがする。

一つ一つは決定打にならない乳首責めと膝裏コキが、ローションに塗れたノドカの全身が擦れる刺激と相まってそのまま刺激が足し算されたかのように射精感を湧き上がらせる。

「あつ……先生、オチンポ膨らんでますね♥　いつでも射精してくださいさって良いですからね♥」

私が射精をこらえる顔を心底嬉しそうに覗き込みながらノドカが耳に心地よく囁いてくる。

脇の下をくぐって後から肩を撫でられ、甘勃起したノドカの乳首とクリトリスにくすぐったく撫でられ、ローションで肌と肌の境が無くなってノドカと溶け合ったような心地よさの中、漏れ出るように穏やかに射精が始まった。

「くう、おお……」

思わず声が出てしまうような、全身が溶けるような気持ちよさ。

「あああ……♥　先生が私のご奉仕で射精してくださいさってのお顔……とってもセクシーですう……♥」

気持ちよくなっている私を見て、ノドカがますます熱を込めて手をワキワキさせる。

「つと、こうしてる場合じゃなかった……」

私の身体の上で、ぬるんと180度向きを変えるノドカ。さつきまで顔のあつた位置に股間が来て、私とセックスしまくってビラビラがはみ出してきたノドカマンコが目の前に現れる。

丸い尻も大陰唇もローションに包まれてヌラヌラと照り光っていて、面白い光景だ。

「はむっ♥　ぢゅうううっ♥」

じっくりとノドカの股間を見つめていると、ノドカがローション塗れの私の亀頭を咥えこんで強く吸引してきた。

ローションのヌルつきを生かした滑らかな手コキと金玉の下を通る尿道を優しく圧迫する指も相まって、穏やかな射精で登ってきてい



た精液がすべてノドカの口へと吸い込まれていく。

気持ちいい吸精を受けながら、私は目の前のノドカの尻に手を伸ばした。驚掴みにしてやると、にゆるんとローションで滑りつつ瑞々しい弾力を持つ尻に指が食い込む。

少し色の濃い菊紋に指を当てると、にゆるんと簡単に侵入できてしまう。

「んふっ!? しえ、しえんしええ、しよこはああっ♥」

ヒクヒクと尻穴で私の指に食いつきつつ、フニャフニャした声を上げるノドカ。

「ほらほら、まだ精液が残ってるよ、ノドカ」

言いつつ、身体に付いたローションを指で寄せ集めてノドカの膣口到人差し指と中指を突っ込む。

「うああっ♥ 今は私がご奉仕する番なのにい♥」

そう言いつつも精液の吸引を再開してくれるノドカ。

私は膣に入れた指を動かすと、ローションのおかげか何時もより更に滑らかだった。調子に乗って限界まで速度を上げてにゅぽにゅぽにゅぽ! と指を出し入れしてみる。

「んむうーっ♥」

目の前の尻が跳ねる。亀頭を啜えて離さないままノドカは頑張つてチンポを吸ってくれているが、膣を指でほじると綺麗な円に広がった穴がパクパクと物欲しそうに収縮し、ローションとは違う液体がトロトロ零れ始めた。

「ノドカのマンコと尻穴、パクパク動いてすごく可愛いね」

尻穴にも2本指を入れて拵げてみる。ノドカは亀頭を啜えたままなのでもがもが言いながらも、嬉しそうに膣穴をキュンキュン締めていた。

「ありがとう、ノドカ。そろそろ入れたいな」

「あっ、はい! すぐ準備しますね!」

股間のローションをお湯で流し、くるくるとコンドームを付けるとノドカは先程のように私に跨り、愛液とローションでヌルヌルになった膣にチンポを導いて腰を落とした。

「あふあ……♡」

ローションのおかげで実にスムーズにノドカの膣奥までチンポが飲み込まれる。

先程までの全身を擦り付ける洗い方と同じく、ノドカが正面から私に抱きついたまま身体を前後に滑らせると、身体が擦れると共に膣穴に扱かれる感覚が襲ってきた。

「あぁ……♡ ローションで密着感が増して、何時もより先生を近くに感じますう♡」

とても楽しそうなトリップ顔で、ノドカが私の目を覗き込むように凝視しながら乳首を一層固く勃起させる。

私もノドカの背中をローションでヌルヌルと撫でたり、滑りを利用して桃尻を掴んでニユルニユル弄んだりして瑞々しい16歳の泡姫を堪能する。

「ノドカ、とっても上手だね。色々勉強して、本当に偉いよ」

頭を撫でるとローションでベトベトになってしまおうので、代わりに尻を撫で回して肛門に指を入れる。

「んっふう♡ えへへ、ありがとうございます♡ 先生に喜んでいただけ、本当に嬉しいですっ♡」

ノドカはそう言つて、晴れ晴れとした笑顔を浮かべた。首から上だけを見るなら女将としての修行を頑張る女の子の、透き通った笑みだ。

しかし裸の身体を起こすと同時にベツタリとローションでくっついていて肌が離れ、ノドカの綺麗なお椀型の胸と私の胸板の間で幾筋もの線を引いた。

下腹部まで続くローションの列柱の先には、ぐっぽりとゴム付きチンポを啜え込む膣穴が私のために陰毛を剃ったことのでつるりと丸見えになっている。

「あつ♡ 先生のおちんぽ、また膨らんできましたね♡ 私のオマンコで好きなだけお射精してくださいませ♡」

私を射精に導けることに對する悦びが透けて見える位に、うっとりとした笑顔と熱っぽい囁きには淫欲と愛情が籠もっていた。

につちや、につちやとローションまみれの肌をくつつけたり離したりして、ノドカが滑らかに腰を振ってマンコを上下させる。

「ああーっ♥ 先生のっ♥ ぶっといオチンポっ♥ いつもどおり気持ちいいですうう♥ イクツ♥ 私もイツちやいますからあ♥ 先生もびゅーびゅーっ♥ って射精ください♥」

学業の成績は振るわないが、セックス奉仕に関してはとても優等生のノドカは、私の仕込んだ淫語と腰使いを完璧にこなして気持ちのいい射精を導いてくれる。

「出すよ、ノドカー」

ローションまみれの尻を掴み、マットの上で腰を突き上げる。愛液より滑らかなローションにより素早いピストンを繰り返し、ノドカの子宮をポンポン弾ませた。

「イッグ♥ もうらめっ♥ もうがまんできましえんっ♥ イッて♥ 射精してえ♥」

私に絶頂を合わせるために我慢しているノドカの顔が、絶頂を堪える泣き顔に歪む。哀れっぽく射精を懇願するその様に満足し、一番奥に一際強く突きこむと同時に射精する。

「んっおっおっおっおっおっおっ♥」

女将をイメージして上品に髪をまとめたノドカが、ケダモノのような声を風呂場によく響かせて唇を突き出し、セックスに夢中になって絶頂する。

そんな最高の絶景を前にとノドカの尻を掴む手に力が入り、射精の勢が増す。

「おっっ、ほお……♥」

くったりと私の上に倒れ伏すノドカの背中を、優しく撫でた。

「お疲れ様ノドカ。とても良かったよ」

「えへ、えへええ……♥ 先生のオチンポも、最高でしたあ……♥」  
デレデレと締まりのない顔で笑うノドカのヌルヌルした尻を撫で回した。

その後はお湯でローションを洗い流し、2人してお風呂に浸かつ

た。

「ふう、温泉程ではないけど入浴剤も結構いいよね」

「はい…………♥ 裸の先生と肩をくっつけて入れるなら、私にとっては最高のお風呂です♥」

ノドカは私の横に密着して座り、腹筋や腕、胸板を撫でてくる。

ベタベタと太ももにも触れ、勃起しているチンポも撫で回す。

「うえへっ♥ 先生のオチンポ、もうこんなにおっきくなってますよお…………♥」

私もまた、ローションのすつかり落ちた瑞々しいノドカの肌を撫で回し、お風呂でホカホカになった美乳をもみほぐしている。

「可愛いノドカが裸だからね、どうしてもこうなっちゃうんだよ」

「もうっ、またまたあ♥ これじゃあ先生の我慢汁がどんどんお風呂に入っちゃいますよお♥ 私はそれでも良いですけど…………むしろ後で飲みたい位ですけど…………一度又いて差し上げますから、腰だけ上がってください」

そう言われ、お風呂の縁に腰掛けた。スツと慣れた動作でノドカが私の開いた脚の間に入り、愛おしげに勃起チンポに頬ずりする。

「先生の、立派な立派なおチンポ様…………♥ ご奉仕させて頂きますね♥」

ノドカの唇が私の亀頭にチュツとつえばむようなキスをする。手コキと云うほどでもない撫でるような手付きで両手を上下させ、裏筋や竿、金玉に至るまでキスの雨を振らせてくれる。

「ちゅっ、ちゅっちゅっ♥」

いつもながら愛情の伝わるフェラに勃起も最大まで回復し、ノドカの鼻先に我慢汁を垂らした。

「あ、勿体ない…………♥」

ノドカは舌を伸ばして我慢汁を飲み込み、竿から裏筋、鈴口までぬらぬらと舌を這わせる。

ぱっくりと一息に亀頭を啜え込み、私のチンポを半ばまで口の中に収めていく。すでにノドカの喉奥の熱い粘膜の感触が亀頭に伝わっている。

食道をチンポで塞がれて呼吸もままならないはずだが、ノドカの手はよどみなく私のチンポの根本をしごき、金玉をこしよこしよとくすぐって飽きの来ない刺激を与え続けてくれている。

女将をやってみた経験は、セフレとしてもノドカを一段成長させてくれたようだ。

私はノドカの頭をそつと撫でた。ローションにもお湯にも浸かっ  
ていないが、風呂場の蒸気ですつとりと湿っている。

「おぶつつ、っぽっ。んふ……♡」

えずくような音を喉奥から鳴らしてチンポを加え込みながらも、頭を撫でられて心地よさそうにノドカが微笑む。

「ぢゅろろっ♡ ぢゅぞぞぞ♡」

ノドカの口内に満ちた唾液と我慢汁が、ひよつとこのような顔でバキュームするのと同時に飲み込まれていく。

あどけなく可愛らしいノドカの顔をゴムのように柔らかく変形させつつ、時に顔を引いて精液ごと引っこ抜くように吸い出し、時に私の陰毛に顔を埋めるようにチンポを根本まで啜えこむ。

喉奥まで全部使った奉仕精神に溢れたディープスロートは、精子を飲みたいがためのイズミの強烈なフェラに勝るとも劣らない。

又き性能だけならマンコを超える口淫技術を尽くして、ノドカが私のチンポをしやぶつてくれる。

「ノドカ、もう出るよっ！」

「んふーっ、んふーっ♡」

喉奥深くにチンポを突っ込まれ喋ることの出来ないノドカが、鼻息の荒さと爛々と光る目の輝きで了承の返事をしてくれる。

ノドカの喉奥深く、食道に対して直に精液を注ぎ込んだ。

「んごっ♡ おごっ♡ んっぐ、ごくっ♡」

苦しそうに喉を鳴らして、私の精液を飲み下してくれるノドカ。この風呂場には私達以外に誰かが来ることもなく、お湯の立てる水音と、ノドカが苦勞して精飲する音だけがよく響く。

「つぶふあーっ……♡ うっ、げえーっぶ♡ つと、失礼しました♡

先生の精液、3回目なのにとつても濃くて、ゲップ出ちやいました

ね♥」

ノドカは私が頭を押さえなくとも喉奥深くでじつと射精を受け止め、全てを飲み下してくれる。

よく出来た生徒に育った彼女の頭を撫でた。

「いつもありがとうね、ノドカ。ノドカはとっても良い生徒で、良いセフレだよ」

「ありがとうございます、先生♥ これからも227号温泉郷の女将、この天見ノドカを、ご鼻屑にお願いします♥」

唇に私の陰毛をくつつけた、とても可愛らしい笑みでノドカは笑った。

アウトローが処女なのは恥ずかしい（アル）

アルが何だかよくわからないコネで何だかよくわからないパーティーの招待券を手に入れた。

相変わらずキヴオトスの権力者は犬猫モニタしかないが、パーティー自体は詐欺ではないようだ。

綺麗な着物姿でもいつも通りしどろもどろになったアルが、顧客だという『鏡もち伯爵』に挨拶しにいくと……

「しっ、失礼しましたー!!」

私の方に走ってきた。しかも、

「あっ——痛たたた……って先生!」

転んだアルが私に倒れ込む。着物の厚い生地越しにも感じられるアルの身体の柔らかさ。

不意打ち気味の接触到チンポが瞬間的にイライラしてしまう。

（よし、セフレにしよう）

「え、先生？ な、何を……!?!」

私はアルとセックスするためにお姫様抱っこした。

パーティー会場で大声を出して転んだ上お姫様抱っこされたアルは悪目立ちしているが、恥ずかしがっているためまだ気づいていない。

「怪我してるんだから、安静にしてて」

有無を言わせずお姫様抱っこそのままパーティー会場から出ていく。

それはさながら、自分の雌にマーキングをする雄のように。

「は、はい……。えっと、じゃあ、お願い……」

押されるがままにしおらしくなるアルにますますチンポをイライラさせつつ、ビルの外に出た。

本来であれば、ビルの前で解散ということになるだろう。

しかし、私は今からアルとセックスするつもりだ。

「も、もうそろそろお姫様抱っこは良いから！ 人目もあるし恥ずかしいわよー!」

ビルから出てすぐ、路地裏を目指す。

「えっ？ あ、先生？ 下ろして欲しいんだけど……」

「捻挫はそんなにすぐ治らないからね」

キヴォトスにはブラックマーケットも有ればラブホもある。私以外の客がどうなっているのかとも知りたい所だが、今はさておく。「ちよつ、ちよつ、ちよつと、せ、先生？ まさか目の前のこの建物に入るつもりじゃないわよね？」

「休憩したいことだし丁度いいね」

「休憩の意味が違うわよ!? う、嘘つ、嘘でしょ先生?!?!」

ぎゃーぎゃーと喚くアルは、脚をバタバタさせたりキョロキョロ周りを見回すが、されるがままに運ばれていく。

ホテルの部屋を選ぶ所でその場に下ろして、そのまま腰を抱き寄せ

る。「きゃつ……!? あうう……」

私の胸に顔を埋めるような体勢になってしまったアルは顔を赤くして固まってしまいが、その隙に支払いを済ませて歩き出す。

腰を抱かれたアルは愕然とした表情で私を見るが、強引に腰を抱き寄せると赤い顔を俯かせ、黙って付いてきた。

そのままラブホの部屋に入り、ベッドに並んで腰を下ろす。

「あつ、あつ、あの！ その、先生……！ わっ！ 私、たち……えつと、たしかに、唯一無二のパートナーだと思ってるわ！ でも、でもね？ ちよちよ、ちよつと、まだこういうのは、早いんじゃないかなつて、その……」

何も言わないうちから、真っ赤になって早口でまくし立てるアル。

「アル。私はアルとセックスしたい」

「ひっ！ あ、う、ううう……」

率直に言ってみると、アルはポンと爆発したように顔を真っ赤にしてしまった。

「それにね、これはパートナーとしての提案でもあるよ」

「て、提案……?」

「アルに足りないのはいざという時の度胸だと思っただ」

「うぐっ！ そ、そうね……ついさっき思い知ったわ」

アルはいつものように見栄を張り、知らない人に顧客のように挨拶



しにいかなければならなくなり挫けて逃げてしまった。

「き、気づいてたの!? 止めてくれたら良かったのに……」

いつもの顔でシヨックを受けるアル。

「別に知らない人に挨拶するくらい、あの場では良かったはずだよ。だから問題だったのはむしろ、挨拶せずに逃げてしまったことだよ」

「ハッ！ そ、そうよね。パーティー会場なんだから人脈を広げるために挨拶しても良かったんだわ！ さすが先生……！」

「だから度胸をつけるためにセックスしよう」

「なんで!？」

「経験したから大人というわけではないけど、経験は心に余裕をくれるからね。処女じゃなくなったらアルはもっと成長できると思うんだ。それに」

「……それに?」

「いつまでも処女のアウトロー女社長、って響きはアル的にはどう思う?」

「くっ……それを言われると……うう、でもそんなついでみたいに捨てちゃうなんて……でもでもアウトローとしての成長のためには……」

あわあわと煩悶しだしたアル。俯いた首元からちらりと覗く肌が眩しい。

「なにより、私はとっても綺麗でカッコいいアルとパートナーとして肉体関係にもなりたい」

「そ、それが主目的なんじゃ!? でも、まあ……わ、私達!? アウトローなパートナーだから!? い、いい……わよ」

こうして。

交渉の結果、アルは自ら私のセフレになる事を約束してくれたのだった。

「じゃあ早速脱いで脱いで」

「わっ、分かったから！ お、お風呂場で脱いでくるから！ それに、身体もちゃんと、綺麗にしてからのほうがいいし……」

アルはスツと立ち上がると、覚束ない足取りでフラフラと風呂に向

かった。

しばしチンポを膨らませて服を脱いで待つ。

「お、おまたせ……って先生もう脱いでる!? し、し、仕舞ってよ!」  
勃起チンポをアルに向けて待っていた私の前に現れたのは、バスローブ姿のアルだ。前もきっちり閉めているため、普段着よりも露出が少ないくらいだった。

しかし、髪型だけは晴れ着の時のままだった。髪飾りなんかは外しているが、上でまとめられた髪は普段と違って新鮮だ。

「髪はそのままなんだね」

「だって……セツト高かったし……」

「似合ってるし、普段と違って新鮮だからそのままセックス出来たら嬉しいな」

私が軽くジャブを打つてみると、びっくん! とアルの身体が跳ねた

「セツ……!? そそ、そういう事言わないで……!」

「身体を洗ったらすぐすることなのに……」

「そうっ、だけどお!」

顔を赤くしながら私とセックスするために待っていていくれるアルが愛おしくてたまらない。

チンポがビンビンになる。ビクンビクンと揺れるチンポに、アルの視線がチラチラと向いているのを感じる。

「じゃあ、シャワー浴びてくるね」

そして、急いでシャワーを浴びて身体を洗って戻ってきた。

「おまたせ」

「ええっ!? もう!? もう少し心の準備を……! というか、先生! だから隠して……!」

すぐに取り払うタオルなど付けていない。洗いたての勃起チンポをアルに向けて歩み寄っていく。

「さあさあアルも脱いで脱いで」

バスローブでベッドに腰掛けたアルに密着するように横に座り、腰に手を回して抱き寄せる。

薄く、一枚しか無い布を隔ててアルの胸が私の身体に押しつぶされる感触がはつきりと伝わった。

「ほら、帯を解くよ」

「あ、う……」

ゆっくりと、きつく結ばれていたバスローブの帯を解く。

まだ中には手を入れず、アルの無防備な首筋に口づけた。

「んひっ♥」

アルの肩が跳ねる。それを抱きしめてやんわりと押しさえつつ、音を立てて首筋に何度もキスをする。

首筋をゆるゆると上がっていき、髪を上げているおかげで見やすい耳たぶを優しく唇で食んだ。

「あ……♥」

アルの背中に手を回して優しく背中をさする。こわばっていたアルの身体が少しずつ、私の行為を受け入れてリラックスしていく。所在なさげにしていたアルの両手が、おずおずと私の背中に回されて……私達はバスローブと裸で抱き合った。

耳から口を離し、アルの顎に手を添えて正面から見つめ合う。

「アル……」

「先生……♥」

早速雰囲気酔っているアルは、バスローブの前がはだけて胸の谷間もヘソも股間の陰毛も見えている事も気づかない風にうっとりとして視線を絡めた。

クイ、と顎を上げさせると、ギョツ、と固く目を瞑つてにゅーつとタコのように唇を突き出す。

アルらしいファーストキスにホッコリしながら、逃さないように背中をしつかりと抱いて唇を奪った。

「んうっ♥」

力んで固い唇に吸い付き、舌を強引に滑り込ませる。

「んむっ!？」

アルを強く抱き寄せ、唇を吸いながら舌を挿入する。

「あむうっ、んんんっ♥」

何か言いたげなアルに言葉を喋らせず、歯と唇の間や歯茎をぬらぬらと舐め回し、大人のキスを迫る。

「ふう、ふう……」

薄目を開けて様子を伺おうとして、私と目があってしまったアルがまた目を固く瞑る。

アルの前歯をねちねちと舐め回すと、観念したように閉ざされていた歯が開いた。

おずおずと怯えたように奥に逃げようとするアルの舌を絡め取り、ぬちやぬちやと粘液をこすり合わせる。

「んっ、ううんう ♡ ふう……ふう…… ♡」

アルの喉からはくぐもった嬌声が響き、鼻息も荒くなっていく。

そろそろアルが慣れて来た所で、舌先でアルの上顎をくすぐるように舐める。

「んっふ ♡ んううーっ ♡ んっ ♡」

目を瞑ったままのアルが、快楽に耐えかねるかのように眉を寄せてうつとりと性感に浸る。その様を目の前で見つめて、私の勃起チンポからアルの太ももの上に我慢汗が滴った。

ディープキスに夢中になった所で、するつとバスローブを左右に開いて肩から滑り落とす。

肘から先に引つかかっただけのバスローブが、アルの大人になる寸前の瑞々しい裸体を飾るラッピングのようだった。

「綺麗だよ、アル」

ちゆるん、と絡み合っていた舌を引き、アルに声をかけながら胸に触れる。

そつと、宝玉を扱うようにうやうやしく、下から持ち上げるだけで、アルはピクンと身体を震わせた。

「あっ…… ♡」

アルの顔はまだ蕩けており、夢を見ているように呆然と、揉まれて乳首をクリクリと弄ばれる自分の乳房を見下ろしていた。

その間にもう片方の胸にも同じく愛撫を始める。

「はっ……あああ…… ♡」

アルの乳首が固くしこり、中指の先ほどの大きさに勃起する。

うっとり心地よさげに息をつき、アルが胸への愛撫を受け入れている。もう大丈夫と判断した私は、再びアルを抱きしめてゆっくりとベッドに押し倒した。

大人に見えても16歳の少女の身体は、寝そべっても乳房の形さえ崩れさせない。

美しい釣り鐘型のおっぱいが天井に向かっていている。愛撫の続きをするために、私は早速アルの乳首を口に含んでねっとり舐め回す。

「あっ♥ ああっ♥」

初めての感覚に翻弄され、されるがままに若い身体を貪られるアル。

身体は食欲に私の愛撫を受け入れ、乳首をカチカチに勃起させ股間からはむあつとアルの雌の匂いが漂い始めている。

片手と口で胸を愛撫しながら、アルのほっそりした腹を撫で、下へと手を滑らせていく。

「あっ♥ せんせっ♥ そんなとこ、さわっちゃ、やあ♥」

幼児がむずがるように、胸を愛撫される快感で舌つ足らずになったアルが声を上げる。

その股間には陰毛がしっかりと生え揃っており、ハート型に剃られていたのを先程見ている。

恥丘をちよりちよりと撫で回してアルの陰毛を愛でてから、ついにアルのマンコに触れた。

「んくうっ♥」

包皮に包まれたクリトリスに指がかすった瞬間、アルの背が仰け反り、腰が浮いた。

さらに指を下ろすと、既にぬるりと潤んでいる。

バスローブの上に寝そべった形のアルの股間からは、すでに愛液がこぼれ落ちローブにシミを作っているようだった。

外から撫で回すだけでも、大陰唇からはみ出たビラビラを指先に感じるができる。

私は乳首から顔を離し、生まれてはじめて大事な所を触られて気持

ちよくなるアルの顔をじっくりと鑑賞する。

「あーっ♥ だめ、そこだめっ♥ ぶりぶりしちゃっ♥」

外側から撫でただけで、これまで全然動かなかったアルの脚が持ち上がり、ゆっくりと開いていく。

男を受け入れるために身も心も開花の瞬間を迎えているようだった。

手のひらをアルのマンコに優しく当てて、全体をただ撫でるように愛撫する。

「んきゅうううう♥ それえっ♥ すぐすぎりゅうう♥ もうだめっ♥ もうむりっ♥」

たったこれだけでアルは悶え狂った。何だか面白いので続けてみる。

「いっく♥ いっくいっく♥ いぐううううっ♥」

軽い前戯だけで顔も胸元も真っ赤に上気させて、本気で絶頂してしまうアル。

「かひゅーっ♥ かひゅーっ♥」

のけぞったままの胸が、乳首を勃起させたまま荒い息で上下する。

アルの愛液でびちゃびちゃになった私の手のひらを舐めると、薄い塩味がした。

「まったく、この位で音を上げていたらアウトローにはなれないよ」

絶頂で呆然とするアルに声をかけるが、アルは聞こえていないのか反応する余裕もないのか、のけぞったままだ。

「はーっ♥ はーっ♥」

しょうがないので、アルのマンコを左右に開いた。むあつと湯気さえ立ちそうな温かい空気が顔を撫でる。

アルの股間は処女そのものの綺麗なピンク色をしている。大きめの小陰唇が薄めの大陰唇からはみ出し、粘膜の綺麗さとはミスマッチな男を誘うマンコだ。

絶頂を迎えてパクパクと口を開閉させる膣にキスをして吸い付く。

「ぢゅっうっうっ！」

「ひぎゅっ♥ らめっ♥ らめええっ♥ おかしくなりゅっ♥ お

かしくなりゆううう♥」

アルが腰をグインと持ち上げ、脚を思い切り広げてピンと伸ばす。そつと小陰唇を舐め、包皮越しにクリトリスを口に含むだけで、地獄の責め苦を受けたかのようにアルはのたうち回って甘い声を上げる。

勃起したクリトリスの皮を私の口の中でゆっくりと剥いて、舌でそつと撫でる。

「いぎゅっ♥♥♥」

ぷしやあああつ！ とアルが潮を吹いた。まだ膣に指さえ入れていないのに、すごい感度だ。

「そんなに気持ちいいんだ、アル？」

「はひーっ♥ ひいーっ♥」

先程の絶頂も覚めやらぬ間の連続絶頂に、アルは答える気力もなさそうに肩で荒く息をしている。

処女をこんなにも乱れさせたのはもちろん楽しいのだが、アルだけが盛り上がってしまったている。

「まったく……これじゃアウトローじゃなくて性奴隷だよ。そんな情けないアル社長にはお仕置きだね」

「ふうーっ♥ ふうーっ♥」

ちよつと撫でただけでクタクタになってしまつて、だらしなく股を開いたまま仰向けで寝ているだけのアル。

仕方がないのでその細い太もを掴み、種付けプレスのように太もを上げていく。

反応のないアルの膣口に亀頭を突き立てた。

「ほらほら、もう息は整ったでしょ？ これからが本番だよ」

「もつ、もうむりっ♥ これ以上気持ちよくなったら、死んじやうっ♥」

フラフラと手を上げて私を制止しようとするアルだが、全く力が入っていない。

「大丈夫だよ、死ぬほど気持ちいいだけで死なないから」

「こわいっ♥ こわいのおっ♥ 先生、ぎゅつてしてえ♥」

泣きじやくるように、幼子のような甘え方でアルが私にすぎる。アルが私に見せたことのない、心の中の一番奥の部分。

それを曝け出して女の子としての大事なものを捧げてくれるアルのマンコに先走り汁を塗りつけ、指も入れていないのに準備を整えた膣をじわじわと亀頭で押し広げる。

ミチミチと処女膣を広げながら、アルに覆いかぶさって抱きしめた。

「いくよ、アル」

「うん……」

不安そうに、涙に潤む瞳で私を見つめながら……それでも領き、私に身を委ねるアル。

腰に力を込めると、亀頭がアルの膣口を押し広げて完全に埋没した。すぐに処女膜に行く手を阻まれる。

「ああ……」

その感触はアルもわかるのだろう、様々な感情がないまぜになった微かな声を上げる。

喪われる寸前の乙女の唇に最後のキスをして、腰を前に進める。

ぷちん。

軽い手応えと共に、アルの処女膜を突き破る。奥へ奥へ、熱く淫らに潤んだ膣を易易と侵入する。

「はあ、ん……♥」

目を閉じたアルが、甘い息を吐いて私のチンポを受け入れていく。

ぬちゆり、と粘っこい水音を立てて処女だった膣の奥まで飲み込んだ。

吸い付くような締め付けでありながら、奥のほうはふわりと包み込むように柔らかい。

乙女として戸惑って、恥じらって、怖がってきたアルの膣奥は、女として男を受け入れる準備を既に整えてくれていた。

ゆったりと円を描いてチンポを動かし、柔らかく私を包んでくれるアルの膣肉を撫で回すように味わう。

「あああ……♥」



漏れ出るようなアルの喘ぎ声が、一かきごとに熱を帯びて少女から女へと変貌を遂げていくのを教えてくれるようだ。

アルの膣は面白みのある個性は無いが、感度がよくて適度な締りとたっぷりのお液でハメやすい優等生膣だ。

「ちゃんと入ったよ、アル。頑張ったね」

「うん……♥ 意外と、痛くないのね。ふふっ、これで私も、大人の女の仲間入りかしら?」

処女を失う事でなれるのは大人ではなく、ただの女だ。

「まあ、子供では無くなったね」

「もう……ま、こんな事一つで認められても仕方がないわよね。でも、お腹の中に先生の暖かさを感じると……確かに、心に余裕ができたような気がしてくるかも」

優しい微笑みを浮かべて、私のチンポが収まっている下腹を撫でるアル。

アルの手のひらが、腹筋と膣肉越しに私のチンポを押すのがほのかに伝わってくる。ビクンビクンとチンポを怒張させて返礼した。

「んんっ♥ お腹の奥、持ち上げられてる……♥」

どうやらアルは、膣内の感度も良いようだ。

「どの辺りが気持ちいい?」

私は早速出血も止まったらしいアルに問いかけながら浅く深く、膣壁を満遍なくこすりつけるようにピストンを開始した。

「あっ♥ ああっ♥ あーっ♥ わ、わかんないっ♥ わかんないっ♥ ぜんぶっ♥ 全部すごいっ♥ 入り口も少し奥も、一番奥もびりびりってくるっ♥」

処女だったことも考慮して、かなり抑えめにピストンしているのだが……アルにはこれが丁度いいらしく、数回往復することに膣がわななき、絶頂を迎えているようだ。

「アルはセックスを楽しむ才能があるんだね。感じてる顔、とても綺麗だよ」

「そっ、そんな事褒められても嬉しくないからあ♥ いわないでえ♥」  
さっ、と両腕で顔を隠してしまうが、その分汗に蒸れた腋が空

きになる。

甘酸っぱいアルの腋に顔をうずめ、ベロベロと舐め回す。

「はひいつ!? ちよ、ちよつと先生! なんて所を舐めてるの! そんな所、き、汚いでしよう!」

「アルの腋、とっても綺麗だよ。ちゃんと処理してるし」

「しよっ!? そ、そういう事を言うのやめてっばあぁうっ♥ だからっ♥ 舐めないでっ♥ ひ、人が文句を言ってる時に腰動かさないでっ♥」

何だか文句を言っているが、アルの腋を舐めたいのだから仕方がない。

「だめっ♥ 腋舐められながらいきたくないっ♥ おかしくなるっ♥ おかしくなるからあ♥」

アルの好きな速さで膣をかき回すとまた簡単に絶頂し、私が腋を舐めるのを止める言葉も喘ぎ声に飲まれていった。

膣もだいぶほぐれ、チンポも引っかかりもなくぬらぬらとスムーズに抜き差しできるようになると、射精感がこみ上げてくる。

「アル、膣内に射精するよ」

「えっ……」

アルは目を見開いた。

「ええええええええっ!」

鶏が首を絞められたような面白い声を出してアルが叫ぶ。

「ちよ、ちよつと、そう言えば先生、避妊、してない!? ど、ど、どうするのよ! 子供ができちゃう!?」

「アウトローがいちいち避妊するの?」

「アウトローだって避妊ぐらいするわよ!」

アルの中のアウトローはゴムセックス派らしい。私はこんな事もあるうかとベッドのそばに口を開けて置いておいた鞆からピルを取り出す。

「しよっがないな、じゃあこれ飲んで」

「えっ、これは……は、話に聞いたことはあるわ。アフターピル……か

しら」

アルも意外にこういう情報は仕入れているらしい。

「そうだよ。もう生で入れちゃったから、既にアルの子宮に私の精子が入り込んでいる状態だからね」

「そつ、そうなの!?! 最後の、しゃ、射精さえ外に出せば良いのだと思ってたわ」

可愛い生徒に実地で性教育を仕込む状況にチンポがますますイライラし、一刻も早く生で膣内射精したくなってくる。

「先走り汗にも精子は含まれているからね。この薬を飲めば妊娠率は大幅に下がるよ」

「分かったわ。えっと、お水無いかしら」

ピルと一緒にペットボトルの水も差し出すと、アルが裸の身体を起こして避妊薬を飲んだ。

「じゃあ膣内射精でいいよね」

「よくないけど!?! ……そんなに、私と赤ちゃん作りたいの?」

「作りたい。可愛いアルの中に私の精子注ぎたい」

アルは顔を反らして、セックスで乱れてしまった晴れ着用の髪型をくしくしと手櫛で整えつつ、

「なら……しようがないわね。先生と私は? パートナーなわけだし? その……もし出来ちゃったら……責任、取ってくれる?」

「責任って?」

かああ、と赤面しつつ、私の生チンポをキュンキュンと締め付けつつ、アルは眉をしかめて少し大きな声を出した。

「だつ、だから! 私と、けつ、けつ、けつこ……してくれる?」

「出来ちゃった婚なんてアウトローらしいね。いいよ」

「先生の中のアウトローってタダのだかららしい人じゃない!」

素っ裸で乳首の勃起も収まらず妊娠の危険のあるセックスをしながら、アルはいつもの顔でショックを受けていた。

「でもアウトローを気取るには、アルのセックスはちよつと受け身過ぎるかな」

「しよ、しようがないじゃない……! 私、初めてなんだから……それ

に、先生の、お……おち……コホン、アレがその、気持ち、良すぎて……ああもう、恥ずかしいっ……」

「セックスパートナーとしては十分満足だけど、アウトローとしては今後も沢山練習しないとね？」

そう言つて笑いかけると、アルは目を見開いて驚いてから、頬を赤く染めて視線を左右にさまよわせた。

「そう、ね……せっかく、先生とより深いパートナーになったのだし……これからも、沢山いろんな事を教えてね、先生♥」

「うん。さしあたっては、膣内射精で絶頂するように仕込んであげるね」

「そういうのは程々にして欲しいんだけど!」

いつもの顔で色気なくツツコミを入れつつも、アルの熱く潤んだ膣はヒクヒクと私のチンポを締め付けて愛情を示してくれている。

流されやすいように自分を見失わない気高さを、セックスのときも見せてくれるアルに、チンポのイライラが高まる。

「アル、一番奥に出すからね」

「あうう……はい♥」

本気でそう言っていると、アルは反論を飲み込んで承諾してくれた。

アルの太ももごと抱え込むように押し倒し、種付けプレスの準備をする。

不安げに私に腕を伸ばしてくれるアルを抱きしめ、私達は裸の身体を密着させた。

「射精まで、もう止まらないから」

「で、できれば、私がおかしくなっちゃう前に済ませて欲しいのだけど……」

ニコツと笑うと、アルは引きつった笑いを返してくれる。

アルの健康的で柔らかい身体を抱きしめながら、腰を使ってチンポをぬるううと引き抜き、

「はっぐう♥」

ずぱん！ と恥骨と下腹部が打ち合わさる音がラブホの部屋中に響く位に力を込めて突き立てた。

急に強い刺激を与えられ、アルの膣がぎちつと締まる。それを力任せに振り払うように再度抜いていく。

締め付けの強い所に強く腰を引くことで、私もアルもカリに強く擦られて激しい快樂が身体を駆け巡った。

「あぐっ♥ あ、ーっ♥」

私の背中に回された手に力がこもる。

それを感じながらも、なおも力任せの膣内射精のためのピストン運動は激しさを増していく。

「お、っ♥ んお、おとおおっ♥♥♥」

激しすぎる快樂に、アルがセットした髪と後頭部の角を柔らかな枕が破れるかと思うほど押しつけながら身体を仰け反らせて、腹の底から響いてくるような絶頂間近の雌の叫びを撒き散らす。

「出すよ、アル！」

「お、うっ♥ いぎっ、ひいいいんっ♥」

もはや返事も出来ないほどに乱れるアルの膣は絶え間ない絶頂で不規則にチンポを絞る動きをして射精を導いてくれる。

子作りしたがりなアルの身体の奥深くで、精を放った。

「あ、っ♥ ああああああああ……♥」

アルは最初の进りの時に大きな声を上げ、激しく絶頂した。そのまま、私の射精が終わるまで小刻みに絶頂してチンポに残った精液を膣で絞り上げてくれる。

快樂のあまり持ち上がったアルの尻を抱えて、下に角度を付けて精液をすべて子宮に流し込むように射精する。

「あ、ー……」

子作りの機能以外は停止してしまっただかと思うくらいに、無抵抗にアルが私の精液をすべて子宮で飲み干してくれた。

「ふう……とつても良かったよ、アル。射精を全部子宮に入れてくれてありがとう」

「あああ……まだ、お腹の奥ジンジンしてる……♥ なんだか宙に浮いてるみたい……♥」

一戦終えた私達は、裸のまま抱き合って添い寝している。

裸のアルが胸を押し付けられるのも構わずひしつと私にしがみついて、子宮の中の精液の感触を反芻し陶然としていた。

汗に濡れたその華奢な女の子の肩を抱き、寝乱れたアルの髪を撫でて少しでも整える。

「先生……さっき、言ったこと……」

「ん？ どれのこと？」

アルが私の肩に顔を押しつけて、目を合わせずにポツリと言った。

「沢山、練習するって……」

「ああ、セックスの練習ね。もちろん、アルの時間のある時にはいつでもするよ」

「うう……そのときには、あの……避妊、ちゃんとしてくれるわよね？」

「どうやらアルも、無事に私のセフレになってくれるようだ。」

「うん、普段はちゃんとゴムをつけるから安心してね」

「ええ……だったら今もしてほしかったんだけど……」

「だって、せっかくのアルの初セックスだし」

「それは……うん、ありがとう。私は……今日のこと、きつと一生忘れないわ」

そう言つてアルは、柔らかくも子供っぽさの薄れた女の笑みを見せてくれるのだった。

負けた方は何でも言うことを聞く（ムツキ）

「あり得ないー！ どうして先生そんなに強いのに!？」

新春。私はムツキに呼び出され、羽根突き勝負をしていた。

「ああもく、せっかく先生の顔を黒く塗ってあげようと思ったのにいー!」

最初、わざとやっているのかと思うほどにムツキは弱かった。何かと器用にイタズラしてくるムツキの意外な弱点を見た思いだ。

しかし、タダでは終わらないのがムツキだというのもこの一年思い知ってきた所。

「……良いこと思いついた」

にやりとイタズラを思いついた顔で笑う。ムツキが次の勝負を挑んできた。しかも先攻で良いという。

絶対に何か仕掛けてくるつもりだ……と思うが、別にムツキのイタズラくらい構わないので普通に受けた。

ててつ、と髪と同じく純白の着物姿でムツキが駆け寄ってくる。

「打つ前にく……あはつ、隙ありく!」

「ムツキ!？」

近づいたムツキは、私の首元をかぶつと甘噛みしてきた。瞬間的にチンポがイラつき、公衆の面前でテントを晒さないよう前かがみになってしまう。

さつと離れて羽子板を構えるムツキに羽根を突こうとするが、ムツキとセックスする事で頭が一杯になりサーブを決められなかった。

「あーっ! 先生、羽根を落としたりしちゃったね? ふふっ、先生そこが敏感なんだ? 顔真つ赤だよ?」

ニヤニヤと勝ち誇った顔で笑うムツキ。その顔を快樂で歪めたくてチンポがひどくイライラする。

「あはつ、ざーんねん! 私の勝ちだよ、先生!」

とても楽しげなムツキに、顔全体を黒塗りにされてしまった。

「もう一回! 今度こそ勝って……!」

再戦を挑もうとする私に、ムツキが余裕綽々に言い放つ。

「先生、何言ってるの？ 私が勝ったんだから、今日はもうこれでおしまー」

「……そう。おしまいなら、精算を済ませないとね」  
「えっ？」

「これまで12回勝って2回しか顔に筆を入れてないから、後10回、何でも言うことを聞いてもらうよ」

「や、やだなー、先生。その時に何も言わなかったんだから……」

「いいや、ルールは負けた方は勝った方の言うことを何でも一つ聞く。時間切れなんてルールは含まれてないよ。重複しないとも言っていない」

「せ、先生？ 本気で言ってる？ か、顔怖いなー。ムツキちゃん、先生は笑ってるほうがステキだと思うよ？」

「ギリギリと逃げようとするムツキに大股で近寄って、小さな手を握る。既に勃起した股間に触れさせた。

「う、うひゃあ!? ちょっと、そういうイタズラは犯罪になっちゃうよ!?」

自分で首筋を甘噛みしておいてムツキはそんな事を言い始めた。

「ムツキがあんな事をするからチンポがピンピンになっちゃったんだ。たつぷり10回セックスしてもらってから、シャールレに行こうね」  
「せ、先生、まず顔洗お？ そんな顔で迫られたら面白くって吹き出しちゃうよ」

「シャールレに帰ったら一緒にシャワーを浴びようか」

「う、うう……先生がまたあの時の感じになっちゃった……」

そう、ムツキはかつて私にイタズラ勝負を仕掛けて、返り討ちにあつてそのまま処女を私に奪われた過去を持っていた。

あれからしばらく、ムツキは私の顔を見るたび赤面して逃げて居たのだが……どうやら喉元過ぎれば熱さ忘れるということか、テンションが上がって同じ失敗を繰り返してしまったのだった。

「私にあんなふうに勃起を促すなんて、ムツキも成長したんだね」

「ち、ちがつ……私そんなつもりじゃ……！ ああもう、どうして先生はこういう時だけ押しが強くなるのー！」



ウダウダとぐずるムツキの手を引いて、真っ黒に塗られた顔のままシャワーレに帰った。

「ちよつと、先生？ 私、これからシャワー浴びるから……」

「流石に元日だと生徒も居ないし、一緒に浴びて問題ないよ」

シャワーの更衣室にムツキと2人きりになった。肌寒いが、どんどん脱いでいく。

「わああっ!? 何脱いでるの先生!?!」

「ほら、ムツキも脱いで。レンタルの着物にムツキのエッチな匂いが付いちやうよ」

「うゝっ……!」

私がフル勃起したチンポを見せつつムツキを促すと、前回メチャクチャにイカされた記憶が蘇ったのかムツキが頬を赤く染めた。

着物にシワができてしまうのにも構わず、太もも辺りの布をギュツと握って硬直してしまっている。

隠されてはいるがムツキの脚が布を押し上げる事で膝の位置がわかり、内股になって震えていることが伝わってくる。

「大好きなムツキにそんな可愛い所を見せられたらもう我慢出来ないよ。まずは着たまま一回しようか」

「なんで先生はおちんちん大きくなるとそんな風になっちゃうの……」

ムツキの前に跪き、着物の裾を捲り上げる。

普段から見えているものではあるが、肌を見せない着物の下を暴くのはまた違った興奮があった。

「ほ、ほら、先生。ここ、ドアが空いたら直接見えちゃう場所だよ？」

こんな所を見られたら、先生は明日から表を歩けなくなっちゃうかもね?」

「ムツキの気持ちよくなってる顔もよく見えちゃうから、2人とも表を歩けなくなっちゃうね。そうしたら一日中セックスしようね」

今日のムツキのショーツは着物に合わせて白だった。可愛いフリルが付いている。

「今日も可愛い履いてるね」

「先生のヘンタイっ！ 私みたいなちっぴやい子のパンツみてそんなに嬉しいの？」

「もちろん嬉しいよ。可愛いムツキがセックスしたくて濡らしてくれてるから、なおさら嬉しい」

「ぬ、濡らしてないもん……！」

むわっとチーズ臭のするムツキの股間に顔をうずめて、薄い布越しに勃起したクリトリスを唇で挟んで刺激する。

初体験で何度もクリイキさせたためか、ムツキのクリトリスはとても敏感だ。

「んくうっ♥」

口を押さえたのか、くぐもった喘ぎ声が上の方から聞こえる。ムツキは細い太ももを震わせて、クンニの快楽に耐えている。

可愛いショーツにシミが広がるのも可愛そうなので、小さなお尻を撫で回すのと同時に後ろからずり下げていく。

「ううう……また脱がされちゃう……♥ 先生にいけないことさめちゃやう……♥」

こちらをからかっているのか、単に興奮しているだけか。ムツキは甘ったるい声でそうつぶやくと、私の顔に押し付けるように股間を前に突き出した。

以前と同じく、ショーツの下には純白で無毛の恥丘が広がっている。

「とっても綺麗だよ、ムツキ」

「そんな所を褒められてもうれしくな〜い〜！」

口ではそんな事を言うが捲りあげた着物の裾はムツキが持つてくれているし、クリトリスも包皮の下でぶっくりと勃起している。

そつとクリトリスを口に含んで、唾液を絡めながらゆっくりと舌で転がす。

「はっ、うああ……♥」

思い出してしまうのか、ムツキは早速悩ましい声を上げて快楽に浸り始めた。

ぴちや、ぴちや。

腰から上は普通の晴れ着姿のムツキが、色白の肌を桜色に染めてクリトリスをしゃぶられて気持ちよくなってしまう顔を晒している。

ムツキの股間にむしゃぶりついているせいでその顔を見ることはできないが、

「あゝ♥ うううー……♥」

聴いているだけで射精してしまいそうなエロ声と、床にトロトロと垂れ続ける愛液がムツキの状態をよく教えてくれる。

ムツキの小さな穴に人差し指を入れて一かきしてやると、きゅうきゅうと締まって私を歓迎してくれる。

「ムツキの膣、とっても熟れてるね。私とセックスしてから沢山オナニーしてくれたんだね」

「ちっ、ちがあっ♥ ううーっ！ 先生がっ、私のこと放っておくからっ♥」

口で何を言おうとトロトロの膣穴をかき回されては答えは明白だ。一度しかセックスしたことがないとは思えないほど、ムツキの膣の中は私の指を喜んで啜えてくれる。

クリだけでなく、穴を使ってオナニーしてきた証だった。

「さあムツキ、ロツカーに手をつけて、お尻を出して」

「もうっ、先生のヘンタイっ♥ どうなっても知らないんだからっ♥」

口元の愛液を拭いながら立ち上がると、ムツキが眉を釣り上げて非常に難しげになる。

しかしその顔は興奮で赤らんでおり、ゴソゴソと自分から帯を緩めて着物の合わせを解いて脚を広げやすくしてからロツカーに手を付いた。

「くふふっ……この角度なら、入り口からは先生しか見えなくなるよ？ 生徒にこーんなやらしい事をする先生だけが酷い目に遭うと思うけど、大丈夫うー？」

ぱりぱりと小さなお尻を振って挑発してくるムツキの着物を捲りあげ、お尻を丸出しにする。

「ひゃああっ!? ちよ、ちよっつと、そこまでめくらなくても……」

「ムツキが沢山マン汁を出してくれるから、この位しないと着物がびしょびしょになっちゃうよ」

「そっ、そんなに濡らさないもん！」

ムツキがお尻を突き出してきている間に、私はコンドームを装着している。ムツキにとっては初めてのゴムセックスだ。

「さあ、ムツキの大好きなチンポでいっぱい気持ちよくしてあげるからね」

「だ、大好きとかじゃ、な、あああああつ♡」

滴るほどに濡れそぼっていた膣に、私のチンポがあつという間に飲み込まれていく。

144cmの小柄なムツキに挿入するためにかがみ込んだ脚を伸ばし、ムツキをチンポと腰で支えて宙吊りにする。

「あ、あああつ♡ これ、おかしっ♡ おちんちんでっ♡ 浮いちやつてるう♡」

いつも余裕そうなムツキの切羽詰まった声が私のチンポのイライラを増長する。

「可愛い声で興奮を高めてくれるなんて、ムツキは優しい良い子だなあ」

「ちがあつ♡ ううんっ♡ とまってっ♡ とまってよお、せんせえっ♡」

ムツキが脚をプラプラさせるたびに、膣が複雑に締まる。

細い腰を掴んだ手を前後に振って、まるでオナホのようにムツキの膣でチンポをしごく。

「あゝっ♡ だめっ♡ こんなのでっ♡ イツちやう……♡」

目の前の真っ白い尻がクネクネとゆらめき、ムツキが自分から快楽を得ようとしているのがわかる。

小さな肛門のすぼまりもヒクヒクと動き、私は片腕で腹の下からムツキの身体を持ち上げ、もう片方の手で愛液を指ですくってムツキの肛門に侵入させた。

「やだっ♡ せんせっ♡ そこ、きたないからっ♡」

むずがるようにムツキの腰のくねりが激しくなる。驚いたためか

膣の締まりも強くなり、一段上のオナホ膣へと変貌する。

「ムツキっ、そんなに締められたらすぐ出ちゃうよ」

「く、くふふっ♥ そんなにつ、きもち、いいんだあ♥ いいよ、だし  
てっ♥ ゴムのなかに情けなく射精しちゃえっ♥」

私をからかうネタを見つけ、ここぞとばかりに調子に乗るムツキ。  
しかし、それは私のチンポをイライラさせて自分を追い詰めるだけ  
ということには気づかないようだ。

「二回目、だすよっ!」

私はムツキの身体を下から支える手をクリトリスへと伸ばし、皮を  
向いてシコシコシコッ! と容赦なく攻め立てる。

「ひぎゅっ♥ ずるいっ♥ こんなんされたら、あっという間に、イツ  
ク……♥」

ムツキの弱点であるクリトリスを激しく刺激し、私の射精と合わせ  
てムツキも絶頂させる。

「イグううううっ♥♥」

誰が入ってくるかわからないシャールレビルの更衣室で、ムツキが大  
声で絶頂する。

ムツキをしっかりと抱えて、小さな身体の柔らかさを味わいながら  
私も射精した。

イツた後もギュウギュウと抱きついてくる甘えん坊なムツキの膣  
をゆったり味わいつつ、汗に濡れたムツキの尻を撫でる。

膣からチンポを抜いて、だらんと下に垂れたムツキの脚をそっと床  
に触れさせた。

「ありがとう、気持ちよかったよムツキ」

「はあ……はあ……♥ くふふ……♥ 先生、激しすぎ……♥ 私の  
ことそんなに大好きなんだ?」

膝が笑ってしまっているムツキの着物が床に出来た愛液の水たまり  
に触れないよう裾を持ち上げながら、振り返った所にキスをする。

「うん。ムツキが可愛すぎてまだ全然収まらないよ。後9回、よろし  
くね」

ずるんとゴムを外し、たつぷり精液が溜まったそれを縛って床に落

とす。

ムツキは赤い顔をしてチンポとゴムを交互に見下ろしながら、

「本当に……見つかっちゃっても知らないからね……♡」

スルスルと帯を解き、着物を脱ぎ始めた。

「ちよつと先生……なんでそこにいんの？ くふつ、私が着替えてる所、そんなにみたいの？」

「もちろん見たいよ。これからセックスするんだし、全部見ていいよね？」

「うう……おちんちんおつきくしたときの先生、おかしくなりすぎ……♡」

尖った耳まで赤くしながら、ムツキは私に向かい合ったまま着物を脱いでくれる。私のリクエストに答えてくれているのだ。

ムツキが脱いでくれている間に、私はチンポにゴムを着る。ムツキはロツカーの籠に衣服をすべて収めると、私に振り返った。

「お……おまたせ、先生……♡」

ツンと張りのある小さな乳房の頂点にある可愛らしい乳首が勃起しているのに目を奪われる。都合がいいのだろう、ムツキの髪はお団子にまとめたままだ。

私の視線に気づいたムツキが、慌てて手で隠した。

「ち、ちがつ……これは、ここが寒いからで……」

「そうだね。早くシャワーを浴びてあたたまろう」

裸のムツキの腰を抱き、手を滑らせて胸を愛撫しながらシャワーへと向かう。私はゴムの箱を複数持つていく。

顔を反らしてこちらを見てはくれないが、ヌルヌルになった股間からは太ももを濡らすほど愛液が流れており、点々と足跡が付いてしまっている。

「ムツキがセックスでこんなに気持ちよくなってくれて、私も嬉しいよ」

「くうっ……調子にのってえー……!」

ムツキは悔しそうに歯噛みするが、さんざん甘い声を上げてマンコも濡れ濡れなのでいつものキレはない。



性的な興奮と嗜虐心が満たされる楽しさで、行為に対する忌避感など吹き飛んでいるようだ。

前かがみ気味になったムツキの小さな胸はシャワーで暖まっても乳首がピンピンに勃起していて、私の目を楽しませてくれる。

「くふふっ♥ なあに、その顔！ なっさけなーい♥ しようがないからあ、ムツキちゃんのオマンコに、先生のどうしようもないヘンタイおちんちん入れてもいいよ♥」

射精を堪える私の顔を見て満足したか、ご褒美を与えてくれるムツキ。

私はシャワーヘッドを金具にかけてムツキの身体にかかるようにし、瑞々しくお湯を弾く太ももを持ち上げてI字に開脚してもらった。

「先生必死すぎ♥ ムツキちゃんのことお、そんなに好き？」

「好きだっ！」

叫ぶと共に、ずぶんっ！ とムツキのマンコを奥まで貫く。

「おっっ♥ っっっ♥」

もどから感じやすいところを日々のオナニーでほぐしてくれていたキツキツマンコが、突然の衝撃に強く締まる。

「こんなに気持ちいいマンコを私のために準備しておいてくれるなんて、ムツキはとつても優しくしてエッチな女の子だねっ！」

ぱん、ぱん、と音が響くほどに、激しく突き上げる。元日の誰もいないシャワーレールに、ムツキと私の肉が打ち合わさる音と、

「だめっ♥ これっ♥ はげしすぎっ♥ せんせっ♥ とまっ♥ とまっ♥」

ムツキが腹の底から絞り出すようなチンポに響くアへ声が響き渡る。もちろん、シャワー室は防音なので廊下には聞こえないだろうが……もしシャワーを浴びに誰かが入ってきたら、その瞬間に中で誰かがセックスしていることは丸わかりだろう。

「ムツキ、マンコがすごく締まってきたよ、もうイキそう？」

「イグっ♥ いぐからあ♥ 一旦止まってよお♥」

手コキで調子に乗ってみたが、チンポにはまだまだ弱いムツキ。



もつと経験を積みめばマンコで私を翻弄できるのかも知れないが、今はまだ可愛らしく簡単にアへるマンコを楽しませてもらう。

「じゃあ、また一緒にイこうね。ほら、私の射精のタイミング覚えて」  
「うああっ ♥ せんせいの、おちんちんが……ぶくっ、てふくらんでるう……♥」

「すぐわかるなんて偉いね、ムツキ。さあ、一緒にいくよっ!」

I字に開脚したムツキの太ももはお湯で温かくなっている。柔らかなくも細いその脚を抱きしめながらムツキの華奢な身体をガクンガクンと揺らして思い切り突き上げ、最後の一突きと共にクリトリスを捻り上げる。

「いっっ、っぐううううっ ♥」

ムツキの本気絶頂によってギチギチに締め付けて貰いながらの射精は、精液が登ってくる所をもみくちやにされていつもより更に気持ちがいい。

「あっ ♥ あっ ♥」

ムツキは身体を痙攣させて低い声でうなりながらいき続けている。2人の絶頂がピタリと重なり合い、溶け合って一つの肉塊になってしまったかのような仮初の一体感に身を任せた。

しばらくして射精が終わると、ムツキが転ばないように抱きしめながらチンポを引き抜く。

大量に射精したゴムがムツキのキツイ膣に締められて入り口で引っかかり、ポン、と音を立てて抜けた。

激しすぎる絶頂で腰が抜けてしまったムツキを床に座らせる。

「ぜー、はー……♥」

激しいセックスの後で息を整えるため小さな胸を上下させるムツキを見下ろしながら、次のゴムを装着する。

「すごく気持ちよさそうにしてたし、ムツキはもう疲れちゃったかな?」

顔を上げたムツキはムツとしてはいるが、いつもより目に力がな  
い。

「ふ、ふーんだ。先生じゃ、あるまいし……この位余裕だよ」

「そっか。でも私も立ちっぱなしで疲れたし、次は座ってしようか」  
「そ、そう？　しょうがないから先生にあわせてあげるね」

そういう事になったので、床に尻餅をついたムツキの前に胡座をかいて座り、軽い身体を持ち上げる。

天井を向いたチンポに膣穴をあわせ、ずぶん、と一気に奥まで挿入した。

「お、っ、ぐ　♥　だか、らあ　♥　それ、刺激つよいい　♥」

せっかくムツキの弱い部分を見つけたので、今のうちに堪能させてもらおうとムツキがいきやすいように動く。

最初に強く当たってガードを崩してしまえば、後は軽くムツキの身体を揺すってやるだけで……

「もうっ　♥　だめっ　♥　いく、またイツちやう　♥」

何度もイカされて耐久力の弱まったムツキは、簡単に絶頂へと導かれてしまう。

「いいよ、何度でもイツて。ムツキの可愛い所、私にもっと見せてほしいな」

「らめっ　♥　せんせいにこんなとこ見られるのやあ　♥」

ムツキの声は甘ったるく、幼児が泣いているような響きがチンポのイライラを更に高めてくれる。

「もういきそうでしょ？　我慢しないでいいよ」

「せんせいもっ　♥　せんせいもいっしょにイツてよお　♥」

ムツキの細い脚が、私の腰に絡みついてくる。首にも腕が回され、オナホのように揺らされるばかりだったムツキはなんとか自力で身体を支える事に成功した。

「ムツキから動いてくれたらきつとすぐイツちやうよ」

私とムツキの肩にかかるシャワーの中、濡れて暖まったムツキが私にひしつと抱きついて腰をくねらせる。

「イツて　♥　せんせいっ　♥　ムツキのオマンコで気持ちよくなって　♥」

余裕さのかけらもない、懇願する声でおねだりしながらムツキが腰を前後にくねらせ、狭い膣で私のゴムチンポをむしゃぶる。

「とつても気持ちいいよ、ムツキっ」

そのお返しとして、私もムツキのお尻を掴んで叩きつけるように突き上げた。

「ひっ、ぐう♥」

しがみついたムツキの手足に力がこもり、裸の身体が密着する。歯を食いしばって絶頂を耐えるムツキの膣は断続的な締め付けで私の精液を貪欲に搾り取ろうとしていた。

「もうだめっ♥ もうだめだからあ♥ せんせいっ♥ だしてっ♥  
だしてえ♥」

イクのを限界まで我慢したムツキが半狂乱になって射精をねだる。セックスに夢中になるその姿を見て愛おしさがこみ上げ、強く抱きしめてキスをしながらいっせいに射撃した。

「ん、むうううううんっ♥」

ムツキは全身を雷に打たれたように痙攣させて、また激しく絶頂した。

「はあーっ♥ はあーっ♥」

お湯で暖まったムツキの小柄な身体を抱きしめ、頬や唇に軽くキスをしてやりながらムツキが息を整えるのを待つ。床に転がるコンドームの数が2つになった。

「さて、次は……」

「む、むりっ、もうむりい♥」

次のゴムを取り出そうとすると、ムツキから待ったがかかる。

「そう？ 流石に疲れちゃったかな。ごめんね、ムツキの身体がすごく気持ちよかったから」

「う、ううーっ……また先生に良いようにされたあ……く、悔しい……」

胡座をかいた脚の上で、股を開いて私にしがみついたままのムツキが歯噛みする。しかし、それでも続けるとはもう言えないようだった。

「じゃあ、後7回のセックスはまた今度しようね」

「そ、それまだ言うの？ もうチャラにならない？」

「ならないよ。私はもつとムツキとセックスしたいからね。」

「仕方ないなあ……先生、私のことすっごい好きだよねー♥ くふつ、今日は負けたけど、もつと練習して先生の事ひいひい言わせてあげるから、期待してていいよ♥」

ムツキはいつもより力の抜けたイタズラな微笑みを浮かべた。私の腕の中で、裸でそんな表情をされてしまうとまたチンポがイライラしてしまう。

抱き寄せて、優しくキスをする。

「んむっ!? んっ♥ ふう、あむっ……♥」

ムツキは目を丸くして驚いてから、じやれ合うようなキスを受け入れてくれた。

「もう、終わりって言ったのに♥ なんでこんなにおつきくしちやつてるのかなあ♥」

ムツキのほっそりしたお腹に、私の勃起チンポが押しつけられている。

「ムツキ、最後に手でしてくれないかな」

「おっけー、いいよ♥ これもちゃんと一回に数えるからね♥」

ムツキが優位に立てる手コキを願いすると、笑って承諾してくれた。

先程習得した、竿と亀頭を刺激するムツキの手コキ。

竿をしごくことで、尿道に残った精液が漏れ出してムツキの綺麗な手をベトベトに汚した。

「あはっ♥ 先生、精液だしすぎー♥ そんなにムツキちゃんのオマシコ、気持ちよかったあ?」

私に跨っているため、ムツキの脚は開いてしまっている。

さっきまで犯していたムツキの膣口が、可愛らしい見た目に反して痛々しいほどに大きく口を開けた様子が丸見えだ。

その私の視線を感じてか顔を赤くしながらも、ムツキは楽しそうな笑顔で手コキを続けてくれる。

「ほらほら、精液だしちゃえっ♥ 『ムツキ様精液を出させてくださいお願いします』って頼んだらもーっと気持ちよくしてあげるけど?」

「ムツキ様精液を出させてくださいお願いします！」

「くふふっ♥ 先生、生徒とエッチすることしか頭はないのお？  
なっさけなーい♥」

即答した私を見て笑みを深め、グチヨグチヨグチヨ！ と精液が泡立つくらいに亀頭を素早くもみくちゃにするムツキ。

「うおおっ、ムツキ、それ、すごいっ」

「だーせ♥ だーせ♥ ムツキちゃんが、先生のなっさけなーい射精顔、  
見ててあげるからさ♥」

天性の言葉責めの才能を発揮しつつ、手首を柔らかく使った巧みな  
手コキで私を射精に導いた。

「ぐうっ！」

手が鈴口から離れた僅かな間に射精し、勢いよく噴出する。

「きゃっ!?!」

ドピュドピュと飛んだ精液は、ムツキの頬にまでかかり、胸元にボ  
トボトと降り掛かった。

「あはっ♥ 沢山出たね、先生♥ ムツキちゃんのちっちゃなお手々  
でえ、おちんちんシコシコ♥ ってされるのお、そんなに気持ちよ  
かったんだあ？」

「うん……とつても上手かった。才能あるね」

「そんな風に余裕ぶってられるのも今のうちだからね！ いつか、『ご  
めんなさい、もうできません』って言わせてやるんだから！」

頬に精液を垂らしつつ、ムツキは晴れやかに笑うのだった。

## ダイレクトに体温を感じる距離（ノノミ）

「ふうーっ……♡」

ノノミの甘い吐息が耳に吹きかかる。

スカート越しの温かく柔らかな太ももに頭を載せながら、膝枕で耳かきをしてもらっているのだ。

頭を固定するノノミの少しヒヤリとした繊細な指がくすぐったく、前かがみになったノノミの大きな胸が顔のすぐ近くに来ていられるほのかな体温さえ感じる。

チンコのイライラを抑えることができていない。

「ふふっ、先生……すっごく可愛いお顔、してましたよ♡ では、逆もしますのでこちら側を向いてください」

少し躊躇したが、ノノミの側を向く。もちろんズボンのはち切れんばかりに勃起テントを作ってしまったている。

「あっ……♡ ん、こほん、や、やっぱりくすぐったいですね……♡」  
私の股間が見えてしまったのだろう、少し言葉に詰まりながらも、触れないでいてくれるノノミ。

ノノミの股間を至近距離で見る姿勢での膝枕に、私は鼻息を荒くした。甘酸っぱいような、饅えた臭いのような、ノノミの股間の匂いがする。

「……………こうして表情が見られると、少し……照れちゃいますね」

勃起を横目でチラチラしながら、股間の匂いを嗅ぐ私を咎めずに続けてくれるノノミ。

私はニツコリと笑って、ノノミの股間に鼻先をうずめた。

「ひゃっ!? あ、あの、その姿勢ですと……くすぐりたい、ので……」

「ううん……でも暖かくてすっごく落ち着くんだ。いい匂いがするし」  
ノノミの雌の匂いは、じわじわと濃くなっている気がする。

「も、もう……仕方のない先生ですね……♡ わかりました、じっとしていてくださいね♡」

私の頭を抱くように固定して、ノノミは股間の匂いを嗅がれながら耳かきを再開してくれた。

かりかりと、ノノミの耳かきは続く。

「ふう……ふう……」

上の方からこぼれ落ちるようなノノミのささやかな吐息が、掃除された耳に滑り込んでくる。

鼻で息をすうーつと大きく吸うと、濃い雌の匂いが胸いっぱい広がった。

「ん……♡」

私の頭を支えるノノミの手に少しばかり力がこもる。

それを良いことに私はノノミの股間に更に強く顔を押しつけ、スカートの中の向こうに満ちる股間の匂いを余すこと無く味わった。

そんな風に夢中になっている間に、ノノミの耳かきが完了する。

「これくらいで、よろしいですね……♡ ふうーっ……♡」

先程よりも熱っぽい吐息を仕上げに吹きかけられ、チンポのイライラが最高潮になる。

「はい、それでは耳かきおしまいです♡」

その声と共に、私はソファアールの上でゆっくりと体を起こす。

「ど……どう、でしたか？ 色々やってみましたが、癒やされましたか？

？ それで、あの……この後は……」

ノノミが、私の股間にチラリと視線を落とした。

「ノノミとセックスしたい」

「え……あの……、こ、困ります、先生……」

顔を赤らめて、自分の体を抱くように腕でかばうノノミ。豊かな胸を強調するようなポーズにチンポのイライラが強まってしまう。

「でも……男の人って、そう、なってしまうたら……だ、出して、あげないと、収まらないんですね。だから……仕方ありません、よね……♡」

赤らめながらも苦笑と共にセックスを受け入れてくれるノノミに我慢の限界に達した私は、その豊かな体を抱きしめる。

「きゃっ!? ふふっ、先生、そんなにがっついて……♡ いけませんよ

？ 私、初めてなんですから……♡」

急に襲いかかった私を優しくたしなめ、そっと抱き返して背中を撫

でながら耳元で囁くノノミ。

耳かきをしているときのイタズラめいた声よりも熱っぽく、期待と緊張で少し上ずったその声は、まるで愛撫のように背筋を伝い、腰の後ろがゾクゾクと快感に震える。

「ノノミっ……っ！」

まるで挑発するように私の性欲を煽るノノミに、巨乳でパツパツになったシャツのボタンを外す私の手が震える。

「先生、落ち着いて。ゆっくりで良いですよ。私は逃げませんから……っ♥」

今まさにセックスのために服を脱がされながら、聖母のように微笑むノノミ。

しかし、それとは対象的にシャツから解き放たれた胸からは少し暑い室温に蒸らされた雌の体臭が立ち上る。

「さすがに……恥ずかしいですね。どう、でしょうか、先生？ 私の胸……変じゃありませんか？」

「綺麗だ」

普段窮屈そうに収まっているところから開放された胸は左右にやや広がりながらも、まだブラとキャミソールという拘束を受けている。

ノノミのほっそりとしたお腹に手を当て、キャミソールの裾から下に侵入していく。

「ふっつ、お腹、くすぐったいですよ、先生。待ってください、今脱いじゃいますから……っ♥」

ぐいつ、と思い切りよくキャミソールを下から上げるノノミ。  
「ん、しょ」

大きな胸が持ち上がり、キャミソールが抜けると共にぶるんつ、と落ちる。

ヘイローと同系統の、薄い黄緑のブラに包まれたおっぱいが、窓から差し込む光に照らされて輝くばかりの白さで目に飛び込んでくる。

「もう、そんなに食い入るように見られたら、恥ずかしいですよ……っ♥」



そう言いながらも薄く笑いながら、上半身がブラだけになったノノミが後ろに手を回してブラのホックを外す。

静かに乳房の拘束が解かれ、一糸まとわぬ状態となった。

「さ、さすがに、ここはまだ、お見せできないと言うか……」

精一杯の勇気を出して上半身裸になったノノミが、乳首を腕と手でかばいながら真つ赤な顔で苦笑した。

ノノミだけに恥をかかせるわけにはいかないと、私も服を脱ぐ。すぐに全裸になった。

「わわっ、先生、思い切りが良すぎますよ!? わあ……そんなに、赤くて、カチカチになって……」

驚いて顔を片手で覆いながらも目の間はぼちり空いていて、ノノミの視線がチンポに釘付けなのもよく分かる。

「これ……痛いんですか?」

ふらふらと、ノノミの手が私のチンポに伸ばされる。亀頭をぶにと指で突くと、快感で我慢汁が滲んだ。

「あ……さきつぽは、結構柔らかいんですね」

好奇心のままにノノミの手が竿へ伸び、優しくさすられる。

「熱い……こんなに固くなって、血管も浮き出て、ゴツゴツしてるんですね……あつ、なんだかお汗が出てきましたよ」

「ノノミの手が気持ちよくて、我慢汁がでちゃったんだ」

「がまん、じる?」

上目遣いに聞き返すノノミに、射精の一つ前の現象、女性の愛液と同じようなものと説明した。

「私の手で気持ちよくなってくださってるんですね。じゃあ……こういうのは、どうです? しこ、しこ……♥」

私の顔を覗き込むように見上げながら、ノノミが竿を握って手を上下に動かす。

先程まで私のほっぺをつつき、頭を撫で、耳掃除をしてくれていた手で、手コキをしてきている。

上半身全裸のノノミが、その大きな胸を片手で申し訳程度に隠しただけで性奉仕してくれている光景は、それだけで刺激が強すぎるくら

いだ。

「ああ……上手だよ、ノノミ」

鈴口から垂れた我慢汁が、ノノミの綺麗だった手をベトベトにしている。

それに構わず手コキを続けるノノミは、我慢汁のヌル付きを利用して更にスムーズに手コキを続けてくれる。

「ノノミ……お願い……ノノミのマンコに入れさせて……」

「そうですね……先生は、私とセックス、したいんですものね……♡」

このまま性欲を発散させておしまい、とはせず、私の要望をちゃんと聞き届けてくれるノノミに胸が熱くなる。

私はそつとスカートのホックを外し、ショーツがちらりと見える状態にした。

「あん、もう……先生、そんなに私とセックスしたいんですか？ 我慢の効かないワンちゃんみたいですよ？ ふふっ♡」

私の粗相をやりわりとたしなめ、腰を浮かせて自分からスカートを脱いでくれる。ワンポイントにリボンの付いた可愛い下着が見える。

ショーツ一枚になると、ノノミの雌の匂いが一段と濃くなった。

近くの椅子にスカートを引っ掛けて、ほとんど裸のノノミを抱き寄せる。

ここは、アビドスの対策委員会の教室だ。一年頑張ったおかげで、ここにも少しずつ物が増えてきた。

今からセックスしようとしているソファもその一つだ。

「他のみんなが今にも現れてもおかしくないのに、こんな格好になっちゃって……私達、とんでもないことしちゃってますね？」

心優しくおっとりしてはいるが、イタズラ好きでもあるノノミが、とんでもない状況をクスクスと笑っている。

「そしたら見た人も入れて全員でセックスしよう」

「あははっ。もう、先生ったら♡」

私の言葉を冗談だと思って笑うノノミだが、私は本気だった。

それはさておき、全裸でフル勃起の私は裸に手ブラとショーツ一枚

のノノミを抱き寄せ、むっちりとした、先程まで膝枕で頭を載せていた太ももの内側を撫でる。

「んっ♥ く、くすぐりたい、です……♥」

そんな事を言いつつ、ノノミの声は快樂の甘さを帯びている。

スルスルと上り、ショーツの上からマンコを撫でると、ぬちゆりと湿った感触が返ってきた。

「ノノミも興奮してくれてたんだ？」

ノノミは股間を指で優しく撫で回されながら、私にもたれかかるように体重を預けて、唇を私の耳に寄せる。

「だって……先生が、耳かきしてるだけなのにあんなにおちんちんを膨らませるから……ドキドキして大変だったんです……♥」

唇が触れるか触れないかの距離から、耳奥がゾワゾワするような官能的なささやき声を浴びる。

愛撫の交換のようにノノミのクリトリスをショーツ越しに舐った。

「ああ……♥ そこ、そこ、すごい……気持ちいい……♥」

初めて聞く、雌の快感に切羽詰まったようなノノミの声。

我慢できなくなり、腰骨に引つかかっているノノミのショーツを丸めるように下ろして、お互いに靴と靴下以外生まれたままの姿になる。

「私……先生の前で、裸になっちゃいました……♥」

愛液にたっぷり濡れたノノミの股間が私の視線に晒される。

処理の行き届いた陰毛が、溢れる愛液に少し湿っていた。

ぽつてりと厚めの大陰唇の上端から、大ぶりのクリトリスがぴこつと可愛らしく覗いている。

「は、恥ずかしいですから……あんまり、見ないでくれると……」

クリ愛撫と羞恥で首元まで赤くなったノノミの言葉を聞き流し、私は床に跪いてノノミの脚を広げクンニを始めた。

「先生、そんなところ舐めたら、きたな、あああっ♥」

あわせ目が少し開いてきれいなピンクの中身が少しだけ見えていたノノミのマンコをベロベロと舐め回す。

汗をかいて恥垢になる寸前の濃ゆい愛液溜まりを舐め取り嚥下す

る。飲み下すたびに腹が熱くなり、媚薬のように勃起が激しくなっていく。

「あつ、ああう、あつあーっ♥」

ノノミは初めてのクンニに翻弄されて、大声でよがるばかりだった。

生徒が5人しかいない校舎には他に物音も無く、校庭に居たって聞こえるかも知れない。

私が寝ている時にやったのだらう、開いた窓からノノミの淫らな声が筒抜けになっていた。

「ご近所さんがいたらノノミの声が全員に聞こえちゃってたね」

「もう、意地悪言わないでください……♥ 明日から表を歩けなくなっちゃうじゃないですか……♥」

「ごめんごめん、と笑って窓を閉めに行く。帰ってきた時には、ノノミがソファアーにタオルを掛けていた。

「このソファアーに臭いが付いちやったら大変ですから……ちゃんとかバーをかけておきましようね」

マン汁に濡れたマンコを見せつけながら、中腰でソファアーメイクをするノノミに後ろから襲いかかった。

「ひゃんっ♥」

下向きになった大きな乳房を支えるように鷲掴みにする。

むっちりとした尻の間にチンポを押しつけ、腰を振って尻コキを開始した。

「もうっ♥ こんな格好で、おちんちんを擦りつけちゃって……先生、本当にワンちゃんになっちゃったんですか？」

からかうようなノノミの言葉に興奮を高め、手のひらにコリコリと主張してくる勃起乳首をそっと摘んで上下に扱き立てる。

「ああっ♥ ち、乳首、だめっ♥ そこ、ビリビリ来ちゃいます♥」

ノノミの敏感な体はすでに準備万端で性感を貪っている。

尻の間にあつたチンポを調整し、マンコに挟まるようにして素股に移行する。

「あ、あつ♥ お、おちんちん、そんな所に擦りつけたらっ♥ 赤ちや

ん、できちゃいますよっ♥」

「そうだったら、産んでくれる?」

「先生……ふふっ、それも良いかも知れません。でも学校の借金を返してしまわないと、みんなに申し訳ないですから……赤ちゃんはその後で、ですね♥」

優しい笑みで子作りを承諾してくれるノノミをソファアに膝立ちにさせる。

腰を掴んで、濡れ濡れになったマンコに後ろから一気にチンポを突き立てた。

「あ、ああっ!」

ずるん、と奥まで押し入ったチンポに、ノノミが苦悶の声を上げる。

ノノミの膣内は熱く、入り口は握るようにキツイが奥の方はふわふわと柔らかく蕩けていた。

「おお……気持ちいいよ、ノノミ。ノノミは平気?」

「はあ、はあ……ちよつとびっくりしましたけど、意外と痛くは無いのですね……先生の熱くてカチカチなの、おへそまで届いちやつてます……♥」

肩で息をするノノミだが、愛撫が功を奏したのか平気そうにしている。

女の子の小さな背中に覆いかぶさり首筋に鼻をうずめてノノミの匂いを嗅ぎながら、ゆったりと胸を揉んだ。

ノノミはソファアの背もたれに手をつけて尻を突き出し、私が犯しやすいように配慮してくれている。

処女とは思えない優しい心遣いにチンポを膣内で跳ねさせると、  
「んっ♥」

ノノミの尻がピクンと跳ね、周りに比べて濃い茶色の肛門がキュッと締まった。

ノノミはあまり痛がってはいないが、処女なので慎重に腰をグラインドさせる。

奥の膣壁がねつとりと竿や亀頭を撫で、ノノミを犯している実感に金玉がドクドクと精子を吐き出したがっているのがわかる。

「あ、あれ……？　そう言えば先生、あの、ひ、避妊というのは……？」  
ずっぽりと啜えこんだ後ではあるが、ノノミが少し振り返っておずおずと訊いてくる。

「後で妊娠しづらくなる薬をあげるから、それを飲んでね」

「へえ、そういうものがあるんですね。わかりました。それなら……  
その、ナマで、しましうか♥」

チンポを啜えこんでも全く陰ることのない優しい笑みに、ノノミの子宮口に押しつけたチンポが激しく射精を訴える。

それを抑え込みつつむっちりとした尻に手を置いてゆつくりと腰を前後に動かし始めた。

「は、んんんっ♥　せんせいのおつきくてっ、お腹の中ひっかいちゃつてますっ♥」

初めての刺激に振り返る事もできず、俯いてしまうノノミ。

カリまで引き抜くと、入り口のキツイ締め付けにより膣を外側まで伸ばして、チンポを引き止めるように離さない。

その反動で速めに奥まで挿入すると、アツアツで柔らかな肉が優しく受け止めてくれる。

「あ、っ、あああーっ♥」

びく、びく、と背筋を震わせて、低い声を上げるノノミ。

突かれるほうが好きなのかと、腰の速度を色々変えて上下左右の膣壁を満遍なくこすって反応を見ていく。

「せっ♥　せんせっ♥　ちよっ♥　これ、だめ♥　へんにっ♥　なっちやいますからっ♥　あっ♥　そこ、そこお、ーっ♥」

パン！　パン！　と尻肉が打ち合わさる音が鳴るくらい突込が好みらしいノノミは、ぐっぶ、ぐっぶ、と愛液を溢れさせて悶えている。

入り口の締め付けは手コキのようにキツく、奥は風呂に入っているかのように熱く汗気に満ちていて、交尾に夢中になる発情期の獣のように、教室の中で腰を振っていた。

窓の外からは時折、ブロロロ……と車の走る音が聞こえる。

汗ばむくらいの陽気な日差しが差し込む中で、間接照明に照らされ

たノノミのセックスする裸体が神秘的に美しい。

その美しいノノミが、処女から激しくバックで突かれ、

「はあっ、ふっ、んぐっ♥んっ♥ふっ、ふっ♥」

息も荒く、腹から出たような低めの声で快楽に没頭している様がたまらなく射精欲をそそる。

きゅん、きゅん、と入り口の締め感覚が狭まり、ノノミの中で快感が限界まで高まりつつあるのを感じる。

私は腰を振ったままノノミにのしかかり、耳元で囁いた。

「そろそろ射精するから、ノノミも一緒にイこうね」

「あっ♥い、いくっ、て♥ どういう感じなのか、まだ、分からない♥」

膣イキしたことのないノノミは、絶頂の手前でどうしたら良いのか分からず高まり続ける快楽を持って余しているようだった。

「大丈夫、気持ちいいのに集中してて」

そして、愛液でベトベトに濡れたクリトリスの皮を剥き、シコシコと擦り上げる。

「んぎゅっ♥はっ、く、んんんーっ♥♥♥」

ノノミの腰が大きく跳ね、膣がギチギチと締まる。それに合わせて私もノノミの子宮口に大量の精液を浴びせかけた。

私の腕の中で、汗ばんだノノミの体が震える。

体を支える肘が笑い、背もたれに突っ伏そうとするノノミを私が間に手を入れて乳房を守った。

優しく子作り射精を受け入れてくれるノノミに甘えて、どくん、どくん最後の一滴まで奥に吐精する。

「はっ、ふっ、ふうーっ……♥」

まだ固いままのチンポを啜えながら数分じっとしていると、ノノミが深呼吸して余韻から覚める。

「はあ……凄かった、です……♥ ああ、先生？ まだ、その、先生のがかちかちなんですけど……」

気恥ずかしいのか、ノノミが振り返らずに声をかけてくる。

「ノノミの中がとても気持ちいいからね。ノノミがもう辛いなら早く

抜くよ」

「あつ、いえ！ 大丈夫、です……なんだか、体の中に先生の熱いのが入っていると、すごく……ドキドキして、幸せになっちゃいますね……♡」

ノノミがそんな可愛いことを言うので、勃起が完全に復活してしまった。

「あんっ♡ 先生の、また熱くなっちゃいました……♡ 今ので、興奮してくださったんですか？ ふふっ、もう一回……しますか？」

柔らかく少しからかうようないつものノノミの声で、次のセックスの事について話してくれるのが、たまらなく興奮する。

「うん、したいよ。次はノノミが上になつてくれるかな」

「上……？ よくわかりませんが、先生のお望みのように♡」

ズルズルとチンポを引き出して、引き止めるような膣口が外に伸びるのを振り払い完全に抜く。

ソファに膝立ちのノノミのとなりに腰掛け、ポンポンと太ももを叩いて呼んだ。

「さあ、腰を下ろして入れてみて」

「ああ、そういう姿勢なんです……抱っこみたいでちよつと恥ずかしいです」

全裸に靴下と靴だけで膣からは精液と愛液を垂らしながら恥じらうノノミがおかしくてエロくて、少し笑った。

「では、失礼して……っん♡」

ノノミが片手でガイドして、つぶつぶと膣口にチンポを啜えこんでいく。

目の前でゆっさりと揺れるノノミの大きな胸は、乳輪が少し濃い肌色で親指の先ほどもある大ぶりの乳首共々迫力があつた。

「先生……私のおっぱい、そんなに気になります？」

「うん、ノノミのおっぱい、近くで見ると圧倒されるね」

そう言つて、片乳に吸い付く。

「あは……先生♡ 赤ちゃんみたいにおっぱいに吸い付いて……かわい♡」



赤子をあやすように頭を優しく撫でられながら、しつとりとしたささやき声に耳奥を愛撫される。

「ママのおっぱい、おいしいでちゅかー……♡」

幼児語で囁かれながら優しく撫でられ、それとは裏腹に熱く汗ばむ体に密着され、膣は快感にキュンキュンと締まって精液をねだつてくる。

これ以上無いほどのいやらしい癒やし空間がここにあった。

レロレロと乳首を舌で転がし、歯に軽く当ててアクセントを加える。

「んっ♡ ママを、気持ちよくしちゃうなんて、いけない赤ちゃんでちゅね♡」

しゃぶっていない方の乳首も転がして勃起乳首に快感を与えるほどにノノミの囁きが熱っぽくなった。

空いた方の手で汗に濡れたノノミの背中をなで上げ、ソファアのスプリングを利用した反動で腰を上下に動かす。

「あっ、ああっ♡ 奥を、ずんずんって、お腹のなか持ち上げられちゃいます……♡」

子宮をチンポで持ち上げられたノノミは、赤ちゃんをあやすような態度をやめて私にすがりつくように抱きついた。

大きな胸の谷間に顔を押しつけられ、鼻だけでノノミの汗ばんだ蒸気を呼吸する。

ノノミの方はそんな事に構ってられないという風に強い力で私を抱きしめ、自分自身も大きく腰を振り始めていた。

まだ不慣れなノノミがぎこちなく腰を振り、ばっふばっふと間の抜けた音を立てながら2人の共同作業で気持ちいい動きを探っていく。

「んっ♡ ふうっ、ふうっ♡ あっ♡♡ ここ、すごい、ビリビリって、きちやい、んんっ♡」

先ほどと同じく、性感の高まりを感じさせるノノミの跡切れ跡切れの囁きが耳朶を打つ。

ノノミの胸、ノノミの腕、ノノミの囁き、ノノミの膣。

「はっ、あ、う、うーっ♡♡」

すべてをノノミに包まれたような安堵感の中で、ノノミが絶頂し……再度、ノノミの子宮に精液を浴びせる。

「ふう……ふう……ふう……ふう……♥」

先ほどよりは楽な姿勢だからか、体を完全に私にあずけてゆったりと余韻に浸るノノミ。

私もアツアツの膣に一滴残らず精液を注ぎ込み、ノノミの中で勃起の収まりをゆるりと待った。

「あー……ここ、血が付いちやってますね」

服を着直してそそくさと後片付けを進める中、ソファに敷いていたタオルを見てノノミが言った。

「ノノミの初めての証だね。飾っておきたいくらいだ」

「だめです！ もう……ちゃんと洗わないと。血の汚れてちよつと落ちづらいですから」

顔を赤らめながらノノミが濡れた面を内側に折りたたむ。

「あつ、そうだ。避妊のお薬っていつ飲めば良いんでしょうか？」

「今で大丈夫だよ。買う時はエンジェル24に売ってるから、欲しくなったら言ってね。お金を渡すから」

「先生……随分なれてらっしゃるんですね？もしかして……他の子ともこんな事を？」

「アビドスでは他にはシロコだけだよ」

笑ってそう言うと、ノノミはふう、と頬を膨らませた。

「無理やりはしてないと思うから、良いですけど……後ろから撃たれても知りませんよ？」

「愛する生徒に撃たれるなら本望だよ」

「そんな事を冗談でも言っちゃいけません！ まったく……さつきは赤ちゃんみたいにおっぱい吸ってたのに、悪い先生でちゅねー？」

「ノノミが吸わせてくれるなら毎日吸いたいくらいだよ」

「ふふっ♥ そうしたら毎日先生がアビドスに来てくれて、楽しくなるかも知れませんね♥」

ノノミはそう言ってニコニコと笑うのだった。

## 待機中の時間つぶし（セナ）

「ああ、先生。ようこそお越しくださいました。さあ、どうぞ」

橋の袂、設けられた小さな駐車スペースに止まっている緊急車両1号の運転席から身を乗り出して、助手席のドアを開けてくれるセナ。

夜のKVハイウェイに人気はなく、こうして歩いて来ても車とすれ違うことさえない。

私の常識で言えば高速道路は徒歩立入禁止なのだが、キヴオトスでは皆がルールを無視するのでたまに高速道路で轢かれる生徒もいるという。

それで死ぬわけではないので誰もやめないのだが……

「ありがとう、セナ。今日の仕事はどうだった？」

救急医療部のバンの運転席には助手席のドアを開けるボタンもついているのだが、セナはこうして身を乗り出して開けてくれる。

下を向いたおっぱいが服越しにゆっさりと揺れるその光景に、毎回チンポがイライラしてしまう。

「乱闘騒ぎが起こって、死……負傷者が大量に出て、それが片付いて書類仕事を。要するに代わり映えのない仕事です」

車に乗り込んでドアを閉めると寒い外の空気が遮断され、それだけで少し温かく感じた。

セナがずっと一人で乗っていた車の匂いはどこか甘く感じ、いつものように報告してくれるセナの表情も心なしか柔らかい。

「先生の方こそ、お体の調子は大丈夫ですか？　あまり疲れているようならこの車で病院まで搬送しますよ」

真顔でこんな事を言うセナだが、純粹な気遣いから出た言葉だということはもう分かっている。

「大丈夫。仕事でこの辺りに来たから、終わったついでにセナに会いに来たんだ」

私がそう言うと、セナの口元が微かに綻んだ。

「そこは前置きを抜いて私に会いに来たと言ってくれたほうが嬉しい

ですが。それでは後ほどシャーレにお送りしますね」

こんな軽口を言い合える位にセナとは仲良くなっていた。何かと落ち着いていて、とても素直なセナは私とウマが合うらしい。

「うん、お願い。……ふう、しかし今日は寒かったなあ……」

「ポットに紅茶を用意しています。どうぞ」

私が車内の暖かさにホツとすると、セナからすぐに温かい飲み物が差し出された。

車内で寛いでいるためセナは素手だった。渡す時に微かに触れ合った滑らかでひやりとした指先が、震えるのを感じた。

無表情のまま差し出されたそれを、お礼を言って受け取るとふうふう吹きながら紅茶をすすする。

「あー、あつたまる……ありがとうね、セナ」

「いえ、自分用に持ってきたもののおすそ分けですみませんが」

「そっかあ……じゃあセナと間接キスかな、なんてね」

「……………」

セナが黙ってしまったのでふと隣を見ると、セナは俯いて太ももに置いた自分の手の辺りを見つめていた。

さすがにセクハラが過ぎたかと謝ろうとした所で、車内の頼りない照明で照らされたセナの頬が赤らんでいる事に気づく。

「セナ？ 嫌なことと言ってしまったらごめんね？」

私が声をかけると弾かれたように顔を上げた。

「い、いえ。不快ということは、ありませんが……先生とキスをするという想像で頭がいっぱいになってしまって、固まってしまいました」  
そんなことまでも素直に伝えてくれるセナに、チンポのイライラを止めることが出来ない。

「じゃあ、実際にキスしてみようか」

「先生は、またそんな冗談を……」

じつとセナを見つめると、その綺麗な喉がごくりと動くのが見えた。

「本当に……そんなことを、私と？」

「セナとだから、だよ」

じつと待っていると、セナは瞳を左右に泳がせ、迷いながらも私に近づいてくる。

「せん、せい……」

セナのつるりと美しい白皙が、肌理まで感じられる位の距離に迫る。

ぷるんとした唇が、吐息のかかる所まで近づき……私はセナの肩をそっと抱き寄せ、唇を奪った。

「ん……」

1秒ほどで離れようとするセナを抱き寄せて阻止しつつ、唇をちゅううと吸い立てた。

「んむうっ!？」

セナの美しい金の瞳が見開かれる。初めて見る、セナの驚愕の顔。

「んっ♥ んちゅっ♥」

唇を吸う私の動きにだんだんと身を任せて、たどたどしくもセナからも私の唇を吸ってくれる。

そのまま、セナはキスの続きをせがむようにそっと目を閉じた。

その変化を楽しんだ後、そっと舌をセナの口に潜り込ませた。

「んんっ♥」

唇の裏を撫でる私の舌に身震いした後、歯の間をノックする私の舌を、そっと口を開けて受け入れてくれた。

「れう……♥」

私の舌と小さくてぷりぷりと熱いセナの舌とが、社交ダンスでも踊るかのようによつたりと絡み合う。

「ふう……ふう……♥」

慣れないセナの鼻息も荒くなり、唇の端からぬらりとよだれが垂れていく。

ぴちや、ぴちやと車中に淫らな水音を響かせながら、何分も唇を貪りあった。

セナの上顎をチロチロとくすぐるように舐めると、

「んんんっ♥」

一際大きな反応をして、全身を震わせる。軽くイッてしまったと見

抜いた私は、そつと唇を離した。

「はあ……はあ……♡」

2人の間に銀の糸を引きながら離れると、セナの顔は真っ赤になっていた。

荒い息を吐いて半眼になっているセナは普段の無表情ぶりが嘘のように艶かしく、チンポがビンビンになった。

「どうだった、セナ？」

耳と首筋を指先で愛撫しながら訊くと、ぴくんぴくんと体をすくませて身悶えしながら甘い声を漏らす。

「あ♡ 先生、そんな、触り方をされては、っあ♡ へんなっ♡ 声が、出てしまいますっ♡」

そう言いながらも抵抗する事なく、席を隔てた私に寄りかかるようにして身体を触りやすいようにしてくれている。

「こういう事、もつとしたい？」

唇同士がかする位の距離で囁くと、セナは瞼を伏せてゆっくりと自分からキスをしてきた。

「ん……♡」

先ほどよりも大胆に舌を絡めると、セナの表情が悩ましげに歪み眉間にシワが刻まれる。

服の上から乳房をさすつてみた。

「っふ……♡」

救急医療ということで戦闘を見据えた看護服はそれなりに厚手の生地だが、それを押し上げるセナの豊かな胸を、ゆつくりと揉み潰していく。

じわじわと揉む力を強めながら、セナの反応を確かめる。

服に強くシワが寄るほどに思い切り驚掴みにしても、セナはむしろ恍惚としていた。

「んう……♡ ふううんっ……♡」

悩ましげな声を上げ、ほとんど私に抱きつくように運転席から身を乗り出して、掴んで良いのか分からないという風に手を空中でさまよわせている。

耳を愛撫していた手を離し、セナと恋人繋ぎに手を握った。

「んっ♥ちゅっ♥ぢゅるっ♥」

セナはきゅっと手を握り返して、私の唇を吸うことで返礼をしてくれた。そのいじらしさにズボンが痛いくらいにテントを張ってしまふ。

私はそつと唇を話すと、セナにお願いしてみることにした。

「セナ、後部座席ってリクライニングできる？」

「はい、死……負傷者を寝かせて運ぶことも想定していますので」

こんなときでも無表情に淡々と言うセナだが、熱っぽくきらめく瞳と頬紅のように赤らんだ頬が興奮の度合いを教えてくれていた。

するりと私の手から離れ、車のドアを開けるセナ。サツと身を翻し、後部座席のドアを開けて再度中に入ると、『ベッドメイク』を始める。

これから私に処女を捧げるためのベッドを整えていくセナへの愛しさが募り、思わず私も車の外に出て今か今かと待ち構えてしまった。

「どうぞ、先生。……周りに、誰も居ませんね？」

「うん。大丈夫、さつきから車も通らないよ」

四つん這いでドアを開けてくれたセナを抱きしめながら中に入る。座席を倒すと結構広々としていて、斜めにすればギリギリ寝転がることができた。

「あつ、先生……♥」

私に押し倒されたセナが、期待に震える声で呼んでくれる。

「じゃあ……まずは服を脱ごうか」

「ぬ、脱ぐのですか？ いえ、まあ、それはそうなのでしようが……」

当たり前だが、この車はスモークガラスとかではない。内からも外からも見える、普通のガラスだ。

夜のハイウェイで、駐車場に止まっているとはいえ……車内には電灯も点いている。道を行く車から見ても、座席越しに裸体が見えかねない。

セナも、車の窓から丸見えの外をチラチラと気にしていたが……や

がて身体を起こすと、私の隣で服を脱ぎ始めた。

見慣れた青の服を脱ぎ去ると、下には簡素な白の同系統の服がもう一枚重ね着されていた。

普段見れないものなので感心して見ていると、セナが少し非難がましい目を向けてくる。

「先生も、ちゃんと脱いでください。私ばかり脱ぐのは恥ずかしいです」

セナの素直な物言いをありがたく聞き入れ、私もどんどん脱いでいく。車内は二人分の体臭が広がり、セックス直前の男女入り混じった匂いが立ち込め始めた。

「あ……先生の、もう、そんなに……♥」

私のバキバキに勃起したチンポをちらりと見てポツリとつぶやくセナ。

お互いに、既に裸になっていた。セナがナース帽をしていないのは新鮮で、頭を撫でる。

「先生に撫でられると、不思議と安らぎます」

「裸のセナにそう言われると、私は安らぐどころか興奮しちゃうけどね」

車内は暖房が効いているとはいえ、少し肌寒い。裸の身体を抱き寄せセナの肩から肘にかけて擦ると、絹のように滑らかな肌の感触にため息が漏れた。

「先生……私の身体は、ため息をつかれるような期待外れのものでしたか？」

少し眉を寄せ、不安げに見つめてくる、私の腕の中の裸のセナ。

「えっ？ 違うよ。セナの肌がすごく滑らかで気持ちいいから、うつとりしてため息がでちゃった」

「さすがのように寄せられたセナの裸体……胸も腕も、太ももも腹も、全てがしつとりと吸い付くような極上の質感だった。」

「本当……ですか？」

珍しく確認するように訊いてくるセナの手を取った。そして、私のチンポを握らせる。



「ひゃっ……」

「すごく勃起してるでしょ？ 男のここは嘘を吐けないから、セナに魅力を感じてる証拠だよ」

そう言っただけだと、セナは握らせた手に少し力を込めてシコシコと上下にしごき始める。

「熱い……硬い……太い……私の魅力で、こんな風になっているのですか？」

上目遣いで自信なさげなセナが、人生初の手コキをしてもらっているという光景を目に焼き付ける。

「うん。セナはとても魅力的な女の子だから。その調子で扱いてくれると気持ちいいから、続けてみてくれる？」

ハッと、自分の手が動いている事を言われて気づいたようにセナは顔を伏せるが、その視線の先にあるチンポを目にしてびくりと肩をこわばらせた。

「もう少しだけ強めに握って、上下にしごいてみてよ」

私は引き続き、セナの身体を温めるように肩を抱いた手で腕の外側をさすり続ける。

「ああ……先生の、男性器が……こんなに……」

私の腕の中に自ら身を寄せながら、セナは両手でチンポを握ってシコシコしてくれる。

それはテクもなにもない愚直なものでしかなかったが、一生懸命なその奉仕に我慢汗がにじみ出てきた。

「これは……尿道球腺液でしょうか？」

「ちょうど……なに？ まあ多分そうだと思うよ。男が気持ちよくなると出てくる、俗に言う我慢汗だね」

「気持ちよく、なっただきさっているのですね……♥　こう？　もつと、こうでしょうか……」

じいっと私のチンポを見つめて、より我慢汗が出るような動きを探求し始めるセナ。

セナの緊張がほぐれてきたと見て、私も裸になったセナの巨乳に手を伸ばす。

服を脱いでもなおツンと形を保った美しい釣り鐘型のおっぱいを、遠慮なく鷺掴みにする。

「あんっ♥ 先生、そ、そこは、敏感で……♥」

「敏感だから沢山触るんだよ。セナが私のチンポを手コキして、我慢汗を出してくれたようにね」

医学用語しか知らなかったセナに、淫語を教えこみながら、握り潰すように胸を揉む。

「んんんっ♥」

セナの白い肌に薄ピンクの乳首をしたおっぱいが、私の手の中で潰れていく。

だがセナは甘い声を漏らして手コキを続けてくれていた。

「セナは、この位の力加減が好みかな？」

ぎゅうう、と胸が潰されると、セナが眉をしかめた。

「ん、う、ううっ♥」

びくん、びくん、と全身を痙攣させ、低めの大きな声を上げるセナ。手コキの手も止まってしまい、くたりと私に寄りかかって脱力してしまう。

「お、っ……♥ ふうーっ♥ ふうーっ♥」

ぽかんと口を開けた、気の抜けた顔で絶頂の余韻に浸るセナを見て、私はセナの乳輪の辺りを、ほとんど抓る位の強めの力で摘み、引っ張った。

「ん、っぐ♥ お、ぎっ♥ い、ひいいいっ♥」

背中をのけぞらせて、ガクンガクンと身体を大きく痙攣させるセナ。

「あ、っ♥ あ、っ♥」

セナは殆ど失神しているかのように焦点の合わない視線を車の天井に向け、私の腕の中でダランと全身を脱力させてしまっている。

その体をそっと横たえ、閉じることさえ意識出来ないセナのほっそりした脚の間にある、生え揃った陰毛を撫でる。

サラサラと柔らかな陰毛は、先ほどからの興奮状態でうっすら汗ばんでいた。

大陰唇はピッタリと閉じ、清楚なスジを描くばかりだ。成熟した身体に反しウブな性器にセナらしさを感じ、思わず顔がにやけてしまう。

「セナ。大丈夫？」

「だ、だい、じょうぶ、です……♥」

セナの陰毛を撫でながら声をかけると、かろうじて返事があった。「セナは身体が敏感なんだね。初めてでこんなに気持ちよくなれるなら、セックスの才能があるよ」

「あ、ありが、とう、ごさいま、す……♥」

よろよろと身を起こしたセナは、ふらつく腕で身体を支え、四つん這いで後部座席へと這い進んだ。

「どうしたの？」

「先生との行為が、予想以上に激しくなりそうなので……シーツを敷かせて下さい」

座席奥のトランクススペースから取り出したのは、病院のベッドに敷く感じの純白のシーツだった。もちろん了承して、ベッドメイクしてもらおう。

セナがぷりぷりの尻丸出しでシーツを手際よく敷くのを眺め、作業が終わると同時に後ろからマンコにしゃぶりついた。

「ああっ♥」

外に聞こえる位の音量で、セナが喜びの声を上げる。ぴったりと閉じたスジを舌で割り開き、濃い目の味がするマン汁をぴちやぴちやと舐め始めた。

「あつ、あつ、あ、あぁーっ♥♥」

せっかくシワ無くメイクしたシーツが、四つん這いでクンニされて悶えるセナの手でくしゃりと握りしめられる。

車の中で裸になり、室内灯で照らされているのが外から丸見えだと忘れてしまったかのように、セナは自分から私に股間を押し付けてクンニの快楽に夢中になっていた。

舐める先から愛液が溢れ出し、膣口がパクパクとうごめくを感じて、頃合いだと口を離す。

「さあ、セナ。セナの処女、私がもらおうよ」

「はあーっ、はあーっ♥ はい、来て……下さい」

可愛らしいヒクつく肛門も、愛液でヌラヌラと濡れる膣も、オレンジの室内灯に照らされる中……セナが迷いなく返事をした。

「本当に、私でいいの？」

「はい……いつか皆がする事であるのなら、初めては先生が良いと……何度もお話するうちに、そんなことを考えていました」

清らかなほど、どこまでも真っ直ぐなセナの言葉に胸を打たれる。

「とても光栄だよ、セナ。じゃあ……行くよ」

「あっ……いえ、先生がお望みならば……来て、下さい」

セナが何事か言おうとして、引っ込める。

私はセナの好意に甘えて、ピツタリと閉じた大陰唇の奥にある受け入れ準備万端の処女膣に、我慢汁を垂らすチンポを生で沈めていった。

「うっ、ぐ……」

濡れそぼっているとはいえ、私のサイズに処女膣を広げるのは辛いようで、セナから苦悶の音が漏れる。

片手でセナの乳輪をぎゅっつと摘むと、牛の乳搾りのように胸を引っ張った。

「あ、あうっ♥」

セナが本気で感じる時の低い声を上げて、乳首の快楽に悶える。

膣から余計な力が抜けたタイミングを突いて腰を進めると、ずっぴりと龟头がはまり込み、逆に奥に飲み込まれるように竿も入っていく。

すぐに処女膜に突き当たった。

「いくよ、セナ」

「はい……♥ 私の処女、貰って下さい……先生」

もし今ハイウェイを通る車に乗った人が横を見ていたら、私のチンポに貫かれて無残に押し広げられたセナの膣口が見えたかも知れない。

そんな開放的な口ケーションの中、ズンと腰を突き出すとあっけな

くセナの処女膜は破れた。

「つつ……ふう、ふう……」

「大丈夫、セナ？」

「ふう、と破瓜の血がセナの股間から溢れ、クリトリスまで垂れた後、シーツに赤いシミを描く。」

「はい……噂に聞くほどの苦痛ではありません……その、先生のお好きに、動いていただけますか？ 私はどうすればいいのか、解らないので……」

セナの言葉なので額面通りに受け取るとしても、あまり最初からガングアンと膣をほじるのはよくないだろう。

だから、ここまで弄っていなかったクリトリスを指先で転がしてやることにした。

「んんっ♥」

「こっちはどうかな？ 痛みが薄れると良いんだけど」

弄るたびに、膣内もヒクヒクと反応している。セナはマンコまで素直だと関心していると、クリトリスを弄られながらなので切れ切れに返事が返ってきた。

「は、い……♥ そこ、はあ……♥ いつも、自分でも、シているところなので……♥ 快楽を、得やすいです……♥」

とても正直に告白してくれるセナに、危うくもう膣内射精してしまう所だった。

「よくオナニーするんだ？」

まだ強張りが完全に取れていない膣をねつとりと撫でるようにかき回しつつ、セナと身体を密着させて耳元で囁く。

「んっ……♥ 先生と、よくお話をするようになってから……夜になると、切なくなってしまうっ……♥」

ひくひくと膣が締め、セナの胸のときめきをそのまま伝えてくれる。

「嬉しいよ、セナみたいな可愛い女の子に思ってもらえるなんて」

「私なんかが、可愛いなんて……」

「ほら、セナの中にある私のチンポはどうなってる？」

セナのどこまでも素直な告白に、私のチンポはもはや暴発寸前だった。

腰を少しくねらせるとセナの熱々の処女膣が吸い付き、懐っこく吸い付いてくる。

「熱くて……大きくて……私で、こんなに興奮してくださっているのですね……♡」

「そうだよ。セナが可愛すぎて今にも射精しそうになってる」

そう言うと、セナは言葉もなく俯いた。ふう、ふう、と荒く息をしながら、ただその時を待っている。

「こういうのは一緒にイクのが大事だから、セナも頑張ろうね。ちよつと体重をかけるけど、手で踏ん張ってて」

「……はい。お願いします、先生」

そして、可愛い生徒に種付けをする時間がやってきた。私はセナの両の乳輪を摘むと、乳首の根本辺りをぎゅうと抓るような強さで摘み、おっぱいを牛の搾乳のように下に引っ張る。

ここまでの愛撫で調べた、セナが苦痛一步手前の一番気持ちよくなる力加減だ。

「んっぐ♡ せんぜえっ♡ ぞれだめっ♡ へんにっ♡ なりまっすっ♡」

普段のオナニーではここまで強くしたりはしないのだろう、強い刺激にセナの肘がガクガクと震える。

それでも頑張っていて耐えている健気な女の子を、バックで激しく犯す。

下腹部をセナのむっちりとした尻に叩きつけるように腰をふる。

パン！ パン！ パン！ パン！

一突き一突きに力を込めて、1秒に2回ほどのペースでさつきまで処女だった膣をカリと竿で蹂躪した。

「おっ♡ うっ♡ うぎっ♡ いっ♡ いっ♡」

膣壁をカリでこそがれ、子宮をノックされて揺らされ、セナは腹の奥から絞り出されるような声で啼いた。

じゅぶ、ぐぶっ、と粘質な音が肉の打ち合わさる音に隠れて聞こえ

る位には、セナは愛液を垂れ流している。

股間の下のシートには大きな水たまりが出来、破瓜の赤はもうぼやけている。

乳首をひねる度、奥深くまでチンポを突き刺すたびにセナの膺はヒクヒクと痙攣し、締付けで私を楽しませた。

力を込めて大胆に動いているため、さつきから車体がぎっし、ぎっしと揺れてしまっている。

座席を長く使おうと斜めに四つん這いになったセナの向きに合わせて前輪と後輪が片側ずつ沈んでいるのが外から丸見えになっているだろう。

そんな事は二人共全く気にせず、ひたすらにカーセックスに夢中になっっていた。

「さあ、セナ。行くよ。一番奥に射精するよ！」

「きて♡ きてください、せんせえ♡」

生ハメ子作りセックスを、避妊の保証もなしにすべて受け入れてくれたセナの優しさに包まれながら、思い切り尻に打ち付けて射精した。

「あゝあゝ ああーっーっ ♡♡♡♡」

車道の反対側に居てもはつきりと聞こえるだろうセナの大きな絶頂声が響く。

処女の強い締付けに射精の気持ちよさを増幅されながら、子宮をめぐらせて私の濃い精液が流し込まれていく。

それからしばらく、二人共身じろぎもせずに射精し射精されるだけの時間を過ごした。

「はーっ♡ はーっ♡ はーっ♡」

息を詰めて射精される感覚に集中していたセナが、肩で息をして絶頂の余韻に浸っている。

そんな汗だくの背中に抱きつき、コロンと二人して横向きに寝転がると、セナの頭を撫でながら声をかけた。

「お疲れ様、セナ。すごく気持ちよかったよ」

目もうつろなほど消耗しているセナを抱きしめてチンポを抜かず

に待っていると、ようやくセナが顔をこちらに向けた。

「はあっ♥ はあっ♥ わ……私も……想像の何倍も、気持ちよくて……衝撃的でした……♥」

笑みを浮かべるセナの表情は今まで見たことも無いほど柔らかく、セックスを頑張り過ぎて力が抜けているのだろうと思わせた。

「それは良かったよ。……じゃあ、はい。これは避妊のお薬だからなるべく早くに飲んでおいてね」

脱ぎ捨てたコートのポケットから薬を出して渡すと、

「……………」

裸で横向きに寝たままのセナがいつもの無表情になった。いつもの事なのになんだか機嫌が悪そうに見えるから不思議だ。

「この手の薬は、確実に避妊できるといえるものではないのですが……」  
「もし出来ちゃってたら責任を取るよ」

「……責任、とは？」

ちろり、と珍しく横目で強い視線を向けてくるセナ。

「セナの望むままに。中絶の費用を出すとか……あるいは結婚するか」

私がそう言うと、視線がふっと緩んだ。

「でしたら結婚ですね。安心してください。他の女性と縁を切るときには私も立ち会って差し上げますので」

「それは心強いな」

セナはチンポを抜かないまま身を起こし、座席足元に転がっていた水筒に入ったあの温かいお茶で薬を飲んだ。

「……先生は、どのくらいの生徒に手を出しているのですか？」

「セナで28人目になるね」

はあ、と呆れのため息を吐かれた。

「まったく……私のように先生に執着する生徒が増えたら、いつか本当に死体になってしまいますよ」

「まあ、そうならないように頑張るから……」

「どうしても駄目そうであれば、必ず私に言ってください。先生を匿う事はやってみせますので」



私に抓られた乳首をぶつくりと扇情的に勃起させながら頼もしい事を言ってくれるセナを見て、セックスしてよかったと笑みがこぼれた。

「ところで先生。一度膣に射精した以上、もう一度しても大して変わらないと思いますか？」

「……またセックスしたい？」

「はい。初めてだったのに、先生の顔を見ながら出来ませんでしたで」

とても素直で可愛らしい女の子を押し倒し、今度は仰向けにして脚を抱えさせ、種付けプレスで犯した。

今度は車が上下に跳ね、ベッドのスプリングとは違った反動に弾むセナの見事なおっぱいと低めの喘ぎ声を堪能した。

二度目もたつぷりと膣内射精して、破瓜の血と愛液と精液がべったり付いたシーツを片付けた私達は、そのままシャーレへと車を走らせている。

ニオイ消しのため車内にはごうごうと風が吹き込み、とても寒い。先ほどまでの濃厚なセックスの残り香が、キヴォトスの郊外に撒き散らされて消えていった。

隣で車を運転するセナは、そんな寒い車内にあっても首筋と頬の赤みがまだ引いていない。

綺麗な横顔に残る情事の痕跡を見て笑顔になっていると、セナがぼつりと言った。

「せっかくの初めてですから、車などではなくベッドで先生と一夜を共にしたいです」

「いいよ。セナが満足するまで付き合っただけでいいよ」

そう言うと、ぐんと車が加速した。

「でしたら、一刻も早くシャーレに到着しなければなりませんね。飛ばしますから捕まっただけでいいよ」

「そこまで急がなくても……セナが望むなら、合う度にセックスしてもいいんだよ」

「……そんな事を言われたら、ますますもう一度したくなってしま  
うんです」

車は更に加速して、夜のK Vハイウェイを駆け抜けて行くのだっ  
た。

## 今日はフウカのための食卓（フウカ）

「さ、どうぞフウカ。お口にあうかわからないけど……」

「く、口に合わないわけじゃないです！ 先生が作ってくださいだった料理なんですから……」

そう言って、フウカは顔を赤らめて目を輝かせながら、私の作った肉じゃがに箸を伸ばした。

地下に存在する、先生用の居住区。そこには専用の風呂やキッチンなんかも存在し、終電を逃した時なんかにはよく利用する。

当番で来たフウカが疲れた顔をしていたので理由を聞いた所、ジユリによるバイオハザードと美食研究会の襲撃が重なり食堂が壊滅したらしい。

相変わらずゲヘナの子たちは元気だと思いつつも、丁度いい機会だからと思いいフウカに日頃のお礼として私から料理を作って振る舞うことにしたのだった。

その日もガッツリと仕事をしてから、エレベーターでフウカと一緒に地下に行く。

「へえーっ、こんな風になってたんですね」

「フウカはゆつくりテレビでも見てて。メインはもう作ってあって、後はサラダを用意するだけだから」

「ふふっ、じゃあお言葉に甘えさせてもらいます」

特に珍しいものはない、内装もコンクリート打ちっぱなしの殺風景な部屋だがフウカはキョロキョロと興味深げに部屋を見渡していた。

まあ、風呂場にはノドカとスーププレイをしたマットやスケベイスが仕舞ってあるのだが……

そんな事とは知らず、ごく健全にソファの柔らかさやテレビリモコンなんかを確認している。

微笑ましいフウカの様子を後目に、私はキッチンで簡単な料理の用意をした。

さつき言ったメインとは肉じゃがのことだ。特に料理が上手でな

い私にも作れて美味しいという、ありがたいメニュー。好みで酒を多めにに入れて風味を出してある。

冷えて味の染みた肉じゃがに再び火を入れ、温まったら醤油を垂らす。これで完成。そしてレタスキゅうりトマトを適当に盛り合わせてサラダということにする。

「おまたせ、フウカ。ご飯と味噌汁を持ってくるから待つてね」

「いえ、そこまでは！ 配膳くらいは一緒にさせてください！」

そう言っ立ち上がると、炊飯器から手際よく米を茶碗によそつた。

「さすがフウカ、そうしてるのがすごくしつくり来るね」

「も、もうっ。配膳してるだけじゃないですかっ」

そう言いながらも照れ笑いしてくれるフウカが可愛い。とはいえ流石にお礼の席でチンポをイライラさせるわけにはいかないので、純粹に可愛さを堪能する。

そして、テーブルに差し向かいで座ると手を合わせていただきますと言う。

「さ、いただきます。えへへ……先生の手作り肉じゃが、楽しみです」

「フウカと比べればお粗末なものだと思っけどね」

「そんなわけありません！ 先生が私のために作ってくださいったお料理、絶対美味しいですよ」

そう言っ、深皿に盛られた肉じゃがを自分の小皿に取るフウカ。

その小さな唇が、あ、と開かれる。

居住区の照明に照らされたフウカのみずみずしい唇が、小さく紅い舌が、私の作っ煮込みじゃがいもを優しく受け止め……フウカの口内へと飲み込まれていく。

フウカならずとも緊張の一瞬だ。

「ん、んんっ……☆ 美味しいです！ これ、料理酒というものでしょうか？ 私はまだ買えないから私には出せない味ですね。えへへ……まさに、先生の味……です」

目を見開いた後、花咲くように満面の笑みを見せてくれる。

「フウカのお気に召したようでよかったですよ」

「ふふっ、だから言ったでしょう？ 先生が私のために作ってくれたお料理と思えば、美味しさもひとしおですっ」

そう言っつて、もう一口ぱくりと人参を頬張るフウカ。

それを見届けて、私も食べ始めることにした。

フウカとの食事は楽しく進んだ。

私の仕事で会った他の学校の話をつウカは微笑みながら聴いてくれて、フウカが語ってくれる日々の苦労話や嬉しかった事を喜んで聴いた。

そして食べ終わると……

「ふわあー……にゃんらか身体がぽかぽかしてきましたあ……」

フウカが酔っ払っつていた。

みりんでも酔っ払うフウカは、ほんの少し飛びきっていなかった酒の成分で酔っつてしまったのだろうか。

「しえんしえー♥ 美味しいおりようり、ありがとうごじやいまーす♥」

けらけらと笑いながら、首元まで紅潮させた赤ら顔でフウカがこちらに手を伸ばして、私の手を両手で握る。

その手は私の体温より少し冷たく、つるりとした手触りをしていた。いつも水仕事をしている人の手だった。

「大丈夫、フウカ？ 少し横になったほうがいいよ」

チンポのイライラをこらえながら、完全に酔っ払っ払いになってしまったフウカの手をそつと押し留めてテーブルの向こうに行き、フウカの肩に手を置く。

「らいじょうぶれふよー♥ んーっ♥ せんせいだいしゆきー♥」

フウカはパツと立ち上がると、私に抱きついた。

女の子らしい小柄ながら、ヒナよりは20センチは高いその体軀は、育つ所もそれなりに育っている。

エプロンと制服ごしにも柔らかな少女の身体が強く密着し、私の胸の辺りにフウカの顔がグリグリと擦り付けられる。こんなときでも

角が当たらないように配慮してくれる所にフウカの並々ならない優しさを感じる。

「えへへーっ♥ せんせー、せんせー♥」

すんすんと匂いを嗅ぎながら私に擦り付いてくるフウカに、あつと  
いう間にチンポのイライラが限界に達した。

細い腰を抱き、フウカとソファまで歩いていく。

「フウカ。こんなに無警戒に男の人に抱きついたら駄目だよ」

「えー？ いいですよーせんせーなら」

「こんな事されちゃうよ？」

そう言つて、無造作にフウカの胸に触る。

「んっ……♥ せ、せんせい……♥」

フウカは甘い声を漏らした後、私に潤んだ目を向けて目を閉じた。

「フウカ……フウカの全部、私が貰っちゃうよ」

「せ、せんせいが、お望みなら……私、なんでもします……♥」

震える唇が、熱情をそのまま漏らすかのように甘い言葉を紡ぐ。  
リップクリームと肉じやがの脂で艶めくフウカの唇に遠慮なくキス  
をした。

「んんっ♥ んむう♥ ちゅうう♥」

唇を重ねるだけのキスに、フウカからの熱烈なアプローチが加わつ  
て淫らな水音が居住区に響いた。

キスの最中にエプロンを脱がし、制服を少しずつ緩めていく。ゲヘ  
ナの生徒は何人もセフレにしたので、制服の脱がし方も慣れたもの  
だ。

前が完全にはだけ、飾り気のない白のブラが現れる。

「あむっ、せ、せんせ、んむっ、ちゅるるうっ♥」

それを恥ずかしがったフウカが何か言おうとしたのを、舌を入れて  
口内をかき回す事で黙らせた。

柔らかく手触りの良いブラごしにフウカの乳首を指先でくるくる  
と回して遊ぶ。

「んっ♥ んっ♥」

指が強めに乳首を押し込むたびに、フウカは肩をすくませて快楽を

感じている事を教えてくれた。

フウカの綺麗な顎に、唇の端から漏れた唾液が伝っていく。明るい照明の下、目を開けてディープキスを続けるとフウカの陶酔の度合いがよくわかった。

一心に私を見つめ、潤んでキラキラと輝く瞳でピチャピチャと私の舌をフェラのようにしゃぶり、トロンと快楽に蕩けた目尻の下がった表情を見せてくれる。

酒に酔っていた最初の頃とはまた違う、甘美な女の悦びに目覚めていくフウカはたまらなくチンポをイライラさせた。

ついにフウカの上着を脱がせ、薄いシャツとブラだけの姿にしてしまう。するりと背筋をなでながら腰の脇にあるスカートのホックを外す。

「ふうっ ♡ ふうっ ♡」

これから犯す事を宣言するその行為にもフウカは私の胸元を握りしめたまま、させるがままにさせてくれた。

その好意を受け取って、フウカの制服をすべて脱がしきる。上下揃いの着心地重視の綿の下着は、いつも料理に打ち込んでいるフウカのイメージには合っていた。

ちゆる、とゆっくり唇を離すと、フウカはトロンと蕩けた視線を宙にさまよわせ、唾液でテカる唇から熱い吐息をして余韻に浸っている。

小さなその背中に手を回して、ブラのホックを外す。ゆっくりと持ち上げると、フウカはぎゅつと目をつぶって自分から腕を上げてくれた。

手のひらにすっぽり収まるサイズの膨らみに、ぽつちりと小指の先のようにやや長めの、肌色が濃くなったような艶のある乳首が明るい照明の下ではつきり見える。

「綺麗だよ、フウカ」

「は、はずかしい、です……」

小さなフウカの前で屈み込み、乳首に吸い付く。

「んいっ ♡ あっ ♡ だめっ ♡ そんなとこっ ♡」

ちゅう、ちゅう、と音を立てて吸い付くと、私の頭を抱きしめながらフウカが身悶えた。

空いた方の乳首も指先で優しく転がす。

「あっ♡ あーっ♡」

誰も来ないシャーレの居住区地下に、可愛らしい喘ぎ声が響いた。

「せんせっ♡ も、だめっ♡ なにかっ、きちやつ、あ、ああああ……♡♡」

泣いているような鼻にかかった声で囁るフウカの声は美しかった。

かすれるような高音の、人生初の乳首イキ声。

「はあっ♡ はあっ♡ はあっ♡」

乳首で絶頂を経験したフウカが、荒い息で小さな胸郭を膨らませている。

ピンピンに勃起したままの乳首に優しくキスをして、身体を離れた。

「次は、フウカに服を脱がせて欲しいな」

「はあっ、はあっ……はい……♡」

熱に浮かされたような性欲にきらめく瞳のまま、フウカはのたのたと私の服を脱がせる。

服を脱がして現れた胸板をペタペタと撫で回したり、ベルトを外すのに興奮しすぎて手が震えている所はフウカが溢れ出る性欲のままに行動していることを感じさせてくれて、チンポのイライラも頂点に達していた。

「わあっ……♡」

勃起が激しすぎて苦勞しながらズボンのジツパーをおろしたフウカの前に、先が濡れた私のパンツが晒される。

蒸れた股間の臭いを吸い込みながら、華やいだ嬌声を上げるフウカ。

前傾したフウカの身体はショーツ以外一糸まとわぬもので、ディープリキスと乳首舐めにより汗でぬらりと濡れ、こぶりな乳首を固く勃起させた淫らな姿を隠しもしない。

いつもしているオレンジの頭巾だけが、目の前にいるセックスした



くてたまらないという顔をした女が間違いなくフウカであることを示していた。

ぐいっと腰のゴムを伸ばしながら、私のトランクスをフウカが脱がしてくれる。ついにフウカの目の前に勃起チンポが突きつけられた。

「ああ……♡　これが、先生の……♡」

そつと、割れ物を扱うようにフウカの両手がふわりと竿に添えられる。

「ありがとう、フウカ。じゃあ、はいこれ」

「はっ……ああ、は……えつと、これは？」

夢中でチンポを眺めていたフウカに声をかけると、我を取り戻したフウカが誤魔化し笑いをした。

「避妊薬だよ。これがあれば生で出来るからね」

「ごくっ……生……赤ちゃん、できちゃうかもしれないからね……♡」

「そうだよ。それとも、フウカは飲まずにしたい？」

汗でしっとりとしたフウカの小さな頬に手を当てて撫でながら言う、フウカはクスリと挑発的に微笑んだ。

「先生と私の子供なら、出来ちゃってもいいんですけど……それじゃあ先生が困りますから。いただきますね」

「ありがとう、フウカ。いっぱい気持ちよくしてあげるからね」

ピルと水の入ったコップを渡すと、フウカはサツと飲み込んだ。

「先生……いっぱいいいっぱい、気持ちよくしてください♡」

そう言つて、見せつけるようにショーツを脱いでいく。

ソファに横になると脚を高々と上げ、白く細い太ももを一枚の布が通過すると、その中央に愛液が糸を引いていた。

脱ぎ終わるまで待ちきれないとばかりにフウカの股間にしゃぶりつく。

「ああっ♡　先生、そんなところっ、汚いですからっ♡」

甘い声を上げながら自分から脚を大きく開き、腰を突き出して舐めやすいようにマンコを差し出してくれるフウカ。

ぷにぷにと弾力があり、キメも細かい上質な大陰唇に包まれて、上

品な塩味の愛液を舐め回す。

鼻面を突っ込み、膣に舌を入れ、皮に包まれたクリトリスを転がす。

「あーっ♥んひーっ♥」

地上に届きそうなくらいに声を大きくしたフウカが、ピンと脚を180度にかけて快楽を叫ぶ。

毎日の立ち仕事で鍛えられた太ももが目の前で快楽の痙攣に震え、細くも筋肉がついている事が伺えた。

チラリと横目に見える靴下に包まれたつま先は、ギュツと力を込めて丸められ、もうじき絶頂を迎えると正直に教えてくれる。

「あーっ♥」

シコシコとクリトリスをしごかれながら、フウカはクンニで絶頂した。

全身をガクガクと痙攣させ、太ももの内側の筋肉が震えているのがくつきりと見て取れる。

背中をグンと反らせてセックスしているように腰を前後させ、艶めかしいダンスを踊っているかのようだ。

「ぜーっ♥ぜーっ♥」

ソファに寝そべったまま、じつとりと汗をかくほどに必死の様子で絶頂の余韻を受け止めるフウカ。

そんな指一本動かさないという感じの少女の前に、勃起チンポを突き出す。

「次は私のを舐めてみて欲しいな」

「ふあい……♥ちゅっ、ぢゅるっ♥」

首を微かに上げたところにある裏筋に、躊躇なくべつとりと唇を押し付ける。

滴る寸前の我慢汁を、言われるまでもなくフウカが吸って飲み込んでくれる。

「ぴちゃ……かぼっ♥かぼっ♥」

本能の赴くまま、という感じで亀頭に舌を這わせ、そのまま口を大きく開いて啞え込み、顔を上下させて音を立てて吸いたてるフウカ。

「おおっ、上手だよ、フウカ」

私の称賛に目だけで微笑んで、フウカは肘を支えに上体を起こしながら口を使つて私に丁寧な奉仕を施してくれる。

「ぢゅっ♥ ちゅぽっ♥ はむっ、れるっ♥」

丁寧以上に熱心なそのフェラは、寝ている所からソファに正座のようにならなうに座つて傍らに立った私のチンポをしゃぶる体勢に変わるまでも途切れる事なく続いた。

「ぢゅろろっ♥ んくっ♥ ふーっ♥ ふーっ♥」

唾液と我慢汁が混ざったものをフウカが喉を鳴らして飲み込む。

実のところ、性欲だけでしゃぶっているフウカのフェラは射精に導くには少し刺激が足りない。

サラリと揺れる黒髪のかかった、フウカの立派な二本の角を撫でる。

「んっ？」

くりっ、と何をしているのか単純に疑問に思ったフウカが首をかしげる。

普段どおりのその仕草が、フェラに興奮した赤ら顔と我慢汁でテカる唇が私のチンポを啜えたままだという事実によりひどく艶めかしい。

「ん、フウカの角つて感覚とかあるのかなと思って」

「ぶああ……♥ さすがに感覚は無いですね。触られると根本の肌が引っ張られるから分かりはしますけど」

そうなんだ、とつぶやきながらフウカの角を撫でる。先端だけツルツルしているが、下に行くときすぐ表面の凹凸が現れる。

「く、くすぐったいですよ、先生」

「そう？ 結構敏感なんだね」

汗で頬に張り付く後れ毛をかき上げながら、少し視線を逸してフウカが言った。

「だって……先生に沢山気持ちよくされたから、全身が敏感になつてしまつて……きやつ!？」

びゅるっ、と我慢汁が吹き出てフウカの顔にかかった。

「よし、それじゃあそろそろ、フウカの処女を貰おうかな」

「ん、ちゅ……はいっ♥」

頬の辺りにかかった我慢汁を指で取って舐めていたフウカが、満面の笑みを浮かべる。

正座していたフウカをソファの背もたれに押し付け、太ももを掴んで思い切り開脚させた。

「いくよ、フウカ」

「よ、よろしく、お願いします……先生♥」

クンニでイかせたとはいえ処女の清らかさを保っているフウカのマンコはぴったりと閉じ、膣口さえ見えない。

亀頭でグリグリとスジを嬲り、先端の感覚で探り当てる。

「あっ♥ あっ♥ そっっ♥」

チンポで表面を弄られるだけで、フウカは身体を震わせて甘い声を上げた。

すぐに膣口を探り当て、体重をかける。じわりと膣口が広がる気配をみせ、フウカもついにセックスするという事が理解できたのか固唾を呑んで結合部に目をやっていった。

「あ、っぐ、ふうふううっ、あ、あっ！」

顔をしかめて、うめき声を堪えながらも……処女膜を一息に破った衝撃にはフウカも腹の底からの声を上げてしまっていた。

「大丈夫、フウカ？」

「はっ、はっ……はい、大丈夫、です……先生の、私のお腹の中に入っ  
てて……すごくっ……ん♥ あっい……です♥」

目を半開きにして自分の腹を見つめ膣の感覚に集中しているフウカは、間違いなく初めてのセックスに没頭していた。

「先生……動いて、ください♥ 私の身体を使って、気持ちよくなって欲しいです♥」

上目遣いに、密やかな声でフウカがささやく。

小さくもしつかりと耳に届く甘い声に押されるように、フウカの太ももを私の脚の上に載せ、チンポを根本まで突き刺した。

「んっく、一番、おく……押し込まれちゃってます……♥」

「辛いならちゃんと言ってね」

フウカの瞳を覗き込みながら言うと、ちゅつと軽くキスされた。「大丈夫です……♥ 先生のお腹の奥に感じて、すつごく幸せなんです……♥ だから、もつともつと、私で気持ちよくなってくれたら、嬉しいですよ」

キラキラと、フェラをしている時のようにフウカの瞳が輝いている。本当に楽しんでセックスしている事がわかり、私も腰を使うことにした。

フウカの小さなお尻を掴んで持ち上げ、犯しやすい高さに調節する。

フウカもまた、私の首に腕を絡め、腰に脚を絡めただいしゆきホルドで動きやすいように工夫してくれた。

小さな少女の身体を背もたれと挟んで押しつぶすように、身体を密着させて腰を振る。

「んっ♥ うっ♥」

フウカは苦悶の声を堪えながら、苦しみをも楽しむように甘いうめき声を上げる。

チンポにビンビン響くその声をBGMに、腰を小さく使って膣奥の肉をかき乱し、子宮をフウカの肚の中でブラブラと揺らし、その穴を堪能する。

フウカの膣は締めりが良く、それは普段から足腰を使っているということもあるが……自分の意志で膣を締められているのがはつきりと感じられる。

「お、おお……すごいよフウカ、初めてなのに、こんなに上手にマンコを締められるんだね」

「はい……っ♥ せんせいの、ために……ま、マン、コ、締めます♥ 気持ちいいですか、先生♥」

一言聞いただけで淫語を理解して使ってくれるフウカは、まるで初夜の新妻のように従順に、貪欲に、私との性交を望んでいた。

「あ、そこ……♥ 奥の手前辺り、擦られたらぴりって、気持ちいいの来ました♥」

「そっか、この辺りかな？」

「そこっ♥そこっ♥すごいっ♥上手です、先生っ♥」

人に尽くし喜ばせる事を自分の喜びとするフウカのホスピタリティが、セックスに対する意欲と混じり合うことで淫らに花開いていた。

まるで私のほうが童貞であるかのように、一つ一つフウカの気持ちいい所を教えられ、そこを攻略するたびに甘い声で褒められる。

「ああっ♥すごいっ♥すごいっ♥深いの、きちやいますっ♥」

見たこともないくらいに口角を上げ、楽しくて仕方ないという風に満面の笑顔のフウカ。

瞳だけは笑っておらず、爛々と輝いて女の快楽を求め、一心に私を見つめてくる。

ぬっち、ぬっち、と処女から出ているとは信じられない粘ついた本気汁たっぷりの膣をかき分ける音が響き、快楽の反射で膣がうごめく。

「でるよ、フウカ!」

「だしてっ♥私で、射精してっ♥あ、あああーっ♥♥♥」

2階吹き抜けになっている地下居住区に、フウカが処女でポルチオアクメをキメた絶叫が響いた。

精液をおねだりしてくるフウカの膣に、私も遠慮なく精液を流し込む。

「あっ♥せんせえのっ♥あかちゃんっ♥できちやうっ♥うむっ♥うみたいっ♥」

性欲と繁殖欲の塊のように欲望を垂れ流し、フウカがヨダレを垂らして私の子を孕もうと膣を締め、脚を絡めて腰を密着させる。

どく、どくと後から後から湧いてくる精液をフウカの小さな子宮に押し込み、ようやく射精が収まった。

「かひゅーっ♥ひゅーっ♥」

射精している間中嬌声を上げていたフウカは、過呼吸のように喉から喘鳴音を出していたが、まだまだ瞳の輝きは褪せてはいなかった。

「せ、せん、せえ……♥おかわり、良いですよね……♥」

「もちろん」

フウカの額に張り付いた髪を払って、汗をかいた額にキスをする。繋がったまま、フウカの身体を回転させた。

「んんっ♥」

イッたばかりのフウカが声を上げるのを勃起の回復剤にしつつソファに膝立ちにさせ、背もたれに手をつかせて尻を突き出させる。そして、一旦チンポを抜き放つ。

合成皮張りのソファに、フウカの破瓜の血と愛液と本気汁、そして今もフウカの膣から滝のように溢れる精液が斑模様を描いていた。

ぷりんと丸く、抜けるように白い肌のフウカのお尻を撫でる。左右に開くと、小さな肛門のすぼまりも汗と愛液に濡れて怪しく光っていた。

「っ……っ♥」

自分の肛門を開かれ、大腸の粘膜を覗き込まれている事を知ったフウカは、クイとお尻の角度を上に向け、見やすいように調整してくれる。

そんなフウカの優しさに甘えず、大陰唇を引つ張って膣口を開いた。

「ごぶ、ごぶ、とまだ垂れ続ける精液に栓をするように、再度すべてを受け入れてくれるフウカの膣にチンポを沈めていく。

「あっ、あっ♥」

ソファの背もたれをギュツと抱えるように力んで、フウカが甘い声を上げる。

私からは後頭部しか見えないものの、どんな表情を浮かべているのか手にとるように分かるような、喜悦に満ちた声だった。

「ふっー」

パンッ！ と拍手のようにフウカと私の肉が打ち鳴らされ、フウカの狭い膣が一番奥よりさらに押し伸ばされる。

「んっ♥ あっ♥ うっ♥」

パン、パン、と一突き毎にフウカは淫らな苦悶の声をあげ、ギチギチと私のチンポを締め上げる。

「フウカは強くされたほうが好きなの？」

「そ、それ、はあっ♥」

「教えて。私を気持ちよくするのがフウカの喜びであるように、私もフウカが気持ちよくなってくれたら嬉しいから」

一旦腰を止めると、はあ、はあとフウカの荒い息だけが部屋に響いた。

「そ、そう、です……♥ 先生に、激しく、求められると……実感が湧くというか……背筋がゾクゾクして、幸せを感じちゃうんです……♥」

パンツ！ とまた一際強い突き込みを入れる。

「おっっ♥ お、おおおーっ♥」

「分かったよ、フウカ。じゃあフウカ、今みたいにもっとお腹の底から声を出してみて。フウカのスケベな声を聞いてると、私もすごく興奮してもっと強く犯したくなるから」

パンパンパンパン！ と処女にしている強度ではないピストンで、フウカの膣を蹂躪する。

「おっっ♥ おっっ♥ ん、おっっほおおんっ♥」

私に後ろから犯されるフウカが大声を上げる。それはまるで動物の遠吠えのようで、フウカにこんな野獣のような性欲が眠っていたのかと思うと突きこむ腰にも力が籠もるようだった。

「いいよ、フウカ！ すごく素敵だ！」

「お、ーっ♥ ん、ひいひいっ♥」

パンパン、と肉を打ち付ける音さえフウカの絶叫にかき消されてしまいうくらいに部屋中に響き渡るその淫らな声に包まれるように夢中で腰を振る。

ぶびゅ、ぶじゅっ、と精液が掻き出され、再び本気汁だけが垂れ流されるようになったくらいでまた射精の限界が訪れた。

「そろそろ射精するよ、自分の膣に集中して！」

「あ、いっっ♥ ぎ、てっっ♥ せんせえのせいえきっ♥ わ、た、しにぜんぶ、そそいでえっ♥」

感情が溢れすぎて、泣いているような鼻声のフウカの尻を強く掴み、遠慮なく全力で腰を前後させ犯し尽くす。



子宮口と鈴口がキスをした瞬間、ちゅうと吸われた気がした。

その刺激が堤防を壊し、どくん、と押し留められない射精感に身を任せてフウカに2発目を注ぎ込む。

「あー……うー……うーっ♡♡」  
殆ど泣きじやくっているかのように、フウカが絶頂の叫び声を上げる。

「あっ♡ あうううーっ♡」  
言葉にもならない、子宮を精液で満たされる歓喜をそのまま音にしたような、フウカの泣き笑いの声を聞きながら……

ぴったりと奥に押し付け、一滴たりとも漏らさないという勢いでフウカの子宮に精液を流し込む。

「ふう、ふう……♡」  
どく、どくと射精するだけの肉塊になった私と、息を整えても身じろぎ一つしない精液を啜るだけの肉塊になったフウカは、居住区のソファでいつまでも生殖のポーズで固まって浸るのだった。

結局私が自然に萎えるまで射精を続け、幾分か冷静になってぎこちないフウカとベトベトのソファに座って裸で抱き合った。

「すごく良かったよ、フウカ」

「は、はい……ありがとうございます……」

フウカは私に肩を抱かれながら身を寄せてくれているが、目を合わせようとはしない。

「先生は、他の生徒ともこんな事をしているんですよね？」

「うん、そうだよ」

「むっ……ま、まさか、美食研の連中とは……」

「まだイズミだけだよ」

「ええっ!?! くうう……! 今日も食堂を襲撃しておきながら先生とこんなことまで……!」

顔見知りだと私とセフレの関係であることを知ると、フウカは怒りを露わにした。

「ま、まあまあ……これからも、少しでもストレスが溜まったら私に会いに来てね。今日みたいに大騒ぎすれば少しはスツとすると思うし」  
「お、大騒ぎ……うう……やっぱり私の態度、普通じゃなかったんですね……」

「いいんだよ、普通じゃなくて。普通じゃないフウカを見せてくれたのが、私は一番嬉しい」

「先生……♥」

フウカの頭を優しく撫でながら言うと、ようやくフウカは顔を上げてくれた。

「酔いもすぐに覚めていたみたいで良かったよ」

「えっ、ええと、それはあ……そ、そうだっ」

キラリと瞳を輝かせ、私をまたぐように膝立ちになる。

「じゃあ、今日は先生と一緒に泊りしても、良いですか？」

「どうやら、思った以上にフウカは『溜まって』いるようだった。再び性欲にきらめき始めたフウカの瞳を見てチンポが勃起するのを感じながら、フウカとキスをした。」

## 淫らな喘ぎ声に包まれて（ツバキ）

ある日森の中でツバキに出会った。

まあ、気持ちのいい森林をフラフラ歩いてたら迷ってしまったただけなのだが。

そんな時、広場のように芝生のように短い草の生える日だまりでツバキが寝ているのを見つけたのだ。

「あれ？ 先生、どうしたの、こんなところで」

「いや、道に迷ってしまつて……」

「そっか、ま、とにかく横になつたらどう？ ここ、寝るとすつごく気持ちいいよ。はい、どうぞ」

相変わらず真摯に眠りを極めようとしているツバキに出会つて笑顔になりつつ、腰を下ろしてみる。

自分でも驚くほどに、立ち上がれる気がしない疲労が全身を包んだ。

セフレも増えたし、仕事にもますますやる気が出ていたつもりだったが、さすがにやりすぎたようだ。

「いらつしやいませー」

横になつた私に、ツバキが触れる位に身体を寄せてくる。

「つ、ツバキ……近くない？」

疲れマラとでも言うべきか、チンポがすでにイライラし始めている。

「近い？ そんな事、無いと思うけど……近いの、気になる？」

むしろもっと近づきたい。セックスしたい。しかしひとまずそれは我慢して、ツバキと添い寝することにした。

ツバキは、むしろいつもより饒舌に、睡眠の心得を語ってくれた。私がよほどひどい顔をしていたのだろう、色々手を尽くしてよく眠れるように手ほどきしてくれる。

森の奥の泉に連れて行ってくれて、そこで一つのリンゴを分け合つて食べたり、髪を洗ってくれたり……

しかし、その一つ一つでツバキの身体が密着し、あまりにも薄い普

段着に包まれたお餅のように白くて柔らかい巨乳が私の身体に合わせ歪む。

「かゆい所とか、ある？ このへん？」

私の頭を洗いながら、ツバキが尋ねてくれる。しかし、私は目の前で鼻に触れるほどの距離で揺れているツバキのおっぱいを凝視していた。

疲れマラの所にリンゴと一緒に食べ、髪を洗われながら顔に胸を押し付けられた結果、完全にチンポのイライラが抑えられなくなった。私の沈黙を疑問に思ったツバキが視線を動かし、股間に気づいてしまう。

「あ……先生、(っ)……」

そつと、長手袋に包まれたツバキの指が私の股間にふれる。

「わ、カチカチ……だね。これ、苦しい……の？」

「うん、まあ……苦しいね」

性的なことを全く知らない、純粹に労る手付きでツバキの指がゆつたりと撫でてくる。

「あ、ごめんなさい。触って、大丈夫だった？」

「大丈夫だよ。ツバキに触れると気持ちよくなるから」

気持ちよくなるが、ますます勃起して苦しくもなる。

「そう、なの？ でも、もつと硬く、熱くなって……苦しそう」

「まあ、そうだね。一度発散しないと収まらないね」

「じゃあ……先生。私が、発散、してあげるね」

そう言つて、ズボンのファスナーを下ろそうとするツバキの頬は、赤く染まっていた。

自分の言っていることの意味をおぼろげながら理解しているのだろう。

ジイイイ……と下ろしきると、トランクスを押し上げて勃起がツバキの手に触れた。

「あっ……こんなになってたんだ……えつと、これはどうすればいいの？」

「棒の部分を直接握って、手を上下させてみて。汚れると思うから手

袋は外したほうが良いかな」

「うん、分かったよ、先生」

とても素直で良い子のツバキは、早速素手でチンポを握ってくれる。

「とつても熱いね。辛いよね、先生。私が、発散させてあげるからね」  
仰向けに横たわる私の腰の横あたりで正座し、両手で包み込むように柔らかく握り、しゅに、しゅに、と手を上下させるツバキ。

手コキという言葉も知らない無垢な眠り姫の手淫にチンポがイライラする。

「あつ、さきつぽからお汁が出てきたよ。大丈夫、先生？」

手コキのために両手を寄せているため、ツバキの巨乳も柔らかく内に押されてたわんでいる。

垂れてきた我慢汁がツバキの綺麗な手を汚し、竿がヌルつくことにより淫らな水音が立ち始めた。

「うん。それは気持ちよくなると出てくるんだ。その、棒の先端を手のひらで包むみたいにしてくれるかな？ さきつぽは敏感だから優しくね」

「わかった、……こう、かな？ あつ、おち……棒が、びくんつ、てしたよ。痛くない？」

「ああ、すごく気持ちいいよ。ありがとう、ツバキ」

優しく、撫でるようにツバキが亀頭を手のひらで包み込む。男性器の呼び方は知っていたらしいツバキの恥じ入る様子に勃起は高まるし、気持ちよくなつたが……

「本当だ、沢山、お汁がでてきたよ。このまま続ければ、発散、できそうかな？」

「うーん、ちよつと難しいかも。もう少し激しい事をしないと」

「本当？ 私は、どうすればいい？ 先生のためだもん。なんでも、するよ」

ツバキはあくまでも真剣に、私を案じてくれている。その心意気に胸を打たれた。

なのでセックスをしよう。

「ツバキとセックスしたら完全に発散できるよ」

「せつくす？ それって、なに？」

「どうやら俗語であるセックスは知らなかったようだ。」

「性交、子作りってことだね。私のおちんちんを、ツバキの中に入れて射精するんだ」

「先生、私と……赤ちゃん、作りたいの？」

「ツバキのような魅力的な女性が居ると男はそうなってしまいうんだよ」

「私、魅力的……なんだ。……うん。じゃあ、いいよ。先生、私と赤ちゃん、作る？」

「そう言って、ツバキは紅い顔をして微笑んだ。」

「明るい日差しとの差し込む、森の中で……泉に流れ込む小川が清涼な水音を立て、澄んだ空気が心地いい野外で、ツバキは私とのセックスに合意した。」

「ありがとう、ツバキ。でもなるべく赤ちゃん出来ないように、この薬を飲んでくれるかな」

「そう？ 私は良いんだけど……でも赤ちゃんのお世話も大変って言うし、飲んでおくれ。ありがとう、先生」

首を傾げながらも、お礼を言いながら避妊薬を飲んでくれるツバキ。

私は身を起こして、脱がせるまでもなく裸の腰を抱き寄せる。

「ツバキ、キスしていい？」

「ん……いいよ」

囁くような微かなツバキの声とともに、唇の動きが伝わるほどの近さで見つめ合う。

潤んだ瞳に瞼が落ち、ツバキがキスを待っている所に唇を押し付けた。

「ん……ちゅ……」

抱きしめると胸の存在が殊更に強く感じられる。横合いから抱いているため、脇から先端近くまでむき出しの乳房と簡単に密着出来てしまう。

そつと手を差し入れると、簡単に指がツバキの上着とブラの下に潜り込み、乳輪に触れた。

「あっ♥」

乳首を探って胸を弄ると、ツバキが甘い声を上げて唇を離した。

「先生、そこ、触りたいの？」

「うん、触りたい。見せてくれる、ツバキ？」

「ん……いい、よ。先生なら……」

いくらツバキといえど、この行為は恥ずかしいらしい。

それでもためらいがちに、胸の間の布を掴み、そつと上に上げる。引つかかっていた布があつという間に外れ、ぶるんつと重そうに弾みながらツバキの胸が外気にさらされた。

「綺麗だ、ツバキ」

「さすがに、恥ずかしい……んっ♥」

色素の薄い、ピンク色の乳首に触れる。長くはないが大きめの乳首は、私が親指の腹でクリクリと愛撫するとすぐにぶつくりと勃起し始めた。

「先生、それ、なんだか……ムズムズする♥」

「それが気持ちいいって感覚だよ。寝る時みたいになりラックスして、それに集中してみて」

私は両手で乳房を撫で回したり、乳首をつまんだり転がしたりしてツバキの性感を引き出していく。

ツバキの上半身はすでに胸の上に服が置いてあるだけの全裸になっっていた。

小川のせせらぎを聞きながら、時折さらりと吹き抜ける涼しい風を感じながら、野外でゆったりと愛撫する。

ついでにむように軽いキスを繰り返して、乳首をくすぐるようになった後ギユツと押しつぶすように摘み、緩急をつけてツバキを追い込んでいく。

「はっ、あっ♥♥」

ツバキが、身体を仰け反らせて固まる。ごく自然に、人生初の絶頂を味わっていた。

「う、あ、ああ……♡」

ぐったりと脱力するツバキを強く抱き寄せ、太ももにチンポを押し付ける。

そのままツバキの身体を正面に向き合うよう回し、脚を開かせて正常位の体勢で草むらの地面に押し倒した。

「大丈夫、ツバキ？」

「ん、うん……♡ いまの、なに……？」

「一番気持ちよくなって、身体がふわふわした？ それは『イク』って感覚だよ」

「イク……？ 不思議な言い方だけど、うん。さっきのは、そんな感じだった。ふわって、浮き上がるみたいなの……どこかに、イツちやいそいな感じ」

「男の人はイクと射精するんだ。それで性欲が発散できるんだよ」

寝る寸前のようにトロンとした表情のツバキが、今は性的絶頂の余韻でそんな表情をしていると思うとチンポを入れたくて仕方がなくなってくる。

「そうなんだ……じゃあ、私とせつくすして、沢山イッてね、先生♡」  
普段からあってないような短さのスカートだが、寝そべって股を開いているとツバキのむっちりした股間がよく見える。

恥丘と陰唇のあたりをスコートの上から撫で回すと、ツバキのはあ、はあという淫らな吐息が大きくなり、ますます熱を帯びていくようだった。

腰の横に指をかけ脱がそうとすると、脚を閉じて高々と上げ、ツバキも手伝ってくれる。

私の目の前でツバキの下着が太ももを抜けていき、スカートと、それをベルトのように固定する綱だけがツバキの下半身に残った布部分になった。

「挿れるよ、ツバキ」

ぷっくりと厚い外陰唇が覆うツバキの股間に、龟头を押し付けてぬりぬりゆと膣口に押し付ける。

普段ならばもつと前戯をするところだが、添い寝などのスキンシップ



プが長かったためにもう我慢できなくなっていた。

「うん、いいよ。私と、赤ちゃん作る？」

そんな私に、ツバキが優しく笑いかけてくれる。

重力で広がるように潰れている胸を気にすることもなく、手コキで我慢汁に濡れた手を差し上げて私を優しく抱きしめてくれた。

ツバキの優しい手が首に絡みつき、そつと私を引き寄せる。ひやりと涼しい乳房と、トクトク激しく脈打つ心臓を感じる身体の熱さに埋もれていく。

私の頭を優しく抱くツバキの腕の中で、眠ってしまいそうな心地よさを感じながら腰を突き出した。

「んっ……」

一度乳首でイッているとはいえ、処女のツバキの膣口は硬く、力を込めてこじ開けていく。

「ツバキ、深呼吸して。さつき教えてくれたみたいにリラックスしたら少しは楽だから」

「あ……そっか。やってみるよ、先生」

ツバキの鼻が私の頭に触れ、すう、ふう、と深く息をするのが頭皮で感じられる。

力んでいた股間の周りも徐々に脱力し、ツバキの脚が自然に私の脚に絡んだ。

そうして、ツバキは頑張つて処女を私に捧げてくれるのだった。

ぬほん、と一番きつい膣口を抜け、亀頭が膣に入り込む。

「あっ♥ 先生のおちんちん、私の中に入った？」

「うん、さきつぽが入ったよ。ごめんね、少し痛いけど頑張つてね、ツバキ」

「うん、大丈夫。先生の性欲、私で全部発散してね」

健気な言葉に我慢汁がツバキの膣内でどぶどぶ溢れ出る。妊娠の危険のある行為にも動じず、ツバキはすべてを受け入れてくれる。

馴染ませるために小さく腰を振り、滑りが良くなった時点で奥深くを目指して腰を突き出した。

「う、いたっ……」

「大丈夫、ツバキ？」

「うん、だい、じょうぶ。そのまま、奥まで、来て……」

顔をしかめ、私を抱く腕に力を込めながらも股間だけはリラックス状態を維持するツバキ。

ずるずると肉をかき分け、清らかな眠り姫の膣奥までチンポを突き刺した。

「はあ……ああ……先生のおちんちんで……お腹の中があつい……♡」

頭の上から優しく降り注ぐような、ツバキのつぶやき声。

確かに熱を帯び、女の喜びを嘔み締めているその声に、膣の奥でチンポが跳ねる。

「あ、ああっ♡ お、お腹の中、持ち上げられちゃう……♡」

反り返ったチンポは子宮口に触れ、お腹の方に子宮を持ち上げた。

「ツバキの膣、すごく気持ちいいよ」

「私も……先生のおちんちん、お腹の中一杯で……すごくドキドキする……♡」

顔をうずめている胸を外から寄せるように掴み、乳首を口に含む。

同時に、ゆっくりと腰を動かし始めた。

「んっんっ♡ おっぱいと、お股を一緒にされると、なんか、ムズムズするよ♡」

ふう、ふうと熱い吐息をしながら、ゆったりとセックスを楽しむ。音を立てて乳首を吸い、破瓜の傷に触れないように膣奥を亀頭でかき混ぜる。

「あっ、ああっ♡ 一番奥っ♡ ぐりぐりされたらっ♡ 声でちやっ♡」

「このあたりかな？」

身体を密着させてツバキの身体の柔らかさを堪能しながら、あくまでもゆっくり反応の良い場所を探す。

「そこっ♡ そこ、すこいの♡」

無垢だった眠り姫の唇が、女の言葉を紡ぐ。その興奮をチンポの力にしながら、ツバキのお気に入りポイントを特定した。

「あつ♥ あああつ♥ せんせいっ♥ せんせいっ♥ そこだめっ♥  
くるっ♥ くるっ♥ すごいくるっ♥」

ゆっくりゆっくり、亀頭の力りで一番気持ちいい所を往復するだけで、ツバキはどっぷりと女の悦びにはまり込んでいく。

ぎゅうと頭を抱き寄せられ、脚は私の腰を逃すまいとホールドした。

呼吸は浅く激しくなり、澄んだ声は熱情を帯び、森の奥で二人以外には聞こえない大声の淫らな独唱が奏でられる。

「それがいくつて感覚だよ。さっきみたいなふわつとするのが来たら、大きな声を出してごらん」

よりピンポイントに、振動のような幅の腰振りでツバキの良いところを擦り、絶頂へと導いていく。

「ふーっ♥ ふーっ♥ うん、うんっ♥ いくっ♥ もういくっ♥  
いくいくっ♥ いっっ……」

ツバキはすすり泣くような鼻にかかった声を出して、いくことで頭がいっぱいになっていると丸わがりの切羽詰まった声になり、そして……

「いっっぐうううーっ♥♥♥♥」

誰も来ない森の中とはいえ、誰が聴いているか分からない野外で、絶叫するように美しくも大きな声を出して絶頂した。

ぎり、と膣が締めまり私の射精をねだるツバキに答えて一番奥に射精する。

「あゝーっ♥♥♥♥ せんせっ♥ でてるっ♥ れてるっ♥ またいゝくーっ♥♥」

射精に反応し、また絶頂する。射精の脈動を手伝うかのように甲斐甲斐しく、膣がうねって精液を搾り取ってくれる。

興奮で抑えられていた疲労が吹き出し、ツバキに精液を絞られるままにぴったりと抱き合っただまま動けない。

ツバキもまた、初体験にして激しすぎる絶頂の余韻で全く動けず、

しばらく二人で身体を重ねて、眠ったようにじっとしていた。

やがてそつと頭を拘束する腕の力が緩み、ツバキが優しく私の頭と背中を撫でてくれる。

「はーっ♥ はーっ♥ すごいね、先生……♥ 私……頭の中真っ白になっちゃった……♥」

「ツバキこそ、初めてとは思えないくらいに上手だったよ」

「そうなんだ？ 上手く出来ていたなら、嬉しいな。……でも、先生はまだ全部発散出来てないみたい……」

全精力を使い果たしたような疲労感に包まれているのだが、だからこそだろうか、まだフル勃起が続いていた。

「ああ、男は本当に疲れるところなっちゃやう事があるんだ」

「先生、そんなに疲れていたんだね。ごめんなさい、私、初めてだから先生に任せきりになっちゃった」

処女を捧げてくれた上にそこまで言ってくれるツバキの思いやりが疲れた心身に染みる。

「先生は疲れているから、動かないでいいよ。次は私が動いて、先生の性欲を発散させてあげるね♥」

ツバキは私を抱きしめたままころんと横に転がり、上下が逆転する。

私の脇の下の地面に肘を付き、体重をかけないように柔らかい身体をそつと密着させてくれる。

「この体勢なら、先生は動く必要ないよね。そうだ、先生はそのまま寝ちゃってもいいよ」

「ツバキのオマンコが気持ちよすぎるから、眠るのは無理だと思うけど……まあ、分かったよ。動くのはツバキにおまかせするね」

早くもセックスの経験を経験にして自分が腰をふる騎乗位の体位を発想したツバキ。

「ふふっ……セックスでイッた時って、頭が真っ白になって、ふわふわって気持ちよくて……あのまま眠ったら、きつと今まで経験したことのない安らかな眠りになると思うんだ。だから、先生。性欲を発散しきったら、セックスしたまま二人で眠ってみない？」

眠りのことについては一家言あるツバキが目をきらきらと輝かせ、すごい提案をしてくれる。

「そうだね。なんだか疲れて眠くなってきたし、出し切ったら気持ちよく眠れそうだよ」

「うん、じゃあ決まりだね。先生、私のオマンコで、気持ちよく射精してね……♥」

いつもの眠たげでリラックスした微笑みにねっとり女の媚を混ぜて、セックス前の顔をしたツバキが腰をゆつくりと引き上げる。

さつきまでは膣奥の感触だけを重点的に味わっていたが、ツバキは経験のないはずの普通のピストンセックスを選択した。

「どう？ 先生のおちんちん、私の中をひっかくみたいなのしてるから……このほうが気持ちいいんじゃないかなって、思ったんだけど」

さつきイッたからか、幾分か余裕ありそうにツバキが腰を上下させながら訊いてくる。

「おお……すごく気持ちいいよ、ツバキ。何より、ツバキが色々考えてしてくれるのがとっても嬉しい」

「ふふっ。先生が喜んでくれると、私も嬉しいな。それに……」

勃起した乳首を丸出しにしてぬぼぬぼと腰を振るツバキの、優しげな目がさらに細められ……女の情念とでも言うべき、絡みつくような熱い視線が注がれる。

「先生がねっ♥ 私のオマンコで気持ちよくなってくると、背中がぞくぞくっ♥ て震えるの♥ これ、変なのかな？」

「そんなことはないよ。それはツバキがセックスを心から楽しめている証拠だから」

「そうなんだ。……うん、そうだね。先生とセックスするのは、とっても楽しい♥」

につこりと屈託なく笑い、眠り姫は無邪気なままに性欲を肯定し、無垢な笑顔を浮かべながらチンポを啜えこんだ膣を上下させて顔を赤らめる女に成長した。

ぬっぽ、ぬっぽ、とゆったりしたテンポで腰を使われ、先程とは打つ

て変わって、荒い吐息だけが密やかに森に響く。

「ふう、ふう……♥ 奥の方も、気持ちいいけど……入り口の近くも、びりって、強いのが来る場所があるみたい……♥」

「うん。Gスポットっていうんだけど、入り口のお腹側にある場所だよ。ほら、ここ……」

そう言っつて、私は胸に遮られて見えない結合部に手を伸ばし、ツバキのクリトリスを指で転がした。

「んうう♥ それっ♥ びりびり、すごいよ♥」

「クリトリスの裏側がGスポットだと言われてるね。入り口が気持ちいいのも、クリトリスが近くにあるかららしいよ」

「そうなんだ。先生は、私以上に女の子の気持ちいい所を知っていて、すごいね♥」

屈託なく褒めてくれるツバキが、教えられた事を早速生かしてクリトリスをも刺激するように腰をくねらせる。

一つ一つ、処女の面影を脱ぎ去りながら……ツバキの腰つきがより淫らに進歩する。

その成長を間近に見る感慨に浸りながら、まだまだ未熟な性技に身を任せた。

「はあ、はあ……♥ ごめんね、先生♥ さつきより、先生は、あまり気持ちよくなれてないよね♥ 私ばかり、またイキそうになってる♥」

ツバキの白い肌は興奮で桜色に染まり、くねらせる腰の速度も幾分早くなっていた。

ぐしよ濡れの処女膣はたしかに気持ちいいものの、しかし経験のなさからくる単調さは否めず……射精には至らない刺激が続いている。

「さつきツバキが教えてくれたのと同じ。こうしなきや、なんて事は考えなくて良いんだ。とつても可愛いツバキと肌を重ねているだけで、私は楽しいからね」

「ありがとう、先生♥ でも……これは先生の性欲を全部発散して、気持ちよく寝てもらうためにしている事だから。頑張っつて先生を射精させてあげる♥」

ふう、ふう、と息も荒く胸の谷間にも汗をかいた状態で、眠りではなく性感で夢うつつに細められた目で笑顔を浮かべ、ひたむきに性奉仕してくれるツバキ。

「ツバキはとつても頑張り屋だね。じゃあ……一番奥に入れる時は少し勢いをつけて、奥に当たるのと同時に膣を締めてみて」

「うん、先生はそれで気持ちよくなるんだね♥　じゃあ、こう……うん♥」

ぱちゅん！　と勢いをつけて振り下ろされた腰が、愛液を溢れさせながら肉と打ち合わさる音を立てる。

ツバキの締めりの良い膣がさらに締めり、握りしめるような刺激がもたらされた。

「これっ♥　私も、すごく気持ちいい♥　さきにイツちゃったら、ごめんね、先生♥」

ツバキはすぐに膣を締めるコツを掴んだようで、腰をゆっくりと引き上げる時にも締め付けてカリの刺激を膣全体で味わっていた。

「あつ、くう♥　んっ♥　あゝあゝーっ♥」

ツバキは膣の締めを教えるから、一気に気持ちいいピストンを理解していた。

ぶじゅ、ぶじゅ、と愛液があふれる音が清らかな小川のせせらぎをかき消し、悩ましげな姫のすすり泣く声が森の奥にひっきりなしに響き渡っていく。

「す、すごいよ、ツバキっ！　一気に、こんなに上手になるなんて……うんっ♥　だつて♥　これ、すごいきもちよくて♥　腰、とまらないのっ♥　だしてっ♥　先生っ♥　私、また先生と一緒にイきたいっ♥」

ツバキ独りで出来ないようなら私が腰を使おうかと思っていたが、全く杞憂だった。

もはや腰つきは一人前の女のものになり、緩急をつけてチンポをしゃぶり尽くす勢いだ。

最後の最後まで生徒に任せ、背中に感じる硬い地面と草のベッドと、胸に乗っているツバキの柔らかな乳房、ぱちゅ、ぱちゅ、と打ち

付けられるむっちりとした腰の感触をただ享受する。

「うっ、もう、出るよ、ツバキ」

「うんっ♥ 私も。イクからっ♥ いっしょにイこうねっ♥」

ツバキはついに私を抱きしめるようにのしかかり、その軽い体重がすべて私に委ねられる。

耳元で絶頂寸前の荒い息をするツバキと一つになってしまいかと思うくらいに全身を絡め、抱き合い、膣の締め付けによって射精した。

「あゝっ♥ 先生っ♥ 射精してくれたねっ♥ 私も、イツ、くうううう……♥♥♥」

先程とは少し違う、ツバキが主導する絶頂。私の射精に応じてピツタリと一番奥に鈴口を押し付け、精液のすべてを子宮に導いてくれながら、ツバキも絶頂する。

深く静かに、ツバキにすべてを吸い上げられていく。

金玉が空になる感覚。作り置いた精子と精液はすべて出しつくし、心地よい疲労感に包まれる。

「ふう、ふう……♥ 先生のおちんちん、少しずつ柔らかくなってくね……♥ 私のセックスで、全部性欲発散できたんだね♥」

「うん……すごく良かったよ。ありがとう、ツバキ」

「私こそ、ありがとう、先生♥ とつても気持ちいいセックスを教えてください♥ じゃあ、先生もようやく眠くなってきたみたいだし、このまま寝よっか?」

「そう……だね……おやすみ、ツバキ……」

ツバキの裸體という暖かな肉布団に包まれ、急速に眠気が襲ってくる。

「おやすみなさい、先生……♥」

熾き火のように熱情の残滓を秘めたツバキの囁きを最後に、意識が暗闇に落ちていった。

「あ、おはよう先生。もう夕方だよ? 本当に疲れてたんだね」

ぱちりと目を覚ますと、とても爽快な目覚めで……眠気が残ることもなく、私は身体を起こした。



「ツバキ。待っててくれたの？」

ツバキは普段どおりの格好で、さつきまで私の上で腰をくねらせていた事が夢のようだった。

「うん、もちろん。先生が森の中で道に迷ったら大変だから」

「そっか、ありがとう。ああ、もうこんな時間だ。仕事はサボりになっちゃったな……」

「ダメだよ、先生。忙しいのは分かるけど、今日みたいな疲れた顔してたら、いつか倒れちゃう」

「そうだね。気をつけるよ、ツバキ」

まるで、ただ添い寝をしてもらったような会話だが……私の隣に座るツバキの、むっちりとしたお腹の奥、子宮の中には、2発分の精液がたっぷり詰まっているのだ。

「ううん、気にしないで、先生。私も、先生とセックスしてイッた後に一緒に眠るとすぐく安らかに眠れるって発見があったから」

屈託のない笑顔で自分の処女喪失の体験を語るツバキ。

「だから、ね。時々でいいから、今日みたいにセックスしてお昼寝しよう？ きつと先生の健康に良いと思うから」

「そう言ってくれてとても嬉しいよ、ツバキ。でも、次からは避妊具をつけてセックスしようね」

「ひにんぐっ」

「こういうゴムだよ。シャーレのコンビニでも売ってるよ」

そう言っただけからゴムを見せる。

「ふうん……わかった。じゃあ、これからはこの盾の裏に睡眠グッズだけじゃなくてゴムも入れておくね」

こうして、エンジェル24はゴムの売れ行きがますます増えていくのだった。

乱交はデビューライブの後で（ユウカ・アル・アリス・ヒフミ）

「先生！　ではセックスしましょう！」

満面の笑みで、アリスがそう言った。

「っ!?　アリス!?!」

ここはシャーレの執務室。イタズラ☆ストレートというアイドルユニットを突如結成したアル、アリス、ユウカ、ヒフミの4人にさなるアイドルとしての飛躍をもたらすべく、企画案を渡したのだが……実はエイプリルフールの出し物だとバラされ、ドッキリ成功の札を掲げられてしまった。

まあ、物販は行うことになったのでめでたしめでたし、で終わるはずだったのだが……

「えっ?　アリ、スちゃん?　いま、なんて……」

処女だったアリスに強引に迫られてセックスしてから、アリスはその無垢な脳にセックスの気持ちよさを、雄の精液を搾り取るマンコの締め方を、下品に頬をすぼませるフェラの仕方を思う存分に詰め込んで来た。

その結果、セフレしか居ない空間になるとすぐに私に抱きつき、股を開こうとするスケベに成長した。

それでも、今までは一線は超えずに秘密は守られて居た……が、今まさにやらかしてしまった。

この場に居る中で、アル、アリス、ヒフミの3人は私のセフレだ。

ヒフミはミレニアムの生徒であるアカネと尻を並べて乱交もしたし、アルだってラブホで処女を奪ってから、パートナーとして親睦を深めるという名目でここシャーレの執務室で何度もセックスした。

しかし、ユウカはまだ処女だった。

「もう、言うと思ったわ。アリスも本当にセックス好きよね」

そして、アルも釣られてポンコツぶりを晒す。

「あつ、え……?　アルさ、え?」

ユウカは、周りから一斉に突っ込みが入る事を期待したのか私達の反応を見ていたが、アルのうっかりカミングアウトでさらなるショックを受ける羽目になった。

「アイドルはライブ後にプロデューサーとセックスをするものです！ ネットで沢山見ました！ アリス、アイドル衣装とユウカに結ってもらった可愛い髪で先生と沢山セックスしたいです！」

ニッコニコの笑顔で、完全に言い訳不能な事を言い出すアリス。アリスと、気づいていないアル以外の空気が凍りついている。私はヒフミと横目でアイコンタクトをしあつた。

（先生！ これ、どうすれば良いんですかあ!?!）

（こうなったらやるしか無いね）

（ううっ、ユウカさんには本当に申し訳ないですが……）

「せん……せいい……?！」

「あつ、そう言えばユウカはまだセフレではありませんでしたね」「ええっ!?!」

アルが自分も一緒になつて墓穴を掘っていた事を知らされて、いつもの顔で白目を剥く。

「ユ、ユウカはって、まさか……ヒフ」

「とうっ!」

ヒフミが素早く動いて、ユウカに後ろから抱きついた。

「アリスちゃんも早く拘束してください!」

「了解!」

持ち前の筋力を生かした俊敏な動きで、アリスはユウカの両太ももをまとめるように抱きつく。

「なあっ!?! せ、先生! これはどういう事ですか!」

くわつと目を見開いて、怒りの形相でユウカが喚く。

「いやー、アリスがうっかりして口を滑らせちゃったね」

「そういう事じゃないでしょう!?! ま、まさか、本当に、アリスちゃんたちと……」

「アリスから先生にお願いして、初めてのセックスを経験させて貰いました! 先生のセックスはとっても気持ちいいから、ユウカもきつ

と好きになります！」

「ちよつ、ちよつとアリスちゃん!? 私はそんな事しないから！」

常識的に返答したユウカに、アリスはぶうと頬を膨らませた。

「えー? ユウカも一緒にセックスしましょう! ほらっ」

腕を拘束しているヒフミにどいてもらったアリスは、素早く立ち上がるとユウカのアイドル衣装の上着の裾から手を入れて、胸をつかんだ。

「んっ♥ や、やめなさい、アリスちゃん! 本当に冗談にならないからっ♥」

「ダメです。ほら、ユウカもセックスしましょう? 一緒にアイドル衣装のまま先生のオチンポを濡れ濡れオマンコにハマてもらって、気持ちよくなりましょう?」

エロゲで学んでいるだけはあるって、淫語はもうスラスラ出てくるようになったアリスが、ユウカの乳首をクリクリ弄りながら耳元に囁く。

「やつ♥ なんてこと言うの、アリスちゃ♥ んっ♥」

ユウカは身体をねじって拘束を解こうとするのだが、アリスは微動だにしない。

アリスの力は指先一つとっても強いようで、安定した筋力が繰り出す乳首愛撫によりユウカはぴく、ぴく、と肩を竦ませて快楽に耐えている。

「ユウカも乳首が弱いみたいですね。アリスも先生に乳首を愛撫されるの好きだから、よくわかります」

「き、気持ちよくなんか……んう♥」

日頃ユウカはアリスを可愛いかわいいと言っているが、そんな相手から乳首を弄られてどうして良いのかわからないのだろう、ユウカの抵抗が弱まり、声が甘くなっていく。

「本当はもうちよつと気分を出して誘おうと思ってただけど……ユウカ、セックスしよう。そして私のセフレになって欲しい」

「もう、先生のバカあ! こんなひどすぎです! アルさんもヒフミさんも! なんとか言ってください!」

必死になって周りを見るが、アルもヒフミも赤面して目をそらしている。

「だ、だって……先生は、私の悪事のパートナーだし？ 身体の関係くらい、その、普通っていうか……優しくしてくれるし、すっごく気持ちいいし……」

「あはは……すみません、ユウカさん。イケないことだとは分かってるんですけど……先生のことも嫌いになれないし、オチンポがすっごく気持ちいいので……」

アリスと大差ない事を言い出した二人にユウカは驚愕の表情で固まってしまった。

その隙を突いてユウカの唇を奪う。

「んむうーっ!?! んっ♥ちゅ……♥」

ユウカは目を白黒させるが、私の唇や舌を噛んだりはずせず好き放題やらせてくれる。目は硬く閉じられ、顔は早くも茹でられたように真っ赤だった。

「ありがとう、ユウカ。舌を噛まれるかと思ってたよ」

「ならしないでください……もう、人をなんだと思ってるんですか。それに、先生からのキスを拒むなんて、できるわけじゃないです……」

モゴモゴと口の中で言った言葉をちゃんと聞き取って、ユウカのデレを確認する。

「やった、じゃあセックスしよう」

「そ、それとこれとは話が……あぁっ♥」

そこにアリスがアシストとして、ユウカの乳首をシコシコと素早く扱いて愛撫を強めた。

気がそれた所に、私もキスを再開する。

「んんーっ♥ んむっ♥ ぷはっ、アリ、あむ、んむううーっ♥」

刺激が強すぎてのけぞり、一瞬唇が離れてユウカが何か言おうとしたのをまたキスで塞ぎ、思い切り舌を入れて絡め合う。

「ユウカ、イキそうなんですわね？ 腰がクネクネ揺れてきました！ 遠慮なくイッてくださいい！」

セックスをダメな事とは全く思っていないアリスが、無垢な顔をし

てユウカを快樂に叩き落とす。

「んぐううー……♡♡」

アリスの腕の中で、ユウカは絶頂した。

まだ触られてもいない股間に対する刺激を欲しがっているように、きらびやかなアイドル衣装のスカートから覗く白くてむっちりしたユウカの太ももが、悩ましげにもじもじと擦り合わせられている。

「ふふっ。ユウカの初乳首絶頂、頂きました。とってもレアなトロフィーです！」

衆人環視の中、男にキスされながら可愛がっていた後輩に力付くで拘束されて強制的に乳首でイカされた初体験も、アリスにかかれればちよつとしたゲームに過ぎなかった。

「はあ……はあ……はあ……」

ぐったりと脱力してしまったユウカを、アリスが抱きしめて余裕で支える。そのまま、執務室のソファに軽々と横たえた。

「わあっ。ユウカのいった後の顔、とっても可愛いです！ レアスチルゲットです！」

目の焦点があつておらず、頬を紅潮させてだらしなく口を半開きにし、清楚なアイドル衣装の胸だけくしゃくしゃに乱れている。

アリスではないが、確かにチンポがイライラするのも当然の光景だ。

私はユウカの脚を掴んで開きつつ、その間に腰を下ろした。

ユウカのめくれ上がったスカートの中にはスパッツを履いている。指をかけ、思い切りよく脱がしてやる。

「えっ？ あ、ちよ、先生っ!?!」

さすがのユウカも気を取り直して制止しようとするが、手首をアリスに掴まれて阻止される。

「さあユウカ、脚を閉じて上に上げてください。スパッツを履いたままで先生のオチンポを入れたいんですか？」

「だ、だってー！ そんな事……恥ずかしいじゃない……」

おかしいのはアリスであり、ユウカは常識的な事を言っているだけなのだが……この場にユウカの味方は居なかった。

「大丈夫、ちゃんと気持ちよくするから」

「何が大丈夫ですか……本当に、後で覚えててくださいよ……」

真つ赤な顔で私をにらみながら、ユウカのむっちりした両脚が私の眼の前で一直線に持ち上がる。

スパッツの裾に指を突っ込み、中のショーツごとすると脱がせる。

真つ白な太ももの裏が新雪のように目に眩しく、脱がせたときにムワリとメスの匂いが立ち上るのも合わせて食前酒のように目でも鼻でも味わい尽くした。

「綺麗だよ、ユウカ」

逆三角に整えられた陰毛、五分咲きと言った所の女になりかけの大陰唇から覗く赤ピンクの花びら。

そつと撫でてみると、ふによりと柔らかい媚肉は汗と愛液で、まだらに湿り濡れていた。

「そんな所見ながら言われても、嬉しくありません……♡」

そむけた顔を真つ赤にしているユウカもまた可愛らしく、チンポのイライラが募る。

アリスに手首を掴まれているユウカは半端にバンザイをしているような格好で、ノースリーブのアイドル衣装から綺麗な腋がよく見える。

「じゃあ、もつといろいろな所を見ながら言おうか」

そう言うと、私はアイドル衣装のボタンを外す。抵抗は無駄だと悟ったのか、ユウカはギュツと目を閉じて大人しくしていた。

ダンスと羞恥で汗をかいた身体からふわりと匂いが舞い、ユウカがそれを恥じて小さく呻いた。

綺麗なアイドル衣装の下にあるのは、ダンス用なのだろうグレーのスパーツブラだ。16歳としては十分大きな膨らみに、ぷつくりと乳首が浮いている。

ぐっしよりと汗に濡れ、色を濃くしているそのブラを下から剥ぎ取っていく。

「やあ……♡」

ユウカの抵抗はもうむずがる位のもので、甘い声を上げて外気にさらされた濃いめの肌色をした乳首を固くしている。

「ほら、ここも綺麗だ」

そう言つて、さつきアリスにシコシコと扱かれて絶頂してしまった乳首を指の腹で優しく転がした。

「それっ♥ だめえ……♥」

乳首の性感をすっかり引き出されてしまったのか、ユウカがはつきりと媚を含んだ声を出した。

私はズボンを下ろし、チンポをユウカの割れ目に押し当てた。

「ひゃあっ!? あ、あ……せ、先生の、おちんちん……♥」

ユウカも慣れたもので、アリスの万力のような力で掴まれている手首を支点にして私のチンポを見るために身体を起こしている。

「ユウカがとっても可愛いからこんなになっちゃったよ」

かろうじてスジと言えるユウカのマンコを竿で撫でると、ぬち、と粘質な音があがる。

「そうやって、皆をおちんちんの虜にしてきたんですね。本当、悪い人……♥」

ついにスイツチが入ったのか、ユウカは婉然と微笑んだ。

めくれあがったスカートは特徴だった大きなリボンを下にして、その裏地を見せつけながらユウカのお腹のあたりまで上がっている。

改造セーラー服のような上着も前を大きくはだけ、上にずらされたスポーツブラの下の美乳を露わにしていた。

脚を開かせるために掴んだふくらはぎ、その先を見ると、まだ履いている可愛いブーツのリボンが本来とは逆方向に重力を受け垂れ下がっている。

「本当に綺麗だよ、ユウカ。人気アイドルって言われても信じちゃいそうだよ」

「そんなこと言つて、ますますおつきくしてるじゃないですか……んっ♥」

ユウカを犯す準備として、親指でクリトリスをゆっくり刺激していく。



「だからだよ。こんなに可愛い人気アイドルとセックス出来るなんて、興奮しないほうがおかしいからね」

「あああ♥ それダメっ♥ すぐイッちゃいますからっ♥」

まだまだ軽い愛撫だが、ユウカは腰をくねらせて切羽詰まった声をあげる。

「ユウカって結構敏感なんだね。じゃあ2、3回イッてから挿れようね」

「えっ!? に、にさんか、ああっ♥ いく、いく、いく……♥」

ちゃんとイクという言い方を知っているし、この感度はオナニーも結構嗜んでいるのかもしれない。

もしも日頃の業務でのストレスによるものだとしたら、仕事を増やしている一因としては念入りにストレス発散させてあげなければならぬだろう。

ユウカの膣からとろとろと溢れだす愛液を指にまぶし、膣口にそっと人差し指を沈める。

「せ、先生の、ゆび、はいつてえ……♥ あ、いつちゃ、いつちやう……♥♥」

指がキュウキュウと締め付けられ、チンポを入れた時にどれほど気持ちいいか教えてくれる。

ユウカの中は、まだ若くヒダも少なめだが熱くて弾力があり、満遍なく私の指を締め付けてくれた。

「あ、あああ……♥」

クリトリスと膣により、更に深く絶頂したユウカの膣をそつとかき回し、追い打ちをかける。

「らめっ♥ らめええ……♥ へんへ、まら、いつふえるふああああ……♥」

まだ余韻も抜けきらぬ処女の身体に、溺れるほどの快楽が注がれる。

ぎゅう、ぎゅうと膣は絶頂のように断続的に強く締めまり、クリトリスの包皮から中身が飛び出さんばかりに勃起している。

「ほら、ユウカ。もつと気持ちよくしてあげるからね」



「はあっ、はあ……えっ……と……？」

イきすぎて意識が朦朧としていたユウカが帰ってくる。自分の状況を把握する直前に、膣口を亀頭が押し通った。

「あああっー！」

窮屈な筋肉のリングを押し広げ、ユウカの乙女を蹂躪すべく亀頭が突き進む。

「すごい……私の中、先生でいっぱいになってます……」

息が詰まったように苦しげな声で、ユウカが膣の状況を教えてくれると、チンポがより一層固くなった。

「あっ♥ いま、ぴくんって……私の言葉で、興奮したんですか……先生？」

貞操観念を寄つてたかつてトロトロにされてしまったユウカが、男を興奮させることに愉しみを見出したように笑った。

「もちろん。ユウカの中、もっといっぱいにしてあげるからね」

肉の弾力を感じる腰を掴み、愛液まみれの膣を進むと程なく処女膜に突き当り……ぷつんと弾ける。

「分かる？ 今処女膜を破ったよ」

「はい……意外と、それほど痛くはないですね……私の処女、先生に捧げちゃったんですね」

ユウカは軽く眉をしかめたが、ただそれだけだった。

絶頂の余韻が残る身体は、行為の続きを切望していて……気持ちいい処女セックスが何事もなく再開される。

「あああっ……♥ こんな、奥までっ……お腹のなか持ち上げられて、息つまっちゃいます……♥」

ユウカの膣は懐深く、私のチンポを奥までピッタリと迎え入れてくれる。

「ユウカの膣、私の大きさにぴったりだよ。身体の相性が良いのかもしれないね」

「やだ……♥ 相性がいいだなんて、そんな……♥」

チンポとマンコの相性を褒められて、ユウカは照れくさそうに笑った。

その笑顔が最後のひと押しとなり、私の理性を打ち砕く。  
たん、たん、たと早速小刻みに腰を使い、奥深くに突き刺して腰  
がくつつくたびに下腹部でクリトリスをも刺激する。

「あっ♥ あっ♥ あっ♥ すっ、すっ、いっ♥ これっ、が、セック  
ス♥ わけ、わかん、ないっ♥」

突かれるたびにに途切れながら、ユウカが艶めかしい声を上げた。  
後はもうユウカに射精するだけだ。気持ち良くなってきている  
動きを維持し、ただただ犯す。

にちや、にちや、だった水音が、ごぶっ、ぶじゅ、と愛液の量が増  
え、深く挿入するたびに押し出されて淫らな音をたてる。

「あっ♥ ああっ♥ くるっ♥ いちばんっ、ふかいのっ♥ くるっ  
♥」

理性が摩擦して心の声そのまま漏れているような有様で、ユウカ  
が絶頂を迎えそうだと教えてくれた。

最高に気持ちいい初体験をプレゼントするべく、一定の速度を保ち  
続ける。

「あー~~~~っ♥♥♥♥♥」

つい半日ほど前に美しい歌と踊りを披露してくれたユウカが、その  
ままの格好で股を開き、胸をはだけ、チンポを突き刺されて絶頂して  
いる。

淫靡ながらどこか幻想的でさえある光景を目に焼き付けつつ、ユウ  
カの無防備な処女子宮に濃い精液を浴びせかけた。

「あっ♥ ああああああ……♥」

びくん、とユウカの身体が一度跳ね、声も動きも大人しくなる。  
真昼の執務室、ユウカと何度も一緒に仕事をした場所、時間帯。

その中で、今だけはただ交尾するオスとメスになって射精をし、膣  
を締めて精液を絞っている。

たっぷりと注ぎ込んでやると、ユウカは湯気を上げるほど身体を上  
気させ、玉のような汗をかいていた。

「はあ……はあ……はあ……♥ あっ！ せ、先生！ なんで中に出  
したんですか!?! に、妊娠しちやいますよ!?!」

「おっと、そうそう。ヒフミ」

「はい、先生。どうぞ、ユウカさん。これ、避妊薬です」

いつの間にか水の入ったコップと避妊薬を持っていたヒフミが、ようやく手を開放されたユウカに渡される。

ユウカはチンポが入ったままで手をつけて身体を起こすと、受け取って薬ごとコップいっぱいの水を飲んだ。

「ふう……ああ、汗かいた。喉からから……」

「お疲れ様、ユウカ」

汗でじつとり濡れた頭を撫でると、上目遣いに睨まれる。

「まったく、初めてなのにあんなに泣かせてくれて……それも中に出しちゃうなんて。デキちゃったら責任とってもらいますからね!」

「産みたいなら、養育費はちゃんと出すから」

「それ、何人に言ってるんです?」

乱れたアイドル衣装で挿入されながら、いつもの調子で目を細めて私の軽口を嗜めるユウカにチンポがイライラする。

「あんっ♥ ……あの、私処女なんですよ? まだしたいんですか?」

からかうように言うユウカの膺は、すでに優しく蠢き私の勃起を応援してくれていた。

「う、うわああ……人がセフレに落ちる所を、見てしまったわ……」

「先生のオチンポ、すごいですもんねえ……」

ヒソヒソと、一部始終を見ていた二人が感想を言い合うのを耳にしたユウカは、自身の処女喪失セックスが衆人環視であったことを今更思い出したように目を丸くして赤面した。

「ダメですよ、ユウカ。先生のチンポは皆のものです! 次はアリスがアイドルとしてセックスする番です!」

腋の下に手を入れたアリスが、ユウカをひよいと持ち上げる。

「うわあっ!?! アリスちゃん!?! もう、せつかく浸ってたのに……つて、うわわっ! せ、精液が零れそうなんだけど!?!」

膺の中を降りてくる感触があったのか、ユウカがトイレをするみたいなガニ股で、股間の下に手のひらを持ってくる。

「ユウカさん、ティッシュユどうぞ!」

サツとヒフミが差し出したティッシュを取り、股間の下に持つてくると同時、私が思い切り射精した精液が、ユウカの膣からどろりと溢れ始めた。

「先生。色々予定外でしたが、ようやくセックス出来ますね。まずはお掃除させてもらいます」

下半身裸でソファに座っている私に跪き、アイドル姿のアリスが躊躇なくチンポを啜えた。

「んーっ♥ ちゅっ♥ じゅぼっ♥ ずろろっ♥」

透き通るように肌の白い、幼気な容姿のアリスにはアイドル姿がともしっくりと似合っている。

そのアイドル姿で、女の子が決してしてはいけない頬をすぼめた全力のフェラ顔を披露するアリスは、目元でにっこりと笑っていた。

「おお……アリス、その格好だと、フェラ顔のいやらしさが際立つね。とっても良いよ」

「ぢゅるるうっ♥ んっぶ♥ ぐぶっ♥」

私に見せてくれるために編まれたサイドテールを手に取り、サラサラの髪の毛を遊ばせながら、途切れることのないアリスの激しいデープスロートを堪能する。

勃起が完全に回復した所で、いつものようにポンポンと頭を叩いてやると、アリスが金玉を繊細な手付きでふにふにと揉みながら最後のひと吸いをして頭を離していく。

頬をすぼめて鼻の下を伸ばす卑猥に歪んだ顔が、ゆっくりと竿を開放して上にながっていく。

「ぢゅろろろっ♥ ぷはっ♥」

卑猥な液体を綺麗に吸い出されたチンポが、アリスの手によってすぐにゴムを被せられる。

「はい、準備完了です。さあ、アル、ヒフミ！ お待ちかねのアイドルセックスしましょう！」

所在なさげに立っていたアルとヒフミが、苦笑しながらお互いに見つめ合う。

どちらからともなく、前かがみになってスカートの脇から手を入れ

ると、スパッツとショーツ、ヒフミはストッキングも無言で脱ぎ捨てた。

「おお……！ ハーレムエロゲでよく見た構図です！ ほらほら、二人共並んで並んで！」

ウキウキと仕切るアリスに促され、3人がソファの後ろから背もたれに手をつけて腰を突き出した。

私の目の前に、アイドル姿の生徒3人が股間だけ丸出しにして立ちバックをねだるといふ夢のような光景が広がる。

向かいのソファには、乱れたアイドル姿のまま、勃起乳首の浮いたスポーツブラだけまともに着直したユウカが赤面し、口元に手をやって3人の顔を見ていた。

「なんか腰もだるいし、見学させてもらおうかと思ったけど……すごい光景ね……」

そう言いつつも、もう処女でない者の凶太さで食い入るように見物モードに入っている。

「やつ、ちよ、み、見ないでえ……」

「あ、あはは……これはやつぱり、恥ずかしいですね……」

「ユウカも、次の機会には一緒にセックスしましょうね」

視線に耐えきれず手で目を覆う事で余計に卑猥な感じがしてしまふアル。

顔を赤くしながらも、プリプリと尻を振って私を催促するヒフミ。

ニコニコの笑顔でユウカと会話しながら、滴るほどに濡れているアリス。

私は、真ん中のヒフミにチンポを突き立てた。

「んんっ♥」

息を詰まらせながらもすんなりと受け入れるヒフミの膣を味わいつつ、両脇のアルとアリスの尻はもつちりと指を沈ませ、尻たぶを開

いて肛門を拝む楽しみがある。

アリスの尻は肉付きが薄いのが、普通ではありえないほどに弾力があり、肌のきめ細かさもいつまでも撫で回していたいほどに心地いい。

何より、ヒフミの膣は何度もセックスする事でこなれつつあり、ヒフミのセックス慣れもあって細かい締付けのタイミングや挿入の角度が調整され、何度腰を振っても飽きの来ないテーマパークのような面白みのある膣へと成長していた。

「あっ♥ あっ、ああっ♥」

控えめなヒフミの喘ぎ声とは裏腹に、じゅぼっ、ぐちゅ、と膣から愛液が垂れ、床へと糸を引いて落ちていく。

立ったまま背後から犯されるヒフミの背中には、めくれ上がったスカートが掛けられお尻が丸出しになっている。

見ようによつては間抜けなその格好が、アイドルという綺羅びやかな印象との落差でより強く卑猥なものとして映った。

両脇の二人の膣口をほじり、ヒフミに負けなくらい愛液を滴らせているそこを音を立ててかき混ぜる。

「あんっ♥ んっんっ♥」

「あっ♥ あっ♥」

「おまんこっ♥ きもちいいですっ♥」

三者三様に、チンポに媚びる声で快楽を叫ぶ。何重にもあり得ない、年若い少女の艶やかな声の三重奏。

アイドルとしての歌と踊りに代わり、チンポをハメられマンコをほじられ、よがり声を上げ腰をくねらせる。

その媚態はしかし、人の視線を釘付けにするだけの魅力を持っていた。真っ赤な顔をして、唯一の観客であるユウカが世にも淫らな出し物を食い入るように見つめている。

ヒフミの腰の振りが激しくなり、膣の締めも強まる。

2発目とはいえシチュエーションのせいでこらえる事も難しい私は、強く腰を打ち付けて素直に射精した。

「ああっ♥ でて、ますっ♥ わたしも、いくっ……♥」

処女の時のように騒ぎ立てることもなく、深く膣で絶頂するヒフミ。

その蕩けた視線は、正面のユウカより頭一つ上の虚空に向いていた。



ユウカが、普段おっとりしているヒフミの本気のイキ顔に見とれていることなどお構いなしに、私のセフレとして快楽を貪っていた。ぬぼんっ、とチンポを抜くと、ヒフミが膝から崩れて背もたれにより掛かる。

アルとアリスはそのヒフミを放って置いて、ゴムを手早く外して両側から同時にチンポを舌で舐め始めた。

「ちゅっ♥ れろおっ♥」

「ぢゅるっ♥ ちゅぱっ♥」

熱くみずみずしい舌が、私のチンポを愛おしげに、大胆に這い回る。

「ぢゅろろろっ♥」

アルとアリスがキスをしながら、同時に私の龟头から尿道に残った精液を吸い出してくれる。

汗でじっとり湿った、二人の細い首の後ろに手を置き、そつと頭を押す。

ヌラヌラと美少女二人の舌が絡められ、吸い出された精液を取り合うようにお互いを味わう。

口元を精液と唾液でベトベトにしながらの後始末に再度フル勃起したチンポに、アルが丁寧にゴムをかぶせた。

「ありがとう、アル。さあ、お尻を出して」

「はい……♥」

アルのスラリと長い脚がコンパスのように綺麗に伸びて、私のちようどいい位置にマンコをセットしてくれる。

自分でスカートを大きくめくって濡れそぼったマンコを見せつけたその尻をぴしゃんと叩き、欲しがりな膣に一気に突きこむ。

「んおおっ♥」

待ちに待ったチンポを大歓迎してくれる、アルの優等生膣。

何度もセックスしてほじった結果、アルは元々敏感だった感度に磨きがかかり、強く腰を振られるとそれだけで簡単に絶頂するようになった。

スタイルの良いアルがアイドル姿に身を包んだ所をメチャクチャ

にしたい。

そんな気分のままに、ぱん！ ぱん！ と拍手のように強い腰使いでアルを責め立てる。

「んっ♥ おっ♥ おおっ♥」

深く静かに快楽を貪るヒフミとは一味違う、男に蹂躪される悦びを全身で表すかのようなアルのよがりぶりに、ユウカはまたも目が釘付けのようだった。

隣で尻をふりふりしているアリスにも忘れず膣愛撫をし、ふらふらと震える脚で立ち上がって、殆ど肘でソファに寄りかかってまで尻を上げるヒフミにもイッた後の膣をほじくってあげる。

「アリスのまんこっ♥ 寂しい寂しいって泣いてるんですっ♥ 早くチンポくださいっ♥」

「おっ♥ おっ♥」

「うっ♥ いく♥ またイッちやいます♥」

演目を変えたかのように先程とは違った淫らさを奏でるセックスショーに、私までも興奮が止められない。

「ううっ、アル、だすよっ」

「きてっ♥ 先生っ♥ きてえっ♥」

アルがアイドル姿の下に秘めた、セックスにヒク付く肛門を眺めながら……一番奥でゴムに射精する。

「あーっ♥ いくうーっ♥」

真昼の執務室、ガラス張りで外に爽やかな青空が広がる中、美しくビブラートしたアルの絶頂声が響いた。

絶頂が深すぎてゴムが取り残されてしまったアルの膣からちゅぽんとゴムを回収し、余韻に浸っているアル以外でまたお掃除フェラをしてもらう。

「ふーっ♥ ふーっ♥ ぢゆるっ♥ ずぼぼっ♥」

鼻息も荒く、アリスが亀頭を吸い立てる。

「はむっ♥ れるれるる……♥」

ヒフミは性欲の限界に達しているアリスをサポートするように私の金玉を口に含み、丁寧な舌で転がした。

下に潜り込んだヒフミの肩あたりにアリスのよだれと我慢汁の混じった液体が垂れ、アイドル衣装を汚すがお構いなく口淫を続ける。「せんせいっ♥ ごめんなさいっ♥ アリス、うっかりセフレだつてユウカにバラしちやいましたあ♥」

白くて細い脚をピンと伸ばし、丸出しのお尻をプリプリ振って私を誘いながら、アリスが謝罪を口にする。

「うん、よく言えたね、アリス。ユウカが優しかったから良かったようなものの、今後はちゃんど気をつけてね」

「はいっ♥ だから、もうお預けは許してくださいっ♥ アリス、チンポ欲しくておかしくなっちゃいます♥」

「ユウカにもごめんなさいは？」

「ユウカっ♥ ごめんなさいっ♥ 本当はムードのある感じで先生にセフレにしてもらうつもりだったのになっ♥」

「あつ、い、いや、いい……わよ、もう。皆の言ってたこと、分かっちゃったし。気にしてないわ、アリスちゃん」

急に話を振られたユウカは、脚をもじもじ擦りつけながら謝罪を受け入れてくれた。

どちらかというと、アリスの痴態がどんなものかという期待が顔に滲んでいる。

「ほら、ユウカも待ってるし、アリスもいっぱいアイドルとして気持ちよくなってるね」

「はいっ♥ アリス、身につけたアイドルのアクティブスキルで、先生と沢山セックスしますっ♥」

やる気に満ちたアリスの宣言と同時に、まだスジを保っているマンコにチンポを突き刺す。

ぎゅうぎゅうに狭いのにヒダが多い、問答無用の名器であるアリスのマンコは、アイドルの踊りを模したアリスの尻の振りにより更に刺激を増し、貪欲に精液をねだってくる。

「先生♥ 私達も忘れないでくださいね♥」

「そうよ、こんなに気持ちよくして、一回だけなんて生殺しだわ♥」

若い性欲に火が点いたアルとヒフミも、自らマンコを両手で開き、

膺を見せつけて私を誘う。

遠慮なく、さつきチンポでかき回してイかせた膺2つにそれぞれ指2本を突っ込みかき回す。

「あっあっ♥ そこっ♥ チンポだけじゃなく指もすこいっ♥」

「先生っ♥ 先生っ♥ アリスのマンコっ♥ 先生のチンポ啜えて喜んでますっ♥ もっともっと一番奥突いてくださいっ♥」

「んっ♥ 先生のチンポでイッてから、敏感なの戻らないんですっ♥  
また、イッ……く♥」

心底楽しそうにセックスするアリスに引きずられるように、アルもヒフミも性欲むき出しの声を上げて楽しんでいた。

「いっく♥ いっく♥ みんなといっしょよに、アリス、イきますっ♥」  
ゲーム部ではない4人組のセックスで、とても仲良さそうにお互いの手のひらをソファの背もたれの上で重ねて、3人の淫らな少女が同時に絶頂する。

「「いっくううう♥♥♥」」

大迫力のその同時絶頂を見て、ユウカが大きく生唾を飲み込み股間に指を這わせていた。

その姿をじっと見ていると、正面のソファに座ったユウカが、何も言わないのに脚を開きマンコを指で開く。

どうやら、アイドルのアフターはまだまだ終わらないようだった。

## 普通の女の子の普通の体験（アイリ）

「先生……この書類はどうすればいいですか？」

シャーレ執務室に、明るい声が響く。

ユウカの破瓜の血を拭き取ったルミノール反応で青く光そうなソファに座って書類の山を小分けにし、郵送手続きを確認してくるアイリの声だ。

「ああ、それはさっきの奴と同じ分類で……」

アイリと会う時は何かと忙しい時が多い気がする。

私はセフレとのセックスで回復した気力と消耗した体力で、結局普段とあまり変わらないしんどさの仕事を進めながらアイリに指示を出していた。

朝どころか今日の日が登る前からやっているのだが、一向に終わる気配がない。

昼からアイリが来て手伝ってくれているが、熱意は感じても書類仕事が得意というわけでもないのであまり期待しすぎても酷というものだった。

「ううっ……私がお仕事できれば先生のお役に立てるんですけど……」

「いやいや、アイリがそばに居てくれるだけでとっても助かってるよ」  
流石に長時間労働が過ぎて、独りでやっているといつの間にか気絶のように意識が落ちそうになることがあった。

アイリの元気な声と、女の子とミントの匂いが気付けになっていることは間違いない。

「え、えへへ……そう言っていただけで嬉しいです。よーし！  
もつと頑張りますよー！」

そう答えるアイリの顔は少し赤らんでいて、疲れた身体に染みる。  
疲れマラでチンポがイライラしてしまった。

「ふう……」

とはいえ、リンにまた怒られてしまうのでセフレと一発というわけにも行かず、勃起を持って余しながらも必死に仕事をやる。

「先生、すこし休憩にしましょう？ 先程からため息を何度も……」  
気遣わしげに目を伏せながら、バッグからミントチョコを出して勧めてくれる。

非常に申し訳ない所だが、溜息はアイリが側にいることでチンポがイライラした結果なのだ。

「大丈夫だよ、少し疲れただけだから」

「疲れてるなら少しお休みしましょう、ね？ ほらほら、糖分を摂って頭に栄養を送らないと！」

アイリが身体を寄せてきて座っている私の顔を覗き込むように前傾すると、ふわりと女の子の甘い香りが漂う。

暖かくなってきた気候に合わせ襟元も緩くなったアイリのセーラー服から胸元の素肌が覗き、アイリの綺麗なストレートロングヘアがさらりと肩からこぼれて下に垂れた。

「ありがとうね、アイリ」

アイリの甲斐甲斐しさと可愛さに釣られて、つい手が出てしまう。私は首と耳の境あたりを撫で、さらりと髪を梳いた。

「ひゃうっ!」

「おつとごめん、嫌だった？」

完全に無意識で撫でていた。生徒とセックスした後はこうやって撫でてあげる事も多いので、癖になってしまったようだ。

「い、いいえ！ そんなこと、ありませんよ？ 先生がお望みなら、もっと撫でていただいても……」

アイリはひと撫でしただけで顔を真っ赤にし、俯きがちにチラチラとこちらを見ながら腰の前あたりで両手をもじもじさせる。

チンポのイライラがとどまる所を知らない。

「じゃあもっと撫でてみようかな」

「ええっ!?! あ、い、いえ……それで先生の休憩になるのでしたら、どうぞー!」

目を見開いて驚き、ギョツと目をつぶって頭を差し出すアイリ。

頬が真っ赤に染まり、期待と不安が入り混じった力んだ表情が愛らしい。

私はアイリのサラサラの髪を梳くように頭の側面をさらりと撫で下ろす。

「んっ……」

ぴくん、と微かに肩をすくめて反応するアイリの様子を眺めつつ、髪の下に隠れた耳に指先で触れる。

つう、と耳の縁を愛撫する。日々のセックスで鍛えたテクで、アイリの『女』を一番引き出せるやり方を探っていく。

両の耳を、耳たぶも耳の内側も余すこと無く撫で回した。

「あっ♥ やっ♥」

あっという間にアイリの吐息は色っぽくなり、頬どころか首筋も桜色に上気し始めた。

目を閉じたまままで前かがみのままのアイリは、私の愛撫を受け入れて息を荒げている。

その白い首筋にも指を滑らせた。

「ああ……♥」

はつきりと、恍惚の溜息が漏れる。

そつと、アイリの瞼が開かれた。そして、視線を下に落とす。

「せん、せい……♥」

おずおずと、しかし真っ直ぐに……アイリの手は、私の股間に伸びた。

「やっぱり……私で、こんなにしてくださってるんですね……♥」

アイリの細い指が、私の股間の膨らみをぎこちなく撫で回す。それに反応して勃起が一段大きくなった。

「ごくっ……こんなに、カチカチで……大丈夫、なんですか？」

生唾を飲んだアイリの唇は、リップクリームの薄ピンクで艶めいていた。

「大丈夫ではないかもね。後で頑張つて鎮めない」と

アイリの手は、だんだんと滑らかに、ねっとり私の股間を撫で回し続けている。

撫で回したままに、潤んだ瞳を私に向けた。

「わ、私のせいなので……責任を……取ります」

私は、首筋を撫でていた手をそつと離し、前かがみのアイリの胸の下に持っていった。

「責任って、どうするの?」

小ぶりな、15歳の少女としては普通といった所の胸を、下から触れる。

服の下に感じるブラを凹ませない程度の胸の形を確かめるような撫で方で触れても、アイリは生唾を飲むだけだった。

「先生の、お、おちん、ちんを……私が、射精させてあげます……♥」  
消え入るような声で、しかし潤んだ瞳で確かに私と見つめ合って、そう言った。

「ありがとう、アイリ。じゃあお願いするよ」

そう言うと、ジッパ―を下ろして勃起チンポを取り出した。

「きやつ……」

アイリは目を丸くして、我慢汁が滲んだチンポを見つめている。

しかし、震える手が肉竿に伸びていき、指先で触れた。

「あつ……熱い……♥」

熱いチンポからすると少し冷たいアイリの指は、撫でるように微かに動く。少しくすぐったい感覚に勃起をビンビンに揺らしながら、私はアイリの胸を少し押し込むように揉み始めた。

「ん……♥」

微かに眉をしかめて、指先も震える。

「どう? アイリも気持ちいい?」

「へっ……? え、えつとえつと……あう……♥」

ふにふにと、制服の上から少し押す程度の刺激を乳首の周りに与えている状態で、アイリに声をかける。

完全に予想外の質問を浴びせられたアイリは、上ずった声でしどろもどろになるばかりだ。

その最中もブラの上から乳首をさすり続け、だんだんと可愛らしい膨らみの下に硬い感触が返ってくるようになってきた。

位置がバレバレになった乳首を、カリカリと集中的に刺激する。

「あつあつ♥ せ、せんせっ♥ わたしっ、が、気持ちよくなってもっ



♥ 仕方ないですから♥

「そんなことないよ。……アイリだけそんな体勢だと辛いよね。ソファに座ってしようか」

おもむろに立ち上がり、アイリの腰を抱いてソファに歩いて行く。ドサクサにアイリにチンポを握らせる形にしたため、力なくまとわりつくアイリの手のひらと指の感触が心地良い。

ねっとりアイリの腰を撫で回しながらソファに座る。

「服、脱がして良い？」

びくん！ とアイリが大きく肩を竦ませて震える。

複雑な感情に揺れる瞳が私を見つめ、つばを飲んでからプリプリの唇が言葉を紡いだ。

「ど、どうぞ……」

遠慮なく、セーラー服のするすると脱がしていく。

制服の下のキャミソールを、控えめな胸が押し上げているのを見てチンポが反応する。

アイリがその動きに釣られてチンポを見て、さするようにゆっくり手を動かした。

私はキャミソールの下に手を入れ、ブラのホックを外す。

ついに、アイリの生乳に下から手を伸ばした。

「あっ♥ んっ♥」

はつきりと、快楽による声があがる。

先程まで私の体調を気遣い、ズボンの上から勃起チンポを見ただけで顔を赤らめていた初心な少女の奏でる人生初の快楽の調べは、私の疲れを着実に拭ってくれる。

「どう？ 痛くないかな？」

そっと乳首をつまみ、ごく弱く捻ってやる。

「んんっ♥ あ、ああっ♥ きっ♥ き、きもち、いつ♥ いいっ♥ ですっ♥」

なんどもつつかえながら、どんどんプツクリと勃起していく乳首の膨らみを肯定する言葉を返してくれるアイリ。

「アイリも私のチンポを握って、しごいてみてくれるかな？」

「あっ♥ で、でもっ♥ せんせいのっ♥ ゆび、っはあ♥ きもち、よすぎて、も、むりっ♥」

アイリは殆ど手を動かせず、私に寄りかかるように身体をくっつけて乳首快樂に酔いしれていた。

なので、ぱつと手を離してやる。

「あっ……………」

快樂に濡れる瞳が、どこか非難するように私を見る。

「す、すみません。先生を気持ちよくしなくちゃいけないのに……えつと、こ、こうでしょうか？」

ハツと我に返ったアイリは、手コキに意識を戻して私のチンポを握りしめた。

しこ、しこ、とたどたどしくも懸命な手コキが始める。

「ああ…………♥ 熱くて、硬い、です…………♥」

しごき出された我慢汁で手のひらをヌルヌルにしながらも、隣に座るアイリは私に身体を密着させて手コキを続けた。

「ああ…………とつてもいいよ。アイリの身体、もつと触っていいかな？」

「ご、ご自由に…………どうぞ♥」

明らかに期待の混じった上目遣いで、上着を脱いでむき出しになった肩まで軽く上気した身体を好きにさせてくれるアイリ。

私はアイリの太ももに手を置き、スツと根本まで這わせてアイリの股間に触れた。

「あっ♥」

甘い声を出して、嫌がるどころかそつと脚を開いて触りやすくしてくれる。

「下も脱がして良い？」

ギユツとチンポを握る手に力が籠もる。快樂と羞恥で耳まで真っ赤になりながらも、アイリは身体を更にくっつけてくる。

そのまま、こつくりと大きく頷いた。

私からもアイリを抱きかかえるようにして、両手を掛けてショーツを脱がす。

ミント色の可愛らしいものがアイリのスカートの奥から出てきて、

ソファの手すりに引っ掛けられる。

むあつとチーズのような酸っぱさを含んだ匂いが一瞬広がった。

アイリは下に何も履いていないトリニティの清純な白のスカートの股間をギユツと抑えながら、ギユツと目を閉じて俯き、羞恥に耐えている。

ノックするように太ももから股間に手を入れようとすると、アイリがゆっくりと手をどけてマンコ弄りの許可を出してくれる。

先程よりも手に感じる湿度が高く、ふによりと柔らかい恥丘が直接指に触れると、汗にしつとりと濡れていた。

「っ♥ ふーっ♥ ふーっ♥」

ショーツを脱がしてからチンポを根本から掴んだアイリの手は動いていない。

キャミソールの下でブラは脱げかけ、スカートの奥でマンコの蹂躪を許している。

「あっ♥ ああーっ♥ んんっ♥ ああっ♥」

スジのように整っているであろう外陰唇の割れ目を何度も往復するように撫でる。

それだけで、ヌルヌルと愛液が染み出してくるのが指先に感じられた。愛液にまみれた指でクリトリスを転がしてやる。

「んーっ♥ ああうっ♥ んぐっ♥」

クチクチクチと、私達の耳に届くくらいにネチネチと音を立ててくりをしごとくと、先程までとは一線を画す大きな喘ぎ声が上がった。

「ごっ、気持ちいい?」

「んぎっ♥ きっ♥ きもひっ♥ いっひーっ♥」

身体をガクガクと震わせ、顎を上げて天井を見るアイリ。

「気持ちいい? もっとして欲しい?」

「もうらめっ♥ もうらめえ♥ おかっ♥ おかひくなるっ♥」

とのことだったので、手を離す。

アイリの腰を抱いて、一度立たせた。

「おっと、ソファにシミが付いちやうね。タオル取ってくるよ」

受け持ち生徒が増えたために導入されたソファだが、セフレとやる

のに都合がいいので最近はこれも使っている。

そのためにマットだけでなく大きめのタオルも常備していた。幸い、アイリはスカートを尻に敷かず座っていたので

愛液に濡れているのはソファだけだ。

シモの始末をされるアイリは、手コキしていた手で顔を覆って恥じらっていた。

よく拭いて、ソファにタオルをかける。

「さ、続きをしようか、アイリ。あ、スカートも汚れるといけないから脱ごうね」

「そ、そう、ですね……」

スカート脇のファスナーを下ろすと、アイリのスカートがあっさり床に落ちていく。

「さ、寝そべって。……アイリさえ良ければ、オマンコ舐めていいかな？」

「あ、う……は、はい……♡」

どんどん過激になる要求に、どこか嬉しそうに言いなりになるアイリ。

ソファに仰向けに寝ると、おずおずと片足だけをソファの背もたれにかけて脚を広げてくれた。

「いくよ、アイリ」

15歳の処女マンコは薄い陰毛の処理も甘く、整えられることもなく生えるに任せている。

微かに色素の沈着した股間をベロリと舐め、プリプリの外陰唇を舌で割り開く。

「あああ♡」

クリトリスを扱かれた時のように大きな声を上げて、アイリが背を反らす。

トロトロと愛液がこぼれてくるアイリのマンコを、じゆるじゆると音を立てて吸いたて、舌をねじ込んで蹂躪する。

「あーっ♡ んひいーっ♡」

うららかな春の昼下がり、大きな窓から穏やかな日差しが降り注ぐ

中、処女のアイリがマンコを舐められて悶え狂っている。

脚は両方とも高々と上がり熱い膣内を舐め回すたびにフラフラと揺れ、私の頭を抑えるアイリの手はむしろ、マンコに押し付けてクンニをせがんでいた。

鼻先に感じるクリトリスは皮から先端が飛び出るくらいに勃起し、アイリがどれほど楽しんでいるかを今も伝えている。

愛液を指にまとわりつかせ、アイリの綺麗な肛門の窄まりに指を伸ばす。

入り口を軽く押すようにくすぐりながら、舌で膣の入り口付近……クリトリスの裏側を刺激する。

「んあああああああああーっ♡♡」

アイリの細い脚が私の顔を強くはさみ、膣の中の舌が握りしめられるように締め付けられる。

力なく下がった脚が、ガタンツ！ と音を立ててローテーブルにぶつかった。

「はあ……♡ はあ……♡」

背を反らしすぎてキャミソールとブラはズレ上がり、可愛い胸の膨らみを白日にさらしている。

荒い息をする度上下する胸は弄るのをやめたのに両乳首とも硬く勃起し、胸にも腹にも玉のように汗をかいていた。

頬には後れ毛が張り付き、うっとり虚脱した表情で天井を見つめている。

チンポの限界だった。

「アイリ、このままセックスしていい？」

「はあい……♡ おねがいしますう……♡」

ふにやっとした力ない笑みを浮かべて、上半身のキャミソールと靴と靴下しか身につけていないアイリが返事をする。

「いいの？ アイリの処女、私が貰っちゃうよ？」

そう言いながら、チンポを綺麗な割れ目に押し付けて、ぬりゆぬりゆと上下させてアイリに快感を与えた。

「……はい。私の処女、先生に……上げたいんです」

静かに呟く。その瞳の輝きは真っ直ぐで、乳首を勃起させて愛液でタオルを湿らせて居てもなお可憐で、清らかだった。

「わかった。一生覚えてる位に気持ちよくして上げるからね」

清々しい位に真っ直ぐな告白を受けて、私は膣口に押し当てたチンポを沈めていった。

「んっ、ぐ……い！」

ヌルヌルと飲み込まれていくとは言っても、15歳の未成熟な身体はチンポを収めるのも一苦労だった。

濡れ方がまだ足らず、引つかかつては腰を細かく使って愛液の滑りを足してアイリの処女膣を進んでいく。

すぐに膜に行き当たった。

「いくよ、アイリ」

「きてください、先生……」

フラフラと不安げに彷徨うアイリの手を恋人つなぎでしっかり握ると、アイリがにこつと微笑んだ。

いつかの日、外で並んでアイスクリームを頬張ったあの無邪気な笑顔と同じ笑顔で見つめ合いながら、腰を突き出す。

「んっ……」

少し眉をしかめたアイリは、へそのあたりまでぐっぽりとチンポを啜え込む立派な女となった。

「大丈夫？ 平気？」

アイリは恋人つなぎにした手をニギニギと確かめるように握り、さつきと同じ笑顔を浮かべた。

「えへへ……これで私、先生にはじめてを貰われちゃったんですね♥」

スジのように美しかったマンコを楕円に押し広げられ、めくれ上がったキャミソールから勃起乳首を晒しながらも、アイリの微笑みは可愛らしくも清らかだった。

「うん。とつても光栄だよ、アイリ」

「先生のお、オチンポ……お腹の中ですっごく熱く感じます」

「動いて大丈夫？」

アイリは処女を失った自分の腹の奥を見通すように視線をやり、

そつと目を閉じて身体の感覚に集中したようだった。

「はい。意外と、そんなに痛くなくて……先生が、あの……ちやんと、射精できるように、ご自由にどうぞ……♥」

うつすらと血の跡を股間からタオルに作りながらも、健気にそう言ってくれるアイリの子宮口に我慢汁が塗り込まれ、子作り準備を整えたばかりの子宮を精子が泳ぎ始める。

「アイリの中で射精していいの?」

ふいっと視線を逸したアイリは、

「先生がお望みなら……どうぞ……♥」

そう言つて、無意識的にか膣をキュツと締める。

いい子のアイリが孕んで既成事実を作ろうとしているその態度にチンポのイライラが高まり、どぶどぶと精子を含んだ我慢汁が知らぬうちにアイリの膣に注ぎ込まれる。

「そう。それじゃあ一番奥で射精させてもらおうね」

「はい……いくらでも、きて……ください……♥」

にいつと口角を上げたその笑みは、男を誘い引けないところまで引きずり込むメスの粘っこい性欲が混じったものだった。

ニチャニチャとアイリの膣をグラインドの動きで上下左右にかき回し、いち早く膣内射精しようと龟头とアイリの子宮口をこすりつける。

「んっ♥ な、なんか、お腹のおく、ぴりってします♥」

「アイリの子宮口と私のさきっぽが擦れあってるんだよ」

「こ、これが私の、赤ちゃん作る所なんですっ♥ わ、私、先生の赤ちゃん産んじやうんですっ♥」

孕む気満々のアイリが、私の説明に興奮を増していく。

「ああ、アイリ、元気な赤ちゃん産んでね?」

「はいっ♥ 可愛いあかちゃん♥ うみますっ♥ すきっ♥ せんせいですきっ♥」

尊敬の念と恋心、性欲と繁殖欲が若く瑞々しいアイリの身体を急速に開花させ、女として自覚させる。

孕ませたい、孕みたいという気持ちを通じ合い、股間の粘膜を通し

て身も心も一つになる。

我慢すること無く、アイリの膣奥に精液をぶちまけた。

「ああ……♥ 先生の、脈打ってます……♥ セーえきつ♥ でちやってます……♥」

にやあーつ、と頬を緩めて淫らに笑うアイリが、膣への刺激よりも射精された事実を思い絶頂する。

処女膣がぎゅうぎゅうと締まり、貪欲に孕もうと精子のおかわりを要求する。

「あ、ああ……♥ イく、イきます、せんせいっ♥」

芽生えたメスの本能が、脳でイッた後の膣イキを導いた。

靴を履いたままの脚が私の腰に絡みつき、決してオスを逃さず腰の密着を強要される。

たとえ絶頂後であっても、アイリの力に逆らえない私は大人しくアイリの子宮口に思いきり鈴口を押し付けて、残っていた精液を遠慮なく射精した。

「はあっ♥ はあっ♥ はあっ♥ 先生の、せーえきつ♥ 私のお腹のなかに溜まってる……♥」

絶頂よりも興奮による荒い息を聴きながら、抱きしめられるままにアイリにのしかかる。

年相応の薄ピンクのリップクリームは淫らな言葉しか紡がない唇にはミスマツチで、だからこそ再度の勃起を煽った。

「どっっても綺麗だよ、アイリ」

「あ……んむっ……♥ ちゅっ……♥」

私の唇を瞳を閉じて受け入れ、処女を失って膣内射精をキめられてからのファーストキスを楽しんだ。

「じゅるっ♥ んんーっ♥」

私の唾液を積極的すすり、気持ちよさそうにくぐもった声を私の口内に響かせるアイリ。

腰を動かしていないのに膣が再度締まり、夫婦のように愛し合うキスハメという行為を喜んでくれるのが全身で感じられる。

舌をアイリの口に入れると、アイリの熱い舌と唾液が絡みつくよう



に私にまとわりついてくる。

「はむっ♥ んむっ♥」

手コキのぎこちなさとは打って変わって、技巧はなくとも必死に絡みつく舌と唾液まみれの口内で社交ダンスのように舞い踊る。

「むふうーっ♥ んふうーっ♥」

押しつけっぱなしの腰をぐりぐりと円を描いて動かし、アイリの好きなクリトリスを刺激しながら膣奥をかき回すと、アイリの舌の動きは激しくなり、鼻息がくすぐったいほどに荒くなる。

いつの間にかパツチリ開けたアイリの瞼の奥には、浅ましく射精をねだるメスの淫らな輝きを帯びていた。

合図するように、こちらから手を強く握り、より体重をかける。

アイリは全く誤解なく理解して、腰の後ろで組んだ脚にギュっとなりを込めて私を逃さないようにし、恋人つなぎの手も肘をソファにつけるように引き、ガツチリと力で私を拘束する。

孕みたがりのアイリの胎に、2発目の射精をご馳走する。

身体を密着させ、アイリのバクバクと激しい拍動さえ感じながら射精する。

「ん~~~~~っ♥♥♥」

射精で絶頂したアイリが私の口内に激しくいき声を送り込み、心地よく頭蓋を揺らす。

腰を引くことも出来ずに処女膣に引き止められ、一番奥の新品子宮が私の2発の精液でたっぷり満ちていく征服欲に満たされ、どぶどぶと思いつき射精してしまう。

額が付くくらいの距離にあるアイリの恍惚の笑みは、私と同じかそれ以上に性行為を楽しんでいる事を伝えてくれた。

お礼とばかりにイツたばかりの膣奥をかき回し、舌でアイリの無防備な上顎をくすぐるように舐めると、

「ん~~~~~っ♥ んふう~~~~~っ♥♥」

びくんびくんと追加で絶頂する。

反射で更に強く絡みつく脚が痛いくらいに私の腰を締め上げ、お互いの恥骨がゴリゴリとぶつかる。

クリトリスを押しつぶす位の強さで挟んで刺激するように腰を動かすと、

「お、—————っ♥」

一際大きな絶頂を迎え、アイリの全身から力が抜けた。

「ううん……あれ、ここは……」

「おはよう、アイリ」

初セックスで気持ち良すぎて失神してしまったアイリを横に、私は仕事をして待っていた。

「といつても10分くらいの事なのだが……」

「あつ、ああっ!?!」

アイリの格好はセックスの時そのまま、下半身は靴と靴下だけ、上半身はキャミソールとホックの外れたブラだけだ。

「バツ！」と音を立てて身体をかばうと、真っ赤な顔を私に向けた。

「うう……私、寝ちゃってました?」

「覚えてない? 寝たというか、気持ち良すぎて失神しちゃったみたいだね」

はわわ、と口を半開きにして自分の痴態を思い出していくアイリ。顔中、耳や首筋までも赤くなりながらも、口元はニヤニヤと緩んでいた。

「えへへ……♥ とつても気持ちよかったです♥」

「うん、私もすごく気持ちよかったよ。アイリも積極的だったし」

「だ、だって、私も、先生と……そういう関係に、なりたかったんですもん」

どぶどぶと自分の股間から精液を垂れ流しながら、子供っぽく口を尖らせるアイリ。

「うん? 皆には秘密にしてるはずだけど?」

「ツルギ先輩がたまにすごく機嫌が良いって前から噂になってますし、カフエとかで、たまに……ヒフミちゃんとかが、汗をかいて出てくる時とかあって……ヨシミちゃんとか皆で、もしかしたらって噂し

てたんです。本当にそうだとは思ってなかったんですけど、その、今日 お仕事を手伝ってる時に机の下で、先生がオチンポおつきくしてるのが見えちゃって……」

ノロノロとブラを直し制服の上着を着ながら、アイリが説明してくれる。やはり疲れマラはよくなかったようだ。

「そっか。アイリは私とセフレになりたいと思ってくれてたんだね」「せ、セフ……!?! いや、そうですね。私、先生となら、こういう事してみた……!?」

少しずつ普段の姿を取り戻しながらも始末の仕方を知らないのだから、少しくも後回しにされていて、とてもチンポに悪い光景になっていた。

「そうだ。はい、これを飲んでおいてね、アイリ」

「これ、は？」

「避妊薬だよ。赤ちゃん出来たら困るからね」

ハッ、と目を見開く。アイリは自分の股間を見下ろして、流れ出てくる液体の正体と、学校で習ったであろうそれがもたらす結果を思い出し顔を青ざめさせた。

「あ、あわわ、わ、私なんてことを……!」

慌てて眼の前の水が入ったコップに手を伸ばし、用意しておいた避妊薬を一飲みする。

「ふう……」

ほっと胸をなでおろしたアイリを見て、笑みがこぼれた。

「ふふ。さつきはあんなに赤ちゃん産みたがっていたのにな」

「だ、だってそれは、気持ちが変わってないですけど……」  
冷静に考えたら、今赤ちゃん出来たら絶対ダメだし……」

「そうだね。そういうのは少なくとも学校を卒業してからね」

「えっ……」  
は、はいっ」

さつきまで処女だった、精液を垂れ流すスジマンをヒクつかせ……  
薔薇色の笑顔を浮かべるアイリを見て、将来が楽しみなセフレが増えたことを喜ぶ。

アイリのように穏やかな春の日差しが、美しい下半身を白く照らし

出していた。

匂わせはクセになるから気をつけろ（ミモリ）

「先生っ、おはようございます。今日もオキシトシンハグしましょう！」

徹夜仕事とセフレとのセックスが重なり疲労困憊だった私は、ミモリに叱られて色々とお世話されるようになった。

最近ミモリは泊まり込みでお世話してくれるようになっていて、ここは私の自宅だ。

昨日は2人で夫婦のように向かい合って食事をして湯上がりパジャマ姿のミモリと並んでテレビを見たりした。

「いつもありがとうね、ミモリ」

そう言つて、ミモリのくびれた腰を正面から抱き寄せる。

ギュツと力を込めて、二の腕でミモリの形の良いおっぱいを寄せて上げるように刺激する。

「んっ♥」

セクハラ行為に嫌な顔ひとつせず、ミモリはただただ甘い声を上げて抱きしめ返してくれた。

眼前にあるミモリの可愛らしい耳を唇で食む。

「やつ♥先生、くすぐりたいです」

オキシトシンハグと称するこの行為は元気をチャージするという名目なので、長くやったほうが良いのだと主張してだんだん時間を長く取り、お触りもどんどん過激にしていった。

しかしミモリは全く嫌がらず、それどころか毎日ミモリの方からオキシトシンハグという名のペッティングをせがんでくる。

私のチンポのイライラは限界に達しようとしていた。

ミモリは、私とオキシトシンハグをする時には普段は首周りまでピツタリと覆う服の襟元を緩めてくれている。

あらわになつた白く美しい首筋に唇を這わせ、ちゅ、ちゅ、と音を立てて吸い、朝からキスマークをつけていく。

「ふふ……♥先生の跡をつけたまま過ごすの、すっかり癖になっちゃいました♥」

私の背中を優しく撫でさすりながらミモリが熱っぽく呟く。

次はもつと大胆に、胸の側面……ブラのワイヤーの縁をなぞるような軌跡を指で撫でて刺激する。

「あっ ♥ はああ……♥」

はつきりと、ミモリが快楽の艶声を上げた。

カリンやアスナを相手に巨乳の性感帯への愛撫を練習した甲斐あって、ミモリが気持ちよくなる愛撫は習得済みだ。

今日は、ここから更に踏み込む。

ミモリの股間に脚を入れ、性器を太ももで押すように膝を持ち上げる。

「あっ ♥ あ、ああっ ♥」

不意打ちでの性器の愛撫に、ミモリはビクンと全身を震わせて天を仰いだ。

「ミモリ……キスしよう」

「い、いけません……♥ わ、私たちは先生と生徒で……」

そう言いながらも、私が強く抱きしめて股間をリズムカルに刺激するのをうっとり受け入れているミモリ。

「男を喜ばせるのも大和撫子に必要な花嫁修業だと思うよ」

顎を指でゆっくりと持ち上げてやると、少しの抵抗と共にミモリの顔が私の方をむく。

「大和撫子になるためならば……しかたありませんね……♥」

私の背中に回したミモリの腕が、肩の辺りをキュツと握ってくる。

その緊張と高揚を感じつつ、ミモリのプルプルとした唇を奪った。

「ん……♥」

朝の自宅、出勤時間はまだ30分は先だった。ミモリのほうが時間がかかるはずだが、気にしないで良いと言うので甘えさせてもらっている。

窓からは初夏の朝日が降り注ぎ、小鳥の鳴き声が聴こえる。

そんな爽やかな朝に、生徒と抱き合っぺってペッティングしていると無限に気力が漲ってくる気がする。

「ちゅっ……ちゅっ ♥ んくっ、こくんっ ♥」

ミモリからも私の唇を健気に吸ってくれる。私がミモリの唾液を吸るのを見てからは、私の唾液も当然のように飲んでくれていた。お礼代わりに、胸の愛撫を強める。ミモリの美乳を、服の上からゆっくり押しつぶしていく。

「んんーっ♥」

強い刺激にミモリが一際大きな声を上げる。一度手を緩めて、乳首の辺りをひたすらカリカリと爪で搔いてやると、服とブラ越しに乳首の勃起がかすかに感じられた。

そのかすかな勃起に集中して、さらにピンポイントに乳首を刺激してやる。

「んっ♥ んーっ♥ ぷはっ♥ せ、せんせ♥ そこ、だめ、です……♥」

とうとうミモリが唇を離し、唾液でベトベトになった口元も気にせず訴えてくる。

「……が気持ちいいんだ？」

もちろんその訴えは弱点の告白でしかなく、力の強弱を調整してミモリの好みの愛撫を探り続ける。

「へんにっ♥ へんになっちゃいますから♥ もうダメ、赦してください、せんせい♥」

清楚な大和撫子が、朝日に包まれながら訳もわからないままに絶頂に至る美しい光景を目に焼き付けつつ、存在感が増えてきた乳首を服の上から強く摘む。

それと同時に膝を突き上げて、ミモリの股間を強く圧迫した。

「ひぎゅっ♥ はっ、ぐ……ああ……♥」

ミモリはつま先立ちになって天井を見つめ、全身を硬直させた。そして直後に膝から崩れようとする。

その股間を膝で突き上げながら、倒れかかる上半身を受け止めた。

「はあっ♥ はあっ♥」

ミモリは息も絶え絶えで、私の胸に縋り付くようにしがみついている。

「ミモリ、大丈夫？ オキシトシンが出すぎたかな」

とろんとした目を向けて、半開きになった口を動かそうとするミモリ。

「今日は午前中、休もつか。……私と一緒に」

ミモリの股間に押し当てた太ももに、暖かく湿った感触を感じる。腰を抱いてゆつくりと寝室へと歩いていくと、ミモリは私に体を預けて頬を擦り寄せてきた。

腰を撫でる手を下げて、ミモリの股間を指で撫で回す。にち、にち、と制服越しにも粘質な感触が感じられ、ミモリが私の胸に顔を埋めて視線から逃げた。

寝室のドアを開けながら、遠慮なくにちやにちやと音を立ててミモリの股間をまさぐる。

「ふっ……♥ んああっ♥」

歩いた時間は僅かだというのに、ミモリはびく、びく、と体を震わせて小さくイった。

「さあ、学校に休みの連絡を入れないとね。はい」

紐を解いて脇のジツパーを下ろすと、ミモリのスカートはあっけなく落ちた。

ストッキングに包まれた股間を更に激しく指で刺激しながら、携帯端末をミモリにわたす。

「せつ、せ、せんせい♥ ゆびっ♥ ゆびを、止めてくださいっ♥」

女らしく艶めかしいミモリの腰つきを、ストッキングの陰影が強調している。

ベッドに腰掛けて脚を広げさせると、黒い網目に透けて見えるショーツの股間からはとめどなく愛液が溢れ出ている、ストッキングの網目を水滴で強調していた。

「しょうがないな……大和撫子たるもの、これくらいで腰砕けになつてちゃいけないよ」

そう言つて、大きく勃起したクリトリスを優しく指でこねる動きに変える。

「も、申し訳……ございま、せ、んんっ♥ で、では……電話させて頂きますう……ふっ♥ ふっ♥」



クリトリスを刺激される快樂でうっとりとして、荒い息を吐きながらなんとか連絡を入れる。

息が荒かったのが功を奏したのか、全く疑われずに休みは受理された。

「ズル休みしちゃったね」

「先生が……こんな風にするからですよ……♡ もう、お股がヌルヌルで……こんな状態で学校に行けません♡」

そう言いながらも、ミモリは微笑んで私に寄りかかってくる。

今や服の上からでも分かる位に勃起した乳首をカリカリと爪先で刺激してやりながら、ミモリに脱衣を促した。

私の目の前で、ミモリが前かがみになってストッキングとショーツを脱いでいく。

股間から離れる時に愛液が太い糸を引き、きゅつと目を閉じて恥じらっているのが初々しい。

スカートを取り去った後のミモリはまるで丈の長い普通のセーラー服を着ているかのようで、新鮮な眺めだった。

そうして私の注目を浴びて恥じらいながらも、ミモリはスルスルと服を床に落としていき……均整の取れた、しかし乳首をカチカチに勃起させた乳房を晒した。

「あ、先生は私が脱がせてさしあげますので、そのまま……♡」

すっかりソノ気になってしまったミモリが、瞳を怪しく輝かせながら微笑む。

神秘的なほどに均整の取れた美しい裸体を惜しげもなく私の目に晒し、ベッドに腰掛けた私の脚の間に恭しく跪くと、ズボンのジッパーを下ろした。

「きゃっ♡」

ぶるん、と勃起チンポがトランクスに大きなテントを張って屹立するのを、ミモリが熱っぽい視線で見つめている。

ぐい、とゴムを伸ばしてチンポを取り出すと、我慢汁の臭いが部屋に撒き散らされた。

そのままズボンごと脱がされ、裸の下半身の脚の間に全裸のミモリ

という、朝の自宅とは思えない光景が生みだされた。

ぬらぬらと液体に濡れるチンポを見て、ミモリは白魚のようなその指で、そつと包むようにチンポに手を添える。

そして、ごく自然なことのように裏筋に優しく口づけた。

「はっ！ す、すみません、私ったら、先生にいきなりこんなことを……!?!」

顔を赤くして謝るミモリの頭を優しく撫でる。

「良いんだよ。むしろ私からお願いたいくらいだし。もつと舐めて、しゃぶってみてくれる?」

「は、はい……♥ 先生の、ご立派さまに……ご奉仕させていただきます♥」

ちろり、と艶めかしくミモリが舌なめずりをすると、先程のキスで可憐な唇に付着した私の我慢汁が舐め取られてミモリの喉に滑り落ちていった。

改めてミモリが先端に恭しく口づけ、ゆったりとしたペースで軽く吸い付き、ちゅっ♥ と音を立てて離れる。

ミモリの瑞々しい唇が、離れた瞬間にぷるんとはずみ、またも我慢汁がにじむチンポにべつとりと押し付けられる。

「んっ……ちゅ、ちゅっ♥ じゅるるっ♥」

ミモリはとても楽しげに奉仕を続けた。竿を、金玉を、ゆつくりと撫でさすりつつも、私の反応を上目遣いに眺め、目だけでニッコリと微笑みながら、唇と亀頭で戯れるようにキスを繰り返す。

段々とキスが深くなり、亀頭がまるごとミモリの口の中に包まれて、亀頭がねろねろと舐め回される。

「良いよ、ミモリ。もつと頬を窄めてほっぺの内側をくつつけてみて」「んっ……♥ ちゅっ!」

そう言うと、ミモリが端正な美貌をひよつとこのように下品に歪めてフェラ顔を晒してくれる。

「ううー……ちよ、ちよつと私、今変な顔してませんか?」

慣れないバキュームで激しい音を立ててしまったミモリが、我に返って頬に手を当てて赤面する。

「とてもエッチな顔になってたよ」

そう褒めそやすと、ミモリは上目遣いに私を見た。

「……先生の、お好みに合う顔が、出来ていたでしょうか……?」

「うん。ほら見て、ミモリが可愛いから更にチンポが固くなったでしょ」

チンポをミモリのぷにぷにのほっぺに押し付けると、我慢汁が綺麗な頬や髪に付いて卑猥なテクリを生んだ。

「ああ……♡ こんなに熱く、硬くしてくださっているんですね……♡」

ミモリはチンポの感触にうっとり目と目を細め、優しく指先で撫で、頬ずりまでした。

「わかりました……先生の好みに沿うよう、やってみます……笑わないで、くださいね?」

意を決して私の太ももに両手を突いて、大きく口を開いて真上からチンポを啜え込むミモリ。

手品のようにミモリの顔が下に下がっていき、チンポが全て口に収まっていく。

「あむっ♡ おっ♡ ちゅっ、ちゅ……ちゅうううっ♡ ぢゅるっ♡ ぢゅぼっ♡」

喉奥に達してえずくが、それを堪えて頬を思い切り窄めて吸引を開始した。

「ぢゅっ♡ ちゅるっ♡ おむっ♡」

慣れないどころか教えてさえいないうちからひよつとごディープスロートを編み出したミモリが、鼻の下を伸ばし、頬を凹ませて頬骨を浮かせてまで奉仕してくれる。

「ああ……綺麗だよ、ミモリ。そんなに激しくしたら、すぐ出てしまいそうだ」

将来の夫にしか決して見せてはいけない、大和撫子の秘められた淫らな面を目の当たりにして、射精感がこみ上げてくる。

ミモリは、喉奥に私の亀頭をねじ込んだ吐き気を堪えて眉をしかめながらも、ひよつとこ顔の目だけで優しく微笑んでくれた。

ミモリの初フェラを堪能したことだし、我慢せずに射精する。

「んぐっ♥ おっ♥ んぐっ♥ ぐっ♥」

咳き込みかけ、真っ赤な顔で鼻に逆流した精液が鼻ちようちんを作ってしまったながらも、一滴残らず飲み下してくれる。

「えほっ、けほっ……ふう、ふう……♥ いかがでしたか、先生♥」

「どつても上手だったよ。さすがは大和撫子志望のミモリだね」

ティッシュを差し出すと、ミモリはベトベトになった鼻と口元を拭いた。それでもまだ唇が艶めいて見える。

「さあ、次は私がミモリを気持ちよくする番だよ。寝そべって、脚を開いて」

「はい……♥ よろしくお願いします、先生♥」

通勤前の朝は静かで、しゆる、しゆる、と衣擦れの音がよく聞こえる。

私のベッドに裸のミモリが仰向けに横たわり、その白くスラリとした太ももを広げてマンコを突き出すように股を開いた。

むつと愛液の臭いが部屋に放散する。ミモリは股間の匂いさえ上品で嫌味がなかった。

芸術的なほどに滑らかで美しい太ももの内側に手を置き、だんだんと中心へ滑らせる。

「ああ……♥」

どこか鼻にかかった、泣き声にも近い歓喜の呟き。その期待に応えるべく、ふつくらと柔らかく膣を覆うミモリの外陰唇の、ピタリと閉じた割れ目に中指で侵入する。

トロトロに濡れた膣に、簡単に指が沈んでいく。

「あ、ん、はああ……♥」

美しい調べのように響くミモリの善がり声をBGMに、ちゅぷちゅぷと水音を立てて指を前後させる。

ミモリの中はザラリとして抵抗があり、粒のような感触がまとわりついてくる。指一本でこれなら、チンポを突っ込んだらどれほど気持ちが良いかと想像させる名器だった。

「ミモリはマンコの中まで優等生みたいだね。……でも良いの？ お

嫁さんになる前にこんな体験をしちゃって」

そう言いながらも手を休めることはなく、健気に指に吸い付いてくるミモリのマンコをほじり続ける。

「そんないじわる、言わないでください♥ 先生が、エッチなハグをしてくださるから……もつと凄いいことが起きちゃうかもつて期待していたんです……♥」

「そっか。それじゃあ期待に答えてとつても凄いい初体験をプレゼントしなくちゃね」

幸いサボったことで時間があるため、じつくりと最高の初体験をさせてあげる準備をすることが出来る。

処女膜の手前から入り口までを往復し、ミモリの膣がもつともつとと強請るように膣口を広げた所に薬指を追加で挿入する。

指先の感覚で、ミモリのGスポットを探り当て、ぐっじゅ、ぐっじゅ、と更に力強く責め立てた。

「あっ♥ あああっ♥ あーっ♥♥」  
まるで琴を爪弾くように、強く弱く、ミモリが意のままに甘い声を上げる。

鍛えられて肉体のラインが美しい腰をぐん、と持ち上げて、恥骨と内腿の筋肉が作る陰影が私の目を楽しました。

「さ、そろそろ一回イこうね。いくときはいくつて言うのがお作法だよ」

「は、はいイッ♥ が、がんばり、ましゅ♥」

ぐっ、ぐっ、と指圧のようにより強く重点的に刺激し、膣イキ初心者のミモリに女の悦びを丁寧に教え込む。

「あっ♥ すごいっ♥ すごいのっ♥ きますっ♥ あっ♥ イクッ♥ イクイク、イ♥♥、っぐうううう♥♥♥」

ぷしや、と盛大に潮を吹いてミモリが絶頂する。

全身全霊での絶頂に、ミモリの腹筋や内腿の筋肉がピクピクと痙攣し、快樂のほどを教えてくれた。

「はーっ♥ はーっ♥」

ぐったりと大股開きでへばってしまったミモリを前に、手に付いた

潮をベロベロと舐めながらチンポをフルボツキさせて覆いかぶさった。

「とつても上手にイけたね、ミモリ。じゃあ……次はセックスだね」  
処女の潮吹きを浴びて、我慢汗が滴る程に勃起したチンポがミモリのずぶ濡れマンコに突きつけられる。

朦朧としたミモリが復帰するのを、入り口を亀頭で黽つてしばし待つ。

「ああ……♥先生のぐい立派な魔羅棒が、私の中に……♥」

ミモリは美しい空色の瞳を発情の光で淫らに輝かせ、艶めかしくヨダレに濡れた唇でごく自然に卑猥な口上を奏でた。

「先生の魔羅棒を、はしたないミモリにお恵みください……♥ミモリに、先生の赤ちゃん産ませてください♥」

大和撫子、素敵なお嫁さんを目指す女の子が、途中を全て抜かして先にお母さんになることを受け入れ、晴れやかな笑顔で処女の腰を突き出してくる。

つぷり、と先端が埋まり、完全合意の婚前性交渉が始まった。

ぷちん、とあっけなく処女膜を突き破り、ミモリの最奥にたどり着く。

「あーっ♥」

奥底まで貫かれ、処女だった身で歓喜の声を上げるミモリは、既にセックスを楽しむ事を理解してくれているようだった。

「その調子だよ、ミモリ。素敵なお嫁さんなら、セックスを目一杯楽しまないとね」

ぎち、ぎちと握りしめるような締付けのミモリの処女膣を味わいながら、陶然としているミモリに声をかける。

「楽しむ……ですか？」

鼻息も荒く、結合部から目が離せない様子のミモリの頭を優しくなでた。

「好きな人同士が仲を深め合う行為だからね。ミモリも積極的に楽しんでくれたら嬉しいな」

そう言うと、ミモリはゆるゆると顔をあげ、どこか焦点の合わない

瞳で私を見つめた。

「楽しい……私、今とっても楽しいです……♥ 体の奥に、全身に、先生をととても身近に感じて……いつまでもこうしていたい……♥」

とても健気なミモリに感動し、そのほっそりした腰の奥、子宮を捉えているチンポをぐんと反り返らせる。

「んんっ♥」

我慢汁が溢れ、清らかなミモリの子宮に染み込み、含まれた精子が新しい命を芽吹かせようと少女の奥深くへ泳ぎだした。

「うん。ミモリなら、今すぐにもとつても素敵なお嫁さんになれそうだね」

「先生のお嫁さんになったつもりで、たっぷりセックスを楽しみますね♥」

ニツコリと微笑むミモリにのしかかってキスをする。

「あむっ……♥ ちゅ……♥」

私が舌を入れるまでもなく、ミモリの方から唇を吸い、舌を入れて来た。ねっとり、ゆったりと舌の粘膜を確かめ合うように絡める。

腰を真上に上げると、新鮮な膣が吸い付いて膣口がひよつとこのように外に伸びているのが感触で分かる。

ぬろろろ、とゆっくり引き上げる間中、ざらりと摩擦の強い膣壁がツブツブの刺激も加えて全方位から射精を促してくる。

亀頭が抜けかかるまで引き上げて、いきなり腰を真下に打ち付ける。

ばちゅん！ と濡れた手で拍手するような音を響かせ、衝撃がミモリの贅肉の少ない腹にかすかな波を立てた。

それを、何度も繰り返す。

ぬろろろ、ばちゅん！ ぬろろろ、ばちゅん！

「うゝんっ♥ んゝもっ♥ おゝっ♥」

機械的に、ただただ繰り返す。そのたびにミモリの膣は熟れ、愛液のぬめりは増し、鼻息も荒くなった。

体重を掛けている華奢な女の子の体はじつとりと汗をかき、甘酸っぱい匂いを私の部屋に染み込ませていく。

愛撫するまでもなく硬くシコっていく乳首が胸板に擦れてくすぐったく、もつと強く抱きしめて清らかに汗でヌメる少女の体を堪能する。

唇を重ねたミモリの顔は私の眼の前にあるが、ほとんど白目をむいて鼻息も荒い。

抱きしめた身体からは心臓がバクンバクンと早鐘を打つのが伝わり、今にも本気絶頂しそうなことがつぶさに伝わる。

一切の雑念なく、ミモリはセックスに夢中になっていた。

ならば、もつと楽しませてあげるのが処女をもらった男の義務というものだ。

繰り返したピストンを更に激しく素早くし、ミモリを追い込んでいく。

「お、ーっっっ♥ん、ぐううううう♥♥♥♥」

ギユウウ、とミモリが私を抱きしめ、背中に爪を立てる。その痛みさえ愛おしく感じながら、ミモリの処女子宮に精液を注ぎ込んだ。

「ん、ーっっっっ♥♥♥♥♥♥」

どくん、どくんとチンポが脈打ち、清らかにセックスを楽しむミモリの奥深くに男の味を教え込む。

脈打つのに合わせてミモリの膺は別の生き物のようになねり精液を一滴残らず絞り出し、生殖欲を貪欲に満たそうと子宮を震わせて子種を啜る。

ちゆる、と唇を離しても、ミモリは呆けたように口を半開きにしたままでマンコの感覚にただひたすら集中しているようだった。

「ああ……♥幸せ……♥」

うっとり、と、濃密に女を感じさせる艶めかしさでミモリが眩く。

「先生……♥もつともつと、お情けをください……♥ミモリのおマンコ、先生の魔羅でグチャグチャにして……♥」

ほとんど夢を見ているようなかすれ声で、セックスしたいという意志だけは疑いようもなくハッキリと、ミモリがおねだりしてくる。

「ああ。今日はもう、1日サボっちゃおうか」

「はい……♥学校をサボって、ずーっと先生と子作りセックスし



ていたいです♥」

背中をねつとりと撫でられ、痛みで顔をしかめる。

ミモリはそれを見て、毒々しいほどに紅い舌で少女らしさの残る桃色の唇をベロリと舌なめずりする。

日が登りつつある外では、少女たちの登校で賑わいが出てきていた。

その明るい日差しが差し込む部屋に濃密な性臭を籠もらせて、肉欲に爛れた1日をミモリと2人で迎えるのだった。

「ふふふ、いかがでしょう？ みなさんの心が読める私を、果たしてみなさんは倒せるでしょうか！」

百鬼夜行中に生中継されている一大イベントの最中、ミモリが私と忍術研究部の前に立ちはだかる。

「じゃあ、次は私！」

読心術使いという、分かるような分からないような役で出てきたミモリに何を言われるか、ちよつと面白がりながら前に出る。

すると、

「せ、先生、そんな事をお考えに……♥」

皆の前ではいけない雌の顔をチラリと覗かせて、ミモリが赤面する。

「……え？」

「そ、それはその……い、今はいけません！」

キリツ、とセックスが大好きなミモリが公衆の面前で『不適切な関係』を臭わせてくる。

「先生、いったい何を考えているんですか」

小柄ながらもこもことした毛量の多い長髪のイロハが、呆れたような目でこちらを見てくる。

「何か色々誤解されてる気配……」

むしろ誤解どころか過小評価されている気配でしか無いが、流石に生中継でバラすわけには行かない。

嗜めるようにミモリを見ると、修行部の優しい副部長の仮面の下で、チラリと舌を出し、

(き・せ・い・じ・じ・つ・つ♥)

「ちゅっ♥」

唇だけで伝えた後、私以外の誰にも見られていないタイミングで指を輪っかにして口の前にかざし、みっともないひよつとこ顔になって見せる。

「なるほど、こうして内部分裂を引き起こすというのが狙い……!?」

「読心術師、強敵ですね……!」

叫んだせいで私を見ていた皆は、何もなかったかのように話を先に進めていく。

ほっと安心の溜息を密かに吐き、

(あとでお仕置きだよ)

(ありがとうございます♥)

私とミモリはセックスの予定を入れるのだった。

## 休憩スペースの正しい用途（イロハ）

仕事でゲヘナに寄る用事が出来たので、出張に来ていた。

「……うん。この内容で問題ない。お疲れ様、先生」

「ではお帰りはあちらです」

風紀委員とのやり取りを終えて、お互いに書類の写しを確認する。

「アコ、失礼でしょう」

「あらすみませんヒナ委員長、つい本音が漏れてしまいました」

ヒナの私に対する態度に親密さが滲んでいるのを危ぶんだアコが、とにかく私を遠ざけようとする。

「全く……まあ先生も忙しいだろうし、仕方ないか。せめて部屋の外までは送っていく」

「ありがとう、ヒナ。全然気にしてないから大丈夫だよ」

ゆつたりと、ヒナと並んで歩いて行く。

「むうう……なんですかその余裕は……」

アコは不満顔だが、大人しくヒナの後ろに付いて私を見送ってくれた。

「それじゃ、先生。……またね」

向かい合ったヒナはアコが控えているのとは逆の方の手を、腰の辺りで小さく振って送ってくれた。

チンポがイライラしたが、アコはセフレではないのでヒナに頼むわけにもいかず、そのまま笑って別れることにした。

次の仕事までは少し時間があるので、ゲヘナ校内をぶらぶらする。

ゲヘナ生にもずいぶんセフレが増えてきた……が、忙しい子と学校に居そうにない子ばかりなので会いに行けるわけでもない。

ふと、イロハのことを思い出して会いに行くことにした。

「うおおおっ！」

「なめるんじゃねえー！」

するといきなり怒号とともに火器の破裂音が聞こえてきた。

音源を確認し、決して射線に身をさらさないように遮蔽物に沿って

進む。

「主砲発射！」

壁から顔を出しかけたところに爆風で舞った土埃がやってきた。ツバとともに吐き出しつつ、音の方を見ると……

「私、振りじゃないって言いましたよね？ それを分かかっててこういう事をしたわけですよね？」

「ひっ、すみませんでした戦車長！ だ、だからもうごかんべ」

「主砲発射！」

イロハが、銃器を使って喧嘩したと思しき万魔殿部員に対し主砲を発射を命じる。

どっかんどっかんと部員のいた辺りが爆発し、煙が晴れた後には尻を上にしたあられもない姿の部員が転がっていた。

ちよつとオシッコが漏れたのか湿っているショーツが見えてしまい、チンポがイラツとする。

「むっ、誰ですか！」

壁から顔を出していたのが気取られたのか、ギュラギュラと虎丸の砲塔が回転し、主砲が私の方を向く。

「わーっ！ 待って待って、ただの通りすがりだから！」

両手を上げて声を出しながらゆっくり出ていく。鋭い眼光でこちらを見ていたイロハが、ふつと力を抜いたのを感じた。

「ああ……先生ですか。ふう、やれやれ……とんだ所を見られてしまいましたね。ほら、あなた達。さっさと立ちなさい。罰として掃除と虎丸の整備をしておくように」

「は、はい……」「わかりましたあ……」

煤と土埃にまみれた太ももをピクピクさせる部員に指示をして、のそのそと戦車を降りるイロハ。

そのまま私の方に歩いてくると、ちよつとバツが悪そうにしながらも挨拶してくれた。

「こんにちは、先生。なんですか？ また私が恋しくなって会いに来てくれたんですか？」

にやっ、と笑うイロハにチンポがイラツとする。

「うん、そうだよ。イロハに会いたくなってる」

「……おやおや、本当に誘惑出来てしまいましたか。マコト先輩にはボーナスをせびらないといけませんね」

少し顔を赤くしつつも、そっぽを向いてあるき始めるイロハ。

少し歩くと振り返って、

「どうしたんです、先生。今日も私の休憩スペースでサボっていくんですし？」

歯を見せてにっこり笑った。

せつかくなので遠慮なくお邪魔させて貰い、靴を脱いで休憩スペースの畳に腰を下ろした。

「そうだ、今日はクツキーを持ってたんだ。どうぞ、イロハ」

風紀委員の話し合いが終わったらヒナと少し休憩でもと思ったのだが、そういう流れではなかったので出す機会もなかった。

「ふうん……ま、いい心がけです。じゃあ私もお茶をあげましょう。ペットボトルですけど」

早くも裸足のイロハは四つん這いになって冷蔵庫を開けるとお茶のペットボトルを取り出し、投げてよこした。

四つん這いのイロハの薄いお尻がタイトスカートをピンと張り、下着のラインがうっすらと見えているのでチンポのイライラが増していく。

「おっ、これ有名店のやつじゃないですか。さすが先生は良いもの食べてますね。あむ……」

開いた窓からは明るい日差しが差し込み、遠くから生徒の喧騒や銃声が届く。

のんびりとしたゲヘナの昼下がりがだった。

学校生活のことや、イロハの交友関係のこと、シャーレの仕事の事なんかをとりとめもなく話した。

イロハはすっかりくつろいで女の子座りになっており、脚の間に付いた手をどけたらショーツが見えてしまう角度でもまるで気にした様子もない。

「ふー……美味しいクツキーを食べてたら眠くなってきました……」

イロハは私に足を向けたまま、座布団を二つ折りにしたものを枕に、脱いだジャケットを掛け布団にして無防備に寝そべる。

チンポのイライラが限界に近づこうとしていた。

「じゃあ私もお昼寝しようかな」

「ふふっ、どうぞどうぞ……」

殊更に甘く優しく、イロハが私を誘う。その体にピッタリと寄り添い寝そべった。

「ちよ……ちよっと、近くありません？」

「せっかくイロハと一緒に昼寝だから、添い寝しようと思って」

ふいっと顔を逸らすイロハ。

「何がせっかくなんだから全然わかりませんが……まあ、したいならすれば良いんじゃないですか？」

お許しが出たので、イロハの首の後ろに腕を入れる。

「わっ、な、なんですか!?! いきなり腕枕なんて」

「座布団だと首を痛くしそうだったから……」

「そ……そうですか。お気遣い、どうも……うふふっ。先生、どれだけ私が好きなんですか？ もうすっかり籠絡できちゃってますね」

「そうかもねえ……イロハはとっても可愛くてお色気があるからね」

だからもうチンポのイライラが臨界点に達しようとしている。

「そうでしょう、そうでしょう……少なくとも……」

イロハが私の方に寝返りをうって、胸を掴んできた。

「風紀委員のために用意したクツキーを、私にあげちゃうくらいには……ね？」

「おや、知ってたの？」

「ふん……先生を誘惑するのは私の仕事なので。ゲヘナに来る用事位は把握していますよ」

きゅっど掴んでくる手を離さずに、少し口をへの字にするイロハ。

「やきもち妬いてくれるんだ。可愛いね、イロハは」

「は？ そんなことはしていませんが？ 私はただ、私のために用意されたクツキーじゃないのが腹立たしいだけです」

自分から腕の中に収まってくれたイロハを抱きしめる。

「あつ……」

「イロハに会いに来たのは本当だよ」

「それも風紀委員のついでじゃありませんか？」

「そんなことないよ。……と、言っても始まらないね」

言葉に嘘はない。もちろん、私はイロハとセックスするためにここに来た。

初めて休憩スペースに来てから、もう何度かお邪魔している。

シャーレに来たイロハの世話のついでにふわふわの髪を触らせて貰えるよう親密な仲になった。

「それなら証明……んむう!? んっ♥」

ニヤリと何かふっかけようとしたイロハの唇を塞ぐ。

イロハはその小さな体を私の腕の中でこわばらせたが、結局は胸ぐらを掴んだ手をより強く握っただけだった。

イロハはアメジスト色の瞳を見開いて眉を寄せて私を睨むが、薄い唇をちゅぱちゅぱ吸いながらじっと目を合わせると先にイロハの方からそつと瞼を閉じてしまった。

「ん……ふう……♥ ふーっ……♥」

いつも落ち着いているからといって、経験のないことを上手に出来るわけではない。

カチカチに固まったままされるがままに唇を貪られるイロハは、くすぐったいほどに鼻息を荒くして顔を紅潮させていた。

ワインレッドのネクタイをするりと解き、ボタンを一つずつ外していくと、ますます顔を赤くしてギョツと顔をしわくちやにして耐えている。

制服の下のそっけないシャツをめくると、艶やかなレースブラが姿を表した。イロハの髪と同じ色調で揃えたらしい赤いブラジャーだ。

イロハの見せないおしゃれにほっこりしながら、スカートのジツパーに手をかける。

「んんーっー」

私の胸ぐらを掴む手がシャツをちぎりそうなくらいに握られ、イロハの脚がピンと伸びる。

脱がせやすくしてくれたイロハに甘えて、タイトスカートと膝辺りまで素早く下ろしてしまう。

イロハの薄ピンクのリップクリームで彩られた唇からそっと離れた。

「イロハっておしゃれなんだね。こういう所も美人さんだなあ」

「せ、せ、先生……！ 本当に、スるつもりなんですか……?!」

「可愛いイロハに誘惑されたから我慢できなくなってる」

「いや、それは……！ 誘惑って言ってもここまでやるつもりなんて、あるわけないじゃないですか!?!」

「でもちゃんと準備してくれてたよね?」

スカートが膝を拘束し、上もほとんど脱がされてあられもない格好をさせられたイロハが、涙目で睨んでくる。

見たことのない表情にチンポのイライラが更に高まる。

私はズボンとパンツを下ろし、ガチガチに勃起したチンポをイロハの細い脚の間につきいれた。

「わああっ!?! あ、あつい! あついですって先生!?!」

肩を竦ませて私に抗議するが、胸ぐらを掴んだ手を離す様子はないイロハ。

そんな半裸のイロハを抱き寄せ、綺麗なショーツに我慢汁で濡れたチンポをこすりつけ、素股を開始する。

「んっ♥ な、なにを擦りつけてるんです♥」

クリトリスの辺りに強くこすりつけると、イロハの声が上ずった。クイクイと腰を小刻みに動かしてイロハが快感で朦朧とするのをじつくり待つ。

「ちよつと♥ やめっ♥ それっ♥ びりびりって♥」

股間に気を取られた隙にシャツを脱がし、ブラのホックを外す。

小さく可愛らしい乳首は、色素の薄い綺麗なピンク色をしていた。

「綺麗だよ、イロハ」

乳首を指の腹でくすぐるように愛撫する。

「ああ♥ 乳首も♥ どうじにされたらあ♥ おかしくなる♥」

戸惑いと共に初めての快楽に浸かり、ジワジワと染まっていくイロ



ハ。

気持ちよさに私を掴んでいた手が緩んだのを確認し、さつとイロハのシヨーツを脱ぎ去る。

そのまま素股を続行した。薄めの大陰唇がその内に隠れた粘膜の存在をハッキリと伝えてくると、にちにちと粘質な音も休憩スペースに響いた。

「あついつ ♡ せんせいの、あついつ ♡」

イロハは潤んだ瞳で私を見上げ、大きく開けた口からはよだれを垂らして快楽に飲み込まれている。

「本当に綺麗だ、イロハ。そろそろ一回イツちゃおうか」

ぐん、と腰を強めに押し付けてクリトリスを押しつぶし、両の乳首を指先でピンピン弾いて刺激する。

「ん、いいいいいい ♡」

イロハが歯を食いしばって眉を寄せ、全身を痙攣させて絶頂する。しばらくするとくっつたりと脱力し、私から手を離してぜえぜえと肩で息をしていた。

「じゃあ、イロハの初めてをもらうね」

「ほ、本当にやるつもりですか……!? この、淫行教師…… ♡ あ、あとでぜったい、万魔殿に協力を……」

「イロハがたつぶり気持ちよくなったのが可愛かったから協力します、って皆の前で言っただい？」

「ううーっ ♡ ひきようですよ、せんせい ♡」

素股をしていたチンポは愛液でヌルヌルになり、仰向けにしたイロハの脚を掴んでみると抵抗なく開いていく。

「これからもいっばい、2人でこうやってサボろうね」

「まったく……とんだ淫行教師に好かれてしまったものですね。まあ、いっばいサボれるなら……いいですよ ♡」

作り物めいて小さいイロハの膣穴に、チンポをねじ込んでいく。

「つぐ……入るんですか、こんなの……おっきすぎ…… ♡」

イロハの細い膝を畳に押し付けるようにして尻を浮かせ、斜め上から押しつぶすように腰を進める。

十分な汗気はあるが、まだ少し準備が足りないと判断した私は、親指でクリトリスをそつと刺激した。

「あああつ♥ だから、そこはあ……♥ 弱いんですつ♥ つてえ……♥」

頭の下に敷いている二つ折りにした座布団を掴み、細い胸を張ってイロハがのけぞる。

小刻みに腰を振って、愛液の滑りを頼りにジワジワとイロハの小さな膣を征服し、ついに亀頭が全て埋まった。

「はいって……♥ 先生が、私にはいつちやってます……♥」

小さなお尻を両手で掴み、竿をねじ込んでいく。ぷつりと平均的な手応えの処女膜を破り、子宮口にキス出来る深さまで侵入した。

「はーっ♥ はーっ♥」

イロハはまだのけぞって、荒い息を吐いて必死にチンポの刺激に耐えている。

好みのやり方でクリトリスをいじって、辛さを軽減してあげた。

「やめっ♥ それっ♥ びくびくっ♥ しちゃうからあ……♥」

クリトリスをほんの少し強めに押し込むたびに、イロハの膣はきゅつと締まる。

腰を動かさずにその感触を楽しんでいると、

「うゝうう♥ あゝうううう……♥♥」

なにもしなくても断続的に膣が締まる。クリと膣の刺激で、イロハは絶頂を迎えたようだった。

「はあーっ♥ ふうーっ♥ ぐうう……さつきから、ずるくないですか、先生?」

何回かの絶頂を迎えて顔を真赤にしたイロハに、涙目で睨まれる。

「ずるいつて?」

「先生ばかりエッチなことが上手で……私は、先生を振り回すほうが楽しいのに」

「それなら、頑張ってエッチな事を上達してみるのが良いんじゃないかな」

絶頂したてのイロハの裸体を見下ろし、結合部を見る。

愛液でしつとりと濡れた股間には、薄くもしつかりと陰毛が生え揃っていた。

小柄ながら、イロハはセックスでちゃんと気持ちよくなれるフロイラインなのだ実感し、チンポが硬くなる。

「んっ♥ 何を考えてるんですか、いきなり中で跳ねさせて……♥」

「イロハは可愛いなあって再確認したんだよ。さあ、そろそろ動いても大丈夫かな？」

ぱつかりと開いた太ももに手を置き、ついにピストン運動を開始する。

「うひいっ♥ まって、それ、私のお腹のなか、引きずりだされるっ♥」

「大丈夫大丈夫、力を抜いて楽しんでみてね」

腰を引くと、私の力りにイロハの膣肉が引きずり出されて膣口からちらりと内側の粘膜が裏返っている。

イロハの体格と比べると長い私のチンポが、ズルズルと引きずり出され続ける。

「あがっ♥ うぞっ♥ もうっ♥ あうううーっ♥♥」

たったの一度チンポを引いただけで、イロハがまた絶頂する。

イッた膣の締めまりが恋しくて、抜けかけたチンポをまた奥まで押し込んだ。

「っっ♥ お……♥」

敏感な所に追い打ちをかけられて、息も出来ないくらいに再度絶頂するイロハ。

畳に身体をこすりつけるのも厭わず、折れそうなほどに背中を仰げ反らせる。

すでに股間の下畳はしつとりと濡れてしまっており、カバンからタオルを出してそっと拭い、イロハの腰の下に敷いてあげた。

「イロハがこんなにセックスで気持ちよくなってくれるとは思わなかったよ。もっともっと楽しんでね」

あまり強いのは失神してしまいそうなので、奥の方を揺らすように優しくピストンする。



「それは……まあ……気持ちよかった、ですけど」

「じゃあ良いよねとばかりに、また腰をふりはじめる。」

「ああああ……」  
「だから、お腹の中ひっぱるの、だめですって♥」  
爽やかな風が吹き抜ける休憩スペース、時折金属がこすれる戦車の整備音が響く中、じやれ合うように腰をくつつけ合う。

イロハの細い脚が私の腰に絡みつき、抱き寄せて来た。

ずっぽりと根本までチンポがねじ込まれる。

「んっ♥ ほら、先生はこういうのが良いんでしょう……？」

イロハは歯を見せてにやつと笑いながら、一番奥の子宮口に亀頭をこすりつけるように腰を揺らめかせる。

早くも積極的に楽しみだしたイロハに感無量になり、金玉でぐんぐん精子が作られ始めるのを感じる。

「ほら♥ ほら♥ 私ばかり変な声出すなんて不公平ですからね、先生も遠慮なく悶えてくれていいですよ♥」

「どうやら奥の方はそんなに敏感ではないのか、大胆に腰をグラインドさせて亀頭をもみくちやにしてくれる。」

「うん、とつても上手だよ、イロハ」

汗に濡れたイロハの頭をそつと撫でると、むつとへの字口で膣を締めてきた。

「そういうのは良いですから、もつと変顔して悶絶してください、っ♥」

腰の振り方で良いところに当たったのか、膣をびくんと痙攣させた。だが、感じているのを隠そうとイロハは責め続けた。

「もう、面倒ですね……先生、下になつてくれませんか？」

「おつ、上に乗ってくれるの？ どうぞ」

イロハの背を抱き起こし、体を入れ替えて私が仰向けになり、イロハに跨がられる。

「おお……良い眺めですね。戦車に乗ってるみたいでこっちのほうが楽しいです。うり♥ うり♥」

「おい、おいと腰を前後にゆするイロハだが、腰の下の手で頑張つて身体を支えていた。」

「ほら、イロハ。もつと奥まで入れてくれないと」

その手首を掴んで、そつと外に反らす。

「えっ？ つぎ♥ お、ぐ……♥ おなかの、なか♥ 持ち上がっ  
ちやっただじやないですか……♥」

小柄なイロハの腹の中に、私のチンポが全て収まる。へそを超えて到達している長さのチンポから、イロハの膣をみっちり伸ばしている感触が伝わってくる。

「き、きもち良さそうですね、先生♥ ほら、もつと……私の身体で、悶えていいですよ……♥」

苦しそうになりながらも、イロハは腰を振ろうとするが……目に見えて遅くなっている。

「んっ♥ これ♥ 深すぎっ♥」

みっちり伸ばされた膣肉から快感を得てしまっているのか、あるいは根本まで啜えこんだことで入り口近くが刺激されてしまったのか、イロハの声がどんどん甘くなる。

「はっ♥ はっ♥ はっ♥」

後ろに倒れそうになりながらも、私の膝に手をつけて自分のペースで腰を使い始めるイロハ。

その顔はもう天井しか見ておらず、チンポの快樂が頭まで回ってしまつたようだった。

「あー……♥ ん、んうううーっ♥」

イロハだけの休憩スペースで、のびのびと騎乗位セックスを楽しむ。

へこへこと小刻みにゆれるイロハの腰が、明るい日差しに照らされて美しく陰影を変化させる。

とろりと唇の端からよだれが垂れた時、イロハが足の指をギュツと丸めて腰を浮かせた。

「んっぐ♥」

とても地味で、自分本位のオナニーのような膣イキを決めるイロハに興奮し、2回めの射精を叩き込む。

「あー……♥♥♥」

快楽に浸りきったイロハが、どくどくと脈打つチンポから溢れ出る  
精液をだらしのない顔ですべて受け入れてくれた。

「あー………だる」

着衣を整えたイロハは、大の字に寝そべって顔をしかめた。

「ほら、イロハ。避妊薬だからお茶で飲んでおいてね」

「はいはい、用意の良いことで……ごっくつ……」

イロハはガリガリと頭をかきながら体を起こし、受け取った薬を飲み込む。

「イロハ」

「なんです？ すっかり臭くなった私の休憩スペースを掃除してくれるんですか？」

「それもするけど。またこうやって2人でサボろうね」

「………仕方ないですから付き合っただけですよ」

そっぽを向いて、甘い声で答えてくれるイロハだった。

## 糖分摂取は疲れに効く（シズコ）

——はー、先生……

——あ、いえ、やっぱりなんでもないです。

そんなモモトークがあつたので、仕事のだがシズコの所に飛んできた。

付いた頃には昼下がりと言った時間で、シズコも忙しく接客している。

「や、シズコ」

とりあえずあんみつを頼んで待つと、シズコが運んできてくれた。

「はいっ、こちらあんみつお待ちどっ!? せ、せんせいっ!」

ぎよつと目を見開いて驚くシズコ。

「わっ、わわっ」

そのまま盆に載せたあんみつをガタガタと揺らしてお手玉する。最終的にこぼすこともなく着地したのを見て、拍手してしまった。

「芸じゃありませんっ。それより先生、もしかしなくても、さっきのを見て来ちゃいました?」

「うん、心配になって」

そう言うと、シズコは顔を赤らめてお盆で鼻から下を隠した。

「ううー……すみません、そんなつもりはなかったんですが。……今はお店なので、後でその……相談に乗っていただけますか?」

「うん。もちろん。じゃあ食べたら閉店頃にまた来るね」

頑張り屋のシズコがわざわざ相談を持ちかける位のこととは何なのか、考えながらあんみつを食べるのだった。

百鬼夜行方面の仕事をついでにこなし、また百夜堂に来た。

「あ、先生……なんか、すみません、ご足労いただいて……」

「いいんだよ、シズコのためだからね」

「うう……せんせえ……」

早くもウルウルと感激した風のシズコの手を握って、客席に隣同士座って話を聴き始めた。



「こないだ出した新作スイーツが酷評されてえ……ぐやっじいん  
ですっうー！」

そう言えばそんな話を聞いたこともあった。いつの世もマニアの  
審査は厳しい。

「まあまあ……百夜堂のお菓子が美味しいことは私もよく知ってるか  
らさ」

「だってえ……『百夜堂にしては期待はずれ』とか『普通に美味しいけ  
ど百夜堂で出す価値ある?』とかあー！」

シズコは拳を握ってワナワナと震わせていた。よほど悔しかった  
のだろう、ギリツ、と歯ぎしりの音も聞こえる。

「それはほら、期待の現れだから……美味しいとは言ってもらえてる  
わけだし」

「それじゃダメなんですっ！ 百夜堂でもっと儲けて、より良いお祭  
りをするのが私の使命なのに……！」

いつも通りに一生懸命なシズコだったが……今回は辛さのほうか  
まさるらしい。

「でも、本当にこのままやっていけるのかって……百夜堂の人気を、私  
の代で落としてしまうんじゃないかって……不安で……」

そう言つて、俯いてしまった。

「大丈夫。シズコはとつても一生懸命なもの。きっと次の新メニュー  
は成功するよ」

私は隣に座るシズコを抱き寄せ、背中を優しくさすった。

「あつ……せ、先生……♥」

すこし身体をこわばらせたシズコが、おずおずと私を抱き返してく  
る。

和洋折衷の制服に包まれた柔らかな身体がぎゅつと密着し、私のチ  
ンポをイライラさせる。

「シズコは色んな仕事をとても良くやってるし、お祭りにも、お菓子の  
開発にも誰にも負けない情熱を持ってる。だから、いま評判が悪かつ  
たとしても次は大丈夫。絶対にね」

「すんっ……うっ……もっ……っといっ……つてください」

私の胸に顔を埋めて、鼻声でリクエストするシズコ。

そのままシズコの気が済むまで、沢山褒めて頭や背中を優しく撫で続けた。

「はーっ……♡ そうですよねえ、私は可愛くて有能な至高の看板娘ですよねえ……♡ あゝ あ……クセになりそう♡」

いつの間にかシズコは泣き止み、うつとりと私の胸に頬ずりしている。

その手は私の背中の後ろでガッチリとホールドされ、身体中を擦り付けるような勢いでゆらゆら動いていた。

「えへへ……先生、本当にありがとうございます。最高に元気出てきました」

私のチンポも最高にイライラしていた。

「やっぱり私、先生のこと……大好き♡ ぎゅーっ♡」

シズコが私の脚をまたぎ、正面からがばっと抱きついてくる。そして……

「あっ……♡ あの、先生……？ ここ……カタく、なっちやってますか……？」

チンポに下腹部を押し当てた形になったシズコに悟られてしまう。

シズコはそのまま目をぐるぐるさせて赤面してしまった。

「ええと、その……先生！ これって、私が身体をグイグイくつつけたから……ですよ？」

緩く握った手を口元に、キラキラ輝く瞳で上目遣いに見つめられる。

「まあ……そうだね」

幾重もの布を隔てて、シズコは股間を私のチンポに押し付けてきた。

対面座位のように私と向かい合って腰を下ろし、上半身も完全に体重を預けるように密着させてくる。

「わ、私……責任、取りたいです。先生の……お……お……」

アヒルのように唇を突き出して、ソレの名前を言おうとするシズコを抱きしめ、唇を奪った。

「んっ♥」

唇を軽く吸って離れると、ぷるんと柔らかく弾んだ。

「今からすることは……とつても可愛いシズコに我慢できなくなつて私が襲っただけだから」

「先生……♥」

みなまで言わず、シズコがそつと目を閉じて唇を少しかたくする。

キス待ち顔のシズコに遠慮なくキスをし、その可愛らしい唇を舌で割って口内を蹂躪した。

「んっ♥ ぴちゃ、ちゆるっ♥ れう……♥」

営業時間が終わり店員もいなくなつた百夜堂に、看板娘が貪るようにキスをする水音が響く。

シズコは私の首に手を回し、顔ごと迫ってくるように自分から身を乗り出してキスをしていた。

2人の唾液を混ぜ合わせ、フェラのように吸い付きながら私の舌にねつとりと自分の舌を絡めてくる。

シズコの長い舌が私の口内に侵入し、拙いながらも情熱的な口淫に酔いしれた。

愛情を感じる処女のキス奉仕にチンポのイライラが更に高まり、まずはシズコのガンベルトを外し、銃を床に置いておく。

私の行動を悟つたシズコが、キスを続けながらエプロンの帯を解いてくれる。摘んで座席の脇にパサリと落とし、スカートのホックも外してしまう。

その間、私はシズコに身を任せてタイプキスをしているだけだ。さすが接客業のプロだけあって処女でも奉仕精神に溢れている。

ピンクの上着を開くと、サラシ……のように見えるチューブトップの服が出てくる。

シズコがもどかしげに脱ぎ去り、ヌーブラをペリペリと躊躇なく剥がすと、ふつくらと半勃起した乳首が顔を出した。

苦労ようにそつとその胸を撫でると、

「んっ♥」

キスをしたままのシズコは、眉を寄せてくぐもつた甘い声を上げ

る。

シズコの舌で口内を舐め回されながらの喘ぎ声は私の頭の中に直接響くようで心地よい。

もつと聞かせて欲しいと人差し指で乳首を優しく弄び、反応を引き出した。

「んっ♥ あっ♥ んむっ♥ ふううっ♥」

まだスカートを脱いでも居ない、上半身をはだけただけのシズコが指一本でトロトロになっっていく。

キスをしているシズコの瞳を覗き込むと、戸惑いと、それ以上に快楽への期待に潤んでいる。

その期待に応えるべく、不意打ち気味に乳首を2本指できゅつと摘んだ。

「んっ……っ♥♥」

シズコの腰が痙攣し、身体が震える事によってシズコのメイドカチューシャについた鈴飾りがしゅりん、しゅりんと音を立てる。

「はっっ♥ はっっ♥」

ひどく興奮していたのか、シズコは顔も胸元も真っ赤に紅潮していた。

ぐったりと脱力し、私の唇から離れて後ろに倒れ込もうとするのを腰に回した腕で支える。

座った私に正面からまたがっていたシズコを座席に横たわらせ、残っていたスカートをすると下ろす。

女の匂いを濃縮した気体が充滿して蒸れていたスカートの下には、可愛らしい白とピンクの縞パンがあった。

股間に食い込んで浮いたスジには愛液のシミが出来ている。その下着を、くるくると巻きながら下ろしていく。

百夜堂の客席で、上半身をはだけて勃起した乳首を見せ下半身はソックスと下駄だけのシズコが、片足を背もたれに引っ掛けて脚を開いた状態で私のされるがままになっていた。

「ああ……♥ やらしい先生に襲われちゃう……♥」

ニコニコと至福の笑みを浮かべたシズコが、私のために脚をもつと

開いて見せてくれる。

「やっぱりシズコはとっても可愛いね」

合成皮の客席に雌の匂いを濃厚に漂わせる愛液が広がり、店内の照明にテカテカ光っていた。

むあつと甘ったるいシズコの股間の匂いを嗅ぎながら、興奮して外陰唇からはみ出るほど充血した媚肉を舌で舐めあげる。

「ふああっ♡」

店中に響き渡るほど大きな声で、シズコが悶えた。

先程の熱心なキスのお礼にと、シズコの股間を入念にしゃぶつていく。

「ああっ♡ 先生がっ♡ 私のきたないところっ♡ 舐めちゃってるう♡」

「汚くなんか無いよ。ちゃんと裏側まで洗ってるんだね、シズコ」

そう言つて、外陰唇の裏側、入口付近のヒダの裏側の隅々まで舌を這わせた。

「あ、当たり前、ですっ♡ 私、そんな不潔な女の子じゃっ♡ ありませ、ん、ん、っ♡」

抗議もどこか甘ったるく、シズコは腰をカクカクと前後に振つて私の舌を堪能してくれている。

「どう？ 気持ちよくなつてくれるかな、シズコ」

もっとシズコと喋りたくなって、話を振ってみた。

「い、い、いっ♡ きもちい、いですっ♡ 先生、おまた舐めるの、とつても上手ですう♡」

時折クリトリスを音を立てて吸い上げ、小指をつぽつぽと膣に挿入してみて頃合いを見計らっている。

営業中の百夜堂のように、店内にシズコの甘い声が響いていた。違いはシズコ自身が提供される側だというくらいか。

「シズコ……シズコの初めて、もううよ」

「はあ、はあ……♡ もらつて、ください……♡ シズコを美味しく召し上がってください♡」

私に貰われるためにあられもない姿で股を開いて待っていてくれ

るシズコに、取り出したチンポから我慢汁が垂れる。

その欲望に満ちた雫がクリトリスに当たると、ひくっ♥ とシズコの膣口が物欲しげに震えた。

シズコの膝は、白いニーソックスで覆われている。滑らかなその手触りを楽しみながら掴み、股を開く。

しやりん、しやりん、とニーソックスに付いた鈴飾りが涼やかな音を奏で、ぱつくりと開いた膣口を清らかに演出する。

汗気が多いシズコの膣に、私のチンポがズブズブと埋まっていく。程なく、ぐんと膣が狭くなっている所にたどり着き、処女膜を先端に感じた。

「行くよ」

流石にシズコの瞳に不安な光がよぎる。私はシズコの手を取り、両手を恋人握りで胸の前に持ってきた。

ごくり、とシズコの喉がなり、覚悟をすませた様子を見て腰を進める。

みちつ、とねばつくような柔軟性を感じる処女膜を、破った。

「っつ……っ！」

「大丈夫？」

「はいっ……っ……！ だい、じょうぶ、です……っ♥」

強張ってはいるが、にかつと自然な笑みを浮かべて処女喪失を喜ぶシズコ。

「私のはじめて、先生の奪われちゃったあ……っ♥」

にまにまと頬を緩めて、痛みすら愛おしいとばかりに腰を揺らめかせる。

その可愛さに、腰を最後まで突き進めてしまった。

「んっ……っ……っ……っ♥ しえ、しえんしえ、不意打ちは、ずるいっ……っ♥」

「うっ♥」

ずっぽりと腹の底まで貫かれて、シズコが悶絶していた。

一旦シズコを休ませるために腰を止める。

シズコの膣は、全体にふわりと柔らかく包み込むようでありつつ、途中に2箇所締まりのキツイ所のある射精に適した名器のようだった。

た。

「ん……そろそろ大丈夫ですよ、先生。私の身体……たつぷりご賞味ください♥」

うつとりと笑みを浮かべて、シズコが許しを出してくれた。

とはいえ胸の前で握りしめた両手はしつかりと力がこもっている。

柔らかく握り返して安心するよう伝えてあげつつ、ずるりと腰を引いて抜いていく。

「んん……♥ お腹のなかで、先生が動いてます……♥」

シズコは初めての感覚に少し眉をしかめながらも、快感を見出そうとしてくれている。

私も少しでもシズコが気持ちよくなれるように最適な速度と角度を探究していった。

シズコの膣の締まる所に差し掛かると、手コキの指リングが亀頭の力を下から上に抜ける時のような強い射精感がある。

処女ながら貪欲に男を射精に導こうとするシズコの奉仕精神に感じ入りながらも、たつぷりと膣に満たされた愛液で処女とは思えないほどスムーズにピストンを続ける。

ゆさゆさとシズコの身体を揺るように腰を打ち付けあうと、しゃりん、ちりんと透き通った鈴の音が鳴りひびく。

両膝とカチューシャに付いた鈴飾りが、私とシズコの初セックスを生のまま表現する楽曲を奏で、誰もいない百夜堂に淫らな演奏が流れた。

「はっ……♥ はっ……♥ あっ♥ 先生のが、出たり入ったりして……お腹の中、あつくて……♥ だんだん、気持ちよくなってきましたあ……♥」

普段よりねっとりとしたシズコの声が私の腰の動きで途切れ、楽曲に華のあるヴォーカルが交じる。

だんだん激しくなってきた腰の動きに百夜堂の制服の花柄のたもとが揺れ、まるで花が舞うように風雅だった。

「やっぱりシズコはとっても画になるね」

「えへへ……そうでしょう？ 美味しいスイーツには見栄えも大事な

ので♥」

私のピストンで処女膣を突き回されながら、シズコはチンポの快楽で緩んだ笑みを浮かべた。

「えへへっ♥ 先生♥ 私が美味しいと思うなら、好きなだけがつついちやって良いんですよ……♥」

ぐぶ、じゅぶ、と粘っこい音を立て股間から白く粘着く濃い愛液を垂れ流しているシズコは、気負いなくそう言った。

「それじゃあ、隅々まで味わわせてもらおうかな」

私に全力で貪られる事を望むシズコの望み通り、指を解いてシズコの膝裏を握り、折リたたむようにその膝を座面につけさせる。

抜いた状態から力強く腰を打ち付けると、拍手のような音が響いた。

「んゝいゝっ♥」

突然どすんと膣奥を突かれたシズコが悶絶するが、構わずに即座に腰を抜き、また叩きつけるように突きこむ。

ぱんぱんぱん、とりズミカルに打ち付ける音が更に加わり、セックスの楽曲がテンポを上げていく。

「んゝーっ♥ おゝっ♥ うゝっ♥ あゝうゝっ♥」

主役に躍り出たヴォーカルが、チンポに射精を促すビブラートを付けてさらなる熱を帯びる。

昼間、シズコがにこやかに……あるいはドジっ子として慌てて料理を運んでいた席に、シズコの破瓜の血とたっぷりの愛液、本気汁がまぶされる。

スポットライトを浴びる舞台のように、チンポをぐつぷりと啜え込んだ股間の下はテカテカと輝いていた。

「おゝっ♥ おゝっ♥ おゝっ♥」

柔軟に貪欲にセックスを習得して、シズコのよがり声が安定している。

整然とした曲として、性交の終局へと2人を導いていった。

2箇所締め付けがある分、シズコの膣を一番気持ちよく味わえる深いストロークのピストンを続けていた私のチンポは、そろそろ限界



に達しそうだった。

「いくよ、シズコ」

「あゝーっ♥ だしてっ♥ せんせいっ♥ のっ♥ あっつ  
いのっ♥ ほっしっいですっ♥」

泣いているような、鼻にかかった声でシズコが懇願する。

最後の一突きまでカ리를気持ちよく刺激してもらって、一番奥深くに射精した。

「んゝおゝーっ♥♥♥」

美しいほどにビブラートの効いた、華やかな曲のフィナーレ。

後にはただ、照明に照らされた汗だくのシズコから立ち上る甘酸っぱい香りが残った。

たらりと肋骨の丸みに沿って汗の珠が流れていく。

シズコの力ない笑みが、額を流れる汗と頬に張り付いた髪が、処女セックスで充実した子作りをした事をよく教えてくれた。

ぎゅうぎゅうと、絶頂した膣がうねり尿道から精液を絞り上げてくれる。

手抜かりのないシズコのアフターサービスに身を任せ、しばし精液を垂れ流した。

「先生と、赤ちゃん作っちゃいましたね……♥ お粗末様でした……♥」

囁いた睦言は、今までのセックスに劣らず食後のデザートのように甘い。

「本当に、結構なお点前だったよ。初めからこんなにセックスの上手い女の子、そうはいないよ」

「むっ、せっかく浸ってたのに他の女の子の事を言わないでくださいよ」

ぷう、と頬を膨らませて、いつものように藪眺みになった。

「ごめんごめん。ほら、これを飲んでおいて」

そう言って避妊薬を渡す。シズコはぷいっと顔をそむけた。

「……先生が飲ませてくれなきゃ、ヤです」

可愛いわがままに苦笑して、挿入したままシズコを抱き起こした。

対面座位で、ピルをシズコの口に入れて私のペットボトルの水で飲ませて上げる。

「んつく……はーあ。せつかく最高だったのに最後に先生の心無い一言で傷ついちゃったな……」

「ごめんね、シズコ……どうすればいいかな？」

にやつ、と笑ったシズコは、私に軽くキスをする。

「もちろん……私の2杯目♥ たっぷりおかわりしてください♥」

からん、と音がして、シズコの下駄が座席から床に落ちた。

ニーソックスだけになったシズコの脚が私の腰に絡みつき、がつつりとホールドされる。

シズコのぷにっつとむちっつの中間のような太ももが、決して私には外すことの出来ない強度で固定された。

ふと見渡すと、そろそろ日が暮れてガラソとした百夜堂は私達の周り以外は薄暗くなるうとしていた。

「せーんせ♥ お料理を前によそ見しちやいやですよ♥」

完全にスイツチの入ったシズコが、爛々と輝く瞳で私を覗き込むように見つめてくる。

シズコは2人の唾液でテカる唇をねっとり舌なめずりし、

「ん……♥」

可愛らしい、しかし決して逃がさないキス顔でゆっくり迫ってくる。

席についてシズコに品を出された以上、断るという選択肢は私にはない。

結局、暗くなるまで百夜堂の看板スイーツをたらふく味わい尽くすのだった。

持ちつ持たれつ（アカリ）

「はい、先生。こちら記入の終わった書類です」

「お手伝いありがとうございます、アカリ。これから食事でも一緒に行く？

……食べ放題の所に」

書類の束に置かれたアカリの手 私の手が重なる。

いつもならアカリがニヤリと笑ってすぐ出発となる所だが、今日はそうならなかった。

「せ・ん・せ・い？　なんだか最近、ボディタッチが多くないですか？」

アカリの逆の手が私の手の甲を掴み、ゆっくりとつねってくる。

「イタタ……ごめんね？　不快だったなら謝るよ」

「もう……そうじゃありませんっ。どうして、素直におっしゃってくだらないんですか？」

ぷくつと白い頬を膨らませて拗ねるアカリ。

机についた私に近寄り髪が顔にかからないようそつと抑えながら前かがみになると、アカリの制服に包まれたはち切れんばかりの胸が重力に従い下向きにゆっさりと揺れる。

アカリには珍しい無防備な仕草に、チンポがイライラしてしまう。

さらにアカリは婉然と目を細めて、少し頬を赤くして私に顔を寄せてくる。

独特なピンク色の瞳孔が興奮を示すように大きく開いて、目を合わせていると吸い込まれそうだ。

「先生は、いつも私の趣味の大食いに付き合ってください……私も、先生のシたいことに付き合うのが筋というものでしょう？」

そう言っつて、そろそろとアカリの手が私の股間に伸びてくる。

しなやかな手付きで半勃起のチンポを撫でられ、ゾクゾクとした快感が背筋を走った。

「ほら、先生の口から言っつてください♥ 私と……何がしたいのか♥」

アカリの口角は釣り上がり、さも楽しげに私を責めているようではあるが……

瞳孔が開き頬どころか耳まで赤くなっつていて、恥じらっつているのが

ありありと分かった。

「ありがとう、アカリ。じゃあ私とセックスして欲しい」

こんな嬉しいことはないのでさっそく素直に言っただけあげる。

アカリの細い喉がぐくりと動き、固くつばを飲み込んだ。

「……ふふつ。さすが先生は素直ですね。では、えつと……」

動揺を隠してほえみ続けるアカリだが、後が続かない。

私は目の前にあるアカリの唇にキスをした。

「んっ ♡ ……ちゅ……♡」

大食い故にか化粧つ気のないナチュラルな唇を軽く吸い、すぐに離れる。

立ち上がって、アカリの細くくびれた腰を抱いて執務室のソファへと歩き出した。

「あはっ ♡ え、エスコートありがとうございます」

キスされたことで顔が真っ赤なアカリを可愛らしく思いながら抱き寄せると、アカリの大きな横乳がむっちりと当たる。

日頃見事な身体だと思っただけはいたが、触れると思っただけ以上に良い身体をしていた。

「今の先生……なかなか素敵ですよ。ふふつ、思った以上にお得意なんですね……生徒を抱くのが♡」

アカリは緊張で身体を固くしていたが、自ら息を整えて私に身体を預けて胸を押し当てながら私に合わせて歩いてくれる。

ソファに並んで腰を下ろすと下から覗き込むように私を見つめて、クスクスと笑った。

「それで、この後私はどうされちゃうんですか？」

私はまたもアカリにキスをする。潤んだ瞳のアカリと目を合わせていると、そつとまぶたを閉じて私のされるがままになってくれた。

アカリの大きな胸を下から持ち上げるように触れてみた。

「んっ ♡」

触れた瞬間、緊張でアカリの肩が上がる。ふう、ふう、と鼻息が荒くなりくすぐったい。

制服をピチピチにするほどの大きさの乳房が、私の手でゆつくりと

押し上げられる。

それだけで手が沈んでしまいそんな柔らかかさと、確かなハリの反発が心地よい。

しばらくは手を上下させて、唇を貪る。舌を入れてみると、柑橘系の風味がふわりと広がった。どうやら、事前にブレスケアしてきたようだ。

アカリの肩を抱き、安心させるように二の腕の外側を撫でつつ、もう片方の手でやわやわとおっぱいを上下させ続ける。

「ふう♥ふう♥」

アカリはだんだんと身体のこわばりが解け、しっとり汗をかいてきた。むわっと強めの雌の香りに包まれ、チンポのイライラもいよいよ強まってくる。

ちゆるん、と唇を離すと、アカリの口元は2人のよだれでテカテカと光っていた。

顔を真赤にして呆然としたアカリは、いつもの泰然自若とした様子からは想像も出来ないほどに食べ頃の女だった。

私がアカリの服を脱がそうとベルトに手をかけると、ハッと気を取り戻したアカリが自ら外してくれる。

ベルトを私に任せてコートみたいな構造をした服のボタンを外したアカリは、脱ぐ前にポケットからハンカチを取り出し、ベトベトの口を拭ってしまった。

「ん、ああ……すみません。こういうのマナー違反でしょうか？ なんだか口の周りが汚れると気になってしまっただけ」

「いや、構わないよ。アカリはきれい好きなんだね」

最近日差しが強くなった執務室で、抱きながらねつとりとキスしたおかげで、アカリが服を脱いだ瞬間にむわりと匂いが強くなる。

発情した雌の出すむせ返るようなフェロモンに、アカリの身体に顔を突っ込みたくなるがぐつとこらえて脱がせていく。

黒レースのキャミソールに包まれたアカリの乳は、圧倒されるような存在感を放っていた。

腰はコルセットのように張り付いていながら下乳のラインをハッ

キリ出すその服は、アカリの巨乳を拘束して平らに均そうとしているかのようだ。

肋骨に沿って外に広がるようにする乳房が拘束を受け、深い谷間を形成していた。

「うふふ……私の胸、そんなに良いですか？」

甘く囁くようにアカリがそう言っつて、両腕で抱えるように乳房を持ち上げる。

むっちりを持ち上がった肌色が、目に焼き付くほどに眩しかった。

私は、まるで処女雪に飛び込むかのようにアカリの胸に顔を埋める。

「きやつ♥ もう、先生ったら、あかちゃんみたいでちゅねー♥」

そつと、私の首をアカリの両腕が拘束する。ぎゅうう、と抱きしめられてアカリの胸に沈んでいく。

しっとり汗をかいたアカリの谷間は、蒸れてより匂いが濃くなっていた。

その濃さも、先ほどよりも刺激の強いものが混じっているように感じられる。

アカリの胸の間の空気を吸いながら、私はほっそりとした背中に手を回してブラのホックを外した。

ぶるん、と拘束から解き放たれた胸が下に行きスツと顔に感じる温度が下がる。

顔を埋めたままにアカリの乳首の位置に見当をつけて指で触れると、

「あつ♥」

甘い声で正解を教えてくれた。

大きさに見合っつてプツクリと大粒の乳首が、既に固くシコつている。

アカリの腕の拘束がはずれないため見ることが出来ないが、両手でそれぞれの乳首をクニクニと弄んでみた。

「んっ♥ はっ♥ あああんっ♥」

いじるごとに淫らな声を上げて喜んでくれる。しかし、そのたびに

腕に力がこもるため、今や私はアカリの胸骨にキスするような姿勢になっただけだ。

アカリに伝えようと身体を起こそうとしてみたり、横乳をぴたぴたとタップしてみたりしても腕は外れてくれない。

しようがないので、両の乳首を激しくしごき立てて絶頂に追い込んでみる。

「んっく♥ んああああああっ♥♥」

ぎし、と骨が軋む音が私の身体の中から聞こえる。

それほどの力でアカリが私を抱きしめ、絶頂していた。

痛いほど押し付けられたアカリの胸骨の向こう側から、心臓がバクバクと早鐘を打っているのが伝わってくる。

唐突に、腕の力が抜けた。身を起こしてアカリの身体を見ると、天井を仰いで荒く息をしている。

八の字に広がったアカリの胸が興奮で桜色に紅潮し、予想通りに大粒で少し暗い赤茶色の乳首が迫力たっぷりには勃起していた。

ソファに座ってはいるがだらしなく脚が開いてしまっているアカリの股間から、むっと甘酸っぱい匂いが漂っている。

腰のあたりにだけまとわり付いたキャミソールとガーターベルトが覗くタイトスカートだけのアカリが、すっかりセックス準備OKになつて私に食べられるのを待っていた。

アカリの身体を押し倒しながらスカートを脱がせていく。眼の前の美味しそうな乳首を口に含みながら背中を撫でるように背中の方を撫で下ろし、コルセット部分とブラを取り払った。ソファに横たわり、アカリの脚を持ち上げると先ほどの剛力が嘘のように簡単に上がった。

上と同じく黒レースのショーツは、股間が陰唇の形に濡れてテラテラと光っている。

ガーターベルトを外し、ショーツを下ろそうとすると脚がスツと閉じてしまった。

アカリの顔の方を見ると、両手で顔を覆ってしまっている。

膝上まで降ろされたショーツから手を離し、アカリの金の陰毛を優

しく撫でて待っていると観念したのかくつついていた膝が離れていく。

ついに手袋とストッキングだけになったアカリの裸体は彫刻のように見事にメリハリがついている。

その立派さに反して、言葉を発する事もなくもじもじと太ももをくつつけて視線を逃れようとするのがいじらしい。

アカリに膣内射精するべく私も服を脱ぎ、常備しているセックス用タオルケットをアカリのお尻の下に敷いてあげた。

ソファに仰向けに寝転がったアカリの胸は、外に向けて広がりつつも先端に向けた紡錘形を崩してはいない。

胸の頂点のつやつやした大粒のさくらんぼのような乳首にむしゃぶりつく。

「きゃうっ♥」

可愛らしい声を上げて、アカリが顔を覆った指の間から私を見る。

目を合わせながらもちゅうちゅうと吸いたて、開いた脚の間に秘部にそつと触れた。

「あっ♥ ああっ♥」

絶頂したての乳首に翻弄されながらも、股間への刺激でアカリの脚が閉じようとする。

むっちりとした太ももに腕を挟まれながらも手のひらでアカリの陰唇を揉みほぐすように刺激した。

既に濡れているアカリの股間がくちくちと粘質な音を立てて、私の手のひらにべったりと愛液が付着する。

「せ、せんせいっ♥ それっ♥ つよすぎますっ♥」

無意識的なのかアカリは私の腕を太ももでギュツとはさみ動きを抑えようとするが、股間に少し空いた空間だけで手首を使うには十分すぎた。

アカリの整ったスジマンが手のひらで揉みくちやにされ、トロトロと尻を伝ってタオルケットを濡らしていく。

いつしか、アカリは顔を覆っていた手を外し私の肩に縋るように手をおいていた。



「あーっ♥ せんせいっ♥ せんせいっ♥ も、もうだめっ♥ わたしっ♥」

その様子を見て、掌底でアカリのクリを少し強めに圧迫してあげる。

「……………」

がくんっ！ と背を反らして、アカリが絶頂する。のけぞった拍子に乳首も私の口から逃れていった。

「アカリが気持ちよくなってきて嬉しいよ。さあ、続けて本番と行こうか」

私の腕を拘束していた太ももが脱力し、アカリの脚は簡単にぱっかりと開いた。

「はあっ、はあっ♥ あの、先生？ も、もう少しだけ待ってくれると嬉しいなーって思うんですけど？」

手マンの絶頂で全身に珠のような汗をかいたアカリから立ち上る甘い匂いが私の興奮を後押しする。

「ごめんね、入れてからはゆっくり動くからね」

ぴったりと閉じたアカリの割れ目に亀頭を押し当てると、ぬるりと熱いぬめりとともに沈んでいく。

「んっ♥ あああっ♥ はいって、入ってくるっ♥」

アカリの細い腰を掴んで、腰を力強く突き出す。ぷつんと軽く処女膜を破り、ずるずると奥深いアカリの中へと埋没する。

「あーっ♥ おくっ♥ ふかいっ♥」

肩を掴むアカリの手にししの力がこもる。スラリと長く細い指だが、むしろ力強さを感じる。

アカリの腰も細い割に柔らかな脂肪の下に密度の高い筋肉が詰まっているのを感じ、それがマンコの良い締りを生み出しているのかと納得した。

汗気が多めのアカリの膣は、柔らかな膣壁が全方位から強く圧迫してくる。奥も深めで亀頭にちょうど子宮口が当たるといふ私にピッタリのサイズ感だ。

「は……………♥ は……………」

天井を見つめるアカリは、瞳孔を開放し爛々と輝かせ、目尻から一筋の涙を流していた。

「大丈夫、アカリ？」

「先生……待ってって、言いましたよねえ？」

ギロリと睨まれて、反射でチンポが跳ねる。

「んっ♡」

アカリから凄んでいた雰囲気が消え、チンポに弱い女の顔になった。

「もう、なんで睨まれておちんちん跳ねさせちゃうんですか？ 仕方のない人ですね……♡」

みっちり私のチンポが詰め込まれた自分の下腹部を撫で、アカリはうつとりと笑った。

「うふふ……♡ 先生のおちんちんで、お腹がいっぱいになっちゃってます……♡ ご飯を食べるときとは違って、なんだか新鮮です♡」

そう言つて、ゆらゆらと自分から腰を動かしてくる。アカリの処女膣がやんわりとチンポを撫で、亀頭が擦れてゾクゾクと快感が走る。

「あっ♡ 今の動き、気持ちいいですか？ んー……こう、こうかな？」

私が怯んだのが楽しかったのか、アカリは自分から攻めだした。

まだまだぎこちないとはいえ、積極的に腰を使って私から反応を引き出そうとする。

「もつと……こうっ♡ つつう、イタタ……まだ少し痛みますね……」  
大胆に、腰を前後にへこっ♡ へこっ♡ と振っていたアカリだが、傷に障ったのか顔をしかめた。

「そんなに無理しなくて良いよ。アカリを抱いてるだけで私は気持ちいいし」

「そうですねえ……こんなにおちんちんをカチカチにしていますもんね♡ はあ……お腹の中、温かいです……♡」

すっかりくつろいでソファに身を預け、普段と同じような微笑みを浮かべてお腹をさするアカリに覆いかぶさる。

リラックスしたアカリの勃起乳首を、大きな乳房を持ち上げて両方同時に口に含んだ。

「んっ♥ 先生、私のおっぱいそんなに美味しいですか？」

快楽をゆったりと楽しむ緩んだ笑顔を浮かべて、アカリが私の頭を撫でてくれる。

乳首を強く吸うたびにアカリの膣は波打つように締り、精液を強請っているように食欲に吸い付いてくる。

「ああ……気持ちいい……♥ 先生が生徒を襲っちゃうのも、わかりますねえ……♥」

日が傾いてきたとはいえまだ空も青い執務室で、2人で重なるようにソファに寝そべり性器を繋げてじっとしていると、アカリの体温と自分の体温が混じって解けていくような心地よい一体感を感じる。

「先生、私、多分そろそろ大丈夫だと思いますから……動いてくださって良いですよ♥」

私の頭を優しく撫でながら、囁くようにアカリが言った。ちゅぽんと乳首を口から離して、背を伸ばしてアカリに軽くキスをする。

腰を引くと、柔らかくもぴったり密着した膣肉が龟头を下からくすぐり、強い快楽とともにチンポが抜けていった。

「くうっ……」

思わず声が出てしまった私を見て、アカリはニイと笑った。

「私の中、気持ちよさそうですね♥ 良いですよ♥ もっともっと、私で気持ちよくなってください♥」

抜けそうになるまで引いて、またアカリの中に入っていく。熱く潤んだアカリの膣は、処女とは思えない柔軟性でチンポを受け入れてくれる。

「ああ……♥ 気持ちいい……♥ もっと、速くしても良いですよ……♥」

うっとりとして、風呂に入った時のようにセックスの快楽に身を浸すアカリに射精したいという気持ちが湧き上がり、その華奢な背中を抱きしめて強く腰を使い始める。

「ああっ♥ それっ♥ お腹の中、響くうっ♥」

じゅぶ、ぱん！とカリが愛液をかき出す水音と、アカリと私の下腹部が打ち合わさる音が響く。

処女とは思えない順応ぶりに舌を巻きつつも、ありがたく処女膣の新鮮さを思い切りピストンする貴重な快楽を堪能する。

「一番奥っ♥ ずんずんってされると♥ 頭のなか真っ白になっちゃいます♥」

私に合わせて逃えたようなアカリの膣の深さは、思い切り突き刺した時に子宮口を狙い撃ちにしやすい利点があった。

アカリのリクエストに応えるべく頑張って腰を使い、アカリのキレイだったスジマンからビラビラがはみ出る位に激しく出し入れする。

「もっと♥ もっと強くう♥」

ストッキングに包まれた脚が私の腰に絡みつき、控えめに肩に置かれていた手も私の頭をぎゅうつと抱え込んで、胸の谷間に押し付けていた。

私はアカリに取り込まれてしまったかのようにしがみつかれながら、強く腰を振り続ける。

時には前後だけでなく平行に回すように膣をかき乱し、入り口近くも刺激して緩急を付け、処女のアカリが膣イキしやすいように導いていった。

「はあっ♥ はあっ♥ んーっ♥ ううううーっ♥」

アカリは言葉を発する事もなくなり、可愛らしいが呻くような声を上げながら手足にさらなる力を入れる。

「んいいいっ♥♥」

そして、唐突にギチツと私の腰をホールドし、膣を強く締めた。

「んぐっ♥ ふーっ♥ ふーっ♥」

拘束されてまた胸に顔を埋めながら、一人だけ絶頂してしまったアカリの頭を撫でてあげる。

そしてそのまま、私もアカリの処女絶頂膣のうねりに身を任せて奥深くで射精した。

「あゝー……♥」

別人かと思うほど低い声を上げて、アカリが射精を子宮に受け入れ

ていく。

身動きすることも許されない手足による拘束の中、一滴残さずアカリが私の精液を平らげる。

そうして、ようやく絶頂の波が引いたアカリの四肢から力が抜けた。

「ああ……♥ 先生♥ 思いつきり私の中で、射精しちやいましたねえ……♥ どうするんですか、これ♥」

興奮で瞳孔をギラつかせつつ、ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべたアカリが問う。

いつも通りに避妊薬を渡し、飲んでもらった。

「ふーん……先生、そんなに大勢の生徒を毒牙にかけてたんですね」

スツと目が細まり、裸でチンポを挿入したままのアカリから押し殺したような怒気があふれる。

「でも先生。このお薬で避妊ができるなら、もっとセックスしてもいいですよね？」

ガシツとアカリが私の肩を掴み、身体を起こしていく。私は為す術もなく押され、ソファに押し倒された。

眼の前には覆いかぶさっているアカリのたわわな乳房が、支えられるものもなく重力で真下にぶら下がっている。

「あの……アカリ？ なんだか怒ってる？」

ニタリと笑ったアカリは、眉間に影が出来ているように感じた。

「怒ってますよー♥ イズミさんにはすぐ手を出したのに、私には全然手を出さなかったこととか♥」

腰をぐりつと押し付けてチンポを膣で揉みくちやにされると、射精したばかりの勃起が回復してしまう。

「それにい……女の子のお腹を何だと思ってるんですか？ これで本当に赤ちゃんできちゃったらどうするんです？」

そう言っつて凄みつつも、アカリは膣内射精されたチンポを愛おしそうに啜えこんで腰をグラインドさせている。

「それはまあ……墮ろしたいのでも産みたいのでも、費用は出すよ」

「イケない先生ですね……そういう人は、お仕置きですつ♥」

アカリがさらに前傾し、私の胸板に垂れ下がった胸の先が乗つか  
る。

それに反して腰が持ち上がり、ずるずるとアカリの膺から抜けてい  
き……

「ふっ♡」

ぱんっ！　といい音を立てて、アカリの尻と私の太ももが打ち合わ  
さる。

「はーっ♡　はーっ♡　これ……お腹が持ち上がっちゃって、すつご  
い響きますね♡」

アカリは、新しく食べ放題のお店を見つけたような上機嫌で、大胆  
に腰を使って私を犯し始めた。

「ふふっ♡　今日はとことん付き合いますよ♡　……ぜーんぶ私に射  
精しちゃったら、流石にデキちやうかもしれませんね♡　怖いですか  
あ？」

私は意地悪くニヤニヤと笑うアカリの頬をそつとなでた。

「アカリが私の子供を産んでくれるなら、もちろん嬉しいよ」

ポツと頬を染めて、アカリが苦笑する。

「本当に、あなたって人は……良いですよ♡　そんなこと言っちゃう  
なら、デキちやったら本当に産みますからね♡」

瞳孔を爛々と輝かせ、興奮のままにアカリが腰をふる。もちろん、  
押さえつけられた私は逃れることなど出来ない。

「あっ♡　あっ♡　前につ♡　私の大食いに付き合わせて、先生が気  
絶しちやったことありましたよね……♡　今度は、私が気絶するまで  
セックスしてもらって良いですよ♡　お上手な先生のことですから  
♡」

ソファにM字に脚を踏ん張って、腰を叩きつけるように上下させる  
アカリから怒りの混じった興奮を感じる。

快樂と自分が上位になった興奮からか、段々とアカリが本気になっ  
て甯猛さを覗かせていた。

「あーっ♡　きもちいい♡　先生とのセックスも趣味になっちゃいそ  
うです♡　ほら、もっと沢山射精していいですよ、先生♡」

結局、その日は日がとっぷりと暮れてもアカリは上になって腰を振り続けていた。

別の意味でお腹いっぱいのアカリと一緒に出禁になっていないお店を探して夜の街を彷徨うのだった。

## 姦淫の秘跡（ヒナタ）

「先生……どうか私を助けてください……」

トボトボと肩を落としてシャーレの執務室にやってくるなりそう言ったのは……ヒナタだった。

俯いて、両手を腹の前に置いているため、ヒナタの巨乳が寄せられて深い谷間を作り、私のチンポを不意打ちでイライラさせる。

「ヒナタ……何があつたの？」

どうぞ、とソファを勧めると、ちよこんと座った。

ヒナタのシスター服は大胆にもへその横辺りからスリットになっていて、太ももどころかお尻の横までバツチリと見えるデザインだ。

正面に脚を揃えて座っていても真ん中を隠すヒラヒラした布は太ももの半ばまでしか隠せておらず、更には太ももが作る谷に沈む事によって左右の幅を更に縮めてしまっている。

正面に座るだけで私のチンポをイライラさせるヒナタに関心しつつヒナタの相談に耳を傾けた。

「実は……またやってしまったのです……椅子を運んでいる時に、くしゃみをしてしまつて……その拍子に壊してしまつて」

「ああ……」

ヒナタはシスターフードの聖堂などの物品管理を担当している女の子で、とにかく力がとても強い。

だからこそ重いものを運ぶ物品管理を担当しているのだが、力の加減は苦手なようで、ついうっかり物を壊してしまうことも多いらしい。

「それでも、皆さんは責めずにいてくださるのですが……その、どうしても腫れ物を扱うような対応で……先生、どうか私の壊しグセを治して頂けないでしょうか？」

「うーん、なかなか難しいね。……方法を思いつかなくは無いです」

「えっ!? 本当ですか！ さ、さすが先生です！ わ、私、本気なんです！ 自分を変えるためならなんでもします！」

なんとというひたむきな決意だろうか。ローテーブルに手をついて



身を乗り出してくるヒナタの巨乳がゆっつきりと揺れるのを見て、私はチンポのイライラが増すのを感じた。

「それで……一体私は、何をすれば良いんでしょうか!」

「ヒナタには私とセックスしてもらおうよ」

「せつ、くす? すみません、私無知なもので……それは何かのスポーツ? とかででしょうか?」

3年生のはずのヒナタの知識の無さはトリニティの性教育がどうなっているのか気にかかる所だが、

「まあ2人で体を使ってやる事だね」

「わ、分かりました。ぐ、具体的にどうするのか伺って良いでしょうか?」

「うん、まず2人で全裸になる」

「ぜんっ!!」

ぽんっ! と音がしそうなくらい一瞬でヒナタの顔が真っ赤に染まる。

「そして私がヒナタの敏感な所を撫でて性的興奮を促し、その後勃起した男性器をヒナタの女性器に入れて射精するんだ」

「せせ、せ、先生! そ、それは……姦淫、と、いうではありませんか……!?!」

セックスという言葉は知らなくても、行為については理解しているようだ。

「そうだね、姦淫だね」

「で、で、で、でしたら、そのようなことは……!」

「でもツルギもこの方法であがり症の改善が見られたしなあ……これ以外でとなるとヒナタが自力でどうにかするしか……」

「うう……」

ヒナタは膝の上でぎゅつと拳を握り、俯いていた。

顔中赤面し耳まで赤く火照っていて、むわつと甘酸っぱい少女の匂いが立ち込めだすのを感じる。

汗かきのヒナタが急激に汗をかいているからだろう。

「それで、本当に……私の壊しグセは治るのでしょうか?」

キツと真っ赤なままのヒナタの真っ直ぐな視線が私を向いた。

「1回や2回では無理かもしれないけど、きつと改善するはずだよ」  
ごくり。

ヒナタの喉が固くつばを飲み込む音が、聞こえた気がした。

「……やります。私、先生と、セックスします」

姦淫を禁じるシスターフードの戒律を破つてまで、自分を変えようとしている。

そのヒナタの気高い決意に胸を打たれつつ、ヒナタをセフレにできる興奮にチンポのイライラは最高潮に達していた。

「よし、じゃあ脱ごうか」

「えっ!? こ、ここで、今からですか!？」

目をむいて驚くヒナタが、チラチラと入り口に目を向ける。

「大丈夫だよ、ちゃんと鍵は閉めたから」

「でっ、でっ、でも……! い……いいえ……なんでも……ありません……」

ふるふると身体を震わせ、おっぱいも揺らめかせながらヒナタが口をつぐむ。

「ヒナタ。これはヒナタの力をコントロールするための練習なんだから、まずはリラックスしないと」

「り、りらっ、くす、ですか? ううう……さつきから、心臓がドキドキして、た、倒れそうなくらいなのですが……!」

ぎゆうう、と股間の布を握りしめているせいで太ももが付け根まで露わになっているのだが、それにも気づかないほどにヒナタは顔を真っ赤にしていた。

放って置いてもしようがないので、ヒナタの隣に座り肩を抱く。

「ひゃああっ!？」

びつくん、と肩をすくませて全身を跳ねさせるヒナタ。

「ヒナタ、リラックスだよ、リラックス。全身の力を抜いて私にされるがままになってみて」

「え、え、え、えっと、ど、どう、すれば、いいで、しょうか?」

「深呼吸して、背もたれに身体を預けてみて」

耳も首筋も桜色に火照ったヒナタから、むわりと濃厚な雌の匂いが立ち込める。

「はひーっ、はひーっ、し、深呼吸って、どうするんですけどっけ」

私は硬直したヒナタの腰に腕を回し、シスター服から零れ落ちそうな巨乳を掬うように下から揉み上げた。

「んんっ♥」

ヒナタのおっぱいは手のひらに全く収まらない圧倒的サイズを持ち、適度な柔らかさと弾力を服の上からでも感じる。

何より、既にほかほかに温まっついていて、掴んだ手にもしっとり汗の蒸気が伝わってくる。

「力を抜いて。私にもたれ掛かっていいから」

「は、い……♥ あんっ♥」

シスター服越しなので多少強めに揉んでみてもヒナタは気持ちよさそうな声を上げてくれた。

ゆつくりと、私の腕にヒナタの重みが掛かる。

それだけで腕の内側がじつとりと熱く湿り気を感じ、どく、どく、と背中を通してヒナタの鼓動が伝わってくる。

「大丈夫、痛いことはしないからね」

「はっ、はい……」

まだまだヒナタの身体はリクライニングされた座席そのもののように固い。

横から抱きしめ、耳たぶをそっと食んだ。

「ひゃっ!? えっ、あの、先生? わ、私は食べ物ではありませんよ?」  
行為に対する知識がまるで無いヒナタは、ただただくすぐったく疑問を覚えただけのようだった。

そんなヒナタから発される甘酸っぱい雌の匂いと、男に抱かれるために存在するような大きな胸に惜しげもなくさらされた太ももと尻のアンバランスさがチンポをイライラさせる。

「ヒナタは食べたくなっちゃうくらい魅力的な女性だってことだよ」

「そ、そうなのですか? あの、えっと、ありがとうございます……?」

これから姦淫されようというシスターが、律儀にお礼を言ってくれ。きつとヒナタは私が膣内射精してもこの態度を崩さないだろうと思った。

「ヒナタは身も心もとっても綺麗だと思うよ。……壊しグセがあったって、ヒナタだから周りに受け入れられてるんだと思う」

腫れ物扱いといっても、ヒナタがまた壊したらもつと落ち込むという周囲の配慮でもあるんじゃないか。そう伝えた。

「おっしやる通りなのかも、しれません……でも！ 私は、そんな優しい方たちにもつと報いたいんです。だから……お願いします、先生……んっ♥」

伝えながら、ヒナタの両の巨乳を力強く揉みしだく。ヒナタの心優しい決意に、雌の情欲がじわりと滲んだ。

そして、羞恥だけではなくなった赤面に、困惑しながらもキラキラと興奮で輝く瞳を私に向けて、改めて言う。

「私と……姦淫して、ください。先生の仰ること、何でも受け入れてみせますから」

「うん。わかったよ、ヒナタ。……まあ、とりあえず力を抜くことから始めようか」

「……ああっ!? そうでした、私、全然受け入れられてませんでした！」

がーんと涙目になるヒナタの顎を指でそつと押し、真っ直ぐ私の方を向かせる。

化粧つけのないヒナタの唇にそつとキスをした。

ヒナタはぴくん、と身体を跳ねさせるが、ぐつとこらえて私のキスを受け入れる。

「んむう……!? れう……♥」

ぷるぷるしたヒナタの唇を、私の舌が割り入っていく。目を見開いて驚くヒナタだが、小さな前歯を何度か舐めているとおずおずと口を開けてくれた。

無抵抗なのを良いことに、私はヒナタの口内を舐め回し、ヒナタの小さな舌とダンスするように絡み合い、唾液を流し込んで飲ませた。

「んっ、あむっ……♡ ふーっ、ふーっ……ちゆるっ、んくっ♡」  
ヒナタの荒くなつた鼻息がかかりくすぐつたく感じる中、豊満な身体をただ抱きしめる。

ヒナタの脇の下を通るスーツの袖がじつとりと汗を吸い、ヒナタの匂いに染まつていくのを感じながら、ゆつたりとディープキスを楽しんだ。

「ふうう……♡ んふーっ♡ んくっ♡ ちゆるるっ♡」

何分もディープキスをしていると、ようやくヒナタの身体から力が抜け始める。

私も全身がヒナタから立ち上る蒸気に包まれるかのような熱気で汗ばんでいた。

ちゆる、と唾液の糸を引いて口を離す。

「さて、そろそろ良いかな。ヒナタ、服を脱ごうか」

「はあっ♡ はあっ♡ わ、わかり、ました……♡」

ソファから立ち上がり部屋を出ようとするヒナタに声をかける。

「そんな状態で部屋からでたらダメだよ。ここで脱がないと」

「えっ!? あ、う、……そうですね……♡」  
らないといけないのですよね……♡」

そう言うと、ヒナタは自身を艶めかしく拘束するシスター服のベルトを外し、ホックを外し、ジッパを下げる……一枚ずつ脱ぎ、ソファに丁寧に畳んで置いた。

その間に私も全裸になり、セックス用タオルを用意しておく。

恥ずかしげもなくチンポをギンギンに勃起させ、我慢汁を先端から溢れさせつつヒナタのストリップを鑑賞した。

「くくっ……♡」

シスター服を脱ぎ、後は下着だけのヒナタが私のチンポを凝視して固まっていた。

しかしその顔は怯えなどではなく、快樂への期待が滲むようにほんの少し口を開けて呆けている。

私もヒナタの立派な胸を包むブラを凝視し、更にチンポを勃起させる。

その視線に応えるように、ヒナタが顔じゆうを今までで一番真っ赤にしながらし前かがみになり、後ろ手にブラのホックを外す。

外からの明るい日差しの中、防音によりほとんど無音の室内で、ぱちんという音がやけに大きく響いた。

その瞬間ヒナタの胸が重力に従い鉛直方向に伸びる。

「おお……」

「そ、そんなに、見ないでください……」

ヒナタは片腕で乳首をなんとか隠しながら、ブラを畳んだ服の上に置く。

解き放たれたヒナタの胸は、それでも完全に重力に屈さずに前をむこうとする張りがあった。

ヒナタの羞恥による力みが加わって腕で押しつぶされ、みつしりと詰まった巨乳が上下に押しつぶされる圧巻の光景に思わず声を上げてしまった。

「大きくて形もきれいだし、やっぱりヒナタは美人だね」

「あうう……♥」

緊張がぶり返したのか、まともに返事をする事も出来ず、腕が震えて巨乳をぶるぶると震わせるヒナタ。

それでも胸から腕を離し、自ら最後の一枚を……なんと普段から見えていた、スリットを横切るベルトのようなTバックの下着を……するすると脱いでいく。

前かがみになったヒナタの胸は隠すものもなく、美しい薄ピンクの大きめの乳輪と甘勃起した親指ほどの太さの乳首が鉛直方向を向いていた。

ヒナタは震える手でショーツを服の上に置くが、そのクロッチはキラリと光を反射する粘液で濡れていた。

「ああ……♥ お赦しく下さい、サクラコさま……♥ 私は、今から先生と姦淫致します……♥」

靴とストッキングも脱ぎ、一糸まとわぬ姿となったヒナタが胸の前で腕を組み赦しを請う。

しかし、ヒナタの股間からは男を誘う甘くも酸っぱい雌の発情臭が

隠しようもなく漂って来ていた。

「おいで、ヒナタ」

バキバキに勃起しつつ、ソファに何枚も重ねたタオルの上に座ってヒナタを誘う。

ローテーブルを押ししてスペースを作ると、私の目の前に立たせた。目線の高さにヒナタの股間があり、その手をどけさせる。

泣きそうになりながら、ヒナタは自分の股間を見せてくれた。

ヒナタの髪のように艶やかな陰毛が生い茂る股間は既に潤み、今にも滴りそうに愛液が珠を作っている。

「足を肩幅に開いて、ここまで腰を落としてごらん」

座った私が真っ直ぐ腕を差し出すと、ヒナタは困惑しながらも脚を揃えて曲げようとする。

「ダメだよ、膝は横に開いて」

「えっ、で、でも、そんな、はしたない……」

じっと見つめると、ぎゅっと固く目を閉じてがに股でゆっくり腰を落とし始めるヒナタ。

「うん、いい子だ。私の肩に手をおいて。これからヒナタのことを触るから、手に力を入れずに力を抜いたままにすること。いい?」

「はっ、はいー」

ついに壊しグセの対策が始まったのだと理解したヒナタが、決意を込めてまぶたを開いた。

そんな凛々しくも真っ赤な顔をしたヒナタの、無防備にがに股になった股間に指を近づける。

ぽん、と裸の肩にヒナタの手が置かれる。同じく、私の指先がヒナタのクリトリスを撫でた。

「ひゃうっ♥」

「ぐっ……!」

ぎり、と万力で絞められたような痛みが襲う。

「あ、ああっ! 先生!」

「これは……痛いね。木の椅子が壊れちゃうわけだ」

「もう、痣になってしまっ……! 先生が手伝ってくださいっ……」

のに、私、こんな……！」

目を見開いたヒナタの顔色が赤から青に変わる前に、肩に置かれた手に私の手を重ねる。

「良いんだよ。これが練習なんだから。ヒナタが我慢できれば私は痛い目にあわない。続けるよ、ヒナタ」

「わ……わかりました！ 続きを……して、ください」

キツ、と決意したヒナタのマンコを指先でこちよこちよとくすぐる。

「んんっ♥ これっ♥ びりびりっ♥」

ヒナタは肩に置かれた手をパーにして私を握りつぶさないように耐えている。

耐えながら、クリトリスを皮の上からくすぐられる初めての快楽に身悶えしていた。

「ヒナタ。木の椅子を運ぶときも手をパーにしておくつもり？ さっきのように自然に手を置いてみて」

「……！ や、やって、みます……！」

私もヒナタをセフレにする以上、半端なことをするつもりはない。本気でヒナタを指導しつつセックスする。

指先で、がに股のヒナタの性器をそつと愛撫する。

ぷつくりと目立つ勃起になってきたクリトリスをカリカリカリ、と等速で弾き続けた。

「あっ♥ あーっ♥ うんーっ♥♥♥ だめっ♥ だめっ♥ せんせいっ♥ つよっ♥ つよすぎますっ♥」

たったこれだけで、私の手のひらにヒナタの愛液がポトポトと垂れてくる。

セックスという言葉すら知らなかった少女がクリトリスを弾かれる快楽に身を浸し、よく通る大声で喘いだ。

リクエストに答えて、ヒナタのスラリと薄めのスジを描く外陰唇を割開き内側の粘膜を撫でる。

「はーっ♥ あ、これ……♥ きもちいい……♥ おまたが、じんじん、熱くなつてしまいます……♥」



ゆったりと割れ目を上下するだけの私の動きが、初心者ヒナタにはちようどよく、私の指を伝って肘まで愛液で濡れそぼる。

ぽた、ぽた、と股間からこぼれた愛液が床を叩く音さえ聞こえる量の多さだ。

「いい調子だよ、ヒナタ。その気持ちよさに集中して、力を抜いてみて。私にどう気持ちいいのか教えてほしいな」

「はい……♥ 先生の、男の方の、ゴツゴツした指が♥ 私の、おまたをお♥ なでなでするとっ♥ じん♥ っってお腹が熱くなってしまうんです♥」

だんだんとセックスに馴染んで来たヒナタが、無知なりに快感を覚えてくれる。その尊さに私のチンポからも愛液が滴った。

トロトロになったヒナタの膣穴に、中指を侵入させてみる。

「あ、ああっ♥」

ぐっ、と肩に力が籠もるが、常識的な範疇に収まった。それでも先ほど痣が出来た部分がズキリと痛む。

「どう？ 穴の中に入れても大丈夫そう？」

「これっ……♥ すごい、です……♥」

ちらりと視線を落として、ガニ股の自分の股間に私の指が少しだけ入っているのを確認するヒナタ。

「ほんの少しだけしか入ってないはずなのに、先生の、指でえ♥ お腹がいっぱいになってしまったように感じます……♥」

少し困ったような微笑みを浮かべるヒナタは、既に前髪が張り付くほど汗をかいていた。

私の目の前にぶら下がる2つの白い果実にも幾筋も汗の珠が張り付き、乳首に集まった汗が私の脚に滴っている。

まるでサウナのようにヒナタに蒸されながら、股間をいじるのとは別の手でその果実を持ち上げる。

「ぱくっ」

弾力を保ちながらも長く伸びた乳は、余裕で乳首を口に含むことが出来た。

「んっ♥ ち、乳首、すっちやだめですう♥ ああっ♥ おまたと一緒に

にされると♡ びりびりがあ♡ 耐えられませんっ♡」  
ぎり、ぎり、とヒナタの手に力が籠もる。

私が顔をしかめて見せると、ヒナタがハツとして緩めてくれた。  
「も、申し訳ありません……！ も、もつと、気持ちいいことに集中しますっ♡」

健気にそう言うってくれるヒナタに応えるため、もう片方の乳も寄せ  
て両方の乳首を同時に吸った。

さらに、封印していたクリトリスのカリカリも同時に行う。

「ひっぐ♡ は、あ♡ んいっーっ♡ あーっーっ♡」

喉につかえたような唸り声にも似た快樂の声を出し、ヒナタがガニ  
股の腰をカクカクと震わせる。

股間からはとぷとぷと愛液が滝のように流れ、もしかすると人生初  
だったかもしれない性的絶頂を余すこと無く私に見せてくれた。

「はーっ♡ はーっ♡ はーっ♡」

力みではなく脱力で、ヒナタの体重が私の肩にかかる。

自分に何が起こったのか理解していないヒナタは虚ろな視線を上  
の方に向けて肩で息をするばかりだった。

絶頂しているヒナタの膣に指を深めに入れると、ヒダが多めの膣肉  
がぎゅちりと締め付けて来る。

それだけで名器を予感させる膣を進み、処女膜に触れ、撫で回した。

「上手にできたね、ヒナタ。じゃあ、本番に移ろうか」

「はあ……♡ はあ……♡ はいい……♡」

こんなにも力強いヒナタだが、体重は少女らしく軽い。がに股の膝  
裏から持ち上げるように抱っこすると、あつあつのヒナタの裸体が私  
の体に密着した。

そのままタオルを何枚も重ねたソファに腰掛ける。

対面座位でヒナタがソファに足を踏ん張るように調整し、膣口に私  
の亀頭を押し当てた。

「ほら、ヒナタも私を抱きしめるみたいにしてみて」

「はっ……♡」

まだ絶頂の余韻から覚めやらぬヒナタが言いなりにその細い腕を

私の首に絡め、勃起乳首ごと私に胸を押し当てて。

間近に覗き込んだヒナタのルビーのように輝く瞳は、もはや無知な少女ではなく姦淫の味を識った女のものだった。

「さあ、今からいよいよヒナタの処女をもらおうよ。……引き返すならここが最後だ」

うつとりと、どこか夢見るようにヒナタの目が細められ……そのまま私に口づけ、すぐに離す。

「大丈夫、です。私……先生と、セックスが、したいです……♡ たとえ、先生からしたらただの訓練であつても……」

ヒナタの瞳に少し寂しさが滲んだと同時に、私はキスで口をふさいだ。

「ヒナタ。これは確かに訓練だけど、私はそれを利用してヒナタとセックスするためにこの訓練をしたんだ」

くす、とヒナタが笑う。ついさつきより……あるいは、年相応に……大人びた、少女の笑みだった。

「いけない先生ですね。でも……その懺悔を受け入れます。私の姦淫の罪と共に……一緒に背負ってくださいますか？」

「もちろん。これからも何度も姦淫しようね」

ヒナタはいつものように屈託なく、目を細めて笑った。そして、強く唇を押し付け……舌を入れてくる。

みちつ、とヒナタの処女膣が私の亀頭を押し、ヌルヌルの愛液によつて順調に沈んでいく。

処女のヒナタが自分から決意を持って身を捧げてくれる世にも清らかな初セックスが、こうして始まった。

つぶん、と亀頭が飲み込まれると、ヒナタの膣圧がみっちり心地よく圧迫してくる。

ヒナタの筋力の強さも相まり、私がチンポをねじ込むよりもスムーズに挿入は進んでいく。

「ふーっ♡ ふーっ♡ ちゅっ♡ れるっ♡」

眼の前のヒナタは少し眉をしかめて、刺激から気を逸らすように夢中で私の唇を貪っていた。

ヒナタから流れてくるさらさらの唾液を媚薬のように飲み干し、口元を2人してベトベトにしながら絡み合う。

あつという間に、ヒナタの処女膜が私の亀頭に触れる。

至近距離で目を合わせるヒナタの瞳が、興奮と緊張で揺れた。

私は汗でヌルつくヒナタの背中をそつと撫で下ろすと、ヒナタが目だけで微笑む。

みちつ、と厚い手応えとともにヒナタの処女膜を突き破り、奥深くまでチンポが突き刺さった。

「ん、っ、ぐ……！」

首に絡められた腕が、踏ん張っていた両膝が、私を強く拘束する。

もしもヒナタが全力を出したら骨が複雑骨折して死にかねない状況だ。

だが、ヒナタは破瓜の痛みの中でそれに耐えた。

ずっぷりとヒナタの胎内に突き刺さったチンポの感触を味わう。

透き通るように白い肌、引き締まったへその奥に、私のチンポが収まっているのを強い締付けとともに実感した。

とはいえ、ヒナタは挿入したときからふるふる震えている。

ぬる、と唇を離すと、先ほどまでの情欲など吹き飛んでうるうると涙目のヒナタが口をはくはくと開閉している。

「い、痛いですう……先生……！」

「処女膜の感触が厚かったからね。よく頑張ったよ、ヒナタ。しばらくじつとしていようか」

痛みにこわばるヒナタの体を抱きしめる。頬をくつつけあつて、汗まみれの肌が癒着しそうなくらいにぴったりと抱き合った。

ヒナタの大きな胸を伝って、どくん、どくん、と今も心臓が早鐘を打っているのを感じ、ヒナタの熱い吐息を耳元で鑑賞する。

手ぐしでヒナタの髪をゆつくりと梳いてやると、根本のじつとりと汗に濡れた部分から先端のさらさらした部分のコントラストとともにヒナタの甘い香りがふわりと広がった。

「ふう……はあ……先生、そろそろ、大丈夫です」

そつとヒナタが頬を離すのを、少し名残惜しく感じる。

「いいの？ もう少し待ってもかまわないけど」

「ありがとうございます。でも……さつきから、先生の、固いのが……お腹の中で熱くて。自分から、動いてしまいそうなんです……♥」

眉を下げて少し困ったように照れ笑いをするヒナタの表情は、普段聖堂で会っている時のように自然なものだった。

自然体で、ぐっぽりと私のチンポを生で啜え込み、自らピストンを強請る女として美しく花開こうとしていた。

少し下に視線を移すと、汗に濡れたヒナタの白い巨乳とビンビンに勃起した乳首の向こうにある接合部が見える。

そこはディープキスをするように私とヒナタの陰毛が絡み合い、愛液と汗でじっとりくっついていている。

黒い森の中から鮮やかに赤ピンクの勃起クリトリスが顔を出し……快楽の疼きでヒナタにセックスを催促していた。

「うん、わかったよ、ヒナタ。私の腰に脚を絡めて、しっかりと抱きついて」

「は、はい……♥ んんっ ♥ か、は……っ ♥ これ、一番奥、押されちゃってます……♥」

踏ん張っていた足を私に絡めさせ、私もヒナタのむっちりとした尻を掴み、ピストンの準備を整えた。

「あの、先生。この体勢で、もし私が力んでしまったら……」

私にしがみついたヒナタが、瞳に恐れをよぎらせる。

「無事では済まないかもね。でも、ヒナタならきつと大丈夫。」

そう言うと、ヒナタは静かに私にキスをして舌を伸ばしてきた。

それを合図に腰を使い始める。

「んんっ♥」

膣を擦られる刺激に、ヒナタがぎゅ、と手足を力ませる。まだ女の子程度の力で、むっちりとした太ももが心地よくくっついてきた。

引き締まったヒナタのお腹の中をずるずると上下にチンポが出入りする。

膣の筋肉はもちろん腹筋も力強く、まるで握りしめるような締付けに激しく射精を促された。

処女なのに奥深くまで突き刺さるヒナタの膣の心地よさに、尻をより強く握りしめる。

「あむっ♥んふうっ♥」

それに呼応するように膣がうねうねと波打つように締まった。

やはりヒナタは強いのが好みのようだ。ならばと、ピストンも激しく長くしていく。

「んーっ♥うんーっ♥ふーっ♥ふーっ♥」

唇を決して離さず、私の口の中にくぐもった喘ぎ声を送り込むヒナタ。

熱い愛液が竿を通じて金玉まで垂れ落ちてくるのをはつきりと感じ、初セックスを存分に楽しんでくれているのが分かる。

さつき見た接合部の勃起クリトリスを思い出し、ピストンからグラインドに以降する。

股間をくつつけて、2人の下腹部でヒナタのクリトリスをすりつぶしながら膣奥のポルチオを亀頭で撫で回す。

「ぶはっ♥あ、っぐ、あーっっっっ♥いーっっっ♥」

激しすぎる刺激に耐えきれず、ヒナタが口を離す。朗々と響き渡るような澄んだアへ声が大きく部屋に響いた。

動きを気に入ってくれたと判断し、クイクイと角度や速度を調節していく。

「んひひひひっ♥うあーっっっ♥♥」

がくん、と釣り上げられたようにヒナタの顎が上がり私に白くも細かい喉元を見せ、天井に向かって絶叫にも等しい悦びの声をぶつける。

チンポが良いところに入った手応えとともに、ヒナタの手足が一段と力を増した。

それでも腰は緩めずにヒナタを更に悦ばせるべく同じ動きを続ける。

「おっ♥おううーっ♥んおおーっっ…♥」

臨界点を超えたヒナタの快楽がギアを上げたかのように、喘ぎ声が少し低く、腹の底から絞り出すようなものに変化していく。

それと同時にヒナタの手足から力が抜け、後ろに倒れ込もうとす

る。

それを抱きしめて支えつつ、さらに慎重に腰を使い続ける。

「おーっ……♡ん♡あーっ……♡」

ヒナタの膺は処女なのが信じられないほどに複雑にうねり、ギチギチに締め付け、精液を欲して蠢き続ける。

くち、くち、とヒナタの愛液が白く濁り粘質なものに變化して股間の動きを淫らに奏で始めた。

そして、止めとして再度腰を引いて奥深くを突くピストンを叩き込む。

「うっ、ぐ、んおおお……♡♡♡」

ぐったりと脱力し、ゆでダコのように全身を桜色に上気させ、湯気が立ち上るほど汗を滴らせながら……ヒナタは深く絶頂した。

膺全体が痙攣しながら締め付ける心地よさに鼻の奥がツンと痛くなるような激しい快楽を感じ、私も射精する。

「あ、あああ……♡♡」

むわむわとヒナタの発する蒸気に興奮を促されながら、どく、どく、と17歳の若く健康な子宮に精液を流し込む。

ヒナタの腹がひく、ひくと痙攣するたびに、チンポも締め付けに襲われる。

生殖本能を全開にして私の子種を欲するヒナタが愛おしくなり、美しく締まった腹をねっとり撫でた。

ヒナタの絶頂は深く長く、それにつられて私の射精もいつまでも続くように錯覚する。

私の腕の中で完全に脱力し、ぱっかりと180度に股を開いて子種を受け入れてくれる聖母のようなヒナタに甘えて、果てしない射精が終わるまで奥深くに精液を流し込み続けた。

「避妊薬、ですか？」

深い絶頂から帰ってきたヒナタに、37人目のセフレであることを伝え、ピルを渡す。

「あの……先生？ シスターフッドは、避妊も罪に当たることです

「……飲まないわけには、いきませんか？」

顔を赤らめながら、その意味を噛み締めながら、ヒナタが避妊しない選択肢を提示する。

「ヒナタが将来、壊しグセを直せて、学校を卒業して、大人になったらね」

私はそう言っ、汗に濡れそぼったヒナタの頭を撫で、セックスで可愛い頬に張り付いていた髪を払った。

「ふふっ。わかりました、先生。次からは、この……ゴムを使って……姦淫、しましようね♥」

ヒナタが微笑んで、私に抱きつく。

ぐざり、と骨がずれる音が身体の中から聞こえた。

「ぐああっ!?!」

「きゃああっ!?! 先生、先生っ!?! ごめんなさいーっ」

どうやら、当分セックスでの（命がけの）練習は続くようだった。



## 怠けがちな警察官の初セックス（フブキ）

今日は休日。

なのだが、私は執務室で仕事をしている。生徒たちとのセックスの時間を捻出するためとあらば仕方がない。

昼を過ぎてようやく一段落した所で、休憩室に向かった。

「おっ、先生。お互い大変だねー休日まで」

水色のジャケットとタイトスカート、そして意外と細い脚をしたフブキがマッサージチェアに座ってドーナツの箱を抱えながらも、もしかや食べている。

「フブキ？ 休日なのに制服なんか着てどうしたの」

そう訊くと、フブキはぶすつとした憤懣やるかたないと言わんばかりの表情で返した。

「またサボりがバレちゃってさー、今回も週末のパトロールを強要されちゃったんだよ」

「大丈夫なの、罰をサボって」

フブキはにやりと笑った。

「大丈夫だって、ちゃんとコースは回ったし。報告書も出先から書いて提出したからもう終わってるよ。シャーレ近くで終わったからここ使わせて貰ってるってわけ」

実際にどの程度大丈夫なのかは疑わしいが、まあそういう事にしておこう。

「おっ、そうだ。先生がいるなら地下使わせてよ」

「地下って……居住スペースのこと？」

「そうそう、なんかソファとかあるんでしょ？ 先生以外誰も来ないし、最高のくつろぎスポットじゃん」

「うーん、まあ良いけど」

フブキのタイトスカートから伸びる、厚めのストッキングに包まれた脚。ジャケットを微かに押し上げる胸。

私のチンポがイライラし始めるのを感じていた。

「おー、これこれ、静かでちよつと薄暗くて涼しい、まさに隠れ家だね」  
ドーナツの箱を持ったフブキがソファにうつ伏せに寝そべり、ス  
ニーカーを行儀悪く足で脱いだ。

目の前にフブキの尻とストッキングに包まれた足が揺れている。

「私もお昼たべよ……」

ドーナツを見ていたらお腹が減ってしまったので、カップ麺を食べ  
ることにした。

キッチンで湯を沸かしてカップ麺に注ぎ、容器を持って帰ってくる  
とフブキが居ない。

ドーナツの箱が置かれているので帰ったということはないだろう。  
耳を澄ますと、風呂場から水音が聞こえてきた。

カップ麺を食べながら待つと、フブキが風呂場から歩いてくる。

「いやー、ここっってお風呂もあるんだねー。パトロールで汗かいたか  
らスツキリしたよ」

そう言うフブキは、頬を上気させて髪がしっとりしている。

「結構早いんだね、お風呂」

「まあねー。ドーナツを食べながらダラダラする時間を削りたくな  
いから」

またソファに寝そべったフブキは、ジャケットを脱いでワイシャツ  
一枚になりノーネクタイだ。

更にはストッキングも着ずに生足を晒してブツダのような横寝で  
脚を広げてポリポリとふくらはぎをつま先で搔いている。

こんな態度ではあるが、風呂上がりの若い女の子の香りが居住ス  
ペースにふわりと広がった。

「どしたの？ そんなじつと見て。……場所代としてドーナツ1個  
くらいなら上げてもいいよ？」

「いや、フブキとセックスしたくなかった」

「はっ」

ソファにツカツカと歩み寄ると、ぽかんと口を開けたフブキの胸元  
に食べかすが落ちた。

上を見上げる体勢になったことで胸のシャツが張り付き、うつすら

とドーナツ柄のスポーツブラが見えている。

「ちよ、あの、先生……笑えないよ？ その冗談」

顔を引きつらせてジリジリと下がるフブキだが、すぐに背もたれに行き当たってしまう。

その空いたスペースに手を置き、小さな体に覆いかぶさるように四つん這いになる。

「まつ、ま、まつて？ 一旦落ち着こ？ そもそも、私なんか襲つても面白くないよ？ こんな貧相な身体つままないでしょ？」

「そんなことないよ。フブキは可愛いし、ほら、こんなに綺麗な脚してる」

タイトスカートから伸びる生足、膝上すぐの太ももを外から撫でてやると全身をびくつと痙攣させた。

「ひやつ!!? そ、そんなことないって。絶対つままないよ。先生、仕事に忙しいからおかしくなっちゃったんだね。そ、添い寝くらいならしてあげるから、一緒にサボろ？」

フブキが風呂上がりよりも顔を赤くして、必死に言葉を紡いでいる。

「添い寝かあ。それは魅力的だね」

「でしょ？ 今の先生に必要なのは休息だよ。休んだら落ち着くから、ね？ このまま寝ちやおう？」

乗り切ったとばかりに表情を緩めて微笑むフブキにそつと上から包むように抱きついた。

「ちよー!!?」

「添い寝してくれないの？」

フブキの薄い胸の奥がドクドクと早鐘を打っているのを感じる。風呂上がりの少女の身体がホカホカと温かく、しっとり肌馴染む。

「いや、添い寝は横でしょ!!? これ縦だから！ 寝苦しいから、どいてってば！ か、顔近いってー！」

おでこがくつつく位の位置からフブキの瞳を覗きこむ。

「フブキの瞳、綺麗な色してるよね」

紅色とでも言うべき赤ピンクの瞳が潤み、キラキラ輝いているように見える

「うんありがとうー……って言うわけ無いでしょ!? は、はやく、どいてよ……ドーナッツ、食べられないじゃん」

そう言いつつフブキは私を押しつけようとはしない。

「なら私が食べさせて上げるよ。ほら貸して」

「ひゃっ!？」

そつとフブキの小さな手を握り、ドーナッツを奪う。

そのままフブキの口元に持っていった。

「う、上むいたまま食べるのしんどいんだけど?」

「じゃあ食べるのは後にしてセックスしようか」

「あー、分かった食べる食べるから!」

フブキの腋の下から手を入れて抱きしめ、密着したまま身体を回転させて2人で横に寝そべる。

「はい、あーん」

「うぐぐ……まあドーナッツは勿体ないし食べるけど……あむ」

顔を真赤にしたままもぐもぐドーナッツを食べていくフブキ。

最後の一口は私の指を唇で啜えてしまつて思い切りのけぞり、ソファの背もたれに頭をぶつけた。

私はフブキが啜えた指を舐め取る。

「なっ、何してんのさ!? 私が舐めたとこなんか汚いでしょ!？」

「汚くないよ。そうだ、キスしていい?」

「良くないけど!？」

「キスしたい」

腕に力を込めてフブキを抱き寄せる。薄い胸がふにゆりとぶつかり、鼻と鼻がくっつきそうに近い。

「あっ……」

「キスしていいなら目を閉じて」

フブキの頬がかあつと朱に染まる。瞳が揺れ、何かを言おうと唇が震える。

そして、そつと目蓋が下りた。

「あ、んむっ……♡」

こうして、フブキはファーストキスを薄暗い居住スペースで済ませたのだった。

砂糖と油脂で薄くコーティングされたフブキの唇はぶるぶるの弾力がありつつ少しベタついている。

飴玉のように舌で舐め取りつつ口内に舌を伸ばしていく。

ドーナツの食べかすが随所に残り甘ったるい。

「んんーっ♡」

閉じた歯を何度も舌でノックしていると、面倒くさがって根負けしたフブキが渋々と言った感じで口を開ける。

ぬるりと侵入した舌でフブキの口内を舐め回す。

ドーナツを食べた後で唾液の少ない口内に私から唾液を送り込み、ぬめりを付けてフブキのアツアツの舌と絡み合う。

「んっんっ……♡」

ちゆる、ちゆる、と丁寧に舐め取り、唾液を吸い合う。段々とドーナツの味は薄れ、フブキの唾液の味になってきた。

フブキからもぎこちなく舌を絡めてくれるようになったのを確認して、一旦口を離す。

「ドーナツ味だね」

ふいっと赤い顔をそらして、フブキがつぶやく

「こっちはラーメン味なんだけど」

「じゃあドーナツ食べさせて」

「やだ……」

無意識的にドーナツを探し始めたフブキの手を取り、まだクリームで汚れたその指をしゃぶる。

「あっ、んっ♡」

細い指をぐるりと巻き取るように舌を絡めると、フブキが甘い声を上げた。

「何するのさ……手がツバでベトベトになっちゃったじゃん……♡」

そう言いながら、指先を唇にそっと当てて。その仕草はすでに、発情した女のソレだった。

「そろそろしようか」

フブキがその気になってきたのを感じて、ワイシャツのボタンを外し始める。

「わわっ!? だ、だめだって! やばいって!」

ギョツと私の腕を握ってくるフブキだが、顔を真赤にしてボタンが外されていく胸元を見つめたままだった。

そうして、完全にシャツの前が開いてしまう。色気のない白の丸首シャツの下のドーナツ柄のスポーツブラがハッキリと見える。

「ね、や、やめよ? 先生。今なら引き返せるから、ね?」

「フブキとセックスしたい」

「なんでこんなときだけ強情なの!? うー……ど」

「ど?」

いーつと歯を食いしばって逃げ道を考えていたフブキが、何かを言おうと唇を尖らせた。

「ドーナツツおごって……」

顔も耳も真っ赤にして、セックスをOKする発言をしてくれた

「いいよ、奢ってあげる。じゃあセックスしようね」

そう言つてスカートに手をかけると、ガツと手首を掴まれる。すごい力でびくともしない。

「や、優しくだよ? ゆっくりしてね?」

「うん、ちゃんとフブキを気持ちよくするから」

「そういうことは言っていないけど!」

ゆるりと手首の拘束が解けると、フブキのスカート脇のファスナーを下ろしホックを外した。

寝そべったままでするりとフブキの細い脚を滑らせ下ろしていく。

上と同じ柄の綿のパンツはいかにも普段着といった趣で、下腹部を撫でて手触りを堪能した。

フブキはギョツと目をつぶって耐えている。

「はい、バンザイしてー」

「こ、子供じゃないんだから」

まだ軽口をきく余裕を見せつつ、素直に両手を上げてくれる。

シャツを脱がすと、どこか甘い体臭が香る。

ソファの背もたれにシャツとスカートを引っ掛けるように投げ、フブキの小さな胸に張り付くブラを下からめくった。

「お、綺麗な乳首だね」

「せ、セクハラは犯罪だよ」

「実物を見て褒めてるだけだよ」

色白の胸に、瞳と同じく少し赤みの強い乳首が映える。

バンザイをしたままなのでブラもさつと脱がしてしまい、コレでフブキはパンツ一枚になった。

隠される前に胸に手を這わせる。

「あっ♡」

フブキのリクエスト通り、表面をなぞるようなフェザータッチで乳輪の縁をくるくると愛撫する。

「はっ♡んっ♡」

小さな乳首がだんだんと固く勃起し、フブキが顔をそむけた。

勃起しても小指の先ほどもない控えめで可愛い乳首に触れないよう注意しつつ愛撫を続ける。

「うんっ♡ん、んーっ……♡」

執拗に続けると、フブキが内股をこすりつけて腰をモジモジと揺らし始める。

「はあ、はあ……♡」

いつしか自然と目を閉じて、乳輪を愛撫される快樂にうっとりとして浸り始めるフブキ。

そして、前触れもなく両の乳首を摘んでゆっくりとしごき始める。

「はっ、あー……♡」

吐息が熱くなり、半開きになったままの口からとろりとよだれが垂れる。

それがソファに落ちる前にフブキにキスした。

「あむっ♡ちゅるっ♡ちゅっ♡」

乳首の気持ちよさを受け入れ始めたフブキが、さつきより積極的に私の唇を貪る。

フブキからも吸い付いて、乳首をもつといじってほしいという風に胸を突き出して来る。

だんだんと速度を上げ、押しつぶすように力をかけていく。

「んゝーゝーっ♥ うゝんっ♥」

シコシコと乳首をしごき立てるとつながった唇からフブキのよがり声が伝わってきた。

目を閉じながら眉を寄せて身体を強張らせ、乳首の気持ちよさに夢中になっている。

ふうふうと荒くなつた鼻息を感じながら乳首を責め続ける。

途中で乳首を離し、先端をカリカリと引つ搔いたり左右にピンピンと弾いたり動きを変えるたび、フブキはグイグイと下半身を押し付けてくる。

「ふうーっ♥ ふうーっ♥」

気持ちいいことに夢中になるあまり気づいていないようだが、小さな体は完全に発情していた。

ギョツ、と急に乳首を潰すと、フブキが唇を離して背をのけぞらせる。

「はっ、おっっ♥」

腹の底から響くような低い声とともに、フブキが乳首で絶頂した。身体を硬直させて絶頂に浸るフブキを眺めながら、今のうちにショーツを脱がせる。

まだ幼さの残るドーナツ柄の綿ショーツを下ろすと、むわっと酸っぱい匂いが立ち込めた。

にち、と静かな居住スペースに粘質な水音が響く。

細いフブキの脚をくぐらせて脱がせショーツを目の前に持つてくると、べったりと愛液のシミが出来ている。

「フブキが気持ちよくなってくれてるみたいで良かったよ。ゆっくりしていいこうね」

「んおお……♥」

白目を剥いてブルブルと絶頂に震えるフブキに声をかけ、私も服を脱ぐ。



勃起チンポをフブキの腹に押し付けた。

ドーナツばかり食べてはいるが、15歳の若さで未だ弛んではないな  
いその腹にぬらぬらと我慢汁がまぶされる。

無防備に男の前にさらされた綺麗なスジマンに指を這わせ、ふわふ  
わとクリームのように柔らかな外陰唇をくぱつと割り開く。

とろりと愛液の溢れる膣粘膜を撫で、乳首と同様に控えめな大きき  
のクリトリスをこちよこちよと撫でる。

「あゝっ♥んーっ♥」

のけぞっているフブキが粘つくような甘い声を上げ、脚を閉じてピ  
ンと伸ばした。

「あーっ♥んっ♥ういいーっ♥いいーんっ♥」

ゆつくりと人差し指一本でクリトリスをくすぐり、フブキをトロト  
ロに蕩けさせる。

喉を甘く震わせて言葉にならない快楽を表現するフブキにますます  
すチンポが勃起し、フブキの腹が我慢汁で汚れていく。

「可愛いよ、フブキ」

聞こえているかよくわからないが、フブキは脚を少し開いてクリト  
リスを撫でやすくしてくれる。

クリトリスを弾く指の速度を上げ、乳首もまたつまんでシコシコと  
扱き引つ張る。

「うゝっ♥うゝんんーっ♥」

くいっ、くいっと腰を突き出し、女の悦びに夢中になるフブキ。

一糸まとわぬその体は興奮を示すように桜色に上気している。

さつきつま先でふくらはぎをポリポリとかいていた時の色気の欠  
片もないポーズと同じなのに、ぐしよ濡れのマンコを弄ってもらうた  
めに脚を広げている今はチンポをイラつかせてやまない。

そろそろチンポをぶち込みたいので、ついに膣口に指をあて、つぶ  
りと侵入させる。

子供じみたアツアツの体温に、造りから小さな膣が人差し指を拒み  
つつも快樂とともに受け入れてくれる。

「あっ♥あっ♥」

くちゅ、くちゅ、と指をねじ込むとともに先ほど比べて可愛らしい声で啼くフブキ。

「膣内がちゃんと気持ちいいんだね。フブキはセックスの才能があるかもね」

食欲に続いて性欲に目覚めつつあるフブキに、1から10まで快楽を教えこんでいく。

入り口近くの天井、クリトリスを裏側から指圧し、同時にクリトリスの皮を剥いて愛液まみれの指でそつと摘む。

「はつぐ♥ い、あ、あああああつ♥」

今までで一番大きい声を上げ、全身をガクガクと痙攣させてピュツピュと愛液とも潮ともつかない液体を股間から垂れ流すフブキ。

膣がギュウギュウに締まり、少女の膣が男を受け入れる準備が整った事を示していた。

「それじゃあ入れるよ」

フブキの半端に開いていた脚を持ち上げて、チンポをはめられる体勢にする。

ぐつとチンポを膣口に押し当てても、

「あー……♥ はあー……♥」

夢見心地で膣イキの余韻に浸っている。

気持ちよさそうなフブキに思わず笑みを浮かべつつ、小さな穴の倍はある太さのチンポをねじ込み始めた。

「いたつ……え？ 先生……？ あたたつ、なんか股が痛いんだけど……」

グリグリと拡張していると、顔をしかめたフブキが余韻から帰ってくる。

「大丈夫だよ、そろそろ亀頭が全部入るから」

「えっ、やばっ、なんかちんこ入ってる!？」

ギョツと目を見開くが、時既に遅く、小さな穴だったフブキのマンコは快感で柔軟になり、大人のチンポを受け入れてしまっている。

「フブキの膣、狭くて熱くて気持ちいいよ」

「だからそういう事を言わないでっば！」

口を四角くして騒ぐフブキだが、全裸で赤面、何より可愛らしいマ  
ンコを思い切り拵げて私のチンポを受け入れながらだとそれも可愛  
らしい。

「あつ、やばいっ♥ はいってる、先生のおつきくて熱いの、はいっ  
ちやつてるって♥」

平坦な胸はフブキの視界を遮ること無く、開かれた自分の股と膣穴  
にねじ込まれるチンポをばっちりと見せてくれている。

「最初はちよつと痛いと思うけど、我慢してね」

「ちよ、ちよ、深い♥ もう心臓の辺りまで来てない?」

「まだおへそにも来てないよ」

しげしげと目を丸くして自分の股間がチンポを飲み込んでいくの  
を凝視するフブキ。

処女の鋭敏な感覚が私のチンポを過大に感じているのか、生唾を飲  
みながらお腹をさすつてあるはずのない感覚を確かめている。

フブキの小さくもむっちり柔らかいお尻を掴んで引き寄せつつ腰  
を押し出すと、少しずつ処女膣が私の形に押し伸ばされて受け入れて  
いく。

「あつう……♥ あつ、今、当たってる?」

「うん。フブキの処女膜だね。破つていい?」

「良くないけど。……先生がやりたいんだったら、しょうがないし。

……やれば?」

「じゃあ遠慮なく」

グツと力を込めて腰を突き出すと、ぷつつと軽い手応えとともにチ  
ンポが沈んだ。

そのまま、特段の抵抗無く奥まで侵入していく。

「んっ……あれ? コレで終わり?」

眉をしかめて身構えていたフブキが怪訝な顔でつぶやく。

「フブキが痛くないならそうなんだろうね。やっぱりセックスの才能  
があるよ」

「だからそういう事を女の子に言わないでっば……! あつ♥」  
ぴくん、と肩を跳ね上げるフブキ。

「ここ、よかった？」

膣奥の少し手前を、ぐいっと亀頭で押し込む。

「んっふ♥　なんか、ぞくって来る……」

「じゃあしばらく擦ってあげるね」

「いや、そんな気を使わないでいっ♥　あっ♥」

く、く、く、と小さな腰使いで、処女喪失直後の膣を馴染ませていく。

「ちよ、やめっ♥　そこ、変な感じっ♥　する、からっ♥」

不安げに私の肩辺りを掴んで、初セックスの快楽に耐えるフブキ。

その初々しさが可愛らしく、風呂上がりでしっとりした前髪を除けて額にキスした。

「なにさ、せんせっ♥」

「いや、フブキが可愛くて」

膣がキyunと締まった。

「変な顔、してるっ♥　だけ、でしょっ♥　んっく♥　なんか、お腹の、奥、うずうずしてっ♥」

「初めてで奥が感じるなんて、中々ないよ。フブキは天才かもしれない」

「ほんとに、まったく、うれしくないっ♥」

フブキは藪眺みになりながらも、声はセックスの快楽に上ずってしまふ。

「気持ちよくなる才能はあるに越したことないと思う」

指一本で乳首をこね回し、更にクリトリスもそっと親指で押しつぶす。

「あゝーっ♥　それだめっ♥　全部されたらっ♥　ビリビリやばいっ♥」

初心者のフブキには一番効く、クリと乳首責めだ。

ギユウギユウと膣が締まり、それにともなう膣奥の性感帯にも強く当たるようになる。

「おつき♥　先生の、ちんこっ♥　おつきすぎ♥　おなかこわれるからっ♥」

自分から膣を締めている事にも気づかず、私のチンポが大きくなつたと錯覚するフブキの乳首とクリトリスを更に責め立てる。

「んっ……っ……っ♡ いっ……っ……っ♡♡」

フブキのイキ声は大きく、居住スペースにわんわんと響いた。

「そんなにされたら、出るっ」

一番奥の締め付けがふわりと緩む場所をめぐらせて私の精液が放たれる。

フブキの絶頂処女膣がポンプのように収縮し、精液を奥へ奥へと絞り出してくれるようだった。

「あーっ♡ でてるっ♡ あついでてるっ♡」

悩ましげな鼻にかかる声をあげ、フブキが悶える。

15歳にして子作りの気持ちよさを存分に味わっていた。

フブキは涙をいっぱい溜め子作り行為をしてしまった大人に非難の視線を浴びせているが、それも鋭さは無く子種を受け入れる快感に蕩けてしまっている。

「なにかんがえてんのっ♡ こんな事したら、赤ちゃんできちゃうのにつ♡」

「フブキ、膣内射精をしなくても勃起したチンポを入れたら妊娠の可能性はあるんだよ」

フブキはくわつと目を見開いた。

「じゃあ余計だめじゃん!? ……せ、先生は私に赤ちゃん産ませたいの? ……一生ぐーたらしていいならお嫁さんになってあげてもいい、けど……♡」

言いながら、顔を赤らめてチラチラと横目で私を見る。

膣もキュンキュンと締まっていた。

「いや、避妊薬あるから飲んで」

フブキは一転してムツと頬をふくらませる。

「はいはい、先生はそういう人だよな」

ぷりぷりと怒ってはいるが、私の勃起チンポからまだ精液を絞り出している途中だ。

「赤ちゃんは卒業して大人になってから考えようね」

フブキの艶やかな髪を撫でつつ膣奥に性液を出し切る。

「3食昼寝付きならいつでもお嫁さんにはなつたげるから、先生が相手に困ったら言つてよね♪」

にしし、と屈託なく笑うフブキから少し視線を下ろす。

汗だくの裸体に小さな胸の膨らみ、その頂点の勃起乳首が、フブキがもう処女ではなく私のセフレになったことを示していた。

じとっ、とフブキが私を睨む。

「……なんでまたおつきくしてるのさ?」

「フブキが可愛いからまた興奮しちゃった」

「えー? なんか汗かいて疲れたし、ドーナツ食べた」

ドーナツを食べさせながらのセックスをして、もう2発膣内射精するのだった。

「またドーナツ買うの?」

「当然じゃん、そういう約束だったでしょ?」

その後、ふたたび風呂に入りもう一発膣内射精して汗を流した私達は、子宮に精液をタプタプに収めたままのフブキとともにマスタードーナツに訪れていた。

フブキは単価の高いドーナツばかりを10個ほど選んでボックスに詰めてもらう。

既に日も暮れた街中で、フブキはしきりにお腹をさすっていた。

「時間が経つと垂れてくるらしいから、早く家に帰ったほうがいいよ」

「ちよ、バカ! こんな場所で何いってんの!?!」

かあつと顔を真っ赤にして辺りをキョロキョロ見渡すが、通行者は誰も気にしていない。

「あー、もう、早くドーナツ頂戴つてば」

「味がどうだったか教えてね。……初めての売春の味だから」

最後に耳元で囁くと、フブキが大きく口を開けた。

「ばいっ!? ……つくううう……」

声を張り上げたいが自分から注目されるマズさを理解してこらえ

ている。

私は真つ赤になったフブキの耳をつう、と撫で、シャーレに向かって歩き出した。

「んっ♥ お、覚えてなよおお……！」

ちらりと肩越しに見ると、珍しく悔しげに頬を膨らませて涙目になるフブキが私を睨んでいた。

後日聞いた話によると。

——ねとねとして、喉に絡んで……いつもより甘ったるかっただそうだ。

やりたいことをやるのが「遊ぶ」事（アヤネ）

「ほらほら、先生！ コレなんて凄いですよ！」

そう言っただアヤネが抱えているのは、なんと一抱え以上はある発電機だった。

「うわ、大きいね」

と言いつつ、私の視線は金属の筐体に乗つけられた柔らかかなアヤネの胸に向けられている。

ここはセリカが福引で権利書を当てたリゾート……の倉庫だ。アヤネはリゾートならもつと他にすることがあるんじゃないかと迷いつつも、倉庫に金目のものがないか漁ることにし、私も宝探しとしてアヤネの遊びに付き合うことにした。

「えへへっ。このラウンドは私の勝ちですね、先生！」

初めは迷っていたアヤネも、だんだんと素直に楽しめるようになって、汗を浮かべつつも顔は笑顔だ。

「ふう。流石に暑くなってきたね」

私がそう言うと、ヘリにはギリギリ積みかさそう大きな大きさの発電機を床に置き、アヤネは喉元を腕で拭いた。

「そうですね。脱水症状になってもいけませんし、休憩にしましょう」アヤネの15歳にしては十分巨乳な谷間を汗が伝っていくのを見て、チンポのイライラが高まっていく。

倉庫で見つけたビーチチェアを並べて、倉庫を出てすぐの日陰で2人して涼んだ。

「ん……風が、潮の匂いですね」

ビーチチェアにちよこんと座って、吹き抜ける涼しげな風に目を細めるアヤネ。

風が止んだ時にむわりと広がる甘酸っぱいアヤネの匂いにチンポがイライラする。

「アヤネ。ここからは私の遊びに付き合ってくれないかな」

「えっ、先生の……ですか？ も、もちろん良いですよ！ ふふっ、先



生のやりたいことってなんなのか、楽しみです」

居住まいを正して微かに赤面し、私の次の発言を待つアヤネ。

私はアヤネのビーチチェアに座り、身体を密着させた。

「はいっ!? せ、先生!?! ど、どうされたんですか?」

「アヤネとセックスしたいんだ」

大きく目を見開いて、口をはくはくさせるアヤネ。一拍置いた後、

「えええええええええええ!?!」

リゾート中に聞こえるような大声を上げた。

「可愛い水着姿を見ていたら我慢できなくて。どうかな、アヤネ」

「どっ、どっ、どっ、どうかなって!?! あ、う、え、」

顔中どころか、ツンと尖ったエルフ耳の先まで赤いアヤネ。

「じよ、じよ、じようだん、とか……」

「本気だよ」

アヤネの腰を抱き寄せ、身体を更にくつつける。乳の側面が私に押し付けられ、上下にずれた乳房が普段とは違う谷間を作った。

「あうう……」

どくん、どくん、とアヤネから伝わる力強い心臓の鼓動を感じつつ、その細くて白い顎をそっと持ち上げる。

「ぐくっ……!?!」

ぎゅつと目をつむり、キスを待つアヤネ。遠慮なくそこに唇を重ねた。

「んっ……♡」

緊張で固い唇をゆつくりと吸い、じつとりと汗をかいた髪を梳く。

少しずつこわばりを無くしていくアヤネの唇に、舌を侵入させた。

「んむうっ!?!」

見開いた目がぐるぐるになっていて、アヤネの困惑ぶりが伝わってくる。

ウインドブレーカーに包まれた腕をさすり、不安で拳を握っていた手を指を絡めて握り、アヤネの心を宥め、解きほぐす。

ゆつくりとアヤネの口内を舐め回す。

薄目になったアヤネは目尻に涙をたつぷりと溜め、それが地面の照

り返してキラキラと輝いていた。

時折風が吹き抜け、ヤシの木の葉を揺らす音や、遠くからはセリカやノノミが楽しんで海遊びをしている声も遠くに聞こえる。

そんな中、2人して口元をベタベタにしながらひたすらディーブキス続ける。

上顎の裏を舌先で撫でると、

「んーっ……っ♥」

鼻に抜ける声を出しながら、恋人つなぎの手をキュッと握ってくる。

アヤネの気持ちいい所を発見した私は、執拗に繰り返した。

「ふーっ♥ んんっ♥ んむうっ♥ へんふえっ♥ あめっ♥ しょ

れ、あむっ♥」

私の腕の中で昂ぶっていくのが手にとるように伝わってくる。

抵抗しようとするアヤネを愛撫で無力化して続けていると、

「んゝううううう♥♥♥」

くぐもった低めの声を上げて、全身を痙攣させた。ちゅるりとアヤネの唾液を吸いつつ口を離す。

「はあ♥ ぜえ♥」

口を大きく開けて熱い吐息で息を整えながら、私にもたれ掛かってくるアヤネ。

「どう、アヤネ？ 気持ちよかった？」

さつきよりも汗だらけになったアヤネの身体を抱きしめながら訊くと、上目遣いで、少し非難がましく私を見つめたアヤネが答えてくれた。

「ううう……き、気持ち、良かった、です……♥ こんな事、言わせないでください……♥」

非難しながらも、どこかその事自体に快感を感じていそうな、ネットリと情欲のこもった返事だった。

「さあ、じゃあセックスしようね」

キスだけで絶頂してしまつて身体に力の入っていないアヤネをビーチチェアに寝そべらせる。

「あうう……ほんとうに、こんな所でしてしまっんですか……?」

建物の裏手とはいえ、ここは涼しげな風の吹き抜ける屋外だ。

アヤネはキョロキョロと辺りを見渡すが、倉庫と防風林、そして合間にきらめくように海が見えるだけだった。

「大丈夫、みんなはここには来ないよ」

そう言いつつ、もうセックスをすることには異存のなさそうなアヤネの態度にチンポのイライラが最高潮に高まった。

ジーンズ地のホットパンツのようなアヤネの水着の下に手をかける。

「ぐくっ……♥」

アヤネが生唾を飲む音が聞こえる。顔を真赤にして口元を両手で抑え、自分が脱がされる所を食い入るように見つめていた。

脱がしてみると水着らしいインナーが見え、そのままずりおろした。

「~~~~~!」

抑えた口元から悲鳴が漏れる。アヤネの15歳の処女マンコは地面からの強い照り返しで幻想的なまでに白く、薄くも生え揃った陰毛は愛液に濡れて黒々と輝いて見えた。

それと同時に、愛液にまみれた股間と水着が糸を引いて、酸っぱい匂いが立ち込める。

「あ、い、いやっ♥」

その匂いを私に嗅がれたのが限界を超えたのか、アヤネが声を出しかけるが、ふいに強い風が吹き抜けて大海原に私達のセックス臭を運んでいった。

「大丈夫だよ、アヤネ。アヤネの匂いはとってもいい匂いだから」

私がニツコリとそう言うと、アヤネは涙目で顔を反らした。

「あ、あ、ありがとう、ごさいます……」

股間の匂いを嗅がれた相手に対し、他に何を言ったら良いのかわからない中での精一杯の返答に興奮した私は、手早く服を脱ぐ。

「ほら、アヤネ。コレで私もお揃いだよ」

「きゃあっ!?! こ、これが……先生の……♥」

寝そべったままのアヤネが、くわつと目を見開いて私のチンポを凝視する。

「さわってみる?」

「えっ!? い、良いんですか……?」

予想以上に興味津々だったアヤネは、身を起こして私のチンポに手を伸ばした。

「あ、熱い……です♥」

そつと触れ、指先で撫でる。ひやりとした感触に、チンポが跳ねた。

「わわっ!? 大丈夫、ですか?」

「うん、アヤネの指が気持ちよかったから」

「そ、そうなん、ですか……♥　じゃあ、もつと……触ってみていいですか……?」

気を良くしたアヤネが、私の指導の元チンポを握る。

片方の手で金玉を優しくほぐし、片方の手で力強く竿をしごき立てる。

「おお……いいよ。アヤネは飲み込みが早くて偉いね」

「そうですか?　先生が気持ちよくなってくださってるなら、嬉しいです……♥」

シコシコシコシコッ!　と手首のスナップを効かせて、残像さえ残りそうな速さで手コキをしてくれるアヤネ。

熟練の風俗嬢のように、にこやかな笑顔を浮かべつつ私の顔色を探り、気持ちいいやり方をどんどん学習していく。

手の輪っかでカリを持ち上げるようにするやり方を探り当てられ、急速に射精が近づいて来た。

「わあ、玉の方が、なんだかキュツとしてきました♥　これも気持ちいいから、なんですか?」

金玉も優しく揉むだけではなく、くすぐるように指先で愛撫されてゾクゾクと精液が煮えたぎるのを感じる。

「ああ、そろそろ、射精しそうな合図だよ」

「射精……男性が気持ちよくなって絶頂するってことですよね……♥　先生、どうぞ遠慮なく射精なさっていいですよ♥」

さつきまでの恥じらいは消え、男を射精させる事に打ち込む奉仕精神とメスの自尊心を満たす愉悦とでアヤネの口角は釣り上がり、目は怪しく細められている。

「さあ、先生♥ 私の手で気持ちよくなってくださいね♥」  
ニコニコと深い笑みを浮かべながらの手コキで、思いきり射精した。

アヤネの胸の前で扱っていたため、首から胸にかけて精液が降り注いだ。

「わっ……♥ あ、熱いです……♥ それに、この匂い……♥」  
べつとりと黄ばんだ精液がアヤネの白い肌や青白ストライプの水着を汚す。

アヤネは谷間の上端にプルプルと溜まった精液を指ですくい、口に含んだ。

「ちゅく……♥ んむっ……♥ んくっ♥ 精液って、こんな味なんですね……♥ これが、先生の……♥ ふふふ……♥」

うつとりと陶酔の笑みを浮かべるアヤネに興奮し、射精したばかりのチンポがすぐに回復する。

「ちゅぷっ♥ ごくっ♥ ああ……先生の味、とっても濃ゆいです……♥ ひゃっ?」

少しづつ精液を口に含んで賞味していたアヤネの肩を掴み、羽織っていた上着を脱がせた。

「え、あ、先生、その、これは……えっと……」

精液でトリップしていた自分を思い返して赤面するアヤネをよそに、水着の上も脱がす。

これで、私たちは2人して屋外で靴を残して全裸になった。

反射的に胸を隠そうとする腕を少し押し留めると、諦めて私に全部見せてくれる。

「アヤネの乳首、綺麗だね」

「うう……恥ずかしいです……♥ ほんとうに、大丈夫でしょうか?」

チラチラと辺りに視線を送るが、周辺には人の気配は無い。

「大丈夫だよ、仮に見られても堂々とすればなんとかなるって」

「それはならないと思いますよ!?!」

想像してしまったのか顔をポンツと急速に赤くして抗議してくる。

「じゃあ、次はお返しに私がアヤネを気持ちよくするね。脚、開いて」  
「あうう……♥ は、はい……♥」

爽やかな潮風の吹き抜ける中、強い日差しの落とす影と照り返しの間接照明で幻想的に白い肌をきらめかせ、アヤネがビーチチェアの上でM字に股を開く。

今までの行為で股間はベトベトに愛液で濡れており、甘酸っぱい汗と愛液の匂いが私の精液の臭いを押しつけて鼻腔に届く。

「あああ……♥ こんな格好、恥ずかしいです……♥」

そう言いながら、幼さの残るスジマンが股を開いた事で少し緩み、美しいピンクの膣穴がぽっかりと男を欲して愛液を垂らしている。

「アヤネは恥ずかしいのも興奮するでしょ?」

「意地悪を言わないでください……♥ だって、恥ずかしいって思うと、お腹の奥が熱くなって……♥」

アヤネのむっちりした太ももを掴み、更に高く脚を上げさせる。唇のように滑らかで美しい処女の外陰唇に口づけた。

「ああっ♥ 先生♥ そんな所、汚いですっ♥」

ちゆる、じゆる、とアヤネの苦酸っぱい愛液を吸いながら丁寧にヒダの裏側を舌で掃除するように舐め回す。

「ああーっ♥ ん、はうっ♥ うーっ♥」

いよいよ始まった本格的なペッティングに、アヤネがよがり声を上げる。

「あんまり大きいとみんなに聞こえるかもね」

「えっ、あう、せんせっ♥ まって♥ あ、んむうううっ♥」

私がボソリとつぶやいたのを聞きとがめて、アヤネが何かを言おうとしたのをクリトリス吸いで中断させた。

今までで一番大きい声を上げそうになったアヤネが口を全力で抑え、なんとか尊厳を守り抜く。

顔も胸元も桜色に上気させたアヤネが眉を寄せて私を睨んでくるが、私はニツコリと笑顔を返してクンニを再開した。



すでにトロトロの膣は、処女にも関わらず少し力を入れるだけで龟头を飲み込む。

「あつ♥　これが、さつき私が握ってた、おちんちん……なんですね♥　身体の中だと、すごく熱く感じます♥」

穏やかとさえ言える笑顔で、膣がチンポを受け入れる様を見守るアヤネ。

ふとももを掴み、腰を押し進めるとすぐ処女膜に到達する。

目を合わせて、無言の内に頷いたアヤネにほほえみを返し、一息に破った。

「つつ、う……あ、いえ、でも思ったよりは痛くない、です」

こうして、リゾート島の屋外でアヤネは処女を喪失した。

ずぶずぶと残りのチンポを押し込めるところまで押し込む。

半ばを過ぎた辺りで、アヤネの膣の最奥までたどり着いてしまった。

「ああ……♥　先生の、おちんちんが……お腹の中いっぱい、入っちゃってます……♥」

アヤネが下腹部を優しく手でさすり、満足げにささやく。

「あの、先生。男の人って、ここから腰を動かすんですね。私のことは気にしないで大丈夫ですから、どうぞ♥」

若干顔を強張らせつつ提案してくれるが、私は腰を動かさずアヤネの頭を撫でた。

「大丈夫、アヤネもちゃんと気持ちよくするから。その方が私も楽しいんだ」

「……はい♥」

アヤネは頭を撫でる私の手を取り、そつと頬に手を当てさせて頬ずりする。

アヤネが心地よさそうに目蓋を閉じてしばらく浸っていると、少しずつ膣から強張りが解けて行くのを感じた。

「先生、そろそろ大丈夫みたいです」

「うん、ありがとう、アヤネ。じゃあ行くよ」

アヤネの下腹部に置かれた可愛らしい手に、私の手を重ねる。



吹き抜ける風で汗が冷えた体表はひんやりとしていて、その下の腹の中の膣はお風呂のように温かい。

そのコントラストも味わいつつ、少しだけ腰を引く。

「は、ああ……♡」

アヤネの膣は処女なのにネットリと絡みつき、私が腰を引くのに膣肉もついてくる。

ずりずりと少しずつ腰を引き続けると、膣口から中のヒダが少しはみ出してきた。

甘えん坊のようにチンポを抱きしめて離さない膣に限界が来て、ぷりんとカ리를刺激しながら反動で奥に戻っていく。

「ああうっ♡」

アヤネにも刺激が強いのか、膣がカ리를撫でるたびに甘い声を上げていた。

「せんせっ♡ お、お腹の中っ♡ ひっかかって♡ ひっかいて、ます♡」

「アヤネがさつき手コキで気持ちよくしてくれた段差の部分だよ。気持ちいい?」

「っ……♡」

こく、こく、と声もなく頷いて、腰を引く時のカ리의感触に没頭するアカネ。

亀頭が入り口近くまで来ると、柔らかな膣肉が入り口から完全にはみ出していた。

その淫らな光景を目に焼き付けつつ、アヤネの細い腰を掴んでまた押し込む。

「はっ♡ く、ううう……♡」

アヤネは私の二の腕辺りをすぎるように掴んで、180度近く開いた股を凝視して自分の膣にチンポが収まっていくのをただ受け入れられている。

「はあ……はあ……♡ 先生の、すごく、太いですね……♡ お腹の中いっぱいです……♡」

汗だくの頬に髪を張り付かせ、うつとりと目を細める。

白いビーチチェアに破瓜の血が愛液に薄められて赤の斑を描いていても、アヤネはセックスを「やりたいこと」として伸び伸びと楽しんでいた。

急速に女になっていくアヤネが少女のまままでいる内に膣内射精しなくなり、私は腰の動きを再開する。

さつきとは違い、絡みついた膣肉が断続的にカリをなで上げ、柔らかな膣肉が多めにはみ出す。

それを間髪入れずに押し込み、アヤネの子宮をどすんと押し上げる。

「あーっ♥ んうーっーっ♥」

これまでとは段違いの刺激の強さに、アヤネが叫ぶようによがり声を上げ、必死に手で抑える。

アヤネのほっそりした腰を掴んで等速で腰を振り、ねとねとに蕩けた膣肉でチンポを扱いてくれる生徒に甘えて快楽を貪った。

ぱん、ぱん、ぎし、ぎし、とビーチチェアをきしませて、アヤネを犯す音が辺りに響く。

「んーっ♥ んおーっーっ♥♥♥」

両手を口に当てて必死で声を抑えるアヤネは初セックスにして快楽をしっかりと感じられているようで、ポロポロと目尻から涙を流しながらも私の腰に脚を絡めてしっかりとホールドしていた。

時折腰の後ろにビーチサンダルが当たり、脚に押されて私達の腰がもつとくっついていく。

リクエストに答えて、アヤネの膣の一番奥を更に押し込むようにチンポをねじ込む。

「おっ、ぐ♥ うっ、うううう♥♥♥」

臍のあたりが少し持ち上がったように膨らみ、アヤネの小さな膣が私のチンポをすべて飲み込んだ。

根本までみっちり締め付けられたチンポが急速に射精感を高めていく。

「アヤネ、中に出すよ」

腰を止めてハッキリとそう言うと、アヤネはポロポロと涙をこぼし

ながらコクコクと何度も頷いた。

「だしてっ♥ だしてえ♥ せんせ……♥」

腰の動きが止まったことで口をきく余裕ができたアヤネが、熱に浮かされたように子作り行為を受け入れる。

愛おしさに覆いかぶさって、アヤネを抱きしめてキスをした。

「んっ♥ ……ん、む、ううううう♥♥」

キスしたまま最後の全力ピストンを3回程叩き込み、一番奥で射精する。

「んーんーんーっ♥♥♥ うーんーんーっ♥♥♥」

アヤネは腕と脚を私の身体にからめて、抵抗できない位の力で強く抱き寄せながら膣内射精で絶頂してくれた。

「んう♥ ちゅ♥ ちゅるっ♥」

アヤネの絶頂膣のうねりが精液を絞り上げ、恍惚のままに唇を吸い立てる。

幾筋もの涙の痕が行為と快楽の激しさを物語っていた。

どぶ、どぶといつまでも射精できそうに脈動するチンポでアヤネの奥深くを私に染め上げる。

アヤネもまた、しっかりと私の身体を抱きしめてもっともっともっとして子供のようにねだり続けた。

「ふう、ふう……♥」

射精が止まってもアヤネのキスは止まず、膣もきゅんきゅんと嬉しそうに締め付けてくれるので、また勃起が回復してしまう。

「あ……♥ 先生、またおつきくなってます……♥」

自分の態度が2回めを誘発したことなどまるで理解していない少女の無邪気さで、アヤネが笑った。

「その、先生がしたいのでしたら、私はいくらでも付き合いますので……♥」

ウキウキで膣を締め付けながら、覚えてたの性欲のはけ口を無意識に求めるアヤネの頭を優しく撫でた。

「その前に、汗をかいたから飲み物を飲もうか。あと避妊薬もね」

「ひに、ん……？ あっ!? そ、そうでしたね。このままだと……先生と、赤ちゃん、できちゃいますね……♥」

言葉とは裏腹に愛おしげに下腹部を擦るアヤネ。

がつしりと抱きつかれながらなので、駅弁のようにアヤネと結合しながら立ち上がった。

「あうっ♥ これ、一番奥に、突き刺さっちゃいます……♥」

私に抱っこされて、より身体を密着させて抱きついてくる。柔らかな乳房と勃起した乳首が汗にぬめり、密着感も強く私の胸板に押し付けられた。

カバンは入り口近くの日陰に置いたはずだが、アヤネとセックスしている間に日が傾いて一部日向に出てしまっていた。

チンポを挿入しながらなんとか腰を落とし、取手を握ってビーチチェアに戻る。

「はい、これを飲んでね」

避妊薬とペットボトルの水を私、目の前でアヤネに飲んでもらう。ぬるくなつた水を私も飲み、

「あ……間接、キス……♥」

チンポをグツポリと咥え込んだままのアヤネに赤面された。

「じゃあ、もう一回しようか。今度はアヤネに上になつてもらおうかな」

そう言うと、アヤネの汗と愛液と破瓜の血で濡れたビーチチェアに横たわる。

素っ裸のアヤネの身体が、地面からの照り返しで身体の凹凸を強調して美しくライティングされる。

「えっ!? あ、あの、この格好ですか？ うう……♥ こんな所、誰かに見られたら……♥」

これまでは私の身体の下に居たのでそこまで気にならなかつたのだろうが、アヤネはしきりに後ろ……防風林とその先の砂浜や海……を気にし始めた。

「それなら、後ろを見ながらしたら良いよ」

私にまたがったアヤネの太ももを持ち上げ、ぐるりと回転させる。

「あっ♥ んんっ♥」

ドリルのように膣奥をえぐられ、アヤネが艶めかしい声を上げる。膣の締めりとともに背面騎乗位になった。

「あ、あのっ♥ これ、余計にすごい格好になってしまっているような……♥」

綺麗な背中ごしにアヤネは私を見るが、私はむっちりとした尻を撫でながら軽くチンポを突き上げた。

「あうっ♥ わ、分かりました……♥ このまま、セックスしますね♥」

そう言うと、アヤネは私の膝に近い太ももに手をおいて腰を上げる。

ずるん、と膣口にビラビラがはみ出すのをゆったりと鑑賞しつつ、尻が上がったことでアヤネの可愛らしい肛門もバッチリと見ることが出来た。

「アヤネの身体、どこも綺麗だね」

尻たぶを掴み、押し広げて肛門を左右に伸ばすと、少しだけ色素が沈着した肛門がぱつくりと開いた。

「やっ♥ せんせっ♥ そこはっ♥ 汚い所ですから♥」

ようやく肛門を見せている事を自覚したアヤネが私の手首をつかむが、その力は弱い。

「大丈夫だよ、アヤネは全部キレイだよ」

アヤネの愛液を指にまぶして、人差し指を肛門に挿入した。

「はうっ♥ だめっ♥ お、おしりの穴なんて……♥」

痛いくらいに指を締め付ける肛門の括約筋を撫でるように指を回しながら、ごく浅い所を遊ぶように入りする。

「うっ♥ んーっ♥ だ、だめですっ♥ なんか、変な感じがっ♥」

「ほら、アヤネ。頑張つて腰を動かして」

肛門に指一本でふにやふにやになってしまったアヤネの尻をぴしゅんと叩く。

「あうっ♥ す、すみませんっ♥ 動揺しました……♥ うござい、ますっ♥」

ビーチチェアにガニ股で足を踏ん張ったアヤネが、アナルに指を挿入されたままで腰を上下させる。

「はーっ♥ はーっ♥ はーっ♥」

膣はギチギチに締めり続け、アナルも常に力を入れていなければ抜けそうなくらいに押し出す力が強い。

アヤネの顔はキョロキョロと間断なく辺りを見回している。

「んーっ、遊んだ遊んだ！ ノノミ先輩、飲み物ってまだ残ってましたっけ？」

「ええ、冷蔵庫も動いてるし、冷えたのをみんなで飲みましょうねー」  
♣

ギチリ、食いちぎるくらいに強く膣が締まった。

「せ、せ、先生！ どどどうしましょう!?!」

耳まで赤面し、涙目で振り返るアヤネ。

「大丈夫だよ、倉庫じゃなくて冷蔵庫に行く所だから」

ずん、と強く腰を突き上げると、アヤネの顎がガクンと上を向いた。

「んきゅううううううっ♥♥♥♥♥」

不意打ちの一撃が、予想外に深い絶頂となりアヤネを襲う。

夏の大きな入道雲に向かって、アヤネの恥ずかしい絶頂声が響き渡った。

「……あれ？ なんか今聞こえなかった？」

「そうですか？」

「なんか、『きゅー』みたいな……鳥の声かな？」

「あー、多分そうですよ。ウミネコさんかもしれませぬえー」

「ウミネコ！ 名前は知ってるわ！ へー、どこにいるのかなー？」

「……セリカちゃん、まずはお飲み物にしませんかー？」

「つと、そうでした！ 待ってくださいよシロコ先輩！ 私の分残し  
といてってばー！」

どく、どく、どく。

アヤネの締め付けに耐えられず、2発目の射精を奥深くに放ちながら、2人で息を殺していた。

「っ、はああああああ……し、しぬかとおもった……」

がつくりと肩を落としてアヤネが脱力する。

「でも、気持ちよかったですよ?」

「それは……はい♥ 恥ずかしくて、ドキドキして……死ぬほど、気持ちよかったです♥」

肩越しに振り返ったアヤネの横顔は悪戯を成功させた子供の笑顔で、女と少女を行き来する幻想的な美しさのアヤネに腔内射精しながらも見とれてしまった。

その夜は案の定気づいていたノノミにみんなに隠れてたつぷりと(性的に)絞られてしまったが、充実したバケーションに色んな意味で満足した。

## 素敵なレディーとは（カエデ）

夏の盛り。生徒たちも夏休みなのだが、この日は仕事中に來客があった。

自動ドアが開くなりパタパタと駆けてくる……そして駆けてくるに従ってぼいんぼいんと大きな胸を揺らしている……生徒は、カエデだ。

「先生先生ー！　ねえねえ、今日、私なんかいつもと違うでしょ！　わかる!？」

ニッコニコの笑顔で、外から走ってきたのか汗を浮かべながら、椅子に座って仕事をしていた私にまわりつくように左右に揺れながら話しかけてくる。

142cmの小柄な体格に見合わない、私の握りこぶしより大きな胸が目の前で左右に揺れてチンポをイライラさせてくる。

「違う？　うーん、そう言われると確かに何か違和感が……」

免罪符を得たので、育ちきらない青さと犯されるのを待ちわびているような色気を兼ね備えたカエデの体を舐め回すように見つめる。

中々理解しない私に業を煮やし、カエデがソワソワし始めた。

「あつ、あー、外と比べてここはすずしーなー」

棒読みでそう言つて、両手を上げてぐいっと伸びをする。

背を反らしたことでカエデの巫女服のような白の布が引き伸ばされ、胸の形を強調した。

その一切垂れのない重力を知らぬおっぱいを凝視していると、ふと気づく。

「あれ、何か下に着てるの？」

普段は見えている胸と腋の境に、普段の赤いインナーと違う白い布が見えている。

私が指摘すると、にぱつと満面の笑みを浮かべてカエデが顔をぐいと近づけてきた。

「えへへー！　分かる？　今日ね、みんな水着を新しく買ったの！」



真夏の太陽のように明るい笑顔で、ぐいぐい体ごと密着してくるカエデにチンポをイライラさせながら話を聞いた。

なにやら機械が暴走したりしたらしいが、その場にいた皆で協力して事態を収めたのだという。

私のセフレが2／3位を占めるメンツだったので、仲が良いのほどもありがたい事だ。

「やっぱり先生は分かってくれるんだねー！ 好きー！」

ニッコニコの笑顔を浮かべるカエデに、私までつられて笑顔になる。

ニコニコと話を聴いていると、カエデがハッと何か思い出したような顔をした。

「そうだつ！ 水着来てきたのは、先生にも見てもらいたいからだつたんだ！」

おもむろに前の合わせを緩め、ぱつと服を脱いだ。

「か、カエデ!？」

分かっているけど、ロリ巨乳のカエデが眼の前で脱衣するのはチンポのイラつきを抑えられない。

ぶるん！ と着物的な制服の合わせ目が解き放たれ、水着に包まれていてもなお強く弾む胸が放り出される。

「どうどう？ 普段の制服と同じ色合いでおしゃれでしょー！」

腰の飾り紐をしゅるりと解いて、袴のようなスカートを床に落としながら満面の笑みを浮かべるカエデ。

ローライズの角度とハイレグの角度の水着を重ねたような、布面積を増やしながらも大胆に尻の側面だけ露出するスタイルの蠱惑的な水着が、子供そのものの小柄さで肉感的な女体をしたカエデによく似合っている。

「うん、カエデにとってもよく似合ってるよ」

「そうでしょー！ そうでしょー！」

腕をパタパタさせてはしゃぐカエデが可愛らしく、チンポをイライラさせながらも笑顔で眺めた。

「せんせー！」

突然、カエデがこちらに飛び込んで、座った私の膝の上に乗っかるように脚を拵げ抱きついてきた。

もにゅん、と水着に包まれた、いつもより柔らかさと弾力をはつきりと感じる胸が押し付けられ、瞬間的にチンポのイライラが高まる。

「ねーねー、先生も一緒に海に遊びに行こうよー!」

「うーん、ありがたい申し出だけど……都合が付けばね」

夏は揉め事も多くなり、私がいともやっっている不良少女達の仲裁なんかも多い。身体が空くかどうかは微妙な所だ。

その気配を感じ取ったのか、カエデの笑顔が一気に陰ってしまった。

しゅんと耳を垂らし、うるうると瞳を潤ませて私の胸あたりのシャツを掴み、身体を更に密着させる。

「えー? いーこーうーよー! おねがーい、先生☆」

普段の制服ならそれなりの厚さで守られているのだが、ピツチリと乳房の形がはつきり分かるような水着でやられると破壊力がまるで違う。

水着の下の、未だ快楽さえ知らないような乳首の感触さえ感じられるほどに強くカエデの胸を押し付けられ、否応もなくチンポのイライラが高まってしまふ。

「ねー……んっ? 先生、何かポケットに入れてる?」

カエデの股間に私のチンポが触れてしまったようで、首を傾げながらそこに触れようとする。

「あつ……これ、おちんちん?」

さすがのカエデも最低限の知識はあるようで、私の股間を無邪気に撫で回してその可能性に至った。

「ごっ……ごめん、なさい」

顔を真っ赤にして手を小さくバンザイしたような不自然な位置で固定して、カエデが謝った。

「ううん、良いよ。でも男の人の股間を不用意に触ったらだめだよ、カエデ」

手コキとしても気持ちよくズボンの中では先走りがすでに滲んで

いたが、私は笑顔でカエデを赦した。

しかしカエデは私の膝の上から下りず、むしろ今度はそつと腕を私の背中に回して正面から抱きついてきた。

「……先生は……私の身体で、興奮してくれたの？」

いつもの元気娘からは想像も出来ない、か細い囁きが私の胸のあたりの高さで聞こえる。

「うん、カエデはとっても可愛いからね。だから男の人に触れる時は気をつけなきゃだめだよ」

「先生じゃなかったら、こんなコトしないよ」

身体を預けるように体重をかけ、大きな乳房を柔らかく潰しながらカエデは私を見上げた。

その表情に切実なものを見て取った私は、即レイプすることなくカエデの頭をそつと撫でる。

「カエデ。こういうことはね、将来、好きな人と……」「私は、」

私の言葉を遮って、カエデの言葉が強く響く。

『はじめて』は、先生とが良い」

不安げに瞳を揺らし、いつも笑顔の口をきゅつと固く引き結びながら、カエデがハッキリと言い放った。

「カエデ……」

ゆつくりと、カエデの頭を撫でる。

「こういうことは、もう少し大きくなってから……」

「私、もう15歳だよ？ 昔ならお嫁に行ったりしたんでしょ？」

昔でも15歳は流石に特殊だと思うが、そういう問題ではないのだろう。

「……本当にいいの？ 相手が私で。後悔するかもしれないよ？」

「うん。好きな相手も、後悔するかどうかも、私が自分で決める。……えへへ、この方が素敵なレディーって感じでしょ？」

顔を赤らめながらも、いつもの悪戯っ子のような元気な笑顔を浮かべるカエデ。

「分かった。じゃあ……カエデに最高の初体験をプレゼントしなきゃね」

「えっ、プレゼント!? なになに? おもちやくれるの?」

最初からおもちやというのの良いが、流石にまだ早い。私達は再び服を着たカエデと地下居住区に向かって行った。

「さあ、まずは服を脱ごうか」

「わ、わかった。ぬ、ぬぐって、どこまで?」

2人きりの居住区で私がシャツを脱ぎながら言うと、棒立ちのカエデが顔を真っ赤にして固まった。

「新しい水着が伸びちゃってもいいなら脱がなくてもいいけど……」

「うっ、だよね……ぜ、全部、脱ぐんだよね……」

あんなに平気そうに脱いでいた制服を、私の視線を感じながらモジモジと身体をくねらせてゆっくりと脱いでいく。

そういう仕草のほうが男を興奮させるという発想がない、純粋な恥じらいからのストリップショーだ。

上の服を開けると、ふるんと優しく揺れる巨乳が再び姿を表した。

白地に2本の赤い縦ラインが入った水着の柄は、カエデの巨乳の作る曲線を余すことなく伝えてくれる。

「せ、先生、目がエッチだよ……」

目をそらしてしまったカエデに、脱衣を続けるよう手で促しつつ答える。

「カエデの体が魅力的ってことだよ」

「うう、ドキドキする……恥ずかしい……でもレディーなら経験は当然って言うし……」

何か過激な雑誌に触発されたのかもしれないが、もうチンポのイライラを抑えられない。

絶対にカエデに膣内射精するという決意を固めつつ、私もカエデと同じペースになるように脱いでいく。

床にスカートを落としたカエデが、ついに水着の肩紐に手をかけた。

ぐい、と柔軟性に優れた生地が伸ばされ、カエデが腕を抜く。もう片方も腕を抜き、胸の前からゆっくりと水着を裏返すように脱いでい

く。

乳房の上端が少しずつ姿を表し、カエデが顔を真っ赤にして腕を止めてしまう

「大丈夫？ やっぱりやめる？」

私がその声をかけると、ふう、ふう、と荒い鼻息を吐きながらカエデがぶんぶん首を振った。

「へ、へーきだよ。はあ、はあ……んくっ」

固くツバを飲み込み、カエデが勢いよく手を下げた。

ぶるんっ！ と巨乳が暴れるように解き放たれ、地下居住区の電灯の白を眩しく反射する。

そこにあつたのは、あまりにも完璧な……天然石を研磨したように滑らかで形の整った乳房だった。

水着を脱いだにも関わらず、来ている時と同じ位置に肌の張りの力で留まっている。

手に取れるような間近で、そのきめ細かい肌の質感さえ伝わるかのようだった。

小皿のように大きく広がった乳輪は透き通るような薄ピンクで、親指の先程の大粒の乳首も艶やかなピンク色をしている。

子供体型でありながら大人以上の巨乳を持つカエデにしか許されない奇跡のような……幻想的ときえ言える巨乳だ。

「先生……そんなにじつと見られたら、流石に恥ずかしい……」

「ああ、ごめんね。あまりに美しかったから見惚れてしまった」

「う、美しい？ 見とれた!? ほ、ほんど？」

ぱあっ、と明るいカエデのいつもの笑顔と、顔を赤らめて胸を完全に露出している光景のギャップが興奮を煽る。

「本当だよ。ほら、こんなになってる」

勇気をもって胸を見せてくれたカエデに敬意を評し、私もズボンとパンツを脱いでフルボッキチンポを晒した。

「わっ!? こ、こんなになつてたの!? 先生、いつもこんなのをズボンの中に隠してたんだ!」

目を丸くして驚くカエデの視線が、無邪気なだけでなく性欲の入り

交じるものになっている事にチンポが限界を超えてイライラする。

「普段は小さいけど、カエデのような魅力的な女性の前だとこんなになっちゃおうんだ。」

「そうなんだ……！ いやー、魅力的な女性だなんてー」

ニマニマと笑いながら、プールで何気なく着替えるように腰まで脱いでいた水着をずり下げて脱ぎ去った。

前かがみになって重力に引かれた巨乳が、流石に少し伸びる。

2つの逆向きの山の間から、カエデの股間が……チヨロチヨロと縮れた薄い陰毛が茂っているのが見える。

無防備に片足を上げて出し、かかとに引っ掛けて掴むように水着を回収する。

「ど、どう？ 先生。私の身体……綺麗、かな」

こうして2人きりの部屋で互いに服を脱ぎ去った。

カエデは手足を覆う袖やサイハイソックスに靴が残され、身体だけが裸なのがより淫靡さを際立てている。

「ああ。小柄なのにしっかりと女らしい身体つきだし、肌も凄く綺麗だし……本当に見とれちゃうよ」

女として褒められる愉悦に慣れていないカエデが、くねくねと裸体を蠱惑的に捻って身悶えた。

「やーだー先生そんな正直に言われてもー！」

口元がにやけているカエデを眺めているのも悪くはないが、これ以上のお預けはチンポに悪い。

私はカエデに近づき、そつと腰を抱き寄せた。

「あつ……」

「じゃあ、ソファアーに行こうね」

見上げるカエデは、それまでの笑顔を引っ込めて大きな瞳を潤ませた。

「うん……」

そつと、私に抱き寄せられるままにカエデが身体を預けてくれる。

胸と腹の境辺りに裸の胸が押し付けられ、勃起チンポが跳ねて我慢汗を垂らした。

「わっ……だ、大丈夫なの、それ？」

「大丈夫だよ。カエデが魅力的すぎて、我慢できなくなってきたるだけだから」

「そ、そうなんだ……」

さつきまでニヤついていた言葉にも、手で覆った顔を真っ赤にするだけだった。

お姫様をエスコートするようにゆっくりと歩き、カエデの幼さを残すくびれに乏しい腰を撫でる。

「んっ……♡」

子供の高い体温を感じる腰から、胸ほどではないがむっちり肉の付いた尻へと手を伸ばす。

「っ……♡」

息を殺して、私の愛撫に動じないようにと胸を張るカエデ。

「おっと、少し準備するから待っててね」

昨日セフレとここでセックスしたので、吸水性に優れたタオル地のシーツの予備がソファ脇に畳んで置かれたままだった。

ばさっと被せ、ソファのクッションの合間にシーツを押し込み固定する。

「そ、それは何？」

「沢山濡れちゃうから、ソファにタオルを被せてるんだよ。カエデももう、少し濡れてるみたいだね」

ソファの傍らに膝をついた私の視線から、カエデのぷにまんがバツチリと見えている。

股間は隙なく覆う形だったカエデの水着からはみ出ない程度に、お手入れの余りされていない放射状の陰毛が茂っている。

その下に、厚い唇のようなぼってりとした大陰唇と美しい一本のズジが走っていた。

「ぬ、濡れちゃってる!?! わ、私お漏らししちゃってるの?」

ばっ、とがに股になって股間を確認するカエデ。

まだまだ子供のその素振りに我慢汗を垂らしつつ、小さな手を取ってソファに導いた。

「さ、脚を開いて座って」

腰掛けたカエデが、自然に脚を開いて座る。

平気そうな顔をしてこちらを見上げているカエデだが、肩は震え、拳は固く握られ、緊張しているのが見て取れる。

その肩にそつと手をおいて抱き寄せ、カエデの頭を抱くように後頭部をなでた。

「な、なに？ どうしたの、先生？」

「うん、カエデが可愛いから抱きしめたくなって」

「しようがないなあ、先生はー……いいよ、私は可愛いから抱きしめなくなるのも不思議じゃないよね！」

にひ、と少し固い笑顔でされるがままに身体を預けるカエデ。

しばらくそうしていると、だんだん力みが抜けてきた。

「……えへへ、ありがと、先生」

はにかみながらそう言つて、カエデからも抱きしめてくれる。

「どういたしまして」

私の気遣いを受け入れ、勘違いせずにお礼を言つてセックスしやすいように身体の力を抜いてくれるカエデは、腕の中で急激に羽化していく蝶のようだった。

「キス、するよ」

脱力したカエデの顎をそつと上げ、顔を近づける。

「あ……♥ い、いいよ……♥」

唇が触れるか触れないかの所で、カエデが微かに震える声で受け入れてくれた。

そして、カエデはセックスのためのファーストキスを経験した。

「ん……♥ ちゅ……♥」

唇と唇を遊ばせるような、軽い吸いつきでカエデと戯れる。

胸だけでなく唇もぷるぷると弾力に富み、それだけで心地よい唇をたっぷりと味わい、舌を突き入れてカエデの小さく歯並びの良い前歯をノックした。

「わわっ!？」

目を見開いて身体を離すカエデ。



「嫌だった？」

「い、嫌だったっていうか……今、し、舌入れたの？ そんな事するんだ……♡」

「そうだよ。大人はセックスの時にこういうキスをするんだ。少し口を開けて置いてくれると嬉しいな」

「そうなんだー！ お、大人のキス……♡ えへへ♡ い、いいよ先生♡」

ちゅうーつとタコ口で唇を突き出すカエデを抱きしめ、唇を吸って力みを解いてもらってから舌を入れる。

微かに開いた口からフリーパスでカエデの口内に侵入し、我が物顔に舐め回す。

「んむう♡ はむっ♡ ちゆるっ♡」

カエデは口内もホカホカと温かく、さらりとした唾液に満ちている。

私の唾液とカエデの唾液が混ざり、お互いにコクコクと喉を鳴らして飲み込んだ。

「ふう……ふう……♡」

抱きしめられて唇を貪られるカエデは、鼻息を荒くしながら私の舌に合わせて踊るように舌を絡めてくれる。

短くて可愛らしい舌では私の口に入れることはできそうにないが、心尽くしの舌使いで私を受け入れてくれた。

カエデの首筋にじつとりと汗が浮かび、性的興奮が高まったのを見て私は唇を話した。

「ふあ……♡ はあ、はあ……♡ こ、これで終わり？」

「まだ始まってないよ。次は胸を触らせてくれるかな」

肩で息をして白い肌をほのかに桜色に上気させ始めたカエデは、幼いままに淫らかな雰囲気を漂わせ始めていた。

「ど、どうぞ……♡」

性欲に侵食された理性で、大きな乳房を下から手で支えて私に捧げるように見せつけてくれる。

大粒の乳首と美しい円を描く広い乳輪を鼻が触れるほどの距離で

見て、美しさにため息が漏れる。

カエデと同一年で巨乳の生徒もセフレには居るが、子供の無垢さと大きすぎるほどの大きさが矛盾なく収まったこれは芸術とさえ思えた。

そんな芸術品をセックス用の器官にする榮譽を思い、うやうやしく口づける。

「ひゃっ♥」

乳首を口に含まれたカエデの肩が跳ねる。

ちゅう、ちゅう、と吸い立てると、カエデは上を向いて手を口元に当てた。

「あっ♥ ああ♥」

ついさつきまで子供だったカエデの、明確な雌声に金玉がぐつぐつと煮え立つ。

空いた片手で、ぽよぽよとカエデの巨乳を跳ねさせるように弄んだ。

「んっ♥ んううーっ……♥」

自分の喉から出てくる声が恥ずかしいのか、カエデが口をふさいだ。

漏れ出る声もまた興奮を煽っていることに気づいている素振りはない。さらに乳首への責めを激しくした。

舌で弾いたり強く吸ったり、飽きさせることなく強い刺激を送ると、ひとときわ強く身体が跳ねる。

「んーっ♥」

全身を縮こまらせて、四肢が痙攣する。……乳首責めで絶頂したようだった。

「はーっ♥ はーっ♥」

深く、熱い呼吸がカエデの感じた快樂の大きさを教えてくれる。

「どう？ カエデはこういうの、気持ちいいかな？」

問いかけると、酸素が足りないようにはく、はくと口を動かしてから、

「ひ、ひもひい……♥」

ろれつの回らない口調で正直に語った。

カエデのむっちりとした太ももを掴み、力ないそれを思い切り開かせる。

むあっ、と穢れない処女の愛液が甘酸っぱい匂いを放っていた。

「じゃあ、もっと気持ちよくなるうね」

カエデを押し倒してソファに寝かせ、股間に顔を突っ込み、ぷにっとした大陰唇を舌で押しつける。

「あひっ♥」

視界の横でぴくんと動く太ももを眺めつつ、親指でぱっくりと開いて蜜を垂らす性器を露わにした。

鮮やかなほどのピンク色をした小陰唇が照明の光でてらてら光っている。

膣口の上の辺りからクリトリスに向かって舌を尖らせて舐め上げた。

「あっ♥ く、ひいっ♥」

これまでより高い声を上げて、カエデがクリトリス愛撫に悶絶する。

私は夢中になってカエデの股間を食った。

「いいーっ♥ あっ♥ ひいーっ♥」

どこか舌つ足らずで可愛らしい、愛液を垂れ流す可愛らしい雌の声。

ベロベロと小陰唇やクリトリスを舐め回すたび、膣口に指を突っ込んで浅瀬をかき回すたび、スポットライトのようにソファだけを照らす地下居住区の中にカエデの雌声が反響する。

「あっ♥ ううーっ♥」

何度目かの強い痙攣を迎え、まだ『イク』という言葉も知らないカエデが女の悦びを覚えこんでいく。

もう恥ずかしさを感じている余裕もなく尻を上げて肛門もバツチリと照らされ、絶頂の余韻にヒクヒクと小さなすぼまりを開閉させていた。

「さあ、このくらいで準備は良いかな」

「はひっ♥ はひっ♥」

私が口を離して立ち上がったっても、荒い息のまま余韻から戻ってこれないカエデ。

震える腕を支えにして身を起こしたカエデに、私はコップに入った水と、錠剤を差し出していた。

「お、お薬？」

「これから私とカエデはセックスするわけだけど、赤ちゃんができないようにする薬だよ」

「そ、そっか。流石にまだお母さんにはなれないかな……ちゃんと飲まなきゃね。ありがとう、先生」

意外な真実を知ったとばかりにパチパチと瞬きをして、カエデが避妊薬を飲んだ。

ごく、ごく、と乾いた喉に水を流し込み、どこか夢見心地にとろんと目尻を下げたままのカエデが一息つく。

我慢に我慢を重ねて先走りを垂れ流していた私は、コップを受けとってテーブルに置くと、身を起こしたカエデを再び押し倒して股を開かせた。

「ひゃっ!? あ、そっか、あの……先生。やさしく……してね？」

自分の股間がどれほど気持ちよくなれるのかを知ってしまったカエデが、処女喪失を目前にして恐怖もなく軽口を叩いた。

「もちろん。さつきよりもっと気持ちよくしてあげるから、沢山覚えて帰ってね」

掴んだ太ももに、カエデがいつも着ているソックスの滑らかな生地が心地良い。

裸の身体に、二の腕と太ももの半ばより先だけが衣服に包まれ、セックスのためにディスプレイされたかのような不自然さが興奮を煽る。

仰向けになったカエデの胸はそれでも球形を保ち、ツンと上を向いていた。

その乳首は私にしやぶられて唾液で滑り、美しいピンクの乳首をピンピンに勃起させている。

どぶどぶと溢れ出す我慢汗を、未だぴつたりと閉じたカエデの割れ目に押し当てる。

強い弾力を、愛液の滑りを借り屈服させていく。

カエデの視線は今まさにこじ開けられようとしている股間に向かつており、肘を付いて上体を起こしそこをバツチリと見られる姿勢を取っている。

「あ……♡ ほんとに、入ってく……♡」

15歳の瑞々しいマンコが亀頭に押し広げられ、みっちりと拡がって行くのを、カエデはじいっと見つめていた。

ぷにぷにの腰を掴んで固定し、亀頭全部をねじ込んでさらに深く腰を突き出す。

みちみちっ！ と粘るような手応えとともに、カエデの処女膜を引きちぎった手応えがあった。

痛みへのけぞったカエデの髪からお団子をまとめる花の髪留めが外れ、ソファに落ちる。

「いっつ！ つたあ……！ 先生、なんか、これ、すつごく痛いんだけど!？」

お団子が解けたことで髪がおろされ、普段より幾分か大人びて見える。

それを感じさせないほど、今までの甘い雰囲気吹き飛ばすように目を見開いてカエデが涙目で抗議した。

「まあしょうがないよ。しばらくじっとしてれば痛くなくなるから。力を抜いて楽にしてね」

言いながら、そつとカエデのクリトリスを親指で転がす。

「ん……♡ それ、いいかも……♡ ちょっと、痛みが気にならなくなる感じ……♡」

早速カエデは、ぽすつと肘を抜いてソファに寝転び、大股を開いて私のクリ愛撫を受け入れていた。

白色光のもと、痛々しいほどに拡げられた膣口を眺めながら落ち着いてクリトリスを転がす。

「あ……♡」

どこか気だるげなカエデの掠れ声が色気を孕み、みつちりと肉厚で強く締め付けてくる膣の心地よさが改めてチンポに響いた。

はあ、はあという微かな、しかし快樂の熱を伴う吐息を聴きながら、だんだんと柔軟性を取り戻すカエデの膣の感触を味わう。

固く勃起したクリトリスをコリコリと潰すと、カエデからも腰を突き上げて、クリ快樂を貪ろうとしてきた。

「んんーっ……♡」

ぴく、ぴく、と内腿を痙攣させ、軽く絶頂するカエデ。

「カエデ、もう痛くないの？」

「えっ？ あ、ホントだ。もうあんまり痛くない……先生、どうして分かったの？」

驚きと尊敬を込めた視線に苦笑を返す。

「クリトリスが気持ちよくて腰が動いちゃってたよ」

そう言っつてクリトリスをくすぐるように転がすと、

「ふあんっ♡」

と艶めかしい声を上げた。まだ照れくさいのか、顔を少しそむけて横目で見つめてくる。

「だって、気持ちいいんだもん、しかたないじゃん……」

「うん、カエデが気持ちよくなってくれるのが私にとって嬉しいことなんだ。これからも隠さずに伝えてほしいな」

「うん、分かった！」

子供の素直さでセックスを覚えていくカエデの膣に、私の我慢汁がどぶどぶと浴びせられる。

避妊薬がなければ知らずに母親になっているような行為を無邪気に、しかし自分の意志で受け入れるカエデが愛おしい。

私は本格的なセックスのためにカエデにのしかかり、抱きしめた。

「いくよ、カエデ」

「あっ……♡ うん、来て、先生♡」

優しく囁き、小さな子をあやすような手付きでカエデの手が私の背中に戻される。

真っ白なたもだが、セックスでかいた汗を吸った。

腰を引くと、カエデの処女膣が強く私のチンポを押し出す。入り口がめくれる位に引き抜き、また力づくで穴を押し拡げる。

「あう、ああ♥」

小さな手が、私の背中を強くつかむ。

身体の下で押しつぶした大きな乳房になるべく負担を与えないように腕で調整しながら、下半身だけで私たちは愛し合う。

「大丈夫？ カエデ」

「うんっ♥ ああ♥ すごい、おっきいよ、先生♥」

ぬっち、ぬっち、とまだ優しいピストンでカエデの膣を耕していく。

「先生、きもちいい？ 私の身体、きもちいい？」

舌っ足らずな高い声が、マンコの感想を求める。

「ああ、凄く気持ちいい。カエデは素敵なレディーの素質があるよ」

キツキツで肉厚なカエデのマンコは、胸と同様に体格に見合わぬ成熟を見せ、チンポを心地よく締め付けてくる。

「そ、そうなんだ……♥ 素質、あるんだ♥ 先生、好き♥ 気持ちいいよ♥」

セックスでかいた汗で頬に髪を貼り付け、チンポの快楽に頬を染めながらの微笑みなのに……いつもと同じ笑顔だ、と直感した。

今まさに、カエデの中でセックスをする自分がしつくりと馴染んだのだろう。

「もうちよつと強くても、大丈夫♥」

朗らかな笑顔で、セックスを楽しむための提案をしてくれるカエデの太ももを抱え、脚を畳んで本気ピストンの準備をする。

どっちゆ！ どっちゆ！ と真上から種付けプレスでカエデを犯した。

「あっ♥ ああっ♥」

小さな体を奥底まで貫かれ、絞り出すようなあえぎ声がカエデのほっそりした喉から奏でられる。

ぎゅうぎゅうと締め付けも強くなり、私のカ리를強く刺激した。

「どう、カエデ、気持ちいいかな」

「すごいっ♥ これすごいよおっ♥ もっとしてえ♥」

鼻にかかった、泣き声にも似た善がり声。

私のチンポを求めているのがあのカエデであることが、我慢を重ねたチンポに強く効く。

「カエデの中に、精液出したい。いいかな？」

「いいよっ♥ だしてっ♥ セーキっ♥ だしてっ♥」

明らかに頭が働いていない、セックスの事以外考えられない切羽詰まった雌の声でカエデが元気に返事をしてくれる。

ぐんぐん登ってくる精液を、我慢せずにカエデの一番奥深くで解き放った。

「あー—————っ♥♥♥」

同時に絶頂を迎えたカエデが、私の腕の中で全身を痙攣させて膣イキを覚えていく。

私達は固く抱き合って、夫婦の子作りのようにぴたりくっついて精液を吐き出し、子宮に全て流し込んでいった。

「ふーっ♥ ふーっ♥」

ホカホカと湯気を上げるカエデの胸が、事後の余韻で荒い息をしてフルフルと揺れながら上下する。

私はカエデに添い寝しながら腕枕をしてあげていた。

「どうだった、カエデ」

「すごかったあ……♥ やっぱ、先生に頼んでよかったね♥」

汗だくの顔にスッキリとした笑みで答えてくれるカエデ。

「……ね、先生♥ ちょっと休憩したらもう一回しない？ なんだか、考えてみたら私から先生になんにもしてあげてない気がして」

生来の優しさで、カエデが更にセックスを求めてくれた。

「うん、いいよ。でも、門限は大丈夫？」

カエデは時計を見ると、目を見開いた。

「あーっ！ こんな時間!! そろそろ帰らないとー！」

そう言っただけで裸で立ち上がる。

「あ、イタタタ……」

すぐに股間を押さえてうずくまった。



「大丈夫？」

「うん、平気……じゃないかも……先生、おぶってー！」

結局、百鬼夜行の近くまで私がおんぶで連れて行くことになった。

別れ際、カエデが耳元で囁く。

「今日の、とっても気持ちよかったよ♥ また、沢山しようね……♥」

甘く、女の媚を含んだ声に私のチンポが瞬時に反応してしまう。

ミモリとツバキにその性欲をぶつけるべく、修行部の寮までおんぶを継続するのだった。

## お昼寝の共犯者（ホシノ）

真上からの日差しを受けながら、砂浜を歩く。

夏の真昼なのにさほど暑さを感じないのは、海風が涼しげに吹き渡っているからだろう。

遠くで鳴くうみねこの声も、のんびりとした雰囲気演出してくれる。

「うくん、この辺のどこかだと思っただけど……」

客室で漁ったりリゾートマップに書き込まれていた場所……『お宝』を求めて、ホシノと一緒に島を歩いていた。

風に煽られホシノのジャケットが捲れると、プリプリとした小ぶりなお尻が見え隠れする。

女の子にしては無防備なホシノの隙だらけな色気にチンポをイライラさせながら、バカンス気分でのんびりと歩いた。

先を歩いていたホシノが足を止め、夏の日差しに輝く空と海を見つめる。

「うへ……すごいきれいな景色。これはまさに『お宝』だねえ」

嬉しそうなホシノの声音に、私も釣られて微笑んだ。

「おっ」

「どうしたの？」

何かを見つけたホシノが、砂を蹴立てて走っていく。

流石の速さで私を引き離れたホシノに追いついた頃には、すでにそこにいた。

「いや〜たままないねえ……」

ヤシの木と、小高い丘のようになった地形が作る影の中。

ハンモックに揺られて、水着のホシノがうつ伏せに寝転んでいた。

「これぞまさに楽園……」

にへ、と笑ったホシノは満足そうに枕に身体を預ける。

足元を見れば、埃をかぶったロッカーのような棚に枕が納められていた。

観光客用のサービスの一つということなのだろう。戸が付いてい

るおかげで枕は十分使えるようだった。

ホシノはうつとりと目を閉じて口元を緩め、木陰に吹き渡る涼しげな海風を感じている。

「最高だねえ、まるで夢みたいな場所だー……」

ふと、目を開けたホシノが赤と青の輝く瞳を私に向ける。

「先生もそんなところにずっと立ってないで、横になってみたら？ あんまり広くはないけど、どう？ 良い感じだよ〜？」

「じゃあ遠慮なく」

私はノータイムでハンモックに近づくと、サンダルを脱ぐと同時にひらりと跳び上がりつつ身体を横にしてホシノと添い寝する姿勢になる。

「うわあ!?! そう来ちゃうの!?! うへ、これは予想できなかつたかな」

驚くホシノをよそに、私はバランスを取るべくホシノの細い腰に腕を回して抱き寄せ、私の上にホシノが乗るような形にした。

水平に戻ったハンモックの上で、ホシノの脚も腰も胸も、身体全部の肌が密着する。

「ちよ、あの、先生？ 水着でくつつくと、肌が触れ合っちゃって、その、恥ずかしいんだけど……」

顔を赤くしつつも、寝そべったままでいるホシノ。

私に水着越しの小さなおっぱいを押し付ける格好になっているのが気になるのか背中を反らして浮かせようとするのだが、その身動きが私達の肌を擦り合わせ、ホシノの太ももが私の太ももを挟みプニプニと圧迫する。

「ていうか、あ、暑いよー。私が悪かったからさ、いっぺん離れよ？」

顔の赤みが増すホシノを抱き寄せ、腰の後ろを撫でる。

「私はホシノとくつついて昼寝したいな」

「ふうーん……生徒にそんな事しちゃうんだ？ ……やつぱり、聞いた通りなんだね」

すう、とホシノの双眸から温度が消える。

ごろん、と離れるように寝返りをうったかと思えば、ハンモックの傍らに降り立ったホシノが私にショットガンを突きつけていた。

「どうしたの、ホシノ？」

「うへ、先生状況分かってる？ 私が引き金を引いたら先生死んじやうんだよ？」

口調はいつもと同じだが、私を射抜くように鋭い目をしてホシノが銃を揺らして存在を示して見せる。私はハンモックの上で横寝してホシノの方を向いた。

「ホシノは理由もなくこんな事をする子じゃないからね」

「それはどーも。でも、先生が一番理解してるよね？ 私の後輩達に次々手を出して、え……エツチな、事をしてるんでしょ？」

鋭い目つきのままで、頬を赤くしてしまふホシノ。

「うん、そうだよ。……ノノミに聞いたのかな？」

ピク、と眉を顰めて反応してしまふホシノ。

「……なんでそんな事分かるの？」

「難しいことじゃないよ。それ以外に言いそうな子が居ないからね。それに、ノノミは凄く積極的だし」

私のセフレになったノノミは、定期的に開催される『小テスト』に殆ど毎回出席している。

このテストは、80点以上を取るとどんなセックスをするかのリクエストができるというルールなのだが、ノノミは80点以上を取った上で3Pや4Pを希望するのだ。

前回はついにハナコが居合わせたため、めでたく3Pが実現した。

——あんっ♥ ノノミさんっ♥ よろしいんですか？ 私がお先に先生のチンポを頂いてしまうなんてっ♥

騎乗位で大きな胸をブルンブルンと揺らしながらハナコが腰を上下に振る。

その両手は向かい合ったノノミと恋人繋ぎでしつかりと繋がっていた。

——ふふっ♥ 気持ちよさそうですね、ハナコさん♥ 私は美味しいものは後に取っておくタイプなので、気にしなくて大丈夫ですよ

☆

そう言いながら、ノノミは私の顔に股間を押し付けてクンニさせていた。

——が、学外のお友達と一緒にあって先生とセックスしてしまうなんてっ♥　なんていやらしい光景なんでしょう♥

ハナコが興奮の余りすぐにイッてしまい、ノノミが正面から抱きしめて大きな胸でハナコを受け止めてあげていた。

それからハナコはすっかりノノミに懐いてしまい、私に相談できないようなことも相談しているらしい。

ハナコは極端な例としても、ノノミはアビドス以外の子と積極的に交流を持ち、持ち前の優しきで仲良くなっている。

そんなわけでホシノにも私とのセックスをオススメしたのではないかと、という予想を聴かせてあげた。

「さすが、よく分かってるね、先生。でも、赤ちゃんが出来るような事を軽々しくやって良い訳ないって、大人なら分かるよね？」

「避妊はしてるよ？」

私が答えると、チャツ、と構え直して、

「は、初めての時は……その……生で、中に出すって聞いてるよ」

赤面を強めながらもノノミから聴いたのだろう猥談の話をしてくれる。

「そうだね。まあ避妊薬は飲んでもらってるし、今まで30人以上やって妊娠してないからまあ平気かなって」

「本当にデキちゃったらどうするの？」

今まで膣内射精してきた、妊娠を心待ちにする生徒たちの顔を思い浮かべる。

「好きなようにしてもらって事前に話しているよ。墮ろすのも産むのも、私がお金を出すし」

むっ、とホシノが口をへの字にして銃口を私の眉間に向ける。

「そんな無責任、私が許さないよ。産まれてくる子供が可哀想でしょ」

「じゃあ、ホシノはどうする？　私との子供ができちゃったら、どうしたい？」

につこりと笑ってそう告げると、ぽん、とホシノの顔が真っ赤に染まった。

「い、いま、そんな事訊いてないでしょ!? わ、私は、他の、後輩達がそんな目にあつたらつて、」

先程までの冷たい目もどこへやら、しどろもどろになって弁明するホシノ。

「でも、ホシノも私とセックスしてくれるんだよね?」

震える銃口の前で身体を起こし、ホシノの前に立つ。

私の水着の股間が大きく膨らんで、ホシノのほっそりしたお腹に銃口のように突きつけられる。

ホシノの視線が私の股間へ注がれ、ふらりと銃身が横に逸れて力なく下がっていった。

「……はあ……やっぱ先生にこんなつままない脅しは効かないかあ」

がつくりと肩を落とし、ぽい、と銃を手放すホシノ。

「ホシノが私のセフレになってくれるなんて、少し意外だったかも」

「うへ、先生つてば私のことなんだと思ってるのさ? 私だつて、そういうことには興味あるし……初めてが先生なら、嬉しいし……」

「それでも、ちゃんと確認したんだね。私が悪い大人じゃないかどうか」

「いやー悪い大人でしょ。分かつててもエッチなことされたいって思っちゃうんだもん。うへえ、私も本当に悪い大人に捕まっちゃったな」

照れながら小声で可愛いことを言うホシノに、チンポのイライラが急速に高まっていく。

「これからホシノと赤ちゃん出来ちゃう行為をするけど、出来たとき、ホシノはどうしてほしいの?」

私はホシノに一步近づき、ぐい、とそのお腹にチンポを押し当てた。「ひゃっ……あ、え、つと、で、できちゃったら……他の女の子には、きつちりと先生からお別れを言ってもらおうから」

真っ赤なままの顔で、チンポをお腹にくつつけたままで、なんとか

鋭い目にして見上げてくるホシノ。

「でも、妊娠初期なら墮胎って手もあるよね？」

「だ、駄目だよ、そんなの。先生と私の赤ちゃんなんだから、や、宿った瞬間から大事な命で……うへ、私何いってんの!？」

乗せられて可愛らしい心境を語ってしまったホシノが鋭い目を維持できずにバツテンの目になって顔を反らしてしまった。

「わかったよ。じゃあ赤ちゃんデキたらそうしようね」

そう言っつて、水着を脱いだ。ボロンと勃起チンポがホシノの前に晒される。

「ぎゃあ!?! ちよ、ちよ、ここ外だよ!?! しまっってしまったー！」

「大丈夫だよ、誰も来ない場所なんだから。ほら、ホシノも脱いで脱いで」

ホシノの純白でフリルの付いた可愛らしい水着の胸を、横から撫でる。

「はうんっ♥ うへ、なんで水着の上から撫でられただけでこんな声でちゃうの♥」

横目で私を睨むホシノだが、私の意志が硬いのを見て取ったか、トップスをぐいと脱いでくれた。

木漏れ日と砂浜の照り返しに、ホシノのなだらかな胸が美しくライトアップされる。

「綺麗だよ、ホシノ」

ちよこん、と指2本で隠れきってしまう乳首が、白い砂浜の照り返しで下から上へ伸びる影を作っている。

「お、おじさんの身体なんか、見たって面白くないでしょ……」

すぐにホシノの手で乳首は隠されてしまったが、羞恥に震える手にそつと私の手を重ねた。

顔を反らしたホシノの頬をそつと押して、私と目を合わせせる。

「そんなことないよ。もつと見たい。ホシノの全部を見せて」

綺麗な瞳をじつと覗き込みながらそう言っつと、意を決してホシノが下も脱いでくれた。

ばつちりとハート型に揃えられたピンクの陰毛が、子供のようにつ

にっとした大陰唇の作るスジを淫らに際立たせている。

「綺麗にお手入れしてきてくれたんだね、ホシノ。すごく嬉しい」

砂浜に膝をついて、くぐるように身をかがめホシノの股間に下からむしやぶりつく。

「ひゃああっ♥ なっ、なっ、なめ、られちゃってる♥」

ファーストキスより先にホシノの陰唇とキスした私は、綺麗な一筋の割れ目に舌を潜り込ませる。

すでにしつとりと濡れた内部は薄い塩味で、私の頭にはホシノの両手が置かれて体重が掛かっていた。

「あっ♥ はああっ♥ だめっ♥ それ、刺激、つよっ♥」

涼やかな風の吹く砂浜に、ホシノの甘ったるい声が響く。

同じ島のリゾート施設にはアビドスの生徒達が居るが、クリトリスも臍口もベロベロと舐め回されて喘ぐホシノに声を我慢する余裕はない。

私は下から顔で股間を支えつつホシノの膝を掴んで開かせ、ホシノの軽い身体は跳び箱を飛ぶような姿勢で宙に浮かびながらクンニされる。

立ち上がり、振り向いてハンモックにホシノを座らせ、脚を高々と上げてクリトリスに吸い付いた。

「んっ♥ ううううっ♥ なんか、くる、きちやう♥ つあああああっ♥」

とっさに枕を抱きしめたホシノが、顔を枕に埋めながら大股を開いたあられもない格好で絶頂に達する。

パクパクと気持ちよさそうに口を開けるホシノのマンコを間近で観察してから、私もハンモックによじ登る。

「さ、ホシノ。気持ちよく赤ちゃん作ろうね」

「うへ、先生ってばハンタイじゃん♥ ……良いよ、来て♥」

お互い馬鹿になりながら、遮るものの何もない砂浜でセックスを始める。

ハンモックの揺れで中々挿入できず、亀頭でぬりぬりゆとホシノの陰唇を舐った。



「あつ♥ んっ♥ もう、全然入らないや……しよがないなく、先生が下になってみてよ」

マンコへの刺激でトロトロと愛液が流れ、ホシノの尻を垂れていき、雫となって砂浜に染みていく。

それを気にすることもなく、抱き合って身体を入れ替え、ホシノが私の上になって跨った。

「よっ、と……♥ ん、これなら、入るかな……?」

処女のホシノが幼く見えるマンコを自分で拡げて、可愛い膣口をパクパクと物欲しそうに開閉させながらなんとかチンポをねじ込もうとしている。

最高にチンポがイライラする光景に、腰をへこへこと動かして挿入しようと頑張っているホシノの細い腰を両手でつかんだ。

「ふんっ!」

みちっ、と処女膜を割る手応えを残しつつホシノのマンコに一気に押し入る。

「うぎっ♥ い、いきなりは、やばいつてえ……♥」

しかしホシノの声は甘く、処女なのにチンポをみっちり押し込まれて快楽を感じられているようだった。

「ごめん、ホシノが可愛すぎて思い切りやっちゃった。痛くなかった?」

「痛いよりも、お腹の中が先生でいっぱいになっちゃってるのが……やばいよお♥ 私の大事なこと、押し込まれちゃってる♥」

ぺたりと私の腹に手のひらを突いて、ホシノがジツと初めての感覚に耐えている。

「ふう……♥ ふう……♥」

青く澄んだ空を背景に、爽やかな風に吹かれながら……重力に引かれて真下を向くホシノの小さな乳首が、勃起してカチカチになっている様をつぶさに観察する。

ちよん、と指先で触れるだけで、

「はんっ♥」

ホシノの肩が跳ね、鼻にかかった甘い声が漏れる。

「ちよつと……♥ まだ、駄目だつてば……♥」

私に跨つて動かないホシノだが、膣は美味しそうにもぐもぐとチンポを頬張り、愛液も粘りと匂いの強いものが垂れ流されていた。

「初めてで、動いてないのにそんなに気持ちよくなつちゃうなんて、ホシノと私は身体の相性がとてもいいみたいだね」

「そう、なの？ うへ、それはちよつと……嬉しいな♥」

チンポの快楽で赤ら顔になったホシノが、清らかな乙女の顔ではにかんだ。

ぎゅうぎゅうと締まるホシノの小さなマンコと、ウブなその反応のギャップにチンポがイライラし、ホシノの腹をぐいと押し上げるほど勃起が強まる。

「ひゃっ♥ なに、先生？ 私の可愛さにドキつとしちゃった？」

「した。ホシノがすごくエッチで、可愛くて……子供を産んで欲しくなったよ」

「うへ〜♥ 一番奥をつんつんされながらそれ言われるの、ちよつとヤバいかも……♥ 本当に先生の赤ちゃん産みたくなつちゃうじゃん♥」

すでにスイッチの入っているホシノが、私の言葉を正面から受け止めてくれる。

大胆に細い脚を開いて踏ん張ると、そろそろと腰を前後に振り始めた。

「あつあつ♥ ちよつと動いただけでビリビリ気持ちいいのくるっ♥」

みつちりとチンポに密着したマンコを動かすことで、ホシノは強い快楽を感じているようだった。

独りではうまく動けないみたいなので、私も少しだけ腰を振って突き上げて動きを助ける。

「あーっ♥ やばっ♥ それ効くっ♥ なんか出ちゃうっ♥」

腰の動きにハンモックの揺れが加わり、普通とは違った不意打ちの多いピストンとなってしまう。

傍から見たらおままごとのように動きの少ないセックスだが、ホシ

ノは顎を上げて気持ちよさそうに善がり声を上げていた。

「ほら、上下に動くのも気持ちいいよ」

私が腰の動きを少し大きくすると、ホシノは気持ちいい所に当たるたびに震えて動きを乱す。

踏ん張った脚のバランスが崩れるたび股に力を込めて踏ん張り、マンコを自分から不意打ち気味に締めてしまいそれが快樂としてホシノに襲いかかる。

「あっ♥だめっ♥だめえーっ♥せんせっ♥もうっ♥へんになるうっ♥」

へこっ、へこっ、と小さく腰を振っているだけなのに、セックスに慣れたセフレのように甘い声を上げてホシノが善がり狂う。

寂しそうな勃起乳首を指先でヨシヨシと優しく撫でると、それも膣の締りを誘発した。

「あっ♥……うっ♥」

腹の底から出たような低めの声と共にびくんっ！と大きく跳ね、ホシノが処女で膣イキする。

最高の思い出を作ってもらうべく、ホシノの絶頂に合わせて一番奥深くに射精した。

「んふーっ♥ふひゅーっ♥」

全身を興奮で桜色に上気させ、ホシノが絶頂する。

ホシノは私に跨ってM字に開脚した前傾姿勢のまま、膣奥に次々注ぎ込まれる精液の感触に夢中になっていた。荒い鼻息が私の胸元にかかってくすぐつたい。

虚ろな瞳はセックスの快樂しか映しておらず、半開きになった口からはよだれが垂れそうになっている。

子供のように小さな造りのマンコが精液を最後の一滴まで絞ろうと強く締め付け、強請られるままにホシノの避妊していない子宮に人生一番乗りし、遠慮なく子作り行為を行う。

「はあああああ……♥」

やがて射精が終わるまで絞り尽くしたホシノが、お昼寝するよりも蕩けた笑顔で熱い息を吐いた。

私は身を起こしてホシノを優しく抱きしめる。

全身を強張らせて精液絞りに夢中だったホシノが、ようやく体の力を緩めて私に体重を預けた。

「どう？ 赤ちゃん作るの気持ちいい？」

「先生、言い方。うへ、本当に気持ちいいねえ……♥ 皆ハマつちゃうのも分かるよ♥」

うっとり夢見心地で、汗だくの身体を密着させるホシノ。

何も変わらない爽やかな海風が、私達の周りにわだかまった精液と愛液と汗の臭いを吹きちらしていく。

セックスでかいた汗が乾いて涼しいが、ホシノのマンコは熱く潤んだままだった。

「それじゃ、汗もかいたし水と避妊薬を飲んでね、ホシノ」

ハンモックの上で挿入しながら身体をひねり、地面からバツグを漁って取り出す。

「はーい。先生本当に慣れてるね。ちゃんと飲むけどさあ……」

ごく、ごく、と眼の前でホシノの細い喉が動き、水と避妊薬を飲み下していった。

「言つとくけど、妊娠してたら本当にちゃんと他の子にお別れするんだからね？ 破ったら今度こそ先生の鼻の穴を後頭部まで貫通させるから」

セックスの余韻がまだ抜けない赤い頬が照れ顔のようで可愛らしく、眉をしかめたホシノの瞳の中で勃起がみるみる力を取り戻している。

「わかったよ。そんなに私の子供を妊娠するのを楽しみにしてくれるんだね、ホシノ」

「うへ、そんなこと……ある、かも。私、家族とか結構憧れあつてさ。先生と、私達の赤ちゃんとで本当の家族になったら、きつと楽しいと思うんだ」

ホシノの前髪は激しいセックスでかいた汗で額に張り付き、小さかった乳首は小指の先ほどにまでぷっくり勃起し、愛液に湿った陰毛も、私のチンポに拡張された処女膣も全てを目の前にさらけ出してい

る。

それでも、私を見つめる赤青の瞳の輝きは清らかな乙女が夢を見るような美しい輝きを湛えていた。

「それじゃ、もう少し子作りしていく?」

「いいよ♥ 私、セックスつて結構好きみたいだし、色々教えてね、先生♥」

にへ、と力の抜けたいつもの笑い方で、セックスの続きを受け入れるホシノ。

その日は、とつぷり日が暮れてハンモックの下の砂が水を吸って丸く大きなシミを作るくらい、ホシノの膣に子作り目的で射精し続けた。

それから数日後、ホシノは必ず一人できてと言って私を呼び出した。

行ってみると、海の幸を一人で取りに行く羽目になったのでこっそりと私に手伝ってほしいという話だった。

断る理由もないので、誰もいない磯で魚介を取ることにした。

「人が全然居ないからか、大漁だ〜」

海の生き物が好きなホシノが、嬉々としてアワビなどをザルに取っていく。日が傾くまで夢中になって励んでいた。

じゃーん、と海水の滴るザルを示してくれるホシノは、弾けるような笑顔を浮かべている。

「ホシノ、海は楽しい?」

私がそう言うと、ホシノは自分が浮かれて遊んでいる事を自覚したようだった。

「……うへ。そっか、私浮かれてたかー。夏だし、海だし、……先生と、2人つきりだから、かな?」

そつと岩礁にザルを置き、私に向き直るホシノ。

「こんな時だからこそ、普段できないような事もできちゃうってあるよね」

ちやぶ、とスネまで浸かる海水の中を歩いて来て、私に抱きついた。

ホシノの右目のように綺麗な夕焼けの中、私は身をかがめてホシノを抱き上げ、宙ぶらりんのホシノにキスをした。

「んっ……♡ これ、ファーストキスだからね？ 分かってる？」

「初めての子作りの後だけどね」

軽口を叩きあいながらもホシノは水着の下を脱ぎ、ぱさりと岩の上に落とした。

ホシノの軽い身体を水着の隣に着地させ、勃起チンポにゴムを被せる。

その間にホシノは後ろを向いて尻を突き出し、マンコを開いて私を待ってくれていた。足元の岩がちょうどいい高さで、楽な姿勢でホシノを犯せそうだ。

「ホシノはきつと良いお嫁さんになるね」

「うへ、この格好で言われるのフクザツ……でも先生とのセックス気持ちはいいからさー」

いつからそうだったのか、ホシノの膣はネットリとした愛液で溢れ、今日一日清く働いてきた海にポタリと垂れた。

少し前に夢中になってほじくった処女穴はまだまだ硬さを残しているが、男を受け入れる能力に優れた拡張性を発揮し私のチンポを飲み込んでくれる。

「んっ……♡ あー、これこれ♡ 先生のお腹いっぱいになって、お腹の底からしあわせくっつけて感じになるよ♡」

昼間からずっと2人きりだが、いつ誰が訪れてもおかしくない岩礁で下半身を丸出しにしてセックスを楽しむ開放感に、お互い酔いしれていた。

パン！ パン！ と存在を主張するかのように肉を打ち鳴らしてホシノの穴を蹂躪する。

「んっおっ♡ そんなせえっ♡ 強すぎるっばあ♡」  
頭上では、急速に傾いていく太陽が上空に夕焼けと夜空のグラデーションを作っていた。

それはホシノの瞳のように美しい色彩を描き、当のホシノはチンポの快楽に目を見開いて涙で瞳を潤ませていた。

「あーっ ♥ すっごいの、くるっ ♥ 先生もっ ♥ いっしょに、いこっ ♥」

タンタンタン、と小刻みにホシノの奥、子宮周辺を揺らすと、膣の締めりが急速に強くなり絶頂の兆しを見せる。

言葉ではなくチンポとマンコで理解りあつた私たちは、同時に絶頂した。

「は、う、っぐ ♥ う、ん、おおお…… ♥」

中腰で尻を突き出していたホシノの膝が、快楽で笑っている。

ゴム越しとはいえその初々しい膣の締めりに身を任せ、気持ちよく最後まで処女喪失したばかりの膣の中で射精させてもらった。

——先生へ

——残念なお知らせ

その日の夜、ホシノからモモトークが届いた。

私が手伝ったことがバレたのかと思つたがそうではなく、

——これからも毎日採ってきてさく

——あ、先生には嬉しいお知らせだったかな？

——次からは日が暮れる前に始めようね。真っ暗になるまでやってると危ないし。

どうやら、しばらくは毎日ホシノとの青姦が日課になりそうだった。

## きらきらのかたち（チセ）

チセが夏休みをもらったとモモトークで連絡してきたので、会いに行った。

「あ、チセ」

「先生だ〜」

昼下がりの砂浜に佇むチセは、セーラー服のような襟のある白を基調とした可愛い水着姿だった。

水着の本体ともいうべき部分は白青のストライプで、チセには大胆とも思えるものだったが透けたセーラー服をもう一枚羽織ることで可愛らしさと色気を両立している。

すでにチンポがイライラしてきた。

チセの連絡は『探しに行こう』というだけだったので、いつもながら全然わからない。

「今日は何をしに?」

「それは……」

「それは?」

「何だろうね?」

チセの話最後まで聴くと、『きらきら』を探すということだった。『昨日ネットで検索したの。』夏 やること』って。それでね。こういうのを見つけたの。先生にも見せてあげる」

てしてしと砂を踏んで、水着のチセが近づいてくる。

「これこれ、見て。見える?」

端末の画面が見えるところからも更に近づいてくる。

肌が触れ合う距離に迫り、チセの胸元を上から見下ろすところまで来てしまった。

大きくはないながらも年相応に発達した乳房が作り出す膨らみが、水着にぴったりと包まれてその形を教えている。

セーラー服の襟には蝶々結びの青い紐がネクタイのように飾ってあり、その隙間から見えるチセの肌は白く、まるでそれが狙いのデザ



インであるかのように無垢な色気を匂わせていた。

どうしようもなくチンポのイライラが高まる。

それはそれとして、チセは画面を私の鼻に付くくらいに近づけてくるので本当に見えない。

密着するまで近づいたチセの裸の腰と背中を抱いて、軽くハグをした。

「あつ……どうしたの、先生？」

「画面が近すぎて見えないから、少し離してね」

「そう……なの？　じゃあ、これくらい？」

スツと視界一面の端末が離れ、私の腕の中のチセの姿が見える。

その頬は少し赤らんで、端末を持たない手が所在なさげに私のお腹あたりに置かれている。

その様子に絶対セフレにしようと思いを固めつつ、記事を読んだ。

『この夏、自分だけの大人な輝きを身に着けて一肌脱いで成長しよう！　夏完全攻略マニュアル！』

キヴォトスには女学生ばかりだと思っただが、女生徒同士で大人の階段を登ってしまうのが一般的なのだろうか？

そんな疑問を脇において、チセに説明を求めるように視線をやった。

「うん、だから、この夏休み中にキラキラを見つけだして成長したいな  
くって」

「……なるほど？」

どうやら、チセは陰陽部員として、俳句erとして（俳人に訂正しておいた）成長するために、自分だけのキラキラを探したいらしい。「なるほど。この記事のキラキラ……いっしょに探していこうね」

生徒との淫行を積極的に行う今の私ならば、チセに教えてあげられるはずだ。チセだけのキラキラを。

私がそう言うと、チセはぱあっと笑顔になった。

「やったー。じゃあ行こう、先生。頑張ってキラキラを見つけて、全部脱ぎ捨てて成長しちゃおう」

「そうだね」

「先生と私、ふたりとも……戦車になれるくらい、成長できたら良いな  
〜」

「戦車……になれるかは分からないけど、頑張ろう！」

そうして、チセとキラキラ探しが始まった。

といつても、初日はとにかく砂浜を散歩しただけだった。

チセは日差しにきらめくゴミ袋やガラス片を大事そうに拾い上げ、ニコニコと収集する。

目につくものを片っ端から私に尋ね、色々な『キラキラ』を集め続けた。

そして3時間後、気づけば夕暮れ。結局のところ、海岸に落ちてい  
るゴミ拾いだった。

「……すごい」

だが、それでもチセの目には確かにキラキラしていた。

「今日集めたこれ……全部キラキラしてた。」

海水が乾いて砂が付いたそれらを見て、キラキラしていると言う人  
はなかなか居ないだろう。

「海ってこんなにも、きらきらで溢れていたんだね」

そう語るチセの笑顔は一点の曇りもなく、集めたものの価値を疑っ  
ていなかった。

「でも、まだ足りない。目を閉じると、浮かび上がってくるものがある  
の……」

なにやらチセには求めるキラキラがぼんやりと思いつかぶらしい。

私と一緒に首をひねっていると、一瞬チセがニコリと笑った気  
がした。

「まあでも、先生がいつしよに探してくれただけで、それで私は……」

夕暮れの砂浜で、チセの紅色の瞳が私を見ていた。

その瞳は息を呑む位にキラキラと輝いていて……

「あ、ご飯の時間だ。そろそろ帰ろっか、先生」

急に私から目をそらすように視線を上をやったチセが、くるりと踵  
を返して歩き出す。

私も横に並んで歩きだした。

「今日一日探して見つからなかったってことは……私やっぱり、戦車にはなれないのかな?」

「大丈夫、夏休みはまだ始まったばかりだし。チセが見つけたいものを見つげるまで、どこまでも付き合うよ。だから、心配しないで」

その過程でセフレにはすると思うが、チセのやりたい事をさせてあげたかった。

次の日。私の金玉はチセの膣内に射精するための精子でパンパンになっていた。

「先生、こっちこっち」

無邪気に私の手をとって、チセが案内してくれる。

柔らかくも力強い、俳句を詠んだりグレネードランチャーを発射したりする手だ。

結構な長さを歩いて、お互いの手の汗でびったりとくっつき始めた頃。

「先生、着いたよ」

チセが案内してくれたのは、人気のない海岸だった。

岩礁に押し寄せる波が砕け、磯の臭いがする。

「これは、亀がたくさん……?」

「どう、すごいでしょ?」

「た、たしかに」

キヴオトスの海に棲むと言っても、特殊なものではなさそうだ。亀

たちはのんびりと、思い思いに過ごしているように見える。

「先生、ほら見て。カメさんたちが、きらきらに輝いてる」

「すごい景色だね」

「うん。この風景を、先生に見せたかったの。先生はこれを見たら、どう思うかなって」

ニコニコのチセが、海に入っていく。

大体ふともも位までの水位で、ぶかぶかと浮かんでいるカメの一匹に近づいていった。

後ろから指でつつこうとしたチセに、高い波が打ち付ける。

「あっ！」

後ろから押されたようによろけるチセだが、すぐに気を取り直してカメをつつくの再開した。

しかし、波で水着がずれてしまったのか紐が緩んで水着のトップスがずれ下がり、乳首が見えそうになってしまっている。

チンポのイライラが瞬時にフルスロットルになった。

「先生、どうしたの？ 顔が赤いよ？」

「大丈夫、なんでもないよ」

私もチセを追って、海に入っていく。

近づいて、チセの上からのアングルになると普通にずれた水着から乳首が見えていた。

薄ピンクの美しい乳首は、真珠のように丸く、思ったよりも大ぶりだった。

水着がテントを張っているので、チセの後ろ側に回る。

「亀さんの甲羅はね、すごく硬いんだけど、実は尻尾のところは、ふわふわしてるの。ふわふわって」

後ろに回ると、チセがふわふわしていそうなこぶりなお尻を無防備に突き出している。

張り付いた水着の下のマンコまで想像できるような頼りない布面積の股間が、シミ一つ無い滑らかな肌を太陽と水面の照り返しでキラキラとライトアップされている。

「どう？ 先生も触ってみたい？ ふわふわだよ」

乳首を見せて、プリプリしたお尻を振りながらそんな事を言うチセを後ろから抱きしめる。

「ひゃっ？ 先生？」

あくまでもものんびりと、チセが疑問の声を上げた。

「本当だ、亀の甲羅の一部分なのに、こんなに柔らかいんだね」  
バックでチンポをはめるのと同じ体勢で、チセといっしょにカメを触る。

「うん。そうでしょ。えへへ」

私と一緒に亀を触れて、チセはご満悦だ。

私の股間の亀はすでに、チセの小さなおしりに押し当てられていた。

「先生？ なにか硬いもの、持ってたっけ？」

チセは首を傾げて、私の股間に自分から尻を押し付けてきた。

よくわからない感触があったから確かめてみるつもりなのだろう。

「チセ、水着がずれているよ」

私はそう言いながら、チセの無防備な乳首を指で撫でる。

「ひゃっ♥せ、先生？ いま、私の、乳首、触った？」

身体を捻って私を見上げるチセの顔に、嫌悪はない。

ただ、私の行動と自分の反応に驚いているようだった。

「うん、触ったよ。嫌だった？」

「ううん、嫌じゃないよ。でも……不思議」

「不思議？」

「先生、ちよつと海からあがろう。一緒に座れるところが良いな」

チセは水着を直しながら、何事もなかったかのようにぎぶぎぶ歩いて行く。

少し離れた、岩礁の中にある小さな砂浜にビニールシートを敷き、腰を下ろした。

「先生、私の乳首、もう一度触ってみて」

チセは顔を赤らめながらそんな提案をした。

「いいの？」

「うん。ニヤ部長は、『許可もなく身体を触ってくる輩はたとえ先生でも攻撃するべき』って言ってたけど、私は先生なら良いって思うから」

さすがニヤ、チセへの性教育も怠り無い。

「ありがとう、チセ。じゃあこっちへ」

私は勃起しながらあぐらをかき、チセを股間に座らせた。

チセは素直に尻をチンポに押し付け、私の腕の中にすっぽり収まるように女の子座りで座る。

「じゃあ、触るよ」

両手でチセの水着を下から捲り上げ、まだ固さを残す若い乳房を撫でるように揉む。

「あつ……♥」

人差し指の側面がチセの綺麗な乳首を弾くと、チセが澄んだ喘ぎ声を上げた。

「どう、チセ？」

ゆったりと私に身体を預けて座るチセに声をかける。

「うん、やっぱりそう……♥ 先生に、乳首、触られると……頭の中が、キラキラって光るの。先生、お願い、もっとして♥」

ゴミ袋やガラス片にキラキラを見出したのと同じ、のんびりとした口調で……チセが乳首愛撫をねだってくる。

「もちろん。チセが満足するまでしてあげるよ」

乳首を指の腹に乗せて、スリスリとかすかな動きで刺激する。

「はあ♥ん♥ きらきら♥ きらきらだあ♥」

ざざん、と静かな波の音だけが響く中、チセは抜けるような青空に視線をさまよわせ、自分の中に産まれたキラキラに夢中になっていた。

「あゝ♥ すごいよ♥ すごいよ♥ 先生♥」

どこまでも素直で、純粹に……乳首快樂をもスポンジが水を吸うように吸収していくチセは、少女でありながら女の輝きを発し始めている。

「こういうのはどう？」

ぷっくりと勃起して固くなったチセの乳首を、そっと摘む。

痛くしないように、日頃のセックスで学習した力加減で圧迫したり、捻ったりしてみた。

「あつ、あつ、あああああああゝ♥」

チセの澄んだ声が、雌の発情した媚を乗せて無人の海岸に響き渡る。

ぐん、と背を反らして、寄り掛かるように首を私の肩に預けて、チセが人生初の乳首イキを経験した。

私は何も言わず、チセの乳首絶頂の余韻が長引くようにゆったりと乳首をなで続ける。

「はあ……♥ はあ……♥ すごかった……♥ 頭の中、キラキラで

いっぱい……♥」

私の肩に頭を乗せたチセと見つめ合う。

その瞳は涙に潤んでいて、絶頂による興奮で頬を赤く染めていた。

ほんの数センチ首を動かせばキスできる距離で、チセはゆったりと微笑んでいる。

「やっぱり、先生なんだ……」

「どうしたの?」

「ううん、なんでもない。先生。先生は、もっとキラキラする方法、知ってるの?」

亀の甲羅をつついていたのと同じ無垢な笑顔で、私を見つめるチセ。

「うん、知ってるよ。チセが知りたいだけ、教えてあげる」

「……そっか。じゃあ、全部、教えて」

私に完全に身を委ねるように、チセの身体から力が抜ける。

チセのつるりとした綺麗な膝を掴み、ぱっかりと股を開かせた。

「あ……恥ずかしいよ、こんな格好」

チセは真っ赤になった顔を手で覆ってしまふ。

「ここが、一番キラキラするからね。まずは優しく触ってみるから、嫌だったらすぐに言ってね」

「うん、分かった。先生のキラキラ、もつとちようだい♥」

本能なのか、チセの声色がいつもより鼻にかかった甘えたようなものに変わっている。

青白の横ストライプの股間を、スリスリと水着の上から撫で回した。

「ん……さつきほどじゃ、ないかも?」

男に撫で回される自分の股間を不思議そうに覗き込みながら、チセがのんびりと評する。

「うん。直に触れてないからね。ここは女の子の大事なところだから、時間をかけよう」

「そうなんだ。先生は女の子の身体にもくわしくて、すごいね」

ずり上がったトップスから覗く勃起乳首を夏の日差しにきらめか

せながら、チセの無垢さは全く損なわれていない。

そんな無垢なチセのクリトリスを探り当て、グリグリと刺激する。

「あ♥ そこ、いい、かも♥」

水着の上から強めに揉むように指を使うとチセの白い内腿がヒクヒクと痙攣し、素直に快楽を教えてくれる。

「チセはここ好きなんだ？」

水着の上からでも勃起クリトリスが分かるようになり、指で摘んでチンポのようにしごきたてる。

「ああっ♥ きらきらっ♥ さつきより、すごい、きらきらあ♥」

私が開いたよりも更に大胆に、ぱっかりと180度近くに開脚し、クリトリスしごきに夢中になるチセ。

無意識的にその細い腕が上がり、後ろにいる私にすがるように掴まってくる。

「ここはどうかな？」

尿道あたりと膣口あたりもグリグリと刺激すると、びくんっ、と脚を痙攣させて足が宙に浮いた。

「すごいっ♥ すごいよっ♥ ぜんぶっ♥ ぜんぶきらきらしてるっ♥」

ぬち、ぬち、と粘着く水音がして、磯とは違う潮の匂いが漂い出す。

まだ水に濡れていない水着の股間が湿り、じくじくとシミを広げている。

「はっ♥ あ♥ ん、あああああああ〜♥ つあ、え……？ せん

せえ……？」

絶頂間近で愛撫を止めた私に、蕩けた顔で続きをおねだりしてくるチセ。

「どうし、たの？ もっと、もっとキラキラ欲しいよお……♥」

「準備はたっぷり出来たみたいだからね、ここからはもっと気持ちよくなるよ」

「そうなんだ〜♥ これよりもっとキラキラなんて、想像できないかも♥」

明らかに絶頂を期待しながら、真っ赤な顔でいつもの無垢な笑みを



浮かべるチセに先走り汗が止まらない。

「じゃあ、水着は全部脱いじやおうね」

「……うん。そっか、そういう意味だったんだね」

今や、チセは雑誌が言いたかった事を完全に理解していた。

少しふらつきながら私の前で立ち上がり、スルスルと水着を脱ぎ捨ててる。

あっという間に産まれたままの姿になった。

「先生。先生の知ってるキラキラ……私に、全部教えて？」

薄く水色の陰毛が茂り愛液でキラキラした股間も、絶頂を迎えたばかりで勃起してキラキラと艶めく乳首も、何も隠すことなく……普段どおりの立ち姿で、ただ雌としてのOKサインを全身から発している。

チセの背後に見える、昼の日差しに輝く海をそのまま女の子の形にしたような美しさだった。

「うん。いっぱいキラキラを見つけようね、チセ」

わたしも立ち上がり水着を脱いで、勃起チンポをチセの目に晒す。

「わ、先生、亀さん飼ってたの？ すごい」

中腰になって、亀頭をぶにぶにと躊躇なく指でつつくチセ。

「先生の亀さんは敏感だから、爪は立てたりしないようにね」

「うん、わかった。ふふっ、ぶにぶにだよ。ぶにぶに」

さつき亀の甲羅を触っていた時と同じテンションで、ニコニコと微笑んでチンポを弄ってくれる純粹さにチンポのイライラが限界を越えようとしている。

「あ、先生、おしっこ漏らしちゃった？ 大丈夫？」

ぬるぬると鈴口から我慢汗が垂れるのを見て、チセが上目遣いに見上げてくる。

「大丈夫、それはおしっこではないからね。チセも、マンコ……股から汗が出てるでしょ？」

言われて、うんこ座りになって股間を弄るチセ。

「ほんとだ。知ってるよ。これ、『ちつぶんぴつえき』って言うんでしょ？ 学校で習ったよ」

どうやら人並みに性教育は存在しているらしい。

「うん、よく覚えてたね。チセが気持ちよくなつてキラキラを感じる  
と出てくるんだよ」

「そうなんだ。先生も、ずっとキラキラを感じてたの？」

裸のチセが、乳首もマンコも無防備に晒して首を傾げる。

「うん。チセがすごく魅力的だから、チセがキラキラを感じてるところ  
を見ていると私もキラキラを感じるんだ」

「私が、キラキラを感じてる、姿？」

ぽつ、とチセが頬を染める。

「そっか。……うん。そうだね。先生が、私の姿にキラキラを感じ  
てくれるって思うと、私も、キラキラを感じる……」

目を閉じ、裸の胸に手を当てて感じ入るチセ。

「うん、なんだか分かってきたかも。先生、早く、キラキラ、しよっ♡」

ニツコリと笑うチセに勃起しながら、私達はそっと抱き合った。

「じゃあ、もつとマンコをキラキラさせていくね」

「マンコ？　って、どこ？」

「チセの、このことだよ」

先走り汗をチセの無垢なお腹に塗りつけながら、ぷにぷにの大陰唇  
を指で割り開く。

「あつ♡ さつき、すごくキラキラしたところ♡」

「チセが好きだったところは、クリトリスっていうんだ」

そう言っつて、愛液に濡れそぼったクリトリスをそっと摘む。

「はんっ♡ これ♡ すごい、キラキラする♡ クリトリスって、い  
うんだあ♡」

自然体の笑みを浮かべて、クリトリスの快樂を受け入れるチセ。

「ほら、ここに先生のチンポを受け入れる穴が開いてるんだ」

膣口を探り当て、入り口を指でくるくるとなぞる。

「チンポっ♡ って、先生の亀さんのこと？」

クリ愛撫で声を上ずらせながら、チセへの性教育は続く。

「そうだよ、初めては少し痛いけど、すぐ気持ちよくなるからね」

「うん、分かった♡ 我慢する♡」

ふう、ふう、とチセの鼻息が荒くなっていく。

直でクリトリスを愛撫され、先程逃した絶頂を間近に感じているのだろう。

「乳首の時、キラキラが一番すごく弾ける感覚があったでしょ？ アレを『イク』って言うんだ。今度はクリトリスでイッてみようね」

シコシコシコシコッ！ と絶頂間近のクリトリスを激しくしごきたて、チセを導いていく。

「うんっ ♥ きらきらっ ♥ すごいよっ ♥ いくっ ♥ いくっ ♥ いくっ ♥」

晴れ渡った青空を見上げ、両足をピンと揃えて、つま先立ちになるチセ。

「いくううううっ ♥ ♥」

高く澄んだ、チセのクリトリス絶頂声が、またも響き渡る。

激しい絶頂にカタカタと笑う膝が折れる前に優しく抱き寄せ、お姫様だっこでシートに下ろす。

「はあっ ♥ はあっ ♥ はあっ ♥ さっきの、より、キラキラ、すごかった……♥」

乳首でもクリトリスでも絶頂を覚えたチセの女体が、艶めかしく横たわっている。

「じゃあ、次は本番だよ。そのまま力を抜いていてね」

「うん……♥ もっとすごいのを、教えて♥」

チセに覆いかぶさり、細い脚を掴んで開かせる。

何の抵抗もなく開いたその股間は、愛液でキラキラと濡れ光っていた。

チセの瞳より明るいピンク色の膣粘膜が、夏の日差しでくつきりとして取れる。

生徒たちの愛液で焼け黒ずんできた私のチンポが、白とピンクで彩られたチセのマンコに遠慮なく押し当てられた。

ぐい、と力を込めると、チセのマン肉が柔らかく広がってチンポの形に歪んでいく。

「んっ ♥ 先生の亀さん、私の中に入ってるの？」

興味津々に股間を覗き込み、自分が処女を失う瞬間を目撃するチセ。

「そうだよ。チセも学校で習わなかった？ 男と女は、こうやって子供を作るんだ」

「そういえば、そうだったかも。先生は、私に子供を産んでほしいんだ？」

にっこ、と微笑んで突然の子作り行為を受け入れるチセ。

「それも良いけど、まだ先かな。今は気持ちよくなるためにしているよ」

「そっか、先生も私でキラキラを感じるんだったね。……ふたりで、同じキラキラを感じるんだ。すごい」

ずっぽりと処女膜にチンポを押し当てられるまで挿入されながら、チセはいつもと同じ笑顔を浮かべていた。

「さあ、チセ。少し痛いかもしれないけど、我慢してね」

「うん。……来て、先生」

その時のチセの微笑みは、穏やかで……行為の意味を理解して受け入れている、透き通った笑みだった。

「あつ、い、たあ……」

さすがのチセも、処女喪失の痛みには眉を顰めて目を閉じている。

「大丈夫？ すこしじじつとしてるから、落ち着いて、身体から力を抜いてね」

ずっぽりとチセの膣の奥底までチンポを埋めてから声をかける。

「うん。大丈夫。先生を、中に感じる……不思議だね」

ジリジリと肌を焼く日差しを背中に感じながら、チセと裸で抱き合っている、マンコの感触を味わう。

チセのマンコは処女にしては柔軟で、奥に行くほどにふわりと包み込むような優しい感触を与えてくれる。

キツさには欠けるかもしれないが、男を素直に受け入れてくれる居心地の良いマンコだ。

私の身体の下チセは、そっと背中に手を回して抱きしめてくれている。

その顔は、ぼーっと横を向いていた。

「先生。海が、キラキラしてるよ」

釣られて私も見ると、先程と変わらず晴天の下、大海原は穏やかに波打ち陽光を反射している。

「うん、キラキラしてるね」

「でしょ〜?」

私がそう言うと、チセは嬉しそうに笑った。

その無垢な微笑みに、チンポが勃起して跳ねる。

「あつ♥ ……先生も、キラキラしたいよね。いいよ。痛いのもう治まったから……キラキラ、しょ?」

チセマンコで射精したい私の心を見透かしたように、すこし目を細めて笑うチセ。

「ありがとう、チセ。チセも気持ちよくなれるように頑張るからね」

「うん。頑張つて、ふたりでキラキラ、探そうね♥」

ぎゅ、とチセが優しく抱きしめてくれるのを機に、私はピストンを開始した。

ずるん、と柔らかなチセマンコが入り口から少し引きずり出されてまでチンポに張り付いているのを感じる。

前後よりも上下左右に、チセの膣壁を探るように腰を使って気持ちいいところを探っていく。

「ん……♥ 先生で、ぐるぐるしてる、お腹の中……♥」

チセは目を閉じて、ジツと私のチンポが胎をかき回す感触に集中している。

吹き抜ける海風が、抱き合ってじつとりと汗をかいた私達の間を涼しく吹き抜けていった。

腰をグラインドさせるたび、チセのマンコは私を受け入れ、デコボコして柔らかい膣肉で亀頭を優しく撫でてくれる。

「あ……♥ キラキラ、したかも……」

「このあたり?」

「んー、もうちよつと、強く? んっ♥ これ、かな?」

私たちは砂浜に埋まった宝物を探すように、チセのマンコの感じる

所を探究する。

「ふふ、宝探してみたいで楽しい♥」

いつの間にかチセの脚が私の腰に絡みつき、くい、くい、とチセからも腰を揺らめかせて宝探しに熱中していた。

奥の方からゆつくりと、膣肉を撫で、カリでひつかき、隈なく愛でていく。

そして、半ばに差し掛かった所で、

「はうんっ♥」

チセがひととき大きな反応を示した。

「みつ、けた♥」

うっとりとして、宝物を見つけた笑みでセックスを楽しむチセの膣内に、どぶどぶと先走り汗を流し込む。

「ここが良いの?」

「んああっ♥ そこっ♥ いちばん、キラキラするっ♥ ちくびよ

りっ♥ クリトリスよりっ♥ きらきらだっ♥」

Gスポットを頑張って探し当て、宝物のようなGスポアクメを楽しむチセ。

「綺麗だよ、チセ。とっってもキラキラしてる」

「すごいっ♥ キラキラ♥ すごいっ♥ すごいっ♥」

いつもなら絶対にしない、鼻にかかった甘えた声で……すごい、すごいと連呼するチセ。

「くるっ♥ いっっちゃう♥ いっしょにいこうっ♥ せんせいとっ

♥」

「うん、一緒にいこうね」

ふわふわしていた膣肉が、握りしめるようにきつくチンポを締め付けてくる。

とらえどころのないチセの奥に隠された、情熱的な一面を思わせるマンコの締りに、私の射精欲は高まり……

「いっ、くうううううっ♥」

チセの絶頂と同時に、奥深くに膣内射精を放った。

どくん、どくん、とほっそりしたチセの腰の奥深くに妊娠の危険の

ある精液を遠慮なく押し込む。

「はーっ♥ はーっ♥」

チセは仰向けで空を見上げつつ、目尻にポロポロと涙をこぼしながら、精液を絞るように私のチンポを緩急をつけて締めていた。

最後まで射精しきると、半勃起のチンポをゆっくり抜いていく。

チセのマンコの入り口が私のカリに掻き出されて中のビラビラをはみ出させる光景が、白日のもとに鮮明に晒されていた。

大量に吐き出した精液が、追って溢れてくる。チセの尻をつたい、ビニールシートに水たまりを作った。

チセは呆然とシートに寝そべったままだった。

「……すごい。空も、海も、砂浜も……キラキラしてる」

初セックスで絶頂した感動を素直に受け止め、世界の美しさを見つめるチセ。

乳首絶頂もクリトリス絶頂もGスポットイキも知ったところで、チセの無垢な美しさを損なうことはない。

私は微笑んで、荷物から避妊薬と水を取り出し、チセに勧めた。

「うーん。でも、先生の赤ちゃん、産んでみたかったんだけど……」

首を傾げるチセをなんとか説得して飲んでもらった。

「じゃあ、先生。赤ちゃん出来ないなら、もつとっばいキラキラしても大丈夫だよね？」

「うん。今日一日だけは、生でセックスしようね」

ニッコリと笑ってセックスの続きをねだるチセ。

さつきと違うのがしたい、というので、体位を変えてみた。

「乳首いじった時と、同じ?」

私に背を預けて座る、背面座位の体位でチセ身体を捻って私の方を向いて聞いてくる。

「そうだよ。このままでセックスしてみようね」

つぶ、と処女を失って膣イキを経験したチセの穴に、再度チンポをねじ込んでいく。

「あっ♥ これいいね♥ 強く当たるよ♥ さつきのとこ♥」

お腹の側にあるGスポットに当たりやすい体位を、チセはお気に召

したようだ。

海が穏やかに揺れ、キラキラと光るのを見ながら、ゆつたりとチセの勃起乳首やクリトリスを撫でる。

「はあ……♥ 先生を私の中に感じてると、空も海も、いつもよりキラキラしてる気がする♥」

当たり前のように全身の力を抜いて、私の愛撫を受け入れるチセ。

「チセはセックスも上手だね」

汗をかいてしっとりしたチセの頭を撫で、チンポでGスポを押し  
た。

「うんっ♥ そうなの？ 先生がそういうってことは、先生もいっぱいキラキラを感じてくれたってこと？」

「そうだよ。さつき、チセの中にいっぱい出したでしょ？ アレはチセにいっぱいキラキラを感じるとたくさん出るんだよ」

そう言うのと、チセは身を乗り出して股間……の下のビニールシートに広がる精液だまりを見た。

「そうなんだ〜。これが、先生の、キラキラなんだね。白くて、ちよつと黄色くて、キラキラしてる♥」

本当に嬉しそうに精液を見つめて笑うチセ。

「でも、私より先生のキラキラの方が少ないね。先生も、もつとキラキラして欲しい」

そう言うって、ぱかっつとM字に開脚する。

大胆に股を開いたチセが、ビニールシートに脚を踏ん張って腰をグイグイと前後に振り始めた。

「うあっ」

突然の行為に思わず声が出てしまう。チセが振り返り、目を細めた。

「先生も、私のマンコの中で動くときらキラするんだよね？ いっぱいキラキラ感じてね♥」

処女とは思えないサービス精神で、腰を波のうねりのように柔軟に使い腰を振るチセ。

一生懸命に私を喜ばせようとするチセの心意気にありがたく甘え



させてもらって、処女の腰振りを堪能し、

「そろそろ、出るよ、チセ」

「うんっ♥ 私も、たくさん、キラキラしてるっ♥」

チセの腰振りはへこへこと自分の気持ちいいGスポを擦る動きになってしまっているが、それで十分射精できる気持ちよさだ。

こみ上げてきたものが放たれようとして、勃起が一回り大きくなる。

「ああっ♥」

その衝撃でGスポに強い刺激が走ったチセの腰が跳ね、ぬぽんっとチンポが抜けてしまった。

「うっ」

チセの膣口をカリが通り抜ける刺激で、外に射精してしまう。

「いくっ♥ ああ、先生、抜けちゃった……♥」

びゅるるっ！ と斜め50度ほどで精液が飛んでいき、砂浜に着弾する。

「わー。すごい！ 先生、戦車みたい！」

チセは目を見開いて、膣イキしたことよりも興奮して身体を反転させ、私に抱きついて感動を訴える。

「すごいすごい！ ね、先生。私も先生みたいに、戦車になれる？」

「どうやら、チセは射精に戦車の面影を見たようだった。」

「そうだね……女性も、まあ……潮を吹くことはできる、かな」

「私も、戦車みたいになれるんだ。教えて、先生！」

満面の笑みで、次のセックスをねだるチセ。

その翌日。

——それじゃあ……

——元気でね、先生

意味深なモトトークを送ってきたチセに会いに行くと、

「先生は、近づいちゃダメ」

珍しくも涙目でチセに拒絶された。

ニヤにセックスがバレて出禁になったのかと思ったがそうではな

く、不幸の手紙入りのビンを拾ってしまったらしい。

『この手紙を受け取った人は、3日以内に同じ内容を7人に送らなくてはいけません』

ベタな不幸の手紙に苦笑するが、チセにとっては大真面目な内容だった。

近づいた私まで不幸になってしまうと恐れて近づけさせなかったのだ。

私はチセを落ち着かせて、証明のために3日間一緒に居ると約束した。

それでようやく、チセもにっこりと笑ってくれたのだった。

初日は、夏の砂浜を散歩して一日中セックスした。

「あつ♥ いいよっ♥ Gスポ、キラキラするっ♥」

チセは戦車みたいになりたいと言うので、水分をたっぷり取らせて手マンでGスポをグジュグジュグジュ！ と激しく刺激する。

「いくっ♥ またいくっ♥」

膣に突っ込んだ私の中指と薬指を締め付けて、何度も絶頂したが、まだ潮は吹けなかった。

次の日は、海の家でアイスやかき氷を食べてから物陰に手をつかせ、立ちバツクでセックスした。

「あはっ♥ おなかのなか、くるくるしてるっ♥」

がに股で踏ん張るようにして中腰になるチセに、私も頑張って中腰になって上から突き刺すようにGスポを刺激する。

「ん、あ、なんかでるっ♥」

ちよろ、ちよろろろ……と出てきたのは、

「これはおしっこだね」

「ええっ!? や、やだあ、見ちゃダメ、先生!」

普通に恥ずかしがっていたが、砂浜にチセのおしっこが染み込むまでセックスし続けた。

その次の日は、絡んできた不良と榴弾コンテストをして人がいなくなっただけセックスした。

「チセ、大丈夫だから、ね?」

「うー、でも、また先生におしっこ見られたら、恥ずかしい……」

「おしっこしてるチセも綺麗でキラキラしてたよ」

「恥ずかしいよ」

そんな事を言いながらも大股を開いて背面座位でセックスさせてくれている。

チセはおしっこを漏らすリスクと戦いながらも水を多めに飲み、潮吹きの実習のためにGスポアクメをキめまくった。

あまり野外でやりすぎると人が来るかもしれないので、リゾートに戻ってまたセックスする。

布団の上でバックからチセを犯す。

「ふっ♥ふっ♥」

この頃になると、チセもセックスにすっかり慣れて、枕を抱きしめて口元に当て、私が気持ちよくなるようにマンコをリズムカルに締め続けていた。

私も身体のだるさを堪えてチセのGスポを丁寧に押し、潮吹き感覚を捉えようとするチセと一心同体で腰をふる。

「ん、なんか、きたかも……ムズムズ、する♥」

チセがそう訴えるので、背面座位になってスパートに入った。

すっかりセックスに慣れて愛液も多く分泌するようになったチセの股間からぬちゃ、ぬちゃ、と粘っこい音が部屋中に響き渡り、チセの荒い息遣いがそこに混じる。

「あっ♥あっ♥くる、くるよっ♥むずむずして、キラキラして、すごいっ♥」

最後のダメ押しにひときわ強くチンポで突き上げた。

「あっ♥♥♥」

びっくん！ とチセの全身が痙攣すると同時に、

ぷしやああっ！

和室の中に、チセの股間から吹き出した潮のアーチがかかった。

「あーっ♥は、っあ♥」

ぐったりと脱力して私に支えられながら、チセも私もそれをバッチリと目撃した。

「ふふっ ♥ 先生のお陰で、私も戦車みたいになれた ♥ ありがとう、先生 ♥」

セックスし通しのため力ない笑みで、それでも私をしつかりと見めて、チセが笑顔を浮かべた。

ぴびぴびっ、とアラームが鳴る。

「先生、時間……」

どうやら、当然ながら不幸の手紙の呪いは嘘だったらしい。

「なにも、起こらない？」

と思つた瞬間に、停電した。

「チセ、危ないから離れないで」

ぐっぽりとチンポを挿入しながらチセを回転させ、対面座位になつて抱きしめる。

雷による一時的なものだったようで、すぐに明かりがついた。

「大丈夫、チセ？」

「うん、大丈夫。……先生」

対面座位でハメたままのチセが、少し背を伸ばす。

そつと、私の唇にキスをした。

潮吹きアクメを決めた後の、チセのファーストキスだった。

「先生、きらきらをたくさん、ありがとう ♥」

「? うん、どういたしまして？」

「ふふっ」

よく分かつていない私を見て、チセはしつとりと微笑むのだった。

私、すっごい性欲強いんです！（シズコ）

リゾート群島を巡る騒動が起こった時。

「あー！ 先生、いらしてたんですね」

これからの事を話し合おうということでも海の家で待機していたら、シズコが水着姿でやってきた。

シズコらしく可愛らしい水着姿だ。

水辺での戦闘になるから濡れてもいい格好をとということでも着替えた、らしいが……

「そ、それで、ですね。えっと、そういうわけなんですけど——」

才気煥発といった感じでキラキラ輝いていたシズコの瞳が、とろりと情欲に濁る。

「その……もし、よろしければ、先生から見た……その……感想とか——」

私にチンポを恵んでもらうためにマンコを拡げる時と同じ顔でシズコが感想を求め、それに答えようとした瞬間。

「あ————るじどのおおお!!」

オナホ忍者であるイズナが背中から抱きついてきた。

水着を着ているので、私がいつも揉みしだしている乳房の形がクツキリと分かる。

「いかかですか、主殿？ イズナ、かつこよく変身できてますか？」

「あ、うん。かつこいいよ」

「ちよ、ちよつと、イズナ……!」

ワンコのように無邪気に私に抱きついてくるイズナが乳首を固くしているなど、傍からは想像も出来ないだろう。

しかし、シズコもまた私のセフレでありイズナがセックスに慣れたメスであることを知っているため、わざと妨害した可能性を思い声を荒らげていた。

「あらあら、皆元気いっぱいですね。うふふ」

さらにセフレのミモリと、このときはまだセフレではなかったチセがやってきてしまったため、そこで話はお流れになりシズコの水着の

感想を言う事は出来なかった。

そして、今。

収益を最大化しようと迷走していた百夜堂を元の路線に戻し、海の家バージョンのドジっ子サービスをたっぷり提供してくれたシズコは、海の家の前で真剣な目をして私に感想を求めた。

「これぞ百夜堂だなんて感じがして、すごく良かったと思う」

私が正直に告げると、シズコはぱあつと明るい笑顔を浮かべた。

「そ、そうでしたか！ それは何よりです！」

時刻は夕暮れ、周りからは客もはけ、見渡す限り誰もいない砂浜でシズコと二人きりだ。

「そうだ、シズコ。すっかり言いそびれちゃったけど、その水着、すごく可愛くてよく似合っているよ」

茜色に染まる世界の中でも、シズコの頬が赤くなったのが分かる。

「もう……先生は、いつも……私が欲しい時にそういう言葉をくれるんですから……♡」

一瞬前までの若き実業家としての輝きを秘めた目から、とろりと濁った私のセフレの目へと変貌する。

さく、さく、と厚底のサンダルが砂浜を踏みしめ、シズコが私に近づいてくる。

「それに、フリルが短くてここが見えてるのもセクシーでとても良いよ」

近づいたシズコの股間に触れ、マンスジを撫で回した。

「やんっ♡ お触りは厳禁、なんですけど……先生なら営業時間外はご自由にどうぞ♡」

「私に見せようとしてこの水着を選んできたの？」

「べ、別にそんな事は……まあ、先生はオチンポおつきくしてくれるだろうなって、思っただけじゃなかった♡」

水に濡れていない水着はサラサラとした手触りで、下に秘められたマンコの感触をかすかに伝えてくる。

「うん、すごく興奮するよ。じゃあ、この場でしよっか」

「え、えっ!？」

目をぐるぐるにして驚くシズコの手を引いて、波打ち際に近づいていく。

シズコはキョロキョロと辺りを見回すが、見渡す限り私達以外には一人もいなかった。

「あ、あの、先生？ さすがにここでイタすのは……」

「ダメかな？」

シズコのくびれた腰を抱き寄せ、腰骨に引っかかっている水着の紐をなぞる。

それだけでシズコのぐるぐる目が情欲に蕩け、身体から力が抜けていった。

「もう、仕方ないですね……どうなっても知りませんからね？」

シズコがその柔らかい身体を密着させ、正面から抱きついてくる。厚底ブーツで背伸びすると、私の唇を奪った。

「えへへ……♡ この頃忙しくて先生にお会いできませんでしたから、私も止まりませんよ……♡」

にへ、と締まりのない笑みを浮かべるシズコが愛おしくて、私からも抱きしめてキスをする。

積極的に舌を絡めてくれるシズコにキスを任せつつ、フリルに包まれた水着のトップスに下から手を這わせる。

寄せてあげられたシズコの胸が柔らかな感触を返し、シズコが私の背に回した手にも力が籠もった。

赤白のグラデーションでかき氷のように甘そうな女の子の水着から、セフレの淫らな胸がこぼれる。

「やっ♡ こ、こんな所で裸になるの、ドキドキしますね……♡」  
「私の身体で隠してるから大丈夫だよ」

「先生と密着してる所を見られるのもまずいと思いますけど？」

勃起チンポをシズコのほっそりしたお腹に押し当てながらの言い訳に、シズコが呆れたような目を向けてくる。

と言っても、露わになった胸は既に乳首を勃起させていて、シズコの興奮度合いもよくわかった。

「もうこんなになってるよ」

「は、んっ……♥ そうですよ♥ 先生に触ってほしくて、シズコ、乳首カチカチにしちやいました……♥」

鼻にかかったような甘ったるい媚び媚びの声で、シズコが囁く。

私を興奮させるための百夜堂看板娘特別サービスにチンポのイライラが加速した。

お礼に乳首をシコシコとしごいてあげる。

「ううんっ♥ せ、せん♥ せいっ♥ あんまり強くしたら、声、大きくなっちゃう……♥」

「誰もいないから多少は大丈夫だよ」

あつという間に一回りは大きくなった乳首を、犬の顎をくすぐってやるように下からカリカリと弄ぶ。

「私が恥ずかしいんですっ♥ んんっ♥ だから、キスして……♥ シズコのお口、ふさいでください♥」

今度は私から身をかがめてシズコにキスし、舌でその口内をゆったりとかき回しながら乳首の愛撫を続けた。

「ん……ふう……♥ ちゅう……♥」

落ち着いて快樂を楽しむ余裕ができたからか、シズコは目を閉じて胸を張り、私の愛撫に身を任せている。

そろそろ頃合いと見て、股間に再度手を伸ばし、触れる。

くちゆり、と水着と肌の間に、さつきなかつた感触が返ってくる。

間違いないく、愛液で滑っていた。

「ぶはあ……♥ 先生、も、もうそろそろ違う場所に行きませんか？ 私も、我慢できませんし……」

「いや、せっかくだからここでしようよ。夕日に照らされてる水着のシズコが、すごく綺麗だからもつと見ていたいな」

シズコの性欲に濁った目が、見開かれてキラキラと乙女の輝きを帯びる。

「だからあ、なんでそういう事を……もう、分かりました。本当に……知りませんよ？」

にやりと笑みを浮かべたシズコの瞳から、その輝きが失せ、にじみ



出るような欲情によりとろりと濁る。

キスで濡れた口周りをちろりと舌なめずりで拭い、そつと肩幅まで脚を開いてマンコを弄りやすくしてくれた。

「ありがとう、シズコ。頑張ったご褒美に、たくさん気持ちよくしてあげるね」

水着ごしにも存在を感じ取れるようになった勃起クリトリスをカリカリと爪でひつかき、時折股間全体を手のひらで強く撫でてやる。

「うっ♥ それ、その動きっ♥ すぐイッ ツちやいますからあ♥」  
されるがままに股間を弄られ、快楽に濁った声を上げるシズコはもう周りの目など気にしている素振りも見せない。

最後はキスしながら乳首とクリトリスを抓り、強い刺激で絶頂に導いた。

「んっむっうっ ううううううっ♥♥」

誰もいない夕暮れの砂浜に、シズコからは海の家も間近に見える距離なのに、絶頂の声が響く。

潮騒と遠くから聞こえる車の音に紛れて、百夜堂看板娘の本気絶頂声が消えていった。

「はぁーっ♥ はぁーっ♥」

膝を震わせながら、勃起乳首を隠すことも出来ずに余韻に浸っているシズコに軽くキスをする。

「ずつと立ってるのも疲れるし、座ってしようか」

そう言って、水着を脱いでチンポを取り出しつつその場にあぐらをかいて座る。傍らにおいたバッグからゴムを装着した。

「はぁ、はぁ……はい、先生……♥ 先生のチンポ、早くください♥」  
そう言っしなだれ掛かるように私の上に崩れ落ちるシズコ。

「おっと」

私は艶やかなシズコのツインテールを掴み、砂がつかないように持ち上げた。

「ふふっ、後でシャワーを浴びるんですから、別に良いのに」

言葉とは裏腹に、シズコは微笑んで目を輝かせている。

「せっかくの綺麗な髪だからね。……ツインテール、とても可愛いよ」

私が普段とは違う髪型を褒めると、シズコは正解と言わんばかりにニンマリと笑顔を浮かべた。

「ありがとうございます、先生♥ でも、ずっと持つてるわけにもいかないし……じゃあ、こんなのはどうです?」

私の持った毛先をそつと取り、そのままふわりと首にかける。

「えへへ、シズコの特製マフラー……なんちやって」

照れたようにシズコが笑う。

サラリとした髪が首と胸元にまとわりつき、シズコの指先で愛撫しているかのように私をくすぐった。

「んふ♥ これ、結構いいですね……♥ 先生全部を私が包み込んでみたい……♥」

シズコのお気に召したのか、興奮が増していくのが瞳の輝き具合で手にとるように分かる。

私はシズコに脚を開かせ、水着は脱がせず股間の部分をずらした。

「それじゃ、入れますよ……♥」

シズコが慣れた手付きでチンポを掴み、膣に誘導して腰を下ろすと、熱々のマンコにぬるぬると沈み込んでいく。

「ああ……♥ 本当に、こんな所で、やっちゃいましたね♥」  
ひしつ、と腰に脚を絡められてホールドされたのを感じる。

殆ど裸に近い身体を密着させると、シズコの心臓のドキドキや勃起乳首もクツキリと分かった。

「もしもウミカとかが海の家から出てきたら教えてね」

「そういう事言わないでくださいよ……ドキドキするじゃないですか♥」

羞恥でマンコをキュンと締めるシズコ。

対面座位で奥深くまで挿入したチンポが、シズコの俵締めマンコで歓待を受けている。

「相変わらずシズコのマンコは気持ちいいね」

「えへへ……そうでしょう? 先生専用のシズコのオマンコ、今日も楽しんでいってくださいね♥」

夕暮れの砂浜で涼しくなってきた風に吹かれながらシズコと全身

を密着させ、まったりと浸る。

「せえんせいー！ 浸ってないでもっとずぼずぼ♥ してください♥  
もう私、我慢出来ないんです♥」

シズコの頭や背中を撫でているだけでは物足りなかったようだ。  
きゆうきゆうと甘えて泣くように締め付けてくるマンコに応えるように、ズンと腰を突き上げた。

「おっ♥ きゆう、に、そんな、あっ♥ うっ♥」

ずん、ずん、と大きく腰を跳ねさせるたび、シズコが声を詰まらせたのけぞる。上下動でシズコの勃起乳首が擦れてくすぐったかった。何度も重ねたセックスでシズコの好きな力加減は大体把握しているので、そのギリギリで突き続ける。

「んっ♥ おっ♥ おおっ♥」

次第に、百夜堂の看板娘でもない、素の顔のプロフェッショナル気質な女の子……でもない、チンポでマンコをほじられるのが大好きな淫乱セフレ女としての顔が出てくる。

可憐な容姿がフリフリの水着に包まれ、どこに出しても恥ずかしくない美少女だったシズコが私にだけ見せる、淫乱な本性。

ガンガンと突いたせいでオホ顔で仰け反ったシズコと私の首の間で、巻かれたツインテールが張る。

まるでシズコの意志のように、かろうじて私を離していない腕の代わりに束縛するために髪が絡みついているかのようなだった。

「ああ……良い締めだよ、シズコ。そろそろ一度出すよ」

「きてっ♥ せん♥ せん♥ えのせーえぎ、だしてえっ♥」

泣き声のように震えて鼻にかかった、シズコの絶頂直前の声に射精を促され、小さな尻を驚掴みにして上下に乱暴に動かす。

オナホのように扱われたシズコが股間に力を入れ、締め付けを強くして協力してくれる。

どく、どく、と一番奥で射精した。

シズコの俵締めにより精液が押し留められ、一瞬緩んだときに一気に吹き出す。

射精の快樂を増幅してくれる、シズコの私専用メニューを今日も

たっぷりと味わう。

「ふう、ふう……♡」

同時絶頂を迎え、くったりと脱力したシズコが私に寄りかかってくる。

「先生のセックス、今日もとっても素敵です……♡」

耳元で甘い声をトロトロと流し込み、耳たぶにチュツ♡とついばむようにキスするシズコ。

「ん……♡」

腰を浮かせ、ズルズルとチンポを抜き放っていく。

たっぷりと先端に精液の詰まったゴムを手早く外し、自分の水着の腰紐に括り付けた。

その仕草が、一発や二発では終わらないことを暗に告げている。

次のゴムをカバンから取り出すと、シズコが生のマッコをチンポに擦りつけて甘い声を上げた。

「ねえ、先生♡ 私い、今日大丈夫な日なんです♡ だからあ、生でしませんか♡」

にやあ、と清らかさをかなぐり捨てたいやらしいメスの顔で私を誘惑してくるシズコ。

「それは、いつかね」

私はそのままゴムをはめ、シズコの腰を掴んでぽっかり空いていたマッコ穴に再度突き立てた。

「あうんっ♡ もう、先生のいけず……♡ 私は先生の子供ならできちゃっても良いですよ？ きつとお客さんたちも祝福してくれませう♡」

じいっと私の目を覗き込みながら、子宮の奥底から出たような言葉を並べるシズコ。

「焦らなくていいんだよ、シズコ」

シズコの頭を優しく撫でながら子宮口を亀頭で撫でる。

「だあって、先生がますますセフレを増やすから……」

唇を尖らせて、上目遣いで甘えた声を出すシズコ。

そんなぶりっ子ポーズを解いて、瞳を輝かせて笑顔を作った。

「皆を笑顔にするのも、百夜堂を繁盛させることも……先生のお嫁さんになることも。私は全部欲しいんです。先生とも、毎日セックスしたいんです♥」

自信と活力に満ち溢れた、夕日の中でも一際まぶしく輝くようなシズコの宣言。

そんな女の子に野外でマンコにチンポを突っ込んでいる実感が、勃起を復活させる。

「あはっ♥ 私、欲張りなのは自分で知ってましたけど……性欲もとつても強いつて、先生が気づかせてくれたんですよ♥ せ・き・に・ん♥ 取ってくださいね♥」

「うん、もちろん」

満面の笑みを浮かべたシズコの瞳からキラキラと透き通った輝きが失せ、ただひたすらにチンポを求める粘ついて濁った……淫靡な美しさをまとう瞳になっていく。

もう我慢できないとばかりにがつつくように私に唇を重ね、吸い立てながらシズコが腰を振り始めた。

「んっ♥ ぢゅっ♥ ちゅるっ♥」

無人とはいえ誰が来るかも分からない、夕日が傾きつつある砂浜に、シズコが唇を吸い、股間の愛液をチンポでかき混ぜる淫らな音が響いている。

夜の闇とともに少し大きくなった潮騒に紛れ、誰にも知られる事なく大胆にシズコが男を貪っていた。

「ふう、ふう……♥ すきっ♥ すきっ♥ だいすきです、せんせえ♥」

全身全霊で私を落とそうと、シズコが甘く激しく愛を囁く。

首に絡みつくシズコの髪は、いつものシズコが纏うシャンプーの匂いを私の鼻腔に運んでいるのに、それを圧倒する勢いでセックス中の汗と愛液の発情臭が全身を包む。

腰をホルドするシズコの脚が強く締まり、ピッタリと私達の下腹部を密着させてシズコの子宮をチンポで持ち上げさせた。

「うふふ、せんせえ♥ ナマでシたくなったらいつでも言ってくだ

さって良いですからね♥ 私のオマンコ、生でハメたほうがずっと気持ちいいですよ♥

繰り返し、繰り返し……愛をこめて、シズコが私を誘惑する。

その媚び媚びの態度があればゴム付きなど問題ではなく、チンポのイライラに任せてガツガツとシズコを突き上げた。

「んっはあ♥あ♥も♥っと、も♥つつよ♥くう♥♥」

とうとうシズコが大声で喘ぎ、チンポをおねだりする。

がっしりと抱き合いながら、お互いに息を合わせて腰をくねらせて下腹部をぶつけ合い、ばっふ、ばっふと気の抜けた空気の抜ける音を立ててピストンが激しさを増した。

「あ、いっく、また、いっちゅちゅやいっますっう♥」

すすり泣くように震えた声で、絶頂を予告するシズコを、強く抱きしめる。

「出すよ、シズコ」

「だしてっ♥ いっしよに、いっきまますっからあ♥」

一度目より更に強く締め、射精の直前から吸い上げるような動きをしているシズコの膣に、精液を引き抜かれるように射精する。

「あ♥ーっ♥♥ すきっ♥ せん♥せい♥のチンポっ♥ シズコの中でイッってますっう♥」

激しく絶頂し、膣で精液をポンプのように組み上げる動きをしながらも媚びた声を上げて私を気持ちよく射精させることにも抜かりがない。

とてもホスピタリティに溢れた最高のセフレに、一滴残らず精液を吐き出させてもらった。

セックスを終え、水着を直したシズコと寄り添って座り、海を眺める。

「ふう、ふう……♥ ふふ、二回目なのにとってもたくさん出してくれましたね、先生♥」

水着の色のようにピンク色で白いものが詰まったゴムを腰の左右から釣り下げ、きらめく瞳でシズコがニヤリと笑う。

「うん、シズコもセックスがとても上手になったね」

「もちろんです！ 先生専用メニュー、これからも充実させていきますから♥」

くすくすと笑い合う私達は、もうすっかり夜の闇に包まれている。

「はあ、もう日が暮れちゃいましたね。……先生？ 実は、海の家にはスタッフが寝泊まりできる部屋も作ってあつてえ……♥」

「よし、それじゃあ続きをしようか」

尻に付いた砂を払いつつ立ち上がる。誰かが居てももう夜の闇に阻まれて見えないと思つたのか、シズコは私に抱きついて密着しながら歩いた。

手早くシャワーを浴びて砂を落とし、まずはシズコが誰も居ないことを確認しに海の家に入る。

しばらくして勝手口から出てきたシズコに導かれ、ベッドがあるだけの仮眠室とでも言うべき部屋に案内された。

「ちよつと狭いですけど……まあセックスするだけなら平気ですよね♥ 内側の音は漏れにくいから、多少はしゃいでも平気ですのぞ！」  
電灯のもと、また水着を着てくれているシズコと抱き合つてキスをする。シズコが繊細な手付きで金玉を撫でつつ、ゴムを付けてくれる。

今度は下だけ脱がし、つるりとパイパンにしているマンコを晒させて、タオルを敷いたベッドに四つん這いにさせた。

明るい電灯の下に、下半身だけ丸出しのシズコが私に尻を向けている。

花がたくさん付いた可愛らしいカチューシャも、しつかりと胸を覆っている二段になったフリル付きの水着も、シズコの赤貝のような秘めやかな性器と薄茶色のアナルのインパクトの前には淫らさのスパイスでしかなかった。

可愛らしいシズコの淫らな部分だけを切り取って、加工して、『チンポを突っ込むモノ』として提供してくれたような光景に……シズコがセフレになってくれた有り難みを実感する。

「じゃあ、頂きます」

「どうぞ、召し上がれ♥」

さつきまでほじくっていたためポツカリと空いた膣穴をヒクつかせて上下の口で返事をしたシズコの尻を掴み、一気に後ろから貫いた。

「んっおっっ♥」

砂浜と違って汚れる心配もなく、マットの反動を生かして上下に突き分けつつマンコを深いストロークで犯していく。

ぱん、ぱん、とシズコの薄い尻と私の下腹部がぶつかり、拍手のような肉の打ち合う音を仮眠室に響かせて伸び伸びセックスする。

今日3発目でなければシズコのキツく締まる名器ですぐに射精してしまいかねない激しい動きで、腰を繰り返し出した。

「あゝーっーっ♥ いっっちや♥ だめっ♥ わたしだけ、いっっ♥♥」

シズコが絶頂しても構わず、激しく腰を打ち付ける。

「いっってるっ♥ せんせんせえ♥ おかしくなるっからあゝ♥」

絶頂の痙攣が止まらないシズコの膣を、狂ったように何度も往復する。

3発目だからか、出そうで出ない感覚に苦悶にも似た快楽を覚えつつ、絶頂しっぱなしのシズコを容赦なくまたも絶頂させる。

「いっっ♥♥♥ あっ♥♥♥」

頭をベッドに突っ伏して、びくん、びくん、と下半身を痙攣させるシズコ。

太ももの筋肉が強張り、下半身が暴れるが、それもピストンに変化をつける効果しかなかった。

ようやく精液がこみ上げ、シズコの尻をぎゅうと乱暴に掴んで奥深くに射精する。

「おっおっおっおっ……♥♥」

腹の底から響くような低めの声で、ベッドに愛液を滴らせながら悶絶するように絶頂するシズコ。

その尻はチンポを抜いても下がることはなく、むしろ膣を私に向け



て尻を高々と上げ、ヒクヒクと膣穴を収縮させて次を催促している。  
私は3つ目のゴムをシズコの背中に落とし、4つ目を取り出す。  
夏の夜はまだ始まったばかりだった。

イズナと一緒にSEXチャレンジ！（イズナ）

「ううーん、おはようございませす、主殿……」

隣で全裸のイズナが声を上げ、私は目を覚ました。

「ああ……おはよう、イズナ」

昨日はイズナの家に泊りがけでたっぷりセックスしたのだ。

夏になってイズナがはしやぎ回り、私にも遊び……もとい修行を一緒にしようと声をかけてくれた。

一昨日は一日中スイカ割りをしてその後セックスし、昨日は一日中砂浜でお城を作ってその後セックスした。

砂をいじっていたため私は筋肉痛だったが、昨日は主にイズナにフェラと騎乗位で奉仕してもらったためそこまでダルくはない。

早朝とはいえ部屋の中は蒸し暑く、お互いの汗の臭いが充満している。私の体臭に混じって、昨日セックス中に嗅いだイズナの濃い汗の香りが漂っていた。

「あ……主殿、朝勃ち、処理いたしますね♥」

朝日の中で寝汗にしっとり濡れた身体を輝かせるイズナが、日中は（元氣すぎるため）あまり見られない力の抜けた柔らかな笑顔を浮かべながら寝返りをうち、私の上に身体を乗せる。

慣れた手付きで手コキシながら私の胸板にキスの雨を降らせ始めた。

「ちゅっ……ちゅっ♥」

一回一回丁寧に、イズナのプリプリした唇が愛情を込めて押し付けられる。

くすぐったさと共に身体を下がっていき、へそ、下腹部と来てチンポに熱いキスをしてくれた。

「いいよ……イズナ」

褒めてあげながら寝汗でしっとりした頭を撫でてやると、によつきり立っているイズナの尻尾がフリフリと揺れ始める。

その尻尾も寝汗で普段よりシユツと窄まっているが、嬉しさで濡れた毛が開き、お尻から出た濃い汗の臭いを部屋に振りまき始めた。

「ちゅっ、ぢゅっ♡」

チンポに対する奉仕も板についてきたイズナが、私の顔を見つめながら、目だけで無邪気な笑顔を浮かべる。

唇は片時も休むことなく私の亀頭に吸い付き、赤い舌を伸ばして淫らに裏筋を舐め上げたり鈴口をほじったりと様々な技を披露してくれた。

躰が良かったのか、スイカ割りや砂遊びのときのように暴走してしまふこともなく丁寧な奉仕に仕上がっている。

「あー…：…んむっ♡」

私の射精感が高まってきたのを見抜いたのか、ぱっくりと口を開けて亀頭を咥え込み、頬を凹ませて下品にバキュームしてきた。

イズナお得意のフィニッシュムーションだ。

「あもっ♡ かぽっ♡」

頭全体が可愛らしいマンコのように上下動し、頬の内側や舌がチンポに絡み付く。

八重歯を時折カリにかすめさせてアクセントを付ける力加減も完璧に、くのいち志望のイズナの才能あふれるフェラに身を任せた。

「ぢゅるるっ♡」

あるじどのっ、と無邪気に私を呼ぶ声が聴こえそうな笑顔を目元にだけ浮かべ、金玉から精液を出してほしいと尿道を吸い出す力で強請られ、私はイズナにご褒美を上げた。

「んぐっ♡ ぐくっ♡ ぐくっ♡」

朝から大量に射精し、イズナが一滴残らずそれを飲み下していく。

イズナは優しく金玉をもみほぐし、その奥にある尿道を圧迫しながらチンポを吸って、全ての精液を啜り上げてくれる。私の仕込みを完璧に会得した心地よい後戯だった。

「とっつても上手だよ、イズナ」

「ふああ…：… 主殿も、朝からとっつても濃いいのを出して下さいましたね♡ ありがとうございます♡」

そう言っつて浮かべる笑みは、昨日砂遊びをして苦心の末ようやく小さなお城を作ったときに浮かべたものと全く同じものだ。

イズナの心にセックスが完全に馴染み、屈託なく楽しめるようになった証でもある。

「それで、イズナは今日は何をしたい？ やっぱりす……」

萎え始めたチンポに愛しげにキスの雨をふらせ、優しく射精を労いながらイズナが視線を私に向けた。

「砂！ 今日……昨日とは別の形で砂遊び……いえ砂修行をしましょう！」

ごまかすようにイズナが大きく声を上げる。それで、オナホ忍者は快活な少女に立ち戻った。

「うん、いいよ。シャワーを浴びて、海に行こうか」

くしゃくしゃと全裸のイズナの頭を撫でると、歯をいーつとむき出してくすぐったそうに笑った。

そして、砂浜。

イズナはビキニにホットパンツを合わせたような水着姿で、最近ますますむっちりしてきたケツがチンポをイライラさせる。

「今日は、脱出・砂風呂修行はいかがでしょう！」

また映画で見たやつをやってみたいと言い出した。砂に埋まった状態から脱出したいらしい。

まあ特に拒むこともなし、日陰に寝そべったイズナに砂をかけていく。

朝とはいえ既に日差しは強く、うっすら汗をかいているイズナが砂にまみれ胸にもヘソにも砂がまとわりついていく様はチンポをイライラさせたが、それは後でイズナに抜いてもらえば良いだろう。

結局小高い丘みたいになっても砂をかけ続け、イズナは砂風呂の心地よさで寝落ちしてしまった。

もしや命の危機かと慌てて掘り起こして、

「主殿……むにやむにや……えへへっ、もつと遊びましょう……主殿……いっぱいセックスも……♥」

締まりのない笑顔を浮かべ、純粹で淫らな寝言を言うイズナ。

「寝言とはいえ秘密を漏らすのは忍者失格だね。お仕置きだよ、イズ

ナ

誰も見ていないことを確認して水着を半分脱ぎ、ゴムを装着する。砂まみれのイズナの股間だけ海水で洗い流し、2人とも仰向けでイズナを私の上に載せ、ホットパンツを脱がせて水着をずらし、挿入した。

「んっ♥ 主殿……♥ もっとお……♥」

寝言でも、私の躰どおり媚びた声音でチンポをねだるイズナ。

周りに小高い丘のように堆積した砂をかき集め身体が見えないように私達にかけていくと、砂浜で淫行をしている証拠が足先まで丸ごと隠された。

寝そべって挿入しながらなので砂が足りず尻尾の先が砂から出てしまっているが、身体は隠れているのでセーフということにする。

砂の下でイズナの胸に手を伸ばし、ザラザラの乳首を強くつねる。

「はきゅっ!? え、あ、主殿?! イズナ、どういう、んっ♥」

混乱するイズナをチンポを勃起させて子宮口を愛撫することで黙らせる。ぴく、と尻尾が動いた。

「す、砂風呂の中で、主殿とセックスしちゃってるんですか!?!」

「そうだよ。イズナが寝言で私とセックスしてる事をバラしちゃったからお仕置きしてるんだ」

「がーん! と振り返った横顔だけでも分かる衝撃を受けた顔でイズナが驚く。

「も、申し訳ありません、主殿! この責任は、んおおっ♥」

真面目な忍術少女の顔をしたイズナに不意打ちでチンポを子宮にくれてやると、意外と聞く機会の少ない隙だらけのオホ声が聞けた。「落ち着いて、イズナ。それより、この状況をどうにかするのがイズナへのお仕置きだよ」

「こ、この状況って……」

「イズナが私のチンポを勃起させちゃったから、水着の上からでも分かるようになってしまったんだよ。このまま射精させて鎮めない、私は社会的に死んでしまう」

「そ、そんな! イズナが主殿とのセックスが大好きなばかりに!」

私の状況説明に、イズナの忍者魂が燃え上がる。

「お任せ下さい主殿！ このイズナ、必ずや主殿のチンポを気持ちよく射精させてご覧に入れます！」

こうして朝一なのに賑やかに、イズナとのセックスが始まった。

「あ、あの、ときに主殿、このままだと動くに動けないと言いますか……」

「砂風呂に浸かっている人が動いたらセックスをしてるってバレバレでしょ？ ちゃんとマンコの締めだけでイかせてね」

「はい……♥」

イズナの脚が、ギリギリ砂を動かさない程度に開いていく。

そして、密着している私の脚の外を回り込み、足首で私のふくらはぎとかかとの境辺りに絡みついた。

こうやって支えを作り、内腿の筋肉を締める事でマンコの締めを良くしようとしているらしい。

イズナらしい、天才的なセックスのセンスを感じさせる判断だった。

「ふっ♥ ふっ♥」

胸元辺りでイズナのセックス時の息遣いが聞こえるが、私の視界には上に青く澄んだ空と真夏の白い入道雲、下にはイズナの可愛らしい立った耳しか見えない。

そろそろ朝も終わり、海水浴を楽しむ人達も増えてきている。

そう、もう見える位置にたくさんの方が居る状況なのだ。

皆が健全に夏を楽しむ中、私達は必死になってセックスを楽しんでいる。

私とイズナがセックスをしている眼の前を、水着の生徒たちが駆けていく。

イズナの細い脚が力強く私の脚に絡み、下半身の筋肉を収縮させて腰をふることなくチンポを締める。

「んふーっ♥ ふーっ♥」

近寄ってみれば、イズナがセックスに耽っていると丸わりのスケベ顔で快楽を貪って荒い息をしているのが一発でバレてしまうだろ

う。

しかし砂風呂でじつとしている私達に注意を払う者は誰も居なかった。

「あ、あるじどの……♥ イズナは、イズナはっ♥ もう、イッてしま  
いそうです♥」

日差しとイズナの肌で温かい程度の砂風呂の中で、マンコだけが風呂に入っているかのように熱い液体に浸かっている。

「ダメだよ、イツちゃ。イズナへのお仕置きなんだから、いく時は私と一緒にしようね」

きゅっ、と乳首をまたつねると、マンコが一際強く締まった。

「はぐっ♥ だ、だめ、本当に、もう、イツちゃいますから……♥」

ぱしゃぱしゃと他校の生徒が水遊びをしている波打ち際を視界に収めつつ、イズナの絶頂寸前マンコをゆったりと味わう。

チンポに力を入れて膣内で跳ねさせ、イズナの強い締め付けを存分に堪能した。

「あっ♥ いく♥ いく♥ いく♥」

周りのことが目に入らなくなったように、普通の声量で絶頂を訴えるイズナ。

仕方ないので力を抜いてしばらくジツとしておいた。

「はあ、はあ、はあ……♥ ありがとうございます、主殿……♥ もう少しで、イズナ独りだけイッてしまう所でした♥」

イズナの身体からも力が抜け、ギチギチに締まっていたマンコが絡み付くようなゆったりとしたものになる。

「よく我慢できたね、イズナ。偉いよ」

そう言つて乳首をスリスリと捏ねてやると、きゅん、とまたマンコが締まった。

「あっ♥ あっ♥ だめです、主殿♥ 褒められながら乳首いじられ  
たら、またイツちゃいます♥」

その時、ポーンと音がして、視界にボールが入ってきた。

どうやら絶頂を我慢している間に水遊びからビーチボールに変え  
たらしい生徒が、こちらにボールを飛ばしたようだった。

「すいませーん」

ちらつとこちらに視線を向けて声を掛け、すぐに友達の所に走り去っていく。

「っ……っ♥」

たったそれだけで、イズナが絶頂した。

砂風呂が揺れる位に全身を痙攣させ、握りしめるようにチンポを締め付けてくる。

砂の外に飛び出した尻尾が私達はここでセックスしていますと主張するように、ぴくぴくと痙攣し、ぶわっ、と毛を開いていた。

「ふっ……っ♥ つぐ……っ♥」

かちかちという音が聞こえる。きつとイズナが歯を食いしばるのに失敗し、歯の根を鳴らして絶頂の気持ちよさを砂浜を歩く一般生徒に伝えてしまっているのだろう。

「セックスしてる所を見られて、興奮しちゃったんだ？」

「ちっ、ちっ、ちがっ♥」

深く絶頂したらしいイズナが、言葉を発する事もできずにマンコを蠢かせてチンポをしゃぶる。

「イズナは見られちゃうかもしれない状況でセックスするのは、好き？」

「こそ、そのような事は……♥ ごくっ……っ♥」

私が提案すると同時に、イズナのマンコがぎゅうぎゅうに締まる。「大好きみたいだね。明日からの修行にもこういうのを取り入れてみようか？」

「あ、主殿、ご、ご勘弁をお……♥ イズナ、これ以上はおかしくなってます……っ♥」

ひく♥ ひく♥ とまたしても絶頂の兆しを見せ始めたイズナのマンコに深い満足を覚えつつ、波の音と生徒たちがはしゃぐ声の喧騒をBGMに目を閉じる。

「イズナとセックスしながら昼寝をするのも気持ちがいいなあ」

「あるじどのお……♥ はぐらかさないてくださいよう……っ♥」

イズナは半泣きのような情けない声を上げるが、マンコは大喜びで露出セックスをねだり、私のチンポに甘えていた。



「ほらほら、イズナが私をイかせなきやずつと終わらないよ。イズナはこの状況でもつと気持ちよくなりたいたいのかもしれないけど」

「うとうう……」♥ イズナ、本当にダメになっちゃいますからあ

イツて♥ 主殿、イズナのオナホマンコでお射精お願いします♥

胸元から、顔を合わせない体勢でヒソヒソと囁かれ、マンコの締めが再開される。

一度絶頂してしまっただうえ、周りの人が増えてきたことで、またもイズナがいきそうになり、その分私も気持ちいい。

このままでは本当に射精してしまいそうなので、あえて力を抜いて昼寝と決め込む。

「ああ……」♥ おねがい……」♥ お願いします、主殿……」♥ はや

くつ♥ また、イツちやうまえに……」♥

うわ言のように、小さな声で射精を促す言葉を繰り返すイズナ。

誰にも気づかれない事なく、時にはトリニティの、時にはゲヘナの生徒が通り過ぎるたびにスリルで絶頂してしまう。

「はあーっ♥ はあーっ♥ もうっ♥ もうイズナはあ……」♥

私は全く動いていないのにイズナのマンコはドロドロにぬかるみ、分泌している愛液も本気汁に切り替わっているであろうことが分かる。

気づけば昼近く、そろそろ小腹が空いてのどが渴いてきていた。

「あんまり長く砂風呂していると脱水症状になっちゃいそうだから、お仕置きの修行は失敗にして切り上げようか？」

「うとうう……」♥ 申し訳ありません、主殿……」♥

適当に切り上げようかと相談し始めた矢先、声がかかる。

「あれー？ イズナ、と先生しえんしえいどによ殿！ どうしたの、っていうかなにやってるの？」

特徴的な舌つ足らずな声は、ミチルだった。

「ぶ、部長?! こ、これはあの、その、しゅ、修行でして！」

再びイズナのマンコがぎゅうぎゅうに締め、砂の外の尻尾がぶわつと開いた。

「あー！ わかった！ こないだ皆で見た映画のやつでしょ！ やっぱ

り土遁は基本だよなー！」

ぽわぽわと笑うミチルは、白地にどこか上品な花柄の可愛らしい水着だ。

追加の大きめのサングラスに赤いマフラー、紐で背負った忍者刀があるため、完全に周囲から浮いてしまっているが全く気にした様子はない。

「うーん、でも生き埋めというには少し砂が足りないかな？ 先生にかけてもらわなかったの？」

私の頭の横で、ミチルが無防備に膝を曲げて座り込んだ。

ピッタリと股間に張り付いた水着が、ミチルのふつくらとしたモリマン気味のマンコのスジを浮き上がらせてしまっている。

「あつ、えっ、いえっ！ その、しゅ、主君と一緒に埋まるのを、やってみたかったの！」

イズナが絶頂寸前のマンコをキツく締め付けながら、しどろもどろにミチルに言い訳をした。

「あー、それはちよつと分かるかも。先生殿が居ないとできないもんねー」

ふう、ふう、と顔を赤くして鼻息も荒く絶頂を押し殺すイズナに気づきもせず、ミチルはキョロキョロと辺りを見回し、それを発見する。

「えへへ、じゃあ私が砂を盛ってあげるね！」

小学校低学年の児童のような無邪気な笑顔を浮かべたミチルが、昨日も使ったスコップを手に砂浜の砂を掘る。

昨日、セックスなしの普通の少女としてイズナと遊んだスコップで、セックスの最中の私達に砂が盛られていく。

イズナは絶頂寸前の荒い息を隠せていないが、ミチルはふんふん鼻歌を歌いながら楽しげに砂をかけているので気づかない。

あつという間にこんもりと砂が盛られ、今セックスで絶頂していません、とミチルに無言の主張をしていたイズナの尻尾も全てが隠された。

「ふう、こんなもんかな？ あと……あれ？ イズナ、顔が真っ赤だよ

!? 大丈夫!？」

遅まきながらミチルがイズナの絶頂顔に気づき、膝を砂浜について顔を覗き込んだ。

「だ、大丈夫、ですから！ なんのこれしき、ですっ♥」

全然バレては居ないものの、知り合いに絶頂顔を間近で見られたイズナが、またも絶頂する。

全身が痙攣し、砂の丘がほんの少し動くほどの深い絶頂で、さつきまでならばバレていたかもしれない激しさだった。

「ダメだよ、イズナ。夏の熱中症は危ないんだから！ 一旦外出ようか？」

掘り起こそうとするミチルに、更に連続で絶頂するイズナ。

「い、い、いえっ♥ 主殿との地中からの脱出、必ずや成功させて見せますので♥ ぶ、部長の手を煩わせるほどは♥」

いき過ぎて目の焦点があっていないし、顔も真っ赤だし、声も上ずっている。

「こんなにあへ口へ口なのに、イズナ……なんて忍者魂ニンジャソウル！ 分かった、じゃあ私が飲み物買ってくるから！ 少し待っててね！」

ミチルは体力の限界に挑んでいると勝手に誤解してくれて、足元にバッグを置くと走って去っていった。

そしてすぐ戻って、私達にストロー付きペットボトルを差し出してくる。

「これを、よつと。ほら、これなら飲めるでしょ？」

ミチルの無防備マンスジを見ながら差し出されたストローを啜え、スポーツ飲料を飲む。

割と本当に脱水していたのでありがたかった。

「ありがとう、ミチル。後でお金は払うから」

私の礼に、照れた笑顔をサングラスの下に浮かべながらミチルが手をひらひら振る。

「別にいいよ。イズナが頑張ってるのを応援したかっただけだからや」

「部長……ありがとうございます！ イズナは、必ずややり遂げてみせます！」

なんだかんだでカリスマはあるミチルの激励に、イズナはマンコを締めて私を射精させるといふ修行に熱意をたぎらせた。

「うむー。しかとやり遂げるのだぞ、イズナよ！ それじゃ、またね」

ノリで仰々しく返事をしたミチルが、おしりをプリプリさせて歩き去っていく。

「ミチルに見られて、気持ちよかったね」

「い、言わないで下さいい……♡」

後輩忍者少女の仮面がとろりと溶けてスケベオナホ忍者の顔が現れ、イズナは私とのセックスに没頭し始めた。

「ふっ、ふっ♡」

内腿だけではなく腹筋も効果的に使い、イズナがチンポを射精させるために動かないセックスを一生懸命習得していく。

砂の量が増えたため、ほんの少しなら上下動できるようになったイズナが、砂に押しつぶされたまま腰を揺らめかせ、変化を付けてチンポを膣壁に擦り付ける。

そんなイズナの必死の奉仕をのんびりと昼寝しながら受け入れていると、日頃の疲れが溶け出していくかのようだ。

「おお、気持ちいいよ、イズナ。イズナはとても頑張り屋だね」

「っ♡ ありが、とう♡ ごさいま、す♡」

絶頂寸前だったイズナが、私の褒め言葉によりまた絶頂すること寸止めが続いていたため、そろそろかと思ひ射精することにした。

「あっ♡ イク♡ 主殿、ついに、イズナ、やり遂げまし、イック♡」  
私の射精を敏感に感じ取ったイズナが、絶頂中にさらに絶頂する。背中をのけぞらせてしまい、砂の丘が崩れる。

オナホ忍者と主君の生き埋めというピンチは、オナホ忍者の本気絶頂によって破られたのだった。

「おっ♡ あっ♡」

深すぎる絶頂でマンコが強く締まり、仰け反って身体がずれたことでチンポが砂の中で抜け落ちる。

ゴムがイズナのマンコに残ってしまっていることで、どれほど締め

が強かったかが伺えた。

「主殿、イズナ、やりましたあ……♥」

周りに人が大勢いる中、いった後の蕩け顔を晒してイズナが甘えた声を出した。

「よく頑張ったね、イズナ。すごく気持ちよかったよ」

ずぼ、と砂の中から腕を出し、手のひらだけ砂を払ってイズナの頭を撫でる。

髪に砂がかかったが、イズナは顔をくしゃくしゃにして笑った。

「あーっ！っ！ 2人ともーっ！っ！！」

セックス後の触れ合いに移行していた私達の鼓膜に叩き込まれるようなミチルの声に、慌てて振り向く。

「あつ、よかった、やつぱりここだった！」

「ど、どうしたの、ミチル？」

絶頂後の余韻を見られたイズナが軽くイッているので私が声をかける。

「あはは、さつきここにカバン忘れちゃって。ふー、盗まれてなくてよかったー、あ、イズナは修行成功したの？」

崩れた砂を見て、ミチルがへにやつと笑う。

「そ、そうなのです！ 主殿と私の強い絆により！ 脱出しました！」

そう言いながら、砂の中で水着の股間を直し、半脱ぎのホットパンツを付けてから砂を撒き散らして立ち上がるイズナ。

「うわーっ！ 砂が！」

イズナのとっさの土遁によりミチルの目をごまかしている隙に私も水着を着る。

「おっと、すみません部長！ 先程はありがとうございました！」

「おお……試練を乗り越えたイズナが、なんだか一回り大人に見える！」

呑気に目を輝かせるミチルだが、イズナのマンコに精液を大量に含んだゴムが残されている事にはもちろん気づかない。

「私達はシャワーを浴びてきますから、その後部長も一緒にあそ……」

修行していかれませんか？」

「えっ、私も一緒でいいの？」

2人きりが良いんじゃないかと私に視線を送ってくるが、イズナはニカツと笑ってミチルを遊びに誘った。

「今度は私から、ミチルに奢らないとね。さあ、行こうか」

先程までミチルの前でイズナの乳首を愛撫していた砂まみれの手でイズナの手を引き、シャワーを浴びるために歩き出す。

「主殿……今夜も、イズナの家に泊まっていつて下さいね……♥」

今日の夜は、いつも以上に激しくなりそうだった。

## 古書に囲まれてイキヌキ（ウイ）

「あんっ♥ あっ、せんせっ♥ そろそろ、イキそうですっ……♥」

ここは、ヒナタの自室だ。閉められたカーテンの向こうから昼の日差しが漏れる中、全裸の私達がベッドの上で対面座位で絡み合っている。

ヒナタのむっちりした身体がびったりと押し付けられ、その手足が腰に首に絡んでいる。

ヒナタは自分の力加減の下手さを克服しようとする私のセフレになったのだが、初めての時から何回かセックスした結果、それなりに上手にはなっている。

それが日常生活で生かされているかというとまだまだなのだが……私としては日常生活でも力加減が上手になって、かつもっとヒナタとセックスしたいので、今はただセックスの気持ちよさをヒナタのマンコに教え込み続けている。

「またっ♥ またイクっ♥ 今度は、先生も一緒にっ♥」

私の耳元で、絶頂直前のヒナタの熱く媚びの乗った声音が垂れ流される。

しがみついてくる力はかなり強いものの、かつてのように骨が軋むほどでもないため心地よく受け入れられた。

がっちりとホールドされ、ヒナタの意志と力によりヒナタの奥深くで射精する。

「あっ♥ ああああああああああっ♥」

絶頂に音程を震わせ、ヒナタが甘い声で啼いた。

私に押し付けられた乳首がギュツと一層固くなり、ヒナタの汗で柔らかな身体がヌルリと滑る感覚は気持ちがいい。

「ふう……♥ ふう……♥」

絶頂してもヒナタは抱きついたままで、動物のように頬をくっつけあって頬ずりしたり、ゆったりと身体をくねらせて身体中の肌を擦り合わせて浸っていた。

ひとしきりスキンシップを楽しんだヒナタがゆっくりと顔を離し、

セックスで赤らんだ顔に純真な笑顔を浮かべる。

「先生……♥ 今日も、（っ）指導ありがとうございます……♥」

マンコで2回射精させてくれたと直後に相応しい、ヒナタの純粹さをもつてしても隠しきれない淫らな気配をまとった笑みに、軽くキスをして応える。

「ん……♥ ちゅ……♥」

ヒナタが私の頭を力強く固定し、スキンシップの延長のように唇をベツタリとくつつけてきた。

しばらくキスをしながらチンポが自然に萎えて抜けるのに任せる。

ヒナタは名残惜しげに唇を離すと腰を浮かせてゴムを外し、口を縛ってからベッド脇に移動させたゴミ箱にポトリと落とす。慣れた手付きだった。

「お疲れ様でした♥ 汗をかいてしまいましたから、シャワーを浴びましょう」

連れ立ってシャワーを浴び、ヒナタの部屋を出る。

そこで、今なら行けると思いいいこうと決めた。

古書館の主であるウイなら会おうと思えば必ず会える。早速モモトークで連絡を入れておく。

「うえあっ!?! 先生!?! もう到着されたんですか!?!」

「うん、近くまで来る用事があったから、ウイに会いたくなくなって」

トリニティに仕事に来た時は大抵ヒナタやハナコとセックスするが、それだけにウイともセックスするということは今まで無かった。

ヒナタもなんだかんだと複数回おねだりしてくれるし、ハナコなど校内でセックスすると無我夢中で私の精液を搾り取ってくるため、チンポがイライラすることが出来ないのだ。

最近では2人のサルのような発情も落ち着いてきて、今日のように気軽にセックスして別れることもあった。

今まで交換ノートを書きあったりそれを元におしゃべりするだけの中学生のような交際を続けていたが、今日こそウイをセフレにしよと意気込んでいた私は早速古書館を訪れたのだった。



「あ、う、ど、どうぞ……」

「今日はまだもうお邪魔して大丈夫なんだね」

「え、い、いつもそこまで散らかしているわけでは……!」

ぺたぺたとスリッパ履きのウイに付いていき、殆どウイの自室である古書館のロビーみたいな空間にやってくる。

「よし、じゃあ交換ノートを書いちゃおうかな」

「ふふ……お願いします、先生」

ウイが選んだ交換ノートが、それ専用のような机に置かれている。長椅子に座って書いているとウイが隣に座った。

椅子に置かれたウイの手に私の手を重ねる。指を絡めるように握ると、ウイは黙って顔を赤らめて俯く。

こうやってジワジワとスキンシップを重ね、ウイのメスとしての自覚と発情を促すのだ。

古書館に来たときにオナニー後と思しき酸っぱい匂いがしたので、効果は出ていると確信している。

「よし、書けた」

「あつ……は、はい。それでは、お飲み物を用意しますから座っていてください」

私がウイのを読んでから書き終わり手を離すと、ウイが寂しげなメスの声を上げる。

いつものようにソファに座って待っていると、2人分のアイスアメリカカーノのグラスをトレイに乗せて持ってきてくれた。

「ありがとう、ウイ」

ウイは実はアイスアメリカカーノが好きだったそうだが、それをわざわざ自分で用意するのは私とおしゃべりをするようになってからだという。

甲斐甲斐しくて可愛らしい所をちよくちよく見せてくれるウイに、ヒナタに2発射精した後でもチンポがイライラしてきた。

ウイは氷の入ったグラスを置いて、私の隣に座る。

その細い腰を、抱き寄せた。

「ふえあつ!?! えつ、えつ!?!」

ウイが顔を赤くして目を見開いて慌てている。

「さあ、今日は何を話そうか？」

嫌がってははいないようなのでそのまま話を進めた。

「えっ、あ、っと、あ、あれです、先日の、あの……ゲーム部？　の子たちの話」

先日私が書いた内容だ。珍しく本の話題になったので、ゲーム部の事を書いた。

と言っても、ウイが聴きたいのはその話題になった本の事らしかつた。

「私がお子の頃好きだったゲームでね、そのBGMの曲名に、本とか戯曲とかの名前が付いてたんだ。子供たちが大人になって曲名を調べたときに興味を持つようになってね」

「な、なるほど……とつても良い趣味ですね、その作曲家さんは。それで、先生はどんな子を読んだんですか？」

「うん、まあ実は作曲家の意図した元ネタとは違うんだけど……トランプペット吹きが旅をする話なんだけどね」

私が本の内容を語って聞かせると、ウイはとても優しい目をして微笑みながら私の話を聞いてくれる。

腰に回した手でウイを撫で回しても顔を赤く染めてウイから身体を密着させてくれるくらいに、私達は身も心も近づいていく。

「でも次の章でフリーセックスの国に行ったのはびっくりしたよね」  
「ふえあつ!?　ふ、ふり、うええええ？」

顔を真っ赤にするウイ。制服越しに押し付けられた胸の奥からとくんとくんと鼓動が強まったのが伝わる。

「ウイはセックスに興味ある？」  
「あ、う……？　え……？」

さつきから思考が全く追いつかないウイは、目をぐるぐるにして混乱しどおしだ。

その隙を突いてソファに押し倒す。  
「……………」

ぎゅっと身を固くして目を閉じ、少しだけ顎を上げてキス待ちにな

るウイ。

遠慮なくその薄い唇にキスした。

「つふ……んう……い！」

固いままの唇に、優しく吸い付く。ウイは震える拳をキュツと握ってされるがはまだ。

いつも着ているセーターのボタンを外し、制服のリボンをほどき、少しずつウイの服を剥いでいく。

黒くぴっちりとした肌に張り付くインナーが現れ、なだらかな胸の形が露わになる。

「あつ、せ、んう♥」

言葉を発しようとして唇が開いた瞬間、私の舌が割り込む。目を見開いたウイが、私と目があつてしまいすぐに瞑った。

舌で丁寧なウイの歯茎をなぞる。自分でもアイスアメリカノを良く飲んでいのか、ほのかにコーヒの風味を感じた気がした。

スカートのホックを外すと、私がどこまでしようとしているか察したウイが震える。

キスを中断し、唇が触れ合う距離でウイに声をかけた。

「ウイ、私は今からウイとセックスしたい」

「あう、うう……わたし、私は……先生が、してください……ど、どうぞ……こんな女ですが、もらって下さい……♥」

「いいの？ 私の、セフレになってくれる？」

「せふっ!? いい、いい、です……! せ、先生が、私を、抱いてくださるなら、もう、なんでも……!」

埴輪みたいな目になったり涙目になったりしたが、ウイはセフレになつてくれた。

お許しがいただけたのでロングスカートをずるずるおろしていく。

ウイの清楚な白いショーツが目飛び込んでくると共に、むつとすくくらいに濃い体臭が漂った。

「わああっ!? あ、いえ、これは、あの、昨日徹夜作業でしたので、やむなく……!」

身体は拭いたとかなんとか言い訳をするウイだが、私はショーツと

インナー姿のウイを抱きしめると、首筋に鼻を埋めて臭いを嗅いだ。「だ、だだ、だめですよ先生！ 私の臭い嗅がないでえ！」

ウイの濃い体臭が発情してかいた汗と混ざり、甘酸っぱさを強めている。

「いい匂いだよ、ウイの匂い」

「そんな、わけ……ないじゃないですか……♡」

だんだんと状況に慣れてきたウイが、目を開けて私と見つめ合う。

「ウイの匂いをかいで、興奮してるよ。ほら、触ってみて」

所在なさげに、シスターフッドのように胸の前で組まれていた手をとって私のチンポに導く。

「あっ♡ 先生……私なんかで、こんなに……♡」

魔術師と呼ばれるほどに繊細な作業をこなすウイの指が、ゆっくりとズボン越しに私のチンポを撫でる。

先端を複数の指が撫で回し、亀頭の段差を確かめるように力加減を調整するという、処女とは思えない器用さを見せてくれた。

「さすがウイ、上手だね」

私が褒めると、夢中でチンポを撫でていたことを自覚したのかウイは目を見開いて口を大きく開けてなにか言おうとしたが、実際にチンポをイジっていたのでなにも言えずに口をパクパクさせるだけだった。

お返しにも、ウイのショーツの上からクリトリスを撫でる。

「あっ♡」

指先に感じるしこりが大きくなり、ウイが興奮していくのが手応えで分かった。

ウイがチンポを撫で回すのに合わせてクリをいじっていると、すぐに理解したウイが私の意地悪に少し藪眺みになるが、ジツと見つめ合ったままチンポとクリを静かに弄り続ける。

あっという間にウイは私の気持ちいいやり方を理解し、裏筋を猫の顎を撫でるように小刻みにカリカリと指先で引っ搔いてくる。

ウイのクリも私の愛撫でピンと勃起し、ショーツから完全にぽっちりと浮き上がっていた。

触っていないインナーも乳首のあたりがふつくらと盛り上がり、ウイの興奮が高まっているのが分かる。

「ウイ、そろそろ良いかな」

「……はっ！ あ、は、はいっ」

夢中でチンポを弄っていたのか、私の声にびくつと反応してウイが慌てた。

私も服を脱ぎ、全裸になっていく。いつものようにタオルをソファに敷いて準備した。

「あわ、あわわ……先生の、裸……♥」

自分も既に半裸だが、私の脱衣を凝視して生唾を飲むウイ。

チンポを取り出すとそこにジッと視線が集中するのがわかった。

「さ、ウイも脱いで」

「う、うう……！ こ、こんな貧相な身体ですみませんが……」

脱ぎかけの制服を近くのソファにかけ、インナーをぐいっと上げて脱ぐ。

ウイの汗の芳しい匂いが古書の臭いに混じり、私達専用のヤリ部屋の臭いになった。

「ひいい……やっぱり、先生にお見せできるようなものでは……」

震える手でブラを脱いでくれたが、すぐに手で隠してしまう。

女の子としてはそれなりに高い身長をしたウイが猫背になって身体のラインを隠そうと縮こまった。

もちろんそんなことをしても全然隠れてはいないが。

「綺麗だよ、ウイ。もつとよく見せてほしいな」

「せ、先生……♥ 先生が、ご覧になりたいのでしたら……どうぞ♥」

そつと、乳首を覆っていた手がどかされていく。

ウイの乳首はぶつくりと大粒で、乳輪も広めだ。比較的スレンダーな身体に、イヤラシイ乳首がとても興奮を煽る。

「う、うう、やっぱり変……ですよ？ こんな胸……」

俯いてしまうウイの手をカウパーで濡れたチンポに触れさせた。

「ひああっ!? あ、熱くてぬるぬるって……!」

「ウイの乳首、私はすごく好きだよ。こんなに興奮してるでしょ」

「こ、興奮……！ 私の、乳首、で……♡」

私の言葉に、握手するように亀頭を手で包み込み、ゆったりと手首を使って手コキしてくれるウイ。

それと同時に、震えながらも猫背を止めていやらしい身体を私に見せてくれた。

少しの盛り上がりを見せるウイの乳房を下からすくい上げるように撫で、乳首を指で弄る。

「ウイの乳首、大粒で触っていて気持ちいいよ。ウイは、ここの好き？」

「はあっ♡ はあっ♡ す、すき……♡ 先生、すきです……♡」

私が撫でるだけで、ウイの乳首がもつと下品に勃起していく。両乳首を平等に弄ると、ウイも両手で私のチンポを手コキしてくれる。

このままだとウイは射精するまでやっていそうなので、ほどほどで切り上げてショーツをずりおろした。

ショーツの下には、ウイの陰毛が生い茂っている。処理を油断しがちなのか、放射状に広く生えていた。

「ううう……！」

何度目かの赤面と俯き。私はウイを立たせたまま跪いて、その茂みに顔を埋めた。

「ちよっ!? 先生!? ささ、さすがにそれは！ あうっ♡」

ぐっ、と頭に手をおいて力をかけられる前に、ウイの膣口を指で愛撫する。

「そ、それだめですっ♡ ち、ちからぬけちやう♡」

クリを下からくすぐるように指で愛撫し、濃いメスの匂いを漂わせる膣口に小指を入れて様子を見る。

ぬぷりと抵抗少なく指を飲み込んだのを感じて、ウイの身体が女性として一人前であることを理解する。

陰毛の樹海から顔を離してウイのマンコに口づけけると、ぴちやぴちやと音を立てて舐め回した。

「あっ、あああーっ♡ んひいーっ♡」

誰もいない古書館に、主のメス声が響き渡る。

知的な空間が、私達の周りだけ恥にまみれていた。

ウイの愛液は舌先にピリピリと辛く、濃厚なメスの苦酸っぱい味を感じる。

媚薬のようにチンポのイライラを増幅させるその臭いと味を存分に感じながら無心に舐め回す。

「ひっ、つぐ♥ らめっ♥ せんせっ♥ もうやめっ♥ あっぐ、うううううううっ♥♥」

ウイの細い脚が私の顔を左右から押しつぶし、絶頂の痙攣を直に感じた。

膝が笑って倒れてしまいそうなウイを下から支え、ソファに座らせる。

「ウイ、これを飲んでおいて」

「あい……♥」

ぐったりと股を開いたまま全裸でソファに腰掛けるウイに、避妊薬を渡した。

アイスアメリカカーノのグラスに入っていた氷が溶けて2層になっていたが、2人して一気飲みする。

少し落ち着いたウイを押し倒し、脚を開かせる。

絶頂でぼーっとしたままのウイは簡単に股を開き、そしてアワビのようにピラピラの発達したウイのマンコに私のチンポが突き刺さった。

「あ、は、うううううう♥」

破瓜の痛みはあまりないらしく、軽い膜の手応えを破って一番奥まで突きこむとウイは気持ちよさそうなうめき声を上げる。

「どう、ウイ？ 大丈夫？」

「だ、大丈夫、です……♥ ああ、私、先生といま、繋がってるんですね……♥」

チンポを奥深くまで突き刺して、ようやくウイがリラックスした笑みを見せてくれた。

「どうでしょうか、先生……？ 私の身体で、先生は気持ちよくなってくれていますか……？」

処女を失った直後だというのに、ただ私の事だけを心配してくれる

ウイが愛おしく、その薄い身体を抱きしめる。

「ウイの中で、私はどうなってる?」

「おつきくて……跳ねてます。こ、これは、気持ちがよくて……?」

「うん。ウイの中、初めてとは思えない位気持ちが良いよ」

実際に、柔軟さとヒダの多さは処女とは思えない受け入れ具合だ。締め付けはさほどではないが、ガンガンと腰を使える犯し甲斐のあるマンコを持っていた。

「で、でしたら、私はもう、満足です♥先生の気持ちいいように、動いていただければ……」

そう言っただけで私に任せようとするウイの頭を撫でる。

「私も、ウイが気持ちよくなる動きをしたいんだ。お互いに教えあおうか」

くすつ、とチンポが刺さった状態で微笑みあい、セックスが始まる。

「あ、あの、先生。おっしゃって頂いた所なんです、な、なんだか、まだ良くわからないというか」

ぬぼぬぼと出し入れされながら、申し訳なさそうにウイが切り出した。

「ううん、気にしないで正直に教えてね。じゃあ、ここはどうかかな?」

ウイの太ももを片方だけ抱きかかえ、横寝にさせて奥深くを突いていく。

「んっ、ふっ、お腹の奥、先生に押されています……♥　　なんだか、一番奥を押されると、じわって、くるような……♥」

私の眼の前にウイのふくらはぎが差し出されたので、戯れにキスしてみた。

「ひゃっ!?　せ、先生!?　そんなとこ、キスするなんて……♥」

キスのたびにウイのマンコがきゅつと締まる。

「ウイはキス好き?」

「と、突然ですね。……先生とのキスは、たしかに、す、す、好き、です……♥」

マンコをぬぼぬぼと犯されながら、恥じらってしまい好きとかなにか言い出せないウイの態度にチンポから我慢汁が溢れ、ウイの子宮へ



と孕ませ汁が向かっていく。

「じゃあ、次はキスしながらしてみようか」

「は、はいっ♥ お、お願い、します♥」

ウイの股を大きく開かせ、覆いかぶさってキスしながら種付けプレスで上から突く。

「ふうっ♥ ふうっ♥ ちゅっ、ちゅばっ♥」

不器用に、ウイが唇を尖らせて私のキスを受け入れ、自分から舌をだして絡めてくれる。

舌の粘膜が絡み合うたび、マンコはうねり私の精液を絞り出そうと蠢いた。

「んふーっ♥ んふーっ♥」

だんだんとウイがセックスに没頭し始め、鼻息が擦ったいほどに私の鼻の下に当たる。

開かせた脚が持ち上がり、私の腰に絡んでホールドする。

頃合いと見て、私も腰を大きく振って力強くウイを犯し始めた。

ウイの膣は処女だが程よく緩く、パンパンと音がなるくらい速く腰を振ってもそこまで負担ではなさそうだ。

「ん、むっ♥ ん、んんーっ♥」

処女の腹の中をチンポが勢いよくかき回し、ウイの指が私の背中に爪を立てる。

たん、たん、たん、とリズムカルにチンポを抜き差ししていると、緩かったウイのマンコがピツタリと張り付き、3つの筋肉のリングが力をしごき立てる名器に変貌していく。

「んっふ♥ ふー、ふーっ♥ ちゅ、ちゅううっ♥」

ウイが、セックスにあつという間に慣れていく。乳飲み子のように私の唇を吸いたて、速いピストンを心地よさそうに受け入れてマンコを自発的に締める。

ヒナタで2回抜いていなかったらもう射精していたかもしれない。

ウイの性に貪欲な一面を見たことで、生膣に射精したい欲が急速に高まっていく。

「ぢゅるるるう♥ ぢゅばっ♥ れろれおっ♥」

ウイは私の口の中の唾液を吸い出し、それと交換のように舌を口内に侵入させて唾液を絡めてくる。

お互いにアイスアメリカノの風味がする唾液で喉を潤し合い、ウイの片手でホールドされて離れない唇を強く押し付けあった。

なにか声をかけたい所だったが、ウイに腰も顔も掴まれてしまっているため射精することしか出来ない。

夢中で楽しんでくれるウイに心の中で礼を言い、ウイの子宮口をガングアンと突く。

ウイの絶頂と共に、一番奥にナマで射精した。

「んぐむうううんっ♡♡」

ウイの愛する古書の子たちが見守る中、知性の欠片もないうめき声が入る。

大胆にもマンコが蠕動するようにチンポを締め上げ、精液をポンプのように吸い出してくれた。

「ぶあっ♡ はあ、はあ……♡」

初の膣内射精に浸り、虚ろな視線を宙にさまよわせるウイ。

「ウイ、すごく良かったよ」

もふっとして毛量の多いウイの頭を優しく撫でる。

「ふふ……先生も、すごく、その、良かった……です♡」

全力の運動に汗を浮かべて、ウイが清々しい笑顔を見せた。

ふとウイが視線を下げ、結合部を見る。

「本当に、先生の精液が私の中に入ってしまっただけですね……♡ 避妊薬が無ければ、赤ちゃんが来ていたのに♡」

愛おしげに下腹部を撫で、マンコを軽く締めつけてくるウイ。

その顔に浮かんでいるのは穏やかな笑みだが、しかしドロリと粘着く雌の生殖欲求を滲ませていた。

「避妊薬は飲んだから、今日だけはナマでするけど……どうする?」

「ど、どう、とは?」

「ウイがしたいなら、何回でも付き合うよ」

そう告げると、細い喉がぐくりと上下する。

「ほ、本当ですか? 本当に、お願い、しちやいますよ?」

そう言いながらも、ウイの目の奥に宿った炎はもう次のセックスを求めている。

私はウイを立ち上げらせ、ソファの裏に回って背もたれに手を付かせて腰を突き出させた。

後ろからウイをガニ股にさせると、全裸にスリッパと黒ソックスだけの卑猥な格好のウイの股間からボタボタと精液が垂れる。

小さなお尻を掴み、一気にチンポを入れた。

「うっ ♡ あああっ ♡」

ぱあん！ と拍手のように肉と肉がうち合わさり、古書館を騒々しくする。

床にまで届いていたウイの2つくくりの髪の毛が、ほうきのように踊り床を掃く。

「ほら、ウイ。ウイの好きな本に囲まれてセックスしてるよ」

「やっ ♡ やあっ ♡ 言わないでえ ♡」

ウイは俯いてしまうが、マンコの締めりはキツイままだ。

ウイがあの子たち、と人のように愛している古書は黙して語らず、ウイの痴態を見守っている。

一度精液の味を知って粘りが強くなったかと錯覚するくらいに、マンコが締まっていた。

それを強引に前後することで、お互いに強い刺激を味わう。

「あーっ ♡ あうーっ ♡」

キスに遮られないウイの善がり声は発情期の獣さながらで、本日4発目のチンポを奮い立たせてくれる。

誰がやってきてもおかしくない古書館の見通しの良いロビーで全裸になってガニ股で後ろから犯されるウイは普段の面影を感じさせないほど『女』だった。

「ウイ、さつきみたいに絶頂する時は、ちゃんとイクって声にだして言ってみて」

「ひぐっ ♡ いっぐ ♡ イクイクイクッ ♡」

ちゃんと言葉を聞いてくれているウイに、ご褒美として眼の前でひくつくアナルに指を入れた。

「イッグウウウウ♥」

その瞬間、ウイが背を仰け反らせて絶頂する。私もウイの生膣に射精した。

いくつもの照明が汗まみれのウイの身体をぬらぬらと照らす中、私達は彫像のように固まってウイの子宮に精液を流し込む。

ぐったりと膝から崩れるウイの身体を支え、チンポをハメたまま歩いてまたソファに座った。

「どう？ 満足してくれたかな、ウイ」

「はあ……♥ はあ……♥ も、もつと、お願いします……♥」

古書に見られる事を意識したまま絶頂を叫んだことでタガが外れてしまったような緩んだ笑みを浮かべて、ウイが熱っぽく囁いた。

ソファに座ったまま身体を反転させ、対面座位に私を追い込んだウイのしかかってくる。

がちつと太ももで脚をロックされ、腋の下に腕を通されて上半身も固められ、動けない私を、ウイは爛々と輝く目で見つめ、鼻息も荒くキスをしてきた。

「ふっ♥ ふっ♥ ふっ♥」

ただただ己の性欲を満たすためだけに、淡々と私の上で跳ねるウイ。

それからしばらく、生徒の生バイブとしてたっぷり絞られるのだった。

「あああああ！ も、申し訳、ごさいませんでした！」

全裸のウイが、裸で土下座している。

4発も膣内射精を強請られ、流石にチンポも立たなくなってきた辺りでウイが正気に戻ったのだ。

「謝る必要はないよ、ウイ。私もすごく楽しかったし、気持ちよかったですから」

「せん、せい……♥」

身体を起こさせ、全裸でソファに座る。敷いたタオルはぐっしよりと濡れ、目を凝らすとウイの破瓜の血の跡も見えた。

激しいセックスを終えて気怠い身体をくつつけあい、ウイの体温と体臭に包まれながらゆったりとおしゃべりした。

「せっかくウイとセフレになったし、これからは交換ノートにやりたいセックスのことも書いていこうか」

「ええっ!? だ、だ、だめですよ……! 誰が読むかわからないんですから……!」

「じゃあ合言葉を決めて、他の人には分からないようにすればどうかな?」

「そ、それなら、はい♥ 先生と、次にお会いできるのを……楽しみにしています♥」

今までとは違った意味でそう言って、ウイははにかんだ。

「マイスターの応援セックス（ヒビキ）」

「お、終わった……」

溜まった書類仕事をどうにか片付けた私は、大きく伸びをした。

「お疲れ様、先生。はい、コーヒーどうぞ」

深夜の執務室。部屋の照明すら目に痛く、光量を落とした明かりだけが部屋を薄暗く保っている。

その中であって、ヒビキの白いチア衣装と、多く露出した白い肌が窓から差し込む月光に輝くようだった。

「さすが先生だね、追い込まれてからタイプピングが加速してた」

「ヒビキが応援してくれたからね」

私の返答に、ヒビキがぐすりと微笑んだ。

マグカップを私の前に置いた前かがみの姿勢のまま、私の顔を覗き込んでくる。

「そんなに効いた？ 私の『応援』」

「もちろんだよ」

至近距離で見つめ合うと、ヒビキが顔をそっと近づけて目を閉じた。

「ん……♡」

吸い寄せられるかのように、私達は唇を重ね合う。

にち、と粘質な音が深夜の部屋の静寂の中はつきりと聞こえた。

動物が毛づくろいしあうように自然に、舌尖を絡め合い唇を吸いたてるセックス前提のキスをする。

「ん……ここまで。コーヒーが冷めちゃうよ」

にちゅ、と糸を引いてヒビキの唇が離れる。

それもそうだと、一日中座り続けて尻が痛い椅子を立ち上がりコーヒーを持ってソファに座った。

「ずずーっ……」

柔らかなソファに体をあずけコーヒーを啜ると、すぐに眠気が襲ってくる。

「お疲れ様、先生」

ヒビキがソファの隣に座り、私に身体を預ける。

夏も去って深夜になると肌寒い季節、ヒビキのむき出しの肩や腹も冷えてしまっていた。

抱き寄せて肩や腕をさすると、心地よさそうに喉を鳴らして私の肩に頭を乗せてくる。

次は腰に移り、細い腰を、腹を、ゆつくりと手のひらで温めた。

「ヒビキの淹れてくれたコーヒー、やっぱり美味しいね」

「慣れてるからね。先生も目を覚ましたいだろうし」

セフレになってから何度もセックスを経験し、ヒビキもすっかり寛いだ雰囲気です。セックスを楽しむようになった。

今日ももちろん、セックスするつもりでここに来てくれている。

仕事明けのぼーっとした頭で雑談をしながらヒビキのコーヒーを飲み、ヒビキの身体を撫で回す。

むき出しの太ももにペたりと手を置き、上に這い上がると、短いスカートの下にまで潜り込んだ。

「おや、アンダーコートじゃないんだね」

指に触れるのは明らかに薄い、ヒビキのマンコの感触をはつきりと伝えてくる布だった。

「んっ♥ うん、だって、シャーレに入ってから着替えたし……先生以外とは誰も会わないから」

「セックス用に見せていいのを穿いてくれたんだ？」

私がハッキリと言うと、クリトリスを固くしつつあるヒビキがマンコを弄られながら頬を赤く染めた。

「うん♥ 服は、その場に適したものがいちば、んっ♥ だから。先生とセックスするのに、最適なのを選んできたつも、りっ♥」

クロッチ部分も横幅が狭く、ヒビキの可愛い陰唇をかるうじて隠す程度しかない。

くにゅ、くにゅ、と薄い布越しのヒビキのマンコは、もはや処女の時のぴったりと閉じたすじマンではない。

愛液に濡れた小陰唇が簡単に触れる、女のマンコに成長を遂げている。

「は……ん……ん……♥」

そつとヒビキの脚が開いていく。腰の後ろを回る私の腕に、ふかふかの尻尾が絡みついて左右に揺れ、少しくすぐったい。

「さすがヒビキのチョイスだね。私もすぐ目が覚めてきたよ」

カフエインとヒビキの痴態で、眠気に遮られていたチンポのイライラが高まってきた。

「でも、ヒビキがあんなことを言ってくれるとは思わなかったな」

「もう、思い出させないで、先生。私だって、恥ずかしかった」

ぷく、と可愛らしく頬を膨らませながら眉を逆立てるヒビキ。

しかし、言葉とは裏腹にその太ももは大胆にも私の太ももの上に乗り、スカートはめくられて白い紐パンが露わになっていた。

「そう言わないで。ヒビキが積極的になってくれて嬉しいんだよ」

私は飲み終わったコーヒーマグのカップをローテーブルに置き、ヒビキを抱きしめるように身体の向きを変えてチア衣装の胸に手を伸ばした。

「ふふつ。そうみたいだね。先生がこんなに元気を出してくれると、チア衣装を着た甲斐があるよ」

夜遅くにチア衣装で私を訪ねてきたヒビキは、疲労困憊の私にこう言った。

——この間のワープロは先生に没収されちゃったから、デスクワークの応援の仕方をまた考えてきたの。だから、ね……

——先生が早く仕事を終わらせてくれたら、私がこの衣装で先生といっぱいセックスしてあげる。そういうのは、どう、……かな。

私はヒビキの最高の応援に気力を奮い立たせ、仕事を全力でやりきった。

ヒビキの胸を覆う衣装はホルターネックの水着のようになっていく。

15歳にしては豊かな胸を寄せて上げるそこは、素人仕事ゆえか微かに勃起した乳首の位置が分かる位に薄かった。

「ん……やっぱ、クオリティが低くて恥ずかしい……」

私の視線を感じて胸元を見て、乳首の勃起が目立ってしまったている



事を恥じるヒビキ。

「私はこの方がヒビキのセクシーさが感じられて好きだよ」

私が心から言っていることが伝わったのだろう、ヒビキは困ったようににはに cand。

「先生は本当に生徒とセックスするのが好きだよね」

「ヒビキは嫌になった？」

ヒビキは、マンコを弄られ胸を揉まれながらも、ゆっくり首を振ると目を細めて自然な笑みを浮かべた。

「うん。私は先生とのセックス、大好きだよ。だから深夜に先生に会いに来たんだし。……でも、先生は毎日皆とセックスしてるから飽きたりしないのになって」

「ヒビキも、皆も、とても魅力的だからね。飽きるなんてことは無いよ」

「うん。先生ならそう言ってくれると思った。……ね、もう、挿入れて？ 今日、この服を着たままシたいの」

まだまだマンコの外側しか弄っていないが、にちにちと薄いショーツは湿り気を帯びている。

私はヒビキから離れてセックス用にタオルケットをソファに敷くと、下半身裸になって座った。

立ち上がったヒビキが短いスカートの中に手を入れて出すと、解けた紐パンが片手にぶら下がっている。

股間が湿ったそれをローテーブルのカップのそばに落とし、チンポをフル勃起させて座っている私の正面からソファに膝立ちになって私に跨った。

「先生、疲れてるでしょ？ 今日、私は私が全部してあげる」

薄暗い執務室の中で、間近に迫ったヒビキの優しい微笑みが輝くようだった。

膝立ちのまま、ヒビキがまずはゴムを付けてくれる。

ぺろん、とスカートをめくり、結合部を確認しながらヒビキが腰を下ろす。

チア衣装用に陰毛は丁寧に剃られ、紐パンを穿いた時にも毛がはみ

出ないようにしていたことを遅れて知った。

まだまだ15歳相応と言っても良い、花開き始めたマンコに私のチンポが押し付けられ、正確なガイドによりすぐに膣口に飲み込まれていく。

濡れ方が少し足りないのかひつかかりを覚えるが、ヒビキは慣れた調子でチンポを掴み軽く腰を振ってマンコを刺激すると、奥から愛液が追加されて亀頭が全部入り込んだ。

ずるん、と一気に腰を落として奥までチンポを啜え込む。

「んつく……♥」

ヒビキは息が詰まったような、いき声をこらえるような艶めかしい呼吸音と共に俯いた。

ゆつくりと顔を上げ、後れ毛をかき上げるヒビキに大人の色気を垣間見る。

「はあ、はあ……♥ 先生のオチンポ、相変わらずとっても大きいね♥」

にこつと笑ったヒビキは、もういつものセックスの時のヒビキだった。

それに安堵と惜しさを感じつつも、愛しさに任せて細い体を抱き寄せる。

「先生は動かないでね。今日は私がするんだから」

いたずらを仕掛ける子供のように言って、私の首に腕を絡めて抱きついた姿勢から腰を引き上げる。

ヒビキの腰の後ろでは尻尾がゆさゆさと左右に振られ、その喜びを伝えていた。

ぬるうう、とヒビキのキツめのマンコが私のチンポに張り付いてしごき、亀頭の力を丁寧に撫で上げるように通り過ぎていく。

「ああっ♥ 先生のオチンポ、力が強く引つかかって、とってもカッツコイイよ♥」

耳元で、ヒビキの囁き声が私のチンポを称賛してくれる。

私の首を支えに、抱きついたヒビキが柔らかな胸を強く押し付けながら大きく腰を上下に振り始めた。

にゆつぶ、にゆつぶ、と静寂に満ちた深夜の部屋にヒビキのマンコの奏でる水音が満ちる。

「ん……♥ あ……♥ ふふっ♥ フレー、フレー♥ 先生……♥」  
ゆったりとした腰使いで、癒やし効果さえ感じるスローペースなセックスのさなか、ヒビキが耳元で囁いた。

「イけ♥ イけ♥ 勝て勝て、先生♥」

以前にやったチアとそっくり同じ事を、セックス中に、込められた意味だけ変えて囁いてくれる。

「勝つって、何に勝つの？」

前と同じように尋ねると、マンコをチンポでしごき立てながらヒビキがクスリと笑った。

「私の、セフレマンコ♥ 先生のカッコイイ、カリ高チンポでめっちゃくちゃに勝って欲しい♥」

いつもと同じ、しっとりとした囁くような声に、ねばつく女の性欲を乗せてヒビキが淫語で私を応援してくれる。

「でも、イけって言ってなかった？」

「だって、私も先生を気持ちよくしてあげたいから♥ 私のマンコにも頑張れって応援してるの♥」

それを示すように、ヒビキのマンコがキュンキュンと強く締まる。「でも、本当に先生のことにも応援してるよ♥ 頑張れ、頑張れ、先生♥」  
ずつぶ、ずつぶ、と愛液の分泌が増えて水音も音量を増し、ヒビキの腰もより速くなっていく。

ヒビキは抱きついた姿勢から身体を離し、私の肩に手をおいてM字に開脚してソファに踏ん張り、より自由に腰を振り始めた。

「はっ、はっ、はっ♥」

腕の長さ程度の距離で、私に跨って腰をふるヒビキと見つめ合う。清らかな空色を感じさせるヒビキの瞳が、今は性欲できらめいている。

興奮に顔を赤くする頬にはチークなど必要なく、滑らかなその頬に手を当てるとスリスリと頬ずりを返してくれた。

小動物のような可愛らしさを感じつつも下に目をやると、15歳の

可憐なマンコがぐっぽりとチンポを啜え込む淫靡な光景が繰り広げられている。

ヒビキは細かい動きで腰を上下左右に振って、私のカチを気持ちいい所に擦りつけていた。

何度もセックスしてお互いの気持ちいい所を把握しあつた私にはまるわがりの動きだ。

「ああっ、すごいっ！ なんども経験してるのにつ ♡ 何度やっても勝てないっ ♡ 先生のチンポかっこいいっ ♡」

すすり泣くような、鼻にかかった声でチンポを称賛するヒビキ。

半開きになった口からはとろりとよだれが垂れ、胸元に落ちて谷間に滑り込んでいる。

私の目の前で青と白の綺麗なチア衣装の胸がゆさゆさと揺れ、チンポの勃起を力の限り応援してくれていた。

「ああっ ♡ 勝て、勝てっ ♡ もうすぐっ、私のマンコ、負けちゃうから ♡ 先生っ ♡ 勝って ♡ 勝ってえ ♡」

半狂乱になって腰を振り、淫らな言葉で私を奮い立たせ続けるヒビキのチア精神に心を打たれる。

ヒビキの腰を強く抱き寄せ、下から力強くチンポで突き上げた。

「ああうう ♡ イク ♡ イク ♡ がん、ばれえ ♡ がんばれえ ♡ せんせえ ♡ あ、ああーっ ♡」

深夜の執務室に、ヒビキの控えめな絶叫が響き渡り、私達は同時に絶頂した。

仕事し通して疲労しきつた身体に鞭打ち、ヒビキの子宮にチンポを押し当てて精液を放つ。

脱力して私にしなだれかかり、首に抱きついてくるヒビキを受け止めた。

「はあっ ♡ はあっ ♡ はあっ ♡」

その腕も、胸も、身体も絶頂で小刻みに震えており、射精しているチンポからは断続的な膣の締りを感じる。

どっぷりと膣イキの快感に浸っているヒビキの背中を優しく撫で、ゆったりと2人で余韻に浸った。

「はあ、ふう……♡ ふふ、やっぱり先生は私と一緒にイッてくれたね」

格好だけは普通のチア衣装のまま、ゆつくりと腰を浮かせてスカート奥からずるりとチンポを抜くヒビキ。

たつぷりと精液の詰まったゴムを手早く外して口を縛ると、カップとショーツのそばにゴムを落とし、また新しいゴムを付けてくれた。

「一日仕事してたし、まだできるよね？」

「もちろん。ヒビキのチア、もつと見せてほしいな」

「じゃあ次は……こういうのはどうかな？」

ヒビキは後ろを向くと、ローテーブルに手をついてガニ股になり、尻を私に突き出す。

尻尾でスカートが大きくめくれ、ヒビキの丸いお尻がまる見えになっていた。

さつきまで激しくセックスをして汗と愛液で濡れ光っている尻を掴み、座ったままだと目の前にくるヒビキのマンコをじっくりと鑑賞する。

奥から蜜を滴らせるそこに口づけ、熱く潤んだヒビキの陰唇と濃厚なキスをする。

「あ、あああ……♡ そんな、イッたばかりだからあ♡ もつとやさしく♡」

ヒビキのマンコを舐める私の鼻先にはアナルがあり、眼の前にはふさふさの尻尾が左右に揺れている。

たつぷりとヒビキの汗を吸った尻尾から芳しいヒビキの発情臭を吸い込みつつ、ガニ股で無防備に股間を弄らせてくれるヒビキを存分に絶頂させてあげた。

「ん、お、おっ♡ だめ、ほん、とおにい♡ も、たつて、られないからあ♡」

何度もイかせていると、ヒビキの膝がぶるぶると震えてきた。

「じゃあ、ヒビキはソファにうつ伏せに寝そべって。今度は元気づけてもらった私がお礼をしなきゃね」

「ん……♥」

スカートは揺れる尻尾で完全にめくられて尻を淫靡に飾る意味しか成さず、脚を少し開いて犯され待ちの姿勢を取ってくれる。

「頑張れ、頑張れ♥ 先生♥」

振り返ってニコニコと応援してくれるヒビキに覆いかぶさり、クイとお尻を上げてくれるヒビキと協力してセックスを再開する。

「あっ……♥ 先生の身体に包まれて、温かいよ」

私たちは深夜の執務室で、まるでただ添い寝をしているかのような姿勢で愛し合う。

「ふっ……♥ ん……♥」

体重を乗せてヒビキの奥深くをじつくりとほじる。

そこは絶頂を繰り返して緊張も完全に取れ、押し込むほどに肉壁のうねりが返ってくる、勝手知ったる安心感のあるマンコと化していた。

後ろからヒビキの髪と獣耳に顔を埋め、濃厚なヒビキの匂いを嗅ぐ。

「あん……♥ 私の匂い、そんなに好き？」

「うん、優しくて落ち着く匂いがするよ」

ヒビキは後ろ手に私の頭を優しく撫でてくれた。

シャイなヒビキが時折見せる包容力をセックス中に実感し、強く抱きしめる。

腰を強く振って、ばっふ、ばっふとみっともない音を立てた。

童貞のように必死になってヒビキの身体を求め。

チア衣装のトップスの上から手を滑らせ、ソファで潰れたヒビキの胸を揉みしだく。

汗に濡れたヒビキの首筋をちゅうちゅう吸い、翌日の事を気にせずキスマークを刻み込んだ。

寝そべって動けないヒビキが私のチンポで快感を感じているのが、膣肉の痙攣で伝わってくる。

「んっ♥ あああ♥ も、もういきそうっ♥ せんせいの、すきなようにっ♥ イかせてっ♥ 勝て♥ 勝て♥ せんせえ♥」

殆どイッているかのように強い締付けの中、ヒビキが甘つたるい声で渾身の応援をしてくれるのに合わせて、一番奥で射精した。

ぴったりと身体を重ねて、本当の種付けのように奥深くに一滴残らず射精する。

「ふう……♥ ふう……♥ ふう……♥」

何度も絶頂したヒビキはぐったりと突っ伏したまま、マンコだけが私のチンポをもぐもぐと美味しそうに頬張っていた。

「おはよ、先生」

居住スペースから出てきた私を、仮眠室で一夜を過ごしたヒビキが迎えてくれる。

近隣住民の目を気にして、一応別室に泊まったというアリバイを作ったのだ。

しかし、朝日の中でチア衣装を着たヒビキの首筋には昨夜の濃厚なセックスの動かぬ証拠であるキスマークが残っている。

「先生のキスマーク、消しちゃうのはもつたいないんだけど……外に出るときにはファンデーションでごまかしておくね」

ヒビキは、つうと首筋のキスマークを愛おしげに撫で、自然な笑みを浮かべた。

言葉通り、パフで何度か叩くだけで傍目にはセックスの痕跡が消えてしまった。

「先生。今度は、セックス用になにかコスプレ衣装を作ってあげようか?」

「いいの?」

「うん。先生もコスプレセックス、好きみたいだし。私も……普段と違う感じで楽しかったから」

「なにか考えておくよ」

すっかりとセックスが生活の一部となったヒビキの成長ぶりに胸が熱くなりつつ……次のセックスの約束をして朝日の中別れるのだった。

## 情熱とロマンの学ランセックス（ウタハ）

「ウタハとセックスがしたいんだ！」

「ちよ、え、ええっ!? 先生、こんな所でそれは……!」

バツ、と髪が横になびく程の勢いでウタハが入り口を見る。

ここはカラオケ屋の一室だ。

シートに隣り合って座るウタハの顔が、瞬時に真っ赤になった。

ピッタリとしたパンツルツクの太ももがギュツと寄せられ、それが股間のラインを逆に際立たせている。

むにやむにやと口を開きかけては閉じ、何を言っているのか分からないようだった。

部員たちが最近元気がないということに、応援歌を作ろうという謎の考えを持ったウタハが、私に聴いてほしいというのでやってきたのだが……

よくわからない歌詞の演歌調の歌をひとしきり聞いた後、ウタハがスツキリした顔でこういった。

——先生にも日頃お世話になっているし、なにか応援してほしいことはあるかい？ どんな依頼でも請け負おう。

——たとえば内容が理解出来なかったとしても、受けた依頼には全力で取り組むのがエンジニア部のモットーだ！

というので依頼したのだ。セックスを。

「でもさっきどんな依頼でもって」

「限度があるだろう……! だいたいセツ……のなにが応援なんだい!?!」

「イライラしたチンポを鎮めるための応援だよ」

学ランのウタハが、普段とは違った豊かな胸をかばうように腕を組み、身を振って私の視線から逃れようとする。

「……お、応援してもらわないと鎮まらない、のかな?」

「もちろん。ウタハのような可愛い女の子の応援だけが鎮めることができるんだ」

男装をしているが、むしろ女らしさが強調されたウタハのくびれた



腰を抱き寄せる。

ウタハの白手袋をはめた手を取り、チンポに導いた。

「あつ……か、硬い……」

真つ赤な顔でズボン越しにテントを張る私のチンポを見つめ、さす、さす、とほんの微かな動きで指を動かすウタハ。

「お願い、セックスしてよ、ウタハ」

「うう……」

いつもハツラツとしたウタハが、俯いてチンポを視界に収めつつ縮こまっている新鮮さでチンポがますますイライラする。

私はいつまでもまごついているウタハの眼の前でジッパーをおろし、チンポを取り出した。

「わっ……」

ウタハが目を見開いてチンポに釘付けになる。

「触ってみてくれないかな?」

「ぐくつ……ま、まあ? 男性器というものを実地で触れられる、き、貴重な機会だから……少しね? 少し……」

ウタハは言い訳のように呟いて、ソロソロと白手袋のまま私のチンポに手を伸ばした。

竿の部分に指先が触れ、指だけでまずはつうと撫でる。

つんつんと指で押し、チンポを根本からぶらぶらさせたりしつつ、ゆっくりと焦らすように……顔を真赤にしているので単に躊躇しているだけだが……チンポを、掴んだ。

「あ……硬い、けど、表面は弾力があるんだね」

ぐつ、ぐつ、と握る力を変えたりと、セックスではしない動きにウタハらしさを感じてイラつきを増したチンポの先から我慢汁が溢れた。

「わ、わ、先生、なにか、液体が滲んでいるよ?」

ちらりと上目遣いに、我慢汁が何なのか理解していないウタハが疑問の視線を投げかける。

「ウタハに握ってもらって興奮したから、射精の準備みたいな液体が溢れて来たんだよ」

「へ、へえ……握っただけで、興奮してしまった、のかい」

「今くらいの力加減で、握ったまま手で上下にしごいてみてほしいな」  
「あ、ああ……分かった」

いつの間にかチンポに夢中のウタハが、素直に手コキを初めてくれる。

ゆっくりしすぎて慣れない感じの手コキに、尿道に溜まっていた我慢汁が溢れ、垂れてくる。

ウタハの清らかな白手袋に我慢汁が絡みつき、染み込んでいく。

「あ、熱い……ね。手袋越しでも、こんなに……それに、汁もどんどん出てきて……これも、興奮しているって、こと？」

「うん。ウタハの力加減、ちょうどいいよ。もつと速くしごいてみてくれるかな」

「速く……こ、こうかな？」

にちゆ、にちゆ、とカラオケボックスで歌も歌わず手コキで我慢汁を泡立てる音だけを響かせながら、ウタハの腰を撫で回す。

「ごくっ……先生のここ、ますます硬くなって……先端も、傘のような……返しがこんなに大きく……♥」

もはやウタハの手袋は臭いが落ちないのでは無いかというくらいに我慢汁が染み込み、少しざらつく手袋の感触と我慢汁のヌメリでいい塩梅に刺激を強くしていた。

しかし射精には遠いが心地いい手コキは、唐突に終わってしまう。  
「うう……すまない、先生。この姿勢で腕を振り続けるのは結構疲れ……」

「ああ、それもそうだね。ごめんね、無理させて」

隣り合って座る姿勢は手コキに向いているとは言えなかった。

ウタハは手を離して、我慢汁がべつとりと染み付いた自分の手を見つめ……そつと顔を近づける。

「ん……♥ 先生の濃い臭い、すっかり手袋に移ってしまったね……」

♥ これは……洗っても取れないかもしれないな」

すん、すん、と液体を吸いすぎて変色して見える指先を鼻先にくつつくくらいに近づけて臭いを嗅ぐウタハ。

「ごめんね、クリーニング代とか出すよ」

声をかけられハツと我に返ったウタハは、さっと手を腰の後ろに隠した。

「い、いや、良いよ。応援の服は汚れるものだから。こ、これは、私の方で処分しておく……♡」

そっと手袋を外し、ねとねとの我慢汁を付けたままでカバンにしまおうウタハ。

それについて何か言う前に、またチンポに手が伸びてきた。

「それよりも、応援の続きだよ。男性器というのは実物を初めて見たが、なかなか興味深いものだね。……観察し易い姿勢で見せてもらおうよ」

そう言つて、座っている勃起した私の脚の間に跪き、眼の前でチンポを見据え……素手で握つた。

「わあ……♡ 手袋越しにも感じていたが、こんなに熱く感じるんだね」

常に手袋に包まれていたウタハの素手が、私の我慢汁に塗れる。

「それに……この先端の部分。ここはとても柔らかいな」

そう言つて、亀頭を遠慮なく指で撫で回す。ビリビリとした強い刺激が私に襲いかかった。

「ううっ」

その無邪気とも言える愛撫に思わず声が出ってしまった。

「だ、大丈夫かい、先生？ すまない、こういうのは、全然わからなくて……」

「ああ、大丈夫。先端のところは刺激が強いから優しくして欲しいな」「し、刺激が……そ、それは、その……気持ちいい、のかな？」

おずおずと、羞恥と知的好奇心がないまぜになった情熱の炎を目に宿したウタハが質問してくる。

「うん、ゆっくりなら気持ちいいよ」

「分かった……ええと、さっきのはこの位の速度だったから……こう、かな」

ウタハの指が、ねつとりと、じれったいほどの速さで亀頭を這う。

「触って見ると、段差の部分がざらついているんだね……♥」  
「うん。ウタハの膺をこすって気持ちよくするためにそうなってるんだよ」

「こ、ここが……私の中を……？　ぐくつ……♥」

別の指がカリの段差を同じくゆつくりと撫で、私は我慢汗をどぶどぶと垂れ流して応えた。

「ふふ、お気に召してくれたみたいだね。なるほど、なるほど……他にどうすれば良い？」

「先端から筋みたいなのが Continuing している所も敏感なんだ」

そう教えると、裏筋を指がつうと下に降りていく。

「あつ♥　また痙攣したね。これも良いのか……♥　ふふ、すこし分かって来たかもしれない」

爛々と目を輝かせ、新しいおもちゃのようにチンポを弄り回し性知識を吸収していくウタハ。

「そろそろ、口を使ってみてくれないかな？」

その動きがピタリと止まった。

「くつ、くちゅ!？」

「うん、チンポにキスしたり、啜えて舌で刺激してみて」

またも顔を真っ赤にして固まってしまったが、ギュツと目を瞑って意を決して顔を近づけて行くウタハ。

「ん……む……♥」

飾り気のないウタハの唇が、私の裏筋に不器用に押し当てられる。

べつとりと我慢汗塗れになり、リップクリームのようにテラテラとウタハの唇を淫らに光らせた。

「良いよ。そのまま吸ったり舐めたりして」

「うう……ほ、本当にこんな事をしなければならぬのかい……？」

そう言いながら、唇はチンポにかすめる位に近いままだ。

「啜えて、頬の内側がくつつく位に吸ってみて」

「はあ……はあ……♥　あー……むぐ♥」

私が特に強制せずとも、ウタハは大きく口を開けて亀頭を飲み込み、微かに歯を当てながらも口内に収めてくれた。

「歯が当たると痛いから、唇を内側に巻いて歯をカバーしてね」  
「んむう……♡」

優しくウタハの頭を撫でながら言うと、従順にしたがってくれる。  
「ぢゅうっ♡ ぢゅぼっ♡」

そして、我慢汁ごとチンポを吸ってひよつとこ顔になってくれた。  
「そう、上手だよ、ウタハ。そのまま顔を上下に振って、手でしてくれた時みたいに唇でしごいてみて」

息苦しさと羞恥で眉を顰め、私に恨めしそうな視線を送りながらもウタハは初フェラで頑張ってくれた。

「お、えっ♡ ぶはっ！ けほっ、けほっ！ はあ、はあ♡ 無理だよ、先生。喉にあたってえずいてしまう」

デープスロートになりかけたが、普通の処女であるウタハには酷な技だった。

気を取り直してセックスの続きを初める。

「ありがとう、ウタハ。私の準備は整ったから、次はウタハの準備だね」

「えっ!? こ、これで応援は終わり、では」

「まさか。ウタハが一生懸命してくれたから、すごく大きくなっての、見えるでしょ」

ウタハが視線を下ろし、我慢汁と唾液でベトベトになってフル勃起している私のチンポに魅入った。

「や、やっぱり、その……せ、セックス、を……する、つもりなのかい？」

白く細い喉がゴクリと鳴り、私の我慢汁をウタハが飲み下す。

ウタハの手首を掴んで立たせ、今度はウタハを長椅子に座らせてズボンを膝まで脱がせた。

「やっ……♡」

羞恥で顔を逸らすウタハ。

ショーツも脱がすと、甘酸っぱい汗の匂いと共に、すえた愛液の……メスの臭いが室内に充満した。

「ウタハの匂いがするよ」

「やあ……♡ そんなこと、言わないで……♡」  
よほど恥ずかしかつたのか、涙目になって掠れた声で可愛い事を言うウタハ。

「私はウタハの匂い、好きだよ」

「やめてえ……♡」

ウタハは手で顔を覆ってしまうが、それはウタハの顔に我慢汁を塗り伸ばすに等しい行為だ。

ズボンで膝を拘束された脚を上げさせ、程よくぴらぴらが発達した、まだ綺麗なウタハのマンコに口づける。

「んっ♡」

普段の低めの声からは想像できない、可愛い高い声をしたウタハの喘ぎ声を聴きながら、クンニを始めた。

「ああっ♡ だめっ♡ せんせっ♡ やめっ♡ とまってえ♡ こ、こんなところでっ♡」

ぴちや、ぴちやと音を立てて吸いたて、舐め回すと後から後から愛液が溢れて私の口元を汚す。

上目遣いにウタハを観察すると、私と入り口とで忙しく顔をキョロキョロさせていた。

「だ、だれか来てしまったら、どうするんだいっ♡」

「ウタハと仲良くしてる所を見せつけてあげるとか？」

「ば、ば、ばっ♡」

クリトリスを舌先で転がされながらだといつものように頭が回らないのか、子供のような罵倒が降ってくる。

ちゅうう、とクリトリスを強く吸引すると、ウタハのほっそりとした脚が強く閉じられ、尻がきゅっと引き締まる。

「~~~~~♡」

ウタハは全身を丸めて痙攣させ、絶頂した。

ズボンに拘束されたウタハの脚がパタパタと揺れ、快楽を逃がそうともがく。

「はぁーっ♡ はぁーっ♡ はぁーっ♡ はぁーっ♡」

たった一度クライキしただけでウタハは息を切らせ、意識を朦朧と

させている。

ずるん、と背もたれからずり下がり殆ど仰向けになって、ウタハは呆然と天井を見つめていた。

「ウタハも準備が整ったみたいだし、セックスしようか」

私はズボンを脱ぎ捨て、全身がふにやふにやになったウタハを席に膝立ちさせて後ろを向かせた。

カラオケボックスのシートは壁際に置かれているが、間接照明のためか壁には凹みが出来ておりウタハが頭を入れるには十分な奥行きがある。

椅子の背もたれにお腹を乗せて白い尻を突き出すウタハは犯されるのを待つばかりの美味しそうなメスだった。

「じゃあ、入れるね」

「あ、う……♥ いい、良いとも。エンジニア部に、一言は……無い！」  
ウタハが部長の意地を見せ、合意のセックスとなった。

くぱ、くぱ、と息をするように開閉する膣口を指で拡げ、亀頭を押し付けて処女膣を押し広げ、めり込ませていく。

「あ、あ……♥ 先生のが、入って……♥」

背もたれを握るウタハの手に力が籠もり、学ランの襟で殆ど見えないうたハの首筋が羞恥と興奮に紅潮しているのをじっくり観察しながら……腰を突き出した。

「う、あああああーっ！」

ぷちん、という強めの手応えと共にウタハの処女が失われる。

たらりと破瓜の血がウタハの内ももを伝い、真っ白い応援団のズボンの内側に淫行の証拠をクッキリと残す。

真っ正直に握りしめるような強さで締め付けてくるウタハのマンコに、私の我慢汁がどぶどぶと染み込み妊娠の可能性のある交尾が始まった。

「大丈夫、ウタハ？」

「い、いたい、な……！ これ、が、破瓜の痛み、という、ものか……」

♥ でも、先生が相手なら、悪くないと、思えるよ」

全身が力み、目の前のウタハの白く丸い尻と濃い茶色の肛門が

キユツと窄まっている。

そんなウタハのお尻を撫で、ジツと動かずに待った。

「ふう、ふう……す、すまない、先生。別に、動いてもらっても、大丈夫だから……」

「気にしないで。ウタハにも気持ちよくなって貰った方が私も嬉しいから」

「う、うん……ありがとう……」

尻を突き出したポーズのままのウタハの肛門を見つめながらそんなやり取りをしつつ、ウタハの冷や汗が引くのを待つ。

ちら、ちら、とウタハが控えめに振り返り、囁くような小声で言った。

「うん……その、もうそろそろ、動いてもらって大丈夫だから……」

撫でさするウタハの尻からも強張りが解け、もちもちとした弾力が戻ってきている。

その尻を掴んで指を食い込ませつつ、ゆっくりと腰を引いた。

「くっ、ふ……♡」

ウタハの膣がみっちりと吸い付き、腰を引くと膣口から鮮やかなピンク色の膣肉まで引っ張り出されていた。

しっかりと発達した女性の身体をしたウタハは膣ヒダもそれなりに育っており、カリがヒダに引っかかり、ぞりゆ、と撫で上げるように刺激してくる。

「うっ♡」

膣ヒダから強い刺激を与えられるたび、ウタハもぴくんと痙攣する。

「ああ……♡　すごいね、この引っ掛かり……♡　なるほど、これは、機能的だ……♡」

静かな吐息のように、密やかなウタハの声がセックスを楽しんでいる事を告げ、私のチンポはますます我慢汁を膣奥に撒き散らす。

「初めてでそんな事まで感じ取れるなんて、ウタハもセックスの才能があるかもね」

「そ、そうかい？　先生が気持ちよくなってくれるなら、嬉しい、かな



……♥」

そう言つて俯いてしまふが、ちらりと見える耳は紅潮しておりウタハの表情が平静でないことを想像させた。

「ウタハが気持ちよくなれば私も気持ちよくなるよ。さあ、2人で一緒に気持ちいい所を探そうね」

にゆるる、と速めに引き、ゆっくりと押し込む。

「あつ♥ あ、あ、あ♥ せ、せんせい♥ しげき、強いからっ♥」

ひくひくっ、と肛門が震え、背もたれを掴む手に力が籠もる。

「どうかな、特別に気持ちいい所があつたら教えて」

「あ♥ き、きもちいいっ♥ からっ♥ もっと♥ ゆっくり♥」

くぷ、ちゅぷ、と水音を立てるほど愛液が滲み、ウタハの学ラン姿の背中が震える。

私はウタハに覆いかぶさるように密着すると、学ランのボタンを外し始めた。

「あ、せ、先生、ボタンくらい自分ではずすから……♥ こ、腰止めてっ♥」

ずっぷりと奥まで貫いて止め、ウタハの首筋に顔を埋めて匂いを嗅ぐ。

ぷち、ぷち、と静かな室内にウタハがボタンを外す音だけが響く。

隣の部屋からは微かに歌と思しき音とも呼べない振動が伝わり、回到りに人が居る事が嫌でも意識させられる。

ウタハの手はいつも精密作業をしているとは思えないほどに震え、何度もボタンを掴みそこねた。

「早くしないと誰か来ちゃうよ、ウタハ」

耳元でそう囁くと、マンコが強く締まる。

「そ、そういう事を言わないでくれ……♥ 先生だって、困るだろう……!?!」

はあ、はあ、と息を荒くして、ウタハが私に胸を愛撫させるために服を脱いでくれる。

出てきたスポーツブラの胸にいち早く取り付き、下から手を潜り込ませてウタハの控えめな胸の頂点に指をかけた。

「んっ、ふっ♥」

コリコリに勃起しているそこを指で転がすと、膣も連動して締まる。

指先でカリカリとひっかくように弾き、ウタハの乳首を更に勃起させる。

「あ、あっ♥ それだめっ♥ 刺激、つよくてっ♥」

言われても、指を止めない。

かりかり、かりかり、下を向いたウタハの乳首をおもちやのように弄り回し、膣がわななくのに合わせて腰も動かす。

「あーっ♥ んーっ♥」

たまらず、ウタハが大声で喘いだ。

しかし隣の部屋の歌声が途切れることはなく、ウタハが人生で始めて上げるセックスの甘い声と放課後に気楽にカラオケを楽しむ歌声が同じ時に同じ場所で響き合う。

「ぶぐっ♥ う、うううーっ♥」

耐えかねたように、ウタハの声がすすり泣くようなものに変わる。

ぐじゅ、にちゅ、と粘質な音がウタハの股間から奏でられ、ダラダラと愛液がウタハの股間を濡らし、垂れる。

穿いたままのショーツとズボンに淫らなシミが付くのも認識できないまま、ウタハは人生初の膣イキを経験しようとしていた。

「いいよ。そのまま気持ちよくなって」

「ううーっ♥♥」

幼い子供が泣いているかのように、ウタハが震えた声を出して全身を痙攣させる。

そんなウタハの初めての絶頂の締りに合わせて、バックから一番奥に精液を流し込んだ。

17歳の孕み頃の膣が美味しそうに精液を飲み干し、後背位なのも相まって子宮にドロドロと流れ落ちていく。

「はあ……♥ はあ……♥ はあ……♥」

ウタハは口をきく気力もなく、背もたれに腹を乗せてぐったりと膣イキの余韻に浸っていた。

「ん……♥」

のっそりと身体を起こし、身を捻って髪をかきあげながら振り返るウタハは、大人の女の魅力を纏っているように思えた。

「あ、ああっ！ せ、先生！ 膣内に出してしまったのかい!？」

股間からこぼれ落ち、ショーツにじくじくと染みていく精液を見てウタハが目を見開く。

「う……さ、流石に、すぐ妊娠と言うのは、ちよつと……2人の将来を考えるなら、」

「はいウタハ、避妊薬あるから飲んでね」

私達の情事を物言わず見守っていた、汗をかいたグラスと共にクスリを渡す。

「む……最初からそのつもりだったというわけかい。もう、先生と来たら……」

じろ、と私の股間を見るウタハ。

「どうやら、まだ応援が足りないみたいだね?」

「うん、もつとしたいな」

呆れたような視線をこちらに送りつつ、ウタハは室内機を手に取り通話ボタンを押した。

「あ、もしもし? 延長、2時間お願いするよ。……ああ、わかった」  
ぴっ、と音をさせ、通話を切る。

「ほら、どうしたんだい、先生。……マイスターたるもの、仕事は完璧にこなしてみせなければね。先生が満足するまで応援するよ♥」

そう言つて、椅子に膝立ちのまま尻をこちらに向けて片手でくいと尻たぶを開いて見せる。

片側だけ陰唇が広げられ、淫らに歪んだ。

「やった！ さすがウタハ、最高のマイスターだね」

素早く覆いかぶさり、精液と愛液でぐちよぐちよになったウタハのマンコに挿入する。

「もう、調子が良いんだから……♥ んっ……♥」

熱々のウタハの中に帰ってきた私は、一番奥の付近をゆったり前後する。

「あ、そこ、びりびりするっ♥」

裏筋にコリコリとした異質な肉の存在を感じる。ウタハの子宮口だ。

「ここが好き？」

「うんっ♥　そこ、ゆつくりと、さすってみてくれないかな……♥」

後ろからウタハを強く抱きしめて密着しながら、腰を微かにうごめかす。

「あー……♥　すごい……♥　そこ、こすられると……幸せな気持ち  
が、溢れてくるみたいで……♥」

囁くような、震える小声でウタハが子宮口アクメに向かって階段を登っていく。

「ウタハは子宮口が好きなんだね。身体が赤ちゃんを欲しがってるんだ」

「そう、なのかも……♥　先生との子供が出来ちゃうと思うと……♥  
もっとして欲しくなってしまう……♥」

熱に浮かされたように、子宮でものを考えているとしか思えない事を口走るウタハ。

可愛いのでずっと子宮口をネチネチと刺激し、ウタハを追い詰めていく。

「ふうーっ♥　ふうーっ♥」

にち、にち、と微かな腰の動きさえも音が立ってしまう程にウタハの股間から愛液が止まらない。

臭いも濃く、首筋に顔を埋める私からは見えないが本気汗を滴らせているのだろう。

「ウタハ……出すよ。ウタハの子宮の中、私の精液でいっぱいにするから」

「だしてっ♥　子供出来ちゃう精液♥　だしてえっ♥」

ぎち、と一際強い締りが催促になり、2度目の膣内射精をキメる。

「んんうーっ♥　あううーっ♥♥」

発情した動物の鳴き声のように、言葉を必要せず興奮が伝わる声がかかる。



「あそこまでして、気持ちよくないなんて言われてたらさすがの私も怒るよ」

「また今度、いや定期的に応援して欲しいな」

ウタハの手を取りそう言うと、困り顔で苦笑される。

「本当に、こういう時ばかり情熱になるね、先生は。……先生の反応は貴重なデータでもあるし、私も『応援』を上達して先生をやり込めてみたいし。……たまにだよ、先生？」

こうしてウタハも、快くセフレになってくれたのだった。

## うさぎメイドのご奉仕（アカネ）

窓ガラスの手前に、橋脚のように三角に鉄骨が張り巡らされている。廊下も広々として清潔。

そんな結構良い住まいであることを感じさせる高層マンションの一室が、アカネの住居だ。

間違っではないかとドアをノックする手も慎重になってしまう。

「あ、ご主人様ですネ！」

ドアを開けて姿を見せたのは、バニーガール姿のアカネだ。

「ぴよんぴよん！」

さらに、かかとを上げ下げして身体を縦に揺らす。

純白のバニースーツはアカネの乳輪をかるうじて隠す程度に下から支えており、目の前で豊かな白い乳が波打ち、震える。

チンポのイライラが瞬時に最高潮に達してしまった。

「じゃあセックスしようか」

アカネを抱きしめつつドアの中に押し入る。

「あつ、ご主人様ったら♥ そんなにお気に召してくれたのですか？」  
私に体重がかからないように身体をさばきながら、アカネからも抱きしめてくれる。

後ろで誰からも見られないうちにドアが閉まった。

もどかしげに靴を脱ぎ、抱きしめあったまま部屋に入っていく。

初めて入るアカネの部屋は、そこはかとなく紅茶の少しスパイシーな香りがしていた。

「おかえりなさいませ、ご主人様。ずっとお待ちしておりました」

アカネが背中に回してきた手に力がこもり、豊かな胸を私に押し付けてくる。

「この服装をとつてもお気に召してくださいさつたようですし……本日は私がより一層ご奉仕いたします♥」

私の股間の勃起をそつと撫でて身体を話したアカネが私の手を取り、部屋全体から見れば比較的質素なベッドへと導いていく。

「さあ、どんなご奉仕をお望みですか？ 掃除？ 洗濯？ 料理？」

護衛？ ……ふふつ、冗談です♥」

ベッドに私を座らせたアカネは、脚の間に跪いてジツパーを下ろした。

「もちろん、お望みなのは……性奉仕、ですよね♥」

目を弓のように細めて、下から見上げてくるアカネ。

「とつても出来の良いメイドで嬉しいよ」

その頭を撫でるとアカネは笑みを深め、私の腰に抱きつくようにしてベルトを緩めてズボンを脱がせてくる。

腰を浮かせて脱がしてもらうと、アカネは反動でぺちんと顔にあたったチンポに頬ずりした。

「ああ……♥ 主人様のオチンポ、今日もとても素敵です♥」

メガネのフレームが龟头にこつ、こつ、と当たり、我慢汗が付くのも構わずに愛おしげに頬ずりしながら、ぺろりとバニースーツの胸をめぐった。

何度もセックスして見慣れたアカネの乳は、私に吸われて乳首が肥大化してきている。

「では、本日もパイズリから初めさせて頂きます♥」

アカネとのセックスも回数を重ね、2人で相談してお作法を決めてきた。

普段とは違い服を脱がなくてもパイズリができるこの衣装は、たしかに奉仕には向いているかもしれない。

「では、失礼しますね」

たぶん、と私の太ももにアカネの両乳が載る。

最初はゆつたりと撫でるようにたぶたと挟み、アカネのすべすべした乳の触感を楽しむ。

アカネの胸骨にチンポを突きつけるような格好で縦に挟み込まれたチンポが最奥に触れた。

チンポの先から、アカネの期待と興奮を示すようにトクトクと心臓の高鳴りを感じる。

「ああ……こんなに胸を高鳴らせているのを知られてしまうなんて、お恥ずかしいです……」



アカネはねじるように乳を扱い、私のチンポから我慢汁を絞り出し  
ては潤滑油として谷間に塗り伸ばすようにたぶたぶ上下動させなが  
ら恥じらってみせた。

「こんなに興奮してくれてるんだね。嬉しいよ、アカネ」

膣では出来ないチンポしごきのための器官として胸を使うのも  
すつかり上達したものだど、サラサラしたアカネの髪を梳き、頭を撫  
でる。

「ふう……ふう……♡」

縦パイズリをするアカネの乳首が私の身体に擦れ、乳首が勃起して  
いく。

その感触に笑みを深めると、恥じらうように頬を赤くしつつ目を閉  
じてパイズリに没頭した。

しばらく、静かにパイズリをされる時間を過ごした。

私はゆっくりとアカネの頭を撫で続ける。

それはペットにするように気安く、主人と下僕、雄と雌の上下関係  
を植え付けるためのものだ。

アカネも性奉仕メイドとしての自分を身も心も受け入れるため、こ  
のようなスキンシップを喜んでくれる。

既に大きな胸の谷間はニチャニチャと音が響くほどに我慢汁で塗  
れ、幾度かアカネのツバも垂らして貰って十分すぎるほどに潤ってい  
る。

アカネの手の動きも激しく、興奮か運動の結果か、しっとり汗を  
かき肌を紅潮させ始めていた。

「そろそろ、お射精いたしますか？」

私のチンポの勃起ぶりから射精の兆候を感じ取ったアカネが、乳房  
を左右から押しつぶし、上下に捻りながら問うてくる。

「ああ、お願いしますよ」

「かしこまりました、ご主人様♡」

アカネの瞳がギラリと肉欲の強い光を帯び、前のめりになって上半  
身全部でチンポを押しつぶすように覆いかぶさってくる。

ビンビンに固く勃起した乳首が私の太ももをくすぐるのにも構わ

ず、ねじるような動きと上半身の前後動で膺よりも高性能かも知れないオナホメイドとなり、射精を促す。

「はあ……はあ……♡」

アカネの胸の奥から伝わる鼓動も激しさを増し、胸からの刺激でいきそうになっているのが伝わってきた。

「出すよ、アカネ」

「はい、ご主人様……♡ アカネの胸に、お情けをください♡」

射精の直前に、アカネの両の乳首をギュツとつねる。

「んっ♡ いっぐ♡」

アカネが絶頂して痙攣したのが腕の動きを不規則にし、私も胸の中に射精する。

「あっ♡ うう♡ はあーっ、はあーっ♡」

不意打ちで絶頂させられたアカネが、身体を震わせながらも私のチンポを丁寧にしごき尿道に残っている精液を絞り出していく。

「亀頭、失礼いたしますね♡」

絶頂の余韻でうっとりとした笑顔を浮かべながら、胸の谷間からぬるりと亀頭をはみ出させ、薄桃色のリップを塗った唇で私のチンポをぱっくりと啜え込んだ。

「ぢゅうううーっ♡」

頬を凹ませて、強く吸い上げる。同時に乳房の下ではアカネの革手袋に包まれた手で金玉をもみほぐし、体内にあるチンポの根本を圧迫して精液を一滴のこらず押し出していた。

「くちゅ……ぐちゅ……♡」

精液を吸い出し終わったアカネが、私と面と向かうように顔を上げて精液を咀嚼する。

「あ……♡」

アカネの唾液と混じり合い、薄まった私の精液を見せてから、

「ごっ……く、ん♡ ……あー♡」

飲み干した口内をもう一度見せてくれる。

「よく出来ました、アカネ。精液もちゃんと飲めるようになったね」

ペットにするように少し乱暴に頭を撫でてやると、アカネは満足気

に微笑み、唇の端に付着した精液を指で拭ってぺろりと紅い舌で舐め取った。

「はい、ご主人様♥ ご主人様のお情けを頂いたら、全て頂くのがメイドの務めですので♥」

そう言つて乳房を左右に開くと、精液が粘ついて乳房の間に橋をかけていた。

「ぴちゃ……ぴちゃ……♥」

革手袋が精液に塗れるのも構わずごっそりと拭い、見る間にアカネに舐め取られていく。

私の射精がすべてアカネの血肉となる事が決定した後、ぱちんと留め金を外して手袋を外すと床に落とした。

「うふふ……♥ 今日の私はうさぎさんなので、こんなのはいかがでしょう？」

ベッドに乗って、こちらにお尻を向けて四つん這いになるアカネ。

むっちりとした尻が目の前に迫り、角度のきついバニースーツの間が辛うじてアカネの秘密の花びらを覆っているのがクツキリと見て取れる。

思わず顔を近づけ、鼻面をアカネの尻たぶに埋めた。

「あつ♥ お気に召してくださったのですね♥ どうぞ、アカネの身体を存分にご堪能下さい、ご主人様♥」

舌でバニースーツの股間を押し込むと、にちゃりと粘ついた感触がある。

硬めの布地を爪先で強めにひっかき、アカネのクリトリスを刺激しながら尻を開いたり閉じたりしてもちもちの柔らかさを堪能した。

私の愛撫により愛液が滲み、アカネの匂いが濃くなっていくのをダイレクトに嗅ぎ取りながら、安産型の尻を思う様揉みしだく。

「ふう、服を着てるアカネのお尻を楽しめるのは、この服のいいところだね」

「はあ……はあ……♥ ご好評頂けて嬉しいです♥」

いく寸前まで追い込んだため身体を支える腕をプルプルと震わせながら、アカネが嬉しげな声で答える。

「じゃあ、このまましようか」

「はい♥ タイツは替えがありますので、破って頂いて問題ありません。ハサミもご用意しておりますので……」

視線でローテーブルを示され、なるほどとテーブルの上に置いてあるゴムを装着してからハサミを手に取った。

バニースーツの股間をぐいつと横にずらし、タイツの下に何も着ていないため染みがじつとりと広がっている部分を引っ張ってチョキンと切る。

私に犯されるための発情バニーと化したアカネのお尻にぺちぺちと手を置いてゴムチンポをあてがった。

「では、オチンポ失礼いたします♥」

しっかりと穴に先端がハマっているのを感じ取り、アカネの方から四つん這いのお尻を突き出してチンポを迎えてくれる。

ゴム越しにも感じられる熱々のマンコに包まれ、バニースーツを着たままのアカネに突き刺さっていく。

バニースーツの尻の下に指を潜らせて生尻を鷲掴みにしながら腰を振り始める。

「はんっ♥ あんっ♥」

ぱん、ぱんと拍手のように遠慮なく音を鳴らしながら、後ろからアカネを犯す。

ふと見渡すと、アカネの部屋は少々質素ながらもところどころ上品な調度品が置かれ、品よくまとまっている。

可愛らしいカーテンの向こうからは明るい日差しが漏れ、ここでアカネが生活しているのだと実感する。

「はあっ♥ んっ♥ あうっ♥」

私に尻を揉みしだかれ、自分のベッドの上でガニ股の四つん這いになってバニースーツ姿でセックスに耽る姿がより淫靡に胸に迫ってきた。

チンポのイライラが更に強くなり、腰の動きが速くなるのを止められない。

「あ、あ、あ♥ イク♥ イク♥」

アカネの喘ぎ声すら途切れ途切れになるくらいのピストンを受けて、トロトロに出来上がった膣がお漏らしのように軽い絶頂を繰り返して、ますます射精を促してくる。

仕込んだ通りに、イクたびにアカネは喉が詰まったような声で絶頂報告をしてくれた。

「出すよ」

「あ、ああっ♥　だ、してっ♥　ご主、人、様のっ♥　お情け、アカネのなかっ♥　だしてえっ♥」

チンポで身体を前後に揺さぶられながら、アカネが切れ切れに射精をねだる口上を叫ぶ。

パン！　と一際強く尻肉を打ち鳴らし、最後の一突きと共に射精した。

「いつく♥　イツキますっ♥　ふうっ♥　ふうっ♥」

一際強い絶頂に、アカネの全身が痙攣する。

握りしめるような強い締付けと共に、ゴム越しにアカネの膣で射精しきる。

にゅぽんと引き抜くと、アカネはフラフラになりながらも振り向いてゴムを外し、またもぱっくりとチンポを啜えて残りの精液を吸い出してくれた。

「ぢゅぞっ♥　んぢゆるるるうーっ♥」

微かに眉を寄せて、頬をへこませながら賢明にチンポを掃除してくれるアカネの頭を撫でる。

「んぐっ♥　ごっくん♥　沢山お射精して下さいましたね……ありがとうございます♥」

何度も絶頂を繰り返して、女の艶が出てきた恍惚の笑みでアカネが私にお礼を言った。

ポロンとこぼれた胸、乳首の勃起を隠すこともなく、使用済みのゴムを縛り恭しくベッドのサイドボードに置くと、肩越しに振り向く。

「ご主人様、もう一回……されますか？」

「うーん、今日はここまでにしておこうか。仕事もあるし」

「左様ですか。ではシャワーを浴びましょう」

にこやかに立ち上がると、アカネと連れ立ってシャワーを浴びる。もちろん、射精後の賢者タイムのうちにアカネの乳を揉みしだき、戯れにキスをしてボディソープを付けたアカネの身体で洗ってもらった。

シャワーに帰ると、山のように積み上がった書類の前でため息をついてから仕事を始める。

そのまま夜が更けるまで仕事を続け、疲労が限界に達した私は真っ暗な休憩室に向かった。

「おかえりなさいませ、ご主人様！　ぴよんぴよん！」

バニーガールのアカネがにこやかに迎えてくれた。

「鍵は閉まつてるはずだけど？」

「ロックを解除させてもらいました」

C & Cの仕事で手慣れているアカネには造作もない事なのだろう。質問は無意味と思いつつこむのは止めておいた。

「ああ、ご主人様……こんなにもお疲れのご様子で……私、胸が痛くてたまりません。本当に心苦しいです……」

アカネは立ち尽くす私に近寄り、手を取って休憩室のマッサージチェアに連れて行った。

「こんなにも疲れた目をなさって……まずは目薬ですね。さあ、上を向いて下さい」

「えっ？　いや、目薬は自分でさしたいかな……」

「ご遠慮なさらず、私がすべてお世話いたしますので！」

むんつとアカネが気合を入れるとバニースーツのおっぱいがふると波打つので、まあ良いかと思ってマッサージチェアに身体を預けた。

「ではお目々失礼しますね……」

ぽと、ぽと、と両目に点眼される。疲れ目に目薬がジンジンと染み、疲労が溶け出していく。

「毎日お疲れ様です、ご主人様。今日はこのアカネが、ご主人様のアイマスクになります」

目を閉じているので分からないが、アカネがマッサージチェアに乗って来た気がする。

「お顔失礼します♥」

たぶん、と私の顔にひんやりした物が乗ってきた。何度も顔を埋めた事があるのでアカネのおっぱいだとすぐにわかる。

「あー……これは気持ちいいな」

すぐ前にあるアカネの身体を抱き寄せつつ、アカネの乳房のひんやりもっちりした感触に浸る。

後頭部を抱え込まれて優しく撫でられながらもズブズブと谷間に埋没していく。

「このまま眠って頂いて構いませんよ?」

「んー……」

アカネの胸の谷間はジワジワと温まりつつあり、瞳が温められて眠気が意識を侵していく。

しかし、抱いているアカネの腰から少し下に手を滑らせて、ムチムチのお尻を撫で回すと無性にチンポがイライラする。

疲れマラという奴だろう。

「あら……? ご主人様、勃起してしまわれましたか? では性処理させて頂きますね……♥」

私のチンポのイライラを敏感に察知したアカネが、身体を下ろしてズボンを脱がせてゴムを装着してくれる。

「目の方は、蒸らしタオルを用意していますので。さ、上を向いて下さい、ご主人様」

言われるがままに上を向くと、ホカホカのタオルを載せられる。当たり前だがアカネの胸より熱いので癒やし効果も高い気がする。

「ご主人様は動く必要ありませんから……私の奉仕に身を委ねて下さい……♥」

耳元でゆったりと囁かれ、アカネの暖かな身体がのしかかる。

胸をむっちり押し付けて腰の位置を調節し、私のチンポを手で支えてマンコに導いていくのが視界を塞がれていてもわかる。

「んっ♥ もうカチカチになっぺいらっしやいますね……♥ アカネ

がたつぷり、リラックスさせて差し上げます……♡」

耳元にかかる吐息と、込められた感情の熱感に心までもほぐされつつ、チンポが暖かなマンコに包まれて性的な意味でも心地いい。

「はっ……♡ はっ……♡」

深夜の休憩室は静寂に包まれていて、アカネの吐息も股間が擦れてニチャニチャと立てる音もよく聞こえる。

生徒たちもよく使うマッサージチェアを使って性処理をしている緊張も、アカネの体温に全身を浸す安心感に蕩けて消えてしまう。

戯れにアカネを抱きしめ、背中を撫でてふわふわとした髪の毛の感触を確かめてみる。

疲れマラだからなのかリラックスしているからなのか、チンポも普段より硬い。

さらにアカネが私を射精させようと頑張ってマンコでしごいてくれているおかげで、私が開発してきたアカネの弱点……ポルチオとGスポを強く刺激し、締りがキツくなっていた。

「ご主人様、ご自由に、アカネの♡ マンコで……お射精下さいね……♡」

私のカリが広がって来て射精が近いことを察したアカネが、イクのを堪えて高速ピストンをしながら熱っぽく囁く。

抱きまくらのように無遠慮にアカネ身体を抱き寄せ、好き勝手なタイミングで射精した。

「あっ♡ イク……♡ ご主人様の精液、アカネの気持ちいい所を叩いてます……♡」

アカネの身体が絶頂の熱を帯び、抱きしめあつて体温を伝え合う。

快樂にもがくようにアカネの手が艶めかしく私の首の後ろや肩を這い回り、荒い息遣いを続けながらも丁寧に腰を上下させてマンコを締め、精液を絞り出す動きに移っていく。

最後の一滴まで出し終わると、急速に眠気が増していくのを感じる。

「おやすみなさいませ、ご主人様……」

下半身裸でアカネと抱き合いながら、私の意識は闇へと落ちていく。



た。

「ん……」

目を覚ますと、休憩室にある仮眠ベッドで横になっている。

もちろん股間に違和感などなく、立ち上がってマッサージチェアを  
検めてもセックスの名残は残っていない。

冷蔵庫に張り紙があったので近づいて読むと、

——朝帰りをすると近隣住民に怪しまれるかもしれませんので、今  
夜はこれでお暇致します。紅茶を冷やしてありますので、よろしけれ  
ばどうぞ

性処理も掃除もきっちりところなす優秀なメイドに微笑みを浮かべ  
つつ、朝の紅茶を楽しむのだった。

## 姦淫用の装い（マリー）

マリーの呼び出しにより、早朝の大聖堂準備室前にやってきた。

「せ、先生、ですか……？」

部屋の中からか細い声が聞こえ、マリーのものだと気づく。

「マリー？」

聞こえてきたであろう部屋に向かって声をかけた。

「その声……良かった、先生ですネ」

ふわりと、花咲くような暖かな声音が返ってくる。

そっと戸が開き、最初に見えてきたのは頭の上のツンと尖った耳だ。

マリーの髪の色と同じ、陽光のような優しい色をした耳は、普段ベールで見えないマリーのケモミミだった。

早朝とあって朝勃ちが収まらない所にチンポのイライラが加算される。

「こ、こちらです……！ おはようございます、先生」

出てきたマリーを見て息を呑んだ。

準備室前の廊下には、朝日が差し込み、マリーの姿をハッキリと照らし出している。

紺と白のジャージとショートパンツ、生足がむき出しの服装。

マリーが体操服を着ていた。

「急なお願いでしたのに、こんな朝早くからありがとうございます」

チンポのイライラを押し殺して笑顔を作る。

「今日はシスター服じゃないんだね」

そう訊くと、マリーは可愛らしく表情を曇らせた。

「は、はい、そのことでご相談がありました……」

話を聴いてみると、運動もできないし体操服になるのも恥ずかしいし、辞退しようか迷っているということだった。

とりあえず、とても似合っている事を伝えて辞退は踏みとどまらせる方向で説得する。

話をしていくと、マリーは普段シスター服で卓球をしている事が分

かった。

「実は……体操着に袖を通したのは今日が初めてなんです。この姿をお見せしたのも……先生だけです」

頬を赤くして恥ずかしがる姿が朝日に照らし出され、光り輝いているようにさえ見える。

絶対にこの場でマリーとセックスすると決めた。

「今のマリーの姿はずっと見ていたい位魅力的だよ」

「ど、どうされたのですか、先生？ そのようなこと……言われたら……い、意識してしまいます……」

もじもじと太ももを隠そうとするマリー。

私はマリーに近づき、手を取った。

「現に私はマリーとセックスしたいと思ってるし」

「え……えっ!？」

目を見開いて、しっかと握られた自分の手と私の顔の間でキョロキョロ視線を彷徨わせるマリー。

「あっあっ、あの、き、聞き間違い、をしてしまったようで……えっと……」

なにかの間違いだと思おうとするマリーだが、私はさらにマリーの腰に手を回し抱き寄せた。

「マリーとセックスしたい」

私と無言で見つめ合うマリーの顔が、見る間に真っ赤に染まっっていく。

「(っ……っ……っ……困り、ます……)」

「マリーの体操服姿を見てもうこんなになってしまったんだ」

そう言つて、マリーの小さな手を私のチンポに押し付ける。

「きやあっ!？ あ、熱い……です……」

叫びつつも、優しいマリーは振りほどくことなくチンポの硬さを確かめるように指を這わせてくれた。

「こんなに、張り詰めて……先生、これ、痛くは無いのですか?」

真っ赤な顔で、ギョツと目を瞑りながらも、優しくチンポをさすつて私を気遣つてくれる。

「マリーに鎮めてもらうまでは痛いよ」

卑怯な物言いだマリーを追い詰め、ジャージの上から細い腰を抱いて撫でさせる。

「うう……でも……姦淫は、禁止されておりまして……」

「でもお願い。今私を救えるのはマリーだけなんだ」

とにかく押ししていくと、マリーが濡れた瞳を開いてくれた。

「そ、そのようなこと……ずるいです、先生……」

「ごめんね、ズルくて。マリーが魅力的過ぎて我慢できなくなってしまった」

さす、さす、とチンポを撫でる手が滑らかに動き、チンポのイライラを最高潮に持っていく。

「いいえ、先生。先生が全部の責任を負おうとするのについて、ずるいと言ったんです」

マリーは自分から身を寄せ、体操服の体を密着させてきた。

「だって、私も……先生と姦淫してみたいと、思ってしまったのですから……♡」

困ったように眉を寄せて、普段よりぎこちない笑みを浮かべるマリーを、正面から抱きしめる。

「あっ……♡」

小柄なマリーの腹部にチンポを押し付け、マリーの頭……2つのケモミミの間の匂いを胸いっぱい吸い込む。

ちらり、とマリーが準備室に視線を向けたのを合図に、私達はセックス目的で部屋の中へ入っていった。

がちや、と早朝の廊下にセックスの開始合図が響くのを、誰も聞いてはいなかった。

「脱がすよ、マリー」

マリーの首元のジッパーをゆっくりと下ろしていく。

下にあるのは当然ただの体操服のだが、マリーが裸を見られるように恥じらって目を逸らすのでチンポがイライラしてしょうがない。

ジャージを脱がして、普通の体操服姿にするだけでマリーは顔を手で覆ってしまった。

「ああっ……先生に、このような姿をお見せしてしまうなんて……」  
「やつぱり、よく似合っているよ、マリー」

もちろんなんてことのない体操服姿なのだが、白く美しい素肌の手  
脚を窓から満ちる朝日に照らされたマリーは、それだけで魅力的だっ  
た。

木と鉄パイプの椅子にジャージを引っ掛け、跪いてマリーを正面か  
ら抱きしめる。

「ひゃんっ♥」

少し汗をかいていたのか、マリーの甘酸っぱい匂いがする。

「先生……ふふ、まるで幼い子供のように……♥」

さらさらと私の頭を撫で、胸に押し付けるようにマリーからも抱き  
しめてくれた。

マリーの心臓がどく、どく、どく、と早鐘を打っているのが分かる。  
そして、微かに勃起した乳首が主張していることも。

マリーの左乳首に、服の上から指をかける。

「っ……っ……」

すり、すり、とゆっくり円を描くように撫でてやると、ぷっくりと  
服の奥で膨らみが硬くなっていく。

「はっ……♥ つく……♥」

やがてはハッキリと乳首が浮くようになり、爪を立ててカリカリと  
刺激を強めてやる。

「んんっ……♥ つふう、ふう……♥」

マリーは口に手を添えて、早朝の大聖堂に姦淫の音が響かないよう  
我慢していた。

右乳首を左右にピンピンと弾きながら、左乳首を体操服の上から口  
で吸う。

「ふああっ♥」

突然の同時攻めに、たまらずマリーから艶めかしい声が漏れる。

「せ、先生っ♥ い、一旦止まって頂けませんかっ♥ こ、このままで  
はっ♥」

ちゆう、とマリーの体操服から口を離して、左乳首を緩やかに指で

愛撫したまま顔を上げた。

「どうしたの、マリー？」

マリーは顔どころか首元まで真っ赤で、目も虚ろなくらいに興奮していた。

「し、刺激が……強すぎます……♡ もう、立っているのもやつとで……♡」

そういう事ならと、マリーを寝そべらせる。

準備室にベッド的なものはないので、床に私の背広とシャツを敷いてマリーに寝てもらった。

「あ……なんだか、先生の匂いに包まれてるみたいで、落ち着きます……」

ぷつくりと両の乳首を勃起させ、顔を赤らめたマリーが寛いだ笑みを見せるので、チンポのイライラが限界に達する。

ズボンを脱いで、マリーの眼の前にチンポを突き出した。

「こ、これが……先生の、男性器なのですね……♡ こんなに張り詰めて……苦しそうにしています……♡」

ぼうつとチンポを見つめ、フラフラと手が伸びてくる。

溢れる慈愛の精神で、マリーが自然とチンポを握り手コキを初めてくれた。

「あ……なにか、先端から溢れて来ました」

「マリーが手でしてくるのが気持ちいいから出てきたんだよ」

私がそう教えると、ホツとした笑みを浮かべ、手が我慢汁に塗れるのも気にせずニチャニチャと潤滑油にしながら手コキを続ける。

「私……今、先生のお役に立っていますか？」

卑猥な水音をさせる手元から、マリーの胸元に我慢汁が垂れかけていく。

「ああ、とっても役に立ってる。上手だよ、マリー」

私の我慢汁が、初めて袖を通したマリーの体操服に染み、臭いが付いていく。

「良かった……なんだか、先生のものだと思うと、とても愛おしいです……♡ チュツ……♡」

慈愛の微笑みで我慢汁を垂れ流すチンポを見つめ軽く亀頭にキスマでしゅつ、おずおずと両手を使って手コキをしてくれるマリィ。とはいえ流石にそれだけで射精できるほど熟練してはおらず、マリィ頭を優しく撫でて中断させる。

「さあ、次は私がマリィを気持ちよくするからね」

恥ずかしさで目をギュツと閉じたマリィにバンザイをさせて、我慢汁で染みができた上を脱がせる。

そっけないスポーツブラに包まれたマリィの細い体はため息が出るほど美しかった。

「ああ……恥ずかしいです……このような姿を……」

顔を完全に手で多い、羞恥に固まってしまっているマリィ。

さらにショートパンツにも手をかけて、マリィに腰を浮かせて貰って一気にショーツごと脱がせた。

「あうう……♡ 恥ずかしすぎて、し、死んでしまいそう……♡」

顔を覆うのに両手を使っているの、マリィの大陰唇が朝日に照らされて神秘的に照り輝くのがバツチリと見えている。

脱がせたショートパンツの中には綿の白いショーツがあり、股間がシミになっている。

「マリィ、とても綺麗だよ」

「感想を、お、おっしやっていたただかなくても、け、結構ですので……！」

私がマリィの体を褒めると、もじもじと太ももをよじってマンコを隠そうとするが膝をつかんで押し留めた。

「さ、マリィの大事な所、私に見せてくれるかな」

「う、ううう……♡」

マリィの膝に手を置いたままじっと待っていると、不意に力が抜けてお許しが出る。

そのまま、ぱつかりとM字に開脚させ……愛液でテカテカと照り輝くマリィの股間がすべて白日の元に曝された。

ほんの少しの膨らみしか無い、シユツとした恥丘に一本のスジが走り、そこから岩清水のように愛液が漏れて周囲を濡らしている。

私は思わずマリーのマンコに口づけ、舌を陰唇の内部に潜り込ませていた。

「あああああっ♥」

マリーが、顔を覆っていても抑え切れないほど大きな震え声で快楽を叫ぶ。

「せ、せ、先生?! い、いま、私に何をしているんですかっ?!」

本当に見えていないマリーは股間を舐められた事を認識出来ておらず、声を裏返らせながら聞いてくる。

「隠していないから見てみればいいよ」

そう言つて、マリーのスジを外からベロンと舐めあげた。

「あっ♥ ああああっ♥ こ、この、温かくて濡れた感触は、ま、まさか

……先生が、そのような、事を……♥」

恥じらいから、囁くように小さな声で呟くマリー。

ぱく、と指でマリーの陰唇を払げ、サーモンピンクの綺麗な性器を

朝日に輝かせる。

ぷつくりと甘勃起したクリトリスに口づけ、軽く吸い立てた。

「ふいふいっ♥ ま、まって、くだ、さいふいふいっ♥」

マリーの声が裏返り、高く掠れていく。

「この動き、気持ちいい?」

「わ、わかりませんっ♥ あ、頭が、まっしろで、くらくらしてっ♥」

とても気に入ってくれているようなので、もうちよつと強く吸い、同時に舌先でクリを転がす。

「ふきゅううううっ♥ お、お願いします、先生♥ も、頭が、おかし

くううううんっ♥」

マリーのM字開脚が突然ビクンツ! と180度の開かれ、腰が突き出される。

華奢な背中が弓のように反り、全身を力ませて痙攣させていた。

朝日の中、部屋のホコリにより光が天使の梯子のようにマリーの裸体に降り注ぎ、その胸に影の十字架を抱かせている。

十字架を抱いたマリーの勃起乳首、蕾が綻び始めたマンコが宗教画のように美しく、チンポに訴えかける芸術性を発揮している。



マリーが、おそらく人生で始めて性的絶頂をした光景を目に焼き付けた。

「はあ、はあ……はあ……はあ……はあ……♡」

脱力して私の背広にペタリと背中をつけながら絶頂の余韻に浸り、顔を覆っていた手は名残のように片手が額に残るばかりだ。

ただただボーっと天井に視線を向けるマリーが、ひどく艶めかしい。

太ももを180度を開いたままのはしたない格好のマリーに覆いかぶさり、膣穴にチンポを押し当てて。

「マリー、入れるよ」

「はい……♡ いつでも、お越しく下さい、先生……♡」

意識が朦朧としたまま、いつものようにふわりと微笑んで私を受け入れるマリーのマンコを、両の親指で開く。

作り物のように整って小さなマリーの膣穴に私のチンポが押し付けられ、汚れなきマリーの膣が愛液と我慢汁のヌメリで性交を許容する。

つぶ、と静かにマリーに埋没していく。

「あ、あ、あ……♡」

眉を寄せ、チンポが胎内に侵入する感覚に耐えるマリー。

ホカホカに温まった膣内と、秋の早朝の冷えた空気が強いコントラストを生む。

あつという間にマリーのぷりぷりの処女膜に先端が到達した。

「わかる、マリー？ 処女膜に当たってるよ」

「はい……♡ 先生の熱さが、私の体の中から感じられて……不思議な気分です」

靴とソックス、そして勃起乳首の浮いた白のスポブラしか着衣のないマリーが、胸元で手を組んで祈る。

「ああ……お許しく下さい、私は今、姦淫の罪を犯します……♡」

そう語るマリーの瞳は熱っぽく結合部を見つめ、期待するように甘やかな声色だ。

「マリーの処女、もらうよ」

「はいっ……！ 私に、一生の思い出を、ください♥」  
キラキラと輝くような乙女の笑顔を浮かべたマリーの膣にチンポを突き刺し、プツンと処女膜を破る。

大聖堂の一室で、皆から慕われるシスターが望んで姦淫の罪を犯し、シスターたちがこれからも使つていく木床に清らかで淫らな破瓜の血を染み込ませた。

「あつ、つつ、う……！」

貞潔なマリーに相応しい厚い処女膜を一気に破つたため、破瓜の血も少し多めに出ている。

奥の奥まで突き刺した後、ギツチリと握るような硬い締め付けの膣を刺激しないよう動きを止めてマリーを抱きしめた。

腕の中でおずおずと私の胸に手を当てようか迷うマリーに声をかける。

「マリーも、私に抱きついてみて」

「そ、それでは、失礼いたします……」

処女をチンポで貫いて子宮口と龟头を密着させているのに、私を抱きしめることに恥じらうマリーの態度にチンポのイライラが高まってしまう。

「あいっ……！」

勃起で子宮を持ち上げられ、傷口に障られたマリーが眉をしかめた。

「おっと、ごめんね。マリーが可愛すぎて興奮が抑えきれないや」

「か、可愛いだなんて、そのような事は……♥ ふふっ」

マリーは私の背中に控えめに手を添え、申し訳程度に抱きついてくる。

しばらく、そのまま鼻が触れ合うほどの距離から見つめ合った。

「ああ……こんな事、罰が当たってしまいます……♥」  
うっとりとして、マリーの声が甘やかに紡がれる。

「姦淫の罪を犯して、先生を独り占めにして……それなのに、私……」  
目が弓のように細められ感極まった、乙女として流す最後の涙がマリーの頬を伝う。

「先生……私、この時間が、とても幸せ……なんです……♡」

朝日に輝くマリーの瞳は、窓の外に広がっているであろう青空のように清らかで美しい。

涙に濡れた頬を指先で拭い、微かに震える顎に手を添えると、どちらともなく顔が近づいていく。

「んっ……♡」

我慢汁に濡れたマリーの唇と愛液に濡れた私の唇が、お互いを求めあいニユルニユルと粘膜を擦り合わせる。

背中に回された手に力が籠もり、マリーの情熱がゆっくりと、マグマのように熱く噴出してくるのを感じる。

私がやり方を教えるように舌を入れると、マリーもおずおずと私の口に舌を忍ばせてくる。

「んふ……れう……ふう……♡」

強い力で抱き寄せられた私は、マリーのなすがままに体を密着させられ唇を吸われ舌を絡めて唾液を交換しあった。

マリーの頭とケモミミを撫でながら、乳飲み子のように必死でキスを求めてくるマリーのされるがままになる。

「ちゅっ♡ ふうっ♡ れるれるっ♡」

吸い立てる音、興奮した鼻息、ぷりぷりした可愛らしい舌が一心にスキンシップを求めてじやれてくる舌使い、全てがマリーらしさを凝縮した最高のディープキス。

いつの間にかマリーの膣の締りが緩み、リラックスしてセックスできる程度に柔軟性を取り戻している。

頭を撫でてこちらからも唇を吸ってやると、自分がいかに夢中だったか気づいてマリーが目を白黒させた。

その隙に口を離し、銀の糸を引きながらマリーの体を見下ろす。

「マリー、もうこの痛みは大丈夫？」

ほっそりとしたマリーの下腹部を撫で、腹の中のチンポを意識させる。

「えっ……、あ、その……先生との、き、キスに夢中で……痛いのを忘れていました」

かあつ、と頬を赤らめて顔を手で覆ってしまうマリィ。

「じゃあ、少しずつつ動いて行くね。痛かったらすぐ言うんだよ」

恥じらいつつも、ちらりと指の間から期待に輝く瞳を見せてくれた。

「はい。私に、姦淫の味……教えて下さい……♡」

その前に、ぐい、とマリィのスポブラを上をにずらし控えめな胸を露出させる。

「ひゃっ!? うう……先生、ここも……見たいの、ですか?」

「もちろん。とても可愛らしくて眼福だよ」

マリィの乳輪はハリがあつてツヤツヤしており、朝日に良く映えていた。

優しく乳首を指で弄びながら、腰を前後させる。

「は、あつ……、くう……♡」

マリィの喉奥から、絞り出すように微かにメスの声が漏れてくる。

膣穴がチンポにピッタリと吸い付いて、引き抜こうとすると強く引き止められてマンコの外までビラビラがはみ出す様は、マリィの甘いん坊な所が形を取ったようだった。

処女のマリィを傷つけないように、ゆったり、ねっとり腰を使い、マリィの膣の気持ちいい所を探る。

「っ♡」

マリィが、鋭く息を呑んだ。

ポルチオ手前のお腹側の膣壁、そこがマリィをメスにするスイッチだ。

一番奥まで突き刺したときにちょうどカ리가引つ搔く位置に性感帯があり、マリィが私にぴったりのマンコをしてきている証だった。

「あつ、あつ♡ そこっ♡ あたまがっ♡ まっしろにつ♡」

普段のマリィなら絶対にしない、切羽詰まったような声音がセックス相手だけの特別を強く感じさせる。

「大丈夫だよ、マリィ。私が捕まえていてあげるから、安心して気持ちよくなつてね」

「いつ♥ いいの、でしようかつ♥ わたしっ、わたしっ♥ ああっ♥  
そらを、とんでいるみたいですよっ♥」

笑っているような、泣いているような、ポロポロと涙をこぼしながら目を弓のように細めたマリーが膣イキの予感に震えていた。

朝日の角度が変わり、マリーの裸体に影を落としていく。

磨かれた木床の間接照明に柔らかく照らされる、絶頂寸前の15歳の裸体。

投げ所を求めて手を彷徨わせるマリーが、必死で私の肘を掴み絶頂に備えた。

「膣内に出すよ、マリー」

「せんせいの赤ちゃん♥ ちゃんと、そだてます、からあ♥ お気にな  
さらず、そのままっ♥ くださいっ♥」

切れ切れになりながら、子作りセックスを受け入れてくれたマリーへの感謝を込めて、乳首を強く押しつぶす。

「いっっ♥ ふっ、つぐ♥ う、ううう……♥♥」

膣と乳首で同時に深く絶頂したマリーが、言葉もなく悶絶する。

脚が跳ね上がり、私をかにはさみにするように太ももがV字に持ち上がった。

ごっつ、と木床に勢いよく後頭部をぶつけるのも構わず、マリーが仰け反って全身を痙攣させる。

強く抱きしめるように膣が締めまり、私の精液を一滴のこらず搾り取るように蠕動を繰り返す。

肘がうっ血するほどに握り締められた手に気をつけながら、マリーを優しく抱きしめる。

頭と、汗に濡れた背中をゆっくり撫でているとジワジワと手から力が抜けていき、血流が再開して指先が痺れた。

「はあ……はあ……はあ……♥」

全身をぐったりと脱力させ、だらしなく股を開いて腕も床に伏せたままのマリーが膣だけはキュンキュンと締めて精液を啜り上げる。

人形のように無抵抗なマリーにドブドブと精液を注ぎ込みつつ、外からシスターフッドの生徒たちの話し声が聞こえるのに気づいた。

名残惜しいがマリーとのセックスはここで終わらねばならないだろう。

「先生……お疲れ様でした……♥ とつても……すごかったです……♥」

全力で運動した後のように全身に汗をかきながら、普段どおりの優しい笑顔でマリーが処女セックスの礼を言う。

「私こそ、マリーの初めての人になれて光栄だよ」

見つめ合った私達は軽くキスをして、セフレとして微笑みあった。

「まあ……こんな薬があるのですね」

マリーに避妊薬を渡して飲んでもらう。

その後、裸で股間から精液を垂れ流す自分の様を見て恥ずかしがったので、準備室から出て着替えるのを待った。

「あう……なんだか、脚の間に太いものを挟んでいる感じがまだ……」

出てきたマリーは内股で脚をプルプルさせている。

「あはは……ごめんね。今日は無理して運動しないほうが良いかも」

「ええ……そうします。シスターフッドの他の方に、気づかれてしまうかもしれないし……♥」

そう言つて下腹部をさするマリーの顔はセックス中に見た恍惚の笑みで……処女セックスが良い思い出になってくれたことを感じて嬉しくなる。

「それでは、また後ほど。よろしくお願いいたしますね、先生」

満面の笑みを浮かべるマリーに見送られ、その場を後にした。

後日、徹夜で仕事を片付けて眠れないのでトリニティの聖堂裏公園を散歩していると、マリーがジョギングをしていた。

声をかけると、ぱっと笑顔をうかべて駆け寄ってくる。

マリーが体操服を着て運動しているのがなんだか嬉しくて、その事を訊いてみた。

「ふふっ。実はあれから運動を続けているんです。……思い返せば、私が体操着で運動するようになったのも、先生のおかげでしたね……」

♡」  
暁輪大祭で忙しく処女セックス以降マリーとはデキていないこともあり、下腹部を撫でる指先の艶めかしさにチンポがイライラする。「この服は、私にとつて一生の思い出を作った服ですから……着ているだけで勇気が湧いてくるんです」

姦淫しても清らかなマリーの心が早朝の爽やかな空気に似つかわしく、微かに匂うメスの香りに我慢ができなくなった。

「マリー、今からセックスしたい」

近づいて、ジョギング中で汗をかいたマリーを抱きしめる。

「あっ……♡ そんな、こんな場所で姦淫だなんて……♡ いけません……♡」

そう言いながらも抵抗はなく、フラフラと東屋の中に連れ込まれ、椅子に手を付いてくれる。

尻を上げさせ、するりとショーツパンツを脱がすと汗の匂いがむわわりと漂った。

「ひ、人が来る前に終わらせましょうね……♡」

夜明けの空が白む早朝に、ホカホカと湯気を上げる非処女マンコを晒しながらも上半身はきっちり着込んだマリーが、セックスの許可を出し、即座にゴムを装着してチンポを突っ込む。

「んんっ♡ やっぱり、先生の、大きいです……♡ あ、ゴム……避妊、してくださいるのでね……ありがとうございます♡」

爽やかな早朝の空気を東屋の中だけマリーと私の性臭で満たし、まったりとセックスを始めた。

結局、2発ほどゴム越しに膣内射精して、東屋に腰を落ち着ける。

「この公園にいと、心がとても休まりますね」

並んで座ったマリーが、私の肩に頭を預けて呟いた。

「先生もお気軽にお越しくださいね。……その、一般開放の時間は決まっているのです、いつでもとは言えないのですが……」

「分かった。それならマリーがいる時に来ようかな」

セックス後の後戯としてマリーの髪を梳きながら返事をする、ぴ

くんと耳を震わせた。

「……わ、私から先生をお誘い……♥」

体操服で会ったらセックスばかりしているので、もう印象が染み付いてしまったのだろう。

「マリーからのセックスの誘い、待ってるよ」

ぽうつと頬を赤らめて、マリーが頷く。

「……はい、分かりました。そういう事でしたら……また近々お誘いしますね……♥」

甘えん坊なマリーの性欲が育って大輪の花を咲かせそうな予感に笑顔をうかべながら、2人きりの公園でスキンシップを楽しむのだった。



## ダイエットのための激しい運動（ハスミ）

「……先生？」

ハスミの呼びかけで我に返る。

しかし、返事をする私の視線をハスミの顔に向ける事ができない。ほんの少し首を傾げただけで、ゆさりと揺れるその巨乳。

小顔で、ほっそりとした顎のハスミだからよく分かるが……明らか  
に頭よりも片乳の方が大きい。

普段の制服でもわかっていたが体操服という飾り気がなく薄めの  
服装がさらに際立たせていた。

チンポがイライラしてしようがない。

「ごめんなさい……やはりこの格好、気になりますよね」

ハスミはなにやらマナー的な意味でジャージのジツパーを上げら  
れない事を恥じているようだが、このエロい着こなしが見られないの  
は残念なのでそれとなく服の買い替えは止めさせた。

「気にしないで。ハスミの普段とは違う格好が綺麗だなんて見惚れて  
ただけだから」

襟元の、巨乳を支える張力によって出来る独特のシワの見事さはハ  
スミでなければ不可能とさえ思える。

「せ、先生……もう。今は仕事中ですから」

そう言って、長いまつ毛の目蓋を伏せるハスミ。

その頬は赤らんで、リンゴのように色づいていた。

「ハスミの体の線、本当に美しいよね。その大きいのが、触ってみても良  
い？」

「えっ!? う、え、いえっ……あっ！ つ、翼の話ですよ？」

「いや、ハスミの胸の話だよ？」

「……………」

突如セクハラに及んだ私に、ハスミの目が見開かれる。

「……だ、大丈夫です！ せん、先生が、相手なら……私は……」

ハスミは突き出すように大きな胸を張って、私に触らせてくれよう  
とする。

「ありがとうね、ハスミ」

宝玉でも捧げ持つように恭しく、下からハスミの胸を持ち上げる。「んっ、く……」

ハスミのほっそりとした首筋は全く隠されていないため、羞恥に赤く染まる所がよく見えている。

本当に触らせてくれるハスミに感謝して、体操服越しのブラ、その奥にみっしりと詰まっているハスミの乳房の芯を震わせるように手を細かく動かした。

「せつ、せんせいっ♥ そ、その、そういう、動きは、えつと、ご遠慮、いただければと♥ び、敏感な部分ですので……♥」

上ずった声、真っ赤な顔でぎこちなく笑うハスミが愛おしく、チンポのイライラが募る。

「ハスミの……、すごく柔らかくて温かいね。こういうのはどうかな？」

手首と肘の間で乳房を支えつつ、肩と乳房の間にある靭帯に沿って指を這わせる。

「はうんっ♥ ああっ♥ そこ♥ ズワズワしてっ♥」  
ハスミが身悶え、上半身をひねると胸がぶるんぶるんと暴れる。

その動きに追随し、じんわりと汗をかき芳しい匂いを漂わせ始めるハスミの胸に快楽を教えこんでいく。

「だ、だ、ダメですっ!」  
どん、と突き飛ばされてしまった。

「おつと、ごめんね。見事な胸だったから夢中になってしまった」  
につこりと微笑んで言うと、ハスミは私から目を逸らし、顔が真っ赤なのをごまかすように耳にかかった髪をかき上げた。

「ふう、ふう……♥ 休憩は……そろそろ切り上げませんと。書類を片付けてしまわないといけませんから」

巨乳を思う様揉み込まれても、ハスミは一切それを糾弾したりはせずに仕事の続きを提案してきた。

「そうだね。じゃあ続きをやろうか」

その日は、大運動会の資料について協議し……ハスミを家に送り届

けるまで、特に手を出したりはしなかった。

チラチラと私の勃起した股間に目をやるハスミと、ハスミ乳首がブラさえ押し上げてふっくら勃起しているのを見る私とが、視線は全く合わないが心を一つにして夜道を帰った。

パンツ！　パンツ！　と女の子の部屋に拍手のような肉のうち合わさる音が響く。

「それで、ハスミの様子はどうか？」

体操服姿のツルギをベッドに寝かせ、屈脚位で犯す音だ。

せっつかくなのでショートパンツも膝辺りに残したいと思い脚を閉じさせている。

「んゝほおゝおっ♡と、特につ♡変わったことは♡ありません♡」

ツルギは忙しいわりにはセックスしに来る方なので、すっかり慣れて屈脚位にも対応してくれる。

いつも外で活動しているのに病的に白い喉元を無防備に晒してのけぞり、私のチンポをマンコでリズムカルに締め付けてくれた。

「で、でも♡お♡時々窓の外を見て、ため息を付いてるのは♡何回か見ましたあ♡」

膣イキを堪えながらも良い情報を教えてくれるツルギにご褒美を上げるべく、ツルギの膝が胸を押しつぶす程のしかかってチンポを深く突き刺す。

コリコリとゴム越しにツルギの子宮口の存在を感じ、優しくカリで擦って刺激する。

「んゝあゝあゝ……………♡はっ、っごおおおううう……………♡」

腹の底から地獄の獣が喉を鳴らしているかのような声を上げて善がるツルギ。

殆ど白目を剥いて凄絶な顔をしているようだが、私にとっては見慣れたイキ顔だ。

普通に着ているだけで物々しくなる制服とは違い、シンプルな体操服はツルギを年相応の少女に見せてくれる。

それだけでなく、ノーブラノーパンなので大きな胸の頂点はくつきりと勃起乳首が浮かび上がっていた。

優しく子宮口を刺激しながら、抓るように強く乳首を刺激する。

「あ、い、ひいひいひいひいんっ♥」

無類のフィジカルをしたツルギのマンコが、処女の時よりも強く締めまる。

「上手になったね、ツルギ。ご褒美だよ」

のけぞったツルギの喉にキスをし、キスマークが残るほどに強く吸い付く。

ツルギの全身を拘束するように抱きしめ、密着した種付けプレスで奥深くに射精した。

「い、っぐ、イグイグイグイグっ♥ ぜん、ぜえ、♥ しゅきいひいひいひいんっ♥」

殆ど意識のない状態で、ツルギが仕込み通り、いやそれ以上に愛情の籠もった絶頂宣言をして深く子宮口イキをキメた。

握るような強い締付けの後、殆ど無意識に膣の筋肉を順序よく蠕動させて精液を根本から絞ってくれる。

ツルギが私のセフレとしてよく勉強してくれている事が嬉しくなり、シヨートパンツを脱がせて脚を開かせ、体操服の前をめくって形の良い巨乳を露わにする。

「これからハスミとの約束があるから、あと一発だけね」

絶頂の余韻で息が荒いツルギが私に顔を向けると、そこには汗だけで髪を顔に張り付かせながらも瞳をキラキラ輝かせた淑やかそうな美少女がいた。

「はい、先生……♥ ツルギの体、もっと使ってください♥」

ずぼんっ、と精液入りゴムごとチンポを抜き放つと、ポツカリと洞穴のように開いたままの膣を思い切り開脚して見せつけ、次を待ちわびるツルギ。

それから数十分、箱入り娘のような屈託のない笑みを浮かべるツルギに覆いかぶさり、たっぷりと喜ばせてあげた。

ツルギとたつぷりセックスをして2発抜いてきた私は、ハスミとの待ち合わせのため下町の体育館にやってきた。

「あ、先生。お待ちしておりました」

「どうやらハスミは楽しみで先に来てくれていたらしい。」

私がツルギと早朝からセックスを楽しんでいる時にはもう待つてくれていた。

この詫びはハスミとセックスすることで返さなければならぬだろう。

ハスミは私の運動不足を解消するためにストレッチなどをコーチしてくれるらしい。

「その、先日先生が「面倒を見てほしい」と言ってくださったので、僣越ながらお役に立てたらと思ひまして」

以前何かと頼られがちなことを悩んでいたハスミにそれが魅力である事を伝えた事があつたが、早速実践してくれたというわけだ。

「……それでは、軽いストレッチから始めてみましょうか」

自分の発言に照れたように、ハスミが切り出した。

私を床に座らせて、脚を伸ばさせる。

「ここをもう少し、こう……」

ハスミのしなやかな指が背を押し、体がのしかかってゆつくりと前屈させられる。

むによん、とハスミの大きな胸が肩甲骨あたりに乗つかつてくる不意打ちに、ハスミの親友のマンコで射精したばかりのチンポがイライラし始めた。

「……先生、どうしました？ 何かありましたか……？」

「ううん、大丈夫だよ。続けよう」

「そうでしたか。では……」

「ここ、と笑つて、ハスミが更に体を密着させた。

しばし前屈のストレッチをして、明らかに関節の可動域が広がった気がする。

「ふう、ふう……次は、私と向かい合つて座りましょう」

大運動会も終わったとはいえ、今日は日差しも強く体育館の中は汗

ばむ陽気だった。

ハスミもまた汗をかき始め、ほんのり色づいた肌をしながら私の向かいに腰を下ろす。

そして大きく股を開き、私にも同じく開かせて足裏をつけあった姿勢で前屈して手を握りあつた。

「2人で引つ張り合つて、前に体を倒していきましよう」

言われるがままに腕を引かれ、腰と内腿をミシミシ言わせながら筋肉を伸ばす。

しばらくして力が緩むと私がハスミを引つ張る。

「んっ……♥」

ハスミは体が柔らかく、額が床に付くまで前屈できている。

それはもちろん、床に巨乳が押し付けられて平たく潰れる様が目に入るということだ。

チンポのイライラがとどまることを知らない。

「ふう、次は私です、ね……」

私が力を抜くとハスミが起き上がったが、ガチガチに勃起した私のチンポを見て固まっている。

「くっくっ……♥」

目を皿のようにしてチンポに魅入り、生唾を飲むハスミ。腰の後ろから伸びた大きな翼もぶわつと羽毛を逆立たせた。

「どうしたの、ハスミ?」

「えっ!? えっと、いえー! な、なんでも、ありません……」

どうやら私が勃起に気づいていないと思っているのか、股間を凝視したままで手を引き、ストレッチを継続する。

性欲を高めあいながらストレッチを繰り返す。私もまた、ハスミの股間にピツタリ張り付くショートパンツを凝視していた。

「……ハスミ、私からもストレッチを教えてあげるね」

フル勃起に至った私は、立ち上がろうとするハスミの太ももを掴み、ゴロンと仰向けに転がした。ハスミの羽の付け根は、腰のくびれで浮いた部分にあるため負荷はかかっていないようだった。

「きやつ!? せ、先生? この格好は……すこし、恥ずかしいのですが

……」

ツルギにしていたのと同じ、屈脚位……種付けプレスの体勢だ。ハスミにのしかかり、太ももの裏の筋肉を伸ばすように膝を床につけさせる。

私のチンポもハスミの股間にグリグリと強く押し付けている。

「んっ♥」

服越しにも、ハスミのクリトリスが既に勃起しているのがチンポに伝わってくる。

「どう？ 苦しくないかな、ハスミ」

「だ、大丈夫、です。もつと強くしても、平気……ですよ」

ふい、と視線をそらし、力を抜くハスミ。

我慢汁でヌルヌルになったズボンの中の龟头を、遠慮なくハスミの股間に押し付けてセックスするようにへこへこと腰を振る。

「んっ♥ あああっ♥」

さんと陽の光が窓から降り注ぐ体育館に、ハスミの澄んだ雌の声が響く。

ストレッチでもなんでもない股間を擦り合う行為にも不満の声はなく、ハスミよりも力の弱い私のされるがままに、ショートパンツの股間の布にシミが出来ていく。

私は無言でズボンを下ろし、勃起チンポを取り出した。

「ハスミも脱がすよ」

そう言うと、ハスミはキョロキョロと辺りを見回した。

開いたままの出入り口には、もちろん誰もいないが……ここは誰でも使える体育館だ。

床の上でセックスをしていたら一発で見つかる状況に戸惑いつつも、拒絶の声は上がらない。

「ど、どっどっ……♥」

下のショーツごと脱がすと、むあつと運動をしてかいた汗と共に愛液の雌臭さが広がる。

几帳面に整えられた陰毛と美しくスジを描く陰唇が、下町の体育館で白昼堂々と曝け出された。

「じゃあ準備を整えようね」

身をかがめて、ハスミの股間に顔を埋める。

「そ、そんな所、汚いですよ、先生……♥」

そう言っただけで私の頭に手を添えるが、チュバチュバと音を立ててマンコを吸うと力が萎えて置かれているだけになった。

「あ、んぐっ♥ ふうーっ、ふうーっ♥」

ねっとりとした喘ぎ声を、口を手で塞いでこらえるハスミ。

私のクニを嫌がることはなく、快楽で腰をくねくねさせながら体育館の磨かれた床にハスミの愛液が水滴を散らしていく。

明るい体育館は、茶色の肛門も、その内側の鮮やかなピンク色もくつきりと見て取れる。

マンコを舐めながら肛門をクイクイと指で拵けて戻してを繰り返して、ハスミの羞恥を引き出して興奮に加え、性感をより昂ぶらせる。

「ああっ♥ だめ、先生、もう、なにか、きて、しまい、ますっ♥」

切羽詰まった、ハスミのかすれるような声。

びく、びくとハスミの体が震える。

真っ白でモチのように弾力のある尻肉が快感の痙攣に震え、膣口がヒクヒクと絶頂の予感に開閉する。

つぶ、熱く潤った膣に指を入れ、入り口の上側を探ると勃起クリトリスの裏側はすぐに見つかった。

「くっ、ひ♥」

ハスミの声が高く裏返り、目の前の太ももの筋肉が固く硬直し、

「っ、あ、あああああああっ♥♥♥」

光に溢れた下町の体育館に、ハスミの絶頂声が響き渡る。

体育館に満ちた爽やかな空気を淫らに震わせ、下半身裸のハスミが長い脚をぱっかりと開いて横たわっていた。

「さあ、ハスミの大事な所のストレッチをしようね」

トロトロに愛液を溢れさせ、肛門までテカテカ光っているハスミのマンコに、我慢汗を滴らせながらチンポを押し付ける。

処女の硬さを絶頂の余韻でなんとか騙して、ハスミの処女穴を蹂躪する。



「うっ、ぐ……」

顔をしかめて破瓜の痛みを受け入れるハスミ。

そんな健気なハスミを見下ろしながら、その大きな胸を抑え込んでいる体操服を下からぐいと持ち上げた。

ジッパーが上がらないだけあって体操服自体よく着れたなど思うほど伸ばさないとならなかったが……私の頭が入りそうなほど大きなブラジャーに包まれた胸がボロンとこぼれ出てくる。

抱きしめるようにハスミの背に手を回してホックを外し、生乳を解き放った。

「本当に綺麗だよ、ハスミ」

体育館の窓から降り注ぐ光はホコリを反射して天の階きざはしのようにハスミを美しく照らす。

「ああ……♥ こんなになっちゃってしまっつて、お恥ずかしいです……♥」

私のチンポをマンコでぐっぽり啜えながら、そっと手のひらで両の乳首と乳輪を隠している。

「恥ずかしいことなんてなにもないよ。ハスミの胸も、お腹も、お尻も……彫刻みたいに整っていて美しい」

日頃の節制の賜なのか、運動が得意でないと割にお腹は引き締まり、セックスでじつとりと汗をかいてヌメるように光っていた。

「先生こそ……私の中で、熱くて、たくましくて……♥ とっても、素敵だと思えます♥」

処女を成り行きで奪った私のチンポを称賛し、あくまで和やかに、セックスしながら雑談する。

「実は、私も……先日大運動会について協議した時、先生の行為に興奮してしまっつて……♥ 少し……悩みましたが。興奮した男女がこのような行為に及ぶのは……た、正しい行為なのではないかと思っつて……ずつと、先生をお待ちしておりました♥」

そう言っつて、照れくさそうに笑うハスミ。

正義実現委員会の副委員長は、自分の性欲に従っつて処女を捨てる事に正義を見出したらしい。

「うん、ハスミがそう思っつてくれて嬉しいよ。これからも、セックスし

たくなつたらいつでも呼んでね」

膣内を動かささないように気をつけながら、ハスミに覆いかぶさつてキスをした。

ただそれだけで、ハスミの大きな胸がつかえて私の胸板で潰れる。勃起乳首がくすぐるように踊るのを感じながら、透明なリツプを塗っただけの飾り気のないハスミの唇と、ハスミの愛液で濡れた私の唇を激しくこすりつけ合う。

「んん……♡」

ハスミの腕がおずおずと上がり、ハスミからも私を抱きしめてくれる。

最初は触れるように、そして私が強く抱きしめてあげてから段々と力が籠もり、自分の性欲に従ってセックスを求める気持ちの強さの分だけしつかりと私の背を、肩を固定し、ピストン運動がしやすくなるように準備する。

大きな翼も持ち上がってきて羽毛布団のように私達を包み込んだ。

「動くよ」

キスを止め、鼻が触れるような近距離で処女穴を私専用<sup>に</sup>耕す事を宣言し、ハスミは微かに頷いた。

「あ、う……♡」

腰を微かに引くだけで、ハスミの膣肉がねちやりと動くのがよく分かる。

179cmの長身だけあって身体は大人として出来上がっており、膣も肉厚の犯し甲斐ある女の穴として完成していた。

微かに抜いては腰を上下左右にグラインドさせて膣肉の弱い部分を探る。

「んっ……♡」

じれつたいほどの遅い動きだが、始めてのハスミにとっては刺激に満ちているようで、セックスが始まってからようやく合った視線は熱っぽく、期待されている事が分かる。

「どうかな？…痛い所はない？」

興奮でキラキラと涙に輝くハスミの瞳を覗き込みながら話しかけ

ると、会話を持ちかけられたのが意外そうに視線を彷徨わせ、少し俯きがちな上目遣いになった。

「だ……大丈夫、です。お構いなく……っ♥」

チンポをグツポリと啜えこんで体育館の床に破瓜の血の跡を残しながらも、何を言えば良いかわからず会話を流すしかないハスミ。

ハスミの膣は3つのリング状の筋肉がくつきりと分かる程存在を主張しており、その一番奥のものにカリが引つかかり始めていた。

亀頭が一番広がった部分に合わせ、筋肉がグーツと伸ばされる。

「あ、あ、ああ……♥」

ハスミの唇から、温泉に浸かった時のようなリラックスした吐息が漏れた。

膣のリングが伸び切った所で、一度チンポを奥に沈める。

「んっ♥」

再度、今度は少し速めに膣のリングを引っ掛けるよう腰を引く。

「は、んんっ♥」

思わず漏れ出してしまうと言った感じの控え目な声だが、処女のハスミが膣で性感を得ている確かな証拠だった。

「ハスミ、この動きは好きかな？」

奥を突き、筋肉のリングを伸ばす動きをひたすら繰り返す。

「そ、そんな♥ 恥ずかしいっ♥ こと、聞かないで、くださいっ♥」

効率良く、ハスミが気持ちいいと感じられるギリギリまで速度を上げて、強い刺激に慣れさせていく。抗議の声も途切れ途切れだ。

「そう？ でも嫌だったらすぐに言うんだよ」

そう言いながら至近距離で見つめ合っていた所から身体を起こし、胸板で潰れていたハスミの巨乳を見下ろす姿勢になった。背中にハスミの翼が優しく触れる。

両手でハスミの胸を驚掴みにした。

そのまま体重をかけ、パンをこねるように掌底を水平に円を描くよう動かす。

「はあっ♥ ああっ♥ だめっ♥ 同時、なんてっ♥」

慣れ始めた膣の刺激に胸からの刺激が加わりハスミが善がり悶え

る。

あつという間に乳首が手のひらの中で固くなる。私の熟練の巨乳揉みを喜んでくれているようだ。

「さあ、今度は真ん中の輪つかまで伸ばしていこうね」

「あつ♥ はいっ♥ す、ストレッチ♥ お願いしますっ♥」

にち、ちゅぷ、と奥からの愛液を溢れさせながら、ストロークを長くして奥の輪をすぐにくぐり2つ目、真ん中の輪をゆっくりと伸ばしていく。

伸び切ったら再度一番奥まで突き、奥の輪を素早く通って膣奥の子宮口に触れる。

「んっ♥ んんっ♥ ああーっ♥」

膣の筋肉が連続で伸び縮みする快楽に、ハスミの声が高くなる。

「どう、大丈夫？ 辛くない？」

「だっ、大丈夫、です♥ 先生が、とても、お上手なので……♥」

チンポのイライラを増幅するようなことを言うハスミにサービスするべく、3つすべてのリングを刺激することにした。

カリが引つかかるまでは素早く抜き、リングに引つかかったらゆっくり抜く。それを3回繰り返す。

「あっ♥ うっ♥ いいっ♥」

そのたびにハスミは甘い声を上げ、キュンキュンと筋肉のリングを締めて反応した。

そして入り口近くに達すると、全てをねじ伏せてチンポを奥深くまでねじ込む。

「んおおっ♥」

ハスミは身体の底から絞り出されるような重い快楽を表現した喘ぎ声を上げるが、あくまでリズムカルに膣を往復していく。

「んっ♥ おっ♥ んひっ♥ ひっぐううっ♥ うっ♥ おっ♥ いっ♥ おおっ♥」

きつちりと4拍子のセックス声が体育館中に満ち、私達はまったく運動に励んだ。

筋肉のリングに力が籠もるため無理に伸ばすと痛いだろうと、細か

く速度を調整し……硬直した後すぐに弛緩する時を見計らって腰を引くのが最適であると見出す。

そしてハスミ専用の膣肉ストレッチセックスは完成を見た。

「おゝっ♥おゝっ♥ふうう♥おゝおおーっ♥おゝっ♥おゝっ♥ふぐっ♥んゝおゝおーっ♥」

ハスミも自分で腰を使ってくれるため、とても効率よくストレッチが出来る。

一突きごとにセックスの腰振りをその身に馴染ませ、明るい日差しの中で保温性の高い翼に包まれ、汗をタラタラと流してスポーツの秋を2人で堪能した。

「さあ、一番奥に射精するよ、ハスミ」

「はいっ♥きてっ♥射精お願いしますっ♥」

蕩けきったハスミの頭が、即座に膣内射精を受け入れる。

胸を揉み込んでいた手をどけて、種付けプレスで密着し、一番奥のリングと子宮口を往復する射精直前の動きに変えた。

「あっ♥あっ♥あっ♥」

もう言葉もなく、ただ射精を待ちわびて2人で息を合わせて腰を揺らす。

程なくしてその時は訪れた。

「は、ああああ………♥」

マラソンでゴールした後のように、射精を受けながらもカクカクと腰を振るハスミ。

だらしなく開いた口元からよだれを垂らし、鉄骨がむき出しの体育館の天井に視線を彷徨わせる。

朝、ツルギに2発射精した私のチンポから3発目とは思えない大量の射精がハスミに流し込まれる。

「はあ……はあ……はあ……♥」

うっとりとしつつも、有無を言わせぬ力の強さで私の身体を抱き寄せてそっとキスしてくるハスミ。

私も逆らうことなく唇を重ね、処女の子宮にびちやびちやと好きなだけ精液を浴びせてハスミの黒い絹のような髪を優しく梳いた。

ハスミは絶頂して腰を止めつつも膣のリングを収縮させて休むことなく刺激してくるため、射精がなかなか止まらない。

どく……どく……と処女に種付ける征服欲と疲労が合わさり、気だるくなった身体から力が抜ける。

「お疲れでしたら、先生……私に身体を預けて、どうかお休みください……♥」

翼で私の身体を包み込み、大きな胸で優しく受け止めてくれる。

全身を肉布団として使うハスミに甘えて、いつもの倍くらいはダラダラと精液を吐き出させてもらった。

「本日は……その……ありがとうございます……♥」

精液を出し切った後、避妊薬と共に水分補給して解散の流れになった。

もちろん、セックスでかいた汗や処女の血や愛液や精液は体育館のモップに染み込む事になった。

「ハスミにお世話をされるの、とても気持ちよかったですよ」

「せ、先生こそ……セックスがとてもお上手で……♥ お恥ずかしい所をお見せしてしまいました」

ハスミはジャージを普段どおり着直したが、股間が落ち着かないように下腹部に手を当ててもぞもぞしている。

「ツルギやマシロも私とセックスしてるから、ハスミもしたくなったらいつでも遊びに来て良いからね」

「う……やはり、そうなのですか。2人とも妙に機嫌の良い時がありましたから……」

少し顔をしかめたハスミだが、優しい顔をして下腹部を……子宮に溜まった精液を思い浮かべるような恍惚の笑みを浮かべながら撫でた。

「ふふ……それも、先生とセックスをしたからと思うと、納得してしまいますね。っと、もうお昼になってしまいますし……今日はここまでにしませうか？」

「ありがとう、ハスミ。……また体育館でもセックスしようね」

「はい♥ 私の身体の硬い所を……沢山ストレッチしてくださいね、先生♥」

爽やかな笑顔を浮かべるハスミと連れ立って帰り……精液を子宮に溜めたままでカフェに寄ってパフェを食べるのだった。

## 休日の合理的な楽しみ方（ユウカ）

「♪」

シャーレ執務室に、ユウカの鼻歌が流れている。

明日の休みに2人でイロイロする約束をしているため、今日はユウカが仕事を手伝ってくれているのだ。

「先生ー もつとがんばってくださいー！ 積もりに積もった仕事が山ほどありますよー！」

目をキラリと輝かせ、こちらに発破をかけながらもキータイプ音が止むことはない。

「うう……なんとか頑張ります……」

実際、仕事を立て込んで数日セックス出来ていないほどに忙しかつたので渡りに船だった。

キーボードを叩いているだけで腕がだるくなる程に長時間集中したため疲弊してしまい、その日は居住区で眠った。

そして翌日。

「おはようございます、先生！ 外はさわやかな秋晴れですよー！」

体操服姿のユウカが私のプライベートスペースのはずの居住区にやってきて身体を揺すって起こしてくる。

「ほらほら、顔を洗って、歯を磨いてー！ 時間は効率的に使いましょー！」

身体を軽々と引つ張られながら朝の身だしなみを整え、私もジャージ姿でユウカと一緒に外に出た。

朝焼けの時間、シャーレ出口の市街地には車の通りも少なく、外で並んで走っているのに2人きりという表現がピッタリくる。

「ひっ、ひっ、ふっ、ふっ」

隣から聞こえてくるユウカの呼吸音は規則正しく、色々と勉強してきたことが伺える。

ゆさゆさ揺れるおっぱいを凝視出来ないのは残念だが、少し前にへばっていた所から見事に成長してみせた姿に頬が緩んだ。



「ふうっ。お疲れ様です。この公園で少し休憩して折り返しましよ  
う」

シャーレからほど近い、市街地にポツンとある公園のベンチに腰掛  
ける。

ユウカは太ももが引つ付くほどの近くに座り、汗でしっとりした身  
体を預けてくる。

木立で見えづらいベンチを選んで導いたユウカの計算を信じて、腰  
に手を回してジャージの下の薄手のシャツに指を這わせていく。

何故か常にはだけさせている胸に指が沈み込むと、ジョギングの時  
とは全く違う熱っぽい吐息が漏れた。

乳房を下から持ち上げるように手の中で弄びつつ、指先はユウカの  
乳輪をスリスリ撫で回す。

「はぁ、あぁ……♡」

ユウカは身体を擦り寄せてきて、揉んでいない方の乳房を私の胸板  
に押し付けてきた。

指先にはふつくらとした盛り上がりを感じ、シャツにも乳首の勃起  
が目に見えている。

「さ、そろそろ戻ろうか」

「あっ……は、はい……」

胸を揉まれてうっとりしていたユウカは、お預けを食らった飼い犬  
のように眉を下げたが……立ち上がると気を取り直して快活に笑っ  
た。

もちろんその乳首はまだ勃起してテントを張っていたが、早く早く  
と子供のようにせがむのでジョギングを再開した。

「いいの？ 人とすれ違ったら乳首立ってるの見えちゃうよ」

「だ……大丈夫ですっ！ だから休日の早朝を選んだんですから……  
最後までシてくれても良かったのに……」

復路はそんな風に雑談できる程度のペースでのんびりと帰った。

実際に誰にも会うことはなく、エレベーターに乗ると地下へと向か  
う。

「さ、朝はんにしましょう」

私にテーブルで待つように言うと、ユウカはダツフルバッグからお弁当を取り出して一つをレンジへ、残りを冷蔵庫へと仕舞っていく。「沢山あるんだね」

「ふふっ。今日という日を最大限に楽しむために、料理の手間は前日に済ませておきました」

それはつまり、今日は朝から晩まで一日中セックスするという宣言だった。

「さ、温かい内に食べましょう」

「いただきます」

汗の匂いをほのかに纏ったユウカが、密着するように隣に座る。

蓋の空いたお弁当からはきんぴらごぼりやブロッコリー、ミニハンバーグなどが湯気を立てていた。

「おお、美味しそうだね」

「そうでしょうか？ 私の腕も日々進化してますから！」

得意気に笑い、ユウカの箸がミニハンバーグを2つに割る。

「先生、あーん♥」

そのまま私の口元に差し出してきたので、ありがたく受け取った。デミグラスソースを纏ったハンバーグが口の中で解け、肉の味が広がる。

「はむ、はむ」

眼の前の白米を追加で口に放り込むと何度も噛み締めて味わった。

「うん、美味しいよ、ユウカ」

「ふふっ、そうでしょうか？ ……せ、先生……あー……♥」

雛鳥のように口を開けて待つユウカにハンバーグを差し出すと、可愛らしい口の中に収まる。

「んっふ♥ えへへ……♥ 先生に食べさせて貰うと格別ですね……！」

ほっぺを抑えてむにやむにや笑顔になりながらも、ユウカも口元を隠してお米を頬張った。

他のおかずも、全て食べさせ合いながらだったので時間はかかったが、楽しく朝食を終える。

ピピツ、とブザーが鳴ったのが聞こえた。

「さつ、ご飯も食べたし、お風呂で汗を流しましょう、先生……♥」  
薄く笑みを浮かべ、手を差し伸べるユウカだが、その乳首は既にピ  
ンと勃起しているのがシャツの上から見えていた。

ぱさり、ぱさりと躊躇いもなくユウカが脱衣していく。

黒の、気合の入ったレース下着が脱衣かごに収められユウカの見事  
に肉の乗った身体がオレンジがかかった上からの室内灯に艶めかしい  
陰影を作った。

「も、もう……先生も早く脱いでくださいよ♥」

心なしか胸を張り、勃起乳首やきれいに処理した陰毛を見せびらか  
すように身体をくねらせながらユウカが文句を言う。

髪をまとめていたゴムを解き、風呂用に髪を上げてタオルを巻く仕  
草も、どこか扇情的でストリップめいている。

「ごめんごめん。ユウカの身体に見惚れてたんだよ」

「お、おだてても……セックス以外ではサービスしませんよ♥」

むわりと、汗の甘酸っぱい匂いとは別のすえたメスの匂いが鼻に届  
く。

ユウカの股間は既に潤い、太ももに垂れてキラキラと光を反射して  
いた。

服を脱いだ私はチンポのイライラを隠すことなくフル勃起を裸の  
ユウカに押し付け、軽く抱きしめる。

「さ、行こうか」

「はい……♥」

ベツタリと身体をくつつけ、歩きづらい体勢でゆっくり歩を進め  
る。

風呂場には、ノドカが最初に持ち込んだソーププレイ用のマットが  
既に敷かれていた。

「寝そべってください、先生。私が全身洗って上げますから……♥」

目に怪しい光をうかべたユウカが風呂桶で肩から湯を被り、胸元に  
ボディソープを塗りつけて誘惑するように自ら乳房をこね、泡立て

る。

私は仰向けに寝そべってユウカに任せた。

身体の前面を泡だらけにしたユウカが、まずは私の乳首にキスしてくる。

「ぢゅっ♥ んれえろっ♥」

うっとり目を細めて、乳首を舌でチロチロ転がしながら腹から下に身体を擦りつけて泡を塗り伸ばす。

チンポがユウカの腹をヌルヌル滑り、早朝マラソンでかいた汗が洗われていく。

更には泡に塗れた手が私の下に滑り、尻を、肛門の縁を指でクルクルとくすぐられる。

つぽつぽと肛門に浅く出入りするユウカの白魚のような指と情熱的に乳首をねぶつてくる舌の動きにチンポがフル勃起し、我慢汁が溢れる。

十分に洗われ、泡まみれになるまで続けられ、歯を食いしばって射精感に耐えねばならなかった。

やがてユウカは名残惜しそうに唇を離すと、身体を上をスライドさせて私の肩までをまんべんなく撫で回し、ボディソープまみれにした。

「先生っ♥ 先生っ♥」

だが本人はもうすっかり頭の中まで性欲でいっぱいになってしまっていて、限界まで勃起した乳首を私の乳首と踊るようにこすり合わせ、生挿入してしまいそうなくらいに龟头を割れ目にこすりつけてへこへこ腰を振っている。

すっかりセックスの味を覚えたユウカに愛おしさが溢れ、ボディソープでヌルつく手でユウカの背を撫でて洗ってあげる。

目にハートマークさえ見えるような熱っぽい視線を浴びながら、ユウカの顔が迫り、当然のように唇を重ねた。

身体を洗うという建前など忘れたユウカの身体が私に巻き付くように絡み、結果としては隅々まで泡を塗り伸ばして洗浄していく。

走っているときより鼻息の荒いユウカの、なかなか自然には洗えな

い首筋や耳の裏をソープで綺麗にしながら、のんびりとマットで前戯を楽しんだ。

ユウカの愛液で私のチンポのボディソープが洗い流された頃、風呂に入ったかのように湯だったユウカを抱いたまま身を起こし、風呂桶で全身に湯をかぶる。

泡が流された裸のユウカの腰を抱き、2人で湯船に浸かった。

さつきまで元気だったユウカはもはや何も喋らず、私に身体を擦りつけてチンポを撫で、鼻息荒く私の許しを待ちわびている。

ユウカの瑞々しい肌がお湯を弾き、珠のように照明に輝いている。乳房を持ち上げ、勃起乳首を水面から出して指先で遊んだ。

気持ちよさを説明するように、ユウカの手が速く、艶めかしく私のチンポを扱き上げる。

ユウカに顔を向けると、興奮とお湯で上気した顔がすぐ持ち上がり、私を正面から見つめた。

ほんの少し身をかがめただけで次の展開を理解し、ユウカが目を閉じる。

「はむっ……♡」

待ちきれないように、私の唇をユウカの唇が食んだ。

「ふう……♡ ふう……♡」

荒い息遣いと、必死に粘膜を擦り合わせようとする舌を心地よく受け入れる。

タオルを巻いたユウカの頭をポンポン叩くと、数秒後にようやくゆっくりと離れてくれた。

「そろそろ行くうか」

「ごっくっ……♡ はい……♡」

チンポを勃起させたまま2人で立ち上がり、ゆっくりと風呂場を出ていく。

脱衣場でも、ユウカが跪いて綺麗になったチンポに頬ずりしかねない勢いで見つめながら丁寧に拭いてくれた。

大きめのソファにはやった覚えのない……おそらくユウカがやった……タオルが重ねられていて、セックスで液体を撒き散らす準備が

整えられている。

裸でそこに腰掛けると、強い力でユウカに肩を押さえられた。

「はあ、はあ、先生……いい、ですよね？　ね？」

そろそろ我慢の限界に達したユウカが、お風呂に入ったばかりの綺麗な股間をすぐヌルヌルにさせてそう言った。

「ゴムをつけなきゃ駄目だよ」

「はっ、そうでした……ええと、ゴム、ゴム……」

全裸で、濡れたマンコを晒すことも全く気にせずはこちらに尻を向けた前かがみになって、テーブルの上を探すユウカ。

セフレにしたあの日から、何かと時間を作ってユウカはセックスをせがんできた。

今や仕事の合間にフェラで即抜きにも対応してくれる模範的なセフレに成長してくれている。

今日のこの「デート」も、ユウカから提案して一日セックス漬けの時間を送るために仕事を手伝ってくれたことで実現したのだ。

「あつた♪」

その声が心底嬉しそうで、思わず笑みが漏れた。

「さ、先生！　今つけてあげますからね♥」

ゴクリと生唾を呑んだユウカによつて素早くゴムを付けられ、風呂上がりのホカホカの身体が遠慮なくのしかかってくる。

「ん……」

ソファに座った私に抱きつきながら、もぞもぞと腰の位置を調節して膣にチンポを入れようとするユウカ。

「っしょ♥」

つぶん、と先端が埋まると、後はもう一気に入った。

「あゝっ♥　あああああっ♥」

待ちわびたチンポを一気に入れた刺激で、ユウカが一突き目から絶頂した。

ホカホカのトロトロに出来上がったユウカのマンコがすがりつくようにチンポを締め付け、マンコと同じようにユウカの手脚が私に絡みつき、ガツチリと全身をホールドされる。

「せんせえ……せんせえ……♥」

甘ったるい猫なで声を上げて私に強く密着するユウカからは、合理も理性も全く感じられない。

その代わり快楽を求める性欲と色気はたっぷりと感じられる身体を抱きしめ、少しだけ湿った頭を撫でた。

「いいよ、ユウカのやりたいようにやってごらん」

言うが早いのか、ユウカから首を伸ばしてキスされる。

胸をクツションにして肩甲骨の辺りをユウカの腕が横に1周し、きつちりと固定する。

背中を波のようにうねらせて尻を振りかぶり、抜けそうになる直前で叩きつけるように腰と腰をぶつけて来た。

ツパーーン！

と平手打ちのような快音が地下居住区に響き渡る。

それは座った体勢の私の太ももとユウカの尻が勢いよくぶつかった音だ。

音ほどには痛くないが、それなりの衝撃は下腹部全体で感じる。

私の腰に脚を絡めただいしゆきホールドでは難しいと感じたのか、もどかしげにユウカの脚が離れ、尻のすぐ左右にしつかりと踏ん張り、私の胴を膝で挟み込むように固定する。

またも尻を振りかぶるためにユウカのマンコが離れ、情熱的な弾力のある膣肉でカ리를ゾリゾリと刺激しながら抜けていく。

ぱちゅっ！ と二発目は肉の打ち合う快音と共に水音を響かせた。

「んっううっー！」

眼の前にはニンマリと笑みの形に歪んだユウカの目が、チンポを奥まで頬張れる喜びを叫んでいる。

ユウカの腕と脚で上半身と尻までを固定され、ジョークグッズ相手のように一方的な性交が始まった。

ぱんっ、ばふっ、ぶちゅっ♥ と肉がうち合わさったり腹同士が当たって空気の抜ける音がしたりと、不器用なセックスリサイタルが誰にも聞かれることのない地下で繰り返される。

「ふうーっ♥ んちゅっ♥ ちゅるっ♥」

パコパコと忙しく動く下半身に対して、顔は私とキスするのに忙しい。

くすぐったいくらいに荒い鼻息を吹きかけながら、顔を左右に揺らして一生懸命に舌を伸ばし、私の口内を舐り尽くそうとうごめく。

そのひたむきさが可愛くてユウカの後頭部をサラサラと撫でながら、亀頭と根本を往復するユウカのマンコの激しい動きを何もせず享受する。

ばっふばっふと跳ねさせていた腰が、動きを小さく奥に擦り付けるものに変化した。

「ん、ふうっ♡ふっ♡ふっ♡う、うーっ♡」

ユウカの眉が寄せられ、瞳がキラキラと涙に濡れる。

にち、にち、にち、にち……粘質で小さな音だが、他に何も聞こえない室内では丸聞こえのその音は、ユウカが一番メスの快楽を引き出せるように私が躡けた子宮口回りの性感帯を虐める音だ。

とても幸せそうに、感極まって頬に涙を伝わせながらユウカは腰を振り続ける。

押し付けられっぱなしの胸にじっとりと汗をかき、ビンビンに勃起した乳首を見えないままにハッキリと感じた。

「ん、っ♡ん、っ♡ん、っ♡ふ、う、む、ううう……♡」

キツく眉を寄せ、目を閉じたユウカの目からぼろぼろと涙がこぼれ落ちる。ユウカが子宮口で深イキした瞬間だった。

私からもユウカを抱き寄せ、強く強く密着する。

膣が今までで一番キツく締め、私もせがまれるままに射精した。

ユウカのキス顔は大きな仕事をやり遂げたような達成感に溢れ、幾筋も涙の跡を残しながらも力の抜けた笑みをうかべている。

射精を続ける私のチンポを労るようにユウカが下腹部に力を入れ、出しかけの精液を最後まで絞ってくれる。

「っふあ♡」

久々に息をしたかのように、唇を離れたユウカが大きく息を吸う。

私の肩に少し力をかけながら脚を伸ばすと、マンコからはヌルヌルとチンポが抜けてずっしり精液のたまったゴムの先端がユウカの愛



液と共にひり出された。

「ふふっ……♡ こんなに射精してくれたんですね……♡」

「ああ、この所溜まってたからね」

ユウカの膝が離れた脇の下はジンジンと痛み、おそらく内出血していそうだった。

それほどセックスに必死だったユウカは、まるで余裕たつぷりにセックスを終えましたと言わんばかりの微笑をうかべながら跪き、ゴムを外して縛っている。

「お疲れ様です、先生♡」

いつも仕事終わりにかけてくれるのと変わらぬ声音ながら、今のユウカの目には私のチンポしか見えていない。

「ん、ちゅっ……♡」

躊躇いもなく裏筋に強く唇を押し付け、音を立てて吸い付く。

ペロペロと舌で舐め回し、あつという間に亀頭に残っていた精液を舐め取った。

「ん、ちゅっ♡ ちゅっ♡」

唇をにゅつと伸ばし、卑猥に歪めながらも鈴口から残りの精液も啜り上げてくれる。

その間にも、ユウカの指先はフェザータッチで竿と袋を這い回り、私の勃起を促し続けていた。

もちろんそのラブコールに答ええない訳はない。すぐにフル勃起を取り戻すと、ユウカの口内に精液の残りを吐き出した。

それを当たり前のように飲み下し、ニンマリと品のない笑顔を浮かべながらもユウカの唇が竿を下に下っていく。

根本を通り過ぎ、玉袋に軽くキスし、更に下へ。

そして、私の尻肉がユウカの親指によって左右に開かれ……肛門にユウカの舌がねつとりと押し当てられた。

「れう♡ んちゅっ♡」

つぶん、と肛門に侵入したユウカの舌がうごうごと這い回る。

一発目よりも強い勃起を促され、シコシコと手コキまで加えられて我慢汁がダラダラと流れ落ちた。

ユウカは私の尻に鼻面を埋没させ、限界まで舌を入れて先端で何かを探している。

ぐっ、とツボを押された感覚と、限界を超えて勃起する痛みにも似た興奮が下半身から湧き上がる。

2度3度と繰り返され、勃起しすぎて亀頭が一回り大きくなってしまったような感覚に襲われた。

「んじゅるっ♥ 予測通り、かんぺきく♥」

目を細めて笑うその顔は、イタズラを成功させたように満足げだ。

お勉強の成果により前立腺マッサージを覚えたユウカは、ヒナに続いて2番目に私に披露してくれたのだった。

「さ、次イきましょう、先生♥」

今度は私に背を向けて、大きなお尻を突き出した姿勢でまたがるユウカ。

私の膝に手をついて、がっしりとソファに踏ん張ってチンポを入れながら腰を落とした。

「おっっ♥ おほおっ おおお……♥ さつきより、おつきいい……♥」

腹の底から絞り出すような低めの声を上げ、眼の前のユウカの肛門もヒクヒクと気持ちよさそうに震えていた。

私も前立腺マッサージを受けて我慢できなくなっているの、ユウカの尻をがっしり掴んで持ち上げる。

ぎっし、ぎっし、とソファのスプリングを生かして、和式便器でするときのように踏ん張ったユウカを下から犯していく。

「んおっっ♥ おっ おう♥ こ、こしゅれるっ♥ いつもより、オマンコひっつかかれちゃう♥」

まだまだ処女の面影を残すマンコに轍を刻むように、亀頭のカリで膣ヒダを引つ掛けながら腰を振った。

ユウカは常に軽イキしているように膣を締めているため、いつもより大きくなったカリの引つ掛かりもまた激しい。

生セックスならもう射精感がこみ上げているほどの激しい腰振り、ペースも何もなく愛欲のままにお互いを求め合う。

まだまだお昼にもなっていない頃から、こつてりとしたセックスを繰り返していた。

ぬちゃ、ぬちゃ、ぬちゃ、と粘質な音を響かせながら、何も考えずにただ腰をふる贅沢に浸る。

「ふっ♥ふっ♥ふっ♥」

ジョギングの時のようにユウカの呼吸は規則正しく、チンポから与えられる快楽を一欠片も逃すまいと言葉を発することも忘れて没頭していた。

眼の前でヒクヒクと震えるユウカのアナルに愛液をまぶし、指を沈める。

「んっ♥」

きゅんきゅんと2回締められ、言葉もなく了承された。最初からアナル責めもしていたかのようにユウカがアナルも膣もリズムミカルに締め、私を歓迎してくれる。

大きな尻がアナルに指を咥えこんだまま私の手ごと振り回し、膣穴にぱっくりとチンポを飲み込み込んで腰を上下し続ける様は別の生き物であるかのようにグロテスクでもあり、女体の神秘をも感じさせる。

膣から垂れる愛液は白濁して泡立ち、メスとしての愛情を精一杯燃え上がらせていた。

ムラムラとその胎の一番奥で射精したい気持ちが湧き上がり、唐突にスパートをかける。

「おっ♥きゅ、に、はげしっ♥だめっ♥これ、わたし、さきにイっっちや♥」

非常事態に言葉を思い出したユウカだったが、激しく突き上げられながらなのであえぎ声と大差ない。

パン、パン、パンとリズムを取る拍手のように大きく部屋中にセックス音を響かせながら、トドメの腰を叩きつけた。

「あーっっっ♥」

地上にまで届いてしまうのではないかと思うほどにユウカのイキ声は大きく、盛大に潮まで吹いて激しく絶頂する。

前に崩れそうなその体を抱きよせて私にもたれさせると、ぐったりと全身を脱力させて汗まみれのユウカの身体を抱きしめる。

「はあ……♥ はあ……♥」

首だけで私に頬ずりしてくるユウカを抱きしめ、その膣奥でダラダラと射精する。

ユウカの手がゆるゆると下腹部を撫で、私のチンポを愛おしげに労ってくれた。

ぴびぴつ、と電子音に我に返ったユウカが、ガニ股で立ち上がりチンポを抜く。

「ああ、もうお昼になっちゃった。先生、ご飯にしましょう」

汗にまみれた全裸で、ジョギングした後のように爽やかに微笑むユウカ。

「いいね。お昼のお弁当はなにかな？」

「えへへ……見てのお楽しみですっ」

普段より少し幼い位にはしゃいだ笑みを見せ、全裸の勃起乳首を見せつけながら冷蔵庫から弁当箱を取り出す。

私も風呂の追い焚きタイマーを入れて昼からのセックスに備えながらもレンジの音を待った。

「あつ、先生！ ここ、青あざになっちゃってる……ご、ごめんなさい！ 私が力を入れすぎたから……」

全裸で食べさせあっていると、ふと私の腋の下を見たユウカがそれを見つけてしまった。

「いいんだよ、ユウカがそれだけ一生懸命になってくれたってことなんだから」

「うう……次はちゃんと加減します」

「うん、それでいいと思う」

そして、楽しい昼食を経て風呂で汗を流し、またセックスを始める。

「あつあつあつ♥」

こんどは私が上になって、ユウカをガツガツと犯した。

何度も絶頂を経たユウカの膣が、そろそろ初心者とは言えないうね

るような締りで私を歓迎してくれる。

「ユウカの締め方、すごく良いよ」

「ふふっ♥ 先生のおちんちん気持ちいいから、もう覚えちゃいました♥」

猿のように激しすぎる性欲を午前で発散したためか、恋人同士のように余裕のあるセックスをすることが出来た。

ユウカの胸を揉みながら正常位でまったりと膣を使う。

ユウカからも胸板に指を這わせられ、時に乳首を指先で転がされてチンポを痙攣させてしまった。

おしゃべりするように気軽にセックスでコミュニケーションを取りながらも、ジワジワとラストに向かって理性を蕩かし腰の振りに力が籠もっていく。

「んっ♥ んっ♥」

私の下のユウカが眉を寄せ、視線が私を見ているようで見ていない、セックスに没頭している顔つきへとグラデーションのようにゆっくり変貌する。

むっちりした脚が持ち上がり、私の腰に絡んで射精を待ちわびる体勢へと移行する。

「そろそろ、イきたい?」

こくっ、こくっ、と言葉もなく何度も頷き、膣を締めて返事をするユウカ。

可愛らしい態度に笑みが溢れる。

正常位からさらに密着し、屈脚位……種付けプレスへと変えてユウカの好きな一番奥をほじくるように腰の角度を一回一回変えて突きこんだ。

「あゝっ♥ それ、すきっ♥ すきいーっ♥」

あられもないよがり声を遠慮なく響かせて、ユウカが悶える。

「すきっ♥ すきっ♥ すきいいんっ♥」

男への媚をそのまま音にしたような、ひたすらに甘ったるい声音でユウカが愛を叫ぶ。

その媚を耳から流し込まれた私も、ユウカの望み通りに勃起を促さ

れて必死に腰を振る。

「せんせいっ♥せんせいっ♥せんせいっ♥」

鼻にかかった涙声に変化していくのを聞きながら、一番奥を高速で痙攣するように擦りあい、射精感に身を任せる。

「うん、愛してるよ、ユウカ」

耳元でそう呟いた途端、ユウカの膣が握るように締り……

「すきいいいいいいっ♥♥♥」

脳を蕩かす甘い声を聞きながら、同時に絶頂した。

べったりと密着しながら、3発目とは思えない大量の精液を吐き出す。

「先生……♥」

耳元で、大分理性のある声でユウカが私を呼んだ。

「好きです、先生……♥」

「ありがとう、ユウカ」

ゴムがあることがもどかしそうに、ユウカがくねくねと腰をゆすり精液を一滴のこらず絞り出そうとしていた。

はむ、と私の耳たぶを唇で食み、ねっとり舌を這わせながら愛欲に蕩けた言葉を紡ぐ。

「私、絶対先生の子供産みますから……♥先生に恋人が居ても、他の

人と結婚しても……絶対絶対、産みますから……♥」

「うん」

「皆のことも、私のことも……甘く見ないほうが良いですよ……♥」

先生の子供だけで学校出来ちゃうくらい、沢山子供を作りましょうね……♥」

ちゆる、と粘っこくユウカの唇が離れ、私と見つめ合う。

残り火のように熱情が揺れてはいたが、ユウカの瞳はまっすぐに私を見つめ、勢いだけではないと言外に告げている。

「楽しみにしてるよ」

「ええ♥ぜったい、逃しませんからね……♥」

溺れるほどの愛情を子宮口マッサージュで育てつつあるユウカにゴ

ムを始末してもらい、  
またもセックスを始める。

外で月が登るまで、  
2人きりで腰を打ち付けあつて汗を流すのだつた。

## 良いゲームのための経験（モモイ）

ミレニアムで一仕事終え、ゲーム部の部室でも覗いてみるかとかってみた。

「あゝー……あゝあゝあゝー……！」

ジタ……ジタ……ジタ……と虫みたいにうつ伏せになったモモイが腕をワサワサ動かしている。

「何してるの、モモイ？」

「うひゃあっ!？」

びくう! と痙攣し、モモイが身体を起こす。

跳ねた時にピンクと白の縞パンが見えて、チンポがイライラしてきた。

トレードマークの猫耳ヘッドホンを外した姿は、眉を下げた表情と相まってどことなくしおらしい。

それに、なんだか今日の部室は甘酸っぱいような女の子の体臭が濃い気がする。

「な、なんだ、先生か……脅かさないでよ!」

「ごめんごめん。なんだか大変そうだね?」

「うん……シナリオを今すぐでも作り出さないといけないんだけど、全然まとまらなくて……休日なのに一日中悩みっぱなしだよ」

涙目のモモイに近づいて、腰を下ろした。一日中ここで唸っていたから匂いが籠もっていたのか。

「他の子たちは?」

「ユズはバイト、ミドリは買い物、アリスは冒険で誰も居ないよ」

「そうなんだ。一人で頑張ってるんだね、モモイ」

「そうなのー! 頑張ってるけど全然だめなのー!」

モモイは両手を上げてお手上げポーズだ。

「うーん、じゃあ気分転換をしてみる? 外を歩くとか」

「もう3回位やったから脚が疲れて来たし、これ以上やったらぐっすり眠っちゃうそうだからヤダー!」

どうやら相当行き詰まりを感じているらしい。



「ううー、先生ー助けてよー」

そう言いながらモモイがしなだれかかってくるので、これ幸いと抱き上げて胡座をかいた脚に載せた。

「ひやつ!? え、あ、あの、先生?」

「モモイも参っているみたいだし、今日は特別ね」

そう言つて、お姫様だつこのように横抱きにしたモモイの髪を梳くように頭を撫でる。

「お、おお……悩んでてちよつとラッキー♪」

モモイも恥ずかしがったりせず、遠慮なく私の胸に頭を載せてくつろぎ始める。

「はー、そこそこ、きもちー……」

目を閉じて私にしがみつくモモイの、無防備に力の抜けたお尻の感触がチンポのイライラを増幅する。

「んー、やっぱ、主人公とヒロインの恋愛を軸に……でもなあ……」

うにや、うにや、と口の中でつぶやきながらほっぺをグリグリ押し付けてくるモモイ。

「仲間との絆の兼ね合いがなあ……んんん……んああ……!」

「あー! もー! まとまんない!」

急にのけぞつて叫びだすモモイ。本当にドツボにハマっている。

「やっぱ、アレか……先生?」

ちらつ、と私を上目遣いに見るモモイ。

「どうしたの?」

「先生は……今日は何でも私に協力してくれる?」

「うん、もちろん」

「じゃ、じゃあ……この間の、恋愛シミュレーションの続き、してみても良いかな……?」

ウルウルと瞳を揺らし、モモイが迫ってきた。

「いいよ。でも、始めてしまったら途中では止まらないからね」

「えっ、なにそれ? せ、先生、どこまでしちゃうつもりなの!?! うう、

ドキドキ……でも、良いよ。私に、恋愛体験の……お試し、させて欲しいな」

「じゃあ早速」

セックスのために、ゲーム部部室のカーペットにモモイを押し倒す。

一日中ジタジタしていたのか、カーペットの上は珍しく片付けられてスッキリしていた。

「わ、わっ……」

モモイは今からセックスをするハメになるとは全く思っていないため、素直に押し倒されてくれる。

「モモイ……」

鼻先が触れそうなくらいに近づき、見つめ合う。

モモイの顎から指を滑らせ、首筋や耳の輪郭をフェザータッチで撫でていく。

「ん、く、う♥」

若く敏感な肌をしたモモイは、これだけでも甘い声を上げた。

「あ、あの、ちょっとこれは、対象年齢上がりすぎかなって、んっ♥」言葉を無視して愛撫を続ける。

じいっと見つめ合う視線に耐えられず、モモイが顔を真っ赤にして目を瞑った。

その隙を逃さず唇を奪う。

「んっ!? んんんーっ!?」

モモイが目を見開いて騒ぎ出すが、唇を吸って舌で揉んで愛撫し、モモイの身体を強く抱きすくめると混乱で抵抗が弱まる。

ちゅぽ、と少しだけ口を離し、モモイに息継ぎをさせた。

「せ、せんせ、こ、これ、キ、スんううっ♥」

混乱している所にまたキスをする。半開きになった口に舌を割り込ませ、モモイの小さくて熱いくらいの口内を蹂躪する。

「んんっ♥ちゅく♥ふううんっ♥」

モモイが何かを喋ろうとしても、その舌の動きを利用して粘膜を絡み合わせ、快感にすり替えてしまう。

酸欠と相まってモモイが騒ぐのを諦めて私のディープキスを受け入れ始めるのが、腕の中の小さな身体から伝わって来た。

「はむっ♥ちゅっ、ちゅっ♥んふう♥」

それでもまだ続けると、モモイからも私の唇を吸ってくる。小さな手ががりつくように私の胸元を握りしめ、たどたどしい舌使いで懸命に舌と舌を絡めるダンスに興じようとする。

私は、モモイの薄い胸に手を置いた。

「んっ……♥」

とろんとしていたモモイの瞳に、怯えと期待の複雑な色合いが交じる。

さするようにゆつくりと手を動かすと、ギュツと強く目を瞑った。セックスOKの合図だ。

私はモモイのネクタイを緩め、服のボタンを一つ一つ外していく。すぐにシャツがあらわになり、モモイの幼児のような甘ったるい体臭が鼻腔に届いた。

薄いシャツの向こうに薄ピンクの縁とアニマル柄のスポブラが透けて見える。

平たいがかすかに膨らんでいるモモイの胸の表面をなぞるように指を這わせ、モモイの小さな乳首を探り当てた。

「ん、んっ♥ううんっ♥」

ぴく、ぴく、と肩をすくめ、快楽をどう受け止めていいか解らず困惑するモモイに、乳首快楽をじっくりと教え込む。

混乱のさなかにスカートのホックを外し、さっと脚をくぐらせてパンツ一枚にしておく。

シャツの下から手を滑らせ、めくり上げた。スポブラも一緒にめくり、モモイの薄い胸が露わになる。

虫刺されのように控えめな乳首は、ミドリに瓜二つだ。

肌色を薄くしたような乳首は、私の弄った方だけ赤く充血しもつとして欲しいと主張している。

首元までシャツを上げると、唇を離れた。

「ぶあっ♥はーっ、はーっ♥」

モモイがキスでいきかけていることも、手にとるように分かる。

汗とは違う甘酸っぱい匂いがモモイの股間から漂い、パンツ一枚の

内腿をもじもじと擦り合わせていた。

意識が曖昧な内にシャツを脱がせ、逆側の乳首に吸い付いた。

「んっ♥ は、ああっ♥」

鼻にかかったような甘ったるい声は、普段決して聞くことのないモモイの善がり声だ。

ちゅうちゅうと吸い付いている間に、モモイのパンツをさつと抜き取ってしまう。

これで、残りは靴下だけの全裸になった。

「だめっ♥ だめだよ、せんせいっ♥」

「モモイ、言ったはずだよ。途中では止まらないって」

「だ、だってここまでやるとは思わないじゃん!? と、とにかくこれいじよ、うっ♥ あああ♥」

モモイはもう勃起乳首を弄られ、吸われ、スジマンが愛液でテラテラと濡れている事さえ見せてしまっている。

これで男が止まるはずもないということを知らせる教育として、乳首を吸ってクリトリスを弄り始めた。

「それだめっ♥ それだめっ♥ それだめっ♥」

皮の上からコロコロとクリトリスを優しく転がすだけでモモイは腰砕けになり、快楽に翻弄され壊れたラジオのように同じ言葉を繰り返す。

指を一本、モモイの割れ目に潜り込ませる。

外陰唇の中は熱々の愛液に満ちて、ぷりぷりの弾力をしたヒダが指を歓迎してくれた。

「あっ♥ あああっ♥ あーっ♥」

オナニー経験も浅いのだろう、モモイは指一本動かせずにされるがままで快楽を叩き込まれる。

そして、前兆も何もなく全身をカタカタと痙攣させて、もしかしたら人生初めての絶頂をキめた。

「あ、ふぐっ♥ ん、っぐ♥ うっ♥ う、うううう♥」

低く、唸るようなガチキ声を堪能しつつ、私もズボン脱ぐ。フル勃起したチンポをモモイの小さなぷにマンに宛てがい、我慢汁とモ

モイの愛液を混ぜ合わせて小陰唇と亀頭で濃厚なキスを交わす。

「はっ、はっ、はっ♥」

モモイは絶頂の波からなかなか降りてこられず、時折身体を痙攣させるだけで私のチンポにも反応がない。

その間に溢れ出る愛液をチンポに塗りたいく、モモイの太ももを抱えて閉じさせ、素股して待つ。

「はあ……はあ……って、ちよつと！ さっきから人の体で何してんの、さあ♥」

眉を怒らせて私に怒鳴ろうとしたモモイだが、腰を強く引いてから突き、クリトリスを刺激しながらチンポを滑らせるだけでモモイの語尾は甘く爛れてしまう。

「モモイが起きるのを待ってたんだよ、準備しながらね」

「じゅ、準備って、やっぱり……」

「もちろんセックスだよ」

「やっぱりー!? あ、あの、先生、謝るから、こ、ここまでにはきゅっ♥」

ヌチャヌチャ！ と音を立てながらクリを虐めて黙らせる。

「さあ、入れるよ、モモイ」

「あ、う……はい……♥」

瞳を潤ませて、強引なレイプを和姦にしてくれるモモイ。

身体を屈ませて顔を近づけると、目を閉じてキスを受け入れてくれた。

小さな小さな穴に私のチンポが押し付けられ、ピンク色の膣肉が力付くで拵げられていく。

「う、いひやいいい……」

キスしながらモモイが呻くが、穴をなんとか拵げたのを確認してから強引に腰を突き出し、力付くで竿まで押し込んだ。

「あ、っ、が……ー！」

ご、つ、とカーペット越しに床に頭をぶつけた音さえするほど勢いよく、モモイがのけぞる。

「い、っ、つ、つたああーっ！ これ、いった、いったあああ

あー！あー！

うー、うー、と唸るモモイだが、それに関係なく腰を押し進め、モモイの浅い膣の奥に亀頭を押し付けた。

「だから、痛いってばあー！ し、しぬ、しんじやうって！」

色気の欠片もなく喚くモモイ。

小さな膣は締りがキツく、握りしめるように全方位から圧力をかけ、ピッタリとチンポに吸い付いてくる。

「ごめんね、でも最初は一気にやらないと痛いのが長引くからさ」

謝りながらモモイのクリトリスをゆつくり弄る。

「あっ ♥ ん…………♥ それ、けっこう、良いかも…………痛みも薄れる感じ…………」

モモイがそう言うてくれたので、じつくりと続けることにした。

裸で向き合う事に耐えられなかったのか、乳首が丸見えなのもお構いなしでモモイは腕で目元を隠して顔を背ける。

「ふう…………♥ はあ…………♥」

何十分後か、すっかり冷めていたモモイのお腹にじつとりと汗が滲み出す。

膣の中も、単調な締め付けから呼吸のようにゆつたりとした緩急が自然につき、女の反応に変化し始めていた。

「どう、もう大丈夫、モモイ？」

「ん、うん…………♥ 先生の、なんか…………さつきより大きくなってない…………？」

確かめるように、モモイの膣がきゅ、きゅ、と締まる。

「モモイとセックス出来るのが楽しみだからだよ」

「うー…………先生の、ヘンタイ…………♥ 今度こそ、私も気持ちよくして、よね？」

ちら、と目元を隠す腕の下から一瞬だけ視線を通して、モモイがセックスへの期待に満ちた雌の顔を見せる。

それが私のチンポに力を漲らせた。

「んっ ♥ な、なにになに？ お腹のなか、持ち上げられてる ♥」

勃起によりモモイの膣が腹の方に寄せられ、子宮が持ち上げられ

る。

それを追ったモモイの腰が持ち上がるのをがっしりと手で固定して、ピストン運動を始めた。

軽くてキツイモモイの身体はまるでオナホのように自在に角度をつけられる。

まだ膣ヒダも育ちきっていないツルリとした膣内が、熱々の愛液で潤って動きは意外に滑らかだった。

なんの工夫もない締まるだけの膣穴ではあるが、大きく拡げられたモモイの股に私のチンポがめり込み、みつちりと膣口が円形に拡げられた光景は射精欲を煽り立てる。

「え、へへ、どう？ 先生？ 私の身体、気持ちいい？」

モモイも膣性感には慣れていないのだろう、ずぼずぼと犯されながらも私の反応を気にする程度の余裕を取り戻している。

「ああ、とっても気持ちいいよ」

モモイの膣はよく締まるため、このまま腰を振っていれば射精は出来るだろうが……それではモモイが気持ちよくなれない。

先程の反応を思い出して、気持ちいい所を探ることにした。

モモイの薄いお腹に手を当てて、子宮の位置を探る。

チンポを上下左右に振って腹の中で膣の奥につながる子宮を引き回し、良い位置に持っていく。

ぐんっ、とチンポに力を入れて腹に押し付けると同時、外からも子宮を掴んだ。

「んっ♥ なに、今の、ぞくってした♥」

「モモイは、これが好きなの？」

薄い腹ではほんの少し押し留めるくらいしか出来ないが、なんとか外からも刺激を与えつつ、膣奥の子宮口を亀頭の力りで引っ搔いて刺激する。

「ぴりって、するっ♥ そこっ♥ あ、またっ♥」

いつしかモモイは、肩を床に押し付けて腰を浮かせ、一番子宮口を虐めやすい角度へと自分から調整していた。

破瓜の血もすっかり愛液で洗い流された膣を自ら差し出し、足を踏

ん張って自分から積極的に腰を振ってチンポを啜える。

短い間に成長を遂げたモモイに興奮を隠せず、チンポのイライラが金玉を疼かせる。

「はあっ♥ これ、これっ♥ 好き、かもっ♥」

何度も言葉を詰まらせて、膣イキクエストを夢中になって2人プレイする。

「はっ♥ はっ♥ はっ♥」

ぬち、ぬち、ぬち。

日も落ちてくる頃合いのゲーム部部屋に、ひたすらセックスする荒い息遣いだけが響く。

汚れない乙女だったモモイの子宮口は私の我慢汁に塗れ、放っておけば妊娠の危険がある精子がドンドンと侵入していることだろう。

それを意識することもなく、純真にセックスの快楽を求めてモモイが腰を振り、膣を締め、一步また一步と処女セックスでポルチオアクメをキメる淫乱にジョブチェンジしていく。

コリコリコリッ！ と痙攣のように細かいピストンでモモイの子宮口を的確に刺激して、私も最速で追い込んだ。

「あっ♥ なんか、きそうっ♥ すごい、すごい、くるっ♥」

腰が攣りそうになるのを堪え、ピストンを継続してモモイをポルチオアクメになんとか送り届ける。

「あ、う、あ、あーっ♥♥♥」

堪えられない快楽に、モモイがついに絶頂をキメた。

それと同時に、生膣内射精を一番奥で解き放つ。

絶頂で握るような強い締め付けをされ途中で精液を押し留められて、必死になってすべてをモモイの奥に出し切った。

「はあ、ふう、ふう……♥ あ、あああーっ!! せ、先生！ 何やってんの！ な、中に出したら赤ちゃん出来ちゃうよ!」

「ああ、そうだね。これ、飲んでおいてくれる?」

「え、なにこれ」

傍らのカバンから避妊薬を出し、モモイに差し出した。

「な、なんでこんなの持ち歩いてるのさ！ 先生、最初から私を……?」



それならそうと、言ってくれば……♥」

いつセフレを増やしても良いように常に持ち歩いているので、モモイの認識も間違っていない。

何にせよ、生で生徒と出来る折角の機会なのでまだまだ逃すつもりはなかった。

モモイに避妊薬を飲ませ、今度は抱っこのように抱えてチンポの上に載せ、貫く。

「あううっ♥ これ、ふか、すごい……♥」

モモイの軽くて温かい身体を抱きしめ、オナホのように胴体ごと上下に振って膣でチンポをしごく。

「あっ♥ あっ♥ なに、さつきより、気持ちいいっ♥」

セックスに慣れ、膣イキも覚えたモモイは短時間で急速に変わっていく自分の身体に戸惑いつつもチンポに溺れ、私の身体にすがりつく。

「あっ♥ いいっ♥ すごいのっ♥ せんせっ♥ もっと♥」

くっぽ、くっぽと粘質な水音を立ててモモイの小さな膣をほじる。すると、ふとモモイの肩越しにドアが見えた。

そのノブが回り、ガチャ、と扉が開く。

「お姉ちゃんいるー？ 進捗どう？」

ぎしっ、とモモイの身体が止まった。

カタカタと震えながら、青い顔で振り返る。

その先には、ミドリが立っていた。

「ちっ……ちがうの！ ミドリ！ これはー！」

ばっ！ と手のひらをミドリに向けて無意味な言い訳を始めるモモイに、ミドリはため息をつきながら部屋に入ってきた。

「何が違うの……先生、ようやくお姉ちゃんもセフレにしたんですね」  
買った物袋を置きながら、世間話でもするように平然とミドリが言い、モモイはぽかんと口を開けて呆気にとられていた。

「うん。モモイがしたいって言うから、全部させてもらったよ」

「……までしたいとは言っていないから！ あっ♥」

口ごたえするモモイを突き上げて、雌の声を上げさせる。

「ふーん……お姉ちゃんは始めての時から痛くなかったんだ」

全裸のモモイをしげしげと眺めるミドリに、モモイが居心地悪げに身体をくねらせる。

「ちっ、違うし！　ほんとに、メチャクチャ痛かったんだから！」

「でももう気持ちよくなってるんだよね？」

「うっ……だ、だって、先生が奥の方コシコシするの、すごくって……♡」

「私は始めての時、オマンコでちゃんとイけなかったからちよつと羨ましいな」

奇妙な雑談をしながら、ミドリがぱさりとコートを床に落としてズボンを脱いだ。

「ちよつ、え？　ミドリ？」

「どうしたの、お姉ちゃん」

展開についてこれられないモモイが目を丸くして双子の妹の脱衣を見守っている。

「なんで脱いでるの!？」

「私も先生とセックスしたいから」

「今日はあと何回かモモイに射精したいかな」

「ちえ……まあ仕方ないですね。せっかくの生セックス、先生もお姉ちゃんも、楽しまなきや♡」

あつという間に全裸になったミドリが私のもとに駆け寄り、ひざまずく。

「ん……♡」

「あー！　き、キスした！」

私のチンポをぐっぽりと啜え込みながら、モモイがミドリのキスシーンを見て指を指して驚愕した。

「お姉ちゃん、キスまだなの？」

「いや……したけど……」

「じゃあ良いでしょ。先生♡　オチンポ以外のお世話は私がしてあげますから♡」

うっとりとして情欲に瞳を濡らし、薄い身体で甘い声を上げて私の

腕に抱きついてくるミドリ。

処女の時は痛くて絶頂するどころではなかったが、最近ちゃんといけるようになって女として自信をつけてきていた。

小さなお尻をむにむにと揉み、モモイの桃尻とも揉み比べながらキツイ膣を突き上げる。

「ちよ、ちよおっ ♥ な、なにミドリともキスしてんの ♥ 私まだ、納得してな、あっ ♥」

しぶとく抗議しようとするモモイに、ちゆるんと口を離してミドリが向かい合う。

「アリスちゃんもユズちゃんも私も、皆、前から先生のセフレなんだよ」

「ええっ!? き、聞いてなーい!」

「言うようなことじゃないでしょ? 先生ならそのうちお姉ちゃんもセフレにするだろうって思ってたけど……意外とかかりましたね?」

「なかなか機会がなくなってるね。でもモモイもセフレになってくれて良かったよ」

「セフレ!? セフレってナニ!?!」

「気軽にエツチなことをする関係だよ。私達の他にももう40人以上居るし、それ以上になりたいなら諦めてセフレからにしたほうがいいよ?」

「そ、それ以上って…… ♥ いや、私は別にそんな、んつく ♥」

雑談を続けながらも愛液はとめどなくチンポを伝い、膣奥をじつくりと押し伸ばして私のチンポを深くまで受け入れる身体へとジワジワ変わっていく。

雌の声を上げる所を妹に見られて真っ赤になったモモイは、やけくそのように叫んだ。

「もうっ! 分かったよ! なる! セフレになりますっ!」

「ありがとう、モモイ。これから沢山セックスしようね」

「先生もとてもお忙しいから、待ってるだけだと全然チャンス来ないよ。『当番』が多く回ってくるように頑張ろうね、お姉ちゃん ♥」

「ううーっ、な、なんかとんでもない事を決断してしまった気がする

……」

裸で絡み合いながらも雑談がいつものような軽いノリなのは、モモイの根の明るさによるものなのだろう。

そうやってダラダラとチンポを突っ込んでかき回している内に、またもドアが開いた。

「ぎゃあー！」

モモイが叫び、マンコが締まる。

脚まで私の胴体に絡めてしがみついていた。

「あつ！ モモイ！ ついにモモイも先生のセフレになったんですね！ パンパカパーン！ ゲーム開発部は全員セフレになった！ ゴールドトロフィーゲットです！」

冒険の旅から帰ってきたアリスだった。

「あ、アリス!? ドア！ 閉めて閉めて！」

入り口からはぐっぽりとチンポをくわえ込むマンコも可愛らしい肛門も丸見えになっているだろうモモイがアリスに必死に頼む。

「おっと、アリスは便利ボタンをもう一回押してドアを閉めます！」

「ごとん、と重々しい音を立ててアリスが光の剣を入り口そばに置き、駆け寄ってきた。

「この愛液の量……モモイは始めてで絶頂したのですか？」

「そつ、そうだけど……そういう事言わないで！ 恥ずかしいじゃない！」

「そんな事ありません！ 先生はとっても上手だから、たいいのセフレは処女で膣イキをキめています！ アリスもとっても気持ちよかったです！」

「だから言わなくていいから！ あつ♥ 先生も、ちよつと腰とめ、てえ♥ あつ♥ あつ♥」

いつものゲーム部の雰囲気の中、気兼ねなくモモイとセックスをする。

感慨深く、チンポのイライラもドンドン高まっていくためもう一度生膣内射精したくなってきた。

「先生、ユズがもう少しでこっちに来るから、モモイをイカせるのはも

う少し待ってくれますか?」

「そうなんだ? うん、わかったよ」

「えっ!? わ、私3人の前でイクの!? ちょ、先生、腰の動き、やめっ  
♥ んっ ♥ そこ駄目だっ♥」

ぎよつとするモモイに深くチンポを突き刺し、子宮口をコリコリと  
カリで刺激する。

モモイの膣にはチンポが入り切らないため身体を持ち上げている  
都合上、乳首も比較的近くにあるため勃起しっぱなしのそこに吸い付  
く。

「あっ ♥ み、皆の前で乳首吸わないでったら♥」

「ふう……♥ ふう……♥ 私も最近シてないのに、お姉ちゃんずる  
いよ……♥」

「モモイは記念すべき処女セックスだから仕方ありません。アリスは  
最初のセフレとしてモモイのセックスを暖かく見守ろうと思います  
!」

「み、見守らないで、いい♥ からあ♥」

適度な強さのピストンでお互いをジワジワ高めあっていると、また  
ドアが開く。

「ふー、ただいまー……えっ!? モモイ!」

「うわー! ユズまで来ちゃった! ねえアリス、ホントに大丈夫な  
の!」

3連続で座位セックスを目撃されたモモイがテンパりながらアリスに尋ねる。

「あ、うん……大丈夫、だよ。私も先生のセフレだから」

アリスよりも先に、しっかりとユズが答えた事によりモモイの目は  
またも見開かれる事になった。

「あ、はは……もうどうにでもなーれ! 先生、もっとな強くしてよ♥  
いい加減いきたくてしようがないんだから♥」

やけくそのように私に向き直り、身体を密着させて抱きついてくる  
モモイを抱き返し、上を向かせてキスをする。

金玉で出番を待っていた精液を吐き出すべく、モモイの膣奥を細か

く突いて射精のスパートに入る。

「んっ♥ んっ♥ ちゅ、ちゅっ♥」

ゲーム部勢ぞろいで見守られる中、モモイが私と熱烈にキスしながら股間から水音を立て、絶頂へと近づいていく。

「んんーっっっ♥♥♥」

モモイと同時に絶頂し、射精する。一度目よりも深く飲み込んでくれたマンコが、強い締付けで下から上へと精液を絞り上げてくれ、モモイの小さな膣から溢れるくらいに大量に射精できた。

「はーっ♥ はーっ♥」

汗だくのモモイと抱き合って、余韻を噛みしめる。

「はいはい！ 先生、ついに皆が揃ったし、全員で乱交しましょうー！」

アリスが元気いっぱいにドスケベな提案をする。

「ちよつと、アリスちゃん。私、最近デキてないからまずは一対一で楽しみたいんだけど？」

ミドリは私とゆつくりセックスしたがっている。

「あ、あの……私、このロツカーにいつもいるから……あんまり臭いが残るようなのは、ちよつと……」

ユズは部室内セックスにはあまり乗り気でないようだが、もう上着を脱いでセックスの準備をしてくれている。

「……ふっ。あははっ」

そんな光景を見ながら、モモイは堪えきれないように笑った。

「モモイ？ どうしましたか？」

アリスがスカートを脱ぎ捨てながら首を傾げる。

「ううん、私はもう腰ガクガクだから、皆と交代するよ」

そう言って私の肩に手を当てて震える膝を伸ばし、ずるんっ、とチンポを抜き放つ。

ぼとぼとっ、とカーペットの上に精液がこぼれ落ちるのを、ミドリが私のカバンから取り出したタオルで受けた。

「わわっ、こんな出してたの？ すごっ」

腹に力を入れると、ぶりゆりゆ、と汚い音を立てて更に精液が流れ

た。

「ふう、流石に部室の中が精液の臭いだと他の人にバレちゃいそうだし」

「ユウカもネル先輩もセフレだから、大丈夫だと思います！」

「まああんまり他の人は来ないけど……」

「わ、私の生活空間なので……！」

裸のまま、必死になって精液と愛液を処理するユズ。

モモイから出てきた私の精液に顔を近づけ、臭いをかいでうっとりするミドリ。

全裸になって後ろから私に抱きついてくるアリス。

そんな皆を微笑ましく眺めながら、全裸に靴下だけのモモイはノータイプの端末に向き合いカタカタと文字をうち始めた。

「主人公と皆が恋愛する……やっぱハーレムものは定番でしょ！今の私なら書ける！」

ミドリにフェラされ、アリスとユズのマンコのに指を入れながら、その背中を応援するのだった。

## 性の6時間（セリナ）

「それでは皆さん、今年も残り僅かですが、頑張りましょう。メリークリスマス！」

「メリークリスマス！」

そんな模範的な締め挨拶で、正義実現委員会のクリスマスパーティーは幕を閉じた。

私のセフレであるツルギとハスミとマシロも、そんな事はおくびにも出さずにこやかに会釈して去っていく。

私も、先生としてその場で生徒たちを見送り……そして、救護騎士団の皆が残された。

「その……先生。この度は大変申し訳なく……」

色々とやらかしてしまつたミネが更に謝ろうとするのを留める。

「今回の事はもう謝つたから、これ以上は無しだよ」

「……はい。承知しました」

後ろのセリナとハナエが苦笑するのを視界に収めつつ、話題を変える。

「皆はこれからどうするの？」

「わ、私はこれからボランティア活動をしてから帰る予定です」

私の意を汲んでくれたか、セリナがすぐに答える。

「私はサンタさんをお迎えする準備があるので家に帰ります！」

にっこりと満面の笑みでハナエが続いた。

「私も、セリナと同じくチャリティーイベントの監督をしに参ります」

「そっか……じゃあ、セリナのボランティアと言うのを私も手伝って

良いかな？」

「えっ？ で、でも……よろしいのですか？」

私を見つめるセリナの目はキラキラしていて、喜びが伝わってくるようだ。

「ふふ……とつても嬉しいです。では先生、ミネ団長。行きましようか」

空は既に赤から濃紺へのグラデーションを描いている。



街もクリスマスのイルミネーションが灯り始め、まさに本番が始まりつつあった。

途中でミネと別れ、セリナと共に持ち場に付く。集まった子供にプレゼントを渡すボランティアで、私の仕事は受付のセリナにプレゼント置き場から運んで渡す事だ。

にこやかな笑顔を浮かべてプレゼントを渡すセリナに、子供たちも素直に従っている。

時折列に横入りする子が現れるが、そんな事態にも落ち着いて諭し、大人しく並ばせる。

「さすがはセリナ……」

「いえいえ、これは救護騎士団のチャリティー活動の一部でもあるので。これくらい、当然です。私は救護騎士団なんですから」

私に持ち上げられて照れながらも、サンタを信じる子供たちの夢を守りたいと言って笑顔でプレゼントを配るセリナはとても生き生きして見えた。

2人でせつせとプレゼントを配ることしばらく、プレゼントを配り終えた。

とっぷりと日も落ち、街行く人も増えつつある。

「ふう、お疲れ様でした。先生」

「セリナの方こそ。お疲れ様でした、サンタのお姉さん」

サンタといえばヒゲではないのか、と言われて子供たちに使った方便を持ち出すと、照れくさそうに笑った。

「もう、先生まで……えつと、忘れ物は……救援物資も入ってるし……」

セリナと私は残った荷物をまとめて確認し、終了報告をするために共に歩き出す。

報告をしたボランティア本部ではミネと会うことは出来なかったが、担当の子に宜しく伝えておいてくれるよう頼んで仕事を終えた。雑談をしながら歩いていると、寒空にいつの間にか雪が舞っている。

「あれ？ 先生、雪です！ ホワイトクリスマスですよ！ は、はく

しゅんっ……！」

年相応にはしゃぐセリナが、くしゃみをした。

その姿を見て、鞆からマフラーを取り出す。セリナへのプレゼントとして用意したものだ。

「はい、セリナ。クリスマスプレゼントだよ」

少し風情がないが、そのままセリナに巻いてあげた。

「せ、先生？ このマフラーを、私に？」

寒さと……照れが相まって、セリナのほっぺはりんごのように紅く色づいた。

「で、でも……今日の私はサンタさんですよ？ 本当は、私がプレゼントを渡す方なのに……」

少し戸惑いつつも、嬉しさを隠しきれないように目を細めるセリナ。

「サンタさんにも、ご褒美があってもいいよね」

「そうおっしゃるなら……ありがとうございます、大切にしますね」

そう言つて、につこりと笑顔を浮かべるセリナ。

マフラーをきゅつと握りしめ、口元を隠しながら……セリナが近づいてくる。

「あ、あの！ 先生。今夜は……先生の、お側にいたいです」

先程とは打って変わって、恥ずかしげに顔を赤くして、媚びたような上目遣いのセリナに、チンポのイライラが急上昇する。

私たちは、売れ残りを捌こうと必死なケーキ屋で小さなケーキを買い、手をつないでシャーレへ向かった。

流石に生徒が誰もいないシャーレビルを、指一本一本を絡めた恋人つなぎで手を繋いだ私達が進む。

言葉もなく、誰の目も届かない地下居住区へとセリナを連れ込んだ。

「あつ、クリスマスの飾り付け……」

ささやかな物だが、部屋はクリスマス仕様に飾られていた。

チラリと私を見るセリナの視線が期待に揺れている。もちろん、こ

ここで昨日ヒナとパーティとセックスをするために飾ったなどと言うわけは無い。

居住区の空調は外から動作開始を指示しており既に温かい。お互いコートを脱いで、テーブルに付いた。

「セリナ、座って待ってて。お茶を淹れてくるから」

「そ、そんな、先生にしていたかくわけには！」

「良いから良いから」

白いセーターにミニスカートのセリナの肩に触れ、座らせる。

ほんの少しの手の動きでセリナの小さな肩を撫でると、顔を赤くして俯き大人しく待っていてくれた。

そして、ケーキのためのナイフとフォーク、紅茶のカップをにお盆に乗せて持つてくるとセリナの右隣に座る。

「じゃあ改めて、メリークリスマス」

「め、メリークリスマス……」

4分の1程度に切り分けたケーキを食べる。

セリナは顔を赤くして、こちらをチラチラ見ながらゆつくりと食べていた。

タイツに包まれた太ももに置かれた手が、時折きゅつと握りしめられている。

「セリナ、大丈夫？ 部屋は寒くない？」

そう声をかけながら、セリナの細い腰を抱き寄せる。

「あっ……せ、先生……♥」

セリナはなんの抵抗もなく私に身体を預け、熱っぽい視線で見つめ返してくる。

「は、はい……大丈夫です。ありがとうございます……」

そう言って、そのままケーキを食べ始める。腰の辺りをねつとりと撫で回す私の手に、太ももがピクピクと反応していた。

「うん……美味しい。ずずっ……ふう、たまには家でケーキを食べるのもいいね」

「ええ……先生と2人で食べると、とても……甘い、気がします……」

セリナと私は身体を密着させ、少しずつケーキを食べる。

「セリナ、その姿勢だと食べづらいでしょ？ 私が食べさせてあげようよ」

いつの間にか頭を私の胸板に載せ、殆ど抱きつくような姿勢になっているセリナの腰を抱き寄せながらそんな事を言う。

「お……お願い、しても……いいでしょうか……♡」

いつもなら絶対にありえない、セリナの甘えた仕草にチンポのイライラが高まる。

「はい、あーん」

「あ、あー……♡」

セリナの瑞々しい唇が開かれ、美しいピンクの口内が無防備に晒される。

そこに、私がフォークでケーキを運び……ぱくんと飲み込まれて行った。

「んっ……♡ ん……♡ 美味しい、です……」

顔が赤くなりすぎて酔ったようなセリナにチンポのイライラを促進されつつ、より大胆にセリナの腰を撫で回す。

「じゃあ、今度は……私が先生に、食べさせてあげたいのですが……」

「ありがとう、セリナ。じゃあお願い」

セリナは私のケーキをフォークで差し出し、食べさせてくれる。

「美味しい、ですか？」

「うん。セリナが食べさせてくれると格別だね」

「先生……♡」

キラキラと、セリナの瞳が輝いている。

それはセックスを待つメスの、発情の輝きだった。

私の手はより大胆に、タイツに包まれたセリナの太ももを撫で回す。

セリナは顔を真っ赤にしながら、ゆっくりと私にケーキを食べさせ、自分も食べさせてもらい、濃厚なスキンシップを取りながら食べ終えた。

「セリナ、口元にクリームが付いてるよ」

「えっ、あ……」

ハンカチを出しかけたセリナの頬をに手を当て、こちらを向かせる。

何か反応をする前に、セリナの唇を奪った。

「んっ、ちゅ……♡」

セリナのぷるぷるの唇をねっとり舌で撫で、上品な味のクリームを舐め取る。

「あっ……」

クリスマスケーキ味のファーストキスを終え唇を離すと、セリナが切なげな声を漏らした。

サラリとピンク色の髪を指で退けて、その耳元でささやく。

「一緒にお風呂に入ろう」

セリナは大きく肩を震わせて、目を見開いて私を見た。

しばらく口を開けないでいたが、決意と共に生唾を飲むと、

「はい……お待ちして、います……♡」

私とセツクスする返事を口にした。

おぼつかない足取りで風呂場に行くセリナを背に、残りのケーキを冷蔵庫に入れて食器を片付ける。

脱衣場に行くと、セリナはこちらに背を向けてブラとショーツだけの姿でタイツを脱ごうとしている所だった。

「あっ、せ、せ、先生っ!?!」

「どうしたの?」

お尻を突き出した姿で固まるセリナに近づき、小さくてキュツと締まったお尻を撫でてあげる。

「ひゃんっ♡」

タイツとショーツ越しの暖かく柔らかなお尻にチンポのイライラも開放を待ちわびている。

「さ、セリナも脱いで」

そう言ってさっさと服を脱ぎ、セリナの前でフル勃起しつつ全裸になった。

「きゃっ……!?!」

バツチリと勃起チンポを見てから、赤くなった顔をそらすセリナ。

震える手で下半身裸になると、むわりとメスの膣えた臭いが脱衣場に広がった。

ぱさりと脱衣かごに落とされたショーツを見ようとすると、セリナが顔を真っ赤にしてセーターの下に隠してしまう。

俯いたままでブラも外し、かごに落とす。乳首と股間を手で隠しながら、私の前に立った。

「綺麗だよ、セリナ」

震える肩に手を置く。真冬の脱衣場は暖房があっても肌寒く、セリナの肌の暖かさが心地良い。

ゴクリ、とセリナが固唾を飲む音が聞こえた。

腕で身体をかばうセリナを、正面から抱きしめる。勃起チンポが清らかなセリナのお腹に突きつけられ、セリナの身体が私の腕の中で跳ねた。

「あつ、熱い……♥」

思わずといった感じで漏れ出たセリナの声は、期待に甘く蕩けている。

身体を離すとセリナのお腹と私のチンポの間に我慢汁の橋がかかった。それを気にせず、暖房と共に風呂を沸かすよう指示しておいたため既に用意された風呂場へ向かう。

チラチラとチンポに視線を感じながら、細い腰を抱き寄せセリナの尻を優しく揉んで歩く。

たった数歩だが、セリナの股間からはかすかな水音が聞こえた。

「あう……」

それを気にしているのか、私の腕の中で縮こまるセリナ。

「セリナも私とシたいって思ってくれてる証拠だね。嬉しいよ、ありがとうセリナ」

風呂のマットに立ち、勃起チンポをセリナのお腹に押し当てながらセリナの陰毛の生え際を指でなぞる。

薄くも柔らかい毛が心地よい。セリナの太ももがキュツと力み、緊張が手に取るように伝わった。

「さあ、まずはお風呂に入ろう」

「は、はい……」

カチコチに固まったセリナをまるで介護のようにスケベイスに座らせ、風呂桶にお湯を汲み肩から少しずつつかけてあげる。

「どう？ 熱くない？」

「あつ、あ、えつと、せ、先生に、そのようなことをさせるわけに、わわっ!？」

緊張で膝が笑っているセリナが立ち上がるうとして、なにもないのに転びかける。

「おつと」

それを見越していた私は、前に倒れかけるセリナを抱きとめ、胸を揉み乳首を指で弾いた。

「あつ♥ んっ♥」

無防備な姿勢でされるがままになるしか無いセリナを抱きかかえながら、今度は自分がスケベイスに座りセリナを膝の上に乗せる。

「っ♥」

尾てい骨にチンポを押し当てられた形のセリナが震え、私が抱きしめる力に従ってもたれかかった。

「私が洗ってあげるね」

「うう……お、お願いします……♥」

セリナごとお湯を被り、2人ともあたたまる。

ボディソープを手に取り、無遠慮にセリナの身体を弄り始めた。

「あつ♥ はんっ♥」

鼻に抜けるような声を上げ、セリナが愛撫を受け入れる。

まずはほっそりとしたお腹、そして上へ。

控えめだがセリナのおっぱいはツンと尖っており、身悶えに柔らかく震えても形が崩れることはない。

髪の毛より濃い赤ピンクの、ぷつくりと小指の先ほどに勃起した乳首が、白い肌にくつきりとコントラストを描いている。

「どうかな？ 痒いところはない？」

「だっ……だい、じょうぶ、ですっ♥」

にゆるん、にゆるん、と私の手が臍と鎖骨までを往復し、勃起乳首

を優しくつつまんでクリクリと刺激する。

「うんっ♥ あああっ♥」

よく響く風呂場に、セリナのメス声が響く。私のチンポも我慢汁を垂れ流してセリナの腰の裏をヌルヌルにしていた。

「はい、万歳してー」

乳首が限界まで勃起した所で、セリナの腕を上げさせて腋の下も洗う。

ほんの少しの剃り跡が、セリナにも腋毛は生えるのだと示していてチンポのイライラに燃料をくべる。

「んっ♥ そ、そんな所、恥ずかしいです……♥」

甘ったるい反抗の声を聞きながら、かぼっ、かぼっ、と音を立てて洗い、肩から腕の先へと移っていく。

手を恋人つなぎでにゆるにゆると洗う段階になると人心地ついたようにセリナの身体から少しづつ力が抜け、私の手をきゅっと握り返してくる。

「先生……♥ ありがとうございます。ここからは、私が先生を洗わせていただきますね……♥」

ぬるん、とボディークリームソープのぬめりで手を自由にし、セリナが腰をひねる。

前面に満遍なくボディークリームソープの泡を付けたセリナが私に抱きつく。

思い切りが足らず横抱きになっていたため、膝の裏に手を入れて股を開かせ、跨る姿勢を取らせた。

セリナの甘勃起したクリトリスが私のチンポと触れ合う。

「あっ……♥ で、では、失礼いたしますね……♥」

クリの快樂で陶然とした声を上げてしまったセリナが、ごまかすように笑って私に抱きついてきた。

にちゃ、ぬちゃ、とまだローション状に残っているボディークリームソープが粘質な音を響かせ、セリナの身体の感触をより強く伝える。

「んっ、あ、ああ♥」

自分で身体を擦りつけた刺激に耐えられず、セリナの口から甘い声



がひっきりなしに上がってしまふ。

セリナの太ももを抱え、座る場所を直させる。マンコとチンポが強く擦れ合うように。

「だ、だめ♥ せんせ、これ、だめ♥ だめです♥」

素股の刺激の強さにセリナの腰が引けてしまふのを逃さず、強く抱きしめて私も腰を使った。

にち、にち、と泡を洗い流すようにセリナの股間から愛液が流れ、異質な水音を奏でる。

「どう、気持ちいいかな？」

くち、くち、と股間からの音が風呂場でよく反響する。

「うう、せんせ、え♥ い、意地悪です……♥ あっ♥ き、きもちいい、きもちいい♥」

これまで私の前で見せたことのないほど余裕のない声音で、セリナが快楽を叫ぶ。

ボディーツープを手に取り、セリナを抱きしめて背中を洗ってやる。

ついでに、セリナのアナルにも指を入れる。

「あうう♥ そ、そんなところ、きたないですからあ♥」

「セリナの身体に汚い所なんて無いよ。あつたとしても全部洗ってあげるから」

「は、恥ずかしくて、気絶してしまひそうです……♥」

セリナは顔を真っ赤にして、アナルに指をつぽつぽ出し入れされながら私の背中を撫で回し洗ってくれる。

風呂に入る前から身体を桜色に上気させるセリナが、腰をへこへこ和不慣れに振り始める。

絶頂秒読みの合図を汲み取り、私はお湯を被って2人の泡を洗い落とす。

「ふえ……♥ せんせえ……っ？」

とろんと蕩けた目で、絶頂をお預けされたセリナが寂しげに私を呼んだ。

「風邪を引いてしまうからね、そろそろお湯に浸かろうか」

「あう……はい、そうしましょう……」

はしたないおねだりをしていた事を後から自覚し、俯いてしまうセリナ。

よくボディソープを洗い落とすと、2人して湯船に使った。

「ふう……今日は寒かったから、温まりますね……」

ゆったりと普通にお湯に浸かるセリナの腰を抱き寄せ、横を向かせてキスをする。

お湯を弾く胸元に指を這わせ、水面から顔を覗かせる乳首をゆつくりと転がして愛撫した。

「んっ……♡ ふう……♡」

流石にそろそろ落ち着いてきたセリナがキスと愛撫を受け入れ、私に向き直る。

さらに、その手がそろそろとお湯の中を進み、チンポをそつと握ってきた。

知識があつたのか、手を上下に動かして手コキをしてくれる。

口を離して人生初手コキに挑戦するセリナの顔を眺めた。

「すごいな……セリナ、こういう事知ってるんだ？」

セリナは目を泳がせながらも手コキを続けた。

「う、いえ、その……病院で働いていると、たまに……ひ、一人で処理されている方もいらつしやって……」

「それを見て、興味を持ってたんだ？」

「きよ、興味は……もちろん、あります。先生と、その、こういう時間を過ごす所を、想像して……♡」

セリナの手コキは力が弱すぎるし竿だけをしごいているので射精はできそうになかったが、それが始めてをもらったという実感に繋がリチンポのイライラを増大させる効果はあつた。

「じゃあ、続きはソファの上でヤツてもらおうかな」

「ぐくっ……♡ はい、喜んで……♡」

絶頂をお預けされてメスの本能を呼び起こされたセリナが、恥じらいつつも性欲に目を輝かせた。

お風呂から上がり、軽くキスしながらお互いの身体を拭き、少し濡

れた髪をドライヤーで乾かす。

なんだかんだと頻繁に使うので、背もたれを倒すとベッドのように使えるソファを購入して置いてある。

全裸でソファの前まで行くと、もう午後9時を回ろうかというところだった。

「キヴォトスではどうか知らないけど……クリスマスイブの9時から翌日3時まででは、1年間で最もセックスをする人の多い『性の6時間』なんて話があったよ」

その性の6時間はみっちりヒナとやりまくったが。

全裸のそれにタオル地のカバーを何重にも敷いてセックスのためのベッドメイクをしてくれるセリナを後ろから見守る。

「へえ、イブなんですか？ 不思議なお話ですね。でも、私にとってはクリスマス当日を先生と過ごす方が嬉しいです♥」

そんな世間話のような声音でいながらも、全裸のセリナが前かがみになると濡れ濡れのマンコが丸見えだ。

メイクの完成直前に後ろに膝立ちになってセリナの股間にむしやぶりついた。

「あっ♥ そんなっ♥ そこ、舐めるなんてっ♥」

足元がふらつき、よたよたとセリナがソファに膝をつく。

そのまま崩しにセックスを始めた。

大きく股を広げさせ、音を立ててセリナのマンコを舐め回す。

スジはほんの少し花開き、少しだけ大人になり始めたマンコはセックスがしたくてベトベトに濡れそぼっている。

「あーっ♥ あああーっ♥」

誰にも聞かれることがない地下に、何人目か分からない生徒の喘ぎ声が響き渡る。

ここまでの前戯で身も心も蕩けたセリナは、とても元気に艶めかしい声を上げてくれた。

ぐんっ、と細い腰が持ち上がり、私にマンコを無意識に押し付けてくる。

穢れを知らなかった白い尻が、絶頂の予感に力んでアナルがすぼ

まっているのも照明の下ではつきり見える。

「はあっ♥ ああうー♥ ん、ああーうっ♥」

声の音量は下がり始め、代わりにすすり泣くような、男に媚びるような哀切さが滲んでくる。

ぷりぷりした小陰唇を舌で弾き、膣口に指を入れて浅い所をかき回すと、白く濁った愛液が指に纏わりついた。

処女で本気汁を垂れ流すほど感じてくれたセリナに愛しさが湧き上がり、クリトリスを裏から刺激しつつ皮を向いて吸う。

「ひっ♥ つぎ♥ いゝいんっ♥ あゝうっ♥ ふぐっ♥」

強すぎる刺激に、可憐なセリナが出してはいけない腹の底からのアクメ声が出てしまっている。

「うっ♥ ううゝうーっ♥ うゝ、あゝ、あああーっ♥♥

程なくセリナは盛大にクリ絶頂をキめ、タオル地に本気汁がシミになるほど吸わせた。

「はっ♥ はっ♥ はっ♥」

全身を痙攣させながら荒く息をするセリナに上から覆いかぶさり、ぐしょ濡れになったマンコにチンポを押し当てる。

乱れた息をしながらも、セリナは私をまっすぐ見つめて続きを欲しがっていた。

「入れるよ、セリナ」

「はあ、はあ……お願い、します……♥ 私の始めて、もらって……ください♥」

セリナは心底嬉しそうな笑みを浮かべ、手を差し上げて私の背中に腕を回し、優しく抱きしめてくれる。

処女膣がチンポに蹂躪の許可を与えたかのように、抵抗はありつつも滑らかに飲み込まれていく。

お風呂に入り、入念に前戯したセリナのマンコはホカホカに温まり、たっぷりの汗気をもって私を迎え入れてくれた。

強い締付けでありながらも密着感がより際立つような、私のチンポを気遣ってくれているかのような居心地の良いマンコだ。

あつという間に処女膜に行き当たり、私とセリナは触れるほどの距離で見つめ合う。

「……どうぞ♥」

処女膜を破る許可を与えられた私のチンポが、天使のような女の子の純血を、今奪った。

「っ……」

眉をしかめ、人生一度切りの痛みを受け入れるセリナ。

ぎり、と背中を抱く手に力がこもり、立てられた爪で傷が出来る。

私は素早く一番奥までチンポを進め、そこから動かずじつとしていた。

「ふう、ふう……も、もう、大丈夫です……先生。ここからは……お好きに、動いてください」

まだ額に少し脂汗の残る顔で、気丈に笑顔を浮かべるセリナ。

普段ならばそれでも動かずに居る所だが……セリナの献身の美しさにチンポのイライラを増幅された私は、ピストンを始めた。

「あっ♥ う、くうう」

ぴく、ぴく、と眉が寄せられるのを堪えきれず、うめき声が交じるものの、十分濡れたマンコはチンポを受け入れて快楽を得始めている。

たん、たん、たん、とスローペースなピストン運動の一回一回に悶えるセリナが、段々と苦痛から快楽へと染まっていく。

その、一生に一度しか拝めない美しいグラデーションをしつかりと目に焼き付ける。

「綺麗だよ、セリナ」

鼻先が触れそうな距離で覗き込むセリナの瞳は、照れと愛欲が入り交じる宝石のような輝きを湛えている。

「先生も……とても、素敵です♥ たくましくて、優しく……思い切ってお誘いして、こんな素敵な時間が過ごせるなんて……本当に嬉しいです♥」

ぼろりと、穢れなき乙女の涙が頬を伝う。

「あ、れ……えへへ、すみません。なんだか……こんなに素敵な始めて

で、感極まってしまつて……」

ぐっぽりとチンポを咥えこんだマンコも、セリナの感激を伝えるようにうねり、チンポの感触を隅々まで味わおうとしているかのようだった。

「ううん。そんなに喜んでもらえて、私こそ本当に光栄だよ」

そつと指で涙を拭い、優しくキスをする。

セリナが目蓋を伏せると、また涙がこぼれた。

ぶじゅ、ぬじゅ、とセリナのぐしよ濡れの本気汁が奏でるマン屁と、ピストンできしむソファの悲鳴だけが流れる。

セリナの膣奥はふわりと広がり、精液を受け入れるスペースを用意してくれている。

初めての膣イキと膣内射精を処女セックスの締めとしてプレゼントしようと、セリナのGスポを探り当ててそこを重点的に擦った。

「んっ♥ んっ♥」

ゆったりとしたキスハメが功を奏したか、セリナの声から苦痛が抜け、ただただ気持ちいいものへと変わっていく。

ピストンを強く速くすると、またもセリナの手に力がこもった。

ぱんぱんぱん、とりズミカルに下腹部を打ち付けあい、順調に2人で絶頂への階段を登っていく。

「ちゅっ♥ ちゅぱっ♥」

セリナも私の唇を吸い、積極的に膣を締めてセックスを貪っていた。

背中に回された手がひつかき、指の本数だけ傷跡が刻まれているのを感じる。

初めてのセックスに夢中になるセリナを導くべく、半開きの口に舌をねじ込みデーブキスを始める。

すぐにダンスの相手のようにセリナからも舌が絡みつき、甘やかに舌の粘膜を擦り合わせ始めた。

大腿を開かされたセリナの脚が畳まれ、私の腰に絡みつく。

膣内射精を何の躊躇もなくねだるその姿勢に金玉から射精欲が溢れ出し、セリナをイカせるべくスパートに入った。

「はあーっ♥ ふうーっ♥ んっ♥ んむっ♥ ぢゅるっ♥ ふうっ♥ んんゝーっ♥」

セリナは荒い鼻息で呼吸しながら唾液をすすり嚙下し、Gスポを激しくこすられる刺激を大いに悦んで受け入れる。

ついに決壊の時が訪れ、セリナの全身がさざなみのように痙攣し、膣が握りしめるように締まった。

「んっ♥ うっ♥ うううううう……♥♥」

派手な声を上げる事なく、しかしポロポロと閉じた目蓋の下から涙がこぼれ落ちる。

ぎり、と手の力も強まり、血が出たような感触があったが、私も同時に射精した快感で動けなかった。

どく、どく、と鼓動に合わせてセリナの膣は緩まり、まるで精液を奥に導いているようだ。

膣の一番奥の膨らんでいた所がすぼまり、子宮が降りてくる。

セリナの子宮は、私の子供を身籠ろうと精子をすすり上げていた。

その動きが、まるで子宮口が射精を労るように優しく亀頭にキスをするかのようで、金玉が全力で精液を吐き出してしまう。

こうして、セリナの処女セックスは膣イキも受精のための子宮の運動も完璧な100点満点の結果に終わった。

「セリナ。はいこれ、飲んでおいて」

「はい♥」

差し出したクスリを、何も言わずにコップの水で飲み下すセリナ。

「もしも、先生の子供を身ごもることができたら……私、きつと産みます」

「うん」

「ふふっ、ありがとうございます。そんなに自然に受け入れてくださって」

精液と愛液と破瓜の血がにじむソファの上で全裸で座るセリナは、穏やかな笑みを浮かべていた。

「ずっと、羨ましかったです。皆さん、先生のセフレになって楽しそ

うにしているから……」

「知ってたの？」

くすりとイタズラな笑みを浮かべて、セリナが私を下から覗き込む。

「もちろん。私は、先生のセリナですから♥」

そう言って隣に座る私の身体に寄りかかろうとして、ふと背中の子が目に入ってしまった。

「あ、ああっ!? 先生、血が！ な、なんてこと、私が先生を傷つけてしまうなんて……!」

つきさっきの余裕さえあつた態度から一転、目を見開いて狼狽するセリナ。

「そんなに気にしないで。こういうのは、男にとって勲章みたいなものだから」

「で、でも……!」

「ああ、まあ薬は塗っておいてほしいかな……」

「はい、ただいま!」

全裸で慌てて救護セットを漁り、軟膏とガーゼを取り出して治療してくれた。

「うう……救護騎士団である私が先生にこんな狼藉を……」

「まあまあ。それほど気持ちよくなってくれたってことだよな?」

後ろで膝立ちになって治療してくれるセリナの股間から、ぼとりと精液のダマが落ちたのが振動で伝わってくる。

「あう……はい♥ とつても、気持ちよかったです♥」

セリナは反芻するように、セックスの時の甘ったるい声で言った。

「じゃあ、良かったよ。それだけセリナの思い出深い経験になれたんだから」

「先生……♥」

セリナの手が、傷ついていない背中に添えられる。その手のぬくもりから、セリナの暖かい思いが伝わる気がした。

「はい、これでもう大丈夫です」



「ありがとう、セリナ」

「いえ、私のせいですので……あの……」

全裸のセリナが、私の前でもじもじと指を遊ばせる。

勃起したままの乳首も、愛液で濡れ光る陰毛も隠す事なく、セックスを覚えた女に羽化した美しさが匂い立つ。

「これで終わってしまうのも、私が、嫌なので……えっと……」

くるり、と背中を向けて、セリナが四つん這いになる。

「今夜は、先生のしたいだけ、セックスしましょう……♡ こ、この姿勢なら、先生を傷つけることもありませんから♡」

尻たぶを片方開いて、マンコを拡げて見せる。

精液と愛液をとろりと溢れさせながら照れた笑みを浮かべたセリナに誘われ、当然のように勃起が回復した。

「ありがとう、セリナ。性の6時間、たっぷり楽しもうか」

「はい♡」

セリナの尻をつかむと、尻たぶを拡げてアナルをよく観察する。

ちゅっ、と濃い肌色をした窄まりにキスした。

「んっ♡ せ、せんせい♡ そ、そこは、流石に……!」

「さっき洗ったから大丈夫だよ」

ねつとりと舌を這わせ、シワの一本一本をなぞる。

「はっ♡ く、ふううっ♡」

アナルを舐められて感じるのがそんなにも恥ずかしいのか、セリナの声は押し殺されていた。

不意打ち気味に、クリトリスを指でこちよこちよとくすぐって上げる。

「んっ♡ ううううう……♡」

ぱく、ぱく、と眼の前で可愛いセリナのアナルが開閉し、絶頂する。

そこでは止まらず、ベロベロと舐め回し続け、ぷっくりとシワが伸びるほど充血するまで愛撫した。

「ぎ、セリナ。お待ちかねのセックスだよ」

アナル舐めでまた本気汁を垂らしていたセリナのマンコに、生チン

ポをハメる。

殆ど処女の穴はまだキツいが、セリナの身体はもう快樂の味を覚えていた。

「あゝっうゝ♥」

苦悶にも似た、歓喜のメス声。

小さなお尻を掴み、四つん這いのセリナを見下ろしながら腰をふる。

「あつ♥ これ、すごつ♥ おく、ひびいちやうつ♥」

セリナの背中は小さく、少女の可憐さを否応なく感じさせるものだ。

それが私のチンポで一突きごとに悶え悦ぶ様は、最高の興奮剤として精液を煮え立たせる。

つぶん、と良くほぐれたアナルに指を差し込んだ。

「んひつ♥ だ、だめっ♥ き、汚いですからっ♥」

「大丈夫だよ。セリナのお尻の穴なら私は気にしないから」

「そういう、問題ではっ♥ ああつ♥」

ぬく、ぬく、と浅い所を優しく前後させながらチンポを一定のペースで突きこむ。

「うゝっ♥ うゝっううーっ……♥」

四つん這いだったセリナの肘が笑い、頭がソファへと沈んでいく。

「セリナ、アナルほじられながらセックスするの、気持ちいい?」

「い、いやあつ♥ そんなこと、言わせないください♥」

殆ど答えの甘い声を上げながら、尻とマンコだけをこちらに向けたセリナがうろたえる。

「聞きたいな。私のセフレの口から」

「う、うう……♥ はあ、はあ……♥ せ、先生に……おしりのあな

……♥ ほじられながら、おちんちんズポズポされるの……♥ 恥ず

かしくて……気持ちよくて……♥ どうか、なってしまっそうなん

です……♥ ああ、恥ずかしい……♥ もう、許してください、先生

……♥」

哀れっぽくおねだりするセリナだが、尻穴はパクパクと私の指を美

味しそうに頬張り、マンコは太ももをビシヤビシヤにするほど濡れそぼっている。

「セリナがセックスを気に入ってくれて、本当に嬉しいよ」

「はいっ……っ♥ 好きっ♥ 先生のセックス、大好きですっ♥」

バックで獣のように犯されながら、セリナは恥も外聞もなく心のまに叫んだ。

ぱんぱんぱん、とセリナの態度に対する拍手のように、私は腰を打ち付けてセリナを犯す。

ロマンチックなクリスマスの初体験、私に傷を付けた負い目、何よりセックスの快楽が合わさり、セリナは急速にセックスに慣れ親しみつつある。

私のセフレとして大きく羽ばたこうとする美しい天使を、より高く快楽の空へと飛ばして上げるためにも腰振りに励む。

「あっ♥ ああーっ♥ あうっ♥ んんーっ♥」

こらえる必要のない、伸びやかな善がり声が地下に響く。

セリナの膣奥はぽっかり膨らみ、再び私の精液を待ち望んでいた。

今度はバックから犯しているため上から角度を付けてGスポを狙い打ち、再びセリナを膣イキへと導いていく。

「あっ♥ せ、せんせいっ♥ せんせいっ♥ わた、わたし、もうっ♥」

「セリナ、イキそうならいくつて言うんだよ」

「い、いくっ♥ いく、いく、いく♥」

教えた言葉が、理性を素通りして本能に刻まれたかのように……セリナは切なげにその言葉を連呼した。

まるで絶頂を手繰り寄せる呪文のように、単調で、熱情のこもった言霊が私の金玉をも熱くする。

「いくっ♥ イキます♥ い、イクっ♥ イックうううんっ♥♥」

半狂乱のように裏返ったイキ声を上げて、セリナの尻が跳ね上がる。

絶頂の痙攣に導かれ、私もセリナの奥深くに射精した。

どく、どく、尻を高々と上げたセリナの膣が作る急斜面に従って、一滴も漏らさず私の精液が注ぎ込まれていく。

射精中の亀頭にセリナの子宮口が近づいてキスをしてきた刺激により射精が長引き金玉が痛くなるほど搾り取られた。

膣奥に流し込んだ精液が、子宮口にトロトロと流れこんで行くのが分かる。

真性種付けをしたという手応えに、チンポが深く満足している。

「はあ……♥ はあ……♥」

セリナは半分だけ振り返り、熱っぽい流し目で私を見上げていた。

隠すこともなくセックスのおかわりを強請るその熱い視線に勃起を復活させ、再び後ろからセリナを犯し始める。

「あっ、あっあっ♥」

私たちは、性の6時間をたっぷりと満喫した。

## 究極の美食く夜明けのコーヒーく（ハルナ）

「はい、先生。お口を開けて……あくんしてください」

昼間の公園とはいえ、大晦日もなれば冷える。

そんななか、ハルナが白い手に箸を持ち、重箱から料理を食べさせてくれた。

銀の髪に白い肌、赤い瞳に恥じらいで紅く染まった頬。

確かにハルナの言う通り、美食にはシチュエーションも大事なのだろう。

つい数日前、セリナとのセックス前にクリスマスケーキを食べさせあつた事を思い出した。

「むっ……先生？　なんだかりアクションが薄くありませんこと？」

すでに美女と言って差し支えない大人びた美しさのハルナが、子供っぽく唇を尖らせる。

その不意打ちの可愛らしさがチンポのイライラを呼び起こした。

「そんなことないよ。うん、美味しい。じゃあ今度はハルナだね」

私もハルナにあーんして食べさせる。

「ではお願いします。んっ……」

あ、と開けた口の中には、ハルナの健康的なピンク色の粘膜が広がっている。

綺麗に生え揃った白い歯に囲まれた舌は肉厚でプリプリしており、デープキスしたときに思い切り舌を絡めあつたら気持ちよさそうだ。

「あく……ん。んむ……もぐ……ふっ、美味しいです」

ニコニコと笑うハルナが大晦日の日差しに照らされて煌めく。

「では次は私ですわね。あーん♪」

先程よりも近く、太ももがふれあいそうな距離に座り直してハルナが差し出してくる。

心底楽しそうな笑顔を振りまきながら、寒空に互いの体温で温めあつてイチヤイチヤと食事した。

そして、食べさせ合うことしばらく。

「これは……一生記憶に残る美食になりましたね。ありがとうございます、先生」

「そう言ってもらえたら嬉しいな」

「ふふっ……ところで、まだお時間はありますか？　もう少し一緒に過ごせればと……思っています」

ぴつとりと横にくつついて座るハルナが、私を見上げてくる。

ルビーのような瞳にまっすぐ見つめられ、吸い込まれてしまいそうだった。

ひゆうう、と寒風が吹き付ける。

「何だか、手が冷たくなって来ましたわね……」

実のところ、食事しているときからかじかむ程度に寒かったのだが、気力でどうにかしていたのがハルナらしい。

その白魚のような指に絡めるように手を握って温めた。

「あ……。ありがとうございます、先生。催促する前に握って頂けるなんて……嬉しいですわ」

さす、さす、と絡み合った指と指をこすり合わせると、ハルナは頬を染めて少し視線をそらしてしまった。

「さ、今日はまだまだこれから。街を見て回ってみませんか？」

「うん、一緒に行こうか」

恋人つなぎをそのままに、私たちは街を回った。

そんな中、ハルナが一つの店の前で足を止めた。

「コーヒー豆？　飲むの？」

私がそう声をかけると、ハルナの身体がかすかに震えたのが密着した身体越しに伝わった。

「い、いえ、その……ちよつと、飲んでみたいなど……」

「じゃあ買っていきましょうか」

何故か顔を紅くして曖昧な笑みを浮かべるハルナを引き連れて、挽く前の豆を買う。

「先生、ここは私が買いますわ。せっかくですもの、一番良いものを少量買いますよ」

「わかったよ」

店員と真剣なやり取りを経て、ハルナが飲みたいコーヒー豆を小さな密閉袋に取り分けて貰い購入する。

店を出て、大事そうにコーヒー豆を抱えるハルナを見てふと思い出す。

「……そういえば、家に手動のコーヒーミルがあつたなあ……殆ど使ったことないけど」

高くもないし、つい衝動で買ってしまつたが結局使わずじまいになつている事を話したら、ハルナの目が潤んで更に身体を密着させてきた。

正面に向き直り、キュツと胸元を掴んで上目遣いに見つめてくる。

「これも何かの運命、先生……わ、私と一緒に、コーヒーを……飲みませんこと？」

昼ごはんの後ぶらぶらと歩いただけだが、すでに冬の空は茜色に染まりつつある。

意味は分からないが、ハルナの思いは伝わった。

「うん、良いね。じゃあ、私の家に行こうか」

「！ は、はい……！」

こうして私は、セックスするためにハルナを自宅に連れ込むのだつた。

「まあ……ここが、先生のご自宅……」

仕事や生徒とのセックスのためシャーレに泊まることの多い身ではあるが、流石に年末年始はビル自体が開いていない。

なので連休中は久々に自宅に泊まつている。

「うふふっ。お忙しい先生が一人暮らしと聞いて、新年の前に大掃除が必要かと思いましたが……その必要はなさそうですわね」

私の部屋は、ちゃんと片付いていた。

それもそのはず、ミモリが定期的に訪ねてくれて、新妻の甲斐甲斐しきで掃除洗濯料理セックスを提供してくれるからだ。

今日は、修行部も年越し夜回りがあるので姫始めが出来ない事をお詫びされ、おせちのおすそ分けと共に年越しそばを打っておいてくれ

ている。

「貰い物でおせちと年越しそばも一応用意してあるから、ご飯はそれを食べよう」

「はい……お、お世話になりますわ」

深夜まで一緒に居る事を仄めかされて、ハルナが頬を染めた。

どこかおぼつかない足取りで家の奥に歩いていくハルナの手を取り、往来では出来ないくらい密着して歩く。

ハルナは何も言わず、真つ赤な顔で私の腕に頭を預けた。

「さて、それじゃあコーヒーミルを出さないかね。ハルナは座ってて」「あつ、ええと、ま、まだコーヒーは頂きませんわ」

ハルナのコーヒー豆を挽こうと思ったが、少し慌てた様子で留められた。

「そうなの？」

「ええ。心にこれと決めたシチュエーションで、先生と一緒に頂きたいので……その時が来たらお願いしてもよろしいでしょうか？」

「もちろん、喜んで。それじゃあ……その時までにはゆつくりしていいか？」

「はい……」

借りてきた猫のように大人しいハルナが、テレビの前のソファに座る。

するりと黒いファーショールを脱ぎ、畳んでおくハルナ。

その上に、着物と合わせた藍と紫紺の髪飾りをそつと乗せる。

私はその隣に座り、ハルナの肩に手を回して抱き寄せる。

「手慣れて……らっしやいますのね」

私の力に逆らわず身体を預けてくるハルナが、拗ねるように流し目で言った。

「嫌になった？」

「いいえ？ 先生のエスコート、期待させていただきますわ♥」

取り繕った笑みを浮かべるハルナだが、隠しようもなく顔が赤らんでいる。

「それで、ハルナのいうコーヒーを飲みたいシチュエーションってど



んなもの?」

「う……それを、私から言わせるんですの? 今日先生はずいぶん意地悪ですわね……」

そう言いつつも、ハルナの声は弾んでいた。

預けられた身体の重みが増し、着物に押し込められたハルナの柔らかな胸が押し付けられる感触さえ分かるようになる。

「いわゆる、『夜明けのコーヒー』というのを……飲んでみたいんですの」

「そういうの、よく知ってるね……結構古くない?」

私を見上げたハルナが、童女のようにニッコリと笑う。

「うふふつ。美食の追求のためには教養が欠かせませんわ。古い小説や映画には食へのロマンが詰まっていますもの」

「そつか。そのコーヒーは夜明けに飲めば良いのかな?」

ハルナが着物の胸に手を当てて、すう、はあ、と息を整える。

澄んだ瞳で私をまっすぐに見上げた。

「いいえ。最愛の方と、一夜をともに過ごし……その……激しく結ばれた後に共に目を覚ます。その目覚めのコーヒー……ですわ」

言いながら、顔がじわじわと紅く染まる。

シヨールで見えなかった首筋と胸元までもほんのりと桜色に色づき、晴れ着に合わせてウェーブをかけている後れ毛がサラリと肩で揺れた。

「……いいの?」

「ええ。先生が、お受けしてくださいるなら……願ってもないことですわ」

気丈に振る舞っているが、ルビーのような瞳は不安に揺れている。

「分かった。……素敵な夜にしようね、ハルナ」

「ごくつ……は、はい……よろしくお願いいたします、先生……♥」

身を固くするハルナを抱き寄せ、顎を指で少し上げさせる。

そつと脛を伏せたハルナのまつげの長さで美しさに息を飲みながら、ぷるぷると瑞々しい桃色の唇にキスをした。

「ん……♥」

外を歩いて冷えた身体を温めるように、太ももを撫で回す。しばらくゆつたりと、ついはむ程度のキスを繰り返した。

「ちゆる……はぁ♥ 熱い……♥ 先生から口移しで頂く唾液も、オードブルには良いものですわね♥」

ペロ、と口元に残った唾液を舌なめずりで拭うハルナに、チンポがイライラする。

着物の帯を解こうとした私の手が、ハルナの手で優しく止められる。

「シワになってしまいますから……脱ぐのは自分でやりますわ。……寝室は、どちらでしょうか？」

共に立ち上がり、腰に手を回してハルナを寝室へと連れ込む。

寝室も勿論ミモリがセックス用に整えてくれているので綺麗なものだ。

「あ、あの、流石に脱ぐところを見られるのは……」

「駄目かな？ すごく見たい」

ハルナはストリップを見られるのを恥ずかしたが、ベッドメイクしながらだからじつと見ることはないとお願いしたら頬を染めながらも了承してくれた。

ハルナは小さなポーチから出した布を広げて床に敷いた。

じつと見ていたら横目で咎められるように見られてしまったので、大人しくベッドメイクを始める。

背後でゴソゴソとハルナが脱衣する音が聞こえる。

ベッドの下の収納から、ミモリによって清潔に保たれているタオル地のシーツを何枚も取って重ねていく。

ミモリはじめ修行部全員と乱交したこともあるため皆のマン汁を吸っているシーツは、今は柔軟剤の良い匂いだけを放っている。

ベッドメイクにはそれなりに時間が経ったが、振り返った時には下着だけのハルナが跪いてブラを外す所だった。

抜けるように白い肌に、着物に合わせた紫紺のレースブラが豪華ながら上品な雰囲気を出している。

「おお……綺麗だね、ハルナ」

「きやつ。もう、先生……途中で見られたら恥ずかしいですわ……」  
ブラを外されたハルナの胸がふるん、と下に揺れるのが脇から少し見えた。

滑らかな背中中は丸められ、ショーツ一枚のハルナが立ち上がりながら目の前で下ろしてくれる。

こちらに突き出された尻は丸く、むっちりと美味しそうに実っている。

ハルナのショーツの際より少し上から生えている尻尾が、マンコを隠すように丸められた。

それでも下ろしたショーツが股間から離れるときに、かすかに粘液が糸を引くのを目撃できた。

チーズのような酸っぱい臭いが私の鼻腔に届き、ショーツを広げた布の上に置いたハルナが尻を広げた手のひらで隠してしまう。

恥じらうように尻尾がくるりと股間を隠し、前から抜けて左太ももに巻き付いていた。

その仕草に艶めかしさを感じつつ、立ち上がって私もささつと脱衣する。

こうして、誰も邪魔するものがない大晦日に処女の女生徒と寝室で全裸になった。

ハルナは裸を見られるのを恥ずかしがって、背中を向けたまま尻と胸に手を当てて隠している。

そのむっちりとした太ももが擦り合わされ、股間を隠す尻尾が愛液で濡れ光っているのを見て、フル勃起したまま歩み寄った。

「あつ……せ、先生……ずいぶん、熱いものが手にあたっておりますわ……」

手に竿を押し付けると同時、我慢汁を垂れ流す亀頭が搗きたたてのお餅のように白くモチモチとしたハルナの尻に押し当てられる。

「ハルナの裸がすごく綺麗で、興奮しちゃったんだ」

裸のハルナの、腰を抱き寄せて肌を密着させる。ちやり、とハルナの左肩甲骨辺りから生える片翼の羽に付いたピアスが音を立てた。

ヒヤリとした女性の表面体温の低さが、トクトクと背中から伝わる

激しい鼓動と共にじわじわ温まる。

肩越しに覗き込まれる視線を感じたのか、ハルナの胸がむにゅりと強く潰される。

「ハルナ。胸を見せてくれないかな」

「……………はい……………」

ハルナの腰の後ろ、尻尾の付け根より少し上を我慢汁で汚しながら抱きしめ、形の良い胸が外気に晒されるのを見る。

きれいなお椀型の胸はぽつちりと立派な乳首を備え、寒さと興奮でふつくらと勃起している。

まだ窓からはカーテン越しに夕日が差し込み、ハルナの白い肌を茜色に染めていた。

「触るよ」

チンポのイライラに従って、ハルナの胸を揉む。

「は、んっ……………♥」

優しく、撫でるように乳房を弄ぶと、押し殺したようなメスの声を上げてハルナが悶えた。

髪型はそのままのハルナはお団子にまとめており、綺麗なうなじもハッキリと晒している。

形の良い耳を食み、滑らかな首筋の肌にキスを降らせ、じつくりとメスの反応を引き出す。

乳首を指でクリクリとこね回すと、ちりん、とハルナの羽の震えと共にピアスが揺れる音が響いた。

「気持ちいいのを教えてくれて嬉しいよ」

私が耳元でささやくと、またもチリンと音がする。

「うう……………私、始めてですよ？ 少し、手加減してくださいまし……………」

口元に手を当てて、羞恥にこらえるように俯くハルナは深窓の令嬢そのものだった。

「ごめんね。恥ずかしいなら何も言わなくて良いから、いっぱい気持ちよくするね」

「ですから、そういう事を言わないでくださいまし……………♥」

両胸の乳首を同時に摘むと、ちりりとまた音がした。

「そろそろベッドに行こうか」

返事もなく俯くハルナを抱きしめ、チンポを押し付けたままベッドに歩いていく。

太ももに感触を覚えて下を見ると、ハルナの尻尾がきゅつと巻き付いていた。

ベッドに並んで腰掛け、肩に力をかけるとハルナは簡単に私に押し倒される。四つん這いで覆いかぶさった。

真上から見るハルナの胸は、ぽつちりと勃起した乳首を頂点として弾力を持って形を保っていた。

「本当に、見惚れてしまうくらい綺麗だ」

「……うふふ。先生相手だと、何度言われても良いものですわね」

ハルナの唇には、さつきあつた薄ピンクの口紅が無い。着物を落とす時に落としたのだろう。

裸のハルナを抱くのだという事が殊更に意識され、我慢汁がハルナの腹に滴る。

チラリとハルナが視線を落とし、ギョツと目をつぶった。

確認もなく、唇を重ねる。

「んむ……♡ちゅっ……♡」

先程のようなじゃれ合うものではなく、セックスのためのディーブキスが始まる。

舌でノックするだけですぐ理解してくれたハルナが口を半開きにして私を迎えてくれる。

薄目を開けて微笑んだハルナは、

(エスコート、お願いいたしますね?)

とても言っているようだった。期待に応え、ハルナの舌に社交ダンスを申し込む。

プリプリで熱いハルナの舌が私の導きに応じてくれ、気持ちのいいディーブキスが始まる。

ハルナの舌は踊るように私の舌に合わせてくれるので、舌のかき回しは1周で2倍分の快楽とさえ思える。

ヌルヌルとした唾液が絡み、お互いに唾液を嚙下しながら夢中で口を貪り合う。

何分も続けるうちにハルナも慣れて来て、私の背中に手を回して抱きしめてきた。

私もハルナのほっそりしたお腹にチンポを押し当てながら抱きしめ、肌を密着させる。

ハルナの勃起乳首のくすぐったい感触と胸の奥から伝わる速い鼓動を感じながら、ゆっくりとハルナに処女セックスする決意を固めさせる。

「れる……♥ んちゅ……♥ こくっ……♥」

抱きしめあつてディープキスをするだけで、ハルナの肌はほんのり桜色に上気し、より強いメスの臭いを股間から漂わせ始めた。

頭をサラリとなでて合図すると、唇を離す。うっとりとしたハルナに見送られ、太い糸を唇の間に伸ばしながら離れた。

「ふう……ふう……♥」

面白がるような態度を取る余裕もないハルナが、呆然と天井を見ているのを微笑ましく思いながら、抱いたままその体を持ち上げる。

ベッドの枕にきちんと頭を乗せて寝かせると、汗でぬらりと怪しげに光るハルナの身体にキスの雨を振らせた。

ぷるんと弾力のある乳房、ふっくらと食べ頃になった乳首を吸い、乳房に顔を埋めながら汗に蒸れた下乳にキスし、汗の溜まった臍に舌を入れる。

ハルナの荒い息遣いを上から聴きながら、下腹部へと移っていく。綺麗に刈り揃えた銀髪の陰毛に口づけすると、かすかに腰が跳ねた。

むっちりした太ももを下から掴み、そっと開かせる。

「っ……っ……」

流星に羞恥に耐えないというようにハルナが顔を両手で覆い隠してしまう。

尻の下から伸びた尻尾が私の手首に絡み付いた。

安心させるように尻尾にキスし、スリスリと根本に近い太めの部分

を撫でながら股間を見つめる。

ハルナのマンコは、息を呑むほどに整って美しかった。

愛撫でたっぷりと分泌した愛液にコーティングされ艶やかに照り光っている小ぶりの小陰唇は、薄いピンク色をしてぷるぷるとした弾力を備えている。

「すごい、綺麗だよハルナ」

「ううう……流石に、そこを褒められても恥ずかしいだけですわ……♡」

ハルナはそう言うが、私がクイと大陰唇を指で開いてやるとトロリと愛液がこぼれ落ちた。

唇をつけ、じゅる、じゅる、と愛液をすすり粘膜をこそぐように舐める。

「ふあ、あああつ♡」

ここまで堪えてきたハルナだったが、クンニの快楽には耐えきれず大きな声を出してしまう。

ハルナが問題なく気持ちよくなれていることを確認した私は、更に大胆にクンニを続けた。

クリトリスを口に含むと唾液に浸し、皮の上から舌で揉むように愛撫する。

「はっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡」

ハルナは顔を隠すのも忘れ枕を掴み、太ももに筋が浮く位に力みながら身悶えている。

ひっきりなしに上がる甘い声に、羽に付いたピアスのちやり、ちやり、という澄んだ音がまじり、ハルナとセックスしている時の音とはこういうものかと理解が胸に満ちる。

手首に巻き付いたハルナの尻尾が甘えるように緩んだり締まったりして、私の肌とこすり合わせる事を楽しんでいる。

クリ愛撫で蕩けたマンコは膣口をパクパクと開閉させて愛液を垂れ流し、むっちりとしたわんだ尻たぶを伝ってシートに大きなシミを作っていた。

準備を次の段階に進め、膣口に指を挿入する。

ハルナの膣内は熱く、女として十分成熟していた。

蕩けた膣ヒダを感じながら、ごく浅い箇所をクリの裏をひつかくように刺激する。

「あゝっ♥ ああーっ♥ せ、せんっ♥ それ、だ、あああああ  
ああーっ♥」

ミモリがセックス用防音処理を施して居なかったら窓からご近所中にハルナの艶めかしい声が響いていただろう。

そのくらい大きな声を上げ、あっという間に絶頂に達してしまっただ。手首にアザが出来る程にハルナの尻尾が巻き付いてくる。

一本しか入っていない指が締め付けられ、腰が跳ね上がってクリと歯がぶつかり、刺激の強さで更に絶頂する。

「っ……いっ…っ……いっ…」

ベッドの上で美しいブリッジをするハルナは、10秒はそのまま固まった上で突然脱力し、胸を上下させて荒い息をし始めた。

普段からは考えられない、だらしなく股をパツカリと広げて、惚けた絶頂余韻顔で天井に顔を向けている姿。

最高にチンポがイライラし、ハルナを犯したくて仕方なくなる。

「せ、先生……♥ その前に、一つ……よろしいかしら？」

太ももを掴んでマンコにチンポを突き立てようとした私の腰に、しどけなくハルナの尻尾が巻き付く。

アザが出来たから気を使ってくれたのだろう。つう、と尻尾を撫でながら続きの言葉を待った。

「先生の……だ、男根を、味見させてくれませんか？ イズミさんが美味しいというものですし、まさかとは思うのですけど、気になってしまっただけ」

「イズミが話したの？」

アカリも知らなかったし、黙っているものと思っていたが。

「アカリさんが『こういう事に秘密は良くない』と……ジュンコさんもお存知ですよ？ 待ってらっしゃるから今度セックスして差しあげてくださいね」

そういう事になったようだ。まあアカリのおかげでハルナとセツ



クス出来ているので不問としよう。

「多分イズミしか好まない味だと思うけど……」

「うふふ、それならそれで構いませんわ。先生との初体験というシチュエーション……唇の味、唾液の味、汗の味……精液の味。すべて体験しておきたいのです」

「分かった。じゃあお願いするよ」

ハルナを抱き起こし、M字開脚で尻もちをつくように座らせると股の間で膝立ちになった。

ゆるくウエーブした後れ毛と三つ編みを手で押さえながら、ハルナが我慢汁まみれの亀頭に唇を押し当てる。

「んっ……♡ す、すごい味、ですわね……♡」

ハルナの端正な顔がしかめられ、ツルリとした眉間にシワが刻まれる。

しかし唇が離れることはなく口を開けて亀頭が飲み込まれていく。

ハルナの熱い舌が裏筋をザラリと撫で、たどたどしくも味わうためのフェラが始まった。

「ぢゅっ……♡ んくっ……♡ じゅるっ♡ じゅぽっ♡」

殆ど目蓋を閉じ、チンポの味に集中するハルナ。

亀頭がハルナの口内で唾液に浸り温められながら、裏筋を絶え間なく舌のザラつきで刺激されて我慢汁があふれる。

「上手だよ、ハルナ。強く吸って、唇出し入れて段差を刺激してくれると嬉しいな」

優しく頭を撫でると、少し鼻の下が伸びたフェラ顔のハルナが上目遣いの目元だけ上品に微笑んで、強めに吸ってくれた。

「んぷっ♡ あもっ♡ ちゅっ、ちゅっ♡」

私の反応を楽しむように微笑みながら、ハルナのフェラがこなれていく。

小さな頭を前後させ、オナホのように私のチンポを出し入れして美しい唇をカリを刺激する性器にしての奉仕。

なにか言う前から、美しい指で竿を握り、手コキもつけてくれた。

唾液と我慢汁で美しい口元も手もベトベトに汚しながら、精液を味

わうために一心にフェラしてくれるハルナに、金玉が煮えたぎる。

少しだけ手で後頭部に力を入れると、察したハルナが深めに啞えこんで頬が凹む程に吸引してくれた。

「んぢゅうううっ♡」

下品なほどのフェラ顔に不意を打たれ、ハルナの口内で思い切り射精する。

「でるよっー」

「んぶっ♡ おっ♡ んぐっ♡ こくっ♡」

大量に出たのでハルナの口はリスのように膨らんでしまった。

口元を抑えるが、濃い精液が唇の端から盛れて陶器のように滑らかな顎を伝い胸元にまで滴った。

「ぐじゅぐじゅっ♡ ぐくっ♡ んっ、ちゆるるっ♡」

ハルナはワインのように口を開けて空気を中に取り込んでから口内で精液をかき混ぜ、丁寧にテイスティングしてくれる。

「うっぶ♡ うっ、ふう……♡ うふふ、やはり味は最低……♡ です

わね♡ 喉に絡みついて、なかなか飲み干せませんし……♡」

ちろり、と唇にこびりついた精液を舐め取るハルナは、言葉とは裏腹に口角を吊り上げて笑みを浮かべていた。

「ですが、先生の味が喉から胃に滑り落ちて、私に入っていく……この高揚は他では得られない経験ですわ。ええ、これは媚薬……のようなものと思えば、悪くありませんわ♡」

顎を汚す精液を指で拭い、ペろりと舐めて見せる。

その仕草にフル勃起を取り戻し、尿道に残った精液がびゅると飛んだ。

「あっ、もったいない」

さっと頭にかかりそうなコースの精液を手で遮り、べつとりと付いた手のひらをペロペロと舐めるハルナ。

犯したくてたまらなくなり、肩をつかんで押し倒した。

「あっ♡ どうぞ、先生。私もいま、とても先生が欲しい気分ですわ……♡」

本当に媚薬であったかのように、ハルナが赤い顔をして処女を捧げ

るのを受け入れる笑みを浮かべた。

自分から股を開き、マンコを拡げてさえ見せる。

チンポを欲しがって開閉する処女穴に亀頭を宛てがい、ひとおもいに貫いた。

「くっ、う、あああっ♥」

みちつ、と薄い処女膜を破り、ハルナの一番奥に到達する。

ホカホカに温まったマンコはヒダが多めで、スキンシップを好むハルナの内面を映したような甘えん坊の絡みつきを感じる。

「大丈夫？ しばらくじっとしているから」

ハルナの顔を覗き込むが、穏やかな笑みを浮かべていた。するすると私の腰の裏からハルナの尻尾が持ち上がり、ゆるりと巻き付く。

「はい、平気です。先生が入念に準備してくださったからですわね♥」  
うっとり和下腹を撫で、チンポの感触を味わっているハルナ。

外ではもう日が落ち、室内灯の白い光が処女を失ったばかりのハルナの汗に濡れた胸と乳首を照らし出している。

ハルナが腰を揺らめかせて膣肉とチンポを擦り合わせた。

「ああ……先生のが、奥深くまで……私を貫いていますわ……♥」

ハルナは膣口でもチンポを味わうかのように、ゆっくりと腰を円運動させながら膣を収縮させる。

男に取ってはたまらない動きだ。私はハルナに覆いかぶさり、胸をもみながら乱暴にキスをする。

「んっ♥ ふう……♥」

ハルナは少し驚いたように目を見開くが、優しい笑みを浮かべてキスに応じてくれた。

その華奢な身体がっしりと抱きしめて、腰を振るう。

「んおっ♥ つぐ♥」

くぐもった悲鳴のような喘ぎ声を上げながら、ハルナが初ピストンに悶えた。

腰を引き、また奥まで犯すと処女とは思えないぬかるみとヒダで私をもてなしてくれる。

処女穴だけの特別な締付けに彩られ、フェラ抜きしていなかったら

堪えられなかったかもしれないというほどの快感がチンポから背筋をしばれさせる。

「んーっ♥ ううんーっ♥」

ぎし、ぎしと揺れるベッドのスプリングに、身悶えするハルナのピアスの澄んだ金属音が混じっていた。

ハルナの腕は社交ダンスのように私の腰の裏に回され、力が籠もらぬよう手ではなく手首から肘でホールドしている。

気遣いと、さらなる激しいピストンを求めている事を察して、より激しく腰を突き出した。

「んむうーっ♥」

私の口内でハルナの甘い声が響く。狭い膣が更に締めまり、ヒダの一枚一枚がカチを撫で上げて精液をねだってくる。

「んんっ♥ んーっ♥ ふうんんんーっ♥♥♥」

我慢の限界に達した私が射精すると、ハルナが初の膣イキを経験するのは同時だった。

腰に巻き付いていた尻尾に強く引つ張られ、腰と腰が密着する。

ハルナの望み通りに膣の最奥でたっぷり精液を放つ。

ピッタリと身体を密着させたハルナから少しずつ絶頂の強張りが解け、より強い繋がりを求めるように身体を擦り合わせてくる。

スプリングの音もピアスの音も止み、ハルナの鼓動と精液を送り出す金玉の脈動だけを感じる。

ゆっくりと、大量に、ハルナに種付けし続けた。

唇を重ね続けている眼の前のハルナは、溢れる寸前に涙を溜めた煌めく瞳をただ私に向けて微笑んでいる。

愛おしさに勃起を催し、追加の精液もたっぷりと吐き出すのだった。

「ふう……♥ はあ……♥ さ、最高の体験でしたわ、先生……♥」

二人してベッドに仰向けで横たわり、ハルナが私の腕枕で寛いでいる。

股間から溢れ続ける精液も気にならないように、甘い余韻に浸って

いた。

「おつと、今のうちに避妊薬を飲んでおいてね」

ベッドのサイドボードには、いつ処女の生徒に膣内射精しても良いようにミモリの買ってくれた避妊薬を置いてある。

「うふふ……♥ このままデキてしまっても面白いかと思いますか……まあ、抜け駆けは程々にしておきましょうか♥」

あくまで泰然と生セックスの結果を受け入れようとするハルナだったが、ちゃんと避妊薬を飲んでくれた。

「さあ、先生。夢中で楽しんでいたらもうこんな時刻ですし、おせちを頂きませんか？ 私さつきから気になって……」

「そうだね。年越しそばのために加減はしないといけないけど」

「勿論ですわ♥」

処女を失って膣イキを覚えても全く変わらない、ハルナの屈託のない笑顔を見ながら、裸で立ち上がる。

ハルナと一緒にシャワーを浴びて精液をかき出し、汗を流す。

風呂上がりのハルナは着るものがないので私のシャツ一枚を着せて、晩ごはんにした。

「うーん、結構なお味ですわね。作った方の人柄がにじみ出るような、優しく上品な味わいのおせちですわ」

修行部のミモリが作ったことを告げると、今度挨拶に伺いますと笑顔で言っていた。

「うふふ、これは年越しそばも期待できそうですわね。……あら、そうは言ってもまだまだ時間がありますわね……先生♥」

乳首の勃起も浮き上がるシャツ一枚のハルナに流し目を送られ、食欲を満たした後はすぐに性欲を満たす。

片付け終わったテーブルに手をつかせ、シャツをめくるとすぐに白い尻が丸見えになった。

風呂上がりで髪も解いた、自宅のような寛いだ格好のハルナに肩越しの笑みを向けられ、チンポを挿入する。

「んっ、ふっ♥」

まだ固い膣を配慮しながら準備運動からやり直す。

ゆったりとした立ちバツクを続けるうちに、合図のように尻尾が持ち上がり腰に巻き付いてきた。

すっかり激しく犯してOKの合図を覚えたハルナの尻を褒めるように撫で回し、拍手のように肉を打ち鳴らして腰を強く振る。

「んああああっ♥」

肺から絞り出されるような苦悶にも似たハルナの善がり声に、ちやり、ちやり、とピアスが強く揺れる音と肉のうち合わさる音、濡れたマンコがかき混ぜられる卑猥な水音が混じり2人だけの即興リサイタルが開催された。

「んっ♥ あうっ♥ うっ♥」

ぺたりと手のひらをテーブルについて、悶えながら快楽を受け止めるハルナ。

苦痛に感じて居ないことは、尻尾の先が愛おしげに私の腰の裏をさすっている事から明らかだ。

リビングの光に照らされたハルナのアナルを良く観察しようと尻たぶを払ってシワの端に指を這わせる。

ぎゅ、と尻尾で軽く締められるが、たしなめる程度なので腰をパンパン打ち付けながらハルナのアナルで遊ばせてもらった。

「うっ♥ うっ♥ うっ♥」

早くもセックスに慣れたハルナが一番心地よさそうにする強さで腰を振り続ける。

単調な動きではあるが、ハルナから腰をクイクイと振ってくれるので初心者学びを楽しませて貰える、私にも嬉しいセックスだ。

「はあっ♥ ふうっ♥ せ、先生っ♥ そろそろ……つよいの、くださいまし♥」

「うん、分かったよ」

パン！ と尻たぶが波打つ位に強く当たり、素早く抜き差しを始めてハルナを絶頂に追い詰める。

「出すよっ」

「どうぞっ♥ くださいっ♥ 一番奥っ♥」

切れ切れの甘い声と共に、ハルナがおねだりしてくれるので勿論膣

奥で射精する。

「ああっ♥　でて、る……♥　ん……♥　不思議と、美味しいという感じがしますわ……♥」

私が楽に射精できるように、ハルナがピンと脚を伸ばして腰を上げてくれるのに甘え、オナホのように尻を掴んで無遠慮に注ぎ込む。

ハルナはしばらく余韻に浸ったあと、時計を見上げた。

「ああ……♥　まだまだ時間はたっぷりありますわね……♥　先生、23時半までしましうか」

「ハルナが大丈夫なら、喜んで付き合おうよ」

寝室に戻り、今度は対面座位で挿入した。

「うふふ……♥　ベッドの上で抱き合っていると、少し照れてしまいますね♥」

「もつと凄いことを沢山したけどね」

「それとこれとは別、ですわよ?」

ハルナは柔らかく笑うと、私と両手を恋人つなぎで指を絡め、尻尾も腰に巻き付けた。

更には翼竜のような羽を私の背中にくっつけて全身で包み込むように私に抱きつく。

「愛する先生との特別な一夜……全力で楽しませて頂きますわ♥」

楽しそうに笑いながら自分からキスしてくるハルナと、ゆったりとしたセックスをして時間を潰した。

裸にシャツ一枚のハルナと、肩を並べてミモリが汁と麺を用意してくれていた年越しそばを啜る。

「はあ……シンプルながらしっかりと旨味を感じるお出汁の味、作り置きとはいえ未だ香る蕎麦……良いものですわね……」

「うん、すごく美味しいね」

セックスの時のようにうっとり年越しそばを味わうハルナを微笑ましく見つめながらの夜食。

そして、食べきった辺りで時計を見た。

秒針が時を刻むのを無心に見つめながら、傍らのハルナを抱き寄せ

て温める。

そして、全ての針が一番上に達した。

「あけて……」

「おめでとうございます♥」

私たちは見つめ合って笑った。

そして、どちらからともなく唇を重ねる。

「うふふ……もうすぐですわね。先生、コーヒーマルの準備はよろしいかしら？」

「うん、カップと豆もまとめて置いてあるよ」

「では……寝ましょう！」

目をキラキラさせたハルナが、子供のように腕を引いて私を寢室に連れていく。

精液と愛液、少しの破瓜の血を吸ったシーツを剥がし、普通に暖かいシーツを引き直して一緒の布団に入った。

「うう……どうしましょう。夜明けの少し前に合わせて起きられると良いんですけど」

「2人で端末の目覚ましを沢山設定しておこうか」

「そうですね。先生もお願いします」

ウキウキしながら、布団の中でアラームを設定し……手をつないで眠った。

しこたま射精したせいとか、チンポがイライラすることもなく眠りについた。

「……んせい……先生、先生！ 起きてください！」

「んあ……もう朝？」

「勿論まだ夜明け前ですわ。結局アラームの寸前に起きてしまいました」

毛布をマントのように纏う、子供のようなファッションでベッドの傍らに立つハルナが、私の身体を揺すって起こした。

「では、お願いいたします」

「はあい……」



台所に立ち、ハルナの選んだ豆をゴリゴリを挽く。

久々の挽きたてコーヒーの匂いに少しずつ目が醒めてきた。

ハルナはまだ子供のように毛布にくるまって、目をキラキラさせてコーヒーを見つめている。

「コーヒー粉はザラメより少し細かめとされていますわ。……そう、そのくらいでお願いします」

シユンシユンと湯が沸き、フィルターにコーヒーを入れようとした所でも、

「あ、ペーパーフィルターは湯通しを！」

そんな調子で色々と指導を受けながら、なんとか美味しいコーヒーを入れる事に成功した。

芳醇な香りを放つコーヒーをカップに注いでリビングに行くと、ハルナが毛布を脱いでカーテンを開け放っている。

元旦の空は晴れ渡り、夜明けの濃紺が初日の出によって明るく染まっていく所だった。

「ああ……とても良い初日の出ですわ！ さあ、先生！ 今こそ、夜明けのコーヒーを！」

シャツ一枚で寒いだろうに、窓辺に立ったハルナは輝く朝日にも負けない笑顔でこちらに手を伸ばした。

「さ、どうぞ」

「ありがとうございます。では、早速……」

すう、とコーヒーの匂いを嗅ぎ、フェラのように丁寧に唇をカップに当ててコーヒーを嚙下するハルナ。

「うふふ……黒く、熱く、甘く。例えようもなく甘美なお味ですわ。一生の思い出が、もう増えてしまいましたわね♥」

昨日からセックスとシャワーを繰り返して化粧も落ち、髪型も全く飾らないハルナだったが……

初日の出に照らされて透けるシャツ一枚向こうの裸体と、輝く銀髪、何より満面の笑顔を浮かべた美貌は見とれてしまうほどの美しさで、私の視線を奪った。

「今年も、来年も……末永く、よろしくお願いいたします、先生♥」

休日は寝坊しがちな私ではあるが……新春の爽やかな朝日に照らされてコーヒーを啜るのも、ハルナとなら悪くない。  
私たちはゆつたりと最高の味を堪能するのだった。

## サンタさんに近づく一步（ハナエ）

「ふう……」

クリスマスの翌日。ハナエがシャーレの執務室の机におっぱいを載せてため息をついた。

普段とは違うリブ生地の手ターターはハナエの巨乳のラインをくつきりと出し、その重量感と柔らかさを見るものに良く伝えてくれる。

チンポをイライラさせながらそのおっぱいを眺め、声をかけた。

「どうしたの、ハナエ？」

「先生、やっぱり私はサンタさんになれないんでしょうか？」

本気で言っているので困りものだ。

「昨日、サンタさんからプレゼントと一緒にカードをもらったんです。『良い子にプレゼントを』って。でも、サンタさんって大人じゃないのですか？ 私は……今のままではサンタさんになれないのではと……」

それは、ある意味本質的な気づきだったかもしれない。

「まあ、想像されるサンタさんは大人だろうね……」

そのカードとプレゼントを置いたのは私だが、これまでハナエにサンタさんとしてプレゼントを上げて居たのは多分生徒の誰かなので大人とは限らない。

何にしても、ハナエが今まで知らなかった事に興味を持って成長するのは歓迎すべきことだろう。

「先生！ 私、大人になりたいです！ どうしたら良いですか？」

「うーん、一朝一夕では無理だろうね。色々なことを経験して、知って行くのが良いんじゃないかな」

「経験かあ……どんな事したら大人になれますか？ 教えてください！」

はいっ、と元気よくハナエが手を挙げると、おっぱいがぶるんと揺れる。

よし、セックスしよう。

と意気込んだは良いが、ハナエの扱いはこれで難しい。

勃起チンポをいきなり突きつけたりしたら、チエンソーを取り出し

て切除すると言い出しかねない。

「じゃあ、今日は私とセックスしてみようか」

「セックス？ それって、なんですか？」

そこで、正攻法で行くことにした。

「男と女が子供を作る行為のことだよ」

「子供を!？ それは……大人ですね！ でも、練習で子供を作るなんてだめですよ？」

無知なハナエが、普通に正論を言う。

「大丈夫だよ。一時的に子供ができなくなる薬を使つてするからね」

「それなら大丈夫ですね！ ……でも、どうしてそんな薬があるんです？」

「セックスは気持ちいいし、好きな人と愛を確かめあう行為でもあるからだよ。私もハナエが大好きだからね」

「す、好きだなんて……そんなにまつすぐ言われたら恥ずかしいです……」

ポツと顔を赤らめて恥じらうハナエ。

「どうかな？ 知らないことを経験してみるのが大人への第一歩だよ」

ハナエの手を両手で包み、目を見て訴えかける。

「そ、そうですね……じゃあ、一回だけ……セックスしてみます。よろしくお願いします、先生」

こうして、私の説得によりハナエは今から処女セックスをすることになった。

シャーレの居住区にあるソファは背もたれを倒してベッドに出来るようになってる。

そのベッドで、昨日……というか今日の初めにセリナとクリスマスセックスをしたばかりだ。

「わ、ふかふか。でも、お昼寝するにはまだ早いですよ？」

何も知らないハナエが、ベッドのクッションを押して柔らかさを確かめている。

私はその隣に座って腰を抱き寄せた。  
手を上に滑らせて、ハナエの横乳を撫でる。

「ひゃっ、くすぐりたいです、先生」

肩をすくめて半笑いでこちらを見上げるハナエの様子を観察しつつ続ける。

「いきなりセックスをしたら痛いからね。こうして触れ合って準備をするんだ」

「そ、そうなんです…でも、お、おっぱいを撫でるなんて、いやらしい事じゃないですか？」

「好きな人同士の行為だから良いんだよ。建前と本音を使い分ける、それも大人だね」

ハナエのおっぱいは服の上から押し込むと確かな弾力を返してくれる。

「そ、そういうもの、ですか？　うう…：…なんだか、大人って思ったのと違うかもしれません…：…」

暴れたりしないのを確認して、両乳を手で持ち上げた。

みつしりと詰まった水蜜桃は重く、ハナエの体温は暖かい。

完全に胸に意識が行った所で、ハナエの耳を食んだ。

「んっ♥」

なにかにつけて子供らしいハナエの、始めて聴く色っぽい声。とてもチンポがイライラする。

「何するんです、先生？　そんなとこ…：…くすぐりたいですよ」

子供がイヤイヤするように身をよじろうとするが、特に強い抵抗ではない。

耳たぶから首筋へと唇を這わせつつ、指でスリスリと胸の頂点をさすって乳首を探る。

位置を確信出来たところで、セーターの上から乳首を摘んだ。

「ああっ♥」

ハッキリと、甘い声が上がった。

ハナエの肩が上がり、背がぐつとのけぞる。

それをいなしつつ、更に乳首に刺激を与え、首筋に吸い付いて反応

を引き出していく。

「あうんっ♥ 先生っ♥ これ、なんか……へんんっ♥ です♥」

戸惑うハナエに、淡々と快楽を叩き込む。

指の間でむくむくと乳首が勃起し、ハナエの身体が産まれて始めてのセックスの準備を整えていく手応えを感じる。

「あ、あの、先生？ さっきから、背中が、ぞくぞくっ♥ って、電気が走ったみたいで♥」

ちゆる、とハナエの首筋から口を離した。

「それは、気持ちいいって感覚だよ」

「き、気持ちいい？ べ、別にこんな……それに、お胸をいじられて気持ちいいなんて、んひっ♥」

ぎゅつと乳首をつねられるとハナエは簡単にメスの声を上げた。

「どう？ くすぐりたいとは違うんじゃない？」

ぐっ、ぐっ、と定期的に乳首を押しつぶし、ハナエ好みの刺激を与える。

「それっ♥ だめっ♥ やめっ♥ あ、わかっ♥ わかり、ましたからっ♥ 気持ち、いい♥ 気持ちいいですから♥」

あつという間に陥落し、乳首愛撫をやめるとハナエはクタツと脱力してしまった。

「これで、また一つ知らなかった事を知ったね」

「うう……別にこんな事を知りたかったわけでは……」

「でも、素直に認められなかった事を認められたよね。乳首、気持ちいい？」

ハナエは、ついと顔をそむけてしまう。

「き、気持ち……いいです……」

恥じらいと、先程までの快楽を反芻するようなうっとりとした艶っぽい声。

ハナエは確かに大人の階段を一つ登っていた。

「ハナエ、少し大人っぽくなったね」

さっと私の方に向き直って、にぱっと口を開けて笑顔を見せてくれるハナエ。

「ホントですか！ えへへ、やったあ！」

その童女のような笑みを浮かべたハナエの乳首を押しつぶす。

「ひんっ♥ な、何するんです？」

「ハナエも慣れて来たみたいだから、次に進もうね」

ハナエはハッ、となつてセックスの途中だったことを思い出した。

「そ、そうでした。次は……？」

乳首を虐められて恥ずかしい事を言わされたハナエが警戒しつつ訊いてくる。

「じゃあそろそろ裸になろうか」

私はさつと服を脱ぐ。

「は、裸っ!? うう、それは……」

ハナエが、勃起した乳首をかばうように胸に手を当てた。

服の上から乳首をイジられただけで今の状況なのだ、これ以上を恐れる気持ちがあるのだろう。

その前に、私から全裸になってしまう。

「さあハナエも脱いで脱いで」

「ひゃあっ!! もう裸になっちゃったんですか!? お、お股の所、腫れていませんか？」

「これはね、可愛い女の子とセックスがしたくなると男はこうなるんだよ」

産まれて初めての勃起チンポを凝視し、ハナエは自分の股間にそつと手をやった。

「ハナエも、さつきから股間がムズムズするんじゃない？」

「あう……それも、大人の知識なんですな……」

「そうだよ、ハナエの身体も私とセックスがしたくて準備を初めているんだ」

あまり恥ずかしい方に振り切れると、即座にチエンソーが出てくるかもしれないので勃起チンポをハナエの眼前にかざしつつ慎重に待つ。

「うう……ぬ、脱ぎます……」

ハナエは、顔を真っ赤にして自分の性欲に従ってくれた。

冬用の暖かそうな肌着も脱いで、ベージュの地味なブラジャー一枚になる。

ちろつと私を見てくるが、無言で笑顔を返した。目をギョツと瞑って、スカートのホックを外す。

クリスマスカラーのチエックのスカートの奥から、白いタイツに包まれた下腹部が現れた。

「さ、下着も脱いでみようか」

「は、はい……」

緊張と興奮で胸元まで紅潮したハナエが、そつとブラのホックを外すと、ゆつさりと重量物が動く。

開放されたハナエの生乳は、15歳とは思えぬその大きさにふさわしい乳輪と勃起乳首を頂いている。

「おお……綺麗だよ、ハナエ」

「ううう……恥ずかしい……」

これ以上は勘弁してくれと潤んだ目で訴えてくるハナエに笑顔を返すと、根負けしたようにタイツにも手をかける。

プルプルとしばらく震えてじつとしていたが、一気にガバツと下ろした。

色気も何もない脱ぎ方だが、下着も一緒に取り去りハナエのマンコが目飛び込んでくる。

そこはハナエの髪と同じ薄紫が散り散りに茂る天然の花畑だった。下の毛を整えるという考えがまだ無いお子様の、秘密の花園。

少しだけふつくらと、唇のように膨らみがある大陰唇の周りにまでヒゲのように生い茂っている。

まだ誰にも立ち入る事を許されるべきではない乙女の禁足地は、禁断の罪を犯そうとする愛液の匂いを放っていた。

「よく頑張ったね、ハナエ。じゃあ、少しゆつくりしようか」

素晴らしいストリップを見せてくれたハナエに近づき、裸と裸で抱きしめる。

「あつ……」

暖房はつけているとはいえ真冬で肌寒い中、お互いの身体の温もり



が単純に心地いい。

「なんか……変な感じですよ。はだかんぼで先生とお昼寝なんて」

私の腕の中で、ハナエが静かに微笑む。

ハナエからもそっと私を抱きしめてくれて、むっちりとした女の子の身体と密着した。

勃起チンポをハナエの股間に宛てがい、素股の準備をする。

「んっ……♡ お、お股、擦れちゃってます……♡」

「そうだよ。セックスの本番は、私の棒をハナエの中に入れて擦り合うんだ」

「な、なかに……!? こんな、熱いのが私の中に入っちゃうんですか!?」

怖がるように私にしがみつき、ハナエのデカパイが押し付けられる。

その極上の感触と、私を見上げてくるハナエの不安げな顔の下にある勃起乳首が、これからハナエとセックス出来るといふ喜びを実感させた。

「んんっ♡ お、押し付けなさい！ 何か、ここ、敏感で……」  
チンポが勃起しすぎてハナエのマンコを押し上げてしまった。

ぷにぷにの外陰唇は、割れ目からしっとり愛液を滲ませて大人になる時を期待して待っている。

「じゃあ、少しずつ刺激して慣れて行こうね」

私は裸体のハナエを優しく抱きしめながら腰を前後に振り始めた。

「あっ♡ なんか、ぞくぞくっ♡ てします♡ さつき、胸を触られた時より、強いかも♡」

社交ダンスのように私の腰と肩に腕を回して、ハナエがセックスの快楽をじっくりと味わう。

愛液の分泌はハッキリと増え、コリコリとしたクリトリスの勃起も感じられるようになってきた。

「じゃあ同時にしてみようか」

ハナエの背中を撫でながら、片乳を持ち上げて乳首を親指で弄ぶ。

「んっく♡ あ、すっ……♡ 一緒にすると、すっ……♡ 頭の中、

ばちばちって♥ 気持ちいいの、弾けてっ♥」

タオル地の心地いいベッドの上で、ゆつくりとハナエがメスの悦びを覚えていく。

くつついた身体が淫らな熱を帯び、快楽に時折痙攣する。

にち、にち、と音が立つほど濡らし始めるまで、あまり時はかからなかった。

「はぁ♥ はぁ♥ はぁ♥」

ハナエは小さな手で私にしがみつき、目蓋を伏せて乳首とマンコをイジられる快楽に息を荒らげている。

その刺激が単調になる一歩手前で、ぐいっと強く乳首を引っ張った。

「んつくっ♥ ううう♥ ああああーっ♥♥」

栓を抜いたように、ハナエの身体にわだかまった快楽が一気に抜けて絶頂をもたらした。

身長150cmの小さな体が私の腕の中で絶頂に震え、太ももとマンコでチンポを抱きしめてくる。

嵐に耐えるように、ハナエが私にしがみつく。

強い力だが私の腕を折ったりすることもなく、むっちりとした絶頂中のメスの肢体がチンポのイライラを高めてくれる。

じつとりと汗ばみ、犯されるのを待つばかりに出来上がった身体を優しく抱いて背中をさすり、ハナエが人生初の絶頂の余韻をゆつくりと噛みしめるのを待った。

「どう? 気持ちよかった?」

「ううう……き……やっぱり恥ずかしいですよ! でも……気持ち、良かったです……♥」

私の腕の中で、ハナエが身を振って恥じらう。

その仕草さえ今までとは違ってどこか媚びるような甘えが見えて、この可愛らしい生徒を今すぐ犯したくなった。

「まずは、この薬を飲んでね」

「これが、子供が出来ない薬ですか?」

「そういう事。はい、お水はこれね」

糖衣とかではない錠剤を、顔をしかめながら飲み下す。

顔をくしゃくしゃにして我慢するハナエにいつも通りの子供らしさを見ると、その身体を今から抱くという期待感がいや増す。

「じゃあ、本番をやってみようか」

「はい……んっ♥」

ハナエの唇に、軽くキスをする。

目を見開いて驚いていたハナエが、とろりと目尻を下げて私を受け入れ、音を立てて唇を吸いあう。

そのまま少しの力をかけるだけで、ころりと転がって私の下になった。

むっちりと肉がつきつつも小柄なため細さも感じるハナエの脚を、そつと開いていく。

M字に開脚したハナエのマンコは、紅く充血した小陰唇をスジからはみ出させて男を誘っている。

大人の階段を駆け足で登っていくハナエに感慨を抱きつつ、誰にも触れられる事無く私のチンポを待っていたスジを左右から指で開く。

健康的なピンクの粘膜にトロリと愛液がこぼれ、十分濡れそぼっている事が見て取れた。

「うん、これなら大丈夫かな。力を抜いていてね、ハナエ」

「はい……先生、私に、セックスを……教えてください♥」

ハナエは私をまつすぐに見つめ、信頼と快樂への期待で瞳を潤ませている。

その思いに応えるため、まだ狭いハナエの膣口にチンポをあてがい、ゆっくりと侵入する。

ハナエは柔軟な膣肉をしていて、狭いが押せば押すだけ拡がってくれた。

これならばと、腰を一気に突っ込む。

「あ、っ、うう！ く、う……はあ、はあ……お、お腹が、苦しいです……」

ハナエは眉をしかめシーツを握りしめるが、それは破瓜の痛みで

というよりはチンポの大きさに驚いているようだった。

小さな腰を掴み、一番奥までずっぽりとチンポをねじ込んでいく。

「あ、あ、あ、はいつて、来る……！ わ、私のお腹の中、先生でいっぱいになってます……すっごく、大きい……」

吐息のような切れ切れの声は色っぽく、男の興奮を煽る。

小柄な処女マンコに、私のチンポがすべて飲み込まれた。

ハナエの身体を見下ろすと、息も絶え絶えに震えながら自分の下腹部を見下ろしている。

その震えが見事な胸をも震わせて、手が勝手に伸びて掴んでしまった。

「ん……♥」

吐息に甘いものが混じったのを聞き逃さず、ハナエの乳首を優しく弄る。

「はあ……くぅ……♥」

目を閉じて耐えるハナエから、少しずつ力が抜ける。

ハナエのすらつとした下腹部を撫で、陰毛をちよりちよりと弄びつつクリトリスを皮の上から触ると、

「あっ♥」

更にハッキリとした声が上がった。

「先生……それ、気持ちいい……♥」

うっとりとして、薄く目を開いたハナエが囁いてくる。

いつもの快活なハナエからは想像も出来ない、しっとりとしたセックス用の声音に促され、私の我慢汁をハナエの膣奥に撒き散らしてしまった。

「ハナエ、動くよ」

クリと乳首を弄りつつ、我慢の限界に達した私はハナエを本格的に犯し始めた。

腰を引こうとすると、ハナエの膣肉がみっちり付いてきて刺激の強い密着感がチンポを襲う。

「んんっ♥ お腹の中、すごい、かき回されてるっ……♥」

くぐもった声を聴きつつ、力をかけて腰を引き、ぷりぷりと新鮮な

膣肉がカリを刺激して奥に戻っていくのに射精を促され、歯を食いしばって我慢する。

パン！ と尻肉と下腹部を打ち付けてまた奥までチンポを突き刺す。

セックスにとっても適したマンコに、処女を相手にする余裕が奪われる。

「ハナエ、セックスの才能があるよ。すごく気持ちいい」

「はあ、はあ……そう、なんですかあ？ えへへ、嬉しいです……♡」

セックスでかいた汗で髪を張り付かせ、ビンビンに勃起した乳首を隠すこともなく晒しながらも、ハナエの無邪気な笑顔は普段の面影を残している。

「先生も、すっごく、セックスお上手です……♡ お腹の中、いっぱい、ひっかくの、ぞくぞくして……♡」

処女を散らされ破瓜の血を尻に伝わせた状態で、ハナエは既にセックスの気持ちよさに目覚め始めていた。

急速に女として目覚めていくハナエに引きずられるように、私は腰を振る。

「あうっ♡」

腰を引いて、また突っ込む。

単調な動きでもハナエの膣肉のうねりが加わると一突き一突きが射精に近づいていくような快感が伴う。

「あっ♡ はあんっ♡ あんっ♡」

鼻にかかった、セックスする女の声。それを、私がハナエに上げさせている。それだけでも今すぐ膣奥に射精したい気分だったが、ハナエが十分満足するまで堪える。

もはや愛撫は不要とクリトリスから手を離し、欲望のままにハナエの胸に顔を埋めて乳首を吸った。

「ふあんっ♡ あああっ♡ んあぁーっ♡」

乳首をコロコロと口の中で転がし、もう片方の乳首は抓るような強さで弄ってもハナエの声は甘く大きくなるばかりだ。

膣もきゆうきゆうと締め、本当に乳首で気持ちよくなっているの

が伝わってくる。

がっしりとハナエの身体にしがみつき、乳首もマンコも貪って必死に腰を振る。

体と体がぶつかり合い、手と口の中でハナエの大きな乳房がゆさゆさと揺れ、頭上からはひっきりなしにハナエの甘い声が降り注ぐ。

「はあっ♥ ああうっ♥ んんっ♥」

ハナエの喘ぎ声も段々と切羽詰まってきて、膣の締めりも更に強くなってきた。

小さな手が私の後頭部に添えられ、脚がやんわりと腰に絡みつく。

先生と生徒、大人と子供である事を忘れ、つがいの男と女として必死に腰を振りあい、共に絶頂へと登っていく。

「んあああーっ♥♥」

一際大きな声と共に、握るように強く膣が締めり……ハナエを強く抱き顔を胸に埋めたまま、私は射精した。

ハナエの絶頂は深く、長く、射精している私の精液を搾り取るように膣がうねり続けている。

「はあっ、つく、ううっ♥ ああ♥」

呻くようなメスの声は、胸に顔を埋めているとハナエとは思えない程に悩ましげだ。

ゆつくりと顔を上げて、ハナエのイキ顔を見る。

眉根を寄せて耐えるように顔をしかめながらも、瞳は興奮にキラキラと輝き、口元からはよだれが垂れていた。

「はあ……はあ……♥ せんせい……っ？」

どこか夢見心地のハナエの声は、喘ぎ声を上げすぎたせいでかすれている。

その力の抜けた笑みにもう一度犯したくなってきた、またハナエに覆いかぶさって唇を塞ぐ。

「んっ♥」

射精しながらも勃起を取り戻し、腰を振り始めた。

「んっ、んっ♥ んんっ♥」

ハナエは文句もなく、当たり前のようにまた私を抱き返し、セツク

スが始まる。

2人でゆつくりと大人の階段を登りきるまで、さらに2回の射精が必要だった。

「はあ……♥　これが、大人のするセックスなんですね……♥　すごかったです♥」

ソファベッドのタオル地のシーツを数枚貫通するほどの精液と愛液を垂れ流し、私たちは裸で抱き合っていた。

「気に入ってくれたみたいで良かったよ。ねえ、ハナエ。一度だけじゃ分らない事もあるだろうから、これからも……」

セフレにしようと誘う私の口に、ハナエが指を当てて黙らせた。

「もうっ、恥ずかしい事言わないでください！　ううー、先生とはだかんぼで抱き合うなんて、またドキドキしてきました……も、もう帰ります！」

ぴゃーと私から離れ、そそくさと服を着始めるハナエ。

「うっ！　お、お股から先生のが垂れて気持ち悪いです……」

「まあ……頑張って」

「先生のせいですよ！　うううー……」

赤い顔で手早く服を着ると、階段を登って出ていこうとする。

が、ドアの向こうから頭を上半分だけニョキツと出してこちらを見た。

「ま、また今度……私がセックスしたくなったら、付き合ってもらえますか？」

目元まで紅くなりながら、壁に遮られたくぐもった声でお願いされた。

「うん、勿論。何時でも言ってね。今すぐでもいいよ」

「こ、今度！　今度ですから！」

エレベーターに乗って出ていく音を聞きながら、また一人セフレが増えた充実感に伸びをするのだった。

## お腹にぬくもりを（ジュンコ）

「連休が終わっちゃうー！ ヤダヤダー！ 気晴らしになんか付き合ってよ先生！」

「えっ怖い……どういことなの……」

モモトークで正月休みが終わる事を嘆いていたと思ったらジュンコがシャーレにやってきていた。

「何よその態度！ 先生と私の仲じゃない！ なんとかしてよ！」

ルワゾー・ブツレの正月限定制服である黄色の袴姿だ。髪の毛と合わせて賑々しい色合いが元気なジュンコに似合っている。

「そうだねえ……じゃあデートしようか」  
「えっ」

強引に誘いをかけておいて、ジュンコは軽く目を見開いて頬を赤らめた。

「じゃ、じゃあ……うん。デート、行きましようか……」

そういうわけで、正月連休最後の日はジュンコとのデートをするこ  
とになった。

キヴオトス中心たるD・Uは冬には雪が降る地域らしく、街の路肩には雪が積まれている。

私は刺すような寒さを感じているのだが、若さか、単に肉体が強靱なのか、ジュンコは袴姿の下に着込んでいるということもなく細い腕が袖から覗いている。

未だ片付けられていないクリスマスツリーを横目に雑談しながら、  
D・U・地下鉄で繁華街へ出てカラオケへ。

軽く歌を歌い、早速ジュンコはハニトーに舌鼓を打つ。流石にこれだけで終わるつもりはないようで、適当な所で切り上げた。

次はインドアスポーツ施設というのか、トランポリンや滑り台なんかが遊べる所に入る。

普段のスカートと違って袴にパンチラはないので、それを理由に選んだのかと訊いたら、



「ば、バカ！ セクハラ！」

と言つてぼすぼす殴られた。袴越しに見上げるジュンコの尻も中々良く、チンポのイライラを感じた。

店内にはオリジナルブランドのミックスジュースが売られていて、ジュンコは笑顔でストローから啜っていた。

そんなこんなで食べ物を食べたり遊んだりを繰り返しているうちにすぐ日は傾き、正月連休最後の日が暮れる。

百鬼夜行の屋台通りで、私とジュンコは腕が触れ合う程の距離で並んで歩いていた。

「人が多いわね……私達と同じなのかしら？」

周りを見回してみると犬猫モニタだけでなく、ヘイローを浮かべた生徒たちの姿も目立つ。

もし本当に私達と同じであるのなら、中々興味深かった。

「連休が終わるのが寂しくて……つてことだとしたら、ちよつと面白いかも」

提灯越しに照らされるジュンコの姿は夜の闇で彼女自体が陽の光のように浮かび上がって見える。

正月という季節にセンチメンタルに大人びた視線を雑踏に向けているジュンコの、腹が鳴った。

「……………」

「……………」

「ち、ちちちち違うー！ 違うんだつてばー！」

目を丸くして取り乱すジュンコをなだめて、そろそろお腹を空かす頃なので仕方ないと慰めたら、ぼかぼかと派手に殴られた。

近くの屋台でお汁粉を買う。あんこの汁に浮かぶ丸い餅をキラキラした目で見つめたジュンコは、爪楊枝でそれを刺すと私を見上げ、目を細めて微笑んだ。

「はい、先生。一個あげる」

自分の取り分は必ず確保するジュンコのこの発言に意表を突かれていると、ジュンコが眉を吊り上げた。

「つて、なんでそんなに驚くの！ た、たまたま多く入つてたの！」

ジュンコは手に持った爪楊枝の刺さった餅を私に食べさせてくれようと腕を上げたままなので、肘先ほどまで袖が上がっていた。餅に視線を向けると、その先のジュンコの胸元も目に飛び込んでくる。

袴姿では普段よりも襟ぐりが広く、チラリと鎖骨が見えるのが不意打ちでチンポのイライラを高めてくる。

「どうかこれ、先生が買ってくれたものだし……それに、今日は、あの……デート、してくれただし……」

提灯の放つオレンジ色の暖色系の光の中でも、ジュンコが顔を赤らめたのが分かった。

「ありがとう、ジュンコ」

お言葉に甘えて、垂れないうちに餅にかぶりつく。

お汁粉を二人で食べながら屋台通りをゆっくりと歩いた。丁度端についた所で食べ終わり、容器回収用ゴミ箱に捨てる。

「もう、こんな時間ね……」

日が落ち、頭上には星が瞬いているが街の灯りは消えず、人通りも切れることはない。

「じゃあ、最後の場所に行こうか」

「えっ？ まだどこか行くの……い、良いけどさ」

首をひねるジュンコの細い腰に腕を回し、抱き寄せる。

「えっ……!?!」

ジュンコの大きくクリつとしたアーモンド型の瞳が、戸惑いに揺れる。

先程よりも頬が赤く、眉がハの字になって困惑を隠せないながらも、全く抵抗無く腰を抱かれたままに人気の少ない方へと身体を密着させて歩いた。

腕の中で、ジュンコの小さい体が緊張に固くなっているのが分かる。

うつむいたままで、尖った耳まで赤くしているジュンコは前を見ていないので分からないようだが……目的地はもう見えていた。

それは、歓楽街にそびえる数々の城だ。食欲を満たす屋台通りのわ

ずか2つ隣の通りには、既にその城の領域となっているのが百鬼夜行らしき、なのかもしれない。

「さ、ジュンコ。入ろう」

「う、うん……んん!」

ジュンコの目の前には、休憩時間に対する値段の書かれたシンプルな看板が掛かっている。

身体を強張らせているジュンコを、ほとんど持ち上げて運びながら、そこに入った。

部屋を選んでいると、腰のあたりにギュツとジュンコが強く抱きついて来る感触がある。

今日のために丁寧に整えられたジュンコの髪をゆつくりと撫でながら部屋を決定し、鍵を得る。

部屋へと歩きだすと、ジュンコは抱きついたままちやんと自分の脚で歩いてくれた。

押し付けられた薄い胸から、とく、とく、とジュンコの高鳴る鼓動を感じる。

ジュンコが処女を散らすラブホテルの一室には、すぐにたどり着いた。

「ジュンコ、先にシャワー浴びる?」

「うん……えっ?! えっ、しゃ、シャワー?」

丸くて大きい、セックス用のベッドを前にしても私にしがみついたままのジュンコの髪を手で梳きながら話しかけると、弾かれたように動き出す。

「私は浴びずにするのも良いと思うけど、すぐ始める?」

「あつ、あ、ば、バカッ! 浴びるに決まってるじゃない! 今日、あの、汗、かいたし……」

カラオケやトランプで遊んだのは濃厚なジュンコの匂いを堪能させてくれるためなのかと期待したが、単に考えていなかっただけのようなのだ。

「そう? ジュンコの匂い好きだから、少し残念だよ」

「へ、変態! 変態! もう! そこで待つてなさいよ!」

顔を真っ赤にしながら、セックスの準備のためにシャワーを浴びに行くジュンコ。

ざー……という音を聞きながら、部屋に備え付けの機能によりシャワー中の姿を壁に映し出す。

音声はないが、手を頬に当てて顔を真っ赤にしながら頭からシャワーをかぶるジュンコの姿がそこにあつた。

ツインテールを解いた全裸で、全体的に薄い身体つきだ。

ツンと澄ましたおっぱいは尖っていて、比較的大粒の乳首がお湯を弾き揺れている。

ハニトーやお汁粉が収まっているとは思えない折れてしまいそうな位に細い腰と、シユツとスリムな尻が目を引く。

髪と同色の温かみのある赤の陰毛がチヨロチヨロと茂る股間の下の空間、いつも走っているためか脚が鍛えられ、細いが筋肉によってムチムチ感を感じもする太ももに囲われた綺麗な三角形をゆっくりと鑑賞した。

どつかとスケベイスに腰を下ろしたジュンコは、年相応に控えめなスジマンをくぱあと払げてシャワーを当てる。

可愛らしい指先がマンコを洗い、ボディソープで隅々まで洗浄した。

腰を浮かせるまでもなく下が空いている事に首をひねったジュンコだが、意味が理解できなかったのだろう、そのままアナルにも指をつぼつぽと入れてボディソープで匂いを完全に消すべく奮闘する。

全身を洗い終わってもシャワーを出しっぱなしにして俯いていたが、キツとこちらに視線を向けて顔を両手ではたく。

口で「よしっ!」と言っているのが分かる、その処女セックスの覚悟を決めた表情に、盗撮機能をオフにした。

「ふう……綺麗で良いシャワーだったわ。先生もどう?」

なんでも無い風を装うジュンコが、バスローブと頭にタオルを巻いて出てきた。

「うん、じゃあ私も浴びてくるね」

可能な限り早く全身を洗い、出てくる。

「わああっ!?! 先生早すぎない? もつとちやんと洗いなさいよ!」  
ベッドの上で正座していたジユンコが、腰に勃起テントを張ったタオル一枚の私をみてのけぞった。

「だって、ジユンコとセックス出来ると思ったら待ちきれなくて」  
後ろに体勢を崩し尻もちをついたジユンコが、しゅぽつと瞬間的に赤面する。

「あ……………」

ぺたぺたと裸足でベッドまで歩き、スプリングをきしませてベッドに乗る。

バスローブから太ももがあらわになっているジユンコに近寄った。  
いつの間にか、風呂上がりには無かった角の根本のリボンが巻かれている。

「リボン、可愛くてよく似合ってるよ」

鼻が触れ合う程の距離で見つめ合い、褒め言葉を投げかける。

「あ、あり、が、と……………」

こうして、ジユンコのお汁粉味のファーストキスはラブホテルで交わされた。

何の抵抗もなく、軽く押す私の力でジユンコが寝そべる。

上から軽くのしかかりながら、そのままキスを続けさせてもらおう。  
シャワーで温まった小さな身体が、かすかに身じろぎをしてしつくり来る位置を探していた。

「ん……………」

舌を入れてみても、従順に唇を開けて私を迎え入れてくれた。

少しだけキスを休み、唇をくつつけながらジユンコに囁きかける。

「大丈夫、ジユンコ? これからすることは分かってる?」

私の問いかけに、ジユンコは真つ赤な顔で眉をハの字にして困惑した。

「な、なによ……………分かってるわよ。セックス……………でしょ? さつき  
言ったじゃない。は、恥ずかしいんだから早く……………キスの続き、  
してよ……………」

紅色に煌めくジユンコの縦長の瞳が、期待と不安に揺れている。

「ジュンコがすごく可愛いから、私も止まれないと思うけど……ごめんね。ちゃんと気持ちよくするからね」

「うん……お願い……リードして……先生……♥」

そのまま、ジュンコがまぶたを閉じる。

正式にセックス許可の出た生徒を前に、私のチンポのイライラも最高潮を迎えていた。

再びジュンコの唇を奪い、より大胆に小さな口内を舌で蹂躪する。

「あむっ♥ んうっ♥ れる……♥」

強い刺激に耐えかねて、ジュンコの細い腕が私の背中に伸び、抱きしめられた。

バスローブ一枚越しに感じる小さな乳首が押し付けられ、チンポとジュンコの下腹部が密着する。

頭に巻いていたタオルを取り払い、ストレートロングのジュンコの髪を晒した。

軽く結わえていた髪が、唇を押し付け合うような激しいキスの動きで解けていく。

髪の乱れがジュンコの貞操と同期しているように、だんだんとキスに慣れて向こうからも舌を動かしてくれるようになる。

緊張がほぐれてきたジュンコのツンと尖った乳首に手を出した。

「んっ♥」

大粒の乳首に指を引っ掛けて、軽く弾く。

キスに乳首愛撫を混ぜるだけで、ジュンコの喉からはひっきりなしに甘い声が漏れるようになった。

バスローブの前をそつと開き、裸体をあらわにする。

ジュンコはキスと乳首に夢中で、目を閉じたまま快樂に浸り続けた。いた。

陰毛もまだ生え揃っていない、未成熟のマンコに手をだす。

まだスジでしかない大陰唇の割れ目に指を侵入させると、既にぬるりと愛液に濡れそぼっていた。

「ふーっ、ふーっ♥」

キスを繰り返す鼻の下に、ジュンコの熱い吐息がかかってくる

たい。

撫でる位の強さで、割れ目に指を上下に這わせる。クリトリスに指がかかるたび、

「んんっ♥」

と可愛らしい声を上げて腰を震わせ、徐々に股が開いていった。

「ジュンコは、ここにされるの好き？」

反応の良いクリトリス愛撫を集中的に行い、鼻が触れ合う距離でジュンコの顔を覗き込む。

「あつ、あ、ああつ♥ う、うんっ♥ そこっ♥ そこいいっ♥」

目をつぶって眉をしかめ、クリトリス快楽に集中するジュンコ。

くちくちくちくち、と速度を上げて、まずは駆け付け一杯というように、絶頂まで導いてあげる。

「はっ、く、ん♥ あ♥ あああうううううう……♥」

息をつまらせ、普段より低い声を上げ、獣のように長く呻きながら、ジュンコはクリトリスで絶頂した。

「はあっ♥ はあっ♥ はあっ♥」

絶頂でほとんど止まっていた呼吸が、肩を上下させながら再開される。ジュンコのぽっちりとした乳首も荒い息に合わせて上下した。

私の背中に回されていた手も、手のひらをぺったりと密着させて縋り付いてきている。

ジュンコの小さな体にセックスの快楽が馴染んでいくのをゆっくりと眺め、呼吸が落ち着いてきた段階で声をかけた。

「次は膣に指を挿れるから、力を抜いてね」

それとほぼ同時に、今まで意図的に避けていた膣口に指をかけ、小指を侵入させる。

「あ、うっ♥ は、はいつて、る……♥ 人差し指、これ？」

「ん？ 小指だよ？」

「え、嘘……こんなふつといのに……」

ちらり、とジュンコが薄目を開けた。首を起こし、股間を覗き込む。

挿入部が直接見えはしないだろうが、わかりやすいように小指だけを立てていたのでどの指が入っているかは理解出来たのだろう。

「ほんとだ……こんな、感じなんだ……先生の指だと、すごく……大きく感じちゃう……♥」

「大丈夫かな？ 痛くない？」

ジュンコは一瞬、きよとんと目を丸くした後で柔らかく微笑んだ。

「ふふ。平気よ、流石にこの位でどうにかなるワケないでしょ？」

私に大げさに気を遣われたと思ったのだろう、優しい笑みを浮かべているが……普通に、人によっては痛いと思われるもおかしくない行為なのだというのは、処女のジュンコに分かる訳はなかった。

「じゃあ、もう少し太い指を入れていくね」

「うん……ゆ、ゆつくり、優しくお願いね？」

行為の勢いは全くないが、一つ一つにジュンコの許可を得た上で処女を奪うことを許された身の上、というのももチンポのイライラを熱く保ってくれる。

挿入部が気になってしょうがないようだったのでジュンコの軽い身体を持ち上げ、ベッドのヘッドボードを背もたれにして枕をクッションに座るような姿勢にした。

見透かされて照れたように笑うジュンコに軽くキスをして、膣穴弄りを再開する。

「ほら、次は薬指だよ」

ぬるりと愛液に濡れた小指を引き抜き、薬指が小さな膣穴に埋没していく。

「あ……♥ ふとい……♥ 先生の指、お腹の中だとすごく大きく感じるわね……♥」

隣に座る私とお互いに腰を抱き合う姿勢で寄り添いながらも、マンコに指が挿入される所をじっと見つめるジュンコ。

「大丈夫そう？」

「うん……♥ 気持ちいい、かも……♥」

薬指に膣肉が絡みつき、ジュンコの気持ちいいマンコを否応もなく想像させる。

シャワーと興奮でホカホカに温まったマンコの中は愛液に満ち、ジュンコの呼吸に合わせて軽く蠕動している。



「じゃあ中指を挿れてみるよ」

「ん……♥」

そつと、ジユンコの股がより大きく開く。

つぶん、と抜いた薬指が濡れそぼり、ジユンコのセックスへの期待が大きくなっているのを教えてくれた。

膣が異物に慣れてきたのか、つぶつぶと心地よく侵入でき、中で軽く指を曲げてみた。

「あ、ああ……♥ そ、こ……♥ いいとこ、当たってる……♥」

ジユンコがうつとりと目を細め、膣の内部を透かし見るかのように股間を見つめている。

ついさつき私にお汁粉の餅を分けてくれた女の子が、セックスの快楽に酔いしれた淫らなメスの顔をしていた。

「綺麗だよ、ジユンコ」

「えっ？ な、なによ……こんな時に……♥ んっ♥ やあ♥ そこ、

ああ♥ されたら♥ 変な顔になっちゃう……♥」

ごく弱い力で、ジユンコのGスポを撫でるように刺激する。

オマンコで気持ちよくなっている顔を鑑賞されたジユンコは、急速に蕩けていった。

膣の中がさらに熱くなり、いく直前のように指をちゅうちゅうと絞るような動きで膣がうごめく。

「だめえ♥ なんか、すごいっ♥ すごいくるっ♥ と、とめて♥

せんせい♥ ほんとに、すごいくるからあ♥」

「大丈夫だよ、そのまま力を抜いて、気持ちいいのを受け入れて」  
ジユンコの小さな震える体を抱き寄せて、身を委ねさせる。

「う、うんっ♥ わかった……♥ あ、あ、あ♥ ああ♥ ああああ

あああああ♥」

未知の領域に対する恐れが、私に縋り付き抱きしめてくるジユンコ  
の力から伝わってくる。

それでも、言われた通りにジユンコは快楽を耐えずに素通しし、瑞  
らしい処女の脳みそに鮮烈な快楽を刻む事を良しとしてくれた。

「はっ♥ あっ♥ あっ♥」

あくまでもゆったりと、初心者用の膣イキをキめて悶絶するジュンコ。

半開きにしたまぶたが快楽にピクピクと痙攣し、目尻からは一筋の涙が溢れる。

八重歯がチラリと覗く口元からもよだれが顎先へ垂れていく。

快楽で頭の中が真っ白になっている事が見て取れる、最高のアクメ顔だった。

「ジュンコ。そろそろ、私のチンポを挿れたい」

「あ、あ……♡ え？ あ……うん。いい、よ。しよ……♡」

ふわふわとした絶頂直後の頭のまま、ジュンコが処女セックスを了承してくれる。

カバンから避妊薬と水を出して、ジュンコの眼の前に差し出した。

「はい、これ。子供が出来ないようにする薬だから、飲んでおいて」

ふらふらと手が伸び、小さな錠剤を受け取る。

ペットボトルから水を飲むことで少し正気を取り戻し、恥じらっていた。

「くくっ……これで、良いのよね？ じゃあ……どうぞ、先生……♡」

媚を含んだ熱っぽい上目遣いで、ジュンコが私を見つめる。

背もたれに座るような姿勢のまま、股を開いて濡れたマンコを見せているジュンコの正面に陣取り、チンポを突きつける。

「わ、そ、そんなに太いの？ 指とは全然違う……♡」

手を上げて、頭の後ろにある枕を掴むジュンコ。

美食研究会で培われた度胸というべきか、フル勃起チンポからも目をそらしたりはしなかった。

「挿れるよ、ジュンコ」

返事はなく、ゴクリとジュンコの細い喉が鳴る。

ジュンコの陰唇やクリトリスは興奮に赤く充血しているとはいえ、まだ新品の不慣れな性器だ。

いくら慎重に膣口にチンポを当てた所で、穴よりも遥かに大きい直径の棒は膣肉にぶつかるばかりだった。

それを、力を込めて押し込む。

「う、いたっ……」

みちみちと肉を引き伸ばし、亀頭が処女膣にめり込んでいくのを見つめながら、ジュンコは痛みに顔をしかめる。

「大丈夫？」

「ん、平気……この、くらい……いつも食らってる銃弾のほうが、よっぽど痛いわよ……」

ジュンコの腰は両側から掴むと指先が触れ合ってしまうかと思うほど細い。

そんな華奢で小柄な女の子の膣肉を強引に押し広げ苦痛を与える行為を、許可された共同作業として進める悦びがチンポの先から我慢汁になって漏れ出て、妊娠の可能性のある精子を処女膜の向こうまで撒き散らす。

私の我慢汁とジュンコの愛液が潤滑油となり、清らかで堅い処女肉は、ジュンコ自身の手首ほども太い私のチンポを受け入れるメス肉へと変貌していった。

「うっ、ぐ……は、はいつ、た？」

押し広げられた膣口がみっちり赤い円を描いて充血している。ジュンコの膣穴は、ついに私の亀頭をカリごと飲み込んだ。

「うん、一番太い部分は入ったよ。これから痛いから、力を抜いてね」  
「えっ、これ以上に痛いの……？」

思わず素で驚いてしまったジュンコが、弱気になって見上げてくる。

「先生……お願い、キス、しててよ……私が、痛いの我慢できるように……」

乙女の最後の願いを、何も言わずに受け入れる。ジュンコの頭の横に手を付き、身をかがめてキスをした。

「ん……♡ちゅっ……♡」

ジュンコの小さな手が、私の腕を掴む。キスをしながら、不安げに半開きになった目と視線を交わして安心させ、腰を前に押し込んだ。

「んっ……！」

苦しげな呻きは、止めて欲しいという言葉は、像を結ばずに私の口

の中へと消えていく。

みち、みち、と肉を裂く痛みを身に受けても、ジュンコは決してキスを止めなかった。

ぷちん、と小さな肉の膜を引き裂いて、ずるずるとチンポが膣に飲み込まれていく。

「んんんーっっ！」

ついにジュンコが目を閉じ、目尻から涙をこぼした。

掴まれた手に、かすかに力が籠もる。だが少女が男に縋る程度の力以上に力が強まることはなく、膣の奥底にたどり着くまでジュンコは耐えきった。

ゆつくりと唇を話し、眉をしかめて涙をこぼしているジュンコに話しかける。

「頑張ったね、ジュンコ。一番奥まで届いたよ」

「う、あああ……お、おなか、苦しい……いっぱい食べた時とは違うけど、私のお腹のなか、先生でいっぱいになっちゃってる……♡」

チンポを受け入れた事で女としての自尊心のようなものが満たされたのか。

眉をしかめながらも、どこか満足げな様子を漂わせながらジュンコが囁いた。

「あ……先生？ まだ、全然入ってないじゃん……」

結合部を見下ろして、私のチンポが余っている事を指摘するジュンコ。

「ジュンコの穴は小さいからね。まだ全部挿れないほうが良いよ」

「そう、なの？ ん……分かった。先生の言う通りにしとく」

セックスへの向上心を滲ませてくれたジュンコが愛おしく、また軽くキスをして膣内で勃起チンポを揺らす。

「あつ♡ う、動かすと、すごい……♡ お腹の中、全部ゆれる……♡」

「ああ、ごめんね。ジュンコが可愛かったから、つい。痛みが収まるまでじっとしていて」

「うん……ねえ、もう一回キスしてよ……♡」

ジュンコのリクエストにより、舌を絡めたディープキスをして時間

を潰す。

「ん……♡ そろそろ、平気だと思う。先生のしたいこと、していいよ……♡」

そう言ってセックスへの期待を滲ませた怪しい輝きを帯びた瞳で笑みを浮かべるジュンコは、一気に大人びたように見えた。

ジュンコのクッションにしている枕ごと抱き上げ、ゆっくりと再びベッドに横たわらせる。

腰の後ろに枕を敷きピストンをやりやすくした状態に、これからの行為を思い浮かべたのだろう。

ジュンコが期待と不安で瞳を揺らしながらも、黙って待っている。「力を抜いててね、ジュンコ」

「うん……♡」

そつと、ジュンコが下腹部に手を置いた。その手の下に挿入されているであろうチンポを愛おしげに撫でるように、ゆっくり撫でる。

いじらしさに射精しそうになりながら、ピストンを開始する。

「んつく……」

ジュンコの小さな体が、ラブホテルの照明に照らされながら私のピストンで揺れる。

かすかな呻き声の他はベッドの軋み位しか音が無く、振り幅も小さいが、ジュンコには大きすぎる刺激だろう。

みっちりとした膣肉が私のチンポに強くしがみつき、前後どちらにも動けない程密着してくる。

「ふうっ……♡ ふうっ……♡」

腰を引いた時にカ리를ゾリゾリと強く処女膣が擦り、ジュンコの膣内に我慢汁が撒き散らされる。

そうして潤滑油を増やしながら前後動の幅が少しずつ大きくしていった。

私の身体の下で、真っ赤な顔をした全裸のジュンコが股間を中心に揺られている。

大きな声を上げまいと口元に手をやり、鼻で荒く呼吸していた。時々辛そうに顔をしかめながらも、徐々に目元の緊張も緩み、夢中

で腰をふる私をニマニマを満足気に見つめている。

それなりに大きく腰が振れるようになり、にゅぷ、にゅぷ、とジュンコの股間から水音が鳴るようになってきた。

「あっ♡ はんっ♡」

私はジュンコの細い腰を掴んで犯し、ジュンコはもう口元からは手を離し、私の手首辺りを掴んでピストンを受け入れている。

成長著しい15歳の少女の膣は、149cmの体格で受け入れるには大きすぎるチンポを愛おしげに啜えこんでいた。

「はあっ♡ はあっ♡」

派手な声は上げないが、ジュンコは私としっかり目を合わせて笑みを浮かべ、初めてのセックスを楽しんでくれている。

「ああ、ね、せん、せい……♡ もっと、先生の、したい、ように……して、いいよ?」

チンポで突かれて息を途切れさせながら、ジュンコが優しい笑みを浮かべる。

一番奥まで私のチンポが届いていない事に気づいていたのだろう。

処女だった生徒に氣遣われて、照れくさいようなくすぐったいような気持ちを味わいながらも、ジュンコが私のチンポで善がる所が見たくてこれ以上は我慢ができそうになかった。

「ありがとう、ジュンコ。慣れてきたみたいだし、そのまま力を抜いててね」

そう言って、勃起に力を込めてジュンコの膣の腹の側の壁をカリで強く擦る。

「んひっ♡」

不意打ちにジュンコが高い声をあげ、その意味する所を理解する前に私が覆いかぶさった。

ジュンコの細い脚を高々と上げさせ、小さな腰を抱え込んで真上からピストンするような角度で処女膣を削りにかかる。

「あっ♡」

どすん、と膣奥に龟头がぶつかり、子宮口の周りを撫でて引き抜かれる。

未熟なポルチオとGスポットの感覚が混じり合い、ジユニコの処女膣が快楽を得られる範囲をぐいぐいと広げてしまう。

ぬちゃ、ぬちゃ、と愛液を掻き出す勢いで激しくピストンを繰り返して、正確にジユニコお気に入りGスポを刺激し、その快楽が残る内に膣の他の性感帯を開拓する。

「はっ♥ つが♥ あ、うう♥ んんあーっ♥」

ゆったりと楽しめるセックスから、突然快楽の嵐に放り出されたジユニコだが、素直に私の言う事を聞いて身を任せてくれていた。

「あ、あ、あうっ♥ んあっ♥ うっ、うっ、んんっ♥」

ジユニコの小さな身体の腹の奥までチンポが押し込まれるため、ピストンのリズムで声が自動的に漏れてしまう。

そうやって、私の身体の下で何もできずにチンポで膣をほじられる快楽を、目を白黒させてその身になじませている。

ジユニコの腋の下あたりに置かれた私の肘辺りを、小さな手が愛おしげに撫で回し続けている。

腰から下は完全に私の自由にされ、天井を向いた足はぶらぶらとピストンに合わせて揺れている。

「あっ♥ あーっ♥ はあっ♥ あっ♥」

真綿が水を吸うように、ジユニコは私のセックスを覚えていく。

処女セックスとは思えない艶めかしい喘ぎ声がジユニコの細い喉から奏でられ初めた。

膣も硬さがほぐれつつもギチギチと締まり、引き抜いた時のカリを強く刺激して射精を促す。

「ジユニコ……い！ そろそろ、いくよー！」

「あっ♥ んんっ♥ うんっ♥ うんっ♥」

言葉を喋る事もできず、それでもジユニコがカクカクと頭を上下に振って了承の意思を示す。

性感帯の開拓を中断し、ジユニコの好きな場所を執拗に擦った。

「あっ、あーっっっ♥ あーっっっ♥」

ラブホテルの部屋中に、可愛らしい叫び声が響く。

ジユニコが絶頂したと同時に、一番奥にチンポを突き刺して射精す

る。

「んああー……っ♡♡♡」

白いつるりとした喉をさらし、背をのけぞらせてジユニコが処女セックスにてチンポで絶頂した。

握りしめるような強さの膣圧が、射精の快楽を増幅する。

ジユニコの処女膣からは余計な力が抜け、男を悦ばせる締め付けをもう覚えているかのようだった。

「ふーっ♡ふーっ♡」

身体の下から、ジユニコの熱っぽい吐息の音が聞こえる。

ぼうっと焦点の合わない濡れた瞳で、身体を駆け巡る絶頂快楽を余すこと無く味わっているように見えた。

すっかりメスとして成長した姿に、金玉からの追加の射精が小さな膣へと注がれる。

ラブホテルの怪しげな照明の下で、そのままの体勢でゆっくりと休憩を続けるのだった。

「はあ……♡凄かった……♡」

射精と絶頂がふたりとも落ち着いた所で、ジユニコと添い寝して抱き合っていた。

「ジユニコも、初めてとは思えない位良かったよ」

「そ、そう？ えへへ……♡」

女として褒められて、ジユニコが笑みを浮かべる。

ふと、私を優しげな目で見つめているのに気づいた。

「先生……セックスの間、一度も茶化したりしなかったね。ちゃんと、私を……大事に扱ってくれて、さ。嬉しかった……♡」

目を細めて微笑むジユニコは、本当に一回り成長してしまったかのように大人びていた。

「もちろん。可愛いジユニコの一生の思い出だからね」

「うん♡一生の、いい思い出になった。ありがとう♡」

グウウウウウ……

そのまま次のセックスへ行けるほど雰囲気を出してジユニコが柔



らかい笑みを浮かべた所で、ジュンコのお腹が盛大に鳴った。

「……………」

「……………」

「ち、ちちちち違うー！ 違うんだってばー！」

目を丸くして取り乱すジュンコをなだめて、いっぱい運動したから仕方ないと慰めると、顔を真っ赤にして腕をつねられた。

休憩を延長し、ルームサービスを頼む。

「へえ……ファミレスみたいな感じなのね。あ、串団子あるじゃん。これにしよう」

二人で団子を頼むと、ほどなくブザーが鳴って別室に置かれた団子を取りに行く。

「流石に……このお団子は食べたこと無かったけど、結構美味しそうね！」

ジュンコは全裸でベッドに腰掛け、ツンと勃起した乳首を隠すこともなく団子を頬張って無邪気な笑みを浮かべた。

隣で同じように団子を食べながら、バキバキにチンポを勃起させてしまった。

「ん？ うえっ!? も、もう……先生ったら……♥ まだしたいの?」

「うん。ジュンコがそんな格好を見てたらね」

「……………いいよ♥ 休憩も延長しちゃったし……そんなままじゃ帰れないでしょ?」

団子を頬張っていた無邪気なジュンコが、あつという間にチンポを待ちわびるメスに変貌する。

キラキラと自由に輝く女の子の眩しさに目を細めて、ジュンコとの休憩を最後まで楽しむのだった。

おせちも良いけどセックスもね（フウカ）

給食部であるフウカの連休は、普通の生徒より数日短いのだという。

仕込みがあるから仕方ないとフウカは言うが、ここはいつも頑張っているフウカに息抜きをさせてあげたい。

「すみません、お待たせしました……」

ゲヘナ学園の校庭で待ち合わせに指定した場所に、からころと木のサンダルを鳴らしてフウカがやってきた。

「ううん、今来たところだよ」

特に何をすることも言っていないので、フウカの目には疑問の色がある。

私がひとまずゲヘナを離れると言うと、不安げながらも私に近づいて上目遣いに見つめてきた。

「と、とりあえず、先生のこと信じていますよ……?」

寒さか、なにかに対する期待か……フウカの白い頬はほんのりと赤く色づいていた。

ひとまずD・U・まで出てきた私達は、最近話題の展望タワーにやってきた。

「な、何だか高速エレベーターで上がってきたせいか……ちよつとだけ、酔ってしまったかもです……」

そう言つて、私によりかかり腕を絡めるフウカ。

観光地で周りの目は丁度逸れているので、私もフウカと指を絡めて手を握った。

「えへへ……ありがとうございます、先生」

顔を赤くしながらも、フウカの身体はぴつとりと密着している。

テラスにでて景色を見ようとしたが、その手前の床がガラス張りになっており地上までよく見えてしまっている。

ミニスカート履きの人も多いだろうに、こんなに広くガラス張りにして大丈夫かなとは思ったが……

「せ、先生……あ、足がガクガクして動けません……」

怖がって身体を押し付けてくるフウカが可愛いのでまあ良いかと思いついた。

自分自身もそれなりに怖いですが、フウカの着物越しの胸の柔らかさに集中して耐えた。

結局フウカの身体のことしか印象に無いが、1つ目の予定を終えて次は百鬼夜行方面へ。

お正月の電車内は200%程度に混んでいて、引き続きフウカと身体を密着させることになった。

あまり正面から抱き合ってしまうとフウカの角が当たってお互い痛い思いをするため、私の脇の下あたりにフウカの額を押し付ける事で角を避ける体勢を取っている。

セックスの時にたつぷりと学習しているため、戸惑うこともない。

「すう……はあ……」

私のコート越しに、フウカが熱っぽい吐息を吹きかけている。

フウカの小さな手が強く私の服を掴み、満員電車に押し付けられる以上に身体をびつとりと密着させてくる。

フウカの大きな性欲が少しずつ目覚めて行くのを感じ、私のチンポもイライラを募らせた。

「あつ……」

私の勃起に気づいたフウカが、ゆつくりと股間を撫で回してくる。

「……………」

無言で、フウカの視線が「降りたら処理していきますか？」と問うてくる。

私はフウカのぷにぷにした白いほっぺを撫で、フウカはそこに手を重ねてニッコリと笑った。

「じゅろっ♥　ちゅっ♥　れうれうれ……」

フェイクファーの襟巻きを柵に置き、便座に座ったフウカが目の前に立った私のチンポをフェラしている。

駅近くの公衆トイレは意外と清潔だったが、駅に来た人は遊園地の方に行くため他には誰も居なかった。

それを確認してフウカに性処理してもらっている。

「んっぷ♥ ふうーっ♥ ふうーっ♥」

もうフウカは何も指示しなくても唾液を口の中にいっぱい溜めて亀頭を浸し吸いたて、パンパンに張った亀頭を舌で舐め回し、喉奥までチンポを飲み込んで頬をすぼめて口の粘膜全部を密着させてくれる。

興奮して顔を前後動させるフウカの動きにつられ、ひらひらと黒髪が薄桃色の着物の上で舞った。

私のチンポをしゃぶる事に喜悦を覚えている事が手にとるように分かるフウカの笑み崩れたひよつとこ顔と、上品に結い上げた髪を留める清楚な花の髪飾りのギャップが興奮を掻き立てる。

デート中でもあるのでさっさと済ませるべくフウカの後頭部を優しく撫でると、フウカは上目遣いに視線を合わせて目だけで笑みを返してくれ、搾精のための動きが始まる。

「んぼっ♥ おっとう♥ りっぷっ♥」

私のチンポを根本まで飲み込み、自らイラマチオしてくれるフウカに感謝しつつ喉奥で射精した。

「ぎゅっ♥ りゅっ♥」

下腹部に当たるフウカの荒い鼻息と、押し当てられた角の不思議な温かみを感じつつ、精液を一滴残らずフウカに飲んでもらう。

カラカラとトイレトペーパーを出して顎の下の垂れそうな涎と精液を受け止めた。

やがてフウカは、尿道の中も含めてすべてを嚙り上げた後でずると喉奥からチンポを引き抜き、愛おしげに亀頭にキスした。

「はい、お疲れ様でした、先生♥」

「ありがとうね、フウカ。突然こんな事してもらって」

私がそう言うと、フウカは眼尻を下げ、うっとりとした目をしてしながら手をパタパタ振った。

「い、いえー！ こちらこそすみませんでした。電車の中で先生とくっついていたら、つい……先生のおちんちん、欲しくなっちゃって……」

♥」

熱っぽい視線を射精後で萎えていくチンポに向けながら、トイレツトペーパーで丁寧に拭ってくれるフウカ。

「フウカは、大丈夫？ 濡れて気持ち悪くなってるない？」

そう聞くと、少しバツの悪そうな顔で視線をそらし、

「あの……今日は、こういう事してくれるかなって期待してたから、濡れても良いように、ナプキンしてて……」

チンポをしまってからフウカをギュツと抱きしめた。

「あっ♥ も、もう、だめですよ、先生♥ ……まずは普通のデートも楽しみたいですから」

フウカも私を抱き返しつつ、瞳の奥に欲情を押し込めた顔で柔らかく笑った。

その口元にくつついた私の陰毛と精液の残滓を綺麗に拭き取り、遊園地へと向かう。

遊園地では絶叫マシンに乗ったり各学校がモチーフのパレードを見て楽しんだ。

なんだかんだで遊び回り、昼を軽食で済ませていた分ゆったりと夕食を食べて少し休むと、もう日が落ちている。

腹ごなしにと歩いている日本の城のような建物がライトアップされた「夜桜の道」という名前の散歩道には、見渡す限り誰もいない。

雑談をしながら歩いた。フウカを楽しませる事が今日の目的だったので、ゲヘナとは違う所で色々なことが出来て良かったと言うと、フウカは微妙な顔をした。

「そんな、閉じ込められているみたいなの……いえ、まあ全然違うというわけではないですが……」

フウカは料理で人の役に立つ事を自分の使命としているが、それでも沢山の楽しみを知ってほしい。

その気持ちが伝わってくれたか、フウカが微笑んでくれた。

「本当に……嬉しいです」

川……というか城の堀に掛けられた橋からライトアップされた城を眺める。

隣り合ったフウカにそっと身体を寄せられ、肩を抱き寄せて温め

あった。

「いつもありがとうございます、先生。これからも、お願いしますね？」

見上げてくるフウカが月明かりと向かいからのライトアップによって淡く照らされ、幻想的な美しさを放っている。

「うん。これからもお願いされちゃったし、近くのラブホテルに行こうか」

ぎよつとフウカが目丸くして赤面した。

「そ、そういう話ではなかったのですが……」

しかしすぐに目を潤ませ、指を絡めて手を握ってきた。

「でも、あの、そうですね……私も、今日のいい思い出の最後は……先生とのセックスで締めくりたいです……♥」

抑え込まれていたフウカの性欲が、じわじわと表面ににじみ出てくる。

足早に遊園地を出た後、ラブホテルに直行した。部屋の電気は結構点いていて、繁盛している事が伺える。

「わあ、こうなってるんですね」

手を握ったまま、フウカが珍しそうにロビーを見渡す。

さつさと部屋に入ると、フウカがベッドと風呂場の位置を確認する。

「先生、一緒にシャワーを浴びましょうか」

やる気満々のフウカは、微笑みながらも瞳の奥にチロチロとセックスしたいという熱情の火が熾っているのが見て取れる。

「うん、それじゃあ身体の洗いっこしようか」

「はい……♥ 隅々まで洗って差し上げます♥」

腰の後ろの帯を外し、洗濯かごに置くフウカ。一人で脱ぐのは大変かと思いきや、それなりに簡略化されたもののようにだ。

「あ、バレてしまいましたね……本格的な着物は、さすがに手持ちが足りないのです……」

「今はそういうのがあるんだねえ。フウカに似合っていてとても素敵な着物姿だったよ」

「えへへ、ありがとうございます。先生にそう言っていただけなのなら、これを選んでよかったです」

そう言いながら、するする脱いでいく。私も脱ぎながら横目で見てみると、フウカも私の勃起チンポをチラチラと気にしているのが分かった。

フウカの着物の下には、着物の柄と同じく紅白の花があしらわれた可愛いブラとショーツがある。

「下着もすごく可愛いね」

フウカは赤面しながらも、はにかんだ。

「はい、今日は……先生にきつと見てもらえるだろうから、ちゃんと選んできました♥」

全裸の私と向かい合って、フウカが手を腰の後ろにやって全身を見せてくれる。

フウカの乳首の位置を、私はよく知っている。

ブラの上からスリスリと撫でると、長めの乳首がブラの下で勃起していくのが分かった。

股間も手のひらで優しく撫でてあげると、脚を肩幅に開いて撫でさせてくれる。

そこは少し厚く膨らんでおり、昼間言っていた通りにナプキンで愛液を留めているらしかった。

「下着は私が脱がしていいかな」

「うう、恥ずかしいですね……ですが、先生のお好きなように♥」

フウカを抱きしめるように背中に手を回し、ブラのホックを外す。ついでにおでこにキスをする、くすぐったそうにフウカが指でそこを撫でた。

腕を抜けると、フウカの裸の胸が目飛び込んでくる。

「ああ……♥ 私、もうこんなになって……♥」

フウカの乳首はやや長めの濃い肌色をしている。それがピンと勃起してフウカの興奮を伝えてくれていた。

「下はどうなってるかな？」

宝の発掘のようにワクワクしながらフウカの前に跪き、キュツとし

まったお尻を掴む。

眼の前にあるフウカのお腹にキスの雨をふらした。

「はっ、あっ♥」

フウカが艶めかしい声を上げ、細い指が遠慮がちに私の頭に手を添えてゆったりと撫でてくる。

時間をかけてゆったりと、フウカのショーツを下にずらしていく。

お尻の頂点を過ぎると、あとは何の抵抗もなく脚の間を通り過ぎた。

クロツチ部分にはたしかにナプキンが置かれ、薄っすらと吸水した後が残っている。

だがそれ以前に、フウカの股間から今もリアルタイムで愛液の橋がかかっていた。

陰毛はハート型に綺麗に整えられ、そのハートの下端はぷっくりと勃起したクリトリスが淫靡な赤ピンク色で膨らんでいる。

「こんなに楽しみにしてくれてたんだね」

「はい……♥ お昼にフェラしてから……ずっと夜が待ち遠しくて、マンコ濡らしました……♥ こ、こんないやらしい女の子、お仕置きしますか……?」

エッチなお仕置きをして欲しいと顔に書いてあるような、哀れっぽい泣き真似でフウカが問うてくる。

「いいや、しないよ」

「えっ……!?!」

がーん！ とアテが外れて涙目になりかけるフウカ。

「どんだんエッチで綺麗な女の子になってるフウカには、ご褒美に沢山気持ちよくしてあげなきゃね」

ばあぁ……と満面の笑みになるフウカ。

「はいっ♥ 先生と沢山セックスして、気持ちよく、して、ください……♥」

まだすんなりと隠語を出すのは恥ずかしいフウカの精一杯のおねだりにチンポをフル勃起させながら、着替えを済ませてシャワールームに入った。



「では、失礼します……♥」

都合がいいので髪だけは結い上げたままのフウカが、スケベ椅子に座った私に対面座位のようにまたがって抱きつく。

身体の前面をボディーツープまみれにして私に身体を密着させてスポンジ代わりに洗い初めた。

ビンビンに勃起したフウカの乳首がくすぐったくボディーツープで滑る。お互いの腕までもソープにまみれ、腋も肩もが洗われている。

私もボディーツープまみれの手でフウカの背中と尻を撫で回し、フウカのアナルに指を挿入した。

「あうっ♥ そ、そんな所、汚いですよ……♥」

「フウカのアナルだから汚くはないよ」

「そ、そんな訳ありませんから……んっ♥」

フウカは乳首がこすれる刺激で甘い声を上げながら、自由にアナルをほじくらせてくれる。

「はぁ……はぁ……♥」

だんだん息が荒く、酔ったように瞳の輝きが増してくる。上を向いてじっと私の目を見つめ、何かを待っている。

誤解せず、顔を近づけてキスを始めた。

「ちゅっ……♥ ちゅっ……♥」

フウカは熱烈にこちらの唇を吸い、味を確かめるように唇の内側を舌でなぞる。

気の済むまで舐ると、今度は可愛らしい舌が口内に伸びてきた。

「はふ……れっ……♥」

ディープキスを初めてしまったので洗体は途切れてしまったが、代わりに泡まみれのフウカの手が私のチンポに伸びてきた。

優しく、撫でるように勃起チンポにソープを絡め、竿やカリの段差などの汚れを隅々まで洗ってくれる。

私もお礼とばかりにフウカの乳首を丁寧に揉みほぐし、さらなる勃起を促す。

「んっ……んっ……♥ んっ、んっ♥」

フウカの興奮が深まり、焦点の合わない遠い目をした。ますます  
ディープキスに夢中になっていく。

次は泡まみれのフウカの股間、さつきまでチンポと擦れて洗いあつ  
ていたクリトリスに指をかけて優しく洗うようにしごく。

「んっ♥ あっ♥ ふあっ♥ はっ♥ せんせっ、そこ、だめっ  
♥」

これにはディープキスを続けられなくなったフウカが快楽に悶絶  
する。

「いいよ、まずは一回イこうか」

「はいっ♥ イきますっ♥」

フウカの細い脚の内側の筋肉が引き締まり、絶頂に痙攣するのが分  
かった。

小さな身体が後ろに倒れそうになり、抱き寄せて支える。

「ふう、ふう、ふう……♥」

まぶたがピクピクと痙攣するほど深い絶頂だったようで、呆然とし  
たイキ顔を見せてくれた。

やがて意識を取り戻したフウカが私の視線に気づいて照れくさそ  
うに笑う。

「あ、はは……やっぱり、見られてしまうと恥ずかしいですね……」

「綺麗なイキ顔だったよ、フウカ」

「あうう……いい、言わないでくださいよお」

ボディーツープまみれの手を頬に当ててしまったフウカは、そのま  
まごまかすように洗顔した。

目が開けられなくなってしまうたので洗い落とし、もう一度ボ  
ディーツープを足す。

今度は風呂場のマットに寝そべる私にフウカが乗って身体を擦り  
つける姿勢だ。

「えへへ……ぎゅーっ♥」

フウカが嬉しそうに私の首に抱きついてくる。身長差で中々出来  
ない体勢にご満悦だった。

そのままフウカの唇が私の耳たぶを食み、耳元でこしよこしよと囁

く。

「ああ……♥ 先生のチンポ、私のマンコに当たっちゃってます♥  
生で入っちゃいますよ♥」

ねつとりと、性欲の塊のように熱っぽい声が私の鼓膜を愛撫のように震わす。

鈴口が泡まみれのフウカのマンコに触れているのを熱く感じていた。

フウカの腰の力加減によっては一息で挿入できてしまう体勢だ。

「ああ……♥ 挿れたいです……♥ 先生と生セックスして……赤  
ちゃん産みたいです……♥」

フウカの言葉が本気の熱を伴っていて、腰をへこへこと振ってチンポをマンコで撫で始める。

「先生……♥ 好き……♥ 愛しています……♥ セックスしたい……♥」

うわ言のような言葉で囁かれるとフウカの心の奥底からの欲望を私の脳に直接注ぎ込まれているようだった。

どぶどぶと我慢汁が溢れ、フウカの外陰唇を汚す。

「先生……分かってらっしやるんですか……？ 私かやろうと思った  
ら、先生を抑え込んで赤ちゃん作れちゃうんですよ……♥」

「うん、もちろん。フウカが本当に望むなら、生でしても良いんだよ」  
フウカの背中をゆっくりと撫で、返事をする。

「……うー……」

ぐりっ、とチンポがマンコに押し当てられ、膣口を捉えた。

「うう……もう、先生のイジワル！ そうやって返されたら、私、何も  
言えなくなっちゃうじゃないですか」

身体を起こし、羞恥で顔を真赤にしたフウカに睨まれた。

「はは……ごめんごめん。でも本当のことだからね」

目を丸くしたフウカがぺたん、と再び抱きついてきて、耳元に唇が触れた。

「もう一回、初めからです……」

「うん」

「先生……先生の赤ちゃん、産みたいです……♥」

先程よりも切なく振るえた声で、フウカが囁いた。

「駄目だよ、フウカ。今は学生だからね」

ぷりぷりしたフウカの尻を撫で回し、アナルの縁を指で圧迫する。

「あつ♥ いじわるっ♥ 先生が教えたのにつ♥ 生セックスで、子

宮に精液注がれて♥ 赤ちゃんできちやう気持ちよさを♥」

「ごめんね。お詫びに沢山気持ちよくするから」

フウカの息はだんだんと荒くなり、自分の言葉で興奮を引き出しているようだった。

「してっ♥ いっぱいセックスしてっ♥ 先生の赤ちゃん作る練習しますからっ♥」

ふう、はあ、というフウカの荒い息遣いと、ちゅ、ちゅ、と耳元にキスをする音が響く。

「よし、そろそろ行こうか」

私の方もフウカを犯したくて堪らなくなってきたので抱きしめながら身体を起こすと、赤い顔のフウカがニツコリと笑った。

「はい……♥ 沢山セックスしてください♥」

並んで身体を拭いて、脱いだ服は放置してベッドに向かう。

フウカはベッドに四つん這いになって登ると、そのまま私に尻を突き出した。

「どうぞ……♥」

むにゅ、とフウカが尻の両側からマンコを開いて見せてくれた。

とろりと愛液が滴り、てらてらと濡れ光る膣口がヒクついて期待いっぱい待ちわびている。

さっとコンドームを付けるとフウカの細い腰をがっしりと掴んで、まだまだ締めまりのきつい膣に一気に突き刺した。

「おっ♥♥」

腹の底からこみ上げるような快感をそのまま音にしたフウカのよがり声がラブホの一室に響く。

「ふう、相変わらずフウカのマンコは気持ちいいね」

「あつ、ありがと、ござい、ますっ♥」

見下ろすと、アナルが真っ赤に充血してパクパクと物欲しそうに開いている。

指でそれを撫でながら、フウカの好きなポルチオ性感帯を開発してあげるため奥深くを揺らすように腰を振った。

「んっ♥ はあ、ああ〜……♥ セ、せん、せえ♥ もつと♥ もつと激しく突いてえ♥」

もどかしげに腰を左右に振って、フウカがねっとりした声でおねだりしてくる。

「ん、わかったよ。いっぱい声を出して良いからね」

「はいっ♥ いっぱい、声あげさせ、んっおっっ♥」

最後まで言う前に、一気に腰を引いて入り口近くまでをカリで刺激した。

「うゝんんんっ♥」

拍手のように肉を打ち鳴らし、フウカの膣奥を衝撃で揺らす。

フウカの膣はキツイ上に、私の動きにも対応して引き抜く時に強く締めてくれるため射精感が一気にこみ上げるが……フウカを沢山気持ちよくするという約束を果たすため必死に腰を振った。

「あゝうっ♥ はああっ♥ あひっ♥」

あっという間に部屋の中が騒がしくなる。

ひっきりなしに手拍子のような音が響き、それに合わせたフウカのアへ声が、かき消すほどに大きく甘く響き渡る。

「んっおっ おおう♥ おっっほ♥」

生殖欲むき出しのフウカの声は金玉に直接射精をおねだりしているかのように興奮を煽った。

ゴムセックスでなければフウカに種付け射精する誘惑に耐えきれなかったかもしれない。

そんな事を思いながら必死に腰を掴み、一番奥を揺らすように一突き一突きを工夫してフウカをもっと気持ちよくする事に集中する。

膣奥のポルチオ性感帯が、フウカの好きな場所だ。

本人から処女セックス中に教えてもらった場所をほじくり返し、女性が行われる一番幸せな奥イキへとフウカをエスコートする。

「おー……っ ♥ ふっぐ、んっ ♥ んぐっ ♥」

だんだんと、フウカの声も詰まって必死さを増してきた。歯を食いしばってうねりを増す膣の締りをチンポ中に感じながら、ピストンの精度を上げて効率よくポルチオ性感を引き出していく。

「ほおっ ♥ うっ、うっ、うっ ♥ ♥ ♥」

フウカも歯を食いしばっているようにカチカチと音を鳴らして、奥イキに指をかけるころまで上り詰めている。

ラストスパートとばかりに力を込めて、殴りつけるような全力で腰を突きこんだ。

「んっ、おっ、おっ、おっ ♥ おっ、おっ、おっ ♥ ♥ ♥」

ぎゅう、と膣肉がぴつとりと密着し、ポンプのように根本から先端まで波のようにうねって精液を絞ってくる。

その動きにフウカの絶頂を感じ取って、私も射精した。

「うっ ♥ ふっ ♥ ふっ ♥ ふっ ♥」

ベッドのシーツをぎゅっと握りしめ、額をベッドに押し付けたフウカが全身を痙攣させ、深く絶頂する。

徒競走のゴールテープを切ったような達成感で、よそ行きに髪を結い上げたフウカの痙攣する裸体を見下ろした。

チンポを挿れておくだけでフウカのマンコは精液を一滴残らず根本から絞ってくれるので、射精が収まるまでお任せで絞ってもらい、引き抜くと先端が大きく膨らんでいた。

フウカの膣口から使用済みゴムが放り出される光景に笑みを浮かべると、まだ痙攣しているフウカの尻を撫でて降りてくるのを待った。

「はあ……ふう…… ♥ すごかったあ…… ♥」

くたり、と四つん這いで固まっていたフウカがベッドにうつ伏せに身を投げ出す。

私はゴムを変えると添い寝をして、フウカを背中から抱き寄せた。

「あっ…… ♥ もう大きくしてくださったんですね ♥ どうぞ、先生 ♥」

お尻に当てられたチンポで理解したフウカは、当たり前のように片

脚を上げて背面側位の姿勢を取った。

私のチンポの太さに開いたフウカの膣穴に押し当てると、ずるずると奥まで飲み込まれていく。

「はあ……♡ 先生の、気持ちいい所にびったり当たってます……♡

私のマンコ、すっかり先生の形になっちゃいました♡」

男への媚びを隠しもせず、甘えた声でフウカが囁く。

一度奥イキをキめて身も心も緩んだフウカが自然な笑みで私を見つめ、少し顎を上げてキスをねだった。

「ん……♡」

優しいキスと恋人つなぎにした手で心を満たしつつ、フウカの腰は揺らめいて私のピストンを待ちわびている。

フウカが言う通りにポルチオは自然に亀頭が当たる位置にあり、先程より小さい動きでも十分刺激できた。

ゆっさ、ゆっさと小さな体を揺るようにピストンするだけで、深いポルチオ快樂に誘うことが出来る。

「はあ……あ……♡」

フウカは目の焦点の合わないぼんやりした顔で口を半開きにし、顎先に涎が垂れることにも気づかないほど没頭していた。

私のチンポに夢中になるフウカをもっと見ていたくて、強さや角度を少しずつ変えて、より深くフウカを幸せの沼へと沈めていく。

「はああ……♡ うう、うううう……♡」

唸るような喉からの声を上げて、またフウカが軽い奥イキに至った。

腕の中のフウカが重みを増したように全身が脱力し、快樂を貪るしか能がない肉人形へと堕ちていく。

ふと見ると乳首が限界を超えて勃起し、触られたそうに震えている。

ぎゅっと強めに摘んでみた。

「はっぐっ!?! はあっ、はあっ、はあっ……あ、あはは……すみません、ちよっと息をするのを忘れていました……」

がくんっ! と頭を前後させてフウカが正気に戻る。

「フウカ、すごく気持ちよさそうだったね。もつとしたい？」

「はい……………もつと、もつと……………息も忘れるくらい、夢中にさせてください……………」

フウカが膣を締めて催促する。

今度は意識を飛ばさないように、乳首とクリトリスを愛撫しながらピストンを再開した。

「あつ♥ いっぱいされたら♥ すぐにイツちやいますっ♥」

「良いよ、約束だからね。フウカは気持ちよくなる事だけ考えて」

耳元で囁くと、フウカは身体を私に預けて乳首とクリトリスと膣の快楽が乱反射するセックスに集中し始めた。

「あ、ああつ♥ ちくび、つよいっ♥ もう、イツ……………くう……………」

もともと奥イキで全身が痙攣する位に温まっていた身体が、あつとという間に乳首イキをキメる。

私は腰も手も止めず、フウカの形の良い耳を唇で食んで愛撫しながらさらなる絶頂を引き出すことに努めた。

「いくっ♥ いくっ♥ いくっ♥」

先程とは打って変わって、かすれるような小声でフウカが絶頂に翻弄され続ける。

声に出した回数だけ本当に絶頂に至り、膣がひっきりなしに痙攣して精液を欲しがるのがこらえ、一番大事なポルチオを必死に突き続けた。

「だめっ♥ だめっ♥ おっきいの、すごい、きちや、う、う……………」

すすり泣くような声をあげ、実際にフウカの目からポロポロと感極まった涙が溢れる。

すべての快楽がフウカの身体の中で混じり合い、全身が力み、痙攣を始める。

クリトリスを弄る手でフウカの下腹部を抑え、ピストンを強めてそこへと到達させた。

「お、お、お、お……………♥♥♥」

腹の底から響く、フウカの本気絶頂の唸り声。



シコシコと乳首とクリトリスを扱き上げ、強く締まる膣に逆らわず今日3度目の射精をポルチオに押し付ける。

「お、おおああああ……♥」

静かに添い寝するような姿勢で、二人して深く絶頂を噛み締めて微動だに出来なかった。

「はふ……♥ 先生……今日も、とっても素敵でした……♥」

すつきりとした笑顔を浮かべ、フウカが見上げてくる。

「満足してもらえたなら良かったよ」

絶頂で汗をかいて顔に張り付くフウカの髪を剥がし、セックスの余韻でリンゴのように赤い頬を撫でた。

「今日は、ありがとうございます。私の為に一日中時間を取ってください……」

「良いんだ。私もフウカの可愛い所を沢山見せてもらったからね」

晴れ着で食欲にフェラをする姿や性欲をむき出しにして必死で私を求めるフウカの姿は目に焼き付いている。

「えへへ……みつともない所をお見せしてすみません……でも、今年も、機会があれば……また、その……」

「うん。デートして、セックスしようね」

「はいっ♥」

汗ばんだ身体とまだ勃起したままの乳首を押し付けるように私に抱きつき、フウカは目を細めて晴れやかな笑顔を見せた。

恋人同士のように最後にキスをして、休憩を終えるべく身体を起す。

ゲヘナ学園への帰り道、私はフウカを抱き支えて歩いていた。

「うう……すみません……足腰が、立たなくて……」

ポルチオ絶頂をキメすぎたフウカは立っただけで膝が笑っていたので着替えにも苦労したのだが……ようやくここまで帰ってきた。

「ううん、かまわないよ。それほど気持ちよくなってくれたって事だからね」

「……はい。あのまま死んじゃっても良いくらいに気持ちよかったです♥」

その脚にはだんだんと力が戻っているのです、今はもう単に密着して歩いているだけだが、お互いに身体を離すことはなかった。

フウカの寮の入り口まで戻ってきて、そこでようやく離れる。

「もう大丈夫です、先生。今日は、ありがとうございました」

「うん、気をつけて」

じつ、とフウカが私を見上げている。

顔を近づけた私に、フウカが背伸びをしてそつと口づけた。

「お、おやすみなさい、先生」

ほんの触れ合うだけのキスに清純な恋する乙女のように恥じらつて、フウカが去っていく。

寮の扉を締める直前に振り返ったフウカがペコリと頭を下げ、見えなくなり……私もゆっくりと帰路についた。

天才ハッカーの美しさは罪を体現する初体験（ヒマリ）

色々大変な戦いの末、私は成層圏からバリアに守られただけの状態で地上までダイブする事になった。

そんな過酷な状況だったので仕方ないのだが……私の身体以外、つまりシツテムの箱以外の服なりなんなりは残らず燃え尽きてしまったのだ。

最初の衝撃で気絶したまま落ちていた私はそれを自覚すること無く地上に降り立ち……

「先生……」

「ご無事だったんですね！」

近くから聞こえてくる生徒たちの元気な声へと笑顔で駆け出し……

「……「きゃああああっ!」「……」」

生徒たちにフルチンを晒してしまう醜態を演じた。

だが混乱の中にも希望はあった。

それは言うまでもなく、その場に居る生徒9人のうち3人は私のセフレだった事だ。

「あ」

向かって左端に居たユウカが、騒いでいる6人を振り返り何かに気づく。

「ヒマリ先輩、ちょっと貸してください」

「えっ」

隣りにいたヒマリのひざ掛けを剥いで私に駆け寄った。

「ちよっ、まさか、ユウカさん!?!」

照れつつも普通に歩きだしているアヤネ、赤面して苦虫を噛み潰したような顔をしているリン、手で目隠しした隙間からチラチラ見ているアユム、赤くなって後ろを向いてしまったモモカ、顔をしかめつつリンからコートを借りようとしていたカヨコ、チンポに見入ってし

まっているアコ、最高の笑顔を浮かべて歩きだすハナコ。

いち早く駆け寄ってきたユウカがヒマリのひざ掛けを私の腰に巻いて、フルチン状態からは脱する。

「わぁー……っ！ あぁー……っ！」

涙目のヒマリが聞いたこともない大声を上げている以外は、平和な勝利を迎える事ができたのだった。

「使うならリンさんのコートとかにすればよかったじゃありませんか!?」

「あー、すみません。近かったので」

「近かったので、じゃありませんよ!? それお気に入りですよに!」

ヒマリは詰め寄りたいが腰巻一丁の私に近づくのが恥ずかしいのだろう、遠巻きになってキャンキャン喚いている。

他のセフレである2人を先頭に、遅れてやってくるメンバーの中にリンの姿もあった。

「ふう……どうしてあなたはこう……いえ、これは仕方のない事態とみなすべきでしょうね。とりあえず、どうぞ」

役目を終えた艦長コートを渡され、それを着ながらも朝焼けの時期の寒さに鼻水が垂れそうだった私にハナコがハンカチを差し出し涙を拭いてくれる。

「本当に……お疲れ様でした、先生。その開放的な服装はぜひ見習いたい所ですが……風邪を引いてしまいますから、早くシャワーに戻りましょうか」

オレンジから白へと変わりつつある太陽の光に目を細めて、楚々とした美少女のようにハナコが言った。

「ううう……私のひざ掛けを返し……いえ返さなくていいです……」

涙目のヒマリが近づいてきて声をかけるが、まだ2メートル以上距離がある。

「うん……本当にごめんね、ヒマリ。まあ、あの……洗って返すから……」

「くっ、そう、ですね……洗えば……ちゃんと洗ってあれば全く問題は……無いに決まっています……」

コートの前を閉めてチンポを覆っていたひぎ掛けを外す。  
ヒマリは色白な肌を真っ赤に染めて恥じらっていたが、終始チラチラと私の股間のあたりに視線をさまよわせていた。

「はい、これ。本当にごめんね、ヒマリ」

色々な後片付けがあつたので間が空いてしまったが、午前中にヒマリの隠れ家である息継ぎNG・円周率暗唱部にやってきた。

チンポを覆うために使ったヒマリのひぎ掛けを洗って返しに来たのだ。

「い、いえいえ。あの時は、この超天才清楚系病弱美少女たる私が取り乱しすぎましたね。わ、忘れてください……」

部屋の中に入った時点でヒマリは膝に手を置いて背筋をピンと伸ばして車いすに座っていたが、いざ手渡しで返すと、ぎこちなく赤面した笑顔で受け取ってくれた。

「それで、あの……今日のご要件は、それだけ……でしょうか？」

ヒマリは代わりのひぎ掛けを車いすのフレームにかけ、恐る恐る渡したひぎ掛けを膝にかける。

「……いいや。今日はヒマリに大事な要件があつてね」

「大事な要件？……お伺いしましょうか」

そう言つて幾分かしゃきつとするヒマリは本当に頼りになるが、私の要件はその気遣いを打ち砕いた。

「ヒマリとセックスしたくて来たんだ」

「……………。すみません、全く聞こえませんでした」

「ヒマリとセックスしたくて来たんだ」

「聞こえません聞こえません！　なんですかその要件は!?!」

耳まで真っ赤になって声を荒げるヒマリ。

「だからヒマリと」

「だ、駄目に決まっていますではありませんか！　清楚系天才美少女で鳴らしているこの私が、そんな挨拶代わりみたいな誘いでぞ、その、そういう、秘め事をする訳はないでしょうに!」

ぎゅう、とひぎ掛けを握りしめ、車いすの操作も忘れて反駁してい

るが、ヒマリの細い喉がゴクリと固唾を飲んだのを見逃さない。

「でも、この前はなんだか興味が有りそうだったし」

「蒸し返さないでいただけます!? あ、あれは、その……うう……先生  
の身体に、興味が無いとは、言いませんが……」

「じゃあセックスしようよ」

「で、ですから、なんなんですかその品のない誘いは！ この繊細純情可  
憐な私を何だと思ってるんですか！ も、もっと相応しいお誘いがあ  
るでしょう！」

「うーん、じゃあ……」

スタスタとヒマリに近寄り、跪いて手袋に包まれたその手を取っ  
た。

「ひゃうっ……」

それだけで肩をすくませて目を丸くしてしまうヒマリは、たしかに  
清楚で純情可憐だ。

「美しいヒマリを見ていたらどうしても触れたくなくなってしまったんだ  
よ」

「あ、う……その程度では到底合格点は差し上げられませんよ。だ、第  
一、私は清楚なる高嶺の花ですから、申し訳ありませんがじゅ、純潔  
を散らすわけには」

「この前、船の中でリオに怒っていた時ね、ヒマリの優しさが伝わって  
きてとても感動したよ」

ヒマリは自称するだけあって天才だし、身体のこともあって周りに  
合わせる事も難儀する分独りになりがちではあるが、人の心を気づか  
えるとても清らかで優しい心の持ち主だ。

「う、聴いてらしたのですか？ もう……ムキになって怒ったりして、  
恥ずかしい所をお見せしてしまったようですね」

「そんなことないよ。トキにも……アリスにも、リオにだってとても  
優しく、ヒマリの心が広がって綺麗だって事が伝わってきた」

ヒマリは口をつぐみつつも、くいくいと口角が持ち上がってニヤけ  
るのを我慢していた。

「ふふ……さすが先生、私のことを理解してくださっているようです

ね」

「うん、じゃあセックスしよう？」

「しませんよ!? もう、先生ったら……生徒相手に迫っただなんて知られたら、今度こそクロノスにすっぱ抜かれて社会的に亡き者にされてしまいますから、決して、そう決して、私以外には言っではいけませんよ♪」

ふふんとドヤ顔をして私の手をきゅつと握りかえすヒマリ。

「ですが私であれば、先生のおっしゃる通り心が広大無辺であり慈悲と寛容に溢れ返っておりますので、先生の心無いセクハラも聞き流して差し上げます。これからも、そういうことは私だけに仰ってくださいね」

「うーん、でももう沢山セフレがいるからなあ」

「はあ?」

くわっ! とヒマリの文字通りの意味での白眉が寄せられ、天才美少女にあるまじきシワを刻んだ。

「い、いいい一体誰です先生とそんな不適切な関係を結んだ人は!? ま、まさか私の知っている人ではありませんよね?」

「えーつと……」

「誤魔化すと為になりませんよ。この超天才美少女ハッカーの目から逃れられると思わないことです」

「今ちようど50人居るけど、全員聞く?」

「どっ……!?!」

目を見開いたまま固まってしまったヒマリの頬をそつと撫でると、「ぴゃあー!」

と可愛らしい声を上げて瞬時に車いすを後退させてしまった。

「ななな、何を考えているんですか先生!? そんな、そんな手当たり次第に若い女体を貪って……こ、この私まで手折ろうだなんて!」

「さつきも言った通り……ヒマリがとても魅力的だからだよ」

普通に歩いて近づいていくと、

「あ、あ、あ……」

ヒマリは身体を震わせて顔を真っ赤にして、身動きひとつ取れない

ままに私の接近を許してしまう。

「心優しくて清らかな美少女のヒマリに、セックスすることを許して貰ってからしたいんだ」

「私も簡単に手を取り、今度は一本一本指を絡めて握った。」

「ヒマリはそのおしゃべりな口をむにやむにやと動かすが喋る事ができず、絡み合って恋人のように繋がれた手を見つめてしまう。」

「わ、私に……拒否権はないのですか?」

「あるよ。けど、私はどうしてもヒマリとしたいんだ」

「ヒマリの両手を取り、鼻と鼻がくつつくほどに顔を近づける。」

「ひゃあああ……」

蚊の鳴くような声を上げるヒマリだが、固まってしまつて拒絶する様子はない。

「ちよ、は、はな、離れて、ください」

「いいや、ヒマリがセックスさせてくれるまで頼み続けるよ」

「そ、それは拒否権がないも同然ではありませんか!？」

「拒否権はあるよ。でもお願い、ヒマリ。ヒマリの綺麗な肌にもっと触れたいんだ」

そつと片手を離して、ヒマリのツンと尖った耳をなぞるように指を這わせる。

「んひゅううう……♡」

「ヒマリは割りと簡単に気持ちよさそうなメス声をあげた。」

「わわわ、待つて下さい、なんですか今のは……先生に少し撫でられただけで腰が砕けるかと思うほどのしびれが……」

「セックスはもつとずつと気持ちいいよ。絶対に痛くしないつて約束するから、ね? ヒマリ、お願い」

「あう、あう、あ、ひゅううんっ♡ そ、それ、やめ、んんっ♡」

「耳への愛撫を繰り返しながら、ヒマリへの説得を続ける。」

「清楚なヒマリがそうやって気持ちよさそうにしてる顔、とても綺麗だよ」

「みないで、みないでえ……あああ♡」

誰も来ることのない部屋の中で、昼間からヒマリとイチヤイチャと



前戯を楽しんでいるとチンポがとてもイライラする。

「ヒマリ、お願い、セックスさせて」

「ああ、もう、もう、駄目、これ以上は、頭がおかしくなってしまうんです……わ、分かりました、分かりましたから」

「セックスさせてくれるの？」

細い耳を軽く握ってチンポのようにしごとく、うっとりとした快楽に浸かったヒマリの薄い唇の端から涎が垂れる。

「し、します、しますから、もう耳は止めてくださいっ♥」

とうとう悲鳴のように甘ったるい声を上げて、ヒマリはセフレになることを了承してくれた。

「ありがとう、ヒマリ。今日は必ず幸せにしてあげるから」

「ぜえ、はあ……そういうのは恋人にすることを確約する時に言っ頂かないと……」

私の恋人はヒナなのでそれは無理なのだが、今はとにかくヒマリとセックスしたい。

肩掛けのカバンからエアマットを取り出し、ワンタッチで即席ベッドを作る。

「今日は荷物が多いと思ったら、そういう事でしたか……そんなにも私と、せ、んんんっ！……ックス、したかったですか？」

「うん、もちろん。この間私のチンポをチラチラ見ていたヒマリが可愛くて、我慢できなくなってしまったね」

「なっ、なにを仰っているのか……この純情純潔清楚可憐な私がそのような……」

「女の子は身体を見る視線に敏感とは言うけど、見られる側だと分かりやすいんだね」

しょんぼりと俯いてしまうヒマリの横目に、タオル地のシーツを敷き枕を用意する。

「わ、私のイメージが……威厳が……」

「大丈夫だよ、ヒマリはとても清楚でお茶目で、魅力的な女の子だって思ってるから」

「だ、騙されませんよ、もう。どうせ身体を貪るための方便なのでしょ

う？」

「本気で思っているよ。私の目を見て、ヒマリ」

立ち上がり、ヒマリの顔をじっと覗き込む。

スネたような顔でそっぽを向いてしまうが、私とその軽い身体をお姫様だつこで持ち上げるとヒマリも首に抱きついてくれ、大人しく処女喪失の舞台へと運ばれてくれた。

「じゃあ脱がすね」

「ああ……信じていた先生に裏切られ、最も美しい少女時代にその花を散らしてしまうだなんて、私はどこまで悲劇の美少女なのでしょうか……」

くすん、と自分で擬音まで付けて、割りとりラックスした感じで自らの身体を隠すように細い腕で抱いている。

「ですがこれも美しさゆえの罪……生徒のためなら命をも投げ出す先生すら狂わせてしまう、罪作りな美少女……それが、わた、ひやうつ♥」

絶好調のヒマリ劇場を聞きながら靴を脱がせ、ピッタリとしたシャツをめくってお腹を出し、処女雪のように白いお腹にキスする。

「はい、バンザイしてー」

「く、くうう……あ、あまり、見ないでいただけると……」

震える腕が上がり、私はヒマリの上半身を裸にしていく。抱きしめるように背中に手を回してブラのホックを外し、服をめくる。

本人の言う通り、雲の上に咲く一輪の花のように手を出し難い領域であったヒマリの素肌が、あっけなく私の目に晒された。

「綺麗だよ、ヒマリ」

昼前のうらかな日差しが、部屋の中に満ちている。

その日差しの中で輝くように白いヒマリの肌が私の目を灼いた。

痩せ型だが骨ばっているわけではなく、女性の丸みを感じさせるお腹と、胸へのライン。

おまんじゅうが載っているようにぽっこりと段差を付けて小さな乳房が膨らんでおり、その頂点にはほとんど白い乳首が3センチほどはある乳輪の中央で短い影を落としている。

ヒマリの肌はあまり血色が良いとは言えず、乳首の肌の薄さにより乳首だけが薄ピンクに明るいため、花のように白く浮かび上がって見える。

「ああ、あああ……もう、心臓が、破裂しそうです……」

じつと乳首を見ている事に気づかれてしまい、バンザイをしていたヒマリが裸の腕で胸を隠してしまった。

「じゃあ、今度は下を脱がすね」

「し、したっ!？」

ヒマリは慌てて庇おうとするものの、胸から腕をどけることもできずになすがままだ。

「は、恥ずかしすぎて死にそう……この天才が死因恥ずかしすぎてこの世を去ったら、先生はどう責任を取ってくださるのです……」

「その時は私も一緒に逝ってあげる」

「ああ、もう、ああ言えばこう言う……死にませんからそういう事を仰っしゃらないでください!」

そう言いつつも、ヒマリは既にマンコを私に見せてしまっていた。ぱらぱらと薄く生い茂った、あまり処理の行き届いていない陰毛。

髪の毛と同じ綺麗な白の陰毛は産毛のように細く、撫でると気持ちがいい。

「な、ど、どこを撫でているのですか!？」

「ヒマリは陰毛まで綺麗だね」

「嬉しくありませんっ! ああ、こんなことならばもつと日頃からきちんとお手入れを……」

「それに、ここも綺麗なスジになってる。正真正銘、清楚な美少女だよ」

「ひっ、ひ、人の身体的特徴を、そのようにあげつらうのはデリカシーに欠けると思いませんか？」

「ええ? 清楚な美少女のマンコをしているって誉めてるのに」

「私の清楚系美少女イヤーにそのような女性器の俗称を流し込んで、耳が卑猥になってしまったらどうしてくれるのです!？」

「私が喜ぶよ」

軽口を叩きながらもヒマリの外陰唇を撫で、ぷにぷにと柔らかいそこを指で軽く開いたり閉じたりして遊ぶ。

ヒマリの股間は体臭が薄く、それこそ甘やかなベビーパウダーのよくな匂いが漂っている。

クリトリスのすぐ上にキスしながら、太ももまで降ろされていたレギンスをショーツやタイツごとすべて脱がせた。

これで、マットの上には全裸のヒマリが転がっているばかりになった。

「本当に、綺麗だ……見とれてしまうよ、ヒマリ」

「そ、そう、でしょう？ ふう……ふう……えつと……」

緊張と興奮で白い肌を紅潮させ、腕をかすかに震わせているヒマリを見ながら、私も全裸になる。

「あ、あ……」

ヒマリの腰の横辺りに膝立ちになった私にバキバキにフル勃起したチンポを突きつけられ、ヒマリが目を丸くして見入っていた。

「これからこのチンポをヒマリの中に挿れるわけだけど」

「絶対無理でしょう、こんなもの……か弱く美しい私に入るわけがありません」

そう言いながらもチンポから視線を離さないヒマリの前で、すこし左右にぶらぶらと振ってみせる。

思わず瞳を左右に動かしてしまったヒマリが、嵌められた事を悟つてむう、と口を尖らせて睨んでくる。

「大丈夫、ちゃんと身体をほぐしてからにするから。ヒマリは力を抜いているだけで良いからね」

「よ、よろしく、おねがい、します……」

雰囲気は飲まれそうだったヒマリがハツと気を取り直した。

「い、いえ、待ってください！ まさか避妊をしないのですか？」

「いや、もちろんするよ。はい、これを飲んでね」

そう言ってピルと水を取り出し、ヒマリを抱き起こす。

「本当に用意周到なんですから……このお薬、調べた限りでは大丈夫そうですね」

近くにある車いすにディスプレイが投影され、薬の情報が映されていた。

「おお、さすが天才ハッカーだね」

「ええ、私はいついかなる時もありサーチを忘れない用意周到な天才ハッカーですの」

ドヤ顔で言い放ちながら、ペットボトルの水で避妊薬を飲み下すヒマリ。

裸で乳首を見せつけながらいつもの調子を崩さないヒマリを押し倒し、指で顎を上向かせる。

「キスするよ」

「んっ……」

ぎゅつと両目をつぶって唇を固くするヒマリの初々しさに笑顔になりながら、ヒマリのファーストキスを奪う。

ちゅ、ちゅ、と軽く吸い、肩や腕をゆったりと撫でる。

「ふう、ふう……」

ヒマリの鼻息で緊張の度合いを測りながら、首筋、耳へと愛撫を試していく。

「んっ♥」

やはり耳が弱いのか、産毛を逆立てるように撫でると一瞬だけ力が抜けるのが固くなった唇を通して分かった。

抱きしめて肌を密着させながら、愛撫で隙を作りつつずっとキスを繰り返す。

「んん……♥　ちゅ……♥」

しばらくすると強張りが解けてきたヒマリから唇を吸ってくれるようになる。

褒めるように頭を撫でると、まつげの触れそうな近さにあるヒマリの目が細められ得意げに笑った。

「ヒマリは物覚えが良くて流石だね」

「天才ですから」

いつものような返事ではあるが、ヒマリは裸でキスしているのを気にしてドヤ顔になりきれない強張った笑みを浮かべている。

「じゃあ次は胸を触るよ」

「くっ……」

細い喉が鳴る音がはつきりと聞こえる。痩せ型のヒマリの、くつきりと浮いた鎖骨にまずキスをする。

触れてみるとすぐ下の骨が分かってしまいそうな、繊細な少女の軟肉を唇で確かめつつ胸骨の上を滑り降り、ほのかに膨らんだ乳房に達する。

「んっ、く……っ♡」

押し殺したようなヒマリの甘い声に導かれるように、唇が乳輪にかかった。

「はっ……っ♡」

頭の上から降り注ぐ息を呑む音すら美しく、ヒマリが人生で始めてその聖域を男に許す。

丹念に、舌でねぶった。

「あ、う……っ♡」

喉の奥にとどまるような、詰まった甘い声を聞きながらも指でもう片方の乳首も転がす。

「んっ、んっ♡」

ぴく、ぴく、と肩が上下し、ヒマリの快樂のほどを慎重に測りながら愛撫を続ける。

もう少し強く吸い、もう少し弱く乳首を撫でる。

「あっ♡　っく♡」

反応をつぶさに観察し、お姫様を乳首イキへとエスコートする。

「んんんっ♡　あの、せんせっ♡　ちよっと、いったん♡　とまって♡

あっ♡　ですから、あのっ♡　とまっ♡」

何か言っているが、乳首愛撫をしながら上目遣いに目を合わせるのと、ヒマリは言い淀んでしまう。

「あっ♡　あの、そ、そろそろ、やめて、ただか、ないと……♡　なにか、こう、おなかのおくっ♡　が、あ、ああ♡」

ヒマリの顔は乳首快樂で真っ赤になり、先程よりもほんのり酸っぱい性臭が漂い始めていた。

様子を確認するべく、股間に指を這わすと……熱く潤んだ感触が帰ってくる。

「っは♥」

ヒマリが鋭く息を呑み、腰を震わせる。

「う、うう……♥ わ、分かりました、認めます、き、気持ちよくなっていますから……♥ ですから、もう、これ以上は、んんあ♥」

なおさらに緊張をほぐすため乳首イキをさせてあげようと愛撫を強める。

「ひっ、つくう、ううーっ……♥」

すすり泣くように鼻にかかった甘い声を上げて、ヒマリが悶絶する。

一段一段、丁寧に乳首快楽を教え込んだお陰で強めの愛撫に強い快楽を覚えるようになったヒマリの乳首は、本人の意思を無視して私の愛撫に大喜びで反応した。

「ふぐっ♥ う、ううううううああああ……♥」

肘を置いて手のひらを上に向けたポーズが可愛い。全身をぶるぶると震わせながら、ヒマリは乳首でイッた。

「はひゅーっ、はひゅーっ」

たったこれだけで息も絶え絶えになっているヒマリの横に寝転び、抱きしめて背中を撫でる。

意外とむっちりしている太ももにチンポを押し付けつつ、ゆっくりと絶頂の余韻から降りてくるヒマリを待った。

横寝になったヒマリが私を抱き返し、少しずつ息を整え……うめき声を上げる。

「ううう……恥ずかしい……こんな、頭が真っ白になってしまうようなものだなって……」

私の胸板に額を押し付けているので表情は見えないが、耳が赤いので恥じらっているのは良くわかった。

「気持ちよさそうにしてるヒマリ、すごく綺麗だったよ」

「ええそうでしょうとも！ その程度言ってもらわなければ割に合いませんー！」

上を向いたヒマリがぶうと頬をふくらませる。が、それもすぐに萎れた。

「ところで、その、先程から熱いものが押し当てられているようなのですが……」

「早くヒマリの中に入りたくてウズウズしているからね」

「あう……や、やはり、我慢はお辛い、のでしょうか……?」

断崖絶壁の下を覗き込むかのような面持ちで、恐る恐る私のチンポに視線をやるヒマリ。

「ヒマリは気にしないで。ちゃんと解れるまで気持ちよくしてから挿れるからね」

「あの、熱い、熱いです……こんなもの、やっぱり入ると思えないのですが……」

ヒマリは腰をもじもじ動かして逃げようとするのだが、それがチンポを刺激してしまうことを理解していない。

これから失われる乙女らしい純粹さが愛おしく、つややかな額にキスをして驚いている所でクリトリスを指で弄った。

「はんっ♥」

ほんの少し掠っただけで、甘く大きい声上がる。

「大丈夫? きつくない?」

敏感なヒマリにはクリトリスの快楽は激しすぎるかと思っただけ、ヒマリは首をかしげた。

「き、きつい? えっと、よくわかりませんが……先程から、先生の触れた所がじんじんと熱くて……体中が心地よくしびれて、何も考えられなくなってしまうています……♥」

ヒマリが順調に、性の喜びを知っていく。

「そう言ってもらえると嬉しいよ。気持ち良すぎて苦痛という事もあるから、そうなたら言っただけね」

「はい、お任せします。……信じてますよ、先生♥」

ヒマリの信頼に応えるべく、そっと細い脚を開かせる。

「ひゃああ……」

大股開きは流石に恥ずかしいのだろう、ヒマリは私に縋り付き、手



袋を嵌めた手をギュツと握りしめている。

頭を撫でてから、無防備な股間に場所を移して華奢なヒマリの膝を持ち上げ、マンコに顔を埋めた。

「~~~~~!」

恥ずかしさが最高潮なのだろう、高く細い音がヒマリの喉から漏れている。

ぷにぷにとした外陰唇の上端からほんの少し顔を出しているヒマリの上品なクリトリスに舌を当てた。

「あっ♥」

皮の上から、唾液によって刺激を低減されていても、ヒマリからハッキリとしたよがり声上がる。

「んん……あああ……♥」

全く動かずじっと待っていると、息を荒くしたヒマリの微かな動きで腰が揺れ、クリトリスが舌とこすれる。

「はっ♥ んんっ♥ あ、あ……」

擦れた快感にヒマリが声を上げ、身体が動き……その動きがまた快楽を呼ぶ。

面白いように自分からクリトリス快楽の階段を登っていくヒマリの様子を見ながら、刺激が単調になりすぎないように内腿や陰唇を控えめに撫で、快楽の振れ幅をじわじわと大きく育てる。

10分後。じつとりと全身に汗をかいたヒマリが、舌を動かす事もないままにクリトリスでイッた。

「あっ♥ は、あああああ~~~~んっ♥」

鼻にかかった涙声のような、チンポを震わす美声を上げて全身を痙攣させるヒマリ。

天才美少女の清楚なる高嶺の花は、降り積もった性の快楽でピンク色の花びらを開いて眼前にあった。

とろりと垂れる蜜を吸い、男を誘うように指一本分の穴を広げている穴に舌を挿入する。

「あ、う、はあああ……♥」

絶頂の恍惚を漂っているヒマリが、喉の奥から低い声で快楽をひりだす。

ヒマリの薄い塩味の中に苦味がまじり、段々と準備が整うのを感じてチンポがイライラする。

鼻の頭に触れているクリトリスはぷつくりと勃起し、皮の先からピンク色の中身をちらりと見せてしまっていた。

あまり刺激を強くすると気絶しかねないほどに痙攣を続け、膣に挿れた舌をギチギチに締め付けてくるので、細心の注意を払って微かな動きでクンニを続ける。

「う、う、ううううう……♡」

ぐす、ぐす、と鼻をすする音と、声の震えの激しきでヒマリが泣いている事をする。

ヒマリの上半身に精一杯の力がみなぎり、ぐんと胸を反らして腰を浮かせ、更に一段上の絶頂に至る。

「あ、あ、あああああ……♡♡♡」

しばらくそのまま息すらせずに留まったと思うと、全身を脱力させてピクリとも動かなくなった。

ぴゅ、ぴゅ、と熱いしずくが鼻面に浴びせられる。

ヒマリはごく弱く、愛液と見分けがつかないような潮を吹いていた。

そっと、身体を起こしてヒマリの様子を伺う。

「はひ……はえ……♡」

白い顔に幾筋もの涙の跡をつけ、半笑いで歪んだような表情が張り付いている。

楽しげにも苦悶にも見える表情が、ヒマリの整った美貌と相まってチンポに強く響いた。

とはいえ気絶寸前でヘイローの像がぶれ、消えかけの蛍光灯のように明滅しているのでこれ以上は刺激を与えるわけにはいかない。

しようがないのでヒマリを横寝にして、背中から抱きついて太ももにチンポを挟んでもらった。

胸の中央に手を置くと、トクトクと今も早鐘を打っている。

しばらくはチンポに熱い愛液が絡むのを楽しんでいたが、絶頂で全身を強張らせていたヒマリから一気に力が抜ける。

「はぁーっ、はぁ、はぁ……」

「大丈夫、ヒマリ？　ごめんね、キツくなっちゃって」

私が声をかけた事でようやく気がついたのか、ノロノロとヒマリが振り返った。

「あ、ああ……先生？　そ、そこにいらしたんですね……もう、私……真っ白になってしまっ……♡」

呆然としながらも、どこか掠れ気味で色っぽいヒマリの言葉にチンポが反応してしまう。

「悔しいです……先生、さっきからお上手すぎて……私が、手も足も出ないではありませんか♡」

寝起きのように緩んだヒマリの声の調子が、心からの言葉である事を示しているようだった。

「ありがとう。でも加減を間違えてしまったみたいで、ごめんね」  
裸のヒマリを抱きしめても、もう緊張せずに私に体重を預けてくれる。

「いえ、その……とても、お上手で……私も、夢中になって……止めるどころか、もっととして欲しいと思ってしま……♡」

胸の中央に当てたままの手のひらに、ヒマリの甘やかな鼓動が伝わってくる。

「ああ、もう……何を言っているのですか私は！　うう……先生はこうやって女生徒を狂わせて来たのですね……悪いお人……♡」

ヒマリは我に返って騒いでみるが、何を言っても裸で抱きしめられている以上は無駄だと悟り、また大人しくなった。

まだヒマリの心臓は早鐘を打っているので、愛撫をせずに頭を撫でて落ち着くのを待つ。ヒマリも前を向いて、静かに私に身体を預けた。

「……先生……私は、先生のお相手をきちんとしてきているでしょうか？」

しばらく沈黙が続いたあと、ヒマリがいつもの冷静な調子で呟い

た。

「ん？ もちろんだよ。今もヒマリに興奮して大きくなってるでしょ？」

ヒマリがとろとろと零した愛液はチンポと太ももを濡らし、マットに敷いたタオル地のシートに染みを広げている。

「んっ♥ それは、あの、解っているのですが……先程から、中断してばかりで……先生は我慢できないほど興奮してくださいさっているのに……」

「気にしないで、ヒマリ。私は必ずヒマリとセックスするし、ヒマリには楽しんで欲しいだけだから」

唇に触れそうな所に伸びているヒマリの耳が桜色に染まっていく。「なんでそこで意思の強さを発揮するんです……何も言えなくなってしまうではないですか……」

口の中でモゴモゴ呟いたヒマリが、腰をひねって私を見上げた。

「もう、大丈夫です。先程から、お腹の奥が熱くて……その……先生と、繋がりたいと……思ってきて……」

真っ赤な顔で、処女を捧げる準備が整ったと伝えてくれるヒマリが愛おしく、そっとキスをした。

「ん……♥」

そしていよいよヒマリの処女を貫うべく、その体を仰向けにして脚を大きく開かせる。

恥じらいと、少しの緊張を孕みつつも……ヒマリは微笑みを浮かべて、その時を待った。

「挿れるよ」

言葉もなくうなずくヒマリと目と目で意思を交わし、優しく両手を繋いだままチンポを膣穴に押し当てる。

「っく」

硬めの膣をチンポが押し抜げる痛みに、ヒマリの眉間にシワが出来る。

それでもヒマリは私を見つめて、続けて欲しいと訴える。

なるべく早く済ませるべく、力を込めて処女穴を強引に押し抜け

た。

「あ、いった……」

苦痛に目を閉じ、小さく悲鳴を上げるヒマリ。

ようやく亀頭が飲み込まれ、熱く潤んだ膣を力付くで奥へと進み……

「つ、う、うう……」

ぷつん、と軽い手応えとともに処女膜を破る。

高嶺の花は昼の日差しを浴びながら、一度きりの赤い花を咲かせて散華した。

そこで止まらず、ヒマリの膣の奥まで潜り込む。

「あ、つが……」

眉をしかめ、歯を食いしばって耐えるヒマリにキスをする。

「お疲れ様。ヒマリの一番奥まで入ったよ」

「つぶ、つぶ……ど、どう、です、か……？ この……天才清楚系病弱美少女の、初めてを貰った、気分は……？」

苦痛に歪んだ、自信満々の笑み。ヒマリが一生一度しか浮かべることのない、今私にしか向けることのない表情だ。

「うん、嬉しい。本当にありがとう。一生忘れないよ」

「ふ、ふ……そう、でしょう……ふう……ふう……この私の、純潔、ですよ？ この世に並ぶ価値のあるものなど、一つも……ありません……」

「うん、あなたは最高の美少女だよ、ヒマリ」

ヒマリの脂汗を浮かべた強張った笑みが、とても誇らしげに見えて……絡み合った手を一度ほどき、血の気の引いた頬を優しく撫でた。目を閉じて頬に当たる私の手に手袋をはめた両手を添え息を整えるヒマリを眺めながら、握りしめるようなヒマリの膣の感触を味わう。

大ぶりのヒダが優しく密着する膣は、強張りが解けたら心地良い絡みつきで精液を絞ってくれる事が簡単に予想できた。

「ふう……ふう……」

じわじわと、ヒマリの顔から冷や汗が引いていき……息が整い……

膣の強張りが解ける。

「お待たせしました。では……楽しませてくださいね？」

ふふん、と冷や汗で前髪を貼り付け、力の抜けたドヤ顔で宣言するヒマリのマンコを犯し始めた。

奥は極力動かさず、敏感な入り口近くを重点的に刺激すべく円を描いて腰をグラインドさせる。

「んっ♥」

胸を反らしたヒマリの乳首が、目の前で可愛らしく勃起している。

口に含んで優しく舌で転がした。

「あっ、んっ♥」

ヒマリにとってはさっきの復習になる愛撫に、すんなりと甘い声上がる。

もう片方の乳輪の周りを指でくるくるとなぞると、あっという間に甘勃起していた乳首が膨らんだ。

上目遣いに顔色を伺うと、ヒマリは照れくさそうにしながらも微笑んで乳首愛撫を受け入れてくれている。

「はっ♥ あ、あ、いい、ちく、び……きもち、いい、です……♥」

恥じらいに上ずった声をあげ、ヒマリからもセックスを楽しもうとしてくれる。

その優しく清らかな心にチンポから我慢汁がほとばしり、ヒマリの膣内に撒き散らされた。

ぐん、とチンポの根本でクリトリスを膣の内側から持ち上げ、強く刺激する。

「ああっ♥」

のけぞったヒマリの細い喉から、鮮明なよがり声上がる。

同じ動きをゆったりと繰り返す。

「はあっ、はあう♥ あああ♥」

じつとりと汗をかいたヒマリは、すでに目の焦点が合わずに快樂に翻弄されているようだった。

身を屈めてヒマリにキスをし、涎で口元をベトベトにしながら唇を貪り合う。



「ええ、とても……幸せでした。まだお腹の奥が暖かくて……」

さす、とヒマリは大量に精液を注がれた子宮の上のお腹を撫でる。「ふふ……これでは、清楚系を名乗ることはもうできませんね。ああ、齢17にしてこのような妖艶さまで身につけてしまったら、ますます私の美しさが光り輝いてしまいそうです♪」

本気で言っつていそうにニヤけるヒマリの頭を撫でた。

「ああ、滲み出るこの妖艶さがエイミに伝わったらどうしましょう♪明日も顔を合わせると言うのに♪」

ウキウキのヒマリには申し訳ないが、言わなかったら後で恨まれるかもしれないので言うしかない。

「エイミは私のセフレなんだ」

「えっ」

ヒマリはギョツ、と目を見開いて口を半開きにしてしまった。

「えっ、えっ。い……いつから、です?」

「えっと……特異現象捜査部の最初の部室が使えなくなったあたり」  
「最初からではありませんか!? あっ、あっ、あっ……エイミにはさんざん、雑誌で得た恋愛知識を披露してきたというのに……あの生暖かい目は、圧倒的、う、上からの……あああーっ!」

アイデンティティがゆらぎ、魂が抜けたように放心するヒマリ。

「いや、まあ、ヒマリもこうして経験を積んだわけだから……ね?」

「ね、ではありません! こうなったら、先生にはこれからも定期的にごくに足を運んでもらわねば! もっと、もっと経験を積んで妖艶系美女になるまで付き合ってもらいますからね!」

勢いで言っつておいて、ヒマリの顔は赤らんでいる。

チンポの味を知っても清楚系美少女なヒマリの頭を撫でていると、ヒマリが可愛らしく腹の虫を鳴らした。

「うう……お腹が空きました。それに、全身運動をしたせいで体中がだるいです……」

「コンビニおにぎりとかパンも持ってきてるよ。食べる?」

「……疲れて腕も上がりません」

裸のまま抱き起こし、カバンから食料を取り出す。



「じゃあ食べさせてあげるね。あーん……」

「あー……んむ。むぐむぐ……」

美味しそうに表情を緩め、惣菜パンを頬張るヒマリ。

「ん」

顎を少し上げ、水をねだっているようだったのでペットボトルから飲ませてあげる。

「こく……こく……こく……ぷは。さすが先生、口から離すタイミングも完璧ですね」

「それはどうも……」

以心伝心で食事の介助をしたお陰で、ヒマリの機嫌も持ち直したみたいだ。

パン一つで満足したようで、ウエットティッシュで口元を拭うとヒマリは私にもたれ掛かって目を閉じた。

「ふああ……なんだか眠くなってしまいました。たまには運動も良いものですね……」

太陽はまだ真上で、教室の中は温かい。

ヒマリの腔内に思い切り射精したせいかわ私も眠くなってしまったため、精液と愛液と破瓜の血でぐしゃぐしゃになったシーツを替え、ヒマリのブランケットで寝ることにした。

2人とも裸なので微妙な顔はされたが、

「まあ、私ももう処女ではありませんので。先生と2人で使うなら……良いでしょう」

ということ裸で昼寝をするのだった。

夕焼けに染まる教室で目を覚まし、服を着ながら恥ずかしさがぶり返したヒマリが逃げるように帰った教室を片付け、シャワーレに帰った。

そして、翌日。

——先生

——全身運動をした後遺症で全身筋肉痛なのですが……至急助けてください。

その日はヒマリの介護をして過ごすのだった。

誤解されるのは慣れてる、から（カヨコ）

「ひ、ひい!? す、すいやせんでしたあ!」

でつぶりとしたモニタ顔の男……機械なのになんで太ってるのかは謎だ……は、路上に跪いて許しを請うている。

「はあ……あんまりナメた真似すると……私としても黙ってられなくなる……分かるよね?」

その対面で不快そうに顔をしかめているのは、カヨコだった。

「うーん、すごい」

「先生、うるさい」

感心してそう言うと、カヨコから横目で睨まれて小声で文句を言われてしまった。

この男は商店街に店を出しているのだが、そのバイト代が不当に安く苦情があったため私が解決に乗り出した。

当然ながらさつきまでゴネていたのだが……

「どうしたの、先生?」

と、カヨコがやってきて、なんだかんだとカヨコを筋者だと勘違いした男が勝手にひれ伏したのだ。

「へ、へいっ! 姉御のシマで失礼しやしたあ!」

最後の方はキャラまで変わって舎弟と化した男にため息をつき、カヨコが去っていく。

その歩き姿は堂々として、通行人まで遠巻きにしていた。

「……何してるの先生、行くよ」

周りの空気が完全に見物モードに入っているのを察して若干恥ずかしそうにするカヨコを追って、その場を後にした。

「いやあ、本当に助かったよ、姉御」

私もギロツ、と睨まれてしまった。

「やめてって言うてるでしょ……はあ……」

俯いて肩を落とすカヨコは、本当に気落ちしているようだ。

「ごめんね、本当に。さつきのカヨコ、本当にキリツとして素敵だったから」

「……まさか先生まで弄ってくると思わないでしょ……」  
後れ毛の先を指でいじりながら、そつぽを向くカヨコ。  
いつも大人びた彼女の、年相応の可愛らしいスネ方に思わず顔がほころぶ。

それと同時に、顔を背けたカヨコの白いうなじと、きちんと閉じた襟元からほんの少し覗く首元にチンポがイライラする。

「お詫びとお礼を兼ねて、どこかに食べに行こうよ。私が奢るから」  
そう言うと、カヨコはスネるポーズをやめて私の方を向いた。

「い、いや、良いよ。別にそういうつもりで言っただんじやないから」  
「まあまあ、カヨコのお陰で今日の仕事は終わったんだから、お礼をさせてほしいな」

所在なく胸元に上げられていた手を取り、絶対セックスすると心に決めて歩き出す。

「あつ、もう……強引なんだから……」  
ぼやきながら私の隣にピッタリ寄り添い、そつと腕を絡めてくるカヨコ。  
ヨコ。

「お礼、でしょ？ ちゃんとエスコートしてくれるよね」  
ほんの少しだけ細められた目と、微かに上がった口角。

知らない人からはごく薄い微笑みに見えるかも知れないが、カヨコがとても嬉しそうにしてくれているのが分かった。

「うん、満足してもらえるように頑張るよ、お嬢様」  
「ふふつ、それはもう良いよ」

からころと下駄を鳴らしながら、カヨコと一緒に遅めの昼食の店を選ぶべく散策する。

店を選んで無事天ぷら定食を食べ終えたが、次はセックスのためにラブホを探さなければならぬ。

「えつと」「次は、」  
同時に喋ってしまった、どちらも黙った。  
目で促すと、カヨコがそつと口を開く。

「次は、どこに連れてってくれるの？」  
そう言つて、また腕を絡めてくる。見返すと、上目遣いの瞳は何か

を期待して揺れていた。

「そうだね。カヨコには日頃のお礼も伝えないと」

通りを2つ3つ奥に入ると、一気に店がいかかわしくなる。

真つ昼間からこんなところに入出入りする人も当然少なく、誰とも逢うこと無くそこにたどり着いた。

「ここ、かあ……」

ぽつりと隣でつぶやく声が聞こえ、腕にカヨコの身体が押し付けられる。

着物越しに柔らかな胸元を感じ、チンポをイライラさせながらも歩き出す。

抵抗なく付いてくるカヨコを見下ろすと、イヤーカーフの間から見える耳たぶが真つ赤になっている。

ラブホの部屋を手早く選び、いち早くカヨコを犯すため足早に部屋へと移動する。

ドアを開けると、カヨコがそこで初めて立ち止まった。

私は何も言わず、カヨコを待った。

カヨコはちら、ちら、と俯いたままの横目で私を見ていたが、ゆっくりと自分から一步を踏み出し……

「ひゃっ!?!」

セックスOKと示してくれたカヨコに興奮が抑えられなかった私が部屋へと引きずり込んだ。

ドアが閉まるのを待てず、壁際にカヨコを追い詰める。

「あつ、あ……」

切れ長の瞳が、今は丸く見開かれている。

さつきまで悪徳店主を震え上がらせていた眼光が、年頃のか弱い乙女そのものだ。

かちやり、とドアがひとりでに閉まる。私が強引に顔を近づけると、カヨコは瞳を閉じる。

「んっ……」

身体を強張らせるカヨコを抱きしめ、唇を奪った。

冬なので付けているのだろう透明なリップクリーム以外には飾り

気のない唇に、ベツタリと密着する。

上唇と下唇をついばむように引っ張り、ちゅぱちゅぱと音を立てた。

「ふ、う、んっ」

ごく短い吐息には戸惑いが籠もっていて、私の動作に翻弄されるばかりのカヨコはこちらのシャツの胸元をギュツと握って初めての刺激に耐えていた。

着物の上から、カヨコの胸をさする。

「っ……い」

カヨコの身体が固く緊張し、息を呑んだのが唇を通して伝わった。

そのまま手をスライドさせ、胸の中央に当てると、どく、どく、とカヨコの心臓が早鐘を打っている。

「ん、うー」

羞恥と緊張で顔を真っ赤にしたカヨコが、ついに目を薄く開いて文句を言った。

ひとまず唇を離し入り口傍で見つめ合う。

「なんで、そういう事するかな……恥ずかしいに決まってるでしょ……」

「カヨコが恥ずかしがってるのが可愛くて、ついね」

「バカ……」

ふい、と顔を逸らすが、カヨコの白い肌はほんのりと桜色に色づいていた。

「じゃあ、まずはお風呂を浴びようか」

そう言ってカヨコの尻を押し、風呂場に連れ立って歩きだす。

「ちよ、ま、まって。……お風呂、一緒に入るつもり……?」

「うん」

カヨコは文句を言いたげに私を見つめたが、やがてため息をついて折れてくれた。

「もう……分かったよ……」

ごくぐり、とカヨコの細い喉が固唾を飲むのが見て取れる。キスをやめても、肌の上気は収まるどころか赤みを増していくようだった。

「ちよ、ちよつと待つて。……これ、飲んで良い?」

脱衣場で私が服を脱ごうとすると、声がかかった。

カヨコが手に提げていた小物入れから、私も今持っている避妊薬が出てくる。

「うん、もちろん。……それを持つてるって事は……」

カヨコは真っ赤な顔でこちらを見つめ、少し眉をしかめていた。

「アルとムツキ、2人も手を出したんだから流石に気づく。ピルも分けて貰ったの。私だって……先生に誘われるの、待つてたのに」

カヨコの視線がそらされ、自信なさげに俯いてしまう。

堪らず抱きついた。

「待たせてごめんね。今日はカヨコのこと、頑張つて気持ちよくするから」

「……うん。期待してるよ、先生」

カヨコはそつと私を抱き返して、囁くように言った。

「カヨコ、手伝おうか?」

すばすばと手早く全裸になり、フル勃起チンポを隠すこと無くカヨコに見せたまま訊いた。

「い、い、いい……あ、いや、帯解くのだけ、手伝つて……」

さつき避妊薬を飲み下したカヨコは震える手で帯を解き始める。

私は全裸でピッタリと寄り添い、カヨコの顎を指でなぞったり耳たぶを唇で食んでみたりして邪魔しつつ、解いた帯を洗濯かごに入れたり、落ちたりしないように解く時支えたりした。

「ふう……ふう……」

ただ帯を解いただけなのに、カヨコは首筋に汗をかいている。

後ろから抱きついて艶めかしい桜色の首筋に顔を突っ込み、音を立ててキスをした。

「んっ♥いきなり、何するの……」

帯が解けて前が開いてしまった着物から、より大胆に胸元が見える。チンポをお腹の横あたりでバキバキに勃起させると、俯いたカヨコ

の視線を熱いくらいに感じた。

「そ、そこ……ハンガー、取って」

さつと指さされた方を見ると、確かにハンガーがある。

しかも幾つかある中には長くてまつすぐな物もあり、着物にも対応しているようだ。

ハンガーをカヨコの前に掲げて、眼の前で脱いでいくのを見せてもらった。

白い襦袢を脱ぎ去ると、存外に可愛らしい下着が出てくる。

真つ赤な顔で眉をしかめながらも全てを脱いで見せてくれるカヨコ。

「先生、さつきから、さ、先つぽから……垂れてるんだけど。まさかそれ、着物につけてないよね？」

ホックを外したブラを片手で抑えながら、ショーツを脱ぐべく前かがみになった所でチンポをバッチリと見てしまったのだろう。

先走りが滴るチンポを見て呆れたように言う。

「うん、もちろんちゃんど避けてるよ。じゃあこれは掛けておくね」

着物をすべて脱いだようなので、私達の間にあつたソレを壁のフックに掛ける。

カヨコは髪飾りやチョーカー、イヤークフなどのアクセサリも外して小物入れに入れていた。

後には、髪を下ろしてブラを一枚胸に押し当てただけのカヨコが残った。

「さ、カヨコ。シャワーを浴びよう」

手を差し伸べると、深呼吸を一つしてカヨコの腕が身体から離れていく。

薄くも柔らかかそうな胸が開放され、ピンク色の可愛らしい乳首をついに拝んだ。

大きすぎず小さすぎず、乳輪と共に美しいバランスで裸のカヨコの胸を飾るそこに、暫し見惚れる。

「な、なに。何か文句あるの」

「カヨコの胸がとても綺麗で感動したんだ」



そう言いながら自然に腕を前に伸ばし、指の腹にカヨコの乳首を乗せた。

「んっ……♡」

カヨコの両肩が大きく跳ねる。

予想以上に敏感なカヨコの乳首をゆっくり優しく転がした。

「ちよっ……♡ やめっ……♡」

身体をよじって逃れようとする動きに完璧に合わせて指を動かし、クリクリと乳首をいじり続ける。

カヨコからすれば私の手を払えば良いだけなのだが、真っ赤な顔で目を潤ませながら顔をしかめて快楽に悶えている様子を見ると、そこまで頭が回っていないのだろう。

「ほんと……っ♡ だめ……っ♡」

ついにカヨコがまっすぐ立っていられなくなって、私の腕に縋り付いた。

へたり込んで前かがみになったため小さな胸が下を向き、より乳首を弄りやすくなる。

ぴん、ぴん、と指で弾き、時折真下から乳頭をカリカリとひっかく。

「んんっ♡ ああぁっ♡」

風呂場に、初めて大きな声が上がった。普段からは考えられないほど甘ったるいカヨコの声にチンポのイライラも高まり続けている。

「せ、せんせっ♡ お、ねがっ♡ もうっ♡」

カヨコは顔だけ上げた。涙でキラキラ輝く紅白の瞳が絶頂が間近である事を訴えているので、ひと思いにイかせてあげる。

きゅっ、と乳首を摘んだ。

「~~~~~♡」

下唇を噛んで声を押し殺し、カヨコは乳首だけで絶頂した。

膝が笑っているの、裸で抱き合っつてその体を支える。

「はっ♡ っか、は……、はーっ、はーっ♡」

絶頂の余韻で震える身体が私に体重を預けてくる。しっとり汗をかいたカヨコを優しく撫でた。

たっぷり30秒は震えていたが、スッと力を取り戻すとまっすぐ

立って私を睨んだ。

カヨコの肩に乗せた私の手に、無造作に手を近づける。

「イタタツ」

カヨコは私の手の甲を優しくつまみ、つねった。

「やめてって言ったでしょ、もう。恥ずかしいんだから……少しは加減して」

微かに唇を尖らせて、ビンビンに乳首を勃起させたカヨコが睨んでくる。

だがイッた直後のどこか弛んだ表情が、それすらも可愛らしく見せていた。

「ごめんね。カヨコも半端な所でやめたら辛いかもって思ってた」

「し、しらない、そんなの。……ああ、もう！ 入るなら早くしよう」

さっと目をそらして風呂場にズンズン歩いて行くカヨコを追って、私も入った。

さああああ……と熱めのシャワーを、カヨコと並んで浴びる。

裸で隣り合っているためカヨコはとても居心地が悪そうで、なんとか私から胸を隠そうとしたり、チンポをチラリと見てしまい顔を背けたりしていた。

「ぎ、カヨコ。椅子に座って。背中を流してあげるから」

「い、いいよ。子供じゃないんだから……」

「まあまあ、これも準備のうちだから」

そう言って、後ろからカヨコを抱きしめてチンポを押し当てる。

「ひゃっ!? あ、あ、当たってるってば……!」

カヨコの胸元に当たるシャワーを手に暖かく感じながら、瑞々しくお湯を弾くカヨコの肌になつとりと指を這わせる。

「わ、わかった、洗っていいからー」

カタカタつ、と大きな音を響かせ、スケベイスに座るカヨコ。

シャワーを止めてボディソープを手に取ると、カヨコの腹や胸をヌルヌルと撫で回した。

「んっ♥ やっぱりこういう奴じゃん……背中を流すんじゃないかかったの?」

「まあまあ、泡立ってるためだから」

微妙に慣れを感じさせる所作でされるがままになるカヨコの腕を上げさせ、腋も洗う。

だんだんと泡立ってきたボディソープをまとめて手に取り、カヨコの滑らかな背中をくまなく洗った。

しばらく洗ってから、背中という比較的穏当な場所に触れていたため安心から油断していたカヨコの股間に手をつっこんだ。

「わっ!?!」

くにゅ、とカヨコの陰唇の蕩けそうな柔らかい感触が指に返り、そのヒダの内側を撫でるように洗っていく。

「ここも洗わないとね」

「じ、自分で洗えるから、ああ♥」

陰毛をわしわしと掌底で揉むようにボディソープを泡立たせ、カヨコの陰毛産のきめ細かい泡で陰唇の隅々まで洗う。

「ここも、中まで洗おうね」

「っ、あああっ♥そこ、そこだめっ♥」

勃起したクリトリスの包皮を優しく剥いて、ソープでヌルヌルと洗う。

「っ♥つく♥うう♥」

カヨコの細い脚がぱかっと開き、気持ちよさそうにクリトリス洗いを受け入れてしまっていた。

「ここも敏感なんだ。カヨコはセックスの才能があるのかもね」

快樂で歪んだ顔で、辛うじて睨んでくるカヨコ。

「ほ、ほめ、て、ないで、うつく♥う、う、うー…♥」

なけなしの力は、クリトリスをシコシコと優しく扱き上げるだけで霧散してしまった。

「誉めてるよ。私にとってはそれが魅力的なんだから」

「あっ、あーっ♥あああーっ♥」

すすり泣くような、哀れっぽく嗜虐心をくすぐる艶声で私のチンポをイライラさせてくるカヨコ。

「ふっぐ♥う♥うううう…♥」

泡まみれの太ももをビクビクと痙攣させ、カヨコがクリトリスでも絶頂する。

「はぁーっ♥ はぁーっ、はぁーっ……も、もう……やめてよ。イクの、結構疲れるんだから……始まってないのにバテちゃうでしょ」  
呼吸を整えたカヨコに、やんわりとたしなめられる。

「うーん、でも初めてだと念入りに準備しないと痛いだろうし。カヨコには楽しい初めてを経験してもらいたいんだ」

「ふうん……先生の趣味じゃないんだ。分かった。それならいいよ、先生の好きなように……して」

言ってからかなり恥ずかしい発言だと気づいたカヨコは、それきり口をつぐんだ。

せつかくなのでカヨコをもう一度イカせるべく、無抵抗に脚を開いたままのマンコに小指を挿入する。

「大丈夫？ これは痛くない？」

「ん……♥ 先生の指、私のお腹の中に入ってるんだね……♥ なんか、すごい意識しちゃう……♥」

2度の絶頂を経て、カヨコの膣内は熱く潤んでいた。慎重に一本から挿入し、カヨコの反応を見ながら徐々に太くしていく。

辛抱強く膣のストレッチを続けると、にち、にち、にち……と風呂場にかヨコの股間が立てる水音が響くようになった。

「はぁ……♥ はぁ……♥」

カヨコも、マンコをほじられ続けて大分リラックスした様子で股を開いている。

「どう、痛くないかな？」

「そういう事……聞かないでよ……♥ き、きもち、良いから……♥」  
怒りつつも、律儀に答えてくれるカヨコ。表情も大分弛緩して、猫と戯れている時のように隙だらけだ。

膣に入り込んだ指が、きゅんと締め付けられる。カヨコの肉ヒダはしっかりと発達し、心地よいプリプリの感触を返してくれている。

チンポを挿入すればみっちり吸い付いてくる名器なのは間違いない。

そろそろ、私もカヨコにチンポをハメたくて仕方なくなってきた。フィニッシュすべく、カヨコを持ち上げて私がスケベイスに座り、脚の間にカヨコを横座りに乗せる。

「こ、今度はなに？ んんっ♥」

有無を言わずキスをする。お姫様抱っこのように抱きすくめた体勢で、乳首をしごきながら手マンを再開した。

「んーっ♥ んんんーっ♥♥♥」

経験の浅いカヨコが、どうしようもなく快楽に翻弄される。

マンコが痛いくらいに指を締め付け、あつという間にカヨコはイッた。

「落ち着いたらお風呂から上がろうか」

「……………♥」

カヨコはもう言葉もなく、とろんと眼尻を下げて熱っぽい瞳で私を見つめている。

その手が重力に引かれるように自然に下がり……………私のチンポに触れた。

「硬い……………今から、これを私の中に入れるんだ……………」

囁くような甘く掠れた声に聞き惚れているとカヨコは指先で撫でるようにチンポを上下にこすり始めた。

「カヨコも手でしてくれるの？」

「ん……………さつきから、先生にされてばかりだから……………私も先生を気持ちよくしてあげたいな」

手首を柔らかく使い、カヨコの手が波打つように上下する。

滴る我慢汁を気にすることもなく、恐る恐るという感じで指先だけの状態から握っての手コキになった。

「あ♥今、跳ねたね。こーうなのが、良いの？」

カヨコは膝の上に子猫のように横座りに収まっていながら、柔らかな笑みを浮かべてチンポを可愛がってくれている。

にちゃ、にちゃ、と今度は私の我慢汁をカヨコが手コキで泡立てる音が響き渡った。

「上手だよ、カヨコ。本当に才能があるね」

「だから、そんな事褒められても反応に困る……おしゃべりな先生の口は、こうしちゃおうね」

すぐ近くのカヨコの顔が迫り、触れ合うだけの可愛らしいキスをしてくれる。

そのまま両手を使っての精一杯の手コキを継続する。

だが、竿を握って優しく上下するだけなので射精には至れそうになかった。

「カヨコ、続きはベッドでしようか」

「ん……駄目だった？ 結構難しいね、やっぱり」

駄目なんかじゃないよ、と感謝を告げて、風呂場を後にする。

自分自身はほとんど身体を洗ってない事に気づいたが、

「……いいよ。先生の匂い……嫌いじゃない、し」

とカヨコが言うのでセックスを優先した。

お互い一秒でも早くセックスしたいので無言で手早く身体を拭き、ラブホの大きなベッドへ向かう。

「う……」

セックスのための空間に尻込みするカヨコの生尻を掴みつつ腰を抱いてベッドまで導く。

ベッドに腰掛けてもらい、私はカヨコの開いた脚の間に跪いた。

「ぎ、流石に恥ずかしいんだけど……」

先程私が丹念に洗ったマンコが、風呂上がりで更に鮮やかなピンク色を晒している。

「もつとほぐす必要があるからね。カヨコは楽にしてて」

綺麗な流線型でありつつも、花のように開いたカヨコのマンコに口づける。

「んっ♥」

柔らかな陰唇をついばみ、既に潤んでいる内部に舌をねじ込んだ。

「あっ♥ あ、あ、あ♥」

カヨコは早速起きていられず、ベッドに背中を付けて腕で目元を隠し悶えている。

2度の絶頂でほぐれつつある膣を全方位にグイグイと伸ばしチン

ポの通り道を整える傍ら、鼻先にちよこんと勃起しているクリトリスを摘んだ。

「きやうっ♥」

カヨコの可愛らしい声と共に開いていた脚が跳ねる。

「ふーっ♥ ふーっ♥ ふーっ♥」

クリトリスを軽く捻りながら膣穴を舌で蹂躪するだけで、もうカヨコは余裕をなくして荒い鼻息を響かせている。

初心者のカヨコにあまり負担をかけるのも良くないので、絶頂しない程度に追い詰め、膣穴のストレッツチに努めた。

「うっ、うっうっうっ……♥」

そのまま10分ほど続けると、カヨコはもう何も考えられなくなるくらいに頭の中が快樂漬けになっていた。

マンコもぱつくりと開き、クリトリスや陰唇が充血している。

立ち上がると、カヨコの膝を掴み脚を上へ上げさせ、犯しやすいように腰の角度を調整した。

「カヨコ、入れるよ」

目を隠した腕の間から、カヨコが私をじっと見つめている。

その滑らかな喉元が、固唾を飲んで艶めかしく上下した。

それを返事として濡れそぼったマンコに鈴口を押しあて、腰を突き出す。

「んっ……♥」

内蔵を押されたカヨコから漏れ出るように可愛らしい声があがり、亀頭がマンコに包まれた。

熱々の愛液に満ちたカヨコの中は処女の窮屈さを持ちながらもほぐれきっており、握るような強い締付けとピツタリと吸い付くような膣肉が心地よい。

「あ、あ、あ……♥」

細く掠れるような、しかしどこか満足げなカヨコの声に押されるように、腰に力を入れてカヨコの中に分け入っていく。

吸い付きが強いためプリプリした膣肉に全方位から撫でられているような刺激に、金玉の中の精子が煮えたぎるように外に出たがつて

いる。

程なく、カヨコの処女膜に到達した。

「来て、先生……♥」

呆然とした表情で、白い肌を全身桜色に上気させて、カヨコが私を求めている。

一気に奥まで突き刺した。

「あ、つか……」

顔の横のベッドのシーツを握りしめ、大きく口を開けてカヨコが悶絶する。

結合部を見下ろすと、痛々しいほどにミツチリと穴が拡げられていた。

押し出されるようにクリトリスがピンと包皮が剥け、限界まで勃起しているので愛液をなじませた親指で優しく撫でて痛みを紛らわせる。

「んっ♥ あ、それ……♥ ちよつと楽、かも……♥」

ぴく、ぴく、と太ももが痙攣するたびに眉をしかめるが、幾分か楽になっていられるらしい。

落ち着こうとして目を閉じ、荒い息遣いでクリトリスの快楽に集中するカヨコ。

「ふう、ふう……♥ んっ……♥」

時折唾液を飲んだり、ちろりと舌なめずりをするのがなんとも言えず艶めかしく、カヨコの子宮口付近に私の我慢汁が撒き散らされる。

空いた片手で乳首も弄り、カヨコを気持ちよくすることで破瓜の痛みを紛らわせる事に集中する。

「んっ♥ あ、先生、それ、強すぎ……♥ あんま、やられたらっ♥

また、イツ、ちゃ♥」

カヨコの脚が持ち上がり、内股に閉じようとする。

かわいい足指はギュツと丸められ、腕の方も肘も左右がくつつく位に持ち上がっていた。

絶頂直前のりきみで指一本動かさないカヨコを見て、指の動きを緩める。



「ふう、はあ……もう、先生の指……すごすぎるんだから……加減してっば……♥」

くたりとベッドの上に手足を投げ出し、イキかけたため消耗したのか弛んだ表情で囁くカヨコ。

「ごめんごめん。カヨコとのセックス、たっぷり楽しまないね」

破瓜の痛みもそろそろ引いてきたようなので、覆いかぶさってカヨコにキスをする。

何も言わずともカヨコの方から抱きしめてくれ、脚まで腰に絡めてしがみつかれた。

「ん……もつと、しがみつかせて……♥ 先生と、くつつきたい……♥」

カヨコが私の首もとに顔を埋め、胸もピッタリとくつつけて強く抱きつく。

シャワーでしっとりとしたカヨコの髪を撫でると、耳元から心地よさそうな吐息が漏れた。

「動くよ、カヨコ」

「うん……私で、気持ちよくなって……先生♥」

鼓膜を愛撫するように甘く、耳元でカヨコが囁く。

膣が期待にヒクつくのを振り払って、腰を引いた。

「あ、あああーっ♥」

処女膣の強い締めでカチを刺激され、私の腰にしびれるような刺激が走る。

耳元でカヨコらしからぬ大きな善がり声が聞こえるのも金玉を煮え立たせた。

腰を再び突きこむと、肉の海をにゆるにゆるとかき分ける感触と共に、カヨコが私の背中に回した手に力が籠もる。

「ふうっ、つく、あ……♥」

苦悶のような、快楽を押し殺しているような、悩ましい雌の声。

もつともつと聞きたくて、腰を引き、押す。

「あうううーっ♥ ん、つぶ、うう、んあーっ♥ あつく、う、うああーっ♥」

後で音だけ聞いたとしても、どう犯されているのかすぐに分かってしまう、カヨコの恥ずかしい声がラブホの一室に響き渡る。

本人は物静かながら沈黙が苦手だというカヨコは、今や自分の艶めいた美声で2人の間に1秒たりとも沈黙の時間を作らない。

たん、たん、と肉が打ち合うほどにピストンに勢いがつき、愛液がチンポにかき混ぜられて泡立っているのだろう水音も混じり始める。

「あっ♥ ああーっ♥ ううーっ♥」

カヨコのあえぎ声は、もはや抜き差しどころにも高らかに快楽を歌い上げていた。

膣の締りも強くなり、処女ながらいつまでも犯していたい位に居心地がいい。

とはいえ、叫びすぎてだんだん声が枯れてきてもいるので、そろそろフィニッシュに移行することにした。

パン！ パン！ パン！ と叩きつけるようなピストンでカヨコの弱点であるクリトリスを下腹部で押しつぶす。

密着しながらも、汗に濡れたカヨコの乳首を摘んで強めにひねった。

「あゝーっ♥♥♥」

決壊寸前にまで高まっていたカヨコの快楽が弾け、大声で絶頂する。

ぎちりと蟹挟みにしたカヨコの脚が痛いくらいに締まり、私の背中に回されたカヨコの手が何かを求めるように何度もねつとりと撫で回してくる。

ひととき強い膣の締め逆天らず、カヨコの奥深くに射精した。

「はあっ♥ はあっ♥ はあっ♥」

荒く、熱い息が耳元に吹きかけられる。

カヨコの脚の拘束は強く、膣奥以外に精液を出すことは許されていない。

「ちゅ……♥ ちゅ……♥」

カヨコは無意識なのか、私の首筋に唇を押しあててキスの雨を降らせ、ちろりと舌で舐めてくる。

その官能的な熱い湿った感触に、精液が追加で子宮に注ぎ込まれた。

射精が終わって勃起が柔らかくなりつつあっても、カヨコはみっちり密着して動かない。

「はあ……凄かった♥ セックスつて、こんな気持ちいいんだね♥」  
唇を愛撫のように耳たぶに掠らせて、カヨコが囁いてくる。

「楽しんでもらえた？」

「うん……♥ 私、初めてなのに。先生に、あんな大きい声聞かれちゃって……恥ずかしい」

「私は嬉しいけどね」

「そりゃ……先生はそうだろうね……」

沈黙が訪れるが、カヨコは気にする風でもなく私の背中を撫でたり首筋や耳にキスしたりしてしがみつき続けた。

「ねえ、先生。まだ、時間あるよ……♥」

ほしよほしよと、限界まで小さいヒソヒソ声が耳穴に直接注がれる。

「先生、私の声……好き、なんだよね？　こういうの、どう？　興奮、してくれる？」

カヨコの熱っぽい唇を触れさせながら、恥じらいと性欲でねっとり蜜のように甘い声を注がれると、それだけで脳みその内部を愛撫されているように心地いい。

返事をするまでもなく、射精後の勃起が復活していった。

「本当に、好きなんだ……♥ 嬉しい♥ 先生も、生徒と生でセックスしたいんだよね？　いっぱいしていいからね♥」

普段からは考えられないカヨコのリップサービスが、私のチンポを奮い立たせる。

「初めてなのに、そんなにして大丈夫？」

「生のできるの、今日だけだし。アルたちも、生が忘れられないって……せつかくだから、沢山しておきたいと思って」

「……アル達がそんな事を？」

あれから何度もゴムセックスはしているものの、やはり生徒たちに

とっても生は格別なのだろうか。

つい気になってしまったが、カヨコに背中を抓られて気を取り直した。

「私からふっというアレだけど、今は私だけ見て……」

「ごめんごめん。それじゃあ、カヨコが満足するまでしよう」

「うん。ラブホの時間が終わったら、シャワーで続き、しよ。良いよね？」

セックスの時は素直になるというカヨコの新しい一面に、早くも追加の先走り汗が膣奥に漏れ出ていく。

その日はカヨコが息も絶え絶えになるまで追い詰め、膣内射精させてもらうのだった。

誰かにお世話されるのは嬉しい（ハルカ）

「はふう……」

陶然と、ハルカがスープを飲み干す。

真冬の寒さの中にあつて、白い肌がさらに青白かったハルカの頬に赤みがさし、めつたに見せないくつろいだ笑顔に私の頬も弛む。

ハルカの雑草植物園が凍えていないかを見に行った帰り、寒そうなハルカを誘つて温かいものを食べるに來た私たちは、適当な屋台に入つてラーメンを食べていた。

「ごちそうさまでした」

私も食べ終わっていたので屋台の店主に挨拶をしたら、ハルカがギョツと目を剥いた。

「あ、し、失礼しました！ わ、わ、私、自分が満足したらボケつとしてしまつてご馳走様でしたの言葉もなく……！」

独りでに狼狽するハルカの背中を撫でて落ち着かせる。

屋台の店主も目を丸くしていたが、無事その場を離れる事ができた。

「す、す、すみ、すみません！ せせせつかく先生がお食事に誘つてくださったのに私が……台無しに……！」

「し、死んでお詫びを……！」

恐縮しきりのハルカが、わなわなと震える手で銃口を自分の口の中に突っ込もうとする。

往來を行く人がギョツとしつつも遠巻きに早足で歩いていった。

「まあまあ、待って」

穏やかな雰囲気だったところからいつものやつをやってしまったハルカの落ち込みは普段と比べても深いように見える。

「ぐすつ……わ、私なんか……先生に優しくしてもらう資格なんて……」

「ハルカ。少し『休憩』していいこうか」

放つておくと際限なく落ち込んで行きそうなハルカに声をかけ、ちようど良い機会なのでセックスすることにした。

銃を撃たないように手を握り、ラブホへ向かう。

「あ、あ、あの、先生……？」

未だ青い顔のハルカに有無を言わず、小さな手を握りしめて歩いた。

「こ、ここは……何でしょう？」

「数時間休憩するための施設だよ」

ハルカはラブホが何なのかもよくわからない様子で、普通に手を引かれて付いてきた。

ちようどカヨコとセックスしたのと同じ部屋が空いていたのでそこにする。

部屋に入ると、2人でベッドに腰を下ろした。

「え、えつと……先生？ どうして、ベッドに座るのでしょうか？」

あつ！ いえ！ 決して先生の行動に疑いを持っているとかでは！

「それはね、ハルカとセックスするためにここに来たからだよ」

「せつ……!! わ、わ、私ごときが先生にセックスして頂くなんて恐れ多い……！ あう、いえ！ あの、先生のお言葉を否定しようなどとは思っておらず、その……！」

行為自体は理解しているのか、顔を赤くするハルカ。

「ハルカは、私に貰ってばかりだと思っっているんだよね？」

「はっ？ ははは、はい！ 先生に受けたご恩を思えば、命も来世も捧げ尽くしても足りません！」

「じゃあ、それを返す一環と思って、私とセックスしてくれないかな？」

可愛らしい着物に身を包んだハルカの腰を抱き寄せる。

それと同時に、ハルカがいつも大事そうに抱えている銃をそつと取り上げてサイドボードに立てかけた。

「う、ううう……私なんか、先生のお相手が務まるでしょうか……」

「大丈夫。ハルカはとても可愛いから、ほら」

ハルカの白い手を私の股間に導き、勃起チンポを触らせる。

「あ……こ、これ……」

「ハルカとこれからセックスする事を考えて興奮したからこうなってるんだよ」

雑草を扱う時のように、ハルカが丁寧に股間をさすってくれる。

「わ、私、で……先生が、興奮を……」

目を見開いて、その言葉を口の中で転がすように呟くハルカ。

「どうかな？ セックスしてもらえる？」

「はっ、はい！ セックスします！ いつでもどこでも、先生のお誘いであれば！」

快諾を得たので、晴れてハルカは私のセフレとなった。

「ありがとう。とりあえずこれを飲んでね」

カバンから避妊薬を取り出し、ミネラルウォーターのペットボトルと一緒に渡す。

「は、はい！」

一切の疑問を挟むことなく、ハルカが私と生セックスする準備を整える。

「じゃあハルカ、脚を払ってスカートをめくりあげてみて」

「ひゃうっ!？」

処女のハルカに軽く要求してみると、目を見開いて赤面したまま固まってしまった。

なので、自分でハルカの太ももをつかんで開く。

真冬なのにミニスカ着物で出歩いていたため、ハルカの太ももはひんやりと冷たい。

「あ、あわ、わわ……！」

股を開かせている私にしがみついて、羞恥に耐えるハルカ。

太ももがあまりに冷たいので、大股開きにしたままでしばらく太ももをさすってあげた。

「ん……♥ 先生の手、とても、温かい……です。ありがとうございます……す……」

若干上ずってはいるが、ハルカがお礼を言ってくれる。

「ううん、良いんだよ。さあハルカ、自分でスカートを持ち上げて見せて」

「う、い、いえ、あ、あの、先生の目に私ごときの汚い股間をお見せずるのは……！」

「でも私は見たいんだ。お願い」

「は、は、はいいい……」

ギョツと目を強く瞑り、ハルカが恐る恐るスカートを摘んで上げる。

真っ白な肌の太ももの付け根がだんだんと露わになり、ついには黒色のショーツがその姿を現した。

「おお……大人っぽい履いてるんだね」

「すすすすみません、私のような人間が生意気にも黒の下着を履いていてすみません！」

「いや、ハルカに似合ってて良いと思う」

そう言いながら、なんの気なしにぷにつとハルカの股間に指で振れる。

「つつつつ！」

瞬時にハルカが反応し、スカートをくしゃくしゃに握りしめて目を固く閉じる。

震える手と真っ赤になった耳でハルカの緊張と羞恥が手にとるように分かった。

くに、くに、と下着越しにハルカの性器の感触を楽しむ。

ハルカの大陰唇はスラリと薄く、まだピッタリと閉じているのがショーツ越しにも伝わってくる。

「大丈夫、ハルカ？ あまり嫌なようなら止めておく？」

「いいい、いえ、大丈夫です！ 先生のお相手は、必ず務めてみせます！」

白い顔を羞恥に赤く染めてハルカが私を見上げてくる。

「ありがとうね、ハルカ」

その表情にチンポをイライラさせつつも、ハルカの股間への愛撫をだんだんと大胆にしていく。

「んっ♥」

掠るようにクリトリスを攻めると、ハルカが押し殺した雌声を上げ



る。

その直後には恥じるように顔を伏せ、声を上げまいと唇を噛んでいた。

「もつと肩の力を抜こう、ハルカ」

そう話しかけながら、指3本でクリトリス、尿道、膣口の辺りを同時に刺激すると、

「うっ ♡ あ♡」

噛み締めた唇が緩み、堪えきれない快楽を伝える喉の奥に詰まったような声が出てくる。

「ハルカは、どこが気持ちいい？」

「はっ、い、い、いえ、あの、どこ、と言われるとその、ええと、ん、ふっ ♡ ううっ ♡」

快楽の発信源はクリトリスではあるのだろうが、同時に刺激しているので経験の少ないハルカからはどこは分かりづらいかも知れない。

「わ、わ、わかりま、あっ ♡ せ、ん ♡ 先生の、ゆ、ゆびっ ♡ いったんに3箇所も、ぐりぐりっ ♡ て、される、とお……♡」

それはそれとして、ようやくハルカも愛撫で気持ちよくなっている自分を受け入れて力を抜いてくれるようになったため、急速に絶頂が近づいている。

「じゃあ、全部気持ちいいと思っておいて。一度軽くイッておこうか」「い、いく？ えっと、どこ、んつく ♡ あ、せんせいっ ♡ そこ、は、はげしいっ ♡ ああ、わ、わた、わたし、頭の中っ ♡ 白くなって ♡ ああっ ♡ あああっ ♡」

3本指の指圧を強くすると、ハルカがほとんど何も喋れなくなるほど快楽に夢中になった。

くち、くち、と黒い下着にも照り返しで分かるくらい愛液がにじみ、内股は絶頂の予感に何度も筋肉を痙攣させている。

「いく時の顔を見せて、ハルカ」

「あーっ ♡ ♡ あっ ♡ ♡ あっ ♡ ♡ あっ ♡」

ハルカの肩を抱いていた手で顎を上向かせ、今にも絶頂しそうなハ

ルカと目を合わせる。

「あゝっ♥♥♥ うゝ♥♥♥♥♥」

ハルカは歯を食いしばって、眉を寄せて、人生初の絶頂をなんとか受け止めていた。

「うっ、ぐ♥ う、う、う……♥」

こめかみがピクピクと痙攣し歯がカチカチと鳴る位に深い絶頂に、ただただ悶絶するハルカ。

目を合わせているはずの私すら気にする余裕は無いようで、無我夢中で私の服にしがみついて絶頂に耐えている。

「うん、やっぱり可愛いよ、ハルカ」

私の脇腹辺りの服を必死に掴むハルカの手を撫でて、ゆっくりと手を開かせて外してやる。

上半身を優しくベッドに寝かせて、股を開いたままのハルカの股間の前に跪いた。

絶頂で湿るハルカのショーツを脱がせ、予想通りにピッタリとしたスジを描くハルカのマンコを拝む。

「ふう、ふう、ふう……♥ あ、え？ せ、んせい？」

朦朧としていた意識が戻ってきたのか、ハルカがスカートから手を離した。

パサリと私の頭にスカートが落ち、それに押されるようにしてハルカのマンコにクンニを開始する。

「ひゃああっ♥ せ、先生!? 私の股間なんて舐めたら、きき、汚いですよー!」

シャワーも浴びていないしきつき食事をして汗をかいたハルカのマンコは確かに若干濃い味がしたが、15歳の若さかそれでも甘く香るような上品さがある。

「あああ♥ だ、だめ♥ さ、さつきより、すご、いい♥」

クリトリスをちゅうちゅうと吸い小陰唇を指で弄んで軽く刺激すると、ハルカは大きな声を上げて善がりながら私の頭の辺りに手を持ってきてワキワキさせた。

しがみつきたいがそれを遠慮していると感じさせるその動きに、片

手だけ恋人繋ぎで手を握る。

「あ……♡」

一瞬、ひいひいと善がる声が止み安堵の声を上げるハルカ。

トロトロと愛液を吐き出し始めた膣口に子指をあてがうと、つぶりと挿入した。

「っ♡」

愛液で濡れた口元を上げ、ハルカの様子を伺う。

「大丈夫、ハルカ？ これは痛くない？」

「へ、へ、平気です！ 先生から与えられるものでしたら、む、むしろ、ちよつと痛い位でちょうど良いです！」

なるほど、と頷くと、試しに人差し指と中指の2本を入れてみた。

「あ……♡」

15歳の若々しい処女マンコには痛いくらいに太いであろうものを啜え込み、ハルカは濁った声を上げる。

「大丈夫？ 辛くない？」

握るように強く私の指を締め付けるハルカのマンコは、別の生き物のようにもぐもぐと膣口を蠢かせている。

「だ、だいつ♡ じょう、ぶ、ですう……♡」

どこか悦びを滲ませるハルカの声を聞いて本当に大丈夫だと判断し、指を前後に動かして手マンを始めた。

「う……♡ うう……♡ う……っぐ♡ お……っ♡」

ハルカの善がり声は押し殺し過ぎて返って艶めかしく、私のチンポのイライラを煽ってくる。

ぐつちゆ、ぐつちゆ、と粘りを増してきた愛液の音をことさら大きく立ててやりながら、濃い雌の匂いを発し始めたハルカのマンコに口づけ、クンニも再開した。

「う……♡ あ……♡ ああああーっ♡♡」

そこで限界を迎えたハルカが、部屋中に響き渡る大きな声を上げてすぐに絶頂する。

私の顔の目の前にある内腿の筋肉が、ハルカの意味とは無関係に食欲に快楽を貪るべく力み、脚がガクガクと痙攣する。

あつという間に雌として開花していくハルカの痴態を見せつけられて私のチンポももはや限界だ。

虚ろな目で天井を見上げたまま帰ってこないハルカの横で全裸になり、ハルカの履物を脱がせて絶頂中の身体をベッドの中央へと運んだ。

「あ、せ、先生……ま、まって、ください……」

ラブホの大きなベッドの中央で、裸の私と対面したハルカが寝起きのように力の抜けた表情をしながら身体を起こす。

「これでは……私はまた、先生にしてもらってばかりです……あの、だから、その……私からも、なにか、先生にして差し上げることは、できないでしょうか……?」

ハルカは紫の瞳を切なげに揺らし、私に奉仕したいと懇願した。

「ありがとう、ハルカ。それじゃあ、私のチンポをしゃぶってもらおうかな」

「は、はいっ！ よろこんで！ ……うええっ!？」

脊髓反射で返事をしたハルカが目を剥いて驚く。

「無理なようなら……」

「いいいいえー！ や、やります！ 先生の、ちち、チンポ！ しゃぶらせてもらいます！」

ちら、ちら、と私の勃起チンポに視線を落としながら、ハルカは破れかぶれのように真っ赤な顔で叫んだ。

その心意気を汲んで、私はベッドに尻もちをついてハルカの前に座った。

「じゃあ、四つん這いになって舐めてみて」

「はひいー」

ハルカはノーパンではあるがしっかりと着物を着込んだままの格好で私の前で四つん這いになり、恐る恐るという感じでチンポに手を伸ばしてきた。

さつきまでの手マンで身体をくねらせたせいか、着衣は乱れて襟元が弛んでいる。

ちようどよくおそろいの黒いブラがちらりと見えた胸元が、幼げな

ハルカの容姿と可愛らしい着物とのギャップを生じさせ、ハルカの手の中でチンポを跳ねさせた。

「ひゃあ!? あ、あ、あの、やはり私などが先生の大事な所に触れるなどおこがましいという事でしようか!？」

「ハルカのセクシーさに興奮しただけだから気にしないで。それより、口をつけてみてほしいな」

ハルカの白く細い指は、既に私の我慢汁で汚れてしまっていた。

ぎゅつと固く目を閉じて耐えるように顔を近づけ、微かに唇を尖らせて亀頭に唇を触れさせるハルカ。

「ん……」

ハルカの薄く柔らかな唇が、私のチンポに押し付けられ……そのまま口内へと滑り込んでいく。

「ハルカ。唇を内側に巻き込むみたいに歯に被せて、チンポに直接当たらないようにして啜えてね」

薄紫のリボンをつけた頭を、優しく撫でる。

ハルカは言われたようにフェラの作法を覚え、上目遣いに私の顔を伺いながらチンポを口内へと導いていった。

「あ、う……」

なんとなくて口に含んだは良いものの、次をどうしたら良いのか分からずにハルカが固まってしまう。

「次は舌で舐めてみて」

頭を撫でながら、ハルカにフェラ指導を始めた。

ハルカは一心に私の顔色を見つめながらも、小さな舌を一生懸命に使って裏筋に舌を這わせる。

舌を広く使って味蕾のザラつきでチンポを悦ばせる方法も、固くした舌先で亀頭をほじくる方法も、ひよつとこのように頬をすぼめて口の内側をすべて性器として使う方法も、教えた側から実践し、自発的に使ってみせてくれる。

10分もする頃にはもう、いっぱしの風俗嬢のような積極的なフェラができるようになっていた。

「ぢゅっ ♥ ちゅぽっ ♥ ぢゆるるっ ♥ んっく ♥」

私の顔色で気持ち良さそうにしているのをつぶさに確認しながら、スケベに鼻の下を伸ばしたひよつとこ顔で口を性器のように前後させてくれる。

唾液を絡ませたチンポに頬の内側の粘膜をくっつけ、亀頭には舌を巻きつけるようにベツタリと触れて強い刺激で射精を促す。

「おお……いいよ、ハルカ。ハルカはフェラの才能があるみたいだね」ハルカの目元だけが、にやあと笑う。

普段なら独特な可愛らしさを覚える所だが……フェラ中の淫靡さと相まってひどく淫猥で、この場に似つかわしい笑顔に見えた。

「それじゃあ、ちよつと我慢してね」

頭の横に結わえられた可愛い花飾りを潰さないようにハルカの頭を掴むと、ぐいと押し下げた。

「おっっ♥っっ♥」

ハルカの喉奥に私のチンポが突き刺さる。

反射により締まる喉の粘膜の熱さを感じながら、勢いよく射精した。

「っぐ♥んぐっ♥んぐっ♥ごっ♥」

目を白黒させながらも、ハルカは喉奥を蹂躪させた事に文句どころか喜悦の笑みを浮かべ、腰を跳ね上げた。

頭を抑える私の手に、そつとハルカの手が重ねられ……すがりつくように優しく撫でられる。

ひとしきり射精すると、ハルカの口からチンポを引き抜いた。

「ぶはっ♥はーっ、はーっ、はーっ……いい、いかがでしたでしょうか、先生……」

にやあ、と口の片端を上げてネットリとした笑顔を浮かべるハルカ。

「とても良かったよ。教えた事をすぐに覚えて実践してくれるし、ハルカは最高の生徒だね」

フェラ授業としては優を付けて良い才覚に、ハルカの頭を優しく撫でる。

「えへ、へへへ……な、なんだか、初めて先生にお返しが出来た気がする

て……すごく、嬉しいです」

顔を赤らめて、口元に精液で張り付いた陰毛をくつつけながらも屈託のない無邪気な笑顔を浮かべるハルカを見ると、射精直後なのにチンポのイライラが収まらない。

「あつ……もう、大きく……えつと……」

フェラ経験で雌として成長したハルカが、私の性欲を察して何も言わずに股を開いてスカートをめくり上げ、仰向けに寝そべってくれた。

「わ、私なんかの身体で良ければ……お好きに、どうぞ……♥」  
にちやにちやした笑顔が、ハルカの機嫌の良さをよく教えてくれる。

今度は私が四つん這いでハルカに近づき、覆いかぶさった。

ぐい、とハルカの襟元を掴み、胸をはだけさせる。

「ひゃっ！ あ、あ、あの、私なんかの胸を見て、た、たのし……いいえ！ 決して、先生のご趣味にケチを付けるつもりは……」

ハルカの黒いブラを拝み、小さな身体に手を回して背面のホックを外すとブラをずり上げ、乳首を拝む。

ハルカの胸は小ぶりながらも盛り上がりがあり、ピンク色の綺麗な乳輪と小さな乳首が頂点に佇んでいた。

「お、お、お見苦しいものをお見せしてしまい、も、申し訳ありません……」

「ハルカの乳首、とっても綺麗だね」

赤面して目を泳がせながら半勃起の乳首を見せてくれるハルカに感謝しつつ、小さな膣口を指で拡げてチンポをあてがう。

「さ、ハルカ。少し痛いかもしれないけど、力を抜いてね」

「はい……！ い、い、痛くしてくださいっても、大丈夫ですので！ わ、私が死んでも良いですから力いっぱい、先生の気持ちいいようにセックスしてください！」

処女を捧げる時にもいつも通りのハルカの頭を撫で、腰に力を籠めてチンポを押し込み始める。

「う、っぐ……」

ハルカのしかめっ面を覗き込むように上から覆いかぶさり、肩をつかんで身体を固定しチンポを更にねじ込む。

ぬるん、と処女膣の抵抗がチンポに負け、亀頭がすべて飲み込まれる。

それから後は力を入れるだけ膣の中に押し込まれていった。ハルカの膣は作りが小さく、ヒダが発達していない子供の膣だが、握りしめるような強い

肉厚な処女膜がチンポの行く手を遮るが、勢いをつけて強引に破る。

「……っ」

ハルカは歯を食いしばり、声もあげずに耐えた。

耐えている間にずぶずぶとハルカの膣を蹂躪し、一番奥にまで到達する。

「はあ、はあ……か、体の中……せ、先生の、チンポで、いっぱいになってます……♡」

天井を見上げたハルカが、呆然と呟く。

ハルカが我慢汁まみれの手で、優しく赤ちゃんをあやすように下腹を……その奥のチンポを撫でた。

ハルカの膣口から鮮血が溢れ出し、チンポで押し拡げられた輪郭を強調しているのを見下ろす。

ぴよこんと飛び出したクリトリスの亀頭を親指で撫でた。

「んっ♡ 先生、お、お気遣い頂き、ありがとうございます……」

まだ全身が強張っているハルカが、陰毛を貼り付けたままの顔で硬い笑みを浮かべた。

「しばらくじっとしていいようね」

と言いながら、手でハルカの口元を拭う。陰毛と、生乾きの精液と涎を拭った。

「……はっ！ すず、すみません、すみません、先生に汚れを処理させてしまうなんて……あ、っっ！」

あわあわと慌てふためくハルカが、体を動かしてしまい破瓜の痛みを顔をしかめる。



「大丈夫。ゆっくり呼吸してね、ハルカ」

「うう……はい……」

そう返事しながらも、明らかに落ち着かない様子で視線を泳がせ、沈黙に追い詰められていくハルカ。

「ハルカ。汚れちゃったからこの手のひらを舐めて綺麗にしてよ」

お預けを食らっていた犬が許しを得たようにパツと笑みを浮かべ、ハルカは躊躇なく目の前に差し出された精液と我慢汁まみれの手のひらを舐めた。

「れう……♥ 先生……♥ 先生の味……♥」

うっとり、夢中になって舐めている。それが良かったのか、痛いくらいの締め付けだった膣が程よく緩み、薄いがぷりぷりと弾力のある膣肉を感じられるようになった。

「ちゅ……♥ ちゅ……♥」

汚れをすべて飲み下しても、ハルカは愛おしげに私の手にキスし続けている。

もつと欲しそうだったので手のひらではなく指をハルカの口に入ると、当然のようにおしゃぶりしてくれた。

「んっ♥ ぢゆるるっ♥」

それも、先程仕込んだフェラテクを使って舌を絡め、頬をすぼめ、顔を前後に揺らした本気のフェラのような舐め方だ。

膣肉がハルカのバキュームにあわせて締りを強くして私のチンポを欲していた。

「ハルカは、フェラが好きなんだね」

「んうう!？」

自分の行為に今更気づいたハルカが、目を見開いて私に視線だけで訴える。

「良いんだよ、ハルカがフェラ好きだと、私もやってもらい甲斐がある」

「ん……ぎくっ……」

指をフェラしながら、ハルカはたつぷりと溜まっていた唾液を飲み下した。

「ハルカは、フェエラが好き？」

もう一度、ゆつくりと問いかける。

「ふあい……♡」

ねちやり、と音を立てそうなほど目元を蕩けさせ、ハルカがフェエラ好きな自分を肯定する。

少女がセックスのやり方を覚え、女へと育っていく様は何度見ても感動する。

微笑ましく、破瓜の血が大分薄まったハルカの膣をチンポで突き上げた。

「んっ♡」

ハルカはもう眉をしかめることもなく、啜えた指に舌を絡めて続きをおねだりする。

片方の手でハルカの胸を揉みながら、ゆつたりとピストンを始めた。

「んふーっ♡ ふーっ♡ ぢゅるっ♡」

ハルカは自分の口をマンコを連動させて、私の腰に合わせて頭を前後させている。

私は手首を返して指の向きを替え、ハルカの上あごを撫でると同時にお腹側のGスポットをカリで刺激した。

「んっ♡ うううっ♡!?!♡」

ハルカは生まれて初めて感じる膣快楽に目を白黒させながら、くすぐるように上あごの粘膜を指の腹で愛撫されて混乱のままどちらも受け入れてしまう。

あくまでゆつくりと、ハルカを追い詰め過ぎない程度の速さでGスポを刺激する動きを心がけて腰を振り続けた。

「んっ♡ んんーっ♡ はうっ♡ あうっ♡」

指フェエラに夢中だったハルカがGスポ快楽に負けてしやぶるどころではなくなり、口を開けて善がり声を上げ始める。

ハルカの口元も私の指もよだれでベトベトにしなから、上あごの粘膜をGスポの快楽を同時に教え込む。

指を2本に増やして交互に擦ると、膣の締まりも強くなった。

「はふっ♥ あむっ♥ あ、あううーっ♥」

口を閉じられないハルカが、よだれを垂れ流しながら処女セックスに悶えた。

腰をぶつけるたびにハルカの可愛らしい着物のフリルが揺れ、淫靡さを飾り立ててくれる。

断続的にぎゅうぎゅうと締まるハルカの膣の様子から何度も絶頂を迎えているらしいハルカを楽にしてやるため、そろそろ射精すべく腰の振りを強める。

「あゝっ♥ はおゝっ♥ おゝっ」

パン！ パン！ と拍手のように下半身を打ち合わせ、押し出されるようにハルカの喉から下品な声を漏れさせながら射精のためにハルカの膣コキを味わった。

私が突き込みながら指を奥へ滑らせるとハルカの膣はほんの少し緩む。

Gスポを擦って抜きながら指では上あごを擦って手前に引くと締め付けを強めてカリへの刺激を強めてくれる。

「そうそう、上手だよ、偉いね、ハルカ」

私がそう言っただけで、きゅん、きゅん、と膣が震えるように締まった。

金玉が限界を告げ、ハルカの若い子宮に遠慮なく精液を浴びせかける。

「んおおおおっ♥」

私に喉を晒してのけぞり、大声を上げてハルカもまた深い絶頂に達した。

もうハルカの着物はほとんど脱げかけており、帯が締まっている事で辛うじて着物である事が分かるほど着崩れている。

ハルカの白い肌に紫の着物と白のフリル、黒のブラジャーが纏わりついて、汗と精液と涎でデコレーションされた情事の後の身体は、そういう芸術作品のように美しささえ感じさせる。

ラブホの照明でテカテカと光る汗に濡れた身体を眺めながら、一番奥にこっそりと精液を吐き出した。

「ちゅ……♥ れろれろ……♥」

射精しきってしぼんだチンポを、ハルカが丁寧にフェラしている。自分の愛液と血液がついたチンポなので拭いてからで良いという私をよそに、ふらふらと起き上がったハルカがパクリと啜えこんでしまったのだ。

処女セックスの前にしてくれたフェラも熱が入っていたが、今のほうが更に情熱的で夢中になっっているように見える。

セックスの汗で額と頬に張り付いた髪を剥がし、目にハートさえ浮かべているようにウツトリとチンポをしゃぶるハルカに、チンポのイライラが急速に高まっていく。

「んっ♥ んんっ♥」

しゃぶりながらも艶めかしい声を上げ、性的に興奮しているハルカを見て、ふと頭を掴んで上あごにチンポを擦りつけてみた。

「んゝんんっ♥」

不意打ちのようにハルカの腰がカクカクと痙攣し、股間の下が液体でぐっしよりと湿る。

「ハルカ……もしかして、イッた？」

「あ……あうう……♥」

トロンと蕩けた目で虚空を見つめ、卑猥なひよつとこフェラ顔のまま固まるハルカの頭を両手でがっしり掴み、ごしごしとカリと上あごを擦りつける。

「んゝおゝおおおっ♥ おゝおゝおゝおゝう♥」

がくん、がくん、とフェラで絶頂するハルカに興奮し、口内に思い切り射精した。

「おゝぐっ♥ んぐっ♥ ごく、ごくっ♥」

上あごで絶頂しながら、健気に精液を飲み下してくれるハルカに甘えて、可愛い舌に乗せるようにしてすべての精液を吐き出している。

私がそつとチンポを取り出すと、ハルカは口を開けたまま精液を味

わうように舌に絡め、ゴクリと飲み下した。

「はぁーっ♥ はぁーっ♥」

何度も口粘膜で絶頂したハルカが、真っ赤な顔で呆然とベッドに座り込んでいる。

「お疲れ様、ハルカ。とても良かったよ」

私は風呂に入ったようにホカホカと温かいハルカを横抱きに膝に載せ、優しく抱きしめて身体を撫でた。

「ふぁい……♥ ありがひよ、ごぎ……まふ……♥」

絶頂で理性を失ったハルカは、童女のように屈託なく笑みを浮かべる。

しばらく、汗だらけの肌をくっつけて猿の毛づくろいのようにお互いを撫でてゆっくりと過ごした。

しばらくして、ハルカが正気を取り戻すと、

「ふわあああああああつ!? すすす、すみません！ 私のような人間が先生に抱かれて優しく撫でて頂くなんて!?」

尻も胸も丸出しの崩れすぎた着物姿で土下座して謝ってきた。

セフレになっても変わらないハルカが愛おしく、その眼前にチンポを差し出す。

「あむっ♥」

いつものハルカから、瞬時にスケベなフェラ顔に変貌する。

「まだしばらく時間があるから、ゆっくり楽しんで、お風呂に入ってから帰ろうね」

ウツトリとフェラをするハルカの頭を撫でて言うと、ハルカの目にたあといやらしく細められる。

嬉しそうなハルカに私も笑った。

そうして、ハルカとの時間をゆっくりと楽しむのだった。

とにかくセフレなんです！（アコ）

「さあ、先生！ 私の言う事を聞いて頂きましょうか？ あなたの……重大な秘密をバラされたくなければ！」

「はあ……」

日も暮れて月が登り始めている時間、仕事を黙々と手伝ってくれていたアコがおもむろに立ち上がり、いきなりそんな事を言った。

「ふっ……とぼけようとしたって無駄ですよ！ 今度ばかりは先生が私の前に這いつくばる番です！ 自分がどれほどの悪事を重ねたか、語って聞かせましょうか？」

カタカタ。キーボードを叩いて書類を作成しながら、流石にアコにバレてしまったのか、とぼんやり思う。

「ちよっ、手を止めてください！ 真面目に聞いてませんね!？」

アコが肩を怒らせてツカツカと歩み寄ってくる。

踏み出しが力強いのでアコの巨乳がぶるんぶるんと揺れて、仕事に疲れた私のチンポをイライラさせてくる。

「あなたは！ シャーレの顧問という立場にありながら、せ、生徒と……い、い……」

「いっ！」

言いづらそうにしながら赤面するアコが、キツと睨を吊り上げて私を睨んだ。

「淫行を、繰り返していましたね！」

「うーん？ なんのこと？ 首輪をしてお散歩させたりとか？」

かあっ、と一気に耳まで赤くしてアコがのけぞった。

「む、蒸し返さないでください！ あんなお遊びではなく、その、……せい、行為を、していたでしよう!？」

「どうしていきなりそんな話になったの？」

「先日の、先生が成層圏からの生還を果たして裸になった時……ユウカさんとハナコさん、そして……あ、アヤネさんまでも……」

当時を思い出しているのか、アコが目を見開いてわなわなと震える。おっぱいも震える。

「あ、明らかに、先生の……は、裸の……下半身に、慣れていました」  
チラリとアコの視線が下へ泳いだ。

「先生に媚びを売るユウカさんや脳みそが卑猥なことで満たされているハナコさんはまだしも……純朴そうな奥空アヤネさんまで……！」

せ、先生が立場を利用して性交を強要したに違いありません！」

「それはアコの感想だよな？」

「な、なんですかその反論は！　うう、先生のくせに……！　そういう事があったから、調査をしたんです！　シャーレに出入りする生徒をね！　そうしたら……やはりハナコさんが、出てきたその足でコンビニに行つて避妊具を買っていたんですよ！　ああ、もう！　言わせないでください！」

「ハナコなら興味本位で買うんじゃないかな？」

「くつ、確かに……！　むむむ……ここで白状しておけば良いものを……！　確信を得た私は、更に調査をしました。そう……シャーレビルから出るゴミをね！　そこから大量に出てきた、せ、せい、精液入りの避妊具！　これをどう説明するつもりです！」

パンツ！　とアコが机を叩く。その手の下から出てきたのは、ジツパー付きのポリ袋に入ったゴムだった。

今日一日、ポケットに入っていたのだろうか？

「アコ……ゴミ袋を漁つたの……？」

「な、なんですかその目は！　ええ、漁りました、漁りましたとも！　先生に言う事聞かせられたら苦労がチャラになるんですから、このくらいはします！」

私が白い目でみても、アコは鼻息も荒く一步も退く気配がない。

「ほら、私も溜まっていくからさ、一人で部屋を汚さないように処理しないといけないんだよな」

しかし確実といえるような証拠ではないので、しらを切る。

「ぐつ、ぐ、ぐぬぬ……！　往生際が悪すぎます……！　これが大人のやり口ですか……！　ふつ、しかし、この避妊具は明らかに使用済み！　ミレニアム辺りに鑑定に出せば、外側に女性の体液が付着していることはすぐにわかりますよ！　さあ！　それが嫌ならば私の言い

なりになつてもらいましようか、先生！」

確かに、その通り。ミレニアムの科学力をもってすれば、私のセフレの愛液を検出すること位はできる……気がする。

「ふう、やれやれ。……出したいなら出して良いんだよ、アコ」

予想から外れた展開に、アコが目を丸くして驚いていた。

「あ、あなたは！ 自分が何を言っているか分かつているのですか!」「もちろん。白日の元に晒されるというのなら、言い逃れをするつもりはないよ。そうしたら、アコが望むようなシャーレの権力は無くなってしまうかもしれないけど」

「なんとということ……! む、無責任です！ 今シャーレが無くなったらキヴオトスにどんな影響があるか解っているのですか!」

「それを分かかって脅してくるアコも相当だと思うけど……」

「うっ、い、良いじゃないですか！ 気づいた上で黙つてあげるんだから少しは旨みがあつてもバチは当たらないでしょう!」

相当な苦勞をして脅しの材料を集めた手前、引くに引けないのかもしれない。

「そうだ、じゃあコイントスでもする?」

それは、アコに首輪をつけて四つん這いで散歩をさせた時の思い出だ。

あの時はアコが負け、犬のように散歩することになった。

「……! 一度ならず二度までも……! もう頭にきました! 良いでしょう、乗ってやろうじゃありませんか! 先生が負けたら、今後先生は私の言いなりですからね!」

「うん、じゃあ、アコが負けたら?」

「……は?」

まるで、何も考えていなかったというようにアコが目を丸くして呆ける。

「私が負けたら、社会的に死ぬか今後も重大なペナルティを課せられ続けるわけだね。アコもそれ相応のリスクを負って貰わなきゃ」

「な、何を言ってるんですか! 私が黙っていてあげる、それで満足出来ないんですか!」



「だから鑑定に出してくれてかまわないよ?」

「なんて夕子の悪い開き直りを……!」

私はゆっくりと立ち上がり、机を回り込んでアコの側へと歩いた。  
「なっ……なんですか!?! 無言で近づくのやめてもらえます!?!」

アコの小さな肩は竦んで、無意識にか手を胸の前にかざしてこちらに壁を作ろうとしている。

「アコが負けたら、私のセフレになって貰うよ」  
「!」

目を見開いたアコの顔が、ぐんぐんと赤く染まっていく。

「しよっ、正体を、現しましたね! 決定的な証拠です! 録音もしました! ほ、ほら! ば、バラされたくなければ、わた、私の、言いなりに」

ポケットからスマホを取り出してかざすアコを無視して近寄り、そっと腰を抱いた。

「ひゃっ……♥」

「アコが負けたら、私がアコとセックスしたい時は必ずセックスさせて。アコがセックスしたくなったら私に言いに来るんだ。それなら、勝負を受けても良いよ」

「なっ、なっ、なっ、何を言ってるんです!?! 私が自ら先生に抱かれたいなんで、そんな事思いうわけが……!」

そう言いながら、アコは腕を振りほどくこともなく抱かれた腰を私とくっつけて至近距離から見上げてくる。

「なら問題ないよね。この条件でコイントスだよ。ほら、コインを握って」

財布から取り出したコインを、アコの手袋をした手に握らせる。

「あっ……♥」

可愛らしい声が漏れて笑顔になった私を、アコが凄い勢いで睨んだ。

「裏か表を決めてください。今回も……私が投げます」

「じゃあ裏で」

「ふっ、言いましたね! 今回は裏表も私が選択します! これは先

生の無茶な要求に対する譲歩です！ 良いですね！ 私が裏を選択しますから、先生は表です！」

なんだかヤケになった感じで新ルールを追加してくるアコだが、別に確率は変わらないので承諾した。

アコはようやく腰を抱く私の腕を出て一步下がると、コインを構えた。

「では、えいっ！」

月明かりと電灯に照らされてきらめくコインが、私とアコの間で宙を舞う。

一秒ほどの滞空時間でぱしつとアコが捉えて手の甲に抑え込んだ。抑えるアコの手が震えている。

「アコ、早く見せてよ」

「分かっています……！ ごくつ……結果は……」

そつと手をどけると、コインは植物の絵が描かれた面を上にしていった。

「表!? そ、そんな……！」

アコの膝がカクカクと笑っている。

「私の勝ち、だね」

恐ろしく運の悪いアコが、私の敗北の運命すら奪ってしまつたらしい。

一步近づくと、アコが後退りしようとして転んだ。

「あ、ああ……」

大きく見開かれた薄青の瞳が揺れ、尻もちをついたまま固まつてしまっていた。

「大丈夫、アコ?」

手を差し伸べても、私の手をじつと見つめるだけで動かない。

しょうがないので私も床に膝をついてアコの顔を覗き込む。

「はあ、はあ、はあ……ごくつ」

アコは私が触れる前から息を荒らげて赤面し、生唾を飲んでいた。

「アコ? セックスしていいの?」

私の言葉に、ビクンツ！ と肩を跳ねさせるアコ。

「こ、こ、こんなところですか!?」

「地下の居住区ならソファをベッドに出来るし、お風呂とかもあるけど。そっちでするっ!」

「え、い、いえ、今日これから!? 本当に私と、その、す、する、つもりで?」

アコの声は可哀想になるほど裏返り、顔が引きつって一周回って笑顔に見える。

「……アコがそこまで嫌なら、辞めておこうか」

「……は?」

「生徒の嫌がる事をしたくないし。ただ黙っておくだけで良いという事に……」

あまり虐めても可哀想なので、アコをセフレにするのは諦めようかと思い、よっこいしよと立ち上がる。

「まっ!」

そんな私に向かって手を伸ばしたまま、アコが固まった。

「つて、ください! だ、誰が、嫌だなんて言いましたか!」

顔を真っ赤にして、目に涙をためながらアコがヤケになって叫ぶ。

「ええ、でも……」

「なんで! 私にばかりそんな意地悪するんですか! 先生は、生徒を何人も手籠めにしてきたんでしょ!?! 私にも、その、そういう……あるでしょう! 少女を誑し込む大人の手練手管が!」

ぎゅつと目をつぶって、執務室が防音でなければ外まで聞こえそうな大声で言い訳不能な事を喚くアコに、また近寄った。

「アコ、落ち着いて。まずは床から立ち上がろう」

「うううー……」

涙目で上目遣いに睨みながら、アコは私の手を強く掴んですつくと立ち上がる。

「じゃあ、私のセフレにはなってくれるんだ?」

「なっ、なり、ます……だって、そういう賭けですから? ルールは

……守らないといけませんし?」

ぶいとそっぽを向いて上ずった口調でそんな事を言うアコを、無言

で抱きしめた。

「じゃあセックスしようか」

「くっ……！ す、すればいいじゃないですか。私は、拒めないのですから」

アコの柔らかい胸が私の身体に押し付けられて潰れる。それと対象的に、全身が強張って固まっていた。

「じゃあもう一回聞けど、ここでこのまま始める？ ベッドの上で、お風呂入ってからする？」

「ふんっ……！ け、けだもの先生が、満足するようにしたら良いじゃないですか？」

「アコの処女を貰う一生の思い出だからね。なるべく嫌な思いはさせたくないんだ」

眉を吊り上げて、抱きしめられた至近距離からアコが睨んでくる。「で！ し！ た！ ら！ セフレになんてしないでくださいます！？」

「なるべくだから。もうアコとしたくて堪らなくなってるし」

フル勃起したチンポを、アコの腹に押し当てる。

「ひゃああっ!? こ、こ、これ、先生の、おっ、おち……男性器じゃないですか!? な、なに当てるんですか!?!」

「アコが可愛いことばかり言うからもう我慢できそうにないよ。今すぐ服を来たままで処女喪失で良い？」

「よ、よくありません！ わかつ、分かりましたから！ せ、せめて……シャワー位浴びさせてください！ あ、あと……ベッドで、出来る限り、や、やさしく……お願いします……」

アコが俯いてぼつぼつと要望を言う。あまりの羞恥に耳まで赤くなっているのが良くわかった。

「うん。じゃあ地下へ行こうね」

「はい……」

アコのスラリと細い腰に遠慮なく手を這わせ、密着したまま部屋をでて夜のシャーレビルを歩く。

誰も居ない閑散としたビルは、既に消灯時間を過ぎており月明かり

だけが頼りだった。

不安げに私の服をぎゅつと掴みアコから身を寄せてくるのが可愛らしく、頭を撫でてあげたら睨まれた。

キヨロキヨロと落ち着き無く辺りを見回すアコだが、誰とも会わずにエレベーターへとたどり着く。

「ふうーっ。うう、なんでこんなことに……」

エレベーターの中に入ってようやく人心地ついた風のアコがガツクリと肩を落とす。

「アコが人を脅そうとするからでは？」

「先生がっ！……生徒に見境なく手を出すからでしょうが……！  
せっかく……私の言いなりにして、独り占めに……」

「気持ちは嬉しいよ、アコ」

「小声の独り言を拾わないでくれます!? ああ、もう……！ 煮るなり焼くなり好きにしてください!」

ストレスの臨界点を越えてしまったアコが腕を組んでそっぽを向き、開き直った。

ちーん、とエレベーターが地下に到着し、居住区へと2人で入っていく。

「じゃあまずはお風呂だね」

「……なんで腰を抱いたままなんです?」

じと、と半眼で冷たく見上げてくるアコに笑い返す。

「ちよつと! 説明してくださいよ! え、まさか、うううーっ……!」

私の腕の中で身を振るが、アコは大人しく私に連れられて脱衣場へ入っていった。

率先して私が裸になり、笑顔でアコを促す。

「お、大きい……」

フル勃起した私のチンポを見つめて立ちすくむアコの小さくて綺麗な鼻をちよんと押してやると、アコは見入っていた自分を恥じるように無言で脱衣を始める。

「せ、せめて目をそらす位したらどうなんです!」

「でもアコは私のセフレだし……」

「親しき仲にも礼儀ありと言うでしょう……!」

文句を言いながらも脱いでくれるアコ。

無駄な抵抗をして乳首と股間だけは晒さないように手ぬぐいで隠し、小さくなつて震える裸体を私に見せてくれた。

片手を掴んで風呂場に引つ張つていくと、こぼれそうな胸を必死で隠しながらアコが付いてくる。

「アコは普段どの位の温度で浴びるの?」

「し、知りません……!」

冷水を手に浴びせてお湯に変わるまで待ちながら、手ぬぐい一枚のアコの裸体を鑑賞する。

いつもの厚底ブーツのないアコは、さつきまでよりも低い位置に頭頂がある。

リボンを解いた髪がふわりと広がり、童顔も相まって可愛らしい印象が先に立つ。

豊かな胸とキュツと締まったお尻は、間近に見るとそのきめの細かい肌の滑らかさに驚く。

恥ずかしがるアコの腕で潰れる胸の柔らかさを、これから存分に味わえると思うとチンポが跳ねた。

「……!」

それを見逃さず、食い入るように見つめて生唾を飲むアコ。

「この位でいいよね」

足先からシャワーを浴びせると、アコが慌ててチンポを見ていたことを誤魔化そうとそっぽを向いた。

「お、好きにどうぞ。シャワーの温度なんて大して変わりませんよ」  
ふくらはぎ、太もも、下腹部と上がっていく。アコの肌がお湯を弾

き珠として流れ落ちていくのを観察した。

ふと思ひ立ち、アコの陰毛が茂る股間へとシャワーヘッドを押し当ててる。

「ひゃんっ♥ 何するんです!?!」

「セックスだよ」

アコのしつとりと濡れた腰を抱き寄せて、下腹部にチンポを押し付けながらシャワーで股間をまさぐった。

「そこは、自分で洗えますから……！ 離してください」

アコが私の手をそつと掴み、シャワーヘッドを奪う。

力なく私を押しつけ、丸いおしりを晒しながらしゃがんでボディソープをかしゆかしゆと手に取った。

手ぬぐいを泡立てながら、チロチロと私を振り返り横目で睨む。

「うう……なんで見てるんですかあ……」

「アコのエツチな身体が目の前にあつたら、そりや見ちゃうよ」

私は笑いながらスケベイスを引き寄せて座った。ぽんぽんと膝を叩く。

「……なんですか？ まさか……この私に……ひ、膝の上に座れとでも……」

私はにつこりと笑みを深めた。

アコは呆れたと顔全体で表現しながらも、泡だらけの手ぬぐいで乳首を隠しながら私の眼の前に立ち、くるりとターンして後ろを確認しながら座ろうとする。

白く柔らかそうなお尻が目の前をフラフラと揺れるが、私が脚を開いているため座る所が定まらないようだ。

結局右太ももの付け根にチョコンと腰掛けた。

「遠慮なく真ん中に座ってくれて良いのに」

「だれがっ……！ あ、当たってしまうのではないですか……！」

指先から肩へと洗い出すアコが、チラチラと私の勃起チンポを盗み見るのを微笑ましく思いつつもアコの太ももに手を置いて股間へと指を滑らせようとする。

「アコ。脚開いて」

「……………」

短く命令すると、アコはそつと脚を開いてくれた。遠慮なくマンコに触れる。

アコの大陰唇はぽつりと厚く、搦き立てのお餅のように柔らかい。それでいて、子供のようにピッタリと一筋に閉じている。

「んくっ……♡」

お湯に濡れて少し温まったそこを、真ん中へ寄せたり開いたりして弄んだ。

手のひら全体でアコの性器を優しく包み、ゆっくりと揉みほぐすように愛撫する。

「あっ……♡」

甘い声を微かに漏らしながら、アコは素知らぬ顔をしているつもりで身体を洗い続けた。

「ふーっ、ふーっ……」

アコの荒い息遣いが風呂場に響き、目の前で揺れる巨乳が桜色に上気しているのを黙って眺める。

崩れてしまいそうなほどに柔らかく滑らかなアコの外陰唇の感触を手のひらで味わいつつ、中指を一本だけ割れ目に沈めた。

ぬるり、と温かな液体に包まれて、ぷりぷりと弾力があり熱い粘膜に触れる。

「あうっ♡」

お湯で湿ったアコの太ももが反射的に閉じ、むっちりと私の手を挟む。

泣きそうな顔で私を振り返るアコに微笑みを返しながら、沈めた指を優しく上下させてアコの小陰唇を撫で回す。

「あっ♡ そっ、やめっ♡ んっ♡」

閉じた脚が、指を動かすたびに弛んで開いていく。

少しずつ大胆に指を動かすと、にち、にち、とハッキリとした水音が風呂場によく響いた。

「やっ♡ あ、こん、なの♡」

アコはもう身体を洗っていられず、手ぬぐいを握りしめたままの手を私の肩に置き、泡だらけの身体を密着させて縋り付いてきた。

くち、くち、くち、と一定のリズムを保って、アコの反応を見ながら手マンを続ける。

「だめっ、だめっ♡ て、てを、止めて、くださいっ♡」

アコはもう目を開けていることも出来ず、ぎゅっと瞼を閉じて快樂



の嵐に耐えていた。

私の太ももに座って身体をひねっているアコの大きな胸が、美味しそうに眼の前に垂れ下がっている。

先端以外は泡にまみれて濡れ光るそのおっぱいを見つめながら、一切手を緩めずに手マンを続けた。

「なっ ♥ なんでも、いうこと、きいて、くれないんですっ ♥ ほんとにっ ♥ だめ、だからっ ♥」

にちやにちやとヨダレを垂らすように股間から愛液を漏らし、アコが私に抱きついてくる。

ぬるりとボディソープ付きの胸が押しあてられ、頂点の勃起乳首がくすぐりたい。

アコがもうすぐ限界を迎えるという所で、手を離れた。

「はっ、はあーっ ♥ はあーっ ♥ はあーっ ♥」

私の首にしがみついているアコが、深く呼吸する。

アコの裸の背中をゆっくりとさする。

ぎり、と肩の肉を抓られた。

「私は、やめろと、言いましたよねえ……!」

イきかけたせいか、普段ほどの力はない。

「でもセックスってそういうものだから……アコも気持ちよかったでしょ?」

「そ、そういう問題ではありません! あ、あんな事をされたら……気が変になってしまわないですか……!」

私に抱きついてむっちり乳房を押し付けながら耳元で照れた声を出すアコに、チンポがイライラする。

「そうやって沢山気が変になるのがセックスなんだよ。今日はそれをいっぱい覚えていってね」

「あ、う……♥」

目を丸くして絶句するアコを抱き寄せ、キスをする。

「んっ……♥」

アコは暴れることもなく、私に身体を預けてキスを受け入れてくれた。

唇を触れ合わせ、ただ愛を伝えるだけのキスをしばらく続ける。そつと唇を離し、力が抜けてぼうつとした顔のアコを見つめた。

「落ち着いた？」

「ふあ、ファーストキスを、こんな風に流れでするなんて……」

唇を尖らせて文句を言うアコを抱き寄せ、またキスをする。

「な、あむう……♥」

コ。少しだけ腕の中で暴れるが、すぐに目を閉じてキスを受け入れるアコ。

「もう……都合が悪くなったら黙らせるんですから……♥」

照れたように上目遣いで呟くアコに、チンポのイライラが限界に達した。

「もう上がろうか」

「えっ？ まだちゃんと洗えてないんですが」

「今すぐアコを犯したいから上がるよ」

アコと共に立ち上がると、シャワーで泡を洗い落とす。

「な、なんです、いきなり……!」

「アコが可愛いことを言うから、我慢できなくなっちゃった」

「か、可愛いって、そんな事言われても誤魔化されませんよ!」

反射のようにぷりぷりと怒り出すアコだが、さつきいきかけたせいか足取りはフラついていて、腰を抱いて支えながら歩いた。

無言で身体を手早く拭き、何気なく服を着ようとしたアコの手を取って裸でベッドに歩き出す。

ぎゅつと震えながら握り返してくるアコの華奢な手の暖かさを感じていると、すぐにベッドに到着した。

アコのリサーチ通り昨日はハナコが来ていたので、後片付けもそつがない。

次のセフレのためにきつちりとベッドメイクまでしていた。

「さ、座って、アコ」

「……………」

アコは私の手を握ったまま、無言でソファーベッドに浅く腰掛けた。

「脚開いて」

「……………っ」

はっ、はっ、と浅く、アコの緊張した息遣いが聞こえる。

アコは私の言いなりになって、ゆつくりと太ももを開いてマンコを晒した。

ぎゅ、と痛いくらいに手が握られる。恋人のように指を絡めて握りながら、逆の手でアコのマンコに触れた。

「あ、あ……………」

か細く、高く…………アコの喉から淫らな歌が奏でられる。

たっぷりとした外陰唇を指で開き、熱く潤んだ中身をそつと撫で回した。

「あっ、んっんっ♥」

借りてきた猫のように大人しく、淑やかに…………アコが手マンを受け入れて甘い声を上げる。

外陰唇に埋もれている小さなクリトリスを親指でそつと転がしながら、膣口の輪郭を確かめるように指で撫でた。

「はんっ♥」

一際高く、心地よさそうな声で啼くアコ。

ガラス細工を扱うように丁寧に、アコの限界を探る。

クリトリスにかける力を、膣口が受け入れられる今の限界の太さを、ゆつくりと引き上げていき、穢れを知らぬ乙女でセックスを進めた。

にちや、にちや、と風呂場と同じくアコの愛液が粘質な音を立てて響き渡る。

今度は、手を止めることは無い。

「ああっ♥ あ、あ、あ、あ♥」

顔を背けて胸元から上を真っ赤にしながら、アコは股間を愛撫される快楽に没頭していた。

無意識に私にすぎりつくように恋人握りで絡み合ったアコの指が、愛おしげに私の手を撫で回す。

スジマンだったアコの性器も内側がぷつくりと充血した陰唇によ

り淫らに花開き、膣口が小さな穴をぽっかりと開いて初めてのチンポを待ちわびている。

今なら大丈夫と判断し、小指を侵入させた。

「んふっ♥」

ごく細いが、アコの狭い穴には十分な刺激だったようで脚が震える。

「アコ、痛い時は言ってね」

くちやくちやと愛液を鳴らしながら声をかけると、必死でアコが首を縦に振った。

薬指、中指と太くしても、アコの膣はキツキツなのにぬるりと飲み込んでくれる。

「大丈夫？」

人差し指と中指の2本を挿入しても、痛がる素振りはない。

それどころか、後ろに倒れそうな身体を手で支えて天井を向き、

「あゝっ♥ あ、ああああ……♥」

大きく口を開けて気持ちよさそうなお腹からの声を聞かせてくれる。

完全に頭が蕩けた事を見て取り、そつとアコの手を引き剥がしてその体を抱きかかえるとベッドに仰向けに寝かせた。

仰向けになったアコの胸が、重力に負けて少し広がっている。

室内灯の下で、湯上がりにセックスの汗をかいたアコの肌がぬめるように照り光っていた。

「……………」

これから犯されるアコは、ぼーっと私を見つめている。

膝を掴んで脚を開かせると、全く抵抗なく開いた。

アコの白い肌に、股間だけが赤い肉の花と薄青の陰毛の鮮やかな花園を広げている。

「入れるよ、アコ」

こくん、と言葉もなく、アコが頷く。

そつと、アコの両手が持ち上がり私に伸ばされた。

アコの瞳が不安そうに揺れ、何かを待っている。

私は膣口にチンポを押しあてたままアコに覆いかぶさって抱きしめ、強くキスをした。

「んっ……♡」

アコの両腕両足が鳶のように私の身体に絡みつき、しっかりとホルドする。

きらりと目尻から涙を流してそつと瞼を伏せた。

アコの脚の輪の中で腰を動かし、頑張って亀頭を膣にねじ込む。

この体勢だと少し難しかったが、アコの膣口がぱっくり開いて歓迎してくれたお陰でチンポを処女膣にねじ込むことができた。

ぷりぷりと弾けるような瑞瑞しい弾力の膣を、力でこじ開けて処女膜を破る。

「んくっ」

全身に破瓜の痛みでこわばるアコの力を感じながら、一番奥までチンポをねじ込む。

「う、ぐ……」

あくまでも私を傷つけず密着するように抱きしめてくれるアコの頭を撫で、痛みのピークが過ぎるのを待つ。

固くなったアコの唇を吸い、舌を割り入れてアコにも口を開けるよう促した。

「ん、れう……♡」

挿入したままぴったりと全身を密着させ、ディープキスを続ける。

アコの小さな舌を踊りに誘うようにくすぐり、くるくると口の中で粘質な社交ダンスに興じた。

「ちゅ、ちゅうう……♡」

段々とアコの身体から強張りが抜けると、むしろ抱きつく力を強めて身体を擦りつけ、アコからも唇を吸い始める。

アコの大きな胸をクッションに、下腹部にだけ体重をかけて膣奥を押し込んだ。

「う、んんっ♡」

ディープキスをする私に、アコの善がり声がダイレクトに伝わる。ちらりとアコが様子をうかがうように目を開けて、バツチリと私と

目があつてまた閉じてしまう。

チンポを咥えながらも可愛らしいアコの頭を撫でると、背中に軽く爪を立てられた。

舌を絡めながら可愛らしい耳たぶをそつと撫で、アコのご機嫌を取ると爪を立てた所を優しく撫でて許してくれる。

奥深くまで繋がったまま言葉を交わさないじやれ合いに、アコの優しく繊細な心を感じ取りチンポから我慢汁が溢れ出る。

アコの身体をしつかりと抱え、これからピストン運動を始める事を知らせる。

アコは脚を少しだけ緩めて、腰を振る事を許してくれた。

ずるりと引き抜くと、中程から奥の天井がコリコリとカチカチを刺激して射精感を煽ってくる。

「んっ♥ んんんっ♥」

アコの膣は絵に書いたような数の子天井だった。

それも、Gスポット辺りから始まっているため探すまでもなくアコの弱点が丸わかりになつてしまっている。

みつちりと吸い付くような締付けと亀頭を狙い撃ちするかのような高刺激のツブツブした膣壁で、ゆっくりと動いているだけなのに射精感が高まつてしまう。

「んっぐ♥ んんんっ♥」

しかしアコも刺激に弱く、快樂の高まりで言えばちようど歩調があつていた。

一往復ごとに声も甘く高くなり、抱きしめる腕にも力が籠もる。

私の胸板に押し付けられた乳房の頂点、アコの立派な乳首はコリコリと勃起して、見なくても押しあてられただけでどれほど大きいかわかかってしまうほどだった。

「ふっ、ふっ♥ ふっ♥」

ズリズリと膣を往復し続けると、アコが善がり声を上げるのをやめて荒い鼻息だけが部屋に響いた。

膣はぎゆうぎゆうに締め、絶頂一歩手前で悶絶している状態なのだろう。

快楽に翻弄されるアコも可愛らしいが、ひとまず私もアコに膣内射精したかった。

射精のために腰を速く強く振る。

「んゝーっ♡んおっ♡んぶっ♡むゝーっ♡」

口を塞がれて、くぐもった善がり声を響かせて、アコが一秒ごとに絶頂へ追いやられていく。

数の子天井が始まるGスポットを狙い撃ちしてカリで引つ搔くと、何往復目かでアコが限界に達した。

「んううううううう♡♡♡」

私の身体の下で、アコの全身が跳ねる。腰が海老反りになって角度が付いた膣に思い切りチンポを突き立て、その刺激で一番奥に射精した。

「んゝーっ♡♡♡」

びくん、びくんと何度も跳ねるアコを、体重でねじ伏せて逃さずに膣奥に射精し続ける。

といつてもアコの脚はがっしりと私の腰に絡みついているので膣奥以外に射精することは出来ないのだが、アコはおねだりをするように艶めかしく身体をくねらせるので、一匹の雄と雌になってケダモノ交尾を楽しんだ。

ベッドの上で寝技の応酬を楽しんで汗をかいた私たちは、ようやく唇を離れた。

「はあ、ふう……もう、初めての経験がこんなに激しいなんて……むちやくちやです♡」

アコは涙と興奮でキラキラと瞳を輝かせ、熱っぽい視線を向けてくる。

「いい思い出になったでしょ?」

「……くす。ええ、おかげさまで」

アコが、初めて見るくらいに柔らかい微笑みを浮かべる。

チンポがイライラを取り戻した。

「……な、なんですか? また大きくなってませんか?」

「アコが可愛いから……」

「わ、訳のわからないことを言わないでください……!」

そう言いながらも、アコの膺はキュンキュンと勃起を回復しつつあるチンポを締め付けてくれている。

「もう……好きにすれば良いじゃないですか。いくらでも……付き合いますから……♥」

顔に張り付いた後れ毛を剥がしながら、視線を反らしてアコが抜かずの2発目を許してくれる。

「そういえば、アコは避妊しなくて良かったんだ?」

「……………」

完全に忘れていたと目を見開いて絶句するアコ。

「このまま子供産みたい?」

「ばっ!? バカなこと言わないでくれます!? ひ、避妊薬! あ、あるんでしょ、早くしてください!」

落ち着いていた顔色を一瞬で真っ赤に沸騰させ、掌底で顎を押しやって身体を剥がされてしまった。

「んく、んく……ふう。汗をかいたからお水が美味しいですね」

避妊薬を飲んだアコは、すっかり一汗かいて落ち着いてしまっていた。た。

「なんです? まだシたいんですか? ふっ、別に良いですけど? どうぞご勝手に」

呆れた半眼で私の勃起チンポを見ると、鼻で笑ってベッドに寝そべってしまふ。

これはこれで可愛いのでセックスの続きをしようと覆いかぶさると、ふとアコが口を開いた。

「そういえば、先生のセフレって誰が居るんです? 今後の付き合いを考えると把握しておかないといけませんから、キリキリ吐いてください」

「ええ? 全員挙げるの?」

「……一体何人居るんですか……」

「50人を超えてるからなあ……」



ギンツ、と瞳孔を窄めるほどに怒りをみなぎらせて睨まれる。

「とりあえずゲヘナの人間だけ言ってみてください」

「ええと……」

私はゲヘナの13人のセフレの名前を挙げた。

「はああああああああ!! 便利屋全員に、美食研究会全員に、セナ部長に、イロハ議員に……フウカさんに……チナツさんとイオリ!! あ、の2人……! 私に黙って……! ふう、ふう……いえ、でも、ヒナ委員長には手を出してないのですね。そこだけは辛うじてセーフ……」

「いや、ヒナは私の恋人なので……」

「はあああああああああああああああああああああああああああああ  
?!?!?!」

「あまりの怒りにアコの顎がしゃくれている。」

「ふっ、ふっ、ふざっ、ヒナっ、いっつ、せ、セックスしたんですか!」

「うん、まあ、沢山」

「あああああああああああああああああああああああああああああ  
!!!」

アコは両手で顔を覆って嘆き叫んだ。

しばらく後、ぴたりとアコの身体が静止する。

「……セックスしましょう」

「え?」

「セックスしますよ! 今すぐ! したくなりました!」

がば、と裸のアコが私の肩を掴んでぐるんと横回転、マウントポジションを取られる。

「ふーっ! ふーっ! ヒナ委員長に一滴も注げないように、先生の精液は今後私が管理してさしあげますので! 良いですよね!? 私もセフレだからセックスしたくなったらしてくれませんか!?」

目が血走っているアコが、精液をどぶどぶ溢れさせる膣口をまたチンポにあてがう。

処女よりは柔軟になった経験数1回のマンコで躊躇なく啜えこんだ。

「ん、おっっ♥」

振り返ったチンポが騎乗位でアコに突き刺さり、お腹の裏のGス  
ポットを鋭く刺激した。

「アコがやる気になってくれて嬉しいよ」

「あ、や、やっぱり、やめっおっ♥♥」

アコの小さく引き締まった尻を掴み、イイ角度で突き上げる。

「アコがセックスしたいって言うてくれたことだし、満足するまでシ  
てあげるね」

「……ひっ」

「んおおおおっ♥♥ らめっ♥ もうちんぽらめっ♥ イくのら  
めえっ♥」

アコは結局数の子天井で4発も精液を搾り取ったが、それ以上にイ  
きやすく私のチンポに完全降伏するのだった。

## 趣味の条件（トキ）

目を覚ました私が布団を抱き寄せようとすると、柔らかい女体の感触が返ってきた。

「ん……先生……？」

夜明けの日差しが差し込むシャーレの休憩室にあるベッドの上に、バニー姿のトキが寝そべっている。

もちろん、それを抱き寄せる私もまたベッドに寝そべっている。

昨夜、トキから混信か何かで任務中の通信が届いており、なかなか激しい戦闘のようで安否が心配になってしまったのだ。

なのでトキのモモトークに安否確認のメッセージを送り、徹夜で待っていたのだが……いつの間にか机で眠ってしまったらしい。

それを何故かシャーレに（不法侵入で）帰ってきたトキがベッドに運んでくれたのだろう。

何にせよ、腋と太ももをバツチリと見せつけるバニー姿のトキが柔らかな朝日に包まれて眠る姿は、朝勃ちチンポをさらにイライラさせた。

「どうされました……？」

薄く目を開けて、普段より力の抜けた柔らかな声音で私に話しかけるトキ。

「トキ、駄目だよ。掛け布団をしないと寒いでしょ」

そう言っつて、バニー姿のトキを抱きしめる。背中と太ももの側面に手のひらを当てると、やはりひんやりとした体温が感じられた。

「あ……あったかい……」

囁くような声をあげ、トキが心地よさそうに私に身体を擦り寄せてくる。

硬質なバニースーツの胸が押しあてられ、トキの割りと大きい乳房が柔らかく潰れる。

腕の中にすっぽりと収まったトキの素肌をゆっくりと撫で、身体を温めた。

「んっ……ふう……」

犬猫のように、トキが私の胸に頬を擦りつけてじやれてくる。いつの間にか脚も私と絡め合い、全身を密着されていた。

スラリとしたトキの腹に、私の朝勃ちチンポが押しあてられる。

「ん……う、んん……」

トキが腰をくねらせて、執拗に身体をこすりつけてくる。どうやらチンポが何なのか分からずに確かめているようだ。

トキのバニー腹コキでフル勃起したチンポをこちらからも押し付けながら、内股や腋と胸の境などの性感帯に手を伸ばす。

「あ……♥ んっ……♥」

トキの鼠径部、ほとんど大陰唇と言ってもいい場所がバニーのキツハイレグによって外にむき出しになっている。

太もものハリのある肌とは明らかに違う、指が沈み込むような柔らかな陰唇を撫で、外側に引つ張ってバニースーツの股間とトキのマンコを擦れさせる。

C & Cの皆の身体で沢山練習した、乳房と腋の境にある乳腺を刺激する愛撫はトキに対しても有効のようだった。

「んん……♥ は、ああ……っ♥」

目を閉じてはいるが、眉を寄せて身体をくねらせる様は明らかに性の悦びを感じている。

「あの、先生。さつきから、その……敏感な所に触れておりますので、少し……緩めてくださると、んふっ♥」

安眠を邪魔されたトキが上目遣いにじっと見つめてくるが、胸と股間への愛撫で甘い声が出てしまう。

「触られるの、嫌だった？」

ちらりと、トキが目をそらした。

「いえ、嫌という、わけでは……先生が相手だと、不思議と嫌悪感はありませんが……しかし、私はもう少し眠りたい……あふっ♥」

トキの股間を両側からくぱつと開き、バニースーツの下のマンコを開閉させて刺激する。

「せ、先生、そこは、流石に……♥」

そつと、トキのしなやかな手が私の手首を握る。

「嫌かな?」

「で、ですから……嫌では、ありません……♥　せ、先生に、そこを刺激されると、んんっ♥　何だか、動悸が、激しく……っ♥」

「じゃあ触りたいな。トキの普段とは違う表情、すごく素敵だよ」

トキは初めての性感に混乱し、私を止めようとしつつも私にすぎりつくように密着し、潤んだ目で見つめてくる。

「す、素敵……?　よく、わかりませんが……私の股間を弄ると、先生は満足するのですか?」

「うん。トキの身体にもつと触れたい。トキとセックスしたいんだ。良いかな?」

「セックス……?　構いませんが……性別という意味の単語ですよね?　それがこの行為と関係があるのですか?」

トキはお勉強が出来ないが、本当にエージェントに関する事以外の知識には疎いようだった。

「うん、あるよ。性行為って意味がね」

「性行為……?　とは何でしょう?　先生が私に触れるのがそれなのですか?」

ぱっくりと両側から陰唇を開き、トキのバニースーツの股間の上からクリトリスを指で押し刺激する。

「あ、はあああっ♥」

いつも落ち着いているトキが、ハッキリと雌の声を上げて悦びに震える。

「こうやって触れ合って、セックスの準備をするんだ」

クリクリとバニースーツ越しにマンコを愛撫する私の手首を、トキが両手で押し留めようとする。

「あの、先生♥　これは、ちよつと……頭の中がしびれて、変な、声が出てしまうっ♥　ので、その……もう、やめっ♥　あっ♥　あああっ♥」

ほんの少し愛撫を強めてやるだけで、バニースーツのまま身体をのけぞらせて快樂に負けてしまうトキ。

不用意にのけぞったせいでトキのそれなりに大きい胸がこぼれて

乳首がちらりと見えてしまっている事にも気づかず、トキは私の腕を愛撫するように優しく握り、指を這わせる。

「それで、トキ。私とセックスしてもらえるかな？」

「わかつ♡ わかり、ました、からっ♡ それっ♡ やめっ♡ つ……♡♡」

びくんっ♡ と大きくのけぞり、トキはクリ愛撫で軽くイッてしまった。

「はあっ♡ はあっ♡」

庇のように手を顔にかざし、清らかな朝の日差しの中で絶頂の余韻に揺蕩って無防備に寝そべるトキを見てみると、チンポがひどくイライラする。

眠たげに細められた瞳は、しかし私を見つめてキラキラと興奮に輝き、処女なのに愛撫で気持ちよくなってしまったバニースーツの股をだらしなく開いて、男に食べられるのを待つ発情うさぎとして出来上がっている。

抱き合って、愛撫で温められたトキの肌は軽く赤みが差し、着実にセックスの準備を整えていた。

そこで、唐突にトキの腹がくうー……と鳴る。

「先生、お腹が空きました」

「みただね。朝ごはん、一緒に食べようか」

トキの腰の下から腕を回し、がっちり抱き寄せつつ身体を起こす。

「……………はい」

フル勃起したままの私の股間を見つめ、これから何が起こるかなんとなく理解が進んだらしいトキは、それでも私に身を寄せて何も文句を言わずに立ち上がった。

休憩室を出て、誰もいない朝一番のシャーレベルの廊下を通り、エレベーターで地下居住区に連れ込む。

「パンと牛乳とサラダ位しか無いけど、良いかな」

「ゆで卵も欲しいです」

「卵は……あるね。茹でておくよ」

バニー姿のまま、トキはちよこんと何もせず待っている。

セフレの皆が定期的に訪れて食事挟んでセックスしていくため、私の食事情もかなり改善していた。

トースターにパンを入れ、鍋に卵を入れて煮始める。

「はい、おまちどうさま」

「ありがとうございます。頂きます」

バニー姿に加えて、寝汗とさっきの愛撫で雌の匂いをむんむん漂わせるトキを対面にして朝食を摂った。

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさまでした。……では、私はこれで……」

「まあまあ。セックスもある意味メイドの仕事の一つだよ」

今更になつて自分の露出度を恥じるようにもじもじと身体を腕で隠し始めたトキを止める。

「そうなのですか？ ……先輩たちもこの行為を？」

「うん、C&Cは全員セフレだよ」

「セフ、レ？ ……セックスをする間柄という意味でしょうか」

トキの隣に座り、むき出しの肩を抱く。

「そうだよ。気持ちいい行為だからね」

少し肩が強ばるが、結局は私の身体に身を預けてくれた。

「不思議です……この行為は、とても暖かくて心地いいのに……どうしてか、やってはいけない事のようにも思えて……動悸が止まりません」

「じゃあ、止めておく？」

トキの細い腰を抱いて撫でていた手を離し、顔を覗き込む。

「……いえ。先生とのセックス……してみたい、です。先生に触られる事が、その……好き、なのかもしれません」

正面を向いたまま俯いて、キュツと私のシャツを摘んで、セックスを承諾してくれた。

「ありがとう、トキ。じゃあ準備するね」

ソファアをセックス用ベッドにすべく変形させ、タオル地のシーツを幾重にも重ねる。

「それは……どうしてそんなにシーツを？」

「体液で濡れてしまうからね」

屈んだ私の背中に手について、トキがベッドを覗き込む。

柔らかなトキの身体が背中に密着し、チンポのイライラが増してきた。

「ベッドが完成しましたね……私は、どうすれば良いですか？」

「まずは2人とも裸になろうか」

トキと一緒にベッドに座り、バニースーツの背中中のファスナーを下げる。

「は、裸……分かりました」

流石に何の知識もなくても恥ずかしいのか、トキが腕で身体をかばうようにしながらバニースーツを脱いでいく。

着たまま眠り、愛撫までされたスーツの内側は蒸れて芳しい匂いを放っていた。

嗅いでいるのを悟られたか、トキに赤い顔をして遠ざけられてしまう。

「先生……先生は私の無知に付け込んで居るようですが……いくらなんでもそこまでされたら分かります」

「トキに知識があっても私は誘ったよ？」

そう言いながら、私も全裸になる。

「……そうですか。C&Cの先輩方も全員やっているのなら、悪い行為ではないのでしょうか……」

バニースーツの残りのチョーカーとカフス、そしてニーソックスだけになったトキが乳首と股間を隠してベッドに座るのを見て、その体の美しさにチンポのイライラは最高潮に達した。

「あの……先端から何か漏れていますか……」

「これは興奮すると分泌されるんだよ。トキと同じだね」

トキの股間からは、すでに酸っぱい愛液の匂いが漂ってきている。

「わ、私は……！」

もじもじと内股を擦り付けると、トキは自分が濡れている事に今気づいたように顔を紅くして俯いた。



「さあトキ、脚を開いて」

トキの隣に座り細い脚を包むニーソックスの膝に手をおいて、ゆつくりと脚を開かせる。

「……………」

さすがのトキも性器を見られるのは羞恥心が働くのか、不安げに私の腕に縋り付いてきた。

裸の胸が私の腕に当たり、健康的な少し赤みがあった乳輪が乳房が潰れるのに従って歪む。

縫られたのと反対の手でバニースーツを着る為に処理をしたと思われる陰毛を指先でくすぐって、まずはその柔らかな感触を楽しんだ。

ピッタリと閉じたトキの大陰唇はスラリと薄く、柔らかさも相まって上からそっと手のひらを当てて揉みほぐすだけで内側の濡れ具合も感じ取れてしまう。

「っ、あ……………」

トキに縋りつかれながら、遠慮なく性器を刺激して処女の性欲を燃え上がらせていく。

「どうかな？ 嫌じゃない？」

「はっ ♥ はいっ ♥ い、嫌では、ありませんっ ♥」

にちやにちやと水音が聞こえて来るほどに、トキの興奮は高まっている。

胸も愛撫したい所だが、トキが必死に私の腕にしがみついているので股間を弄る以外のことが出てこない。

その代わり、トキの胸を強く押し付けられて汗ばんでいくのをつぶさに感じ取れている。

頃合いと見て、ヒダの内側の粘膜にも指を滑り込ませた。

「あっ ♥ ああっ ♥」

びく、びく、と教えてもいないのに、トキの股が更に開いていく。

指先をトキの温かい愛液にまみれさせながら、ぷりぷりした小陰唇とクリトリスを弄り始めると、トキが顔までも私の肩辺りに押し付けて悶え始めた。

「はっ♥ あ、ううっ♥」

普段の落ち着いた声からは想像もできない、甘く高い声で雌の悦びを歌うトキが愛おしく、チンポも独りでに我慢汁を垂れ流す。

「一回イッておこうか」

クリトリスの根本を指でカリカリと細かく弄り、トキを追い詰める。

「ああああっ♥ んんっ♥ ふああっ♥」

トキは甘ったるい声を垂れ流しながら、脚を180度近く限界まで開いて腰を突き出し、無意識にクリトリスのもたらす快楽を貪っていた。

愛液まみれのクリトリスの包皮を、つるりと剥く。

そつと、むき出しのクリトリスの周りを指でくるくるとなぞった。

「~~~~~♥ っか、はっ♥」

腰を上下にガクガクと痙攣させ、トキが絶頂する。

愛液でベトベトになった手を舐めて綺麗にすると、全身を痙攣させて絶頂の余韻に浸るトキを抱きしめてゆつくりと待った。

「はあ……はあ……♥ 先生は、ずるいです」

「どうしたの、突然」

股間をいじられただけで身体を桜色に上気させてうつつら汗をかいているトキが、普段よりも少し弛んだ切れ長の瞳で見つめてくる。

どことなく不満げでじつとりとした視線だが、今自分が見せた痴態を取り繕う恥じらいも滲んでいた。

「さつきから私ばかり恥ずかしい姿を見せている気がします。攻守交代を要請します」

「トキが私を気持ちよくしてくれるの?」

「べ、別に、気持ちよきは……うう……今日の先生は意地悪です」

ぱつかりと開いていた股を恥ずかしげに閉じ、上目遣いに睨んでくるトキ。

「それじゃあ、私のを啜えて舐めてくれるかな」

「えっ」

トキが普通に嫌そうな顔をした。

「……先生は私の股間を指で弄つたのに……私は先生の股間を啜えて舐めるのですか？」

「トキの股間を舐めさせてくれるならそれを先にやろうか？」

太ももに手をおいて開こうとすると、トキが抵抗した。

「っ♥ い、いえ。良いです。舐めるのは、普通のことなのです……」

ずり、と尻をずらして間合いをとり、トキが横寝のように身体を倒して私の股間に顔を近づける。

「ん……」

さらりと髪が流れ、私の脚にトキのサラサラした髪がかかる。

顔にかかる髪をかき上げるトキを真上から見下ろし、可愛い耳に指を掠らせつつ髪を梳いた。

「う……臭いが、キツイですね……ちゃんと洗ってください、先生」

「ごめんね、昨日はお風呂入れなかったから……」

それ以前にトキとセックス出来る興奮で我慢汁に濡れた私のチンポは、処女には耐え難い臭いだろう。

しかしトキは、それでも唇を亀頭に触れさせてくれた。

「ちゅ……」

薄く、バニーの割に飾り気のない唇が我慢汁にまみれていく。

「あの……これで、気持ちいいのですか？」

ちろりと横目に顔色を伺うトキの頭を優しく撫でて、笑顔を返す。

「うん。出来たらもっと啜えて舐めてくれると嬉しいな。唇を内側に巻き込んで歯が当たらないようにね」

「はい……」

言ったことを素直に実行し、トキが処女の初フェラを健気に続けてくれる。

たどたどしく、ほとんど啜えているだけのフェラだが興奮は出来た。

「いいよ。舌を使って、先端の柔らかい部分を撫でてみて」

じつと止まってしまう、戸惑っているのが伝わるトキの髪を梳きながらフェラ指導する。

「んふ……れる……」

ずつと口を開けていて苦しいのかトキの吐息が荒くなるのが聞こえるが、それでも文句は言わず舌を使って亀頭を舐め回してくれる。

鈴口や裏筋を舌先でくすぐられ、思わず私も声が出てしまう。

それを決して聞き逃さず、トキの攻めがどんだん的確になっていく。

「じゅる……れろれるっ♥」

舌を亀頭に巻きつけるように刺激する、教えていない動きまで加わってきた。

唾液と我慢汁が混じったものを啜り上げながら口内を温かい液体で満たしたトキのフェラは、こちらを気持ちよくする事に重点を置いた奉仕のためのフェラだ。

「凄い……上手だよ、トキ。口全体で吸って、頬をへこませてくつつけてみて」

「ぢゅっ♥ぢゅぞっ♥れるっ♥」

口から卑猥な水音をひっきりなしに立てて、頬をすぼませてフェラ顔を晒しながら、トキが横目で私を見つめた。

「ひーふ♥」

そしてチンポを啜えながら両手でダブルピースをしてくれる。

「じゅぽっ♥んじゅるっ♥」

言われていないが刺激が強くなる方法を考えたトキが、頭を下させて口を性器にしてチンポを気持ちよくしてくる。

さらに金玉を指先でふにふにと撫で揉みほぐす動きまで加わって、一気に射精感がこみ上げてきた。

「くっ、出るよ、トキ、不味かったら吐いて良いからね」

じゅっぽ、ぶっぽ、と盛大に音を立ててしゃぶるトキに宣言し、口内に射精する。

「んぶっ!?!んっぐ……ぐく……ぢゅる……♥」

トキは、辛そうに身体を震わせながらもチンポから口を離さずに精液を飲み下す。

「大丈夫？ 本当に、無理して飲まなくても良いんだよ？」

「ぐく……んぐ……ぐつくんっ ♥ ふう……いえ、そこまでひどい味では、ありませんでしたので」

酸欠気味なのか、身体を起こしたトキは顔が赤く、酔ったようにとろんと尻を下げていた。

「それに……こうして出されると、なぜかとても先生に勝利したという感じがして、気分が良いので。 ピクトリぶいつ」

唇の端から精液を垂らしながら、トキがいつものようにVサインをした。

「私の技でなすすべもなく身悶えするばかりの先生を見ると、とても気分が良いです。もう一度しゃぶって良いですか?」

「それもいいけど、今はトキとセックスがしたいな」

「セックス……今までの行為も、準備なのでしようか?」

「うん、そうだね。私のチンポをしゃぶってたトキも興奮してくれたみたいだから、準備は問題なさそうだ」

トキの裸の尻を掴み、外側に開いてやるとマンコの肉も釣られて動き、にち、と粘質な水音を立てた。

「……わかりました。では……その、セックス……しましょう」

チョーカーとカフス、ニーソックスだけの裸になったトキをベッドに仰向けに寝そべらせ、上から覆いかぶさる。

ハリのあるトキの胸は仰向けになっても潰れることはなく、それがむしろ普段より大きく感じさせる。

欲望のままに、その胸に手を伸ばして親指で乳首を転がした。

「あっ ♥ はんっ ♥」

責められるのには弱いトキが、恥じらうように口元に手を当てて堪えつつも簡単に甘い声を上げて善がる。

「せ、先生、いたずらしないで、早くセックスしてくださいっ ♥」  
快楽と羞恥で赤面したトキが、知らずに恥ずかしいことを口走る。

「そう? それじゃあお言葉に甘えて」

ハッキリとした合意の言葉を得て、私のチンポも射精から完全復帰している。

避妊というものを知らないトキのマンコに、精液の付いたチンポを

押しあてた。

「トキ、セックスと言うのはね、子供を作るための行為なんだよ」

「子供……？ ああ……そうなのですね。先生と、私の子供……ふっ。何だか見てみたい気がします」

性行為の意味も知らないトキが、身体中を発情させて股を開いている。

そのシチュエーションに興奮し、トキの密やかに花開いた膣穴へチンポを突き入れる。

「うっ……い、痛いです、先生」

「ごめんね。初めてはちよつと痛いかもしれないけど、力を抜いていてね」

「うう……大人に騙されました……くすん」

トキはこんな時でも冗談めかしているが、その手は不安げに中空を揺れていた。

優しくその手を取り、少し恥ずかしそうに目を細めるトキと見つめ合いながらチンポを進めていく。

亀頭が完全にめり込み、トキと恋人つなぎで繋いだ手に苦痛から力が入った。

「うっ……く……」

トキのスレンダーな下半身が、あられもなく股を開いて私のチンポに蹂躪されている。

力んで背中を丸めたトキも、自分の股間を見つめてマンコが痛々しいまでに拡げられてチンポを飲み込んでいく所から目が離せないでいた。

「トキ、力を抜いて。力むと痛くなるよ」

「は、はい……」

トキが目をつぶって眉を寄せ、悩ましげに苦痛に耐える。

どうにか力を抜こうと、ベッドに背中を預けて脚をカエルのようにだらりと開いた。

だんだんと力みが抜けて行くのを膣の締めから感じ、クリトリスと乳首を弄って更に痛みをそらした。

「あっ♥ だめ、いま、されたら、痛いのもっ♥ 気持ちいい、のがっ♥」

感じやすいトキの身体は、処女を奪われる痛みを簡単に誤魔化されてしまう。

膣の熱さと潤みが増し、じわじわと処女膣をかき分け……ようやく処女膜に達した。

「少し痛いけど、我慢してね」

トキは言葉もなく、コクコクとうなずいて返事をした。

ぷっん、と比較的薄い処女膜を破る。

「……あっ」

肩をすくませ、私の手をギュツと握りしめて、トキが破瓜の痛みに耐えていた。

「せん、せい……本当に、痛いのですが？」

「ごめんね、セックスってそういうものだから」

涙目で睨んでくるトキに、チンポを奥までねじ込みながら謝る。

処女でよく運動をするトキの膣は熱くもしつかりと肉厚で、握りしめるような締付けが心地良い。

「……また先生だけ気持ちよくなっていますね。傷つきました。もつと私を褒め称えて甘やかしてください」

ふんっ、と鼻息を吐いてトキが憤慨するので、手を解いて抱きしめる。

「トキの裸、すごく綺麗だよ。乳輪と乳首もバランスがいいし」

つう、と乳輪の外周を指でなぞり、乳首を指の腹でいい子いい子するように撫でる。

「んっ♥ そんな事を言われても、あまり嬉しくありません」

「普段鍛えているから、身体が引き締まっっていてとてもプロポーションが良いよね。この脚とか、腰周りとか……」

しっとり汗に濡れた腰と太ももの付け根を撫で、胸元にキスの雨を降らす。トキも私の背に手を添えて抱きしめ、密着感を楽しんでいくようだった。

「ん……はい、エージェントとして、最高のメイドとして、日々トレー

ニングを欠かしていませんので……♡」

この褒め方で良かったらしくトキの身体からじわじわと力が抜けて行くのを感じる。

ギチギチの膣がふわりと和らいでくる処女セックス特有のオーケーサインを感じ、腰を微かに動かしてトキの膣ヒダの感触を確かめた。

「あつ、は……♡」

トキは、自分が膣をえぐられて心地よさそうな声を上げた事が信じられずに目を見開いている。

「どうやら、準備は良さそうだね」

「……そのようです。さすが先生ですね。ではセックス、よろしくお願いします」

口ではあくまで淡々と、しかし背中に当てられた手に力がこもり不安なトキの心情を伝える。

「トキ、キスしようか」

「きつ、キス、ですか？ そんな……突然……恥ずかしいです」

キスの意味は知っているのか、急に恥じらうトキに顔を寄せ、至近距離で見つめ合う。

「あ……♡」

ゆつくりと近づく私の顔に、真っ赤な顔をしたトキが目を閉じる。

そして唇を触れ合わせた。

先程フェラしていた唇ではあるが、トキの唾液に洗われてさほど気にならない。

「ん……♡ ちゅ……♡」

トキは薄目を開けて私を見るが、私はずっとトキを見つめている事を確かめて恥じらいからまた目を閉じてしまう。

その初々しさが可愛らしく、トキをしっかりと抱きしめたまま腰を大きく動かし始めた。

「んっ♡ うっ♡」

みっちりと密着するトキの膣肉が、私の亀頭に引っかかって引きずり出される。



弛められてヒダになった膣肉がぷりぷりとカリを刺激して射精感を煽る、トキらしい素直なマンコだ。

「んふー♥ はふっ♥」

一突きで息が上がったトキの鼻息が口元に当たり生暖かい。苦痛には感じていないようなので、ピストンを繰り返した。

「うっ♥ ん、むっ♥ ふーっ、ちゅうっ♥」

内蔵を突かれるたびにくぐもった善がり声を上げるトキが、必死に私の身体にしがみついて口を吸って甘えてくる。

ゆつくりとトキの頭を撫でて落ち着かせながら、存分に処女膣の熱さとみずみずしさを楽しんでピストンを激しくした。

ぬちゅ、パアン！ と音を立ててトキの膣を往復し、処女膣からセックスでイける女の膣へと耕して行く。

「んっ♥ んっ♥」

責められるのに弱いトキが閉じた目尻に涙を浮かべながら、一方的に犯される。

ぱんっ、ぱんっ、ぱんっ、とりズミカルに腰を動かしても苦悶の声ではなく快樂の呻きを上げるようになったトキの成長をチンポいっぱいと感じ、無垢な子宮に精液を浴びせたくなくなってくる。

「トキ。一番奥に出すよ」

「は、はいっ♥ っ♥ だして、だしてっ♥」

わけも分からず、子作り行為を承諾するトキに触れ合うだけのキスをして強く抱きしめる。

「うっ♥ っ♥ あああーっ♥ っ♥」

特にGスポットなどの刺激をしたわけでもなく、トキが処女セックスで膣イキをキメる。

その格別の締りに応じて、私も一番奥で射精した。

トキの鍛えられた腹筋が、ぴくん、ぴくん、と痙攣して私のチンポを締め、貪欲に子作りのために精液を搾り取る。

「あ、あっ……熱い、です……♥ 先生の、さっきの液体が……中に出ていますね……♥」

トキから私を抱き寄せ、首元に顔を埋めてじっと射精を受け止めて

くれた。

「あ……先生のが、小さく……終わった、のですか？」

私の耳元でトキが囁く。セックスでしつとりと濡れた頭を撫でながら、私もトキの耳にキスをして囁いた。

「うん。ありがとう、トキ。気持ちよかったよ」

「私は……上手にセックスのお相手が出来たのでしょうか？ 最後の方は、わけも分からず先生に揺らされていただけで……」

トキは汗でヌルヌルになった身体を密着させ、少し不安げに呟いた。

「そんなことないよ。初めてとは思えない位に上手だった」

「そうなのですね。さすが私です。先生もお疲れ様でした。その……私も、セックス気持ちよかった……です♥」

汗で頬に髪を貼り付けながら、いつも通りのすまし顔で喋ろうとするトキだが、頬は赤らみ、声が快楽の余韻で少し上ずっている。

「初めてであんなに気持ちよくなれるのも、才能の一つだよ。……じゃあ、この薬を飲んでおいてね」

トキを抱き起こすと、テーブルの上に常備されている避妊薬を取ってトキに差し出す。

「……これは？」

「膈内射精したからね。妊娠しないようにするお薬だよ」

「……先生との間に子供を作ったら、先生が養ってくれて私は永久就職できるので、飲む必要が無いのでは？」

「でもC&Cからは抜けないといけなくなるだろうね……」

「うーん……仕方ありません。この場は飲みますね」

冷静に学生出産を考えるトキを説得し、避妊してもらった。

「ところで先生、やはり私がやられたまま終わるのは納得行きません。もう一度先生のを舐めさせてください。私が勝って終わりますから」セックスの後のお掃除フェラを志願してやってくれるトキに甘えて、もう一発抜いてもらうのだった。

後日。

「先生、セックスしましょう」

「駄目だよ」

すげなく断ると、トキが目を見開いて愕然とする。

「トキは成績が悪いからね。セックスしたければ小テストに合格してもらわないと」

「そんな……！ 私を弄んで捨てるのですか、先生！」

漫画を読んで覚えたらしい言葉で私を責めるトキだが、無視して執務室と同じ階にある教室へ向かった。

半分以上席が埋まった教室で、生徒皆が私とトキを見る。

「あ、ご主人様！ 今日私もちやんと勉強してきましたよ！」

「アスナ先輩、合格したら一緒にご奉仕しましょう！」

「あ、良いねー！ 今日アリスちゃんもメイド服着てるし、メイドづくしだね！」

そのメンツを見て、トキが目を見開いている。

「あ……アリス……？」

「トキ！ トキも先生のセフレになったんですね！ 一緒にセックスするのが楽しみです！」

「アスナ、先輩……」

「良かった！ トキちゃんにご主人様とのセックスの事、もう隠さな  
いで良いんだね！ これからはセックスでも一緒だね、トキちゃん  
！」

知り合いが私とセックスするために集まっているという事実を目撃し、改めて圧倒されているトキを席につかせ、小テストを始めた。

もちろんトキは合格出来ず、アリスより勉強が出来ない事実打ちのめされアビエシユフを呼んで暴れようとするのをなだめる羽目になった。

「先生……次セックスする時は沢山しゃぶってあげますから覚悟して  
いてください」

「楽しみにしてるよ」

他の生徒で沢山射精した後で、プルプル震えながら勉強をするトキに付き合って個人指導をするのだった。

## メイド勇者のご奉仕（アリス）

「ふああああ……」

朝日が窓から差し込み始めたゲーム部の部室で、アリスが大きく伸びをした。

「ゼルナの伝説、ティアーズオブギャングスタ、面白かった……神ゲーでした……」

ふすーつ、と鼻から息を吐くアリスは、無表情のようで口元だけが緩んでいる。

「ああ……この感動を先生と語り合いたいです！ あとセックスしたいです！」

アリスが突如立ち上がり、徹夜テンションで休日朝から先生のもとへ押しかけようと思いつつ。

とはいえ、制服のまま徹夜でゲームをしていたアリスの身体は汗でベトついていた。

いかにアリスが高性能なボディをしていても、初夏の気候は脇や股間に汗をたっぷりかかずには居られなかった。

「くんくん。うーん、流石に着替えましょうか……先生はアリスの臭いを嗅ぎたがりますが、アリスは恥ずかしいです」

汚れた服や下着をぽいぽいと脱ぎ捨て、メイド服を着こむ。「セックスするからノーパンで行きましょう。先生もそのほうが喜ぶはずですよ！」

ロングスカートのガード性能を活かし、ノーブラノーパンで外に出るアリスだった。

ふんふん、鼻歌を歌いながらアリスが朝の校舎を歩く。

「あれ……？ アリスちゃん？」

声をかけられてアリスが振り返ると、それはよく見る顔だった。

「あつー！ あなたはいつもお菓子をくれる人ですね！ おはようございますー！」

ぱあつと満面の笑みを浮かべ、朝の挨拶をするアリス。

「うん、おはよう、アリスちゃん。どうしたの、その格好？　かわいい……」

前髪で隠れ気味のメガネの向こうの瞳が、アリスの身体を舐め回すように眺める。

「今のアリスはメイド勇者なんです！　メイドと勇者を極めた先にある上級職です！」

「そうなんだあー、半袖白タイトのアリスちゃん……いいなあ……」

ドウフオフォ、と笑うその生徒にアリスは薄い胸を張った。

その服の下では、服に擦れてしまったため全く気づかれていない。プロロンに隠れてしまうため全く気づかれていない。

「えっと……あ、アリスちゃん！　生チョコ一個あるよ。食べる？」

「えっ、くれるんですか!?　ほしいですほしいです！」

動物園で餌やりをするようなノリでポケットから生チョコを取り出し、アリスにあげようとする生徒に、びよこびよこ無警戒に近寄るアリス。

そして、チョコ待ち顔で生徒を見上げた。

「あー……♥」

目をそっと閉じ、口を半開きにして、美しいピンク色の舌をぷるんと差し出す。さらには、顎の下に両掌を上にして添えていた。

先生とのセックスですつかり癖になった顔射待ちと全く同じ顔が、早朝の光溢れる校舎に突然現れてしまった。

それを不意打ちで見せられてしまった生徒が、アリスに性の臭いを感じ取り、下腹を熱くする。

「ごくっ……♥　アリスちゃん……か、可愛いねえ♥　つと、あれ、ごめん。チョコが少し溶けちゃってる」

個包装を破いて取り出すと、生チョコは生徒のゆびにねとりと付着してしまった。

「大丈夫です！　美味しく頂きます！　あなたのチョコ……アリスに、ください♥」

おねだりまでされて、生徒の興奮がますます高まる。下腹部の疼きに脚をもじもじさせながら、溶けかけチョコをアリスの空いた口にポ

トリと落とした。

「あー、んむっ♥ んっ……くちゅ……♥ れちゅ……♥」  
自分のモノをアリスが口に含み、上あごと舌で押しつぶし、唾液と絡めながら口の中で転がして味わっている。

向かい合う生徒は、そのアリスの舌の動きと股間の疼きを脳内で結びつけ、クリトリスをウズウズさせて興奮していた。

(きよ、今日のアリスちゃん……スケベすぎる！)

この生徒も課題を徹夜でこなして朝帰りの途中だったため、テンションがおかしくなっていた。

「ごっ……くん♥」

アリスが自分のものをごっくんしてくれたのを見て、生徒が軽イキする。

「ふう……♥ ふう……♥」

朝の道端でチョコをあげただけなのにクリイキ顔を晒している生徒の顔には見向きもせず、アリスはじつと生徒の手を見つめている。

「まだチョコが付いています。もったいないです！」

「えっ？」

そっと、アリスのひやりとした手が生徒の手を取った。

フェラの時にチンポに添えるように優しく固定し、親指と人差し指だけを伸ばした手に口を近づける。

「ちろ……♥ ちゅ、くちゅ……♥」

先生にも褒められることの多くなってきたアリスのフェラテクが、生徒の親指に襲いかかっていた。

チョコの付いた指の腹に柔らかく舌を這わせ、綺麗に舐め取る。

さらに指先を口に含んで、先生の亀頭にいつもやっているようにクルクルと全周を舐め回した。

「あっっ♥」

生徒が、アリスの指フェラで絶頂する。

「んくっ♥ こっちの指も……♥」

ネットリとチョコの付いた人差し指は、生徒の絶頂でアリスの顔より高い位置に上がってしまった。

しつかりと手を掴み、アリスが顎を上げてフェラ顔でチョコを舐めに行く。

「んふーっ！ んふーっ！」

生徒はアリスの痴態を脳裏に焼き付けようと、血走った目でそれを凝視していた。

「れるっ♥ んっ、こくっ♥」

女の子の細い人差し指を、アリスが舐め回し口に含んでチョコを残さず味わい尽くす。

自分の人差し指をクリトリスに見立てて、生徒はアリスのクリトリスフェラでまた絶頂していた。

「ちゅぽんっ♥ ふう、生チョコ、美味しかったです！ 徹夜明けには糖分のエネルギー補充がよく効きます！」

濃密なフェラ奉仕にショーツをねとねとにしてみました生徒をよそに、アリスは何食わぬ顔で満面の笑みを浮かべた。

「あ、アリスちゃん？ こ、こういうこと、みんなにしているの？」

アリスの唾液にまみれた自分の指をじっと見つめながら、生徒が尋ねる。

「あ……ごめんなさい！ アリス、徹夜でお腹が空いていたからつい……」

流石に指しやぶりがはしたない事だと認識しているのか、アリスが目をバツテンにして謝った。

「い、いいえ！ いいの！ 私はね！ 私は、アリスちゃんにいつもお菓子を上げてるし、アリスちゃんの事が大好きだから良いんだけど、他の人には……ね？ その、ちよつと、面食らうかもしれないから、こういう事は私が相手の時だけにしましょう？ ね？ 私は本当、もう、毎回やってくれてもいいから！」

指の唾液を決して拭わず、アリスにねちやねちやとした笑みを向けながら猫なで声で指フェラの予約を取る生徒。

「そう……ですか？ ありがとうございます！ じゃあ、また！」

したっ、と手を挙げて挨拶をすると、アリスはシャーレへと向かって小走りで駆けていく。



去っていくアリスの背が小さくなるまで見送ると、生徒は指先に鼻を近づけてアリスの唾液の臭いを鼻腔いっぱいに吸い込んだ。

足早に、ほとんど全力ダツシユで自分の部屋まで帰ると、すぐさま全裸になり唾液が乾き始めた指で乳首をキツくつまむ。

——— とうですか？ 乳首を虐められるのが好きなんて、面白いですね！ えいえい！

アリスに満面の笑みでS責めされる妄想で軽く乳首イキするまで虐めると、唾液の感触が残っているうちに指2本だけでクリを摘んで、ひたすらシコシコと扱く。

「アリスちゃっ♥ アリスちゃっ♥ アリスちゃっ♥」

指先を這い回るアリスの舌使いを鮮明に思い起こしながらクリトリスを虐めるのは、今まで味わったことのないほど深い快樂をもたらした。

アリスが無垢な……生徒は本当にそう信じている……笑顔を浮かべ、自分の指をねつとりと舌でねぶつてくれた体験が、クリトリスフェラの妄想をこれ以上無く鮮明にする。

徹夜明けで恥垢にまみれた自分のクリの皮を剥いた根本をアリスの舌先がほじり、舐め取り、クルクルと全周を舐め回してくれる。

ばちん、ばちん、と脳みその中を電撃が走ったと思うくらいに強い快感の中、生徒がクリをすごい絶頂する。

もうアリスの唾液はマン汁で洗い流されていた。

こうしてアリスは乙女の性的嗜好をぐちゃぐちゃにしつつ、セフレとして成長しているのだった。

「せーんせいっ♪ ゼルナ新作、もうクリアしましたか!？」

休日の朝にも関わらず、私は執務室で仕事をしていた。

アリスも休日の朝だというのにテンション高く乱入してくる。しかもなぜかメイド服だ。

「んー、ああ、プレイはしてるけど……まだ地上のマップを2箇所しか埋めてないよ」

「ええー!? 駄目ですよ、あんな神ゲーをプレイしないなんて!」

そう言つてちよこちよこ走つて私の側に寄り、腕を抱きしめてくる。

「今日は先生とセックスしようと思つて来ましたが、予定変更です！先生、私とゼルナで遊びましょう！」

「いやあ、でもね、アリス。仕事があつてね……」

「今日は休日です！あーそーぶーんーでーすー！」

こればかりはアリスが正論だった。済ませておきたい仕事ではあるが、休日出勤するほどかと言われると返答に困る。

「分かつた分かつた。確かに今日は休日だもんね。遊ぼう、アリス」

ぱあつ、と笑みを浮かべてアリスが身体を押し付けてくる。胸がいつもより柔らかく潰れ、下着をつけていないのが感じられた。

「アリス、今日は下に何も着ていないの？」

「はいっ！先生とすぐセックス出来るように着ないで来ました！」

「そっかあ……」

まあいつもより長めのスカートなので大丈夫だろうとは思いつつ、ギリギリのことをするアリスにチンポがイライラしてくる。

「あつ、先生、勃起しましたか？先にアリスとセックスしてからゲムしますか？」

最初のセフレだけあつて察しも良くなったアリスが自分から提案してくれる。

「うーん、でもアリスの言う通り今日はゲームをしようかな……」

「じゃあ、アリスがさつとフェラで射精させてあげます！これもメイドスキルです！」

ニコニコと跪いて、アリスが私のズボンのジッパーを下ろす。

「はい、先生のチンポ、おはようございます♥」

アリスの笑顔は窓からの日差しにも負けない明るい笑顔で、私の勃起チンポに挨拶をしてくれる。

「ちゅっ♥ れるれるれる……♥」

鈴口に軽くキスし、ちろちろと裏筋から鈴口を舌先で甘やかすように撫で回してくれる。

ぴく、ぴくとチンポが痙攣してしまう私の反応を上目遣いで楽しげ

に見つめながら、アリスが唾液をたっぷり湛えた口を開き、亀頭を啜えこんでくれる。

「あもっ♥ちゆく、くちゆくちゆくちゆく……♥」

唾液の粘質な音を響かせながら、アリスが頬を窄めるひよつとこのようなフェラ顔を晒して頬の内側と舌のすべてで亀頭をもみくちやにしてくれる。

高刺激の即ヌキに適した動きにチンポがフル勃起に導かれ、アリスの口内に我慢汁を撒き散らした。

「れるれるれる……♥」

舌で裏筋を強く擦りながら、手首を柔らかく使った高速の手コキと金玉を優しく揉みほぐす熟練の性技で効率よく私を射精に導いたアリスは、私の顔をじいつと優しい目で見つめている。

アリスの成長を感じ取りながら、アリスの手コキフェラで口内に射精した。

「んっ……くちゅ……♥れちゅ……♥」

アリスが、私の精液を口にいつぱい溜めて舌で転がし、まるでお菓子のようにじっくりと味わっている。

「んくっ♥」

少しずつアリスの細い喉を通り、私の精液が飲みくだされていく。

「あ……♥」

上を向いて口を開けて見せてくれるアリスの口内を覗くと、ただ綺麗な口のピンクだけが見える。

「うん、全部飲めて偉いよ、アリス」

ポニーとメイドプリムで普段と違ったアリスの頭を優しく撫でると、アリスはニコツと笑って舌なめずりで精液を拭った。

「じゃあ先生！ゼルナしましょう、ゼルナ！アリスが先生のナビ妖精になつてあげます！」

手コキをしていたとは思えない小さく可愛らしい手で引かれ、地下居住区……ではなく自宅へと帰る。

「えへへー、先生のおうちでゼルナをプレイです！」

地下鉄でもメイドのアリスは目立ったが、ニコニコして私の手を

握っているので職質などは受けなかった。

「そこです、そこ！ この地方の塔はこの洞窟を抜けないとたどり着けません！」

「ああー、ここかあ……おつ、こんな所に……」

「あー！ このポログ、アリスまだ見つけてません！」

ソファに座り、アリスを膝の上に座らせて、ゲームをプレイする。ぴったりと密着したお尻は柔らかく、ノーパンであるのがなんとなく伝わってくる。

腕の中に収まるアリスの身体はいつもより甘酸っぱい香りを漂わせ、私に遠慮なく身体をこすりつけてくる。

それでも大作ゲームの面白さでなんとか気を散らしていたが、

「先生！ このボスは氷みたいになった部分が弱点です！」

ボス戦でアリスが興奮して身体を揺らすと、お尻が私の股間に擦り付けられて否が応でもチンポがイライラしてしまう。

「やったー！ ボス撃破です！」

バンザイをしたアリスが背中を預けて私にもたれかかる。

その時には、もうはつきりと勃起してしまっていた。

「ふふ……♥ 先生、ボスも撃破しましたし、少し休憩しましょう♥」

アリスが身を捻り、私を優しく……しかし有無を言わさぬ力でソファに押し倒す。

カチャカチャとベルトを外し、ズボンもパンツも脱がせてくれる。

「先生のチンポ、もうすっかり元気になりましたね♥ じゃあゴムを付けますね」

ぱく、とゴムを唇で挟み私のチンポを掴んでゴムを押し付ける。

「おむっ、あもも……はい、出来上がりです！」

口でのゴム装着も習得したアリスが完璧に準備をこなしてくれた。「あ、先生は寝たままですよ。今日のアリスはメイドなので、先生にご奉仕します！」

そう言っつて、馬乗りになったアリスがスカートをペろんとめくつた。

予告通りにノーパンの股間が曝け出され、柔らかいマン肉がゴムチンポに乗っかっているのがよく見える。

「アリスはもう濡れてるから、すぐに挿れられますよ♥」

脚を開いて私の腰の両脇に踏ん張り、膣穴にクリクリと亀頭を押し当てて愛液をまぶす。

私の胸に手を当てて前傾し、優しく微笑みながら腰を上げて正確にチンポを膣で啜え込む。

そつと腰を沈めると、いつもどおりに熱くてヒダが多いアリスのマンコがチンポを包み込んだ。

「はぁ……♥ 先生のチンポ、アリスの気持ちいい所に当たってます……♥」

薄く笑んで、耳にかかった髪をかき上げるアリスは、その時だけ酷く大人びて見えた。

「アリスのマンコも、いつもすごく気持ちいいよ」

私たちがいつものやり取りを終えると、アリスが腰を前後に揺らし始めた。

ぎつ、ぎつ、とソファのスプリングが静かに情事の始まりを告げる。

「んっ……んっ……♥」

休日昼間の日差しが窓から降り注ぎ、アリスを正面から明るく照らしている。

アリスのスカートの長さが結合部を完全に隠し、傍から見たら寝そべる私の上にアリスが跨ってじやれているとしか見えない光景なのだが、スカートの内側ではぬっぽりとアリスのマンコがチンポを啜え込み、時折きゅっ、きゅとマンコを締めてアクセントをつけてくれる。

「はぁ……♥」

最初の頃はチンポをハメたらとにかく全力で腰を振っていたアリスだったが、最近はこうしてTPOに合わせてまったりとしたセックスを楽しむ余裕を見せ始めている。

ほんのりと頬を染めて快楽に浸りつつも、チンポをじっくりと味わうようにへこへこ和小刻みに腰を使って、じわじわと気持ちよさの段階を引き上げていく。

しばらくすると厚めのスカートの奥から、にちやにちやとアリスの愛液が泡立つ音が響きはじめる。

「ふっ……ふっ……♡」

アリスの表情も蕩け、よりセックスに没頭しているかのように頬を紅潮させて腰を大胆に使いだす。

アリスはにつちや、につちや、という粘質な音を大きく立てて、私の身体についた手を支えに腰を上下に振ってマンコ全体でチンポをしごく。

膝を上げて踏ん張った事により、スカートの奥の結合部がチラチラと視界に入ってくる。

「あ……♡ イキそうです……♡」

ほそりと囁くように、アリスは絶頂に近いことを教えてくれた。

私もマンコの締まりに射精が近く、アリスの細い腰を掴んで下から腰を振り始めた。

ぎっし、ぎっしとソファの立てる音が大きくなり、ばふっ、ばふっとスカートの奥から肉が打ち合って空気が押し出される音が響く。

「ああ……イク、イク……♡」

アリスは美味しいお菓子を食べる時のようにちろりと舌なめずりをして、イク直前の快樂を舌の上で転がすように楽しんでいるようだった。

薄く笑んで弓なりに開かれた目にはキラリと涙が貯まり、堪えるように眉を寄せて笑顔とも苦痛とも付かないセックス顔でひたすら腰を打ち付け合う。

アリスが私に突き上げられてガクンガクンと小さな体を揺らし、その不規則なピストン運動にタイミングを完璧に合わせてマンコを締め、精液をねだる。

「イツ、つく……♡♡♡」

ぎゅ、と私の服の胸元をシワになる位強く掴んで、アリスが絶頂する。

根本まで突き刺さったチンポを上から下までみっちり締め付けられ、私も堪えきれず射精した。

「あっ……あっ……♡」

膣内で収縮するチンポに艶めかしい声を上げるアリス。

スカートがぺたんくと大人しくなり、再び結合部は隠されて絶頂に震えるアリスのイキ顔だけがセックスの卑猥さを伝えていた。

アリスのマンコで精液をポンプのように搾り取られ、出し切ってもじつと2人で絶頂の余韻に浸った。

数分後、

「ふうー……♡」

熱っぽいアリスの吐息とともに、メイドの腰が上がりぬっぽりと半萎えのチンポが開放される。

「お疲れ様です、先生。今日もセックス、気持ちよかったです♡」

ソファから降りて、アリスがゴムを外して縛ってくれる。

「んちゅっ♡ ちゆる……ちゅ……」

射精後の尿道をすすって残りの精液も吸い出し、チンポを綺麗にお掃除フェラしてくれるアリスの頭を撫でると、目だけでにっこりと笑みを返してくれた。

「さあ、ゼルナの続きを……」

「まって、アリス。アリスもちゃんと拭かないとね」

本気汁でべっとり濡れたアリスの股間を、ティッシュを出してコシコシと拭いてやる。

「ん……♡ ありがとうございます、先生。メイドのスカートの内側を汚してしまう所でした」

セックスに慣れてスジでは無くなったアリスの陰唇もティッシュでよく拭き取って、ゴミ箱にはいくつかの性臭漂うティッシュが積み重なった。

「よし、っと。じゃあ続きをしようか」

「はいっ！ アリスはゲームをクリアしたのに、先生のプレイで全然知らない事が起こってますごい！ 流石神ゲーです！」

ついさっきまでの艶めかしいイキ顔が嘘のようにアリスが無邪気に笑う。

それでも、ぽすと背中を預けてくる密着感ハセックスする前より

も強く、また少しアリスと仲が良くなった気がする。

知らず、アリスの頭を撫でた。

「んっ?」

アリスは不思議そうに振り返り、もつと撫でて欲しいと頭を差し出す。

ゲームをしながらスキンシップをして、まったりと過ごした。

なんだかんだで傑作なので夢中でプレイしていると、もう日が落ちそうになっている。

「あつ、もうこんな時間か……アリス、そろそろ帰らないと」

「ええー? 明日もお休みだし、アリス、先生の家にお泊りしたいです!」

アリスが唇を尖らせてわがままを言う。

「うーん、じゃあユズ達にちゃんと連絡をするんだよ」

「はいっ!」

端末でゲーム部の皆に連絡を取り、大丈夫です、と満面の笑みを浮かべるアリス。

「じゃあ、私はご飯の用意をするから、アリスはお風呂を沸かしてくれるかな」

「了解です! メイドアリスにお風呂掃除もお任せです!」

パタパタと駆けていくアリスを見送って、夕食を作り始めた。

そして食事を終え、アリスの沸かしたお風呂に入る。

「さ、先生♥ アリスのオマンコの中、先生のチンポでよく洗ってください♥」

長すぎるほど長い髪を頭の上でお団子にした全裸のアリスが、かけ湯をしてすぐに立ちバックでマンコを払って私を誘った。

ご丁寧にお風呂に入る前にフェラで勃起させてゴムをハメた私のチンポが、アリスのマンコに簡単に沈んでいく。

小さな身体を腰の下から抱き上げて、風呂場の椅子に座る。

「ふうう……♥ さ、先生、洗いっこしましょう!」



ずっぽりとチンポを啜えこんだアリスが、鏡に勃起乳首が映り込んでも構わずに笑みを浮かべる。

タオルにボディークリームを取って、アリスの身体をこする。

ため息が出るほど滑らかな肌が水を弾き、あつという間にきめ細かな泡がたつた。

「ふふっ、先生の洗い方、セックスの時みたいに優しくして気持ちいいです！　じゃあ、アリスもお返ししますね」

私の膝の上でアリスが身体をよじり、挿入したまま振り返って背面座位から対面座位になった。

締めりの良いマンコにチンポをねじられる感触に、腰に痺れるような快楽が走る。

「えへへっ、あわあわあわーっ♪」

チンポを今まさに啜えこんでいるとは思えない無邪気な笑みを浮かべてアリスが私の身体をボディークリームまみれの手で撫で回し、思いつき泡を立てた。

アリスの白い肌も私の身体も泡で包まれてしまう。

「アリス、ボディークリームを使いすぎだよ」

「そんな事ありません！　2人分洗うんだからこれくらいでちょうど良いです！」

アリスの小さな手が私の腹や脇、背中を這い回り、汗と汚れを落とす。

私もアリスの身体を隅々まで洗い、お互いの足まで残らず泡まみれになった所でシャワーを浴びて落とした。

「ふう……さっぱりしました！」

晴れやかに笑顔を浮かべたアリスが、お団子になった髪をシユルリとほろほろながら言った。

「先生、先生！　アリスの髪を洗ってください！」

再び背面座位に戻ったアリスが、肩越しに振り返り見上げながらおねだりするのでアリスの頭をシャンプーを付けた手で洗っていく。

「はー、気持ちいいです……」

アリスが頭を洗われて、気の抜けた声を上げて心地よさそうにす

る。

しかしそのマンコはぐっぽりと啜え込んだチンポを時折キュウキュウと締め付けていた。

「しかし、これほど長い髪だどう洗えば良いのかわからないな……」  
「んー？ 適当にシャンプーを付けて、さっと流せば良いと思います。  
ミドリはいつも煩く言いますが、アリスの髪は高性能なのでそれで十分なんです！」

俯いて目をつぶったアリスが、大雑把なことを言う。

どのみち私にも知識はないのでアリスの言う通りにするしかない。  
わし、わし、とまずは頭皮を洗っていると、アリスの身体が揺れてマンコの中のチンポが刺激される。

「うーん、結構時間がかかりそうだね。アリス、済まないけど髪の方は自分で洗ってくれるかな？」

「はい、わかりました！ ……シャンプーしてるから痛くて目が開けられません！」

髪のを束を抱えてアリスの膝の上に置き、シャンプーも用意してあげると、アリスは洗面台でシャツを揉み洗いするくらいの雑さで髪を洗い始めた。

「ん、アリス、頭流すよ」

「はい」

アリスが目を閉じたまま顔を上げ、私はアリスのおでこに手を当てて目にお湯がかからないようにしながら頭のシャンプーを洗い流す。  
「んんー、スツキリしました！ 先生、髪も洗い流しちゃっていいですよ」

アリスがそう言うので、膝の上の髪のかたまりにもお湯をかけてよく泡を洗い流した。

「さ、このあたりで……射精しておこうかな。アリス、湯船に手をおいてね」

つぶん、とチンポを抜きながら立ち上がり、アリスが浴槽に手をかける。

「はい、先生♥ アリスのオマンコでたくさん射精してくださいね♥」

洗い終わった髪を先にちやぽんと湯船に入れておき、アリスが尻を上げて私にマンコを突き出した。

直前までチンポが入っていたためぼっかり開いた状態の膣口に、再度チンポをねじ込む。

アリスの小さなお尻はお湯が珠として散りばめられ、宝玉のようにきらめいている。

その尻を指が食い込むくらい驚掴みにし、思い切りチンポを抜き差しした。

「おっっ♥」

ずっと挿入していたことで温まっていたアリスのマンコが、一番奥の子宮口を押し込むことでギュウと締まった。

ぬっち、ぬっちと滑らかに腰を前後させ、カ리를強く刺激する締めりの良さを味わう。

「おっ、おっ、おっおっ♥」

とん、とん、とアリスの好きな力加減で子宮口を押し込むピストンをしてやる。

アリスは言葉を忘れた発情猿のように私のピストンに併せてへこへこと腰を揺らし、セックスに没頭していた。

「んん、ーっ♥ んっ、あっ、はあっ、うんっ、うっ♥」

風呂場に、アリスの苦悶にも似た本気の善がり声が響き、私の金玉も煮えたぎるように精液を注ぎたくなってくる。

アリスの細い腰をがっちりと掴み、最後のスパートをかけた。

パアン！ パアン！ と深く突き刺すピストンを繰り返し、射精に至る昂りまで一気に駆け抜ける。

「ほおうっ♥ おお、うっ♥」

アリスの腹の底からの喘ぎに導かれるように、奥深くに射精した。

「ふっぐ♥ イク、イク、イク……♥」

びくん、びくんとアリスも尻を大きく跳ねさせて絶頂する。

お風呂の湯気でじっとり汗をかきながら、アリスの絶頂マンコのうねりを味わいながら最後の一滴まで射精しつくした。

ぺたん、と床に膝をついてアリスがへたり込んだので、ゴムを縛っ

て風呂場の外にあるゴミ箱に捨てる。

ふらつきながらもアリスがチンポをボディソープで洗ってくれて、ようやく2人で湯船に浸かった。

「ふうーっ……」

アリスが私を背もたれにして天井を見上げ、ぽけーつとため息をつく。

セックスの後の気だるさをアリスと共有しながら、ゆっくりと湯船で温まり、のぼせる前に上がった。

ぶおーん、とアリスが裸で長い髪にドライヤーの熱風を当てて頑張ってる乾かしているのを横目に、大きめのシャツを渡した。

「アリスは服を持ってこなかったみたいだから、パジャマとしてこれでも着ておいて」

「はい……えへへ、先生のシャツ、レア装備です！」

髪がとにかく長いので乾かすのも大変なアリスに飲み物でも用意するべく、先に出しておく。

ジュースに入った氷が解けて層になった頃、アリスが出てきてごくごく美味しく飲み干した。

「さあ、先生！ ゼルナの続きです！ 今日はずっとアリスとゲームですね！」

シャツ一枚のアリスを膝に乗せて、またゲームをする。

その日は寝る前にもベッドの上でキスハメをして、アリスで金玉を空にして眠るのだった。

## クイーンメイドとセックス勝負（ユズ）

シャーレの地下居住区、セックス用にタオル地のカバーを何重にもかけたソファベッドに腰掛け、私は食事を取っていた。

「お、おいしくなーれ、おいしくなーれ、もえ、もえ、きゅ、きゅん……♡」

ぶるぶると身体を震わせながら、メイド服を着たユズがオムライスを魔法をかけてくれる。

「うんうん、かわいいよユズ……いやクイーン」

メイド名で呼ぶと、ユズはぎゅつと目をつぶって赤くなった。

「せ、先生はその名前で呼ばなくていいですから……！」

もう、と唇を尖らせて、ユズが私の隣に座る。

「はい、あーん♡」

カチャ、と小さな音を立ててスプーンでオムライスを切り分け、口元に運んでくれるユズ。

その小さな腰を抱き寄せつつ、私はオムライスを頬張った。

「うん、美味しい。料理まで上手になったね」

「えへへ……はい。だって……先生に食べて、もらいたかった、ので……」

ユズはメイド服の腰を撫でる私の手にも動じず、どこか熱っぽい目で私を見つめている。

カチャカチャと、ユズのスプーンの音だけが響く。

私の手は腰から上へと這い上がり、メイドエプロンの下に潜り込んでユズの小さな膨らみを撫で回していた。

「んっ……♡」

乳首を指でこねると、ユズの肩が跳ねる。

赤面の理由は恥じらいから快樂へと変わり、身体を震わせていた緊張が抜けていく。

「美味しかったよ、ユズ。ごちそうさまでした」

食べ終わり、ユズにナプキンで口を拭いてもらいながら言う。

「お、お粗末様でした……先生。じゃあ……さっそく、今日も『対戦』、

「しましようか……♡」

ユズの小さな体が私に押し付けられ、薄くも柔らかな女体を意識すると同時、小さな手が私の股間を撫でた。

「まずは私がご奉仕しますね♡」

ゲームをしている時のように繊細かつ素早い手付きで、ユズがジツパーを下ろし私のチンポを取り出す。

あどけないユズの顔からは想像もつかない、指先のフェザータッチでチンポの根本から裏筋までをつう、と撫でられた。

5指を伸ばして縦に筒のようにした手で、ゆつくりと手コキが始まった。

手の平をマンコの一番奥のようにぐりぐり押し付けて亀頭を刺激し、手首をひねって指の動きにひねりを加え、膣のような卑猥な動きを実現している。

「じゅ、じゅ……じゅ、じゅ……♡」

ユズが普段は絶対に見せない余裕のある笑顔を浮かべ、我慢汁に塗れた手をさらに滑らかにうごめかし、あつという間に私の射精欲を引き出してくる。

私もユズの上手な手コキを楽しみながら、メイド服の上から乳首を摘んだ。

「んっ♡ せ、先生、乳首いじるの、お上手……です♡」

困ったように眉を下げて快樂に耐えながら、ユズが手コキの速度を早めた。

勝負を決めに来たユズを迎え撃つべく、ユズの小さな乳首を摘んでダイヤルのようにクリクリとひねって刺激する。

「ふっ♡ くっ、ううっ♡ し、しーこ、しーこ……♡」

ユズの声が荒く、手コキの手が震え始めるが……それでも頑張って甘ったるい声で囁き、私を射精に導こうと頑張っていた。

十分に勃起した乳首をしっかりとつまみ、強めに引っ張ってチンポのように扱く。

「あううっ♡ んくっ♡ あ、イク、イク……♡」

かくん、と限界とともに顔を下げ、全身を小刻みに震わせて、静か

に絶頂するユズ。

「はーっ♥ はーっ♥ うう、先生が集中して弄るから、私の乳首、すっかり弱点になってしまいました……♥」

再び顔を上げた時には絶頂で弛んだユズの顔があった。唇の端からはとろりとヨダレが垂れている。

「ふう、ふう……1ラウンドは取られてしまいました……続いで2ラウンドは負けませんよ♥」

絶頂で赤らんだ顔に、勝負師としての表情を幾分か戻し、にっ、と笑うユズ。

メイド服のスカートのポケットからゴムを取り出し、射精寸前のチンポに取り付けてくれた。

ユズは処女のときこそかなり痛がったが、今ではすっかりセックスに積極的になっている。

私とのセックスを対戦型ゲームと捉え、真面目に「攻略」を初めたのだ。

手コキもどんどん上達し、私を興奮させる媚びた甘い声での囁きも頑張つて習得した。

今日はメイド好きな私の弱点を突くべく、メイド喫茶で磨いたメイドスキルを使つてのセックスを仕掛けたという状況だ。

お陰で私はユズの手作りオムライスを食べることができた。健気で小柄なメイドというのも新鮮で、確かにチンポのイライラを増幅している。

私をベッドに押し倒し、馬乗りに跨つたユズがスカートの奥で股間にチンポを押し当てる。

「ふふ……♥ 先生の体力ゲージ、もう残り少ないですよね？ 私のオマンコで、すぐに射精させてあげます♥」

乳首で絶頂したユズは、ロングスカートの奥のぬかるんだマンコで正確にチンポを咥え込み、腰を落とした。

ユズの小柄な身体についた造りが小さくて締め付けの強いマンコが握りしめるようにチンポに刺激を加えてくる。

「あっふ……♡ ほ、ほら、どうです？ んっ、んっ♡」

自分の絶頂の直後なので、ユズの膣内はヒクヒクと痙攣し小刻みに強く締め付けてくる。

手コキで射精しそうになっていた私にはかなり効果的で、金玉が煮えたぎるように熱くこみ上げる射精感はもうすぐ耐えられなくなりそうだった。

「ほら、ほらっ♡ 先生♡ はあっ、はあっ♡ しゃ、射精、して、くださいっ♡」

ユズのロングスカートの中から、にちゃ、じゅぷ、と粘質な水音がくぐもってかすかに聞こえてくる。

硬さの取れた小さなマンコは、強い締りで男の精液を効率よく搾り取る名器に成長していた。

「ふう、ふう♡ この動き、好き、ですよね？」

ユズが腰を浮かせて、膣の入口付近で亀頭をつぼつぼと出し入れして刺激する。

締めりの良いユズがやると、フェラのように高刺激の膣コキとなり、精液が引っこ抜かれるように上がってくるのを感じた。

「うふふ♡ そろそろ、限界なんじゃありませんか？ そー、れっ……！」

ユズは一気に深く腰を落とし、竿を熱くヌルつく膣でみっちり締め付ける。

ぬっちや、ぬっちや、と水音を立ててチンポを根本から亀頭までまんべんなく刺激されると、さすがに我慢の限界だった。

ユズの細い腰を掴み、腰をくつつけて射精する。

「あっ♡ イクっ♡ すぐにイキますっ♡」

私の太ももにユズの脚が絡み、騎乗位の姿勢で一緒に絶頂に至った。

小さなユズの膣の絶頂締付けに逆らってする射精は、鼻の奥がツンとするほどの快楽をもたらす。

ユズはすぐに膣を締めたり緩めたりして、ポンプのように精液の流れを手伝うことによって更に快楽を与えてきた。



「ふふ……♥ どうですか？ こういうの、気持ちいいですよね？」

ほとんど同時に絶頂するのも、射精している私に追い打ちをかけるのも、ユズにとってはセックスの駆け引きの一つだ。

「これで1勝1敗、最終ラウンドですね♥」

セックスで汗をかいたユズが、にやりと勝ち気に笑う。

射精が終わったのを見計らって、ユズがつぷんとチンポを抜いて次のゴムを被せた。

普段なら気遣いの言葉の一つも言う所だが、最終ラウンドのユズは次のセックスのことしか考えていない。

「それじゃあ、次は私が責めさせてもらおうかな」

私は体を起こし、ユズにキスした。ユズはすぐに私の首に抱きつき、自分から舌を絡めてくる。

ベッドを転がり、今度は私がユズの上になる。

ユズのロングスカートをペろんとめくって、股間を露わにした。

「うう……恥ずかしいです……♥」

自然に恥じらってみせるが、その目の奥の光は強く、私の興奮を煽って射精させようという意思を感じる。

もちろん私は別に負けてもいいので、ユズの媚び媚びな態度にチンポを膨らませ、スジだった陰唇がぷっくりと充血して小さく花開いたマンコに押し当てた。

イツたばかりのマンコが、熱々の粘膜で私のチンポを歓迎してくれる。

ヒダは少ないがとにかく締めりが良く、精液を絞るのに適したユズのマンコはなかなか手ごわい勝負相手ではあった。

「はっ、あ、あああ……♥」

ユズもリラックスした大股開きで、心地よさそうにチンポを飲み込んでいく。

めくれ上がったスカートの下から現れたほっそりとしたお腹の中にチンポが全て収まった。

「ぎ、動くよ、ユズ」

「はい、負けませんよ、先生♥」

ニツコリと笑うユズの細い腰を掴み、ズルズルとチンポを引き抜く。

「ふっ……♥」

ユズの腹筋と太ももに力がこもり、ぎつちりとチンポを締め付けてくる。

責めの姿勢を崩さないユズに、私も全力でユズをイカせるべく天井側の膣壁をカリで擦るように腰を突き出した。

「はあんっ♥」

締め付けを強くするというのは刺激が強くなるということであり、格ゲーで言えばインファイトで短期決戦だ。

ぞりぞりとカリを膣の締めまりで刺激されると同時にユズのGスポットも強く刺激され、確実に絶頂へと近づいている。

一突きごとに精液を吸い出されるような、全力の締め付けをこらえながら腰を振るう。

「ふひ、ふひい……」

しかし、インドア派の哀しさかユズの体力は早々に尽きてしまう。私も体力のある方ではないのだが、ユズは常に下腹部の筋肉に力を入れていたので疲労度合いはより激しい。

マンコが脱力で弛んだ隙について、柔らかなGスポットと子宮口をグリグリと突いた。

「あうんっ♥」

一際大きい声でユズが善がる。

ユズは思わず上がってしまった顎を戻し、苦笑のように顔をしかめて快楽をこらえ、またマンコを締め付けてきた。

しかし、私の膣開発で感度の上がってしまったユズに崩れた後の立て直しは困難だ。

ユズの細い脚を片方上げさせ、抱きかかえて角度を変えて突く。

「ああっ♥　せんせ、そこ、そこだめですっ♥」

最近のユズのお気に入り角度で一番奥を突くと、意図しない膣のヒクつきが連続して発生する。

「だめっ♥　そこ、弱い、からあ♥　あ、あっ♥　ま、負けちゃう♥

また先生のセックスで負けちゃう♥」

悔しさをにじませながらもユズの声は甘く高くなり、こらえきれない絶頂が迫って来ているのを感じる。

健気にも膣の締め付けを諦めないユズの抵抗により私の射精も確実に近づいているが、耐える体勢になってしまったユズのマンコはもう突き放題で、陥落は時間の問題だった。

「ふっく♥ ああ、い、イキませんっ♥ まだ、まだイキませんからっ♥」

ユズが横寝の体勢でシーツをシワになるほど掴み、ズコズコと突かれながら絶頂を耐える。

興奮でぶっくりと膨らんできた子宮口にコリコリと龟头をこすりつけて最後の追い込みをかけた。

「あゝーっ♥ いっく♥ いく♥ いくいくいくっ♥」

眉を寄せて目をぎゅつと瞑り、どうしようもないほど激しい絶頂にこらえきれず大声を上げるユズ。

握りしめるような強い締め付けに耐え、最後のひと押しとしてクリトリスをピンと指で弾いた。

「はうっ♥ んっぐ♥♥♥」

がくん、がくん、と全身を大きく痙攣させ、ユズが先に絶頂する。

「出すよ、ユズ」

勝敗が決してから私もユズの奥深くで射精した。

「つか、はっ♥ はっく♥ ふ、う、うううう……♥♥」

限界を超えて堪えたため、ユズの絶頂も深い。

呼吸もままならない様子でまぶたをピクピクと痙攣させてハイローを明滅させる本気絶頂を1分以上も続けていた。

そんなユズの膣を存分に堪能させてもらい、私はアツアツの膣に揉まれながら一滴残らず射精する。

ユズの白い腹がヒクヒクと痙攣し、ゴムに隔てられた私の精液を子宮に取り込もうとうごめいているのをゆったりと眺め、勝利の射精を楽しんだ。

「はふう……また負けちゃいました……♥」

「お疲れ様、ユズ。すごく上達したね」

汗だくになったメイド服を脱ぎ全裸になったユズを抱き寄せ、ベッドの上でただ触れ合って添い寝する。

「えへへ……なんだか、セックスの感覚が掴めて来た気がするんです。……あの、先生。も、もう一戦、お願いできませんか……？」

ユズの若い性欲はまだまだ底なしのようだ。

返事を待つが早いか、身体を起こしたユズのポニーテールがさらりと揺れる。

ユズは四つん這いで私の身体の横から近づき、私の股間へ顔を近づけた。

「ちゅっ♥ ちゅるっ♥ ちゅば、ちゅば……」

ユズは半勃起で汁を垂れ流していたチンポを手に取り、優しく口付けて舌で舐め回し、掃除と勃起を促すフェラを始めた。

ためらいなくチンポを喉まで飲み込み、口全体を使つて体液を舐め取る。

ユズの口の暖かさと小刻みに擦り付けられる舌の刺激で、チンポはすぐに勃起を取り戻す。

「本当にフェラが上手になったね」

メイドブリムを外したユズの頭をゆつくりと撫でると、ユズはチラリと横目で私を見てから恥ずかしそうにひよつとこ顔でフェラを続けた。

「ちゅぽっ♥ んちゅっ♥ ちゅく、ちゅく、ちゅく……♥」

照れ隠しのように目を閉じ、フェラの激しさを増すユズ。

亀頭を舌で常に刺激し、口をすぼめて頬の内側の粘膜をマンコのようにつけて竿を満遍なく刺激する技巧は、C&Cのアカネやアスナも一目置いている。

射精したばかりのチンポも我慢汁を垂れ流し、着実に金玉から精液が昇ってきているのを感じる。

「ちゅるっ♥ ちゅるるるるっ♥ ちゅぽっ♥ んぽっ♥」

唇からチラチラと舌先を覗かせながら派手な音を立てて亀頭を舐め、吸い立て、ユズが自分の口をマンコ扱いして精液を絞ってくる。亀頭をざらついた舌で舐めていた所から不意打ち気味に鈴口に硬くした舌先をねじ込まれ、瞬間的に射精感が限界を超えてしまった。「ううっ」

私はうめき声とともに、ユズの口内に射精してしまう。

「んふ……♥ ぐくっ、ぐくんっ♥」

鼻の下を伸ばして口を突き出した卑猥なひよつとこ顔で精液をすべて飲み込むユズ。

いつもと違ってポニーテールのためよく見える可愛らしい耳に指を這わせ、たっぷりと精液が詰まった頬を撫でた。

「ふうう……♥」

ユズがうつつとりと目を細めて精飲の余韻に浸っている。

四つん這いの小さなお尻が震え、折れそうに細い太ももに愛液が一筋垂れて来ていた。

「1ラウンドはユズの先制だね」

そう声をかけると、ユズはハツと気を取り直し、ハの字に眉を下げて謝ってきた。

「ご、ごめんなさい……！ 先生に勃起して頂くだけのつもりだったのですが……」

「射精するまでチンポしゃぶりたくなっちゃったんだ？」

私の指摘に、ユズはセックスで絶頂した時よりも恥ずかしそうに赤面した。

「あう……はい……♥ 先生が、私のフェラテクで気持ちよくなってくれるのが、嬉しくて……つい……♥」

すっかりセックス大好きになったユズを見て、私はニツコリと笑みを浮かべた。

「ユズがセックス大好きになってくれて嬉しいよ」

「だ、大好き、とか、そういうの、では……あうう……ある、かもです……♥」

全裸で苦笑するユズの乳首はぷっくりと勃起して、まだまだセック

スしたいと無言の主張をしている。

「それじゃあ、ユズも続きを早くしたいだろうし今度は後ろからやろうか」

小さなユズのお尻を撫でながら、四つん這いのユズの後ろに移動すると、恥ずかしそうに困り笑顔を浮かべながらユズがマンコを拡げて迎え入れてくれる。

自分でゴムを付けてユズの後ろに膝立ちになると、ユズはくいつと尻を上突き上げてマンコをよく見せてくれた。

「どうぞ、先生……♡ ラウンド2、ファイトです♡」

造りの小さな、人形めいたマンコがぱくぱくとチンポ欲しそうに開閉している。

私のチンポの太さにぽっかりと開いた膣穴に、つぶつと簡単にチンポを挿し込んだ。

バックで見下ろすとユズの身体は本当に小さく華奢に見える。

そんなユズが私のチンポを受け入れて艶めかしく身体をくねらせている光景が射精したばかりのチンポをイライラさせ、全力の勃起を取り戻させた。

きゅつと小さなお尻を掴み、尻たぶを開いて可愛らしい尻穴を親指でクイクイと伸ばす。

「あつ♡ そ、そこはまだ、恥ずかしいです……♡」

ユズはやんわりと抗議するが、その声は甘く膣もウズウズと刺激への期待でわなないている。

たつぷりと漏れ出た愛液を指につけ、ユズの肛門に親指をズツポリとハメながら腰を振った。

「あ、うっっ♡」

ユズの肛門が親指をぎゅつちりと強く締め付け、ざらりとした腸壁の感触を指先で味わうと、膣の方も締めまりが強くなった。

「ん？ ユズ、これ気に入った？」

「ち、ちがっ♡ あ、うっっ♡ うんっ♡」

肛門に更に深く指を沈める。ほとんど根本までねじ込むと、ユズの善がり声が低く、ケダモノのように腹の底から漏れ出るような気持ち

よきそなものになった。

「でもユズの声、気持ちよさそうだよ」

「だ、だって、え♥ お、お尻のあなっ♥ ほじられっ♥ ながら、なんて……♥ は、はずかしい、です♥ うっっ♥」

ぱん、ぱん、と腰の振りを強くして、直腸を親指でグリグリとかき回すとユズの声がどンドンセックスに没頭した発情雌のものになっていく。

「ラウンド2は私がもらったかな？」

「ああっ♥ だめ、だめえ♥ お尻ぐりぐりするの♥ 気持ちいい♥ 先生ばかり私の弱点見つけて、ずるいですう♥」

無防備にお尻を突き出してマンコもアナルも好きにさせてくれるユズが、当然のように快楽に屈した。

「うっっ♥ い、いっくっ♥ うっっ♥ おっっ♥ おっっ♥ ううううーん♥♥」

腹の底から気持ちよきそうな声を上げ、ユズが絶頂した。

「ふう……ふう……ふう……♥」

ユズが絶頂の余韻から降りてくるのを待って、声をかける。

「さ、ラウンド3と行くこうか」

ぬぷんと肛門から指を引き抜き、ユズの身体を上から押しつぶす。

「やんっ♥ せ、先生のチンポ……ますますカチカチになって……ピッチです……♥ ど、どうぞ、ラウンド3、ファイトです♥」

うつ伏せにピッタリとくっついた寝バツクの体勢になって、汗だくのユズの首筋に顔を埋めながら腰を振り始める。

密着する面積が大きいため、ばふっ、ばふつと大きな音を立てながらのセックスとなった。

「あっ♥ ああっ♥ い、良いところ、当たってます♥」

ユズがことさらに甘い声を上げ、私の興奮を煽ろうとする。

「さっきのほうが良い声出てなかった？ お尻の方にチンポ入れたほうが良い？」

耳元でそう囁くと、マンコがギュツと締まる。

「うう……イジワルです……♥ あ、あの声を先生に聞かれるの、恥ず

かしいのに……♡ お、オマンコもちゃんと、気持ち良いですから……♡ 今日、こっちでお願いします……♡」  
セックスの最中に涙目をお願いされると、普段とは違った興奮がある。

私に顔を向けてきたユズにキスをしながら、奥をえぐるように腰を振った。

「はっ♡ あっ♡ 奥っ♡ 奥、すきですっ♡」

私と舌を絡めながら、うっとりとした声を上げ、マンコを的確にきゆうきゆうと締めてくるユズ。

ユズは押しつぶされながらも小さなお尻をクイクイと上げ、チンポの刺激が強くなるように腰を振ってくれている。

「んっ♡」

私のチンポが奥をえぐるタイミングを見計らって思い切りマンコを締められ、一気に射精感が増す。

「あっ♡ うっ♡ ああんっ♡」

夢げでありながら貪欲なユズのマンコを必死で貪り、二人で必死に相手をイかせようと気持ち良い所を責め合う。

ユズの甘ったるい汗の匂いが濃密に漂い、マンコがますます熱くお湯のように蕩けているのを、金玉から昇ってくる精液を抑えこみながらひたすら突く。

「だしてっ♡ だしてっ♡ だしてっ♡ いっちゃ♡ いっちゃ♡ っ♡」

性欲をそのまま音にしたような、チンポに響くユズの誘惑に浸りながら、絶頂寸前のユズの膣奥をひたすらに亀頭で刺激する。

「うっ♡ うううう……♡ いく、いく……♡ が、がまん、しなきゃ……♡」

ユズの腰が小刻みに、ヘコヘコと上下に揺れる。

私の竿を狭い膣がぎゆうぎゆうと扱き、耐え難いほどに射精欲をあまり……

「あ、ああああ……♡♡♡」

ユズが一際大きい声で絶頂すると同時に、私も射精した。



必死で我慢していたのが溢れ、腰が震えるほど射精の快楽が強まっている。

ユズも深い絶頂に達しているらしく、二人して指一本動かさずにピツタリと種付けの姿勢で固まっていた。

痙攣する膣が射精するチンポに精液の排出を促し、ユズの小さなマスコの奥はゴムで膨らんだ精液で埋め尽くされる。

ユズの汗に濡れた首筋、耳、襟足の辺りにキスし、ユズを絶頂の余韻からゆっくりと下ろしていく。

「はふ……♡ す、すごかった、です……♡」

首筋を差し出してキスさせてくれていたユズが、力なく呟いた。

「勝負は引き分けかな？」

「くす……♡ はい、先生と私、一緒にイっちゃいましたね♡」

ずるんと奥深くからチンポを引き抜き、ユズと並んで寝転がると、ユズは丁寧な手付きでゴムを外してくれる。

そのたっぷりと精液の詰まったゴムをうっとり眺めて、ユズは笑顔を浮かべた。

「今日も、たくさん出してくださいましたね……♡」

「うん、ユズのマンコがすごく気持ちよかったからね」

「えへへ……♡ 勝率も、少しずつ上がって来ましたし、これからも沢山セックスしてもっと上達したいです♡」

さっきまで汗だくで必死にセックスしていたのに、もう次のセックスの事を考えている。

本当に良いセフレとして育ったと私も笑顔になった。

「でも、先生にばかり私の弱点を見つけれられて、なんだか不利になってる気がします……」

「ユズも私の乳首やお尻を責めてみる？」

「ち、乳首……お尻……♡ そ、そう、です……♡ 先生さえよろしければ、トレーニングモードで、たっぷり……シてみたいです……♡」

次々と貪欲に性技を身につけようとするユズの頭を撫でて、お互い汗まみれの身体を密着させる。

今日の「対戦」もまだまだ終わらないようだった。

## 本番さながらの熱心な訓練（ミヤコ）

「……先生が、多数の生徒と性交渉を行っているというのは本当でしょうか？」

見渡す限りの海。

誰も来るはずのない漁船の船室で、私は腕を拘束されて身動きが出来ない。

海に照り返す日差しで後ろから照らされるミヤコは、揺れる瞳で私の顔をじつと覗き込んでいる。

ミヤコが船上での人質救出訓練を行うということで私が人質役としてやってきたわけだが、船上訓練出来るという話に浮かれたミヤコが私と2人きりで船に乗ってしまったため、敵役となる人が誰も居なくなってしまうた。

普段なら……というか誰でも気づきそうなものだが、それほど楽しみにしてくれたということだろう。

「人質救出作戦はまたの機会にして、捕虜を護衛しながら連れ帰る脱出訓練に切り替えます」

ということと脱出訓練に付き合った。

のんびりした海の景色の中、ミヤコは真剣に訓練に取り組み……一通りやり終えた所で船室で休憩となった。

2人で一緒に買った、可愛い水着を着たミヤコが船室の壁と一体化した長椅子に座る私に寄りかかって来て、控えめながらも柔らかな乳房が押し付けられる。

チンポがイライラしてきたが、それ以上に腕が痛い。

「あの、ミヤコ？ 休憩なら拘束を解いてくれると嬉しいんだけど……」

窓を背にしたミヤコが、無言で私に顔を近づける。

綺麗な瞳が感情を押し殺したように揺れ、艶やかな唇が言葉を紡ぐうと微かに開いて、閉じる。

「……先生が、多数の生徒と性交渉を行っているというのは本当で

「しょうか？」

じいつ、と虚言は許さないという強い光を湛えたミヤコの瞳が、私の瞳を覗き込む。

「ど、どうしたの、突然？」

「モエが、シャーレビルのハッキングを定期的に行っているのですが、行わないで欲しい。」

「夜に先生と地下に入り、朝まで出てこない生徒が複数観測されています。これについて何か釈明はありますか？」

「うう……ありません……」

「では、先生は本当に、複数の生徒と性交渉を行っているのですね？」

ミヤコはくわつと目を見開きながら、身体を密着させて触れるほどの至近距離から私と見つめ合う。

「は、はい、そうです……」

「どうして……」

「せ、生徒の可愛い所が見たかったので……」

ついに文字通りお縄になってしまった。もはや万事休す、という事でせめて正直に答える。

「そうではありません！」

至近距離から怒鳴られ、肩がすくんだ。

「どうして……私を誘っていただけなかつたのですか!？」

じわり、とミヤコの目に涙が浮かぶ。

「たしかに、私は……いつも公園でデモをしているし、普通の生徒より清潔でないと思われるかも知れませんが……他の生徒と違って、先生のお呼びした時に24時間即応することが出来ます。他の方よりも先生のお役に立つ用意は……あります。それとも……私のような身体では、つまらない……でしょうか？」

ミヤコの繊細な指が、いつの間にか私の背中に触れている。

私の胸板にミヤコの水着の身体が押し付けられ、チンポがイライラする。

「ええと……まあ、ミヤコ達はたいいてい4人でいるから……誘いづらくて」

「では、2人きりの今なら……大丈夫、ということですよね？」  
ミヤコはじわじわと私の身体を押し倒し、のしかかってくる。

「いたたた……ミヤコ、まずは拘束を外してくれないかな」

「う、うう……それは、わかっているのですが……こんな事までしておいて、外した後に先生に拒絶されてしまったら、もう一生立ち直れませんか……それが、怖くて……」

しゅんと俯いてしまったミヤコに、微笑みかけた。

「大丈夫だよ、ミヤコ。そんなに怖がらせてしまってごめんね。もつと早く誘えば良かったね」

「……こんな、強姦のような真似をした私を……赦してくださいるので  
すか？」

「もちろん。……そうだ、だったら、ミヤコから私にキスをしてみて」  
「キツ、キ、キスですか!？」

沈鬱にしていたミヤコが、純粋な驚きで目を見開いて赤面する。

「うん。私が本当にミヤコとセックスしたいと思ってるのが伝わったら、ミヤコの怖さも和らぐかと思って」

「ごくっ……キ、キスを……動けない先生に、キスを……」

背中に触れる指先が、感触を確かめるようにゆっくりとうごめく。

後ろ手に縛られた上で仰向けに押し倒されているのでかなり痛い  
が、水着のミヤコが眼の前でそつと瞼を伏せて唇を突き出して来る光  
景に集中した。

「んっ……♡」

こうして、ミヤコは誰も来ない船の上、レイプ直前のようなシチュ  
エーションでファーストキスを済ませた。

デモで公園ぐらしをしているとは思えないほどに、押し当てられた  
ミヤコの唇はぷるぷると心地よい感触がする。

緊張で固く閉じた口に、舌を潜り込ませた。

「ふうっ!？」

処女のミヤコはまさか舌が出てくるとは思っていなかったのだろ  
う、身体をビクンと震わせて驚いたが、唇を離さずに私の舌も受け入  
れる。

催促する前からミヤコの口は開き、チロチロと遠慮がちに私と舌先を触れ合わせてくれる。

「んっ……ちゅっ♥ れるっ♥」

だんだんと緊張が抜け、私の舌を吸い、舌を伸ばして絡ませて、ディープキスが始まった。

ちゅぷ、ぴちや、と微かな水音を鳴らしながらミヤコが積極的に唇を押し付けてくる。

上にのしかかったミヤコの身体から遠慮が薄れ、しなやかで柔らかい身体がハッキリと押し付けられ、水着の奥の乳首の勃起を感じた。それと同時に腕の痛みも増した。

「……どうかな、ミヤコ？ 私も本当にミヤコとセックスしたいって、信じてくれた？」

そつと唇を離し、額と額をくつつけたまま囁く。

ミヤコはディープキスにうっとり夢見心地だった表情からハツと気を取り直して、取り繕うように視線を泳がせた。

「は、はい、もちろん。今すぐ解かせていただきます……」

私を素早く起き上がらせ、さつと縄を解く。

訓練の間縛られ続けていたので固まってしまった気がする肩をぐるぐると回した。

私は自分のカバンからタオルを取り出し、尻に敷く。

「ほ、本当に、申し訳ありませんでした。このお詫びはいかようにも……」

水着姿で小さくなるミヤコを抱き寄せ、私の膝に座らせる。

「じゃあミヤコには、たつぷりとセックスの相手になってもらおうかな」

無遠慮に、清楚可憐な紺のワンピース水着の股間に手を伸ばした。

「あつ♥ は、はい……♥ 先生の……セックスのお相手、務めさせて頂きます♥」

訓練で少し汗ばんでいる股間を手の平で撫で回すと、ミヤコは顔を真っ赤にしながらも脚を開いて触りやすく受け入れてくれた。

ぐつ、と手の平を押し付けると、サラサラとした水着の布の裏にヌ

ルリとした女陰を感じる。

「あっ♥」

ミヤコは押し殺したような、控えめな声で快楽を伝えてくれた。

「ここなら誰にも聞こえないんだし、声を出していいよ」

「で、でも……先生にはしたくない声を聞かれるの、恥ずかしくて……」

ミヤコは顔をそむけたが、白い首筋は紅潮している。

胸元を覆う薄いフリルの下に手を滑り込ませ、撫でるように胸を揉んだ。

「はんっ♥」

「ミヤコの気持ちよさそうな声、もつと聞きたいな」

そう言いながら、股間に指を食い込ませてミヤコのクリトリスを水着の上からグリグリと刺激した。

「あっ♥ はっ♥ あああっ♥」

股間への刺激でミヤコの細い脚が閉じ、私の手を軽く挟んだ。

「せっ♥ 先生っ♥ そんなに、強く、されますと……♥ あっ、あっ♥」

海の波で揺られる船の上、更に私の膝の上でミヤコがくねくねと揺れる。

ミヤコを抱き寄せながら腋に顔を埋め、胸と股間を愛撫してじつくりと性感を引き出していく。

「そ、そんな、所……♥ きたない、です、から♥」

「ミヤコの濃くていい匂いがするよ。もつと声聞かせて」

水着の下で勃起してきたクリトリスと乳首をつまみ、シコシコと扱き立てる。

「あ、っ♥ ふっ♥ うう、うーんっ♥ ゆ、ゆるしてっ♥ それ、つよすぎますっ♥」

我慢の限界を超えた快楽に、ミヤコが大きな声で喘ぎ声を上げた。水着の身体から力が抜け、私にしなだれかかるように身体を預けてくるミヤコの腋をぺろぺろと舐め回す。

「ああっ♥ はあっ♥ はあっ♥」

閉じていた脚が、快楽を受け入れるにつれて開き、あっという間に

180度近くになった。

布の薄い水着は勃起乳首とクリトリスが浮いてしまうほどで、指先でカリカリとひっかくことさえ出来る。

ミヤコは肘を上げて後ろにある私の首に抱きつき、背中を支えにして腰をへこへこと物欲しそうに振ってしまっている。

真っ赤な顔をしてギョツと目を閉じた本人は気づいていないのだろうが、可愛らしくいやらしい処女の愛欲の発露を楽しませてもらった。

元から体毛が薄いのだろうミヤコの腋は、つるりと滑らかな感触で薄い塩味がする。

ミヤコの水着の股間を指先で撫でると、もう外に染み出すほどに濡れそぼっていた。

「もうこんなに気持ちよくなってくれたんだね。さすが、ミヤコはセックスでも優等生だよ」

「はあーっ♥ はあーっ♥ あ、ありがとう、ございます……♥」

絶頂寸前の快樂にさらされ続け、ミヤコの意識は朦朧といていた。ぱっかりと股を開いて私にもたれ掛かるだらしない体勢で、トロンと下がった目尻をして口を半開きになっている。

普段キリつとしたミヤコの痴態に私のチンポのイライラも最高潮に達している。

「じゃあ、次は私を気持ちよくしてもらえるかな」

ミヤコを隣に座らせると、私は水着を脱いで勃起チンポを晒した。

「わ……♥♥ これが、先生の……♥ そ、それでは、失礼しますね……♥」

脚に力が入らないように少しフラフラしつつも、ミヤコが私の前にひざまずきチンポをそつと握ってくれる。

「あ、あの……これは、どうすれば良いのでしょうか?」

我慢汁を垂らす亀頭をじっと見つめながら、ミヤコが尋ねてくる。

「まずは先っぽにキスしてみて」

「はい……♥♥ ちゅ、ちゅ……♥♥」

私が命じると、ミヤコは何のためらいもなく、むしろ愛おしそうに

目を細めて優しくキスしてくれた。

先程ファーストキスを済ませたばかりの唇を我慢汁に塗れさせるのを厭うこと無く、熱心に、愛を込めて、亀頭にキスの雨を降らせてくれる。

「……………」

興奮に頬を赤くしてニツコリと目元に恍惚の笑みを浮かべながら、可愛らしい唇を柔らかく押しつぶし亀頭に押し付けて吸い付き始めた。

綺麗な銀髪をポニーテールにした頭をゆつくりと撫でると、ようやく自分がチンポしゃぶりに夢中になっていたことに気づいたミヤコが照れくさそうに私の方を見て、目だけで笑う。

「とつても上手だよ、ミヤコ。そのまま口の奥まで啜えてみて。唇を内側に巻き込んで、歯が当たらないようにしてね」

こくん、としゃぶったまま微かに頷いて、唇を竿にくっつけたまま顔を沈めて行き、チンポを啜え込む。

「うっ……………」

「あまり無理はしないで良いよ」

喉奥に亀頭が触れ、ミヤコが眉をしかめてえずく。

ミヤコは申し訳無さそうに眉をハの字にして目礼し、どうすれば良いのかという風に見つめてきた。

「口をすぼめて頬の内側をくっつかけたり、舌で舐めたりして刺激してみて」

言うが早いか、すぐに実行してくれる。

「ぢゅっ♥ ちゆるっ♥ ぶっじゅっ♥ じゆるっ♥」

ミヤコの端正な顔がひよつとこフェラ顔に歪み、口の中で熱い舌が蠢く。

「ちゅっ♥ くちゅ、ちゆるるっ♥」

唾液を溜めた口の中で粘膜をぴったりとくっつけ、ややゆつくりと舌を動かすミヤコのフェラは、誰よりも丁寧で熱意に満ちている。

舌のザラつきをよく感じ取れる丁寧な動きが裏筋を的確に往復し、チンポがどぶどぶと我慢汁を吐き出した。



「そこ、気持ち良い所だよ。ミヤコは本当に覚えが早くて上手だね」

探り探りだったフェラのコツを素早く掴んだミヤコは、先程のように恍惚の笑みを浮かべてうっとりとしてフェラ奉仕に夢中になっていた。

形の良い小さな耳を撫でると、線のように目を細めてニッコリと笑みを浮かべ、舌を亀頭にクルクルと巻き付けて刺激を強めてくれる。

「んふうーっ♥ んふうーっ♥」

口淫に夢中になりすぎて口の端からはよだれが垂れ、鼻息が荒い。

いつも冷静なミヤコがこんなにも夢中になっている姿は年相応のようで、決して子供に教えてはいけない事でもあり、チンポのイライラを加速した。

「ミヤコ、すごく興奮しているね。乳首がこんなになってるよ」

生地が薄めだという水着の胸は、ハッキリと勃起乳首のポッチが浮いている。

「んっ♥ はふっ♥」

それに手を伸ばしてカリカリと刺激すると、ミヤコはひよつとこフェラを続けながらも恥じるように眉を下げた。

「そうだ、ミヤコも気持ちよくなって貰いたいし、そのままオナニーしてみてください」

「んんっ!？」

ひよつとこ顔で目を見開くミヤコを、それ以上何も言わず見つめる。

観念したミヤコは、蹲踞のような姿勢でおずおずと自分の胸と股間に手を伸ばした。

「ちゅるっ……っ♥ ごくんっ♥ んっ♥ んんっ♥」

流石にオナニー姿を見せるのは恥ずかしさのレベルが違うのか、涙目になって耳や首筋まで真っ赤にしながらか乳首をスリスリと優しく指の腹で撫で、クリトリスをぐっ、ぐっ、と指でリズムミカルに押しつぶしてちゃんとオナニーをしてきている。

「おお、ミヤコは普段そういう風にオナニーするんだね」

「……っ♥」

身を乗り出してミヤコの頭の直上から下を覗き込んで言うと、私が

腹に抱え込んだような格好になったミヤコの頭の方から息を呑むような音がして、つるりと滑らかな肩が跳ねていた。

「こういう動きかな？」

身体を戻し、ミヤコの愛撫する乳首とは逆側を、真似をして愛撫する。

「ふうーっ♥ ふふうーっ♥ ふふうーっ♥」

私を見上げるミヤコの目にはキラキラと輝く涙が浮かび、自分のオナニーと同じやり方で愛撫される羞恥と快楽で真っ赤になった表情は、恥ずかしいという訴えともつとして欲しいという欲求が混じり合い、酷くチンポをイライラさせた。

その顔に今すぐミヤコを犯したくなかった私は、ポンポンと頭を叩いて終わりを告げる。

「よし、そろそろセックスしようか」

「んっ……♥ あも、ぷはっ♥ はあ、はあ……♥ さ、流石に、恥ずかしかったです……♥」

真っ赤になった頬に手を当てて恥らうミヤコ。

「じゃあ、水着は脱いでね。せっかく可愛いのが伸びてしまったらいけないし」

「あう……♥ わかり、ました」

ミヤコは、震える手で肩紐を掴み、ぐいっと外にずらした。

少しだけ背けられた顔がまたいじらしく、ミヤコの視線がチラチラと私の顔と勃起チンポを行き交うのが楽しい。

水着を下におろし胸が露わになると、ミヤコはぎゅつと目を瞑ってそのまま腰の下まで手をおろした。

窓から明るい日差しが差し込む船室で、ミヤコの肌が新雪のように眩しい。

細い脚を通すため前かがみになると、目を閉じているために距離感がわからないのか私とキスをしそうな位顔が近い。

控えめな胸が真下を向き、ぽつちりと大粒の乳首が存在感を主張しているのもチラチラと見えて期待で我慢汗が垂れる。

ぺた、ぺた、と水着を脚から抜く時の足音とともに、ミヤコは私の

眼の前で一糸まとわぬ姿となった。

ミヤコは少し緊張で震えながらも、胸を張って手を後ろに回し、恥ずかしい所も余すところなく見せてくれる。

「ど、どう……でしようか？ 私の、身体……先生の、お気に、召しませでしようか……♥」

そつと目を開けて、期待と不安の入り交じる目で私を見つめた。散々愛撫した乳首は控えめな大きさの乳房に比べて大粒で、今すぐむしやぶりつきたい位だ。

薄い銀髪の陰毛が茂る股間は、外からの日差しに照らされてテラテラと愛液できらめいている。

思わず手を伸ばし、ほっそりとした腰の横に触れ、汗でぬめる柔肌を撫でた。

「綺麗だよ、ミヤコ」

「あつ……♥」

見つめ合いながらそう告げると、じわじわとミヤコの口角が上がり、笑みの形を取っていく。

「嬉しい……♥ 先生の、好きなように……抱いて、ください♥」

全身を汗でぬらりと輝かせ、乳首とクリトリスを固く勃起させた雌の媚態を晒しながら、ミヤコは恋する乙女のように朗らかに笑った。

そんなミヤコの小さく締まったお尻を掴み、引き寄せる。

「あつ……♥」

全裸のミヤコが一步踏み出し、眼の前に来た大ぶり乳首に吸い付いた。

「んっ♥ ふ、はああつ♥」

ミヤコは私の頭を抱きかかええ、乳首を吸われる快楽に悶える。

舌先で乳首を転がしながら、むにむにとミヤコの尻を揉み、滑らかな背中を撫で上げる。

鍛えた体幹の上に女の子らしく柔らかな脂肪の乗ったバランスの良い身体はどこも触っていて気持ちがいい。

ちゅぱ、と乳首を離し、また逆側の乳首を吸い立てた。

内股になって膝が笑っているミヤコの股間に指を滑り込ませ、熱く

潤んだミヤコのマンコに直接触れる。

「はんっ♥ あ、ああっ♥ 私、恥ずかしい所、先生の指がっ♥」

かすれるような高い声で、ミヤコが羞恥と興奮を伝えてくれた。

処女らしく綺麗なスジを保ったミヤコの大陰唇をぷにぷにと指でこね、愛液でぬかるんだ内部へと中指を沈ませる。

にちゅ、くちゅ、と水音が聞こえるほどにミヤコの愛液はたつぷりと滴っていた。

「ミヤコのこころ、すごく濡れてるよ」

「うう……♥ い、言わないで……♥」

ただの気弱な少女のように、鼻にかかった媚びるような涙声でミヤコが囁いた。

汗に濡れたミヤコの胸の真ん中に耳を当てて、ミヤコのとく、とく、という早鐘を打つ心音を聞き、細い体を抱きかかえるように腕を回して眼の前の乳首を指で弾く。

つぶん、とミヤコの膣に指が潜り込み、つるつると飲み込まれた。

「あつ、ああっ♥ 先生の、ゆび、太いっ♥」

処女にしてはスムーズに飲み込む膣に、慣れを感じて質問してみる。

「いつも膣にも入れてオナニーしてるんだ？」

「あうう……♥ だって、先生が、他の子とシてると思ったら……我慢できなくて……♥ 皆、一人になった時には自分で慰めてるんです……♥」

いじらしいミヤコに我慢の限界を迎えた私は、ミヤコの軽い身体を抱き上げて膝の上に座らせた。

「ミヤコ、入れるよ」

「あつ……」

もの問いたげな視線を返したが、数秒でミヤコはニツコリと笑顔を浮かべて頷いた。

「はい♥ 先生のお好きなように♥」

私にまたがるように膝立ちになったミヤコが、チンポに向かって腰を落としていく。

ぬちやり、と濡れそぼったマンコと亀頭が触れ合い、そのまま力をかけて押し付けられる。

勝手の分からないミヤコが股間を覗き込む素振りをし、私もチンポを手で持つて角度を合わせ、膣口へ導いた。

照れくさそうに私を上目遣いに見て微笑んだミヤコが、更に腰を落として挿入していく。

「はっ♥ あ、熱い……♥」

思わずといった感じで漏れるミヤコのつぶやきが興奮を煽る。

亀頭をぬっぽりと啜え込み、ミヤコが私の肩に手をおいて本格的に腰を沈めた。

処女のキツイ膣肉をかき分けて、奥へ奥へと侵入していく。

「おお、きい……♥ 先生の、すごく、お腹の中に存在を感じます……♥」

至近距離からミヤコのうっとりとした処女喪失顔を見つめ、愛おしさにその頬を撫でる。

目を細めて私の手に頬を擦り付けてくるミヤコをあやししながら、ぷりぷりとカチを刺激する膣ヒダに射精感を堪えた。

「んっ……」

すぐに行き止まりに当たり、ミヤコが私の手に愛おしげに頬を擦り付けながらも目に強い光をみなぎらせ、一息に腰を落とす。

「っ、く、う……」

ぷっん、とチンポに処女膜を破る感触を感じ、ずるんと一番奥まで飲み込まれる。

きり、とミヤコが歯を食いしばる音が聞こえたような気がした。

眼の前で苦悶の表情を浮かべるミヤコを抱き締め、そっと背中を撫でる。

「大丈夫、暫くこのままじっとしていようね」

「はい……すみ、ません……」

ふう、ふう、と耳元でミヤコが苦痛に耐える息遣いを聞きながら待つ。

波に揺られて少し動いてしまうため、膣ヒダとチンポがこすれる度

にミヤコが苦痛から私に強く抱きつき、勃起乳首が押し当てられた。ざざん、と波の音を聞き、光に溢れた大海原を見ながらミヤコと裸でセックスしながら抱き合っていると、いつまでもこうしていたいような気になってくる。

10分程もしただろうか、ミヤコが私の首元に頬を擦り付けて抱きつく力を強めた。

「先生……もう、大丈夫です。痛みは引きましたから……先生の好みに、動いていただければ……」

汗で少し冷えてしまったミヤコの身体をさすって温めながら、私は腰を並行に動かして膣肉の感触を確かめる。

ミヤコの膣奥はふっくらと柔らかかな膣壁でチンポを受け止めてくれ、熱い粘膜が撫でるように龟头に擦れる。

「ん……」

少しの動きだけで察してくれたミヤコが、自ら腰をグラインドさせて積極的に膣でも奉仕を始めた。

ぎゅ、と私の頭を抱えるように抱きついて固定し、くい、くい、とぎこちなく平行に腰をくねらせて膣で揉むようにチンポを刺激する。

ねちや、ねちや、とたつぷり分泌された愛液が攪拌され、波の音とのセッションを奏でる。

「ふう、ふう……」

ミヤコの吐息も少しずつ苦痛が抜け、先程の恍惚とした熱を取り戻しつつあった。

へこへこ♥ とミヤコの腰の動きが滑らかになってきたのを見計らって、軽く膣奥を小突く。

「あうっ♥　せ、先生……　急に動かれては、びっくりしてしまいました……」

「ミヤコの可愛いダンスを見ていたら我慢できなくて」

私もミヤコの細い腰を抱きかかえ、上下に軽く動かしてピストンを始めた。

「あっ♥　あああっ♥　ひ、引っ搔いて、ます♥　これ、刺激、つよ……」

私に突き上げられながらへこへこと腰を前後に振る動きを止めず、ピストンに複雑な動きを加えて快楽を貪るミヤコ。

ぎゅ、ぎゅ、とチンポを引き抜いてカリで膣を刺激する度に、ミヤコの膣は締まる。

まだ傷が痛むかも知れないので処女膜よりも奥を重点的に責めたが、ミヤコの好みにも合っていたようだった。

「あ、ああ♥ わ、わたし、初めてで、こんな♥」

「ミヤコが気持ちよくなってくれて、私は嬉しいよ。もつと気持ちよくなっている所、見せて欲しいな」

ぴん、と勃起したクリトリスをぐ、ぐ、とリズムカルに押すミヤコのオナニーと同じ動きで刺激し、更に苦痛を和らげる。

「せ、先生♥ 同時に、されたら♥ も、もう、私……♥」

切羽詰まったようにかすれた声で啼くミヤコは、それでも腰の振りを止める事はなく私の腰の突き上げも相まって膣の締めりもギチギチに強まる。

「あ、く、は、うううう……♥♥♥ん、ふうううう……♥♥♥」

喉の奥から漏れるような可愛らしい絶頂の呻きを耳元で聞かせてくれながら、ミヤコが初めての膣イキを経験する。

「出すよ、ミヤコ」

可愛らしい耳たぶを唇で食みながら、ミヤコの膣奥に思い切り射精した。

「あ♥ あ♥ 先生♥ 先生♥ 先生♥」

甘ったるい声で、ただ私を呼ぶミヤコに、たつぷりと子種を注ぎ込む。

ぎゅう、とミヤコの脚が私の身体を拘束し、ぐりぐりと股間がこすり合わされて一番奥に精液を導こうと夢中になっている。

「先生……♥ 好きです……♥ お慕いしています……♥」

決して子種を肚に飲み込みながらすることではないが、乙女の愛の告白はそれでもなお清らかだった。

ミヤコの愛情が金玉を漲らせ、清らかな乙女の子宮にどくどくと精液を注ぎ込み続ける。

首筋にミヤコがキスをして、ちゅ、ちゅ、と音を立てて吸い立てていた。

「先生……♥ 先生……♥」

子作りの快樂にどっぷりと浸るミヤコに誰も居ない船の上でたっぷり種付けを楽しんだ。

「避妊薬……ですか？」

膝の上でぽーつと惚けているミヤコに、ペットボトルと避妊薬をもたせた。

「……少し、残念ですが……仕方がありませんね。子供を育てながらデモをするのは現実的ではありませんから」

こくん、と薬を飲んだミヤコは名残惜しそうに下腹部をさすった。

「でも……嬉しいです♥ 私は、先生を満足させる事ができたのですね」

首筋に珠のような汗を滴らせながら、ミヤコはスツキリとした笑顔を浮かべた。

乙女から女へと成長を遂げたその笑顔に、私のチンポが反応する。

くすり、と笑顔に性欲を混じらせたミヤコが、目を細めて私に顔を近づけ……そのまま唇を奪う。

ミヤコから舌を入れ、ねつとりとしたディープキスをする事で勃起を促し、また膣奥にチンポがぶつかる感触とともに唇が離れた。

「まだ、私の事を求めてくださるのですね♥ 先生お望みの通りに、何度でも使ってください♥」

ニツコリと細めた目の奥に、粘着く女の性欲をにじませるミヤコの笑顔に、セフレにしてよかったと私も笑顔になる。

訓練終了の予定時刻まで、ミヤコと激しくキスしながら何度も膣内射精して楽しく過ごした。

——先生、聞きましたか？

——村の西海岸から、歩いていける離島があるそうです



——西側の海岸は水深が深いので  
——潮が引くと、島につながる道が現れると聞きました

セフレにした途端にミヤコからのお誘いがあり、村にある海の道へと向かった。

「あつ、先生……！」

待ち合わせ10分前に到着すると、既にミヤコが待っている。

「早かったね、ミヤコ」

「そ、それが……」

ミヤコは、もじもじと内股を擦りつけて頬を赤らめた。

「先生と2人きりになれると思ったら、我慢できなくて……！」

ミヤコはねつとりとした笑みを浮かべて、するりと間合いを詰めて腕を絡めて来る。

「一日に二度、海に道が現れるなんて不思議な現象が起こるなんて、とても神秘的ですよね」

「うん、面白い光景だよね」

むにゆり、と私の腕に強く胸を押し当てて、ミヤコは海の道を眺めた。

「先生、潮が引いている時間はそう長くありませんから……渡ってしましましょう」

海の道をミヤコとくつついて渡っていると、水着の下でミヤコの乳首が固くシコって行くのを感じる。

「♪……」

軽やかに鼻歌を歌うミヤコに導かれるように、誰も居ない離島へとたどり着いた。

そして、自然豊かな離島で花を鑑賞して帰ろうとすると、既に海の道は消えていた。

「先生……♡　ここなら、誰もきません……♡」

薄笑いを浮かべたミヤコが、肩紐をそつと外して水着を脱ぎ捨てる。

島に棲む沢山のウサギに見守られながら、浜辺の木に手をつかせてミヤコを後ろから犯した。

ポニーテールにしたミヤコのうなじが色つぽく、白い首筋に何度もキスをしながら膣奥を突き上げる。

「うっっ♥んっっ♥」

野生の獣のように2人で全裸になって、10時間ほどもセックスに励む。

海の道が現れる頃には、ミヤコの小さなバッグは色とりどりの使用済みゴムで溢れ返っているのだった。

「はあ、はあ……♥先生……♥私の身体でしたら、いつでもご使用になれますので……これからも、よろしくお願いいたしますね……♥」

目覚めてしまった性欲の大きさを感じさせるねっとりとした笑みを浮かべるミヤコの頭を撫で、流石に煙も出ないチンポをたっぷりとお掃除フェラしてもらってから帰路に着くのがだった。

## 深い絶頂、浅い呼吸（サキ）

最近、サキに連日海産物をごちそうして貰う……ために呼び出されて結局捕れず、採取した海藻類を食べている。

「ううう、こんなはずでは……」

水着姿でしゃがみこんで背中を向けているサキは、当然ながらお尻が丸出した。

ポタポタと海水がお尻や股間から滴り、サキの引き締まったお尻が夏の強い日差しに照らされて私の目にまぶしく飛び込んでくる。

「まあまあ、サキ。私はサキと一緒にご飯を食べられて嬉しいよ」

びくっ、と肩を跳ねさせて、サキが振り返る。

「だから、そういう事をいきなり言うな……!」

ふいっとそっぽを向き、小声で

「ドキドキしちゃうだろ……ただでさえ、私は……のために……」

しゃがんだまま太ももと腕の中で呟いた内容は分からなかった。

ただ、サキが私とセックスしたがってくれているという事は良かったのでチンポがイライラしてしょうがない。

「はあ、今日はもう諦める。方法と道具が悪いんだ。次こそは先生に美味しい海の幸をごちそうするからな」

「うん、楽しみにしてる。じゃあお昼を食べに行こうか」

私が差し出した手を、おずおずと握るサキ。

「……うん。うん、ごちそうになる……」

海に潜っていたサキの手はひやりと冷たく、温めるためにニギニギと指を動かすと、サキも私の手を握り返してくれた。

漁村に唯一ある定食屋に近づくと、サキがそつと手を離して私から一歩遠ざかる。

「別に手を離さなくても良いのに」

「ば、ばっ! 人の目のある所で何言ってるんだ……!」

顔を紅くして、軽くグーパンチで殴ってきた。

裸の膝と膝を突き合わせて、今日も持ち込みの昆布を味噌汁にしてもらってご飯を食べる。

「先生、昼からは干潟に行ってみないか？ 許可はいっしょにもらってるんだ」

サキの言う所によると、一日に二度浅瀬が砂浜になり色々と捕れるのだという。

当然快諾して、2人で潮干狩りとなった。

「しかし……その格好のままというのはな」

「なにかまずいことでもあった？」

完全に普段着の私と、水着で素足のサキ。

「サキが頑張ってるのを見守るつもりだったんだけど」

「はあ……まあ、いいか。危ないから動き回っちゃだめだぞ」

そう言って、サキが干潟で獲物を漁り始めた。

「干潟では足を取られると危ないから、こうやって中腰で移動するんだ」

サキが実演してくれるのだが……中腰とは脚を開いて腰を落とすということであり、サキのお尻が突き出され水着がパツンと伸びている。

「どれ、この穴を……おお！ 捕れた！ 今までの苦労は何だったんだ……」

前かがみになって干潟の穴を探るため、お尻が更に突き出されて股間までもチラチラと見えるアングルになる。

夏の強い日差しはサキの水着に締め付けられる柔らかかなお尻も、ほんの少しマン肉で盛り上がっているように見える股間の凹凸も、くつきりと写し出していた。

絶対今日サキとセックスするという決意を固めながら見守っていると、サキがまたも獲物を取り上げた。

「おおー……なんだこれ？ 先生、これがなにか知ってるか？」

そういうサキは、手に赤くてヌルヌルと動く棒状の生き物を持ってている。

2人してそのチンプミたいな生き物に首を傾げていると、近くにいた村の人が

「ああ、それはユムシだな」

と教えてくれた。食用らしいので確保したいが……

「先生……さつきから、こいつ手の中でクネクネ動くし生臭い水を吐き出すし……気持ち悪いんだよ。先生が持っててくれないか？」

「え、やだ……」

「……………」

ダツ、とサキがダツシユで詰め寄り、巨乳がぶるんと揺れた。

しかしユムシは気持ち悪いので逃げる。

「おい、待てー！」

普段着の私と、裸足のサキとではあつという間に追いつかれてしまった。

どしん、と背中にサキが体当たりしてきて、大きな胸が潰れる。

「いった、もう、急に止まるな。……ほら、預かってて。高級食材だぞ？」

心なしか顔を赤らめながら、サキが干潟をぺたぺたと戻って海産物を漁る。

その後、顔の赤いサキがたまにユムシを私に預ける以外は無言で取り続けた。

そしてまた、食堂に持ち込みで料理を作ってもらう。

見ている私も脚が棒になる程度に取り続けたため、なかなか豪勢な食卓になった。

「マテガイに、ハゼに、ユムシ……取った時はどうかと思ったが、こうして並ぶと美味しそうだな」

「うん、本当に。ありがとうね、サキ。じゃあ頂きます」

「いただきます」

手を合わせて唱和し、焼き、揚げ、刺し身と海の幸の色々な味を楽しんだ。

食後の腹ごなしに、村の近くの岩礁にマットを敷いて腰掛け、2人でのんびりする。

「ふう……食べた。米といっしょだとなかなか満足できる量だった

な」

「うん、サキが取ってくれたと思うと美味しさもひとしおだったね」

「そ、そうか？ そう言ってくれたら……その……嬉しい」

隣に座るサキが、距離を詰めてくる。岩に置かれた手に、私の手を重ねた。

「んっ……♥ その、先生は……生徒と、セックスするのが趣味なんだろう？」

「うん、まあね」

そっぽを向いたサキは、首筋と耳が既に真っ赤だ。

「本当に、褒められた趣味じゃないと言うか……バレたら犯罪者扱いの趣味だな。その……先生が捕まるのは、私としても不本意だし……これからは、わ、私が、先生の……セックス、相手に……なる、から」ぎゅ、とサキから手を握られる。

サキはチラリと横目で私を見て、ゴクリと喉を鳴らした。

「か、勘違いするなよ？ 先生に性犯罪者になってほしくないから、私が相手なら、合意だし、合法になるからであって……」

「うん、嬉しいよ、サキ。じゃあ、私とセックスしてくれるんだ？」

「うう……そ、そんな直球で言うな……」

真っ赤な顔を俯かせたサキを、昼下がりの日差しが海に反射して下から照らしだす。

「先生が相手なら、何回でもする、から……私以外と、あんまり、その……するんじゃない。わかったか？」

上目遣いにジロツと睨んでくるサキが可愛らしく、肩を抱き寄せてキスをした。

「んむっ♥ ん……ちゅ……♥」

驚きに目を見開いたサキだが、すぐにしおらしくなりされるがままだに舌まで受け入れてくれる。

調子に乗って横乳にするりと手を伸ばし、ラッシュガードの上から柔らかなおっぱいを撫でる。

「んうう♥」

サキは身体を縮こまらせ、私の胸に握りしめた手を置いてされるが

ままになっていた。

まずはサキの緊張をほぐそうと、胸から首筋、耳へと愛撫の手を伸ばしていく。

それと同時に大胆に舌を使い、くちやくちやと唾液を攪拌してお互いに喉を鳴らして飲み合う。

サキはますます私に身体を預けてくれたが、緊張はあまり解けて居ないようだった。

「大丈夫、サキ？　あまり気が進まないようなら、」

一度口を離して、サキの表情を覗き込む。

「ちっ、ちがう！　そうじゃ、ないんだ……」

サキは顔を真っ赤にして、今にも零れそうなくらいに涙を目に溜めてキラキラと輝かせていた。

「さつきから胸がドキドキして、頭がふわふわして……な、何も出来ない……これじゃ、先生も面白くないだろ……？」

しゅんと眉をハの字にし、私を上目遣いに見つめてくるその姿は、迷子の子供のようで……チンポが非常にイライラする。

私はサキを抱きかかえ、膝の上に正面を向かせて座らせる。

対面座位の姿勢で、水着の下で勃起するチンポがサキの水着の股間に触れた。

「あっ♥　か、硬い……」

恐る恐るという感じで下を……股間を覗き込むサキの頭を撫でた。「むうう……こ、子供扱い、するな……」

サキはジトツとした半目で睨んでくるが、抱き寄せると目を丸くして赤面してしまう。

「サキは初めてだからね。戸惑うのも仕方ないよ。今は力を抜いて、私に身を任せる事だけ考えて」

「うん……何事にも、インストラクターは必要だからな……先生……私に、セックスの事……教えてください」

しおらしくそんな事を言うサキにチンポがフル勃起し、ぐりっとサキの股間に当たる。

「んっ♥　あ、当たってる……これ、その……私で、興奮して……？」

「うん、サキはとっても可愛いからね」

至近距離で見つめ合いながら言うと、サキの視線が左右に泳ぐ。

「あ、ありが……どう」

本当に余裕のなさそうなサキと一刻も早くセックスしたくて、ラツシュガードのジッパーを下ろした。

「……………っ！」

ぎゅつと目をつぶり、無抵抗で胸を剥かれるサキ。

中から出てきたのは白く輝くサキの巨乳だ。

下と同じ色の水色のビキニ水着が、15歳とは思えない立派な胸を包んでいる。

「水着をはずすよ、サキ」

真つ赤な顔でそっぽを向いたサキが、こくん、と頷いた。

巨乳にふさわしい大きめの乳輪と親指の先程もある乳首が現れ、美しさにため息が出る。

「わ、私の、胸……駄目だった……？」

「ん？ いや違うよ。すごく綺麗だからため息が出ちゃった」

「そ、そうか？ う、うん……それなら……うう……恥ずかしい……」

手で口元を隠したサキの乳首に吸い付く。

「あっ ♥ つく、う ♥」

押し殺したような喘ぎ声をあげながらサキが身じろぎすると、胸もふるんふるんと揺れた。

サキの細い腰を抱き寄せ、密着する位にべったりと抱き合う。

大きな乳房に顔を埋めながら、勃起チンポでサキの股間をグリグリと刺激した。

「んんんっ ♥」

クリトリスに当たると、サキがひとときわ大きい声を上げて身体を痙攣させた。

サキもオナニーでクリトリスを弄っているのだろう。

乳首をしゃぶりながらもう一方を指で優しく弾き、チンポで水着越しにクリトリスを刺激する動きをそのまま継続する。

「はあ……っ ♥ あ、ああ…… ♥ せ、先生…… ♥ その、あんまり、



続けると、こ、声が……♥」

サキは私の腰に巻き付くように脚を絡め、クリトリスを刺激される度に締め付けていた。

「そろそろイきそう？」

こく、こく、と真つ赤な顔で何度もうなずくサキ。

「じゃあ、セックスしてみようか。サキがして欲しい事があったらちゃんと行ってね」

「わ、分かった……私は、どうすればいい？」

「力を抜いてて。痛くてダメそうだったらやめるから、それも教えてね」

「うん……」

心細そうにうつむくサキに軽くキスをして、下の水着を脱がし、私も脱ぐ。

「うわ……先生の、パンパンになってるな……これ、痛くないのか……？」

ちよん、と人差し指で私のチンポに触れるサキ。

「サキの中に入れば痛くないよ」

「……バカ」

サキはそう言いながら、私の肩に手をおいて股を広げ、入れるために位置を合わせてくれる。

くちゅ、くちゅ、とサキの柔らかくほつてりとした大陰唇が亀頭に触れ、内側の粘膜に触れてお互いに快樂が走る。

「あっ♥ん♥」

甘い声上がる度に恥ずかしそうに目を閉じるので、なかなか位置が合わなかったが……サキのお尻を私が掴み、愛液と我慢汁でヌルヌルと密着しながら穴を探り当て、入り口へ亀頭を押し込み始める。

「くっ、あ……おつきい……」

眩くような小さな声に勃起をさらに硬くしながら、サキの尻を掴んで押し下げる。

ずぶずぶとサキの自重でキツイ膣の中にねじ込み、ザラリと抵抗の強めな処女膣を味わう。

そのままずるずると奥に入り込み、ぷつんと軽い手応えと共に処女膜を破って一番奥に亀頭をぶつけた。

「ふうー、はあー、う、うう……先生の、大きくて……息が詰まる……♡」

目を閉じて眉を寄せて未知の感覚に耐えるサキを間近から見つめる。

「サキのなか、凄く気持ちいいよ」

「だから、そういう事言うな……！　なんて言っていないのか、分からないだろ……♡」

顔を合わせたくないのか、サキが私の首元に抱きついて耳と耳が触れ合う位顔を寄せてきた。

「サキ、痛くない？　暫くこのままじっとしていいようか」

「うん……ありがとう……」

夏の日差しの中、2人して汗を流しながらもずっぽりと結合して、心が求めるままに裸同士で密着した。

「はあ……暑いな」

「うん……大丈夫？　木陰に移動する？」

「いや、いい。なんか……先生とこうやって、くっついて……深くまで繋がってるの、結構……好き、かも」

ぽつりと呟いたその言葉で、サキの膣奥に我慢汁がびゅるりと撒き散らされる。

「あ……跳ねた。ふふ……興奮したんだな、先生♡」

不思議と落ち着いた声音で、サキがチンポの実況をしてくれる。

「その、先生。私は、あんまり痛くない体質みたいだから……もう、動いて大丈夫だ」

やさしく耳元でサキに囁かれ、導かれるままに腰を振る。

「あつ♡　う、動く……中が、ひっかかれる……♡」

私の興奮を煽っているのかと思うほどにサキは素直に自分の状態を告げてくれるので、私もチンポが勃起してしょうがない。

サキの太ももに下から腕を入れて腰の高さを固定し、下からピストン運動で処女膣を耕す。サキも足を踏ん張って、犯されるのに協力し

てくれる。

「んくっ、ちよつと、奥は、刺激が、つよい……」

とのことだったので、浅めのGスポットに集中した。

くぷっ♥ くぷっ♥ くぷっ♥ と愛液を亀頭で外に掻き出すほどの激しさで、浅めの位置にあるサキのGスポットと入り口を往復する。

「はああ♥ ああう♥ そこっ♥ こ、こえが、抑え、られなっ♥ んああう♥」

サキが鼻にかかったような色っぽい声を上げている。それだけでこのまま膣内射精したくなるほどに興奮した。

ズゴズゴとマンコを突いていると、サキの膝が笑ってマットに膝をついてしまう。

さらに縋り付くように抱きついてきて、私の顔を胸の谷間に埋めてしまった。

真夏の日差しで蒸れたサキの胸の谷間の甘酸っぱい匂いを嗅ぎながら、ザラつくサキの膣内をこねるように掻き回す。

「ああっ♥ すごいっ♥ せんせいっ♥ せんせいっ♥」

甘ったるい声で私を呼びながらサキが初の絶頂へと着実に近づくの、Gスポを擦って後押ししてあげる。

私の頭を抱えるようにサキが抱きしめ、乳房に左右から顔を押しつぶされてほとんど何も見えない中、ひたすらに腰を振った。

「あ、あ、あ、……っああああああああっ♥♥♥」

ひととき強い力が腕と、膣にこもる。

にゆるにゆると汗でヌメる胸の谷間に顔を押し付けられながら、サキの処女膣が絶頂に震えた。

浮いていたサキの尻を掴み、思い切り押し下げて奥まで貫き、射精する。

「はっ♥ はっ♥ でてるっ♥ 中で、せんせいが、跳ねてる……♥」  
サキの谷間にタラタラと汗が流れる。

耳元ではサキの浅い、全力疾走した後のような呼吸が熱く耳にかかっていた。

処女膣が絶頂した、握りしめるような強い締付けに逆らってサキの膣奥に精液をどぶどぶと吐き出す心地よさにジンと鼻の奥が痺れる。サキも一番奥に精液を受け入れる事にためらいを見せず、むしろ自分から腰を揺らして精液絞りに協力してくれた。

遠くで蟬の鳴く音と波の音を聞きながら誰も居ない野外でじつと子作り行為に励み、受精を待つ野生動物のように性器で深く結合したまま動かない。

1分以上もじつくりと射精し、ようやくサキの中でチンポが萎えてくると、サキの腕の力も抜けて汗だらけの顔に爽やかな潮風が吹いた。

「はあ……はあ……す、凄かったな……これが、セックス……♡」

茫然と、暑さと興奮で茹で上がったサキが呟く。

「気に入ってくれた？」

「そ、それは……うん♡先生とのセックス、凄く……気持ちよかった♡」

頬に張り付いた後れ毛をかき上げながら、サキが柔らかく微笑む。

その一つ大人になった色気と15歳の少女の可愛らしさが入り混じった表情に、サキの膣の中でチンポがまた勃起した。

「……っ♡また、したいのか？」

照れくさそうに、サキが少し睨むようにして口をとがらせながら言う。

「うん。サキが可愛かったから、つい」

私が微笑みながら言うと、サキは少しの間目を丸くして、顔をそらした。

「だから、そういう、勘違いするようになって……まあ、良いよ。先生がセックスしたいと言うなら、幾らでも……私の中に出していいから……♡」

「その前に、避妊薬を飲んでおいてね。汗もかいてるし」

「……別に、そんなの良いんだけどな」

サキはなぜか、じとつとした半目で私を睨んでくる。

「先生とセックスする以上……子供を産むかも知れないという覚悟は、その、済ませてあるし……こういうのは、自然の成り行きというか、ご縁に任せるといえるか……」

射精した後の勃起チンポを、ついさっきまで処女だった膣の奥に咥え込んだままむにやむにやと言ひ募るサキ。

「私との子供、産んでくれる気なんだ。嬉しいよ、サキ。でも、SRT復活のデモもあるでしょ」

「それは、そうなんだが……でもせっかく先生との赤ちゃん作る機会なんだし……なんか、もつたない気がしてしまつて」

じつ、と潤んだ瞳でサキは私を見つめ……

暫くして、どう思ったのかは分からないがフツと微笑んだ。

「ま、いいか。飲むよ。これからも、セックスしたくなつた時はちゃんと私に言うんだぞ！」

ニカツ、と快活に笑い、ペットボトルと薬を受け取つてごくごくとたっぷりの水で飲んだ。

「私なら、ナマでもでもいいからな♥ ちゃんと言うんだぞ♥」

一転してヒソヒソ声で耳元で囁かれ、尿道に遺つていた精液がサキの子宮口にとろとろと流れた。

「サキは、赤ちゃんが好きなの？」

勃起チンポでサキの膣奥をじっくりと撫で回すように腰をグラインドさせながら聞く。

「ん……♥ 好きとか、嫌いとか……分からない。接した記憶もないし。けど……」

サキも、セックスの2回戦が始まったことを了承するように私の腰に脚を巻き付け、お互いあぐらをかくように座つて深く挿入して腰を揺らし始めた。

「先生との子供なら、きつと可愛いし……見てみたいかな」

優しく微笑んで下腹部を撫でるサキを抱きしめ、強引にキスをする。

「はむっ♥ ん、ちゅっ♥ ぴちや♥」

サキは分かっていたかのように私を受け入れ、自分からも舌を絡め

てディープキスが始まった。

じりじりと暑い日差しの中、サキのほつそりしたお腹や顎から汗が垂れ、私を伝ってマットをビしゃビしゃに濡らしていく。

時折吹く海からの風が私達のセックス臭を吹き散らし、潮の臭いが取って代わるが、お構いなしに腰をねちやねちやと揺らす私達は数分で辺りをセックス臭に染めてしまう。

「ぶはあっ！ はあ、はあ……先生、流石に暑い。場所を変えないか」  
汗をダラダラと垂らしたサキが、セックスで緩んだ中でも耐えきれない不快さで眉をしかめて言った。

「そうだね……一度海に浸かろうか」  
挿入したまま、よいしょと頑張って立ち上がる。

太ももが負荷にビキビキと痛むが、なんとか歩き出した。

「これ、先生が転んだら私が岩場に叩きつけられるからな？ 絶対転ばないでくれよ？ ……んっ♥」

不安そうに私の足をキョロキョロ見ながらも、立って歩くとは言わずにハメたまままで居てくれるサキに、お礼としてGスポをひと擦りして上げる。

甘い声を上げてしまったサキはパシツと平手で肩を軽く叩かれて睨まれてしまった。

ちょうど階段のように海に浸かれる所があったのでぎぶぎぶと肩まで海に入った。

水の中でバランスを取るサキが、脚で私の腰を固定してマンコを締めめる。

「ふう……冷たくて気持ちいい……それに、先生が、身体の中で熱くなってるのもよく分かるな……♥」

のんびりとチンポを堪能するサキに、水の中で浮きながら頑張って腰を振ってみた。

「んっ♥ はは、流石の先生も水の中では勝手が違うみたいだな！  
ほら、こっちからも、こう、か？」

足がつかない中で腰を振るには、私の身体は貧弱過ぎた。

サキが少し気持ちよさそうにしながらも余裕の表情で、マンコを締

め付けてくる。

涼しい海に浸かりながら、サキの熱いマンコでゾリゾリとチンポを擦られ、射精感を煽られるが……サキもあまり腰を使えないので、射精には及ばない。

「よ、つく、ふっ♥ む、難しいな……腰を、もつと、こう……♥」

私の腰をカニバサミで固定したサキが、くい、くい、と腰を前後に振ってチンポをもみくちやにする。

処女を失ったばかりだと言うのに、教範もない所からセックスの動きを自分で考え実行してくれるサキに、私のチンポも熱くなった。

私はサキの尻を掴んで引き寄せ、くいっ、くいっ、と腰を振るサキのクリトリスが擦れるように動きをあわせる。

「あっ、つく♥ せ、先生っ♥ こ、擦れてるからっ♥ くっ、あ、あ、あっ♥ ず、ずるいぞ、私だけイかせようとしてっ♥」

サキも負けじと腰を大きく振り、膣をギチギチに締めてチンポを扱きたて、とにかく私に射精させようとする。

「ほらっ、ほらっ♥ どうだ、このっ♥」

歯を見せてニカツと笑いながら、サキと海中でへこへこ腰を振ってイかせあいが始まった。

上から見れば首だけ海中に出してイチヤイチャしているだけに見えるだろうが、海面下ではサキがぐいんぐいんと上下前後に腰を揺らし、私はなんとかバランスを取りつつ腰を打ち付けてクリトリスを刺激するくらいしか出来ない。

「あ、あ、……やばっ♥ なんか、奥の方、ジンジンして……♥ 気持ち、良くなつて来たかも……♥」

無邪気に水遊びしているかのような快活なサキの笑顔が、悩ましげに眉を寄せたメスの顔へと変わっていく。

それでも、一度始めた行為を止める事はしなかった。

「ほら、イけ、イけっ♥ これは、日頃の、お礼なんだからっ♥ 先生が気持ちよくならないと、意味、無いだろっ♥」

声が甘ったるく、時折チンポの快樂で詰まりながらも、サキは腰を振り続け……

ズリズリと強い膣圧で刺激され続けた私のチンポも、そろそろ限界に達しようとしていた。

「ありがとう、サキ。でも、私はサキといっしょにイッたほうが幸せなんだ」

抱き寄せてそつとキスをすると、そのまま何も言わずにサキから唇を押し付けてくる。

「ちゅっ♥ れるっ♥」

サキから唇を吸い、舌を口内に入れてかき回される恍惚に浸りながら、海の中でしっかりと抱き合つて腰を引き、サキの好きなGスポを擦る。

「あむっ♥ んむう♥」

唇をくつつけたまま言葉もなく、着実に絶頂へと向かつてお互いを高め合い……

海に揺られながらサキの熱い膣奥へと射精した。

「ん……♥ ぶあ……♥ 出てるな……♥ すごく、元気に跳ねてる……♥ どうだ？ 私とのセックス、気持ち、良かったか……？」

絶頂の余韻か、とろりと目元を緩ませるサキと鼻先がくっつく位の距離で見つめあった。

「うん。とつても。サキが今感じてくれてる通りだよ」

「……へへっ♥ 良かった♥」

汗と海水で、額や後れ毛を顔に張り付かせながら、サキはニカツと笑った。

射精が終わるまで波に揺られた後、ゆっくりと岩場に戻る。

前の開いたラッシュガードだけで、水着は上下とも脱いで素っ裸のサキを見て、また勃起してしまった。

「……なんだ？ まだ足りないのか？ 全く……」

裸のサキが腰に手を当てて、ジト目で睨む。

「私以外にそんな態度を取ったら愛想尽かされるから気をつけろよ？

……ほらっ♥」

サキは近くに突き出ている岩壁に手をついて、くいつとお尻を向けた。



初めて見るサキのマンコは、処女の佇まいを色濃く残しながらもセックスの後がありありと残っていた。

ついさっきまでセックスし続けていた膣穴はチンポの太さにぽっかりと開き、今も精液をドロドロとこぼし続けている。

膣穴の端でぴつたりと大陰唇が閉じ、ぷくつと勃起したクリトリスが覗く以外は綺麗なスジを描く美しいマンコだ。

親指で大陰唇をぶにと押し、左右に開いてみると精液ではない白濁した本気汁が岩場に滴った。

「それじゃあ、サキの言葉に甘えさせて貰うよ」

「ああ、……来て、先生♥」

立ちバツクで振り向いたサキの横顔は優しく、私はいきり立ったチンポを一気に沈めて腰をふる。

サキの腹側の浅い所にあるGスポットを一番刺激しやすいこの体勢で、サキを気持ちよくするためのピストンを開始した。

「あゝっ♥ ちよ、先生っ♥ そこは、駄目だっ♥ あっ♥ あっ♥ あああっ♥」

早くも慣れて来たサキが、少し低めの悩ましげな声をあげて悶える。

ぱん、ぱん、と野外に拍手のようにサキの尻肉と私の下腹部が打ち合わさる音が響き、それを気にする余裕がないほどにサキは乱れ続けた。

「はっ♥ はっ♥ あ、うゝううう♥ も、だめっ♥ すぐ、イツちやう、から♥ だめっ♥ だめえゝっ♥」

ぽた、ぽた、と海水を胸や腹から滴らせながら、後ろから私に突かれて全身をくねらせるサキの姿は完全にセックスの快楽を知ったメスのそれだった。

「私もサキが気持ちよくなってくれと嬉しいから、いく所を見せて欲しいな」

「ばかっ♥ ばかあーっ♥」

私に対する文句すらもねっとり甘く、男に媚びるような響きを帯びている。

「あ、い、イクっ♥ イクっ♥ あ、く、あああああ……♥♥」  
高くかすれるような声を上げて、サキが絶頂した。

がくん、がくんと腰を痙攣させ、膝がカタカタと震えている。

私はサキの細い腰を抱えて倒れないように支えながら、更にピストンを続ける。

「ば、ばか♥ い、イツてる♥ いまイツてるから♥ はっ、つぐう、う、ううう……♥♥」

私がGスポを執拗に責めると、サキが絶頂している最中に更に絶頂する。

握りしめるような強い締め付けに逆らわず、サキの奥深くで射精した。

「あ、は、あ、ああああ……♥♥」

腹の底から絞り出すような低い声を上げて、サキが子作りの快楽を叫ぶ。

海水で濡れた身体に風が吹き渡り、爽やかな気分になりながら、金玉が空になるまでサキのマンコの奥深く、子宮にすべて注ぎ込むように射精しつくした。

「まったく……やめろと言ったのに、あんな事をして……♥」

「ごめんね。サキの凄く可愛い所が見たくなかったから」

マットまで戻った私達は、水着を着直して2人して肩をくっつけてあって座り、手や肩を愛撫しながらピロートークしていた。

「ふん。でも、おかげでセックスについて色々と学べた。これからは先生のセックスパートナーとしても、よろしく頼む」

「大歓迎だよ。サキ、よろしくね」

「ふふふ……次は、先生が射精しても腰を振るのを止めてやらないから、覚悟してろよ……♥」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべるサキとくっついたりキスしたりしてイチャつきながら、次の機会を楽しみにするのだった。

## 性的魅力の確認（ミュ）

——今日は最近買った服で街を歩いてみようと思います  
そんなモトワークがミュから送られてきた。

他の生徒ならあまり心配はしないのだが、ミュが買った服といえば水着以外に思い当たらない。

そしてミュは自分の存在感の無さをとても気にしている。

色々almazそんな事が起こりそうなので、心配で見に行くことにした。

こういう時にキャンプが近いのはありがたい。

そして、すぐにミュが見つかった。

骨ばった小さな肩と、むき出しの背中が夏の日差しをまばゆく反射している。

ビキニタイプの水着ではあるがローライズではなく、身体をしつかりと覆うボトムスは、パステルカラーも相まって単に下着としか見えない。

漁村の港でも2人きりの砂浜でも私のチンポをイライラさせた薄い身体が、街中で曝け出されていた。

「あ、先生……、ここにちは……」

ミュもすぐ私を見つけ、笑顔さえ浮かべて挨拶してきた。

麦わら帽子もビーチサンダルも、完全に水着姿そのままだ。

「先生ならすぐ見つけてくれると思いましたが……いつもより早かったですね……」

普段より目がキラキラしていて、何故か得意げなミュが私に歩み寄ってくる。

話を聴くと……案の定、視線を集め……存在を認知してもらうためにだけに水着姿でうろついていたということだった。

私は、街で水着の子が歩いてたら誰でも見るし、何事かと思っただけのさだろうと教えてあげた。

「話しかけ、づらい……？　気づかれないのならわかりますが……」

街中で水着姿のミュと対面していると、ミュに下着姿なのにそれに

気づいていない催眠が掛かっているかのようで、チンポがイライラする。

「……とりあえず、ここから離れよう」

そう言つて手を差し出すと、ミュは首を傾げながらも私の手を取つてくれる。

小さくひんやりした手を握り、チンポの勃起をこらえて人気のない場所……子ウサギ公園へとミュを連れ込む。

テントなどがある開けた場所ではなく、入り口に近い林になっている場所だ。

暗いほどではないが、道路からの視線は通らず2人きりになることができた。

「あ、あの……先生。どうなさったんでしようか……私、なにかマズい事を……？」

ミュは小さくなりながら上目遣いにこちらの顔色を伺ってくる。

「うーん、まあ、そうだね……あまり、良くはないかな」

「うう……やっぱりそうなんです……私のような子がこんな格好しても、存在を認識してもらえただけで気味が悪くて……」

息を吸うようにネガティブ思考に陥っていくミュの、半裸の身体を抱きしめた。

「ひゃうっ!?! せ、せ、先生……!?!」

夏とは言え今は風があるため木陰は涼しく、ミュの身体も汗でしっとりとして冷えていた。

「ミュみたいな可愛い女の子が肌を露出してたら、変な男が寄ってきてしまうから良くないって事だよ」

「あう、あう、か、かわいい、だなんて……」

ミュは赤面して目をぐるぐるさせて、私を突き放す事も抱き返すこともできずに腕をソワソワと彷徨わせている。

その様子に味をしめ、私もミュのむき出しのお腹や内股をさすつた。

「んっ……♡」

敏感なところを愛撫され、ミュの喉から甘い声が漏れる。

「あわ、あわわ……！」

そこで、ひよいっと私の腕の中から逃げられてしまった。

「あ、あの……先生。わ、私……は、初めてが、先生なのは……良いのですが……せめて、マットとかの上でしたいなって……」

チラチラと、私を横目に見上げながら、赤面したミュにリクエストを受けた。

チンポの勃起が収まらない。

「今、テントには他の子が居るかな？」

「うっ……て、テントするのは流石に……いつも誰か詰めています……後で、気まずすぎるので……」

「それじゃあ、シャーレに来る？」

一歩踏み出し、ミュとぴったりくつつくような位置に立って見つめる。

さらに、そっぽを向いていたミュの顎をそっと指で押して私と見つめ合うように上を向かせた。

ミュは私の力に逆らわず、頬を赤く染めて見つめ返してくれる。

「そ、そ、それって、私と……セックス、するために、って、こと、ですよね……っ？」

「うん、そうだよ。可愛いミュとセックスしたいんだ。どうかな？」

ミュの細い喉が、こくりと鳴る。

「ほ、本当に、私なんかと……っ？」

「そうだよ。ミュは自分の可愛さに気づいて貰わないとね」

ミュは間近にある私の顔を、しばらくのあいだ目を丸くして見つめていた。

「は……はい。お願い、します……先生♥」

そして、ついに……私とのセックスを承諾して、シャーレに付いてきてくれるのだった。

「ありがとう、ミュ。じゃあ、普段着に着替えてきてね。……ああ、そうだ」

ミュの後れ毛をかき上げて、耳元に顔を寄せる。

「……………」

「ひゃうう……」

耳元でリクエストを囁くと、肩をすくませて赤面しながらも頷いてくれた。

パタパタとライフルを抱えて去っていくミュと別れ、シャーレに戻る。ミュが来るまでに、部屋の準備を整えるために。

——先生

——おまたせ、しました。今、シャーレの入り口に到着しました。そんなモモトークが来たので迎えに行く。

「いらっしやい、ミュ」

そこには、SRTの制服姿の……しかしいつもと細部が違うミュだった。

髪を三つ編みにしているし、手袋も白タイツもない。制服の上からゴテゴテと装備しているベルト類も外している。

つまり、水着の上から制服を着た状態だ。

「さあ、行こうか」

差し出した手に重ねられたミュの小さな手が、震えている。

それでも、私の指先をきゅつと握って、セックスするために付いてきてくれた。

エレベーターの中に入ると、地下のボタンを押しながらミュの腰を抱き寄せて撫で回した。

「あううう……」

ミュは目をぐるぐる回しながら、身体を固くしてされるがまだ。

あつという間に地下に着き、ゆつくりと歩いてベッドメイクしたソファアーベッドへとたどり着いた。

「じゃあ、見せてくれるかな」

「は、はい……」

手を震えさせながら、ミュが制服のジッパーに手をかける。

静かな地下居住区に、ミュの脱衣する音だけが響き渡った。

小さな撫で肩を制服が滑り下り、その下からは先程見た水着が出て

くる。

そのまま、続いてミュが脇腹辺りに手をやってスカートのホックを外し、ぢいいい、とゆつくりジッパを下ろす。

いとも簡単に、ミュが私の前で水着姿になった。

「あううう……は、恥ずかしくて倒れそう……」

顔を真っ赤にして目をぐるぐるにしているミュを見てると笑顔になってしまう。

チンポもイライラする。

私はミュの手を取り、抱き寄せてベッドに押し倒した。

「あ……先生……♥」

ミュはむしろ安心したかのように微笑んで、私の服の袖をきゅっと握りしめる。

「おっと、私も脱がないと」

「あ、じゃあ……私が、先生の服を脱がせて差し上げますね……」

そつと、真下に居るミュが淀みない手付きで私のワイシャツのボタンを外し、その下の胸板にぺたりと触れる。

「わ……♥」

感触を確かめるように微かに手を動かすミュ。

その積極性に笑顔になりながらも、脱衣を進めるためにシャツを脱ぎ、ズボンを下ろした。

「あ、す、すみません……い……その……つい、夢中に……」

脱がすと言っておいて胸板を撫で回すのに夢中になってしまったミュが恐縮するが、裸になった私が無理やり唇を奪うことで次の言葉を吐くことはできなくなった。

「あむう……んむ……♥」

無理やりキスされたミュが、甘い声でさえずる。

ミュの目が笑みの形に細められ、ルビーのように赤い瞳がじつと私を見つめていた。

「ちゅ……♥」

おずおずと、ミュから私の唇を吸って音を鳴らす。

そのいじらしさにチンポをイライラさせ、ミュの細いお腹に勃起を

押し付けながら薄い唇を割って舌を挿入する。

「んっ♥ ちゅう、れる……♥」

軽く目を見開いて、初めてのディープキスに対応するミュ。

小さな舌が私の舌と的確に絡み合い、舌のざらつきとヌルつきを増幅させ、チンポから我慢汁が漏れるほどに舌尖から快樂を得る。

「ふう、ふう……♥」

ミュの小さな小鼻がぷくりと膨らんで、鼻息が荒く私の口元に吹きかけられていた。

そろそろ次の段階に進める事を確信した私は、ミュの薄い胸に手を当てる。

「んっ……♥」

困った時のようにミュの眉がハの字に下がり、目が細められる。

膨らみがほとんど分からないミュの水着を指先だけで優しく撫でて、乳首の位置を探り出す。

「んっ……♥ れう……♥」

ミュはディープキスに積極的に舌を絡めながらも、緊張で身を固くして私の手首を掴んだ。

動きを阻害するわけでもないの、胸への愛撫を継続し……人差し指と中指で乳首を刺激し始める。

「はう……♥ ん、うむう……♥」

ミュの細い肩が跳ねる。

目は糸のように細められ、目尻に涙がキラキラと溜まっていくが、決して振りほどいたりはしない。

水着越しに、しっかりとミュの乳首が固くなっていくのを感じていた。

「はふ……ふうーっ♥ ぴちやっ♥ れるっ♥」

ミュの息はますます荒くなり、鼻だけでなくなたまらず口を開けて呼吸を始める。

私はディープキスを止めないので、ぴちやぴちやと唾液がかき混ぜられる音も大きく響くことになった。

完全に乳首が勃起した所でミュの水着をめくり、直接乳首を摘んで



抜き立てる。

「んっ♥ はっ♥ あっあっ♥」

耐えきれなくなったミュが、甘い声を上げて身体を震わせる。

ミュの小さな手が縋り付くように私の鎖骨辺りに当てられ、腕の動きを使って首元に抱きつかせた。

唇を離して舌を見ると、ミュの足は絶頂間近の乙女のオナニーのように足首までピンと伸びている。

「ミュ、イッて良いよ」

「あっ、ああああっ♥♥」

そう囁いて、強めに乳首を引っ張るとミュは掠れたような高い声を上げて身体をエビ反らせた。

そのまま数秒間痙攣し、沈み込むように力が抜けていく。

「はあ……♥ はあ……♥ はあ……♥」

肩で息をするミュは、赤い瞳を熱っぽく輝かせて私を見つめている。

「気持ちよかった？」

そう問いながら優しく頭を撫でると、にこりと微笑んで目を細めた。

「は、はい……♥ す、凄かった……です♥」

普段より緊張が抜けているのか、素直な感想にチンポがイライラする。

「じゃあ、次はこっちを触るからね」

そう言つて、ミュの女兒用下着のような水着のボトムにふれる。

「……………♥」

ミュは喉から出かかった悲鳴を飲み込み、顔を真赤にして頷いてくれた。

「ミュ、少し脚を開いて」

ミュの細い太ももの内側に手を入れて撫でると、おずおずと股が開いていく。

水着の股間に指を這わせ、ミュの性器の形を確かめる。

細っこいミュの股間は、ほとんど凹凸の感じられない生娘のもので

……下にある綺麗な一本筋が目には浮かぶようだった。

「っ♥っあ、う……♥」

勃起乳首を露出させたまま股間を弄られるのは流石に羞恥の限界を超えているのか、ミュの顔はずっと真っ赤だ。

その処女の恥じらいを余すことなく目に焼き付けるためにミュをじっと見つめているため、ミュも頑張つて目を開けて私と見つめ合い続けている。

それでも、私の指が股間の横の水着に潜り込んでずらした時はミュの視線も下がらずにはいられなかった。

「ミュの……、もう熱くなってるね」

「ひゃんっ♥」

ぴつたりと閉じた綺麗な貝殻のようなミュの性器を、指先だけで感じる。

滑らかな肌にじつとりと興奮と羞恥の汗をかき、艶めかしくヌメる大陰唇をふにふにと弄び、中央の割れ目へと指を潜らせた。

にちやり、と確かな水音が響き、ミュが羞恥のあまり目をギュツと閉じる。

「嬉しいよ、ミュ。こんなに気持ちよくなってくれたんだね」

「あう、うう……♥」

ゆつくりと大陰唇の内側の粘膜の感触を確かめるように指を這わす。

たつぷりと愛液を絡めた指で、固くシコっているクリトリスを指でつついた。

「あっ♥あ、あっ♥」

私の首に抱きついたミュの腕に、ギュツと力が籠もり、有無を言わさぬ力で抱き寄せられる。

ベッドに顔を突っ伏して、ミュの鼻が首元に当たるのを感じながら、にちやにちやと粘質な音を立てて乙女のマンコをいじり続けた。

私の太ももにミュの脚が当たり、ミュがまたしても脚をピンと伸ばして絶頂間近であることが伝わってくる。

「いいよ、気持ちよくなって、ミュ」

ミユの耳元で囁くと、細い腰がくねりまたもエビ反りになってミユの身体が跳ねた。

「あ、あああああああーっ♡♡」

地下室に、初めて聴くミユの絶頂声が大きく響き渡る。

抱きしめられている私が上にのしかかっけていても、肩と尻を起点にしたアーチは美しく曲線を描き、私の身体を軽々と持ち上げた。

一方でマンコの粘膜は熱く潤み、少し弄るだけでミユの腰はヘコヘコと震え、与えられる快楽を素直に受け取ってしまう。

「あっ♡ せ、せん、せっ♡ いまっ♡ むりっ♡ でっ♡ あああっ♡」

とぶとぶと愛液を吐き出し続ける膣に、指を一本沈めてみる。

「んっ♡ は、はいって、きま、したあ♡」

不安からか、ミユが私の首元に頬をむにむにと押し付けてきた。

「大丈夫？ 痛くない？」

耳元で囁き、ゆっくりと指を奥深くへと進める。

「はっ♡ はっ♡ い、痛くは……でも、ふ、太い、です……♡ お腹のなか、全部……先生で、埋め尽くされてる、みたいで……♡」

会話する事で、ミユもだんだんと落ち着いてきていた。

私を力強く拘束していた腕からも力が抜けていき、スツとミユの顔がまた目の前にやってくる。

「あ、あの……、す、すみません……私、パニックになって、先生の事、だ、抱きしめて……しまっ……」

バツが悪そうに視線を左右に泳がせながら言うミユは、まるで普段と同じようで……

しかし、水着を上も下もめくられて勃起乳首と濡れそぼったマンコを晒し、今まさにセックスしようとしている時に言われると酷くチンポがイライラする。

「良いんだよ、セックスなんだから。ミユの好きなようにして大丈夫」

そう言っって、触れ合うだけのキスをする。

「んっ……♡ そ、そう……なんででしょうか？」

まだまだ自信無さげなミユに、またキスをする。

「あむっ♥ ……ちゅっ……♥ えへ、えへへ……そ、それじゃあ……  
もう少し……キス、したいです……♥」

へにや、と力の抜けた笑顔でリクエストをくれるミュに、また  
デープキスをする。

もちろんマンコを弄る手も止めず、くちよ、くちよ、と粘つく水音  
を立ててミュの処女膣をほぐし続ける。

私が膝を握って脚を開かせると、困ったように目だけで笑いながら  
ミュはぱっかりと股を開いてくれた。

「ちゅっ……♥ ちゅぱっ……♥」

ミュの手が私の首に絡めた腕を動かし、背中をさわさわと撫でてい  
る。

じいつと至近距離から覗き込むように私を見つめ、舌をゆつくり、  
しつかりと私の舌に絡め……まるで私がそこに居る事を確かめるか  
のように、ずっとずっとキスを続けている。

勃起した乳首を指でピンピンと弾き、そろそろ解れて指が2本入る  
ようになつた膣の中をかき混ぜても、鼻息が荒くなるものの、もう唇  
を離すことなくキスを続け、私を一心に撫で回し続けた。

「ぶあ……♥ はあ……♥ はあ……♥」

暫く愛撫とキスを続け、何度かミュが絶頂した頃、ようやくミュが  
口を離して息を荒らげた。

ミュから離れて身体を起こすと、流れる汗が珠のように煌めき、ミ  
ユの身体を艶めかしくぬめり光らせている。

肋骨の凹凸まで手に取るように分かる薄い身体に小指の先のように  
可愛らしく存在を主張する勃起乳首が乗り、ミュの荒い息に合わせ  
て上下する。

下半身に目を移すと、股間だけがべろんと横にめくられて産毛のよ  
うに薄く茂る陰毛も、愛撫され続けてめくれた大陰唇の下から赤ピン  
ク色に充血する小陰唇とクリトリスが覗いているのも照明に照らさ  
れてよく見える。

絶頂の快樂にぼうつと私を見つめるミュは、局部を隠す事もせず、  
ただ待っていた。

私としてもミュの小さなマンコにチンポをハメたいという気持ちが抑えられず、ミュの両膝を掴んで持ち上げ、しっかりと水着の股間を脇にどけて膣穴に亀頭を押し付ける。

「ミュ、入れるよ」

「はい……先生の、お好きなように……♡」

柔らかな笑みを浮かべたミュの言葉が私を誘う。

熱く潤んだミュの膣肉を、むりむりと押し広げて力づくでミュを犯した。

「あ、く……う」

亀頭をぐっぽりと飲み込むと、ミュが微かに眉をしかめ、うめき声を上げる。

「大丈夫？」

「は、はい……大丈夫です。そのまま、お願いします……」

私の目をしっかりと見て答えるミュを信じ、両手の指が付いてしまいうようなほど細い腰を掴んで、さらに奥深くへとチンポを突き刺していく。

行き止まりには、薄い肉の膜があった。

「ミュ、少し痛いかも知れないけど、力を抜いていてね」

「は、い……あの、えっと……」

ミュは腰を掴む私の手首に、そつとくすぐるように指先を触れさせたり離したりしている。

私は、腰から手を離して両手共ミュと恋人繋ぎでしっかりと握りあった。

「あつ……♡ ふふ、先生は……いつも私の気持ちを分かってくさいますね……♡」

ニッコリと笑顔を浮かべるミュ。

じっと、私の目を見つめて言った。

「私の、処女……先生に、もらって、欲しいです……♡」

握りあった手をベッドに押し付けるように勢いをつけて、私のチンポがミュの処女膜を破る。

「つく、う……」

ずるずるとチンポを飲み込むミュのマンコの奥まで到達すると、小柄で処女のマンコは握るように強く締め付けてきた。

「しばらくこのままでいようね」

「い、いえ……大丈夫、です……」

眉をしかめて、それでも平静でいようとするミュだが、握りしめた手から緊張が伝わってくる。

キスをして唇を塞ぎ、覆いかぶさったままじっと待つことにした。

「ん……♡ちゅ……♡」

しばらくするとミュからも唇を吸ってくれるようになり、だんだんと握る手の力も、マンコの強すぎる位の締め付けもふんわりと緩んでくる。

そつと、ミュの細い脚が私の腰に絡んだ。

「ありがとうございます……先生。もう、大丈夫みたい、ですから……今度こそ、先生のお好きなように……動いて、ください……♡」

きゅつ、とミュから両手を握られ、照れくさそうな笑みを浮かべてピストン解禁のお達しがでる。

「うん、力を抜いていてね、ミュ」

ずるり、と腰を引くと強い抵抗と共に膣壁と擦れ合い、チンポが抜けていく。

ミュの膣はあくまで未成熟で、つるりとした引つかかりの少ない穴だった。

しかし、熱くて弾力があり、たつぷりの愛液で痛み無く出し入れできる。

まだ食べてはいけない青い果実の旨みを体現したような、今しか味わえない少女の膣だった。

「ミュの……、凄く気持ちいいよ」

「ほ、本当、ですか？ ああ……♡先生が、私の身体で、満足して、くれているん、ですね……♡」

くぶ、くぶ、と静かな水音を立てて私のチンポがミュの子宮を押し込むたび、ミュの言葉が苦しげに途絶える。

遠慮なく締付け、ひたすらに高刺激なミュのマンコはただただ射精

という『成果』を求めているかのようで、ミュの笑顔にも男を搾り取るメスの恍惚が混じり、普段絶対にしないくらいに口角が上がっている。

「お、男の人は……射精、っていうのを、するんですね……？ 先生なら、私の中で、たくさん射精して、くださって、構いません、から……♡」

もう少しミュの処女マンコを味わっていたい私の気持ちを見透かして、ミュが射精の催促をしてくる。

にぎ、にぎ、と可愛らしい力で手を握られ、腰に絡んだ脚がもつともつと私の腰を押し付けてミュの膣を引き伸ばすように奥深く押し込まれる。

「ミュは、射精してほしいの？」

笑顔を返すと、ミュは自分の言っている意味に気づいたのか、恥じらうように目を伏せてハの字に眉を下げた。

しかし、目を開けてちらりと上目遣いに私と目を合わせると、

「はい……♡ 先生に、私の中で射精して、ほしいです……♡ 私、先生を満足させた、証が欲しい……」

素直に言えた良い子に、金玉の中で煮えたぎった精液を一番奥にプレセントした。

「あつ♡ で、でてるっ♡ 先生の、精液っ♡ 私の中で、跳ねてっ♡」

ミュの声は聴いたことが無いくらいに大きく、射精される興奮だけで軽く絶頂しているように膣がわなわなしていた。

ぎゅうつ、と手を握り締め、腰に絡んだ脚で力強く抱き寄せられ、身動きが出来ない。

恍惚の笑みを浮かべるミュに、たっぷりと膣内射精した。

「んっ……♡ も、もう、全部出ましたか……？ 先生の精液で、お腹のなか……あつたかい……♡」

優しい笑みを浮かべ、ぎゅつちりと私を拘束したまま子宮に貯まる精液の感触に満足するミュを見ると、まだまだチンポが勃起している。

「あつ……♡」

ミュも膣の中で再び膨らんでいくチンポにすぐ気づき、私を見上げて嬉しそうに笑みを浮かべた。

「まだ、射精していただけるんですか？　では……よろしくお願いします……」

酔ったように頬をバラ色に染めて、ミュが笑顔でセックスの続きをおねだりする。

みっちり力強くチンポを締め上げる膣が、尿道に残っていた精液を絞り上げてミュの新品の子宮へと流し込んだ。

淫らに開花していくミュに大いに満足し、ぐりぐりと腰をグラインドさせて膣壁を満遍なく亀頭で擦る。

「んっ♡　せ、先生？　私は、先ほどみたいに、先生が気持ちよくなっていたらできれば、それで……あっ♡」

ぴく、ぴく、とミュの肩が小さくすくめられ、甘い声が漏れるポイントをじっくりと探る。

「ミュは、奥の方も大丈夫なんだね」

「えっ、は、はい……そこ、擦られると、あっ♡　声が、漏れてしまつて……んっ♡」

人によつては痛がるが、ミュは処女にして膣奥で感じる才能があるようだった。

ミュの薄い腹を内側から持ち上げるように、天井を亀頭で擦る。

「ふうっ♡　んああっ♡　っあ、え？　わ、私、へ、変な声を、あげっ♡　ううんうっ♡」

言葉が途切れ途切れになる位に、ミュが気持ちよくなる速度を保つてチンポを往復させる。

「うっ♡　おううっ♡　んお♡　ううんっ♡」

チンポを積極的に受け入れ、射精を待ち望む程にセックスに慣れ親しんでくれたミュだからこそ、膣の感度もそれなりに上がっているようだ。

狭い膣がうねるように締まり、ミュの大好きな射精を力いっぱいにおねだりしていた。

「やっぱり、セックスはミュも楽しんで貰いたいからね。どうかな、ミ



ユ？」

「お、っ、う♥ うんぐっ♥ ふーっ♥ ふうーっ♥」

握りあった手が痛いくらいに握りしめられる。私を気遣う余裕もなくチンポで善がるミュに、楽しんで貰えているのを感じて笑顔になった。

「そろそろ、出すよ、ミュ」

「あ、っ♥ だっっ♥ だしてっ♥ くださっ♥ あ、あああああ  
ああああっ♥♥♥」

快楽に翻弄されながらも、健気に射精をおねだりしてくれたミュに、特濃の精液をプレゼントする。

地下室いっぱいに一際大きいミュのイキ声が響き渡った。

「はあ……♥ はあ……♥」

するん、とミュの手から力が抜けて、ベッドへと落ちる。腰を拘束していた脚も、180度に開脚して離れていた。

ぐっしよりと汗で濡れた背中を抱き、ミュの小柄な身体を抱き上げて対面座位でベッドに座る。

奥深くまでチンポを突き刺したまま、ミュの望むように一番奥で精液を吐き出し続けた。

ミュはぐったりと私の胸に頭をあずけ、微かな力で胸板にキスしている。

すべての精液を吐き出すまで、ミュの背中を撫でて赤子をあやすように種付けを続けた。

「んくっ、んくっ、ぶはっ……お水と……お薬、ありがとうございます、先生。」

セックスで汗をかいた頬に後れ毛を貼り付けながら、ミュがスッキリした笑顔を浮かべた。

「ミュがセックスを気に入ってくれたみたいで良かったよ」

そう言っつてミュの頬を撫でて髪を剥がしてやると、いつものように目をギュッと瞑って照れてしまった。

しかし、おずおずと私に腕を伸ばして抱きつきたそうにしているの

で水着姿のミュを抱き寄せる。

「あつ……♥ えへへ……本当に、先生には何でもお見通しですね……♥」

お互いに汗でぬるつく身体にも全く嫌がらず、ミュが密着して私の胸に耳を当てる。

「なんだか、先生にお腹の奥で射精されると……凄く、心がふわっと、軽くなるというか……飛んでいるみたいで……」

ミュは私の心音に聴き入るように優しく目を閉じ、全身で感触を味わうように私にぎゅっと抱きついた。

「私……先生とのセックス、凄く、好きかも……知れません」

水着の胸の奥から、とく、とく、とミュの心音が伝わり、その暖かさが身体に伝わるかのようにだった。

「先生。先生は、生徒を皆セフレにしてるんですね。私も……先生のセフレに、なれますか？」

寝ているかのように、ミュの声は穏やかだった。

私はミュの三つ編みにした髪を優しく撫でながら答えた。

「うん。もちろんだよ」

顔を上げたミュが、じいっと私の目を覗き込む。

「私は……目立たないし、先生に好かれるような特別な魅力もないから、先生の一番にはきつとなれないですけど……でも……先生とのセックスは、大好きですから。誘っていただいたら、いつでも、セックスしに来ますから。だから……ずっと、ずっと、私と、セフレでいて、くれますか？」

「うん。ミュが望み続ける限り、ずっとだよ」

私の返事を聴いて、ミュはニッコリと笑った。

そのまま、水着を脱ぎ捨ててセフレ同士のセックスへともつれ込むのだった。

## セフレの使命（コハル・ウイ）

トリニティの生徒たちが、シスターフツドの謎の遺跡の調査をするために無人島に行くということで、引率として付いてきた。

生徒の内訳はウイ、ヒナタ、ハナコ、コハルなので、コハル以外は私のセフレだ。

なので……

「あつ♥ あつ♥ セ、先生っ♥ ちょ、調査を、先にしませんと……♥」

拠点として作ったテントの中で、水着姿のウイをバックで犯している。

「せっかく無人島に来たんだし、バカンスも楽しもうね」

ほっそりとした体躯に手足がスラリと伸びたウイの胸を、黒いビキニが頼りなく覆っている。

水着の下はすでに床に落ち、薄茶色の肛門とチンポで押し広げられた赤ピンクの膣口もよく見えていた。

「し、しかし、ここには仕事にっ……♥ あつ、あつ♥」

「ウイはとても真面目で偉いね」

長い黒髪をポニーテールにしたウイの頭を撫でながら、腰を強く打ち付けてウイを絶頂間際まで追い詰める。

「はぐっ♥ うっ♥ ああーっ♥」

膣がヒクヒクと痙攣し、すぐそこに絶頂が迫ってきた所でピタリと腰を止めた。

「じゃあ、セックスはここまでで良いかな？」

「う、ううっ♥ ず、ずるいです、先生……♥ こんな所で止められたら、仕事になりません……♥ で、ですから……」

ウイが振り返り、普段は知的な目を哀れっぽく細めて懇願する。

「せ、先生の、たくましいオチンポで……沢山犯してください……♥  
先生の気持ちいいオチンポでイキたいんです……♥」

「良い子だ」

図書館に赴くたび交換日記を書いてからセックスをしていたため、

ウイは私に媚びる仕草がすっかりと身についていた。

ウイの細い腰を抱えて、ガンガンと奥を突き崩す。

「あっ♥ ああっ♥ ああうっ♥」

ぱん、ぱん、と肉を打ち鳴らす音と、ウイの善がり声がテントに充滿し、もちろん外にも筒抜けだった。

無人島であり、コハルは今ハナコと水を汲みに行っているから心配は無いが……ハナコのお遊びにコハルが付き合わなくなったら帰ってきてしまうため、そろそろ射精しておく必要があった。

「出すよ」

そう短く告げるだけで、ウイの尻がくいつと持ち上がり、射精待ちのポーズになる。

ウイの小ぶりの尻を鷲掴みにして、3段の筋肉のリングが強く刺激してくる絶頂間近のウイのマンコを余すこと無く味わいながら、ゴシゴシとマンコでチンポを扱き立て、一番奥に射精した。

「あっ♥ あ、あああああああっ♥♥♥」

一際大きい絶頂声を上げて、ウイが背中を反らして痙攣する。

外からの日差して蒸し暑いテントの中にはウイと私の性臭が充滿し、すっかり愛の巢となっていた。

ゴム越しに大量の精液をウイの子宮に押し付けて、全て射精する。

「はーっ♥ はーっ♥ はーっ♥」

ウイの細い肩が荒い息と共に上下し、肩甲骨に沿って大粒の汗が白い肌を滑る。

握りしめた跡の残るウイの尻を優しく撫でながら、ぬぼんつとチンポを引き抜いた。

「はうっ♥」

ウイの絶頂がぶり返し、尻が跳ね上がる。

ウイのビラビラの大振りなイヤらしいマンコが赤く充血し、ひくひくと満足そうに痙攣を続けていた。

ゴムを外して縛ってから、タオルでウイの股間を拭いて上げる。

「あっ♥ せ、先生っ♥ だ、大丈夫、です、じじ、自分でやりますからっ♥」

ぬつとりと粘度も味も濃いマン汁を拭い去ってから、洗い物カゴへと投げ入れた。

「うう……もう……赤ちゃんじゃないんですから、自分で出来ますってば……♥」

のろのろとウイの手が水着の下を掴み、私の目の前でセックス直後のマンコがビキニにしまわれていく。

「ごめんね。ウイのマンコが気持ちよかったから、最後までお世話したくなっちゃって」

「そ、そんな事あります……？ うう……恥ずかしい……」

腰から下に力が入っていないウイの手を引いて、テントの外へと出ていく。

「あ、お疲れ様です、先生、ウイさん。どうぞ、アイスコーヒーを淹れてありますよ」

テントの外は林になっており、程よく日光が遮られている。

椅子に座って待っていたヒナタにタンブラーを渡され、私達はぐびぐびとコーヒーを飲んだ。

セックスで汗だくになった身体に冷たいコーヒーが染み渡り、そろってため息がもれる。

「し、しかし、調査もまだなのに、こんな事をするというのは、その……」

真面目なウイが少しうなだれて、セックス直後の身体を恥じるように羽織った上着の前を閉じる。

「まあまあ、ウイさん。せっかく水着で浜辺に居るのですし、少しくらいは楽しみましょう！」

ニッコリと笑顔で私とウイの手を取ったヒナタも、当然水着姿だ。身じろぎしただけでゆっさりと重そうに揺れる乳房が木漏れ日で

輝いて目を引く。

しっかりとくびれた腰は大胆に露出し、セックスの時に掴みやすそうな構造をしている。

「うふふ、後で私もたっぷりお相手してくださいね、先生♥」

クスリと、いつものように無邪気な笑顔でヒナタがセックスの予定

を入れてくる。

「うん、もちろんだよ」

ヒナタに握られた手を握り返し、熱い視線をしつかりと受け止める。

「うう……本当に、ヒナタさんも先生のセフレなんですね……ふ、複雑というか、反応に困るというか……」

気まづげに目をそらすウイに対し、ヒナタは無防備にすり寄った。

「私はウイさんもセフレになつてくださって、とっても嬉しいです！

夜はぜひ、ご一緒しましょう♥」

「ご、ごいっしょ!? そ、そんな破廉恥な事をヒナタさんが言うなんて……!」

何やら衝撃を受けているウイと、3Pを心待ちにしているヒナタで談笑していると、コハルとハナコが帰ってきた。

「うふふ♥ 遅くなって申し訳ありません♥」

「ほんとに遅いわよ! もう! ちよつかいかけて来すぎ!」

満面の笑みを浮かべたハナコと、ぷりぷり怒るコハルがキャンプに戻ってくる。

そちらにもヒナタがコーヒーを渡し、大量に水を担いできた2人が汗を拭いながら飲んでいった。

「さて、おふたりも帰ってきたことですし、少し休憩してから調査をしましょう」

子宮イキをキメてまだ緩んだ雰囲気を残しながらも、真面目に仕事をしようとするウイ。

「うふふ♥ そうですね。これから日も高くなりますし……遺跡調査をしたほうが日差しも避けられて良いと思います」

「では、参りませうか」

「が、がんばり……ますー!」

その後、近くの遺跡を探索した。

元は迷路のような通路になっていたと思しき石を積んだ建物が、結構な原型を残して自然の中に佇んでいる。

ウイが全員バラバラに探索を試みようとする提案し、その場で散開し

た。

そのはずだったのだが。コハルが私のシャツの袖を掴んで離してくれない。

「……今は手分けして調査するはずじゃ？」

「な、なにか問題でもあるの？ さつきも言ったでしょ!? 先生とハナコを監視するのが私の使命なの！」

と言いつつ、水着の身体を私にくつつきそうな位に近寄せてくる。なんだかんだと言いつつ、コハルは遺跡の雰囲気は怖くて誰かと一緒に居たいのだろう。

「そっか。じゃあもつと近づいていないとね」

そう言つて、コハルのくびれが少ない裸の腰を抱きよせる。羽がシャツを撫でる感触が気持ちいい。

「ひゃあっ!?! な、な、何するの！ エッチ！ エッチ！ こ、こんな場所で迫ってきて、あんなことやこんな事をするつもりでしょ！ し、死刑！」

カツと目を見開いて騒ぎ出すが、私の腕から逃れようとはしない。これはコハルもセフレにできる、と手応えを感じた所で、近くの茂みからガサツと音がした。

「……あれ……？」

出てきたのはウイだった。

怯えたコハルがピツタリと私にしがみつき、水着の薄い胸を押し付けてくるのでチンポがイライラしてくる。

ウイとも同行するか尋ねてみたが、結局そこでは別行動することになった。

私の背中に隠れるようにしがみつくとコハルとウイを見送る。

見えなくなった所で、コハルが言い訳のように早口でまくしたてた。

「べ、別に緊張なんかしてないわよ!? 誰かに聞かれたらどうするつもりなの！ 私がすぐ緊張するような人に思われちゃ……」

そこで更に別の茂みからがさつと音がする。

「ひいっ！」

またコハルが私に胸を押し付けて抱きついてきた。  
出てきたのはヒナタだ。

「あつ、先生」

チラリと下を見て、私が半勃起しているのを確認するが、ヒナタは特に顔色に出さずにコハルにも声をかける。

「後ろの方は……コハルさん、ですよね？」

「……あ……こ、こんに……ちは」

借りてきたネコのように大人しく、コハルがチラチラ上目遣いでヒナタの顔を見ながら挨拶をした。

「はい、こんにちは。先ほどはウイさんともお会いしましたし、面白い遺跡ですね！」

ヒナタの屈託のない笑顔に照れて目をそらしてしまったコハルの頭を撫でると、キツと私を睨んでヒナタに見えない背中をぱしぱし叩かれる。

ニコニコと笑顔で手を振りながら去っていったヒナタとは別の道へ進み、また遺跡の散策を始めた。

そんなふうに暫く歩いてはみたが、目を引くものは何もない。

それこそ部屋さえも無く、通路と通路だった瓦礫の山が広がっている。

「お疲れ様。頑張ったね、コハル」

「ふう……って、そこまで疲れてるように見えた!？」

気を張っていたコハルが疲れを息として吐き出したようだった。

そこで、更に別の茂みがガサツと音を立てる。

「よ、よしっ。今度は私から挨拶するんだからっ！　そこで見ててよね、先生！」

腰をひねってもくびれない子供の身体にチンポをイライラさせつつ、茂みにズンズン歩いていくコハルを見送る。

「こ、こ……こんにち……わっ!？」

そこにいたのは、青白い肌にビキニ水着を着てガスマスクを付けた女性……ユステイナ聖徒会の複製ミメシスだった。

「きやあああああつ!!!」



コハルならずとも驚くシチュエーションで、泡を食って逃げ出す。複製達はなぜか構えた銃から水を大量に放出し、私とコハルを水浸しにしながらもコハルの射撃で斃れて消えていく。

逃げ切った時には、2人ともずぶ濡れだった。

安心したことで腰が抜けてしまったコハルが立てなくなってしまうので、おんぶして帰ることにする。

水に濡れたコハルの身体は冷えており、暖を求めてか遠慮なく肌を密着させて来るためチンポがイラついて仕方がない。

「うう……は、はずかしいから、下ろして……」

「でも立てないんでしょ？ 危ない所にコハルを置いていくわけにはいかないよ」

「う……うん……ありがと」

不安からか幾分か素直なコハルが、きゅつと首に腕を絡めて背中に身体を預けてくる。

薄い身体の感触を堪能しながら私達はキャンプに戻った。

キャンプに戻ると、ハナコがニコニコとからかって来るのでコハルが叫び声を上げるようになった。

話し合った結果、複製の攻撃も特に危険というほどではなかったため調査続行となった。

その後も、地下遺跡をヒナタが砲撃して崩落させたり、レモン農園でハナコとセックスしたり、灯台でヒナタがどかんどかんと砲撃しまくった後セックスして休憩したり、滝裏の洞窟でハナコが誰にも聞かえないように卑猥な言葉を言いまくったり、様々な冒険を経て島の秘密に到達した。

わずか1日にして調査を終えてしまったので後はゆつくりと休む事になり、私はコハル以外の全員とセックスしたので休憩するために滝裏の洞窟で涼むことにした。

水辺なのでサーフパンツ一丁の涼しい格好に着替えている。

コハルがモモトクで突然連絡を入れてきて、こちらにやってくる事を告げて来たので場所を伝えて待つ。

ウイ、ハナコ、ヒナタの絶頂した蕩け顔を思い起こしながらぼーつと過ごしていた所、忙しい足音が聞こえてきた。

「やっと思つけた、先生！」

水着姿のコハルが、大股で歩きながらやってくる。

「……滝を眺めながら、ぼーつとしてた？ またいつもみたいなのに、変な妄想してたんじゃないの？」

コハルは、私に変な妄想をしていないかと思張りに来たらしいが……私は今日行ったセックスを思い返していただけなので妄想はしていない。

座っている私の真正面で堂々と立ち、股間をちようど見せつけるようにしてくれるコハルにチンポが再度イライラしてくる。

私は適當なことを言つてコハルと一緒に休むようもちかけた。

素直なコハルは私の隣に座り、一緒になつてぼーつとし始める。

滝の落ちる音と、ときおり鳥の鳴き声だけが響き、水しぶきが舞うためとても涼しいこの場所は避暑地としてとても良い。

隣に座るコハルは言われた通りに空を見たり、チラチラと私を見たりしているが、特に気を遣わずに膝を抱えて座っているため水着の股間が見えてしまつており私のチンポをイライラさせてくる。

「ん……」

コハルは時折自分の腕をさすつていた。ここは冷えるので、コハルにとつては寒いくらいなのだろう。

「コハル、寒いならもっと近くに來るといいよ」

「なっ!? 何言つてるの!? そう言つていやらしいことするつもりでしょ! 変態! 死刑よ!」

コハルの思っている通りなのだが、セックスしたいのでなんとか口説き落としたい。

「でもさつきから寒そうじゃない？」

「それは……まあ……ていうか! こんな寒い所で座つてるのが悪くないじゃない!」

「私は別に寒くないからね」

「ううー……」

隣の地面にカバンからセックス用に持ち歩いているタオルを敷いてポンポンと叩いて示すと、手で身体を浮かせて少しずつ尻をずらし私の隣に座ってくれる。

「あっ……タオルだとこんなに暖かいのね」

「でしょ？　腕も寒くない？」

そう言つて、コハルの肩の辺りに触れる。

「ひゃっ……あ、あつたかい……」

身をすくませたものの、振り払わずにそのまま触らせてくれるコハル。

「女の子だし、身体を冷やしすぎるのは良くないからね」

カツと目を見開いて顔を赤くするコハル。

「な、なによ！　え、エッチな事言わないで！　禁止！　死刑！」

「普通だよ、普通。……コハルの身体、かなり冷えてるね。もっと温めないよ」

今度はコハルの身体を抱き上げて、自分の膝の上へと載せた。

「わ、わああっ!?　な、なな何するのよ！　やつぱりそうなんだ！　だ、誰も来ない所で私にエッチなことするつもりなんだ！」

「そうかもね」

コハルの小さな肩に手を置き、手の平から熱を伝えるようにゆっくりと腕を撫でていく。

「は、ん……」

冷えた身体が温められる心地よさに、コハルが甘い声を上げた。

「せっかくバカンスに来たんだし、役目はさておいてコハルもゆっくり休もうよ」

「うう……でも……」

「誰かに聞かれたら、私の指示で休んだって言えば良いからさ」

「そ、そんなの……理由にならないし……」

そう言いつつも、大人しく私の腕の中で丸まっているコハル。

「私はコハルと2人きりの時間を大切にしたいな」

「なによ……それ……」

腕をさすつても抵抗しないコハルの様子を見て、次は腰に手を当て

る。

「ひゃ……♥」

くすぐったそうにするものの、そのまま触らせてくれるコハルに甘えて、ぷにぷにとしたコハルのお腹に手を当ててじつくりと温めた。

次に太ももに手を置く。

「……………ぐくっ」

静かな洞窟の中で、コハルが固唾を飲む音が聞こえる。

太ももの内側を念入りにさすっても、コハルは抵抗しない。

私はチンポを勃起させ、コハルの小さな尻にグリグリと押し付けていた。

「ねえ、コハル」

「な……何よ」

コハルは腕を組んで目を覆い、知らないフリをして私のセクハラを受け続けている。

「コハルとエッチな事がしたい」

「……………うー……………だ、だめ」

弱々しく、消え入るような否定にチンポのイライラが募る。

「お願い、コハル。コハルが可愛すぎて我慢できない」

「そ、そういう事、皆に言ってるんでしょ……………？ 分かるもん、そのくらい」

「皆可愛いからね」

「ほんとに言ってるんじゃない！ もう、先生のバカ！ 変態！ しんじやえ！」

怒って膝が開いた所を、コハルの股間にふれる。

「あっ♥」

「でも今は、コハルとしたいんだ。お願い、コハル」

そう言いながら、コハルのクリトリスの辺りをスリスリと水着越しに撫で回した。

「だ、駄目だってば……………♥ あっ♥ そ、そんな所触らないで……………♥」

身を振ってイヤイヤと抵抗してくるが、まるで力はいっていない。

「私も我慢できないから、イヤって言ってもしちゃうよ」

グリグリと、押しつぶすようにクリトリスに強い刺激を与えると、コハルの股がきゆうと閉じ、私の手腕を挟んだ。

「ああっ♥ だめっ♥ だめえ♥」

言葉とは裏腹に、愛撫する私の腕に縋り付くように抱きつき、更に背中を預けてくるコハル。

カリカリとクリトリスをひっかきながら、水着の胸元に下から手を入れてずらし上げていく。

「あっ♥ そ、そこ♥ ち、乳首、触られるの、だめっ♥」

コハルの声はどんどん甘ったるく、か細くなっていく。

「コハル。エッチなことしよう?」

優しく乳首を摘んで、クリクリとひねるように愛撫すると、コハルの声は面白いように蕩けた。

「だ、だめえ……♥ そこ、だめなの……♥」

「これ、好きなんだ? もっとして上げるね」

クリトリスから手を離し、愛撫で開いた股から腕をはずす。

両手でコハルの胸にかかった水着を完全にずらし、青空の下にコハルの小さな乳房を露出させた。

「こ、こ、こんな所で、何考えてるのよお……♥」

「コハルとエッチな事をしたって考えてるよ」

腕の中でもがくコハルに対し、くりくりくり、と乳首を弄ると、

「~~~~~♥」

声もなく悶絶し、顔を真っ赤にして気持ちよくなってくれる。

「コハルも気持ちよくなってるし、ね、お願いだよ。もっと気持ちよくしてあげるから」

乳首で軽く絶頂したのか、コハルが脱力して私に背中を預け、上を向いて目を合わせた。

「はあ……♥ はあ……♥ も、もっと、気持ちよく……♥」

ハッ! と目を見開いて、乳首を手ブラで隠してしまう。

「だっ! だ、だ、駄目……よ! そ、そんな事……そんな事……♥」

両手を胸に当ててしまったので無防備になった下半身に手をやり、

水着を膝までずり下げた。

「きやあああつ!? なな、何するの!?!」

「もちろんエッチなことだよ」

「……………! そ、……………そんなに、したいの?」

真つ赤な顔で左右に目を泳がせながらも、コハルは逃げたりしなかった。

「うん、したい。とつてもしたい。コハルとエッチ出来なかったら他の3人とまとめてセックスする」

「なつ!? へ、へ、変態! スケベ! しんじらんない! ……ううーっ……………そこまで、言うなら……………し、して上げるから……………♥」

ついにセックスオーケーの返事を聞き、私の勃起が最高潮に達した。

「ひやつ!?! あ、あ、熱くなってる……………♥」

「コハルがエッチなことさせてくれるのがとても嬉しかったから……………」

「恥ずかしいこと言わないで……………!」

すでに殆ど生まれたままの姿になっているコハルの、半端に残っている水着を剥いで横の地面に落とした。

「あつ……………う、うう……………恥ずかしい……………」

胸と股間を腕で隠すコハルの、無防備な耳を食む。

「ひやつ♥ そ、そんな所、な、舐めないでえ……………♥」

声が震え、コハルの側頭部から生えている羽が震える。

コハルは私の顔をサワサワと羽で撫で、首筋を差し出すように頭を傾かせて舐めやすくしてくれた。

「これも気持ちいいんだ?」

耳元でささやきながら、ガードが甘くなっている胸元に手を忍ばせる。

「ち、違うもん……………♥ 私は……………こんな事で、気持ちよくなったり……………あんっ♥」

私の指がコハルの乳首をつまみ、コハルの声が甘く蕩けた。

「気持ちよさそうだよ?」

「ううーっ♥ ず、ずるい……♥ そんなことっ♥ された、らあ♥」  
泣いているような鼻声で、コハルがぐずるように性の快楽に絡め取られていく。

「きもちっ♥ よく、なっちやうの……っ♥ しかたない、じやないっ♥」

「素直に言ってくれて嬉しいよ、コハル」

ガードがどんどん甘くなるコハルの小さな両乳首をつまみ、シコシコと扱き上げる。

「あっ♥ あっ♥ あっあっ♥ ああああああっ♥」

その昔ユステイナ聖徒会が使った滝裏の洞窟に、コハルの甘ったるい声がいんいんと響き渡る。

「コハルの気持ちよさそうな声、凄く可愛いよ」

「はっ、あ、あああっ♥ ひっく、ううううっ♥」

乳首愛撫だけでコハルはトロトロになってしまっ、言葉を発することも出来ないくらいに乱れている。

「一回、イッておこうか」

「やっ♥ だめっ♥ それ、された、らあっあああああっ♥♥♥」

乳首を押しつぶすようにギュツと強くつねると、コハルの小さな体がガクンツと痙攣し、私の腕の中で暴れた。

「ひっ♥ つぐ♥ うっ♥♥♥」

可愛らしい背中をエビ反りにして、呼吸もままならない位に快楽に打ちのめされているコハルの様子が、私のチンポをイライラさせてやまない。

とはいえ、小柄なコハルのマンコはピッタリと閉じてスジを描いており、入れる前にほぐす事が必要と思われた。

「はい、立ってね、コハル」

「はひっ♥ はひっ♥ ……えっ?」

折れそうに細いコハルの脚を抱え、私の目の前に立たせる。

私の目の前にコハルのマンコを持ってきて、そこにむしゃぶりついた。

「んきゅうううううっ♥♥」

じゅるっ！　じゅるるっ！　とコハルの薄い塩味のマン汁を飲み干しつつ、大陰唇も小陰唇も薄く小さな造りのコハルのマンコをベロベロと舐め回す。

コハルは反射的に私の頭を掴むが、それ以上何も出来ず……お腹を頭の上に乗せる形でなんとか立っている状態でクンニを受けるしかない。

鼻先に当たる小さなクリトリスの勃起を感じながら、小さなコハルの膣穴に舌をねじ込む。

大きく音を立てながら、顔全体を使ってコハルのマンコすべてに刺激を与えた。

「はぐっ♥　ふんっつぐ♥　う、うううううっ♥♥」

コハルの小さな手がガツシリと私の頭を掴み、細い足をピンと伸ばしてセックス以外の時は絶対に出せない声を上げ、全身で性の快楽を表現してくれる。

「あ、ああああああつあああつ♥♥」

洞窟の中に死者が眠っていたとしても飛び起きてくる位に、コハルの甘ったるい叫びが反響し、吸い込まれていく。

コハルの熱々のマンコの中は狭く、小さなヒダがぷりぷりと弾力をもって私の舌を歓迎してくれるセックスの才能を感じる名器のようだった。

ヒダの一つ一つまで丁寧に舐め回して、コハルが喜んでくれる所を探そうとするが……

「あ、ーっ♥　いくっ♥　イック♥　イクイクっ♥　イクツ♥」

腰がガクンガクンと跳ね、舌をギュウギュウと膣が締める。

どこを舐めてもコハルはいきまくり、私の顔を愛液でびちゃびちゃにしてくれた。

膣もヒクヒクと元気よく開閉しているので、そろそろ大丈夫かと思いい顔を離す。

「……あ、っ♥　う、あ……♥」

膝がカクカクと笑い、立っていることがままならないコハルをヨイシヨと膝の上に横抱きに座らせてやると、口を半開きにしたまま焦点



の合わない目で虚空を見つめている。

すぐにチンポを入れたくなつたがこらえて、口元の愛液をタオルで拭つてからコハルにキスをした。

「あ……♡ん、う……♡ちゅ……♡」

コハルは私のキスを受け入れて、乳飲み子のように舌に吸い付いてくる。

汗に濡れた身体を撫で回し、ビンビンに勃起した乳首をゆつくりとこねると、甘い声と共にコハルの目に輝きが戻ってくる。

「ぶはっ！ せ、先生っ！ な、なんてことするのよ……!? あ、あ、あんな、エツチで、気持ちい……♡ つじやなくて！ へ、へ、変態！ 変態！ 死刑!!」

正気を取り戻したコハルが開口一番罵ってくるが、顔は真っ赤だし乳首もクリトリスもビンビンだ。

「気持ちよかつたんだよね？」

一言でコハルの怒りはかき消えてしまい、キョドキョドと視線を泳がせる。

「!! う、ううう……♡ し、しかたない、じゃない……♡ 先生に、あんな事、されたら……我慢できるわけ、ないもん……♡」

キラキラと、興奮と涙で輝くコハルの瞳が私の顔を上目遣いに伺っている。

「コハル。これからコハルとセックスしたい」

「……………うん。いい、よ」

絶頂の熱に茹だつたコハルの頭が、ついにセックスを解禁した。

「……………や、やさしく、してね？」

不安が一滴混じつた、セックスへの期待に輝く瞳を見て、私はコハルを抱きしめてキスした。

「あ、む……♡」

コハルも目を閉じてキスを受け入れ、おずおずと私の首に腕を絡めて抱きついて来てくれる。

軽い身体を太ももの下から持ち上げ、正面を向き合う対面座位の形にした。

勃起チンポの先でにちゃにちゃとマンコをほじり、膣穴にピッタリと合わせてからコハルに声をかける。

「さ、ここに腰を下ろしてみて」

「う、うん……」

コハルは不安から私に強く抱きつき、へっぴり腰で震えながら腰を下ろそうとする。

それだとすぐに位置がズレてしまうので、コハルの小さな尻を掴んで力強く膣穴に龟头をねじ込む。

「あつ、つう……！」

コハルが苦痛のうめきを上げるが、長くやっても仕方がないので思い切りコハルの尻を下げた。

ぷつん、と平均的な処女膜の抵抗を貫き、狭くて熱いコハルの膣を蹂躪する。

「ああああっ!!」

ぎゅう、とコハルの腕が私の身体をがっちり固定する。

「かつ……はっ……うううう……」

暫くうめき声を上げていたが、数分でコハルの息が落ち着いてくる。

「う、う、うそつき……！ 全然やさしくないじゃない……！」

「いやいや、一気にやるのが一番痛くないんだよ、本当に」

「ほ、本当……？ ま、まあたしかに、ジワジワ来られても困るけど……」

冷や汗をかいたコハルの背中を撫でながら、ずっぷりとチンポを突き立てた状態でゆっくりと待つ。

そして、コハルのマンコから強張りが取れ始めた頃、私の顔の横にぴったりと頬をくっつけたコハルが声を上げた。

「あ、あの……先生。私、そろそろ……大丈夫、かも」

「うん。そつと動いてみるよ。痛かったらすぐ言っつてね」

こくん、と頷く気配を感じ、コハルの一番奥をグリグリと龟头で撫で回す。

コハルの膣は熱く、動かすと小さな膣ヒダが一粒一粒際立つて竿を刺激してくる良いマンコをしていた。

「うっ、く……ちよ、ちよっと、それ、苦しい、かも」

「そっか。じゃあこっちな……」

今度は逆に、奥を動かさずに入り口近くをグリグリと動かした。

この動きのほうがコハルの膣の気持ちよさがハッキリと感じられ、無数の舌尖で竿を舐め回されるような快楽に我慢汁が漏れる。

「あっ♥ そ、そこっ♥ ぴりぴりっ、って♥ くる……♥」

「これ気持ちいいんだ?」

「う、うう……うん♥」

小さな声で、確かにセックスの気持ちよさを認めたコハルに興奮し、我慢汁がびゆるっとコハルの子宮口にかかった。

「んっ♥ な、なに? お腹の中で、跳ねた?」

「コハルが可愛くって興奮しちゃったんだよ」

身体を少し離してコハルの顔を見ようとする、コハルは頭についている羽で目元を覆ってしまった。

「ば、ばか……♥」

顔の赤さと、笑顔に失敗したようなふにやふにやした口元が可愛らしく、そのままの姿勢でセックスを再開する。

にゆぷ、にゆぷ、と静かな洞窟に、コハルの恥ずかしい水音が響く。「ふう……ふう……♥」

膣の強張りは薄れ、少しずつピストン運動も出来るようになってきたコハルの膣を、上から下まで味わい尽くす勢いでゆったりと満遍なく刺激する。

「はっ、あっ♥」

コハルも目元こそ隠しているものの、それが逆に照れずにセックスに集中するのに良い効果をもたらしていた。

ひたすらにチンポの感触に集中し、時折腹の底から気持ちよさそうな声を上げる。

亀頭にコハルのヒダが引っかかり、処女の締まりも相まって強烈に精液を絞ろうとしてくる。

素直なコハルの弱点をあらかじめ把握した所で、コハルの太ももの下に腕を入れてピストンの深さを制御する。

「あっ♥ あっ♥ な、なにっ♥ 気持ちいいところ、ばっかり♥」  
敏感なコハルがすぐに気づいて甘い声を上げるが、もう止まることはない。

にゅっぽ、ちゅっぽ、と愛液を掻き出す水音が激しくなり、羽で顔を隠したコハルの口が大きく開いて喘ぎ声をひっきりなしに上げる。  
「せ、せんせえっ♥ ここ、だめっ♥ なんか、むずむずしてっ♥ で、出ちやいそうだからっ♥」

男を興奮させる事を言ってくれるコハルにますます勃起を硬くし、コハルのGスポを強く擦る。

「だ、だからあっ♥ それ♥ だめなのっ♥ やあっ♥ で、でちやうっ♥ でちやううっ♥」

甘い声が切羽詰まり、私の肩を掴むコハルの小さな手に力がこもる。

「あ、ああっ♥ ああああああああっ♥♥」

ぷしっ、と音を立てて、私の股間にコハルの潮が吹き付けられる。

股間が濡れてしまうが、サーフパンツなので気にせず犯し続ける。

「だめっ♥ だめっ♥ へんになるっ♥ とめっ♥ とめてえっ♥

っあああああっ♥♥♥」

目隠しのまま絶叫し、Gスポの連続絶頂をキメるコハル。

みっちりと締まる膣に、こらえきれず私も射精した。

「あっ♥ あ、あ、あああああ………♥」

脚だけでなく腰の羽もピンと伸ばし、余すこと無く精液を絞ろうと膣がヒクヒクと痙攣して何度も圧迫してくる。

下から上に、ポンプのように汲み上げられた精液が一滴残らずコハルの若々しい子宮へと吸い上げられた。

「はふ………♥ ん………♥」

目元を隠すコハルの羽が、気の緩みで左右に開き……チラチラと快楽に染まった瞳が見えている。

半開きの口からはとろりとヨダレが垂れて、初セックスと膣内射精

に大満足してくれたことがよく伝わってきた。

絶頂で痙攣していた脚がパタリと力なく地面に落ち、コハルの全身がぐったりと弛緩する。

ヘイローがチカチカ点滅し、意識が落ちようとしていた。

「おっと、これ飲んで、コハル」

たつぷりと子宮に精液を詰め込んだまま寝落ちすると、コハルが妊娠してしまうかも知れないので避妊薬だけ飲ませる。

「んく……んく……ふぁ……」

水を飲んでもコハルのヘイローの明滅は収まらず、初セックスを全力で楽しんだ疲労に包まれたコハルは眠りに落ちていった。

「お休み、コハル」

「あら、先生。おかえりですか？ ……ふふ、2人で一緒だったんですね♥」

寝ているコハルの股間を始末した後、そのままおぶって帰ってくる。とキャンプでハナコが迎えてくれる。

「コハルちゃん……先生の背中でこんなに安心しきって……まさか……」

「うん、コハルとセックスしたよ」

そう告げると、ハナコの切れ長の瞳がまん丸く見開かれ、満面の笑みを浮かべた。

「まあ！ まあ、まあ、まあ！ そうなんですね！ ついにコハルちゃんも先生のセフレに！」

ニッコニコの笑顔で踊るようにクルクルと回りだすハナコ。

「これで、夢の補習授業部5Pセックスが出来ます！」

無邪気に、普通の女の子のよう……ではないが、楽しげに夢を語るハナコに私も笑顔になった。

「コハルはまだ処女喪失したばかりなんだから、手荒なことは駄目だよ」

「もちろんです、コハルちゃんにも楽しんでもらわないと♥ でも……」

ハナコが私に身体を擦り寄せ、ワイシャツ一枚ごしに男好きのする肉感的な身体が柔らかくたわんだ。

「もう私、5Pセックスのことで頭がいっぱいで……♥ 先生、どうか私の身体を鎮めてくださいませんか……？」

「もちろん、構わないよ」

コハルをテントに優しく寝かせてから、私のテントにハナコを連れ込んでまったりとセックスするのだった。

## 森の中のお手製ラブホ（ウイ）

——素敵な場所をようやく見つけました

というウイのモトトクを見て、その「素敵な場所」に向かう。

木々の生い茂る無人島の小道を行くと、脇の茂みからガサガサと物音がして、

「あ、先生。どうぞこちらへ」

ウイの声が招き入れてくれた。

中を覗くと……レジャーシートに、小さな机やクーラーボックス、トランクを載せて間仕切りにしており、真ん中にウイがちよこんと座っている。

机の上には氷の浮かぶコーヒーの入ったコップや本などが並んでおり、ウイのための空間になっている。

何より、こちらを見上げて微笑みを浮かべる水着姿のウイが可愛らしい。

「先生も中に入りますか？ 意外と、居心地いいですよ」

「それじゃあ、お邪魔させてもらうね」

水着姿のウイと密着できる機会は逃さない。レジャーシートの隣に、ウイとくつついて座る。

「ひあぁっ、せ、先生？ 少し近い、ような……」

汗をかいたところに涼しい風を浴び、しっとり冷えたウイの太ももに触れる。

ガウンがずれてむき出しになった肩を抱き、撫でさすった。

「ん……温かい……不思議ですね、外に居るのに普段より冷えている気がします」

ウイはごく自然に私の肩に頭を載せて、こちらに寄りかかってくる。

「汗をかくし、ここは風が涼しいからね。……もつと温めあおうか？」

そう言うと、ウイが恥ずかしそうに目を伏せながらも私に向けて顔を上げてくれる。

「あ、あの……セックスは、私も、したいのですが……コーヒーを飲ん

でからでないよ、こぼすかも知れないので……」

「そういえば、私も喉が乾いていたんだ。一杯貰えるかな？」

私の目を見て、ウイがふにやつと笑う。その可愛らしさに、思わずキスをした。

「んっ……♡　ちゅ……♡　ふふ、まだですよ、先生♡　さ、コーヒーを……」

未だ氷が浮かぶコップを差し出してくるウイ。

「そうだ、ウイが口移しで飲ませてよ」

ウイがギョツと目を見開いて私を睨んでくる。

「な、な、な……そそ、そんなことを……」

「せっかくウイと2人きりの秘密のカフェだからね。お願いできないかな？」

ウイの豊かな髪を手櫛で撫でる。

ウイは氷の浮いた水面を見つめながら俯いていたが、意を決してコーヒーを口に含んだ。

少し膨らんだ頬と突き出た唇が可愛らしくて、またキスをする。

「ん……」

ウイの飾り気のない唇の端からコーヒーがつう、と漏れる。

清涼なアイスアメリカカーノが私の口内に流れ込み、ウイの柔らかかな唇の甘美な感触と共に香り高い余韻を残していく。

「う、んく……ふう、先生、やはり上を向いたまま口移しなんて難しいですよ」

ウイの白い肌に、唇から首筋、胸元までアイスアメリカカーノの這った跡が残っていた。

「おっと、もったいない」

上から丁寧に、ウイの体に唇を押し付けて舐め取る。

「あつ♡　せ、先生、あ、後で水で洗えば、大丈夫ですから……♡」  
そう言いながらもウイは無防備に首筋と胸元を差し出して舐めさせてくれる。

音を立ててウイの体を吸い、鎖骨、胸の谷間、へそまで下がっていく。



「はっ ♥ ふうっ ♥」

短くも甘いウイの声と、からんからんとコップの中の氷が奏でる涼やかな音が、森の中のカフェを淫靡に彩っていく。

「せ、先生 ♥ そこは、コーヒーがこぼれた所じやありません…… ♥」

マンコまで舐めたかったのだが、ウイの愛液の酸っぱい臭いがし始めた所でひんやりした手が私の肩を掴んだ。

「そう？ もっとウイの体を舐めていたかったんだけど」

「こ、コーヒーがこぼれてしまいますので…… ♥ 飲み切ってからセックスしましょう…… ♥」

ウイの白い肌に赤みがさし、発情のスイッチが入った事を教えてくれる。

「それじゃあ、もう一回口移ししてもらおうかな」

「わ、わかりました…… ♥」

同じようにキスをして、コーヒーを体に垂らし、私はウイの体に舌を這わせてのんびりと前戯を行う。

何度かの口移しを経て、ウイの水着は乳首がツンと浮き、私の股間もすっかりとテントを張っていた。

「相変わらず……とてもご立派ですね、先生のチンポは ♥」

こと、と机に空になったコップを置いて、水着越しに私のチンポを優しくさすつてくれる。

「ウイもセックスが大好きになってくれたみたいで、嬉しいよ」

「ふふ…… ♥ 先生の『セフレ』ですから。もっとも……毎日、お付き合いたしますよ」

ウイの繊細な指先が竿を撫で、手の平が亀頭を包んでヨシヨシと撫でられる。

ガウンを片腕だけ脱がせてウイの細い腰を抱き寄せる。

ウイが、私のチンポに快楽を与えている確信を得て笑みを深めた。そのまま、私の首にキスしてくる。

「ちゅ…… ♥ 先生、チンポ、失礼しますね…… ♥」

耳元でしつとりと囁かれ、アイスアメリカーノの香りがふわりと漂う。

私のサーフパンツをぐいっと引っ張り、フル勃起のチンポが森の中のカフェに曝し出された。

「ふふ……♥ 森の中のカフェ、先生の臭いでいっぱいになってしまいましたね♥」

ウイが尻を横にずらし顔を下げのりに合わせて、私もウイと距離を取って調整する。

ウイが横寝の状態でチンポに口づけ、フェラを始めた。

「ちゅ……ちゅうう♥」

豊かな後れ毛が私の太ももにかかってサラサラと心地よい。

アイスアメリカカーノで冷えた口内は、かえってウイの舌の軌跡をハッキリと知覚できる。

フェラにも慣れたウイが柔らかな頬の内側をチンポに張り付かせ、ひよつとこのように口をすぼめながらゆったりと顔を上下させて、味わうように丁寧なフェラをしてくれていた。

ウイのポニーテールを撫でながら、木漏れ日で美しく色づく森の中のカフェの景観を楽しみ、ウイにフェラ奉仕してもらっていると普段の疲れも吹っ飛ばす思いだ。

「ぢゅるるっ♥ ぢゅぼっ♥ ちゅぼっ、ちゅぼっ♥」

段々とフェラに熱が籠もり、ウイの口内も熱くなる。

ウイの体の下に手を入れて、水着の脇から指を滑り込ませ、ウイの大粒乳首を指先でピンピンと弾いて遊ぶ。

「んっ♥ ふうっ♥ ふーっ♥」

あつという間にガチガチに勃起する乳首を摘んでシコシコしごき、ともに絶頂へと上り詰める。

ウイの喉奥の感触が熱く亀頭を締付け、根本まで唇の輪が降りてくる。

「んぐっ♥ おっ♥」

舌の先端から根本まで、余すこと無くチンポに擦りつけながら喉奥で締付け、指先で金玉をタップとほぐす。

いつも古書館で味わっているウイの献身的なフェラを屋外で味わい、開放感にまかせて射精した。

「んぐっ ♥ んぐくっ ♥ おぐっ ♥」

下品に喉を鳴らして、体を痙攣させながらも喉奥からチンポをはずすこと無くウイが精液をすべて飲み下してくれる。

ねぎらうようにウイの頭を撫でていると、飲みきったウイがゆつくりと体を起こした。

「はあ……………ふう……………」

酔っ払ったように顔が赤く、目は夢見心地に蕩けていた。

しつとりと汗に濡れたウイを抱き寄せ、勃起した乳首を感じながら優しく背中を撫でる。

「お疲れ様、ウイ。いつもながらとっても気持ちよかったよ」

「え、えへへ……………♥ 先生のチンポも、とっても素敵でしたよ……………♥」

もう、私……………挿れるのが待ちきれなくて……………」

デープスロットで奉仕しながら発情していたウイが太ももをこすり合わせると、にちゃ、と水音がする。

ウイの濃くてねばっこい愛液が、水着の下に満ちているのを感じ、射精直後のチンポが勃起を取り戻した。

「あ……………♥ もう、こんなに……………」

ウイのガウンを脱がせ、またキスしようとする指一本で唇を止められる。

「せ、先生がキスする時に、私の臭いを精液の臭いで覚えて貰いたくないですから……………こ、コーヒーを、飲ませてください」

「そうだね。喉が痛むかも知れないし、コーヒーで流しておいたほうが良いかも」

水筒からコーヒーをコップに注ぎ、んくんと飲み干すウイ。

その間に、私もゴムを装着してその時に備えた。

「で、では、改めて……………」

腕を上げて待ち構えてくれるウイを抱きしめ、膝の上に迎え入れる。

「ん……………♥」

精液を洗い流したアイスアメリカノの風味漂うウイと、ねつとりとしたデープキスを交わした。

水着の肩紐に指をかけ、上を脱がせる。

ウイがそれを摘み、私達の脇へとぱさりと落とした。

ウイの大きな乳首と乳輪を念入りに撫で回して、両乳首を完全に勃起させてからそつと乳房を揉みしだく。

「うん……♡ ふう……♡」

ウイもぱつかりと股を開いて私の腰に脚を絡ませ、胸への愛撫を夢心地で受け入れている。

くい、くい、と腰をくねらせて、水着の股間とチンポをこすりつける。

薄い水着越しにウイの花開いた大陰唇がふにふにと押し付けられ、汗とウイの唾液と我慢汁で水着が濡れそぼる。

腰の横で金具を外してウイの水着をぺろりと剥き、小さなハートに剃り込んだウイの陰毛と、清涼な木漏れ日にテラテラと愛液で光るウイのビラビラマンコを晒した。

「挿れるよ、ウイ」

額をくつつけて見つめ合い、ウイがコクコクと小さく頷くのを感じて肌で感じる。

腰を浮かせ、チンポに手を添えてウイが私のチンポを真上から飲み込み……

「ん、ふやあつ♡♡」

ずぶん、と一気にチンポが収まる。

もちろん森の中にウイのふにゃふにゃしたセックス声が響き渡った事だろうが、誰も騒いだりしていないので他の皆は近くに居ないだろう。

ずつぽりと根本まで収まったチンポで、ウイのヒダ多めの心地よいマンコの熱を感じる。

森の中に吹き抜ける爽やかな風が、お互いに一糸まとわぬ姿でハメている私達の気だるい暑さを吹き払った。

涼しい中でお互いの体温をより強く求めようとウイの冷えた背中を撫で、ウイにぺたぺたと背中をさすってもらった。

「先生のチンポ……♡ とつても太くて、気持ちいい……です♡」

ウイが私の耳に唇をかすらせながら、ぽしよぽしよと囁きかける。私の興奮を促す仕草を一つ一つ覚えて実行してくれるウイとのセックスは回数を重ねるごとに心地よく、淫靡さを増していく。

「動いていきますね……♡ 何度でも射精してください、良いですよ♡」

頭の中をくすぐられるようなウイの媚びた甘い声を耳元で浴びせられ、勃起を促進され……

ついに、ウイが足を踏ん張って体を上下に揺らし始めた。

つぶ、くぶ、とウイのたつぷりと分泌された粘つく愛液が音を奏でる。

自分ではなくウイの意思でマンコが上下し、沢山のヒダがチンポを撫で上げ撫で下ろし……カ리를ギュツと締付け、より強い刺激を与えて来た。

「はっ♡ はっ♡ はっ♡」

ウイの熱い吐息がひっきりなしに耳元にかかり、行為に没頭しているのがよく分かる。

ウイの心尽くしの奉仕に身を任せ、自分からは動かずにウイの可愛い耳や首筋にキスの雨を降らせ汗にしっかりと濡れた背中を撫でる。

「あつ♡ 気持ちいい♡ 先生っ♡ 好き、好き、で、す♡」

何度もセックスを繰り返し、素直に言葉にするように調教したウイの愛らしい気持ちの数々が溢れる。

「うん、私もウイの事好きだよ」

髪を振り乱すウイの頭を撫でながら私も愛の言葉を囁くと、フワトロのヒダが柔らかかく絡むウイのマンコが絶頂したかのようにキュウキュウと締まる。

「あつ♡ い、イキます♡ わた、私、もうっ♡ イクッ♡ イクッ♡」

痙攣のようだった強い締め付けがだんだん長くなり、私のチンポが根本から亀頭までみっちり締まる。

ウイからの性欲に彩られた恋情に応えるべく、私も一番奥に射精した。

ウイの細い手脚が私の背中や腰に絡み、ワキワキと撫で回してくる。

私もウイを強く抱きしめ、お互いの鼓動を感じながらゆったりと射精を続けた。

涼しい風が吹き、木立がさらさらと爽やかな葉擦れを奏でる。

汗が接着剤であるかのようにヌルつく身体を密着させ、ウイも最後の一滴まで絞ろうと腰を揺らめかせる。

溢れる愛情に急ぎ立てられるようにウイは私の首筋に愛おしげに唇を押し付け、ちゅばちゅぱと音を立てて吸い立てる。

生でやっていたならきつと種が着いていたであろう、本番の予行演習のように愛に満ちたセックスだった。

「上手になったね、ウイ」

夢中で私の首筋にキスを続けていたウイの背中と頭を撫でながら声をかけると、ハツと意識を取り戻したウイが私と間近で見つめ合い、照れくさそうに笑う。

「きよ、恐縮です……♥ 先生のチンポ、とても素敵で……いつも、つい夢中になってしまいますね……♥」

身体を離れたウイの裸体を、幾筋もの汗が伝った。

「コーヒーはまだあるかな？」

「はい、た、ただいま」

汗で顔に張り付いたウイの髪を剥がしてやりながら、ウイが立つのを手伝ってやる。

たつぷりと精液の溜まったゴムを取り替え、全裸でコーヒーを水筒からコップに移すウイに後ろから覆いかぶさった。

「ひええああ!? せ、先生、コーヒーをこぼしてしまいますから……♥」

「一緒に飲もうよ」

膝立ちのウイにチンポを挿入し、腰を抱いてあぐらをかく。

「おっっ♥」

背面座位で深くまで貫かれたウイが唇を尖らせて腹の底から気持ちよさそうな声を上げる。

「ぎ、ウイから飲んで」

「はっ♥ はっ♥ はひい……♥」

ゆったりと、汗に濡れたウイの腹を撫で回す。

ウイの豊かな髪に顔を埋め、甘酸っぱい匂いを嗅ぎながらくびくびとコーヒーを飲むのを待った。

「ふう、ふう……♥ せ、先生も、どうぞ……♥」

ウイが顔の横あたりにコップを掲げたのを受け取り、ウイと同じ所に口を付けてゴクゴクと飲み干した。

また涼しい風が吹き、私たちは目を細めて涼を楽しんだ。

寛いだウイのマンコが、身動きする度にヒダでチンポを撫で回して私の勃起を完全に回復させる。

「……先生も、変わっていますね。こんな女を構ってくださいるなんて」

「ウイはとても魅力的だよ」

幾度も繰り返された問答。

それは、私の方からウイを手酷く貪って欲しいという催促だ。

ガツシリとウイの腰を固定し、ウイの大粒のクリトリスに指を伸ばす。

「今日も、よく解らせてあげる」

「よろしく、お願いします……♥」

ウイの力で簡単に振り払える私の拘束を万力よりも強いかのよう  
に尊重し、ウイの方からお尻を私にみっちり押し付ける。

楽しみにしてくれるウイのため、手首を使って素早く左右に手を  
振ってクリトリスを往復することで激しい刺激を継続して与える。

「あゝっ♥ ああああっ♥」

森の中にウイの本気アへ声が響く。

まるでジェットコースターに乗っているように、ウイが私の腕を掴  
む。

はしたなく股を思い切り開き、私の愛撫から最大限快楽を貪ろうと  
無防備にマンコを差し出して力を抜いている。

急激に絶頂に上り詰めていくウイの状態を感じ取り、手を止めた。

「はっ♥ はっ♥ ……♥?」

普段の知性を感じさせない蕩けた瞳で、私を振り返るウイ。

童女のようなあどけない表情を見せてくれるようになったウイにチンポを更に硬くしつつ、クリトリスを摘んで扱くのと同時にチンポで膣奥を突き上げた。

「あゝー♥うゝー♥」

喉元を晒してのけぞるウイの頭を肩に載せ、後ろから汗まみれの胸元に乳首が大きく勃起しているのを眺める。

森中に響かせる勢いで、ウイの膣奥を刺激しマンコの表面をまんべんなく撫で回した。

「あゝっ♥おっっ♥」

再びウイの絶頂が近づき、完全に意識かそちらに集中したところでウイの尿道を集中して刺激する。

「せっ♥せんせっ♥そこっ♥ちがっ♥」

ウイの膣が何かに耐えるように強く締まる。

私は頑張つてウイを抱えたまま立ち上がると、茂みを通つて森の道に出る。

「ひい!? だ、だめです♥こ、こんな所を誰かに見られたら♥」

無人島には私のセフレ以外に誰もいないので問題ない。

赤ん坊を排泄させるような体勢で、道端に喘ぎ声を響かせ……ウイが絶頂へと押しやられていく。

ぬちゃ、ぬちゃ、と粘質な愛液を滴らせ、もうどうしようもない位に迫る限界を必死に抑え込み、歯を食いしばって耐えるウイに、トドメを刺した。

「ウイが漏らしちゃうところ、私に見せてよ」

囁いて、強く突き上げ、クリトリスを捻るように押しつぶす。

「あゝー♥ー♥ー♥♥♥♥」

島中に響きそうな大声を上げて、ウイが絶頂した。

じよろ、じよろ、じよろ……

大きな弧を描き、ウイの小便が森の小路に水たまりを作る。

「ひあっ♥へああっ♥」

羞恥のあまり顔を手で覆い、なかなか止まらない小便をどうしよう



もなく見送っている。

絶頂快樂と失禁羞恥の合わさった強い締め付けに、私も射精していた。

「はあっ ♥ あ、ああ……♥」

じよろっ、じよろっ、と小便が途切れ途切れになる頃には、ウイの声も表情もすっかり蕩けていた。

「ウイが漏らしちゃうところ、とても興奮したよ」

「も、もう……♥ 森の中のカフェが、トイレの隣になっちゃったじゃないですか……♥」

ほかほかと湯気を上げる小便溜まりを見ながら、ウイが甘ったるい声で文句を言う。

肩越しに振り返ったウイの顔は、変態セックスに満足してすっかり蕩けていた。

言葉もなく顔と顔が近づき、唇が触れ合う。

腕がかなり疲れてきていたが、絶頂の余韻に浸るウイのために頑張ってキスを続けた。

そしてふと顔を上げると、

「えっ」

青白い肌をした、ガスマスクに水着姿の乙女……ミメシスが茂みのそこかしこからチラチラと身体をはみ出させ、こちらを伺っている。

「……………」

さつきまでとは別の理由で2人共身体を硬くし、驚愕してしまう。

絶体絶命かと思ったその時、

ぱち

何の音かすぐには判らなかったが続けて、

ぱちぱちぱち……

雨だれのようにささやかに始まり、音がだんだんと大きくなる。

セクシーな水着姿で子供っぽくしゃがみ込みながら、ミメシス達が拍手していた。

「……………」

ウイならずとも変な声を出したくなる光景だったが……遅ればせ

ながら、ミメシス達が私とウイのラブラブ変態セックスを鑑賞していた事が理解できてくる。

「ひいあああああつ!?!♥」

絶叫とともにウイのマンコが締め、思わず私もチンポを突き上げ、ウイが再度絶頂する。

「ああっ♥ 先生♥ こ、こんな所でっ♥ い、イクツ♥ イクツ♥」

私の調教通りに絶頂を宣言しながら、顔を真っ赤にして衆人環視の中、拍手の音に包まれてウイが絶頂する。

ぴゅつとウイが潮を飛ばすと、誰かがガスマスクの下で口笛を吹いた。

「ううーっ♥ な、なんでこんな目に……♥」

絶頂しながら嘆くウイの声は私のチンポによく響き、どぶどぶと精液を膣奥に注ぐ。

ずるん、とチンポを引き抜くと、大きく膨らんだゴムがウイの充血したビラビラマンコから出て来て、拍手がより大きくなった。

ウイがむずがるのでそつと足を下ろしてやると、耐えられないとばかりにミメシスに背を向けて、身体を隠すため私に抱きつく。

見つめる私の視界の中、唐突にミメシス達が煙のように消えていく。

何もなかったかのように、森は静けさを取り戻した。

「何なんですか、本当に……」

「さあ……ミメシス達も、エッチな事に興味のあるお年頃だったのかもね」

ウイは裸で抱き合ったまま私の言葉をゆっくりと咀嚼して、

「……まあ、タイムカプセルを埋めるといふ発想になるんだから、当時の人たちも仲良くやってたのかも知れませんか……」

ウイが私の腕の中で身体を捻り、ミメシスが居た辺りを見やる。

「だからってこんな堂々とした覗きは無しでしょう!?!」

それはそうだね、とウイの背中をさすり、ウイの秘密のカフェに帰る。

セックスを続ける雰囲気ではなかったので水着を着直してウイと普通にゆつくり過ごした。

木々のざわめきに耳を澄ませると、森に遊ぶ昔のユステイナ聖徒の声、今も聴こえる気がした。

## 2人きりの性の告白（ヒナタ）

水着姿のヒナタが、サマーベッドに寝そべってすやすや眠っている。

頭よりも大きい位の乳房、無防備に上げられた太ももから覗く水着の股間、童女のように緩んだ笑みを浮かべてむにやむにやと寝言をつぶやく唇。

大人顔負けに育った体と子供らしさが同居した、ヒナタの魅力を余すこと無く堪能できる光景に、私も思わず笑顔を浮かべ、見入ってしまった。

もちろん、日差しに照らされて輝くように白いヒナタの巨乳を見てチンポをイライラさせてもいた。

コハルをセフレにしたことで全員セフレのバカンスと化し、昨日も今日も皆とズコバコセックスしまくって疲労を感じていたため、私も隣にサマーベッドとパラソルを用意して休むことにする。

さて寝そべるかという所で、ヒナタがこちらに寝返りをうった。

「むにやむにや……先生……♥」

半開きの口からヨダレを垂らしそうなヒナタの緩んだ顔と、寝返りで横寝になった事で乳房が凶悪に変形しチンポを苛立たせようとしてくる色気のギャップで勃起してしまふ。

目が覚めたらヒナタとセックスしようと思いつきながら眠りに落ちた。

「ちゅっ ♥ ちゅぶっ ♥」

股間に温かいものを感じ、目を開けると……ヒナタが私のチンポを優しくフェラしてくれている。

「ちゅぶっ ♥ あ、おはようございます、先生。先生のココが、とても苦しそうにしていたので……鎮めて差し上げようと思って」

セフレとして沢山の経験を仕込まれて来たヒナタは、朝フェラも初めてではない。途中で私が目覚めても当たり前前のようにフェラを続行してくれる。

「ありがとう、ヒナタ。さっきからヒナタとセックスしたくてウズウ

ズしてたから、とても嬉しいよ」

そう言つて、私は上半身を起こしてビーチパラソルの角度を変えた。

「じゅるるるう♥ぢゅぽっ♥がぽっ♥」

ヒナタが、可愛らしい童顔の頬を卑猥に凹ませたフェラ顔でチンポに頬の内側の肉を密着させてくれる。

目元だけはいつものように優しく、私に礼を言っているようだった。

私はさつきまで夏の日差しを浴びていたヒナタの熱い髪を労るように撫で、ヒナタが心地よさそうに目を細める。

「ぢゅ、ん、ぐ……おっ♥ごぶっ♥」

それがスイッチであつたかのように、ヒナタが可愛らしい唇をチンポの根本まで寄せていき、私の陰毛に顔を突っ込む。

ヒナタのフェラが本気のデープスロットになって、しなやかな指が私の金玉を優しくもみほぐし、射精を喉に受ける準備を始めた。

このままヒナタの奉仕に身を任せても良いのだが、せつかくのバカンス、ヒナタと共に盛り上がりたいたいと思つた私は、ヒナタの耳を指先で愛撫して止めた。

「そろそろ良いよ。今はヒナタを抱きたい気分なんだ」

私がそう言つと、ヒナタは目を弓のようにニツコリと細め、頬をひよつとこのように卑猥に凹ませて吸引を強めながらズルズルと長いチンポを喉奥からゆっくり引き抜いた。

「ぶああ……♥ん、けほっ」

「大丈夫？」

「す、すみません。私も寝起きにフェラしたから、少し喉が乾いてしまったのかも」

「それはいけないね。ちゃんと水分補給しようか」

サマーベッドの脇には、半分以上飲みかけのソーダが残っていた。ヒナタは自分のサマーベッドに浅く腰掛け、ちゅーちゅーと可愛らしく飲み始める。

「ふう。人心地つきました。先生も喉が乾いてらっしやるんじやあり

「ませんか？」

そう言つて空色のソーダを差し出してくるヒナタを手招きする。

「せっかくだから、ヒナタが口移しで飲ませて欲しいな」

ヒナタの白い顔がぽつと赤くなった。

「く、口移しですか!? い、いえ、先生が求めてくださるのであれば、私は、嬉しい、ですけど……」

ついさつきまでひよつとこフェラをしてくれたヒナタが、初心な乙女のように恥じらいながらもソーダを手に私に近づいてくる。

「えつと、どういう体勢で……」

サマーベッドに寝そべったままの私にどうやって口移しで飲ませるかと思案しているヒナタに、遠慮なく水着の股間に手を伸ばして布地を横にずらし、マンコを露出させる。

「ひゃんっ♥」

水着を着るために入念にととのえて来たヒナタの陰毛がチラリと見え、チンポの勃起が回復した。ベッドの脇に置いてあるカバンからゴムを取り出し、装着する。

「挿入してから飲ませてくれればいいよ」

「は、はい……♥」

恥ずかしがりながらも、チンポをハメる行為に慣れきったヒナタは淀みなくサマーベッドに膝をついて私に跨った。

一旦ソーダを私が預かり、ヒナタがチンポをそつと握って自分のマンコの入り口にくちやくちやと刺激を与え、愛液を追加で加えることで滑らせ、挿入していく。

「は、あ、あ……♥ん、先生、挿入できました♥」

ビーチパラソルの日陰の中、夏の海辺の日差しが砂浜に反射する間接照明で照らされたヒナタの微笑みが、幻想的なまでに美しい。

チンポを根本まで受け入れて快楽に浸るその笑顔は、聖女のように清らかな印象を与えつつも浅ましいメスの欲望を知っているがゆえの期待感を滲ませている。

「綺麗だよ、ヒナタ」

「えつ、や、やだつ、先生つたら、そんな、いきなり……♥」

素直な感想を伝えると、チンポをぐっぽりと啜えたまままでいつものように照れてみせる。

「はい、ソーダ」

私がソーダの入ったグラスを渡すと、ヒナタは大事そうに両手で受け取った。

私は体を起こし、ヒナタのむっちりした体を抱き寄せる。

「ちゅ……♡ んっ♡」

ソーダを口に含んだヒナタが優しく唇をあわせ……そっと、舌先で私の唇に触れる。

口を開いた私に、ちよろちよると慎重な流量で温くて甘ったるいソーダが流れ込んでくる。

外で寝ていた間に汗をかいたか、私の体は水分を欲し、殊の外美味しく感じられた。

ぎゅう、とヒナタの柔らかな体を強く抱き寄せると、大きな胸が私とヒナタの体の間で押しつぶされて裸の胸板に感触が伝わってくる。

「ん、ちゅ……♡ ちゅ、ちゅっ……♡」

ヒナタは口の中のソーダがなくなったら後も唇を離さず、私とのキスに夢中になっていた。

チンポに力を入れてヒナタの子宮を揺らしてやると、

「あっ♡ んっ♡ ……はっ！ す、すみません、ソーダのおかわり、欲しかったですよね！ ちうーっ……」

蕩けたメス顔を晒した後で我に返り、リスのように頬をソーダで膨らませ、色気の欠片もないタコ口で私にキスしてきた。

ヒナタを落ち着かせるべく尾てい骨の辺りをねっつとりとさすり、腰をほんの少しグラインドさせて愛液が増してきたマンコを刺激する。

「んっ♡ んくっ♡」

口に含んだソーダをヒナタも飲みながら、それでもゆっくと私の口に流し込んでくる。

「……ふう……♡」

沢山のソーダを飲ませ終わって顔を離すと、チンポが効いてきたのか、うっつりと目を細めて妖艶さを滲ませた顔でヒナタが息を吐い

た。

そして、申し訳なさそうに肩を落とす。

「あうう、すみません……私ったら、つい先生とのキスが心地よくて夢中になってしまつて……」

ナチュラルに私のチンポをイライラさせる事を言うヒナタだが、自覚はなさそうで本気で謝罪しているようだ。

「良いんだよ。ヒナタが夢中になってくれたなら、私は嬉しいんだから。ほら、ヒナタもソーダを飲んで水分補給しないと」

大きめのグラスになみなみと注がれていたソーダを半分ずつ飲み下していく。

「はあ……♥ はあ……♥ ん、ちゅ♥」

段々とヒナタも目がとろりと快樂に蕩け、腰をへこへこと前後に振つてセックスに没頭しつつあり、中々最後の少しが飲みきれない。「ちゅ……ず、ずずずう……」

ようやく液体がなくなった音がストローから響き、その音で遅れて気づいたヒナタがセックスに没頭していた自分を恥じて顔を赤らめる。

私も無言でヒナタを抱きしめ、セックスでしつとりと汗をかいた乳房が水着の下で乳首を固く勃起させているのを感じていた。

コト、と空になったコップをベッド脇の机に置き、ヒナタが私の首に腕を絡めて抱きついてくる。

いつになく激しく唇を押し付け、すっかりヒナタの体温と同じになったソーダを私に流し込みながら、腰を上げてずるとチンポを半ばまで引き抜いた。

「んっ♥ ちゅっ♥ ……んんっ♥」

唇を押し付けたままヒナタの腰が勢いよく下がる。

「ぱあん！」と拍手のように私の腰とヒナタのむっちりした尻がち合わさる音が鳴り、こつんとヒナタの膣奥が亀頭に当たる。

そう思っているとすでにヒナタの腰が上がり、ヒナタの熱くて締まりの良いマンコがカ리를ひっかきながら抜けていく。

ソーダを飲ませ終えたヒナタが唇を離し、私を至近距離から熱っぱ



く見つめている。

「はあっ♥ はっ♥ ああっ♥ せ、先生っ♥ お、お願いしますっ♥  
うごいてっ♥ チンポっ♥ もっとくださいっ♥」

ヒナタは必死に腰を上下に振り、可愛らしい声で必死にチンポを懇願した。

私のチンポを勃起させる方法を本能で理解しているヒナタが、瞳をキラキラと涙で輝かせながら必死に胸を押し付け腰を振りたくる。

「ずっと、ゆっくりの動きだけでっ♥ こんな、焦らされる事、初めてだからっ♥ もう、もうっ♥ 強くっ♥ 強くしてほしいんですっ♥」

ヒナタのドスケベボディとセックスする時は、確かにガツツリと激しめにマンコを突くことが多かったかもしれない。

すっかりとセックスの味を覚え、激しいピストンでないと満足出来なくなったヒナタが愛おしく、お互いに強く抱き合って下からも激しく突き上げてやる。

「あっ♥ あああーっ♥ きたっ♥ いちばんっ♥ おくっ♥ ポルチオっ♥ もっと、もっと突いてくださいっ♥」

開放的な砂浜で、ヒナタの善がり声がソーダより甘ったるく響き渡る。

誰かに聴かれているかという心配も、チンポを焦らされたヒナタには浮かんで来ないようだった。

ヒナタの腰使いが小刻みになり、奥をコツコツと叩く回数を増やしてポルチオ快樂を夢中で貪っている。

握りしめるような強い締付けに、ポルチオ快樂で震える膣がうねりまでつけて私のチンポを搾り取る。

グツグツと金玉が煮えたぎり、私もヒナタの求めに応じて射精欲を堪えきれなくなってきた。

ヒナタの大きな尻を鷲掴みにし、尻を固定して下からズゴズゴとヒナタの好きな角度でポルチオを突きまくる。

「おっ♥ おっほ♥ んおおおおおっ♥♥」  
けだもののようにヒナタが吠え、膣のうねりが一層激しくなる。

目の前でぶるぶると揺れるヒナタの巨乳の谷間に顔を埋め、汗っかきのヒナタがセックスで流した汗の蒸気に包まれながら、一番奥で射精した。

「あっ♥ ああああああああーっ♥♥♥」

空と海の綺麗な青の中に、ヒナタの絶頂の叫びが吸い込まれていく。

自分のチンポがどくどくとヒナタの膣内のゴムに精液を吐き出す感触と、ヒナタの胸の奥でトクトクと激しく脈打つ心臓の鼓動。

絶頂の間はそれしか聞こえなかったが、過ぎ去ってみるとそれ以外の音が戻ってくる。

ざざあという優しい波音、風に揺れる木々の葉擦れの音が、絶頂の余韻に浸って強く抱き合ったままの私達を包み込んでいた。

「はあ……♥ ふうーっ……♥ お疲れ様です、先生♥ 今日もとても素敵でした……♥」

絶頂の余韻に赤らんで緩んだ笑顔で、ヒナタが私のセックスを褒めてくれる。

たらりと頬から顎まで汗が伝い、さつきまでヒナタがセックスに夢中になっていた事実を証明しているようだった。

「ヒナタこそ、とても良かったよ。一生懸命求めてくれて、とても嬉しかった」

そう指摘すると、途端に慌てた顔になり、涙目になったり赤面したりして百面相している。

「うう……私、その……先生のチンポで焦らされると、もう、ムズムズしてしまつて……♥ あんな、はしたない事を……恥ずかしいです……」

目を伏せて本気で恥じらうヒナタにキスをする、励まされた事に気づいたヒナタが苦笑してキスのお返しをしてくれた。

ちゆるん、と糸を引いて唇が離れると、ヒナタがそつと微笑む。

「ふふっ。お外でこんな事をするなんて……また一つ、いけないことを経験してしまいましたね」

そうやって、2人してチンポをハメたままクスクスと笑いあつてい

た。

一旦ヒナタと別れ、他の子とセックスしたりしてのんびり過ごしている……ヒナタからモトトークが届いた。

——もし、よろしければ……ひとつお願いがあるのですが……  
というので、レモンの木が立ち並ぶ農園に駆けつける。

「すみません。私のワガママに、付き合ってください……」

「ヒナタのワガママならいつでも歓迎だよ。さっきのセックスみたい  
にね」

「も、もうっ ♥ 先生ったら……そんな事言われたら、お、思い出して  
しまいますから…… ♥」

会ってみてもモジモジとして中々切り出せないヒナタを待つてい  
ると、ついにそれを教えてくれる。

「告解を!! 練習したいのです……!!」

ヒナタは緊張して上手く出来ないので告解の担当を避けて来たら  
しいが、それではいけないという事で練習をお願いしたのだという。

緊張で固くなりながらも、ヒナタがお決まりの口上を述べていく。

「今日は、どのようなお悩みをお持ちなのか……私に聞かせていた  
けますか?」

キリッとした顔でシスターとして告解を待つヒナタ。

「正直な気持ちを聞いていただけの事ですか?」

「もちろんです。どんな内容であれ、シスターとしてその告白をお聞  
きします。先生の率直なお言葉を聞かせてください。胸の奥に仕舞  
い込んでいる思いを、どうか」

「では、お願いいたします」

「ずっと、ここで遊んでいたいです」

「そうでしたか。帰らずに、ずっとここで……えっ? 先生……?  
今、何を仰って……」

普段の忙しすぎる日々から離れ、セフレ4人と野外でもテントでも  
セックスしまくる生活。最高だった。

「お仕事なんて知らない！ ヒナタとセックスしたい！」

「せ、先生……!?!? お、落ち着いて……セックスならいくらでもさせてあげますから！」

「本当？・じゃあ早速しようか」

急に正気に戻ってヒナタに近づくと、ヒナタは目を白黒させて棒立ちのまま私に抱きつかれてしまった。

「あんっ♥ もう、今日はさつきあんなに激しくセックスしましたのに……♥」

そう言いながらも、ヒナタの引き締まったお腹にチンポを押し付ける私を優しく抱き返し、セックスへの期待に目を蕩けさせ始めた。

「さつきは、ヒナタのおっぱいを吸えてなかったから……」

「ふふ……♥ 先生の大好きな私のお胸、出して差しあげますね……♥」

ヒナタが水着の胸の部分をごいっと谷間に寄せて、ひと抱えはある乳房を2つもさらけ出してくれる。

私と抱き合っていたからか乳首は甘勃起していて、衝動的にしゃぶりついた。

「あんっ♥ 今日の先生、とっても正直ですっ♥ こ、告解の効果でしようか……♥」

両方の乳首を口に含んで転がす私の頭を、ヒナタが優しく撫でてくれる。

「わ、私のお乳で良ければ、いつでも吸ってくださって構いませんからね……♥ んっ♥」

聖母のように自愛に満ちた表情に、どうしようもなく性感に夢中になるメスの欲望がにじみ、相反するはずの2つが同居した清らかに卑猥なヒナタの笑みが私のチンポをイラつかせる。

ちゆるん、と口を離すとヒナタの乳首はぷっくりと勃起し、もっと快楽を欲しているかのように震えている。

「そうだ、せっかくだからパイズリお願い出来るかな？」

「はい、良いですよ。ふふ、いけない告解ですね……♥」

倒木に腰掛けてチンポを出すと、ヒナタが苔むした地面に跪いて首

にかかった水着の紐を外す。

上半身を裸にして完全に乳房を出したヒナタが、その大きくて暖かそうな胸で私のチンポを包み込んだ。

思わず、心地よさにため息をついてしまった。

「くすくす……♡ 気持ちよさそうですね、先生♡ 喜んで頂けて嬉しいです♡」

太ももの上にたっぷんと乳房を載せた格好で、ヒナタの谷間の下から入った私のチンポが上から龟头を覗かせている。

ヒナタが左右から胸を押しつぶし、チンポを圧迫した。

ヒナタの胸の谷間に満ちる汗が潤滑油の役目を果たし、にゆるんと胸の肉とチンポがぬめりあって心地よく擦れる。

「ああ……気持ちいいよ、ヒナタ」

「はい♡ いつも、私が気持ちよくして頂いているので……今日はたっぷりと気持ちよくして差し上げますね♡」

私に奉仕出来るのが本当に嬉しい、と言わんばかりの笑顔に、私も笑みを浮かべた。

「では、こういうのはどうでしょうか……？ えいつ♡」

そして、私のチンポを乳房の先端から根本に向かって挟む。

縦パイズリで左右の乳房を互い違いに動かす熟れた動きで、チンポを捻るように胸の肉で揉みくちやにしてくれる。

くすぐるようにヒナタの大きな乳首が下腹部に当たり、その刺激が乳首の勃起を維持しているのに気づいて指で摘んでみた。

「あんっ♡ せ、先生♡ 今、そんな事されたら、き、気持ちよくなつてしまいますから……♡」

ヒナタが悩ましげに眉をひそめて身悶えする。

「私もヒナタが気持ちよくなってる所が見たいからね」

「もう、先生つたら……♡ はい、わかりました。その告解を、受け入れますから……私の乳首、気持ちよくしてください♡」

たぶ、たぶ、と乳房を揺らしてチンポを気持ちよくするヒナタだが、揺らせば揺らすほど乳首も刺激されて快楽を感じてしまうのでだんだんと顔がとろりと蕩けていく。

チンポへの奉仕に夢中になっているのか、それによって乳首が刺激されることに夢中になっているのか、快樂で蕩けた顔でヒナタのパイズリはどんだん激しくなり、息遣いも荒くなる。

「はあ、ふう……♥ んっ、あっ♥」

ヒナタの乳首が限界まで勃起し、シコシコと根本から摘んでやるとヒナタが虚ろな目をしてまぶたをピクピクさせ、絶頂を堪えた。

手元は絶え間なく乳房を揺らしてチンポをもみくちやにし、献身的に奉仕を続けている。

そんな一生懸命なヒナタと一緒に絶頂するべく、歯を食いしばって射精を堪え乳首をシコリ続ける。

「はあっ♥ はあっ♥ あ、あ、あ♥」

シコられ続ける乳首に、ヒナタの艶声もひっきりなしに上がり続けている。

「ヒナタ、そろそろ、イクよ」

私がそう言うと、こく、こくと言葉もなく真っ赤な顔で頷き、ヒナタが私の射精を待ちわびる。

一際強く、乳房の根本の肉に亀頭が擦り付けられ、ゾクゾクと精液が登ってきた。

ギョツとヒナタの乳首を強く摘んで、同時に絶頂する。

「あああっ♥♥」

どぶどぶと谷間の深い所から精液を溢れさせながら、ヒナタが乳首で絶頂して天を仰ぐ。

「はあ……♥ ふう……♥ もう、先生ったら……♥ 私まで、すっかり気持ちよくなっちゃいました……♥」

頑張つてパイズリ奉仕してくれたヒナタの頭を優しく撫でる。

力が抜けて乳房が開くと、むわつと蒸気さえ上がる谷間の内側にはべつとりと精液がへばりついていていた。

「あは、こんなに出して頂いたんですね……♥ ん、ちゅ、ちゅるっ……♥」

何も言わないのに、ヒナタは指で精液を拭って口に含んで飲み下していく。

「んくっ……♥ 今日の精液も、とっても濃くて……喉に絡まってしまいますね……♥」

熱に浮かされるように嫌な顔ひとつせず精液を処理してくれるヒナタを見ていると、また勃起がぶり返してしまった。

「まあ……♥ もうこんな……♥」

ヒナタは目の前でそそり立ったチンポに、うっとり目を細め……まだ精液でベトつく亀頭にべつとりと唇をくっつけてまだ尿道に残っている精液をすすり始める。

「ぢゅっ♥ ぢゆるるっ♥ んくっ♥」

すすり終わると、チンポを口内に咥え込み汗と精液をすっかりと綺麗にしやぶり、お掃除フェラまでしてくれた。

「ありがとう、ヒナタ。じゃあ次は、水着を全部脱いで欲しいな」

「……はい……♥」

すでに腰までしか着ていない水着を、チンポに熱っぽい視線を送りながら脱ぎ捨てていく。先程まで私が座っていた倒木に、ヒナタの水着がパサリと落ちた。

「ヒナタ。レモンの木に手をつけて、お尻を出して」

「……♥」

くいつ、とマンコを見せつけるようにお尻を上突き出し、ヒナタが肩越しに私を見た。

ヒナタのマンコはチンポ欲しさにぱっくりと開き、愛液で太ももがテカテカと光っている。

大きくて白いお尻を掴んで左右に開くと、ヒナタの肛門までもよく見えた。

「挿れるよ、ヒナタ」

「どうぞ、先生♥ 激しく……お願いします♥」

すっかり準備万端になっているヒナタのマンコにチンポを押し当てると、締めりが良いのに飲み込まれるようにスルスルと挿入出来る。

「はっ、あ♥ あ、ああ♥」

一番奥まで押し込むだけで、ヒナタは感極まったような声を上げ

た。

くびれてはいるがしつかりとしたヒナタの腰を掴み、思い切り腰を使ってパン、パンと音を立ててヒナタを犯す。

後ろから見てもぶるんつぶるんつとヒナタの胸が大きく揺れているのが見える、迫力のある立ちバックだ。

「あんっ♥ ああうっ♥」

一突きごとにヒナタは甘い声を上げ、レモン農園に腰を打ち付け合う音を善がり声が響き渡った。

「私達が騒いでると、皆が来るかもね。ヒナタは皆でセックスしたほうが楽しいかな？」

「いっ、いじわる、言わないでくださいっ♥ い、いまはっ♥ 先生と、二人つきりで、セックスしたいですっ♥」

ズコバコと犯されながら、ヒナタが可愛い事を言っつて私のチンポを苛立たせる。

「それじゃあ、もつと激しくして早めにイこうか」

ヒナタの本気汁で白濁する膣口から愛液を指で掬い、ヒナタの肛門に親指をずぷりと突き刺す。

「んああっ♥ そ、それ、されるとっ♥ も、もう、私、我慢♥ できなっ♥」

「さっきのお礼に、ヒナタを沢山気持ちよくしてあげる」

直腸の中をグリグリとかき回しながら一番奥を子宮口に向かって突く。

「はっ♥ んおっ♥ うっ♥」

ヒナタがセックスに没頭した証、腹の底からの喘ぎ声が出てきて手応えを感じつつ、カタカタと膝が笑って立っていられなくなりそうな体を、肛門と腰の下に入れた手で支える。

腰が下がり、角度が変わった事でより深く子宮口を突ける体勢になり、更に責める。

「ん、ーっ♥ はっ、あ、あ、ーっ♥」

力の抜けきったヒナタの膝が地面に付き、殆ど座るような姿勢で一旦大きく喘ぐ。



「出すよ、ヒナタ」

私が耳元で囁くと、ヒナタは喋る余裕もなくカクカクと大きくうなずいた。

「あゝっ、あああっあああああーっ ♡♡♡」

レモン農園中に響き渡るような、一際大きく甘い声を上げてヒナタがポルチオ絶頂する。

ゴム越しにも熱いくらいのヒナタの膣がうねり、奥深くで射精した。

肛門に啜えられている指がギュウギュウと痛いくらいに締付けられ、ぬぼんつと引き抜く。

「おゝっ ♡」

その衝撃でヒナタがさらに小さく絶頂し、膣のうねりが激しくなる事で射精している私にもビリビリと強すぎるくらいの快楽が襲いかかった。

金玉の中身をすべて吸い上げられるような強烈な射精感に、ヒナタを後ろから強く抱きしめる。

「はあっ ♡ ふうっ ♡」

抱きしめた私の腕を、ヒナタがすがりつくように握った。

無人島のレモンの木々が生い茂る農園の中、2人して裸になって、心地よく抱きしめあう。

「はあ、はあ…… ♡ ふふっ、ご奉仕もいいですが、やっぱり……先生に激しくセックスして頂いた後で優しく抱きしめられて……撫でてもらうのが、私には一番気持ちいいです ♡」

汗を幾筋も垂らした必死のセックス跡が残るヒナタが、力の抜けた笑みを浮かべる。

「それに……先生ほどの困った告解をちゃんと聞き届けられて、少し……緊張が解れたかもしれません」

苦笑して、後ろから抱きしめる私と頬をくつつけた。

「ですから、これからも……その……私に、エッチな告解を聞かせてくださいね…… ♡」

その発言で勃起を取り戻したのをヒナタがマンコの中で感じ取り、

ペロリと舌をだす。

「ヒナタのイタズラなんて珍しいね。そんなに求めてくれるなら、皆が集まってくる位に声を出してみようか」

「くすっ♥ はい、先生♥ 私の、一番気持ちいい所……先生の素敵なおチンポで、ホジホジしてください……♥」

緊張が解れた事で火が点いたヒナタが、さらなるお代わりをねだつてくれる。

レモンの爽やかな香りとヒナタの汗の香りを入り混じらせながら、裸で青姦し続けるのだった。

## 楽園の存在証明（ハナコ・コハル・ウイ・ヒナタ）

モモトークでの話によると、ハナコが海以外の水場で水遊びをしているらしい。

ヒナタとレモン農園でセックスをした後で散歩を再開した私は、ハナコが見つからないかと適当に歩いていたら森の奥まで来てしまった。

滝が落ちるような微かな水音、そして女性の歌声が聞こえ、それを頼りに歩いていく。

果たして、木々の中に開けた場所があった。

「あら……先生？」

まだ高い太陽をバックに、ハナコが膝上まで浸かって水場で佇んでいる。

桃色の髪が日差しに透けて、自ら輝きを放っているかのように煌めく。

シャツの裾を水に浸さないためか前を持ち上げているため、太ももの際どい部分までめくれ上がり私のチンポをイライラさせた。

「よく、ここを見つけてましたね。それとも、偶然ですか？」

ハナコは普段見られない柔らかな笑みを浮かべて私を見ていた。

「ふふっ……ご安心ください、先生。先生といつでもセックス出来るように、下は穿いていませんよ」

ハナコが私の方に向き直りシャツの裾をたくし上げると、その下には私にとっては見慣れた、大きめのハートに剃りこまれたハナコの陰毛とマンコがあった。

「水の温度を感じたくて、入っていたのですが……先生も、こちらへどうぞ？」

ごく自然な寛いだ笑みを浮かべてセックスに誘うハナコに、私も笑みを浮かべて……サンダルとサーフパンツのまま水場に入っていた。

近くまでざぶざぶと歩いていくと、ハナコからそつと抱きしめられる。

水で冷えたハナコが、暖を求めているように私の背中に指を這わせる。

ヒナタとガツガツしたセックスをしていなかったらフル勃起しているくらいにハナコは胸を押し付けて、頬をぺたりと私の肩に載せた。

「ん……♥ 先生の体、暖かくて気持ちいいです」

濡れていてもなめらかに手櫛を通すハナコの髪を愛でながら、私はただ抱き合って言葉を待った。

「ここは……トリニテイの噴水とは真逆の姿をしていますね。人影のない、自然な姿……。何も着飾ってない、ありのままの姿なんです」  
ハナコが、眠っているかのように寛いだ声音で私に囁く。

「先生には、これと一緒に感じて欲しかったんです。ありがとうございます  
います……」

体を密着させるように、ただ抱きしめてくるハナコの背中を撫でた。

夏の日差しを感じながらも流れる水は冷たく、滝の落ちる音が辺りに満ちて涼しげな空間を作り出している。

「……先生は、ここに来るまでに随分沢山セックスなさっていたよう  
ですが……まだ私の分は残っていますか？」

私が勃起しないことから察したのだろう、ハナコが控えめにセックスの許可を求めてくる。

「うん、もちろん。ハナコに付き合おうよ」

くす、とハナコが笑い、私の乳首を指でつついてくる。

「もう、イジワルを仰らないでください。先生だって、私とセックスしたくて探してくださいだったんじゃないやありませんか？」

「ふふ、そうだね。私もハナコとセックスしたいよ」

少し顔を動かせばキス出来る距離で、私達は微笑みあう。

ハナコの腰を抱いて水辺の岩に腰を下ろすと、正面の水に膝立ちになって腰まで浸かったハナコがサーフパンツを下ろしてくれて、萎えたチンポを優しく口に含んだ。

「ちゅっ……れろれろ……♥」

ひよつとこ口で吸い付いてチンポを揉みほぐしたり、舌で残った精液を拭って亀頭に刺激を与えたりして、チンポが少しずつ勃起していく。

ハナコの大きな胸が太もみに押し付けられ、まったりとしたフェラと共に柔らかな感触で下半身が熱を帯びていく。

「はあ……♥ 先生のチンポ、とつても逞しくなりました♥」

ハナコがちゅぽんと口を離すと、丁寧なノーハンドフェラですっかり勃起を取り戻したチンポがそこにあつた。

ハナコはうつとりとした笑顔で舌なめずりをして先走り濡れた唇を拭い、水辺においてあつた自分のバッグまでちやぷちやぷと這っていく。

「いつも、先生にゴムも用意してもらっていますが……たまには私のを使わせてもらいますね。お店で可愛いの見かけたので♥」

そう言つて出してきたのは、ピンク色のゴムの袋だった。

ハナコは慣れた手付きで私のチンポに被せると、ニツコリと笑顔を浮かべる。

「ふふっ♥ やっぱり可愛らしいです♥」

そこにそびえていたのは、チンポの側面から腕の生えたどこかで見たシルエツト。水晶埴輪だった。

「よくこんなの見つけてきたね……」

ハナコが立ち上がり、シャツや股間から水の雫が滴っている。

腰までどつぷりと濡れた男もののシャツがハナコの肌に張り付いて透けているのを優しく剥がして、ハナコが座っている私と向き合つて脚を上げる。

私の肩に手をおいて腰の位置調整するハナコを抱き寄せ、ぬぷんとチンポを挿入した。

「あつ♥ はうんっ♥」

刺激の強さにハナコがのけぞり、大きな胸が目の前でたぷんと揺れる。

細い腰を抱いてそれを支えようと、体を戻したハナコがそのまま抱きついてきた。

ハナコの長い手足が私の首や腰に絡み、弾力がありつつも柔らかかな身体がぴったりと密着してくる。

「は、ん……♡ このゴム、腕の所が突起になって……ナカの壁と強く擦れるから、思わず声がでてしまいました♡」

「ハナコは気に入った？」

ぐっ、ぐっ、と腰を少し突き出して揺らしてやると、首に絡むハナコの腕に力がこもり、大きな胸が強く押し付けられる。

「んっ♡ あっ♡ は、はい……♡ 普段無い刺激で、なかなか、新鮮味があつて……♡」

ハナコの瞳が興奮にキラキラと輝き、頬が紅潮して身体がセックスのために出来上がっていくのを感じる。

見つめ合うハナコがそつと瞼を伏せて、触れ合うようなキスをしてきた。

「先生……♡ んっ……♡」

ちゅ、ちゅ、と可愛らしくついばむようなキスと共にハナコからゆったりと腰を振る。

私の背中にも愛おしげに指を這わせて何度も優しくさすり、すっかりセックスに没頭しているようだった。

ハナコは、こうして2人きりで気持ち盛り上がった時ほど優しいセックスをする。

恋人同士できるように、イチヤイチャと触れ合ったりキスを続けたりして心を満たすようなセックスだ。

それを指摘すると顔を赤くしてイジワルな言動が加速するので、私もハナコの好みに付き合うことにしている。

もつとも、恋人同士のヌルいセックスの時の方がハナコが盛り上がってすぐに絶頂するし締めりも良いので、私にも文句はない。

今も濡れた髪をさらりと撫で、形の良い耳たぶを指先で愛撫し、むっちり大きな尻をむにむにと揉みほぐしている。

「ちゅっ♡ ちゅっ♡」

ハナコは私の唇を夢中で吸いながら、へこへこ和小刻みに腰を振っている。

静かな水場に、滝が流れ落ちる音とは別のニチャニチャというねばつく愛液の音が響くほど、ハナコは興奮していた。

私は未だにシャツと水着に包まれたままの胸元に手を伸ばし、シャツのボタンを外してハナコの胸を露出させた。

ビンビンに勃起した乳首を触れるか触れないかの優しさで摘んで、くすぐるように愛撫する。

「ふうんっ♥ んんんっ♥ んあっ♥」

目を瞑ったままのハナコが悩ましげに眉をひそめて、甘ったるい声を上げた。

さらに下からのチンポの突き上げを始め、丁寧にハナコの手を引いて絶頂の階段を一段一段登っていく。

「はっ♥ ふっ♥ んちゅっ♥ ふーっ♥ ふーっ♥」

ハナコの息がどんどん荒くなり、にちゃ、くちや、という愛液の音も大きく、マンコの締めもきつくなる。

ふらふらと、ハナコの片手が背中を離れて中空をさまよう。

恋人つなぎで手を握って上げると、すがりつくように私の手を握り返してくれた。

「んんん~~~~~~~~♥♥♥」

高く、か細い声を上げてハナコが絶頂する。同時に私も射精した。

「はあ……はあ……はあ……♥」

ようやく唇を離れたハナコが、ぼうっとした顔をして絶頂の余韻を味わっている。

そこには警戒心も猜疑心も全くなく、セックスのもたらす動物的な幸福にどっぷりと浸って緩みきった微笑を浮かべていた。

そんな可愛らしいハナコの頭を優しく撫でながら、戻ってくるのを待つ。

ハナコは大きいため息を吐いて、再び私に抱きついてくる。

「ふううう……♥ 今日もとっても素敵でした、先生♥」

まだスキンシップが足りないという風に私の首筋にキスの雨を降らし、耳たぶにキスしながら甘く囁いた。

「ハナコこそ、とっても綺麗だったよ」

「……もう、先生だったら……イジワルですよ。そんな事を言われると、私もワガママを言いたくなってしまう」

そう言って、ちゅ、ちゅ、と首筋にキスしながらイッたばかりの膣を蠢かせて挿入したままのチンポを刺激してくる。

「先生……私、最近ときどき不安になるんです。先生に手を引かれて、出ることも留まることも出来ない樂園に導かれて……このまま、どうなってしまうのかって……」

「……………」

「私の、不安を……拭ってくださいませんか？」

耳の穴に、トロトロとシロップを流し込むかのように……甘い囁きが染み込んでくる。

「私、今日は安全日なんです……♥ 先生の精液を直接お腹に注いでくださったら、きつとこの不安も少しは良くなると思うのですが……♥」

「それは駄目だよ、ハナコ」

「……もう、先生のイジワル。初めての時は、あんなに遠慮なくどぶどぶと私の子宮を精液で満たしてくださいだったのに……あんな激しい女の幸せを覚えておいて、お預けするのですか？」

苦笑して、ハナコの頭を撫でた。

「ま、そういうのは学校を卒業してからね」

キラリ、とハナコの瞳が光った気がした。

「約束ですよ、先生♥ 私、絶対に覚えていきますから」

そう言ってまたハナコからキスをしてくる。

「ふふ。未来に希望が見えてきたら、ムラムラして来てしまいました。先生、もう一回お付き合い、お願いできますか？」

腰を浮かせてぬちゃりと勃起済みのチンポを引き抜くと、また水晶埴輪のゴムを被せてくる。

その日の昼下がりはそのままゆったりと、水辺でハナコとセックスをして過ごした。

そして、すつきりとした金玉でキャンプに戻り、ハナコと一緒に夕



食の準備をする。

「はい、皆さん。お料理が出来ましたよ」

海で釣った魚を焼いたものに農園で採れたレモンが添えられている。

焚き火に飯盒で炊いた米と、デザートにはまた農園で採れた果物もあつて普段よりも豪華なくらいの食事が並んでいた。

「うわー、美味しそうな匂い！ 私もうお腹ペコペコー！」

この場の生徒全員がセフレだとバラされてしまったコハルは、来た時より大分打ち解けた様子で夕食を前に笑顔を浮かべる。

簡素なテーブルにヒナタとコハルが皿を並べていき、ウイは自分も配膳しようと思わわわしていたが結局出番無く気まずげに座っていた。

皆が席につくと、ヒナタとコハルが食前のお祈りを始めるのでハナコとウイも付き合ってお祈りをする。

「頂きます」

皆が唱和して、笑顔で食事が始まる。

「お食事の後なのですが……」

半分くらい食べた所で、ハナコが切り出した。

「今日の夜の、セックスの順番を決めませんか？」

げほっ、とコハルがむせる。

「ちよ、あんたねえ！ しよ、食事中でしょ!？」

口元に手を当てつつも、興奮して猫のように目を見開きながら真っ赤な顔で叫んでいた。

「でもですよ、コハルちゃん。今決めておかなかつたら、お食事を片付ける人は最初にセックスする事が出来ない貧乏くじということになってしまいます。そんな不幸の押し付け合いは良くないことだと思いませんか？」

「べ、別に、そんなの片付けを待ってから決めれば良いじゃない！」

「あら、と言うことはコハルちゃんも先生とのセックス一番手をご希望ですか？ うふふ、先生はお上手ですから、セックスが好きになつてしまうのも当然ですよね♥」

「そっ！ そんな事言っていないでしょ!? し、死刑！ エッチ！  
エッチ！」

キヤツキヤウフフとコハルとハナコがじゃれ合い、ウイとヒナタは並んでそれを微笑ましく見ていた。

「まあまあ、コハルさん。ハナコさんの言う事ももつともですし。お食事の後片付けは私という事で良いですから、皆さんで決めておいて頂けませんか？」

「だ、駄目ですよ、ヒナタさん。片付けはむしろ、配膳を手伝えなかつた私……と先生がするべきです」

「うん、良いよ。一緒にやろうね、ウイ」

すぐ自分がやろうとするヒナタがウイに制止されて、片付けは私とウイでやることになった。

「うふふ、ウイさんとヒナタさん、とつても仲が良くて羨ましいです。では、セックスの順番も決めましょうか」

「わっ！ 私は、別に先生とセックスするなんて言っていないけど!？」

日が落ちて、卓上のランプで照らされているだけだがコハルが赤面しているのはハッキリと分かる。

「えー？ コハルちゃんと先生のセックス、ぜひ見たかったですけど……とつても残念です」

「みせない！ あんたには絶対見せないから！」

だんっ、と机を叩いたコハルの手を取り、ハナコがじつとコハルの目を見る。

「それでは、私達は先生とたつぷりと♥ 楽しみますので……コハルちゃんもセックスしたくなったらすぐ言ってくださいね。せつかくの機会ですし、皆で楽しみましょう♥」

「だ、だから……しないってば……」

ヒナタはニコニコとその様子を見守り、ウイは皆に見られるセックスを想像してか赤面して食後のコーヒーを啜っている。

「私はコハルともセックスしたいんだけど……どうかな？」

私もコハルの手を取り、目を見てお願いしてみた。

「だっ、だからあ……ううう……わかったわよ……♥ する、するから

見つめるのやめて……」

ハナコとハイタツチして喜ぶと、コハルはむくれながらも言葉を撤回したりはしなかった。

意気揚々とハナコが音頭を取り、順番決めが始まった。

「さて、それではそろそろ皆食べ終わりそうですし、決めてしまいましよう。じゃんけんで良いですよね？」

「いえ、私は一番後で良いんですけど……」  
ウイがつぶやく。

「では、じゃんけんで勝った人が順番を指定出来るという事にしましょう。では、じゃーん、けーん……」

「ういっ!? つほいー!」

唐突に始まったじゃんけんにあわててグーを出してしまったウイが、皆のパーに負ける。

「……………」

自分の握りこぶしを見つめて険しい顔をするウイを尻目に他の人たちがじゃんけんをし、ハナコ、ヒナタ、コハルの順で指定出来ることになった。

「うーん、では……私は最後でお願いします」

「な、なによ、あんた……あんだけ言っという最後を選ぶの？」

「だって、せっかく皆さんのセックスを見守れるチャンスですから♥」

「ううう……早まった……」

セックスすることが確定してしまったコハルが、太ももをモジモジと擦り合わせて赤面する。

「では……私も、今日はお昼にたっぷりしていただきましたし、3番手という事で」

爆乳をモノトーンの水着に包んだヒナタがさらりと昼間たっぷりセックスしたと告白し、コハルが猫目を見開いた。

「えっ!? ひ、ヒナタ先輩……!?!」

「どうかしましたか、コハルさん? 次はコハルさんの番ですよ」

キョトンとして、ただの日常会話をしただけという雰囲気ヒナタに、コハルが口をパクパクさせて顔を真っ赤にする。

「わ、わた、……ううう、2番手で……」

「うい……結局私が最初じゃないですか……！ はあ、まあ良いです。どうせセックスはしたかったし……先生、片付けの後、よろしくお願いします」

「うん、ウイは今日はどうしたい？ 激しめにする？」

かちや、かちや、とそれぞれの食器が立てる音だけが響く。

ハナコはニコニコと笑顔で、ヒナタは自然体の微笑で、コハルは食べるのも忘れたように口を半開きにして赤面して。

「は……いい、言うわけじゃないですか！ ……そういうのは、片付けの時、誰も聞いてない所で……」

「そっか。じゃあそろそろ食べ終えちゃおう」

「……………」

ウイも顔を赤らめて目を瞑ってぱくぱくと食べる速度を上げる。

「ごちそうさまでした」

パラパラと皆が食べ終わり、食器を回収して汲んできた沢の水で洗っていく。

「では、私達はベッドメイクしておきますね♥」

ハナコ達も、これから夜通し皆でセックスするための一つしか無い大きめのテントの中に入った。

ちやぶ、ちやぶ、という水音と洗剤の立てる泡が地面に消えていくのを、ウイと肩を並べて見送る。

「それで、今日はどんなふうにしたい？」

「……先生のおまかせで良いですよ」

「そう？ ウイの好みがあれば何でもするけど」

ポニーテールにしたウイの、闇の中で電灯に照らされて幻想的に光を反射する白い首筋を見ながら食器を洗っていると、

「先生は、私よりも私の好きなセックスの事をご存知ですから。先生が気持ちいいセックスが、私の一番気持ちいいセックスなんです」

私を見上げて、クスリと屈託なく微笑むウイを見て、チンポが強烈にイライラしてくる。

「嬉しいよ、ウイ。じゃあ2人で楽しもうね」

「はい、楽しみにしています♥」  
2人でもつと寄り添いあい、ぴったりと裸の腕をくっつけてチンポを勃起させながら丁寧に食器を洗い終えた。

「あんっ♥ はうっ♥ ううう♥」

控えめな照明に照らされたテントに入ってウイとキスをする、前戯もそこに正常位で挿入する。

ウイも私と同じで楽しみにしてくれていたのか、水着を脱がすとマスコがぐっしよりと濡れていたのですね、すぐにセックスは激しくなった。

「う、うわ、うわ……♥」

コハルが顔に手を当てているが、指が開きすぎていて全く目隠ししていない。

「ふやああんっ♥ あんっ♥ あっ♥ せ、せんせいっ♥ も、私、こんな、すぐ、いっちゃ♥ あ♥ ああああっ♥♥」

ウイもじつくりと周りで見られながらのセックスに興奮しているのか、あつという間に絶頂してしまった。

だが私はまだ射精していないので、イッたばかりのウイの激しくうねる膣を更にほじくり回す。

「あつ、あああああーっ♥♥♥ またっ♥ またイクツ♥ イクツ♥ イクツ♥」

テントの中に、たん、たん、たん、と私とウイの腰が激しくぶつかる音が響く。

私にのしかかられながら、連続絶頂で全身を痙攣させて跳ねさせるウイを皆が息を吞んで見守っていた。

そろそろとコハルの手が股間へ伸び、こっそりとオナニーを始めている。

その光景に射精間近のチンポを更に勃起させながら、ウイの膣奥をさらに力強く突いた。

「うっ♥ う、ううう♥♥♥」

叫び声を通り越して啜り泣くような善がり声を上げ、ウイがポロポロと涙を流して快樂にどっぷりと浸っている。

私の腰にしつかりとウイの脚が絡み、強く抱き合いながら同時に一番奥で絶頂した。

「あ、あ………♡♡♡ ううう♡♡♡ お、おお………♡♡♡」

絞り出すようなうめき声にも似た絶頂声が、ウイの快樂の深さを皆に知らしめ、皆してモジモジと太ももを擦り合わせて無言で見守っている。

股間を濡らしているのがその仕草だけでありありと分かってしまい、ウイの膣にどぶどぶと精液を吐き出してしまふ。

ずるんつ、と引き抜いたチンポにはたつぷりと先端に液体の詰まったゴムが付いていた。

「はあっ………♡ はあ………♡」

たった30分にも満たないセックスでグチャグチャに乱れたウイを見て、誰ともつかない固唾をのむ音が鳴る。

「おいで、コハル」

素っ裸で股を開いてヒクヒク痙攣したままのウイをすみっこに寝かせ、コハルを呼ぶ。

「あつ、うう………♡」

新しいゴムをつけながらコハルを呼ぶと、真っ赤な顔をしながらコハルが立ち上がり……おずおずと水着を脱ぎ始めた。

下を脱ぐとねつとりと愛液が糸を引くが、誰もからかったりはしない。

手早く脱いで乳首と股間を手で隠すコハルが、私の前のタオル地のシートが引かれたマットレスに腰をおろす。

「コハルはどういう感じが好き？」

「し、しらないっ………！ まだ一回しかしたこと無いのに、分かるわけ無いでしょ………!?!」

そうだね、と流しつっ、裸のコハルを仰向けに寝そべらせて脚を開かせる。

処女喪失したばかりのマンコはまだ綺麗なスジを描いており、つきたてのお餅みたいに柔らかい。

愛液でベトベトに濡れそぼったコハルの股間に口づけをして、舌で

陰唇をかき分けて中身を舐め回した。

「あつ♥ な、なんでっ♥ そんなとこっ♥」

「コハルはまだ慣れてないだろうから、もっと濡らしておかないとね。それに、コハルは舐められるの好きかなって」

クンニ好きを指摘すると、コハルは猫のように目を見開いて頭の羽で目を覆い隠してしまった。

「ばっ、ばっ♥ えっち♥ 死刑よ、死刑っ♥ は、ああっ♥」

マンコを舐められながらいつものように罵倒してみせるが、あつという間に快楽に屈して甘い声が上がってしまう。

その様子をハナコがニッコニコの笑顔で見守り、隣のヒナタとなにか小声で談笑している。

気にはなるが、コハルの喘ぎ声はどんどん大きくなるため何も聞こえない。

仕方ないのでクンニを激しくしてコハルの性器の充血をより促していく。

「はああーっ♥ ああっ♥ 先生っ♥ 先生っ♥ も、いつちや、いっちやうからっ♥ やめっ♥ あああーっ♥♥♥」

片手は口元に、片手は私の頭を抑えて、羽で自主的に目隠したコハルがクンニで激しく絶頂する。

コハルの激しい息遣いに胸も上下している。

私は愛液でベトベトになった口元を拭うと、コハルの力の抜けた細かい脚を持ってぱっかりと開かせた。

「ぎ、入れるよ、コハル」

「あ……♥ うう……♥」

目隠したままで絶頂の余韻に浸っているコハルは聞いているのかいないのか、マンコをヒクヒクさせて答えた。

「うふふ♥ コハルちゃんの気持ちよさそうな姿……♥ この眼で見ることが出来て本当に嬉しいです♥」

ハナコが性欲で目を輝かせつつ、とても機嫌良さそうに笑っている。

それに反応することもなく、身体中ふにやふにやになっているコハ

ルに覆いかぶさり、チンポを膣口に当て、まだ新品同然のコハルのマンコのプリプリとした弾力と熱さを味わい……

ずぷりと挿入した。

「おっ うっ ♥ あっ っ ♥ あうううううっ ♥」

動物のように、腹の底から気持ちよさそうなるうめき声を上げるコハル。

「コハルちゃん…… ♥ 先生とセックスする時はこんな風に喘ぐんですね…… ♥」

「とつても気持ちよさそうですね…… ♥」

ハナコとヒナタがモジモジと太ももをこすりながら、コハルの痴態に見入っている。

目隠ししたままのコハルが、ふらふらと両手を前に出し……それをしっかりと握りしめてあげる。

可愛らしい力できゅっと握り返された手をマットに押し付けるようにして、上から角度をつけてコハルのマンコをぐぽっ、ぐぽっと力強く犯した。

「あっ ♥ ああっ ♥ だめっ ♥ そこ、だめだからあ ♥」

殆ど泣いているような、高くも濁ったコハルの善がり声が金玉を煮えたぎらせる。

コハルの好きなGスポと、一番奥のポルチオを均等に刺激し、コハルのポルチオ性感をじっくりと開発する。

「そこっ ♥ おくっ ♥ 奥の方、したいの？ いいよっ ♥ いいからっ ♥ 先生がしたいならっ ♥ そっち、おねがいつ ♥」

コハルも私の意図を少し感じ取ったようだが、奥だけではなくGスポへの刺激も欠かしてはいない。

「だめえ ♥ そこだめなのっ ♥ 気持ち良すぎるからあ ♥」

コハルの声が悲鳴のように快楽を叫び、膣イキが近づいているのを感じる。

「ほんとにつ ♥ だめっ ♥ おねっ ♥ おねがっ ♥ あっ ♥ イクッ ♥ イクウっ ♥」

あつという間にコハルは追い詰められ……



「んああああああつ♡♡♡」

ぷしやあつ！ と潮を吹いて絶頂した。

「わああ……い！ コハルちゃん、お潮を吹いたんですか!? そんなに気持ちよかったですね……♡」

「す、すごいですね、コハルさん……あんなにカクカクと震えて、気持ちよさそう……♡」

羽で目隠ししたまま潮を吹いて思い切り絶頂したコハルは、外野の声も耳に入っていないように顔をそむけて首筋を晒し、脚をカクカクと痙攣させ続けて絶頂を噛み締めていた。

ギチギチに締め付けてくる造りの小さい新古マンコに精液を全部絞ってもらってから、ぬぼんつとチンポを引き抜く。

一日中セックスしているのによく出ると我ながら感心するたつぷりとした量の精液を溜めたゴムを縛り、満足に身体を動かすことも出来ないコハルを抱き上げて隅に寝かせる。

「ふうう……それじゃあ交代しますか」

すつきりとした顔をしたウイがむくりと起き上がり、コハルに場所を譲った。

「では、次は私が……♡ 先生、お昼ぶりですが、よろしくお願いします♡」

落ち着いていながらも、セックスへの期待で少し艶が乗った声音でヒナタが挨拶をして、立ち上がって水着を脱いでいく。

ねつとりと愛液が糸を引く水着を丁寧に畳んで、私の近くへと歩み寄った。

「じゃあ……四つん這いになって、ヒナタ」

「あ、う、後ろからですか?」

チラリとウイの方を気にするヒナタだが、顔を赤らめて苦笑するだけで言う通りしてくれる。

「ど、どうぞ、先生♡」

肩越しに振り返るヒナタがセックスを許可してくれる。

大きな尻がでんと突き出され、昼に犯したばかりのマンコが愛液でグショグショになって準備万端の状態でパクパクと口を開閉させて

チンポを待ちわびていた。

新しいゴムをつけてヒナタのマンコにつぶんと挿入する。

そのままのしかかり、ヒナタが腕で耐えてくれるのに甘えて体重を預けて手のひらよりはるかに大きな乳房を真下からすくい上げるように持ち上げ、ゆったりと揺らす。

「あつ♥ 先生、それは……♥ あまり激しくされますと、気持ちよくて耐えられなくなってしまいです……♥」

「そっか。じゃあ、最初は優しくしめましょうね」

無防備なヒナタの耳が目の前にあり、優しく食みながら腰を振り、胸をたぶたぶと遊びのように揉む。

「んっ……♥ お上手です、先生……♥」

ぺたん、ぺたん和肉と肉が優しく合わさる音を立て、スローな後背位のセックスが始まった。

手のひらに感じるヒナタの乳首はあつという間にカチカチに勃起して、それを摘んで牛の搾乳のようにシコシコと扱く。

「ああ♥ だ、だめえ♥ お乳は、まだ、出ませんからあ♥」

チンポで突かれるたびにゆっさゆっさと揺れる胸を乳首で抑えこまれ、それもヒナタへの刺激を強めていた。

「はんっ♥ ああ♥ 先生っ♥ お胸も、子宮も、そんなにされては、もう、私……♥」

乳首で軽く絶頂したヒナタが、マンコでもイキそうになっている。「それじゃあ、そろそろマンコに集中しようか」

満足いくまでヒナタの下向きおっぱいを揉んだ私は、今度はヒナタのマンコを満足させるべくヒナタの腰を抱えた。

「や、ちくちく」

ばあんっ！ とヒナタの大きなお尻が波打つほどに強く腰を打ち付ける。

「はあんっ♥」

ヒナタの痴態を間近で見て目を丸くして驚くウイ、迫力のあるハードなファックが始まりそうでウキウキするハナコ、寝そべったまま目元の羽をチラリと持ち上げて盗み見るコハル。

皆が見守る中、ヒナタとの本気セックスが始まった。

少女たちの恥じらいによって光量を落とされた照明は薄暗くテントを照らしている。

それが逆に後ろから突かれてぶるんぶるんと乳房を揺らし、パンパンと騒がしく肉を打ち付けるヒナタの姿をエロティックに演出していた。

「ああっ♥ あーっ♥ んああっ♥」

ヒナタも、ことさらに恥じらったりすることもなく、私と2人きりでセックスしている時のようにチンポに没頭している。

ウイも最初は驚いていたが、のびのびとセックスを楽しむヒナタの姿に当てられて顔を真っ赤にして股間に指を這わせていた。

「ヒナタさん、とつても楽しそう……♥ 先生とのセックスが大好きなんです♥」

「は、はいっ♥ 先生のっ♥ セックス♥ 優しくて、激しくてえ♥ もう、大好きなんですっ♥」

チンポにメロメロになった甘ったるい声で、ハナコの野次に丁寧に答えてくれるヒナタ。

「ありがとうね、ヒナタ。もっと気持ちよくしてあげる」

じつとりと汗をかいたお尻たぶを撫で、ヒナタの肛門近くの肉を親指でクイと払げる。

ベトベトに垂れていく愛液を掬い、人差し指をヒナタの綺麗な肛門へと挿入した。

「んおお♥ おっ♥ ほおおっ♥」

さらに動物じみて卑猥な善がり声を上げるヒナタに、殆ど全力の筋力でパン！パン！と腰を打ち付ける。

あまり長くやると私の腰が筋肉痛になる動きで、ヒナタのポルチオを全力で刺激しフィニッシュへと持つていった。

「ああああーっっ♥ あうっ♥ ん、んおおおおおーっっっ♥♥♥」

最後は遠吠えのように背中をのけぞらせ、上に向かって大声で絶頂を叫ぶヒナタ。

膺もウネウネと波打つようにチンポを締め上げ、工夫せずともヒナタと同時に絶頂する。

抱え込んだヒナタの腰が痙攣し、その奥にあるチンポとマンコも震えてビリビリと強い快樂が襲う。

金玉の奥底から精液を絞り上げるようなうねりに射精しきると、ヒナタはマットに頭を付けて倒れ伏してしまった。

「はあっ ♡ はあっ ♡ はあっ ♡」

ぽっかりと大きくチンポの形に穴の空いたままのヒナタのマンコを前に、私のチンポが萎えて垂れ下がる。

流石に極上の生徒マンコに3回出した後で私も息が切れていた。

のそのそと既に裸のハナコが這い寄り、膝立ちの私を相手にゴムを外し、精液の残滓を垂らすチンポをパクリと啜えてお掃除フェラを始める。

「ちゅっ ♡ くちゅっ ♡ ちゅるるっ ♡」

ことさらに卑猥な音を立てて、何発もセックスした後の残滓に塗れたチンポを丁寧な舐め回し、綺麗にしていく。

「ありがとう、ハナコ」

発情してしつとりと汗をかき始めた頭を撫でると、ハナコは勃起チンポから口を離してうつとりとチンポを見つめた。

「ああ……♡ 目の前で生徒を何人もメロメロにした所を見ると、先生のチンポに惚れ直してしまいますね……♡」

ハナコはべつとりと裏筋に唇を押し付け、ちゅ、ちゅ、と愛情たっぷりにキスしてくれる。

「ふ、ふふっ！ さあ、やっとハナコの番ね！ あんたの恥ずかしい所、じっくり見てやるんだから！」

むつくりと起き上がった全裸のコハルが、乳首をピンと勃起させながらもイジワルなつもりでニヤリと笑った。

「はい ♡ コハルちゃん……私の恥ずかしい所、じいっと ♡ 見ていてくださいね ♡」

ハナコはむしろ興奮して顔を赤らめ、笑みを深くしている。

コハルは猫のように目を見開き、圧倒されかけたが……

「つ、強がった所で無駄なんだから！ 先生のセックス、あんたみたいなエツチな子じや絶対凄いや声上げちゃうに決まってるし！」

かなり恥ずかしい事を言っているのにも気づかず、勝ち誇ったように笑った。

「うふふ♥ ええ、もちろん♥ 私も先生のセックスでメロメロになっちゃいますから、どうか良く見ていてください……♥」

心から楽しそうにハナコ達がおしゃべりしている間に、ゴムをつけてあぐらをかいて息を整える。

「それでは、先生……♥ よろしくお願いします♥」

あぐらをかいた私の肩に手をおいて、下品に見えるようにガニ股になっちゃ腰を落とすハナコ。

「あつ♥ ふうんっ♥」

濡れそぼったマンコには前戯など不要ですんなりと奥まで挿入出来る。

「ぐくっ……♥」

友達の痴態に顔を手で隠すのも忘れて見入るコハルと、まるで2人でセックスした後のように仲睦まじく腕を組んで、まったりと遠巻きに見守るウイとヒナタ。

「それじゃあ、ハナコが一番好きなセックスしようか」

「えっ?」

対面座位でずっぼりとハメてハナコと見つめ合うと、昼間のラブラブセックスが思い出される。

優しくキスをして、さらさらと手櫛で綺麗な髪を梳いた。

「あ、んっ♥ せ、先生? そ、その、私は、今はもつと、ガツガツした……んっ♥」

耳を優しく撫でると、ハナコは鼻にかかった可愛らしい嬌声を上げた。

「な、なに? なんのこと?」

何故かハナコが突然及び腰になって、コハルが困惑する。

「うん、ハナコはこういう、ゆったりした優しいセックスが好きなんだ」

「先生!? あっ♥」

かああ、と興奮より羞恥が原因で、先程より真つ赤に赤面するハナコ。女の子の秘密を暴かれ、耳まで赤くなっている。

「へ、へえ……?」

その何が恥ずかしいのか良くわかっていないコハルが首をかしながらも、ハナコの反応が明らかに艶めかしく、善がっているのを食い入るように見つめている。

「あっ♥ ああっ♥」

私に抱きしめられ、優しく頭を撫でられながら奥をゆったりしたりズムで突かれるだけで、我慢できないほどにハナコは感じていた。

そこについばむようなキスを加えると、ハナコは羞恥で真つ赤になりながらも唇を離す事ができずに積極的にキスを返してくれる。

「ちゅっ♥ ちゅううっ♥ ちゅぱっ♥」

2人きりの時にしかない大好きなセックスを普段顔を合わせる友達に見せてしまう羞恥をも、ハナコは快樂として感じているようだった。

膣のうねりは昼間よりも激しく、ほんの少しの動きなのに、ぐぷ、じゅぷ、という粘質な水音がテントに響き渡る。

「ふうっ♥ ふっ♥ ちゅっ、ちゅっ♥」

真つ赤に火照った肌が汗をじっとりとかき、ハナコがセックスに大興奮しているのが全身から伝わってくる。

「わ……♥ す……♥ ハナコ、あんな可愛らしくセックスするんだ……♥」

「……………♥♥♥」

コハルがどこか感心したように囁くのが耳に入った瞬間、ハナコの膣がギチギチに締まり絶頂する。

見つめ合う私には、困ったように眉を下げてキラキラと興奮と羞恥に涙目になるハナコの表情が余すこと無く見えていた。

コハルの一言で絶頂した事はさすがに隠してあげるべく、ハナコをより強く抱きしめて身体を上下にゆさゆさと揺さぶる。

「んむうっ♥ んんっ♥ んんうーうーっ♥♥」

本気で絶頂した後の追い打ちに、ハナコも必死で私にしがみつく。「じゅるっ♥ ぢゅううっ♥ んんあああああああ♥♥♥」唇を激しく吸いながら奥を突き続けると、いきっぱなしのハナコが耐えかねたように背中を仰け反らせて激しく絶頂した。びっくん、びっくんと全身を痙攣させて、ど派手に潮まで吹いている。

「うわっ♥ し、潮吹いてるじゃない……♥ そ、そうよね、先生のセックス、気持ちいいもん、仕方ないわよね……♥」

自分も潮を吹いたので仲間が出来たのが嬉しそうにガクガク痙攣するハナコを見つめ、モジモジと股間をいじり始めるコハル。

「はっ♥ はっ♥ はっ♥」

荒く息をして、大きな胸をたぶんと揺らしながら放心するハナコを抱きしめてあやす。

「はあ、ふう、ふううーっ……♥ 先生、後で……凄いですからね……♥」

本気の絶頂で脱力しながらも、薄笑いの奥の瞳がギラギラと光を放っている。

「ハナコがまた一つ素直になれてよかったよ」

ポンポンと頭を撫でてやると、苦笑されてしまった。

「もう、本当に恥ずかしかったです♥ 赦しませんよ♥」

「ちよっとハナコ！ あんた普段自分こそ好き放題やってるでしょ！」

キャンキャンとコハルが喚くと、ハナコは汗だくで後れ毛が張り付いた顔で振り返り、ニッコリと笑顔を浮かべた。

「うふふ♥ それもそうでした♥ では……次はコハルちゃんに好き放題しちゃいますね♥」

「えっ!? い、いや、そういうのは良いって!」

ぬぼん、とチンポを引き抜き、私の肩にかなり力をかけながら立ち上がる。

カタカタと膝を震えさせながらもハナコは立ち上がり、コハルに抱きついた。

「いやーっ！ あ、汗臭いわよ！ ちよ、離れなさい！」

「いやん♥ コハルちゃん、そんな所をこすられたら私、気持ちよくなつてしまいます♥」

「ちよつと！ 馬鹿！ 気持ち悪い事言わないで！」

そのままねちやねちやとレズセックスじみたスキンシップを始めた2人を笑顔で見ていると、脚に暖かなものが当たる。

「先生、お疲れ様でした。お疲れでしょうし、お開きにしましょうか？」

左からウイが、右からヒナタが、私の太ももに胸の谷間を当てるように四つん這いで近づいていた。

セックスでかいた汗にしっとり濡れている2人の頭を撫で、自然に始まるお掃除フェラに身を任せる。

「せっかくの機会だし、まだまだ大丈夫だよ。2人はなにかしたいことはある？」

「ん……♥ ちゅっ♥ た、確かに、せっかくの機会ですから……♥ ヒナタさんと2人で、ご、ご奉仕しますね……♥」

「うふふ♥ ウイさん、普段は照れて一緒にしてくれませんから今日は特別ですね♥」

3人で、お互いに恋人つなぎに両手を繋いで輪になる。

ウイとヒナタが両方から同時に私のチンポに唇を捧げ、まるで2人で恋人のキスをしているように見つめ合い、たっぷり情感を込めてチンポと同時に相手の唇をも愛撫している。

「ちゅっ♥ ちゅぱっ♥」

美しい2人の乙女のキスシーンが、どぶどぶと溢れる私の我慢汁にまみれている。

卑猥な水音を立ててのお掃除フェラにどんどん熱が籠もり、ウイとヒナタはお互いに舌を絡み合わせてディーブキスのように私の亀頭を掃除しながらレズキスに没頭していた。

「わ、わああ……♥ え、い、いいの？ いいの、これ？」

美しい友情とセックスが結びついてしまったウイとヒナタの痴態を食い入るように見つめるコハルが、ハナコに肩を抱かれてくつつか



れながら股間を弄ろうとする。

「うふふ♥ ね、コハルちゃん♥ これくらい普通なんですよ、先生のセフレなら♥ 私も他校の方とキスしたことありますし……私達も、『仲良し』しませんか?」

「えええ……でもハナコとするの、何か後で面倒そうだし……」

「そんな事言わずに♥ コハルちゃんもさつきからムズムズしているじゃありませんか♥」

「ちっ! ちがっ! こ、これは……その……うう……♥」

コハルとレスリたくて仕方ないハナコに誘惑されて、後ろの方でもペッティングが始まる。

「……………♥」

「うい……♥」

その仲睦まじさに、ヒナタがフェラをしながらニッコリと目だけで微笑み、ウイが自分の行為を顧みてしまつて羞恥に耳まで真っ赤になっている。

「あっ♥ ハナコっ♥ そこっ♥ だめっ♥」

「コハルちゃ♥ そんな、引っ搔かれたらっ♥」

「ちゅっ♥ ぢゆるっ♥ ウイさん、私達もお胸やマンコを弄りあいませんか?」

「うい……♥ お、お、……おねがい、します……♥ ぢゅうううっ♥」

こうして、全員が頭の中を真っピンクにしてセックスに没頭し、楽しい夜が更けていく。

結局のところ……テントの入り口から朝日が漏れてくるまで全員で全員と楽しんでしまい、ウイとコハルが羞恥で死にそうになりながらキャンプの片付けをするハメになるのだった。

## 夏の海のセフレ撫子（ミモリ）

ハナコ達とのセックス合宿から帰ってきて次の週、私はミモリとホテルに泊まっていた。

合宿のことを知ったミモリが、セフレ達がやっている定期小テストで良い点を取っておねだりしてきたのだ。

「わ、ふつかふかですよ、先生！ あつ、窓の外はとってもいい眺めー」  
ミモリがカーテンを開けると、夏真っ盛りの強い日差しがホテルの部屋を明るく照らす。

海遊びのための荷物をたくさん下ろした後、ミモリはベッドの具合を確かめたり眺めを確認したりとはしやぎ回っていた。

窓辺で景色を眺めていたミモリが、くるりと振り返って満面の笑みを浮かべる。

「ふっふっ♥ 先生、ご自分の水着はお持ちですか？ 早速着替えて海に出発しましょう！」

そう言うと、ミモリはおもむろに胸元の帯を解きはらりと落とす。  
軽い音を立ててミモリのスカートが落ち、ストッキングに包まれた脚と、美しくも薄いレースの白いショーツが目飛び込んできた。

「どうしました、先生♥ 先生も水着に着替えてくださいね」  
そう言いながら、ミモリの脱衣が止まることはない。

まだ午前とはいえ日差しは強く、ミモリの白い肌は日差しを受けてまばゆいばかりに輝いている。

制服の上も脱ぎ捨てると、ショーツとおそろいの純白ながら華やかなレースブラが現れた。

セフレになってから何度となく揉みしだき吸い上げて絶頂させてきたのに、それでも美しい形を保ち続けている乳房が、手を背中に回したミモリ自身によって目の前で堂々と開放される。

薄く微笑んだミモリの頬は赤らみ、私が愛撫し続けたため初めて見た時より色を濃くしている乳首は既に甘勃起している。

（軽くお射精してから行きましょうね♥）

そんな心の声が聞こえてきそうなほど明らかに、海に行く前にセツ

クスを誘っていた。

「あら？ 先生……もしかして、もう勃起してしまわれたのですか？」  
太陽をスポットライトにしたミモリのストリップに魅入っていた私に、ようやく言葉がかけられる。

「うん。ミモリの身体、相変わらずとても綺麗だからね。見とれていたんだ」

「ふふっ ♥ 満足行くまで御覧ください……♥」

遅ればせながら私も脱衣し、鼻歌交じりにストッキングを脱ぐミモリに近寄った。

ミモリも最後の一枚であるショーツを脱いだ後、すぐに私の前にひざまずく。

「こんなにおつききしていたら外に出られませんし、先生のチンポ、鎮めさせて頂きますね ♥」

ニッコリと天女のような美しい笑顔を浮かべたまま、ミモリが大きく口を開けて私のチンポを飲み込む。

「ちゅっ ♥ ぢゅうつ ♥ じゅぽっ ♥」

勝手知ったる私のチンポを、吸い、舌を絡め、首を前後に振って唾液をまぶしていく。

初めてのセックスの時からフェラの才能を見せていたミモリが、私のためだけに磨いてくれたフェラテクを、真昼のオーシャンビューを眺めながらゆったりと楽しむ。

ミモリの白魚のような指が私の金玉をこちよこちよと優しくくすぐり、精液を大量に準備するようおねだりされる。

美しい顔に頬骨が浮かぶほど頬をへこませ強く吸い付くフェラと、フェザータッチで太ももや金玉を愛撫される優しい刺激が相まって、すぐさま精液がグツグツと煮えたぎるような射精感が込み上げてくる。

「んふっ ♥ ぢゅっ ♥ じゅっぽっ ♥ ぢゅ、ずるるるるっ ♥」

派手な音を立て、頭を激しく振って、自分の口と喉をまるでオナホのように激しく使ってしごき立ててくるミモリ。

だが、一番魅力的なのはその表情だった。

私に尽くすのがたまらなく嬉しいとばかりに、頬から上はニツコリと笑顔を浮かべている。

処女だった頃と何も変わらぬ清純な笑顔を、ひよつとこフェラでチンポに吸い付きながら浮かべることの出来る愛が、ミモリのフェラを熱のこもったものにする。

「ミモリがフェラしてる時の顔、とても綺麗だよ」

興奮で赤らんでいたミモリの頬が、私の称賛に照れてさらに赤みを増す。

ミモリのヨダレが竿を伝って金玉まで流れ、ミモリ自身の愛液もホテルの柔らかなカーペットの床を汚した。

「そろそろ出すよ」

海遊びをとても楽しみにしてくれていたミモリのためにも、今は手早く切り上げようと我慢せず射精する。

「ぢゅぞっ！・ぶっぽ！・ぢゅうううううっ ♡♡♡」

根本から引っこ抜かれそうな位に強く吸い付かれ、ミモリの口内に射精する。

亀頭を口の浅い所に留め、ミモリに舌で裏筋を優しくくすぐられるサポートを受けながら今日の一番搾りを大量に射精した。

うっとりと目を蕩かせながら、ミモリの外の夏空にも負けない澄んだ空色の瞳が私をじっと見つめている。

（ご満足頂けましたか？）

頬を精液で膨らませながらまだ最後の一絞りを出させようと舌先で裏筋をほじってくるミモリの頭を撫でた。

「うん、ありがとう。とても満足したよ」

ミモリは心の声に返事をしてあげると、とても喜んでくれる。

私の精液をコクコクと可愛らしく喉を鳴らして飲み下しながら、赤らんだ顔で満面の笑みを浮かべていた。

「ごっ……くん ♡ ふう…… ♡ ごちそうさまでした、先生 ♡ さあ、着替えて海に遊びに行きましょう！」

太ももの内側を愛液でベトベトにして、私の陰毛と精液の残滓を口元に貼り付けて、ミモリがにこやかに立ち上がる。

「うん。でもミモリはシャワーを浴びてきた方が良いかもね」

「あつ……♥ ふふ、お恥ずかしい所をお見せしてしまいました」

私の射精を受けたミモリは、それだけで絶頂に至っていた。

心の底から奉仕が好きミモリならでは、とてもチンポをイライラさせるいじらしいイキ方だ。

シャワーに行くミモリのプリプリした裸の尻を見送りながら、私も手早く着替えた。

「パラソルもレジャーシートも持つてきましたし、椅子にクーラーボックス、食べ物、飲み物……」

連れ立ってホテルの廊下に出た所で、ミモリが持ち物の点検をする。

「ゴーグルに浮き輪、予備の水着もちゃんと用意してきました。準備はいくらしても足りないと言いますが、これだけ揃っていれば大丈夫そうですね」

いくつものベルトが乙女の肩に食い込み、大量の荷物を支えている。

「ちよつと多かったね」

「いえ、これも修行部の副部長として当然です」

ミモリはそう言つて水着の胸を張るが、見た目があまりに罪悪感を誘うのでいくつか持たせてもらった。

「それでは先生、海に行く前に……」

いくつか荷物を渡した事ですべて背中に回せるようになったミモリが、肉感的な身体を見せつけるように私の前で両腕を広げる。

私とセックスをするきっかけにもなったオキシトシンハグのおねだりに、私もサーフパンツ一丁の格好で応じた。

「ふふ……♥ 素肌同士だと、一層オキシトシンが溢れてくるみたいですよ……♥ んっ♥」

先程フェラで大量に射精していなければ絶対に部屋に戻って犯している所だったミモリの水着ハグに、顎を上げさせてキスもつける。

「ん、ちゅっ♥ ちゅうう♥」

セフレになってからはオキシトシンハグにデープキスやセックスが付くことも珍しくなかったため、ミモリもごく自然に応じてくれる。

誰に見られるかわからない廊下で、肌をこすり合わせるように抱き合つて熱のこもったキスを交わした。

あまり長引かせると本当に外に出ずセックスしたくなってしまうので早めに切り上げる。

「ふふっ♥ 私の頭の中、オキシトシンで一杯になってしまったみたいです……♥」

澄んだ青空に星が輝くように、ミモリの瞳が潤んできらめいている。

「さあ、先生！ 今日私は私とたっぷり楽しましよう！」

フェラをしてくれた時と変わらぬ満面の笑みで、ミモリが私の手を引いて歩き出した。

「レジャーシートもパラソルも、うまく設置できましたね。これも先生が手伝ってくくださったおかげです」

オキシトシンに満たされたミモリが上機嫌に砂浜に準備をし、バカンスが始まった。

この間のセックス合宿で身体を酷使した後で仕事の遅れを取り戻すべく必死になって働いたせいか、まだ身体に重い感じが残る私は、ミモリの提案する選択肢の中から日光浴を選ぶ。

「では日焼け止めを塗りましょう。さあ、サマーベッドに横になってください」

トプトプと、ミモリが丸めた手のひらに日焼け止めクリームを溜める。

うつ伏せになった私にミモリが跨り、腰の後ろにむっちりとした尻を置いた。

正常位でミモリを犯すと背中を撫でてくる時と同じ、優しくもどこかねっとりとした熱を感じる手付きで全身を撫で回され、クリームを塗り伸ばしていく。

ミモリの尻がだんだんと下に置かれ、腰も、脚も、足の指先の股さえも丁寧に撫で回されてクリームを塗ってくれた。

「さあ、寝返りをうってください。次はお身体の前に塗りますから♥」  
仰向けになった私の股間は、ピンピンに盛り上がっていた。

「……………」

ミモリは笑みを深めるだけで素知らぬ顔をして、溢れる位に日焼け止めクリームを手取る。

ぺちやり、と胸板に置かれた手のひらが、たっぷりのクリームを塗り伸ばしつつ、私の乳首を愛撫していく。

私にまたがるミモリが、勃起チンポに水着越しのマンコをグリグリと押し付けながら、穏やかな笑みを浮かべている。

「ふふ……♥ あんなに射精してくださいましたのに、先生、もう勃起してしまいましたね♥」

腕や、脇の下まで丁寧に撫で回され、日焼け止めを丁寧に塗り込まれながら、とつくの昔に濡れそぼっているマンコのネチネチという密やかな水音を聞かされる。

「それじゃあ、ミモリのマンコで抜いてくれるかな」

「はい、喜んで♥」

ミモリは当たり前のように青姦を受け入れてくれて、水着の股間をずらして誰に見られるかもわからない野外でマンコを晒した。

シーズンから少し外れているので今は人が少なく、砂浜の隅に居るので周りに人の姿は無い。

といっても砂浜である以上は観光地には違いなく、いつ誰が来ても不思議はない。

それを気にした風もなく、実にスムーズに私の水着も下ろされて手早くゴムを被せられ、ミモリのマンコに飲み込まれた。

「あんっ♥」

ぬち、ぬち、という音が、クリームを塗られる手のひらとミモリの濡れそぼったマンコの2箇所から聞こえる。

「やっぱり、先生のチンポ、とっても気持ちいい……♥ うふふ、今日は普通に遊ぼうと思っていたんですが……私も我慢できなくなつて

しまいました♥」

ミモリの腰に巻かれた白いシースルーのパレオの奥で、真っ赤に充血したマンコがぐっぽりとチンポを咥えこんでいる。

夏の日差しを波の音を聞きながらお湯のように熱いミモリのマンコを感じていると、夢の中をたゆたっているかのような非現実感にとらわれた。

「あまり長くなると、誰かに見られてしまうかもしれませんので……クリームを塗るふりをしながら、頑張って短くしましょう」

「うん。今度はちゃんと、ミモリも気持ちよくしてあげるからね」

「はいっ♥ 先生もたっぷり射精してくださいね♥」

ミモリは朗らかな笑顔を浮かべながら、へこへこと腰を前後に振り始める。

ミモリのマンコは処女だった頃の硬さがすっかり抜けて、ざらりと刺激の強い膣壁が吸い付いてくるように私のチンポを刺激してくる名器だ。

私はミモリの手を握り、残っている日焼け止めクリームを手にとつてミモリの上の水着に忍び込ませ、乳房を揉みしだいた。

「あっ♥ だめっ♥ 先生、脱げてしまいます♥」

「ミモリにもクリームを塗ってあげないとね」

口でだけ嫌がりながら、ミモリは私に好きなように胸を揉ませてくれる。

勃起乳首をクリームの滑りで素早くシコシコと扱くと、ミモリの膣がキュンキュンと締まる。

「ああ♥ それっ♥ 好きっ♥」

ミモリが私を上手に勃起させるのと同じように、ミモリのあらゆる弱点も私に素直に教えてくれているため、やろうと思えばあつという間にお互いを昂らせる事が出来る。

「あっ♥ んっ♥ はあっ、はあっ♥」

ぬっっちゃ、ぶっじゅ、とミモリの本気汁が攪拌される音が立っている。

クリームを塗る振りをかなぐり捨て、ミモリが私の胸板に手をつい



て腰をリズミカルに上下動させ始めたのだ。

いつもならじつくりとミモリの膣を堪能した上でのフィニッシュの動きだった。

ミモリの気遣いか、フェラから我慢し続けたのが限界に達したのか、本気で自分の性感帯を虐める動きでGスポとポルチオを必死になつて亀頭に擦りつけて快楽を貪っている。

「はあっ、ふうっ ♡ あっ ♡ うっ ♡」

興奮にミモリの視線が茫洋と宙をさまよい、マンコの快楽で頭がいつぱいになっていくのが手に取るように分かる。

最高にチンポをイライラさせる聖母にして娼婦のようなお嫁さんセックスをしてくれるミモリに応えるべく、私も片手を乳首からクリトリスに移してシコシコ抜きながら腰を跳ね上げた。

「うっ ♡ ん ♡ ううううう…… ♡ ♡ ♡」

野外だからか、ミモリが自分の口を手で抑えてイキ声を押さえつけながらも激しく絶頂する。

ミモリのほっそりとした腰、柔らかかそうなお腹の中で、私のチンポがドクンドクンと跳ね回っている様を幻視する。

「はあ…… ♡ 先生の、精液…… ♡ 注がれてます…… ♡」

うっとり、鼻にかかったような艶っぽい声でミモリが絶頂の余韻に浸っていた。

お掃除フェラのようにミモリのマンコがうねり続け、私のチンポに残った精液を限界まで吸い上げてくる。

波の音だけが聞こえる静かな浜辺で、二人してゆったりと行為後の余韻に浸る。

「ふうう…… ♡ お疲れ様でした、先生 ♡ 今日もとっても素敵でしたよ ♡」

しばらく後ゆつくりとミモリが腰を上げると、たっぷりと精液を溜めたゴムがミモリの膣穴からひり出される。

酔ったような赤ら顔で慈愛の笑みを浮かべ、てきぱきとゴムを始末してお掃除フェラをしてくれるミモリ。

「ぢゅううう…… ♡ ちゅぽんっ ♡ はい、綺麗になりました ♡」

萎えたチンポを勃起させないように優しく残りの精液を啜り上げ、タオルでお互いの股間を拭き上げてしまえば、セックスの証拠はもう目に見えなくなってしまう。

「あ、日光浴なら、サングラスは忘れないでくださいね？」

ミモリはそう言いながら、サングラスを渡してくる。ミモリ自身も同じものをかけた。

「ふふ……先生と青空の下でセックスしたら、私ものんびりしたくなってしまうました」

ガタガタともう一つサマーベッドを並べて、2人で横になる。

少し離れた場所にミモリが寝そべって……ほんの少し、私の方に手を伸ばしていた。

その手を取って、優しく握る。

「……………♥♥ ありがとうございます、先生」

ビーチパラソルに遮られてちょうどいい夏の日差しと、涼しく吹き抜ける風。

セックスの疲労も相まって、眠気が増していく。

繋いだ手は、時折感触を確かめるようにミモリが指を動かして柔らかさが心地よい。

チラリと横目に様子をうかがったが、サングラス越しには顔色が良く分からなかった。

ただ、ミモリの口元が穏やかな笑みを浮かべている事だけは見て取れる。

プラトニックな関係の恋人のように手を繋いで、私達は昼寝した。

優しくて心地いい人肌を後頭部に感じる。

「先生……今日は、ありがとうございます……」

ミモリの密やかな声が、優しく上から降ってくる。

「本当は、いつまでもこうしていたいのですが……それは、無理でしょうから。せめて、今日だけは……私だけの、先生で……」

優しく頭を撫でられ、頬に手を当てられている。

「お慕いしています、先生……先生のお嫁さんになる予定演習、いつか

本番をさせてくださいね……」

ミモリはとても鋭いので私が聴いている事も織り込み済みなのかもしれないが、夢うつつの私は狸寝入りをするまでもなく再び睡魔に引き戻される。

ミモリの優しい匂いと感触に包まれながら、意識が遠のいていった。

「あ、先生。お目覚めですか？」

目が覚めると、膝枕に加えてゆるゆるとミモリが団扇で扇いでくれていた。

「……あ、ミモリが扇いでくれてたんだ。膝枕までありがとう」

そう言つて、枕元に手を伸ばしてミモリのお尻を撫でる。

「んっ♥ いえ、大和撫子を目指し日々精進する修行部員として、これくらい当然のことですから」

私を上から覗き込むミモリが曇りのない笑顔を浮かべて、私が身体を起こすのを支えてくれた。

「えっと、では……」

ミモリが胸を張って、私の方に両手を差し伸べる。

おはようのオキシトシンハグをおねだりされたので、ミモリを膝の上に抱えて抱きしめた。

「んーっ♥ ふふっ♥ 先生と素肌をあわせたほうが、オキシトシンが出る気がします……♥」

水着がズレてしまうのも構わず、ミモリが身体中を私に密着させるようにしっかりと抱きついて、私もミモリの美しい背中や首筋を撫で回してオキシトシンが出るに任せた。

「んっ……」

ミモリが私の胸元にくっつけていたほっぺを剥がし、上を向いて唇を突き出す。

ぷるぷると潤っている唇に、吸い込まれるようにキスをした。

「ちゅう、ちゅう……♥」

愛を確かめ合うスキンシップとして、軽く唇を吸い合う。しばらく

すると満足してくれたミモリがそつと唇を離した。

「おはようございます、先生♥ ふふ、先生がお昼寝をすると一日に何度もオキシトシンハグ出来てしまいますね♥」

ニコニコと満面の笑みを浮かべるミモリとしばし見つめ合ってから、ミモリの用意したお弁当を食べる。

「どうぞ、先生。レモネードです。ビタミンも豊富ですし、味わいもスツキリしていますよ」

ピリリと辛子の効いたカツサンドの濃いソース味が、レモネードの爽やかさで流されるのを楽しんだ。

「あら、口元にレモンの果肉が……少々お待ちください♥ れる……♥」

口元についたレモンを見るなり、ミモリが顔を寄せてきて……唇をかすめるように舌先で舐め取る。

「ちゅっ……♥ はい、これで大丈夫です。レモネードはいかがでしたか？」

ミモリも飲んだレモネード味の唇でキスをされ、まつげが触れそうな近さでニツコリと笑顔を浮かべた。

「うん、お弁当とも合うし、とても美味しいよ」  
私の感想に満足げな表情を浮かべ、膝を突き合わせてお弁当を食べ

ていく。

食後のオキシトシンハグをしながらのんびりとした後、浜辺でビーチバレーをする事になった。

「さあ先生、行きますよ？ セーの……」

ミモリがトスを上げると、柔らかな胸がポヨンと弾む。

2人きりの眼福なビーチバレーをしていると、大きく跳ねたボールを追っていたミモリが砂に足を取られて転んでしまった。

「きゃっ！」

「大丈夫!？」

ミモリに駆け寄って抱き起こすと、苦笑しながらミモリが身体を起こした。

「はい、大丈夫です。少し足をくじいただけなので……ふふっ、私の負

けですな」

ミモリの玉の肌が付いた砂を撫で落としながら、ラリーに勝ち負けはないと苦笑した。

「たしかに、仰る通りですね……今日の私は、勝負がしたい気分なのでしようか？」

顎に砂をくつつけながらも、ミモリはニコニコと笑っていた。

「少し休憩にしましょうか。そちらのクーラーボックスで、パイナツプルジュースを冷やしておきました。どうぞ、お飲みください」

用意の良いミモリに導かれるまま、またサマーベッドに座って2人でゆつくりとジュースを飲んだ。

ちら、とミモリを見ると、ミモリは先程からずっとそうしているかのように私の顔を見つめていた。

「……先生、お隣失礼しますね」

隣りに座って、私に頭を預けてくるミモリの腰を抱き寄せる。

心地よさそうに目を細めるミモリを見て満足してくれたことを確かめると、そのまま2人でただ波の様子を眺めた。

「……………素敵ですね」

日が傾き、空がオレンジになった頃、ぽつりとミモリが呟く。

「好きなの？」

「はい!? あ、海が……ですよね？」

珍しく慌てた様子で赤面するミモリが、すぐ落ち着きを取り戻した。

「その、もちろん海も好きなのですが……こうして、ゆつたり過ごす時間が好きと言いますか……」

ミモリが私に身体を寄せ、柔らかな胸をむぎゅつと押し付ける。

「先生と、こうして2人きりの時間を過ごさせて……今日はとても、幸せです」

ミモリの頬は夕焼け色に美しく色づいている。

スツと立ち上がったミモリが私の手を取った。

「先生。そろそろ……ホテルに戻りませんか？ 私……先生と、もっ

と一緒に居たくなってしまうって……♥」

夕焼けの中で、ミモリの青く澄んだ瞳が昼と夕の境目のような美しい色味を帯びている。

「うん。部屋の中でゆっくりしようか」

ミモリの手をしっかりと握って立ち上がる。

片付けをしてパラソルやサマーベッドを回収し、手を繋いで帰った。

ホテルに着いて、ミモリは自分の部屋に荷物を置いてすぐに私の部屋にやってきた。

「わあ……夕焼けの海も綺麗ですね、先生」

窓の外を眺めるミモリに後ろから近づき、そっと抱きしめた。

いつもより髪がゴワゴワしているのを手櫛で確認すると、白い首筋にキスする。

日焼け止めと潮の苦味を感じた。

「まずはシャワーを浴びようか」

「……はい♥」

腕を絡めてくるミモリと共にバスルームへと歩いていく。

お互いに潮風を浴びてべとついていた身体を洗い、ミモリにワシヤワシヤと洗髪してもらう。

湯船に一緒に入ると、ミモリが対面座位で抱きついて情熱的にキスしてきた。

「ん……♥ 先生、私、もう……我慢できません……♥ 早くあがって、ベッドに……行きましょう?」

触れる前からぷっくりと勃起している乳首をこちよこちよとくすぐってやるだけで、ミモリは切なさに目をうるませる。

お嫁さん志望のかわいい生徒の願いを聞いて、身体を温めるのもそこそこにお風呂から上がった。

手早く身体を拭き、ミモリは長い髪にドライヤーをかけるのもそこそこに生乾きのままでベッドまで私を引き連れていく。

ミモリが私に抱きつき、ベッドに押し倒した。

ミモリが上から私の顔を覗き込み、しつとりと濡れた髪が上から垂

らされて頬をくすぐった。

「ふふっ♥ 今日はたっぷり、ゆつくりとご奉仕いたしますね♥」

暮れていく窓の外をよそに、ミモリの瞳の中の爽やかな青空は陰る気配を見せない。

きつと今夜は長くなると思いつながら、口に加えたゴムをフェラの要領でサツと被せてくれるミモリの楽しそうな笑顔を眺める。

「んっ♥ それでは、失礼して……♥ あああ♥」

歓喜の声をホテルの一室に響かせながら、ミモリが腰を落としてずぷりとチンポを挿入した。

ゆるゆると小さく腰を振りながら、ぺたんと倒れ込んできたミモリが私の胸板にキスの雨を降らせる。

「ちゅっ♥ ちゅっ♥ ちゅぱっ♥」

穏やかだが情熱的なスキンシップに、ミモリの膺のザラつきだけが際立って熱い。

私もミモリの艶やかな背中に手をおいて、湯上がりでしっとりとした肌を撫でた。

「ちゅうう……♥」

胸板にいくつものキスマークを付けられ、乳首を吸われる。

私のチンポが乳首を吸われる気持ちよさでピクピクと動くのを膺内で感じたミモリが、嬉しそうに目を細めた。

ミモリはがっちり両手両足を使って私をホールドし、決して離れないと言わんばかりに勃起乳首がくすぐったい胸もベツタリと押し付けてくる。

てらてらと唾液に濡れた紅い舌が、私の乳首をゆつくりと舐め回し、ピンと弾くとチンポにまでビリビリと響く快感の電流が流れる。

「ふふ……♥ いつも先生に乳首を気持ちよくなってもらっていますから……今日は先生も、ゆつくりと気持ちよくなってください……♥」

チンポの快樂が回ってきているのか、ミモリの頬は薔薇のように色づき笑みも深くなっている。

ミモリが胸を支点に腰を持ち上げ、ゴム越しにもザラつきを感じ取れる名器がチンポを少しだけ扱く。

しかし、上下動は一回で終わってしまい、またゆったりと腰を揺らすだけの動きに戻った。

「今日はずっとセックスしてきたいので……お射精は、まだお預けです♥」

ウキウキと笑顔でそう言われてしまうと何も言う事が出来ず、ただミモリの性欲の高まりに任せるしか無い。

「んーっ♥ ぢゅうううーっ♥」

馬乗りで下半身をガツチリと固定したミモリに、胸板や脇など無差別にキスの雨を降らされ、どんどんキスマークが増えていく。

「先生っ♥ 先生っ♥ 先生っ♥♥」

熱にうかされたようにミモリの囁きは繰り返され、微かにしか動かしていないはずの腰からねちゃねちゃといやらしい水音がひっきりなしに聞こえてくる。

2人きりで邪魔の入らないホテルの部屋で、ミモリは心からセックスを楽しんでいるようだった。

揺れている程度だった腰が、だんだんと大きくクネり、上下動に変わっていく。

「はあっ♥ はあっ♥」

たぱっ、たぱっ、とミモリのお尻が私の太ももにぶつかる音を立てながら、膣口を無惨なくらいに大きく拡げてチンポを出し入れする。

ゆっさゆっさとミモリの乳が揺れ、私の脇の下に置かれた手がベツドのシーツをギュツと掴んだ。

ミモリは私の調教を受け、自分ひとりで腰を振っていてもいきづらようになっていく。

膣で大きな絶頂を得るためには昼間のように私から責める事が必要なのだが……今日はたっぷりと楽しみたいらしいので、形の良い乳房が派手に揺れるのを眺めて楽しむに留めておいた。

「あゝーっ♥♥ すきっ♥♥ すきっ♥♥ せんせえっ♥♥」

いきそうでいけないミモリがセックスで頭を一杯にして、大きな声で叫び始める。

「すきっ♥ すきっ♥ すきっ♥」



いじらしく奥ゆかしいミモリの美しい心が、チンポの快樂で押し出されてむき出しになる。

ギチギチと締まる膣が絶え間なく痙攣し、殆ど絶頂していた。

あと一押し私が突いてあげるだけでミモリは高みへと舞い上がるだろう。

「いくよ、ミモリ」

私が声をかけ、細い腰を掴むと、ミモリはヘッドバンギングのようにガクガクと頭を上下に揺すった。

すぱあん！ と拍手のように肉を打ち鳴らし、ミモリの最奥を乱暴に突く。

「おっっ♥♥♥ おっ、うっ♥♥♥ うっ♥♥♥ うっ♥♥♥」

それだけで、ミモリは仰け反って天井を仰ぎながら深く絶頂した。握りしめるように強い締付けの中、私も射精する。

「あっ♥♥♥ ああ、うっ♥♥♥ うっ♥♥♥」

ミモリの、普段の高く澄んだ声とは全く違う、深く唸るようなすすり泣きの声が、絶頂の深さを物語っている。

汗ばんで桜色に上気した身体を痙攣させながら絶頂の余韻に浸るミモリを、ゆっくりと待った。

ふらりと私に倒れ伏してくるミモリを優しく抱きとめ、背中を擦る。

「ふわあ……♥♥♥ すみません、先生……♥♥♥ 結局、私のほうが我慢できなくなってしまうました……♥♥♥」

「夢中になつてるミモリ、とても可愛かったよ」

「ふふ……♥♥♥ もう、先生はそんなことばかり……♥♥♥」

深い絶頂の後だからか、ミモリの声音がねっとり甘ったるい。

腰を浮かせてチンポを抜いたミモリは、当たり前前のように次のゴムをチンポに被せた。

それを確認してから今度は私が上になりミモリを組み敷く。

「今度は私がミモリを気持ちよくしてあげるね」

「お願いします、先生♥♥♥」

ぱっかりと股を開いたミモリが、充血してパクパクと口を開閉する

マンコを両手で左右に開いて見せる。

今日三回目の挿入ですっかりスムーズに入る膣にぬぷぬぷとチンポを沈め、ミモリの脚ごと抱え込んで種付けプレスで上から犯した。

「おっっ♥おっっ♥」

この姿勢の時は素直に声を出すよう仕込んであるミモリが、腹の底からチンポを歓迎する声を上げてくれた。

先程ミモリにされたように、私も犯しながらミモリの乳首を吸いたてる。

「んゝーゝーっ♥♥ あゝーゝーっ♥♥」

外に漏れ聞こえそうなくらいに思い切り声を上げて、ミモリが喜ぶ。

ガツチリと私の腰をミモリの脚がホールドしているので少し動きづらいが、何とか腰を振ってミモリの膣を上から突きまくった。

「んゝおゝおおお♥♥」

ぐっぽ！ ぶっじゅ！ とミモリの膣に蓄えられていた本気汁が噴出し、汚い音を立てる。

ミモリの顔は今や涙とヨダレでぐちよぐちよだったが、澄んだ空色の瞳の輝きだけは全く衰えて居ない。

若く真っ直ぐな恋情が私のチンポをイライラさせて、腰の動きもさらに力強くなった。

「んおおお♥ おおーおん♥」

一番奥を集中的にほじってやるとケダモノの遠吠えのような声を上げてミモリが善がり狂う。

ミモリの力強い腕で抱き寄せられ、柔らかな胸の谷間に顔を突っ込むしか無い体勢のままファイニッシュの動きを継続し……

スパアアンっ！ と渾身の突きを放った時、ミモリの脚がガツチリと私の腰を固定し、強い締付けが始まった。

「あゝーゝーゝーっ♥♥♥」

恥も外聞もなくミモリが絶叫する。

ポロポロと涙をこぼし、幾筋も涙の跡を付けながら呆然とした表情で快楽に蹂躪されるのを楽しむミモリに、金玉の中身が空になるかと

思うほど大量に射精する。

シャワーを浴びたばかりなのに、また2人とも汗だくになってベッドの上で重なって倒れた。

「はあ……はあ……ふうう……♥ 先生とのセックス、ゆっくりたっぷりしようと思っていたのに……つい夢中になってしましますね……♥」

つい先程まで盛りの付いた雌のように乱れていたミモリが、涙の跡をそのままに清楚な微笑みを浮かべる。

「ミモリの誘い方が上手だから、私もつい本気で突いちやったよ」

「いえいえ、先生のチンポが素敵すぎて……♥ ふふっ♥ お互い様ですね♥」

上機嫌に笑ったミモリが私に触れるだけのキスをして、ベッドに備え付けの時計を覗き込む。

「あら、もうこんな時間。先生、夕食を食べに行きましょうか」

「確かに……もう外も真っ暗だ。行こうか」

「では……帰ったら、またセックスの続きをしましょうね……♥」

その日は結局、深夜までたっぷりミモリを抱き、裸のまま2人で眠った。

翌朝、肌の艶が増したミモリを見ながらあくびを噛み殺し、腰が軽くなっていたが疲労は抜けていない現実には苦笑しながら2人で帰るのだった。

あなた様のためならば（ワカモ・アスナ）

「ちゅっ……♡ ぢゅっ……♡」

私のチンポを啜り上げる卑猥な水音が、執務室に響き渡る。

「ご主人さま、いっぱい我慢汁にじんできたね。もっともっと、気持ちよくしてあげるね♡」

につこりと、本当に楽しくてしょうがないといった風にあすなが笑った。

ソファに腰掛けた私の前に跪き、あすながメイド服の胸をはだけてパイズリフェラをしてくれている。

ピンピンに勃起した乳首をそっと撫でると、あすなは電気が奔ったように全身を痙攣させる。

「ひゃううんっ♡♡ も、もうっ。ダメだよ、ご主人さま……♡ ご主人さまに触られたら、すぐイツちやうってわかってるでしょ……♡」

ほんの少し撫でただけで、無邪気な笑顔が雌の媚が交じる性処理メイドの顔になった。

「ごめんごめん。あすなはすごく気持ちよくなってくれるから、つい見たくなっちゃうんだ」

休まずパイズリの手を動かし続けるあすなの頭を撫でると、頬をバラ色に染めながらもあすなはニカツと笑った。

「ふふ、ご主人さまが見たいなら、いくらでもシていいよ♡ でもまずは、私にご奉仕させて欲しいな……♡」

あすなは私に触られる時に敏感になるので、セックスしているとすぐにイッてしまう。

処女の初セックスの時でも気絶するほどイキまくって、私に奉仕出来ないことを何度もわびていたくらいだ。

それもあつてか、C&Cの仲間はもちろん先任セフレのノド力など奉仕好きのセフレにも色々教わり、着実に腕を上げていた。

「んぢゅうううう♡」

あすなが端正な顔をひよつとこみたいに歪めて、私の亀頭にむしやぶりつく。

「ぢゅっ♥ぢゆるるっ♥」

強く吸い付き、頬の内側の粘膜をマンコのように使いながらも、舌が亀頭を舐め回したり裏筋をグリグリと刺激したりと飽きさせない工夫を感じるフェラを堪能する。

セフレとしての努力を欠かさないアスナに偉い偉いと頭を撫でてやると、卑猥なひよつと顔の目だけにいつものような無邪気な笑顔を浮かべて、さらに熱のこもったフェラをしてくれた。

アスナの清らかな奉仕精神と、その結果生み出される卑猥なフェラ顔に心を打たれ、金玉がグツグツと煮えたぎる。

片手でアスナの頭を軽く掴み、ほんの少し下げさせると、無邪気なアスナの目が性奉仕の愉悦に蕩けた。

「んぐっ♥ぐっぷっ♥」

自分の胸に顔を突っ込むようにして、アスナのフェラがチンポを奥まで飲み込むディープスロートに変化する。

アスナの瑞々しい唇がぬるぬるとチンポを上下し、舌のザラつきで裏筋を絶え間なく刺激してくる。

「じゅぽっ♥がぼっ♥んぐっ♥」

私のチンポの膨らみで射精を悟ったアスナが、更に激しく頭を上下させ……

ねだられるままに、アスナの喉に精液を叩きつけた。

「んぐっ♥ぐっくっ♥」

目元に笑みをたたえながら、アスナが喉奥に溜まっていく精液を飲み下す。

手袋に包まれたアスナの指先が、金玉を優しく揉みほぐし、尿道を押し精液を一滴残らず啜り上げてくれる。

最後まで、ひよつとこのように口を伸ばしながらぬるくとチンポを抜いていき……

「んぐっ♥……ふぁ♥」

褒めて欲しそうなニコニコの笑顔を浮かべるアスナの頭を、ワシワシと撫でてあげる。

「とつても上手だったよ、アスナ。本当に上手くなったね」

「ありがと、ご主人さま♥　じゃあ……ここからは、ご主人さまのシたいこと、しよつか……♥」

今から自分が失神するほどイカされまくる事を受け入れたアスナが、私とのセックスを期待してうつとりとした笑顔を浮かべる。

メイドのアスナは、てきぱきとソファにタオル地のシーツを何枚もかけてから、射精で萎えていた私のチンポを優しくしゃぶって勃起させ、ゴムを付けてくれた。

セフレ教育もすっかり板につき、真つ昼間のシャーレ執務室でアスナが服を脱ぎ落として全裸に手袋とストッキングだけになった。

「それじゃ、ご主人さまのチンポに失礼しまーす♥」

愛撫もしていないマンコにチンポが触れると、にちゃりと既に熱く濡れそぼっている。

何度もセックスしているのにプリプリと弾力があり締めりも良いアスナのマンコに、ヌルヌルとなめらかに飲み込まれていく。

「んっ♥♥♥　ふ、うう♥♥　あああーっ♥♥♥」

たったそれだけで、アスナは何回か絶頂していた。

元々気持ちいい穴を持っているアスナが、絶頂により更に強く、うねるような締め付けをしてるのでアスナだけでなく私にとっても気持ちいいセックスになる。

「あ……♥　う……♥」

早くも呆然としているアスナを優しく抱き寄せ、背中をさすりながらキスしてみる。

「んっ♥　うううーっ♥♥♥」

そんな何気ない愛撫でもアスナは膣をうねらせて軽く絶頂する。

痙攣する脚を健気に動かし、ソファに腰掛ける私の腰に絡みつかせた。

私もアスナをしつかりと抱きしめ、私達の身体でアスナの巨乳が押しつぶされる。

「ご主人さま……♥　いつもみたい……私を、メチャクチャにして……♥♥」

自分がどれほど乱れるかを思い知っているアスナが、期待と畏れと

媚を載せた視線で私を見つめる。

ソファの弾力を利用して、勢いをつけて突き上げた。

「あうんっ♥」

顎を上げてのけぞるアスナを抑え込むように、ぎっ、ぎっ、とソファのスプリングをきしませて連続して突き続ける。

「あゝっ♥♥ あゝっ♥♥」

突き上げる度に、ほっそりとしたアスナの喉から絞り出すような善がり声が響き渡る。

アスナの両手は私の首の後ろでしっかりと握られていて、連続絶頂の渦に叩き落されながらも健気に私にしがみつき続けていた。

アスナが仰け反っているので私の眼の前では巨乳がぶるんぶるんと跳ねている。

ぱくんと口に含んで、舌で乳首をねぶり始めた。

「ん、おおおおっ♥♥ お、おお……♥」

今までよりもさらに甘ったるく、粘着くように耳に残る鼻にかかった喘ぎ声。

アスナは何度も絶頂しているのか、マンコもうねり続けていた。

ちかつ、ちかつ、とハイローが明滅し、意識を飛ばしそうなほど深く絶頂しているのが分かる。

絶頂して強く閉まるマンコが引き抜くチンポを逃すまいと密着し、カ리를ゾリゾリと擦り上げ、射精を促す。

アスナの大粒勃起乳首を吸いながら、フィニッシュのためにアスナを強く抱きしめる。

ぐり、ぐりと一番奥を力を込めて突き、アスナをさらに深い絶頂へと連れて行く。

「う、あ、あああああっ♥♥♥」

啜り泣くような大声を上げてポルチオアクメを決めたアスナが善がり狂った。

その素晴らしい膣のうねりに押し流されるように私も射精する。

アスナの心地よい膣のうねりに促されるように、大量の精液が膣奥……のゴムへと吐き出されていく。

ピストンをしていた時間はさほど長くないのに、ほかほかと蒸気が漂うほどアスナは汗をかいている。

しっとりとした汗ばんだ乳房にキスすると、チカチカとハイローを明滅させながらアスナが身体をびくんと痙攣させた。

「お疲れ様、アスナ。今日も可愛かったよ」

ずるん、とチンポを引き抜きながらアスナを優しく抱きしめると、ようやくハイローが安定したアスナが力なく微笑み返してくれた。

「ご主人さまのチンポ、今日もすごかった……でも、もう良いの？ 私の身体のことなんか気にしないで、シただけシてくれて良いよ？」

「仕事もしないといけないからね。今日はここまでにしようか」

頭を撫でて、軽くキスをすると、アスナも了承したようで後片付けを始めた。

「ふうう……気持ちよかったあ……それじゃ、ちよつとシャワー浴びてくるね」

これもテキパキと終わらせると、アスナは着直したメイド服の胸元をパタパタやってセックスの火照りを冷ましながら部屋をでた。

仕事をしながら待つと、メイド服ではなく制服姿のアスナがドアから入ってくる。

「やほー、ご主人さま♥ 仕事のお手伝い再開するね！」

身体にピツタリと張り付くようなメイド服とは違い、制服のブラウスはアスナの体型にはついてこれず、スカートの部分でギュツとまとめられてシワが寄っている。

それがアスナのプロポーションの良さを余計に強調し、ともすれば胸元の出るメイド服よりもセクシーでさえあった。

とはいえチンポをイライラさせている場合ではなく仕事をする。

アスナは書類仕事が得意というわけではないが、私が欲しいと思つた資料をパツと探して渡してくれるので有り難い。

順調に仕事を片付けて居ると、そろそろアスナの当番の時間が終わりの次の生徒がやってくる時刻になった。

「んー……♥」



小休止してお茶を入れてもらって飲んでいると、アスナが傍に座って私に抱きついて甘えてきた。

セックスしてシャワーを浴びたのでしっとりとしているアスナの髪を撫でつつ、しばしまったりとしていると……

「こんにちは、先生♥ あなたの様のワカモ、ただいま参りました♥」  
ワカモがドアを開ける直前にアスナは抱きつくのをやめていたが、まだぴつとりと私に寄り添っている。

私達を見て、ワカモが仮面の下で不機嫌な表情をしたであろうことが簡単に想像できた。

「先生……その女は？」

低いトーンで話しかけてくるワカモ。

「ああ、この子は……」

「こんにちは！ ミレニアムの3年、アスナだよ！」

「……先生の……お言葉を……遮るな」

密着したままでアスナが満面の笑みを浮かべて挨拶するので、ワカモは余計にビキビキしている。

「まーまー、硬いこと言わないで！ 先生、この子は……？」

アスナが小声で訊いてくるのは、つまりワカモがセフレかどうかという事だ。

「ん……百鬼夜行のワカモだよ」

私が言葉を濁すと、アスナは察したのか眉を上げて軽く驚いていた。

「ふーん？ そうなんだ……？」

察しのいいアスナは、ワカモが私の事を慕っているというのを理解しているのだろう。

セフレにもならずそこまで入れ込んでいるというのを驚いている風だった。

「ちよつと……貴方。先程からそんなに密着して……先生に対して、無礼ではありませんか？」

怒りからか、ワカモの声が震えている。

「大丈夫だよ、ご主人さまと私の仲だもん。それより、ご主人さま。

「……いいんじやない？」

セフレにしてあげてもいいんじやない？ の意だとすぐにわかった。

「いやあ……うーん」

私としてもワカモの身体には日頃からチンポをイライラさせているのだが、ワカモの気持ちは良くも悪くも本物だということと、本人の精神性に問題があった。

ワカモのコミュニケーション能力の低さと、かなり子供っぽい所と、嫉妬深い所が合わさるとセフレにするのがためられるのだ。

とはいえ……

「さ、さつきから何なのですか……先生と……そのように、通じ合って……」

私とアスナが2人にしか通じないように会話していることはワカモにも伝わっている。

私からの疎外感を感じたワカモが、先程の怒りもどこへやら、童女のように萎れてしまっている。

「ほらほらー、可哀想じゃん。ご主人さまの事好きっぽいし、大丈夫だって！」

アスナがグイグイと身体を密着させ、私の腕が大きな乳房に包み込まれる。

「も、もう我慢なりません！ 私の眼の前で、そ、そのような、はしたない真似を……！」

ワカモが我慢の限界を迎え、アスナを排除しようと動き出すのを見て、私は決意した。

「わかったよ、アスナ。ワカモはその……周囲に溶け込むのが苦手な子だから、フオローしてあげてね？」

「うんっ、いいよー！」

「えっ……？」

2人で立ち上がった私達を見て、ワカモがなにかされることを察してか一歩下がる。

「ワカモ……おいで」

呼びかけるだけで、ぴくんとワカモの身体が震え、豊かな胸がふると揺れた。

そのままフラフラと私に向かって歩いてきたのを、そつと抱きしめた。

「……………!? えっ、えっ、えっ!?」

身体を緊張で固くするが、私の腕の中から逃れようとはしないワカモ。

「おっと、お面は外しちやおうねー」

横からアスナがサツとワカモのお面を取り上げてしまう。

「あつ……………」

ワカモの少し垂れ目で優しげな目が見開かれ、私をまっすぐ見つめている。

ぐんぐんとワカモの顔が赤くなっていき、瞳が潤んでいくのを見て、チンポがイライラしてしまった。

「ワカモ…………私とセックスしてみない?」

「えっ、ええええええっ?!?!」

ぽかん、と口を開けて、ワカモが絶句している。

「いつ、い、いけませんいけません、そのような、ふしだらな……………!」

いえもちろん、あなた様がお相手であればこのワカモ、いつでも準備は出来ておりますが、しかし…………そのようなことは、結婚の初夜にすることであつて…………」

「でも私はワカモとセックスしたいよ」

「はううううんっ♥」

ぐずるワカモの耳元で囁くと、ぴくんと震えて背筋をピンと伸ばして悶えた。

「駄目かな? 駄目なら、もう誘わないけど…………」

「そつ、そんな! だ、だ、駄目では! 駄目ではないのです! ただ、あの、順序が逆と申しますか、そう、ま、まずは私と結婚をしていただきたく……………」

「ワカモと結婚したり恋人になつたりする気はないよ」

「……………う、ううううう……………」

ポロポロ泣き始めてしまった。

「そ、それでは……あなた様はただ、私の身体を、欲望のままに貪りたいと……?」

「うん、まあ、そういうことだね」

酷い話だが、ここを了承してもらわないと後でさらに拗れるのでちやんと言っておかねばならない。

「ううっ、うううう……わ、わかり、ました……この恋、もはや叶わぬのであれば……せめて……お情けを……お情けを頂きたく……」

「あーあーご主人さま泣かせちゃったー。かわいそー!」

気分を出して、ポロポロと涙を流して私を見つめるワカモの横からアスナが茶々を入れた。

「さ、さつきから……何なのです、貴方は! 先生に仕えるメイド風情が、私の邪魔をするなど……!」

横を向いてアスナを睨むワカモだが、アスナの方は全く動じていない。

「確かに私はご主人さまのメイドだけど、今はそれ以上にご主人さまのセフレだもーん」

「セツ!? セフツ!」

あっけらかんと笑うアスナの口から飛び出した過激な言葉に、ワカモの目がまたも見開かれる。

「大丈夫。ご主人さまならあなたの事もちゃんと愛してくれるよ。ほら」

アスナがワカモを向き直らせ、さらにその手を取って私の股間に押し当てた。

「ひゃあああああつ!? あ、熱っ! か、か、硬っ! あ、あ、あ、」  
ワカモがその感触にパニックになり、一気に顔を真っ赤にした。

アスナはニツコリとその様子を見守り、ワカモの耳にこしよこしよとなにかを囁いた。

チンポを触らせられて顔を真っ赤にしながらも、ワカモがだいぶキリツとした表情でアスナの方を向く。

「……! その話、本当なのですか?」

「さあ、どうだろ？ 結局はあなた次第だし」

ワカモはアスナを睨みつけていたが、赤面しているのでイマイチ迫力がない。

アスナのニコニコ顔を崩せないと悟ってか、急にしおらしい顔になって私に向き直った。

「先生……私はあなた様のことを、お慕いしております……愛しております……叶うことなら今すぐ結婚したいと……」

「……うん」

チンポを触るワカモの手が、ぎこちなく動く。

「し、しかし……それが先生のご迷惑になるというのであれば……他の女を排除するような事はいたしませんから……どうか……私が、心の中であなただ様を思う事だけは……許して、頂けませんか……？」  
つう、とワカモの頬に涙が伝う。

「ワカモが、それで辛くないのであれば」

「酷いお方……辛く、無いわけが、ありません……けれど、このワカモ……あなた様に少しでも私の事を見ていただくためならば……なんでも、いたします」

「うーん……だからね、そこまで思い詰めるのであれば……」

「いいえ！ 絶対にやります！ 私をあなた様のせ……セフレ、にしてくださいませ！」

決意を漲らせた目で断言されてしまった。こうなるだろうと思っただのでワカモをセフレにする気はなかったのだが……

「わーっ！ かっこいいー！」

アスナがニコニコしながら横で拍手している。

「……ちよつと……そのメイド。いつまで居るのですか。これから、あの……先生と……ムニヤムニヤ……をするのですから、出ていきなさい」

「えー？ 聞こえない？ なんて言ったの？」

「ワカモ、ハッキリ言っただけだよ」

アスナの煽りストレスの返しに私まで加わって、ワカモはタジタジになってうつむき恥じらった。

「あ、う……あなた様まで……あの……その……せ……セックス……まぐわい……ですわ……」

返答に満足したアスナが、グツと親指を拳の人差し指と中指の間から突き出してニカツと笑った。

「そっかー。それじゃあ出ていこうかな！ 当番の時間ももう終わりだし、セックス頑張ってね！」

迷わない足取りで出ていくアスナに、もしかしてフォローはこれで打ち切りなのかという不安をいだきつつも、私の腕の中にいるワカモとのセックスにチンポのイライラが高まり続けている。

「それじゃあ、ゆっくりセックス出来る場所に行こうか、ワカモ」

「ひゃ、ひゃいい……」

私と2人きりになって緊張感が抜けたからか、ワカモは顔を真赤にして目を見開いたまま、呂律の回らない返事をした。

ワカモの、常に破壊行為に勤しんでいるとは思えない白魚のような指を取り執務室を出る。

まだ生徒が残っているが、今この階に居るのは全員セフレだったので誰にも咎められる事はなかった。

地下居住区という名のヤリ部屋にワカモを連れ込むと、カチコチになっているワカモをよそにソファベッドにシーツを何枚も被せ、準備を整えた。

台所でコップに水を用意し、避妊薬と共にワカモに渡す。

「ぎ、ワカモ。避妊薬だから飲んでね」

「は、はい……くっ……んくっ……」

緊張で震えながら、喉を鳴らして小さな錠剤を嚥下する。ローテールブルにコトリと置く音が、やけにハッキリ聞こえた。

これからセックスするという緊張感が更に増したのか、ワカモは私から目をそらして自分を抱くように腕をさすっていた。

そのポーズがワカモの巨乳を強調し、チンポをイライラさせる。

私は近づいて細い腰を抱き寄せ、白いスカートに大胆過ぎるほどに入ったスリットに手を潜り込ませた。

「ひゃっ……!」

身体を固くしてギュツと目を瞑ってしまうワカモを微笑ましく見つめながら、優しく太ももの内側を撫でる。

「んっ、く……!」

私の指の動きに応じて、ワカモが肩を震わせ、胸がゆさりと揺れる。

「ワカモ。脱がすよ」

耳元でそう囁いてやると、ますます身を固くして肩が上がった。

腰の帯を解き、床に落とす。

制服の前のジッパーを下ろすと、ワカモは腕を解いて脱がせるようにしてくれた。

する、ぱさ、と衣擦れの微かな音を立ててワカモの制服が床に落とされる。

セクシーなガーターベルトも黙って脱がされてくれて、かちやりと金属の擦れる音と共に落ちていく。

サラシを巻いただけの豊かな胸と、ふんどしを締めた股間を必死に手で隠そうとするワカモに、チンポのイライラが格段に高まった。

「綺麗だよ、ワカモ」

「あ……ありがとお……い……、ます……」

顔も、顔の横の耳も真っ赤にして、涙目で恥じらうワカモを抱き寄せ、裸の背中を擦る。

「あっ ♥ んっ ♥」

ワカモはたったそれだけで甘い声を上げ、私の胸にすがりついてきた。

「ワカモ、後は自分で脱げるっ」

「っ……! は、い……」

震える手で全裸になろうとするワカモの前で、私も服を脱ぐ。

下を脱ぎ去って勃起チンポをワカモの腹にかするくらいの近さで突きつけると、ワカモは目を丸くしてそれを凝視していた。

「ほら、手が止まってるよ」

促してやると、ワカモのサラシが解かれて巨乳が開放された。

手で乳首を隠そうとするワカモの細い手首を取って、股間に目を向

けると……観念したように、ふんどしも解き、ワカモはストッキングと靴以外一糸まとわぬ姿となった。

ふんどしの帯の幅は狭いため、ワカモの陰毛は綺麗に処理されている。

もとからパイパンであるかのように艶やかなマンコはピッタリとは閉じておらず、芽吹きかけた花を思わせた。

「あつ、ああああ……は、恥ずかしくて、死んでしまいたい……」

顔を真っ赤にして、ポロリと頬に涙を伝わせるワカモ。

その涙を指で優しく拭いながら、チンポを腹に押し付けるように抱きしめた。

「はうっ♥」

「とても綺麗だよ、ワカモ。さあ、ベッドに寝そべって」

キヴォトスでは凶悪な犯罪者として名を馳せているワカモが、非力な私に押されるがままにベッドに仰向けになる。

仰向けになってもさほど形が崩れない張りのある胸を、そっと掴んだ。

「ああ……♥」

ワカモは私の指が自分の胸に食い込んでいくのを食い入るように見つめている。

手のひらに伝わる大きさ相応の立派な乳首が、ムクムクと固くなつていく。

その反応を見てもう少し強くても平気そうだと判断し、両の乳房を揉み潰していく。

「んっく……♥」

わずかに眉をしかめながら、ワカモは私の手から与えられる感触に陶然となり意識を集中しているようだった。

私は一度手を離し、ふっくらと勃起した乳首をつまんで引っ張つた。

「あつ♥ うんんっ♥」

ワカモは軽く背をのけぞらせ、ますます乳首を勃起させている。試しにもつと胸が伸びるほど引っ張ってやると、



「はああああんっ♥♥」

と大きな声で快楽を叫んだ。

「ワカモはこのくらいが気持ちいいんだね」

「う……ああ……♥ わ、わたくし、なんてはしたない声を……♥」

「とても可愛かったよ。もっとワカモのそういう所を見せて欲しいな」

ワカモは口元を手で隠しながら、私を見つめたり視線をそらしたりと恥じらっている。

「あ……あなた様が、そう、おつしやるならば……♥」

そう言いながらも、快楽を貪る許可を与えられたことでワカモの瞳の奥に情欲の火が灯る。

「じゃあ、次はこつちを舐めるね」

「きやあっ!?!」

ワカモの引き締まった太ももを掴んで持ち上げる。

ほとんど大人と違って良い成熟したマンコは既に愛液で湿っており、むわりと甘酸っぱい匂いを漂わせていた。

「そ、そ、そのような所、汚いですから!」

「そうかな? とても綺麗だよ」

少しはみ出した小陰唇に口づける。

「はっ、く♥」

それだけでワカモの脚からは力が抜け、されるがままに大股開きさせられてしまう。

ワカモの肉厚な花びらを、まんべんなく舌で撫で回す。

「あっ♥ ああああーっ♥ はんっ♥ あんっ♥」

たまらない、という感じで、鼻にかかった悩ましげな喘ぎ声を上げてワカモが善がり始めた。

クンニを続ける私の鼻に、コツリとクリトリスがぶつかると可愛らしい豆が、ぷつくりと健気に勃起して触って欲しそうにヒクヒク震えていた。

そつと口を含み、皮の上からコロコロと舌で転がしてやる。

「うあああああーっ♥♥ あうううーっ♥♥」

恥も外聞もなく、ワカモが悶え狂う。

執務室でセックスしていたら、扉の前なら聞こえてしまっていたかもしれない。

口の中でムクムクとクリトリスの勃起が増し、つるりと皮を向いて中身をそつと舌で撫でる。

「おっっ♥ うっっ♥ はっ、はあああああっ♥♥♥」

ワカモが激しく反応し、限界まで開いた股をカクカクと痙攣させて絶頂する。

私の口から顎へと、飲みきれないほどの愛液がダラダラと流れていった。

ようやく口を離し、ワカモの顔を覗き込んでみると……呆然と虚空に視線を彷徨わせ、半開きにした口からはよだれを垂らし、頬には幾筋もの涙の跡が残っている。

「あ……う……♥」

手のひらで口元の愛液を拭い、ワカモに覆いかぶさる。

ほとんど失神しているようなワカモの顎をつまんで向き直らせるど、唇をうばった。

「あむっ♥ ん……ちゅう♥」

乳飲み子のように私の唇を吸うワカモに合わせて、しばらく大人しいキスをする。

段々とワカモの目に正気の光が戻り、うっとりキスに没頭するようになる舌をねじ込んで口内を蹂躪した。

「んくっ♥ ちゅ、ちゅぱっ♥」

ワカモは喜々として舌を受け入れ、吸い付きながら私の唾液をコクコクと飲み下す。

おずおずとワカモの腕が上がり、許可を求めるように控えめに私に抱きついてくる。

私も抱きしめてワカモの頭を優しく撫でてやると、目元だけで童女のようにニコツと笑ってワカモの手が私の背中に当てられた。

ワカモの健気さが、セックスの快楽を貪る方向に働き始めているのを感じ、チンポのイライラが高まる。

ほつそりとしたワカモの腹にチンポを擦りつけ、我慢汁でヌルヌルにした。

ワカモもまた、チンポに合わせてゆらゆらと腰を動かし、もっともっととせがむように抱きしめる手に力を込めてくる。

ちゆる、とワカモに惜しまれて吸われながら唇を離す。

「入れるよ、ワカモ」

「はい……………♥ 私の処女、どうか、もらってくださいませ……………♥」

本当ならば結婚まで取っておきたかった、という心痛を滲ませながらも、柔らかく微笑んでくれるワカモ。

ネチャネチャに濡れそぼったワカモの割れ目に、チンポを押し付ける。

ぐり、と押し込むとワカモは眉をしかめるが、決して目を瞑ろうとはしない。

「あなた様……………♥ 好き……………♥ 愛して、おりま、う、っ……………♥」

角度を調整していたチンポがズブリと一気に侵入する。

ワカモのマンコは発達しており、ねつとりと纏わりつくような厚い肉ひだに満ちていた。

それでいて処女の熟れない感じが残り、締めりもきつい。今しか楽しめない、未成熟な名器だ。

生ハメならではの熱さと絡みつきを楽しみながら腰を進めると、すぐに処女膜に行き当たる。

「力を抜いてね」

「はい、いつでも、どうぞ……………♥」

無意識なのだろう、少し眉をしかめながら、不安げに背中の手を力を入れる。

みち、みち、と処女膜が破ける感触を味わいながら、ガツチリとワカモの腰を固定して突き入れる。

「う、く……………」

流石に痛そうに顔をしかめるが、すぐにうつとりと微笑んだ。

「これで、私……………一生に一度しか無い経験を、あなた様に捧げられたのですね……………♥」

一滴の涙と共に柔らかく微笑むワカモに、チンポからびゆるびゆると我慢汁が溢れ出す。

ワカモを犯すために、強く抱きしめて口づけた。

「んっ♥ うっ、んむっ♥」

そつと腰をふる私に健気にも苦痛混じりの声を聞かせまいとして、殊更にこびた善がり声を上げるワカモ。

「ううんっ♥ ちゅうう♥」

ワカモも痛みをごまかすためにセックスに没頭しようと、積極的に唇を吸い、私に舌を絡ませてくる。

ありがたくその努力を受け取り、グリグリと裂けた処女膜以外の肉壁を亀頭で擦り、ワカモの弱点を発掘していく。

「んっ♥ はあっ♥ あうう♥」

フリではなく、良い所をえぐった事で堪えきれない甘い声が唇から盛れる。

唇を離して至近距離から見つめ合うと、ワカモが唇を尖らせて文句を言った。

「も、もう……っ♥ か、顔を覗き込まないでくださいませ♥ 恥ずかしゅうございます……♥」

「照れてるワカモも素敵だよ」

「あう……♥ あなた様、閨の中ではこのようにイジワルなお人なのです……♥」

そう言いながら、ワカモのマンコはキュウキュウと締まっている。

唐突に乳首を強くつねってやった。

「んきゅうううんっ♥♥」

高い声を上げて、ワカモが軽く絶頂する。

「そういうワカモは、意地悪されるのが好きみたいだね？」

「だ、だって……仕方ないではありませんか♥ あなた様にされるイジワルならば、私にとってはどのようなものでも極上の甘露のようなものなのです……♥」

抓られて左右の大きさが不揃いになった乳首を見つめて、うっとり微笑むワカモ。

「それじゃあもつともつとご褒美をあげないとね」

「はい……♥ もつともつと、沢山くださいませ……♥」

破瓜の痛みも引いてきたらしいワカモから、ズルズルとチンポを抜いていく。

入り口付近まで亀頭が来ると、一気に奥まで押し込んだ。

「うっ♥♥」

あまりの刺激の強さに、ワカモが歯を食いしばり眉を寄せて必死の形相で悶える。

自分がどんな顔をしているか自覚させる暇を与えず、マンコのすべてを使った長いストロークのピストンを始めた。

「おっ♥ うっ♥」

パン、パン、とワカモの太ももと私の下腹部がうち合わさり、セックスの音を奏でる。

ワカモの愛情のようにねばつく膣の肉ひだが一突きごとに亀頭を愛撫し、私も急速に射精感が高まっていく。

「うっ♥ うっ♥ うっ♥ うっ♥」

やはりワカモにはこれくらい刺激がちようどいいのか、処女膣を無茶苦茶に蹂躪される強すぎる刺激を必死に貪って快楽を得ていた。

ほとんど白目を向くように上の方を見ながら、歯を食いしばり快楽を受け取る事だけで頭がいっぱいになっているワカモなど、私以外の誰も想像したことがないだろう。

本来ならば彼女の夫になるものにしか見せない顔を脳裏に焼き付けながら、乙女の聖域である子宮を汚すべく、カリ首で子宮口を擦る。

「ふうん♥ん♥ん♥ おおおお♥♥」

開発を済ませていない子宮口は常人ならば痛みで泣くくらいの敏感な部位だが、興奮しきったワカモにはこれも快感として受け止められるようだ。

処女ポルチオアクメでギチギチに締まる膣圧に、導かれるように奥で射精する。

「ああおおおおおおんっ♥♥♥♥」

部屋中に響く絶叫と共に、ワカモの膣奥に精液が放たれる。

「ほ、お、あ、ああああ……♡♡」

ぽつかりと口を開けて、目を見開いたワカモがまつすぐ天井を見ている。

アスナに2発絞られた後とは思えない位に大量に射精した。

限界まで勃起して膨らんだ亀頭に抑えられて、精液がワカモの子宮口に圧力をかけて押し入っていく。

「ああ……♡ 熱い……♡ 奥まで、染み込んで、きます……♡」

生殖欲求が満たされる真正銘の雌の幸せにどっぷり浸かり、ワカモが広角を歪にあげて恍惚の笑みを浮かべる。

「もっと……♡ もっとくださいませ……♡ この卑しいセフレの穴と袋に、あなた様のお情けを吐き捨ててください……♡」

射精のされる感覚をいっぺんに気に入ったワカモが、ドロドロと湧き上がるような劣情に押し流されて瞳の奥にハートを浮かべたような狂熱を湛えて目を輝かせる。

「いいよ。ワカモの欲しいだけ注いであげる。セフレだからね」

どぶどぶと射精を続けながら、可愛いことを言うワカモにチンポをイライラさせて腰のフリを再開した。

「いいっ♡ もっと、もっと精を注いでっ♡ 産みたいっ♡ 孕みたいっ♡」

子宮に精液を入れた事で完全にトリップしてしまったワカモが、欲望をむき出しにして必死に子作り行為を楽しんでいる。

火傷しそうに熱い膣と断続的に締め付けてくる刺激に加え、ワカモも腰をくねらせて変化を付けてくる。

「ああっ♡ 嬉しいっ♡ あなた様が、私で、心地よくなってくださいっ♡ ているのですね♡」

チンポがヒクつくのを敏感に感じ取り、ワカモが熱に浮かされたように笑う。

「もっと♡ もっと、奥まで来てくださいませ♡ ほしいっ♡ ほしいのですっ♡」

ワカモの手足が私に絡みつき、ガッチリと固定される。

ワカモの方からヘコヘコヘコっ♡ と高速で腰を振り、自分の膣を

オナホに貶めてまでも精液を貪ろうとするワカモが愛しくなつて強く抱きしめた。

「すきっ♥ すきっ♥ すきいいっ♥」

甘つたるく媚びた声を耳元で聞きながら、ワカモの絶頂と同時に膣奥で射精する。

「はっ♥ ああああーんっ♥♥♥」

甲高い、歓喜一色の声を上げてワカモが膣内射精を大歓迎する。

ポンプのように精液を搾り取る膣に、腰が震えるほどの快感が襲つた。

「すき……♥ 愛しております、あなた様……♥」

手足を私の身体に絡めたワカモが、全く覚めやらぬ熱狂に導かれるまま、私の身体を押しつけ、逆に押し倒す。

はあ、はあ、と湯気が出るほどに熱い吐息をこぼし、目が爛々と輝いている。

「欲しいだけ……くださるのですよね……♥」

毒々しいほどに紅い舌がよだれに塗れた唇を拭い、重力に従つてぶら下がる巨乳の先にはぷっくりと勃起したままの乳首が弄られるのを待ちわびている。

身体が本能的に理解しているように、ワカモは私の上に跨つて腰を上下に、左右に、必死にふりたくり始めた。

「ほおっ♥ おおっ♥ きもちっ♥ きもちいいんっ♥」

下品に蕩けた顔で男を貪るワカモにご褒美を上げるべく、乳首をギョツとつまんで引つ張る。

「んっ♥ おおんっ♥♥♥」

色欲に染まった獣と化したワカモに跨がられ、幸せそうに失神するまで子宮に精液を注いで上げるのだった。

「~~~~~!!」

お面を被った上から顔に手を当てて、ワカモがうずくまっている。「ワカモのセックス、とても良かったよ」

「い、言わないでくださいませ……！ ああ……なんと品性の欠片もない真似を……！」

羞恥と興奮に小さく震えるワカモの、ピコピコとゆれる頭の上の耳を撫でてあげる。

「ひゃんっ♥ も、もうっ♥ あなた様っ♥」

文句を言いつつも私のスキンシップに対する嬉しさがにじみ出るワカモの頭をなで、微笑みかけるとおずおずと立ち上がってくれた。

「……あの……これからも、このようなお時間をいただく事が……できる、のですよね？」

「もちろん。まあ、みんなには小テストをやってもらって、成績の良い子からになるけどね」

「しよ、小テスト……いつ以来でしようか……」

気落ちしているのか、肩を落とすワカモ。

「ワカモもこれを気に、友達を作ってみて欲しいな。さっきのアスナとか」

「………友達、というのはわかりませんが……あのメイドには、借りができましたので。いずれ何か礼をいたしますわ」

「うん。良い子だね、ワカモ」

抱き寄せて頭を撫でると、ギュツと今までより大胆に抱きついてきた。

「先生……私、絶対にくじけません。どのような形であっても……必ず、あなた様のお側に侍って見せます」

「………」

「あなた様好みのセックスも、身につけてみせますから……」

それだけ言うと、ワカモが身体を離す。甘やかな匂いがふわりと鼻に届いた。

「それでは、今日はこれで失礼いたします。また、お会いしましょう………♥」

そう言っ振り返り歩き去るワカモだが、処女セックスで必死に腰を使いすぎたせいでいつもより大分ぎこちない歩き方になっていた。

「~~~~~♥」



自分の歩き方を自覚したワカモが声もなく悶えて、無理やり大股で早歩きになり、そのままエレベーターに入っていく。

ワカモの処女の血が染み付いたシーツを片付けながら、帰路の無事を祈るのだった。

## 懺悔の席（サクラコ）

——先生、申し訳ありません、本日の夜、お時間いただけますでしょうか？

というモモトークがサクラコから届いた。

その他のやり取りも殆どない簡潔な会話……というか伝達事項は、サクラコの余裕の無さを伺わせる。

（夜と言わず、今すぐでも大丈夫だけど）

と返信すると、

——……いいえ、ありがたいお申し出ですが、何卒内密のお話がしたく……

という返信が来た。

こういう事は初めてではない。以前にも、サクラコは自分が秘密を抱えている事を私に相談していた。

だから、その時と同じような話なのかと思ひ、夜行くことを了承する。

そして、夜の大聖堂。回廊の先、聖堂の前で、サクラコが火の灯った燭台を手に佇んでいた。

「……こんばんは、先生。申し訳ありません、このような時間にお呼び立てしてしまい……」

「大丈夫。それで、話つていうのは……」

サクラコは、黙つて俯いた。

その顔は赤らんでいるようにも見えるが、蠟燭の炎の色と判別がつかない。

「その……ええと……うう……」

眉を寄せ、苦悶の表情を浮かべるサクラコを、辛抱強く待つ。

「本日は……ざ、懺悔をさせていただきたく、このような場を設けさせていただけました……」

「懺悔？… どうして？」

私とサクラコの関係は、モモトークでお喋りしたり偶に街中で会っ

て相談に乗ったりと言う位のものだ。

懺悔なんてしなければならぬ自体が、そもそも起こらないように思う。そう伝えると、

「はい……ですから、これは、本当に……私の勝手な想いであり、先生には、大層失望されるかとは思いますが……もう、心に抱えておく事ができず……」

本当に苦渋の決断だったことが伝わるサクラコの表情に首を傾げながらも、座って話すように促す。

「でしたら……」

そう言ってサクラコが目を向けたのは、聖堂の片隅にある告解室だ。

「……いいえ、相応しくありませんね。罪の告白をすべきなのは先生に対してなのですから、面と向かって行わなければ」

「でも、夜になって冷えてきたし。一緒に部屋に入って話すっていうのは？」

「ああつ！ 申し訳ありません、私と来たら、またも配慮の足りない行動を……」

何故か自分を責めるサクラコをなだめて、丸いスツールを2個告解室に並べて向かい合って座る。

狭い部屋の中で2人分の体温が放たれ、少し底冷えする寒さが軽減された。

「……話の都合上、他人の事情が混じりますが……実名を明かすことはできませんことをお許しく下さい」

「うん、大丈夫だよ」

耐えられないという風に、座ってすぐにサクラコは手を祈りの形に組んで語りだす。

「先日……シスターフッドの仕事として校舎の見回りをしておりました所、とある教室で……その、生徒同士が……か、か、姦淫っ……！」

し、している所に出くわしてしまいました」

ギョツとするが、サクラコの語りは止まらない。

「そのうちの片方が……シスターフッドの方だったのです。か、彼女は……私が扉を開けると同時に絶叫し、お相手の方に対して……とても、幸せそうな笑みを浮かべていました……」

私は呆然としてしまつて。相手の方共々、私に気づいてからは言い訳もせず服を着込んで頭を下げて謝罪なさいました。

ご存知かもしれませんが……シスターフッドにとり、姦淫は罪に当たります。ですから、何か処罰をすべき所なのですが……

シスターフッドの、しかも1年生の方が、あのような狂おしい声を上げて、すっかり慣れた調子で姦淫を楽しんで……正直な所、私は気圧されてしまつていました。

それに、お二人とも、お相手をかばうのです。とても、仲睦まじく……2人の間には、確かな愛を感じました。真剣にお付き合ひをしているという弁明を、私は信じました……

そ、そして、言つてしまつたのです。姦淫は、もう二度と見つかるような場所では行わない事、と。

私は……あのような、愛し合う2人の行為を、否定したくなかつたのかもしれない……それで、姦淫を肯定し、黙認するような言動を……してしまいました……」

滔々と続くサクラコの告白に頷くと、震える手を私の手で包む。

「確かに、組織の長として問題がある行動なのかもしれない。けど、サクラコはその子達を信じて選択したんだよね。私もサクラコを支持するよ」

「……いえ……違うのです……私の懺悔は、これから、なのです」

じつと、私の両手に包まれた自分の手を見るサクラコ。

蠟燭の燭台だけが横から照らす、サクラコの白皙。

明かりの中でもわかる程に頬が赤く染まつていた。

「私は、半裸で組み伏せられ、お相手の方に幸せそうな笑みを向けたあの方の表情を……自分に置き換えて、想像してしまつたのです。その……先生に、組み伏せられ、求められ……」

殆ど涙目で己の罪を告白するサクラコ。

「打ち消そうとしても、日々、寝る前になると……その想像が浮かぶよ

うになり。もう、どうしてよいのか……本当に、申し訳ございません……先生……私は、淫らな女なのです……」

顔をしかめて目を瞑るサクラコの頬を、涙が伝った。

私のチンポは強烈にイライラしていた。

「そんなのは、何の罪でもないよ、サクラコ。内心の自由というやつだよ」

「いいえ、先生はご存知ないかもしれませんが、聖典にはこうあります。『だれでも、情欲をいだいて相手を見る者は、心の中すでに姦淫をしたのである。』私は……先生に対するこの気持ちをも、どうしても消し去る事ができない……姦淫の罪から逃れられないのです」

告解室を照らす蠟燭が、サクラコの悲しげな顔を、そしてピツタリとしたシスター服を照らす。

サクラコの豊かな乳房が大きく胸元を押し上げている事による陰影が、それに反してキュツと見事にくびれた女らしい腰つきが、蠟燭の薄明かりでくつきりと浮かび上がっていた。

「それじゃあ、私も罪を背負おう」

「えっ……っ？」

身を乗り出すと、すぐにサクラコの顔が近づく。

「んっ……っ♥」

涙に濡れたサクラコの目が見開かれ、甘やかな声が告解室に響いた。

「せん……せい……っ？」

呆然とするサクラコの白い頬に赤く残る涙の跡を優しく指で撫でてあげる。

「心の中に留めるから悶々としてしまうんだ。だったら、最後まで姦淫しよう、サクラコ」

「なっ、なっ、なっ」

白い肌故に、サクラコの赤面はわかりやすい。

「嫌かな？」

細い顎を指で持ち上げると、先程とは違う種類の涙でサクラコの瞳は潤んだ。

「だ、だめ……です……先生まで、姦淫の罪を犯すだなんて……」

「私はシスターフードじゃないから平気だよ」

「うう……しかし、シスターフードの長である私が、そのような……」  
「でも、今も姦淫の罪を犯してしまってるんだよね？　じゃあ変わら  
ないんじゃないかな？」

その、とか、えと、とか言葉を探すサクラコだが、何も言えない事  
に気づいて、ただ私を見つめた。

顔を近づける私に対し、サクラコは目を閉じて自ら唇を突き出し  
た。

「ちゅ……♡」

はつきりと、唇を吸う淫らな音が告解室に響く。

顔を上に上げたサクラコの髪がさらりと揺れ、露わになった耳は羞  
恥で真赤になっていた。

「するよ、サクラコ」

「お……お願い、いたします……♡　淫らな私に……姦淫を、教えてく  
ださい……♡」

蠟燭明かりの元で見る幻想的な紫の瞳に、セックスへの期待が満ち  
ているのがわかった。

私は丸椅子をくつつけて、サクラコの細い腰を強引に抱き寄せる。  
先程より荒々しく、貪るようにキスを繰り返した。

「んっ♡　ちゅっ♡　ちゅばっ♡」

されるがままのサクラコが、淫らな音を立ててしまう自分に興奮  
し、どんどん鼻息が荒くなっていく。

目を閉じたままのサクラコの頬をひと撫でしてから、豊かな胸に手  
を伸ばした。

「っ♡」

息を詰めて肩を跳ねさせるサクラコ。

見事な縫製で、たつぷりとしたサクラコの乳房をピッタリと包み込  
むシスターフードの制服の上から、輪郭をなぞるように胸を撫でる。

「はんっ♡　ふうっ♡」

サクラコは口内を私の舌に凌辱され、胸の刺激にも蕩けるようなう

めき声を上げることしかできずにいた。

マリーとも散々セックスしているので、シスターフッドの制服を脱がす事も私には出来る。

襟に隠れた背中の中のファスナーを下ろし、襟のホックも外してやると、校章の描かれた白い襟が衣擦れの音を残して床に落ちた。

ちゆるん、と音を立てて唇を開放すると。サクラコの服を肩から腰まで脱がせてしまう。

「あう……♡」

羞恥のあまり真赤な顔を背け、大きな乳房を暴かれるままになるサクラコ。

蠟燭の火に照らされるサクラコの胸は、新雪のように真っ白で光を放っているようでさえある。

半端に抜けた袖のせいで動くこともままならないサクラコに正面から抱きついた。

「先生……♡ 温かい……」

チンポがイライラして温まってきた私は気づかなかったが、夜の告解室はまだ肌寒い。

肘、胸から上を露出したサクラコの玉のような肌を手で撫でさすりながら、背中ブラジャーのホックを外す。

ふるん、と重量物が開放される柔らかな衝撃とともに、サクラコの乳房が暴かれた。

「は、恥ずかしい……♡ です……♡」

手袋をしたままの手で、胸の頂点を隠そうとするサクラコの動きをやんわりと制すると、体を強張らせながらも乳首を見せてくれる。

蠟燭の火に乳首の影が伸び、サクラコの白い肌にくつきりと淫らな造形を描いた。

寒さで紫がかかって血色悪く固くなった乳首を、温めるように掌で包み込む。

「んっ♡ あああ……♡」

感極まったように、口を開いて甘い声を上げるサクラコ。

もっちりとした、柔らかさと弾力を兼ね備えたお餅のような両胸

を、掌の体温を浸透させるようにゆったりと揉み込む。

押しつぶされたサクラコの乳房に、薄つすらと静脈の青が見て取れる。

そうでもなければ造り物かと思うほどに、サクラコの胸は手に吸い付く極上の肌触りと最高の揉み応えを備えていた。

やがて、しつとりとサクラコの胸元に汗が浮かぶ。

手を離すと、サクラコの乳首が桜色にふっくらと勃起していた。

「はあ……♡ はあ……♡」

うつとりと、乳房を揉まれる快感に浸っていたサクラコが深い呼吸を繰り返している。

チンポのイライラを加速させるセックス待ち顔を見て、私はサクラコの膝の下に手を伸ばし、はしたなくも股を開かせて私の脚の上にサクラコの太ももを載せた。

「やっ♡ せ、先生♡ このような姿勢、恥ずかしいです……♡」

取り合わず、サクラコのスカートを大きくめくる。

「ああ♡」

どこか喜色を含んだ悲鳴を夜の聖堂に響かせ、サクラコは口元に手をやって羞恥を堪えながら股間を私の目に晒した。

清楚で飾り気のない、白のショーツ。サクラコの肌もまた溶け込むように白く、無理に脚を上げたせいで股間に食い込んでいる。

そして、蠟燭の火の中では判別し辛い……股間には、すでにシミができていた。

ショーツごしに下腹部を優しく撫でると、サクラコが短く吐息を漏らしてピクピクと痙攣した。

「わかる？ サクラコ。ここ、もうシミになってるよ」

するりと陰唇をショーツ越しに撫でる。

「あっ♡♡ つく、う♡ ああ♡」

今までで一番高く、甘い声上がる。私が強制するまでもなく、サクラコの脚は快楽を求めてひとりでに開いていく。

片方だけだったはずの開脚は、いつの間にか私の脚に乗せていない自由なサクラコの脚も横に開いていた。



「大丈夫？ 嫌じゃない？」

「はあっ♥ はあっ♥」

サクラコはかくん、かくん、と首を縦に振りながら、股間を軽く撫でられただけで言葉も喋れなくなっている。

撫でるだけだった指を、ショーツに沈み込ませる。

にちや、という淫らな音がサクラコの股間から確かに響いた。

「ふうっ♥ ふうっ♥」

サクラコは羞恥を感じる余裕もないほどに股間の快樂に集中しているようで、胸をゆさゆさと揺らす程に深い呼吸を繰り返している。

「脱がすよ、サクラコ」

スカートの奥に手をつ込み、サクラコのくつきりと浮いた腰骨を撫でながらショーツをずり下げる。

「あああ……♥」

サクラコはショーツを脱がされる事よりも、脱がされた時にねちやりと愛液が糸を引いたのを目撃してしまった事を恥じているようだった。

制服の清らかな白と金の襟に、淫らに濡れたショーツが落ちる。

サクラコの愛液はすでに告解室のストールを濡らし、甘酸っぱく発情した雌の匂いを部屋中に充満させていた。

サクラコの股間は、毛の一本も生えていない。処理をしたとも思えない、陶器のように美しく滑らかな肌だった。

神々しいまでの淫らさに、蠟燭の火が身震いするかのように揺れる。

キラキラと蠟燭の火を反射するサクラコの股間へ、中指を慎重に沈める。

くちゅ、にちや、と美しい一本筋に沈み込む指先に、熱く潤った感触が返ってくる。

造り物などではない、サクラコが生身の人間である事を確認するよ  
うに粘膜を指の腹で撫で、たっぷり愛液がまぶされたクリトリスを  
くすぐってあげる。

「あああーっ♥」

聖堂の入り口までも届くだろう、サクラコの激しい嬌声。

肩を跳ねさせ、天井を仰いでしまっていた。

「大丈夫？」

クリトリスを少しくすぐっただけでこの反応かと思うと、チンポのイライラが更に加速する。

私は、スツールに今も水たまりを広げ続けるサクラコの愛液をたっぷり指にすくって、クリトリスを摘んでシコシコとしごいた。

「んおおおーっ♡♡♡」

びくん、びくんと全身を痙攣させ、絶叫するサクラコ。

私の胸元を反射的にギュツと握りしめ、吹き飛ばされそうな意識を健気に留めている。

「たっぷりと準備しないといけないから、サクラコはもつと気持ちよくなっついていいよ」

とぶ、とぶ、と水差しを傾けたように愛液を垂れ流すサクラコの膣口に中指と薬指をねじ込む。

「っ……♡♡♡ は、はっ……♡♡♡」

自分がどんな風になってしまうのか予感したサクラコが、目を見開いて私を見つめる。

恐ろしさにやめてほしいと懇願するような、浅ましくも乱れたいと哀願するような、美しく輝く紫の瞳を見つめ返し、膣内を撫で回す。

サクラコの膣内は比較的ゆったりとして柔らかく、思い切り突いたら気持ちよさそうな柔軟性に満ちていた。

とりわけ、浅い所の天井にふっくらとした大きなシコリがあるのが特徴的だ。

ふっくらと肥大化したGスポットが、探すまでもなく存在を主張している。

「はっ♡♡♡ あああっ♡♡♡ ああっ♡♡♡」

サクラコは普段からは考えられないほどにポツカリと口を大きく開けて、あまつさえよだれさえ垂らしている。

甘ったるい声を上げ、あつという間に膣快樂に夢中になってしまった。

チャコチャコチャコ……と素早く手を前後させて膣を掻き鳴らす。  
「はあっ♥ ああーっ♥♥ ああうーっ♥♥♥」

夜の大聖堂とはいえ、誰かが来るかもしれないという配慮など何もない、腹の底からの善がり声を上げて、サクラコが乱れる。

私の指をサクラコのマンコがキュウキュウと強く締め付け、絶頂を訴える。

柔らかなサクラコのマンコは全力で締め付けて来ても膣肉の柔らかさを際立たせるばかりで、指のピストンに全く支障はない。

チャコチャコチャコ……という水音を更に大きくし、サクラコを追い込んでいく。

「ふうっ うっ♥♥ うううっ ううっ♥♥♥」

がくん、がくん、と全身を大きく痙攣させ、サクラコが絶頂した。

ハイローが瞬き、失神で椅子から転げ落ちそうだったので、背中を支えて抱き寄せる。

私の腕の中でサクラコが快楽を全身で肯定して痙攣する。

まるで射精した後のような満足感を持ってサクラコを強く抱きしめ、焦点の合わない瞳が蠟燭の火にきらめくのをじっと見つめた。

「あえ……ふえ……♥♥♥」

サクラコの半開きの口から、てるん、と可愛らしい舌が覗く。

マンコをホジって絶頂の余韻を長引かせてやりながら、優しく舌を絡めるキスをしてサクラコの覚醒を待った。

「ん……♥♥♥ ちゅ……♥♥♥ ちゅう……♥♥♥」

赤子のように私の唇に無邪気に吸い付いてくるサクラコの動きが、数分後によくやく止まる。

「んっ!? ちゅうう♥♥♥ ぷあっ♥♥♥ あ、あ、あの、先生……♥♥♥ 私は……♥♥♥」

サクラコは目を見開いて自分の状況をようやく理解し、俯いた所で床と襟とショーツをビチョビチョに愛液で濡らしてしまっているのに気づき、羞恥で目をつぶってしまった。

「ううう……ん、このような醜態を……」

「良いんだよ、これがセックスなんだから。さあ、立って、サクラコ」  
そろそろ私も限界なので、ズボンだけ脱ぎ捨ててサクラコを立たせる。

制服から腕を抜かせ、壁に手をつかせて尻を突き出させる。

スカートを大きくめくり上げ、背中にかけてしまった。

もはやサクラコの制服は腰に纏わりつくだけで、乳房も下腹部も全裸になってしまう。

Aの字に立たせた脚が美しい脚線美を描き、キュツとしまった小さめの白いお尻が羞恥と期待に震えている。

我慢汁を垂れ流すチンポをサクラコのぷっくりと充血したマンコに押し当てて、ガツチリと尻を掴む。

サクラコは、一心に壁を向いて何も語らず、ただ尻をくいっと更に上げた。

つぶん。

大歓迎している証というかのように、サクラコの処女膣は私を抵抗なく迎え入れてくれた。

にち、くち、と奥から愛液が押し出される淫らな水音を立てつつも、ズルズルと飲み込まれるように奥へと導かれる。

こつん、と処女膜にぶつかり、サクラコの体が震えた。

腰を突き出すだけで、あっけなく膜は破け、サクラコの一番奥にまでチンポが届く。

指を入れた時の感想に違わず、全方位から柔らかなヒダに包まれ、心地よい圧迫感を感じる。

「うっ、く……ふう、ふう……」

結合部を見ると、サクラコの白い股間から太ももに赤黒い線が引かれている。

破瓜の血が、清らかなストッキングと告解室の床にシミを作っていた。

しかし、さほどの時を置かずに血は愛液の前に薄れ、蝋燭の火の下でサクラコ股間はまんべんなくテカテカと愛液に照り光っていた。

「動くよ」

壁に向かって俯いているサクラコの髪から覗く耳は、羞恥で真赤になっっている。

膣の締めりから、サクラコがもう気持ちよくなり始めている事は分かりきっていた。

ぱあんっ！ と拍手のような音を立てて、告解室で姦淫に励む。

「うううーっ♡♡」

くぐもった嬌声は、サクラコが手袋をした手で口元を隠しているせいで。

「声、聞かせて」

それだけで、サクラコは言う通りに口を隠すのをやめ、壁に両手をつく。

ぱんっ、ぱんっ、ぱんっ、と力強く突くと、その度に膣ヒダが大きく蠢いて律儀にチンポを受け止めてくれた。

「うっ♡♡ うううううう♡♡♡ はああああ♡♡」

夜の大聖堂に、サクラコのすすり泣くような悩ましげなうめき声が響く。

処女セックスなのに、何の会話もなく、立ちバツクの快楽で悶絶するサクラコに天性の才能を見てこれからは楽しみになる。

入り口の腹の方を強く擦り、もつとサクラコにセックスを大好きになつてもらおうべく快楽のギアを上げた。

「うん、うううう♡♡ あ、あああああ……♡♡♡」

声を震わせ、ポタポタと愛液を床に落としながら、サクラコはセックスの快楽に悶えていた。

みっちりと膣を私のチンポに密着させ、熱烈なハグのように愛情深く包み込んでくる。

サクラコが何度も絶頂している事は分かっていたが、あまりに反応が良いので少し射精を我慢してしまっていた。

煮えたぎるような金玉の中の精子をすべて注ぎ込むべく、奥を重点的に突き亀頭で聖なるシスターマンコの膣を味わい尽くす。

サクラコの細い腰を抱えるようにガツチリと抱きながら、一番奥にねじり込むように思い切り射精した。

「うっぐ♥♥ あゝひいいんっ♥♥♥♥」

射精と同時にサクラコも絶頂し、程よい力加減で射精を促してくれる。

どく、どく、と精液をサクラコの子宮に注ぎ込む間、さっきまでが嘘のように辺りは静まり返り……サクラコと私の荒い息遣いだけが密やかに2人の間だけに流れていた。

「ううう……♥」

サクラコが顔を真赤にしてしかめっ面をしている。

あの後、ベトベトになった告解室を2人で掃除して、サクラコも服を着た。

愛液で酷いことになってしまったので襟はつけず、ノーパンだ。

「どう？ すつきりした？」

「そ、それは……はい♥ 今はとても……晴れやかな気持ちです」

サクラコが自然に私に近づき、そつと腕を絡めてくる。

先程揉みしだいた胸が制服越しに押し当てられた。

「そうそう、避妊薬を飲んでおいてね」

「ひにっ……♥ あの……♥ 避妊を、しなくてはいいけませんか……？」

「ダメだよ。マリーもヒナタもちやんとしてるからね」

「なっ!？」

サクラコが目を見開く。ややあって、苦笑を浮かべた。

「もう……先生は、私以上にとんでもない秘密を抱えてらっしゃるのですね？」

「まあね。だから、サクラコもあまり気にしないほうが良いよ」

「それは……本当に良いことなのか、自信が無くなってきました」

サクラコはそう言いながらも、穏やかな笑みを浮かべていた。

「今度からは、セックスしたくなったらこうやって私を呼んでね。シャールレに来てくれても良いから」

「立场上、そのようなことを認めるわけには行かないのですが……ふふ、秘密の多い私ですから。今後とも、先生との逢瀬は秘密にさせて

頂きます……♥」

くい、と上をむいたサクラコは、いつちよ前にキスをねだっていた。触れるようなキスを交わすと、するりとサクラコの身体が離れていく。

「今日はありがとうございました、先生。また、月の綺麗な夜にお会いしましょう」

コツ、コツ、と規則正しい足音が遠ざかる。

愛液まみれの襟を抱え、破瓜の血が染みたストッキングをまとつて、サクラコは貞淑な足取りで去っていった。

——夜の大聖堂で女性のうめき声があったという怪談が伝わっているようです

——先生、くれぐれも真相はご内密に……

モモトーク越しにもサクラコの苦悶の表情が見て取れるようだった。

## デエナドリ（ハレ）

「先生、あの……今日はここで、泊まっていけない？」

日も暮れた山奥。

キヴオトス公式天文台跡の廃屋の床に並んで寝そべっている時、ハレが私の手をそっと握りながら言った。

チラリと視線だけ向けると、ハレは星空を睨むように見据え唇も一直線に引き結んでいた。

月と星が照らすハレの頬が、今はさつきより赤く染まっている。

「うん、泊まっていこう。テントも1つ用意してあるよ」

「で、テント、ひとつ……なの？」

震えながらも、ハレの手は私の手をしっかりと握っている。

指の腹でハレの指をスリスリと愛撫すると、ハレは星なんか見えないのに目を見開いて、足先までピンと気をつけの姿勢になった。

「さあ、そろそろご飯にしようか。ガスコンロがあるから、ハレはお湯を沸かしてね」

「う、うん」

ハレがお湯を沸かしている間に、比較的綺麗な床を選んでワンタッチのテントを展開して中も準備しておいた。

2人用のそれはそこそこ狭く、2人で寝るとなると身体が触れ合ってしまうだろう。

もちろんハレと夜通しセックスするつもりで狭めのものを選んだ。

ヴェリタスとのキャンプではないので、普通の調理まではやらない。一応ハレの身体に気を使って完全食という謳い文句のインスタント食品にしておいた。

キャンプ用の小さな椅子に腰掛けて、2人して肩を並べて食べる。

「ん……美味しいね。先生のカレー味、ちよつと頂戴？」

「いいよ。ハレのトマトスープ味のも分けてね。あーん」

カップをハレの口元に持っていき、スプーンですくって食べさせてあげる。

「あ、あー……んっ」



「またも顔を真赤にしながらも、ぷるぷると震えるピンク色の舌を出してハレがぱつくりと啜える。」

「ごくりと喉を鳴らして嚙下する所を見ていると、チンポがイライラしてきた。」

「せ、先生も、あーん……」

「ハレが真赤な顔のまま私にスプーンを差し出してくるので、遠慮なくいただく。」

「うん、美味しいね。ハレはもう少し食べる？」

「すつとまたスプーンを差し出す素振りを見せると、ハレは左右に視線を泳がせたあとで上目遣いに私を見る。」

「うん、い、頂こうかな……」

「あ、と可愛らしい口を開けてスプーンを啜え込むハレを見て、チンポのイライラが高まりながらも食事を終えた。」

「ハレが持参のクーラーボックスからエナドリを取り出し、かしゅつとプルタブを開ける。」

「ごちそうさま。ふう、食後のエナドリはまた格別……」

「グビグビと飲み、どこかキマツた目を虚空に向けている。」

「エナドリもほどほどにね……」

「うー、でもエナドリは私の稼働燃料だから……」

「そんな雑談をしつつも、夜はどんどん更けていき辺りは真っ暗になった。」

「じゃあ、寝ようか」

「……………うん」

「テントのそばに立って入り口をじつと見つめるハレの腰を抱き、狭いテントに連れ込んでいく。」

「靴を脱いで中に入ると、そこにはヤリモクでマットとタオル地のシートが整えられている。白いLEDランプが煌々と緊張気味のハレを照らした。」

「ハレは上着を脱ぎ、じつと私を見た。」

「先生……………♥」

ハレの方も乗り気のようだったので、腰を抱き寄せて密着し、指で顎を上げさせる。

「ハレ、キスするよ」

私の言葉に、ハレは素直に目を閉じた。

化粧つきの薄いハレの唇はぷるぷると柔らかく、ほんのりエナドリのケミカルな甘い香りがする。

ちゅ、ちゅ、と瑞々しい唇を吸って弄び、チンポのイライラを高めていく。

ハレのマフラーを解き、キュロットスカートの紐を解いた。

これから犯される事をハッキリと感じたハレが身を硬くし、私の服に縋りついた。

私はハレの震える唇を舌で甘やかし、指で優しく耳を愛撫して気が変わらないように誘惑する。

ハレの身体をそっとマットに押し倒し、上を捲りあげて脱がしにかかると。

「ん……♥」

私の力に逆らわず、バンザイをして脱がされてくれるハレ。

2枚服を脱がすと、むわりと甘ったるい汗の臭いがテントに充満しキャミソールが露わになった。

「うう……寒い」

「ごめんね。私も脱ぐよ」

ハレに先んじて全裸になると、私の勃起チンポがハレの目に晒される。

その間にハレも下を脱いでくれて、後はブラとショーツ、タイツだけになっていた。

「お、おっきいね」

ハレは私の勃起チンポを見ながら冷静を装っているが、声が震えていた。

冷えた小さな女の子の手を取って、チンポを握らせる。

「わ、あつ……♥」

ハレは寝そべった姿勢で少し頭を浮かせ、熱っぽい瞳で自分の握っ

たチンポを見つめた。

にぎ、にぎ、と感触を確かめ、竿の表面をただ撫でるだけの手コキとも呼べない動きしかない。

正真正銘処女の振る舞いに、チンポから我慢汁が垂れる。

「あつ、な、なんか、出てきたよ。先生、大丈夫？」

とろりとハレの身体に滴りそうになった我慢汁を、優しく指先で受け止めてくれる。

「大丈夫だよ。ハレが可愛すぎて興奮したらこうなっちゃうんだ」

「か、可愛いって……えへへ……」

チンポを握りしめながらも照れた乙女の笑みを浮かべるハレの背中に手を潜り込ませ、ブラのホックを外す。

いよいよ覚悟を決めて目を潤ませるハレと見つめ合いながら、そつとブラを脱がせた。

色素の薄い、小さな乳輪と乳首が現れる。

「綺麗だよ、ハレ」

「うう……恥ずかしい」

顔を真赤にしてぎゅっと目をつぶってしまったハレを可愛く思いながら、乳首にキスする。

「はう♥ あつ♥ んっ♥」

かすれるような細い喘ぎ声を上げつつ、ハレはチンポを握っていない方の手で口元を抑えた。

唇と舌先に感じるハレの乳首が瞬く間にムクムクと勃起し、舌先でピンピンと遊ぶ。

「あつ♥ ああつ♥」

刺激が強まってハレの声がどんどん甘くなる。

頃合いと見て、乳首から口を離し腰のタイツとショーツに手をかけた。

脱がそうとすると、ハレも善がり声を出して素知らぬ顔のまま腰を上げて手伝ってくれる。

ハレの脚を上げてするりと脱がせると、ハレの甘ったるい汗の匂いにチーズっぽい股間の臭いが交じる。

お互い全裸になってしまった緊張に、ハレが私のチンポを握る手に力がこもった。

既にしつとりと濡れていそうなハレの脚を開こうとすると、抵抗される。

さすがにハレも恥ずかしいらしく、目を見開いて真赤にし、股間を手でガードしてしまう。

「ごっ、ごっ、ごめん、先生……さすがに、み、見られると思うと、頭が真っ白になっちゃって……」

私のチンポを握ったままなのも忘れて、声を震えさせながらハレが謝った。

「いいよ。それじゃあ、見ずに触ろうか」

寝そべっているハレに覆いかぶさり、唇が触れ合う距離で見つめ合う。

腕を取ってハレを私に抱きつかせ、手を封じた。

「んう……♡♡♡ ちゆう……♡♡♡」

キスをして、舌を入れて口内をかき回す。

エナドリの風味が残る唾液を飲み下し、ハレにも私の唾液をココロと飲ませ、ただキスに集中させた。

「はむっ♡♡♡ ちゆうっ♡♡♡ ちゆうううっ♡♡♡」

身体から緊張が抜け、ハレからも私の唇を吸うようになってくる。

ガードが下がりがきった所でハレの股間に触れた。

「んっ♡♡♡ うんっ♡♡♡ んーっ♡♡♡」

私の背中に回されたハレの手に力がこもるが、手マンを続けさせてくれた。

ハレの小陰唇は柔らかく、蕩けそうな淫らな感触を撫で回して味わう。

「ふうっ♡♡♡ んあっ♡♡♡」

外側を少し撫でていただけでハレはひっきりなしに甘い声を上げて喜んだ。

べったりと愛液で濡れた指で、ハレのクリトリスを探り当てる。

「んうーっ♡♡♡♡♡」

身体中を痙攣させ、クリを撫でられただけで軽くイッてしまうハレに、チンポのイライラが募る。

すがりつくように私の背中をハレの手が撫で回し、何もしない内にハレの細い脚が開き始める。

いつ正常位が始まってもおかしくない大股開きで、ハレは私に股間を弄られる快楽に夢中になった。

ぽっちりと小さなクリトリスが勃起しているのをハレとキスしながら優しく撫で回し、初心者のハレを優しく、しかし有無を言わず快楽の高みへと連れて行く。

「んーっ♥♥ んんーっ♥♥」

外に……いや、この建物に誰か居たら丸聞こえの大きな声で、私のクリ愛撫に善がり声を上げ続けるハレ。

至近距離で見つめあうハレの柳色の綺麗な瞳が快楽に潤み、目尻から幾筋も涙をこぼしていく。

それでも私の目をじっと覗き込み、もっともつとつと次の行為を求めている。

ぬるりと、愛液でずぶ濡れになったハレの膣に指を潜り込ませる。

ハレの穴は狭いが柔らかく、処女にしては容易く私の指を飲み込んでいく。

「んっ♥♥ あっ♥♥」

しかし反応はより激しい。入り口近くの天井を私の指がこすると、ハレはマットに頭を押し付けるようにのけぞって唇を離してしまっ

た。「ここ、好きなんだね。もっとしてあげる」

「やっ♥♥ だめっ♥♥ あっ♥♥ あーっ♥♥ う

うーっ♥♥」

ぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこ、とGスポを擦り、聡明なハレに獣のよ

うな善がり声を上げさせる。  
ハレの声はあっという間に泣き声のように鼻にかかり、震える大声で腹の底からの叫び声になった。

「だめっ♥♥ だめっ♥♥ ほんとにっ♥♥ だっ♥♥ あっ♥♥ あ

「ああー……っ ♥♥♥」

限界を越え、ぷしやつ、と私の肘から先をビチャビチャにする量の潮を吹く。

潮はほんのりとエナドリの臭いがした。

「あつ……う……う♥」

虚ろな目でテントの天井を見つめるハレにチンポのイライラが限界に達し、大股開きで脱力しているハレの膝を掴んで膣口にチンポを突きつけた。

「入れるよ、ハレ」

控えめな小陰唇が充血しきってハレの股間に淫らな花を咲かせている。

花園をかき分けるように私のチンポが処女膣を拡げ、押し入っている。

つぶん、と亀頭を飲み込んだ所でハレの意識がようやく戻ってきた。

「あつ……先生？ え？ わわっ!？」

寝ぼけているような甘えた声のあと、マンコに既に挿入されていることを知り慌てるハレ。

「おはよう、ハレ。可愛かったからつい先に入れちゃった」

「うう……先生、可愛いって言えば何でもごまかせると思ってるでしょ……」

唇を尖らせながらもハレは抵抗もせず、むしろ脚を私の腰に絡めて犯して欲しそうにしている。

「でも、いいよ、先生。私の初めて、貰って?」

真下から私を見上げるハレが、処女膜とチンポをくつつけながら朗らかに笑った。

乙女だったハレの最後の笑みをまぶたに焼き付けつつ、腰を押し進めるとハレの処女膜は簡単に破けた。

「あうう……痛い」

眉をしかめて目を細めるハレだが、さほど大きな痛みはなさそうだ。

「動いて大丈夫？」

「ん……もうちよつと……奥まで来て欲しい、かな……♥」

処女膣をかき分け、ずぶずぶとチンポを沈めていく。

ハレの膣は柔らかいものの、奥に行くと狭さが適度な締めりとなつて私の射精を誘った。

「く……う……♥ 先生ので、お腹、いっぱい……♥」

龟头とハレの膣奥がぶつかる所まで行っても私のチンポはまだ余っている。

押し込みすぎてハレを痛がらせないように気をつけつつ、再び全身を密着するように抱き合った。

こうしていれば満足、とでも言うように、ハレが私と頬をぴったりくっつけ、汗に濡れた背中を撫でてくる。

私もハレの首筋に顔を埋め、発情して汗に濡れたハレの匂いを胸いっぱい吸った。

外では常緑樹が寒風にざわざわと揺れ、動物の鳴き声すら聞こえない。

そんな中、誰も居ない廃墟の中のテントで裸の私達はお互いの体温を全身で感じ合う。

ハレがおずおずと私の首筋に唇を押し付け、ちゅ、ちゅ、と控えめに吸いたてる。

お返しにもハレの首筋をちゅうちゅう吸っていくつもキスマークを付けた。

「あっ♥ あっ♥ せ、せんせっ♥ もっと♥ もっとして♥」

ハレのサラサラした後れ毛を避けて、首筋から登って耳を唇で食んだ。

柔らかなハレの膣がキュウキュウと締めり、処女の腰が踊る。

薄つすらと汗をかいているハレの胸に指を伸ばし、勃起乳首を力り力りと指先で弄ぶ。

「んあああっ♥ ああっ♥」

誰もが静まった冬の山で、ハレだけが発情した鳴き声を上げている。

可愛らしい声をもつと聴かせてもらおうと、乳首を摘んで引つ張り上げた。

「んいっ!?! せ、先生っ♥ そ、それ、痛い、よっ♥ あっあっ♥ 痛いのにい♥ じんじんしてえ♥」

小さな胸の形が変わる位に引つ張り、元の位置に戻したらダイヤルのようにひねって、ハレの乳首をイジめる。

可愛らしかった乳首が限界を越えて勃起し、快楽を得るための器官に変貌していく。

「そろそろ動いて大丈夫?」

「んんっ♥ いい、よっ♥ 動いてっ♥ もっと、先生のしたいように、めちやくちやに、してっ♥」

興奮にキラキラと目を輝かせ、ハレがセックス許可を出してくれる。

ハレの乳首を摘んだままで身体を離し、腰を使い始めた。

「あっっ♥ ああっっ♥」  
突きこむ衝撃で声が震え、ハレのお腹が、乳房が、波打つように揺れる。

蕩けるような膣肉はカりに纏わりつき、引き抜く度に射精をせがんでいるようだった。

処女だが柔らかい穴なので、ピストンもハイペースで行う事ができる。

「あーっ♥ ああーっっ♥♥」

建物の周りに獣が居たら逃げ出していそうな大声でハレが善がり泣き、膣を締めた。

摘んで軽く引つ張っている乳首は一突き毎にハレの乳房を卑猥に歪ませ、清らかな乙女はあっという間にチンポの味を覚えていく。

ふと股間の結合部を見ると、ぴよこんと勃起クリトリスが飛び出しているのでハレに覆いかぶさり押しつぶすように腰を密着させ、クリトリスごと刺激できるように腰を左右に振った。

「いっっ♥ ひいひいんっ♥ すごいっ♥ すごいっ♥ すごいっ♥  
あーっっ♥♥」



大好きなクリ愛撫と膣と乳首の刺激が混ざり合い、ハレは気が狂ったようにすごい、すごい、と連呼して身体をくねらせている。

快樂に身悶えするハレがLEDランプのくつきりとした光で照らされ、その美しさに見惚れた。

「綺麗だよ、ハレ」

優しい緑色の瞳を覗き込みながら、乳首を引いて伸ばしクリトリと膣奥をグリグリと刺激する。

「あゝーっっっっ♥♥♥♥」

ハレは私の目を確かに見つめ返し、ポロポロと涙をこぼしながら深く絶頂した。

全力を振り絞るように膣が締めまり、逆らわずに私も膣奥に射精する。

「あゝっ♥うっ♥♥♥♥」

射精の感触でさらに絶頂したのか、ハイローがチカチカと瞬き……

「あひっ♥♥う、うう……♥」

腰に絡めた脚もそのままに、ハレは気絶してハイローが消えてしまった。

全身が汗に輝き、首筋には私の付けた幾つものキスマーク。

白に近いピンクだった乳首も爪つねって引つ張って、少し伸びてしまっている。

気絶した無防備な所にぐっぽりと膣がチンポを啜えこんで拡がり、一番奥に精液を注がれているハレの淫らかな姿を眺め、金玉が空になるかと思うほど大量に射精した。

「ハレ。ハレ。起きて」

チンポを挿入したままハレを揺さぶり、乳首をピンと指で弾く。

「んひっ♥ あ、え？ 先生……？ あ、そうだ、私……先生と、初めて……しちゃったんだ……♥」

ハレは押し倒されて犯されたままの自分を確認し、愛おしげに下腹部を撫でた。

「さ、これを飲んで。避妊薬だよ」

「……………うん。先生、そっちのクーラーボックスからエナドリ取って」

テントの隅にあったクーラーボックスからエナドリを取ると、ハレは私のチンポを抜かずに身体を起こしただったので、対面座位に移行した。

ハレは私の肩に手をおいて深くチンポを咥えこみ、腰に脚を絡めて体勢を安定させてから薬と一緒にエナド리를飲み始める。

「ふひー……………凄かった……………」

すっかり落ち着いた様子で、目元の涙の跡をくしくしと指で撫でている。

「喜んでくれたみたいで嬉しいよ」

ハレの頭から背中にかけて優しく撫でると、マンコがきゅんと反応した。

「うん……………嬉しい。先生……………好きだよ♥」

「ありがとう、ハレ。これからもセックスしようね」

「……………いいよ。コタマ先輩ばかりじゃずるいもん♥」

にやりと笑うハレが最初から積極的な理由を語ってくれた。

「コタマ先輩、気付かれて無いと思ってるのかも知れないけど……………絶対エッチな音声聴いてる顔してたから、ハッキングして聴いてみたら……………先生とのセックスだったから……………ずっと期待してて……………♥ いっつ誘ってくれるのか待ってたの」

ハレは汗をかいた以上にぐくぐくとエナド리를飲み干し、一缶すぐに空けてしまった。

「ふは……………でも、本当に凄かった……………♥ こんなのもう忘れられないよ……………♥」

雄に媚びる雌の甘ったるい声で、ハレは私のセックスを褒めそやす。

「ねえ、先生……………♥ せっかく2人きりだし、もつと、しよ……………?♥」

生セックス継続の誘いに、私のチンポのイライラが急速に回復しハレの膣奥をグリグリと押し広げた。

「……………♥♥」

汗で張り付いた後れ毛をかき上げて、私にキスを迫るハレはすっかり雌の雰囲気を身に纏っている。

テントの中にはハレの愛液のチーズっぽい臭いと先程吹いた潮のエナドリの臭いが入り混じり、全身をハレの臭いに包まれているかのようだった。

ハレらしいフェロモン臭が私のチンポをさらに勃起させる。

首と腰に抱きついてくるハレの尻を掴み、上下に揺すってオナホのようにマンコを使う。

ハレもコツを掴んで来たのか、狭いマンコをリズムカルに締めて私の射精を誘った。

「はっ、はっ、はっ♥ あ、ああっ♥ んああっ♥」

ハレの荒い息遣いと、落ち着いて快楽を噛みしめるようなしつとりとした善がり声が耳元で響いている。

膣口はぐっぽ、じゅっぽと精液と愛液が泡立って淫らな音を奏で、テントの中は淫らな音で満たされていた。

愛液を流した量に比例するようにハレの膣も熱を帯び、ふつくらと奥のほうが拡がって私のチンポを根本まで飲み込んでいく。

がっちりとはレの身体を抱きしめ、お互いに腰を使って激しくピストンを始めた。

「あーっ♥♥ ああーっ♥♥」

ハレの善がり声は澄んでいるが大きく、テントを貫いて夜の冬山に吸い込まれていく。

快楽を逃がすためなのか、本能でもつと気持ちよくなる方法を理解しているのか、ハレは腰を円を描くようにくねらせて膣壁をすべて使ってチンポを味わい始めた。

「いいっ♥♥ これいいよお♥♥ 気持ちいいっ♥♥」

鼻にかかったハレの雌声が、金玉を煮えたぎらせる。

ぱん！ ぱん！ ぱん！ と遠慮なく肉を打ち付け合い、絶頂へと仲良く上り詰めていく。

「はあっ♥♥ ああーっ♥♥ あ、あ、あ、あああああああっ♥♥♥♥」

声を震わせながら、ハレの絶頂と共に私も2発目を膣内に射精し

た。

ハレも今度は気を失う事無く、射精の感触を味わうように全身で私にしがみついてくる。

「ふうっ♥ふうっ♥ふうっ♥」

いつまでも荒い息遣いが耳元で聞こえ、ピッタリと押し付けられたハレの胸からドキドキと早鐘をうつ鼓動が伝わってくる。

しばらくしがみついて余韻に浸っていたハレの全身から力が抜け、今度は種付けの感覚に浸っている。

汗に濡れたハレの額にキスして、ゆっくりと身体を離れた。

まだまだ狭い膣からぬーつとチンポが抜けていき、ぬぼつと先端が抜けると同時に精液が溢れ出す。

「はあーっ♥ふうーっ♥セックスつて、すっごい……♥」

どうやら衝撃的な初体験を経て、ハレもセックスが大好きになってくれたらしい。

狭いテントに並んで寝そべると、身体をべったりとくっつけるセフレの距離でハレは笑みを浮かべた。

「ねえ、先生。ふえ、フェラチオ……っっていうの、してみたいな」

まだまだ恥的な好奇心は収まりきらず、ハレにフェラしてもらおう事にした。

LEDランプに片側から照らされ、ハレの不慣れなフェラ顔がくつきりと浮かび上がる。

私の指導のもと、すぐにひよつとこフェラを身に着けて舌使いも覚えてくれた。

「ぢゅっ♥ぢゆるるっ♥れろれろえろっ♥」

精液と愛液まみれの亀頭をぴかぴかに洗うようにハレの舌がくるくると巻き付くように舐め回し、頬をすぼませて吸い上げていく。

2回も大量に射精したが、ハレの献身的で情熱的なフェラで完全に回復した。

汗に濡れたハレの髪に指を入れ頭を撫でてあげると、フェラ顔の目だけ笑みを浮かべて喜んで裏筋をチロチロと舐めてくれる。

「ハレ、次は外でしてみようか」

私がそう言うと、ハレはちよつと微妙そうな顔をした。

「えー？ 寒いよ、絶対……」

余っているタオル地のシーツを毛布代わりに掛け、なんとか外でのセックスに合意してもらおう。

外に出ると、開放したままの天井から月明かりが差し込んでいた。

「う……あの、先生？ やっぱり、やめておかない？」

裸にタオル地の薄布一枚のハレが内股になっているのを抱きしめて部屋の隅の壁際に連れていき、手をつかせた。

シーツで腕から先とお尻だけ出したハレの膣を指で左右に拡げる。

さつきまで処女だったのが信じられないくらいに赤く充血した膣が、月明かりの下で愛液によって照り光っていた。

声もかけずにチンポを押し込むと、すんなりと飲み込まれる。

「あ、う♥せ、先生♥ やっぱり、だめだつて……♥」

小柄なハレの腰を持ち上げて高さを調節し、ぷらぷらと足先を浮かせたハレを好き勝手に犯した。

「あつ♥ あつ♥ あつ♥」

私が腰を突き出す毎にハレから悩ましげな声が漏れ、人の居なくなった天文台に吸い込まれていく。

「あつ♥ お、お願いっ♥ も、だめっ♥ ちよつと、休憩……♥」

ハレは片手だけで身体を支え、もう片方の手で私の手首を掴んでくる。

「大丈夫だよ。そのまま身体の力を抜いていいからね」

ハレの我慢が限界と見た私は、持ち上げていた身体を下ろし、背中を丸めてハレの股間に手を伸ばして尿道を愛撫し始めた。

「あつ！ や、やああ♥ そこっ♥ 今されたら……！」

切羽詰まったようなハレの声と共に、膣がぎゅうぎゅうと締まる。

「ほら、ハレ。もつと脚を開いておかないと」

「だめっ♥ だめだつてば……♥」

ハレの大好きな入り口すぐの天井を亀頭で擦ってあげると、抵抗の意思が溶けるように声が甘くなる。

「ううっ♥ ううううううううううっ♥♥ もうっ♥ だめっ……♥」

膝を入れてハレをガニ股にし、それを待ち受ける。

ちよろ、ちよろろろろろ……という勢いのある水音と共に、ハレが失禁した。

「やああああ……♡♡」

チンポで良いところを擦られながらの放尿に、抵抗しながらも快楽を隠しきれない甘い声を上げる。

ちよろろつ、と長い放尿を終えると、むわりとエナドリ臭の尿の臭いが立ち込めた。

「ううう……♡ 先生のばかあ……♡」

「ごめんごめん。エナド리를 沢山飲んでたからおしっこしたいかなと思っただけ」

「流石に一人でさせてよ……」

「ハレの可愛いおしっこ姿が見たかったんだ」

「だから、可愛いって行ったら何でも通るわけじゃないんだよ……♡」  
そう言いつつも膣を締めしてくれるハレのお腹を押してあげると、尿道に残った雫がぴゅつと飛び出して床の水たまりに加わった。

「せっかくだし、いっぱいおしっこを出して身体の中のエナド리를 抜いていこう」

「ええっ!?!」

繋がったままテントに戻ると、持参した生搾りオレンジジュースと一緒に飲んでまた外でセックスする。

ハレの不健康さはチヒロにも相談を受けていたこともあり、良い機会だと思っただけ利尿作用のある飲み物を用意しておいた甲斐があった。

「ほら、ハレ。我慢しないで」

立ちバツクでばん、ばん、と突いていきそうになった頃にまた尿道を刺激してあげる。

「あつ♡ や、やあああつ♡♡♡」

ちよろろろろろ、とまだまだ大量の放尿と共にハレが絶頂した。

「私も出すよ」

ガニ股で放尿しながら絶頂するハレの痴態に、チンポのイライラが

頂点に達し膣内射精する。

草木も眠るような真夜中の冬山で、廃屋の片隅に一生落ちないほどハレのマーキングを重ねた。

その後、絶頂時のおもらし癖が付いてしまったハレに怒られてしまったため、癖を抜くために沢山セックスに付き合う事になるのだった。

## テントの音（コタマ）

「先生、今週末、山登りしてお泊りしませんか？」

「キャンプ？ いいねえ」

元日と同じ週、ほんの少しだけある平日から普段通りを装って手伝いにやってきたコタマが、そんな事を言った。

集合日時を決めたらそれ以上特に何も言う必要はなく、普通に仕事をこなす。

私とコタマが出かける時は常にセックス付きのデートなので、今回もテントでやりまくるつもりだ。

そして翌日。日の出早々に登山口にいるコタマと合流した。

「おはよう、コタマ」

「おはようございます、先生。では行きましようか」

白いマフラーに黄色のジャケット、内側はアーガイル柄のセーターに黒のミニスカートと厚いタイツ。

コタマの綺麗な長髪はポニーテールだ。普段とは違う私服スタイルのコタマを見て早速チンポがイライラする。

前後に人が居ないことを確認して、歩きながらコタマの腰を抱く。

「その服、もっこりしてて可愛いよね。ポニーテールも新鮮だし」

「ふふ、嬉しいです。……今日は人の少ない所にテントを張って、一日中セックスしましょうね……♥」

コタマはすぐに私に身体を預け私の耳元に口を近づけると、いつもチンポを愛撫する時に出すのと同じ声で甘く囁いた。

コタマにとって、私とのセックスはもはや日常の一部と化している。

セフレ間でAV撮影サービスをシステム化しており、私が鑑賞する用に生徒のイキ顔も撮してくれるようになった。

謝礼としてセックスする事も多く、時折カメラマンを務めるノドカとも3Pしている。

もはや飢えていないコタマは、甘く囁いた後に身体を離して生徒と



先生の距離感を維持する。

バレずにセフレを続ける方が自分にとって得であることを冷静に理解しているのだ。

ジャケットの裾と然程変わらない丈のスカートを眺めてチンポのイライラを溜めつつ、気持ちの良い朝の山を登った。

「ふう……ひい……疲れた……」

目的地に着く前にコタマがへばったので手を引いて登るが、明らかに重すぎる。

「そんな重いものを担いでるから疲れるんじゃない？」

「でも……はあ……これを持つてくるのが目的なので……」

録音機材が入っているのだからユックを背負い直すと、私の手をしっかりと握って細い足を頑張って踏み出す。

ついにたどり着いた高原の見晴らしのいい場所……を避けて、人の来そうにならないなるべく音の響かなさそうな木立の陰にテントを用意する。

「おお……さすがワンタッチは早いですね。これならすぐにセックスを始められそうです」

そう言いながら、コタマも下ろしたりユックからさらにケースを取り出し、機材のセッティングに入っている。

その中にはハンディカメラも入っていた。

「おや、カメラもあるんだ」

「ええ。せっかく先生と2人きりで楽しめるのだし、今回は音だけでなく映像も残しておこうかと」

少し照れたように上目遣いになるコタマの頭を撫でると、くすぐったそうに笑った。

昼と晩の食事であるインスタント食品を取り分けて、テント内部にタオル地のシーツを敷き詰め、ライトとカメラ、録音機材をセットする。

さらにコタマは「盗聴してる感じの音も欲しい」と言っておてテントの外にも録音機材をセットしていた。

「ふう、これで出来たかな」

「完璧です。では……中に入りましょう、先生♥」

全体のチェックを終えた後、入り口で靴を脱いでコタマが四つん這いでテントに入っていく。私も続いた。

中は既に隅に置かれたカメラの後ろでライトが点灯し、内部を明るく照らしている。

ハレとのセックスにも使ったこのテントは床が正方形になっており、対角線なら脚を伸ばせる程度の大きさでしかない。

ヴェリタスの皆で泊まった時とは比べ物にならない大きさだが、セックスに使えることは実証されている。

そんな狭苦しいテントの奥で、コタマがジャケットの次にタイツを脱ごうとしていた。

私もすぐ下半身裸になる。結構寒いのが、コタマとセックスするためなので我慢する。

「どうぞ、先生♥」

マフラーにセーターとミニスカート、普段着のようなコタマがノーパンでM字開脚し、私を誘う。

コタマのマンコは私と頻繁にセックスする事で処女の佇まいを失い、小陰唇が花開くように発達していた。陰毛は全て剃り、つるりと綺麗なパイパンだ。

まだ脱いでいないので見えていないが、散々揉み込んだ乳房は少し垂れ、パフィーニップルの盛り上がりも若干激しくなっている。

「コタマのエッチに育った身体、凄く良いね」

「ふふ……先生のせいなんですからね？ ……責任、取ってください♥」

脚を広げ、すでに濡れそぼっているマンコを両手でぱっくりと拡げるコタマの股間に顔を埋めた。

「あっ♥ 先生、ワンちゃんみたいですよ♥」

ミニスカートに顔を突っ込み、ぴちやぴちやとコタマのマンコを舐め回す。

味が薄く飲むのが苦にならない愛液を顎から滴らせながら、コタマ

の冷えた身体を暖めつつゆっくりとコタマの尻を引き込み、スカートを捲り上げた状態で寝そべらせていく。

愛液でベトベトの口元を拭いながら顔を上げ、コタマに覆いかぶさる。

コタマは用意しておいてくれたゴムを手慣れた様子で私の勃起チンポに装着し、愛おしげに竿を優しく擦った。

「……………」

白い頬に興奮の紅が差し、見つめ合って眩しいものを見るように目を細めて微笑むコタマに顔を近づける。

阿吽の呼吸で腰を上げて角度を調節してもらっているマンコに、チンポが飲み込まれていく。

「ああ……………」

一番奥の定位置まで挿入すると、コタマから微かな感嘆の声が漏れた。

昼のテントの中とは言え冬山で下半身を出していると寒い、チンポだけは風呂に入ったように暖かい。

コタマの白く細い太腿をさすって暖めつつ、セーターとマフラーを着たコタマを抱きしめて私も暖を取る。

開発済みのポルチオをクイクイと押し、ゆっくりとコタマの性感を高め始めた。

「んっ、はあ……………」

「ごそ、ごそ、と衣擦れの音とお互いの息遣い、コタマの艶声だけが流れ、時折外からは野鳥の泣き声も聞こえてくる。

「コタマのマンコ、いつもより熱さがハッキリ分かって気持ちいいよ」「あはあんっ♡♡」

ポニーテールなので、いつもと違って髪がかかっている耳に唇をかすらせながらコタマに囁くと、コタマが大きく喘ぎマンコを締めた。

「声が大きいいね、コタマ。外に人が居たら聞こえてしまってるよ」

コタマの頭を優しく撫でながら言葉責めしてあげる。

「だめっ♡ だめですっ♡ 今日先生の声は♡ 私が独り占めした

いからあ♥」

細い手足で私の身体にしがみつくコタマは甘つたるい声を上げて悦び、膣もだんだんと暖まって私のチンポにピッタリの長さまで伸びてくれる。

この状態になるとポルチオを突くのがもつと簡単になるため、ここからコタマとのセックスが盛り上がる所だ。

「気持ちよくなってきたんだね、コタマ。コタマのマンコはいつも素直で可愛いよ」

「はい♥ 私の身体、先生のオチンポの味、すっかり覚えてて……♥ いつもみたいに、私の事、ぐちゃぐちゃに犯してください♥」

媚びた笑みに猫なで声で、コタマが気分を出してセックスをねだる。

いつもよりも膣の熱さが際立ち、コタマも野外の山の上というロケーションに興奮しているのが伝わってくる。

コタマが腰を良い角度に浮かせてくれているため、私はそれに応えるように腰を強く振ることに集中できる。

息のあつた2人の共同作業が始まった。

「あつ♥ あつ♥ あつ♥」

狭いテントの中がコタマの善がり声とぱん、ぱん、という肉を打ち合わせる音で満たされていく。

コタマの中はよく熟れて、柔らかく蕩ける膣肉が纏わりついてくる。

普通に犯しているだけだとあまり締めまりがないものの、コタマが頑張つて膣の筋肉の使い方を覚えてくれたため引き抜く時に締め付けで私の射精を促す良いマンコに育った。

「コタマの中、今日も気持ちいいよ」

耳の穴にキスをしながら囁くと、膣がひととき強く締まった。

「はあん♥ もつと♥ もつと言ってくださいっ♥ もつと気持ちよくなりますからあ♥」

首と腰に絡まる手足に力が籠もり、コタマの膣も痙攣するように断続的な締め付けで私の精液を求めてくる。

ペースとしてはやや早い、コタマの献身的なセックスに今日最初の一発を出したくなり、コタマの耳の穴に舌を突っ込んでくちやくちやくと下品に音を立ててかき回した。

「うん♥♥お、おお♥♥それ♥もうするんですかあ♥♥はやつ♥♥も、だめ♥♥いつぐ♥♥うううーっ♥♥」  
コタマは弱点の一つである耳穴舐めをされると、1分と保たずにガチキしてしまう。

その絶頂にポルチオ快楽を混ぜ込む事で少しずつ開発を進め、今では相乗効果でより深い絶頂姿を見せてくれるようになった。

「おっ♥♥♥うっ♥♥♥うううううう……♥♥♥」  
たん、たん、と全身を痙攣させて激しく絶頂しているコタマを構わず犯し、ポルチオを揺さぶってさらに深い絶頂へと導いていく。

膣がうねるように強く締め、腰がガクガクと激しく痙攣し始めると、ヘイローもチカチカ瞬いて意識を保つのも難しい激しい快楽の味わっている事を客観的に教えてくれている。

「好きだよ、コタマ」

「あっ♥♥♥」

ほんの少し愛の言葉を囁くだけで、コタマのヘイローはぷつんとスイツチを切ったように消滅し、ただ気持ちよく膣を痙攣させて精液を搾り取る肉オナホと化してしまう。

マフラーをしたコタマの首筋に顔を埋めると、寒い中でもセックスで汗ばんで蒸れていて、甘ったるい匂いをたっぷり吸うことが出来た。

失神したままのコタマを強く抱きしめ、射精する。

起きている時と同じように私のチンポの脈動に合わせて膣を締め、精液を絞り出してくれるのに任せ、コタマに性処理を委ねた。

まったりとした射精が終わる頃、コタマの頭頂から光が浮かび上がり放射状に拡がってヘイローを形作った。

「はあ……♥♥はあ……♥♥もう……♥♥これすると凄く疲れるんですよ……♥♥」

そう言いながらも、私の背中を指先で愛おしげに撫で回して身体を

擦り寄せてくるコタマ。

力なく微笑み、私の首筋に唇を這わせてついでにキスの雨を振らせている。

すっかり快樂で躡けられたコタマの頭を優しく撫で、真っ赤になった耳にキスした。

「ごめんね。今日のコタマ、いつもと違った姿だから可愛いイキ顔が早く見たくて」

「ふふ♥ 構いませんよ、どっちみち、今日は一日中セックスするんですから♥ 先生がもう駄目って言っても勃たせてあげます♥」

私をご機嫌取りのように耳元で囁くと、コタマは目に見えて機嫌を良く笑った。

次のセックスのために一度起き上がって向かい合っていると、コタマに精液たっぷりのゴムを外して貰い、新しいものをつけて貰ってお礼にキスをする。

ガチイキを経て汗をかいてきた私達は、ついに服を脱いでお互い全裸になった。

寒いのはどうしようもないので、コタマをカメラに向けて横寝させ私が後ろから犯し、お腹に電気毛布を掛けて暖を取ることにする。

コタマはメガネを外して裸眼になり、私の腕枕にべったりと耳をくっつけてご満悦だ。

「はふ……♥ 先生の身体の中を血流が巡る音が聞こえます……♥」

コタマならではのコメントと共に、膣がヒクヒクと物欲しげに蠢いている。

正面のハンディカメラは内蔵の液晶をこちらに向けており、私とコタマが背面側位でぐっぽりと繋がっている姿を鮮明に映し出している。

「カメラにコタマのエッチな姿が映ってるよ。乳首もこんなに大きくなって……」

ぶにぶにのパフィーニップルを指で撫で、大きく勃起した乳首を優しくこねる。

「あんっ♥ 先生にっ♥ 大きく育てていただきましたあ♥」  
すっぽりと手に収まるコタマの胸を揉みほぐし、腰を使ってコタマのGスポットをグリグリと突く。

テントの中は真昼の日差しによって照明なしでも明るく、ひゅううと風が鳴る音が時折聞こえる。

コタマが腕枕から頭を上げてキスをねだってきたので、腕で支えてあげながらゆっくりとキスをした。

「ちゅ……♥ れるれる……♥」

コタマはどうやらまったりと環境音を楽しむ気分らしいので、お腹を擦って身体を冷やさないようにしつつダラダラセックスを続ける。

今日は日差しが強いのかテントの中がじっとり暑いくらいに温まり、2人分の体臭が満ちている。

興奮している私達にとってはそれさえも良い匂いとして感じられ、上の口も下の口も体液でべとべとにしながら絡み合って腰をゆさゆさ揺らしていた。

それでもコタマの剥き出しの肩は寒そうに白くなっているの定期的に撫でて温める。

「ありがとうございます、先生♥ 先生もそろそろ射精しなくなってきましたでしょうか？ もう良い時間ですし、射精したらお昼にしましよ  
う」

コタマは一度チンポを抜くと、ぐるんと私の腕の中で寝返りをうち、私に向かい合ってしっかりと抱きつく。

パフィーニツプルが押し付けられ、勃起乳首がくすぐったくコロコロとした感触を伝えてくる。

より深く挿入でき、冷えていたチンポの根本が再びコタマの熱さに包まれる。

横寝なので下腹部が広く打ち合わさってばふ、ばふ、と気の抜けた音を鳴らしながら射精するための腰振りを繰り返す。

「はんっ♥ ああっ♥」

私に抱きついたコタマは、胸の中心……私の心音を聞きながらのセックスで甘ったるい声を上げて伸び伸びと善がっていた。

私もコタマの耳を塞ぐように手のひらを当て、膝の裏に手を入れてより股を開かせてズコズコ犯しまくる。

「あつ、んっ、んう♥ あ、あ、あ♥♥」

身体をガクガクと揺さぶられて、コタマの声が途切れ途切れになりながらもマンコの締めりが強く、コタマの抱きつく力もきつくなっていく。

コタマも私に合わせて腰をへこへこと振り刺激を追加してくるため、カリがふわトロの膣肉に強く擦られて射精感がどんどん強まる。

ごうごうという強い風の音に負けないコタマのアへ声に包まれながら一番奥で今日2発目の射精を決める。

「はあっ♥ あああ……♥♥♥」

私にしがみついたコタマも、射精で子宮口が押し込まれる快樂でまったりと絶頂する。

お互いに汗に濡れた身体で抱き合い、本当の子作りのようにじっと精液の受け渡しに集中した。

「……はふう……♥♥♥ やっぱり、自分の身体の中で射精されてるのを振動として聴くのは最高ですね……♥ あ、そうだ。次は射精の瞬間にお腹にマイクを当てさせてくださいね♥」

私の射精音だけで追加の軽い絶頂をキめたコタマが、ゆるゆるの笑顔を浮かべて私を見つめた。

「いいよ。コタマがちゃんとマイクを持っててね」

もちろん、とにこやかに頷くコタマを抱きしめて頭を撫でつつ余韻に浸る。

すでに外は正午を回っており、2人とも空腹を感じていた。

タオルで身体を拭いて最低限服を着ると、のそのそとテントの外に這って出る。

「うう……寒いです。せつかくセックスで暖まったのに」

なるべく入り口近くで火を焚こうとガスコンロを出し、手が届く範囲に置いて持ってきた水を火にかける。

ヤリ部屋の匂いにカップ麺の臭いが入り混じり、更に混沌としていくが背に腹は代えられない。



「あ、先生。先生が麺をすすする音も録りたいのでお願いします」  
マイクを向けて私の食事音を録音しつつ、セックスの時と同じアヘ顔になるコタマと和やかに食事を取った。

昼食の後、ゴミ袋に片付けてまたセックスを再開する。

ぱん！ ぱん！ ぱん！ と裸のコタマを後ろから力強く突いた。  
「うっっ♥ おっっ♥ んおお♥」

コタマはタオル地のシーツを敷いたテントの床に突っ伏しつつも、自分の下腹部にマイクを当ててセックス音の録音を忘れていない。

お互いに慣れきっていて、バックの腰の角度もピッタリとあつているため無心に腰を振ることが出来る。

「おっ♥ おっ♥ おっ♥」

コタマの好きな環境音のように、リズムカルにパンパンと肉を打ち合わせる音がなり続けていた。

朝から突きまくっていたからかコタマもセックスに没頭して子宮口をふつくらと充血させ、コリコリと裏筋に当たるようになっていく。

もし近くにキャンプしている人が居たら丸わかりなくらいにパンパンと音を鳴らし、コタマのポルチオをえぐり続ける。

「ほおっ♥ おうっ♥ うんんっ♥」

いつも通り、コタマの善がり声が獣のように腹の底から出るものに変わっていき、膣のうねりがひっきりなしに続くようになると、ピストンを小さくして一番奥だけを小刻みに揺すってポルチオだけで絶頂させる動きに切り替えた。

今もまだコタマのポルチオ開発は続いている。

もつと早く、もつと深くポルチオでイけるように事あるごとに躰を繰り返しているため、コタマもだいぶ上手く子宮絶頂が出来るように上達していた。

「コタマ、もうイキそう？」

「はいっ♥ 先生のおちんぽでっ♥ イキますっ♥ ポルチオアクメ  
ありがとうございますっ♥ うっっ♥ イぐっ♥ イツグ♥」

♥ イグイグイグっ ♥ ♥ ♥  
激しい動きではないのに、コタマが全身を小さく痙攣させて絶頂する。

どぶどぶと滴るほど白濁した本気汁を垂れ流し、丁寧に私にお礼を述べて絶頂を宣言し、1分以上もガクガクと震え続ける。

その間も私はコタマの子宮口を擦り続け、長く絶頂を維持してあげる。

子種を欲しているようにうねる膣に促され、ポルチオに亀頭を押し当てながら3発目の射精を放った。

「あ、あああああ……♥♥♥ お、ほ、おおおおお……♥♥♥」

コタマはぐったりと全身を脱力させマイクからも手を離してしまおうが、身体と床でつつかえ棒のように腹に固定していた。

幸せそうに震え続けるコタマを撫でつつ、ゴムの始末をする。

数分後、ぶるるっ、と裸の尻を震わせたのでピンと来て、裸のまま外に出た。

セックス音が山全体に響くのを避けるため、ほとんど森の中にあるテントからは木々の合間に昼下がりの空が見える。

「さっむ……！ うう、死んでしまいます」

「コタマ、おしっこしたくなつたでしょ？ 中でしたら流石に辛そうだから、今のうちにしてしまつてね」

「うう……♥ いくら先生が相手だからって、おしっこを見られるのは恥ずかしいのですが……♥」

周りを気にしつつも全裸にメガネと靴だけの格好でしゃがみ込み、放尿してくれるコタマ。

木漏れ日の降り注ぐ冬の山奥で、木々のざわめきに混じってコタマのおしっこがジョロジョロと木の根に当たる音が聞こえ、環境音というのも良いものだとかタマみたいな事を思った。

「あ、そうだ。先生の放尿音を録音させてください。私ばかり恥ずかしい思いをするのは納得できません」

ぴゅっぴゅと残尿を飛ばしながら振り返るコタマが提案するのを、断るすべはなく……まんまと放尿する所を観察され高品質の音源を提供するハメになった。

テントの中に入るとシックスナインでお互いの尿道をぴちゃぴちゃと舐め、丁寧の後始末をしてから口を拭う。

外に出て冷えた身体を暖めるために対面座位で挿入し、電気毛布にくるまった。

「ふうう……♥ 先生に包まれて、音を体中で感じる……至福……♥」  
しがみついてくる冷たいコタマの手足が、じわじわと暖まってくる。むにむにとコタマの小さい尻を揉み、私もかじかんだ手を暖めた。

コタマの好きな場所から少しだけズレた所をチンポが突いているため、コタマがモジモジと場所をずらそうと腰を揺らしている。

私にバレているのを分かっているコタマが、照れたように目をつぶり口を引き結んでいるのが可愛くてコタマの頭を撫でた。

コタマの細い身体を抱きしめ、上下に揺すってポルチオに当たるように突いてあげる。

「ふああんっ♥」

何度かのポルチオ絶頂を経て敏感になってきたそこを2人の意志で執拗に刺激し、子宮から湧き上がる多幸福感に酔いしれるコタマを間近で鑑賞した。

コタマの目が潤み、キスを求めているので優しくついばむようなキスをする、キュンキュンと膣が反応して心地よく締め付けてきた。

「はあ……♥ 先生♥ すき……♥ すき……♥」

「好きだよ、コタマ」

私達は見つめ合いながら、繁殖欲に従って愛の言葉を囁いてお互いを貪り続ける。

ぐっちゅ、ぐっちゅ、とぬかるんだ音が股間から響くほどにコタマは愛液を垂らし、電気毛布の内側はタラタラと汗をかいている。

テントを照らす太陽の光はだんだんと赤みを増し、その色を陰らせつつあった。

どちらからともなく強く抱きしめ、さざなみのように小さく震えながら同時に絶頂する。

「っあ……♡♡♡ うう……♡♡♡」

コタマが泣き声のように鼻にかかった小さなイキ声を上げる。

私にも鼻の奥がツンとするような快樂が押し寄せ、漏れ出るような勢いのない射精が長く続いた。

癒着したかのように抱き合うコタマと同じ快樂を感じているかのように、息を合わせて射精し、膣の痙攣が先端へと啜り上げてくれる。何十分もの間抱き合って動かずに居たような気もするし、数分だったような気もする。

汗をたらずコタマの笑みを見て、何も言わずまたキスをした。

「あー……結構疲れてきましたね」

お互い対して体力のない者同士、朝からずっと腰を振っているのでへばってくる。

精液と愛液でドロドロになったシーツを私のリュックの中の汚れ袋に押し込んで新しく張り直し、おやつにペットボトルのジュースとお菓子を食べて休憩した。

セーターとミニスカ姿になったコタマと寝そべりながらキスしたり抱き合ったりしていると、あつという間に日が落ちてしまう。

「うわ、もう日没ですか？ やっぱり冬は早いですね……」

ジャケットとマフラーまで巻いて寒さ対策をしつつも、素脚にノーパンは維持してくれるコタマの尻を撫でつつ、晩飯にまたカップ麺を啜った。

「やっぱり、夜になると気分が出てきますね」

今朝と同じ、ライトが横から照らすコタマのM字開脚も外が暗く陰が濃いと淫靡な印象が強くなる。

こっそりと射精した私のチンポも勃起を取り戻し、正常位でセックスを始めた。

コタマの白い脚を抱いて暖めつつ、一定のペースで腰を振る。

お互いに今日は満たされきっており、ただ何となくやるだけという贅沢を貪っていた。

「ああ……♡」

コタマがオナニーのように腰をへこへこ揺らし、気持ちいい所に私のチンポを当ててニヤけている。

そのスケベそうな顔を見ていて、ふとコートから端末を取り出した。

生徒のAVが全て保存されている中で、コタマの処女を奪った時の映像を呼び出す。

「ん……？ どうしたんですか、先生？」

コタマにも見えるように背面側位になり、再生を始めた。

——コタマはどう？ 膣内に射精している？

——いいっ……♡ いいですっ♡ 今日は多分大丈夫な日だから、ナカにダしてください♡

一本筋の綺麗なマンコをしていた頃のコタマが、私に膣内射精をねだっている。

「ふふ。懐かしいですね。ノドカさんに撮影してもらったんですっけ」

「うん。コタマは最初から私の囁きでイッてたね」

「もちろんです。先生の囁きこそ、私にとっては最高の愛撫ですから♡」

今も私達を撮影しているハンディカメラが、コタマの柔らかな笑みを撮しだしていた。

この映像もいつか、コタマとセックスしている時に鑑賞して懐かしめたら良い。そう思ってコタマの頭を優しく撫でる。

「……そうだ。初日の出の時も言いましたが……先生。今年もよろしくお願いします♡」

そう言って微笑んだコタマは、私にキスして膣をキュンキュンと締め付ける。

翌日筋肉痛になるくらいに腰を振りまくり、翌日下山する時には2人ともフラフラですれ違う登山客に心配されてしまうのだった。

とにかくセックスしたいんです！（アコ）

「遅いじゃないですか！」

開口一番、アコに怒られた。

日も落ちたゲヘナ学園、風紀委員長室。なんだか良くわからない憤りをみせるアコに呼び出されて、5分前に到着したのだが。

「それでも私を待たせたんだから遅刻です！」

抗弁虚しく、ぷりぷりと怒るアコを止められはしなかった。

「私が時計を何回確認したと思っっているんですか！」

と言いながら、入り口近くに佇む私に近寄ってくるアコ。

「先生が到着されるまで、何回も何回も！」

びつ、と手袋に包まれた人差し指が、私の胸を打ち据える。

ぐりぐりと、アコが普段私の裏筋を愛撫するような力加減で指の腹で押してくるので、頭を撫でてあげた。

「……まあ、時間通りなので今回は許しましょう」

何も言わず当たり前のように頭を撫でられ、私の胸に身体を預けて抱きついてくるアコと一緒に、部屋の中央の椅子にぴったり隣り合って座る。

ようやく話を聞くと、万魔殿が主催するパーティで着ていくドレスを選びたい、という話だった。

普段からアコを苛つかせている万魔殿に挑発されたため、今回も鼻息荒く目を見開いて対抗しようとしている。

「先生には私に似合うドレスを選んで頂きます」

「えっ？」

「はい？」

自分で選ぶのが一番では……と思って提案してみると、

「は……？ 私にこれだけ悩んでいるというのに、知ったことじゃない、勝手にしろと……？」

「ええ……」

「先生は釣った魚に餌をやらないタイプなんですネ！ 私が日々、どれだけ先生の性欲を解消しているか分かっているんですか!？」

「アコのムラムラに付き合うパターンが多い気が……」

「そんな事を言って、いつも私の身体を無茶苦茶に貪っているじゃないですか!」

それは確かにその通りなので、まあそうかも、と頷いておいた。

「とにかく! 私に似合う色も、デザインも、先生に決めて貰わないと困ります!」

とても大胆な事を言っている自覚もなく、アコが私の身体にむっちりと密着して至近距離から見つめてくる。

勢いに押し切られて、カタログを二人で見始めた。

基本的に髪色に合わせた青系が良い気がして提案するのだが、アコはむしろ似合うかは無視して私の好みに合わせたがった。

そこは適当になだめ、デザインを見ていく。私はアコは可愛いのも似合うと思うのだが、今回は万魔殿に対抗するという目的があるので大人っぽく大胆なデザインを提案する。

大胆に胸の谷間も横乳も露出し、背中などはお尻まで見えそうな位に見せつけている。

足は殆ど床に付きそうなくらいに丈が長く、ピッタリと纏わりつく布が脚と尻のラインを際立たせ、スリットから生脚も見せるセクシーなデザインだった。

あまり学生の着る感じのドレスではなさそうだったが、こういうのもまたアコには似合いそうなのも確かだ。

「さ、流石に大胆すぎるのでは? たしかに、これならタヌキどもを黙らせられると思いますか……」

あまりのセクシーさに、アコも若干正気に戻ってしまっている。

「これを私に着せたいんですか……?」

アコは顔を赤らめて、柔らかな胸を更に押し付けて私を上目遣いに見つめた。

「そうだね。アコにきつと似合うよ」

「条件が……あります」

アコのふわふわした髪を撫でて続きを促す。

「先生に、こんなエッチな格好をしろと言われたら……身体が火照っ

て来てしまいました。今すぐ解消してください」

アコと私は、お互いに望んだらセックスするという約束をしたセフレ同士だ。

アコはとても律儀なので、本当にセックスしたい時には私の所にふらつとやってきてセックスさせるとおねだりしてくれる。

今日も、当然のように素直におねだりしてくれたのだった。

アコの細い顎を指で持ち上げ、潤んだ瞳と目を合わせながらキスをする。

手袋に包まれた指先がぷつぷつと器用に素早く自分のボタンを外し、夜の風紀委員長室がヤリ部屋へと変貌していく。

いそいそと、当たり前のように上着もスカートも取り払い、靴と手袋だけを着用したアコが私の目の前に立った。

「うん、いつも綺麗だよ、アコ」

眼前に、既に潤ったアコの股間が甘くも饜えた香りを放っている。セフレになってから、アコは陰毛をすべて剃るようになった。つるりとした股間を指先で撫でると、くいと腰を突き出してもつと撫でて欲しいとねだってくる。

中指と薬指を膣にゆっくりと挿入し、Gスポをネチネチと責める。

「うっ ♡ あ、あ♡」

椅子に座ったままの私の前で、アコがだんだんとガニ股になって大胆に手マンに夢中になっていた。

あつという間に水音が大きくなり、愛液が手のひらに溜まって袖まで垂れてきそうなので中断する。

当然セックスするだろうからと持ってきたタオルを何枚も椅子に敷き、今度はアコに座らせて手すりに脚をかけてM字開脚させた。

やりやすい体勢で手マンを再開する。

コチュココチュココチュ……と愛液が泡立つ淫らな音を響かせること、数分。

「あーっ ♡ ♡ イクッ ♡ ♡ イキますっ ♡ ♡ イック ♡ ♡ イク ♡ ♡ イツ、クウウウウん ♡ ♡ ♡ ♡」

駆けつけ一杯、という感じでうっとり絶頂を連呼して手マンで



イツて見せるアコ。

ぷしやつ、と潮を吹き、床にも敷いていたタオルにも収まらない位に体液を撒き散らした。

「あーあ、アコのお潮でビシャビシャになっちゃったよ。ほら、舐め取って」

「くっ……♥ 相変わらず、そんな、屈辱的なことを……♥♥」

ポタポタと愛液と潮を滴らせる私の手をアコの顔の前に持つていくと、顔をしかめながらも指一本一本をフェラするかのように熱心にしゃぶってくれる。

アコの心も身体も暖まってきた、目が爛々と性欲に輝き始めた所で、椅子の手すりに捕まらせて私に尻を突き出すように立たせる。

「じゃあ、しようね」

「……………♥♥」

ホカホカと暖まっている尻に手を置くだけで、私が犯しやすいように股を開いて尻を高々と上げてくれた。

私も下半身裸になり、ゴムをしたチンポをいきなり突っ込む。

にゅぷにゅぷ、とキツイ締めりながらもほぐれきった膣は簡単に侵入できてしまう。

アコの数の子天井はGスポットから奥まで続き、バックで犯すと裏筋をコリコリと心地よく刺激した。

「うっ♥ ああっ♥♥ あい、変わらずっ♥ おつきい……♥♥」

耳まで真っ赤になって興奮しながら、アコが全身を汗でしっとりさせてセックスの開始を待ちわびている。

細い腰をがっしりと掴んで、入口付近まで引き抜いたチンポを押し込む。

パアンっ！ と勢いよく肉を打ち鳴らす音を立てて、暴力的なまでの力加減でピストンが始まった。

そのままパンパンと打ち据えるように腰をぶつけ続ける。

「はあっ♥ はあっ♥ もっと♥ もっと強くしてくださいっ♥♥」

アコはハードなファックが好みなので、私も毎回頑張っているのだが……セックスのたびに全力を要求されて大変な思いをしていた。

いつものように、痣になって残るくらい腰をしっかり掴んで、ビンのように乱暴に腰を打ち付ける。

パン！ パン！ パン！ というお尻叩きの折檻のような音が部屋中に響き、それに負けないアコの善がり声が艶めかしく混じり合う。

尻がひしやげ、波打ち、尻穴もヒクヒクと嬉しそうに痙攣しているのを眺めつつも気を抜くこと無くアコの腰を全力で掴み、膣を壊す位の勢いでピストンを繰り返す。

むっちりとしたアコの下半身は、これほど乱暴にしても恥骨が当たることはなく、程よい弾力で受け止めてくれる。

「いいっ ♥ おくっ ♥ ♥ もっとお ♥ ♥」

何度もセックスしている内に当たり前のようにポルチオ性感も開発されており、アコも膣奥の良いところに当たる腰の位置を器用に探り当ててヘコヘコと暴力的なピストンに合わせて腰を揺らめかせている。

全力で腰を振るのもかなり疲れるし、アコも結構すぐに絶頂するので私もそれに合わせるようにしている。

膣がヒクヒクと痙攣してきたのを感じた私は、いつものフィニッシュに移るべくアコに覆いかぶさった。

「ぎ、アコ。アコの好きなのでイかせてあげるからね」

「してっ ♥ してくださいっ ♥ おねがいしますっ ♥ ♥」

鼻にかかった媚びた声をあげ、おねだりするアコ。

真下にゆっさりと垂れ下がっているアコの乳房に手を這わせ、優しく乳首をつまむ。

「ふうーっ ♥ ふうーっ ♥」

何度もやられて来た経験から、それだけでアコの乳首はガチガチに勃起してしまった。

「いっよ」

耳元で低く囁くと同時に、腰を思い切り突き出してトドメのピストンを放つ。

そして、力いっぱいアコの両乳首を抓り、引っ張った。

「んっぐうううううううう　♥♥♥♥」

輪をかけて暴力的な刺激に、アコが低く腹の底から唸るような喘ぎ声を出して絶頂した。

ギチギチに締まる膣と、絶頂でアコの腰がガクガクと痙攣する動きで数の子天井のツブツブに裏筋を刺激されて私も射精する。

椅子に押し付けられるようにへたり込んだアコに覆いかぶさり、尻肉の柔らかさを感じながらゴム越しに膣奥に射精し続ける。

椅子とその下に敷かれたタオルはぐしゃぐしゃに濡れそぼり、アコの満足度をよく教えてくれていた。

「……落ち着いた？」

「はい……」

余りのタオルで汗や股間を拭いた裸のアコを膝の上に載せ、対面座位のように抱っこしている。

アコはセックスの後こうして良く抱きついてスキンシップをしたがる。

「今日のセックスも……とても良かったです。ありがとうございます。た、先生」

照れて赤面しながらも、アコは至近距離で私と見つめ合ってお礼を言った。

「うん。アコもとっても魅力的だったよ」

毎度の挨拶を済ませると、クスリと力の抜けた笑みを見せてくれた。

「それじゃあ、明日はドレスを受け取りに行きますから、遅れないようお願いしますね」

「わかったよ。じゃあそろそろ」

「はい、また明日」

ちゅっ、と優しいキスをしてアコが微笑む。愛液の染み込んだタオルはアコが持ち帰って選択するというので任せた。

翌日はドレスを購入し、急用ができたアコに変わって私が届けた。

それで、ドレスに合わせた紐下着もとりあえず購入して一緒に置いておいたのだが……

——…あの

——何ですか、これは

——紐、みたいな物が入っているのですが……

——当然それを見咎めたアコからモモトークで言及されてしまった。

——生徒にこんな格好をさせるんですか？

——先生は私なんでも言いなりになると思ってるんですね!?

——もう許しません。先生にはとことん付き合ってもらいます。

性欲を漲らせるアコが目に見えるようだったが、アコがセックスに誘ってくれるのなら断る理由はないのでそのままにしておいた。

そして、アコの言う付き合いの日はすぐに訪れる。

——先生、急いでパーティ会場に来てください。特訓です！

ゲヘナと交流のある企業との親睦会という事で、パーティが催されているらしい。

実際にドレスを着ているアコと隣で歩いていると、やはり目を惹く。

白く透明感のある若い肌が惜しげもなくさらけ出され、胸に反射する光がまばゆいくらいだ。

アコは動きづらいドレスを着こなす練習のため、このパーティでドレスを着てみたと言い、歩きづらそうにしていた。

「それに、先生と一緒に選んだドレスですから……初めては……」

と可愛いことを言うので、腕を差し出してエスコートをする。

ちらと周りを気にして赤面しながらも、アコは私と腕を組み、横乳をやんわりと押し当てて歩きだした。

「うーん……このドレス、思ったより裾が長くて……」

懸念通り、歩きづらそうにしているアコのためにゆつくり歩いていたが、それでもアコがヒールで裾を踏んでしまいっんのめる。

アコの柔らかな胸の下を腕で支えて転ぶのを防ぐが、ビリッと嫌な音がアコのお尻から聞こえた。

「も、もしかして、背中、破れてませんか……?」

というのでアコの背中から立って周囲の視線からかばいつつ確認してみるが、やはり破れている。

パーティ会場はお詔え向きに無駄に柱が多く、影に隠れる事で詳しく確認ができた。

こんなこともあるのかと安全ピンを用意していたので、手早く応急処置をする。

「ううーっ、どうしてこんなことに……」

アコも涙目になっていたが、私がじつとある場所を見つめているのに気づいた。

「な、なんですか?」

「アコ、この紐は……」

ドレスを買う時に勧められた、紐のようなインナーだった。

「せ、先生がそれを付けた私とセックスしたいでしょうから、ちゃんと着てきたんです……」

涙目で赤面するアコが可愛らしく、指で涙を拭ってキスをした。

「後でたっぷりしようね。ひとまず今は安全ピンで外から見えないように直したから大丈夫」

「でしょうね……うう、お尻にピンが当たって気持ち悪いです」

その後、アコはお尻を気にし続けたものの、何食わぬ顔でパーティをやりとおせたのだが……

パーティ会場を後にする時にがっちり腕をホルドされたまま風紀委員長室に連れ込まれ、ドレスのまままで求められた。

「ほら……先生お望みのドレスですよ? なにか言うことはないんですか?」

正面から私に抱きついて眉を逆立ててイライラと私を見つめるアコに笑顔を返す。

「とつてもセクシーで良く似合ってるよ」

「……セックス、したくなりましたか?」

アコは顔を赤らめ、ドレス越しにもわかるくらいに乳首をぷっくりと勃起させる。

「うん、とつても」

アコの裸の肩にかかるふわりとした髪を撫で、少し冷えた腕を優しくさする。

「ん……♥ 私も……今すぐ、先生とセックスしたいです……♥」

アコはぐいつ、とスリットからドレスを持ち上げて、股間をさらけ出す。

黒い紐が纏わりついているだけ、といった下着がアコの股間を申し訳程度に包んでいる。

小陰唇をギリギリ隠せているだけと言った程度の股間の布は発情し始めたアコの匂いを全く留める事ができず、部屋の中に雌の匂いを放散させてしまっていた。

「そんな風になっていたんだね」

あえて直接接触せず、布の上をゆっくりと指でなぞる。

「は、あ♥……んっ♥」

上端に指がかかり、ぽっちりと勃起しているクリトリスを撫でられてアコが震えた。

「これ以上ドレスが破れないように気をつけないとね」

「そうですね……でも……絶対、この服を着たまま先生とセックスしようと思ったのに……」

しよぼんと落ち込んでしまったアコを抱きしめて、裸の背中を撫でて慰める。

「今日は優しくしようね」

「はい……♥」

今日は私がたつぷりとタオルを敷いた椅子に座り、アコが奉仕することになった。

「んむ……ちゅう……♥」

ドレス姿のアコが、跪いてチンポを啜えてくれる。

艶やかなネイルと銀のブレスレットが煌めき、シコシコと手コキしながら裏筋をベロベロと舐めて奉仕する下品さがより鮮やかに映えた。

「れる……♥ ちゅう……♥」

唾液をたつぷりとまぶした舌で裏筋を往復し、出てきた我慢汁は都

度亀頭を吸って飲み下す。

身体が前後するにつれて、固定の甘い乳房がゆっさゆっさと柔らかく揺れ、深い胸の谷間が目を楽しませた。

うっとりフェラをするアコの、ふわふわした髪を撫でながら奉仕に身を委ねていると、アコの興奮が高まりパツクリとチンポを咥え、頬を軽くすぼませて顔を前後させる射精させるためのフェラに移行した。

「ぢゅっぶ♥ ぢゅっぶ♥」

アコの口からはマンコのように淫らな水音が響き、一見不機嫌そうに目を閉じて眉をしかめながらフェラに没頭している。

ちら、と片目だけが一瞬私を見つめたので、アコのおねだりを叶えてあげた。

小さく形の良い頭を掴み、思い切りアコの頭を私の股間に押し付ける。

「うっ♥♥♥」

喉にチンポが突き刺さり、呼吸できなくなったアコの全身が震える。

そのまま私は気持ちよく喉奥に射精した。

「んっぐ♥ うぐっ♥♥ つぶ♥♥」

喉奥に吐き出された精液を必死で飲み下し、ぐいと私を持ち上げるまで抵抗せずにいたアコは、鼻から精液の提灯を作りながらとりと快樂に蕩けた目で私を見つめていた。

「はあーっ♥ はあーっ♥ はあーっ♥ じ、自分の快樂のためにこんな酷いことをするなんて……♥ そ、それでも先生ですか……♥」  
「アコがこうして欲しそうだったからね」

椅子の前にも敷かれたタオルの上で脚を広げて膝をついているアコの股間からは、ぽたぽたと愛液が滴っていた。

「もう……もつとちゃんとノツてください……♥ いつも、人のせいばかりするんですから……♥」

私はアコのよだれでベトベトの口元を拭い、ティッシュで精液が逆流した鼻をちーんとしてあげた。

アコは椅子に座った私の前で立ち、ドレス姿でインナーだけ抜き取ってピンピンに勃起した乳首を強調するように見せつけてくる。

「ふふ……どうですか？ 先生のイヤらしい視線、ずっと感じていたんですよ……♡」

「うん、アコのそういう姿をずっと見たかった」

につこりと満足げな笑みを浮かべたアコが私にゴムを装着する。

腰の後ろの布が張らないようにドレスをずりあげて、アコが脚を開いて私に跨った。

紐のような下着は指で簡単にずらされ、ピンク色の綺麗なマンコが簡単に晒されてしまっている。

座ったままの対面座位も慣れたもので、アコは股間を見る必要もなく簡単にチンポを膣に挿入した。

「ふ、う……♡ はあ、今日は慣れない服でパーティになんかできるから、くたびれました」

「お疲れ様、アコ」

熱々のマンコでチンポを包み込みながら、私の首筋にアコがキスの雨を降らせる。

「先生には、私のセフレとして……たつぷりと癒やしていただかないと……♡」

普段仕事をしている風紀委員長室で、きつとアコヤヒナ、イオリにチナツだって日常的に座っているだろう椅子の上でセックスをする。

とつぷりと日が暮れたゲヘナでは時折遠くの方で銃声が聞こえたりするのだが、私にガツシリと抱きついて乳首を擦りつけながらゆったり身体を上下させるアコは、業務時間外ですとでも言わんばかりに何も反応しなかった。

「ふう……♡ ふう……♡」

私の腰の上でへこへこマンコを擦りつけ、気持ちいい所に亀頭をぶつけているアコを抱きしめ、背中を撫でて身体を暖めた。

服で隠れる部分とはいえ私の首筋はべっとりアコの唾液とキスマークが付き、今度は唇を好き勝手に吸ってくる。

「んちゅっ♡ ちゅうう♡♡」



性欲を素直に発散しているアコが可愛いので特に文句も言わず、アコの望むように頭を撫で、背中を撫でる。

クイクイと腰のくねり方が大きくなり、アコが目を閉じて私の唇を貪るように吸い、舌を絡めて舐め回してくる。

「ふっ♥ふっ♥ふっ♥」

お互いに口元がよだれでベトベトになり、アコの荒い鼻息が口元にくすぐつたい。

ゴム越しにもアコの数の子天井のツブツブの膣がチンポに擦りつけられ、どンドンピストンのストロークが深くなっている。

そろそろアコがフィニッシュを欲しているのを感じ、ドレスの上から乳首をなぞるように撫でてあげた。

「んっ♥ふう、はあ♥ちゅううっ♥♥」

乳首愛撫に肩を跳ねさせたアコが、肯定するように甘い声を上げ、唇を強く吸ってくる。

猫の喉を撫でるように下から指で愛撫すると、ドレスの胸元に更にテントを張るようにアコの乳首がフル勃起した。

アコの膣が連動してヒクヒクと痙攣し、今か今かと乳首を抓られる刺激を待ち望んでいる。

ここで出来るだけ焦らしてアコを高めて上げると深く絶頂してスツキリしてくれるので、優しいピストンをしている分のポイントを稼ぐ事にした。

乳首の先端をカリカリと引っ掻いたり、逆に乳房を驚掴みにして乳首に触れないように期待を高めたり、じつくりとアコの頭の中を乳首イキへの期待でいっぱいにする。

「ふうっ、ふうー、ふうーっ♥♥」

アコの眉間にシワが寄り、赤ら顔のまま不機嫌そうに顔をしかめている。

まるで私を睨んでいるかののように、まだかまだかと乳首絶頂をお預けされてイライラムラムラとしていた。

「そろそろいっくよ」

「っ♥♥」

目を見開いたアコが、乳房を自分から持ち上げた。ずり上げられて乱れていたドレスから乳房がこぼれ、勃起乳首が私の目の前に晒される。

私は2つの乳首を寄せ、大きく口を開けると……噛み付いた。

「いっっつっ、っぎ♡♡♡」

その瞬間に、アコが激しく絶頂する。

精液を絞る動きで膣が蠕動し、ありがたく射精させてもらう。

勃起した上に噛みつかれた乳首を、今度は優しく舌で舐め回す。

「はっ……っぐ、う♡♡♡」

痛覚により敏感さを増していた乳首を愛撫され、絶頂したままのアコがさらなる絶頂を叩き込まれる。

射精したままのチンポでも膣奥を突き、アコの膣の刺激の強さに痛みにも似た激しい快感を感じながらどくどくと大量に射精した。

「うっっ♡ う、ううううう……♡♡」

かなり気に入ってくれたみたいで、アコはそのまま10分ほどずずり泣くように気持ちよさそうな声を上げ、絶頂に浸っているのだ。た。

「もうっ！ まだ乳首がジンジンするじゃないですか！」

セックスの後、ドレスを脱いだ全裸で私の上に座り、アコが文句を言っていた。

「ごめんごめん。アコの乳首がちょうどいい所にあったから」

「ちょうどよければ人の乳首を噛みちぎって良いと思っっているんですか!?!」

ぶく、と頬を膨らませながらも、アコは無警戒に私に背中を預けて気持ちよさそうに座っている。

「まったく……クセになっただらどうしてくれるんですか？ ちゃんとセックスの回数増やしてくださいね？」

「ふふ……アコさえ良ければいつでもどうぞ」

「ふん、言質は取らせて頂きました。じゃあさっそく……ヌルいピストンだけじゃ足りないと思っただんです、先生には頑張っつて貰います

よ  
♥  
「

その日もタオルをびちやびちやにするまで激しくセックスをねだられ、しばらく痛む腰で仕事をする羽目になるのだった。

## ヒナと恋人セックス（ヒナ）

「やあん♥ ちょっと、先生♥」

ヒナがパーティに来ていくドレスを探して、普段使っているという倉庫にやってきた……のだが。

ヒナが昔使っていたバレエ衣装とか体操着とかほんの子供のころ使っていた女児用ドレスなどが出てきて興奮してしまった。

なのでヒナに襲いかかり、倉庫の中でセックスすることにした。

「もう、こんな所で……♥」

「だって、最近できてなかったし……」

お互い忙しく、セフレともセックスできていなかった。おかげで部屋が適度に散らかり、ヒナに他の女の影を疑わせずに済んだ。

「ううん……ドレスも、結局着れなかったし……先生の時間を無駄にただけで終わってしまうのは心苦しいから……うん、一発だけ、よ？」

私をトンと押して離れさせると、恥ずかしそうに壁に向き合って手を付き、クイと尻を上げてチンポ待ちの体勢になる。

「やった！ ヒナとセックスできる！」

「も、もう。恥ずかしいから、そういう事を言わないで……♥」

私が喜びを表すと、ヒナは頬を赤らめて短いタイトスカートを捲り、お尻を丸出しにした。

ゴムを装着し、ヒナの白い飾り気のない普段着ショーツを下ろすと、軽く指でマンコをほじる。

「あ♥ んっ♥」

ヒナのマンコはすっかり開発されて、少しいじっただけで水音が漏れてくる。

後ろに立つと、私のチンポの位置よりもだいぶ低い位置にあるヒナの腰を持ち上げて、脚をぶらぶらとさせたヒナに挿入した。

「ふああっ♥♥」

真つ昼間の倉庫の中で、ヒナが甘い声を上げる。

本当にすぐ済ますつもりなのか、いつもよりも遠慮なく膣圧が強

い。

ヒナの性処理モードをありがたく堪能すべく、お互い刺激の強いストロークの長いピストンでパンパンとヒナを突いた。

「あっ♥ ああっ♥♥♥ んああんっ♥♥♥」

5分もしない内に、カリにかき回されてヒナのマンコからぬちやぬちやと水音上がる。

私はヒナの小さな体を抱きしめ、服の上から柔らかな胸を撫で回した。

開発された大粒乳首が服の下で気持ちよさそうに勃起し、カリカリと引つ掻くと膣も痙攣してさらなる快感を与えてくる。

「せんせっ♥ もっ♥ 私っ♥」

「うん、一緒にいこうね」

「うんっ♥ いくっ♥♥♥ いくからっ♥♥♥」

涙声のように震えるヒナの善がり声が倉庫に響き、私のチンポにも響いた。

汗に蒸れたヒナの髪に顔を突っ込み、甘やかなヒナの匂いを吸い込みつつ乱暴なくらいの力加減でヒナの膣奥を突く。

「あああーっ♥♥♥ いく、いく、いくっ、イツ、つく、う♥♥♥♥」

私の腕の中で、ヒナが小さな全身を痙攣させて絶頂する。

握るような強い締付けに、私も射精した。

「はあ……はあ……♥♥♥ もう、昼間からこんな事するなんて……」

「うん、付き合ってくれてありがとうね、ヒナ」

窘めつつも、優しく私の頭を撫でてセックスの後の余韻に浸るヒナ。

この時だけは頭皮と髪の毛の匂いを嗅いでいても文句を言われないので、細い首筋にキスしながらすんかすんかと嗅ぎ続ける。

「ううん、私こそ先生の時間を取らせちゃったから……ドレス、買いに行くのを楽しみにしてるね♥」

「さ、倉庫を閉めるから早く出て」

しばらく後、ヒナが身だしなみを整えるとチンポで善がっていた時間が嘘のようにキリツとした表情で言う。

ヒナの顔を見つめてそんな事を思っていたのがバレたのか、顔を赤くしてぽかっと殴られた。

その後一緒にドレスを買い、本番の演奏も終えてしばらく。バレンタインのパーティーも終わり、がらんとしたパーティー会場。定位置なのか、単に片付けを面倒くさがっているだけなのか、ピアノも変わらず置かれている。

照明の落とされた中でピアノの上のスポットライトだけが点けられ、夜空のような色合いの内装の中にヒナの白い肌だけが月のように輝いていた。

「ゆら、ゆらゆらり、ゆらめいて……♪」

私のためにと練習してくれた弾き語りを、二人きりのパーティー会場でゆっくりと味わった。

いつもとは違い結び上げたヒナの髪型は、小さくて形の良い耳を外に出している。

演奏で身じろぎする度にイヤリングが揺れ、サファイアの青とヒナの瞳の紫がスポットライトの下で煌めく。

宝石以上にまばゆい白の光を放つヒナの肩と、胸元……デコルテと呼ばれるところが、歌のための深い呼吸で上下し、腕が鍵盤を左右に行き来するにつれて小さな胸が柔らかく形を変える。

無色のリップクリームがヒナの唇を艶めかせ、滑らかな手袋に包まれた指先が愛情を表現するかのような優しいタッチでピアノの音色を奏でる。

やがて静かに演奏が終わった時、私は自然と拍手していた。

「とても良かったよ、ヒナ」

そう言うと、スポットライトの下のヒナは目を細めて笑顔を浮かべた。

「ありがとう、先生。あなたに聴いてもらえて、よかった」

壇上に歩み寄ると、ヒナもギリギリ足のつかない椅子から降りて私の前に立った。

私が身をかがめるのと、ヒナが上を向いて少し背伸びをするのは同

時だった。

「んっ……♡」

触れ合うような優しいキスをして、私はヒナを抱きしめて抱え上げる。

ピアノの椅子に座らせると、唇を離して鎖骨のあたりにキスをした。

「あっ……♡　だ、だめ、先生……♡　こんなところで……♡」

ヒナはそっと私の肩に手を置くが、力が入っていない。

唇を下に滑らせて、ドレスの胸元をはだけさせ、乳房にキスの雨を降らせる。

ちゅ、と吸って離す度にヒナの小さな胸がぶるんと震え、白い肌にじんわりと興奮の赤みが差していった。

フリルを指で摘んでぺろんと腰まで下ろすと、ヒナの胸は何にも隠されず、見慣れた薄い桜色の乳首が甘勃起している。

私とのセックスを繰り返す事で親指ほどに肥大化し、可愛い身体に不釣り合いなスケベ乳首となったヒナの乳首が、首元のパールやサファイアの輝きと共にヒナを美しく飾っていた。

乳飲み子のようにそっと唇で喰み、舌尖で転がす。

「はぁ……あぁ……♡」

悩ましげな声を上げて、ヒナが快楽に悶えた。その間も私の頭をそっと優しく抱えて、愛おしげに撫でてくれる。

両乳首がすっかり勃起した所で、そっと口を離した。

スポットライトの下のヒナの身体が、淫らな汗と私の唾液で妖しく輝いている。

私が見つめるだけで、ヒナはスカートを自分からたくし上げて脚を開いていく。

薄紫のタイツの奥、ドレスに合わせた色の可愛らしいショーツがじんわりとシミを作っているのが見て取れる。

下から手を入れて腰のタイツに手をかけると、ヒナが脚に力を入れて少し尻を上げてくれる。

ヒナの股間の筋肉の陰影が、光の下で強調されて手に取るように分

かる。

タイツとショーツを一緒に脱がせる時に内股になってくれて、そのまま私の顔の方に脚を伸ばすよう誘導した。

靴を脱がせて揃えて置き、足首のリボンもタイツと一緒に脱がせてしまう。

裸足になったヒナの足の甲に軽くキスをした。

「んっ♥ くすぐりたいよ」

苦笑と共にそれを受け入れるヒナだが、ふくらはぎ、膝、太ももと唇が上がっていくと、顔を赤面させて股を開いてくれた。

小柄な身体に似合わぬ小陰唇の成熟した雌のマンコは、少し酸味を帯びた匂いを放ち私を誘っている。

ぷつくりと充血して快楽を待ちわびているヒナのマンコを下から舐め上げた。

「ふあああっ♥♥」

誰も居ない夜のパーティ会場に、ヒナの淫らな歌声が響き渡る。

ピチャピチャと音を立てて舐め回すと、さらに高く甘い声となって歌を綴った。

そこに、ピアノの不協和音が交じる。

「せ、せんせ♥ そこ♥ あっ♥ いっっ♥♥」

クンニの快楽を逃がすためにさまようヒナの手が、開いたままのピアノの鍵盤の上で踊っていた。

ヒナの独奏の繊細な美しさとはかけ離れた、即興で、淫らで、しかし恋人同士の夜に相応しい演目が始まる。

一度ヒナから離れると、私のカバンからタオルを何枚も取り出して、ヒナの尻の下、ビロードのピアノ椅子に敷いた。

これから本気のセックスが始まるのを理解したヒナが、ドレスの胸をはだけたままスカートを持ってパツカリと股を開いてクンニの続きをせがむ。

今度はより大胆に、柔らかな膣肉を左右に開いて敏感な内側の隅々に舌を這わせヒナを感じさせた。

「ああーっ♥♥ はあああんっ♥♥」



ヒナの小さな背が鍵盤にもたれかかり、またも不協和音が鳴り響く。

股間の角度が変わって、ふつくらと縦に割れた柔軟なヒナのアナルが見えたため、指でぱくぱくと開閉して遊びつつ膣に舌を挿入してかき回す。

スポットライトの下でヒナの勃起クリトリスがツヤツヤとピンクに輝いていた。

啞えこんでちゅうちゅうと吸い、舌で弾く。

「あっ♡♡♡いくっ♡♡♡ イツちゃうっ♡♡♡ あ、うゝーっ♡♡♡」

美しいドレスをあられもなく乱れさせ、乳首もマンコもさらけ出した格好のヒナは、それでも神秘的なほど美しい。

抜けるように白かった肌はクンニで絶頂した興奮により桜色に上気し、ツンと尖った乳房の間を一筋の汗が宝石のように輝きながら滑り落ちる。

「ヒナ……とつても綺麗だよ」

「こんな、時に……言わないでえ……♡」

大股開きでマンコをヒクヒクと気持ちよさそうに痙攣させながら、ヒナが甘ったるい声で応えた。

我慢の限界に達した私も下半身裸になり、ヒナに勃起チンポを突きつける。

ヒナは椅子に座ったまま、のっそりと身体を起こし……滑らかな絹の手袋で私の太ももに触れ、口を大きく開けてチンポを啞えた。

「あむ……♡♡♡ ちゅう……♡♡♡」

ゆつくりと、髪にかかる後れ毛をかき上げつつ……小さな唇が亀頭を優しく往復し、リップクリームの艶がヨダレと我慢汗に上書きされていく。

可愛らしい舌が常に裏筋をほじり、下品な水音を奏でている。

手コキをしようと手袋に包まれた手を上げて、汚れすぎるのに気づいたか私の内腿に置き直す。

ヒナが繊細な手付きで私の脚を愛撫し、ゾクゾクとした刺激でさら

に勃起が強まった。

「ぢゅっ♥　っぽ♥　ぢゅっ♥　っぽ♥」

アヒルのように唇を突き出したヒナが、強く吸って軽く離す動きを繰り返してくる。

それは射精よりも快楽を与えるのを優先した動きであり、ヒナの奉仕精神の発露だ。

「……………」

桜色に上気したヒナの端正な顔がフェラのため鼻の下を伸ばして歪み、目は上機嫌に笑みを浮かべている。

ヒナの絹手袋が私の金玉をうやうやしく撫で、形の良い頭がスライドするように滑らかに下がってチンポを奥深くまで啜え込む。

喉奥の熱さを龟头に感じてヒナもヒナも笑顔に何の陰りも無く、当たり前のようにデーブスロートを開始した。

「んっ♥　じゅっぽ♥　ぐっぽ♥」

喉奥にまで啜え込む度にぐもった声を上げつつ、自分の口をマンコのように容赦なく使って最高に気持ちいいピストン運動をしてくれる。

抜く時にはひよつとこのように頬をすぼめて吸い付き、常に舌をチロチロと細かく使って快楽を与えることも忘れない。

どくどくと精液が作られているのが実感できるほどに射精が近いが、ヒナの巧みなコントロールによりギリギリで保っている。

ヒナの手は優しく金玉を揉みほぐして、たくさん射精して欲しいとおねだりしてくれているので、私も頑張って射精を我慢することにした。

優しい笑顔で私をじつと見つめるヒナが、美しい顎にまでヨダレと我慢汗を垂らして夢中になってフェラをしている光景がスポットライトで照らされている。

上半身を揺らす度、小さな乳房の先の勃起乳首が揺れ、戯れに指先で触れた。

「んっ♥　んむっ♥　がぽっ♥」

肩をぴくんと痙攣させて乳首愛撫に反応し、ますます笑顔を蕩けさ

せて顔の上下動を激しくするヒナ。

ついに決壊を感じてヒナの乳首をカリカリと激しく愛撫すると、ヒナも察して深く咥え込み、喉奥で亀頭に刺激を与えて射精を促した。ぎゅっ、とヒナの乳首を抓ると同時に、溜めに溜めた射精がヒナの喉奥に直接注がれる。

「うゝっ♥ つぐ♥♥ んごっ♥♥ つっくん♥♥ んぐっ♥ ごくっ♥♥」

喉が鳴る音が、静かなパーティ会場に大きく響く。

痙攣する金玉をヒナにもみほぐされ、喉奥を擦るような動きで亀頭に追加の刺激を与えられ、金玉が空になるかと思うほど大量に出た。それをすべて、ヒナの小さな喉へと流し込み、嚙下させる。

「ぶはっ♥ はあっ、はあっ、はあっ……お疲れ様、先生。たくさん、出たね♥」

一瞬前までひよっとこのような下品でスケベなフェラ顔をしていたヒナが、チンポから離れた途端に元の美しい笑みとなっている。

それだけに、口元にベツタリとついたヨダレと我慢汁、陰毛が卑猥さを際立たせていた。

「うっく、っ……げえっ……っぷ♥」

ヒナは口を押さえて我慢を試みるが、可愛らしく精液の臭いをしたゲップが出してしまった。

「うう、恥ずかしい……あなたの射精、たくさんだったから……我慢しきれなかった」

「可愛いゲップだったよ」

私が笑って言うと、恥ずかしそうに軽く眉をしかめてトンと拳で胸を叩かれる。

「今日もすごく良かったよ、ヒナ。今度は私がヒナを気持ちよくする番だね」

タオルでヒナの口元を拭い、ドレスに垂れそうになるのを阻止する。

ヒナは私が渡したゴムの封を切ると、慣れた手付きで素早く装着してくれた。

「うん。お願い、先生♥」

赤ん坊のように私に腕を差し上げてくるヒナを抱きしめ、首に細腕が絡んだのを感じてから抱き上げる。

脚を開いたヒナを抱き上げた私は、早くも回復しつつある勃起チンポをぬるんと挿入した。

「は、あ、あ……♥」

風呂に入ったようにリラックスした気持ちよさそうな声上がる。

フェラで興奮したヒナの膣は熱く潤んでおり、膣壁は柔らかいが頼りない感じは全くしない。

私のチンポを造りの小さな膣でいっぱいに啜え込み、みっちりと全体を圧迫して纏わりついてくる。

腰を引き、ヒナに突きこむ。

ぱん、とヒナの薄いお尻の肉が私の下腹部と打ち合い、不格好なパークツシヨンとなる。

「はあっ♥ あっ♥ んっ♥」

ぬぷ、ちゅぷ、と愛液を床に敷いたタオルに垂らしながら、ヒナは目を閉じてセックスに没頭していた。

一突きごとにヒナの着けたネックレスがちやり、ちやりと小さな音を奏で、スポットライトにキラキラと輝く。

がっしりと私の腰と首にしがみつくとヒナに身体の保持を任せて、ピストンしながら片手でヒナの頬を撫でると、無意識のようにヒナの方からすぐ頬を擦り寄せてくる。

子供のようなふにふにとした頬を優しく撫でながら、私のピストンに合わせて締め付けてくれるヒナのマン肉をゾリゾリとカ力で引っ掻いた。

「はああんっ♥♥」

鼻にかかったヒナの喘ぎ声がひときわ高く響く。

股間から響く水音がより粘質になり、ヒナが本気汁を垂れ流し始めたのがわかった。

ぱん、ぱん、と肉を打ち付ける音の間隔が狭まり、マンコの締めりも処女のように強く、射精をせがむものになる。

「ああっ♥♥ せんせっ♥♥ せんせえっ♥♥」

息を詰まらせて、甘い声で私を呼ぶヒナを強く抱きしめる。

汗に濡れた背中を撫で、お互いの精液の匂いと愛液の匂いを漂わせる口でベチャベチャと必死でキスをする。

どんどん速くなるピストンにも、ヒナは抜く時に締めを強くして力りへの刺激を強くする完璧な性技で私を射精へと導いた。

「くっ、ヒナ……すぐ上手だよ……」

「うんっ♥ 先生の、ために♥ 頑張っつて、練習っ♥ したんだよ♥」

興奮に輝くヒナのアメジストの瞳と見つめ合いながら、お互いに導かれるようにまたキスをする。

ヒナの内股に、ぐつと力が籠もり……それが絶頂の合図であることを感じて私もタイミングを合わせて射精した。

「ん、んん……っ♥♥♥」

スポットライトの下で、私に抱きしめられたヒナの身体が激しく痙攣する。

ヒナの意志ではない、本能で奔放にうねる膣に射精し、小さな体の中でトクトクと早鐘を打つ心臓の鼓動を感じながらじっと射精を続ける。

ゆっくりと唇を離すと、絶頂でうっとりとしているヒナが気づいてそっと微笑む。

ぬぼんとチンポを抜いて、ピアノ椅子に座らせてあげた。

「ふう……♥ ふう……♥」

肩どころか乳房までむき出しにして、風呂に入ったように桜色に肌を上気させてうっとり余韻に浸っているヒナの隣に座り、肩を抱く。

「……………♥」

しばらく、ゆったりとお互いの身体を撫でていたが……ヒナがまだ物足りなさそうに見つめるので、スカートをめくってピアノ椅子に膝立ちにさせてお尻を向けさせた。

「あうんっ♥」

後ろから私に犯されたヒナの手が、また鍵盤を叩いて不協和音を奏  
でた。

その夜、私達の二人きりのリサイタルはまだまだ続くのだった。

## カヨコとのひととき（カヨコ）

オペラハウスでの工作中、ふと休憩したくなかった私はカヨコに教えてもらって路地裏で休むことにした。

「早かったね。こっち」

ドレス姿のカヨコが、ビルの外にある鉄骨の階段で待っていた。

夕焼けが柔らかく降り注ぎ、日陰ばかりの路地裏には珍しい居心地の良さとなっている。

私とカヨコはならんで階段に座り、休憩することにした。

隣に座ったカヨコはモノトーンのセクシーなドレスにベージュのカーデイガンを羽織っていて、肌の露出が多い。

デコルテどころか片側の腰骨、ショーツの紐も見せるスタイルになっている。

「ふふ、見過ぎだよ、先生」

そう言ってカヨコは私を上目遣いに見て、身体を預けてきた。

「カヨコのドレス姿、とても素敵だよ」

「……もう、またそんな事を言って……今は駄目だからね」

もちろんそれは、仕事だからセックスは出来ないという意味だ。

「そうだねカヨコとならいつでもシたいけど……今は流石に時間がないね」

そういいつつ、カーデイガンが落ちて露わになったカヨコの肩に手を置いて撫で擦る。

季節柄、気温は夕方になると肌寒く……カヨコの肩も少し冷えていた。

「ふう……温かい。ありがとう、先生」

カヨコは私の肩に頭を預けてリラックスしている。

その無防備で可愛らしい様子にチンポがイライラするが、今はカヨコの肌を暖めることに専念した。

上から見下ろすカヨコの目は力が抜けて、切れ長の伶俐な眼差しもどこか柔らかい。

肩紐はたるんでいるが、ドレスの胸元は流石にそこまで緩くはな

く、私の知っているカヨコの乳首の位置までは見えそうになかった。肩が暖まったので手を下に滑らせ、腰のひし形の露出部へと指を伸ばす。

「あ……ふふ、気になる？」

私のイタズラにも動じず、カヨコは私を見上げて微笑んだ。

「でも駄目。私が説明しちやったら……先生、絶対我慢できなくなるし」

私のセックスへの意欲を見抜いたカヨコがお預けしてくる。

「たしかにね。じゃあ、説明を聴かずにすむようにカヨコの口を塞いでおこうか」

普段よりも緩い雰囲気のカヨコに我慢できなくなり、指で顎を上げさせて顔を近づけた。

「ちよ、もう……ん♥」

困り顔をしつつ、そのまま受け入れてくれるカヨコ。

ドレス姿でも飾り気のない唇をそつと舌で舐め、弾力を味わってからカヨコの口内にお邪魔する。

「はむ……ん……」

カヨコも舌で出迎えてくれ、ゆったりと舌を絡め合わせた。

「ちゅ……んく……♥」

私の唾液を吸い、躊躇いもなく嚙下し、カヨコの白い頬が少しずつ上気していく。

触れそうなほど間近に、休憩している時と同じリラックスしたカヨコの目が私と見つめ合っていた。

ツヤツヤと美しいまつげは長く、カヨコの瞳を彩っている。

珍しく下ろしているカヨコの髪を梳くと、サラサラと心地よい。

その後、10分ほどカヨコと抱き合ってキスをして過ごした。

「ふう……♥　ありがとう、先生。おかげで身体も暖まったよ」

カヨコはチラリと私の股間を見下ろして、クスリと笑う。

「先生はもうちよつと休憩していったほうが良さそうだから……先に行くね」

イタズラな笑みを浮かべて、カヨコが腰を浮かせて立ち上がった。



「次はもつと長くカヨコと休憩したいかな」

「……いいよ。楽しみにしてる」

結局その日の仕事は散々な結果になってしまい、カヨコとの休憩どころでは無くなってしまった。

それからしばらくして、便利屋68の持っている資料を取りに事務所による用事ができた。

カヨコによればその時間は皆居ないから、事務所を開けてくれるという。

チンポをイライラさせつつ、仕事を頑張って前倒しにしてカヨコの下へ向かった。

「待ってたよ。それより珍しいね。こんな時間に寄るなんて」

「カヨコに会いに来たからね」

「本当にもう……座ってて、今探すから」

すみつこの段ボールなんかを漁るカヨコを眺めながら雑談していると、ふと開いた段ボールの中が見えた。

「その段ボール……この間、依頼の時に着てたドレス？」

「うん？ まあ……普段着でもないし、着るとしても依頼の時だけだからね」

「もったいないよ。すごく似合ってたのに」

カヨコは私の股間を見て、顔を赤らめた。

「……まあ。そう言ってくれるのは、嬉しいよ。本当、みたいだし……」

こほん、と咳払いをして、資料探しに戻る。

チンポを甘勃起させた私と、ソワソワしだしたカヨコが微妙な空気を作る中、しばらくして声が上がった。

「あった。はい、これ」

必要な資料を受け取り、お礼にカヨコを夕飯に誘った。

「……良いよ。あんまり我慢させたら悪いし。でも、まずはそれをどうにかしよつか」

ドレス姿でセックスしたいという私の意図を理解し、顔を赤くして受け入れてくれるカヨコ。

そして、ソファに座る私の前に跪いた。

ジィイ……とズボンの前を開き、カヨコは私のチンポを取り出す。「はあ……♡ 蒸れて、臭いが濃い……♡ 今日もお疲れ様、先生」

カヨコの目はうっとり細められ、パンツから出した私のチンポに鼻を近づけてスンスンと臭いを嗅いでいる。

「カヨコにこうしてもらおうと疲れも吹っ飛ばよ」

普段の髪型のカヨコの頭を優しく撫でる。

返事はなく、柔らかな微笑みと共にカヨコのフェラが始まった。

処女の中から何度かのセックスを経て、カヨコもフェラが上達している。

今日は、手早く抜くための刺激の強い手コキフェラだ。

「れるれるれる……♡ ちゅ、ちゅぽっ♡」

よく動く舌が亀頭をクルクルと周り、裏筋をチロチロとくすぐる。

カヨコの手首は滑らかに動き私の仕込んだ力加減で竿を上下していて、一秒ごとに射精へと近づいていくのが分かった。

「ぢゅっ♡ ぢゅるっ♡ ぢゅぽっ♡」

スパートをかけるカヨコが、私の亀頭を口に含んで顔を前後に動かし、我慢汁まみれの唇を鈴口とカリの間で往復させる。

射精の準備で持ち上がってきた金玉を手のひらで優しく撫で、いつでも射精していいと上目遣いに目を合わせて優しく微笑んでくれるカヨコに甘え、頭の上に手をおいた。

「んむっ、んっぐ♡ おぐっ♡」

ゆっくりと慎重に、カヨコがチンポを口の中に啜えこんでいく。

先生のために覚えたい、とデーブスロートを練習中のカヨコは、合図をすることで喉奥で射精させてくれる。

カヨコの熱い喉奥の感触に亀頭を締め付けられ、根本をシコシコと親指と人差し指のリングでしごかれ、気持ちよく射精した。

「んぐっ♡ ズくっ♡ ん、ズく、ズくっ♡」

引っかかりつつも、大量の射精を飲み下していくカヨコ。

「ぷは……♥ う……げぷ……♥ 先生、多すぎ……♥」

口元を抑えて小さくゲップし、少し汗をかいたカヨコが微笑んだ。

「カヨコが上手かったからたくさん出たよ」

「もう……この後の夕飯が食べられなくなったら、先生のせいだからね」

カヨコは取り出したハンカチで口元に付いた私の精液と我慢汁を拭い、普段通りの顔で立ち上がった。

「時間になったら言っ、私が店まで向かうから……じゃあ、また後で」

カヨコにキスをして、その場は別れた。

受け取った資料で、シャールで残りの仕事を済ませ、店を予約してカヨコに知らせた。

ドレス姿のカヨコとセックスしたすぎてチンポのイライラを苦勞して抑えて店に入り、座ってカヨコを待っていると、しばらくして声をかけられた。

「お待たせ、先生。早いなだね。私も結構早めに出たつもりだったんだけど……」

こつ、こつ、とヒールを鳴らして近付いてくるカヨコは、期待通りにドレス姿だった。

「おおお……とても似合ってるよ、カヨコ」

「ありがとう。あんなにリクエストされたし、その言葉、素直に受け取っておく」

その後、カヨコと一緒に夕飯を食べた。

カヨコは食事中、不意に口元を抑える仕草をし、私を軽く睨んでくる。

「どうしたの？」

「お腹の中から臭いが上がってきて……やっぱり食事前に飲みすぎるのは良くないね」

そんな事を言っ、私のチンポをイライラさせつつも、美味しく頂いた。

そして。

「へえ。ここが先生の家なんだ」

「どうぞ、上がって」

百鬼夜行にはラブホ街があつたが、D・U・レストラン近くにはそんなものはないため、カヨコを自宅まで連れてきた。

「ラブホやシャールも悪くないけど……先生の家は新鮮だね」

先上がったカヨコがパチ、と電気を付けると、セフレ達が綺麗に掃除してくれている我が家が明るく照らされる。

「……ふうん。私みたいに、他の子も連れ込んでるんだ」

部屋の中を見渡し、カヨコは私に振り返ってナイフのように目を細めた。

「うん。皆のおかげで散らかさずに済んでるよ」

返事をする私に近寄ったカヨコが、背を伸ばして上を向く。

当然のように抱きしめてキスをする、カヨコは至近距離から私の目を覗き込んだ。

「今日は朝までしてくれる……って期待していいの？」

普段よりも少しだけ熱っぽいその囁きに、チンポがイライラしてくる。

「明日の予定が大丈夫なら」

カヨコの細い腰を抱き、耳たぶのピアスを撫でた。

「嬉しい。じゃ、シャワー……分かった、この服で一回しよう」

無念を顔に出してしまった私を見て、カヨコが苦笑ひとつで着衣セックスを了承してくれる。

カヨコの薄いドレスに浮き出る尻を撫で回しながら、寝室に案内した。

ベッドにセックス用タオル地のシーツを重ねてかけると、服を脱ぎ捨てる。

「もう、こんなに脱ぎ散らかして……子供みたいだよ、先生」

脱ぐ度にカヨコが腰を落として拾い、丁寧に畳んで床においてくれた。

「カヨコとセックスするのが楽しすぎて……」

「興奮しすぎ。……でも、これなら朝までできそうだね」

全裸でフル勃起している私に近付いてくるカヨコを抱きしめ、ベッドに押し倒す。

ぴらりとカヨコのスカートをめくってショーツを拝んだ。

「ふふ。そんなに気になってたんだ？」

余裕の微笑みで、そっと脚を開いて良く見せてくれるカヨコ。

カヨコのショーツはタンガタイプというのか、前後共にT字になって布がとても少なく、紐を腰骨に引っ掛けてようやく穿けるものだった。

スレンダーなカヨコの恥骨や腰骨が黒の革っぽいショーツに彩られ、コントラストが美しく目に飛び込んでくる。

セフレになってからカヨコも陰毛を綺麗に剃っており、布の少ないショーツからもはみ出したりしていない。

「綺麗だよ、カヨコ」

「そこ見ながら言われても……」

だが実際にカヨコの股間はきめ細かく、白く透き通るような質感をしている。

私はこの気持ちを伝えるためにもカヨコの下腹部にキスをし、ショーツの上からマンコを指で刺激した。

「んっ……♡」

感じやすいカヨコが甘い声を上げる。

ツルリとした革の奥に、蕩けるようなカヨコの小陰唇があるのを感じながら、ショーツの左右からはみ出している大陰唇をくぱくぱと弄ぶ。

簡単にピンク色の肉がはみ出してしまうセクシーなショーツに笑顔になりつつ、そっとカヨコの腰骨に引っかかった紐を外して目の前の布を下げていく。

酸っぱさの中に甘さの混じったカヨコのマンコの匂いが開放され、ねとつとした愛液の糸を引きながら布が離れた。

ぴらぴらと花びらのように慎ましやかなカヨコの小陰唇を、愛液ご

とべろりと舐め回す。

「んあああっ♥♥」

それだけでほっそりとした腰が浮き、艶めかしく恥骨が浮き彫りになった。

ちゅぷ、ちゅぷ、と音を立ててカヨコのマンコを舐め回し、準備を整えていく。

「はんっ♥ ああっ♥♥」

掠れるような声で快楽を叫ぶカヨコにチンポのイライラを搔き立てられながら、膣内に舌を挿入する。

「んくう♥ あふっ♥」

びく、びく、とカヨコの脚が震え、だんだんと開いていく。

細い脚を撫で、ほんの少しの力で押すとスルスルと大股開きになった。

カヨコの膣は相変わらずぷりぷりと弾力のある肉厚さで私の舌を楽しませてくれる。

天井側を擦り、クリトリスを裏側から刺激すると、ぐんつとカヨコから腰を浮かせて股間を押し付けてきた。

「あっ♥ だめっ♥♥ 先生っ♥ も、もう……♥♥」

切なそうな声で言われ、クンニを中断する。

カヨコは絶頂する時に全身を痙攣して激しく悶えるため、あんまりイかせすぎるとバテてしまう。

今夜はたっぷりやる予定なのでまだ体力は温存しておきたい。

「はあ、はあ、はあ……♥」

身体を起こすと、カヨコのドレスの胸が荒い息遣いで上下していた。

口元を拭ってカヨコに覆いかぶさる。

むき出しの鎖骨に口づけ、くびれた腰を撫でた。

「あ、ん♥ あっ♥」

絶頂を寸止めされた形のカヨコは、まるで楽器のように美しい声を響かせる。

肩から浮いた肩紐をそつと外し、ドレスの胸元をめくって下げる。

小ぶりながら均整の取れた美しい乳房が露わになり、カヨコが荒く息をしながら熱っぽい眼差しで私をじっと見つめた。

口を近づけ、小さく形の良い乳首を吸う。

「んくっ♡♡」

カヨコの細い肩が震え、快樂のほどを伝えた。

乳首も敏感なカヨコがすぐイッてしまわないように、そつと吸い、舌でゆっくり転がす。

「んんんんんんんん♡♡」

それでもクンニで昂ぶった身体には大きすぎる快樂がカヨコの身体を強張らせ、身をひねらせた。

「そろそろ挿れようか」

私が囁くと、カヨコは絶頂寸前の真つ赤な顔でこくこくと何度も頷いた。

ベッドのサイドボードに常備しているゴムを着け、胸と股間をめぐられてあられもない格好になったドレス姿のカヨコの股を開かせる。

いきかけでフラフラとした手付きのカヨコが、自分の股間を両手で拡げて見せた。

「どうぞ、先生♡」

甘やかな囁き声に導かれるように、ぬるりとカヨコの穴へチンポを突き入れる。

「は、あ、あ、あ……♡♡」

つぶつぶと亀頭がカヨコのぷりぷりした膣をかき分けて進むたび、カヨコは背をのけぞらせて声を震わせる。

スレンダーな身体が照明の下でくねり、カヨコが腕を上げて枕にしがみつ়くことにより鎖骨が艶めかしくうごめいた。

線の細さに似合わぬ肉厚で私のチンポをしっかりと受け止めてくれるマンコは、カヨコの内面の情の深さを表しているかのようだ。

腰を円を描いてグラインドさせ、亀頭でカヨコの膣奥を撫で回す。すっかり興奮して奥はふっくらと膨らみ、私の精液を受け入れるための空間を作り出していた。

「お、お願い、先生……♡ もう、突いて……♡♡ 我慢できない……」

♥♥」

セックスの時にだけ聴くことのできる、カヨコの切なく余裕のない声。

火照った身体にとどめを刺して上げるべく、細い腰を掴んで力任せにチンポを引き抜き、また押し込む。

たん、という肉の打ち合わさる音は控えめで、コツンという恥骨のぶつかる衝撃が強く響く。

肉の少ないカヨコ相手だとこんな風になるのだが、終わってから聞いた所ではぶつかる振動が結構気持ちいいらしいので遠慮なくぶつけて行くことにしている。

絶頂寸前のカヨコの膣は強く締まり私を引き留めようとするが、それを引っっこ抜くとカヨコの手が上がり、私はのしかかるように密着してカヨコを抱きしめた。

「あゝっ♥ うゝうゝうゝっ♥♥」

カヨコの善がり声が、鼻にかかったすすり泣くような声へと変わる。

深くセックスに没頭し、激しく絶頂する前兆だ。

ふらふらとカヨコの手が上がり、私はのしかかるように密着してカヨコを抱きしめた。

ベツタリと私の背中にカヨコの手ひらが押し当てられ、愛おしそうに撫で回される。

「ふう♥ んああ♥♥ ああうゝっ♥♥ んうゝうゝっ♥♥」

いよいよカヨコの声が切羽詰まってきたので、カヨコの好きなクリトリスを押しつぶすように腰を押し付ける動きで絶頂に追い込んだ。

「うゝっ♥♥ あゝっ♥♥ あゝ ああうゝうゝうゝ…♥♥♥」

セフレになって、さらに上手に絶頂出来るようになったカヨコが本気で膣イキする。

がくんっ、と腰がはね、膣全体が痙攣するように収縮を繰り返す。精液を搾り取るようなその動きにありがたく射精させてもらった。カヨコの切れ長の目から一筋の涙が溢れる。

お互いに激しく絶頂し、優しくキスをして粘膜で愛を交わしあった。



「ふう、ふう……♥　すごかったね、先生。やっぱり……この服を着た私を犯して、興奮したの？」

一戦終えて、カヨコを腕枕して休憩していた。

「うん。普段と違うカヨコの姿、すごく良かったよ」

カヨコの後れ毛が汗で頬に張り付いていて、激しい情事の後だということを感じさせる。

そつと柔らかな頬を撫でて髪を剥がしてあげながら、興奮にキラキラと瞳を輝かせるカヨコと見つめ合った。

「ふふ。それなら、着てみた甲斐があったかな。でも、まだまだ夜はこれからだよ」

「うん、もちろん。とりあえず、ドレスはもう脱ごうか。あんまりシワにしても良くないし」

「今更言う？　それに、私はこの格好で明日の朝イチで帰らなきゃいけないんだけど」

「昼まで居てもいいよ」

「駄目。明日も仕事あるんだから」

それは残念、と腕枕している腕でカヨコの胸元を撫で回した。

「んっ♥　先生ももう大丈夫そうだし……そろそろ、しよつか」

むくりと身体を起こしたカヨコが、私に背を向けてスルスルとドレスを脱いでいく。

一糸まとわぬ姿になって私に覆いかぶさったカヨコが、目を細めて笑った。

「今夜は、寝かさないから」

その後、カヨコがクタクタになっても休憩をはさみつつ一晩中セックスをするのだった。